

球磨の薬指

vs どんぐり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最初の暗殺は意図せずチュートリアルのようになってしまった、と思った。

それでいい。

これから先はどうせ何もかもが敵になる。最初の一人くらい楽をしてもいいだろう。

(以下、例一話のとおりpixivに同作を投稿しています)

<http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=3709950>

目次

第01話	叢雲の薬指	1
第02話	叢雲の薬指	2
第03話	叢雲の薬指	3
第04話	叢雲の薬指	4
第05話	叢雲の薬指	5
第06話	ラックレッサー山城	41
第07話	叢雲の薬指	56
第08話	叢雲の薬指	63
第09話	改二とたこ焼き器とメガネ	74
第10話	叢雲の薬指	79
(R-15) 第11話	ラックレッサー山城	90
第12話	叢雲の薬指	102
第13話	龍驤デイスティネーション	108
第14話	叢雲の薬指	116
第15話	叢雲の薬指	123
第16話	叢雲の薬指 空母炎弓宴	134
第17話	航空戦艦は揺るがない	152
第18話	叢雲の薬指 来訪者	158
第19話	『なりかけ』た正規空母の譚	197
第20話	ずっと一緒だよ	207
第21話	ラックレッサー山城	215
第22話	妖精さんの、かんたいこれくしょん	228
第23話	発：特殊深棲監視艦隊 正規空母 葛城	246
(R-15) 第24話	叢雲の薬指 12 さよなら純情ようこそカ	

オス	264
第25話 エラー猫のパラドックス	286
第26話 叢雲の葉指 13	312
第27話 ラックレッサー山城 4 叢雲がウザい	330
第28話 二周年	345
第29話 叢雲の葉指 海花と海鳥 ①	351
第30話 叢雲の葉指 海花と海鳥 ①と②の間	361
第31話 叢雲の葉指 海花と海鳥 ②	381
第32話 叢雲の葉指 海花と海鳥 ③	394
第33話 叢雲の葉指 海花と海鳥 ④	414
第34話 叢雲の葉指 海花と海鳥 ⑤	432
第35話 叢雲の葉指 海花と海鳥 ⑥	455
第36話 秋空を翔ける阿呆	486
(R-15) 第37話 磯風がいる世界	500
第38話 温度差	528
第39話 わらしべ任務(上)	534
第40話 わらしべ任務(中)	551
第41話 わらしべ任務(下) + 用語集 Ver. 20160131	572
第42話 ラックレッサー山城 5	595
第43話 島攻略オンデマンド	608
第44話 日向は富士急ハイランドに行きたい	631
第45話 ヤーナム泊地にて	638
第46話 そんなの『艦これ』の設定に無い	652
第47話 ラックレッサー山城 6	668

第48話 アイアム深海棲艦ベリーマッチ! | 685

第49話 撃沈王の世間話 | 693

第50話 ショートショート集 | 701

第51話 任務・続・ネオサイタマ鎮守府との交流を深めよ!

711

第52話 洞観者つてなにクマ? | 717

第53話 極楽とは程遠い極楽 ① | 728

第54話 極楽とは程遠い極楽 ② | 734

第55話 極楽とは程遠い極楽 ③ | 739

第56話 極楽とは程遠い極楽 ④ | 743

第57話 極楽とは程遠い極楽 ⑤ | 747

第58話 メリークリスマス、天照大艦隊 | 751

第59話 極楽とは程遠い極楽 ⑥ | 755

第60話 極楽とは程遠い極楽 ⑦ | 758

第61話 極楽とは程遠い極楽 ⑧ | 762

第62話 極楽とは程遠い極楽 ⑨ | 766

第63話 極楽とは程遠い極楽 ⑩ 出張版『撃沈王の土産話』

770

第64話 極楽とは程遠い極楽 ⑪ | 774

第65話 極楽とは程遠い極楽 ⑫ | 781

第66話 極楽とは程遠い極楽 ⑬ | 786

第67話 極楽とは程遠い極楽 ⑭ | 793

第68話 極楽とは程遠い極楽 ⑮ | 800

第69話 極楽とは程遠い極楽 終 | 807

第70話 プラチナ | 820

	第71話	山城が設定をまとめる回(天照隊の派閥)	833
	第72話	ヤーナム島の黒い風(前編・雑)	844
	第73話	ヤーナム島の黒い風(中編)	849
	第74話	ヤーナム島の黒い風(後編)	857
	第75話	天狗	873
	第76話	球磨争奪戦 ①	881
	第77話	球磨争奪戦 ②	887
	第78話	球磨争奪戦 ③	901
	第79話	球磨争奪戦 ④	909
	第80話	球磨争奪戦 ⑤	927
	第81話	球磨争奪戦 ⑥	951
	第82話	球磨争奪戦 ⑦	960
	第83話	球磨争奪戦 ⑧	981
	第84話	球磨争奪戦 ⑨	996
	第85話	球磨争奪戦 ⑩	1022
0	年秋イベ実況	追— & a m p ; 202	1022

第01話 叢雲の薬指 1

叢雲を解体する。

言ってしまうえばそれだけの事を、なぜ私がこれほどまでに、しつこすぎるほど自分に言い聞かせているのか、仕事そつちのけで机に突っ伏して煩悶しなければならぬのか。それは艦隊の為であり、それ以上で叢雲のために他ならない。この事は他の誰よりもこの私が理解しているところであり、決してこの目的というか手段というか実行するに当たったの理由付け言い訳を何度も何時も考えているなどという女々しい事ではない。断じてない。

ああ、叢雲と結婚したい。

秘書艦とかそういうのはもういいから、これからは平和で安全な場所ですべて私を支えて欲しい。

いや、何を甘えた事を言っているのだ私は。男子たるもの艦隊と妻の両方を、この日々の書類仕事と開発の廃材ペンギンへの八つ当たりで鍛えた腕でもって支えて当然のことだ。例え腕相撲で叢雲の腕をピクリとも動かさなかった時があつたかも知なかったかも知、それはきつと恐らくたぶん夢の中の話に違いなかったとしても、涼しい顔をして万難を排してこそ提督という立場にある男の見せるべき姿というものだろう。叢雲は軍令部からのイチャモンが記された書類などではなく、私の勇姿のみ見ていれればいい。



ケツコンカツコカリなどという技術屋の悪趣味に、後ろ暗い胸の内を誰にも晒せないままこれまで付き合ってきたのは、叢雲の艦娘としての能力を少しでも強化し、あるいは安全祈願を形として表すために利用してやったにすぎないのだ。

戦時であるというのに能力強化に紛らわしい名称と演出を付属するなど悪趣味が過ぎる。

何が戦意向上か。むしろ逆効果であると私は激怒し、戦場を桃色の

遊技場と勘違いしている上層部に思うがままを、ついでに資材配給の少なさやら備品の異様な高値についてやらも一緒に建白書にしたため、何度も送りつけた。いささか過激な内容になってしまい、しかし私一人がどう処罰されようとそれは我らが守るべきもののため、我が愛刀一本を携えての殴り込みも辞さない覚悟ではあったが、私の身はもはや私一人のものではない。そう、私がいなければ誰が深海に潜む悪鬼から叢雲を守るといふのだ。決して我が身が可愛いなどということはない。そんなものは着任時にトイレに捨ててきている。トイレが詰まって職員に少々キツイことを言われたくらいだ。ペンも剣よりも強しとも言おうし、ここは軍上部の反応を待つしかなかった。青葉が言う「確実に届けるルート」とやらを使っているのだから、程なく反応があつてもいいはずだった。

しかしケツコンカツコカリはいくら待てども姿を消さず、我が鎮守府の備蓄は育ち盛りの艦娘らに食い尽くされるし、暖炉を待っている間に季節が変わってしまった。

そして我が鎮守府の風紀も、球磨のあの発言のせいで乱れてゆくばかりである。

ケツコンカツコカリに必要な道具、つまり指輪を叢雲にさりげなく渡すための作戦会議の場で、

「提督、それ七百円で売ってたクマー」

「球磨；；Lv. 59」

と何も考えていなさそうに言い放った。

直後に大井が会議室を飛び出していき、その翌日、大井と北上が揃って左手薬指の指輪をこれみよがしに輝かせたのだ。

「いやーごめんね提督。大井っちがどうしても言うからさー」

「北上；；Lv. 100に限りなく近い99」

この私と叢雲を差し置いての蛮行、なんと私が二人仲良く営倉にブチ込むことすらも大井は織り込み済みだった。当然ながら二人の部屋は最大限離させているが、何故か大井は日に日にツヤツヤになっているとの話を聞いている。

「言っておくけれどあの二人、書類上ではあんたが相手方になってい

るからね。私たち艦娘にケツコンカツコカリ実行の権限なんてあるわけないし」

「叢雲；Lv. 99」

「ならばどうして奴らは昨日の今日でしかした？ しでかすことができた？ 私は何もしていないぞ」

「さあ？ ところで私もそれなりの練度に達しているのだけど。軍令部から届いた一式は使っていないのでしよう。あんたの命令なら私が使ってもいいけれど？」

私は叢雲の身に間違いが起こらぬよう細心の注意を払いつつ、先走った阿呆二人のような真似はせず一切の業務を停止し、ケツコンカツコカリの手続きに専念した。ウンザリした叢雲の顔は見飽きたものだが、球磨の失言、そしてハイパーズの大っぴらな暴挙を放置したのは失敗だった。艦娘達が自分達だけでもケツコンカツコカリができると知ってしまったからというもの、この鎮守府は桜の花見会場、上層部が思うがまま桃色の遊技場となってしまった。



「主力だった雷巡が二人とも抜けてしまったのは痛い。木曾が遠征から帰投次第、改装に向けたトレーニングを始めさせる。それと球磨、お前も今から甲標的を扱えるようになっておくように」

「無茶振りクマ!? 無理だクマ、クマは重雷装巡洋艦にはなれないクマ！」

「誰も雷巡になれとは言っていない。発情したお前の妹二人分の穴を埋めろと言ったんだ。さらに失言によりこの鎮守府の風紀を乱し、全体的な戦力ダウンという結果を導いたお前には本来は営倉行きどころじゃあ済まない罰を与えたいところだったのだ。分かるか？ お前に拒否権はない。それに同じ球磨型の妹にできて姉にできない事など無いはずだ」

「わんさかあると思うクマ……。それにクマは何も悪くないクマ！ 悪いのは自分一人でケツコンカツコカリできなくて会議を開いた提

督だクマ！ 叢雲に直球でお願いするのが恥ずかしいからクマ達を呼んだんだったクマ。ビビリで、しかも会議に大井を呼んだ提督一人が悪いクマ」

「貴様……この軍人オブ軍人である私を指してビビリと言ったな！」

「言ったクマ。言ってやったクマ。ビビリてーとくざまあみろクマ」

「いいか、この私には命令を強制する権限があるんだぞ。それを知った上での発言であるならば、その度胸だけは認めてやらんでもない」「やれるもんならやってみるクマ、ビビリてーとく。解体処分なんてちつとも怖くないクマ。むしろ望むところクマ。クマは戦争なんかやめてのびのび暮らすクマ」

「ほう、ならばこれはどうだ？ ——大井と北上の指輪を没収して来い、という命令」
「……………」

「どうだ、姉の貴様ならば妹の指輪を取り上げるくらい容易いことではないのか？ いや北上はともかく大井には少してこずらされるのかもしれないなあ。これはあくまで私の予想だが、我が鎮守府から初めて殉職者を出してしまうことになるかもしれない。悲しいことだ。絶対に艦娘を轟沈させないと誓っている私だが、まさか営倉での事故により尊い命を失ってしまうとは……。もともと、この予測はクマお姉ちゃんの努力によって回避されるだろうか？」

「……じよ、上等だクマ。クマの生き様を見せてやるクマ。ただし、そんな時やあクマも黙ってないクマよ」

「ほう？ 黙っていないとは？」

「そのままの意味クマ……、叢雲に全部喋ってやるクマ」

「ぐっ!? お前、叢雲は今関係ないだろ！ いや、だがその程度の報復でこの私が怯むと——」

「おっと、提督はまだ「全部」の意味を理解しちゃあいないクマ。理解の遅い提督のために、賢いクマがひとつ例を挙げてやるクマ。この一見して殺風景な司令室を、クマはゆっくりと眺めてみるクマ——すると秘書艦の席であるあの机。あそこによく座る叢雲はこう言っていたクマ。「部屋には提督と私しかいないのに、たまに何処かから視線

を感じるのよ」

「……………」

「さすがは最高練度の叢雲、勘の鋭さも一流と言いたところクマ。しかしクマは死地に赴く前に、叢雲に一つの誤りを僭越ながら教えて差し上げなければならぬクマ。叢雲それは「視線」ではなく「撮影」クマよ、と」

「き、貴様、何故それを知っている…………！」

「ふっふっふ、戦場に生きる艦娘を侮った提督が悪いクマ。おかしいと思わなかったクマか？ どうして叢雲がよく使う一号ドックだけ利用者が極端に少ないのか。提督と叢雲はどうやら最古参メンバーのための心遣いと思っっているクマね。勿論ソレは何も間違っちゃやあいないクマよ。クマ達は一蓮托生クマ。クマはみんなのために、みんなはクマのためにクマ。だから提督がクマに「死ぬ」と言った時、それは同時に提督の最後にもなるのが必然つてもものだとは思わんクマ？」

「…………球磨一人で調べられるとは思えない。仲間は誰だ」

「知らんクマ。仮に知っていたとしても仲間を売るような真似はしないクマ。おっとそういえば提督もイ・チ・オ・ウ・ナ・カ・マ、だったクマ。そうなるとお、提督が取るべき行動はあ、必然的に一つに絞られるはずクマあねえ」

「……………こ、今回の件は不問に付す。なかなかどうして度胸があるじゃあないか球磨。ただクマクマ言っているだけの阿呆とばかり思っていたぞ」

「クマも提督のことをまともな判断ひとつ出来ない阿呆とばかり思っていたクマ。これからもナ・カ・マ・ド・ウ・シ、仲良くやっていくクマ。——それじゃあ、賢いクマはここで失礼するクマ。妹達が良い扱いを受けるものと、クマは期待しておくクマ」

あんな小娘如きに、この私がああああああつ！！

第02話 叢雲の薬指 2

「Hey, 提督。ここんところ秘書艦をコロコロ変えてるけどサー、叢雲と何かあったネー?」

「金剛；Lv. 85」

「何も無い。いや何も無いというのはここでは平穩であるという意味であり、決して私と叢雲との間に何かしらの不都合があるというわけではない。お前は不要な事に気を散らさず黙って補充要請書を書いていけばよい」

「へーい」

球磨の、私のこめかみに砲口を突きつけてくるような話は、なに冷静になれば何のことはない、私にとって有益な情報でしかなかった。いつそ感謝したいくらいだ。全機器の回収は昨夜の消灯時間で終わり、これで事が叢雲に露見してしまう危険はなくなった。リスク管理というやつである。

しかし残念でないと言えば嘘になってしまう。最初期こそ生意気盛りの叢雲であったが、共に死線を乗り越えること幾度、いつしか信頼し合う仲になっていたからこそ、私は前線だけでなく日常生活においても叢雲を支援しようと考え、実行していたのだ。そして支援には彼女の状態を常に把握する必要がある。ならばこそである。当然だが叢雲に「今日の調子はどうか」と何度も聞くような真似はかえってプレッシャーをかけるだけだ。提督の体面という意味でも、あまり表立って叢雲ばかりを鼻負するわけにもいかなかった。球磨はどうやら勘違いをしていたようだが、この私の脳内にやましい電気信号は微塵も流れていないことをハッキリとさせておきたい。すべての秘匿には必然性があったのだ。

機材を回収して叢雲の状態観察ができなくなってしまうた今、尚以って叢雲を艦娘から普通の女性に戻し、結婚を急がなければならぬ。いい。

待てよ。それとも先に結婚してしまって、それを口実として解体するのかもしれない。既成事実さえ作ってしまえば事が運びやすくな

るのではないか。

いや、やはりこうあるべき、という順序は海軍男子たるもの守って当然かもしれない。叢雲もどちらかと言うまでもなくルールを重んずるタイプだ。

結婚が先か、解体が先か。

字面が酷い。

どうやらこれは卵と鶏よりも難しい問題のようだ。そもそも艦娘にとって解体とは、どういったものだろうか。試しに球磨を解体して様子を見ることも検討しておこう。

「書き方ワカラン箇所多すぎるよテートクー。叢雲呼んで来てオーケー？」

「遠征先から書類一枚のために呼び戻すつもりか」

「そもそも今時、紙とペンってどうかと思うネー。こないだ珊瑚諸島で怪しいシルエットを発見したって報告したデシヨ？ あれスマホで写真撮ったのヨ？」

スマートフォンを携行品として許可した覚えはない。まあ深海棲艦に奪われたとしても海中でスマホを使用できるとは思えないからどうでもいいが。

「秘書艦用のパソコンはあるにはあるが、使えない理由が三つある。一つ、書類の入力をデジタルにすると不慣れな秘書艦が訳分からんまま入力して訳分からん内容を訳分からん場所に送信してしまう事故があったからだ」

「オウ、意外とそれっぽい理由ネー」

「私に二十五枚もの始末書を書かせたのは比叡だ」

「Oh……」

「二つ、これは秘書艦にある程度自由にさせた私も悪いが、定額課金制オンラインゲームに手を出した馬鹿者がいた」

「そ、それは私達も謝ったヨー。次のミスで霧島が比叡をスクラップにするって決めてるから勘弁してクダサイ」

「三つ——」

「ストップ！」

椅子を蹴飛ばして倒して立ち上がった金剛は、変身ポーズか何かのように左腕を垂直に立て、手の甲を正面に構えた。超高火力を叩き出す戦艦とはとても思えない白く細い腕。叢雲には届かないがそこそこ見どころがあると言えなくもない——だが金剛が私に見せたものは腕でも手でもなく、左薬指で怪しく輝くアクセサリだった。七百円で好評発売中のアクセサリだった。

「だからどうして艦娘が私の知らないところで勝手にケツコンカツコカリしているのだ。そもそも金剛、お前はまだそこまでの練度に達していないはずだぞ」

「別に手続きしなくてもリングを指に嵌めることはできマース。こういうアイテムに大切なのは、ハートだと思いませんか？」

「ハートが籠もらないからカツコカリなのだろう」

「このリングをくれたのは比叡なんデス」

聞けよ。

「昔こそ私も提督のナンバーワンになりたいと思っていたこともありマシタ。今だつて提督からのケツコンカツコカリのお誘いを……待って……一応待つてマス。でも提督のナンバーワンは私が英国から帰国した時からずっと叢雲。そしてコノ私は他の誰かのナンバーワンでもあつたのデス」

こんなトークができるのは提督だけネー。そう言つてはにかんだ金剛は、確かに誰かの一番になるに値する華を持っていたと認めざるを得ない。叢雲という既に心を決めた相手がいる私でさえ、そう思わずにはいられない。比叡とつて指輪を贈るに値する、愛する自慢の姉、なのだろう。

「私もどうやら比叡のことをどうこう言えない、根っからのシスコンのようネー。比叡だけじゃなく榛名も霧島も、私の最愛の妹達なのでス。だから提督、こんな事は良くないと分かつてマス。でも比叡がこれ以上何かやらかしても少しの間だけ——長女である私が責任を取るまで、どうか猶予を与えてはくれませんか？ パンチメガネ霧島には私から話しますカラ」

「なぜ霧島なんだ」

「ぎつぎ言ったネ。比叡が次、何かやらかした時は霧島がメガネパンチで比叡の顔を粉碎してしまうヨ。……提督はメガネパンチの威力を知らないknow?」

「知らん。そんなしんみりした顔でメガネパンチとか言われても冗談にしかな聞こえん。なんだメガネパンチって、もう少しマシな技名はないのか」

「メガネが放つ必殺のフィストに余計な装飾は不要ネー」

「今お前、最愛の妹である霧島をメガネと呼んだぞ」

「気のせいネー。……じゃあ提督、話してもらいまシヨウ。秘書艦のパソコンが使えなくなった三つ目の原因トハ!」

「OSがWindows XPだったからだ。サポートが終了した」
「……………」

「アレは元々、私が叢雲のためにポケットマネーで購入したものの痛いつ!? やめっ、お前モノを投げるな!」

「フック! そんなシヨボい理由でマイシスターの話させてんじやネーヨ!」

「シヨボいとは何だ! お前のように安い紅茶だけ買っていればいい奴と私を一緒にするな!」

「シヤラップ! ファ○キン提督の下で働く私らがどんだけ苦労してると思ってるネー! 消費税増税だか何だかにかこつけて給料ダウンさせヤガツテ! 超弩級戦艦が穴の空いたソックス捨てるかどうか悩むとか意味わからんヨ!」

「それはお前が比叡のゲーム代を肩代わりしているからだろうが!」

「私がゲーム代なんか出すわけ……………! ………………What? パーダウン?」

「どうした、突然顔が青くなったぞ」

「何の話ネ。ゲーム代って何のことネ」

「知らずにケツコンカッコカリの指輪を受け取っていたのか」

あまりにも金剛が可哀想だったので、私は可能な限り丁寧に説明してやった。といっても、ややこしい部分は一つとして無い。

事の発端は比叡が秘書艦(叢雲)用のパソコンで始めた定額課金制

ゲームだ。途中で止めさせたところで、一度手を付けたならば当然、料金が発生する。しかし比叡は宵越しの銭は持たない性質だった、……と言えば格好がつくと本人が思っているかどうかはさておき、とにかく金を持っていなかった。支払期日と給与支給日のタイミングが神がかり的に悪かったこともあり、姉の金剛が肩代わりすることになったのだった。

「それは知ってるネ。それだけは知ってるネ」

その翌月、再び同じ形式の請求書が届いた。オンラインゲームは中毒性が高いと聞いている。つまり比叡はゲームを止めてはいなかった、ということなのだろう。初回とは異なり、請求項目が増えていたことから、比叡がゲームにはまっていることが窺い知れた。

そして（金剛にとつて）肝心の請求先だが、我が鎮守府の「巡洋戦艦、金剛型一番艦、金剛」だった。私としては問題さえ起こさなければ、ゲームをするのも支払いを他人に押し付けるのも艦娘達の自由と考えている。念の為、比叡に確認して問題はないと聞いていたので、好きにさせていた。

「様子がおかしいとは思っていたヨ。一人部屋を欲しがったりティールタイムに顔を出さなくなったり……私はそれをとて心配したヨ」

左薬指の指輪——つい先程まで大切そうにしていた比叡からの贈り物を抜き取った金剛は、海を目掛けて窓からブン投げた。一連の動作に躊躇いがまるで無かった。

金剛に黙っていた比叡も比叡だが、蛙の子は蛙というか、悪い意味でこの姉にしてあの妹ありというか、二人とも誠に残念な戦艦だった。先ほど私が不覚にも美しいと思ってしまった金剛は、メツキが剥がれてしまえば七百円の絆などゴミ同然に扱う輩である。

「この鎮守府にネットゲヤってるだけの穀潰しの居場所なんてナイ。今日から金剛型は三姉妹になりマス」

「やめろ。奴はあれでも貴重な戦力だ。勝手に艦娘を解体するな」

「解体？ 何を生温いことを言っているネ提督。今、この私は『怒り』というエモーションをコントロールすることで感覚が研ぎ澄まされた——即ち、イージスシステムを会得した新たな『こんごう』であ

ると考えてもらおうヨ」

「金剛；L v. 85 ↓ こんごう；L v. 999」

「そんなので身に付くものだったのか、イージスシステムは」

「奴の存在を手取るように感じられるネ。愚かなり我が元・妹ヨ。それ程に私の監視網を避けてゲームがしたかったのならば、最低でも私のSPY—1 レーダーの探知距離以上は離れておくべきだったと、元・姉妹のよしみとして最後に教えてやるとするヨ」

「ほぼ日本に居場所がなくなるぞ」

「今日はこれで秘書艦任務を終えさせてもらおうヨ提督。戦力の事は心配無用ネ。霧島と妙高、鳥海、それに榛名にもイージスシステムを習得させて、最強の艦隊を結成するヨ。奴はその生贄として殺つてやるネ。フフ、フフフフ……」

イージスシステムを会得した代償なのか、金剛、もといこんごうの目は、ビタミン剤を摂取したムスピのそれに似ていた。



「ねえ、下の騒ぎは何？ 霧島はどうして暴れてるの？」

「気にするな。ただの姉妹喧嘩だ」

「あれ放つておいたら金剛と比叡の顔の形が変わるわよ」

「こんごう；L v. 999 ↓ 金剛；L v. 85」

「それより叢雲、演習の調子はどうだった。木曾は物になりそうか」

「あのねえ」と執務室の扉を閉める叢雲。

「今までずっと大井と北上に任せつきりにしてたポジションが、今々で、急に他の誰かに務まると思う？ 木曾はあんな性格だから頑張つてくれてはいるけれど——」

そう言いながらも叢雲は、下の階で制裁を加えられている今日の担当秘書艦が投げっ放しにしていた書類を手に取り、目を通していく。遠征から帰った直後であっても事務の事を気にかけて、こうして真っ直ぐ執務室に足を運んでくれるのはさすがの貫禄であると賛辞を贈りたいところだが、私達の間にもそのような言葉は野暮というものであ

る。

「——まだまだ時間が必要よ。営倉でイチャついてる二人を出す気がないのなら、戦線はこのまま暫く偵察と牽制程度にしておいた方がいいかもね。まあ、それはあんたが判断することだけけれど。予備戦力の強化には私も賛成よ。層が厚くなればなるほど私達も安心できるしね。木曾にはプレッシャーをかけるように悪いかしら」

「問題なからう。あの球磨の妹だ」

「球磨？」

そう言つてはみるものの、球磨型の姉妹関係はどうなのだろう。霧島をピラミッドの頂点に据え置く金剛型姉妹より複雑だと推測するが——いや、だからこそ考えるだけ無駄か。

「今の話で遠征の報告を受けたこととする。今日はもう休んでいいんだぞ」

「誰がこの書類を片付けるのよ。疲れてる私を労うのなら、下から今日の秘書艦だったはずの金剛を連れてきてよね」

金剛の言っていたメガネパンチが本当ならば、それを喰らった金剛が今、意識を保っているとは思えない（直に見てきた叢雲も分かつて言っているのだろう）。

叢雲には余計な迷惑をかけてしまった。早く風呂にでも入りたいたらうに。明日からはもっとマシな秘書艦の人選を行わなければ。

第03話 叢雲の薬指 3

天気予報では明日の朝から久しぶりに晴天が拝めるとのことだったが、窓の外はただひたすらに暗く、この執務室の照明で照らす範囲の雨が見えるだけだ。この分だと予報は外れるだろう。

ふと、子供の頃に習った詩の事を思い出した。坊主が月下の門を押すか、叩くか、チャイムを鳴らすかを推敲する話だ。今のこの執務室の様子にとても似ている。月こそ見えないが、変わらない調子の雨音、それと時雨がペンを走らせる音が静けさを強調しているように思う。

「雨が気になるかい？」

「時雨；L v. 70」

「時雨に秘書艦を任せるようになってから、ずっとこんな空模様だったからな」

「僕が雨女だと？」

「違うのか？」

「僕は他の艦娘より少し運に恵まれていて、明日は久々の休暇を楽しもうと思っている。明日が晴れになるように今の雨があるのさ。どうかな、てるてる坊主よりは信じてもらえるとと思うけれど。【明日はきっと晴れる】」

「ふむ。確かに説得力はあるな。——少し休憩しよう」

眼鏡を外して背筋を伸ばす。もっと良い椅子があれば私の仕事も捗るのだろうが、贅沢は口に出せば出すだけ虚しくなる。この簡素な椅子を私はずっと尻で磨き続けるのだろう。

時雨は立ち上がって背伸びをして、窓の側に行く。硝子に映る時雨の姿が硝子の上を流れる雨水で歪められる。水平線も見えない黒一色の外に、時雨は何を見ているのだろうか。

「すまないな。こんな時間まで働かせて。疲れただろう」

私がそう言うとき時雨は何故か首だけをこちらに向けて、謎の深海棲艦Xでも見るように眉をひそめた。先日新たに発見された黒い棲姫の姿を見た艦娘の多くが同じような反応をしていた。コイツ何ゴス

ロリしてんだ？ といった風の。

「なんだその顔は。私を轟沈させる気か」

「轟沈？ 何の話だい？ 提督こそ、少し疲れてるんじゃないかい」

「そんな顔で見物されるほど疲れてはいない」

「今日はもう休んだほうがいいよ。後は僕がやっておくから」

「秘書艦にすべて任せられたら提督はいらん」

「なら僕が提督代理として働こう。艦隊と叢雲の事はもう心配いらないよ——なんてね」

「こうも堂々と造反されるとはな。だが叢雲だけは何があろうと譲れん」

「艦隊の方はいいのかい……？」

「二人揃って寿退役した、ということでご宜しく頼むぞ時雨新任提督」

「やめて。冗談だからやめてよ。……提督が叢雲以外の誰かに労いの言葉をかけるだなんて思わなかったから、少し驚いたんだ」

悪気無く失礼な事を言ってくれる。確かに叢雲は別格だが、他の艦娘も我が鎮守府の大切な仲間だ。再認識などする必要もない。これまで上手くやってきたのが何よりの証拠だ。それにいくら叢雲鼻肩だとしても、他の者に労いの言葉一つかけない提督など存在するのだろうか。してよいのだろうか。

「昨日の私はどうだった。お疲れ様の一言もなかったか」

「いや、そこまで気にしてたわけじゃなくて、さっきのことも——何て言えばいいのかな、少し空いた間で改まって言われたような気がして、ちよつと驚いたのさ」

「それならいいが」

「でも僕達が、まあ、叢雲までとは言わないけど、やさしい言葉が欲しいと思ってるのは事実だよ。今は叢雲以外に仕事を任せられる秘書艦を探してるんだろう。僕のように慣れた人選もいいけど、この機会にいるんな子に任せてみたらどうかかな。意外と向いてる子がいるかもしれないし、交流を深めることもできる」

「金剛と比叡が今、長期療養中なのは元はといえば二人に秘書艦を任せただったんだぞ」

「……………んん？ 初耳だよそれ。何がどうなったら霧島が暴れることになるの？」

「霧島は何か言っただけでなかったのか」

「言っただけはいたけど、僕達はメガネパンチが炸裂するのを離れて見ていただけだったし、金剛と比叡にまだ息があるかどうかでパニックで……………」

メガネパンチは金剛姉妹の内だけではなく艦娘達共通の呼称だったのか。どれだけ恐ろしいんだメガネパンチ。

「二度見てみたいな、メガネパンチ」

私が適当に正拳突きの実似をすると、「メガネパンチはそうじゃないよ提督」と遮られた。

時雨は両足を肩幅に広げ、両の拳を腰だめに据え置き、一度深呼吸をした。そして大きく息を吸うと、静から一点、両腕を交互に、滅茶苦茶に振り回した。腰を使うことなど考慮せず、とにかく空中の一点に向けて一発でも多くのパンチを、あらゆる角度から叩き込む。震えるぞハート。燃え尽きるほどヒート。刻むぞ血液のビート。メガネパンチはまさかのラッシュ系だった。

「ふう……………、やっぱり人の体には無理があるよ。でも霧島がやると腕が増えたように見えるくらいスゴイ技なんだ」

「霧島の練度は高くないが、ポートワイン破壊作戦に参加させてもよかったかもしれない。港湾棲姫を一度のメガネパンチで破壊できれば資材を枯渇寸前まで使わずに済んだものを。勿体無い事をした」

「肉弾戦が通じるかな……………？ 資材がなくて休暇を取らざるを得ないというのもイマイチ格好が付かないね。中部や北太平洋まで出撃したかったのかい？」

「勲章四つで叢雲の改造設計図と交換できるからな。戦果を上げれば勲章もどんどん集まる」

「提督にとって勲章そのものは銀のエンゼルくらいの価値しかないんだね……………。分かっているとと思うけど、叢雲は今のところ改二にはなれないし、仮に改造できてもそれ以上はないからね」

「時雨はどうして改二になれたんだ？ 同じ駆逐艦だろう、コツがあ

るなら教えてくれ。やはり夕立と同じく、その動物の耳のような髪型に秘密があるんじゃないか？」

「……提督、そろそろ仕事に戻ろう」



予報通り、あるいは時雨の強運が空から雲を追い払ったのか、今朝は空も海も見事に青い。あの水平線の彼方では他の艦隊が例の黒い棲姫を破壊するために戦っているのだろう。海の平和のため、我が艦隊の分まで頑張ってもらいたいものだ。しかし出撃前に演習の場で、戦艦に46cm砲の微調整を行わせるのはやめていただきたい。新たにやってきた天津風——陽炎型ではあるがやっとな仲間が増えたと島風が泣きながら迎えた艦娘を木っ端微塵にするつもりか。

まあ今は演習さえも極力控えなければならぬほど資材が無く、どこか別の艦隊達が黒い棲姫を破壊するまでの間は資材の備蓄に努める他にできることはないのだが。頑張ってくれ全国の提督達よ。私は声援だけは惜しまない。

従って本日の私の業務は海の彼方とは関係が無い。時雨の改二の秘密を暴くことである。

勲章との交換で改二への改造設計図を入手することができる——これはつまり軍が目覚ましい戦果を露骨に要求してきたという事に他ならないと、私の鋭敏な頭脳が昨夜、布団に潜った瞬間に陰謀を見抜いた。勲章を要求される改造と練度のみで到達できる改造、それに何の違いがあるというのか。開発に技術や時間を要するから、とは言わせない。ケツコンカツコカリなどというシステム(七億円)で遊んでおいて、叢雲には改二どころか正確な時刻が分かるという謎の時報システムすら用意されていない。ふざけている。軍は戦争と叢雲をナメているとしか思えない。

軍が動かないのであれば私が動く。今日は休暇である時雨を観察して改二の秘密を暴いてみせよう。



まずは食堂で姿を見つげようと歩いていると、角を折れてきた時雨とぼったり出くわしてしまった。ラフな格好をしているが動物耳のくせ毛は変わらない。

「お、おはよう提督。食堂に行くの?」

「あ、ああ」

「提督が食堂で朝ご飯を食べるのは珍しいね。僕はもう食べたから、それじゃ」

探す手間は省けたが、これは幸先が良いと言えるのだろうか。時雨が私とすれ違って向かう先は工廠くらいしかない。数日前まで三式弾（とペンギン）を量産していて現在は資材不足により完全に稼働を停止させている。

当然、私服での入場は禁じていて、それを時雨が知らないはずはないのだが……、それに出くわした時の様子も少し怪しかったように思う。どうやら観察開始からいきなり、時雨の秘密を暴くことができそうだ。

「ストーカー発見クマ。一度呼んでみたかったクマよ、憲兵さん」

「こいつ私の背後をつ……!」

「こんなところで何をしている」

「鎮守府内で女の子をストーキングしてる怪しい男を見張ってるクマ」

「ストーキングなどしていない。あっちいけ。食堂で焼き鮭の皿ばかり取って皆に迷惑でもかけてろ」

「叢雲の次は時雨クマ? 時雨にお熱になっちゃったクマ?」

「阿呆が。私が心変わりするなど断じてあり得ん」

「え、でもこの写真はどう見てもだけどクマ?」

球磨が持つスマートフォン画面には、遠ざかる時雨とそれを角から頭だけ出して観察する私が映っていた。スマートフォンを奪おうとしたがヒラリヒラリと躲す球磨。よりにもよってこんな面倒臭い奴に背後を取られ妨害を受けるとは考えもしなかった。

いつまでも遊んでいたら時雨を見失ってしまう。

「この写真を叢雲に送るか時雨に送るか、実に悩ましいクマ。果たしてどちらの方が楽しめるか——」

「クソッ、ちよつと来い」

球磨のスマートフォンを持っていない方の腕を掴んだ。このチャンスモノにするためだ、想定外の事態が発生しても臨機応変に対応する他はない。

「なっ！ な、何すムグッ！」

「黙ってついて来い。交換条件だ球磨。「改二」になりたくないか？」

球磨を引つ張ったまま時雨が歩いて行った先に向かった。幸いすぐに見つけることはできたが、時雨は周囲をしきりに見回しながら歩いている。物陰に隠れながら、諜報員にでもなったような気分で後を付ける。

「時雨はどこ行ってるクマ？ 改二って何の話だクマ？ 時雨と何か関係あるクマ？」

「そうだ。時雨の様子は明らかにおかしいだろう。あの行動から重要な何かを掴むことで、どんな艦でも改二になれると考えている。球磨型の長女であるお前が誰よりも考えたんじゃないか？ 北上、大井、そして木曾が雷巡になれて自分にもなれない理由はないはずだと」

「まあ。……少しは思ったかもクマ」

「改二に隠された秘密があるのは明らかだ。私はそれを暴いて叢雲を改二にする。球磨、お前がここで静かにしていたら、叢雲の次に改造してやろう」

「確信があるクマ？ 本当に改二になれるクマ？」

「何の根拠も無く休暇中の時雨の後を追うと思うか？ そして見る、あの挙動不審っぷりを。分かったか？ 分かったら静かにしている。そしてさっきの写真を消せ」

「……分かったクマ。ただしクマからも一つ条件があるクマ。叢雲の次に改二になるのはクマじゃなくて多摩だクマ」

「なんだ。いいクマお姉ちゃんじゃあないか」

「好きに言っただけいいクマ。ほらさっさと動くクマ。この場所だと

先に隠れる場所がなくなるからあっち側に移るクマ」
「お前、本職はアサシンか何かか？」



工場に向かっていた時雨はしかし、周囲に誰もいないことを確認すると中へは入らず、建屋の裏側へと回った。私が提督に就任してから一度も行ったことがない——行こうと思ったことすらない場所だ。どんな方向音痴の者でも迷い込んだりはしないだろう。私の知り得ない目的でもない限りは。

「工場の裏に何かあるクマ？」

廃材の影から覗き込む球磨。隠れている様子がどうしてだか様になっただけで気色悪いが、ずっと誰かに見つかるのを警戒している時雨に見つからずここまで尾行できたのは、球磨の的確な隠伏術があったからこそだった。もし私一人だったらすぐに見つかっていたことだろう。

「失敗ペンギンくらいしかないんじゃないかクマ？」

「私も知らない。とにかく時雨が見える位置まで移動するぞ」

「待つクマ。位置的に隠れ場所が風上に限られるクマ。……よし。工場の屋根に登るクマ」

「待て球磨。どうやって屋根まで登るつもりだ。それに屋根には角度が付いているから転げ落ちるぞ」

「いいから黙って付いて来るクマ。このチャンスを逃すわけにはいかんクマ」

言うが早いか工場の扉まで近づくと、なんとドアノブに足をかけた。これならピッキングでもしてくれた方がいくらかマシである。僅かな出っ張りに手をかけ足をかけ、迷いなく登ってゆく。クマは木登りが上手いと聞かすが、野生のクマでもここまで上手くはあるまい。「モタモタしてんじゃないクマ。今、時雨が何かしてたらどうするクマ。早く登ってくるクマ」

そして当然のように同等の技術を要求してくる。

第04話 叢雲の薬指 4

「あそこがただの待ち合わせ場所みたいでラッキーだったクマ。提督が壁にへばり付いてる間に時雨が何かやってたら全部台無しだったクマ」

足手まとい扱いを隠そうともしない球磨に対して、何も言い返せない自分が情けない。各階の窓の間、三階と屋根の間は足をかけられる場所がなく(球磨はなんとジャンプで飛び移った)、降りてきた球磨が片足を出して私の足場となってくれたのだった。そのような調子だったので、屋根に到達するまで十五分以上はかかってしまった。これでも落下しなかっただけ良かったと言っておくべきだろう。

本当に恐ろしいのは壁登りよりも今の体勢の方である。屋根は時雨がいる方向に下る向きにあり、そこそこの勾配があり、しかも昨日の雨で湿っている。立ちやしゃがみの姿勢では時雨に見つかる恐れがあり、寝そべって雨樋の先から見下ろしているわけだが、少しでも油断しようものなら転がり落ちてしまう。時雨に見つかるところの騒ぎではない。提督が工廠の屋根から落下して死亡、などと新聞に掲載されれば私は地縛霊としてこの工廠と球磨を呪い続けるハメになるだろう。靴と靴下を脱いで、どうにかへばり付いていられるものの、時雨の観察が終わった後はどうやって地上に降りればよいのだろうか。

余裕綽々の球磨は長い髪が風にさらわれないように片手で押さえてさえている。

これだけ苦労して監視しているターゲット——時雨はといえば、特に何かをする様子はない。工廠裏にあるものといえばペンギンの山くらいで、それらに近づきもせず、ただ壁に寄りかかっている。まさか貴重な休暇をこのような場所で浪費するのが趣味でした、という事は考えづらく、球磨の言う通り誰かを待っているというのが妥当な推論だろう。

「お洒落してないフツーな服装だから、こっそり誰かとお出かけするって線も消せるクマ。提督、これは案外、ヤバイパターンのことも

覚悟して臨むべきかもしれないクマよ」

「縁起でもない事を言うな。時雨は叢雲の次によく秘書艦を任せているんだぞ」

「つまり時雨は艦隊の情報と影響力を持っていることになるクマ。こないだ提督が全部撤去した隠しカメラの事は知らないはずクマが——」

「貴様こそ危険な情報を持っているな」

「時雨を買収することで利益を得る奴もいるはずクマ。待ち合わせの相手と内容によつてはここで時雨を始末して、もう一人から情報を聞き出さないといけないかもしれないクマ」

球磨がどんどんおかしな奴になってゆく。私は諜報部隊を作った覚えはない。

「いいか、私達は改二の真相を暴くために今ここにいるんだ。それを忘れるな」

「改二になるために実は情報や、あるいは身体を売っていたとしたらどうするクマ?」

「なあ球磨、お前大丈夫か? 悩み事でもあるのか? 後で私とゆっくり話そう」

「誰か来たクマ」

時雨が歩いて来たのと同じ道から一人、時雨とは違い警戒する風でもなく真っ直ぐ歩いてくる。緑色のジャージ姿で時雨よりも服装に気を遣っていない。布団から出てそのまま来たような感じだ。誰だか分からなくないような姿ではあるが、右目の眼帯だけはしっかりと付けている。

「木曾だキソー!?!」

「声大きい。それと語尾が変わっているぞ」

「そ、そんな……何かの間違いだキソ。木曾が悪事に加担するなんて悪い冗談だキソ。あ、あいつは木曾に変装した誰かに違いないキソ!

たぶん最近異常に増えたスパイ報告と同時期に導入されてる夕雲型の誰かに間違いないキソ! ヤツの不愉快極まりない変装を剥いて洗いざらいしゃべらせて、それから息の根を——!」

目を血走った球磨は震える手を服の中に突っ込み、鋭く輝く物を抜いた。大型のナイフだ。私^がが持っている支給品より一回りは大きい。しかも緊急ツールの形状ではないどころか、ランボーが使っているような形状をしている。明らかに格闘戦用として用意されたものだ。なんて奴だ、つまり普段からこんな、漫画の世界ですらなかなか見かけないナイフを隠し持っているというのか！　こんな危ない奴が平然と鎮守府内をうろついているのか！　ある意味、本物の熊より恐ろしいぞ。

「お、おい落ち着け馬鹿者、あれは本物の木曾だ。お前の妹の木曾だ。あと語尾をクマに戻せ」

「違うクマ。違うクマ。木曾が昨日言ってたクマ。今日はTSUTA YAでスパイダーマンの新しいやつをDVDを借りてくるって言ってたクマ。一緒に見ようぜって言って……ぐすつ……言って……ひっく……だから」

「妹を勝手に犯罪者だと思い込んで泣くなよ、どれだけお前の愛情は歪んでいるんだ。まだ朝だぞ、DVDを借りに行く時間なんてまだいくらでもあるだろうが」

「でも木曾はクマに、なんも言ってくれなかったクマ。ひぐつ……クマに黙って時雨とランデブークマ……」

「私達は改二の秘密を探りに来たんだぞ。よく考えろ、時雨はもう改二で、木曾は改二になるべく訓練中だ。つまり木曾は時雨に改二になるための教えを乞うとか、技術を受け取るとか、そういうことだとか思えん」

「クマあ……」

「まずはあの二人の会話を聞くん。球磨、お前がこのポジションを確保してくれたからできることなんだぞ」

「ぐすつ……分かったクマ。クマも「妹殺しのクマちゃん」とは言われたくないクマ」

誰が呼ぶか。

球磨は涙を拭って、逆手に構えていたナイフをクルリと器用に順手に持ち替えて、再び服の下にしまった。左脇の下あたりにナイフを収

めるシースがあるようだが、セーラー服の上からではまったく分らない。私の立場としては没収すべきなのだろうが、今は改二のほうが優先度は高い。私も冷静になるべきだ。なに、艦隊にアサシンが紛れ込んでいることなど存在さえ知れていれば取るに足らない事である。我が艦隊は宗教や信条といったことでは差別を断じてしない。

私と球磨が遊んでいるうちに木曾は「よう、随分と早いな」と工廠の裏、私達の眼下に来ていた。

「メシ食ってねえのか？ そんなんじゃ力が出ねえぞ」

「木曾；L.V. 44」

「やっぱりちよつとね……大丈夫、今夜もしっかりやるさ。長月は一緒じゃなかったのかい？」

「あいつも食堂では見かけなかったぜ。そろそろ時間だったのに、あいつが遅れるのは珍しいな」

「そんな日もあるさ」

「案外、腹壊してたりしてな」

「それは……ちよつと想像できないね」

「長月も来るクマ？」と、やつと普段通りの落ち着きを取り戻した球磨（こいつの「普段通り」がいったいどんなものか、もう私には判断が付かないが）。

「らしいな。睦月型の駆逐艦は改二からは程遠いと思うが」

「特型の叢雲達も似たり寄ったりだと思おうクマ」

「叢雲だけ艦装が豪華だろうが。地味な主人公とその仲間達の中で一際輝いているだろうが」

「あーはいはいクマの失言クマ。ほら何か話してるクマよ」

こいつ、さっきまで泣いていたくせに！

「しっかし久しぶりだよな。昨日アレを聞いてから昂ぶっちゃまってよ。この天気は皮肉なもんだよな」

「【明日はきつと晴れる】。……昨晩、提督にも同じ事を言ったけれど、僕は心の中でずっと、雨が降り続けばいいのになって思ってたよ。雨は、いつか止んでしまうのにね」

「不安なのか？」

「……木曾と長月を巻き込んでしまった僕としては、泣き言よりも感謝の言葉しか言うべきじゃないんだろうけどね」

「感謝なんか必要ないね。仲間だろ？」

「それでも、ありがとうの一言くらい言わせてほしいな。木曾は平気なのかい？ 眠つてもいないのに悪夢を見るんだよ」

「ま、確かに気分がいいとは言えないな。でも、そうだな——俺には時雨と夕立を助けて、さらにこの鎮守府を守るって理由がある。深海棲艦と戦うのと同じ使命感ってヤツだな。それ以外の雑念がない。だから割り切れる。だから、あの気色悪くて胸くそ悪い【ソロモンの悪夢】を見る事も蹴散らす事も、不安じゃねえなあ」

時雨と木曾が穏やかではない話をしているのは分かる。しかし私にはまるで心当たりが無い。ソロモンの悪夢とは夕立が言っている事を指すのだろうか。まさかガンダムの話ではないだろうか。

「その強さを少しでいいから分けて欲しいよ」

「一番最初にたった一人で立ち向かおうとしたお前は十分強いぜ、自信持てよ。もしお前に勇気がなくて最初に逃げてりゃ、ここは間違はなく壊滅してたんだしな。それに俺は軍艦としての練度じゃお前にはまだ届かねえし、ゾンビ駆除の腕前じゃ長月の足元にも及ばねえ」

「長月に関しては同意するよ。夕立が改二になったあの日、あの時、長月が偶然近くに来てくれなかつたらと思うとぞつとするよ。実は今でも疑ってるんだけどね。実は長月はこっちが本職で、だからタイミング良く助太刀に来てくれたんじゃないかって」

「ああ、違いねえ。あいつは戦闘の天才だ」

「まだ僕と長月だけで戦ってた頃、長月がゾンビに背中を見せたことがあってね。僕が危ない！ って叫ぼうとしたら振り向きもせずにも首を刎ねちゃって。で、ボソツと言ったんだ。「私は出演するゲームを間違えたかもしれない」って」

「ブツハハハハ！ 自分で言ってるじゃねーか！ そうだよ長月にとつちや艦これなんて温過ぎるだろうよ。あいつはバイオハザードとかデビルメイクライみたいな、いやダークソウルくらいが丁度いいか？」

「言えてる言えてる。この前の鼠輸送作戦中、レ級に見つかったやつた時なんて——」

時雨と木曾の会話があまりに突飛すぎて理解が追いつかない。長月の強さ談話で楽しんでいることだけは分かるが、私は長月には燃費の良さから遠征だけを任せているはずである。ならば単純にゲームか何かの話か、とも考えられるが、それにしても時雨の語っていた内容は重すぎる。

「提督、長月ってそんなに強かったクマ？」

「遠征だけで練度が高いと言えるほど上がるとは思えない」

「じゃあ練度とは別の種類の強さクマ？　メガネパンチが恐ろしい霧島とか、そういう方向の強さクマ」

「お前達は私に隠し事をし過ぎだ。霧島が強い、長月が強い。それにお前は どうしてナイフなんか隠し持っている」

「護身用クマ」

「十得ナイフが見つかった時の言い訳みたいなことを言うな。あんなゴツイナイフが護身用であつてたまるか」

「木曾も改二で軍刀を持つクマ。それと一緒にクマ」

「お前は改二ではないし、仮に改二になれたとしても絶対にナイフを持ち歩くキャラにはならない。木彫りの熊でも持ってる」

「改二の話はどうなったクマ。時雨と木曾の言ってることがサツパリ分からんクマ。骨折り損の草臥れ儲けクマ」

「それどころじゃないだろうが。あの二人、怪しすぎて——」

「二人とも動くな」

「長月；Lv. 16」

私とクマの話を遮るように、顔と顔の間に刀の切っ先が割って入ってきた。音もなく、雨粒が落ちるように自然に、しかし刀は屋根から数ミリ程の隙間を残して止まった。球磨が顔を上げたので、私もそれにつられて刀が伸びる方向を見た。長月がいた。屋根に寝そべっている私達を見下ろす形で立っている。刀は長い。長月の体格が小柄

なための錯覚もあるかもしれないが、少なくとも私のような大の大人が扱う長さ以上はある。

恐ろしいのはその眼だ。エメラルドグリーンの、まさに宝石のような眼は確かに私を捕捉している。観察ではない。ただ動きを捉えてさえいればいいという冷淡さが伝わってくる。

ようやく「動くな」と言われた事を思い出した。私と球磨は迂闊にも振り向いてしまったが、これは許されたいらしい。

「時雨！ 木曾！ この二人に後を付けられていたな！」

「えっ、長月？ ——提督?! どうしてそんな所に!?!」

「姉ちゃん!?! お前何やってんだ!」

「それはクマの台詞クマ！ 木曾はスパイダーマンのDVD借りに行くんじゃないかったクマ！」

「まだTSUTAYAが開く時間じゃねーよ！ 後でちゃんと行くよ!」

「あとゼロ・グラビティ！ ゼロ・グラビティも借りてきてほしいクマ!」

「これだから朝は行きたくなかったんだよ！ どうせ俺が出かけた後になってアレもコレも借りてこいって、いつつもそうじゃねーか！

自分で行けよ、もう!」

「木曾、今それはいいから……。提督。そんな場所にいるって事は、本気で僕達を監視してたってことだね。理由を聞かせてもらってもいいかい?」

「お前達の説明が先だ。三人は何の集まりなんだ？ 深海棲艦以外の何かと戦っているのか？ だから長月がこんな物騒なモノを持っているのか?」

「……………」

返事がない。屋根の上からでは俯く時雨の表情は見えないが、沈黙は肯定と受け取って間違いない。では時雨は私の問いかけのどこまで肯定した？ 否定の一つもない、ということは全て外れてはいないということか？

「時雨、答えなくていい。私が二人の記憶を消す」

「長月に見つかってたクマね。やっぱり提督がここまで登るのにモタモタしてたのが悪かったクマ」

「いいや、私が見つけたのは通路の舗装外にあった不自然な足跡だ。昨日は雨だったからな、クツキリと跡が残っていた。隠れているところを背後から仕留めるつもりだったが、さすがに屋根に潜んでるとは考えもしなかった。おかげで見つけるのに時間がかかって、余計なことを聞かれてしまった」

「長月、お前はいったい何者だ」

「睦月型八番艦の平凡な駆逐艦だよ司令官。それだけの認識でいい。悪夢を見るのは私達だけで十分だ。じゃあな、明日からはまた艦隊の指揮に――」

「クマアツ!!」

ナイフを抜いた球磨が長月に飛びかかる。うつ伏せの体勢から、とんでもないバネだ。しかし対する長月は踊るように体を一回転させただけで球磨をいなしてしまった。金属が衝突する甲高い音は聞こえたが、私の眼には長月がただ回っただけで、球磨は勝手に転んだようにしか見えなかった。受け身も取らず屋根に突っ込むように倒れてしまった球磨は手足を投げ出したまま動かない。血は流れていないようだから斬られてはいな――



目を覚ました私はまず、自分が記憶喪失になってしまったのではないかと疑った。例えば交通事故に遭い医務室に担ぎ込まれた、といったフィクションにありがちな展開だ。しかし「ここはどこだ」と見回すお決まりのリアクションは取れなかった。この部屋が我が艦隊の拠点の医務室だと一目で分かっただけのだからから面白くない。付き添いが一人もいないのも面白くない。さらに隣のベッドで球磨がヨダレを垂らして眠っているのも尚一層面白くない。何故叢雲ではなく球磨なのか。

「……すう………ジョジョ………ジョジョも借りて………クマア」

傷病者には見えない。少なくとも向かいのベッドで仲良くミイラの仮装をしている金剛と比叡に比べたら健康そのものだろう。

さて、私がこんな場所で寝ていた理由だが、頭頂部が痛い。コブができているらしい。それくらいしか体の変調がない。昨日酒を飲み過ぎて覚えていない、という事ならば二日酔いで苦しんでいるのだろうか。やはり何らかの理由で頭を強打して気絶したのだろうか。

だとしても、タンコブを作ったきつかけどころか、気絶してしまう、あるいは眠ってしまう前までの覚えすらないのはどういうことだ。壁に掛かった時計の針は六時三五分を指している。外は明るいから今は朝だ。カレンダーはあるが今日が何月何日なのかまでは分からない。では昨日の私はいったい何をしていた？

「キルミー……ベイバー………クマア」

コイツは寝言でも語尾にクマを付けるのか。

窓の外は明るい、私が覚えているのは雨が続いていた日の事までだ。遅くまで働いていて、マヨナカテレビでも見てみようかと考えていたが、時雨は翌日は晴れると断言した。そして私は艦娘の改二について考えながら、当然、医務室ではなく自室に戻った……はずである。果たしてそれは昨日の事だったのか、それとも何日か過ぎてしまっているのか。



執務室で日付を確認すると、時雨が翌日は晴れると太鼓判を押した日は一昨日だった。つまり私には丸一日分の記憶が無い、という事になる。例えるならばペルソナ4でカレンダーが勝手にスキップして攻略計画を潰されたような気分だ。マヨナカテレビに叢雲が映っていたらどうするつもりだ。ウチのクマの何と役に立たないことか。着ぐるみ以下の軽巡とは情けない。

球磨に深海棲艦の着ぐるみを装備させて出撃させるのも悪くないと考えていると、執務室の扉がノックする音とほぼ同時に開いた。

「こんな所において、もう。せめて先生の許可くらい貰ってくれない？

みつともなく気絶して担がれてきたんだから」

「叢雲；L v. 99 ↓ 101」

「何も覚えていない。私は昨日どうしていたんだ」

「こつちが聞きたいわよ。球磨と一緒に工場の近くで気絶してたって時雨と木曾は言ってたけど、朝早くから何やってたんだか。遊びで皆に迷惑かけるんじゃないわよ」

「遊んではいなかっただろう。私が球磨と遊ぶはずがない」

「じゃあ閉めてた工場で何やるつてのよ。頭打って気絶つて、少なくとも馬鹿やつてたのは確かじゃない」

反論できない。記憶がないと人間はこうも不利な立場に立たされるものなのか。記憶がないと言い張る政治家も、そういえばあまり見かけなくなつた。

「まあいいわ。昨日はどうせ暇だったし、あんたも球磨も今は問題なさそうだし。それより仕事前に朝食にしなさいな。昨日の朝から何も食べてないんだから」

「ああ、そうしよう」

叢雲に気遣わせてしまうとは情けない。



「あー。もう起きたつぽい？ 提督さんつぽい人」

「夕立；L v. 58」

「提督さんつぽい人とは何だ。ただの不審者になるだろうが」

夕立は私に歩調を合わせた。適当に何か買って執務室で食べるつもりだったのだが、たまには食堂で食べるのも悪くない。TKGは暫くぶりだ。それに覚えがないとはいえ丸一日眠つてしまう何かがあったのだ。せつかく食べるのであれば健康的なものの方がよい。「ねえ提督さん、時雨の具合が悪いっぽい。今朝も顔色が悪かったし、朝ご飯もいらないうつて。昨日は提督さんのこと心配してたけど、関係あるっぽい？」

「迷惑をかけたらしいことは申し訳ないと思つている。だが私も覚え

ていなくて、むしろ時雨に聞きたいくらいだ。なあ夕立、時雨は昨日、何をしていたか知っているか」

「木曾と一緒に提督さんと球磨を運んできて——」

「その前だ。私と球磨は工廠の近くに倒れていたのだろう。もっと詳しい事を言っていないかったか」

「べつに言っていないっぽい」

昨日は工廠の稼働を停止させていた。当然用事のある者はいない。だとしたらどうして私と球磨はそこにいて、さらに時雨と木曾は気絶していたらしい私達に気付くことができた？ 仮に叢雲の言う通り私と球磨が工廠付近で、鬨牛ごっこでもして二人揃って気絶したとすると、誰にも気付いてもらえず丸一日、誰かが工廠を開けに来るまで野ざらしになっていたはずではないのか？ それはそれで嫌な話ではあるが。

この出来事には十分ミステリとして成り立つ要素がある。ミステリに詳しいわけではないが、少なくとも「誰が」「どうやって」「なぜ」の三つが見事揃っている。しかし悲しいことに騒ぐ者は誰もおらず（夕立もこのように呑気に朝食の時間だ）、謎を解決してくれる探偵役がない。ミステリにはなり得るが、ストーリーにするための魅力が皆無である。せめて球磨が死体で発見されるくらいのインパクトが欲しいところだ。

「後で時雨にちゃんとお見舞いしてお礼言つてよ。じゃないとせっかくの休暇が台無しにされて可哀想っぽい」

「木曾にもな。特別休暇でも与えたほうがいいだろうか」

食堂の扉に手を伸ばそうとすると、ちょうど長月が扉を開けて出るところだった。

「ん、目を覚ましたのか司令官。頭の調子はどうか」

「ダメっぽい」

「お前、今日は雑用係だ」

「大丈夫そうだな。今日も我らの艦隊は平和だ」

「それじゃ。もう屋根には登るなよ。」

長月はそう言つて去つていった。

「提督さん、まさか屋根に登って落ちたっぽい？」

「そんな阿呆なことをするものか」

遠ざかっていく長月の小柄な姿が私にはどうしてだか頼もしく、また恐ろしく見えた。

第05話 叢雲の薬指 5

「おっそーい！ 遅いおそいオソイ遅イおそまつさまっ！」

「島風；Lv. 31」

「うるっさいわねえ……あなた「速さ」と「早さ」の区別もつかないの？」

「天津風；Lv. 11」

「つくもん！ 分かるもん！ だから時間が経つのが遅いつて言ってるの！」

「朝っぱらから時間にケチつけるなんて詩的ね。ああ時の女神様、私はもう一度布団に入るまでにどれだけ長く苦しまなければならぬのでしょうか」

「え、天津風ってポエマーだったの？」

「あ、ん、た、ね、え……！」

「あーあ、どうして使えないんだろ。メイド・イン・ヘブン」

「素数でも数えてなさいよ。少しは落ち着きのある人間になれるかもよ」

「ねえ。どうしてメイドさんが天国にいと時間が加速するの？」

「話題を転がすのだけは無駄に早いわよね、あなた」

「ねえなんで？」

「なんでってそれは——ほら、天国のメイドだからに決まってるでしょ。悪魔のお屋敷のメイドは時間を止めたりするじゃない。なら天国のメイドは逆に時間を進められるってことじゃないの」

「おお！ なるほどー。天津風って意外と物知りなんだね」

「意外と、は余計よ」

「ねえねえ、他には面白いこと知らないの？」

「そうねえ。例えばこんな話はどう？ 人間は脳をたった10%くらいしか使ってないのよ。残りの90%には時間を止めたり加速させたりする超能力が眠ってるかもしれない」

「ホント!? なにそれすごい！ じゃあ私もヘイスガとか使えるようになれるの!?!」

「ヘイスガ？ さつきあなたメイド・イン・ヘブンが使いたいって言っ
てなかった？ ヘイスガって、いや、あなたがそれでいいならいいけ
ど」

「よーし！ 提督が戻ってくるまでに習得するよ！ 40ノットを超
えて、目指せマツハ40！」

「ヘイスガでメテオが降ってくるくらいに速度になったわね」

「連装砲ちゃん！ 天津風にでんこうせっか！」

「やめてその勢いだけのノリやめて。あなた調子に乗って速さばっか
り求めていると空気の摩擦で燃え尽きるわよ」

「それくらい知ってるもん。大気圏突入する時でしょ。軍艦の耐久は
すごいから大丈夫だよ！」

「島風って宇宙戦艦だったの？」



「遅いわね」

少しイライラしたように叢雲がそんなことを言うとは、珍しいこと
もあったものだ。バスの到着時間は決まっているのに、叢雲は腕時計
に目をやり、溜息をついた。今朝から機嫌が悪かった、という風には
見えなかったが。

ふと目が合った。かわいい。私の心配を読み取ったのか「ああ、違
うの」と頭を振った。

「なぜだか分からないけど、留守を任せた二人が馬鹿なことを言いつ
放しで散らかしてる気がするのよ。早く執務室に戻らないと」

「そうさせないために島風と天津風、二人組で置いてきたんだろう。
天津風には少しでも仕事を覚えさせたかったしな」

「ああいう子ほど奇妙な勘違いをしてたりするのよ。メイド・イン・ヘ
ブンの和訳を「天国の使用人」だと思っていたり」

「随分と具体的な例だな」

「ダメ、やっぱり気になる。後で謝るから、出迎えは任せたわ」

走って戻っていつてしまった。大切な客人よりも心配になるほど

のことだろうか。出迎える時はしつかり気を引き締めてと、いつも言っているのは叢雲だ。これまで私と叢雲の二人で出迎えなかったことは、私がどこだったかの海域での作戦で忙殺されていて、叢雲に任せただけきりしかない。

島風は確かに天津風が来てからというものの元気を有り余らせている。同じ任務に就かせていれば練度も積極的に向上させようとするだろうという期待があり、実際それに応えてくれている。それをサポートの叢雲も否定したことはなかった。帰還してからの報告を聞くことしかできない私と違い、直接見ることができる叢雲ならば二人の関係をより深く知っているはずだが……執務室の留守は任せられないのだろうか。部屋を出た時は特に肯定も否定もなかったが。

こういう日もある、ということなのだろう。叢雲だつて完璧ではないし、島風と天津風が執務室で、例えば叢雲のような言い方をすると——未だに人間が脳を10%程度しか働かせていないと信じていたり、宇宙船が大気圏突入時に高温になるのは空気との摩擦が原因だと勘違いしていたり、そういうことだろう。よくある話だ。この海軍の生き字引たる私であっても、ビフテキがフカヒレ料理の一種ではなくビーフステーキの略であると去年、知ったくらいだ。誰にだつて間違いの百や二百はある（それでもビフテキには未だに納得がいかないでいる。ビーフステーキをわざわざ略する必要はないだろうに。美味そうな呼び方ではないだろう、ビフテキ。サイコロのほうがまだマシだと思う）。

0847。バスは時刻通りに到着した。

「出迎え頂きありがとうございます。竹櫛提督」

〔電・Lv. 136〕

小柄な体躯には不釣合いなほど、電の敬礼は立派なものだった。



電にとっては数ヶ月ぶり、私にとっては数分ぶりの執務室に入ると、折り畳んで壁に立てかけている机の横で島風と天津風が正座して

いた。なるほど家具を買う金がなければ艦娘を家具にしてしまえばいいじゃない、ということか。新奇なアイデアだ。二人が落ち込んだ表情をしているのもポイントが高い。島風は軍の広告に使われる姿形で、天津風はその友人。艦娘のチョイスも理に適っている。さらにレアリテイの高い二人を無駄運用しているという背徳感が私の中の新たな感覚を掘り起こそうとしてくる。よいのではないか？ これはいいものではないのか？ そこで私としてはだ。正座させる艦娘を島風と天津風に限定する必要はない、と考えてみる。

「くだらないこと考えてる顔してるわね。電が困ってるでしょ、さっさと入りなさい」

叢雲の声で奈落の底に落ちかけた我を取り戻した。叢雲を家具にするなど想像するのもおぞましい。pixivで画像を探せば出てきそうなどと愚かなことを考える私ではない。醜悪なる悪魔の囁きめ、我が愛刀【丑の刻摩天楼】で一刀両断してくれる。

ここに戻るまでに叢雲が私の机の正面に椅子を二つ用意してくれていて、叢雲と電が座った。

「ごめんなさい、出迎えができてなくて。そこのおバカ二人の相手をしてて」

「いえ、とんでもないです。私こそ忙しい時にこちらの都合でお邪魔しちゃってごめんなさい」

「必要な打ち合わせだし時間もあるからいいのよ。こうして会うのも久しぶりね」

「はい！ お久しぶりです叢雲さん。お元気そうで何よりです。その——竹櫛提督もお変りなく、なのです」

「変わらないとは何だ。私は常に鍛錬に励み成長を続けているのだぞ。活目せよ」

「はわっ!? ご、ごめんなさい！ そんなつもりで言ったのではないのです。その、健康的な意味での事でした」

電こそ私を「司令官」と呼んでいた頃から変わらない……と私の方こそ勘違いしそうになる。薬指に指輪を嵌めて、今や叢雲すら超える練度は伊達ではない。こうして談笑しているわけだが、執務室に入っ

てから一度も、微塵も、正座している調度駆逐艦二人には触れていない。余計な事に触れてはならないと理解しているのだ。さすがはピーコック島攻略作戦（ゴスロリ棲姫破壊作戦）に参戦した艦隊の秘書艦、この程度では動じないということか。恐るべし、一ノ傘率いるブラック鎮守府。

「間違っていないわよ電。この人は先週、球磨と遊んで気絶してたんだから。何一つ成長していないわ」

「気絶？ 球磨さんと？」

「余計な事は言わなくていい。それに私は球磨と遊ぶ趣味はない」

「でも私を除いたら一番お付き合いが長いのは球磨さんですよね。」

「……ケンカ、とかですか？」

「二人ともバカなだけよ」

叢雲は辛辣だ。

「雷はやっぱり、今日は忙しかったの？」

「司令官が、せめて雷だけは残せと」

「残念だけでしょうがないわ。こちらの暁と響が寂しがってたわよ。今日はあの二人は仕事を入れてないから、空いた時間にも構ってあげて」

「はい！ ありがとうございます！」

「電には今日一日だけでもいいから秘書艦を頼みたかったんだけどなあ」

「ええっ!? そそ、それは……ええと」

「あんだ、電は打ち合わせに来てんのよ。一ノ傘提督の秘書艦様を働かせるだけの蓄えがウチにあるの？」

「以前、ピーコック島攻略作戦に参加するからと資材を無心されたのだ。奴め、我が艦隊のことを補給部隊と勘違いしているらしくてな、代わりに4トトラック分のペンギンを送っておいた。だから電が働いてくれた分、またペンギンをまとめて送ってやる。トラックの手配は面倒だが、同期のよしみでサプライズプレゼントだ」

「こちらの司令官、あれ、ものすごく怒ってました」

「戦争中に他所様に迷惑かけてんじゃないわよあんだ」

「三式弾製造の歩留まりが悪いからといってノウハウを無償で提供しろなどとふざけたことをぬかした奴が悪い。友軍でもタダで融通できるものか。戦時中なら売店のパンが無料になるのかという話だ。そうだろう」

「あんただだって一ノ傘提督に徹甲弾の開発方法を聞いてたじゃない。しかも九一式徹甲弾じゃなくてダーツみたいなの、AP……何だったかしら」

「APFSDSですね。装弾筒付翼安定徹甲弾」

「そうそれ。電あんた、よくそんな名前がホイホイ出てくるわね。とにかく、この艦隊の指揮を執る人間は鋼材やボーキサイトどころかタングステンや劣化ウランを使おうとしてたのよ。信じられない。ねえ電、打ち合わせはこのバカを除いた私達だけでやらない？ 今日も一泊していくんでしょう、決める事は早く決めて、食事でもしましうよ」

何故だろう、叢雲が冷たい。今日は合同作戦に向けた、本会議前の軽い状況確認程度の打ち合わせとはいえ、私がいなければ進まない話もあるというのに。私が仕切ればどんな話もすんなりまとめて見せるというのに。冗談でも叢雲に除け者にされるこの痛み、分かち合いたい相手も叢雲であるという矛盾。男は一人、黙って耐えるしかないのか。男はつらいよ、とはよく言ったものである。

私にやさしくし続けてくれるのは電くらいのものである。それは昔から変わらない。変わらないといえば、正座させられている島風と天津風の体勢も変わらない。本当に置物のように正面を向いている。ねんどろいどのほうがまだ表情豊かである。

「いえ。竹籬提督にもいて頂かないと絶対だめなのです！」

「わ、分かっているわよ。本気にしないでいいから」

「支援のお願いもありますし、どなたに出撃して頂けそうか確認もさせて頂きたいです」

「そうは言っても今すぐ出られるメンバーは限られているのだがなあ。砲撃火力を揃えるならば山城、伊勢、古鷹ちゃん、鳥海、あとは軽巡でよければ球磨くらいだな」

「(古鷹さんだけちゃん付け……?)」

「金剛と比叡は病み上がりで、復帰にはもう少しかかるだろう。最近になって霧島の戦闘力が異常に高いことが判明したのだが、射程距離は魚雷どころか文字通り手の届く範囲だ。支援どころか最終決戦レベルだな」

「霧島と榛名も前に出しているんじゃないの？ 山城を旗艦にし始めてから……あ、いえ、山城が悪いわけじゃないのよ？ ただ羅針盤や電探が故障したり、海が予想外に荒れたり、民間船と揉めてる最中に不審船に襲撃されたり、ネウロイとかいう聞いたこともない敵と戦わされたり、アンラツキーが多くなった気はするけど」

「確かに不幸だ不幸だと聞かされ続けていれば気が滅入ってくるしな。霧島と榛名の活動制限はもう解除でいいだろう」
「？」

霧島と榛名を第一線に立たせなかったのは私に考えがあったからではない。金剛が妹達を危険に晒したくないと訴えてきたからだ(比叡は金剛とほぼ同時期に来たため、当初は一緒に海に出ていた)。自分が前に出るから妹達は後ろへと。あの頃は本当に美しい姉妹だった。どんだん力を付け、艦隊の主力になり戦い続けていたのは、常に艦隊を導く光のように輝いていたからだのかもしれない。しかし時間は残酷である。次女に裏切られ末っ子にボコボコにされた今となってはもう、金剛は今までの姉ではいられないだろう。いや、個人の事情については、まあ、提督である私の関与すべきところではない。より親身になって話を聞ける叢雲に任せるとしよう。

「航空支援はどうですか。私のところは相変わらず蒼龍と飛龍の二人だけで回しているので、空母の方々にもお願いしたいのです」

「個々の練度は高いんだがな。まともなのは大鳳と、軽空母の飛鷹だけだ」

「……赤城さんと加賀さん、翔鶴さん、瑞鶴さんも何か事情が？」

「打ち合わせが終わったら弓道場を見学しに行くといい。ではそろそろ会議室に行こうか」

「あ、あのっ！」

第06話 ラックレッツサー山城

「叢雲；Lv. 101」

「山城を旗艦にし始めてから……あ、いえ、山城が悪いわけじゃないのよ？ ただ羅針盤や電探が故障したり、海が予想外に荒れたり、民間船と揉めてる最中に不審船に襲撃されたり、ネウロイとかいう聞いたこともない敵と戦わされたり、アンラツキーが多くなつた気はするけど」

ネウロイとかいう聞いたこともない敵と戦わされたり

ネウロイとかいう聞いたこともない敵と戦わされたり

ネウロイとかいう聞いたこともない敵と戦わされたり



「お断りします。そんな事よりも扶桑姉さまを探しに行くべきです」

「山城；Lv. 73」

提督は何も分かっていない。私が何のために練度を上げてきたのかを小一時間問い詰めたい。というか今更、いや常々思っていたけど、艦隊に扶桑姉さまがない理由がサッパリ分からない。

「絶対これ陰謀とかそういうヤツよね。伊勢には日向がいるのに私に姉さまがないなんてありえないし。なので潜水艦とか狩ってる場合じゃないと思います」

「お前は今、この鎮守府の近海に潜水艦が潜んでいることを「そんな事」と言ったか？ 私の聞き間違いだといいが」

「クラゲが多いので敵は海中からは近づいてこないと思います」

「クラゲが抑止力になるなら世界は平和だ。あんなゼラチン生物が魚雷をどうにかできるものか」

「扶桑姉さまならやってみせます」

「意味もなく姉を持ち上げるな。砲弾にクラゲを詰め込まれなくなければ黙って聞け」

話に戻る提督。以前は伊勢が対応して、その時の話は聞いていたか

ら作戦内容はだいたい知っている。

この辺りの海に敵潜水艦が頻繁に接近してくるようになった。日本全国でも同じような報告があつて、つまり海面上で私たちに阻まれてばかりいた深海棲艦が、ならばと海中からこっそり近づこうとしているらしい。あるいは単純に、私達が見落としやすい海面の下だから防衛網をくぐり抜けられるのだとも言われている。どちらにせよ敵もがむしやりに攻めてくるばかりではない、とかどうとか。

鎮守府近海を何度回つて撃滅していつても、網戸の隙間から入ってくる小バエのように次々とやってくる理由、というかチマチマ対応するしか現状方法がないのは、敵潜水艦が臆病だから。こちらの本拠地に大胆に接近してくるくせに、大きな部隊で出迎えようとすると姿をくらましてしまう。だから小規模部隊でちよつとずつおびき出しては倒して帰る。また倒しては帰る。その繰り返し。私が本来姉さまを探すのに当てるべき時間をこれほど無駄に費やしてしまう任務は他にない。

「叢雲と飛鷹は何度か同じ作戦を行っているが、木曾と山城は初めてだ。特に木曾、ソナーと爆雷の扱いはいいな」

「問題ないね。ついでにクラゲも一掃して海水浴できるようにしようか」

「木曾；Lv. 44 ↓ 49」

「海水浴ができる範囲に爆雷を撒くな。作戦について何か質問はあるか」

「扶桑姉さま見ませんでした?」

「細かい判断は叢雲に任せる。では1030に出撃だ。装備の確認を怠るなよ」



海。

海。

見渡す限り海。

たまに無人島。

見慣れた光景なのに、不吉な感じがしてならないのはどうしてだろう。

「そろそろ敵潜水艦が出てくるわ。木曾、ソナー使うわよ。山城と飛鷹は空からよろしく」

「了解……………あ」

そんなはずはない。そんなはずはないのだけれど、そんなはずがあつてしまった。何度数えても瑞雲が10機しかない。余剰スペースには今日は絶対に撃つ場面がない三式弾をしこたま詰め込んだ。

これポートワイン破壊作戦の時の装備まんまだ！

出撃前に装備の確認はしたつもりだったけれど、たぶん何度も同じ装備で戦つてたから頭が勘違いしてたんだ。慣れつて怖い。

「不幸だわ……………」

「いや、それ不幸とか関係なく完つ壁に山城のミスでしょ」

「飛鷹；L.V. 74」

「艦載機忘れる航空戦艦つてどうなのよ」

「うう、ごめんなさい……………飛鷹、ちよつと分けてほしい」

「分ける？ 何を？」

「流星」

「使えないでしょ何言つてんの!？」

「練習すれば使えるようになるかもしれないし。伊勢はその気になれば彗星飛ばせるつて Wikipedia に書いてたから、私も負けてられないし」

「装備忘れてくる時点で負けてるわよ。どうする叢雲、引き返す?」
「……………まで来て戦果無しは燃料が勿体無いわ」

トゲトゲ責められるかと思つたけれど、叢雲は困つたように笑うだけだった。時々、姉さまもこんな風に優しくしてくれるんだろうな、と思つたりする。扶桑姉さまへの想いは私だけでも、たぶんこれは艦隊の皆が同じように考えている。叢雲は艦隊全員の姉みみたいなものだ。提督が無駄に猫可愛がりしているのとは違って、いてくれるだけ

で安心できる。

「相手も多くは出てこないし、戦力が足りないってことはないでしょう。今回は特に飛鷹に頑張ってもらおうけどね」

「はいはいりよーかいしました。山城。帰ったら一杯おごりなさいよ」

「それに——まあ、これくらい誤差の範囲よ。ソナーはちゃんと動かし海は静かだし、何語しゃべってるか分からない人間が乗ってる不審船に威嚇射撃しなくて済んでるだけ今日はツイてるわ。ねえ山城」

みんなの叢雲お姉さんはわりと根に持つタイプみたいだった。



索敵開始から三時間が過ぎて、私達四人はさすがに異常を認めざるをえなくなった。

敵の潜水艦どころか駆逐艦や軽巡、はたまた海鳥の一羽すら見当たらない。叢雲と木曾のソナーもパッシブタイプで性能がイマイチとはいえ、何も聞こえてこないようだ。目標ポイントをゆっくり徹底的に回って、現在は少し外れた位置、鎮守府からさらに離れたところにいるけれど、何も無い。何もいない。私と叢雲、飛鷹と木曾で交互に休憩を取りながら索敵を続けているけれど、ずっと不気味な何かを自分の肩にのしかからせているみたいだった。振り落とすたくても、振り落とす何かがあるかもしれない。肉眼で見渡せる範囲はたったの4km。戦艦の私が本来は恐れる距離じゃないのに、今はこの半径4kmが怖い。

「ねえ、ちょっと怖くなってきたんだけど。これって異常じゃない？ どうして何一つ見つからないの？」

彩雲を戻した飛鷹が私の思っていたことを代弁してくれた。

「俺は自分の耳が異常だと疑い始めたところだったぜ」と耳をポンポンと叩く木曾。

「少なくとも耳は正常よ。こっちが見落としたらあっちが魚雷撃ってくるだけだもの。でもこの静けさは経験したことないわ——嵐の前

触れってこと？」

「ちらりと私のほうを見る叢雲。なんでもかんでも私のせいにないで欲しい。」

「俺は難しいことは分かんねえけどよ。鎮守府近海に敵の姿はなかった。当面の安全は確保できた。じゃダメなのか？」

「それを確認できる材料が欲しくてここまで進んだのだけ……これは一度戻って、本格的に作戦を練ったほうがよさそうね。一ノ傘提督の管轄エリアも近いから様子を知りたいし……嫌な予感がするわ」

「だから私を見ないでよ。不幸とかじゃないから」

飛鷹は肩を抱いて身震いしながら聞いた。

「叢雲の嫌な予感って……あまり聞きたくないけど、例えば？」

「例えば——深海棲艦の拠点が新しく、ここ付近にできつつある。あるいは既にある」

「うわあ聞かなきゃよかった」

「山城。春に港湾棲姫を破壊しに行った時、鳥とか魚とかクラゲとか、深海棲艦以外の動物を見た？」

「そういえば見なかった……って不気味なこと言わせないで。戦闘に集中してて覚えてないだけ！」

「アイツらはどうやって成長する？ 港湾棲姫はどうやってあそこまで強くなった？ 強くなるまでどうやって私達の目を逸らさせた？」

「どうやって自分を守るように他の深海棲艦を集めて配備した？」

この四人の中でアレと相対したのは私だけだ。他の動物どころか雑多な敵戦艦すら目に入らなかった。考えてる暇があれば撃った。航空機に接近されても撃った。砲弾が雨のように降ってきても撃った。怪我をしても撃った。艦装が動く限り撃った。飛行甲板が破損しても撃った。観測機が飛ばせなくなったら着弾が見える距離まで接近して撃った。目に血が入っても拭うより先に撃った。壊れた甲板を盾にして撃った。アレと目が合っても撃った。アレの全攻撃が私の方を向いても——

「私達は深海棲艦のことを知らなさ過ぎるのよ」

「おい、何か来るぞ！」

木曾が叫んだ。



青空に黒い塊が浮いていた。大きい。でも飛んでいる。それもかなりの速さで。まだ遠い。近づいてみる。

「ちよつと、どこ行くの山城!」

よく見ると黒い塊は飛行機のような形をしている。近代のステルス爆撃機のような形だ。でも大きさは大型旅客機くらいはある。機体には窓などはなく赤い模様がある。

黒い機体の周囲を、小さな人影が追いかけて回すように飛んでいる。数は四。その人影を払うように黒い機体から赤い線が伸びた。人影はそれを避けて——あれは攻撃している?!

「おい、どうした山城!」

「ちよつと、ほんとに何!? 何なのアレ!」

銃撃だ。けれど黒い機体の大きさに対してあんな豆鉄砲じゃ意味がない。幸いあちらから近づいてきてくれるから姿勢を安定させられる。一斉斉射。

三式弾が上手く命中した。黒い機体のほぼ全体に当たって右翼は折れて、墜落——しない!?! 姿勢が崩れただけ!?!

だったら粉々にしてやる!!

私の真上を通り過ぎる時に黒い機体から赤い線が走って、主砲が一基やられた。あれは霧の艦隊の超重力砲みたいなものだ。けれど大した事はない。弱い。港湾棲姫と比べて弱すぎる!

「ウィッチ!?! どーして陸戦ウィッチが海にいるんですか!?!」

「今は夢でも幻でもいい! あ、さっきの砲撃もう一度お願いできますか!」

空を飛ぶ人が黒い機体の片側に集まって集中砲火を浴びせる。さすがに装甲が持たないのか、私から逃げようとしていた黒い機体は大きく旋回しようとする。次弾装填完了。的が近づくまで3、2、……「今です!」

「一斉斉射っ!!」

——弾が出なかった。もう一度、一斉斉射! ……やっぱり弾が出ない。

さつき受けた攻撃で艤装全体がダメになったらしい。ワンパン大破されたらしい。気が抜けてしまうと、叢雲達が見ているのに気付いた。三人とも、早く撃てよお前、と顔に書いていた。

「……不幸だわ」



ダメージを受けてへろへろ状態の敵に対して、こちらには雷撃機流星を操る飛鷹がいるのだから、決着はともあつけないものだった。空を飛ぶ人達が黒い機体を追い回している隙に流星部隊が、かなり無茶ではあつたけど航空魚雷を直接落つことし、黒い機体は爆散した。

爆発の破片はまるでダイヤモンドダストのように洋上に舞った。一つ一つの破片が自ら輝いている。元がああ黒い機体だったとは思えない。とどめを刺した飛鷹も他の二人も目を奪われている。こんな光景、この先二度とお目にかかれまいだろう。

「あいつ。先ほどの応援、感謝致します」

空を飛んでいる人——両足にレシプロ機の胴体をズボツと嵌めたような道具でホバリングして、とんでもなく古臭い機関銃をスリングで背負った少女は丁寧な敬礼をした。

「単独演習中に先のネウロイと遭遇してしまつて……私達だけでは対処しきれなくて」

後ろで他の三人も同じ装備、同じ服を着ている。服はパツと見お固い制服だけれど、じゃあなぜ上着だけを着ていてズボンなりスカートなりをはいてないのだろうか。邪魔になるからだとしても短パンという選択肢もあるはずなのに。趣味なのか。はいてないのは誰の趣味なのか。

「私、扶桑海軍兵学校一号生、服部静夏と申します」

「扶桑?! いま扶桑つて言った!?!」

「は、はあ」

「じゃあ扶桑姉さま、えつと、私と同じ格好した髪の長い美人を見たことない!？」

「いえ、ご期待に添えず申し訳ありませんが……、あなた方のような海の上に立つ技術が開発されていたことすら、今初めて知ったもので」「そう……扶桑違いね」

「あ、あの！もしかして皆様は極秘任務中の方々だったのでしょうか!?! ああじゃなくて、ネウロイを誘導してきてしまいお怪我までさせてしまつて大変申し訳ありません！でも強力かつ正確な砲撃、被弾しても全く怯まない勇猛果敢さ、皆様は凄腕のウィッチであるとお見受けします!！」

「ウィッチ?！」

魔女という意味のウィッチだろうか、箒で空を飛んだりするやつ？

叢雲達を見ても首を傾げるだけだった。

「もし宜しければお名前を伺つてもよろしいでしょうか」

「すぐそこの鎮守府所属の航空戦艦、山城ですけど」

あつちの方、と私が指差すと、今度は服部静夏さん達が首を傾げた。

「あつち、というとりベリオンの方向ですが、すぐそこと言える距離では……、太平洋ならば第508統合戦闘航空団、マイティウィッチーズのように船舶での活動をさせているのでしょうか」

言葉は通じているのに何を言ってるのかがサツパリ分からない。知っている単語だけでも、

「太平洋は向こうでしょ?！」

「向こうは扶桑です。皆様は言葉も姿も扶桑人のようですが、あの、失礼ですけど迷ってます? 宜しければ陸までご案内しましょうか。改めて先ほどの戦闘のお礼もさせて下さい」

扶桑人。なんて素晴らしい響きだろう。分かってきた。私はその扶桑という場所に行かないといけない。姉さまも必ずそこで戦っている。必ず探し出して私も隣で戦つて、それからずっと一緒に――

「私は第508統合戦闘航空団所属、特別戦艦隊隊長の叢雲少佐だ」

私と服部静夏さんの間に叢雲が割つて入ってきた。何? 今の変

な名乗り。叢雲はいつから少佐になったの？

服部静夏さん他三人は途端に体を強張らせ、一人がバランスを崩して海に落ちてしまった。私達のように海面上に立てるわけではなく、ストライカーを外せだの紛失して帰ったら怒られるだの喚きながら、二人がようやく引つ張りあげた。両足に付けていたレシプロ機のようなものは海の底に捨ててしまったらしく素足だった。そんな騒ぎを気にも留めず服部静夏さんを睨む叢雲と、どっちに対応していいのか分からず結局叢雲に向かってさつきよりもキレのある敬礼をしてみせた服部静夏さん。

「服部候補生」とやけにドスをきかせた声で叢雲は呼んだ。

「は、はいっ！」と当然ビビる服部訓練生。

「貴様はさつきこう言ったか。極秘任務中の方々だったのかと。私の聞き間違いだったらしいのだが、なあ服部候補生。海軍には貴様のような学生が知る極秘情報など存在せず、また知る者も存在しない。情報の取り扱いについては勉強しなかったか？ 例えば不必要に漏れてしまった重要な情報はどうやって処理するか——いや、これはこちらの話だったか、気にするな。こちらとしても不幸中の幸いだ。何せここは陸から遠い海の上で、遭遇者は我々の装備で容易く撃墜できる士官候補生四人のみ」

学生達の顔が青ざめる。

「同じ海軍として将来有望な士官候補生を一度に四人も失うのは残念に思う。いつだって人手不足の時代に貴様、貴様、貴様、そして貴様のうち誰が——」

もったいぶって一人一人を指差していった叢雲。ウチの艦隊には暇人が多数いることを棚に上げている。

「将来戦争に貢献するかは分からん。だが貴様らヒョッコが育つのを敵は待つてはくれない。よって貴様達はここで先の異形と戦い、戦死したこととする」

一人が海に落ちた子の手を離して回れ右をしようとした瞬間、叢雲は副砲を一発ぶつ放した。私達にとってはメインとして使うには頼りない武器でも、小銃を抱えた程度の人間相手ならば威嚇だけで十分

すぎる効果があった。一人で逃げようとした子は落下し、さつき海に落ちた子も手を離されて再び落ちた。そして手を離れた子はわんわん泣き出してしまった。一人だけ冷静に——いや服部訓練生もいつの間にか大粒の涙をこぼしていた。すごい、ちゃんと気をつけの姿勢を崩さない。将来大物になるかもしれないけれど叢雲曰く彼女に明日は無いです。

「最後に何か言いたいことはあるか。貴様らが残したメモを拾った、という事にでもしておいてやろう」

「……は、発言、よ、よろしいでしょうか」

震えながらも服部訓練生は口を開いた。

「言ってみろ」

「大変、あつ、厚かましいお願いではありますが、どうか、自分達を見逃して頂けないでしょうか」

「見逃せだど？ 命乞いなどしてはどの道、軍人としての見込み無しだな」

「じ、自分には！ まだやるべきことが残っているであります！」

「はっ、未来でも見えるというのか」

「いえ、まだ自分には大きな魔法は使えませんが、それでも！ 扶桑皇国の英雄を助けたりしないといけない気がするんです！ この私にしかできないことがあるんです！ それが扶桑の——いえ世界の！ 人類を守ることに繋がるんです！」

「……クツ、クハハハハハッ！ なるほど人類を守るときたか。英雄を助けるとは夢の話か？」

「い、いえ、これは、なんといいいますか勘のようなもので……ですが、絶対です！ 絶対に私だけができることをやらなきゃならないんです！」

「英雄になる、ではなく英雄を救うことで人類を守る、か。なるほど運命的だ。それは私にはできないことだなあ。しかし英雄を守る者もまた英雄。世界のヒーローを秘密兵器が殺してしまったんじゃあ本末転倒か。——では服部訓練生。答え方を誤ってくれるなよ、貴様は今日、何を発見した？」

「えつと、い、一機の大形ネウロイであります」

「それをどうした」

「我々第三班が単独で撃墜しました」

「海上の一点に長時間留まった理由は」

「二名がネウロイの攻撃を受け墜落、ストライカーを紛失してしまい、人員の引き上げ作業に当たっていました」

「では次に急ぎ行すべきは何だ」

「単独演習終了！ 総員帰投！」

まだ空を飛べる二人が海に落ちた二人を拾い上げ、一目散に帰っていった。方向は太平洋だけけれど、帰る先は扶桑皇国という素晴らしい名前の国。四人の姿が見えなくなるまで見送った。また会えるだろうか。こうして海に出ていけば、いつかまた。

「じゃー私たちも帰りましょつか。今日はもう早く休みたい」

高圧的でもツンデレでもない、普段通りの優しい雰囲気に戻った叢雲は、帰る間ずっと引きつった顔をマッサージしながら、報告書どうしよう報告書どうしようと唸っていた。



「失礼します」

「山城；L v. 73 ↓ 74」

提督は電話中だった。そこに座れと提督が指差した秘書艦用の机には誰もいない。今日は秘書艦がないのだろうか。机に書類が散らばったままだ。提督の電話は長そうなので、座ったついでに目を通す。みんなの休暇・外出申請書と今週の第二、三、四部隊編隊・活動予定表、それと全員分の行動予定表だ。でも肝心のチェックリストがない。誰かがやりかけで逃げたんだ。……ここに来るのやめとけばよかった。これ絶対私がやらないといけないパターンだ。別にいいけど。

折角だし目ぼしい記録がないか漁ってみようとしたところで、丁度提督の電話が終わってしまった。

「予算を決めるだけが仕事の奴が羨ましい。配る金を減らした分だけ自分の評価は上がるんだからな。減らすのならば減らして出た実害の責任まで負ってほしいものだ。どうする山城、奴ら燃料の消費を抑えるために小さな島は徒歩で横断しろと言いだめたぞ」

「いや無理ですから。通過する島全部の山をならして舗装してタクシーでも置いてくれるなら考えますけど」

「地図は平面だからな。電話の向こうで陸の形と地名しか書かれていない地図を広げて得意げにしゃべる奴の顔が、いや不愉快だ想像したくない。——ところで丁度お前に話があつたんだが何か用か」

「聞きたいことがあつて来たんですけど、提督からどうぞ」

「三式弾を何発か私物化しているだろう、お前」

バレテラ。

「な、何のことやら」

「ネウロイがどうかという報告を聞いた日から数が合わない。叢雲の言うことだから信用はするがな、あの日お前が誤って対港湾棲姫用の装備のまま出撃して、ネウロイとやらのために四発使ったそうだな。それはいい。全部ペンギンに変えたとも思っておく。だがストックがあと二十発分も足りないんだぞ。二十発だ。いざという時のために取っておくべきそれを、よりにもよって航空戦すらない潜水艦狩りに持ち出す阿呆がいるのだ。この阿呆」

「阿呆って何よ！ 役に立つ時が実際にあつたわけだし、叢雲の報告を信じたんでしょ」

「返せ」

「いやです。扶桑姉さまに会えるまで返せません」

「意味が分からん。理由を説明しろ」

「ネウロイとかいうのと「扶桑」って名前が関係あるらしいんです。だからいつでも対空戦ができるように備えておかないと」

「あのなあ。扶桑の事は一ノ傘のところの電にまで搜索を頼んでいるんだぞ。あのブラック鎮守府の秘書艦様にこっそり頼み事だぞ。ツケがどれだけ溜まっているか考えたくもない。それこそ三式弾二十発どころの話ではないぞ」

「ならこの艦隊で本格的に扶桑姉さまを探しに出たほうがいいと思いますけど」

「海に出る安全を確保するために潜水艦を狩っているところだろうが。もういい、お前が保管しておけ。その代わり絶対に撃つなよ」

「ネウロイと交戦する時はどうしろっていうんですか」

「交戦するな。得体の知れない敵を増やすな」

ため息をついた提督は「今日は疲れる話ばかりだ」と酷いことを言った。

「それで、私に聞きたいことがあると言っていたな。武勇伝か」

「提督はこの艦隊に来る前は軍の学校に通ってたんですよ」

「ああ。弓道の腕前はそこそよかったぞ」

「今、海軍に所属してる学生に連絡ってつきますか？」

「……………姉の次は男か？」

「違いますから！ 女の子です。服部静夏っていう士官候補生で、年齢はたぶん叢雲と同じくらい」

叢雲の名前を出せば少しは食いついてくるかもと期待していたけれど、案の定、怪訝な顔をされてしまった。

「もし海軍が一つの会社だったら内線で話ができるんだろうが…………山城まさかお前、本当に頭の調子がよくないんじゃないか」

「ええ聞くだけならタダだと思ってた私が馬鹿でした。用事は以上ですこれで失礼します」

「まあ待て座れ。誰もやってみないとは言っていない。私がチャレンジしている間、その仕事でもやっていてくれ」

提督が指差したのは勿論、秘書艦机の上の紙。

「今日の秘書艦は？」

「白露だった」

「だった？」

「うやむやな感じで逃げられた」

「うやむやな感じって…………」

「書類だけを見てやるべきことが理解できる山城はすごいんだぞ」

「唐突におだてられても、馬鹿にされてる気分なんですけど」

「それと駆逐艦の使う砲身が寿命が近いものが多いらしい。今週中に全点検と、できるなら新品への交換までさせておきたい。その連絡書も作ってくれ」

「今週中？ 砲身の予備なんてあるんです？」

「ああ、足りない分の手配も頼む」

「……ちよつと白露探してきます」

「待て待て。奴にやらせても終わりが見えないから逃したのだ。机の一番下の引き出しに確か、誰かが菓子を入れていたぞ。それでも食いながら励んでくれ」

言われたとおり引き出しを開けると、金魚鉢が入っていた。

「……………」

閉じた。ちよつと目が疲れているかもしれない。

……もう一度開けてみたけど、やっぱりお菓子ではなく金魚鉢が入っていた。チャプンと水まで入っていて、中に白いものがある。金魚鉢を持ち上げた。

クラゲが入っていた。

ちよつと意味が分からない。しばし考える。……やっぱり意味が分からない。

「提督これ、お菓子じゃないと思うんですけど」

「ん？ ……んん!? まだあつたのかソレ！」

「知ってるんですか」

「夕立がどこかの海で捕ってきて持ち込んだものだ。捨ててこいと言ったのに——そうか昨日は村雨が秘書艦だったぞ。仕事はしないくせにこんなくだらない連携だけはして、白露型は時雨以外どうしてこうなんだ！」

それより秘書艦机の引き出しの中で飼おうとするほうが意味不明すぎる。なぜ自分達の部屋でなくここなのか。そんなに執務室でクラゲの飼育がやりたいのか。せめて水槽を用意して観賞用にするなら分かるけど、引き出しの中って。引き出しの中に金魚鉢って。どれだけ玄人好みなんだ。シユールレアリスムか。現代アートか。というか臭い。

「捨ててきてくれ。トイレには流すなよ、詰まるから」

「一応海に返してきますよ、まだ動いてますし……面倒だけど」

「すまん。売店にでも寄って何か買ってくるかい」

そう言っ提督は小銭をジャラジャラ何枚も出してきた。百円玉は二枚しかなくて、他は全部十円以下。クラゲほどじゃないけどドン引きした。千円札くらい出せる提督であって欲しい。

「ついでにコーヒー買ってきてくれ」

コーヒーを買うと、私の取り分も百円と少ししかない。押し付けられた仕事の対価が掌の上でジャラジャラと虚しく鳴る。今日も私はいつもと変わらず――

「不幸だわ……」

第07話 叢雲の薬指 6

ケツキョンキヤツキョキヤリしてください。を改めて

「ケツコンカツコカリしてください」

と電は言い直した。ライトノベルの主人公がだいたい共通して習得している当身技「ン？ イマナニカイツタカ」を封じるように聞き取り易く、視線でも私を縫いつけて離させようとはしなかった。情けない限りだが、私はこの駆逐艦の小娘から逃れるどころか羨望すら覚えてしまった。叢雲をも超える練度は伊達ではない。

我が艦隊の最初の一人だった頃の電は、今のように私を真っ直ぐ視ることすらできなかった。簡単な指示を出しても、実作業よりも慌てている時間のほうが長かつたくらいだ。私に意見をするなどあり得なかった。私も新米だった頃だ、二人目の球磨、三人目の叢雲の配属があと少しでも遅ければこの近海は今頃、深海棲艦の勢力下にあったことだろう。

そんな小娘が私にケツコンカツコカリをしてくれと頼んできた。

本当に強くなった、と心から思い、口に出しかける寸前、叢雲が電の顔を殴った。小柄な体はあっけなく弾き飛ばされて壁にぶつかった。いくら電が小柄だからといって叢雲との差はあまりない。叢雲は手加減をしていなかった。怒り狂った叢雲を私は初めて見た。

「あんだ電、こんな最悪なこと、どこで覚えた！」

詰め寄る叢雲の肩を押さえたが動かない。私がビビってどうする。

叢雲は倒れた電の胸倉をつかんで無理矢理起こした。

「こんなゲスな手段をどこで覚えたかって聞いてんのよ！ 答えろ！」

「ううっ……」

「いいわ、あんだの飼い主に直接聞いてやる。出ていけクスが、二度と来るな！」

そう言い放ち、電の胸倉をつかんだまま扉まで引きずって執務室の外へと放り出してしまった。言動がもはや私の知る叢雲ではない。恐ろしい。夢なら醒めて欲しい。こういった場面での提督としての

振る舞い方を考えるも見えるのは走馬灯のような光景だけ。軍は艦娘がキレた時のマニュアルを作成すべきだ。叢雲から「あんたもよ、出ていきなさい」と言われたのは皮肉な幸運だった。

正座をしていて足が痺れてみつともなく呻いていた島風と天津風も追い出されて、執務室の扉は鍵をかけられた。それはいい、今は叢雲よりも倒れたままの電だ。意識はあるが眼の焦点が合っていないように見える。鼻血が出ていて右頬が内出血している。あの勢いで殴られたのだから骨が折れている可能性もあった。慌てて周囲を見回す。廊下の見える範囲に私達四人しかいないのは幸いだった。電に上着をかけて顔を見られないようにした。とにかく医務室へ行かなければ。

「島風、天津風、手伝え」

「はい」

「いいか、さつき見たことは忘れる。誰にも言うなよ」

「なにも見てません。なにも聞いてません」

二人にはメンタルケアが必要かもしれない。



艦娘でなければ病院送りだ手術必須レベルだ障害が残る可能性もあった提督アンタはこの鎮守府で何をやってんだ金剛比叡球磨アンタの次は他所の秘書艦か監督する立場にある人間としての自覚がない、と医者に散々罵倒されながら、電が処置を受けているのを見守っていた。処置を終えた頃には電の意識ははつきりとしたものになっていた（罵られる私を庇おうとはしてくれたが、電も動くな喋るなど怒られるだけだった）。とりあえずベッドに横になってもらった。ひとまず安堵はしたが勿論、電の晴れやかな表情を拝めるはずはなかった。理由はともかくとして古い付き合いの叢雲に殴られ罵倒され、その心中を察することなどできない。

一段落がつき、いや問題は何一つ解決していないのだが落ち着いたところで、今後の事を考えなければならぬ。順を追って考えるとし

よう。

一つ、電がケツコンカツコカリを、一ノ傘ではなく他の艦隊の提督である私に申し込んだこと。前例を聞いたことはないが、軍隊的にかなりマズいことではないか？

二つ、他艦隊の秘書艦様を叢雲が殴り怪我をさせてしまったこと。アウトだ。霧島が金剛と比叡を殴った事とは話が別だ。我々、艦娘を戦力とする艦隊には普通の軍隊と違い、精々どこぞの学校の校則に毛が生えた程度の縛りしかない。その方が艦娘の個々の戦力を最大限生かすことができる、という研究結果があるからだ。だからといって、例えば他校の生徒を殴れば停学・退学になる、といったような単純な話ではない。艦娘に期待される戦力、それも艦隊の第二の頭脳である秘書艦を作業不能にさせてしまったのだ。一ノ傘の艦隊への影響は計り知れない。

三つ、電が私にケツコンカツコカリを迫り、その回答——よし決まった。全て隠匿するでしょう。

今日、執務室にやってきた電はウツカリ酸素魚雷を自分に向けて発射してしまった。以上。いやあ、もし爆発していたと思うと、叢雲があれほど怒るのも無理はない。めでたしめでたし。

「電いる!？」

ドアを破りかねない勢いで叢雲が入ってきた。

「なんて姿に、私のせいで。ごめんなさい。全部私の勘違いだったの……!」



今日ほど叢雲が表情豊かな日はかつてなかった。できれば喜怒哀楽の不景気な二種類はやめてほしいと注文を付けたい。

「……ごめんなさい。待たせたわね」

私が一人で執務室に戻って一時間ほど過ぎたところで、まぶたを泣き腫らした叢雲は帰ってきた。

「それと……何度も言うけれどごめんなさい。私の勘違いのせいであ

ん……提督にすごく迷惑がかかるかもしれない」

「今までどおり「あんた」と呼べばいい」

頭を振る叢雲。

「一ノ傘提督にね、変な誤解をしてて、電話して、全部喋っちゃって、でも一ノ傘提督は何も知らなかった——つまり電はあの子自身の思いで提督にケツコンカツコカリをお願いしたの」

「待って待って待って。それはそうだろう。そうに決まっているだろう。勘違いの余地など微塵もないだろう」

「いや、その……ほら、一ノ傘提督のところの艦隊って、えっと、とても仕事熱心じゃない。だから資材を調達するためにあん……提督を……ね？ 電を使って、懐柔とかしようとしたんじゃないかって、思ってる」

ハニートラップ。

くだらない作戦だと考えられがちだが、ハニートラップという言葉を目にする時があるとすれば、その時既に作戦はほとんど成功していると云っても過言ではない。眉唾ではあるがヲ級に懐柔されてしまった提督がいて鎮守府を丸ごと深海棲艦に乗っ取られた、という話すら聞いたことがある（不自然な情報操作の痕跡が見つかっているが関連は不明）。それほどに恐ろしいものはある。

だがしかし。

だがしかし。

「この私がハニートラップに引っかかるとでも？」

「引っかかるでしょ」

即答だった。

「戦争が長引いても、電だけはまっすぐな子でいて欲しいと思ってるの。昔からの付き合いだし。それだけは確かめられて良かった」

「手が出るのが早かったぞ。叢雲、私はお前にも真っ直ぐであって欲しいのだが」

「だって……あんたに本気でケツコンカツコカリをお願いするなんて思えなかったし」

「泣くぞ。今のはさすがの私も傷ついた」

「それより」と話を流されてしまった。本当に泣きたい。

「一ノ傘提督にはもう話したけど、電に怪我させてしまったこと……私はどうやって責任を取れば……」

「責任を取るのは提督である私だ」

「そう、なるのよね。……ねえ、もしもの話よ？ あんたが提督を解任されたら、どうなるの？」

「変わりの人事異動があるだけだ」

居場所のない私は元の文民のような生活へ……そこで閃いた。少々不謹慎だが、これは叢雲と結婚するチャンスではないのか？ いやチャンスという言い方も良くない——そう、私には叢雲を守る義務がある。衝動的に電を殴ってしまった負い目がありながら、また他の者への示しを付ける必要もあり、艦隊での肩身が狭い中での仕事は困難を極めることだろう。ならばいつそ叢雲を解体処分という形にして、同時に私も引退する。完璧な作戦、もとい事後処理ではないか。

我が艦隊員は全員、一ノ傘のところに転属させてしまおう。電に怪我をさせてしまった詫びだ。奴の艦隊は火力に特化している分、鈍足で燃費も悪い。さらに安定して戦える空母が蒼龍と飛龍しかいないのは馬鹿だ馬鹿だと馬鹿にし続けていたが、この機会に強化するとい。支援などと言わず艦隊を丸ごとくれてやるのだ。奴も納得するに決まっている。

善は急げと受話器を取った。

「どこにかけるの？」

「勿論、一ノ傘にだが」

「ねえ、あんたはさ……この艦隊のこと、好き？」

「嫌いではない」

「そう……」

叢雲はそれ以上何も言わず俯いてしまった。なんとなく気不味い雰囲気になってしまい呼び出し音をずっと聞いていた。

二十回ほど呼び出し音を聞いたくらいか、やっと繋がった。

《今は忙しい。すまないが急ぎでないなら後にしてくれ》

「竹櫛だが、忙しい原因はこちらにあるか？」

《竹櫛提督か？ その通りだとも。おかげ様で今、鎮守府総出で提督探した。ああ私は長門だが――》

「長門；L.V. 109」

《どんな魔法を使ったんだ？ この私が海に出ず座って留守番など考えた事もなかったぞ。雷が詳しく話さず他の全員を捜索に当たらせせてはいるが、なあ、何かあったのか？ そちらには電がいるんだろう》

「詳しい事は話せん。放送で呼び出せないのか」

《もう試した。電話越しでもいいから電の声で放送させてくれ。それなら鎮守府内にいる限り必ず出てくるはずだ》

「電の声で？ それこそ魔法だな」

《魔法ではない、愛の力だ》

「アイ？ なんだそれ」

《愛は愛だ。愛情の愛。溺愛の愛。英語でラブ。愛する電の声を聞けば提督も戻って来るだろう。もしかしたら電に会いにそちらに向かっているのかもしれないな。そんなことあるわけないとは思うが、もしこちらの提督を見》

長門には悪いが受話器を置いた。まだ正午にもなっていないのに、問題の嵐が頭の中で暴れまわっている。一難去らずにまた一難。

「一ノ傘提督はいなかったの？ 電話の相手は」

「長門だった。一ノ傘は行方不明で、現在鎮守府内を捜索中らしい。だが奴は恐らくこちらに向かっている。そんなことより叢雲」

「そんなことで済ませちゃダメでしょ」

「一ノ傘にはさっきの事をどこまで話した？ どんな話をした？」

「……問い詰めるつもりで電話しちゃったから、あんたにケツコンカッコカカリを迫ったことを言っつて、一ノ傘提督はそんな卑怯な真似するはずがないって。じゃあどうして電がケツコンカッコカカリを迫ったんだって私が言うのと一ノ傘提督はそんなはずはないって否定して、その流れを何度か繰り返し返したわ。で、私が誤解に気付いて謝っても一ノ傘提督は納得しなくて、電を出せって言われて」

「怪我をさせてしまったから出せない」と

第08話 叢雲の薬指 7

ここから電車とバスで三時間もあれば、一ノ傘のいる鎮守府まで行くことができる。私と奴の鎮守府はとにかく近い。海路ならば当然さらに近く、だったら艦隊を統合してしまえという意見もあるものの、敵は海のゲリラのようなものである。こちらの戦力も分散せざるを得ない。

戦術上の立地の話はともかく、一ノ傘は距離の近い鎮守府間を電車とバスより早く移動できる。奴はマイカー保持者なのだ。目覚ましい戦果を上げるブラック鎮守府の提督様であればローンを組めるのだ。決して羨ましくはない。私には変速ギア付きの自転車（パンク中）がある。

奴が失踪したと聞いてから予想通りの早さで、不審車両が警備員を無視して門を突破してきた。

「無理をして出てくる必要はないぞ叢雲。一ノ傘の相手など私一人で十分だ」

「悪いのは私よ、全部……。謝罪で済む問題じゃないけど」

そうは言うが、一ノ傘の車を見て縮み上がってしまったている。怯える叢雲を見るなどいつ以来か。

叢雲を怯えさせる悪魔は車を道のド真ん中に停車させ、後ろから走ってくる警備員など気にも留めず降り立った。あの男勝りな姿に惚れてしまった連中は多かったが、警備員において男女差別など皆無である。対一ノ傘用のバリケードでも用意しておくべきだった。

「電はどこおるん」と一ノ傘は言った。

「久闊を叙する、という言葉を知らんのか貴様」

「あつれえ、叢雲がおるやん。へー、ワタシのこと待ってとってくれたん？」

「は、はい。あの――」

「じゃあ早速やけど電んどこまで案内してくれん。一言も喋らんで、黙ってワタシを連れてって」

「私の叢雲に勝手に命令をするな」

言ってしまった。「私の叢雲」と言ってしまった。当然の表現ではあるが私の男らしさが溢れんばかりである。さらに叢雲を背に隠すように前が出る。

「お前が敷地に入る許可は出していない。電に会いたければ私の屍を超えてみせろ」

躊躇なく腰のホルスターから拳銃を抜く一ノ傘。ウチの大井並に頭がおかしい。

「おい馬鹿やめろ危ないだろうが貴様！」

「エアガンに決まつとるやん。銃持ち出したら捕まるし」

「エアガンでも捕まるぞ馬鹿者。こつちを向けるな」

「自分で倒せて言つたくせに」

バン。

「痛っ!？」

バンバン。

「お、お前もう許さん！ 電と同じ医務室送りにしちゃらあ！」

「竹櫛が悪いんやろーがボケ！ 死ね！」



結果的にはあるが一ノ傘は電に会うことに成功した。私共々、医者に怒られた後に。頬に大きなガーゼを貼られた電は一ノ傘にとつては衝撃的だろう。

「大丈夫、電？ 痛くない？」

「……………」

一ノ傘がこの鎮守府に来ることを知らなかった電は、医務室に入った最初こそ驚いて（恐らく来訪したことと怪我をしていることに）一ノ傘を凝視していたが、その後は俯いたまま目を合わせようとしなかった。他艦隊の提督にケツコンカッコカリを申し込んだのだから当然といえば当然である。

しかし一ノ傘に黙っていられる話でもなく、では電は落とし所をどう考えていたのだろうか。考えなしに発言するほど脳天気ではない。

「大した怪我じゃなくてよかった……うん」

一ノ傘が電に対して強く出られないのも計算の内なのだろうか。私が左足首を、一ノ傘が右手首を捻挫したのも計算の内、と言われたら今なら信じてしまいそうだ。

医務室で一人電に話しかける一ノ傘の声が虚しかった。艦隊の指揮を執る人間の情けない姿は、同じ提督として見ているのが辛い。

「一ノ傘。話がある。執務室まで来い」

「え？……あ、うん……」

先ほど私にエアガンを連射して、弾を撃ち尽くした後はエアガンを鈍器代わりにして殴りかかってきた奴とは思えないほど、弱々しい返事だった。

電の考えは分からないが、こちらにはこちらの都合がある。一ノ傘の気が滅入っていることは、悪いがこちらとしては好都合だ。



「Para—Ordnance」と、一ノ傘が携帯していたエアガンに刻印されている。全体は黒く、グリップ周辺のシルエツトだけならありふれたデザインだが、銃身や銃口まわりに攻撃的な溝が掘ってある。反動を抑えるためだとかそういう目的で穴を開けると聞いたことがある。しかしエアガンに意味があるとは思えない。銃身の下にも何故か凸凹がある。

手に持った感覚としては、まず重い。1kg程ある。次に太い。持ちづらい。エアガンを無意味に持ち歩く時点で頭がおかしいが、仮にも女性でありながらこの銃の選択はあり得ない。普通エアガンといえば一発撃つ度にコッキングする安いやつを持ち歩くべきではないか。値段的にも、一ノ傘のこれは絶対に私が考えるエアガンより一桁は高いものだ。安物のエアガン同様コッキングしてみると——驚くほど気持ち良い。銃の中で金属がカチャリと動く音と感触がすごく楽しい。しかし安物と違って引つ張ったら引つ張ったまま、戻らなくなってしまうた。

「やから叢雲ちゃん、ワタシに電話したんやもんねー。そっかー、電はガチかー。ガちなやつかー」

自分自身もガちなことを棚に上げたような言い方だ。

「んで竹櫛、話ってなん？ 仕事の事やったら、ワタシもう提督やめたいんやけど」

棚に上げるどころか棚ごと全部捨てるようなことを言い出した。

「そう簡単にやめられるものじゃあないぞ。話は私の艦隊についてだが——」

「もうやだやめる。やめてワタシも艦娘になる。そんで轟沈して海の底で物言わぬ貝になりたい」

懐かしい歌を。と、電話が鳴った。誰だこんな時にと言いたくなつたが相手は一ノ傘の艦隊の誰かに決まっていた。今は一ノ傘の相手をしているので叢雲に出てもらう。

「誰だ」

「雷よ。一ノ傘提督の艦隊の」

「聞いたか一ノ傘。お前が失踪してからあつちの鎮守府では終わりのないかくれんぼ状態だ。やる気を出せ。電のことは諦めろ」

「うっさいバカ！ アンタは電から好かれとるから余裕があるんやろうけどね、ワタシはどないせつちゅー話よ！ 昔アンタんところから電借りてそのまんまにしとつたワタシが悪いん!? 悪いんやろ!? 今更んなって元カレが忘れられんとか言われたら死ぬしかないやん！ 電みたいな良い子に言われたら死ぬしかないやん！ ……はあ。」

物言わぬ貝と深海棲艦つてどっちがマシやろ」

起き上がって騒いだかと思えば再び机に突っ伏してしまった。忙しい奴だ。

「雷が一ノ傘提督に代わって欲しいって言っているけど……」

「一ノ傘、電話だ。雷から」

「死んだって伝えといて」

「早く来い」

のそのそと動いて叢雲から受話器を受け取った一ノ傘が「……もしもし」と言うと、私にも聞こえるくらいの音量で「心配したんだから

！』という声が聞こえた。反射的に仰け反る一ノ傘。雷は一方的に喋り始めた。邪魔をしては悪いので（うるさいので）一ノ傘の側から叢雲と離れた。

「これからどうなるの？」

不安を隠さず叢雲が聞いてきた。私が聞きたいことではあるが、叢雲の前で情けない姿を見せるわけにはいかない。

「まずは一ノ傘が落ち着いてからだな。アレと電がどう折り合いをつけるかで対応も代わってくる」

「私はどうなってもいいけど、この艦隊は大丈夫よね」

「叢雲含め問題無い。事と次第によっては一ノ傘に指揮を任せればいい」

「……何よそれ。じゃああなたはどうするつてのよ」

「どうしたものか。職でも探すか」

「バカ言わないで。真面目に考えて」

「ならば叢雲。もし私が提督を辞めたら——」

一ノ傘が受話器を置いた。電話が短すぎる。タイミングが悪すぎる。

「電んところに戻るよ、二人とも」

何か決意したような表情の一ノ傘に促され、私と叢雲は顔を見合わせた。



「電、ワタシじゃダメなん？ 竹櫛のほうがいいん？」

雷は何を言って焚き付けたのだろう、一ノ傘は直球勝負に出た。

この場面に私と叢雲は立ち会う必要があるのだろうか。そもそも全ての発端は電の軽率な発言である。叢雲が負い目を感じる必要はない。色恋沙汰は自分達の鎮守府でやって欲しい。

「……………夜」

一ノ傘の挑むような目に応えるためか、考えがあつてのことか、長く沈黙を続けていた電がようやく口を開いた。

「今夜、飲みながら話すのです」



「だいたい一番最初に仲間になった艦娘を他所の司令官に預けるとか意味分からののです。」

同期のよしみで戦力をレンタルするとか、じゃあポケモンマスターになるためにライバルからポケモン借りるかって話なのですよ。

他力本願で殿堂入り目指して何が楽しいのかってことですよ。

あり得ます？

そりゃあの時、一ノ傘司令官の管轄海域はヤバかったですよ？

わたしがいなかったら壊滅待ったなし状態でしたし。

でもそれ完つ全に一ノ傘司令官のせいですよね？

資材全部溶かして上からもすごい怒られましたよね？

戦争じゃなきや自業自得で見捨てられましたよね？

その尻拭いをどうして竹櫛司令官の秘書艦がやらなきやいけなかったのか、当時の二人に聞いてみたいですよ。

わたしは普通に秘書艦しかかったのに、球磨さん叢雲さんが仲間になって艦隊が形になりつつあるなーってワクワク思ってた直後にコレですもん。

マサラタウンにさよならバイバイですもん。

いいんですよ？

人助けは別にいいんですよ？

わたしだって最初は出来るなら敵も助けたかった博愛主義者でしたよ。

ええそうでしたよ、わたしも未熟でしたよ。

でも敵どころか味方すら助けるのが難しい状況ってどうですか。

味方艦娘は吹雪一人で、一ノ傘司令官はまさかの役割論者ときましましたよ。

主砲ガン積みwww魚雷無しwwwとか、駆逐艦の存在意義を入渠中に吹雪と二人で考えてましたもん。

蒼龍が味方になってくれてからも深海棲艦より資材不足と論者積み装備のほうに深刻でしたよね。

いい思い出ですよね本当にまったく。

なんとか山を乗り越えて、やっと竹櫛司令官のところに帰れるって思ってた話をうやむやにされたんですよ、信じられます？

あなた方のこと言ってんですよ、聞いてます？

打ち合わせで時間作ってこっちの鎮守府に戻ったら竹櫛司令官は叢雲さんとイチャついてますし、戻ったら戻ったで一ノ傘司令官のセクハラが待ってますし、最悪最低ですよこの環境。もう限界です。

電の堪忍袋の緒は切れました。

今から好きにやらせてもらいます。

こんな指輪なんてポイです。

ポイっ。

わたしは竹櫛司令官の元に帰ります。

今からのわたしの居場所はここです。

一ノ傘司令官は一人で帰ってください。

今日サボった分だけ明日はキツチリ働いてください」



「妖精の場所の確保も目処がつかしました。あっちの鎮守府に新しく着任する提督さんも明日から正式に活動を始めるそうです。これですと一段落ですね、司令官」

「電：Lv. 136 ↓ 99 ↓ 100」

太陽のような笑顔が眩しい。目を背けたくなるのはしかし、単純に眩しいからではない。この部屋——執務室改め第一執務室——に当然のように座っている電がどうして笑顔でいられるのかまるで分からないからである。今はなきブラック鎮守府の秘書艦は心を鋼鉄製にする必要でもあったのか。だとすれば一ノ傘はどこまでも自業自得だ。私も一翼を担ってしまっている以上、人のことを言えたもので

はないが。

「そろそろわたしたちも新体勢で動いてみませんか。交流会でも雰囲気良さそうでしたし」

「あれでか？」

「良さそうでしたよね」

「……ああ、そうだったかもしれない。ところで電」

「なんでしよう」

「今日の秘書艦は叢雲のはずなのだが」

「代わってもらいました。叢雲さんは第二執務室です」

叢雲を遠ざけられる私。

電にそっちのけにされる一ノ傘。

その一ノ傘の相手をさせられる叢雲。

誰が一番可哀想だろうか。

「お邪魔しまクマー」

「球磨；Lv. 59 ↓ 63」

「球磨さん！ お久しぶりなのです！」

「おひさクマー！ 電が忙しそうだったから球磨から会いに来たクマ。

今晚のお誘いに来たクマ。最初期メンバー四人で飲み会やらんクマ

？ 叢雲と吹雪はさつき誘ってきたクマ」

「うわあ、いいですね、是非お願いします！」

「じゃあ今晚、外に出かけるクマ。人が二倍に増えてから居酒屋鳳翔

が三倍はうるさくなったクマ」

「球磨、第二執務室の様子はどうだった」

「くまあー……入っただけで胃が痛くなってくるような雰囲気だった

クマ。副提督も叢雲も黙々と仕事してたクマ。ブラック鎮守府の執

務室ってどこもあんな感じクマ？ クマは絶対、一ノ傘副提督の秘書

艦はやりたくないクマ」

「雷が慰めてそのうち元気になりますよ。そうだ、今から雷に叢雲さ

んと交代させましょう。副司令官が落ち込んでる今こそチャンスで

すし」

「チャンスとは何だ？」

「雷が一ノ傘副司令官を口説き落とすチャンスです」

「それはアレか、ガチなやつか」

「ガチなやつです」

またガチか。二つの艦隊を統合させてしまうほど甚だ酷い風紀の乱れにはまだ奥があるらしい。今ままでさえ問題だらけだったのだ。艦娘がおよそ倍に増えて、今後平穏でいられるはずがない。せめて寮の拡張工事が終わるまでは私と叢雲の気苦労を増やさないでほしいと願うばかりである。営倉まで拡張したくはない。

「では少し席を空けます。雷が代わりますから叢雲さんは今日はお休みで問題ないですよね」

「いや叢雲はここに呼——」

「竹櫛司令官。わたしは竹櫛司令官のことが好きです。ガチなやつです。敬愛よりも熱い気持ちです」

「……………」

「ではすぐに戻りますね」

言い逃げるように執務室を出ていってしまった。私はこれから電にどう接していけばよいというのか。電がこの艦隊に戻ると言っていて、その流れで一ノ傘の艦隊が丸ごと転がり込んでくる間はできるだけ考えないようにしていた。今後も考えたくない。叢雲のことだけを考えていたのに、まさか最古参の電が立ちはだかるとは。マサラタウンで別れたライバルが最後のボスとして襲ってくるような気分だ。

「提督も隅に置けないクマ」

「五月蠅い。ああそうだ丁度いい、これを一ノ傘に——」

「うおおおお銃向んじゃねークマ！ 危ね……なんだエアガンだクマ。でも腐っても軍関係者が銃を人様に向けてんじゃあないクマ！ 銃口管理ができんヤツが銃の形したもん持ってんじゃあないクマ！」

「ああすまん。これは一ノ傘の物なのだが、よく一目でエアガンと分かるな」

「先に言っとくクマ、絶対に銃口を覗いちやダメクマよ。銃口からアルミの細かいインナーバレルが見えるクマ」

なるほど銃口かとうつかり見ようとしてしまう前に、球磨にエアガンを取り上げられてしまった。初めて球磨に感心してしまった。艦娘は拳銃であっても扱いに慣れているものなのだろうか。艦装を装着したままうろうろしている連中だらけで考えた事もなかったが。

「この安っぽい感触、あーやっぱりウエスタンアームズのガスブロだクマ。パラ・オーデイナンスとは変わったチョイスだクマ。でも変な形してるクマ。オリジナルにしても目指した方向がさっぱり分からんクマ」

球磨は妙に手慣れた手つきで弾倉を抜いたりあちこちを弄ったり眺めたりしている。

「一ノ傘は犬みたいな名前を言っていたぞ。ダックスフンドだとか、いや違ったか？」

「ふーん。この妙ちくりんなデザインは間違いなく古き良き時代の産物クマ。いーなー一ノ傘副提督はお金持ちクマ。クマはマルイのガスブロも買えんクマ」

「その銃、お前の物にしてもいいぞ」

「マジクマ!? これ副提督の物じゃないクマ!?」

「奴が忘れていったんだ。失くしたことにしておけばいい」

「キヤッホウ！ レアモノ、ゲットだクマ！」

「その代わり、今晚、電達と飲むのだろう。そこで電に私のことを諦めるよう誘導しろ」

「……返してくるクマ」

第09話 改二とたこ焼き器とメガネ

開発部からの連絡は非情なものだった。

重巡洋艦・羽黒は予め噂されていたからまだいい。確か一ノ傘（正確には電）が連れてきた艦隊の中にいたから改造するなり何なり好きにするといい。しかし噂のもう一人、我が艦隊では頼れる重巡として古鷹ちゃんと並ぶ鳥海の名が挙げられず、ひたすら遠征任務ばかりを任せていた龍驤に白羽の矢が立つのは許せない。

受話器を叩きつけて開発部員の鼓膜に我が怒りの音波をぶつけてやろうとしたが、電話機が壊れては困るので受話器をそっと置いた。「どうだった」と叢雲がまるで期待していなさそうな顔で聞いてくる。「いや実際、何に期待したらいいのか分からないんだけど」

「鳥海を改二にしたいとは思わないか」

「できたらいい、とは思うけど」

「鳥海はメガネなんだぞ」

「? ……………ああ、霧島繋がりね」

綿菓子のような軽いため息をついた叢雲は目を書類に戻してしまった。カリカリとボールペンを走らせては紙をめくってゆく。白露あたりに任せたら丸一日かかっても読み通せないかもしれない書類が、鉄板の上のたこ焼きのように次々とめくり返されてゆく。

そう、たこ焼きである。

「たこ焼きが食べたい」

「何?」

「たこ焼きだ。龍驤ならたこ焼き器を持っているだろう」

「知らない。というか、さっきタンカー護衛に出たばかりじゃない、龍驤の部隊。遊びたいなら一ノ傘副司令のところにも行けば? あの人もたこ焼き作れそうじゃない」

「訛りで誤解されやすいが奴は北九州人だぞ。奴は自分の訛りを博多弁と北九州弁の組み合わせ方言だと思っている。だがそうだな、奴ならたこ焼き器くらい持つていそうだ」

「博多弁と北九州弁? あんなのだったかしら」

一度食べたくなると、食べるまで気が収まらないのが粉物の恐ろしいところである。



「オウ、なんか用事ねテートク」

「金剛；L v. 85 ↓ 89」

第二執務室はダンボールのジャングル地帯と化していた。この鎮守府に引越してきて何一つ整理してないどころか、運んだダンボールをそのまま乱立させるとは恐れ入った。ダンボール摩天楼は文字通り部屋を埋め尽くし、奥にいる金剛がいったいどうやってあそこまで入っていったのか分からないの隙間しかない。震度3〜4くらいの地震で一ノ傘はダンボールに押しつぶされて死んでしまっただろう。

そんな中で一人黙々と仕事をしている金剛というのもよく分からない。

「一ノ傘はどうした」

「さあ、どこかに行ってしまったネー。雷が探しに行つて、その間の仕事を頼まれてシマツタヨ。運が悪かったデース」

「よく引き受ける気になつたな」

「恩は早い段階で売っておきたいカラネ」とにやりと笑う金剛。「というわけで今はワタシがこの部屋のマスターデース。提督、ご用事は何デスカ？」

「たこ焼きが食べたくなつてな。一ノ傘ならたこ焼き器を持っているかと思つたんだが——」

天（井）にも届きそうなダンボール摩天楼を見上げる。引越業者はよくここまで積んだものだ。中国ですらもつとマシな建築計画を立てるだろうに。この中から存在するかどうかも分からないたこ焼き器を探すくらいなら龍驤の住む部屋に忍び込んだほうがマシである。

「諦めた。誰か外に出る者に買ってきてもらうことにする」

「ちよつと待ツタ！ それなら任せてクダサイ。確か居酒屋鳳翔でそ

れらしき物体を見た気がシマース」

「鳳翔か。だが鳳翔も遠征に出てしまったぞ」

今度から龍驤と鳳翔はどちらか残そう。緊急時のたこ焼きのために。

「ちよつと道具を借りるだけデス、夜までに洗って返せば問題ナツシングネー」

「それもそうか。材料も揃っていいそうだしな」

「じゃあ提督は行ってクダサイ。ワタシはコツチからじゃないと出られないノデ」

そう言う和金剛は錨（イカリ。猫じゃない）を手に持って、秘書艦機の背後の窓を開いた。錨に繋がったロープを外に落として、錨を窓の縁に引つ掛けた。あの錨は雷が持っているものか。なるほど、あれがこの部屋の鍵代わりになっているのか。自分の装備品を鍵にしようとは、さすがは本艦隊の現状最高練度を誇る艦娘のセキユリテイだ。私ではあの鍵を渡されてもまず入ることすらできそうにない。

金剛は忍者のように窓の外から出ていってしまった。仕事はいいのだろうか。



「見つからないネー。そういえば提督」

「なんだ」適当に戸を開いてみるが皿や仕込み済みの具材、調味料ばかりでたこ焼き器の姿は見当たらない。蛸だけは冷凍庫で見つけた。

「たこ焼き器」って日本語おかしくないデスカ？」

名付け親が誰かは知らないが、お前にだけは言われたくないことは想像に難くない。

「たこ焼きを作る機器なら「たこ焼き製造機」じゃないとおかしいと思いきりマース。それか、たこ焼きを焼くんだから「たこ焼き焼き器」にするべきデス。「たこ焼き器」だと普通にたこ焼くだけの機器になっちゃいマセンカ？」

「ただ蛸を焼くためだけの機器が存在し得ないから「たこ焼き器」で通じるのだろうか。お前こそ、英国帰国子女が蛸をどうこう言うのはどうなのだ。デビルフィッシュとは言わないのか」

「あー忘れ……美味しければなんでもいいネー。そんなことより見つからんネーたこ焼き器。これくらいしかなかったヨ」

金剛は小麦粉とお好み焼きソースを持っている。なるほど、惜しい。いやもう私もそれでいいような気がしてきたところだった。よく考えてみると、わざわざ丸い物体を作るのは例えそれ専用のたこ焼き器があつたとしても面倒臭い。作つたことが一度だけあつたが、あれは大量生産して売り捌いて儲けを出してようやく楽しめるものだった。

たこ焼き器を探している間に様々な食材を見せつけられたせいでますます腹がへってきた。もうたこ焼きのような味であればなんでもいい。

「よし、お好み焼きを作ろう」



「タコは？」と叢雲に至極当然の質問をされた。冷凍庫で見つけたのであればせめて使えという話だ。しかし蛸は私の記憶が正しければ一度茹でる必要がある。それに八本の足はともかく頭の部分をどう使用したらよいか分からない。

「手間を加えるより肉を加えよと金剛が言ったのだ」

「デース」

「まあ、下手なもの食べさせられるよりいいけど」

執務室で出来たてのお好み焼きを三人で頬張る。キャベツと肉だけでなく私の舌はどうやら満足したらしい。ソースとマヨネーズ、かつお節、青のりさえあれば何でもよかったような気がする。叢雲も箸を止めないよう何よりだ。

「ところで提督はどうしてたこ焼きのためにあそこまでバーニングしてたネー」

「はて。忘れた」

「龍驤の名前が出たからでしょ。改二のこと」

「そうだった。なあ金剛、鳥海を改二にしたいのだが、霧島のメガネ――」

ガチャン、と金剛は皿と箸を落としてしまった。顔から汗が吹き出て固まっている。「おいどうした」と声をかけても反応しない。どんな顔が青ざめていく。

「メ、メメ、が、めガ、……めがね。メガネ、メ、メガネパンチ」

「だ、大丈夫？」と叢雲に肩を叩かれると、

「Noooooooooooooooooooooooo!!!!」

雄叫びを上げながら執務室から飛び出していつてしまった。残された我々二人は暫くぽかんとするしかなかった。

とりあえず片付けを叢雲に手伝ってもらい、遠征から帰った鳳翔に事情を説明して使った材料分の料金を支払った。

翌日の早朝、金剛は第二執務室で発見された。私が気付かなかったことから深夜に入ったものと思われる。第一発見者の雷が部屋に入るとダンボール摩天楼は全て倒壊しており、微かに動いていた山の下から埋もれていた金剛は無事救助された。憔悴し怪我もしていたので医務室に連れて行くこうとすると、いやだ外にはメガネがいると怯えて動こうとしなかったため、数人がかりで無理矢理連行したらしい。

第10話 叢雲の薬指 8

「竹櫛司令官と一ノ傘副司令官の艦隊が統合したんですから、艦隊の名前も新しくするべきだと思っんです」

叢雲と一ノ傘を執務室にわざわざ呼びつけた電は得意顔で人差し指を立てた。この艦隊に加わってからのというもの、実にイキイキとしている。提督と副提督、それに人員が倍増して心労も倍増した叢雲の業務を中断させる程だ。楽しそうでなによりであると、呆れを通り越して共に喜びたい。

しかし当艦隊は私のものである。

「私が熟考に熟考を重ね名づけた艦隊名を変えろと？」

【叢雲艦隊】が熟考された結果だとは思えませんが」

「そうよ変えましょう。私が今までどれだけ恥ずかしい思いをしてきたか」

「大規模演習の時の旗艦が叢雲だったのだから妥当だろう。それに今までずっと【叢雲艦隊】で通してきたではないか。今更だ」

「変更手続きが面倒臭過ぎるからよ。電がやってくれるのなら是非お願いしたいわ」

「はい、お任せくださいー！」

どんと胸を張る電。そこに割り込むように一ノ傘が、かつてブラツク鎮守府を束ねていたとは思えない弱々しい挙手をした。

「じゃ、じゃあ電、前にワタシんとこで使った艦隊名とか——」

「却下です」

この場に存在を許しているだけでも有り難く思え、と言わんばかりの切り捨て方である。

「実はもう新しい名前を考えてありまして、響に掛け軸を作ってもらいました。では発表します……、ジャン！ これなのです！」

【隊 艦 櫛 竹】

竹櫛艦隊。電が誇らしげに掲げた掛け軸には、へったくそな字でそう書かれている。「櫛」は書き慣れない字だからか他の文字より一回り大きい。字の上にはやはり「すぱしーば」と小さくある。ふりがな

だろうか。それとも響的には「第六駆逐隊」も「竹櫛艦隊」も「すばしーば」と読めるのだろうか。流行りのキラキラネームというやつだろうか。

待てよ、これはもしかすると電のボケではないか？ 先に【叢雲艦隊】のネーミングを安直だとディスっておいて、それからの【竹櫛艦隊】という安直極まるネーミング。この後「アンタも名前そのまんま持ってきてるやん！」という一ノ傘のツツコミが入ることで一連のネタが完成するのではないか。ダチヨウとおでんのような黄金比を形成するのではないか。一ノ傘と電は腐っても元・提督とその右腕だった。私と叢雲がそうであるように、二人にも阿吽の呼吸があるに違いない。だとすると私がここで口を挟むのは野暮というものだろう。電が掛け軸を作つてまで布告したボケだ、発言権は一ノ傘に譲つてやろう。

「ね、ねえ電？ ワタシは？ 一ノ傘さんの名前は入れてくれんの？

お姉さんちよつと寂しいな……なんちゃって」

なんちゃつてと言つてしまった。

「じゃあ第二艦隊を組む時は【一ノ傘艦隊】にしときます」

冷た過ぎて見ているだけで眼球が霜焼けしてしまふそうだ。どれだけの罪を犯せば電からこれほど冷たくあしらわれるんだ。ほら見ろ、叢雲も少し引いている。

「掛け軸まで作つているところを悪いが【竹櫛艦隊】は却下だ」

「そんなんっ!? 何故にです!？」

ボケではなく本気だったのか。

「【叢雲艦隊】と大差ないではないか。それに自分の名前が艦隊名に入るのには少々恥ずかしい」

「ふざけるな」と叢雲に足を蹴られた。

「せっかく一ノ傘副司令官の艦隊とウチを合わせて随分な戦力になったのよ。もつとこう、誰に聞かれても恥ずかしくないようなしつかりした名前にしないと」

「ですから、ほら」

ズイと掛け軸を突き出す電。私は喜ぶべきなのだろうか。こうも

推されると悪い気はしなくなる。【竹櫛艦隊】が戦果を上げれば私の名は後々に残るであろう。勇敢なる【竹櫛艦隊】は叢雲を先頭に荒れた海を突き進み、襲いかかる深海棲艦をちぎっては投げちぎっては投げ、ついには奴らの正体を人類が暴くより早く絶滅させてしまうのだ。長かった戦争は終わり、英雄となった私達二人はその後、潮騒の届かぬ場所でゆつくりと余生を過ごすのだ――。

「だから却下。ぜんぜん締まらないでしょそれだと」

「失礼なことを言うな。私の名を出せば戦意も高揚するだろう」

「げんなりするわよ。名前で言えば山城の次に縁起が悪いわ」

山城の次……この私が鉄と不幸の化合物で建造された山城の次……。

「そこまで言う叢雲さんはじゃあ、どんな名前がいいですか？」

「私？ ……はほら、艦隊の名前を決める権限なんてないし」

「もしかして変えたくなかったりしますか？」 【叢雲艦隊】

「そんなわけないでしょう！ 一刻も早く変えたかったところよ！

ただ、その……私の立案なんてあんまり意味ないし、こういう事はせっかく人数も増えたことだし、コンペみたいなのを開いて案を出すとか」

「もしかして命名センスに自信ないんですか？」

「あ、あるわよっ！ 艦隊名のひとつやふたつ考えて――」

「考えて？ あるんですねやっぱり。【叢雲艦隊】から変えたい名前を温めてないわけがないですもんね。では叢雲さん、とっておきの発表をどうぞぞ！」

「~~~~くあwせdrftgyふじこーp!!」



【天照大艦隊】。

由来は文字を見たまま天照大御神。日本最古の引きこもりとしても有名な太陽神である。その引きこもり事件、天岩戸隠れの元凶である弟の建速須佐之男命は、八岐大蛇がドロップした天叢雲剣を天照大

御神に献上したという。ざっくり言えばアマテラスが装備している剣がムラクモノツルギ、ということになる。

天照大御神の剣——この艦隊の剣であろうと叢雲は自身の名前をかけて命名したのだろう。

「好評じゃあないか」

「う、うるさいっ」

新艦隊名決定の通知を張り出した掲示板の前に集まった者達の反応は上々だった。叢雲の真意を汲み取れた者は少ないようだが、旧一ノ傘艦隊を含め、天照大艦隊としてまとまってくれるのであれば、「あれなんて読むの?」といった声が聞こえてきても構いはしない。

「てんてり? てん……天日干しで照り焼きの艦隊?」

「【アマテラスダイカンタイ】っ。これでいいかい」

「うおーカツケエー! 神サマの名前だぜ、負ける気がしねえな!」

「神様!? いつも助けてくれてる幸運の女神ですか!」

「てゆーか前まで【叢雲艦隊】だったんだ。知らなかった—」

「えっ!? それでよく今まで無事だったね、竹櫛司令官の艦隊」

「ちよっと大げさな感じはするけど、いいんじゃない?」

「これくらいハツタリ利かせたほうが戦いでアツくなれるんだよ」

「日本神話の……なるほど、そういう意味ですか。つまり【叢雲艦隊】から意味は大して変わってませんね」

「新しい艦隊……これで一航戦と五航戦のみんなが少しでも仲良くなれば……」

「テリヤキバーガー食べたくなってキマシタ」

「いい名だ。この名に恥じぬ戦いをしなければな」

「クマー」

「にゃー」

「不幸だわ……」

「そ、そんな……【竹櫛艦隊】だったはずでは……電、私が作った掛け軸は……」

「えつとですね……、だ、大丈夫ですよ捨ててはいませんから! ちやんと飾りますから!」

「y p a a a a a a a a a a a a a a a a!!」

「ちよつ、どこ行くんですかひびきーっ!」



一ノ傘の艦隊と我が艦隊が合体したことを上層部にしつこくグチグチと言われることがなくなった程度には、天照大艦隊の滑り出しは良好と言えた。

技工を凝らして（叢雲の）安全確保に努める我が旧艦隊と、火力に任せて敵艦隊を蹴散らしながら進撃する旧一ノ傘艦隊、互いが互いの欠点を補い合える編成を行えるようになったのだ。人員が増えたことにより遠征任務も多くこなすことができ（これは遠征そのものの負担を考えると儲けは少ないが）、支援艦隊の編成にも悩まされることはなくなった。

艦娘の顔合わせについては問題無く——といえば私はホラ吹きのリッテルを貼られることになるが、一ノ傘の艦隊とは鎮守府が近かったこともあり、よく演習や合同作戦を行っていたし、電をはじめとして陸上で顔を合わせる機会があった者も多く、派閥争いのような不毛な問題は……今更である。問題のひとつやふたつ増えたところでへこたれる私ではない。

帆船の時代ではないが、我が天照大艦隊はまさに順風満帆と言えよう。

「……なに浮かれた顔してんのよ」

「叢雲；Lv. 101 ↓ 103」

覇気のない声である。艦隊の名付け親がそんなことでどうする、と叢雲の顔を見ると、目の下にはどよんと隈ができ、頬もげっさりしているではないか。山城がネウロイとやらと戦ったとかなんとかの報告書を持ってきた時の数倍は酷い。美しい顔が台無しだ。誰だ私の叢雲をこんな風にしたのは。やはり山城か。奴の不幸は天照大御神の威光ですら明るく照らし出せないというのか。

「なんとかしてよ、隣の部屋」

「一ノ傘か。そういうえば最近姿を見ないな」

「そりやそうよ、引きこもってるんだもの。あの人がぜんぜん働かないせいで仕事が減らないわ。陸の仕事だけで練度が上がったくらいよ、信じられる？」

艦隊の規模が大きくなれば当然、やるべき事も単純に二倍とは言わずとも増える。しかし副提督という便利な肩書の奴がいるのだからむしろ今までより楽になるだろう、と考えていた。そうでもないらしい。私の叢雲をコキ使う奴は許さん。

第二執務室は仕事を行うに相応しい場所ではなかった。奴には奴が寝る部屋を別に用意したはずなのだが、第二執務室は一ノ傘の私物で溢れている。いや埋もれていると言い換えよう。机の周囲には大量の銃火器が置いてあったり立ってかけてあったりなかったりしている。ライフルやハンドガン、スコープ、なんだかよく分からないパーツや何故か大量のガスボンベが無造作に置かれている。全部エアガン関係だろうか。しかし奴は拳銃を支給されたと言っていた。パソコンの前に無骨な拳銃とBB弾ではない金属製の弾が転がっている。卒倒したくなる安全意識だ。

他によく目につくものはニヤリと笑ったダンボールの空箱である。これが全ての元凶だろう。Amazonと引きこもりを接触させてはならない。その他、人をダメにすると言われるソファ、変えの軍服、雑誌、文庫本、一応まとめて置いてある化粧品、梱包材として使われるプチプチ、扇風機、不細工なぬいぐるみ、秘書艦の机、「隊艦櫛竹（ばーしばす）」掛け軸、空のペットボトル、ビールの空き缶、出し忘れたらしいゴミ袋などなど。

部屋を汚すことは百歩譲ろう。一ノ傘副提督がこの部屋をどう使おうと私が口を出すことではない。やるべきことさえやってくれるのなら私は文句を言うまい。

「ちよつと！ ノックもなしに入ってくるなんて失礼じゃない！」

「雷・Lv. 122」

一ノ傘は雷に膝枕されていた。すぐそこに人をダメにするソファがあるというのに、一ノ傘は雷の太もも枕に頭を乗せて、刈り取られ

た雑草のように転がっていた。そんな奴の頭を雷は優しく撫でている。

「竹櫛司令官はエチケツトがなつてないわ。ほぼ女所帯なのにそんなことじゃダメじゃない」

「貴様らにだけは言われたくない」

「んん……おー竹櫛やん。恥ずいけん部屋見らんぞー」

「現在進行形で生き恥を晒している奴の台詞とは思えん。さっさと起きろ馬鹿者が。今何時だと思ってる」

「いかずちー、いま何時ー？」

「1750よ副司令官。今日の夕食はカレーだつて」

「そっかー。そうらしいよーたけぐしー」

「ここで特別昇進したいか？ 引きこもりが特進できるかは知らんが」

「なんてこと言うの!!」

「いいんよ雷、ありがとうね。ワタシが死んで深海棲艦になったら……電はちゃんと沈めてくれるかね」

「やめてよ、やめてよそんなこと言うの！ あなたには……私がいるじゃない……!」

雷は一ノ傘の頭を抱えて泣き出してしまった。数日前まで物置だった私の執務室の隣室で繰り広げられる少女と干物のロマンス。付き合っていないので部屋を後にした。



つかつかと凜々しく廊下を歩く電の背中に声をかけた。振り向いた電はこれ見よがしに左手で髪をかき上げた。見せつけてくるのは勿論、海に出ることが多くとも全く傷んでいない清流の如き髪ではなく、薬指に嵌めた一個七百円の指輪である（本人は全く気にしていないが、一ノ傘とのケツコンカツコカリを解消してしまったため、我が艦隊における最高練度の座は雷に譲り渡している）。

「お早うございます、竹櫛司令官。今日も良い天気ですね」

「ひとつ頼みがあるのだが」

「ああ、ええ、なんなりとおっしゃって下さい」

「一ノ傘と仲直りしてくれ」

太陽のようだった笑顔が、スーパーノヴァを起こして残ったガスの臭いをかいだような表情になってしまった。私の知る電がどんどん俗物になっていく。先ほど「今日も良い天気」と言ったが、窓の外は折り畳み傘では頼りないくらいの雨である。

「一ノ傘副司令官のことは雷に任せてあります。雷ならきつと上手くやってくれます」

「上手くやれていないからこうして頼んでいるのだ。雷は人をダメな方向にしか導いてはくれないぞ」

「影のあだ名が「ダメ人間製造機」ですからね。もしわたしがいなかったら旧一ノ傘艦隊は、仮に初期の資材不足をなんとか凌いだとしても雷に骨抜きにされて滅んでたと思います。最古参の吹雪がとろけましたし」

「私の艦隊を滅ぼす気か。一ノ傘と雷が働かないせいで天照大艦隊は早くも存続の危機だ。一ノ傘の秘書艦をやれとは言わん。だがせめて奴の労働意欲を復活させるために仲直りだけはしてくれと頼んでいるんだ。電、これは真面目な話で、この艦隊の司令官の命令と考える。働かざるもの何とやらレベルでは済まないんだぞ。最悪、旧一ノ傘艦隊の人員を全員路頭に迷わせることになりかねん」

「なにより叢雲が過労で倒れかねない、と言うほど私は空気を読めない男ではない。今ここで叢雲の名を出せば電が反発することは必ずである。上層部から金をふんだくるために磨いた処世術を今活用せずいつ活用するのか。」

しかし電は「大変みたいですものね、叢雲さん」とぼつりと言った。知っていたなら手伝えよ。

「本っ当に、仲直りするだけでいいですか？」

「うむ。それだけでいい」

「……竹籬司令官の命令なら仕方がないのです。じゃあ、ついて来てくれますか」

◆
◆
電の姿を見るなり、一ノ傘は雷枕から飛び起きた。ダメ人間製造機の魔の手から一瞬で開放してしまうとは、私の最初の秘書艦は流石である。

「ひ、久しぶり、やね。 ……えっと、本日はお日柄もよく」

「外は雨です。土砂降りの音が聞こえませんか」

「(おい電、もう少し優しくだな)」

「(分かっています)」

「電！ 今までどこ行ってたのよ！ 一ノ傘副司令官がずっと寂しがってたんだからね！」

「わたしは雷のようにメンタルは強くはないのです。だから今日、一ノ傘副司令官には約束をしてもらいに来ました」

「する！ なんでも約束するけん今までどおり話しようよ！ もう身体触ったり——」

「ギャー！ 言うな！ 竹櫛司令官の前では黙りやがってください！

わたしまで同類扱いされたら本当に絶交しますからね！」

「あんなのちよつとしたスキンシップじゃない」

「R指定のスキンシップなんて許さないのです！」

「ちよつと蕩けるくらいが人間、一番心を開けるのよ」

「姉妹艦にそんな汚れた倫理観を語られたくないのです！ 暁と響にしゃべったらぶつ飛ばすからね！」

「でも暁は一人前のレディになりたがってるのよ。そろそろ機会があってもいいんじゃない」

「大人の階段と汚れたエレベータを一緒にすんな！ お子様ランチの旗をピンクチラシにしてしまうようなおバカはここで一度死ぬのです！」

殴りかかる電と受けて立つ雷。ドタバタ騒々しく暴れるせいで、なんだなんだと第二執務室の外に人だかりができる。この雷電キャットファイトは暫くの間、鎮守府内での語り草となってしまうた。



第二執務室の扉をノックすると、「どうぞクマー」と間の抜けた声が返ってきた。奴はここに入るのを嫌がっていなかつたか？

部屋の中はそれなりに片付いている。捨てるべきものを捨てて整理するものは整理した、というだけで執務室とは思えぬ物の溢れ様ではあるが、ダメ人間と球磨がきちんと机に向かっているだけ上等である。

「球磨が秘書艦とは珍しいな。どういう風の吹き回しだ」

「ここは天国クマ。見るクマよコレ、APS—3だクマー！ まさかの精密射撃銃クマ。そこにあるのはM14—EBRで、一ノ傘副提督のコレクションは半端ないクマ」

「ありがとう球磨ちゃん。でも遊ぶのは働いてからにしようねー」

「サーイエッサー」

どの口が言うか、とは言うまい。一ノ傘が給料分しつかり働いていれば問題は最初の部分だけは解決するのだ。私がここに来たのは次なる問題を解決するためである。

「一ノ傘、この明日からの遠征計画だが」

「単冠湾あたりでレ級がおるって目撃情報があつたんよ。新米の見間違いやとは思うけど本当やつたら危ないやん？ そんで可能性のあるルート探すと、ついでに一、二匹撃破」

「ふざけるな艦娘を過労死させる気か貴様。単冠湾は択捉島にあるんだぞ、レ級をマグロか何かと勘違いしてないだろうな。艦娘は蟹工船じゃあない。それに装備にドラム缶が入っていたぞ。輸送任務の装備表フォーマットを使い回してないだろうな」

「入れ物がないと途中で物資が尽きるやん」

元ブラック鎮守府の長は私とは根本的に考えが違っていた。試みに資材確保のための遠征計画を任せてみたらコレである。輸送任務でチマチマ資材を運ぶよりも戦果を上げて得られる報奨金のほうが物資その他に自由に変換できて効率が良く軍上層部のウケも良い、

と。おかげで前線に送り出す部隊よりも強力な部隊をはるか遠いオホーツク海に送り出すことになってしまふ。

「レ級は存在が確認され次第、可能な限り交戦を避けるのが我が艦隊の方針だ」

「提督は心配性クマ。一ノ傘副提督の艦隊が来たんだから戦力は十分クマ。もうレ級に怯えながらのクルージングとはおさらばクマ」

「たっのもしい♪ この作戦が成功するかどうかは補給班の腕にかかるとるからね、頑張つてよ球磨ちゃん」

「は？」

「秘書艦をやっているのに知らなかったのか。お前もドラム缶ガン積み要員としてレ級狩りに加わるんだぞ」

「聞いてないクマ！ とゆるかクマはまだレ級と交戦したこと一度もないクマよ!?!」なのにドラム缶ガン積みって、対空機銃もなしにどう生き残ればいいクマ!?!」

「だいじょぶちゃんと考えとるって。戦い慣れとる蒼龍飛龍も一緒やし、二人が戦場かき回しとるうちにこっそりMVP取ってくればいじゃん」

「ドラム缶でどーやって攻撃しろっつクマー!」

三日後、ボロボロになりながらも球磨はMVPと原形をとどめないほど破損したドラム缶を持って帰投したものの、ドック前で力尽きて倒れ、一週間の絶対安静となった。

「球磨；Lv. 63 ↓ 72」

歩き慣れない鎮守府の中を、雷はどこを目指すでもなくふらふらと歩いていた。両の目は開いていても道や建物を漠然と捉えているだけで、焦点が定まらない。危うく錆びた看板にぶつかりそうになっても注意する者はいない。無意識に人の声が聞こえない方へと足が動く。雷は考え事に没頭していた。

一ノ傘が元の調子を取り戻したことを雷は他の誰よりも喜んだ。電を竹櫛に奪われたショックで捨て鉢になり、もう艦隊の仕事などやめてやると、事実上つまり雷たちのことを放棄すると言い出した時は、有言実行を貫く性質の一ノ傘をできる限り側に縛り付けた。どんな手を使つてでも、たとえ一ノ傘が軍から抜けてしまったとしても絶対に手放さないと決意した。結局その決意は電と喧嘩しているうちに不要になってしまったが、この艦隊の副司令官として前のように艦娘たちをげっそり干からびさせるほど働けるようになったのだから、雷は満足だった。

満足していたはずだった。

「司令官」と、雷はぽつりと呟いた。

それだけで身体が一ノ傘とのことを思い出して疼いた。一度思い出してしまうと止まらなかつた。一ノ傘の愛撫はいつも唇、そして左耳から始まる。雷は左耳を手で押さえた。しかし熱は首筋を這うように全身に広がっていった。

この鎮守府で真面目に働くようになってから一ノ傘は雷との時間を作らなくなってしまった。まるで雷のことなど忘れてしまったかのように。今日も自分ではない誰かが秘書艦に就いている。その誰かを毎日羨ましがった。ほんの少しでも構わない、一ノ傘との二人だけの時間が欲しかった。触れてもらいたかった。

「あ、あ……」

雷は自分でも気付かないうちに、両手を耳から離して制服の上に這わさせていた。一ノ傘に「されるがまま」である時の手を真似ていた。心悸は早まり、浅い呼吸を繰り返す。

スカートの下に手を伸ばしかけたところでようやく雷は、自分が変電所近くの電気室前にいることに気付いた。誰もいない場所であったと僅かに安堵するも、身体が言うことをきかない。この場へたりこみそうになる。力が入らない足をなんとか動かして電気室の裏に回った。

電気室の裏側は茂みになっていて、誰にも見つかりそうにないと考えると雷は止まらなかつた。左手は右の乳房を下から上へ撫で回し、右手で秘部を強くマッサージするようになぞりあげた。

「しれいかんっ」

一ノ傘にされる感覚を再現するように自分の弱い場所を慰めた。雷は自分で手を動かしているとは考えず「されるがまま」を妄想していた。

「んっ……………はあ、っ…………」

気持ちのよい所、強すぎる所はすべて知られている。雲の上に横たわるような浮遊感を味わいながら、より高い場所へ昇るために雷はあられもない声を繰り返し出す。しかし一ノ傘はいつも、何も考えられなくなつた隙をつくように陰核を刺激する。

「いっ!? あ、ああっ…………!!」

ぼんやりしていた頭の中が弾け、唐突に襲ってきた大きな波に飲まれるように腰が暴れる。まともな意識を取り戻すのにしばらく時間がかかる。そして、

「お願い、だからもうすこし優しく——」

と雷が懇願してようやく本当の遊戯が始まる。弱く撫でるだけだった秘部を指を巧みに使つて陰核と合わせて強く擦る。

「あんっ!? いや、ああああっ!!」

地面に倒れても右手は止まらなかつた。苦しいと感じるほどの快楽が絶え間なく、しかし絶対に慣れることのないようにリズムを変えながら身体と心を攻め続けた。

雷が悶えれば悶えるほど一ノ傘はそれを楽しみより強く弄ぶ。抵抗しようものならよりいっそう強い快感で雷の抵抗を跳ね除ける。一ノ傘に「されるがまま」になっていると錯覚した雷は暴れて逃げよ

うとする秘部を陰核を押しやることで留めた。

「——っ!! つはあつ、ああつ!」

自分の感覚を強烈に揺さぶり続ける右手に耐え切れず左手で抑えようとするが、意思に反して左手はやはり一ノ傘がそうするように乳首を転がしてしまふ。

「いやっ、しれいかん、あっ——!」

自分自身に催眠術をかけるように、どれほど苦しく悲しくても、雷は空想した一ノ傘との自慰を止めようとはしなかった。

一方、みだらな声が響く変電所近くの電気室の裏手、鬱蒼とした茂みの中には、ダウジング用の棒を持った一人の阿呆が潜んでいた。



これには理由がある。いや別に言い訳とかではないけれど、私がここにいる理由くらい考え直しても不思議なことはない。

あんまりにも扶桑姉さまが見つからないものだから、私は探す方法をより多様な視点で考えてみた。例えばテレビのリモコンを失くした時どうやって探すか。普通は部屋をしらみつぶしに探すけれど、それでも見つからない時があるから「妖怪リモコン隠し」なる新種の怪異が現代に生まれることになる。よく耳にする「妖怪リモコン隠し」の話だと案外近くにあつて驚いたつてオチが多いけれど、私は「妖怪リモコン隠し」のせいで既にリモコンを3つ再購入している（ローテーションでどれかが無くなったりテレビ付属のものが見つかりする）。

きつと扶桑姉さまも「妖怪扶桑姉さま隠し」の魔の手によって行方をくらまされているに違いない（そういうのを普通に「神隠し」と呼ぶのかもしいないけど、似たようなものだからどうでもいい）。

そこで思いついたのがダウジングだ。L字形の棒や振り子を持って歩き回ったりするやつ。エセ科学的だと言う人もいるだろう。というか私もそう思う。棒を持って歩くだけで水道管の場所が分かるなら対潜水艦用ソナーは何なんだって話になる。でも私は敢えてそ

こに目を付けた。

扶桑姉さまの見つからなさは科学的にあり得ないと言ってもいい。ボウリングでバンパーまで出したのに0点を取るくらいに奇跡的なあり得なさだ。迷惑な奇跡もあったものよ。このあり得なさを「妖怪扶桑姉さま隠し」と定義付け、そして真つ向からの対策として同じくエセ科学的な「ダウジング」を対抗策とするのである。

工廠で作ってもらったL形棒を両手に持ち、導かれるまま私は鎮守府内を歩き回った。部屋から出て30分くらいは同じ所をグルグル回ったりすれ違う人たちに異様なもののように見られたけど、慣らし運転中では仕方のないことだと私は耐えた。

二本の棒がようやく寮の外に私を連れ出した時、私は扶桑姉さまの振動だか電波だかそれ系のを掴んだと確信した。L形棒が示す先には変電所がある。なるほど考えてみれば探したことのない場所だ。エセ科学に導かれるまま歩いていき、変電所に近づいたところでL形棒はクイツと曲がった。電気室の向こう側を指していた。これはもう近い、間違いなく運命の瞬間が迫っていると、電気室裏手の茂みに入った。

何もなかった。木々が生い茂る中を枝に服を引っ掛けたり芋虫が落ちてくるのも我慢しながら一通り探し回ったけれど、強いて見つけたものといえれば百年以上前からずっとそこにいるような風化したお地蔵さんだけだった。このお地蔵さんに扶桑姉さまに繋がるご利益があるということだろうか、どうせ他には何もないしと、手を合わせ「どうか扶桑姉さまに会えますように」とお願いした。

再びL形棒を二丁拳銃のように構えてダウジングの旅を再会しようとする、すごい勢いでL形棒が電気室の方を指した。引っ張られたと言ってもよかつたくらいだ。反応が露骨過ぎてちよつと怖かつたけど、どの道電気室の横を通らなければここからは出られないのだし、ビリビリ反応する方向へ歩いていくと、甲高い声が聞こえてきた。

「いつ!? あ、ああつ……!!」

まあ、うん。

生で他人の声を聞いたことなんてないのだけれど(私自身? 何の

ことやら）一発であの声だと分かった。混じりつけ無しの淫欲が音波となつて木の葉を震わせた。樹幹に身を隠しながら近づき覗くと、電気室の壁に寄りかかった雷が一人で自身を慰めていた。

「お願い、だからもうすこし優しく——」

オーケー。何も問題ない。私は理解ある女です。誰だつてしますよ。むしろ男を連れ込んでいなくて安堵したくらい。うん。だからそりゃあ、健全な女子なら一人でやるか大井と北上みたいに仲良くやるかの二択になりますよ。可愛い子はたくさんいるけどもし男なんて作つて、それを理由に艦娘やめちやつたら処分されますからね。何かシチュエーションを想像しているみたいだけど、妄想をきちんと人気がない場所まで移して処分する雷はえらい。流石、練度が叢雲を超えているだけのことはある。

「あんっ?!? いや、ああああっ!!」

でもあえて言わせてもらえるならば、ちよつと盛り上がり過ぎるんじゃないか。だって私から見ればまだまだお若いですよ。なに意識がはつきりしてるのかしてないのか分からないような顔をして、悲鳴みたいな喘ぎ声を上げて、全身を痙攣させるなんて許しているの？ 自分の指だけで失神してしまひそうですよ。若いからって道具も無しにこれはちよつと飛ばし過ぎですよ。この鎮守府に移ってきたばかりだけど将来が心配になりましたよ。

出るに出れず、結局私は雷の自慰を最後まで覗き見してしまった。地面に身体を投げ出したまま手を動かしていた雷は急に動きを止めて、痙攣する他は動かなくなつてしまった。

そんな意識が朦朧としていているらしい雷に向かつて、運悪く茂みから白い蛇が這い出てきた。この鎮守府では蛇が出ると聞いたことはあつたけど、なにも今このタイミングで出なくてもいいでしょうに！

危険が眼前に迫っているのに雷は魂を抜かれたような顔のままだ。私は迷った。すごく迷った。雷の安全か尊厳、どちらを守るべきか。そして「今の雷の前なら出ていっても気付かれないんじゃないか」と考え、茂みから出た。雷の方を目指していた蛇の尻尾（どの部分か尻尾か分からないけど後端部分）を摘んで放り投げた。深海棲艦

を相手に奮闘する私にとって蛇なんてどうってことはない。そしてこの山城はクールに去る——はずだった。

蛇を放り投げた方向からバン！と破裂音がした。何事かと見た方向には変電所があった。そして煙を噴き出している細長い物体。やってしまった。ただでさえ運に恵まれないのに蛇殺しはよくない。そしてさっきの大きな音はもつとよくない。

「う……………え？ え？」

雷の涙でふやけたような目の焦点が私に合った。

「や……………ま、しろ？」

私と雷の鬼ごっこが始まった。

まず山城の外出届けが出ていないことを確認した雷は竹櫛と一ノ傘に、山城を見かけたらすぐ電話するよう頼んだ。そして12・7c m連装砲を持った。錨も勿論忘れない。

「あれ、雷って今日海に出る予定あったっけ？」

「ないわよ。ちよつと山城狩りに」

「ふーん。——ん！？」

それから数人に聞いて回ったが、予想通り山城を見かけた者はいなかった。やはり隠れたかと雷は舌打ちした。この鎮守府には来たばかりなので地の利は山城にある。それでも逃げ続けることはできまいと、雷は山城の部屋がある寮へ向かった。



「おい、もう行ったぞ」

「本当に？ 嘘じゃない？」

「いいからさっさと出る」

提督の机の下から引っぱり出され、身構えたけど確かに雷はいなくなっていた。ホッと一安心、しかけて提督がさっき私を見つけたら雷

に連絡すると言ったのを思い出した。

「黙っておくからどこかに行け。私は忙しいのだ」

「山城さん、雷に何したんです？ あんな顔した雷なんて初めて見ました」

付き合いの長い電が言うくらいだからよほどの顔だったのだろう。

「どんな顔してた？」

「一応笑顔でしたけど、死にたくなるような恥辱と脳の血管が切れそうな怒りを辛うじて押し殺したような顔でした。あと休日ゴロゴロする時しか着ないジャージ姿でしたけど」

「ではお邪魔しました」

執務室を出て、とにかく真っ直ぐ寮に戻った。ほとぼりが冷めるまで籠城していればいいと考えたのだけど、自室に戻ると扉の鍵が破壊されていた。こじ開けたとかではなく鍵のあった位置に穴が空いていて、鍵だったらしき破片が床に散らばっている。あと少しここに来るのが早かったら私もこの鍵のように粉碎されていたんだ、うわあ。

本気で隠れ場所を考えないと。一度この部屋に来たのだからもう安全では？ いや、こんな鍵穴が風穴になったような部屋にいて目立たないはずがない。どこか雑然とした場所——工場はどうだろうか？



竹櫛と一ノ傘の艦隊が統合してまだ日が浅いため、工場は整理しきれていない物で溢れていた。置き場のない装備はスクラップのように積み重ねられ、整理されたスペースのほうが少ないくらいだった。しかし人が隠れる場所こそ多いが隙間も多い。山城に行動を見られている可能性も考慮し、雷は足早に工場内を回った。

工場の中にはおらず目撃証言も得られなかったため雷は外に出た。日陰になっている工場の裏に回ると、失敗ペンギンが見上げるほどの山を形作っていた。一ノ傘と竹櫛が徹甲弾と三式弾を大量生産しようとしたため発生したものだ。とてつもない量への呆れと、ついでは山城が見つからない苛立ちをぶつけるために主砲を一発発射した。

失敗ペンギン山の五合目から上がバラバラに吹っ飛んだ。

次の探し場所を考えているとスマホが鳴った。期待して電話に出たが竹櫛からの鎮守府内で撃つなという叱責だった。雷は肩を落として、言われた通り装備を工廠に置きに向かった。



こうして伏せていなかっただら死んでいた。肝を冷やすどころじゃない、幽体離脱しかけた。雷的には私さえ見つければ、例え首から上が無くなっててもいいということか。そりゃあ確かに口封じにはなる。死人に口なし。山城に幸なし。

第二射が来るかもしれない。ペンギンの山から一か八か飛び出ると、雷は姿を消していた。さっきの一発を工廠探しのメにしたらしい。死ぬかと思ったけど運が良い。これでじっくり、ここで次の作戦を考えられそうだと、工廠の表まで出ると、同時に工廠の出入口から雷が出てきた。

コンマ5秒見つめ合う。

「見つけたっ!」

死の追いかけてっこが始まった。全力で走った。航空戦艦の鍛え方をナメるなよ!

「ハッ、ハッ!」

ちらりと振り返ると雷はぴったりついて来ている。何故か艤装を外しているのは幸いだけど、そのせいで普通に走っている。しかもあつちは何故かジャージに着替えていて対する私は、もう何なのこの振り袖! ジャマ!

「待ちなさいっ!」

息が上がってきて引き離せそうもなくなり、咄嗟に思いついた最後の賭けに出ることにした。建物に入って階段を駆け上がり、第二執務室に飛び込んだ。

「山城ちゃん!?!」

「山城!?!」

声を揃えて驚く一ノ傘副提督と叢雲。そして雷が飛び込んでくるのと同時に私は一ノ傘副提督の後ろに回り、盾のように突き出した。

「え!? なん、なにごと!」

「はあ、はあ——! ど、どうする雷。ここ、で、大人しく、引き、下がれば、私は、こ、けほっ! ……ここで、何も言わないけど?」

「はあっ、はあっ」

作戦通り雷は入り口で固まったままだ。雷は電気室裏で自慰していた時「司令官」と言っていた。それは紛らわしいが旧艦隊の一ノ傘副提督のことで、だったら副提督本人をこちらの味方(盾)にしてしまえば雷は手が出せないって寸法よ。これが大人の鬼ごっこつてものですよ!

「ねえ山城、私は関係無さそうだから出てっついていい?」

「あ、はいどうぞ」

「ちよっ!? 見捨てんでよ叢雲ちゃん!」

「休憩に入ります。一時間くらいしたら戻りますので」

まだ息が整わない雷の隣を華麗に避けていく叢雲。クールだ。

「さあ、これで残るは私たちだけ。これでもまだ私のことを追い——」

「ぐすっ……」

汗ではなく涙。嗚咽とともに、雷は泣き出してしまった。

「うわああああああああああああん……!」

一ノ傘副提督の視線が痛かった。



「……だって、今日も叢雲だったし、司令官、全然私を頼ってくれないし」

秘書艦用の席に座って、やっと落ち着いた雷はぽつりぽつりと語った。

「前はこうじゃなかったじゃない。電ばっかりの時もあったけど、一緒に仕事したりご飯食べたり——構ってくれたり、してくれたのに。もう私なんかいらなくなったの?」

「違う違う」と一ノ傘副提督は手をぶんぶん振った。

「雷がおらんと困るし寂しいに決まっとるやん。こつちに来てから何日かはずっと雷に励ましてもらっとったやろ」

雷はダメ人間化を促進するというのが常識だけど……。

「でもそれからずっと他の誰かとだけ一緒だったじゃない。叢雲なの？ 今度は叢雲なの？」

「そうじゃなくてやね……あー、いろいろ恥ずい理由があるんよ」

「私だって山城に恥ずかしいところ見られたんだから！ ほら言いたきゃ言えばいいじゃない山城！」

「いや、何が楽しくてしゃべるのよ」

「分かった分かった。あのね、前までトップで仕事しとったからって、じゃあこつちの仕事もできるかつつーと、そうもいかんのよ。やり方が軍全体で決まっとる部分とか、元々竹櫛のやり方と似とる部分もあるけど、ぜんぜん違う部分のほうが多いんよ。港の位置がちよこつと変わったくらいに思っとったけどね。細かい数字とか今まで使えたものが使えんようになったり、今までどおり使うためにまだまだ色々せんといかんし」

「……みんなそんなこと気にしてない」

「そう？ なら苦労した甲斐あった。私の艦隊のみんなが、なくんも気にせんで今までどおり戦えるようにするのが最優先やったからね」
「……………」

「ずっと叢雲ちゃんに迷惑かけとったけど、そういう理由。竹櫛の艦隊のことを一番良く知っとるのが叢雲ちゃんやしね」

その後、取って付けたように「あー、あと球磨ちゃんも一応」と言っ
た。

「つまり私の仕事が悪手やったって話。ごめんね。前と一緒にいたい
にっつて言っときながら雷にそうできんかった」

雷は頭を振った。

「私こそ、ごめんなさい……わがまま言っつて」

「なに言っとるんよ。雷は頼りにしとるんやから、その分ガンガンわ
がまま言っつてくれんと」

「ホント!?!」

ようやく雷の表情が輝いた。明るいイメージしかなかった雷なのに、今日はこの顔を見るまで本当に長かった。やっぱり人間、笑顔が一番です。なんてもっともらしいことを考えてみる。

「私、頼りになる!?!」

「なるなる」

「私無しじゃ成り立たない!?!」

「成り立たん成り立たん」

「わがまま……言ってもいい?」

「いいよ。何でも言って」

「じゃあ」

ガシツ、と雷は私の手首を掴んだ。捕まえた、というよりも逃げたら骨折る、といった風の掴み方だった。

「あ、あの、痛いんですけど」

「さつきね、山城に見られたの。その——一人でしてるところ。最近ずつとしてくれなかったから我慢できなくて、でもまだ足りなくて、今近くに司令官がいてもう……はあつ……我慢、できないから、山城を混ぜてしよう?」

「なぜ私を混ぜる!?!」

どうしてわざわざ異物を混入させようとするのこの子ちよつと意味が分からない!

「あ、あはは。まあ山城とはあんま交流なかったし、こういう形で親睦を深めるのも、ね」

「ないです! そんなの聞いたことないです! いや聞いたことはあるけどそれ乱○パーティー!」

「そんなのじゃなくて」と言いつつ雷の手が服の中に滑りこんできた。

「ひいつ!?!」

「見られたのは嫌だったけど——ちよつと、ドキドキした」

逃げる間もなく絡みつかれ、ソファに押し倒されてしまった。頭ひとつ小さな子に。

「だ、誰かンツ——!?!」

助けを呼ぶ声を雷の口で遮られた。舌を入れられた。

これが私のファースト・キスですよははは……。

副提督も加わり、完全に抵抗する気力を奪われた私は二人が満足するまでいろんなことをされたりさせられたりした。叢雲はずっと帰って来なかった。

ごめんなさい扶桑姉さま。山城は……汚れてしまいました。

第12話 叢雲の薬指 9

「しつこく言うけど、くれぐれもクルーザーに深海棲艦の存在を気取られないように。交戦の音や敵が嘖く煙、何一つ乗客に悟られるなどという命令よ」

「無茶言つてくれるぜ」と天龍がぼやいた。

「天龍；Lv. 39」

「金持ち共もニュースくらい見て海に出てんだろ？ クルーザーの至近距離でリアルな戦闘ショーでも見せてやればチップくらい出るんじゃないか？」

「かもね。でもその代わり護衛料が無くなるどころか違約金や慰謝料とか請求されるかもよ」

「面倒臭え〜！」

私だつて馬鹿馬鹿しいとは思うけれど、こんなに実入りのいい任務は滅多にありつけないと一ノ傘副司令は言っていた。艦隊を統合する前はこんな（本当にくだらな）任務が存在するなんて知りもなかった。それなりの実力があつて、上からの命令に従順な艦隊——つまりご都合的な凶上演習のとおり敵を殴りに行く艦隊にだけ声がかかるってことらしい。

それでもまだ上には上がいる。たとえば天龍がどんなにあざといパフォーマンスを行ったところで、チップをポケットに突っ込んでもらえるのは豪華クルーザーの側にべったり張り付いて警戒航行する、それはもうたいへん優秀らしい艦隊様だけ。ブローチのように勲章を付けている、昨日の新聞にも写真が掲載されていた撃沈王とかいう艦娘がいる艦隊だ。乗客に手を振り延々と写真を撮られながらの不毛な護衛任務も楽ではないのだろうけど。

つまり天龍たちの役目は彼女らがつつつがなくお送りするクルージングを水平線の彼方からこっそり守る、燃料と自尊心を消費するだけのやり甲斐のない仕事なのだ。その航海ルートにしたって、さらにどこかの艦隊が前もって命を張って安全を確保したもののなのだから……そこまで理解しているらしい龍田が何も言わないでくれるのは

ありがたい。

「じゃあ天龍ちゃんはお留守番してる？ 敵のいない海域でクルー
ジングなんて退屈なだけだし」

「龍田；L v. 39」

「出るよ、出る！ 旗艦のオレが外れてどうするんだよ」

「それじゃあ他の皆も頼んだわよ。長くて退屈な任務だけど気を抜かないように。安全が確認されてる海域でも駆逐艦の一匹や二匹潜んでるかもしれないわ。何かあれば天龍の指示に従うこと。では出撃」

どこか気の抜けた足取りで遠い港を目指す六人を見送った。日が昇ったばかりの潮風は肌を刺すように冷たい。朝食まではまだ時間がある、けれどお腹が空いてきてしまった。昨日からずっとこの平和なクルージング任務の計画にかかりつきりだったから、天龍たちを送り出して気が抜けたのかもしれない。

今日の司令官の秘書艦は誰だったっけ？ —— なんだか頭が回らなくなってきた。カフェオレでも飲もう。

冷えたカフェオレを一缶一気飲みして、体が芯まで冷えてしまった代わりにほんの少しだけ頭とお腹がマシになった。さて、今日は何をしよう。一ノ傘副司令がここに来てから初めて取得した休暇だ。最近オーバーワーク気味だったし有意義に使いたい。

空き缶を捨ててぼんやりしながら歩いていると、つい執務室の前まで来てしまった。

「……あう」

今日は休みでしように、と自分に言い聞かせても手が勝手にドアノブを回そうとした。鍵が掛かっているのだから開かないに決まっている。

「はああ」とよく分からないため息が出た。

二度寝してやろうと自室に戻ると吹雪が目を覚ましていた。

「おはよう。叢雲ちゃん」

「吹雪；L v. 105」

「おはよう。早いよね」

「叢雲ちゃんのほうが早いよ。私は今日、竹櫛司令官の秘書艦の日だ

から」

「ああ……」

吹雪だったか。そうだ、こっちの艦隊の仕事と雰囲気に早く慣れてもらおうって言ったのは私だった（元々一人部屋だったここに吹雪を誘ったのも私だった）。【天照大艦隊】なんて大げさなネーミングをした私がこうもぼんやりしてしまうなんて、今日はずっと布団をかぶってしようかしらん。

「なんだか元氣ないね」

「そう見える？」

「うん。ええとね、本当はもつと竹櫛司令官の側にいたいのに——」

「ぶっ!? けほっ!」むせた。

「艦隊が統合してから忙しくてすれ違ってばかりな上に、電ちゃんっていう強烈なライバルまで登場して、あー今日も仕事があつたら竹櫛司令官に会う口実が作れるのになー、どうして休暇なんて取っちゃうかなー私、って考えてるうちに、うっかり執務室に足を向けちゃったみたいな顔してるよ」

「……ず、随分具体的な表情ね」

FXで有り金全部溶かしたわけでもあるまいし。

「そう顔に書いてあるけど、違うの？」

「違うに決まってるでしょ。バカ言ってるんじゃないわよ」

「うーくん、叢雲ちゃん本人がそう言うんだから気のせいだね。ごめん変なこと言っちゃって。顔洗ってくるね」

吹雪が部屋を出て鏡に詰め寄った。

「ふざけんじやないわよ、私」

見慣れた顔を睨みつけると、向こう側の叢雲も私を睨みつけてきた。負けじと眉間に力を入れると左右対称の私もやっぱり同じ顔をしていた。

本当はもつと竹櫛司令官の側にいたいのに、艦隊が統合してから忙しくてすれ違ってばかりな上に、電ちゃんっていう強烈なライバルまで登場して、あー今日も仕事があつたら竹櫛司令官に会う口実が作れるのになー、どうして休暇なんて取っちゃうかなー私、って考えてる

うちに、うつかり執務室に足を向けちゃったみたいなの顔をしていた。



「……お腹空いた」

結局二度寝もできずに、ただ布団の上で下着姿で転がっているだけで休日の午前を終えてしまった。なんて時間の無駄使い。じゃあ何かしないと、と考えてみるも、とりあえずお腹に物を入れないことは動けない。

「はああ」とまた今朝のようなため息が勝手に出た。

鏡で顔を確かめてみたら、普段通りの自分だった。何を当たり前のことを。さつきは吹雪に変なことを言われたせいであんな風に見えるてしまっただけ。思い込みだ、思い込み。

服を着て部屋を出て、食堂に向かうべく一階へと階段を降りていった。誰とすれ違ってもいつも通りだ。私が気にしすぎているだけらしいようで安堵した。これで落ち着いてたぬきうどんが食べられる。

「おいすクマ。今日は休みクマ?」

「球磨;Lv. 72 ↓ 78」

食券を持って並ぶ列の、私の後ろに球磨が続いた。一ノ傘副司令に気に入られてしまったおかげで、最近ガンガン練度が上がっていつている。任務から帰還する度に担架で運ばれて、さすがに司令官がストップをかけたけど。

「ええ。たまにはね」

「ん?」と眉を顰めた球磨は私の顔を覗きこんできた。

「ど、どうかした?」

「んん?」 叢雲、悩み事とかないクマ?」

やだ、なんか怖い。『対FXで有り金全部溶かす人電探』みたいなものでも開発されたんだろうか。

「本当はもっと竹櫛司令官の側にいたいのに、艦隊が統合してから忙しくてすれ違ってばかりな上に、電ちゃんっていう強烈なライバルまで登場して、あー今日も仕事があったら竹櫛司令官に会う口実が作れ

るのになー、どうして休暇なんて取っちゃうかなー私、って考えてるうちに、うっかり執務室に足を向けちゃって、そんな恥ずかしい真似するくらいなら部屋で二度寝でもしてたほうがいいやって思うけど、バカみたいにならず寝してる間に今日の秘書艦の吹雪はどンドン竹櫛司令官と仲を深めていつてるのよ、なにやってんだらう私、って顔に書いてあるクマ」

「これあげる。火急の用事を思い出した」

たぬきうどんの食券を球磨に押し付けて走って食堂を出た。

「ちよつ、こんなに食べきれんクマー!」



……空腹を我慢する限界が近づいてきた。こんなことなら煎餅でも何でも買っておくんだった。うん、明日買いだめしよう。明日は出撃があるから、その前にでも売店に寄って……、明日の秘書艦って誰だろう。

「はああああああああああああ……」

「ど、どうしたの叢雲ちゃん!」

いつの間にか吹雪が帰ってきていた。

「おかえり。あれ、今日はもう終わり?」

「うん。明日は私も出撃するから早く休んでおけつて。だからご飯食べて戻ってきたけど、叢雲ちゃんはもう食べたの?」

「食べてない。今日はなーんにも食べてない」

「ええっ!?! だめだよちゃんと食べるないと! まだ食堂開いてるよ」

「部屋から出たくない」

「初雪ちゃんみたいなこと言ってる……。もしかして具合悪いの?」

なんだか、本当はもっと竹櫛司令官の側にいたいのに、艦隊が統合してから忙しくてすれ違ってばかりな上に、電ちゃんっていう強烈なライバルまで登場して、あー今日も仕事があったら竹櫛司令官に会う口実が作れるのになー、どうして休暇なんて取っちゃうかなー私、って

考えてるうちに、うつかり執務室に足を向けちゃって、そんな恥ずかしい真似するくらいなら部屋で二度寝でもしてたほうがいいやつて思うけど、バカみたいに不貞寝してる間に今日の秘書艦の吹雪はどんな竹櫛司令官と仲を深めていつてるのよ、なにやってんだろう私、こんなんじや明日の出撃でみつともない姿見られて幻滅されて主力から外されて竹櫛司令官の秘書艦なんて二度とさせてもらえなくなるかもしれない、そうになったら私もうどうしたらいいか分からない、って顔してるよ」

「……そうですか。じゃあ売店でパン3つ買ってきてくれたら元気になるかも」

財布をそのまま吹雪に渡した。

「お医者さんに診てもらわなくて大丈夫なの？」

「からかってる？ 私の顔に、本当は（中略）分からない、って書いてあるって言ったのはあんたでしょうに」

「からかってなんかないよ。よくある悩みだもん。私だって、いろいろ、雷ちゃんとか……う、ううん何でもない。じゃあ買ってくるね」

吹雪は慌てて部屋を出て行った。そういえば吹雪はダメ人間製造機・雷の手中に堕ちていたんだった。最近は山城が陥落したって噂も聞くし……ルームメイトに誘ったのは失敗だったかな。ちよつと気をつけよう。でもこうして動けなくなった時（今は情けない理由でだけど）に手を貸してくれる人がいると安心できる。これで私は十数時間ぶり——いや昨日の晩からだから約二十時間ぶりに食事にありつける。

安堵したせいで、また口からため息が出た。けれどため息のくせに、それは言葉のようにも聞こえた。

「好き」

第13話 龍驤デイスティネーション

「出撃前に言っておくことがある。心して聞け」

先週から同じ海域に出撃しては戻り、また出撃しては戻りを繰り返してきた六人は皆、もううんざりだと言わんばかりに私をじろりと見つめている。彼女らが沖ノ鳥沖戦闘哨戒任務、Ope. No. 2―5に飽き飽きしているのは私にもよく分かるし、我が鎮守府としても安全を考慮してこの任務を重火力で押し通る方針を取ったため、資材不足に悩まされている。

しかしだ。それもこれも目的を達成できないのであれば意味がない。

「先週、諸君らを選抜した際に私が言ったことを覚えているか。北上―旗艦の北上は面倒臭そうに答えた。

「はあ。えーっと、帰ってくるまでが任務だ気を抜くな、でしたっけ」

「おやつは300円までかバカモノ。では古鷹ちゃん」

「『大鯨を連れて来い』……でしたよね」

「古鷹ちゃん；Lv. 88」

「その通り。さすがは古鷹ちゃんだ。本作戦の最優先目的は大鯨だ。勲章などどうでもいい。上層部の思惑など心底どうでもいい。我が天照大艦隊に潜水母艦を導入することが最優先だ。……だがしかし本日より目的を変更する。諸君らには引き続き沖ノ鳥沖戦闘哨戒任務に当たってもらうが――いいかよく聞け。絶対に龍驤を連れて来るな」

「ブフツッ！」と金剛が吹き出した。

「貴様、何がおかしいか！」

「ソーリー提督。でも、……ふふっ、まさかボスドロップが七連続で龍驤とは私たちもサプライズヨ」

金剛の言うとおり私も驚いた。事の発端は――今となってはオカルトだと馬鹿にできないが――作品投稿サイト『TINAMI』に『改二とたこ焼き器とメガネ』を投稿した事だった。

『改二とたこ焼き器とメガネ』は龍驤改二の話を耳にした私が、しかし

我が艦隊の龍驤は遠征要因であるため練度も高くなく、では改造は関係がない、そんな事よりたこ焼きが食べたい、といったことを記した手記だ。海の魔物から見ると龍驤を蔑ろにする内容であったと言われてもおかしくない。この件がどうやら悪い意味で艦これオカルト現象を呼んでしまったらしいのだ。

一般的には（一般的と言えるオカルトがあつてよいかは知らないが）勧誘したい艦種の絵を描いたりプラモデルを組み立てたりするとドロップすると聞く。私は意図せず龍驤の事を手記に記してしまい、ドロップ率をやたらと上昇させてしまったかもしれないのだ。

「こうなつては一旦、煩惱を禊がなければならぬ」

「煩惱にまみれてるのは提督だけネー」

「私に欲があつたのは確かだが、お前たちの運の悪さも一因だ。昨日、土砂降りの雨の中から七人目の龍驤を連れて来たお前たちの姿は全員、山城のように見えただぞ」

私の前に並んだ六人の顔が強張った。

「事の重大さをようやく理解できたようだな。どれほど優れた艦船であつてもここぞの瞬間を決定付けるのは運だ。今日の出撃でもし八人目の龍驤を連れて来てみる。年中宿命大殺界の山城と同レベルになるぞ。それでもいいか」

全員が勢い良く頭を振った。名前を出すだけでこの威力とはさすが山城である。

「では気分を一新して出撃だ。いいか、今度は絶対に龍驤を連れて来るなよ。絶対だぞー！」



「ねえ、もしかしてわざとやってない？」

叢雲に資材管理票を机に叩きつけられても、私は何も言い返せなかった。もはや自分でも、無意識的ではあるが意図的に龍驤を呼んでいるとしか思えなかったからだ。

「大鯨を迎えるための作戦だから運悪く何度出撃することになつても

仕方がないとは思うわよ。戦果に拘る一ノ傘副司令もそこだけは納得してるし。でも八人連続よ。八人も、連続で！ 狙ってやっているとしか思えないんだけど」

「い、いやそんなまさか！ そんなことができればなら大鯨を連続八人呼ぶことだつてできるはずだ」

「じゃあ早くそうして。金剛はもう出せないわよ、前の出撃で戦艦用の弾薬が底を付いたから」

「冗談だろ？」

資材管理票を取つて見ると、41cm以上の弾薬全種類が指で数える程しか残っていなかった。35・6cm用をずっと昔、もう必要ないだろうと処分してしまったことが悔やまれる。

「今までこんなことがあったか？ 資材の枯渇に気づかないなど！」

「一ノ傘副司令と共同で動いてるつてこと忘れてるでしょ。あつちは演習でバカスカ撃ちまくってるもの」

「気づいていたのなら教えてくれよ」

「それは……ごめん。私も龍驤がドロップし続けることにばかり目がいつちやつてて」

「叢雲が悪いわけではない。悪いのは——」そう言いかけた時。

「「「「「「 うらめしやでく 「「「「「」」」」」」」」

龍驤のいくつも重なったような声が執務室に響いた。どこからともなく声が湧いたように聞こえた。驚いた私は椅子ごとひっくり返ってしまった。慌てて周囲を見回したが龍驤の姿はない。窓と扉は開けっ放しにしているが、今の声はそんな所から発せられたようなものではなかった。まるで龍驤の幽霊のような……。

「な、なによ、今の。ねえこれ、あんたが仕掛けたの!？」

叢雲は屈んで机にしがみついていた。

「ち、違う！ 私じゃない！」

「じゃあ何よ、なんなのよ……で、出てきなさい龍驤！」

震える声で叢雲は叫んだ。しかし反応はなく、代わりに隣の部屋か

ら一ノ傘がやって来た。

「二人とも何しよん？ 叢雲ちゃんの声が聞こえたんやけど」

「おい一ノ傘、廊下に誰かいなかったか」

「いや、おらんけど。どしたん、そんなお化けでも見たような顔して転がって」

「見たのではない、聞いたのだ。そっちでは聞こえなかったのか」

「何を？」

「龍驤の声だ」

「龍驤なら四機動部隊組んで遠征に出とろうもん。居眠りしとって夢に龍驤が出たとかやないん？ 叢雲ちゃんまで」

「ち、違う！ 本当に龍驤の幽霊の声が聞こえたのだ！」

「はいはい、そら怖かったですなー。ほら竹櫛も叢雲ちゃんも、早く立ってくれん？ ちよつと資材のことで話があるんやけど」

演習で何人も戦艦を動かし弾薬を枯渇させた一ノ傘に詰め寄りたくても、私も叢雲も僅かな風や床が軋む音に過剰に反応してしまい、ろくに話ができなかった。



「十二人目。正式な報告は……明日でもいいかしら」

大破した叢雲はふらふらとドックへ向かった。私はどうして叢雲を危険に晒したのかと、情けない気持ちで一杯になった。

戦艦に続き重巡・航巡用の弾薬も乏しくなってきたため、駆逐艦を組み込まなければならなくなった。危険な海域であるため練度の高い叢雲と電を出撃させているが、やはり装甲の薄さはどうにもならない。

共に出撃していた飛鷹に声をかけられた。

「空母が傷ついたらまともに索敵できないからって、無理して庇ってくれるのよ、叢雲も電も。私は足遅いから末期の機動部隊みたいな雰囲気になっちゃって……ねえ、どうにかならない？」

「ああ。少し考える。今はゆっくり休んでくれ」

叢雲たちにごここまで苦勞させておいて今更大鯨を諦めてしまえばすべて水の泡となり、誰も報われなくなってしまう。しかし十二連続で龍驤が出るという異常事態の最中、また部隊を送り込んでも龍驤が増えるだけなのは目に見えている。

オカルトにはオカルトで挑むしかなかった。



「お邪魔します。なんやこの部屋も久しぶりやなあ。ウチ秘書艦とか初めてやけど、どないしたん。やっとウチの実力を分かってくれた？」

「龍驤；L v. 34」

「うむ。実は考えを少し改めようと思つてな」

「ほっほー？」

「燃費の良い空母として飛鷹をばかり頼っていたのだが、やはり空母は速力に優れていなければならぬ。練度の高い飛鷹には悪いが、足が遅いことは諦めるしかないと考えていた——今までは」

「ふむふむ」

「しかし実戦ではやはり問題が出てしまう。ジャブのように軽く素早く繰り出せる機動部隊が必要になってくるのだ。私はその重要性にようやく気づいた」

「なるほど」

「だが話は簡単ではない。我らが天照大艦隊は大きくなったが故に軍上層部から過酷な任務ばかり回されてくる。もはや試験的に出撃させたり、試行錯誤の中で練度を上げていくことは難しくなったのだ」

「確かに」

「そこでだ。どうにかならないものかと私は名簿を眺めていると——いるではないか、改二になれる軽空母が！」

「おおっ！」

「私としたことが迂闊だった。龍驤のような優れた空母を使いにはかり出すなど、今まで何と勿体無いことをしてきたことか。私は提督失

格だ」

「いやいや、そないなことあらへんよ。よう気づいてくれた。よう言うてくれた。その言葉をウチは待つとつたで」

「そうか、そう言うてくれると私は救われる！ ……たぶん本当に……。では早速だが、まずは秘書艦としての仕事を頼もうかと思う。書類仕事から艦隊を見渡すことも一流の条件だからな。それから今は演習にガンガン出て貰おう。道のりは長いが、なあに、改二になった後の事を考えればどうということはない。これから期待しているぞ」



龍驤が竹櫛の秘書艦を務めた翌日、第二執務室のソファには大鯨がぼつんと座っていた。ソファの周りには着替えや文庫本が置いてあり、先週からこの範囲は彼女の生活スペースになっていた。花を摘みに出る時のための変装用のカツラと綾波型の服まで用意していた。

「あのう……事情はまだよく分かってませんが、もういいんじゃないでしょうか」

「大鯨；L v. 1」

「まだまだ。これからが楽しいところやで。ウチが沖ノ鳥沖戦闘哨戒に出て、こう、スパツ！ と一発で大鯨を連れて帰るんまでが今度の話や。いやあ〜一ノ傘副提督に相談したんは正解やった」

この日の一ノ傘の秘書艦は龍驤だった。竹櫛は龍驤を演習に出したつもりだったが、その演習監督はしばらく一ノ傘が引き受けていた。演習の内容も竹櫛は知らされていなかった。

「さすがの腕前でんなあ。竹櫛提督の出した部隊に先回りして敵さんを電光石火で叩いて、ボスドロップに龍驤さんの用意や。完璧すぎてちよつち恐ろしいわ」

「もう隠しとつた資材もなくなりかけとるし共犯の長門たちも流石にバテバテやけどね。竹櫛があとちよつと鈍かったら危ないところやったわ。あの幽霊作戦が良かったんかね。でも『うらめしやで〜』は

やっぱないと思う」

「まあそれは……、兎も角、後で長門たちにもお礼言わんとなあ。ウチを表舞台に出してくれたんやから」

一ノ傘と龍驤、二人の会話を大鯨は呆れながら聞いていた。籠の中の鳥のような生活を送っているため艦隊のことを知っているわけではないが、ちよつと戦争を始めたレベルではない、かなりの規模の艦隊をこの二人は欺いているのだ。なんて自由な人たちなのだろう、と関心もした。

二週間をこの第二執務室で過ごした大鯨は、一ノ傘のことを悪い人間ではないと考えていた。恐らく共犯者であろう、秘書艦を務めた戦艦や重巡たちと仲が良さそうに見え、雷に至っては「司令官と二人だけの時間が欲しい」と言つて潮に変装した（俯いていればバレないとアドバイスしたのは雷だ）大鯨を三時間ほど追い出したこともあった。艦娘からの信頼は厚く、一方でたった一人の軽空母のために大型艦を秘密裏に動かして艦隊を欺く悪行を働く。

（クーデターとか、しちゃうのかな）

大鯨には一ノ傘がそのような人物に見えた。実際、大鯨の今の境遇は人質のようなものだった。

龍驤は気持ちよさそうに秘書艦机の上で伸びをした。

「これでウチもやつとスポットライト当ててもらえるつちゅうこつちや。お使いも飽き飽きしとつたし、これからは前線に立って活躍して、まあ危ないこともあるやろうけどそんな時や引き返——」

「本当に危ないけん回避行動は練習せんといかんよ」

一ノ傘の言葉で龍驤は固まった。

「ん?」

「艦載機あんま載せれんやろうけど、制空権取らんと爆撃されながら撤退とかせんといかんハメンなるし、頑張つてよ」

「い、いやいや副提督。それどこの海域の話やろ。なんかウチの練度じゃどうしようもないレベルの話しとりませんか」

「改二になるんやろ? そりゃ特訓せん」と

「いやいやいや死にますつて! 改二になる前に沈んでまいま

すってー！」

龍驤は席を立つて一ノ傘に抗議した。

「もつと安全に、演習とかありますやん。特訓言うたら普通まず演習でしょ」

「そら勿論。やからまず怪我せん演習やって、エンジン温まつてきたところで出撃。やろ？」

「いや、あの、ウチも頑張りますよ？　せやからもうちよつと控えめなトレーニングメニューをですね……」

「この艦隊の弾薬をほとんど龍驤ちゃん一人のために使つたんよ？」

一ノ傘はニヤリと笑った。大鯨はその表情を見て身震いした。

「私の元の艦隊やと、空はずーつと蒼龍飛龍に任せつきりやったんよ。今の天照大艦隊になって、竹櫛は空母に力入れとつたからもう全然心配せんでもいいんやけど、仲良くできる空母がもつとおつたらなーって常々思つとつたんよ。例えば、ほら——誰かにこつそり相談持ちかけられて動く時に共犯者になってくれる軽空母とか」

龍驤の顔がみるみる青ざめていった。木偶人形のように歩いて秘書机に戻りはしたが、机の上を呆然と見つめたまま震えている。

(うわあ、嵌められたんだ)

先輩空母の哀れな姿を見つつ、大鯨ははつと気がついた。自分も改造すると軽空母になってしまう。恐る恐る一ノ傘を見ると、大鯨を見つめて微笑んでいた。その微笑みに大鯨は先の悪さを感じはしなかったが、何を意味するのかまでは分からなかった。

第14話 叢雲の薬指 10

〔叢雲；Lv. 103 ↓ 104〕

人数がある日突然、およそ倍に増えてしまうという珍事を迎えて右往左往していたこの鎮守府も、ここ最近はようやく足が地につく、もとい帆に風を受ける舵取りができてきたように見えた。

しばらく一ノ傘副司令の側で働きつつこの場所での仕事のやり方をサポートしていたけれど、それも必要なくなりつつあった。元ブラック鎮守府の責任者は思いの外仕事が丁寧で、持ち込んだパソコンのキーボードを叩き、あちこちに電話をかけて、あつという間にこの鎮守府に存在を馴染ませてしまった。部屋は相変わらず片付けようとしなけれど。

寮や工廠などの設備の増築工事もあと僅か一部を残すだけとなり、みんなも（一ノ傘副司令にこき使われる艦娘を除いて）変化した環境を原因とする緊張から開放されつつあった。

夜になれば旧竹櫛艦隊と旧一ノ傘艦隊のメンバーが入り混じって飲み会を開いては喧嘩して、次の日はアルコールをさらに増やしてまた喧嘩していた。

「ビツギゆセブンの力をあらどるなあー！」

「わらしの扶桑姉さらを返せえー！」

殴り合う長門と山城を周りの阿呆たちは無意味に囃し立てている。夜になれば居酒屋鳳翔に様変わりする食堂は、一ノ傘副司令が来る前までは愚痴をこぼしたり悩みを打ち明けたりしながらしんみりお酒を飲む場所だった。私は食堂の隅から乱闘騒ぎを眺めながら、これはこれでいいかとコップに口をつけた。

「珍しいですね。叢雲さんの顔が赤いのです」

〔電；Lv. 100 ↓ 102〕

電は私の隣の椅子に腰掛けた。

「ただのウーロンハイよ。明日も仕事があるし」

「流石なのです」

「電のそれは？」

『電気ブラン』というらしいです」

小さなグラスに綺麗な琥珀色の液体が注がれていた。半分ほど減っているそれを私に勧めてきた。香りをかいで一口飲むと、火を放り込んだように口の中が焼けた。吐き出しそうになるのをこらえて飲み込むと喉に電気が走った。ビリビリする。悶絶しているところに電が水を差し出し、ひったくった私はすべて飲み干した。じわりと涙が出てきた。

「ぶはっ！ なによこれ、きつつう」

「でもお水を飲んだ後はどうです？ 甘いでしょ」

確かに口の中はまだヒリヒリしているけれど、それと一緒に甘さも残った。ただその甘さも風邪薬のシロップのような甘さで、美味しいとは思えない。

「電、まさかそれ好きで飲んでるの？」

「嫌いじゃないですよ」

「電気なだけに？」

「鳳翔さんに教えてもらったのですが——」

なんて酒を出すんだ鳳翔め。

「まだ電気が当たり前じゃなかった時代、東京の銀座に日本で初めての電灯が輝いた年に浅草で生まれたカクテルなのだそうです。日清戦争より10年くらい前、日露戦争より20年くらい前ですね。今も雷門通りの東端にお店があります。スカイツリーやあの……えっと、形がアレな金色オブジェがよく見える場所ですね。その頃は海の外から西洋の珍しいものがたくさんやって来て、ハイカラな品を『電気ナントカ』って呼んだそうです。それにあやかっこのお酒も目新しく『電気ブラン』と名付けられたと。まあ珍しいものでごった返していた時代ですから、何でもかんでもそうだったわけではないみたいですけど、電気は珍しさの象徴のようなものだったのです」

電はちびつとだけ電気ブランを口に含んだ。電気のような刺激と独特な甘みを楽しんでいるようだった。赤銅色の目は穏やかに、遠い昔の、急速に移ろう文明を見つめていた。小娘のくせに。

私はウーロンハイで口直しをして、また黙って戦艦たちのバカ騒ぎ

を眺めた。山城を殴り倒した、怒り狂っているらしい霧島は今度は長門に詰め寄った。霧島は頭にカニ玉の皿を、ベツトリと帽子のように被っていた。酔いのせいか恐怖のせいか震える手で霧島をなだめようとすする長門の前に陸奥が割って入っ——ああ犠牲者が無駄に増えただけだった。金剛姉妹の末っ子を三人の姉たちは無責任に煽っていた。

他の席では、空母たちだけは艦隊が統合する前とほとんど変わらなかった。旧一ノ傘艦隊にいた蒼龍と飛龍は一航戦と五航戦の間で泣きそうになっていた。加賀と翔鶴は箸を振り回して唐揚げを奪い合い、隙あらば相手の目を潰さんと火花を散らしていた（あんまりにも箸を折るので、正規空母の箸はみな金属製にしてある。だから文字通り火花が飛ぶ）。肴をめぐる正規空母の争いを肴にして軽空母の面々はひたすら飲んでいた。その中には早くも軽空母に改造された大鯨改め龍鳳もいて、龍驤と身を寄せ合って何やら泣いていた。そういうえば二人ともこここのところずっと一ノ傘副司令の命令で任務に駆り出されている。

「新しい飲み物、持ってきましたようか？」

電に声をかけられ、いつの間にかコップが空いていたことに気づいた。

「ああ、ごめん。お願い」

電は空になったコップを持って鳳翔のところへ向かった。料理で忙しい鳳翔が動き回る前のカウンターには球磨型の五人が座っていた。球磨は真ん中に座り、左隣では北上と大井がところ構わずイチヤつき、右隣では多摩が、最近改二になったばかりの木曾に何かを言うてからかっていた。球磨は一人、なんだか私自身の背中を見ているかのように静かに飲んでいた。なんとなく、私と球磨、電、それと司令官の四人だけで艦隊をやっていた頃が懐かしくなった。

「お待たせしました」電に差し出されたコップを受け取った。電も今度は私と同じウーロンハイにしていた。

「ありがとう。ねえ電って一人で飲みに来るタイプやったっけ？」

「副司令官の訛りがうつつってますよ。長くあの人の秘書艦やってると

そうなります」

「……お一人で飲みになられるのでしょうか」

「来る時は雷と響、あと起きていれば暁と一緒にですね」

「じゃあ今日は？」

「一人じゃダメです？」

「いや、そういうつもりで言ったわけじゃないけど」

「冗談です。今日は宣戦布告に来たのです」

「ふうん」

長門を沈めた霧島に向かって、顔を真っ赤に染めてはしゃぐ榛名は「いいぞーもつとやれー！」と囃し立てた。慌てて榛名の口を押さえ金剛と比叡だったが、もう遅かった。もつとやろうにも辺りには金剛姉妹の他にいなかった。榛名を抱えて金剛と比叡が逃げ、霧島はそれを追いかけていった。戦艦たちが飲んでいたテーブル周辺の床にはひっくり返った料理や醤油差し、椅子、山城、陸奥、長門などが散乱していた。節度を知らない大学生の宴会が終わった後のようだった。

「で、何だつて？」

「ですから叢雲さんに宣戦布告に来たんです」

「……恨みを買うようなことしたっけ？」

「ええ。叢雲さんはずつと竹櫛司令官と一緒にいましたから」

そろりと電のほうを伺うと、私をまっすぐ見て笑っていた。「知ってるんですよ」と心の声が聞こえてきそうだった。私はウーロンハイを一気に飲み干して立ち上がった。「じゃあ私は今日はこれくらいで」

「まあまあまあ」

電に服の裾を引っ張られ、椅子に倒れこむように座らされた。ああ、お酒に強いわけでもないのに飲むんじやなかった。一気飲みと今のお尻への衝撃で酔いがさらに回った。

「まだ寝るには早いですよ」と言いながら電は自分のウーロンハイを半分、私のコップに分けた。

「お話ししましょうよ。ねえ叢雲さん。私たちは古い付き合いです」

から、隠し事なんてしなくてもいいじゃありませんか。私たち艦娘は、いつ灼熱の炎に焼かれて寒冷な水の底に沈むか分からない身です。こうしてお酒を飲めるうちに話しておいたほうがいいと思いませんか」

「電あんた飲み過ぎよ。さっきの電気ナントカってお酒、そうとう強いヤツだったじゃない」

「叢雲さんの口から聞きたいんです。あなたの気持ちを」

「き、気持ちだったって……そんなもの別に」

「では諦めてくれますか」

「んなこと言っていないじゃない！」他人ごとのように私は馬鹿だなあと呆れた。大概酔っていた。

「べつに人に話すようなことじゃないってだけよ」

「言葉にしないってことは、つまりお話にならないってことです」

「言葉にするとかしないとか、そんなこと関係ないわよ」

「口で直接伝えないで、それならどうするんです」

「どうって……どうにか、する」

「そのスタイルでも構いませんけど、じゃあ私が頂いていくのを叢雲さんは黙っていてくれるんですね」

「ダメ。そんなの許さないから」

「いえいえ許されなくても黙っていてももらえれば」

私の拳がテーブルを叩いた。

「私のほうがずっと長く側にいたんだから！ 誰よりも長く！」

「出会ったのは私が先です。この艦隊だって私がいたから出来たんです」

「でも強くしたのは私！ アイツと一緒に大きくしたんだから！」

「関係ないです。これから一緒にいるのは私です！」

「ふざっけんじやないわよ！」ああ言うな私のバカ。

「竹櫛は誰にも渡さないんだから！」

電は私の失言が何よりも楽しいと言わんばかりに顔をニンマリとさせた。私は今更になつて、一ノ傘副司令の艦隊のこちらへの転属を拒否しておけばよかったと後悔した。

「後悔は先に立ってはくれませんかからね」

「人の心を読まないで」

電は意地悪そうに言った。「私が一ノ傘『司令官』から離れなければ、って思いますか?」

「あんたは古い友人よ。何したって構やしないわよ」

「竹櫛司令官を貰っても?」

「絶対ダメ。それだけは許さない」

電はまたニンマリした。私は熱くなった喉に冷たいウーロンハイを流し込んだ。

「今日はこれで満足?」

「大満足です。昔の叢雲さんならダンマリしてたと思いますけど——
変わりましたね」

「……あんたは変わり過ぎて別人レベルよ」

「長くて、いろいろありましたしね」

「そうね。本当にいろいろあった」

やけっぱちの熱が冷めて、少し二人でしんみりした。昔の事が色々
と頭に浮かんでは消えていった。

「この鎮守府ができてから、本当に大変でした」

「うん。電は本当に大変だったと思う。それと球磨も——」

向こうに座っていた球磨を見ると、手を添えた耳をこちらに向けて
いた。居酒屋鳳翔のカウンターに並んでいた球磨型姉妹が五人とも
同じ格好をしていた。

気が付くと食堂内は、時計の秒針の音が聞こえるほど静かになって
いた。争っていた正規空母も騒いでいた軽空母もその他飲んでいた
連中が全員黙って、こちらを窺っていた。私がコップを握り潰すと、
全員の肩が一斉に跳ねた。

「あ、あんたら、盗み聞きしてたわね……!」

立ち上がって睨みつけると、一人、球磨だけがガサゴソと動いた。
セーラー服の下から小さなテレビのリモコンのようなものを取り出
して、ボタンを押した。

「竹櫛は誰にも渡さないんだから!」

ノイズ混じりの私の声が食堂内に小さく響き、私は球磨を殺さんと
駆け出した。

第15話 叢雲の薬指 11

お前は二番手にしておくには惜しい人材だ。

なあ一ノ傘。

どうだ、私に代わり天照大艦隊を統べる気はないか。

コツコツと板張りの廊下をリズムよく踏み鳴らして横を歩く一ノ傘は、

「や」

と私のほうを見もせず、せっかく捏造してやった arī もしない美德まで並べたというのに、無遠慮にひらがな一文字で却下した。顔色一つ変えない。

味も素っ気もありようがないひらがな一文字は、もしかしたら口からゲップのように出たのかもしれないと考えた私は、出鼻をくじかれはしたが話を続ける。

「ずっと考えていたのだが、やはりお前は艦隊を先頭で指揮してこそ輝ける人間だ。誰かの補佐に回るなど性に合わないとお前自身も思っているはずだ。そうだろうか？」

「全っ然、粉微塵も思ったらん」

「ブラック鎮守府と言われていたことを気にしているのか？ あれは艦娘を砲弾や魚雷のように使い捨てる連中を指す言葉だ。お前は違う。ここのところ龍驤と龍鳳が干し柿のような顔をしてはいるが、力を付けた二人は後々になってお前に感謝するだろう。戯言なんぞに耳を貸すな」

私の言うことに耳を貸さなくなってしまうた一ノ傘は返事も反応すらもすることなく第二執務室に戻っていった。その背中を少し睨んで私も第一執務室に一步入った直後、机の上の電話が鳴った。相手は一ノ傘の声で喋った。

《今日のそっちの秘書艦って叢雲ちゃんよねえ》

通信回線の向こう、また壁一枚挟んだ向こうで一ノ傘が勝ち誇ったようにニヤついているのが容易に想像できた。受話器を耳に当てた私を、一ノ傘の言う通り秘書机に座った叢雲が見ている。

「だったらどうした」

《あら、ひとがせつかく気い遣ってやったんに冷たいねえ。さっきの話、ワタシがあんたの部屋の前であることあること喋って叢雲ちゃんに聞かれてもよかったん?》

「あることあること? なんだそれは」

《あんた最近、やたらワタシに立場押し付けようとしてくるやん。こんな時代に鎮守府から出て他の仕事探すんかな、なんでかなーって考えとつたんよ。それでちよこちよこ艦娘たちに聞いとつたらね、偶然あんたがこんな話しとるのを聞いたらしいんよ——叢雲ちゃんと寿退役したいって》

私の脳内に瞬時に暗雲が立ち込め、記憶の稲妻が閃いた。あれは雨続きの最後の日であり、また丸一日記憶を失った日の前日のことだった。秘書艦だった時雨と休憩中に話をしていた私は「二人揃って寿退役」と軽口をたたくようで心からの願望を口にした。もう数ヶ月も前の事だが確かに言った。

(※詳しくは……いえ別に詳しくはないですけど) 叢雲の薬指 3
「を参照してくださいね!」

時雨が他言するとは思えない、いったい誰が盗み聞きしていた!

《竹櫛のヘタレぶりはよー知つとるけん、まだ叢雲ちゃんには何もアプローチしとらんのやろ。どーしてもワタシに仕事押し付けたいんやったら、今からそっち言つてナマでお喋りしてもいいんよ?》

「……要求は何だ。さっさと答え」

叢雲がギョツとしてこちらを見た。確かに通話で「要求は何だ」と言わなければならぬ相手といえは誘拐犯や爆弾魔のような輩を想像するだろう。手信号で(気にするな)と送ると、叢雲もため息をついた後で手信号で(早く仕事に戻れ)と返してきた。

《ワタシねえ、今の立場がけっこう気に入るんよ。前と違っていざとなったら竹櫛を盾にできるし》

「おい貴様」

《艦隊も、まあワタシの責任の重さは竹櫛と重複して増えたと思つてるけど、艦隊そのものがメチャクチャ強くなって事故が起こる確率は

激減するはずやし、よかつたとは思つとるよ。でも事故る確率をゼロにはできんやん？ 例えば竹櫛が鎮守府から出ていった後で——」

「胸糞悪い例え話すら出る余地を無くすのが我が艦隊のルールだ。私がいなくなつたとしても全員が必ず遵奉するよう教育している」

《あんたのやり方にケチつけたいわけやないって。ワタシとあんたで珍しく共通しとるとこやろ？ そこにワタシのやり方を加えてほしって話よ。今のままじゃう、海に出た子たちが心配で心配でたまらん》

「不安を煽るのは保険屋のやり方だな。私は脅されているのか？」

《あーごめん、ちよつと真面目な話なる。ちよつと屋上でも行こ》

司令官が副司令官に呼び出されてたまるか。「お前がこつちに来い」

《あんたが動かしとつた艦娘に聞かせていいか悩んどるんよ。叢雲ちゃんは艦隊全体の旗艦みたいなもんやから特に。余計な足枷になつたら嫌やし》

叢雲の名前を出されてしまつては動く他にない。一ノ傘が保険の営業であれば私はなんとチョロい客であろうか。まあ今の時代、この職と保険屋の間には危険という隔たりが高く広くそびえ立っているため無縁であるが。

席を立とうとしたところで、今更ながら電話の向こう壁の向こう、一ノ傘の隣にも秘書艦がいることに思い当たつた。今までの一ノ傘の余計な発言はすべて聞かれているではないか！

「おい、そつちの秘書艦は誰だ」

《電やけど》

私と時雨との会話を出したのは当て付けだったのだろうか。一ノ傘と電が仲直りをした後、二人の関係がどのように変化したのかは私の与り知るところではなく、一ノ傘の百合的恋慕の行方も定かではない。個人的には一ノ傘と電が相思相愛になることを強く望んでいるのだが、電の私をターゲットとする緩急を付けた絶妙なアピールが終息の気配を見せないあたり、物事は望んだようには運ばないものだと嘆く他にない。

半ば思考を放棄し、電話を切って腰を上げた。

「すまん叢雲。また少し席を外す」

「はいはい、いつてらっしゃい」

叢雲は実にそっけなく、ひらひらと手を振って私を執務室から追い出そうとするかのようだった。



扉が閉まるのを見て、私は椅子の背もたれに体を預けて、天井あたりを漂っていると思われる淀んだ空気を眺めた。

一ノ傘副司令を妬んでも心が荒んでゆくばかりなのは分かっているけれど、一人留守を任された執務室では司令官を連れ出した一ノ傘副司令に心の中で「あほー……」と八つ当たることくらいしかやることはなかった。浅ましい罵倒はすぐに私自身に跳ね返ってきた。

司令官はずっと前から司令稼業を辞めてしまうことを仄めかしている。私を残し……もとい、私たちを残して、鎮守府から出て行きたいと。

関係者が戦争から手を引きたがるのは珍しいことじゃない。情報が規制されていても人から人へ、噂は風に乗って届いてくる。時には艦隊を去った事実より、その理由ばかりが強調される。

電は——ああ思い出したらまた腹が立ってきた——こう言っていた。

「私たち艦娘は、いつ灼熱の炎に焼かれて寒冷な水の底に沈むかわからない身です」

この言葉を『轟沈』のたった一言で片付けるべきか？ 深く考えってしまう司令や恐れ怯えてしまった艦娘は恥も外聞もなく逃げるべきだと私は考える。人から人へ語られる噂、写真や映像に残される資料、それらは氷山の一角どころか砂漠の砂の一粒に過ぎない。目を瞑り耳を塞いでも逃れられない現実に背を向けるのであれば……そんな人たちの恐怖を水平線の彼方へ追い散らすのが私たちの役目だ。

灼熱の炎に焼かれ、寒冷な水の底に沈むことを覚悟して。

「艦娘がどうやって轟沈するか知つとる？」

風になびく長い髪をかき分け、すっかり錆びてしまっている柵に寄りかかった一ノ傘は、そっぽを向いて缶コーヒーを開けた私に続けて問う。

「じゃあ昨日も届いた『慢心、ダメ、ゼツタイ!』のポスターは？」

「もう何枚届いたろうなあ、あれ」

捨ててはいないから執務室のどこかにまだ残っているだろう。目に付く場所に必ず貼れとの命令も一緒に付いてきたことを思い出したが、私の興味は建屋屋上からの景色に再び移った。階下の執務室から高さはあまり変わらないはずの景色は新鮮なものだった。青く晴れた空を遮るものはなく、気温を上げる忌々しい陽光がコーヒーの味を引き立てるのに役立つた。

「あのポスター、艦娘が手え伸ばしながら海の底に沈んでいつとつたろ」

「ああ」

「絵にケチつけるのも阿呆らしいけどさ、あれ、おかしいと思わん？」

「よく見ているわけではないからな、覚えていない」

「五体がちゃんと残つとるのに沈むのってどんな状況やろね」

私は深く考えず答えた。「魚雷の炸裂で脳震盪でも起こしたんじゃないか」

「艦娘の装備は、当たり前やけど浮かぶように作られとるやん？ それに一人が気絶しても普通は他に誰かがおるもんやろ」

「何の話がしたいのだ貴様は。また私を脅しているのか？」

「つまり」一ノ傘は腰から拳銃（お気に入りのエアガンだ）を抜いて、銃口を自分のこめかみに当てた。「艦娘が沈むには相応のダメージを食らわんといかんのよ。普通の人間は小さい銃弾で、艦娘は装甲を貫く砲弾で、つつー違いはあるけどね。……恥ずかしながらそれを艦娘に見せてしまつて、報告させてしまつたことがあるんよ」

バスン！ と一ノ傘の銃が作動した。空撃ちであつても今の話の流れで自決の真似事など悪趣味極まりない。一ノ傘は銃を腰のホルスターにしまった。

「いきなり応援の要請が入ってね、でも主力部隊は遠い海域に出しとつたし、高速艦の急造部隊を向かわせたんよ。でも他の艦隊に応援要請しとる時点で……分かるやろ？ ワタシの部隊が到着した時には深海棲艦もおらんで、壊れた装備がいくつか浮かんどただけやった。火を避けながら残骸が散らばった中を探して、結局見つけられたのは一人だけ。飛行甲板にしがみついたとつた」

「そいつは助かったのか」

「高雄がね……」話を続けようとした一ノ傘の表情が崩れた。俯いて「ごめん」と呟いた。

途端に一ノ傘が小さく見え、私は何故だかそれが気に食わなかった。阿呆だらけのこの鎮守府で、一ノ傘にまで調子を狂わされてはたまらない。私は飲みかけのコーヒーを握らせて、いつもと変わらない穏やかな海を眺めた。

「その子、抱き上げたらね……胸から下が、無かつたって……」
「そうか」

へたり込んだ一ノ傘の隣に私も座った。このような日もあるのだろう。



「——という話をしてると思いますよ、屋上の二人は。一ノ傘『元』司令官の鎮守府がブラックになったのはそれ以来です」

二人の司令官がいなくなったのをいいことに、仕事をサボってこちらの執務室に遊びに来た電は『慢心、ダメ、ゼツタイ！』ポスターで折り紙を楽しみながら語った。

「いやあ、あの時はさすがにみんな、参ってしまったのです」と嘯く電。ポスターが気に食わないのか私が気に食わないのか、どちらにせよ電の腹立ち紛れの話のせいで今日の夕食は不要になりそうだった。

高雄とはまだ任務関係で軽く話したことしかない。でも会話に気を遣う必要がありそうには思えなかった。

「こんな簡単に話しているの？ デリケートに扱う事件じゃないの？」

「ここぞの時のために叢雲さんは知っておくべきと思ひまして」

「……なに、ここぞの時って」

「この話をダシにして副司令官が偉い人から色々ふんだくる時です」

ドン引きがさらに極まった。

「気をつけてくださいよ。うっかり『アンタ艦娘を死ぬほど働かせてるでしょうが！』ってツツコミ入れてしまったら一ノ傘副司令の名演技が台無しになりますから」

泣き崩れる一ノ傘副司令がスケベ心丸出しの男たちを手のひらで転がして、心の中で笑っている姿が容易に想像できた。今までいったい何人の阿呆がその毒牙にかかったことやら。

呆れて言葉も出ない私の顔を見て、電は慌てて付け加えた。

「あ、いえ、その時は本当に艦隊のみんながショックを受けたんですよ。高雄は立ち直るまで長いこと病院に通ってましたし、一ノ傘司令官も『資料映画の世界が現実になった』って考え込んでしまいました。他のみんなも海が怖いって言い始めたんです。だからわたしと雷、蒼龍、飛龍、長門、陸奥の六人で手当たり次第に深海棲艦を駆逐して回りました。わたしたちなら絶対に大丈夫だって言いながら。振り返ってみると本末転倒ですけど、そのうちわたしたち六人に他のみんなも続くようになったんです。一ノ傘司令官の盛り返しは一番最後でした」

「ん？ ブラック鎮守府になったきっかけ、の話よね？」

「です」電は首肯した。

「いちばん最初の頃はわたしが応援に行かないと壊滅待ったなしかつたくらい、一ノ傘司令官には司令官としての素質が欠けてた、のはご存知ですよ。資材を枯渇させたりわたしたちに論者積み装備させたり。暫くはわたしたち艦娘の個々の能力だけが頼りでした。ですがさっきお話しした事件があつて、わたしたちが我武者羅に敵を倒して

いくのを見て、一ノ傘司令官のスイッチが入ってしまったんです。それからは……まあ良くも悪くも、一ノ傘司令官はわたしたちを追い越していきました」

電は丁寧に折られたまれたポスターに口を付けて息を吹き込んだ。ふつくと大きく立派に、しかし素材が『慢心、ダメ、ゼツタイ！』ポスターなだけに縁起がいいとは言えない鶴が誕生した。

「つまり以前までの鎮守府がブラックになったきっかけは一ノ傘司令官にはなくて、勝手に無茶な出撃を繰り返したわたしたち艦娘——というか最初に立ち上がったわたし含む六人にあるんです。一ノ傘司令官のことを最初からブラック鎮守府の女王だったみたいに見える人は多いんですが、就任からいきなりブラック稼働なんてしてたら三日経たずに焦土にされちゃいます。艦隊に歴史あり、なんて考えもしない人たちは良いカモだとか言い始めたのもその頃からです。まさか一ノ傘司令官に『ブラックな鎮守府を指揮する』才能があったとは想像もしていませんでしたが……わたしたちが苦労していたのは自業自得、だったのです」



流れてゆく雲の形で一人ロールシャツハテストを行いながら、そういえばあのテストに用いる絵は左右対称だったと思い出し、テストを切り上げて視線を下ろした。

打ちっぱなしコンクリートの上に蹲って、伏せていた顔をのろのろ上げた一ノ傘はコーヒを一気に飲み干して「今のままで安全やと思う？」と肯定を許さない問いかけをした。

「海に絶対の安全などあるものか」と返すと、気に食わなかったのか空き缶で私のふくらはぎを突っついてきた。何かにつけて発揮される一ノ傘の攻撃癖が今だけは可愛らしい（まだまだ未熟に見える的な意味であって、一ノ傘が叢雲のように可愛いということは断じてない）。「あなたの艦隊の過去の報告書、全部目え通したんやけど、普通やつたら誰か最低一人は轟沈しとるはずの任務が二件あった。ひとつが撃

滅任務で、もう一つが物資のお使い。お使いはへたしたら全滅しotta

「馬鹿を言うな。私はお前と違って敵を選ぶ。危険だと判断される海域には絶対に近寄せない」

「あんたがミスったわけやないよ。ただ運悪く想定外の敵に出くわして、運良く部隊メンバーが想定外に対して強かっただけみたいやし。まあ、そんなひねくれ者たちやから、あんたにちゃんと伝わらんかったんやろうね。ワタシみたいな第三者やないと読んでも気づかんやろ、あの報告書やと」

ひねくれ者、という言葉で真つ先に一人の間抜け面が思い浮かぶ。「球磨か」

「そう、一人は球磨ちゃん。たぶん数えたくもない数の敵機動部隊に囲まれとつたんやろうね。普通なら誰かが囮か盾になつてもも突破するしかない状況なのに、どうやったかは分からんけど無傷でやり過ごして帰ってきとる。球磨ちゃんの報告書にもちゃんと書かれとつたよ。目立たんように、やけどね」

「……だからあの阿呆は気に入らんのだ」

「もう一件は長月ちゃん」

意外な名前が挙がった。

「夜間の輸送任務で旗艦は天龍やつたけど、報告書には長月ちゃんに刀盗られた単独行動されて探すのに時間食った、って文句ばっか書いてあった。でもおかしいやろ？ ただの輸送任務で部隊の足並み乱す意味無いもん。それで他の子に話聞いたらね、レ級らしき奴が単騎でうろついとつたんやつて。そいつに長月ちゃんはたつた一人で天龍の刀担いで、こっそり戦いを挑んだんよ。しかも部隊に合流した時は天龍の刀を無くしたのと弾薬を全弾消費して、燃料もかなり使つとつたけど、報告書になんも書かれとらんってことは天龍の目から見て長月ちゃんに異常はなかった。帰投後もドッグ入りしとらん。無傷で帰ってきとる」

「さすがにお前の勘違いだろう。長月本人には聞いたのか？」

「覚えていない、の一点張り。でも時雨ちゃんが確かにレ級にロツク

オンされたって言つとるんよ。その標的を引き受けて長月ちゃんが向かっていったって。……信じられんのはワタシも一緒よ。だってロクな装備もない子が一人でレ級の相手して無傷で生きとるんやもん。雷巡・重巡・戦艦どころの話やない、ベヨネッタくらいの別次元的な強さやないと」

小柄な長月がキャンディーを舐めながらレ級を必要以上に挑発する姿を想像した。「ギャグだな」

「ワタシもバカ正直に信じとるわけやないけど、天龍たちが何らかのギャグに命を救われとるのは間違いない。竹櫛はこのままでいいと思う？ 送り出す部隊に万が一があっても、球磨ちゃん長月ちゃんみたいに才能ある誰かが何とかするとは限らんよ。ワタシだって……もう迂闊に応援部隊組んで出撃させたくない」

「誰だって不愉快な思い出などいらん。……それで、考えがあつて私を屋上に連れ出したのだろうな？」

我が意を得たりとばかりに一ノ傘は立ち上がり、私に向けて人差し指を突き立てた。表情は空模様と同じく晴れ晴れとしている。まるでさっきまでメソメソしていたのが演技であつたかのように。

「勿論、考えはあるんやけど、まず前提として竹櫛には叢雲ちゃんとの寿退役を諦めてもらわんとねえ」

「はあ?」

なにをいきなり、と詰め寄る前に一ノ傘は柵から身を乗り出し、下に向かって叫んだ。

「叢雲ちゃん!」



窓の外から名前を呼ばれ、顔を出して屋上を見ると、屋上の縁から一ノ傘副司令の顔がひよっこり出ていた。3メートルくらいの距離だから普通に会話もできるけど……。

「……何してるんですか?」

「竹櫛がねー。『一人で』艦隊やめたいってダダこねとるんよー」

「貴様なにを！——違うぞ叢雲、誤解だ」と司令官が一ノ傘副司令の横に並んだ。

「どうしたんです？」と電まで私の隣から顔を出して、重力に逆らいながらの雑談に興じる四人。なんとというか、平和だった。

そのまま一ノ傘副司令が艦隊の方針を変える話を始めそうになり、慌てて私は話を遮って、屋上にいる二人に降りてくるようお願いした。青空はホワイトボードにはならない。

「自由な人よね、一ノ傘副司令って」

「フリーダムさで言えば叢雲さんたちも負けてませんよ」

……その通りではあるのだけれど、電には言われたくないし、何より私が阿呆たちの筆頭のように言われるのは甚だ不服だった。

第16話 叢雲の薬指 — 空母炎弓宴

戦艦の寮から少し離れた空母寮、その裏手はコンクリートが敷かれた箇所まで侵食するほど雑草が好き放題に勢力を拡大している。誰にも興味を持たれない場所であることの証だった。そんな場所で、建屋の壁に寄りかかった金剛は虫たちの合唱に突き上げられるように顔を上げて、彼女の目は自然と北極星を探していた。

もし夜の海で道具が破損したとしても、星だけは絶対に私たちを裏切らず導いてくれるから、恐れず出撃しなさい。そう言つて榛名の肩を叩いた日に限つて天候が急変し、上を向いて目を開けることもできないほどの豪雨に見舞われ恥をかいたことをふと思ひ出し、金剛は「Fuck」とつぶやいて缶コーヒーを飲んだ。

彼女は妹たちにコーヒーを飲んでいるところを見られたくなかった。だから戦艦寮から離れている。

「あんなコールタールみたいなカラーの泥水なんて誰が飲むネー」と言つてしまった手前、ブラック無糖を今のように口の中で揺らせて夜な夜な気取っているなどと知られたらどのような目で見られることか。

紅茶（アールグレイ）も美味いが珈琲（サントリー・ボス）もまた美味い。未成年者が隠れて煙草を吸うかのように、週に二・三度、彼女は姉妹たちが寝静まったところを抜け出して空母寮の荒れた裏手を訪ねていた。

北極星を中心として空が、彼女が観測できないほどゆっくりと、しかし確実に回っている。これでもかと散りばめられた宝石群から星座を探すのは難しい。そもそも彼女は星に詳しいわけでもない。ならばと彼女は、よく目立つはずの夏の大三角を探すことにした。

「アレガ……デネブ……アルタイル……ベガ……う〜ワカラン」

すぐに飽きてしまい、適当に明るい星を三つ選んで『金剛大三角』と名づけた。缶に口をつけて再び空を見上げると、ほんの数秒で、どれが金剛大三角を構成する星だったか分からなくなっていた。こうして隠れてコーヒーを飲む時はいつも頭のネジが自然と緩み、それもま

た彼女は好んでいた。

缶が空になり、戦艦寮に戻ろうと空母寮の角を曲がろうとした時だった。まさか人が出てくるとは彼女は考えもしなかった。

「きやつー」「ワオツ!？」

正面から派手にぶつかり、二人とも尻餅をついてしまった。金剛の足元に小さなものが転がってきた。電灯はないが星明かりでよく見えた。プリンだった。

「いたた……ごめんさい。まさか人がいるとは思わなくて」

赤城は金剛を助け起こすより先に、素早くプリンを拾い上げた。



この戦争の敵は何か。

深海棲艦だと答える提督はおよそ半数。もう半分は書類、羅針盤、運、資材、上層部、妖怪猫吊るし、その他鎮守府諸事情といった具合になる。後の半分こそすべて正しい。書類、羅針盤、運、資材、上層部、妖怪猫吊るし、その他鎮守府諸事情と酷烈に刃を交え、余力を持つて深海棲艦と戦うのがこの戦争の正しいあり方だ。この仕組み、真の脅威を理解して初めて艦隊は独立した戦力として及第点を与えられるものになる。

では私、叢雲が所属する天照大艦隊の最大の脅威は何か。それは醜悪きわまりない人間関係である。

【1】

つい数分前に出撃した第一部隊に続き、準備を終えた第二部隊が私の前に並んだ。皆ジメジメした空気への不快感から、セーラー服の裾をはしたなくパタパタさせたり扇子を持っていたり、飛龍は改二改造で支給された鉢巻を早くも外してしまい、撫で付けられた髪をワシヤワシヤとかき上げた。今頃は海面上を滑り、向かい風を全身で浴びているであろう第一部隊の面々も、さつきまで似たような有り様だっ

た。

私もこの蒸し焼きにされそうな暑さには参ってしまいそうだった。昨日までは連日雨続きでウンザリしていたのに、やっと晴れたと思ったらコレである。これから出撃するみんなには悪いけれど、早く執務室に戻って冷房の爽やかな風を満喫したい。

出撃前から暁が音を上げてしまった。

「あーっーいー！ レディーをこんなにつらい任務に出すなんて司令官は何も分かってないわ」

「暁；L v. 24」

反射的に返したのは元一ノ傘艦隊の不知火だった。「それなら帰れば？」

「不知火；L v. 55」

涼しい顔をしているがこの暑さは心頭滅却でどうにかなるものではない。暁の軽はずみな発言が余計に気に障ったんだろう。

「この任務は私と陽炎がいれば十分よ。任務中に熱中症にでもなられたら面倒だから、余計な荷物は置いていききたいのだけど」

「なによ！ ちょっと練度が高いからって！」

「あら。不知火に何か落ち度でも？」

睨み合う暁と不知火の間に響と陽炎が割って入って二人を遠ざけた。もう何度目だろう、このような衝突は。私のため息もすっかり枯渇してしまった。

ちよいちよい、と蒼龍が手を振り、こっそり手信号を送ってきた。

（なんとかしてよ。今からメンバー変えられないの？ 叢雲は出れないの？）

「蒼龍；L v. 119」

旧一ノ傘艦隊の制空を飛龍と共に二人だけで担ってきた歴戦の空母に、期待に応えられない返事をするのは心苦しかった。

（ごめん。冷たいラムネ用意しとくから頑張って）

〔2〕

「あら叢雲。執務室に戻るところ？ 瑞鶴を見なかった？」

「加賀；L.V. 97」

弓と矢を持ち、薄汚れた壁や板張りの床にガンを飛ばしながら廊下を徘徊していた加賀はぼそりと言った。「ローストターキーにしてやる」

「やめなさい。いい加減仲良くしてよ、あんたたち空母はもう！」

「失礼ね。まるで一航戦が五航戦を恨んでるような言い方」

「じゃあどうして瑞鶴をローストするの」

「私のプリンが冷蔵庫から消えていたの。他に理由が必要？」

言い返したいことは沢山あるけれど、ここで加賀と議論をしていたら日が暮れる。

「……もう好きにして」

「七面鳥を見かけたら連絡して頂戴」

そう言って加賀は矢を弓につがえ、歩いていった。

売店にプリンを置くのをもうやめてもらおう。いっつもこうだ。

私のプリンがない。食べたのは誰だ。名前は書いていたのか。名前を書いてたはずなのに食べたのは誰だ。

どいつもこいつも暇さえあればプリン争奪戦をおっ始めて仕事を放り出す。あんたたちはそんなに他人のプリンが好きか。他人が買ったプリンがそんなに美味しいか。他のお菓子じゃダメなのか！

プリンに罪があるわけじゃない。悪いのは元からこの艦隊にいた正規空母だ。空母を憎んでプリンを憎まず。

蒼龍と飛龍、一ノ傘副司令の下で鍛えられた二航戦の二人がやって来た時は、間に入って緩衝材になってくれるのではと期待したけれど、結局ただ被害者が増えただけだった。まったく手に負えない空母連中を、どうやって大人しくさせればいいのか皆目検討もつかない。あのアホチン司令官はとつくに諦めているし、板挟みになってしまった大鳳に海でも陸でもずっと気苦労をかけ続けるつもりか。

だいたい、あいつは人の心を分かってなさすぎる。全然分かってない。さっきの第二部隊だって、いつかは和解除しないといけないにせよ、考えなしに組ませるのだからタチが悪い。艦隊と艦隊が出し抜け

に統合されて困惑した子もいるのだから、もつとデリケートに動かし
てもらわないと波が立ってばかりだ。なのに……電一人からのア
タックで狼狽えて、情けない！ 可愛い子に言い寄られて、放ってお
いたら秘書艦が電に固定されてしまいそうになる。もつと艦隊のこ
とを理解している私みたいな……。

「あう……」

執務室に向かっていた足が止まった。今日は電が出撃しているか
ら私が秘書艦になったのであって、代打のようなものだった。電も仕
事はできるほうだけど私はもつと秘書艦に向いている、と自分で思う
なら自分の口からそう言いなさいよ。でもそれが言えないから私は
こうして突っ立っている。

「おお叢雲、ここにいたか」

突然聞きたかつ——いやいや——考えていた声に呼ばれた。司令
官は子供がすっぽり入りそうなほど大きなダンボールを抱えて階段
から降りてきた。

「なに、その荷物」

「分からん。私宛に届いたのだが伝票にな、ほら見てみる」

司令官はダンボールを廊下に乱暴に置いた。伝票を見ると、届け先
は司令官になっていて、内容物に『シヨウカクノザツカ』と書いてあっ
た。シヨウカクノザツカ。翔鶴の雑貨。……翔鶴の雑貨？

「なに、翔鶴の雑貨って」

「だから分からん。一ノ傘のミスかとも思ったが違うらしくてな、邪
魔だから処分しに行くところだったのだ」

「書いてあるとおり翔鶴の荷物じゃないの？ どうしてあんた宛かは
分からないけど」

「だとしたら余計に腹立たしい。艦隊の提督を集荷所扱いだぞ」

威厳が足りないんでしょ、とは言わなかった。

「だから工廠の妖精にでも好きにさせる」

一ノ傘副司令のことをやることなすこと大雑把だとしよつちゆう
非難しているけれど、この男も大概だ。

「私が持つてくわよ。翔鶴に話も聞いとくから」

「いやいい。少し重いぞこれ」

「主砲と魚雷よりは軽いでしょ」

ダンボールを持ち上げた。せいぜい2〜3キロくらいだろうか。でも大きさが縦1メートル、幅50センチくらいあるせいで、だき抱えないといけない。ああ暑苦しい。

「無理はするなよ。少しでも面倒になったらその辺にでも捨てていいんだからな」

「私はいいいから仕事に戻りなさい。今日が回答期限の話があつたでしょ」

はっと気づいたような顔をする司令官。やれやれである。

「ではすまんが任せた」

「はいはい」

素っ気無い返事をする私自身も、やれやれである。

【3】

支える手の汗がダンボールに染みてしまうほどの熱気に、やっぱり捨てるのかと途中何度も葛藤した。よく考えたら司令官がこの荷物を持ち運んでいたのは捨てるためであつて、翔鶴に渡すのであれば電話で翔鶴を呼び出せばよかった。空母寮の前に来てやつとそのことに気づいたものだからイラツとした。

お金をケチってばかりの司令官の側で働いていると、どうも思考回路がアナログになってしまう。一ノ傘副司令はパソコンとスマホでバリバリ仕事を片付けていくし、そのうち司令官には前に処分したWindows XPパソコンの代わりを用意してもらおう。

空母寮も他の建物同様、玄関や窓はすべて閉ざされていて室外機が回っている。人影は見当たらない。元々そんなに人数はいないけど、仕事が必要かどうかせみみな（さつき会った加賀と逃げたらしい瑞鶴を除いて）部屋の中であらけているんだろう。

寮に入ろうとすると、庭の奥の茂みから小さな声がした。

「こつちです。叢雲、こつち」

「翔鶴；L.V. 81」

茂みの上から翔鶴がひよっこり顔を出した。暑さで頭をやられたのかもしれない。

「……何してんの？」

「しーっ！ 早くこっちにその荷物を」

手招きされるまま茂みの奥に入っていくと「ごめんなさい隠れて！」と肩をぐつと押さえつけられ、膝に土が付いた。これにはさすがにカチンときた。

「ちよつと！ 私はあんたのためにコレ運んできたのよ！ この暑い中！」

「ご、ごめん！ ごめんなさい本当に！ 後でなんでもするから今は静かにしてください、ね？」

「後じゃなくて今よ今すぐ！ 涼しくなるもの持ってきて。麦茶とかアイスとか。あんたの部屋はすぐそこですよ」

「それは……今は何もありません。本当に。全部、加賀先輩に奪われたんです」

「奪われた？」

「冷蔵庫から全部無くなっていました。だから……これは本当に良いタイミングで届いてくれました」

そう言つて翔鶴はダンボールを乱暴に開封し始めた。『シヨウカクノザツカ』はやはり翔鶴の雑貨、という意味で正しかったらしい。

「これ司令官に宛てたのよね。わざとそうしたの？」

「……申し訳ないとは思つたんです。でもこれを私が目につく場所で直接受け取るわけにはいかななくて」

開いたダンボールの中には梱包ビニールで包まれた、大きさはダンボールと大差ないひとつの箱が入っていた。その箱には美的センスが日本人には合わない感じの英語のロゴタイプと弓矢の絵が大きく描かれていた。

「ちよ、ちよつとあんた、これ」

「はい。コンパウンドボウです」

ビニールを破つて箱を開けると、滑車がついたイカツい弓が入つて

いた。翔鶴や加賀、蒼龍、飛龍、それに司令官が持っている、私の身長を遥かに超える長さの弓とは全然う。これは弓道ではなくアーチェリーに使うものじゃないの？

「……和弓ではどうしても精度に限界があります。鍛錬が足りないと言われるとそれまでですが、遠距離武器として考えると、28メートル先にある直径36センチの的に中るか中らないかを競うレベルの道具なんて正直なところ、話になりません。一ノ傘副提督がエアールをお持ちですよ。たまに球磨を連れて道場に遊びに来られるのですが、私が早気に悩んでいる横で何連発でも軽々と小さな弾を当てるんです。的に穴を空けるだけの威力はありませんが、的に周りに散らばる私の矢よりもずっと良いんです。狙ったものに当てられるわけですから。弓道ではそもそも『狙う』という意識すら否定することもあって——」

「あー分かった分かった」

弓道について喋らせると止まらなくなるのは司令官と一緒だ。側の葉の上を蝸牛が、翔鶴の弓道論から逃げるようにゆったり動いている。

「つまり命中率が良い弓を使いたいってことでしょ」

「端的に言えば、そうです」

「なら別に隠すようなことないじゃない。わざわざ司令官を集荷所扱いしなくても、いい装備になるんでしょ？」

「いえ、この弓では戦闘機は飛ばせません」

「じゃあアーチェリー始めるんだ」

「泥棒を狙撃するためです。今日これが届いたのは運命なんです。——今日こそ加賀先輩を仕留めろと」

引き締めた表情で言う翔鶴がより一層、阿呆らしく見えた。

「叢雲、逃げた加賀先輩をどこかで見かけませんでしたか」

「……見てない」

さつきあந்தの妹を射殺そうと徘徊していた、とは面倒に拍車をかけそうなので口が裂けても言えない。

「そうですか——では暫く練習してから探しましょう。わざわざ荷物

を届けてくれてありがとうございます。このお礼は後でしつかりします。……その頃には泥棒もいなくなってますし」

〔4〕

行儀悪くも私はラムネを飲みながら執務室へ向かった。どうせ廊下には私以外にコツコツと足音を立てる人はいないし、見られる心配はない。まだ昼前だし、これだけ暑ければ、今日が提出期限の書類を持った姿がひとつも見当たらないのも仕方がないのかもしれない。皆がだらだら集まってくる昼食時にせっついて回ればいい。

執務室の扉の前には、もじもじしている怪しい奴がいた。そいつはぎこちなくクロスボウを構えて、取っ手に触れようとしては手を引つ込め、を繰り返している。執務室が襲撃された事は度々あったけれど私の不在時を狙ってくるとは卑怯千万。

「何してるの」

「ひゃいっ!?!」

「大鳳・???」

不審者は驚いてクロスボウを落としかけた。その拍子に矢がポロツと外れ、張っていた弦がバン! と勢い良く開放された。順序が逆だったら扉に矢が刺さっていたでしょうが。

わたわたと取り乱す不審者の、身なりだけは大鳳だった。航空機とは縁がない私にはイマイチその良さが分からない化粧直しされた装甲甲板。密閉されているらしい格納庫。私たちが用意する意味があるのかハリケーン・バウ。いざ戦闘では当人の自慢も伊達ではなく少々の被弾ではビクともせず、しかも随一の能力を誇りながら、何よりも頭が常識的である、貴重な頼れる装甲空母様。

……頼れる大鳳様には今朝、出撃してもらったはずだった。

私に向き直った不審者はクロスボウを背中に隠した。

「お、おはようございます。改装済み大鳳です。……えっと、た、タウイタウイのみんなも元気かなー?」

不審者は大鳳になりきっているつもりらしい。普段はツインテール

ルにしている長い髪をお団子にしているのが唯一見られる努力で、他はただ服と装備を盗んできただけのコスプレだった。胸のサイズくらいしか似ている箇所がない。せめて鏡くらい見なかったのか。

「大鳳が帰還する前に盗んだ服は返しときなさいよ、瑞鶴」

「うそつ、バレた!? こ、この変装を見破るなんてさすがは叢雲ね」

「瑞鶴；Lv. 80」

「でもこの服と装備は盗んだんじゃないじゃなくて借りたのよ」

「ああそう。で？ 大鳳の格好で執務室を襲撃して罪をかぶせるつもり？」

シルエツトくらいしか似ていないけれど。

「違う違う！ この格好は翔鶴姉を油断させるためだ」といった瑞鶴は何か気づいたような素振りをして固まった。しかしすぐに「ううん、大鳳が直接やったって覚られる前に翔鶴姉を仕留めればいいだけの事じゃない」と勝手に一人で息巻いた。

「叢雲、翔鶴姉を見なかった？」

「なに、あんたたち正規空母はバトルロイヤルやってるの？ さつき

加賀が弓矢持ってあんたのこと探してたけど」

「は？ 加賀先パイが？ どうして」

「加賀のプリン勝手に食べたんじゃないの？」

「私がい！ 食べてない！ 間違って翔鶴姉のアイス食べちゃったけど、加賀先パイのは知らない！」

「誤解だろうと何だろうと静かにしたほうがいいわよ。加賀があんたを狙ってうろついているから」

七面鳥も鳴かずに撃たれまい。

瑞鶴は口をつぐんでキョロキョロあたりを見回した。人影はなく、古くなった冷房の駆動音だけが廊下に響いている。

「どういう事？ どうして私が加賀先パイのプリン食べたことになつてんの？」

プリンひとつで命が狙われることに疑問を持たないあたりが、さすがは私たち艦隊の正規空母だと言えた。ちよつと人柄がトリツキーナ一ノ傘副司令官ですら、関わりを避けてるくらいだしなあ。

「知らないわよ。コロシアイなら空母寮の中でやって。軽空母に迷惑がかからない程度に」

「状況が全然わからない……もうやだどうすればいいの、私は翔鶴姉を殺さないといけないのに……ちよつと落ち着きたいから隠れさせて」

瑞鶴は執務室に飛び込んだ。中から「おい遊ぶならせめて外でやれ」と司令官の声が聞こえた。

私も中に入ろうとすると、カツカツと足早に階段を上がってくる人がいた。相変わらず弓を構えたままの加賀だった。あと少し来るのが早かったら執務室前で矢が飛び交う事態になっていた。

「あら叢雲、また会ったわね。この辺りから七面鳥の鳴き声が聞こえたのだけど、見なかったかしら」

「蚊が飛ぶ音と間違えたんじゃない？ 今日はまだもう休んだら？」
「そうね、冷たいものでも買いに……ん？」

加賀は床から、先ほど瑞鶴が落とした矢を左手で拾った。『かけ』をはめた右手だけで弓矢を器用に支えている。感づかれるかと一瞬ひやとしたが、瑞鶴が持っていたのは和弓ではなくクロスボウで、矢も派手な紫色をしている（関係ないけど司令官の矢も負けず劣らず派手な青色をしている）。

「この短い矢はクロスボウ用……どうしてこんなところに」

「さあ。一ノ傘副司令が落としたんじゃない？ あの人のいろんなコレクション持ってるし。こんなもの落とすの副司令もだけど加賀、弓矢を持ち歩くのやめなさい。あんたが威圧して回るせいで怯えて誰も部屋から出て来ないのよ」そういうことしておこう。

「善処するわ」と言った加賀はつがえたままだった矢を弓から外して、瑞鶴が落とした矢を私に渡した。

「食堂にノコノコ姿を見せた時にでも仕留めるとするわ」

「だから、危ないって言うてるでしょうが」

「心配いらないわ。五航戦や提督と違って私は狙ったものは外さないから。絶対に」

『絶対に』の部分に殺気を込めて言い放つと、加賀は背を向けてさつき

上がってきた階段を降りていった。

ひんやり冷たい空気が天国のそのような執務室に入って、司令官にさつき届いた荷物はやはり翔鶴のものだったと伝えた。予想通り集荷所扱いされていたことに怒ったけれど、私に労いの言葉をかけると仕事に戻った。

瑞鶴は秘書机の下で息を殺して縮こまっていた。司令官は邪魔にならなければどうでもいいとばかりに無視している。今更だけど、うちの正規空母たちは今の練度になるまでよく欠員なく生き残っているなあ。

【5】

「さつきと出ていけ」と司令官がつっけんどんに言うのを無視して、瑞鶴はクロスボウに紐を垂らした。紐にはフックが2つ洗濯紐の洗濯バサミのように付いていて、それを弦にひっかけた。クロスボウ先端の金具を右足で踏んで固定して、瑞鶴は紐の両端を持って引つ張り上げた。すると二つのフックが弦を引き、最後まで引かれるとカチツと固定された。クロスボウは一回撃つ度にイチイチこんな作業が必要になるんだ、面倒な。

「叢雲、それ」と手を出されたので、私は瑞鶴が落とした矢を「ふんっ」押し曲げた。

「あつ、なにすんのよー！」

「さつき翔鶴を殺すとか言ってたでしょうが。黙って見てるわけ——ん？ あんた、翔鶴のアイス食べたって言ってなかった？ 逆じゃない？ あんたが殺される側じゃないの？」

瑞鶴は顔を背けた。「……深いワケがあつて」

「強盗殺人の動機ねえ」

「違う！ 脅されてるの！ ……私、見たんだ。翔鶴姉がネットでアーチエリー用品探してるの。次バレたらきつと私はあれで！」

本当に強盗殺人を働いたかのような動揺っぷりだ。でも大鳳のコスプレをしているおかげで、まるで緊迫感が伝わらない。

「落ち着きなさい。さつき翔鶴にアーチエリーの道具が届いたけど、あれは加賀を狙うためだつて言つてたわよ。冷たいもの全部たべられたからだつて」

「……そうなの？」

「ついさつき本人から聞いた話よ」

「じゃあ翔鶴姉は今、加賀先パイを見てるつてことね。——背後を取るチャンスじゃない」

「どうしてコロシアイ続行なのよバカ！ いい加減にして！」

「だから脅されてるんだつて。ばらされてこつちがやられる前にやらないと」

「ばらされる？ あんたを脅してるのつて翔鶴じゃ——」

まったく唐突に、ノックもなしに部屋のアが開き、弓を引き絞つた加賀が屈んで滑りこんできた。弓が天井に当たらないように屈んでいるのだろうけど、銃を構えた特殊部隊のようだった。矢の照準をサーチライトのように執務室内に巡らせた。

私と瑞鶴のやりとりを無視していた司令官も、これにはさすがに額に青筋を立てた。

「貴様、加賀！ もう許さんぞ営倉行きだ！ 解体も考えるからなー」

椅子を蹴飛ばして軍刀を手にとつた司令官が怒鳴つたものの、加賀は冷静に室内に視線を走らせて首を傾げるだけだった。「おかしいわね、七面鳥は？」

瑞鶴ならここにいるじゃない、と言いかけて、横で脂汗を吹き出している大鳳コスプレ馬鹿が見えた。この雑なコスプレが奇跡的に効果を発揮しているらしい。加賀の目がどれだけ怒りで曇っているかが分かる。逆に他の誰かが瑞鶴に変装したら加賀に命を狙われるんじゃないだろうか。

瑞鶴もまさかこのような形でコスプレ（本人は変装のつもり）が役立つとは考えもしなかつただろう。口を閉ざして固まって、歯がカチカチ鳴っているのが微かに聞こえる。姿の真似は出来ても（出来は悪いけど）声の真似はできない。七面鳥も鳴かずに撃たれまい。

司令官が軍刀で加賀の弓の弦を切つた。大きくしなつていた弓が

加賀の手から離れはじけ飛び、派手に音を立てて秘書机にぶつかって床に倒れた。危ない真似を！　と思っただけ矢は加賀の手前に落ちただけだった。

「乱暴なことするのね」と自身を棚上げする加賀。

「今この場で切り捨ててもいいのだぞ」と司令官。

加賀が営倉に入ってくれれば（仲間の営倉行きを望んだのは初めてだ）翔鶴も大人しくなるはずで、少しは静かになるかと安堵して、なんだか疲れた私は椅子に座った。まだ午前中なのに、正規空母の面々はよくもまあ騒いでくれた。

切れた弦と弓矢を拾っていた加賀は、相変わらず直立不動の大鳳モドキを見て——二度見して、気付いてしまった。

「大鳳？　あなた今日は出撃したんじゃないやなかつた？」

「おい加賀、さっさと行け。貴様の足でだ」と司令官が駈るのにも構わず、加賀は右手に矢を握り締めて大鳳モドキの正面に回った。大鳳モドキ、瑞鶴は矢のないクロスボウを胸に抱えて後ずさった。加賀はじりじりと瑞鶴に近寄った。

「——今日の大鳳は気配が妙だと思ったのよ。風邪なのかしら。ねえ大鳳？　自慢の装甲はどう？　燃料庫は大丈夫？」

「……………」

「私はあなたを心配しているの。一言、具合がいいのか悪いのか声を聞かせてくれないかしら——あら、なにその手。手信号？　不勉強で申し訳ないのだけれど分からないわ。ちゃんと、声で、教えて頂戴」

いい加減にしろと怒鳴る司令官や私を別世界に追いやり、加賀と瑞鶴は少しの間、しかし二人にとっては恐らく時間が停止する寸前まで圧縮された事象の中で向かい合った。深海棲艦に極限まで接近した時に敵の砲身内部すらはつきりと見える、あの生きるか死ぬかの刹那と同じ。感覚だけが鋭敏に加速して他の全てが切り取られる。それだけ加賀は十分に睨みを効かせ、瑞鶴は情報を打破できる最適解を探った。

ゆつくりと下がっていた瑞鶴の足が壁まで到達し、瑞鶴はついに口を開いた。

「……………食べたのは私じゃない」

加賀が突き出した矢を瑞鶴はクロスボウで受け止めた。どちらも両手が塞がっている。加賀が蹴りを入れようとした瞬間、

「加賀先輩、覚悟オー！」

届いたばかりのコンパウンドボウを構えた銀髪の阿呆、翔鶴が執務室に突入してきた。

翔鶴はいきなりぶつ放すと、まったく扱えていないらしく、私の左のこめかみ付近の空気が削られるのと同時に窓ガラスが破裂した。私の命が砕け散ったかと本当に思った。

唾然として加賀が翔鶴を見ている隙に、瑞鶴は加賀から矢を奪い取って距離を取り、矢をクロスボウにセットした。

「やめんか馬鹿者が！」と司令官が軍刀を翔鶴のコンパウンドボウに振り下ろした。しかし残念ながら司令官の愛刀『丑の刻摩天楼』は名前負けしているらしく、翔鶴の手からコンパウンドボウを叩き落とすのには成功したが、刀身が真ん中あたりで折れてしまった。宙を舞った刀身はせめてもの道連れに天井の蛍光灯を割った。

ガラス片や刀身が舞い散る中で瑞鶴は、加賀と翔鶴、どちらを狙うか決めかねていた。和弓を薙刀のように構えて接近してくる加賀か、無防備になり最も狙いやすくターゲットにしていた翔鶴か。セーフティを解除し、迷う時間がないのだからどちらでも！——のところで私は椅子で瑞鶴の頭を思いっきり殴った。その拍子にクロスボウが発射されてしまい、この艦隊が司令官と電で作られた当初から使用されていたエアコンに矢が突き刺さった。瑞鶴が倒れ、エアコンは何かガショートする音を立てて停止してしまった。それを見た司令官、加賀、翔鶴は呆然と立ち尽くした。私は瑞鶴を殴った椅子から手を離してへたりこんでしまい、左手でこめかみを押さえながら執務室の惨状を見回した。そこへ、

「あの一……大丈夫？」

一ノ傘副司令は、落ち着くのを待っていたようなタイミングでそりりと顔をのぞかせた。

◆
◆
以前よりいつそう静かになったと感じるのは錯覚だろう、そう金剛は理解していたが、気分的に静かになれるのであれば錯覚であっても歓迎した。

三人の阿呆が営倉に移ったおかげで空母寮は、ギャングから開放された町のように平和になった。一時的なものではあるが。

正規空母の主力が一度に三人も抜けたことで、大鳳はよりいつその働きが期待され、疲労が蓄積してか睡眠をとる時間が長くなった。今日この日も夕食後、すぐに布団に潜った。蒼龍・飛龍はそれでも一ノ傘艦隊の頃より全然マシだと言った。

コーヒートの缶を手の上で転がしながら、明日は雨が降りそうだと金剛が夜空を見ていると、空母寮の裏にもう一人の客が現れた。

「こんばんは。明日は天気は崩れそうですね」

「赤城；L.V. 98」

赤城は大きめの缶コーラを持っていた。

コーヒートを隠れて飲んでた金剛とぶつかって以来、二人はこうして会うことがあった。コーヒートを飲んでいることを隠したい金剛と、夜食を隠したい赤城。日や時間を決めるわけではなく、この場所で二人のタイミングが合えば話をした。赤城は金剛の隣に並んで、缶を開けて炭酸を弾けさせた。

「私、明日はちよつと遠くまで出撃なのにネー。嫌んなっちゃうヨ」

「私はやつと休みです。ここのところ本当に忙しくて」

「ご愁傷さまデス」

「いえいえ」

「みんな不思議がつてるヨ。どうして正規空母が一度に三人も営倉にぶち込まれたのかって。誰かは『痴情のもつれ』って推理してたネー」

二人とも、加賀・翔鶴・瑞鶴のありえない姿を想像して笑った。

「ないない。絶対ないです」

「それ推理じゃなくて妄想ダロ、ってバカにされてたヨ」

「あの三人が処罰を受けたのは執務室で暴れたからでしょう。それを

推理するなんて——」

「へい赤城、だから、そこじゃあないから不思議なんデシヨ？ 重要な問題は」

「何がですか？」

「ユーとミーの仲ネ、隠し事はNothingでお願いシマスヨ。本当は関わってるんでシヨウ？」

「……それは金剛さんの推理ですか？」

「気になる事があると眠れないんデース。明日の出撃に寝坊したら赤城のせいって言いマス」

「こんな時間にコーヒー飲んでるくせに」

「カフェインに強い体質なんデス。ホラホラ、今なら誰も聞いてないヨ、王様の耳はDonkey's earsって」

「はあ……内緒ですよ」

金剛は深く頷いた。

「まさかあんな大事になるとは思ってたんですけどね……あの暑い日に冷たいものをちようど切らせちゃって、売店まで行くのも嫌だったから皆のものを——いえ、後でちゃんと返すつもりだったんですよ？ でも加賀さんにも翔鶴さんにもゴミを捨てるところを見つかっちゃって、つい、こう……」

「罪を着せた？」

赤城はコーラを呷り、小さくゲップを出した。

「まあ……そうです。瑞鶴さんには特に悪いことをしちやいました。飲食物の奪い合いは日常茶飯事ですけど、私が翔鶴さんのを貰う前にちよつと摘んでたのを偶然見つけて、上手い具合に三竦みに誘導できるかなって思ってたんです。ほら、一方通行ならよくないことが起こりますけど、三竦みなら誰も動けないでしょ？」

「いや動いたから三人が営倉行きになつたんデスガ……」

「三人とも大胆な性格だったのを忘れてたというか、私たちの普段が普段なのでちよつと感覚が麻痺しちゃってたのかなー……なんて」

「ナルホド。夏の大三角の中心には赤城の存在があったと」

「夏の大三角？」

「モノの例えデス。事情はよく分かりマシタ」

「その代わり私が三人の分まで頑張るつもりですからね。そこはちゃんと頭に入れて、誤解はやめてくださいよ」

「仲良く営倉に入ろうとは思イマセンカ？」

「三時のおやつと夜食が出るならそうしてもいいです」

「オーケー……さて、知的好奇心が満たされたところで、私はそろそろ戻リマス」

「あれ？ 飲まないんですか、そのコーヒー？」

「ああ、これは……」金剛はずっと手で弄んでいたコーヒーの缶を見た。「明日の任務から帰ってから飲みマス。それじゃあ赤城、Good night」

「今の話、秘密ですからねー」

ひらひらと手を振って金剛は空母寮を立ち去った。

途中、何度も後ろを振り返りながら戦艦寮の前に到着して、周囲に誰もいないことを確認すると、コーヒー缶の上下を持って捻った。すると缶下部から1cmほど上の、輪切りにされたような線で45°回転し、するりと二つに分割された。缶上部は覆いであり、下部に付いているボイスレコーダーを隠すためのものである。

赤城との会話を録音できていることを確認した金剛はボイスレコーダーを缶状に戻し、『指示』された通り戦艦寮の下駄箱の使用されていない箇所位置に置いた。

ボイスレコーダーを取りに来る誰かを、彼女は知りたとは思わなかった。彼女が密かにコーヒーを飲んでいることを利用してしまう人物など、何重に先回りされているか分かったものではない。並大抵の知的好奇心では藪をつついて蛇を出すだけだと十分承知していた。

日が昇る頃にはボイスレコーダーは何者かによって既に回収され、彼女が海に出ている間に赤城は三時のおやつも夜食も出ない営倉に入れられる。事は確実に進む。それが分かるだけで十分、彼女は気掛かりなく眠ることができた。

第17話 航空戦艦は揺るがない

戦艦寮の入り口の強烈な日差し影から最上は、コンクリートの上に止まっているオスプレイをじっと見ている。オスプレイは生きた猛禽類ではなく、ここ海軍鎮守府に相応しい、日本国民をいくらか騒がせた輸送用テイルローター機である。

最上の目の前にあるオスプレイは近隣市民の感情を逆撫でることはない。手に抱えることができるサイズのラジコンであるし、最上が最初にそれを見た時、

「あの有名なオスプレイだ。知っているだろう」

「日向；Lv. 10」

いや、知りませんよこんなの、と言いかけた口を閉ざして首肯しておいた。

日向のラジコンオスプレイは全体的にキュウリのような緑色に塗装され、両翼と胴体には赤いマル模様が入れられている。毎度の事ながら瑞雲を意識したカラーリングだった。さらに機体下には水面上に浮かぶためのフロートまで無理やり取り付けられており、もはやオスプレイを瑞雲風に改造したのか、それとも瑞雲をオスプレイ風に改造したのか分からなくなっている。しかし日向がオスプレイだと言うのだから、コンクリート上にフロートで立つ謎の機体は紛れもないオスプレイなのだ。最上はそういうことにおいた。

この鎮守府において、航空戦艦としての仕事はほぼ全て伊勢と山城が担い、仕事がないことを日向は雀の涙ほど気にしている。雀が泣くことなどなからうと考えている日向はつまり全く気にしていないと言えないこともない。伊勢と山城に少しは働いてくれと懇願されたとしても「まあ、航空戦艦の時代はすぐそこだからな」と繰り返し、鋼鉄製のメンタルは微動だにしない。日向は目先の深海棲艦などより来るべき航空戦艦の時代ばかりを見ていた。あんまりにも見すぎて本末転倒になっていることに気付きはしても、鋼メンタルはその程度ではやはりビクともしなかつた。

自発的に持て余した時間で日向は二つの能力を会得した。ひとつ

はラジコンの外装を大きく改造することである。

「時代が求めているのはステルス性……：ATD-Xか、よし」などと言いながら、鳥人間コンテストに出てきそうな機体をスケールダウンしたようなプロペラ飛行機ラジコンを、極めて近代的で洗練されたフォルムに大改修した。翼は短く幅広く、機体そのものがミサイルとなつて飛びそうであり、原型は動力のプロペラを除いてまったく残っていない。初めから必要な部品のみ選択して買うのは日向の性に合わなかった。それでも安定して飛行できるのだから最上は度々、脅威の無駄技術に舌を巻いた。しかしやはり機体は瑞雲調に塗装されておりステルス性を台無しにされ、ミサイルの代わりなのか外見的不スマートチが過ぎるフロートが付いていた。

日向はどのような機体を作る時も、一度は参考にした機体を作り、そこから瑞雲に改修(?)した。日向と伊勢の部屋には、これまで日向が作ってきた機体が飾られている。F-22ラプター、Ka-50ホーカム、コンコルド、気球船、果てはハインケル・レルヒエのような珍機体(特に航空戦艦が運用できそうなもの多)も並び、どれもやはり瑞雲化に例外はなかった。

もうひとつ、有り余る時間で発芽した能力は今から発揮されるところだった。

「よく見ていろよ最上。飛ばすぞ」

日向はフンと腹に力を込め、ヒトデのような形をしたエンジンがウヨウヨと動き回転する様子を想像した。すると瑞雲風オスプレイの両翼の端に付いているローターが、ゆっくりとはあるが回転を始めた。日向はコントローラーを持たずにラジコン飛行機を、文字通り思うがまま操作できるのだ(さすがにバッテリーは要る)。理屈は日向にも、ましてや見ているだけの最上にもさっぱり分らない。日向は星型エンジンを想像しているがラジコンはモーターでローターを回しているし、本物のオスプレイはターボシャフトエンジン駆動である。細かいことは航空戦艦の枯れた素質と鋼メンタルでどうにかなるらしかった。

ローターの回転数が徐々に上がっていくところがいかにも本物ら

しく、最上もそこは気に入っていた。出撃しないにもかかわらず無駄に鍛えているらしい日向の腹筋あたりから電波が出ているのかもしれないと想像して、こつそりと口元を隠した。

日向の新作を飛ばす『試飛会』に最上は必ず招待された。あるいは強制参加とも言った。残念ながら日向のような鋼メンタルを持たない最上は、鎮守府のほとんどの人員同様に普通に働いている。しかしどうやら日向は自分の都合に合わせて飛行機の制作予定から立てているらしいことに気づき、少々の予定はキャンセルすることがままあった。「まあいいか」と思えるのは、最上も毎度毎度みようちくりんな飛行機が飛んだり墜落したりする試飛会を楽しんでいるからだっただ。

一方、鎮守府の人員のほとんどの含まれない日向は、伊勢と山城の言葉には耳を貸さなくせに最上の予定は気にかけて。最上の出撃が増えると劳い、さらに増えると提督に苦情を入れ、怒り心頭に発する叢雲と不毛な言い争いの末に伊勢か山城を代打に送り出した。代打の当人たちには事後承諾で。

プロペラが回る音が甲高いものとなり、瑞雲風オスプレイはいよいよ浮き上がり、車輪代わりのフロートをぶらつかせた。地上から僅か数センチのところを真横に向かって滑ってゆくのを見て、最上は思わず口をぽかんと開けた。

「どうだ最上。やはり時代はVTOLだな」

問われた最上はオスプレイに目を奪われているふりをして無視した。

前回の『試飛会』にて鳴り物入りで登場したF-35ライトニングIIは、艦載機という仕様に惹かれた日向がF-35Cをベースにし、F-35Bの短距離離陸・垂直着陸(STOVL)を「垂直に着陸できるのなら離陸もそうだろう」と独自に解釈して垂直離着陸(VTOL)に変えて機体に組み込み、例によって瑞雲化されたものだった。その結果、垂直に離陸することには成功したが、離陸というより発射に近い勢いで機体が跳ね上がり、一気に数十メートルまで上昇したところで機体がバランスを失い反転、ミサイルの如き勢いで背面垂直着

陸を敢行した。最上の回避があと少し遅ければ、F-35C or B or 瑞雲は最上の頭頂に着陸して木っ端微塵になつていた。鋼メンタルを持つ日向が珍しくしょんぼりしたのは最上を危険に晒したからか垂直離着陸に失敗したからか、最上には分からない。

しばらく低空をふらつきながらオスプレイの操作感覚を腹筋かどこかに馴染ませた日向は、空中で機体をピタリと停止させるホバリングに成功した。日向のエスパー的操作が成せる技なのか、操縦に成功する時は一発で本当にあっさり成功した。一度安定してしまえば最上は安心して見守ることができた。

「驚くのはまだ早いぞ。この機体の本領はここからだ」

戦艦寮の二階あたりまで高度を上げたオスプレイは、翼端ふたつのローターを前方に傾けた。すると高度が下がり多少ブレたものの、比較的安定して飛行機らしく前進した。回転翼機のどこか危なっかしいバランスと固定翼機の忙しい動きが見事に相殺されていて、最上は心の中でひたすら称美した。自分に向かって墜落してくる今までの機体は何だったんだ。

オスプレイを見上げる最上の表情を見た日向は気を良くして、さらに機体の高度を上げた。二階建ての戦艦寮の屋上からさらに数メートルは高い位置でホバリングさせ、そこから二人を囲むように大きく旋回させた。地上からはオスプレイのずんぐりとした胴体が見えた。空に大きな円を四回描いたところで停止すると、ローターを今度は機体後方に傾けた。するとオスプレイは奇妙にも尾翼の方向へゆっくりと後退した。航空機がムーンウォークをしているかのようで最上は思わず「おおっ!？」と声を上げてしまった。

『試飛会』において最上は可能な限り言葉を慎んだ。日向のESP的コントロールの妨げにならないように、ではなく、コメントをすると日向は決まって調子に乗り、航空機を墜落させる確率が酷く上がるからだった。

「ふふっ……どうだ、最上もこの機体に興味が出てきただろう」

「そ、そうですね。……あの、そろそろ着陸させたほうがいいんじゃない」

「うん？ バッテリーなら心配ないぞ。充電にぬかりはない」

「いや、そういうんじゃない……」

「ではいよいよ本領発揮だ」

日向が念じると、オスプレイのローターが前方に90°。倒れて固定翼機のような形態となった。最上がよく知るプロペラ機と同様に高速での飛行が可能となる。オスプレイは固定翼機と回転翼機の特性を併せ持ち、さらに日向の瑞雲化改修により水上での運用も可能だった。

しかしローターの操作が性急だったためか、オスプレイは揚力を失うばかりかローターを水平に向けての速度は日向の想像を大きく超えていた。

「こんなはずではない」と思った頃には手遅れなのがラジコン航空機というものである。

制御を失った瑞雲風オスプレイはさながら爆撃機・彗星の急降下爆撃の如き鋭さで遙か上空から戦艦寮を目掛けて突進した。慌てた日向がローターの向きを変えるもオスプレイは勢いに任せ、戦艦寮の一室の硝子窓を突き破った。さらに室内で何かを確実に破壊した音が聞こえた。最上は一刻も早く逃げ出したかった。

「あそこは山城の部屋だったか」日向は鋼メンタルをここぞとばかりに発揮している。

オスプレイが山城の部屋に突撃してしばらくして、最上を罪悪感で絞め殺しかねない悲痛過ぎる悲鳴が割れた窓から聞こえてきた。怪我をしたような悲鳴ではないものの、窓硝子より遙かに価値のある物が失われたことは確かだった。日向は腰に手を当てて嘆息した。

「まあ……なんだ。もう少し段階を踏んで練習するべきだったな」

この人のメンタルはどうなっているんだろう、最上は呆れを通り越して感心していると、割れた硝子窓を律儀に開いた山城が、ところどころ破損した瑞雲風オスプレイを片手に持って泣きながら出てきた。

「ふざけんな日向あー！」

二階から山城が投げつけたオスプレイを日向は見事にキャッチした。さらに怒り心頭の山城はパソコン用らしきモニターを構えた。モニターは割れている。ケーブルがぶら下がったままのモニターを、

文庫本を、目覚まし時計を、山城は次々に色々なものを投げて、日向は避けた。日向の足元で様々なものがコンクリートに激突し砕けていった。

「今度という今度はもう許さない、その辺の浅瀬に大破着底させてやる！」

「悪かったよ、そう怒るな。同じ航空戦艦だろう」

「黙れニート戦艦！ あんたみたいなのがいるから姉さまがいないんだ！」

「やれやれ、時代は航空戦艦だというのに、なあ最上。……最上？」

山城に顔を見られる前に最上は戦艦寮から離れていた。遠く離れて山城と何か言い合っている日向をこっそり見ながら、次の『試飛会』も何事もなかったように開催されるんだろうなあ、と悄然として山城に頭を下げた。

第18話 叢雲の薬指 — 来訪者

【1】

一ノ傘が海に睨みを効かせていた鎮守府から十数キロ先に、日本有数の粗鋼生産量を誇る巨大な製鉄所がある。高炉を備える敷地は冗談のように広大で、構内の道路を、特有のナンバープレートを付けた自動車やトラックが、信号や踏切警報機に従い走っている様は日本の法から独立した自治区のように感じられる。安全という観点では、どの車も必ず規制速度以上の速度を出さないため、製鉄所の外よりは安全といえた。歩道はごく一部しかなく、歩行者も自転車もほとんど見られない。あまりに敷地が広すぎるため、製鉄所内で働く人々は移動手段として主に車を用いる。

資材産業のテーマパークのように、敷地内には様々な建物があ
り、内部、あるいは外部で鉄の材料らしきものをこねくり回したり、あ
るいは入道雲のような蒸気を吐き出したりしている。北九州にある
遊園地「スペースワールド」のすぐ隣に未だ鎮座している、八幡製鉄
所の高炉跡に似た設備も見受けられる。関係のない話だが、八幡の高
炉跡内では今もなお作業をしている人影をJR鹿児島本線のスペー
スワールド駅から八幡駅の間で見ることが出来る。

「あの工場はまだ稼働している」

「作業員の幽霊が見える」

「廃材泥棒がいる」

よほどの暇人でない限り電車以上に近寄らないため勘違いが多発
するのだが、高炉跡内で作業中の人々は何らかの理由で撤去されるま
で永遠に作業中のままである。

【2】

我々が血眼になって集める鋼材は、製鉄所で艱装専用
に製造され、形を整えられたものである。生産方法は当然ながら機密事項であり、
新日鉄住金が韓国メーカーPOSCOにやらかさされた例もあるため、

製鉄所の見学に行ったはずの一ノ傘は「なんか、うるさくて熱かった」と何一つ学んではこなかった。

製鉄所と出入りする船を守るため、私と一ノ傘、他にも数カ所の鎮守府は頻繁に見張りを出す。深海棲艦に接近を許してよい陸地などないが、大規模の製鉄所が一箇所でも潰されてしまえば戦争の天秤は大きく傾くこととなる。艦娘の装備品だけではなく、鉄はあらゆるものに大量に使用される。破壊された建物ひとつにいったい何トンの鉄骨が使用されているのやら。

資源メジャーや中国の過剰でもあった鉄鋼メーカーの躍進により日本での「鉄は国家なり」がひっくり返され、同時に品質面での優位も揺るいで自動車向け鋼板などにも海外製が使用され、もはや拠点を海外に移し需要の多い新興国にターゲットを絞るしかないか、に見えたところに現れたのが深海棲艦である。海から襲って来る連中のせいで国内外を問わず需要が爆発的に増えたのだから、メーカーの偉い人間は「平和のためにも安定供給に努める」と取材記者の前で硬い顔をしつつ、設備をフル稼働・増築しても足りない需要を「業界に二度と訪れない特需」と言ったことだろう。

【3】

一ノ傘の艦隊が私のところに転がり込んできた後、空になった鎮守府には重要な場所なだけにすぐに新しい者が配備された。とはいえ近海は一ノ傘がブラツク的手腕で遠出ついでに敵を葬っていたので、一ヶ月は放っておいても平和なはずだった。そのため防衛上のご近所さんでありながらも、どのような人物が提督になったのか私の耳に届くまでしばらくかかった。

警察でいうところのキャリアのような男だと聞き、しかし警察に興味のない私にはいまいちピンとこなかった。

「乱暴に言えばエリートのことです」と手近な椅子に座った電は言った。情報を持ってきた電は今日は休暇を取得しているはずである。しかし仕事熱心である彼女は私と、本日の秘書艦である叢雲の間に

割って入ることを常に忘れない。

「現場を知らないのにどんどん出世街道を登っていく、みたいなイメージを持たれる感じですね」

「なるほど、ドラマで悪役にされるタイプか」

「逆に凝り固まった組織を壊す、ってパターンも多いのです」

「ならば私や一ノ傘とは扱いが違うのだろうか」

ペンを走らせていた叢雲が顔を上げた。

「最初から正規空母を連れてたそうね。当面の運用資材付きで」

どう返したのか困った。私は叢雲や電のような駆逐艦が正規空母に劣るとは考えていないのだが、広範囲の索敵や装備を自在に変更できる艦載機などは圧倒的なメリットである。顔に考えが出てしまったのか、電はフオローするように言った。

「でも所詮は練度の低い elite です。flagship のわたし一人の足元にも及ばないのです。それより問題は噂のほうですよ」「噂？」

「経歴が隠されてるみたいなんです。普通はどんな作戦に参加したとか記録に残るはずなのに、その人については以前までどこかの鎮守府で司令官をやっていた、とだけしかはつきりしていません。怪しくないですか？ 記録を消すってことは、つまりその記録は誰かにとって面白くないものなわけですし」

「上がマズいものを隠したかったとかか？ あるいは、どこぞの艦隊のようにブラックな運用をしていたことを——」

「そこなんです。流れている噂は」電は人差し指を立てた。

「指揮の腕も性格も、ちよこちよこ聞こえてくる噂は一ノ傘副司令が可愛く思えてくるような話ばかりなのです。ええもう本当にわたしは井の中の蛙でした。一ノ傘副司令こそ最悪だとばかり思ってたのですが、副司令なんて全然です。小物ですね」

隣の部屋で今もキーボードを叩いているであろう一ノ傘が哀れでならなかった。私が一ノ傘の立場だったら心が折れて魚雷を抱いて海に飛び込んでいるに違いない。

「一ノ傘副司令の艦隊はブラック艦隊でしたけど、その例の人はまと

もな艦隊の運用すらままならなかったそうです。滅茶苦茶な編成で激戦海域に出撃させて、他の艦隊に『支援』と言いながら実質『救助』要請を出してばかりだったそうです。記録が消えても『救助』に出た人の記憶までは消せませんからね。運良く逃れて助けられた艦娘がまた同じ海域で助けられた、なんて話まで聞きました」

「まさか捨て艦戦法ではあるまいな」

「ちよつと、やめてよ聞くだけで寒気がするんだから」

叢雲は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「実質そうだったかもしれないですけど、そもそも戦法どころか戦略すらあったかどうかも怪しいみたいです。素人が同じ海域にずっと拘って艦隊の編成は二の次、みたいな感じで」

「何故そいつは提督になれたのだ？ いや待て、一ノ傘がいた鎮守府にそんな奴が着任したというのか？ 冗談だろ？」

「悪い冗談みたいですが、その人が着任していくらか時間が経ってます。ですので——」

「待て待て。本当に冗談じゃあない。あの鎮守府は工業地帯、特に製鉄所を守る要所だぞ。一ノ傘は出撃に出る『ついで』に近海の草むしりをしていたがな、それくらいでないと務まらないのだ。そんな無能に防御ができるものか。あの工業地帯に何かあればこころ一帯の戦況が傾くぞ。……ああ、くそつ、余計な仕事が増えた。防衛の計画を……駄目だ、そいつが邪魔で話を通らん、予算も足りん！ ……そうだ、今から一ノ傘を元の居場所に戻すか」

「おお、ナイスアイデアなのです」

「二人ともやめなさい……艦娘の私たちが考えることじゃないとは思うけど、実際に戦う私たちからしても足手まといのご近所さんは嫌よ。昔からずっとあんた」とは勿論、私である。「と一ノ傘副司令で持ちつ持たれつ上手くやってきたから尚更。工業地帯の防衛だって、ちよつと距離は離れてるけど私たちだけで十分やれるって思ってる。自惚れじゃなくて、ほぼ全員の認識は一致してるわ。面倒臭いって声も同じくらい多いけど……まあ、私たちはそんな感じ」

実にあつさりと漏らす叢雲の話は、今に限らず貴重なものばかりで

ある。

てんでバラバラで言うことを聞かない連中に情報を流し、情報が鮮度を失う前に反応をまとめる。これは容易なことではないどころか私や他の連中には不可能な仕事である。百を超える有象無象は一人一人に考えるところがあり、ひねくれ曲がった球磨や悪運の化現である山城、頭のおかしい大井、営倉で罵り合う空母連中、鋼の如く動かず働かない日向……その他諸々、考えるだけで目眩がする阿呆共を整列させられるのは叢雲ただ一人をおいて他にない。

それに私が新たに防衛海域を増やすと言えば、阿呆共はブーイングしか返さないだろう。そのことを（私としては情けない限りだが）叢雲も理解してくれているらしく、根回しを積極的に行ってくれる。私の叢雲以上の秘書艦が古今東西に存在するだろうか、いやいやない。

叢雲は話を続けた。

「だから私たちが演習で、あまり良いやり方じゃないけど徹底的に脅して大人しくさせるか、上手くいけば演習結果が上層部に人事異動を掛け合うための材料になるかなって」

「成る程なあ。相手は知らんが万に一つも負けないであろうし……ん？ 演習？」

電は面白がって椅子をガタガタ揺らした。

「ですので、今度の演習で天照大艦隊の圧倒的な力を見せて、しばらくあちらの司令官さんには執務室にひきこもって掛け軸コレクションでもやってもらおうかと」

「待て。演習とは何のことだ」

電は「やらないんですか？」と首をかしげ、叢雲も片方の眉を上げた。

「演習も何も、相手が誰だかすら知らなかったんだぞ。そもそも、なぜ二人が知っていて私が知らないのだ」

叢雲が不思議そうに答えた。「昨日の夕食の時、白露が食堂で話してたからみんな知ってるわよ。誰が相手になってやろうかって、ちよつとした騒ぎになって……ねえ電」

「なのです。一瞬で壊滅させるかジワジワ追い詰めるかで盛り上がり

てましたが……」

私はどこぞの社名ロゴが名入れされた三色ボールペンを机に叩きつけた。昨日は外に出る用事があつて、秘書艦だった奴に電話番号を任せた。任せた私が馬鹿だった。もし奴が電話に出ることを怖がるタイプだったらまだマシで、奴は相手が上層部であつても平気で世間話を始めるタチなのだ。勝手に通話して自己完結してしまうのが奴だ。話し好きなくせに肝心の私への報告は忘れるのだ！

私がぶるぶる震えていると、叢雲が静かに席を立った。

「えつと……白露、呼んでくるわね」

【4】

「明日？ わざわざココに来るん？」と一ノ傘は目を丸くした。

「打ち合わせをしたいらしいぞ。我々にとっては急な話だがな、相手はしっかりと、あの阿呆——」会議室の隅に正座させている白露を指さした。「に連絡を入れていからな、延期はできん」

私は叢雲を、一ノ傘は秘書艦の吹雪を連れて、会議室で頭を抱えた。私と一ノ傘の二人が黙っているのも、ホワイトボードの前に立った記録係の吹雪は日付と参加者（白露の名前もあつた）を書いただけで、他に何を記録すればよいのか分からず困った様子だった。

「あの……そんなに大変なことなんでしょうか。顔合わせと演習の打ち合わせ、なんですすよね」

「そうやけどさー。色々気まずいやん」

「一ノ傘が弱気になつてどうする。お前は得意じゃないのか、エリートだかフラッグシップだか……」

「キャリアね」叢雲がフォローを入れてくれた。

「そう、キャリアみたいな人物を上手く転がすのは得意だろう」

「ブチ殺しちやろかアンタ、人をなんやと……ワタシ他の用事入れるけん、アンタだけで対応してくれん？」

「一ノ傘が出ないでどうする。元々お前がいた鎮守府に着任した奴だぞ」

「……まあ、そうですね。せっかく司令官が二人いるんですから、一ノ傘副司令が無理に出る必要はないですよね」

「あ、はいはい！」と白露が挙手した。

「でも電話だと一ノ傘提督を会議に出せって言ってたよ。一ノ傘副提督は副提督で、提督は竹櫛提督だって教えたけど、それでも一ノ傘提督を出せ！　って、なんか怖い人だった」

白露は他人事のように言った。床に転がっていている表情は見えないくとも一ノ傘、叢雲、吹雪が凍りついたのが分かった。

「……白露ちゃん、そんな大切なことなんで黙っとつたん」

「黙ってなんかないよ。今思い出したんだもん」

「そっかー、今思い出したかー。……吹雪、白露ちゃんを営倉に連行」
「なんで!?!　ちよつと忘れてただけ、え、冗談でしょ吹雪ちゃん、痛つ、ねえ足がししびれて、ねえ！　ちよつと！　嘘、いやだ営倉なんて嫌だー！　助けて叢雲、提督、明日のコンサ——」

白露を襟を掴んで引きずっていった吹雪が会議室の扉をバタンと閉じた。廊下でも騒ぎ続ける白露の声が聞こえなくなつた頃になつて、ようやく私は椅子に這い上がれるまで回復した。

ストーカーに怯えるように縮こまっている一ノ傘に、叢雲は氣を使った。

「あ、明日は私と司令官で対応しますから、一ノ傘副司令は執務室で待機しておいて下さい。……えっと、護衛に霧島を付けますので」

【5】

一ノ傘という人物はあらゆる面で誤解を招きやすく、それは自らが望んでいるうちに度が過ぎてしまった、というようなことを酔った時に言っていた。

私から見ればまったく阿呆らしい限りだが、それが持病であるのかのように策を弄したり、あるいは犬が腹を見せるように下手に出るのはどちらも一ノ傘が相手との立ち位置を調整するためである。私が観察すると八方美人になり、それが叢雲であれば仕事の出来る女性、球

磨であれば遊び相手、雷であれば愛人、電であればセクハラ魔が少しはマシになった程度、どこぞの鎮守府の提督であれば女でありながら戦場に立つさながらジャンヌ・ダルク、上層部の連中からすると従順で器量が良く餌をやれば懐くが手を伸ばすとスルリと逃げる猫のよう。どれも一ノ傘が相対する人間一人一人を相手に作った仮面である。では私が言った八方美人というのが正しい人物像かといえば、それこそ一ノ傘が望まぬうちに作ってしまった仮面だった。

器用な人間であれば鎮守府に着任していきなり資材を全て溶かしたりなどするものか。私の艦隊から当時では最も助っ人になりそうだった電を派遣して以降のトラブルを抱え込むことなどなかったはずだし、「お前には向いてない」と私の助言を聞いていれば今頃は軍人ですらなかつたはずだ。仲が良かった従姉妹の姫乃にも反対されていた。柔らかくも強かな姫乃の前ではいかなる仮面も用意できずに、反射的に反発することがよくあった。そして踵を返した途端に溝に嵌って身動きが取れなくなったところに散歩中の大型犬に襲われる。それが本来の一ノ傘である。

「鉄ちゃんはまだ少し落ち着かないと、ケガ、しちやうよ？」

大型犬の頭を撫でながら諭す姫乃を、一ノ傘はべそをかきながら見上げた。

【6】

慌ただしく今日の出撃部隊を送り出し、私と叢雲は会議室に控えた。相手も秘書艦を一人連れて来るだろうから会議室の中央に長机を二つ並べ、椅子は四つ用意している。

客人が面会を所望している一ノ傘は第二執務室に電と雷を連れて、本日の一切の職務を放棄して籠城に入った。電話をかけても代わりに雷が出る徹底っぷりだった。

『今日は副司令官はお休みなの。静かにさせてよね、もう』

「だから外に出かけたらかどうかと言っただろう。出張先の台風をバスの中でやり過ぎそうとしているようなものだ」

『出先で誰が守ってくれるっていうのよ。私がいるここが世界で一番安全なんだから』

頼もしい限りである。

『それと警護に霧島を付けてくれるんでしょ。早くしてよ、危ない奴が来てからじゃ遅いのよ』

「雷が守るんじゃないかったのか」

『念には念を入れないとダメじゃない。一ノ傘司令官に何かあったらどうするの！』

「うるさい電話で騒ぐな。ちよつと一ノ傘と代わってくれ」

『今日は高尾山に旅行に行つてて、期待がはずれてガツカリするって設定なの。だから第二執務室には私と電しかいないの』

「ガツカリする設定は必要か？」

『こういう事はリアリティが大切なの。いい？ 相手に一ノ傘司令官のこと聞かれたら「今頃はケーブルカーで登らなかつたことを後悔しているでしょう」って言うのよ』

電話の向こうから『そげん軟弱やないんやけど……』と聞こえてきた。

『今の訂正。「やっぱり高尾山よりスカイツリーのほうがよかつたかなあと後悔しているでしょう」って言つといて』

「どうしても高尾山をつまらん場所にしたいらしいな。恨みでもあるのか」

『じゃあ例の男が鎮守府から出て行ったらまた連絡して』

護衛に霧島をつけるとは叢雲が一ノ傘を気遣つて言ったことであり、無視するわけにはいかなかった。かといつて第二執務室の扉の前にずっと立っている、不審者が来たら殴り倒せ、など下らん命令はできず、金剛型姉妹に隣の第一執務室——私の部屋の留守を頼んだ。今日の来訪者がきな臭い男らしいことは艦娘たちには既に知れ渡っており、金剛たちは二つ返事で引き受けた。

「任せてクダサーイ。怪しい奴が来たら提督の軍刀でぶつた切つてやりマース」

「あれは……折れた。この前……」

「Oh……」

切ない気持ちになりながら金剛型の四人に留守を任せ、今は会議室で待っている。鎮守府の門に島風と天津風を待たせているが、予定の時間から三十分が過ぎている。あちらから一方的に予定を組んでおいて、こうも大胆に遅刻する輩にまともであることは期待できそうもなかった。きつとしようもない男に違いない、その相手をしなければならぬと変に緊張して手が汗ばみ、イライラするばかりだった。叢雲も黙っているが、ペンを出して手先でクルクル回したりと珍しく落ち着きがない。

廊下から足音が聞こえたかと思うと乱暴に扉が開き、四十くらいの男が一步入ってきた。男の背後には艦娘らしき者がおり、さらにその後ろで島風と天津風が早くも疲労困憊といった風の顔をしていた。

男は私を、次に叢雲を不躰な視線で眺め回し、言った。

「おい、一ノ傘はどこだ」

〔7〕

夷川提督は呆れるほど前評判通りの男だった。

見た感じは四十年代前半だが、渋柿を嫌々食べ続けているような顔の造形をしているため五十、六十と言われても納得できる。背丈は私より僅かに低い。両手の指が僅かに震えている。私と同じ軍服を着用しているものの、どこかみすぼらしい雰囲気がまとわりついている。室内では帽子をとれと言えないのは、軍の帽子では隠しきれない不毛の地が見て取れたからである。

夷川が同伴してきたのは、着任してから最初に秘書艦になったという正規空母で、名を『葛城』と言った。青白い髪を波立たせて長く伸ばし、藍色の道着袴から細く出している肌は不気味に白い。特に異様なのは我が艦隊の誰よりも鋭い眼光である。全身は青白く暗いのに瞳だけはサファイアのように輝き、私と叢雲を冷静に観察しているようだった。

空母葛城は夷川提督にはまったく不釣り合いだと断言できる。木

刀を持ったこともないような男が斬馬刀を担いでいるような、武装と使い手に天と地の差があるように見える。葛城の練度は相当のものだろう。下手をすると蒼龍と飛龍に並ぶか、それ以上かもしれない。叢雲も葛城の異様さに気づいたらしく、私と二人でそちらにばかり気を取られていると、椅子の数をかぞえたらしい夷川が喚いた。

「おい、てめえ、なんで一ノ傘がいないんだ」

葛城も会議室に入って扉を閉めたが、夷川と同じく座ろうとはしなかった。

夷川提督は体のあちらこちらから臭気を発しているらしく、私は鼻をつまみたくなり、こっそり手で空気をはらうとついでに緊張も雲散霧消した。

「一ノ傘は先週から長期休暇中でした。今頃は、あー、高尾山で——」

「馬鹿かお前！ 電話でいるつつたのはお前だろうが、ああ!？」

まったくその通りだった。白露が電話に出たことを私も雷も誰もが忘れていた。よくもまあ、こんな器の小さそうな男に言われるまで気付かないものだ和我ながら感心してしまった。

私は叢雲を背後に隠しながら、適当に思いつくまま、出来る限り男を刺激するまいとした。

「冗談です。しかし一ノ傘は昨日から体調を崩しておりましてな。演習の打ち合わせなら私が一人おれば十分でしょう」

「分かんねえのかお前、一ノ傘を出せつつつてんだよ」

「一ノ傘に何か用事でも？ 彼女が復帰したら伝えましょう」

「今すぐここに呼べ！」

夷川は棒のような足で椅子を蹴り、椅子は長机にぶつかって倒れた。背後で叢雲が縮こまり、私は雷の過剰なまでの防衛は間違いじゃなかったとうんざりした。頭のおかしい人間は刺激しようとするまゝいと初めから破裂することが決まっているものである。それだけは程度の差はあれ我が艦隊の阿呆共と変わらない。

夷川は腰のあたりに手を突っ込んでまさぐると、拳銃を取り出し、ひけらかすように私に向けた。確認するまでもないだろうが、球磨から聞いた無駄知識が役に立つ。銃口からやたら細い銃身が見えたら

エアガンで、そうでなければ――

「ほう、本物の鉄砲か。どうやら玩具の脅しではない様子」

拳銃を構えて優位に立つことで少し気を良くしたのか、夷川は気色悪い笑みを浮かべた。

「そうだ。やっと分かったかノロマめ。それとな、いいことを教えてやる。俺は演習の打ち合わせに来たんじゃねえ。演習をしに来たんだけ。そこに立ってる空母はなあ――」

夷川は無駄に勿体ぶって「深海棲艦、なんだよ」

「ふん。そんなことだろうとは思った」

「一ノ傘の演習相手に連れてきた。艦娘じゃねえ、一ノ傘本人に戦わせるんだ。海でも深海棲艦に囲ませてある。ヒヒツ、逃げ道はねえぞ」

葛城と呼ばれた深海の空母は扉の前に立っていて、叢雲が睨みつけている。叢雲は相手が深海棲艦と分ければ肝が据わったらしく、静かに観察を続ける葛城に威勢を譲らない。

私と叢雲は背中を合わせた。夷川を部屋の奥の席、窓側に行くよう促してしまったのは失敗だった。逃げ道を夷川と葛城に塞がれている。

私は情けないことに打つ手を思いつかなかった。夷川は拳銃を片手で私に突き付けるように持つており、扱いにまったく慣れていないことが分かる（これも球磨から聞いた無駄知識である）。体を横に動かせば弾はまず当たらないだろう。しかし私と叢雲は夷川と葛城に挟まれており、葛城を睨む叢雲は夷川に背を向けている。叢雲を狙われるわけにはいかない。

夷川よりも何をしでかすか分からない葛城のほうが脅威だ。陸に上がった深海棲艦に何ができるのかまるで分からず、だからこそ艦娘の叢雲は夷川を無視して警戒している。

海に深海棲艦が包囲網を敷いているという話は本当だろうが、無能と噂の夷川が言うことである。葛城が深海棲艦の指揮をしていて、夷川をただ陸を攻めるための都合のよい捨て駒として扱っている可能性が高いが、海から動きがあれば一ノ傘が気付くだろう。今は目の前

の危機をどうにかすべきだ。

夷川と葛城のどちらがいつ引き金を引くとも分からず、とにかく何か話をして気を逸らすしかなかった。

「深海棲艦にコネがあるとは羨ましい。その葛城とはどうやって知り合ったのだ？」

「一ノ傘の次はお前がいい。海の底でいくらでも会わせてやる」

「冥土の土産、ならぬ深海の土産に聞きたいな。一ノ傘は阿呆だがこれほどの恨みを買うような奴ではないはずだが」

「一ノ傘はクスだ！ ウスノ口だ！ あいつの支援が遅れたせいで海鳥が死んだんだろうがよ！ 海花も、娘が二人とも死んだんだぞ！

お前みたいな若造に分かるか!? ええ!? そうだ、あの時海鳥の遺体を持って帰ってきた奴も出せ！」

夷川は拳銃の重さで腕がだるくなったらしく、右手から左手に持ち替えた。あくまで片手で持って威勢を誇示したいらしかった。

「あー事情があるんだな。なるほど。その海鳥さんと一ノ傘には」

「ちよつと艦隊が強いからって調子に乗りやがって、自分の戦果だけ稼いで応援は後回しにしやがる。戦闘が終わった後にノコノコやって来て、お前みたいなバカに分かるか？ 精一杯やってみたいな顔して、娘の上半身だけ持って来られた俺の気持ちがおよ！」

上半身、という言葉に引っかけかりを覚え、すぐに一ノ傘が屋上でいつか語っていたことを思い出した。

艦娘がどうやって轟沈するか知つとる？ と一ノ傘は私に聞いた。見飽きるほど送られてくる『慢心、ダメ、ゼツタイ!』ポスターのように言葉を遣しながら沈めるほど戦場は劇的ではなく、一ノ傘が応援に出した部隊は壊滅後の残骸を目の当たりにした。唯一発見できたのは飛行甲板にしがみついた、しかし高雄が持ち上げると胸から下を欠損していたという。一ノ傘の艦隊がブラック化する契機になった出来事である。

後に叢雲から、その話をダシにして上層部を意のままに操っていると聞き、罰が当たってしまったえと考えたものだが、その罰がどうしてだか私と叢雲に当たったらしい。

部隊が全滅するという普通はあり得ない話も、夷川の無能っぷりを伝える評判と一致する。

高雄が発見した遺体は夷川の娘の海鳥で、夷川は部隊壊滅と娘の死を一ノ傘のせいだと考えている。

なんと目出度い逆恨みであろうか。人間もここまで腐れば深海棲艦よりもタチが悪い。

同情の余地が無くなったところで私は再び時間稼ぎの会話を始めた。私も叢雲も丸腰であり下手に身動きが取れず、時間が事態を好転してくれることを願う他になかった。この時間稼ぎもまた球磨が仕事中にペラペラとほざいていた無駄知識に不覚にも頼っているのであり、あんなクマクマ言っている小娘に頼る他ない自分が情けなくて泣きそうである。夷川との戦いは私の脳内で天狗になった球磨との戦いでもあった。

この状況下にある私が知るはずもなく後日また改めて唇を噛むことになるのだが、球磨が無駄知識を吹き込んでくるだけの器でないことは知っているつもりで、侮っていた。

会議室の移動式ホワイトボードの目立たない位置に貼り付けられた小型の機械は、室内の音を拾い続けていた。

【8】

盗み聞きといえば壁や扉に耳を押し当てる方法を想像するが、我が艦隊の艦娘たちは会議室前ではなく食堂に集まっている。皆スピーカーから聞こえてくる会話に様々な表情で耳を傾けている。スピーカーに音声を出力している機械のツマミを球磨が、珍しく緊張した様子で握っている。

盗聴器は軽い気持ちで仕掛けられた。一ノ傘が元々拠点としていた場所には果たしてどのような輩が来たのか、情けないばかりの噂が本当かどうか確かめてやろうと皆が面白がり、手が空いている者はほとんどが食堂に集まった。

『おい、一ノ傘はどこだ』と下品な男の声が聞こえると、あれやこれや

と雑談していた皆が凍りつき、長門などは青筋を立てた。ポップコーンを鷲掴みしながら高みの見物ならぬ高みの盗聴をしていたくせに、一ノ傘に喧嘩を売りに来たと見るとバケツサイズのカップを潰し、他の者を押しつけてスピーカーの前に陣取った。

私の巧みな話術によって夷川が要領を得なくも状況を一通り話したため、密室となった会議室の中の状況は食堂に集まった者たちにおおよそ伝わった。特に旧一ノ傘艦隊の者たちは夷川の娘がどうしたという話が何を指すのかすぐに気づいた。高雄は飛行甲板にしがみついていた艦娘を助けようとした時の、ズルリと軽い感触を思い出して気が遠くなり愛宕に支えられた。海鳥という名前までは知らなかった。

高雄だけでなく旧一ノ傘艦隊の者たちは多かれ少なかれ衝撃を受けた出来事であり、また自分たちの艦隊がブラック化したきっかけでもあったため忘れるはずがなかった。

元から私の艦隊にいた者たちは何やら訳ありらしいことは悟ったが、話を聞いている限りキチガイが深海棲艦を連れて殴り込みに来たらしい、と話を単純に考えた。

球磨がセーラー服の下から大型ナイフを抜いて周囲の者が飛び退いた。

「会議室の敵はクマが殺るクマ」

「ね、姉ちゃんまだそんな危ないモン持って……」

「木曾、手伝うクマ。窓から煙幕を投げ込むクマ。その前に一ノ傘副提督にも状況を連絡して——」

「駄目だ。副提督には知らせず我々だけで処理する」と言い切ったのは長門だった。

「鎮守府が敵に囲まれてるクマよ、いつ動き出すか分からんクマ。部隊を編成して指揮を取る人がいないとダメクマ」

「近くまで来ているのであればこちらも少々出向いて蹴散らせば済む話だろう」

「下手に動いたら叢雲と提督が危ないクマ！ 夷川とかいうのは瞬殺できても深海棲艦は何してくるか分からんクマ」

「球磨、お前は知らないかもしれないがな、一ノ傘副提督はああ見えて繊細なんだ。このような取るに足らない逆恨みで傷つけるわけにはいかない」

「今一番危ないのは叢雲と提督だつたつてクマ！ 陸と海で連携しないと敵の思う壺クマ、副提督に全体を見てもらわんと困るクマ！」
「わからん奴だな。一ノ傘副提督に事を話せば必ず動揺する。この件に限ってはまともな指揮を期待するのは無理なのだ！」

「早く動かないと狂った人間はいつ何しでかすか分からんクマ！」

吹雪：「あ、あの、二人ともちよつと落ち着いてください」

球磨：「このまま落ち着いたら最悪のパターンになるクマ！ もういいクマ、せめて叢雲と提督だけは助けるクマ。ほら木曾、早く来るクマ」

木曾：「ちよ、ちよつと待てつてば姉ちゃん。本気かよ」

鈴谷：「ねえねえ、空母全員で窓から弓で狙撃するつてのはどう？」

陸奥：「二航戦と五航戦は営倉。大鳳は出撃に出てる。蒼龍と飛龍は海戦に備えていてもらわないと」

吹雪：「いえですからあ……もうちよつと穏便にできませんか。会議室の外から説得するとか」

漣：「青葉さん、そういうの得意そうですね」

青葉：「おつと思わぬところから弾が飛んできましたよ？ 青葉が得意なのは取材で、説得じゃありません」

衣笠：「じゃあお色気作戦なんてどう？ ほらあ、ちよつと足柄もいることだし」

足柄：「いい度胸してるわねコンチクショウ。腕切り落としてサイコガン付けてやりましょうか」

川内：「ねえ夜まで待つつてのはどう？ 夜戦なら無敵なんだし」

臯月：「(出たよ川内さんの夜戦万能論)」

望月：「(無視無視。夜戦に付き合わされるこつちの身にもなれよねー)」

長月：「(私一人で十分なんだが……言っても信じてくれるのは時雨と木曾だけだしなあ……他に敵が潜り込んでないか見て廻るか)」

山城：「この夷川って男……扶桑姉さまのこと知ってそんな気がする」

※知りません

天龍：「な、なあ球磨。その、お、オレも加勢してやろうか？　こういうのは人数が多いほうがいいだろ」

龍田：「そうね。天龍ちゃんは鎮守府にテロリストが来た時のために、ばっちり脳内シミュレートしてるものね」

天龍：「なっ、なななに言ってるんだっ！　違えよ！　オレはただ戦鬨に球磨を一人で行かせるのは反対だけで」

暁：「電と雷からメールが来てる。様子はどうかって」

響：「この様子だと勝手な連絡はしないほうがいいな……無難に『順調だ』と返しておこう」

摩耶：「そーいや金剛たちは？　こーゆー時はあいつらが一番騒ぎそうだけだよ」

飛鷹：「聞いてないの？　第一執務室でお茶会やってるわよ。一ノ傘副提督の護衛を兼ねて」

龍鳳：「……さつきから気になってたんだけど……島風と天津風、ちよつと……臭いが……」

島風：「だって臭かったんだもん！　あのオツサン！」

天津風：「腐臭よ腐臭！　ぜったいお風呂に入らない系よアレ！」

あの会議室はもう腐海に沈んだと思って——ぶへっ?!　こつちにフアブリーズ噴かないでよ！」

時雨：「木曾、長月を見なかったかい？　こんな時こそ出番だと思うんだけど」

木曾：「俺もそう思って、さつきまでいたと思ったんだけどよ。クソツ、姉ちゃんじゃ危なっかしいぜ」

初雪：「鎮守府が深海棲艦に乗っ取られたらどうなるの？　私たち雑魚っぽい駆逐艦になるの？」

敷波：「いきなりはならないんじゃない？　こー……ゾンビパニツクみたいに一人……また一人と……」

潮：「ひいひいひいっ!」

秋雲：「どうせなるなら手がある軽巡以上がいいな。深海棲艦でもサークル申込んでできると思う？」

初春：「出来る可能性が1ミリでもあろう思うておるのが不思議じゃ……」

那珂：「まあでもお、本当のライバルは深海のアイドルのヲ級かな」

北上：「どしたん球磨姉。今まで食べてた鮭が代用魚だったって知った時みたいな顔して」

球磨はスピーカーから流れ続ける会話を右耳から左耳へ聞き流し、叢雲不在の艦隊がこれほどまで足並みを揃えられないのかと呆然としていた。自身がそもそも歩調を合わせるタイプでないのはよく分かっている。しかしやるべき時はやるクマちゃんだとも思っていた。それは全くの自惚れだった。

みな危機感はあるも動こうとはしない。長門や高雄などは緊張の面持ちで何ができるか考え込んでいるようだが閃きが期待できる様子ではない。どいつもこいつもどれだけ役に立たんだと球磨は木曾の胸倉をつかみそうになった。

球磨が一人で動けば夷川の一人程度であればどうともなるが、正体不明の深海空母に下手に手こずってしまえば鎮守府が危険に晒される可能性が高い。海にいるらしい深海棲艦らがどれほどの量と質で攻めようとしているか、あるいは罠を張って待ち構えているかもしれない。

深海空母に最後っ屁すら許さないよう狙いを絞れば、その場合はパニックに陥った夷川が確実に銃を乱射する。これだけは絶対にあつてはならなかった。ツマラナイ銃弾ほど下手な場所に当たってしまったものである。

夷川の無力化を再優先に行い、深海空母を仕留め損なった時のために部隊を用意しておく。部隊さえ編成してしまえば敵が強かろうと皆はいつも通り動けるはずであり、大きな損害は出ないはずだった。そんな簡単そうなことすらできず、球磨は己の非力さを嘆いた。

嘆くばかりでは時間が過ぎてゆく。自身の哲学に反することだが球磨はここで初めて、何かくだらないことでもよいからハプニングが

起きて今の膠着した状況が壊れないかと虚しく願った。

【9】

私と叢雲が会議室で命の危機に晒され、球磨が食堂で歯を軋ませている時、そんなことは露程も知らない日向は少し離れた戦艦寮の前で呑気に『試飛会』を開催していた。

『試飛会』とは日向が制作したラジコン飛行機のテスト飛行を行う会である。

日向を除いてたった一人の参加者である最上は旧一ノ傘艦隊がいた鎮守府の提督が来ること、皆で食堂に集まって会話を盗み聞きすることを知っており、日向も一緒に混ざってみないかと逆に誘ってみたものの、

「ほう、そんなことが……ならばやはり航空戦艦の時代だな」

摩訶不思議な理屈で『試飛会』は予定通り開催された。いつものことなので最上も特に期待はしていなかった。

日向が制作する飛行機の機種はいつも自由自在だった。F-22ラプター、Ka-50ホーカム、コンコルド、気球船、果てはハインケル・レルヒエのような珍機体（特に航空戦艦が運用できそうなもの多）などがプロペラ駆動のラジコン飛行機となり、ついでに全機体に例外なく外見を瑞雲に似せる瑞雲化改修を行った。瑞雲ペイントを施されフロートが付いた最新鋭機体はなかなかシユールだった。

今日、日向が飛ばしている機体はA-10サンダーボルトIIという攻撃機である。この機体に関しては以下の文で有名である。

〜今日もA-10学校に朝が来た〜

「お早うクソツタレ共！　ところでジヨナスン訓練生、貴様は昨夜ケンカ騒ぎを起こしたそうだな？　言い訳を聞こうか？」

「ハッ！　報告致します！　磯臭いF-18乗り共がアヴェンジャーを指して『バルカン砲』と抜かしやがったため7砲身パンチを叩きこんだ次第であります!!」

「よろしい。貴様の度胸は褒めておこう。いいか、低空で殴りあうに

は1にも2にもクソ度胸だ。曳航弾をクラツカー程度に感じなければ一人前とは言えん。今回のジョナスン訓練生の件は不問に処そう。だがアヴェンジャーを知らないオカマの海軍機乗りでも士官は士官だ。訓練生の貴様はそこを忘れないように。ではA-110訓、詠唱始めッ!!!」

何のために生まれた!?

——A-110に乗るためだ!!

何のためにA-110に乗るんだ!?

——ゴミを吹っ飛ばすためだ!!

A-110は何故飛ぶんだ!?

——アヴェンジャーを運ぶためだ!!

お前が敵にすべき事は何だ!?

——機首と同軸アヴェンジャー!!!

アヴェンジャーは何故30リなんだ!?

——F-16のオカマ野郎が20リだからだ!!

アヴェンジャーとは何だ!?

——撃つまで撃たれ、撃つた後は撃たれない!!

A-110とは何だ!?

——アパッチより強く! F-16より強く! F-111より

強く! どれよりも安い!!

A-110乗りが食うものは!?

——ステークとウイスキー!!

ロブスターとワインを食うのは誰だ!?

——前線早漏F-16!! ミサイル終わればおケツをまくるツ!!

お前の親父は誰だ!?

——ベトコン殺しのスカイライダー!! 音速機とは気合いが違

うツ!!

我等空軍攻撃機! 機銃上等! ミサイル上等! 被弾が怖くて

空が飛べるか!! (×3回)

このA-110が今、戦艦僚の前を飛行している。ただし機体は例によって瑞雲色に塗装され、ミサイルなどをぶら下げる代わりに水上に

浮かぶためのフロートが付いている。

それほど興味のない最上もA―100といえばアヴェンジャーという単語が浮かぶ程度には知っていた。

無理に垂直離着陸（VTOL）仕様にされたせいで最上の頭上に急降下着陸を試みようとしたF―35や、一般大衆の期待に違わず山城の部屋に墜落したオスプレイとは違い、今回日向が制作したA―10は危なげなく、また会議室の切迫感などとはまったく無縁で平和な戦艦察・重巡察前の空を飛び回った。

しかし日向はどこか不満気に「ふむ……」と唸り、まさか、いやいやまさかと懸念する最上の気分をざわつかせた。

「速度が出ないし高度もいまいち上げられないな。やはりガトリング砲が重すぎたか」

造形に拘る（くせに瑞雲化改修だけは欠かさない）日向がそこを再現しないはずがなかった。懸念が当然の如く当たってしまった。最上は手で陽光を遮るふりをして額に手を当てた。A―10機首の下部から魚雷のように付き出しているガトリング砲はただの飾りではないらしかった。

「なに、心配するな最上。さすがの私でもあのサイズでガトリング砲は再現できんさ。あの七本の砲身はダメーだ」

「そ、そうなんですか。よかつ……」

最上は慌てて口を押さえた。つい油断して日向の言うことに相槌をうつのは非常にまずい。『試飛会』にて最上が喋ると十割の確率で日向が増長して何かやらかすというジンクスがあった。山城の部屋にオスプレイが突っ込んだのも最上がほんの一言、感嘆の声をあげてしまった直後の事故だった。

「あれは一本の銃身に七本の細い砲身の絵を描いているだけだな。弾を発射する時は前部の蓋が開く仕組みだ」

「そ、そうですね。ガトリング砲なんて危ない物、さすがに作りませんよね」

やはり弾は出るのか、と思いつつも最上はホッとした。せいぜいB弾か何かを軽く射出する程度だと思ったからである。

「ああ、威力も当然スケールダウンしてしまう。なにせ弾薬はデリンジャーピストル用だからな」

最上の認識は甘かった。

「本物の弾ですか!？」

「調達には苦勞した。この時世に小さな弾薬など需要は皆無だからな」

「BB弾でいいじゃないですか! 一ノ傘副提督がいくらでも持つてますよ!」

「破壊力のある弾を撃つてこそそのA-10だ。まあBB弾を飛ばすのが存外難しかったというのもあるな。その点、弾薬ならば雷管を叩けばいいだけだし、反動の相殺ついでに自動装填と発射もできる。代わりに金属部品が増えて重くなってしまったがな」

「……まさか本当に撃つ気じゃないですよね?」

「それと一度発射すると全弾を撃ち尽くすまで止まらないのも課題だな」

「撃ちませんよね! ねえ!？」

「A-10 アヴェンジャーの掃射だぞ。見たくないのか?」

「どこ向けて撃つつもりですか」

「フツ、そう心配するな。山城の部屋の窓を的にしたりはせんさ。ちゃんと海に——ん? どこ行つた?」

日向は最上のほうを、最上は日向のほうを向いて話していたため、暫く無視されていたA-10は気ままに何処へとも分からず飛んでいた。日向はラジコン飛行機を飛ばすのにコントローラーを必要としない無駄な特技を身につけているので、まったくの手放しで飛行機を飛ばすことができた。そのため飛行中のラジコンから意識が逸れてしまうこともあり、日向が思い出して空を見上げた時には墜落するコンマ五秒前であったりした。それでも慌てず冷静に墜落を見守るのが日向のメンタルの強いところだった。

ごく普通のメンタルを持つ最上からしたらたまたまったものではなかった。ラジコン飛行機には実弾が積まれている。今までの『試飛会』の中で危険度は異論なく最悪だった。

必死に空に首を巡らせると、微かにブウンと低い音が聞こえてきた。食堂や執務室、会議室などがある総合棟の方角だった。何ができるか思いつかないがとにかく最上は走った。空にA—10のような瑞雲のようなものがいた。コントロールを失ったのか飛行の勢いはそのままに高度を下げて総合棟に突っ込もうとしている。最上は泣きそうだった。

日向は最上の後ろについていきながら操縦を試みたが、どうやら操作範囲外らしかった。もうやだ冗談じゃないよと鼻をすする最上とは対照的に、「操作範囲か……ふむ、検討してみるか」と新たな課題を発見して満足気だった。

【10】

夷川の背後からまったく唐突に、少し大きめの鳥くらいの大きさの飛行機が窓硝子をけたたましく割って入ってきた。さらに間髪をいれず爆竹が破裂するような音がして飛行機の機首から火が出た。それはまさに戦闘機の機銃の如く射撃し、何発かが夷川の銃を弾き飛ばした。だが驚いている暇も喜んでいる暇もなく飛行機はバランスを失い、一度床に墜落すると跳ねて私の左足の脛に衝突した。

「ふぐおっ!?!」

「な、なに!?!」

私と夷川に背を向けていた叢雲には何が起きたのか分かるはずもない。

夷川もいきなりのもので混乱したらしく割れた窓や床に転がった飛行機、足を痛めた私をグルグルと見ていた。窓から一番遠い位置にじっと立っていた葛城は一部始終を見ていたはずだが、反応はなかった。

自分の手に拳銃がないことによく気付いた夷川は硝子片の中に落ちていたのを拾い上げ、私に銃口を向けて混乱に任せるまま引き金を引いた。

カチツ。

先程の飛行機が火を吹いた音とは比較にもならない虚しい動作音だった。夷川は二度、三度、四度と引き金を引いて、ようやく銃が歪に変形していることに気付いた。

「クソッ！」

【11】

これまで私と夷川の会話ばかり拾っていたスピーカーから突然、硝子が割れる音や何かが連続して破裂する音などの騒音が聞こえ、ああだこうだと不毛に言い合っていた皆は驚いて押し黙った。その後、夷川の『クソッ！』と悪態をつくのが聞こえ、球磨は食堂から飛び出した。

「姉ちゃん！ おいつ！」

何か物が壊れる音がして夷川が悪態をついたということは、夷川は間違いなく無力化されている。そう当たりをつけた球磨は廊下を駆けて会議室前に着き、扉に回し蹴りを放った。

【12】

窓の次は木製の扉が真ん中からひしゃげながら飛び散り、同時に球磨が室内に滑り込んできた。手には冗談のように大きなナイフを持っている。

球磨は視線を室内に巡らせ、夷川は一瞥しただけで無視し、初対面の葛城を見るなり躊躇無くナイフを突き出した。

「グマ、アッ！」

その掛け声はどうかと思ったが葛城が前に出した右腕にゴリツと鈍い音がして突き刺さり、何もかも青白い葛城の右の袖が瞬く間に赤くなつてゆく。葛城が声にならない叫びを上げてナイフを振り払おうとすると球磨はあっさりナイフを引き抜き、下がろうとした——かに見えると葛城が仰向けにひっくり返った。球磨が足を引っかけた。葛城の両腕に両膝を乗せて跨り、首にナイフの刃を当てなが

ら球磨は言った。

「海にオマエの仲間は何人いるクマ？ 答えて死ぬか黙って死ぬか、好きなほうを選ぶクマ」

「ちよ、調子に……艦娘如きが調子に乗ってんじやねえぞお前！ お前も一ノ傘と同——！」

威勢だけは良い夷川をようやく冷ややかな目でじっと見た球磨は、ナイフを逆手に持ち替えて葛城の二の腕めがけて振り下ろし、葛城の耳を塞ぎたくなるような絶叫で夷川の言葉をかき消した。

「今忙しいクマ。コイツが死んだら次はオマエに聞くから、後で相手してやるクマ」

赤黒く濡れた大型ナイフを見た夷川は何かをぼそぼそ言いかけて、球磨を避けるように会議室から走って出ていってしまった。

【13】

私が球磨をやり過ぎないように制止すべきか、夷川を追いかけるか逡巡している時、最上は割れた硝子窓から会議室内を覗き見ると、室内は想像以上——どころの事態ではなかった。

窓硝子を割ったのはA—10（瑞雲風）で間違いなさそうである。床に翼が折れて転がっている。

今日は旧一ノ傘艦隊がいた鎮守府の提督が来ていて、この部屋で打ち合わせをしているはずだった。そこに（日向が）実弾発射機能付ラジコンを突っ込ませてしまったのだから冗談では済まされない。おまけに客人はキャリアなのだという。怪我をさせてしまえば（日向が）一体どうなってしまうか想像もつかない。

しかしラジコンが突っ込んでしまったのは事実で、仮にガトリング砲モドキまで暴発してしまっただとして、それが原因で果たして今この状況にまで至ることはあり得るのだろうか。

ぱっと見はとてもシンプルである。球磨が知らない女性に馬乗りになり、やたら大きなナイフを突き付けている。球磨のセーラー服に血がついていることから、どうやらもう怪我をさせたらしい。

提督と叢雲が客人と会議をして、そこにA-10（瑞雲風）が突撃し、球磨が恐らく客人らしき人をナイフで切りつけている。いったいどこから球磨とナイフが出てきたんだと最上はミステリ現場に居合わせるように頭を捻った。

「どうした、随分と乱暴なことをしているじゃないか」

こっそり室内を覗きながら考える最上とは対照的に、追いついた日向は堂々と割れた窓越しに室内に声をかけた。どれだけ鋼メンタルなんだこの人は、と最上は呆れた。

「この飛行機は日向のものか。いや助かった。感謝するぞ」

提督は最上のどの推理とも外れて、皮肉でもなく日向を持ち上げた。

「あれこそ神業だった。しかしよく夷川の銃だけを狙撃できたものだな。大したものだ」

「うん？　——まあ、そうだな、航空戦艦だからな」『航空戦艦』は無闇に会話を成り立たせる便利な単語になっていた。

どうやらガトリング砲モドキは暴発していたらしく、提督や叢雲に当たっていた可能性も十分あったのだが、最上は一切合切を『航空戦艦だから』ということにしておいた。

「ところで君、球磨が襲っているあれは誰だ？　出血が酷いじゃないか」

「深海棲艦の空母だ。夷川という男が連れてきてな」

「深海棲艦？　いや普通の艦娘だぞ」

「男がそう言って連れてきたのだ。それに見ろ、なんとなく青白い」

「それは山城は幸薄いから深海棲艦だと言っているようなものだ。おい球磨、いい加減どいて傷を塞いでやらないと手遅れになるぞ」

「知らんクマ。——で、オマエはだんまりを決め込むクマ？　まあ逃げたオッサンのほうが口は軽そうクマ。どうせ指の爪一枚くらいで泣いて喋るクマ。けど、全部剥がしてもクマは——」球磨のこれ以上の豹変を遮るように、葛城は荒い呼吸の合間を縫ってこの日初めて口を開いた。

「深海棲艦は、いません」

「あ？　なんか言ったクマ？」

「この、はあ……この鎮守府を狙う、深海棲艦はいません」

球磨はナイフの柄で葛城の顔面を叩き潰す勢いで殴った。葛城の口から悲鳴ですらない音が漏れた。とても最上が口出しできる雰囲気ではなく、明るかった球磨の豹変した姿は悪い夢だと、直視できるものではなかった。

「オマエがちゃんと喋れるみたいでクマはとっても嬉しいクマ。お話は大切クマ。みんなが話し合いで物事を解決すれば世界は平和になるクマ。それじゃあ、10数えるうちに本当のことを話すクマ。『お話は大切』、これをよおく頭に刻んで残り10カウントの人生を有意義に過ごすクマ。10、9、……」

「ぼ、僕がお父さんを騙したんです！　艦隊を用意しろって言われて」

「6、5、……」

「でもできるわけない。だから準備したってお父さんに嘘ついて……」

「1、0。嘘でもせめてもうちよいマシな嘘が聞きたかったクマ」

カウント中ずっとクルクルと回っていたナイフが逆手でピタリと止まり、葛城の喉を目掛けて振り下ろされた。提督が「待て！」と叫んでも止まらず、最上は目を瞑った。

すぐに「なにをするクマ！」と球磨の声が聞こえ、最上は恐る恐る目を開いた。球磨の腕にしがみつくように叢雲がナイフを止めていた。「無事か!？」

それから長門を初めとした大勢が会議室に押し掛けてきた。見知った顔が大勢現れたおかげで安堵したのか、ようやく最上は何が何だかよく分からない状況を、何が何だかよく分からないなあど冷静に想うことができた。

【14】

悪運だけは強いのか、それともこの時点で大人しく捕まっておけば良かったのかは誰にも分からないが、会議室から飛び出した夷川は目

当ての一ノ傘を探して走った。会議室も食堂も総合棟の一階にあり、夷川が案内板を見て階段を駆け上がるのがあと二、三秒遅ければ食堂から出てきた艦娘たちに見つかっているところだった。

総合棟はエレベーターなどという気の利いたもののない四階建てであり、丁寧に四階にある執務室への順路が矢印で示されている。ずいぶん以前に誰だったか阿呆が「執務室の場所が分かんなかったから、テヘツ☆」と仕事を放棄したため、案内板（DIY）を用意して執務室とそいつの部屋を何往復もさせる訓練を行ったりした。従って部外者であつても執務室へは迷うことなく赴くことができ、さらに人員はほとんど食堂にいるか会議室にいるか出撃しているかで、階段を駆け登る夷川と出会う者はいなかった。

息切れしながら四階に到着した夷川は深く考えず『第一』執務室へ飛び込んだ。案内板が作成された頃はまだ一ノ傘の艦隊とは統合しておらず、夷川もまた遠い他の地で艦隊を指揮していたであろう。後に『第一執務室』『第二執務室』ができてても部屋は隣接しているため案内板の表記を変える意味はなく、そもそも今更誰も気にも留めなかった。

夷川が飛び込んだ部屋では金剛型四姉妹が紅茶と菓子を置いた丸テーブルを背にして、持ち込んだテレビとゲームキューブでスマブラDXをしていた。

四姉妹の中で流行っているスマブラDXは比叡vs他三人、というパワーバランスがようやく崩れようとしているところだった。比叡が操るマルスから榛名のピカチュウはどうか距離を取り、入れ替わるように金剛のキャプテン・ファルコンがこれ幸いと「くたばるネ！

Falcon——！」

「援護します……が、だから姉様はファルコンパンチばかり狙いすぎです」

カウンターを狙うマルス目掛けて、霧島のネスが援護には頼りないPKサンダーをよろよろと放った。

金剛、榛名、霧島はこれまで繰り返し返していた闇雲な総突撃玉砕から、どうやら波状攻撃が有効であることを無意識に学び取り、他の誰かを

狙っている比叡の背後を狙うようになった。

まだキャラ毎の特性を理解するまでには至っておらず、例えば金剛はポケモンが二匹以上選ばれる対戦では決まってミュウツーを選び、「下等ポケモン共が、最強とは何かを教えてやりマースー」と息巻くくせにシャドーボールを放つくらいしかやることがない有り様である。それでも扱い易いC・ファルコンを選べばCPU程度なら勝つことができ、ヒラヒラと攻撃を見切ることが得意とする比叡を相手に三人がかりとはいえ実力は伯仲している。

金剛は豪快系のキャラ、榛名はカワイイ系、霧島は『ターゲットをこわせ!』が好きなのでどのキャラも満遍なく使う。ただし三人ともマリオだけは頑なに使おうとはしなかった。比叡から最もシンプルで使いやすいとの説明を受けて、じゃあ永遠に使うことはないとへそ曲がりな三人は、立派なヒゲを生やした赤い配管工を今日までCPU専用キャラだと決め付けてきた。

「いやー最近のお姉様のファルコンパンチは冷や冷やさせられますよ」

「NOOOOOO!! とかいいつつ戻るの邪魔してんじゃネーヨ! まだ50%もなかったノニ!」

残り一機となったC・ファルコンが再出現し、性懲りもなく『Falcon——!』とタメに入った時だった。

執務室の扉が乱暴に開かれ、床にぺたんと座っていた四人が背後を振り返ると、夷川が息を切らして四人を見ていた。

『Punch!』

発酵しそうな汗を吹き出し臭い息をフシューフシューと吐き出す男の唐突な登場はまさにファルコンパンチのようなインパクトがあった。マルスが場外へ吹っ飛ばされた音がして比叡は慌ててゲームを一時停止した。

金剛は露骨に一ヶ月寝かせたカレーを見るような目をして鼻を掴んだが、夷川は四人の反応など目に入らなかつた。

「お前ら艦娘だな、一ノ傘をどこに隠した」

呆然とする金剛たちに見られながら夷川は執務机の下を覗き見た。

この執務室で人が隠れられそうな場所などそこくらいしかないからである。人が隠れられる大きさの棚もあるにはあるが、キングファイルで埋まっただけで扉が閉まらないような状態だ。従って夷川は再び金剛たちに聞く他にやる事がなくなる。

「一ノ傘を出せ。ここにいるんだろ？あ、あ、ああ!？」

夷川が凄んでみせても金剛たちには何処吹く風で、夷川が軍服を着ていることに霧島は気付いた。

「この方、今日打ち合わせに来るといふ司令ではないですか？」

「あーたぶんそうネ。じゃあこのオツサンが鎮守府のお隣りサン？」

え、私イケメンがよかったデース」

「うわあ……やっぱ一ノ傘副司令のストーカーっていう感じですね」

「二人とも、本人の前ですよ」と言いつつ榛名も蒸された空気を顔に浴びて「うえぶ……」顔を背けた。

「早くしろオラ！早くしないとお前らを——」

壁に飾られた軍刀を見つけた夷川はそれを掴み、生意気な艦娘を脅すつもりで引き抜いた。しかし装飾品となっていた軍刀『丑の刻摩天楼』は翔鶴の弓に負けて半分に折れてしまっていたのだ。やけに短い刀身に夷川は呆気にとられ、金剛たちは一斉に大笑いした。

「てめえら……もう許さねえからな！」

折れていても刃物は刃物。鞘を投げ捨てた夷川は金剛たちに近づき、一番か弱そうな眼鏡をかけた女の頭に刃を振り下ろした。

夷川が標的に霧島を選んだ理由が『眼鏡をかけているから』だったことを、霧島は男の視線から正確に見抜いていた。人を見かけで判断する人間は扱いが楽でいい。下手に金剛、比叡、榛名を狙われるよりもずっといい。

夷川が霧島に狙いを付けて『丑の刻摩天楼』の亡骸を振り下ろすまでの間に、霧島はゲームキューブから全てのケーブルを丁寧には抜いていた。そして夷川が振り下ろす刃を、掴んだゲームキューブで薙ぎ払った。

ゲームキューブはNINTENDO64の後継機であり任天堂がロムカセットから光ディスクへと移行した意欲的ハードウェアであ

るが、目立った売上は先述のスマブラDXくらいのもので（作者はFCCをオススメする）不振に終わり、任天堂は次世代機のWiiで猛烈に巻き返すことになる。ゲームキューブ用ソフトはそれほど作られることなく、延々と続くゲーム業界の歴史の足跡の一つとなった。

PlayStation 2の影で比較的ひっそりとしていたゲームキューブだが、他のハードには決してない異常なほど優れた、ある隠された特徴があった。

霧島の右の豪腕によりハンマーの如く振られたゲームキューブは軍刀と衝突し、鋭利な刀身を僅かも残さず削いでいった。パキンと軽い音がして折れた刀身が宙を舞って壁にぶつかり、ゲームキューブには擦り傷が僅かにできただけだった。

伝説の鈍器、ゲームキューブ。

その名の通り立方体に近い形状はゲーム機としては異様に見えるが、背面にある取っ手を掴むことでゲームキューブの隠された秘密を窺い知ることが出来るだろう。そもそも据え置きで使用するゲーム機に取っ手など必要であるはずもなく、しかもゲームキューブはせつかく全体をコンパクトにまとめているにもかかわらず、固定式の取っ手を付けることで収納性を損ねてしまっている。何故かと誰もが首を傾げたが一部の者はなるほどと目を光らせ、霧島もまた眼鏡を光らせた。取っ手を握ると重さも本体バランスもメリケンサックの如く丁度良いのだ。それだけではない。比叡が誤って出っっぱなしにしていたゲームキューブを蹴ってしまったことがあったが、壊れたのはゲームキューブではなく比叡の小指のほうだった。繊細であるはずの機器が外部からの衝撃に無駄に強いのだ。

持ち易く、頑丈で、ついでにゲームもできる。これが武器でなくて何なのだ。

刀身の柄にすぎるように握ったまま何が起きたのか理解できないでいる夷川の前に立った霧島は、ゲームキューブを引いて構えた。

「金剛姉さま。どうやら本当に不審者が来てしまったようですが——構いませんね？」

「This party's getting crazy……やつてしまっな！」

霧島の行動は早かった。夷川に反応させる暇も与えず腹にゲームキューブを打ち上げるようなアッパーを入れ、夷川の体が宙に浮いた。夷川の口から汚いものが吐き出され、それを避けながらさらに高く左拳で突き上げた。意識があるまま床に下ろす気はなかった。

「くたばれえー！」

落ちてきた顔に破城槌のような右ストレートを打ち込み、ゲームキューブが僅かに歪んで取っ手が外れた。顔面を平面に押し潰された夷川は柵に突っ込んでファイルを散らかし、その中に倒れた。霧島の手から離れたゲームキューブはサイコロのように転がり、止まる前にスマブラDXのディスクを吐き出した。

【15】

会議室には三人の提督と三人の秘書艦がそれぞれ向かい合って座っていた。私の隣には叢雲が座り、一ノ傘の隣には電でも雷でもなく何故か球磨がいる。自分の目で見ないと信用できないから、だとか何だとか。

「まさか本っ当に来るとは思わなかったクマ。ここまで来れた度胸だけは褒めてやるクマ。でも少しでも怪しい動きをしたら——」

服の下にナイフを隠しているぞアピールをする球磨を「こらっ」と叢雲がチョップで諫めた。

「もう二ヶ月も前の話でしょう、いい加減に水に流しなさい」「だって……クマ」

あの事件の後、大型ナイフを持って返り血を浴びた球磨は、現場を見た者からしばらく怖がられるようになった。『意外に優秀なクマちゃん』から『野生に目覚めた熊ちゃん』に見えるほどの格闘をしたのだから当然といえば当然だった。格闘攻撃に秀でる球磨も露骨に避けられる精神攻撃には弱いらしく、球磨型姉妹にしばらく慰められていた。そんな球磨に、気遣ってのことは分からないが、声を掛け

たのは叢雲だった。なんと球磨に、ナイフの使い方を見せてくれ、と食堂で皆が見ている中で頼んだらしい。何故そんなことを始めようと思ったのか私には教えてはくれず、球磨と叢雲のトレーニングが始まった。ゴムのナイフを持って本格的に技を磨く二人は日増しに興味を集め、いつの間にか参加者が増えていった。同時に球磨を避ける者もいなくなっていた。これが狙いだったのかと叢雲に聞くも、未だ何も答えは聞けていない。ただいつも右の太腿に小さなホルスターを常備するようになった。

球磨の獅子奮迅の活躍で聞き出した通り、我が鎮守府を狙う深海棲艦は索敵の結果、一匹も存在しなかった。あの日の敵は実質的に夷川海司ただ一人だった、ということになる。夷川はひたすら迷惑なだけの男だった。霧島に顔面のパーツを平たく『ならされた』おかげで視覚・嗅覚・味覚を一度に失ったことは自業自得とはいえ哀れではあるが、奴が居座る予定だった鎮守府は工業地帯の防衛の要所であり、そこを根城にして我々人類に喧嘩を売った罪はあまりにも大きい。私を含めた関係者はあつさりと哀れみを忘れ、夷川の今後についてもどうでもよくなっていた。

この二ヶ月のほとんどは乗り込んできた捜査員への対応と工業地帯の防衛に追われていた。海路でそう遠くないとはいえ作戦としては長期遠征となら変わらず、しかも戦艦や空母のような大型艦を多数出さなくてはならないため指揮は大いにまごついてしまった。一時的でいいから元の居場所に帰れと一ノ傘に言っても「いっぺん移ったら二度と戻れなくなるに決まるとるやん。電みたいな目には遭わんよ」と返された。電を戻させまいとした張本人がいけしやあしやあとよく言う。まあ自分の命を狙った男が一時でも縄張りとしていた場所に足を踏み入れたくないのは私にも分かるつもりである。

ここ二ヶ月の苦労も今から始める防衛引き継ぎ会議であらかた終わる。新たに着任した提督——白が眩しい下ろし立ての軍服を着こなしたオカツパ頭、着任して間もないというのに落ち着きっぷりは私や一ノ傘と遜色なく、物柔らかに微笑む一ノ傘姫乃ならば新米であっても上手くやってのけるだろう。

「私はまだ納得しとらんのやからね」と一ノ傘鉄子はここにきてまだ駄々をこねた。

「なんで傘姫が軍の仕事やるんよ。売店のバイトでもしときやあいいのに」

「鉄ちゃんのコネで、だよ。偉い人が鉄ちゃんのためにつて、身内人事してくれただから。次にどんな人が着任したつて、絶対に信用しない、でしょ？ その点、私ならよく知ってるし、全然問題ない、よね？」

一言一言を言い聞かせるように返す。

どちらの苗字も一ノ傘であるため、二人が揃うとどちらをどう呼ぶべきか迷う。

「昔みたいに姫乃・鉄子つて呼べばいいじゃない、竹櫛弧域くん？」
「何年前の話だ。いやその前に私は竹櫛と呼べ」

一ノ傘（訛りのある方）の化けの皮を剥がす一ノ傘（言葉を区切る方）は実は私もあまり得意としていない。いや、記憶にある限り一ノ傘姫乃を対等以上に相手取れる人間はいなかった。軍から信頼の厚い一ノ傘家系での身内人事とはいえ、一ヶ月前まで軍関係者ですらなかった者が曰く付きの鎮守府を任されるなど普通は考えにくい。傘姫（一ノ傘に倣つてそう呼ぶことにする。というより今更になって電大好き一ノ傘鉄子を「鉄子」などと呼ぶ気にはなれない）が強引に入ってきたことは想像に難くなかった。

「失礼なこと考えるねえ、竹櫛くん。私は新米なんだから、今日こうしてベテランの皆様にご助力をお願い、しに来たんだよ？ この部屋で私一人だけが経験、無いんだもん。だから私と——」

傘姫は連れてきた秘書艦、頭頂から足先まで青白く、針の筵に座らされてオドオドしている正規空母の肩に手を置いた。

「葛城ともども、よろしくお願いします、ね」

余所余所しく傘姫が頭を下げるのに続いて葛城は、机に頭を叩きつけそうな勢いで頭を下げた。

葛城は記録上では一年以上も行方不明となっていた。本名は夷川海花。今はゲームキューブのような顔になってしまったあの男とは似ても似つかないが実の娘であり、一ノ傘の艦隊がブラック化した発端となった応援作戦で遺体が回収された夷川海鳥の姉である。

夷川がまだ自分の艦隊を統括していた頃、行方不明となった葛城——海花のために、夷川は全戦力を搜索活動に投入。しかしただっ広い海で艦娘一人を探すのは百の敵艦と遭遇することと等しく、さらに夷川の頼りないでは済まされない手腕も災いし、海鳥の部隊壊滅を以って夷川の艦隊は全滅した。個人的事情による艦隊の運用、大規模な戦力の喪失、これだけの事をやっても追放されないのだからキャリアだか何だかというのはタチが悪かった。しかし何らかの理由で夷川を庇っていた者たちも我が鎮守府を襲ったことについては庇護も隠匿もしようがなかったらしく、ちよつとした人事騒ぎになったらしい。つまり男一人で騒ぐ連中も全くつまらないことこの上ない。

私の目の前でオドオドしているように、夷川が探していた海花——葛城は生きていた。遭難したことだけは覚えていたようだが何故自分が生きているのか分からず、深海棲艦に成り果ててしまったのだと思ひ込んでいたらしい。そんな自分が陸に帰ってよいのかも分からず、たつぷりと悩んだ末に帰投。その頃には夷川の艦隊は壊滅しており、探し回った父親と再会することはできたものの、父親からは頭のネジが何本か取れていた。一ノ傘への的外れな復讐心を燃やす父親に「あなたの娘、海花は深海棲艦になってしまいました」とは言えず、葛城は夷川に言われるがままになった。

この葛城の扱いを巡る騒動が今回の件で最もややこしく、実質突っ立っていただけとはいえ鎮守府を襲撃した者が再び我々の前に現れたのだから、球磨がアホ毛を垂直に立てて警戒するのも当然だった。

襲撃事件の一部始終は球磨の盗聴器から録音されており何が起こったかを捜査員に説明する手間は大いに省けた。日向の発言を除いて。

記憶が定かではない葛城から有効な証言、つまり葛城は艦娘か深海

棲艦かを聞き出すことはできず、唯一頑なに断言する日向も何故分かるんだと根拠をいくら聞かれても「まあ、航空戦艦だから」と言うばかりで捜査員どころか研究員すら困らせた。深海棲艦とはいったい何なのか、深い謎に対する貴重な証拠を航空戦艦万能論で片付けられてはたまったものではないのだろうか、恐らくその辺りの理由で葛城は観察下に置かれることになったのだと私は考えている。だがそれがよりもよって新たに着任した傘姫の秘書艦になるのは……。

【17】

「これも何かの縁、だよ竹櫛くん。葛城が生きてるのって、君の秘書艦の叢雲くんが間一髪で助けてくれたから、なんだから」

「それはそうだろうが傘姫、お前とは無関係だろう」

「せっかく練度が高い正規空母の手が空いてたんだから、手伝って貰おうかなって、ねー葛城?」

「あ、あの僕、今日も検査の予定で……手が空いては……」

「ねー?」

「……………はい」

「ところで球磨くん、私と葛城のケツコンカツコカリの指輪、そんなに、気になる?」

「クマツ!」

「欲しいなら竹櫛くんにお願い、してみたろう?」

「い、いらんクマ! それにクマはまだ練度が……あああもう関係ない話はお終いクマ! さっさと打ち合わせを終わらせてアナと雪の女王のDVD観ないといけないクマ! 多摩たちを待たせてるクマ!」

球磨はホワイトボードの前に立ち、下手くそな字で『工業地帯防工イ引きつき会ギ』と書いた。読みづらいとケチをつける暇もなく、議題の下に『全部カツラギがやる! 以上!』と書き足した。

「そ、そんなあ」と真に受ける葛城に「せいぜい頑張るクマ」と捨て台詞を残して会議室を出ていってしまった。

「何がしたかったのだ、あいつは」

「傘姫がいらんこと言うけん」

「面白いねえ、球磨くん」

「あの、僕、本当に忙しくて……」

「はいはい静かにしてください。いいかげん真面目にやりますよ」

叢雲がホワイトボードの球磨の字を消し、丁寧に『工業地帯防衛引き継ぎ会議』と書き直した。

会議が終わって執務室に戻り、私と叢雲は椅子に背を深く預けて同時に大きなため息をついた。これでようやく通常業務に戻れると思うと気も抜けるというものだった。隣の部屋でも一ノ傘は同じように呆けていることだろう。

「ここ二ヶ月間の疲れがどっと出たわ」と叢雲。

「ああ」

「一ノ傘姫乃司令って知り合いなの？」

「昔は髪が長かったな。子供の頃の話だが」

「ふうん……ねえ、副司令のことだけど」

気が抜けた叢雲の声に少し真面目な色が混ざった。

「これで終わった、って思っているのよね」

「含みのある聞き方だな。まだ気になることがあるか」

「だって……」暫く考え込んだ後、「やっぱり何でもない。普通の仕事に恋しくなったわ」立ち上がって右太腿のホルスターを軽く撫でた。

「コーヒー淹れてくるわね」

【18】

普通の仕事をしたかったのは私も同感だったが、やはりというか何とどうすべきか、そうは問屋が卸さなかった。

新人であろうと傘姫は優れた人材であり、しかし優れた人材とはいえ新人は新人だった。打ち合わせの二日後に資材が枯渇しそうだと言われ連絡を受けた時は、やはり一ノ傘の従姉妹だと笑えた。私と一ノ傘が着任した当初のように電を派遣しようかと冗談で言っていると、電が

並々ならぬ殺意を放って私と一ノ傘を震え上がらせ、結局『工業地帯防衛引き継ぎ会議』で決めた内容は一ヶ月ほど先延ばしになった。

こちらの艦隊から出撃した部隊に葛城が混ざる形での防衛作戦は調度良い交流の機会となった。夷川を再起不能にした霧島と出会った葛城は、父を止めてくれてありがとうございました、と礼を言っただけらしい。球磨もかなりの深手を負わせたことを気にかけているらしく、戦闘では葛城をよく庇った。ただしうっかりナイフを落とす振りをして刃を見せびらかし、葛城を意味もなく脅かしては帰投して叢雲に絞られた。

良くも悪くも愉快的な仲間ができた、といったところだった。頑なに納得しようとしないうちに一ノ傘が傘姫に言い包められるのは時間の問題だろう。傘姫の艦隊が落ち着くまで辛抱強く待つだけでよい。ただ待っていればよい問題など、夷川の騒動や営倉から出した直後に殴り合いを始めた阿呆空母の扱いに比べれば何のことはない。

嵐が去った後の青空は実に美しいものである。其の様な時間ができて私は、ついに刀身を綺麗サツパリもがれてしまった愛刀『丑の刻摩天楼』に接着剤を塗って暇を潰した。

第19話 『なりかけ』 た正規空母の譚 1

【1】

どうやら僕、正規空母・葛城は『なりかけ』だそうで、作業服や白衣を着た人たちからは色々な目で観察されています。まだ研究は進んでいませんから、最初に採血をされて一ヶ月以上が過ぎても僕のことを、いつ人を襲うか分かったものじゃないと警戒を緩める気が無さそうな人がいるのも仕方のないことです。それが普通の反応だとも僕自身が思います。何せカレンダーを丸々一年分だけ飛ばして人前に現れたと思ったら、お父さんと一緒に鎮守府を襲撃したわけですから。てつきり深海棲艦になってしまったとばかり思い込んでいた僕には元々やる気はなくて、お父さんに言われるがままぼんやり動いていただけです。それらの悪事より『なりかけ』であることのほうが関心を集めてくれたのは幸いでした。自分は深海棲艦ではないと航空艦的理論(?)で判明し、またこうして色々と考えていることができます。ただ有り難いものです。

肌や髪が白くなったのは諦めるとして、襲撃の際にインパクトを持たせるためにお父さんが道着袴まで青白いものを用意したのはさすがにどうかと思いましたが、お金がないので今も使い続けています。ええ、ナイフで切り裂かれた部分は補修して、血で真っ赤になった箇所はまだ若干色が残っています。あの痛みと軽巡の恐ろしさは忘れることができませぬ。

目に見える危険因子を生かしておくか、深海棲艦の謎に迫るサンプルを処分するか、僕の命の天秤は忙しく右へ左へと傾いたわけですが、決定的だったのは室内プール(塩素の臭いがする綺麗なプールです)での実験です。深海棲艦であれば10メートルの深度くらいわけもないだろう、試しに潜ってみろというのです。魔女狩りですよ、これ? 10メートルまで潜ることができれば怪しまれ、出来なければ研究者たちを欺いているとやっぱり怪しまれるのですから。ご丁寧にも僕が深海棲艦としての本性を表した時のために、装備を整えた日本屈指の『撃沈王』大和まで待機していました。僕はブランクがあ

るとはいえ練度は測定不能域に達していますから、武装を取り上げられていたとはいえ当然といえは当然です。

水に飛び込むあたり道着袴で飛び込むわけにはいきませんが、さきんざん嫌がったにもかかわらず潜水艦娘が着るような水着を着せられました。いい年しているのにです。少し自慢に思っているからこそこの体つきを野暮つたい紺色の水着（胸元が苦しい）で隠すわけですから、なんだか研究がしたいのか卑猥な映像を撮影したいのか分からなくなっていました。大和が「……」愁傷様です」と氣遣ってくれたのが余計に恥ずかしいっただけありません。この時ばかりは深海棲艦になった気分で、人類よ滅べ、スケベ野郎共はもれなく滅べと密かに念じました。この直後に僕が深海棲艦ではないと大体の検討がなされたので、ちよつと深海棲艦の気分になってみてもそれは思想の自由というものです。

僕は溺れました。泳げないんです。艦娘が泳げなくて何が悪いんですかとこの日に至るまで開き直り続け、そのツケを払うように手足をバタつかせて必死に沈むまいとしました。戦場で鍛えられただけあってパニックにはなりません、泳ぎ方がまるで分からないので、プールの外周から見ている人たちからするとパニックに陥った人が漫画のように溺れているようにしか見えなかったでしょう。僕の溺れっぷりを見て「うん、少なくともこの子は深海には棲めないな」と太鼓判を押した人もいたくらいですから。

大量の水を飲んで力尽きかけた僕を助けてくれた大和とはその後、友達になりました。『撃沈王』が溺れた『深海棲艦』になりかけた艦娘』を助けた時の映像や写真がメディアに掲載され、健全な水着がかえって背德的破廉恥を加速させる姿でメジャーデビューを果たしてしまった僕の愚痴をよく聞いてくれます。検査の都合で顔を合わせる機会も多いので、すぐに親しくなりました。勇ましい姿ばかりが伝聞される大和は話してみると案外ほっこりした感じです。気が合いそう。

「有事の時のためって名目であなたの検査に立ち会ってますが、私にとってはお休みが増えたようなものです。気楽にやりましょうね」

「大和；L.V. 150」

どこかのナイフを持ち歩く危険な軽巡とは大違いです。

【2】

艦隊結成から恒例行事のように資材を全て溶かし、近隣の鎮守府の援助を受けながらこの一ヶ月、コツコツと貯蓄に勤しみました。

「ついに……ついにやったよ、葛城」

オカッパ頭の提督はエアコンの風が直に当たる所まで椅子を持ってきて座り、得意気に言うのです。

「大和砲っていうの？ 46cm三連装砲、やっと完成したよ」

またやりやがりました、このアンポンタン提督。ちなみにひと月前の資材は甲標的になり、工廠で眠っています。雷巡や水母がいるとかいないとか以前に、この鎮守府には正規空母の僕と椅子に座っているだけの提督、二人しかいません。

「提督、やる気ないでしょう」

「失敬な。鉄ちゃんか命狙われて危ない、って聞く前までは戦争とか早く終わればいいのになって、他人事みたいに思ってたけどねえ——」

提督は嫌味で言ったつもりはないようですが、一ノ傘鉄子副提督の命を狙いにお父さんに連れられた僕は、その話を出されるだけで尻込みしてしまいます。

「今はけっこう頑張るつもり、だよ？ ほら、最初に命令された任務だって、こう、パーツと終わらせたでしょ」

「ほとんど一ノ傘鉄子副提督の艦隊に手伝ってもらいましたよね。というか、練度が低い艦娘の基礎訓練に利用されただけですよね」

「持ちっ持たれっ、だね」

「一方的に持たれてます」

「葛城ってさあ、隠してるだけで本当は使えるんじゃないの、甲標的？

こっそり教えてよ」

使えるものなら使いたいです。僕が持っている兵装はすべて竹櫛提督・一ノ傘鉄子副提督のところの余剰品です。運が悪いと空母なの

に副砲メインで戦う場面すらあり、大和に愚痴ると「高練度空母の無駄使いですね」と笑われました。

「言っておきますけど、あんまり出鱈目なことばかりしていると深海棲艦に奪われた土地の近くや無人島に飛ばされますからね。僕のお父さんもコネがなかったら港湾棲姫の近くの島で補給所やらされてたと思います。どうします？ 敵の勢力圏内に左遷されたら」

提督は椅子をガタガタ前後に揺らしながら「失礼な！」と言いました。

「鉄ちゃん竹櫛くんにできて、私にできないわけないじゃない！」

この一ヶ月でさんざん助けられた二人にもものすごく失礼です。

「葛城が仲良くなった大和に来てもらおうかなって、思ってたけど、予定を変更します。ちよつと待ってね……」

提督はクーラーの風が当たる場所からやつと離れて、開けっぱなしのダンボールが散らかっているところまで行きました。しばらくゴソゴソ漁って、取り出したのはマイクとイヤホン、それにタブレット。それらを渡されました。

「出撃命令が丁度来てたし、ここらで私と葛城の実力を見せときましよう、ね」

「ね、じゃないですってば。素直にまず味方を増やしましょうよ。あと装備も」

「タンカーを待ち伏せる敵艦隊が多数。これを撃破せよ——うん、こういうのを待ってたのよ。日が傾き始めるくらいから作戦始めるから、お昼ご飯食べても昼寝はしないでね」

この時は、もし大破したらその足で竹櫛提督の鎮守府に亡命しようかと本気で考えていました。また一人で遭難でもしたら次こそ本物の深海棲艦になってしまうでしょうから。

【3】

タブレットに接続したイヤホンとマイクで提督の指示を受けながら、僕は海の上で一人、四方八方の敵艦隊に喧嘩を売って回りました。

タブレットに表示された海図に敵の詳細位置が記録されていきます。なけなしの索敵機を飛ばして敵の位置を知らせ、提督が記録を終えと同時にこちらに気付いて向かってくる敵から逃れ、振り切ったところで再び敵を探しました。総指揮艦と思われる敵を発見しても同じです。敵戦艦からバカスカ撃たれる砲弾やしつこく追いかけてくる雷撃機をヒイヒイ言いながら躲し、

「ああ……綺麗な夕焼けだな……」

なんて現実逃避を始めた頃には隙間なく敵に囲まれていました。タブレットの海図上で赤い点か円を作っていて、その円の中心座標に僕がいます。

『ちよつとー？ 今あきらめたみたいいな声が聞こえたんだけどー？』

イヤホンから緊張感のない声がします。クーラーの効いた部屋で呑気に指示しているオカツパを想像すると腹が立ってきます。轟沈して深海棲艦になったら真つ先に一ノ傘姫乃を襲おうと思います。

『襲うなら鉄ちゃんのところにして。そうじゃなくて、これから一番なんだから、気合入れてよ』

『空母が日没後にどう気合を入れると……？ とうかもう残ってませんよ、艦載機も僕の気力も』

『怪我はない？』

『通信切つていいですか、最後に大和とお話したいので』

『作戦が終わったらタブレットは好きに使つていいから。太陽が完全に沈んだら教えて』

『鎮守府からでも見えるでしょう。あと何分かで沈みますよ。……僕も』

『葛城って、ブラックジョーク好きねえ。北北西に進路を取つて』

深く考えず言われたまま進んでいると、左舷で海に輝く道を照らしていた太陽が水平線の下に引つ込みました。すべてが影になる時間の始まりです。夜戦では的にしかならない空母ですが、今の私にはそもそも艦載機が残っていないので、昼夜の区別なくただ的的です。

『日が落ちましたよ』

『よし、じゃあ今の方向のまま最大速度！ なるべく姿勢は低くして、

タブレットの明かりは隠してね』

「暗闇に紛れて突っ切る作戦ですか？　いくら空母でも駆逐艦には追いつかれますよ」

せめて低速で進んで鼠輸送ならぬ鼠逃走でも試したほうがマシです。それも不可能なくらい敵の包囲網がぐつと狭く私を囲んでいるわけですが。提督の何がしたかったのかサツパリ分からない浅知恵に、付き合ってしまった私も私だと一人自嘲的に笑いました。

『余計なこと考えてないで早く速く！　急がないと作戦が台無しになるから』

「はあ、作戦ですか」

『名づけて「ワレアオバ・トリガー作戦」！』

僕が最大速度で進んだ真正面には、軽巡を旗艦とした小規模部隊がいました。陣形を組んでこちらに向かってくる懐に、勢いに任せて飛び込みます。敵が泡を食っているうちに僕はお守り程度の気持ちで装備していた副砲を、飛び込んだ敵部隊の艦——ではなく、他の敵部隊に何発か放ち、砲撃した方向に背を向けてすぐに離脱しました。当然ながら敵が追ってきますが、僕に魚雷を向けようとした敵駆逐艦が飛来してきた砲弾により吹き飛びます。僕がしょぼい砲撃を加えた部隊が、こちらの部隊を敵だと勘違いしたのです。敵は馬鹿な空母が一人だけで迷い込んできたと日中に捉えていましたから、夜になって砲弾が飛んで来れば別の増援でも来たと思いついたのでしょうか。

僕を囲んで輪状になった敵艦隊を全速度で駆け巡り「ワレアオバ・トリガー作戦」を繰り返しました。作戦名がおかしいことに突っ込みを入れる暇もなく、正体不明の艦になりすまして提督の指示した方向へと、次々と深海棲艦の同士討ちを誘いました。僕の副砲が引き金となり、あちらこちらで敵が前後不覚に陥っていきます。

『上手くいってる？』と提督の声が敵の砲撃音の合間から聞こえてきました。

「大規模作戦でもないと思えない光景です」

戦域から離れて、真っ赤な砲弾がやけくそ気味に夜空に飛び交うのを花火大会のように眺めました。風に流される黒煙が夜の帳をいつ

そう黒くして、敵はいつそう未知の相手に攻撃を激しくします。海上で夜風に吹かれながらぼんやりと敵を眺める事があるなんて想像もしたことはありません。さんざん動き回ったせいか、無性にかき氷が食べたくなりました。

「ワレアオバ・トリガー作戦」をゲームに例えるなら、普通は定められたルートに従って進みながら攻略するところを、提督はルートを勝手に弄ってスタートとゴールを繋ぎ、ウロボロスのように敵を自滅に追い込む、といったところでしょうか。「戦術」と言うより「裏技」……いえ、「バグ技」と言ったほうがしつくりきます。一歩間違えば僕もそのウロボロスの輪から抜け出せなくなってしまうのが甚だ不服ですが、空母一隻で一度に敵の大艦隊を壊滅させるという何気に聞いた覚えがないことを自分でやってのけたのですから、それほど悪い気がしないのも事実です。

『ふふん。私のこと、見直してくれた?』

「……まあ、少しは」

『うんうん、素直でよろしい。敵が引つ込むのを確認したら、今日はお終い。ピザ頼んでおいたから、早く帰ってきてね』

「頼んでおいたって、ちよっと、僕が帰投した頃には冷めてるじゃないですか。お風呂にも入らないといけないのに」

『じゃあ今日は一緒に、入ろっか、お風呂』

砲撃や魚雷が炸裂する音がピタリと止み、深海棲艦が同士討ちに気付いて撤退したか、全滅したようでした。音を立てないように煙のない風上に廻り作戦海域を見て廻りましたが、敵の姿はありませんでした。僕と提督が他の艦隊に頼らず自力でやってのけた、初めての勝利です(正規空母らしいことを全然していないのは納得できませんが)。鎮守府では温かいお風呂と冷めたピザが僕の帰投を待っていました。

「私も待ってた、よ?」と言う提督の口元にはチーズが付いています。いいんです。この人はそういう人です。

たった一人で敵の大艦隊を片付けたのですから、僕が人類の味方か否か、その疑いの天秤は大きく傾くに違いないと、意気揚々と研究所へ向かいました。ですが出迎えてくれたフル装備の大和の引きつった笑顔で、ああこれは何かやってしまったなと悟ったのです。研究所の自動ドアをくぐった直後、さらに背後に、どこに隠れていたのか二人の戦艦が付きました。

いつもの座り心地の悪い椅子に座ったまま、いったい僕は何について喋らされようとしているんだろうと、多数の研究者——怖い顔や怯えた顔の様々なおじさんに囲まれてしばらく呆然としました。そんな僕があんまり不憫だと思ったのか、大和がこっそり近づいて耳打ちをしてくれました。

「あなたが深海棲艦を操れるんじゃないかって疑われてるんですよ。ほら、この前のタンカー進路確保の件。あんなこと、その……言いつらいんですけど、深海棲艦でもないときつこないって」

結果を出せば報われるとは限りません。それはまあ世の中の厳しさというものですから甘んじて受け入れるのもイチ艦娘の義務というものです。しかし僕は提督立案の「ワレアオバ・トリガー作戦」に忠実に従って動いただけの忠誠心に溢れる清く正しい正規空母であつて、深海棲艦の仕業と疑うのであれば私の提督・一ノ傘姫乃をこそ此処に連れて来るべきでしょうに。

「あなたのところの提督が提出した報告書に『正規空母・葛城が敵艦隊を思うがまま操り〜云々』って書いてあつたからこの騒ぎなんですけど……本当？」

「違うー!」

僕が急に叫んだので、研究員たちは驚いて僕から飛び退きました。尻餅をついた人が僕を化け物のように見るので胸がチクチクと痛みます。

つまらない脚色ばかりされて肝心なところが書かれていない報告書など忘れてもらうべく、僕は「ワレアオバ・トリガー作戦」を微に入り細に入り身振り手振り説明しました。研究員の何度も繰り返す

ような質問にも根気強く答え、いかに私が深海棲艦と無関係であるか、いかに提督が練った戦術が怪しげであったかをこれでもかと語ったのです。僕の弁明は数時間にも及びました。

〔5〕

「本日より監視役として着任しました、戦艦大和です。よろしく願い致します。……あの、監視といっても私は葛城を怪しんでるわけじゃありませんから、そう気を落とさずに……」

「どーせ僕の話聞いてくれるのなんて大和だけだもん。あーよかつたー大和が来てくれて。どこかの提督と二人つきりにならずに済むもんなー」

「着任早々で悪いけど大和、この口が悪くなった子、どうにかしてくない、かな？」

僕が何度説明しても「ワレアオバ・トリガー作戦」を信じてもらうには至らず、僕の科学的評価は

『深海棲艦になりかけた艦娘』

から

『深海棲艦になりかけ敵を操れる可能性がある艦娘 ※泳げない』

に改められた。僕の存在を危険視する声はいつそう大きくなり――深海棲艦を操るのなら例えば港湾棲姫のような強大な敵になる可能性があるとかどうか――不用意に処分することもできず、次善の策として僕をいつでも消し飛ばせるようにとこの鎮守府に、世に名高い『撃沈王』大和が配置された。味方としてこれほど頼りになる艦娘は世界に存在しないはずなのに、その主砲のうち一基は常に僕の方向に向けられている。大和の意思に関係なく、自動照準で僕を狙い続ける便利機能なんだそう。エアコンのセンサーみたいなお手軽さで命を狙われ続ける僕の気持ちなんて誰も考えてくれないんだ。

「私は考えてるよ、葛城？　ねえってば、そんなにヘソ、曲げないだよ。大和着任祝いに、さつきピザ、頼んでおいたから」

「またピザ……」

「ピザ!？」と大和が素っ頓狂な声を上げた。

「あ……いえその、私、まだピザを食べたことがなくて、つい、すみません………じゅるり」

生まれてこのかた上品なものばかり食べてきた大和にとって、とろけるチーズの上でベーコンやエビ、オリーブなどがこんがり焼けた円盤は大和の奥底に眠っていた欲求を目覚めさせたらしく、おっかなびっくり一切れを手で摘んで頬張ったが最後、その手と口は止まらなかった。提督が注文したラーಜサイズの三枚のうち二枚と半分くらいがあつという間に大和の腹の中へと姿を消し、

「ああ……こんな美味しいものを今まで知らなかったなんて……！」

大和はコーラを飲みながら恍惚としていた。言うまでもなく僕と提督はドン引きしていた。

僕を牢に閉じ込めておくのではなく大和の監視下に置くという案は、実は大和の提案だったらしい。それはもう大真面目な顔で最強の戦艦としての勘が告げているとか云々、説得力だけはある空論で洩る管理者たちを言い包めてしまった。国が抱える秘密兵器とも言うべき大和がそこら辺の鎮守府に赴任するなどあり得ない、しかも赴任先は深海棲艦になりかけた挙句、破廉恥な水着姿で深海棲艦のイメージアップを図ろうとした艦娘がいる鎮守府であるなどといった軍関係者は何をやっているんだとしばらく世間を騒がせた。しかし大和はそんな事など意に介さず、ずっとテレビ越しに見るだけで憧れていたジャンクフードの味わい浅い魅力に取り憑かれ、いかにも健康を度外視した風のハンバーガーを念願叶って幸せそうに頬張るのだった。

第20話 ずっと一緒だよ

暗雲は僅かの隙間もなく空を覆い隠して只管に黒く、強く降り続ける雨が海と時雨の体に叩きつけられて音を立てた。いつ止むとも知れないこの雨ばかりは、時雨も好きにはなれなかった。

主砲を握る手に必要以上に力が入った。

前髪から滴る水滴の向こうで不敵に笑う、時雨の知っている彼女でいてくれているか判別できない彼女は、顔の右半分を覆う灰色の仮面の下からじつと時雨を見ていた。

彼女の目に映っているのはかつての仲間でなくなり、ただ一匹の駆逐艦だった。

淡いベージュ色をしていた柔らかかった髪は青白く変色し、闘争本能の象徴とも言えた赤い瞳は赤と黒が入り混じった濁色になっている。セーラー服が破れて下着姿に近くなっていても気にしている様子は無い。気がついていのかすら定かではない。脇腹など抉れた部分は臍物が見えるはずだが、影が細部を黒く覆い隠している。

「アハッ♪」

夕立『だったもの』は躊躇いなく魚雷を何本も時雨に向けて放った。当たるはずもない魚雷を無闇に発射するなど、かつての夕立ならば絶対にやらない愚策だ。躲しながら時雨は、こんなのは酷過ぎると唇を噛んで主砲を夕立に向けた。これ以上痛い思いはさせたくない。しかし夕立を止めるにはもう身体の機能を限定的に奪うしかない。時雨の背後で魚雷が立て続けに爆発して何本もの水柱が上がる。

「目を覚まして夕立！ 今ならまだ間に合う！」

「ザコ駆逐艦ダァ！ サイコウニ素敵ナ……何ダツケ？ マアイイヤ！」

「僕のことを覚えていないのかい!? 時雨だよ！ 白露たちも艦隊の皆も待つてる！」

時雨が撃った砲弾を、その数倍の量の弾幕で夕立は押し返した。
「くっ!」

残弾を気にする様子などまるで無い。時雨に反撃させる暇も与え

す夕立は残骸から搭載できるだけ拾い集めた砲で弾幕を張った。通常の駆逐艦が装備できる量を数倍は超えている。過重で彼女の足は膝付近まで海中に没していた。圧倒的な数の主砲は装填の隙を作らず機関銃のフルオートのように砲弾をばら撒いた。個々の砲は砲身が曲がっているなど故障品も同然であるため狙いはまとも定まらないが、とても彼女に接近を許す火力ではない。

「アハハハ！ ネエ逃ゲルダケ？ イイヨ、アト何秒逃ゲラレルカナア？」

横に大きく動いて躲す時雨の顔の真横を砲弾が掠め、編んでいた髪がほどけた。夕立より少し短い黒髪が流れて雨を弾いてゆく。

後先を考えない夕立の猛攻は壁となり、必死に叫ぶ時雨の声を砲撃音がかき消した。跳ね上がった水飛沫が雨より強く時雨を打つ。

「もう君を独りにはしない！ 絶対に！ だから！」

「雑魚ノクセニ避ケルのジョウズダネエ。サスガ幸運艦——アレ？ ドウシテ知ツテル？」

夕立が首を傾げたその時、乱射していた主砲のうち一基に時雨の弾が当たり爆発した。爆発は隣のもう一基も吹き飛ばした

今しかない。まだ多数の砲が勢いを緩めず砲撃を続けているが、僅かにできた隙間めがけて時雨は夕立に向かって全速力で突進した。

「夕立！」

時雨は左手を伸ばした。この手を掴んでくれと願い、声よ届けと叫んだ。それを確かに見た夕立は、ゆっくりと左腕を上げた。

時雨に合わせるように左手を伸ばした夕立は左掌を時雨に突き出し、『そこから撃った』。弾は時雨の胸に真直ぐ吸い込まれ、貫通した。

「あ……………」

時雨は自分が撃たれるまでを目視していながら避けなかった。避けられなかった。見ていながら、こんなのは嘘だと、胸に衝撃が走り体から力が抜けた後になっても、自分を撃った砲が何かの見間違いだと思ってしまう。だが再び弾が炎と共に吐き出されてよろけた時雨の右脇腹を抉り、今度こそ逃れようのない事実となった。

夕立の左腕は皮を被っただけの兵装に変質しており、骨格のように

砲身を内蔵し掌から突き出たそれはもう夕立が人間ではないことの証だった。

時雨は夕立がまだ『彼女』だった時に、彼女が左腕に攻撃を受けて大きく損傷してしまった瞬間を見ていた。その時の彼女は左腕を躊躇い無く諦めて、自分一人に攻撃が集中するよう怯まず敵に向かっていったはずだった。しかし時雨の前に再び夕立が姿を表した時、左腕の欠損した部分が黒い何かで埋まっているのを見て、傷は塞がっていないらしいと自身を欺いて安堵した。海面に崩れ落ちながら時雨は、これは夕立の左腕を捨てた覚悟を踏み躪った代償だと悟った。

胸と脇腹を抉られた衝撃は指先にも至る体の隅々まで走り、接近していた勢いのまま夕立の足元へと体を投げ出した。右手に持っている主砲は手を離れて水中に消えた。海水の冷たさを頬に感じて沈みかけていることが分かった。視界は霞み、夕立の嘲笑は近いはずなのに遠く聞こえた。

「アツハハハハハハ、弱イ弱イ！ ソンナニ弱イノニ何シニ来タノ!? モシカシテ誰カノ敵討チ？ ソレトモ自殺？」

「……どっちでも、ないよ」

致命的な量の血液が海に流れ、しかし絶え間なく降る雨と上も下も黒く暗い世界が血の色を塗り潰してゆく。雨でさえ全身を押しさえつけるように重いと時雨は感じ、夕立もこのように苦しんだのだろうかと考えた。

「フーン。ジャアドウシテ？ ドウシテ？」

「約束、したから、だ、ケホツ……君と……もし深海棲艦に、なったら、時雨に沈めて欲しいって言ったのは夕立、君……じゃないか」

「ナニ言ッテルノ？ 死ニカケテ頭オカシクナッタ？ シツカリシテヨ時雨。……ア、アレ？ 時雨ツテ誰？ 敵ノ名前？ オマエ知ッテル？」

「よく……知ってるよ。僕が白露型2番艦の時雨で……はあつ、はあ……君は4番艦の夕立だ。白露と村雨、それに僕を、庇ってたった一人で戦った、駆逐艦だよ」

「……ワカラナイ」

「もう、絶対に君だけ行かせたりは、しない。どんな姿になったって夕立は、僕たちの大切な姉妹だ」

「ワカラナイ。オマエ……オマエ、全然ワカラナイツポイ！」

意識が薄れゆく中で夕立らしい言葉遣いを聞けてクスリと笑った時雨は、ポツポツ呟きながら最後に許された力で両手を伸ばした。右手で夕立の足を掴み、左手は魚雷を引き抜いた。

「ナニ、ヤ、ヤメロツ！」

気付いた夕立が頭に狙いを付けるより早く、時雨は魚雷を起爆させた。

残された時間はあまりに短く、最後まで言えたかどうか時雨にも分からなかった。

「ずっと一緒だよ、夕立。この雨が止んだら、また同じ姉妹として会えるさ」



「……あー、爆発オチですか」

村雨の感想に「ツツコミどころ、そこじゃないっぽい！」と夕立が素早く反応して台本のコピーを床に叩きつけた。それを拾って、今度は白露に叩きつけ直した。

「あいたつー！」

「これももう深海棲艦どころかターミネーターだよ、これもう！ 時雨が自爆しても煙の中から歩いてくるパターンっぽい！ 時雨が無駄死に！」

「ちよつと、夕立……これ以上僕をズタボロにするのやめてくれるかい。気分が……」

時雨は乗り物酔いのように顔を青くしていて、まさに台本の最後で自爆する時に相応しい顔色である。

「ねえ白露、ちゃんとした台本が他にあるんだよね？ まさか『よさこい祭り』のステージで本気でこの演劇しようとか考えてないよね？」
「もう！ 失礼なこと言うねえ時雨ってば。この台本から溢れ出す本

気パワーを感じたでしょ?」

「……白露一人に任せた僕らも悪いとは思うよ。でも『よさこい祭り』だよ? お祭りなんだよ? 盆踊りの合間に挟まれる和気あいあいとしたプログラムだよ? そんな場所で何が悲しくて姉妹が殺し合う演劇を披露しないといけないんだい?」

「うーん、悲しかったといえば……ホラあれ、『アナと雪の女王』」

「それでしよう、白露がやりたいって言ったのは」村雨がズバリ指摘した。「桃太郎とか浦島太郎とかありきたりじゃなくて、『アナと雪の女王』みたいなのがやりたいって言ったじゃない」

「うん。だから後でちゃんとDVD借りて見たんだけどね」

「見てもないのにやりたいとか言っただけだよ!」と夕立。

「テレビで言ってるほど面白くなくて」

「デイズニーをデイスりはじめたっぽい!」

「姉妹は出てくることだし、バトル要素を膨らませて台本作ったの」

「バトル映画じゃないっぽい!!」

天井に向かって吠えた夕立は一息入れて「……真面目に見てないでしょ。内容覚えてる?」と全く信じていない風に尋ねた。

「完璧。女の子がブリザド ↓ ブリザラ ↓ ブリザガって覚えていく映画でしょ?」

「二」 違う 「二」と三人。

「じゃあ、ブリザラ ↓ ブリザガ ↓ ブリザジャ?」

「二」 だから違う 「二」

「……マハブフダイン?」

「二」 ゲームタイトル変えても違う! 「二」

息の合った三人は同様に頭を抱えた。『よさこい祭り』まで残り日数はあまりなく、当然ながら準備など何一つ進んではない。

鎮守府近所の祭りで地域交流の一環として艦隊から一組を舞台に出すことになり、白露が手を挙げたのだった。今更になって「できません」とは言えない。しかし白露が作った台本通りの演劇などそれ以上出来ない。もし実行に移せば地域交流どころかドン引きされること請け合いです。

「どうしよう……」

「どうしようか……」

「どうしようね……」

「ダメなの？ この『ずっと一緒だよ』、せっかく頑張って作ったのに。じゃあ分かった、こうしよう。『アナと雪の女王』そのものをやろう。そうすれば当たり外れがないというか絶対ウケ——何その目、三人とも、ちよつとやめて見るの。ねえ、ねえってば聞いて。傷つくよ？ さすがの1番艦も傷つきますよー？」



時雨・村雨・夕立が三人寄ってどうにか文殊の知恵をひねり出そうとし、そもそも自分たちにはきちんとした演劇は向いていないとの認識でやつとのことながら一致し、出来ることといえば深海棲艦との戦闘くらいとの結論でまとまった。

派手な色の炎を出す空砲を用いて音と色で拙い部分を誤魔化しながら、申し訳程度のストーリーに添ってステージ上で深海棲艦との戦闘を繰り広げるようになった。

ストーリーは至ってシンプルに、ひとりの艦娘が仲間とはぐれてしまった時に運悪く深海棲艦と遭遇、ピンチに陥ったところで仲間が駆けつけ敵を撃退する、というものである。デパートのチビッコ向けヒーローショー丸パクリである。

部隊からはぐれる役は多数決で白露になかば必然的に決まり、祭りまで時間がなかったため、練習は白露が深海棲艦にやられて大破する箇所だけ徹底的に拘った。

「もつと頑張るとこ他にあるよね!? ねえ!?!」

よさこい祭り当日、公園中央に高く組まれたやぐらとは別に派手に明るく装飾されたステージが用意され、この日のために練習を積んだグループが華やかな踊りや会場を震わせる太鼓などを披露していった。たった数日で演劇をでっち上げた時雨たちは順番を待ちながら、祭りの陽気な雰囲気に向けてなんだか申し訳ない気分になった。

装備に積んでいるのは実弾より軽い空砲であるはずなのに、むしろ普段より重いような気がした。

そしていよいよ出番の時が来た。

拍手と共にステージに上がった遭難役の白露はいきなり予定から大きく外れ、

「これから敵の空母が現れますが大丈夫です！ この白露型1番艦、白露が皆さんをお守りいたしましょうー！」

マイクに威勢良く叫んだ。

あの阿呆に特別なポジションを与えるんじゃないやなかつたと後悔と絶望に打ちひしがれる三人だったが、少なくとも真面目に取り組もうと頑張りはした三人に、この土壇場でようやく助けの手が伸びた。

勝手に自己アピールまで始めた阿呆の次にステージ上に現れたのは、会場全体が小さく悲鳴を上げて数人が本気で逃げようとしたほど真に迫った深海棲艦、空母ヲ級（の姿を真似た葛城）だった。深海棲艦に本当になりかけた葛城がそれらしい格好をして恐ろしくないはずがない。これだけは適役ではあるものの事情が事情だけに頼みにくい葛城に平気な顔をして約束を取り付けた白露の手柄だった。しかし白露の一人ライブで盛り上がっていたところを黙らせるほどとは誰も予想しておらず、葛城も特別な細工はせず（むしろ化粧は普段より気合を入れていた）衣装と小道具を揃えただけでこれほど恐れられるとショックを隠し切れなかった。

「出たなー空母ヲ級！ よーしこの白露様が相手だー！」

一人はしやぐ白露に葛城はイラツと来て、台本を無視する阿呆を八つ当たり相手に決めた。まずは一発当てられる予定の白露の主砲が火を噴く前に、葛城は先制雷撃（ドロップキック）を見舞ってやった。白露の口からカエルが潰れたような音が漏れた。葛城の頭からヲ級のなんだかよく分からない大きな口が取れても気にせず、ステッキで白露の尻をペシペシと叩きまくった。この辺りでようやくニセ空母ヲ級を安心して見れるようになった観客が安堵して笑いが沸くと、満足した葛城は予定が大幅に遅れた爆撃で白露を派手に、大胆に、練習通り、しかしいささかやり過ぎ感もあるくらいに白露を大破させた。

最も拘った場面なだけに会場は、特に男性陣（狙い通り）は肌を惜しげもなく露出させた白露に釘付けとなった。

以降は予定通りつつがなく劇は進行した。助けに駆けつけた三人の駆逐艦が長時間衆目に晒すのはまずい大破白露を裏手に放り込み、ステージ上を実戦をイメージしながらくるくる廻って派手な空砲を撃ちまくり、最後は駆逐艦三人の三連続特殊攻撃で空母を見事打倒して、盛大な拍手に包まれながら四人は揃って頭を下げた。

一仕事をやり遂げた四人はよさこい祭り会場を回って花火を見た。自分たちの空砲も悪くないとは思っていたが、やはり夜空に咲く花火はたまらなく綺麗だった。鎮守府から他に祭りに来ていた者もいて、なかなか面白かったとか何とか言われた。行き交う人々から四人は次々に握手や写真を求められ、せっかく買ったかき氷を食べる暇もない。よさこい祭りの運営委員からは絶賛されたものの、大破演出について来年は子供の目があることも考慮して欲しいとも言われ、四人は曖昧に返事をした。来年のことなど誰も想像できなかった。

大きな満足感と少しばかりの寂寥感を土産に四人は帰路に就いた。

「葛城さん。今日はもう遅いし、こっちの鎮守府に泊まっていけばいいっぽい」

「ありがとう。でも明日早く出る用事があるから」

三人と二人は手を振って別れた。

鎮守府までの長い下り坂を三人は歩いた。

「来年かあ」と夕立がぼつりと海岸の方を見ながら呟いた。

「来年は終わってるかな、戦争」

村雨と時雨は答えに迷った。自分たちが終わらせるんだ、そんな事を安易に言える雰囲気ではなかった。今、口を開くと、どうしても大破状態の白露を放置したまま忘れてきたことに言及しなければならぬからである。夕立も察したらしく、三人は街灯が並ぶ歩道を黙々と歩いた。しかし鎮守府の門の敷居を跨ぐと同時に時雨のスマートフォンが鳴り、やっぱりダメだったかと三人は綿菓子のように粘っこい溜め息をついた。

第21話 ラックレッツサー山城 3

「はあ……………天使だ」

机に片肘をつけて手にでつかちな頭を乗せたまま、かれこれ一時間は上の空でボソボソとつぶやいている提督。アンニユイな雰囲気の気色の悪いことといったら。

「へえ、工作艦に売店の店番やらせてる艦隊なんてあるんだ。贅沢というか、艦娘の無駄遣いすぎ」

【山城；Lv. 86（非改二）】

「……………ん？ 明後日って打ち合わせがあるんじゃないやなかったっけ、あつちの鎮守府と？ 叢雲が予定入れ忘れるなんて珍しいこともあるのね。ちよつと提督これ——」

「天使……………」

「もしもーし」

「……………大天使」

「生きてますかー。返事してくださいよ」

「……………」

「……………いとくのあほー」

「……………はあ」

いや仕事しろよ艦隊潰す気か、と本来なら言うべきなのだろうけれど、大規模掃討作戦『渾作戦』における私たちのノルマを余裕綽々でこなして【※】もう作戦内容すら忘れかけている今、我ら天照大艦隊は有り体に言えば暇だった。

【※ 読み飛ばし推奨】

日本各地域から烈々たる信条、そしてそれに見合うだけの勢威をを持った鎮守府が招集される程の作戦がどうして楽ちんなのか？ それはこの鎮守府のちよつと変わった体制とコネに理由がある。

この鎮守府は元々、竹櫛提督（今、天使がどうかぼやいている阿呆）が指揮をとっていたけれど、呆れるしかない根深い痴情、もとい事情があつて近隣の鎮守府から一ノ傘提督と彼女が率いる艦隊がまるまる転がり込んできた。一ノ傘提督は副提督という形で竹櫛提督

の下に就いているわけで、表面的には艦隊の規模がおよそ二倍に増えただけのこと。でも一ノ傘副提督が良くも悪くもフリーダムなお人柄なので指揮系統を二つに分けることもでき、つまりこの鎮守府だけで連合艦隊を二つ編成、戦力の温存など考えずに二方面作戦を立てちやえたりする。AL/MI作戦の時なんて初の大規模作戦ということで大本営から継戦についての注意喚起がさんざんアナウンスされていたけれど、

「これさ、私と竹籬でAL作戦とMI作戦をそれぞれ分担するだけで、別にいつも通りやればよくない？」

一ノ傘副提督の身も蓋もない発言のおかげで、私たち艦娘はこれといった混乱も苦労もなく参戦、そして実に呆気なく終了。渾作戦では実戦経験の少ない子に連合艦隊を経験させることすらできた。強敵が出現したのにもっと頑張らないでいいの？ といった具合で作戦終了まですつとソワソワさせられたくらい。

コネというのは、元々一ノ傘副提督が居座っていた鎮守府に新しく配置された艦隊に、大本営直属のアルティメット級戦艦『撃沈王』大和が何を間違えたのか所属していること。

そもそも渾作戦に限らず全国の戦力を結集する大がかりな作戦は当然ながら立案者がいるわけで、立案するには事前に情報収集を行う戦力が存在する。作戦の前哨戦を託される戦力。全国から寄せられた情報を元に出撃し、偵察と現場視点での分析、未知の強敵と遭遇した場合は「危険だからこそ接近して」交戦になったとしても必ず十全に情報を持ち帰って来る、私レベルじゃ手も足も観測機も届かない戦力。その一人である大和が電車とバスで三時間、車を出して二時間、海路なら飛ばせば一時間半の距離にいて、しかもその提督さんは一ノ傘副提督の従姉妹である——これを利用しない手はない。

大和からすれば作戦前からお疲れのはずだろうけれど、そこは皆して心の中で頭を下げつつ、大本営からの作戦発表を待たずして得られた情報から艦隊編成の準備に入るのだった。ズルい？ いえいえ有事こそ人と人の繋がりを大切にすべきですから。

昨日と同じ風が緩やかに鎮守府内を流れ、手の空いた子らは休暇を取って外に繰り出すなり自室で怠惰の限りを尽くすなり、ここ最近はやかな時間がかかる回っている。思えば私がここに着任してから、こんなにも平和なのは初めてなんじゃないか、というくらいに暇。とはいえ天照大艦隊そのものに休業日などというものは訪れるはずもなく（艦隊が休めるのは戦争が終わった時か、私たちが終わった時かのどちらかですしおすし）、出撃部隊、遠征部隊、そして秘書艦山城この私は、今日も今日とて平常運転で働いている。

というわけで、上の空なアホ提督の頭を書類の束でひっぱたいた。

「ぬおっ?! 敵襲か!?!」

「敵じゃありません。山城です」

「やましろ? ……なんだ山城か」

「こんなにも真面目な私に対してこの言い草!」

「働きましようよ。ねえ。あなた仮にもここのトップですよねえ」

「仮にもとはなんだ虚空戦艦」

「コンチクショウ!」

しばらく書類を丸めた剣とペンケースでのチャンバラに興じる私たち。ゴキブリを叩くように書類剣を振り回せば振り回すほど、頭の片隅では執務室で何やってんだろうという冷めた思いがギンギンに強くなっていくのだった。

チャンバラは提督のペンケースから文房具がぶち撒けられるのと同時に熱も雲散霧消した。散らばった文房具を見ると私と提督の何だかよく分からない虚しさがシンクロし、二人で何も言わずに文房具を拾い集めた。本当に、何よコレ。

「……それで」と気まずさを隠すように切り出す提督。

「何か問題でもあったのか。遠征に陸路を使った白露たちなら既に――」

「違います。仕事をしてくださいと言ってるんです。て・い・と・く・に」

「どういう意味だ? 私の働きに不満でもあるのか?」

ダメだこの人、自覚がない。

「ずーっと放心してたじゃないですか。天使がどうか眩きながら」
「ああ、天使か……そうだな……」

はあ、と提督はどこかうつとりしたような溜息をついた。また自分の世界に閉じこもりそうだったので書類剣を再び構えると、
「なあ山城。古鷹ちゃんはやはり天使だな」
などと意味不明の供述をするのだった。



提督の古鷹轟頂は今に始まった事ではなく、私が覚えている過去の範囲では、提督は既に古鷹のことをちゃん付けで呼んでいた。それが当然であるかのように。最愛のはずである叢雲をも差し置いて。一ノ傘副提督の艦隊と合流した後も、それはなんら変わらなかつた。「飛龍と蒼龍はかなりの練度だが、旧一ノ傘艦隊に所属していたため連携の程はやってみなければ不明だ。旗艦の叢雲の指示に従い、金剛、古鷹ちゃん、北上は戦場での意思疎通に特に努めること。二航戦の二人もだ。演習であつても気を抜くな」といった具合に。

たぶん誰もが気にはなつたはずだけれど、あんまりにも自然に「古鷹ちゃん」と呼ばれているので、次第にそういうものだと思うようになり、疑問や違和感は消えていく。古鷹当人に何か理由があるの？と聞くより先に。

「古鷹ちゃん」は艦隊の暗黙の了解、というか、夕張と大淀が普通の軽巡洋艦よりも兵装を多く搭載できる特徴を持つのと同じように、重巡古鷹は名前をちゃん付けで呼ばれるものだと認識している。これは私だけでなく皆がそうだと思う。だって誰も本当にまったくツツコミを入れないし。

それが今更になつて、元凶(?)である提督が古鷹についてどうこう言い出したとなると、思い当たるきつかけは一つしかない。



「古鷹の改二装備の事ですか？ あれに天使的な要素なんてなかったと思いますけど」

提督は肩をすくめ、やれやれとばかりに首を振り、私を無駄に煽つてくる。

「何も分かっていないようだな。私が装備だけを見て人を決めつける愚か者だと思うか？」

「潜水母艦の大鯨を副提督に速攻で軽空母に改造されて、ものすごく悔しがってたくせに」

「うるさい。過去のことなどどうでもいい。今は古鷹ちゃんだ。古鷹ちゃんが天使だという話だ」

してません、そんな話。

「私は天国や輪廻転生といった考え方に共感するところはないが、古鷹ちゃんという天使の存在だけは目に映る事実、いや真実として考えている」

「はあ……」

「そうだろう？」

「はあ……え？ 今、同意を求めたんですか？」

「真実の確認に疑問を挟むな。お前は太陽が眩しい事を疑問に思うのか？」

「すみませんが、私には提督が何の話をしてるのかサツパリ理解できません」

提督の目が私を珍獣扱いしているのがよく分かる。私も提督のことが地球の裏側の人間のように思えてきたから、ここ第一執務室では今、生物学の発展に何ら寄与しない異種間コミュニケーションが発生しているらしい。深海棲艦のほうはまだ話が通じそう。

「改二になったことにより古鷹ちゃんの輝きが増して、私は目眩がするくらいだぞ」

「落ちてるものでも食べて三半規管がやられたとか、そんなんじゃないですか？」

「なんだと貴様」

「それより私。私は？ 私も改二になれるんですけど？ 練度的には余裕なんですけど？」

「古鷹型重巡に加わるにはなあ。まず装備が違いすぎて」

「私は扶桑型の航空戦艦！ 渾作戦で勲章いくつか貰ったじゃないですか。あなたの目の前に、お手軽に強くなれる戦艦がいると言ってるんです。勲章ください」

「勲章なあ」と乗り気の無さを全面アピールしてくる提督。

「叢雲の将来のために八つは最低、取っておくとして」

「四つでいいでしょ、四つで」

叢雲 *dreii* にでもする気かしらん、この阿呆。

「一ノ傘と分けたら残り二つだ。当面は大規模な作戦はないだろうから改修資材とやらに交換しようと思っていたのだが……はて、そういうえはどこにしまったか」

「どうして勲章なんて貴重品を、銀のエンゼル程度に扱うんですか。その神経が信じられません」

「成る程、古鷹ちゃんは元々が天使だから、金のエンゼルがなくとも改二になれたというわけか。その発想はなかったぞ山城、お手柄だ」

「……ええ。私にもありませんでしたよ。そんなしょーもない発想」

さあ仕事仕事。



艦隊が暇ではない平時よりも閑散とした食堂でひとり蕎麦をすすっている、「おはよう山城」と丁度HOTな声をかけられた。黄金色に輝く左目が、私のどんよりと淀んだ目にはいささか眩しい。

「おはようって、もう昼よ？」

「あ……あはは。休みだから、つい加古と一緒に寝過ごしちゃって」

【古鷹；Lv. 97】

「ごめんね、山城は事務で忙しいのに」

「忙しくなんか……ただ提督がちよつとねー」

「ふふっ、お疲れ様です」

私の前に座った古鷹は「いただきます」とカレーライスに向かつて手を合わせた。

改まって正面から観察しつつ思い出を振り返ってみると、なるほど、確かに古鷹ほど艦隊中に慈愛を振りまく子は見当たらない。どちらかといえば低燃費・低火力の重巡洋艦でありながら高火力殲滅組と肩を並べ、相当な練度に達しているのは、信頼の高さから来る一緒に出撃した時の安心感が大きい。役割分担・連携の意思疎通を図るのが誰よりも上手く、縁の下の力持ちのようであり目立つことはないけれど、帰投して入渠した時には古鷹にお礼を言っていることが多い。というか、提督が艦隊編成に悩んだ時はまず古鷹に出撃命令を出して、それから他の五人を考える、なんて滅茶苦茶なことが月に一回ペースであつたりする。それに私を「お疲れ様」と労ってくれる人なんてほとんど……ああ、扶桑姉さまは何処に……。

(天照大艦隊のお姉さんである叢雲も似たタイプではあるけれど、さすがに駆逐艦に重巡のような重い役割はこなせないし、あと優しさに比例して小言も多い)

「——それ聞いた青葉が休暇を取ってまで葛城と大和を取材しに……山城?」

「え? あ、ごめん聞いてなかった」

「ぼんやりしてたけど大丈夫? 調子が悪かったらちやんと言つてね、いつでも仕事、代わりに出るから」

「ありがと、なんでもないから」

この気遣いの抜き無さは、天使と呼ばれても不思議じゃあないかもしれない。……逆に言えばこの鎮守府の他の連中はどんだけ他人への思いやりを欠いてんの、とネガティブに見てしまう私も人様の事を言えたもんじゃあないけれど。

普段は日中なら食堂に限らず必要以上に賑わっているから、誰も彼女も区別なんてあつたものでなく、あまり気にもかけないことだけれど、今こうして静かな中で向き合ってみると、古鷹からはいい匂いならぬいい雰囲気はほわほわと漂ってくる(古鷹はカレー食べてるんだから匂いは当然スパイシー)。どう言い表せばよいのだろう。ありき

たりな表現だと、一緒にいて落ち着くとか？ 殺伐とした艦隊に重巡古鷹が！ とか？

いかにも優しそうな外見だつて重要なポイントに違いない。私と古鷹が並んで道端に立っていたら、道を尋ねるとしたらそりやあ誰だつて古鷹を選ぶに決まっている。私だつて古鷹に声をかける。改二になったことで気が引き締まったのか、少し大人びたような気がしてはいたけど、まじまじ観察するとやっぱり若干、変わったらしい。より良い方向に。

私も改二になれば変われるのかなあ。あんまり自分を変えたいとか自分探しかかかっていると、ますます欠陥戦艦とか虚空戦艦とかの声が大きくなりそうで嫌なのに、現に目の前にウルトラグレードアツプを果たした古鷹がいると――

「やっぱり変だよ山城」

「うん？」 つい変な声が出た。確かに変だ。

古鷹は手を伸ばして私のおでこにぺたりと触れた。絶妙な冷たさがこれまたグツド。

「熱はないみたい……でも今日はもう休んだほうがいいよ。秘書艦は私が代わるから」

「大丈夫、別に風邪とかじゃないから」

「でもさつきからずっとボーツとしてるよ」

「ちよつと考え事してただけで、本当に何ともないから。古鷹こそ休暇でしょ、心配させといて言うのもなんだけど、今日くらいは加古のぐうたらっぷりを見習つてみたら？」

「うん……何かあつたら言つてね、部屋にいるから」

私も見習つたほうがいいのかもわからない、この天使を……と、つい阿呆提督と同じことを考えていることに気がついてしまった。古鷹の雰囲気は良し悪しで表すよりも「天使」と言い切ってしまったほうが正しいのではなからうか。

私は当然ながら天使様になど謁見したことはなく、天使という言葉から真つ先に連想するのは『聖☆おにいさん』に出てくるイケメン大天使、という程度の興味の無さ。ごく普通の日本人だと思います。だ

から天使の雰囲気なんて私の妄想でしかないし、古鷹から、東京の立川駅から離れた途端に賑わいが霧散する味わいの無さを感じ取ったわけでもない。

こういうことは概ね、考えるより感じた方がいいとは偉大なる拳法家の残した言。私は直感を信じて、まだ若干私を心配そうに見ている古鷹に、蕎麦をすすする手を止めて、つい素朴な（誤用だけれど、ここはあえて素朴と言わせてもらう）疑問を投げかけてしまった。

「ねえ。古鷹ってさ、天使なの？」

この手の言った直後に後悔する言葉を、なぜ私は繰り返してしまうんだろう。ただでさえ不幸の星の下に生まれてきたというのに（決して扶桑型戦艦が悪いという意味ではない。この命にかけて）自分から「阿呆」と言われる所に積極的に足を踏み入れてどうしたいというのか、私は。いつそ年中口をつぐんでいたほうが何かしら具体的なパラメータが上がりそうな気さえしてきた。山城改二は寡黙キャラにしたほうがいいのかしらん。

「間違えた間違えた。古鷹は天……天ぶら蕎麦は好きかなって——」

自分でもわけが分からない訂正を、幸か不幸か聞き流してくれた古鷹はスプーンをピタリと止め、少し俯いてしまった。そして、

「山城も……やっぱり私って……天使、なのかな」

私よりも数段わけが分からない切り返しをしてきた。



古鷹の名誉のために念頭に置いておかなければならないのは、彼女は決して自身の事を天界から堕ちた記憶喪失の天使、といった思春期にありがちな設定上の存在とは思ってもいけないということである。古鷹の言う天使のイメージは、翼を生やして頭頂を輪形の蛍光灯で照らすお迎え、というよりも、どちらかといえばお迎えされる側のネロと。パトラッシュに近かった。

「だって今まで誰もツツコミ入れてくれなかったんだよ!？」

古鷹には悪いのだけれど、俗っぽい言い方が私のツボに入ってしまった

い、しばらく表情が歪むのを堪えるのに必死だった。

「私だけちゃん付けで呼ばれて続けて練度九七！ 最初だけかなーとか、新しく配属された艦娘だけかなーとか自分に言い聞かせ続けること練度九七！ 自分でもびっくりだね！」

「そ、そうね」

「自分からは言い出しづらいし、でも絶対おかしいから誰かツッコんでくれるかなって待ってたのに、逆にツツコミづらい雰囲気ができちゃったんだよ？ 私の後に着任した子どころか、一ノ傘副提督の艦隊が丸々加わった時なんて、私しばらく皆からすごい目で見られてたんだから。電も認めた提督の古鷹ちゃん。何故か一人だけ古鷹ちゃん。叢雲が妻ならじゃあアイツはいつたい何なんだ古鷹ちゃん！」

人を外見で判断するのはよくないね。古鷹は着任した時から、笑顔の裏に脈々と蓄積してゆく苦悩を隠し続けていたんだから。

「あんまりスルーされるから私もう、本当は幽霊とか深海の怨念とか、そういう何かなのかなって……秘書やってた時に思い切って提督に聞いてみたら『？ 天使だからだが、それがどうした？』だよ！？ もつとわけがわからなくなっちゃったよ！ そうですか天使ですか、霊長類よりも幻想種に近い存在ですか。おかしいなあ、私そんな大層なものじゃなあいんだけどなあ、ちよつと左目が光るだけの重巡洋艦だと思ってたのに」

ピカーと私にサーチライトを当ててくる古鷹。

「これ、ただの光じゃなくてヤコブのはしご的なものだったんだ、わー幻想的だね、これなら夜戦もちゃん付けで呼ばれる理由もバッチリです！ みんな気を遣ってちゃん付けをスルーしてくれてるんだよきつと。ここは本っ当にとってもいい部隊ですね♪ ……ごめん皮肉みたいになって。山城やみんなに不満があるわけじゃなくて、私これからみずつとこうなのかなって」

「うん、私は別に気にしてないから、ちよつと左目の明かり消そう」

「あ、ご、ごめん」

あまり賑わっていないとはいえ三分の一程度は座席が埋まっている食堂で、至近距離でライトアップされていればさすがに目立つ。お

盆を持って私たちの近くに座ろうとした陽炎型ご一行様が全員揃って目を逸らし、他の席を探し始めた。駆逐艦の子らに避けられるのって傷つくわあ……。周りで食べてた奴らもご飯残ってるのに、いそいそと席を立っていくし。

軽く落ち込む私と一緒に、貯めに貯めた呪詛を吐き出した古鷹も暗い顔を——と思いきや、モジモジしながら表情を緩ませていった。どころか、

「ふう……こんなに思い切った話をしたのって初めて。本当に誰にも話したこと、無いんだよ？ 山城が、その、初めてで……うん。初めてなんだ。えへへ。自分を開放するっていうのかな。ちよつとだけ恥ずかしいけど、今、すごく気持ちいい……」

なんだか恍惚とし始めた。まずい、これはまずい。雷がターゲット（性欲処理フレンド）を見つけた時と同じ臭いがプンプンする。いやムンムンする。

「ねえ……山城はさ、私が天使なのかって、聞いたよね」

「そうだったかなー？ 記憶にございませんなー？」

「私にとっては何」古鷹はテール越しに手を伸ばして私の手を熱くホールドした。ついでに感情が昂ぶったためか、再びライトアップ。目が潰れそうなほど眩しい。

「山城こそ……その………天使、だと思っただ。それで、つて言い方は変かもだけど、今日は具合悪そうだし、私の部屋で休んでいかない？」

超弩級のベタな誘い文句！

「昼休み終わったから。それじゃ」真面目に働きに行こうとする私の手を、古鷹は離してくれない。

「駄目だよ安静にしないで。私のベッド使っ方がいいから」

「いや休むとしても自分のベッド使うからね!？」

「なら山城の部屋に行くから。私が戦艦寮に行くから」

息を荒くしながら食い下がってくる。笑顔が怖い笑顔が怖い。

「いやいや秘書艦を代わってくれて話はどこ行ったの？」

「他の誰かに頼めばいいよ。私がずっとあつたかくしてあげるから」

「そもそも体調悪くないんですけどね!？」

「体調は自分じゃ分からないものだよ。ほら目の下にクマができてる」

「元からだから!。そういうアレだから!」

「きつと寝不足なんだよ。私と一緒に——寝よう?」

古鷹は天使の皮を被ったガチレズだった。

そっかー。ストレス貯め続けたらこうなっちゃうんだー。そういうえば大井とかもそんな雰囲気あるもんなー。パンパンに膨れ上がったのを私がうっかり針でつついちゃって、溢れ出したダーククマターが340m/sで降りかかってきてるわけかー。そっかー……。

「やらばっ!」

繋がれていた手を無理やり振りほどいて、食べかけの蕎麦をそのままに私は食堂を飛び出した。

「あつ、待って山城!」

誰が待ちますかい。

以前、雷と死の鬼ごっこをした時の経験を活かして、鎮守府内で完全に人目につかない場所に潜むことにした。そう、雷が自分を慰めていたあの場所、変電所付近の電気室、その中。かなり寒いけれど毛布でもくすねてきてじっとしていれば、大天使古鷹なら（まだ古鷹のことを信じていたい私がいる）少し時間をおけばきつと冷静さを取り戻してくれるでしょう。

秘書艦の仕事は……どうせ提督が呆けていては進まないし、べつに問題はないでしょうよ。



私の戦略はあまりに浅はかだったと言わざるを得なかった。

以前戦ったのはこの艦隊で最高練度を無駄に誇る雷、とはいえ所詮は小娘であり、改二にまでなった古鷹は格が違った。

「見いつけた♪ 駄目だよ山城、こんな場所で一人で寝ようなんて。わざわざ毛布まで用意して、まったくもう」

それはそれは嬉しそうに言う古鷹だった。

電気室の扉がこじ開けられ、サーチライトに照らされるまで逃走開始から十五分もかからなかった。キィと軋む音を立てながら扉がゆっくりと開かれ、ギリリと覗いた左目はかなりホラーだった。どうやら高性能な電探をフル活用したらしい（それにしたって早過ぎる）。本気で逃げるのならば鎮守府の外に出るべきだった。わざわざ人目につかない所に場所を変え、毛布まで用意するなんてこれじゃあ——美味しく頂いて下さいって誘ってるようなものじゃない！

「寒いよね？ 大丈夫、今あつたかくするからね」

セーラー服を脱いだ古鷹はそれを私に掛けて……くれるはずもなくポイと捨てて、隅っこに逃げる私にジリジリと迫ってくるのだった。

信賴していた古鷹までこんなだったなんて、いったい私は誰を信じたらいいんだろう。

今、確信した。もうこの艦隊ダメだ。汚されまくるわ危ない奴が多すぎるわ、もういやだ、他の鎮守府に行きたい。扶桑姉さまに会うまでに私の身体はきつともたない。

「山城って、思ってたよりもあつたかいんだね——」

私を取り巻いてもみくちやにしてくれる環境を嘆き現実逃避をする他に、私にできることは何一つなかった。古鷹は雷とは違って、それはもう天使のように優しく私に尽くし、どこまでも高く昇らせまくってくれた。私が神様に祈るように許しを請うても、天国への階段を引いて行く手はむしろ加速するばかりで、天使（のような悪魔）の抱擁は時間の感覚が無くなるまで続いたのだった。

第22話 妖精さんの、かんたいこれくしよん

手のひらサイズの三頭身が、台車の上でゴム毬のように飛び跳ねた。

「むらくもさん、むらくもさん」

無表情にも関わらず楽しげらしいことが伝わって来るのは、妖精さんが器用なのか私が毒されたからか。

「はいはい、なあに?」

【叢雲；Lv. 104 ↓ 111】

「さいしんへいき、できました?」

いや、私に聞かれても……。

錆だらけの鉄柱が屋根を支えるここ工廠では頃来、何故か、言語体系が非常に不安定で不安になってくる。意思疎通は図れている(らしい)からいいのだけれど。

「お願いしてた主砲の改修ができた、ってことよね?」

「ありていいにえば」

「装備の改修って、私まだよく分かってないのよ。どんな風に改造できるの?」

「ちよーすてきなかんじに?」

「……漠然とした聞き方した私が悪かったわ。仕上がったものを見せてくれる?」

「あいー」

私の肩に飛び移った妖精さんは、重さをまったく感じないほど軽い。

「あっち、かも?」

指をさされた方へと歩いていく。

弾薬箱や部品が並ぶ棚の間をすり抜けて行くと、隙間から次々と、とても工事作業に向いているとは思えない色とりどりの服を着た妖精さんが飛び出してきた。みんながヘルメットの代わりに三角帽子を被っていて、やつぱりみんな無表情。

「むらくもさんだ」「むらくもさんか?」「おそらく」「まちがないか

と」「ぎゃくに、むらくもさんなのは?」「そのかのーせーは、ひてー
できませぬな」「きよくただしきつんでれた」

頭が痛くなってくるので、いつも通り「お疲れ様」と軽く手を振つ
てスルー。ちなみに彼ら(彼女ら?)がお疲れになるような仕事をし
ているのか、艦隊の誰一人として知らない。結果は出しているのだけ
れど、その過程がサツパリ不明瞭。そもそも常に無表情なのだから、
疲れたとしても顔に出ようがないし。

消耗品置き場から完成品置き場に移ったあたりで、

「あれでっせ」

お目当ての品は、妖精さんに言われるより前にソレと分かった。い
や正確に言うくと、ソレが雑多に置かれた兵器の中であんまりに異彩を
放っていただけで、私は決してあんなモノを目当てに改修をお願いし
たわけじゃあない。間違いであつて欲しかった。でも妖精さんは間
違いなくアレを指していた。

「いや、あのね? ちよつとアレは……何?」

「くーりんぐおふ、きかんぎれです」

「まだ納品すらされてないんだけど!? 悪徳商法も雑すぎよ!」

「らいせんせいさん、しましたがゆえ」

「なに勝手な契約を無許可で……どこから? どの国から?」

「さー?」

「……まあいいけど。今更だし」

妖精さんを相手にいくら質問をしたってせんないので、作られた現
物で成果を確かめるしかなかった。

私が改修をお願いしていたのは10cm連装高角砲。そのままでも
優秀な主砲だけれど、せっかく数は揃えられて試験機には困らない
から、ひとつ試しに強化改修してみることにした。ライセンス生産
パーツを使ってまで強化しろとは誰も言っていないけれど。いや使う
なども言っていないし考えもしなかったけれど……妖精さん語の言
葉の綾ということにしておこう。うん、私が気にしすぎているだけ。
うん。

で、改修が完了したらしい物体Xが目の前にある。

どうやら火器というカテゴリーからは外さないでくれたらしく、物体Xの下部から6砲身のガトリング砲が勇ましく突き出している。きつと砲撃の際は砲身が超高速回転して恐ろしい程の連射ができるんだと思う。元のシンプルな砲身2本から何をどう弄ったらガトリング砲になるのやら……とりあえず見た目のインパクトは絶大なものになった、ということだ。

そう、最大の問題は見た目。

「ねえ妖精さん」肩の上でクネクネしている妖精さんに、無駄だろうなと思いつつも聞いてしまう。

「はいな」

「この真っ白な……ええと、トイレトペーパーの芯に卵の殻の下半分を乗せたようなものは何？」

形状については芸術的オブジェっぽさのせいで、どう表現したものととても難しい。モノで例えるならば星の戦争のR2-D2とか、シルバーソウルのジャスタウェイとかに似ている。

「ましーんですが？」

「てい」指で妖精さんのお腹をつついた。

「やーん」と悶えながらも何故か嬉しそう。

「見りや分かるわよ。ああいや、機械だつてことしか分かんないんだけど、どんな意味があるのかを教えてください？」

「さすが、めのつけどころが、しゃーぷです？」

「これだけ目立ってれば誰だつて気になるわよ」

「むらくもさん」

「うん？」

「……ぼくのこと、みて？」

この謎の兵器Xと同じくらい妖精さんのことも分からない。

「妖精さん、飴ちゃん食べたくない？」

「あめちゃんらびゅー！」

でも、とても分かりやすくもある。

妖精さんが飴玉をペロリと（ほんの数回ほど舐めただけで全部溶かしてしまっただかのように消化してしまう）平らげたところで、話を元

に戻す。

「で、この白い機械は何なわけ？」

「かいぐんでゆーところの、でんぱたんしんぎ？」

「普通にレーダーって言うてくれていいから」

「そうよぶのも、やぶさかではありませんな」

「火器にレーダーって、どう使えばいいのかいまいちピンと来ないわね。もう改修完了してるなら試射できるのよね？」

「……どーしても、やる？」

「なんで含み持たせんのか……だめな理由があるの？」

「やるきのもんだい、てきな？」

「だから、やりたいんだけど。私すっごいやる気あるんだけど」

「ただのすすとじゃ、こいつをまんぞくさせられないぜ」

武器のやる気って何よ……。



鎮守府近海の掃討や遠征で慣らしている最中のメンバーらを演習に連れて行くのは、新兵器Xのテストにも丁度良かった。……工廠にあるテスト環境をスルーしていきなりの装備は嫌過ぎるのだけれど、作った妖精さんが使え使えとうるさくて、監督役のはずの私だけが装備に不安を抱いた状態での部隊編成となってしまった。

旗艦は時津風。

【時津風；Lv. 12】

時津風を先頭、私をしんがりとした駆逐隊の単縦陣で、どうにも綺麗な一列になりきれないあたりから、皆のぎこちなさが伝わってくる。

「あと数分で相手の偵察機が飛んで来るはずだけど、飛んできた方向に相手がいるとは限らないからね」

前を進む五人に、出撃前に確認したことをもう一度言い聞かせた。

——時津風、ハンドシグナル覚えてないなら普通に返事してくれていいから。その手は何、忍術の印？

「相手は正規空母と戦艦のたった二人だけど化け物よ。下手すると近

づくこともできずにやられるからね」

時津風を真似て他の四人まで忍術で返事してきた……今はいいけれどね。ちゃんと話、聞いているなら。

「とにかく、相手の航空機が見えたら片っ端から撃ち落とすこと。ほとんど迎撃できないでしょうが、それでもよ。私たちの目標は航空戦と砲撃戦を突っ切って雷撃戦まで持ち込むこと。いいわね」

全員、忍術。肝は座っているようで大変よろしい。

今回の演習相手はお隣りの鎮守府の二人、葛城と大和。たった二人での部隊編成なのは平均練度の低い私たちに合わせてくれたわけでも、こちらを甘く見ているからでもなく、所属している艦娘が諸事情あってこの二人しかいないから。よくもまあ艦隊として成り立っていると感じさせられる。

一人は深海棲艦になりかけるも蘇った正規空母、葛城。

もう一人は全国区の強さを誇る『撃沈王』戦艦、大和。

どちらの練度も当然のように測定不能域に達していて、もう何度もこちらから挑んだ六人を返り討ちにしてくれている。しかも人手不足は明らかなため、酷い時には葛城がタブレットを片手に秘書艦としての仕事をこなしながら、もう一方の手で航空機を飛ばして来ることもあったとか。ボコボコにされた矢矧曰く「最初は舐められてるって頭にきたけど、あの忙しきで目を回して泣き出しそうな顔を見てると、私たちが仕事の邪魔してるみたいで……」ということらしい。練度カンストしているのに律儀に演習に付き合ってくれる葛城と大和にはひたすら感謝しかない。

相手の鎮守府の方角へと一直線に向かっていると、

「来た、来たよー！ あっち！ えーと……2時の方角！」

時津風が指した方向から偵察機の一団がゆったりと飛んできてい。こちらの戦力は既に大まかに把握したからか引き返すでもなく、さらに近づいて詳細を観察に来られている。さて、こちらの情報が丸裸にされたところで、どうするか——じゃない。今の私はあくまで演習の監督で新兵器Xのテストだった。戦術は旗艦に任せないと。

「むらくもー！ 戦闘始めていーんだよねー!？」

「前を向きなさい前を！ 爆撃されるわよ！」

「よし。それじゃあ時津風隊、あつちの方角へ突撃——！」

時津風がものすごく大雑把な作戦を立てて速度を上げた時だった。

ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！

私の艀装が突然、けたたましい炸裂音（レシプロエンジンを酷くしたような音）と共に火を吹いた。あまりに突然の衝撃で海の中へとひっくり返りそうになり、わたわたとみっともなくバランスを取ってなんとか立ち直した。

一方、空からも同時に異音が聞こえた。私たち時津風隊に探りを入れていた偵察機が全機、なんと、黒い煙を吐きながら墜落しているところだった。

時津風隊、速度の維持なんて忘れて全員ポカーン。

前方の三人は青空に墨汁を垂らすように落ちてゆく偵察機を見ていた。「我二追イツク敵機無シ」とは何だったのか。

後方の二人と私は、私の艀装から火が出た部分——新兵器Xをじつと見ていた。

火薬臭い新兵器Xと撃墜された偵察機。状況証拠からも間違いない。……のだけれど私に撃った覚えなんて当然なく、ほんの一瞬で敵機団を壊滅させる対空技術なんて現実的ではない。

「……今の、叢雲がやったの？」

イエスでもありノーでもあり、黙り込むしかない私。それと、先の連続ブウン！ にやられたせいかな、少し目眩がするような……。

つい戦場に棒立ちしてしまう間抜けな私たちに対して、相手はもちろん待つてはくれない。飛ばした偵察機が一機も帰って来ない異常にもすぐに頭を切り替えたらしく、私たちが動き出すより早く、更なる機体を送り込んできた。プロペラが風を切り裂く音が恐怖の合唱となり、その数——葛城のカタログスペックと大和の観測機を足せば、丁度あれくらいにはなる。

「い、いっぱい来たー！ どぞどぞどうしよう!？」

そして何より恐ろしいのが、その戦い方。こちらの対空能力がはつきりしていないにも関わらず全機を送り込んでくるやり方には覚え

がある。

『押しただめなら引いてはいけません。もつと強い力で押して、必ず道を切り開きます。それが最強の火力を誇る戦艦の使命なんです』

テレビのインタビュで『撃沈王』大和は確かこんなことを答えていた。国の命運そのものを背負う大本営直属の戦艦様はさすが気合が違っていらつしやる、と皮肉気味に捉えていたことを思わず無線で謝りたくなる。空を埋め尽くす敵機なんて見慣れているはずなのに、『押しただめ、だからこそ押し通る』鋼の信条が私ですらも含めた全員を疎み上がらせた。

……そのおかげ、というのが甚だ遺憾ではあるものの、誰も動けない状況は新兵器Xの謎機能をテストするにはうってつけだった。

私は引き金なんて引いていない。

新兵器Xは再び唐突に、迫り来る戦闘機団に対して猛火を吹き始めた。

ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！
ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！

やっぱり全自動、というより私の意思からも離れたスタンドアローン兵器だった。レーダーらしい白いオブジェも含めた全体が忙しく動いてはガトリング砲の向きを最も近い敵機の方へ変え、短い連射を叩き込んで迷いなく次の目標に移った。

ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！
ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！

自動照準だからなのか曳光弾なんて気の利いたものは用意されておらず、ガトリング砲のマズルフラッシュが灯る度に、一拍置いて戦闘機、爆撃機、攻撃機、観測機がレミングスのように墜落していった。

ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！
ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！

時津風隊は恐怖を忘れ、さつき偵察機を撃墜した時以上にポカーンと、砕け散る敵機と新兵器Xを交互に見ているだけだった。

ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！
ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！ ブウウン！

ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！
時津風が歓喜と不満を入り混じらせた味のある表情で何か言ってきた。

「なに!? 聞こえない!!」

ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！
ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！

この時点で相手の戦闘機団の過半数を無力化。最後っ屁に魚雷を放っていく機体もいたけれど狙いなんてあったものじゃあなく、時津風隊を狙ったものすら思えない方向へとすっ飛んでいった。

ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！
ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！ ブウン！

しかしさすがは練度測定不能の二人の機体、航空戦を諦めると残った航空機で隊列を組み直して逃れる観測機を私たちから隠すように、他の機体は壁となって引いていった。大和が弾着観測を行うためだ。新兵器Xの鬼神の如き殲滅力にも劣らない切り替えの早さ、やっぱり相手は化け物だと改めて思い知らされる。……相手からしたら私こそ真正銘の化け物なんでしょうけれど。

カチツ、とガトリング砲の回転がようやく停止し、嵐が過ぎ去った後の静けさが私たちを間が抜けた感じで包んだ。連続砲撃で爆音を鳴らし続けた新兵器Xのせいで、ちよつと耳をやられた私には足元を打つ波の音が聞こえない。

「……ぜんぶ叢雲一人でいいじゃん」

と恨みがましく言う旗艦殿の声はかろうじて聞こえた。

「えーつと……高角砲の改修でこんな超兵器になるとはね？ ちよつとテストするだけのつもりだったし……演習の邪魔したいわけじゃないのよ？ いやホントに」

スタンダードに連装砲と魚雷、それとごく普通の高角砲を装備している皆からの視線が痛い。

「ほ、ほら、駆逐艦って魚雷撃ってなんぼだから、ね？ 受け身に回るしかない航空戦は運良く切り抜けたつてことで、だから、えーと……ほ、砲雷撃戦よ時津風！ 敵は本能寺にあり！（自分でも意味不明）」

「……分かった。じゃあ行くよ」

渋々ながらも気を取り直してくれた時津風は後方の五人に進路を示した。

「あっちから飛んできたから、相手もあっちにいる！ だからなんかこう、いい感じに裏を取るよ！」

時津風の非常にふわっとした作戦を聞いていた時だった。突然、視界が真っ暗になり、全身の力が抜けた。いや、感覚が何故だかハッキリしなくなり、艦装を背負っていることや自分が立っているのかすら分からなくなつた、というのが正しい。

「時津風隊、あたしに続けー！」

時津風が言い終わるより先に何かが水面を叩く音を聞いて、それつきりだった。



目覚めると私は仰向けに倒れていた。いや、天井があるし頭の下はフカフカしているし——医務室か。

……私としたことが、やってしまった。

妙に重たい頭を動かして自分の体を見ると、布団がかけられ、左手には点滴を打たれていた。そして右手は、がっしりと握られていた。

「……時津風？」

「叢雲!? 起きた！ 大丈夫!? 痛くない!？」

【時津風；L v. 12 ↓ 13】

「大丈夫よ。ごめんね、心配かけ——」

時津風の顔がくしゃりと崩れた。

「よ、よかつ……ぐすつ……このまま叢雲が死ん、ズズツ、じやつたら……うわあああーん……!」

大泣きしてしまった時津風の声を聞いてか、医務室に次々と入ってくる人たち。私は体がだるくて起き上がることもできず、ひたすら時津風を泣かせ続けてしまった。あー恥ずかしい……。

たっぷり数十分かけて時津風が落ち着いてから、いったい私に何が

起こったのかを聞いた。

まず今日は、なんと演習の日から三日後であるらしい。呼吸はあったものの意識を失った理由も取り戻す目処も分からなかったそうで、そりゃあ時津風をあれだけ心配させるわけだ。

私がつまみたく唐突に海に沈んだものだから時津風隊はパニックに陥り、とにかく私をどうにか引っぱり上げてくれて、白旗を掲げた時津風は全速力で葛城と大和の元へと向かい、二人に助けを求めた。そして私は大和におぶってもらって無事、鎮守府に帰ってこることができた。

「ありがとう時津風。勝負相手に救護を求めなんて咄嗟には出来ない。いい判断のおかげで沈まずに済んだわ」

時津風は赤くなつた鼻を擦りながら、えへへっと笑った。

「気にしなくていいよ。だって叢雲は時津風隊の一員だからね」

了解、を表す独自のハンドシグナルらしい忍術の印をビシッ！と構える時津風。……今の私の立場から色々教えていくの、やりづらいなあ。

でも、どうして戦闘中に体調不良で倒れる（セルフ轟沈する）なんてみつともない真似をってしまったのか、いくら考えても思い当たる理由がない。最初に偵察機を迎撃した直後、目眩がしたのは覚えている。あの時点で体調に何らかの異変があったと判断していればこのような大事にはならず済んだのかもしれない。……でも仮に貧血なんかだったとしても、三日も昏睡してしまう理由にはならない。今は怠さ以外の不調はないけれど、一度しっかり検査してもらわないと。



私の容態とは別に、10cm連装高角砲を改修した新兵器Xにも注目が集まっていた。

一番驚いていたのは葛城と大和だそうで、特に大和は大本営直属ということもあり、正規空母をたつた一人の駆逐艦で無力化させてしま

う驚異的な兵器を放っておく手はなかった。

私をこの鎮守府まで担ぎ込んでくれた後、新兵器Xの量産とデータ採取を頼んでいった。勿論、せつかくこちらまで来たのだから改修方法も視察していこうと工廠に足を運んだものの、

「あれを」「こうして」「こんなふう」「ろばすとなかんじで」「ぐるーばるなおぼちゆにていを」「このてでつかんだら」「あたらしいそうぞうせい」が「うまれるかも?」

さすがの『撃沈王』も妖精さんのアバウト加減の前には無力だった。

三機の10cm連装高角砲を追加で改修して、新兵器Xは私が使ったものと合わせて計四機が揃った。誰か一人にガン積みしてみるためなのは言うまでもない。部隊全員に一機ずつ装備させて様子を見る、という案もあつただけけれど、改修資材が不足したのと単艦で実現し得る最大火力を計るために廃案となった。

……廃案にして本当に良かったと、私たちは後に戦慄することになる。

それと、いつまでも名無し兵器(「新兵器X」とは私が何も考えず勝手に呼んでいただけで、他には「長10cm砲改」「ガトリングガン」など、みんな好き勝手に呼んでいた)のまままで使用するわけにもいかず、いつの間にか誰かによって『フアランクス』と命名されていた。極端に密集した縦長弾幕が古代ギリシャ兵の陣形に似ているからだとか、はたまた防空性能がギリシャ神話のイージス並だとかどうか、由来もあやふやだった。名付け親が古代ギリシャ好きらしいことだけは分かる。



私がようやく医務室のベッドから自室の布団に移れるようになった頃、フアランクス四機をガン積みした夕張を旗艦として、テスト部隊は南方のサーモン海域へと出撃——そして大失敗を喫し、テストどころか夕張を失いかける惨憺たる結果に終わった。

私が寝ていたベッドに入れ替わるように夕張が寝かされ、フアラン

クスは力の代償として呪いをもたらす悪魔の兵器だ！ ……と誰もが口を揃えて恐れおののいた。

「呪いなんてなーいさ♪ 呪いなんてうーそさ♪ ねーぼけーたひーとを、あーたしーがたーたく♪ ……だから叢雲のことも守ってあげようかなど。あ、あたしは時津風隊の旗艦だから怖くないしね！ ホントホント！ ちょっとなにその目！」

時津風隊の五人が寝間着で枕を抱いて、私と吹雪の部屋に押し掛けるような光景が駆逐艦寮のあちこちで見られた。他には第六駆逐隊の部屋あたりが競争率が高い(?)とか。

「気持ちは嬉しいけどね？ 見ての通り狭いんだけど。この部屋」

「川の字になって寝ればいいじゃん」

「いや川の字ってそういう意味じゃないし。そもそもここじゃ七本も線引けないって言ってるのよ……」

縦線を並べて11111111。百十一万千百十一。2進数と見て10進数に変換すると127。

「じゃあ『罍』の字ならコンパクトでいい感じじゃない？」

「んん？ 罍う？ ……あ、ホントだ七画でしかも誰も折れ曲がらずに済んでる。よく思いつくわね」

「へっへー♪」

「で？ 誰がくにがまえの中の『井』で寝るの？」

「臨機応変にいろいろよ。四人がそれぞれ誰かの足を枕にしたら、ほらね」

「ほらね、じゃない。私は普通に寝たいの。まだ安静にしてないしんどのの」

「しよーがないなー。じゃあ叢雲から『罍』の好きな箇所、選んでいいよ」

「……フアランクスの呪い、うつすわよ？」

「ひいっ!？」と悲鳴を上げた時津風隊は私を見捨てて廊下をドタドタと逃走していった。自分で追い出しておいて何だけど薄情者どもめ。

「ごめんね吹雪、騒がしくしちゃって」

「ううん、いいよいいよ。全然気にしないで。……でもね」

【吹雪；L v. 105 ↓ 107】

「叢雲ちゃんが呪いって言うのと、ちよつとりアリティがあるなーって……」半泣きだった。

「あー……ごめん」

それでも部屋を出て行かないでくれているのは、時津風たちとは練度の桁が違うからか、旧一ノ傘艦隊の最古参は伊達ではないからか。

艦隊が呪い云々の話題に飽きて、落ち着きを取り戻してからフランクスのテストについて話を聞いた。

体調も万全の夕張は敵機動部隊と遭遇した際、随伴艦が構える必要すらない程の弾幕で、ほぼ一瞬と言っても過言ではないくらいの早さで敵航空機団を壊滅させたらしい。駆逐艦の私がフランクスの一機であれだったのだから、より安定感のある軽巡が四機ガン積みすれば当然といえば当然といえる。

しかし問題は、敵機の残骸がまだ空中で黒煙を上げている最中に発生した。私と同じように夕張は唐突に気を失い、敵機より先に海中に倒れた。

随伴艦は練度も高く実戦経験も豊富で、時津風隊の時のようなパニックにこそ陥らなかつたものの、大破者と意識不明者では部隊にかかる負担に雲泥の差がある。おまけにテスト環境に選んだのは強力な敵機動部隊が確認される南方サーモン海域。念の為に遠方で控えていた支援部隊が駆けつけるまで、まったく反応を返さない夕張を抱えたテスト部隊は死に物狂いで戦う羽目になり、暇を持て余していた天照大艦隊の頬を引つ叩く形となってしまう。この事もフランクスの呪い騒ぎに拍車を掛けた一因と見て間違いないと思う。

夕張が大きな病院に移されて目を覚ましたのは、私の丁度四倍、十日後の事だった。原因は不明。私の時と同じように、ただひたすら休息に入っているように見えた。ついでに私も精密検査を受けたけれど異常なし。ちよつとだけ痩せたかな、くらい。

この結果を受けた司令官・副司令官は当然、フランクスのテスト並びに量産計画を永久凍結。実戦テスト結果を記した報告書にサンプルの一機を付けて、使用禁止兵器として大和に送った。この時、産

廃兵器のくせにフアランクスという名前は奢侈が過ぎる、というしよ
うもない理由で『夕張砲改』と名を改められた(命名・竹籬司令官……
あのバカ)。そっちの方が酷と苦情が噴出したのは言うまでもないも
のの、『フアランクス』と再び訂正しようとするも時既に遅く、既に大
和が研究機関に回してしまっていた。産廃兵器『夕張砲改』として全
国の鎮守府に開発・使用禁止が発令されるのは時間の問題であり、テ
ストの被害者である上に指名手配犯のように名前が広まるであろう
夕張が気の毒でならない……。



10cm連装高角砲の改修をお願いした私には、騒動が終わった後
にもあと一つだけ仕事が残っていた。

「妖精さん、いるー?」と工廠で叫ぶと、物陰から三角帽の小人がわら
わらと出てきた。

「つんでれさんだ」「つんでれさんか?」「おそろく」「まちがないか
と」「ぎやくに、つんでれさんなのでは?」「そのかのーせーは、ひてー
できませんな」「きよくただしきむらくもだ」

「コイツら、私を何だと……!」

「フアランクスのことでも聞きたいことがあるんだけど」

「すふいんくす?」

「フアランクス。……って、あなた達は名前知らないんだっけ。ほら、

10cm連装高角砲を改修してもらったやつのこと」

「はて」「しってる?」「しらない」「きおくにございません」「ゆめでみ
たかも」「こちようのゆめで」「じんせいは、はかないものですな」「し
かし、くらなどはじんせいでは?」

とぼけているようには見えない。ああ、本当に忘れてるんだ……。
どんだけ刹那的な生き方してればこうなるんだろう。

「じゃ、じゃあね? えっと……例えばこの10cm連装高角砲を」現
物を見せて説明することにした。

「こういう形の兵器に改修したとするわよ?」

フアランクスを一機、持ってきて妖精さん達に見せた。

「びてきせんす、けつじよしてます?」

「いや、あんた達が作ったんだけどね……」

グツとこらえて話を続けた。

「この新しい兵器、妖精さんならどうやって動かす?」

私たち艦娘の常識を遥かに超えた動きを見せたフアランクス。それが機能を働かせるために真つ当な方法を使っているとは思えなかった。

「さー?」と予想していた反応。

「ちゃんと考えて」

「そういわれましても」

「お願い考えて」

「むずかしいですなー」

「……10分やるから考えろ」

「ぴい!」

イラツとしたのが功を奏し、てんでバラバラだった妖精さん達は一箇所に集まって会議を初め、十秒程で（早っ!）代表者が出てきた。

「きあいで、うぐきます?」

「気合?」

「きあい」

「……気合?」

「こんじようでも、いけますが?」

「そう。ちよつと待ってね、頭ん中を整理するから」

妖精さんは嘘をつかない。と言うか恐らくつけない。だから気合とか根性で動かすというのも、本気で言っているのだと思う。

でも妖精さんの言う事はあくまで妖精さん基準であって、私たちとの認識には大きな隔たりがあつたりなかつたりする。じゃあ妖精さんの言う気合や根性とは、いったい何を指す? それとも本当にそのままでの意味?

「むらくもさんがふりーずした」「ふゆだけに、ふりーずどらいだ」「おゆをかけて、いただきます?」「むらくもれーしょん」「ほろにがそう」

「つんでれあじ?」

……頭を柔らかくしよう。そうでないと考えに集中するどころか妖精さんの会話でイライラしてしまう。妖精さんに悪意はない。妖精さんに悪意はない。

フアランクスが気合や根性で動くとして——フアランクスを動かすために気合や根性を使ったとすると、使用者はどうなる? シンプルに考えるとそのまま、気合・根性が無くなる。じゃあ気合・根性が無くなると、使用者はどうなる? 例えば、練度がカンストした正規空母の航空機団を壊滅させるほどの気合と根性を、一瞬で使い果たしたとしたら……?

「ねえ妖精さん」

「さー! いえっさー!」

「ちよつと聞きたいんだけどね」

「さー! どうぞ、さー!」

「……どごぞの海兵式はいいから」

「あーい」

「気合と根性って、どんなものだと思う?」

妖精さん相手にはいささか曖昧が過ぎる質問であっても、聞かないわけにはいかない。

「うーむ?」「わかる?」「しつものいみが」「ベリーはーど」「るなていっく」「へるもーど」「だんてますとだい」「こうりやくふか?」「きあいとこんじよう、あれば」「いのち、すりへるな」

「ストップ! 最後の発言者、もう一度!」

「いのち、すりへるな」

平然と言った! 命がすり減るって平然と言った!

妖精さんに悪意はない。妖精さんに悪意はない。むしろ好意でフアランクスみたいなの超兵器を生み出したんだと思う。……その安全性とか私たちが使う側の命とかは一切考慮されずに! そのあたりに頭を回すという発想すらないでしようね!

「はーい、ちよつと注目ー」

「なんだ」「じゅうだいはつぴよう」「くるかも」

私は大きく息を吸い込み、まだ工廠のあちこちにいるであろう妖精さん達にも聞こえるよう、ありったけの声で叫んだ。

「いい加減にしなさい——っ?!?!?!?!!」

「び——っ?!?!?!?!!」

蜘蛛の子を散らすとはまさにこのこと。けっこういう人数がいた妖精さん達はあつという間に私の視界から逃げ、悲鳴は工廠から消え、私一人がぼつんと残された。

私と夕張の命、大丈夫なんでしょうね……。



翌日から工廠はごくごく当たり前の妖精により、ごくごく当たり前に稼働していた。

結局あのフアランクス、いや、それを作った彼ら（彼女ら?）それすらも不明）は何だったのだろう。ある日突然この鎮守府に居座つて、私の一喝だけで姿をサツパリ見せなくなった。何もかもがあまりに刹那的過ぎて、これで良かったのか悪かったのか判断に困る。

作ってしまったフアランクス、大和に送った分を除く残り三機については、ダメコンと組み合わせたら使えるんじゃないか? という意見もあつたにはあつたのだけれど、当然ながら実践を買って出る者は一人も出ず、保管箱に鍵付きで封印することになり、鍵は海に投げ捨てられた。

フアランクスの動力源が装備者の命だということには黙っていた。本当にそうなのか確かめようがないし、また呪い騒ぎが起きそうだし、退院と同時に全国に発令された『夕張砲改 開発禁止令』のせいで凹まされた夕張に追い打ちをかけたくなかったから。

さて、私がようやく本調子を取り戻し、久々の秘書艦として働いていると、

「ところで叢雲」と司令官。

「なに?」

「いやな、数日前に電探を製作していたのだが、妙な物ができてな」

これだ、と司令官が片手で軽々と持てる程の機器はどう見ても電探には見えず、電圧や電流なんかを計るような計測器だった。目盛りが扇状に並び、今も何かを計測しているのか赤い針が目盛りの真ん中あたりをフラフラしている。その針の根本の下あたりには、とてもシンプルな銘版が付いていた。……白いアクリル板に『き あ い』とだけ印刷されていた。こんなシユールな計測器が他にあるだろうか。

「ああそれ間違いなく失敗作だから」

「しかし相応の資材をつぎ込んだのだが——」

「失敗なの。いらぬものなの。ちよつと工廠行ってくるわ」

司令官から気合計測器をひったくって、

「お、おい叢雲？」

私はまっすぐ工廠、ではなく海に向かった。気合計測器を持っている間、恐らくは私の気合（命）を計測していたはずなので見ないようにして、フアランクス保管箱の鍵と同じように大海原へ放り投げた。

第23話 発：特殊深棲監視艦隊 正規空母 葛城

【宛：特殊事態対策本部 特殊災害研究部 担当官殿】

『定期連絡』

お世話になっております。

今期の当艦隊、また私の状況につきましては、前期から大きな変化はありません。詳細は提出済みの任務状況報告や検査結果をご参考下さい。気になる点がありましたら別途ご連絡下さい。

失踪した潜水艦娘5名の搜索任務につきましては、申し訳ありませんが依然として手掛かりも掴めておらず、当艦隊への演習申込の殺到が收拾しない状況が続いていることもあり、具体的な成果報告には今しばらくお時間を頂きますようお願い致します。前回の定期連絡でもご連絡致しましたが広範囲の搜索活動は大規模で人員に余裕のある艦隊に委託したほうが良いと考えます。任務の性質上それが難しい場合、大和のスケジュール配分を当艦隊に現状より多く振り分けることは可能か、ご検討をお願い致します。当艦隊の常駐艦は私一人のみであることはご承知頂いていることと思しますので、宜しくご配慮願います。

また正規空母である私がソナーなどの対潜装備を使用可能である理由は工夫・努力の2点だけであり、よこしまな手段は一切使用しておりません。定期検査結果からもご確認頂けるものと思えます。潜水艦娘の搜索任務に必要であったため身に付けた能力であり、決して深海棲艦のような異常性は持ち合わせていないものと貴研究部に強く念押し下さいますよう、宜しくお願い致します

— 以上 —

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】

本当に助かります！ どなたでも大丈夫です！

練度や秘書艦経験は問いません。猫の手も借りたいくらいなので、この機会に仕事を勉強させようって感じでも、僕が責任をもつて色々と教えます（勿論、叢雲さんのような即戦力なら大歓迎です）。

竹櫛提督より正式に連絡を頂ければ、すぐにこちらに席を用意します。

ところで、そちらの艦隊に潜水艦娘が1人もいないって本当ですか？ それだけの規模の艦隊で潜水艦を所持していないのは全国的に見ても珍しいというか、たぶん天照隊だけだと思います。何か理由があるのでしょうか。

関連して、というわけでもないですが1つ。

こちらの鎮守府が管轄している海域で5人の潜水艦娘が行方不明になったままなのはご存知でしょうか。元々はそちらの一ノ傘副提督の管轄だったので、ちよつと気になりました。

べつに何を追求しようとか、そういった意味はないです。ご存知なければ気にしないでください。噂のようなものですし（潜水艦の幽霊相手はさすがに笑えませんしね）。

では、次の防衛ライン会議でまたお会いしましょう。

忘れてました。追伸。

すみませんが、しばらく演習は行えそうにありません。大和がしばらく次の大規模作戦のために席を空けがちになるのと、それでも予約でいっぱいなんです。皆して単艦突撃させられる僕をボコるんだ……。

【宛：天照大艦隊 竹櫛提督殿】

お世話になっております。

貴艦隊より艦娘を1人派遣頂きます件、ご快諾頂きありがとうございます。

こちらの一ノ傘姫乃提督を迎えに上がらせますので、お手数ですが準備が整う予定日を予めご連絡下さいますよう宜しくお願い致します。

— 以上 —

【宛：大和】

お疲れ様。

急な話だけど明後日、あつちの鎮守府から応援に来てくれることになつたよ！

まだ誰とは聞いてないけどねー。

歓迎会やるつもりなんだけど予定どう？（ピザとかたくさん注文する予定！）

【宛：特殊事態対策本部 特殊災害研究部 担当官殿】

大和のスケジュール決定権は当艦隊に一切無いことはご存知かと思えます。

また仮に大和が本気で「ピザが食べたいから」という理由で予定をこちらに移したとしても、それは極めて優秀な彼女自身の判断に基づくものであり、私がピザに中毒成分を混入し大和を幻惑させているなどという根拠のない憶測・デマゴギーには惑わされぬようお願い致します。

ピザは鎮守府近隣のチェーン店に電話注文している至って普通のものであり、注文してから配達されてきたものを最初に開封するのは大和です。それからピザが無くなるまで大和がピザから目を離す瞬間は一切無く、私あるいは提督が手を加えられるような隙は一切ありません。どうしても疑われるのであれば私よりも先にピザ店舗を調査すべきと考えます。

現時点で深海棲艦が催眠・幻惑系の化学兵器を使用した例は確認されておらず、強いて挙げるとすれば、駆逐棲姫を撃破ではなく鹵獲したいと渾作戦の直前まで顔を緩ませながら食い下がった方々や、クリスマスに北方棲姫と交流したという部隊などが要警戒かと思われま

す。
大和は近隣の天照大艦隊より応援に駆けつけて頂く艦娘を純粹な気持ちで歓迎するはずであり、「ピザが食べたいから」発言は彼女なりのユーモアから出たものと思われま

す。宜しくご理解下さいますようお願い致します。

— 以上 —

【宛：傘姫提督】

いつまでもそつちに居座つてないで、早く例の艦娘さん連れて帰ってきてよ。

大和のお腹からすごい音が鳴ってる……とか書いてる間に勝手にピザ注文しはじめちゃった。

もう間に合わないから帰りに提督と艦娘さんの食べ物、何か適当に買ってきてね。

【宛：天照大艦隊 竹櫛提督殿】

お世話になっております。

貴艦隊より派遣頂きました軽巡洋艦、多摩が無事到着致しました。改めてお礼申し上げます。

当艦隊提督、私、大和が責任を持って預かります。

ご迷惑をお掛けしますが、今後とも宜しくご協働下さいますようお願い致します。

— 以上 —

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】

その通りだと思います。潜水艦だからって失踪して海中に隠れ続けられるわけなく、もう搜索不能の手遅れか、陸のどこかで隠れ暮らしているかのどちらかで間違いないはずです。（1年のMIAから帰還した僕としては複雑な気持ちですが……）

もし探すとしても海はないですよ。可能性と効率的にも。

それにしても、やっぱり不思議です。艦隊運用が厳しいことで有名な一ノ傘副提督が潜水艦での任務遂行や資材運搬を行っていないなんて。あまり深く追求しないほうがいいかもですかね。

ところで……早速で恥ずかしい限りなのですが、多摩についてアドバイスを頂けないでしょうか。

借りてきた猫のような性格は普段からなのでしょいか、とっても大人しく、ストロブから離れてくれません……。

猫の手も借りたいとは確かに言いましたが、本当に猫のように動い

てくれないんです……。

あのナイフ持った凶暴球磨さんの姉妹艦とはとても思えないサイレンスっぷり、と言いますかずっと寝ています。ストーブをこっそり移動しても眠ったまま熱源を追尾するんです。

マタタビがよく効くとかいった話があれば教えてください。

【宛：特殊事態対策本部 特殊災害研究部 担当官殿】

b m b m , m , b 7 8 つ w 3 b w 3 : @ | 0 ; ぴ @ : : ; p . @ p 0 ;
0 | @ 0 | @ p z せ s z せ s z せ A S せ つ つ s z s d う え つ q う え
w く え q う え q う え う え q w q う え q う え 。 ? . ? .

【宛：特殊事態対策本部 特殊災害研究部 担当官殿】

先程、意味のないメールを私発で送信してしまったことをお詫び申し上げます。

一昨日より天照大艦隊から派遣された軽巡多摩がまだ情報機器の扱いに不慣れであり、パソコンの練習中のミスで送信してしまったものです。

今後このようなことがないように十分な注意を持って業務に当たります。お騒がせしました。

【宛：傘姫提督】

いま作戦中です愚痴は帰ってからにしてください！

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】

おっしゃる通り僕に懐いてくれているため、過度にくつろいでいるのだと思います。タマ。

ですが傘姫提督に対しては本能的に警戒してしまうらしく、僕が任務に出ている間の留守をお願いすると提督を引つ掻いたり噛み付いたりするんです。この鎮守府でタマの縄張りを確保できてから本来の姿になっちゃったのだと思います。良くも悪くも。

それとマタタビは駄目でした。タマはあくまで自分は猫じゃない

と言い張るつもりなのですが。

【宛：特殊事態対策本部 特殊災害研究部 担当官殿】

一ノ傘提督に噛み付き負傷させたのは確かに天照大艦隊より派遣されて間もない軽巡洋艦タマですが、当艦隊に派遣されたことで凶暴性が増した、人類への敵対心を獲得した、といったことは全く根拠のない憶測に過ぎず、私にだけ攻撃性を示さないのは単純に私がタマの信頼を獲得しているからであり、タマを深海棲艦へと引きずり込んだ、また私がそのような能力を隠しているなどあり得ません。

仮に私が艦娘を深海棲艦化させる特性を持つていたとしたら、既に幾度も行動を共にしている大和は深海棲艦化しているはずであり、現時点で貴研究所に損害が発生していないことから逆説的に私の潔白が証明できます。猫一匹よりも大本営中枢戦力の戦艦を寝返らせた方が人類に敵対するならば有効であるはずです。

これ以上の誤解を避けるためタマは一旦、天照大艦隊に帰しますが、次回の定期検査を滞りなく行うためにも私の主張を関係者へご周知頂き、またタマを帰すのに説得できるだけの高級キャットフードを手配下さいますよう宜しくお願い致します。

— 以上 —

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】

お疲れ様です。

こちらの傘姫提督から連絡してます通り、今からタマを連れてそちらにお伺いします。

到着は一六〇〇頃になります。

今回の事については色々難しい事情が重なってしまったためなので、タマが悪いとかそういうことは一切考えてません。本当です。なのでお願いですから、そちらの正門で球磨さんがナイフ構えてスタンバっているとかいっただけは勘弁してください。ホントお願いします。マジで。

【宛：傘姫提督】

今タマを返して叢雲さんと話したんだけど、タマの代わりとしての他の誰かを貸そうかと言ってもらえてる。

航空戦艦の日向さん（僕の事を普通の艦娘だと唯一断言してくれた命の恩人）だけは今直ぐにでも移れるらしいしってことで、いいよね？

3分以内に返信か電話がなければ叢雲さんのお言葉に甘えます。

【宛：傘姫提督】

日向さんの移動は明日になったよ。

ご本人は問題ないらしいけど、航巡の最上さんを残していくのが心配らしくて、一緒に連れて来てくれるらしい。最上さんの準備が整い次第、こちらに向かってくださるって。

……最上さんが僕の見る限り「はあ!? なんで!」みたいな顔してたから、僕が帰ったらちよつと出迎え方を打ち合わせしよう。



『試飛会』とは日向が制作したラジコン飛行機のテスト飛行を行う会である。

航空戦艦へと進化した日向は己の刃を研ぐべく航空機の研究に明け暮れ、定期的に切れ味を試すべくラジコンを製作しては鎮守府敷地上空を飛行させたり墜落させたりした。日々を深海棲艦との戦いに費やす艦娘にそのような暇があるのかと問うならば普通は無いと答え、日向は普通という枠を何食わぬ顔で切り捨てた。故に航空戦艦になつてから随分と久しいものの練度に僅かの上昇も見られず、ラジコン飛行機の製作技術とコントロール技術ばかりが無駄に上昇していった。勿論、この技術が深海棲艦に対する抑止力となった例は一度として無い。本末転倒も甚だしかった。

「艦娘としてあんたそれでいいの!？」と叢雲に激怒されることは度々あり、日向も雀の涙くらいは気にしている。ところで雀に限らず鳥類

が涙することなどあるのだろうか」と日向は疑問に思い、つまり全く気にしていないと同義とも言えた。これぞ鋼のメンタルの成せる業である。

日向が製作するラジコンはいかなる機種であれ、全体をニガウリのような緑色に塗装され、両翼と胴体には赤いマル模様が入られる。機体下部には固定翼機や回転翼機、アダムスキー型未確認飛行機だろうと何だろうと例外無く水上に浮かぶためのフロートが無理やり取り付けられ、つまりは瑞雲化改修が行われた。

制作する飛行機の機種はいつも自由自在だった。F-22ラプター、F-35ライトニングII、A-10サンダーボルトII、Ka-50ホーカム、V-22オスプレイ、コンコルド、気球船、果てはハインケル・レルヒエのような珍機体（特に航空戦艦が運用できそうなもの多）などがプロペラ駆動のラジコン飛行機となった。

この日の試飛会のために日向が用意した（もはや試飛会のためにラジコンを作っている節があり、当初の目的すら完全に失われていた）機体は珍しく、最上が一目でアレと分かるものだった。

「ここらで原点に帰ってみようと思つてな。ライト兄弟の機体と迷つたんだが、やはり浪漫の方を選んでみた」

日本国内での正確な認知度は機種判別の難しい旅客機や零戦を超えるのではないだろうか、ジブリ映画『紅の豚』の主人公ポルコ・ロッソの愛機サボイアS・21である。これには最上も感動し——かけ、心の中で「まあ、そうなるよね」と呟いた。サボイアS・21は水上機であり、瑞雲化改修にはいつも以上に気合が入っているように見られた。アドリア海の透き通る空と海の青の中で輝く紅色こそ要であるにもかかわらず機体はワカメのような瑞雲色に塗装され、浪漫にペンをきをぶち撒ける所業に他ならなかった。しかしセツティングする日向は上機嫌であり、鋼のメンタルは鎮守府が変わろうとも変わらないうが故のものと、最上は再確認することになった。

天照大艦隊からここ、特殊深棲監視艦隊に派遣されて職務開始から二日目である。

二日目である。

初日は装備や荷物の整理を行っただけで、本日は二日目ある。

二日目から早くも職務放棄である。

先程、サボイアS. 21（瑞雲化改修済）に感動したりガツカリしたのは最上なりの現実逃避であった。舗装された地に鎮座する機体に目を向けていなければ、すぐ隣の建屋二階の窓からとつてもないオーラを発しながらこちらを凝視している葛城と目が合ってしまうからである。

最上：Lv. 66

葛城：Lv. 150

急遽派遣された助っ人の立場とはいえ逆らってよいレベルではない。日向に至ってはLv. 10と、海の上では腐っても戦艦であろうと葛城にとつて正直、いないよりはマシな程度である。最上の胃が辛うじてストレスと拮抗できているのは、葛城のオーラが最上たちに超嫌な顔をしているというより、理解の範疇を超えた異文明人のサバトを警戒・観察している風であったためである。とはいえ最上の胃はかつてないほどキリキリ痛んだ。

そしてしつこいようだが鋼のメンタルを持つ日向は葛城のオーラなど何処吹く風、鼻歌交じりに最後の調整に取り掛かっていた。

「いいものだな、アドリア海。あのヨーロッパの……………うん……………どこだったかな」

「知らんのかい！」

極度のストレス下にあったせいか、最上はついらしくないテンションでツツコミを入れてしまった。

試飛会には絶対のジnkスがある。それは最上が僅かでも言葉を発すると日向が調子に乗りラジコンの墜落率が十割に跳ね上がるというもので、制御不能に陥った機体は爆発しない巡航ミサイルとして最上の頭や山城の部屋、葛城の実父を襲ったこともあった。

「ふふ、今日はいつになく元氣じゃあないか最上。普段と違う環境でテストができる機会は貴重だからな」

電車とバスを乗り継いで三時間、海路を飛ばせば一時間程度の距離しか離れていない鎮守府の環境がそう変わるとは思えない。どうし

て僅かな環境の変化に気付いて、葛城の言い表しがたい圧迫オーラを感じ取ってくれないのか。

「あの、ここ他所様の鎮守府ですからね？ 責任とか色々——」

「よし。では始めるぞ。最上もアドリア海にいるつもりで見ている」
場所も知らないくせに！



【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】

あまり気になさらないで下さい。……といっても難しいかもですが、元はといえばこちらの人員不足が招いたことですし、僕がちよつと寝ていた日から部隊を出していただけで助かっています。

ちよつど定期検査があつて、ついでに頭も見てもらいましたが何ともありませんでした。突っ込んできたラジコンは結構な速度が出ていたような覚えがありますが、窓ガラスを突き破ったことでエネルギーがだいぶ下がつたようでした。包帯もすぐに取れると思います。日向さんと最上さんにも問題ないとお伝え頂けると幸いです。

それよりも金剛さんを派遣いただけるといってお話、大歓迎します！
高練度の高速戦艦で事務仕事もこなせる艦娘が手伝ってくれるのはまさしく願つたり叶つたりです。

(ここだけの話、超火力・低速の大和と空母の僕では連携がなかなか難しく悩みの種だったんです)

金剛さんにも色々と準備があるかと思えますので、そのあたりの調整をよろしく願います。

もう1点、噂の潜水艦娘についてですが、できればもう少し情報を集めて頂けないでしょうか。不明瞭なものでも構いません。ちよつと気になるところがありましたので、個人的に調べているところなんです。

では、よろしく願います。何か金剛さんよりこちらにご要望があればご一報ください。

お世話になっております。

先日の定期検査から追加して再度検査を行うとのことですが、検査項目にメンタルモデルやナノマテリアルといった用語が出てきた理由をご説明下さい。どちらも科学分野において使用されることに何ら不思議のない単語ではありませんが、項目は明らかに『霧の艦隊』を意識されたものと読み取ることができます。関連して再び潜水テストを行うともありましたが、貴研究部内では私が泳げないことは周知のはずであり、潜水テストとは全く関係のない私の水着画像を大量に保存していた職員に対して適切な対応を取って頂いたことは記憶に新しいかと思えます。

霧の艦隊についてはかつての大規模作戦から詳細不明のまま姿を完全に消したはずです。当時獲得し保存を試みた技術は全て砂になってしまったと聞いています。

私を通常の艦娘だと最初に断定した天照大艦隊の日向のラジコンにより負傷・昏倒はしましたが、あれは日向の特に理由のないサボタージユ（破壊による労働妨害、あるいは一般的に怠慢、どちらの意味も含みます）であり、私を敵対者と認識を改め攻撃を仕掛けたとする見方は穿ち過ぎであると言わざるを得ません。

確かに正規空母が対潜装備のみならず魚雷や甲標的を装備・使用できるとは他に類を見ない特色かもしれませんが、

- ・ 当艦隊の慢性的な戦力不足
- ・ 提督の戦略性のない兵器開発
- ・ 単艦での遂行が困難を極める任務

などの事情により、無理な訓練を重ねても私1人で様々な装備を扱う必要性が発生し対応致しました。全てあくまで訓練の結果であり、通常の正規空母の枠から外れている部分は一切無いと考えています。

演習や合同作戦時には他部隊の艦娘に混乱をきたさぬよう普通の正規空母として活動するなど、私個人に与えられた命令や艦隊、人類側の戦略を害することのないよう細心の注意を払っております。

私自身の潔白を証明するためにも追加検査は受けませんが、深海棲艦のみならず霧の艦隊疑惑までかかれれば研究部内に疑心暗鬼が無闇に広まるばかりであり、これを防ぐためにも改めて検査項目をご精査下さいますよう宜しくお願い致します。

別件ですが、失踪した潜水艦娘5名について確認したいことがあります。

現在、天照大艦隊に所属している一ノ傘鉄子副提督がまだ独立した艦隊を指揮していた頃、潜水艦を運用していた記録は残っていないでしょうか。現在の天照大艦隊の規模から考えて潜水艦が1人も配属されていないのは不自然であり、内部の方から考えて潜水艦が1人も配属を得られています（まとまり次第、別途連絡致します）。

調査活動はこれまで通り続け、新たな情報が入り次第、見当を修正しながら進めることと致します。

— 以上 —

【宛：大和】

ちよつと聞きたいんだけど、この艦隊って勝手にアルバイト雇っていいの？ いやまあアルバイトというか、艦娘の誘致なんだけど。

潜水艦娘を探してるじゃない？ それでちよつと確信があつて提督に話したら即行動されちやつて。次にこつち来る時、正門に募集チラシが貼つてあるから見てみて。

やつていいのかわいのか分かんなかったからそつちで調べてくれない？ 研究部にバレル前に決着つけて話の辻褄あわせたいから、怪しまれない程度にこつそりお願い。OKだったら大つぴらにやしたいし、ダメだったらバレた時の言い訳を考えないといけないから。

あと、天照隊から金剛さんが来るでしょ。いま提督が迎えに行つてるところなんだけど、戦艦用の装備で金剛さんが喜びそうな装備とか余つてない？ あつたらちよつと嬉しいかも。

【宛：傘姫提督】

なんか変な男の人が来てるんですけど

【宛：傘姫提督】

なんか変な人が正門にいてるんですけど！ いま！

【宛：傘姫提督】

シヤレとかじゃなくてガチで！

ガチな変質者！

金剛さんのコスプレしてる！

【宛：傘姫提督】

金剛さん後でいいからちよつとはよ帰ってきて！

怖いんだってマジで！

【宛：傘姫提督】

でかいラジカセ担いでめっちゃダウンダウン鳴らしてる。なにあれ？ ねえ？

提督が仕組んだドッキリとかじゃなくて？ なんで金剛さんのコスプレしてんのねえ

【宛：傘姫提督】

いや本物はそっちにいたりとかいいから。言われなくても分かるから

アレ見て金剛さんだ思う人いないから

【宛：傘姫提督】

正門からものっそい大声で僕に声かけてきてんの！ Yah—m an, ブラザー閉じこもってないで出て来いよとか言われてんの！

ああいうのダメだってホントやめてよもう早く帰ってきてお願いだから助けてくださいマジで

【宛：傘姫提督】

いって今ちよつとそつちの金剛さんはおいといて

【宛：傘姫提督】

男が苦手とかじゃなくて！

怖い黒人がいんの！

金剛さんのコスプレしたやつ！

あんなん誰でも怖いでしょうが！

めつちや手振ってる！

うるさいのが！

【宛：傘姫提督】

めつちや呼んでるの僕のこと！

耳痛いんだって！

うるさいからに！

【宛：傘姫提督】

もういいからほんと早く帰っ

【宛：傘姫提督】

窓割れた全部

【宛：傘姫提督】

女神使っても意識しか回復しない

平衡覚が壊れた

【宛：傘姫提督】

いや窓割られてもう反撃したんだって耳と頭キーン言ってる

ずっとキーン言ってる

【宛：傘姫提督】

ほらもうパトカーやつと来たけどサイレンの音ぜんぜん聞こえな

いもん

ちよつともう終わらせたからもう早く帰ってきて早く

頭痛い吐きそう

手ちよつと切れたもうやだ

【宛：傘姫提督】

いや金剛さんはもういいって今は

窓ぜんぶ割れたし正門も木っ端微塵にしたし今それどころじゃないのよて

警察の人来てるから提督が話してよ僕もう気持ち悪いすごい無理死にたいくらい気持ち悪い起き上がれない助けて

【宛：傘姫提督】

もうほんと無理電源切る

【宛：特殊事態対策本部 特殊災害研究部 担当官殿】

検査・治療ではたいへんお世話になりました。

明日、鎮守府に戻り復帰する予定です。

2週間前のジャマイカからやってきた金剛型1番艦と名乗る男についてですが、服装は間違いなく天照大艦隊に所属している金剛型戦艦のものと同一であり、装備は大型ラジオカセットレコーダーの外観をした音響兵器でした。兵器の性質は指向性爆音を鳴らす単純なものです。他に類を見ない大出力であり、その威力は当鎮守府の窓ガラス被害と私のダメージを確認して頂ければ、危険度はハッキリしているかと思えます。

ジャマイカ男の行方は現在も不明とのことですが、先述の兵装に加えて私のフルファイアを凌ぐ防御力も持ち合わせているものと思われまます。搜索・捕縛を行う機関には十分な注意喚起をお願い致します。

ジャマイカが当鎮守府を襲撃した動機は不明であり、同日に天照大艦隊より偶然にも金剛型1番艦・金剛を派遣頂く予定でしたが、今の

ところ関連性は無いと考えています。総旗艦の叢雲殿の協力を得て聞き取りを行いました。金剛はジャマイカが地球のどこに位置するのかすら知らない様子でした。アフリカの左辺りではないかと答えていました。

もし再び当艦隊が襲撃された場合、その時に限り大和の砲撃を許可頂きたく、宜しくご検討下さいますようお願い致します。

― 以上 ―

【宛：傘姫提督】

すみません、明日そつちに戻れそうです。

……ジャマイカ襲撃の時のログ見返してたらちよつと酷いなーと思つて……本当に怖かつたんだつて、あの時は。咄嗟にダメコン使つたからよかつたものの、無かつたら危なかつたつてお医者さんに言われたんだから。提督は出かけてて本当に九死に一生だったんだからね。

僕が正門壊しちゃつて潜水艦娘の募集チラシも一緒に燃えちやつたと思うけど、次は「オリヨクル任務無し！」つてアピールしたもの作つといて（オリヨルクルージングがどんなのかは前に話したよね）。募集人数も5名つて明記したほうがいいかな。

天照隊の人たちに来てもらう話はしばらく置いときたいから……。それと珍しく良い話。

研究部から事務専だけど一人、僕たちの鎮守府に転属してくれるつて。

提督の秘書を付きつ切りでやつてもうらうつもりだから、もう出撃中の僕に連絡しないでよ。

じゃあよろしく。

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】

ご心配をおかけしましたが、無事仕事に復帰できました。

天照隊にはもう何度も任務を代行していただいでいて、本当に申し訳ないです。ありがとうございました。

金剛さんについては僕の方からもさんざん説明しましたので、これ以上あらぬ疑いを上からかけられることはないと思います。

(防犯カメラに写ったジャマイカの画像を添付します。色々あり得ないのが分かるかと思えます)

話は変わって以前からお聞きしていた潜水艦娘ですが、やっぱりこちらの副提督の元部下だったようで、何の偶然か僕の復帰と同時にこっちの鎮守府に出頭してきました。伊号潜水艦の伊168、伊58、伊19、伊8、伊401の5名です。

……当人たちの話を聞いていると明らかな脱走艦なのですが、研究部がジャマイカの件で混乱している隙を狙って行方不明艦を保護したことにして、こちらの鎮守府で預かることになりました。本来ならばそちらに引き渡すべきですが、5人とも脱走した理由(言うまでもないと思いますが、オリヨクルです)をまだひきずっているようで、暫く副提督とは顔を合わせさせないほうがよさそうな感じです。演習など海では問題ないかと思えますので、その時はよろしくしてあげてください。

それと同時に、艦娘ではありませんが秘書仕事をこなせる子が1人、新たに配属され、こちらの人手不足はようやく解消されました。次回の打ち合わせでそちらに伺う際に連れて行くことになるかと思えます。いつも猫をプラプラ持ち歩いているちよつと変わった子ですが、伊号潜水艦ともどもよろしくおねがいます。それではまた任務などで一緒に頑張りましょう。

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】
いえ違います。

ちゃんと大和と同じ所属でしたし、普通の人です。

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】
確かに猫が好きすぎるのかもしれませんが、それなら私だってタマのこと好きです。

さすがにタマの前足を持って吊り下げるのは筋力的に難しいです

が。

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】

知っています。妖怪猫吊るしを知らない艦娘はいないです。

でもうちの秘書はそういう感じじゃないんです。普通です。

ただでさえ僕のアレコレでこの鎮守府が曰く付きみたいになってるところに妖怪の話とかやめましょうよ。

本当に一回会えば分かります。

普通の妖怪ですから。

【宛：天照大艦隊 総旗艦 叢雲殿】

僕だけでもそっちの艦隊に移れないでしょうか……？

もう提督はアレだし大和は来たら食べてばかりだしジヤマイカ来たり妖怪来たり勘弁して欲しいんですほんと……。

(R-15) 第24話 叢雲の葉指 12 さよなら
純情ようこそカオス

「え……エクスカリバーあ」

【磯風：Lv. 18】

射撃試験・演習場に味気なく零れた掛け声はすぐに、連装砲の砲撃にかき消された。

対空機銃から戦艦主砲、魚雷に戦闘機、ストレス発散までなんでもござれのこの設備は恐らく、鎮守府内では工廠の次にお金がかかっている。奥行き2キロを超える細長い防音壁は海にまで突き出している、騒音が陸地に漏れることは決してない。狭い日本、ご近所さんと私たちとの関係がいかに難しいかを如実に語っているとも言える。

……アニメーション記録で海上に的を立てて訓練していたシーンは、司令官・副司令官が最も難癖をつけたいシーンだったと珍しく意見を一致させていた。出撃口をはじめとして鎮守府にあれだけの無駄施設を用意しているくせに、なぜ訓練はWi iソフト『リンクのボウガントレーニング』以下なのかと。そんな体たらくだから近海まで強力な深海棲艦の侵攻を許すのだ。——とか何とか、食堂に用意されたテレビで鑑賞会をやっていたら一番はしゃいでいたのが司令官と副司令官で、そのせいで他の皆はというと、

「あのパフェ食べるためにさあ……うちの艦隊ならどんだけ働かないといけないんだろうね」

「月一でもためらうよね……お金だけはあるんだね、あの世界」

「あたしならあの吹雪の100倍は戦えるのに、今日のおやつ何だったと思う? ……おにぎりせんべいの小さい袋」

「僕はボンタンアメ2個。……明日も2個」

「白露は我慢できなくて特盛りパフェ食べてきましたー! ……夕立さあ、アニメのギャラ入ってるよね? ちよつとでいいから……ね?」

「(最高に素敵な軽蔑の眼差し)」

艦娘という私たちにとって最高にホットな内容だったのに白けてしまった。アニメ見ようと何しようかと勝手だろうけれど、立場とか年齢とか少しは気にしましょうよ。

そういったわけで(?) キャットウォークで軽い散歩すらできる広い射撃試験・演習場は実は過剰で無駄なんじゃあないかと思えてきたところに、熱心にも施設の利用申請が入ってきて、今は二人が訓練に励み有効活用してくれている。

時津風隊が一人、磯風は意味不明な掛け声を発して耳を少し赤くした。

「違う違う！ 何度言ったら分かるの。心にこう、ブレイブなハートがない！」

【時津風：Lv. 13 ↓ 19】

「時津風隊はなんかこうガッツのある感じなの！ 分かる!」

旗艦殿の曖昧模糊たる説教に、私たちはただ辟易するしかなかった。部隊を編成した時から時津風の言うことはいつもフワツとしていて、まさかその悪い癖がここまで酷いとは……と、二人の訓練を離れた場所から監督する私は時津風をどう矯正したものか頭を捻っていた。

「……時津風の士気は敬服に値すると思っっている」

「そう？ フフン、当然当然」

近頃のフワツとした被害は磯風に集中していた。練度が一人突出している私はさすがに特別訓練は免除されるとして、他の隊員は磯風の武人氣質を風除けにして逃がっている。団結？ 何それ燃料になるの？

「しかしこの訓練は……何の意味があるのだ？」

「だーかーらー、主砲は気合でドゴーン！ ってやるでしょ？ やりたいでしょ？」

「いや、別に……」脳筋純朴の気がある磯風の困り果てた表情はなかなかレアリティがあった。

「もう一回だけお手本見せるからね。よく見て目に焼き付けること」

時津風は100メートル先に新しくターゲットを出して、それに向けて連装砲を構えた。

訝しげに見守る磯風と私。

すう、と大きく息を吸った時津風は大声疾呼、

「スターライト——ブレイカー!!!」

ドオン。ごくごく普通の砲撃音の後、的の後方約300メートルの位置で水柱が立ちのぼった。先の磯風の「エクスカリバーあ」は同距離的を狙ってしつかり当てているというのに、時津風隊の旗艦がこの体たらく……いや、それよりも天照大艦隊の総旗艦として憤悶すること甚だしい。ホントどうしようこの子、解体して資材の足しにしたほうがマシか知らん。

砲撃の腕が悪いのか連装砲の整備を怠っているのかそれとも両方か、しかし外したことを気にする様子もない時津風は「ふう」とかいてもいない額の汗を拭った。「どう？ 分かった？ 間のタメがとくに重要だから」

「時津風。質問がある」

「なに、まだ分かんないことあるの？」

「分かる事の方が少ないのだが……差し当たり一つ。掛け声が違うのではないか？」

「ん？ そんな事ないでしょ」

磯風の混乱が極まったようで、生まれてこの方一度も使ったことのない顔の筋肉を動かしたような表情になった。恐らく私も似たような表情になったと思う。顎と頬のあたりが特に引きつって痛い。

『スターライトブレイカー』だったではないか。私は『エクスカリバー』と叫ばされるために訓練に連れて来られたのだぞ」

「似たようなもんだし、平気平気」

「に、似たようなもの……?! エクスカリバーでなければ駄目だと言ったのは時津風ではなかったか！ ならば普通に『撃て！』や『斉射！』などでいいだろう」

「駄目駄目、そんなんじゃ。面白くない」

「お、お、おもし、ろ……!」

「ほら。もう一回やるから早く構えて」

プツン、と何かが切れる音がしたのは私の幻聴だとして、動揺に動揺を重ねた磯風は一周してピタリと冷静さを取り戻し、妖刀に取り憑かれた武士のような不気味な笑みを浮かべていた。

「じゃあ次は50メートルにしてあげよ」と設定する時津風の背後にゆらりと迫った磯風は、

「エクス——カリバー——!!!」

綺麗な後ろ回し蹴りを食らわせ「へぐほお!?!」時津風を海へ叩き落とした。



時津風隊はあくまで実践経験を積むために編成した一時的な部隊で、駆逐艦だけを集めた作戦も今回でお終い。この次からは他の艦種とも組んでより難しい任務に当たってもらおうし、また以前のように遠征にだつて行ってもらおう。いつまでも人員を比較的安全な海域で遊ばせておけるほど艦隊に余裕は……（まあ、なくはないんだけど）……とにかく今日が最後の基礎訓練ということになるから、明日からの過酷な仕事で折れてしまわないよう気を引き締めること。

と、私は磯風にだけ出撃前にこっそり伝えた。

本当はまだまだ不安要素だらけの時津風隊を解散させる予定なんてなく、結束が固ければ私だけを他の誰かと入れ替えてそのまま固定メンバーで任務をこなしてもらおうか、なんてことも司令官と話していたくらいだった。

そう、結束さえ固ければ……。

部隊解散の話をした途端、ブラック鎮守府の潜水艦娘のようだった表情をぱあつと明るくさせた磯風にとって時津風隊の結束なんて、首に巻かれた結束バンドのようなものなのかもしれない。締めることはできても緩めることはできない。今にも窒息してしまいそうだった磯風をあんまりにも見ていられなくて、時津風隊解散は私の独断でつい決めてしまったものだった。磯風云々がなくとも他の三人だつ

て磯風を盾にする薄情者だし、遅かれ早かれ解散は決定的だったでしょうよ。

「そうか……い。 ああ任せておけ。この磯風、天照大艦隊の剣となり暁の水平線に約束された勝利を刻もう！」これほど高揚した磯風を私は初めて見た。

「いや、あの、意気込んでるとこ悪いんだけど、艦隊の剣は私っていう意味合いがあつてね？ ほら、天叢雲剣にかけて私が艦隊の名前を決めたというか、そういう設定とか事情が……」

「そうだったのか。いや単なるものの例えだよ。大船に乗ったつもりでいてくれということだ」

「私たち艦そのものなんだけど……小型の駆逐艦なんだけど……」

「フツ、軽い冗談さ。どうした叢雲、今日は調子が出ないようじゃあないか」

あんたがどうした。

「ねえ磯風、いつも通りで今日が最後とはいってもこれから戦闘よ？

深海棲艦と命がけの戦闘すんのよ？」

「うん？ ——ああ、うん、勿論分かっていても。気を引き締めていかねばな」

絶対忘れてたよこの浮かれポンチ。そこまで時津風隊が嫌だったか。

「……時津風隊が訓練目的の編成だったことも忘れてないでしょうね。今からの戦闘で無意味に大破してみなさい、さっきの話は取り消すわよ」

一瞬固まる磯風だったが「なに、当然の働きをするだけだ」と軽く笑って余裕を見せた。

世界はまだまだ説明されていない謎で溢れていて、それは当たり前と思っっている日常の中にも理解の及ばない理(ことわり)として組み込まれている。事実は小説よりも奇なりと言うけれど、逆にベツタバタに手垢のついた流れを裏切らないのもまた事実。例えば熱湯風呂に入るのを躊躇していたら必ず誰かに突き落とされてしまうように。

その後の戦闘で磯風は私の期待をまったく裏切らない結果を出し

てくれた。無論、悪い意味で。



「そんなに酷いダメージ受けたの？ この世の終わりみたいなの顔して
るわよ？ ほら私につかまって、お風呂行こ？ ね？ 大丈夫よ、私
が慰めてあげるから」

【雷：Lv. Lv. 122 ↓ 135】

一人大破した磯風は帰投すると足の動かし方をも忘れてしまった
らしく、雷に引きずられるように入渠していった。時津風たちが事情
を知らないから良いものの、そこまで拒絶するのはさすがに酷いん
じやあないかと思う。

……でもこれは、戦闘前に余計な事を吹き込んだ私が悪かった。

旗艦という立場についたため目を濁りに濁らせた時津風も「そんな
に痛かったのかな……ねえ叢雲、やっぱり輪形陣がよくなかったのか
な」と、ズルズルと浴場に引つ張られてゆく磯風の後ろ姿を見ながら
自省している。

昼間は敵の軽巡と駆逐艦しか出て来ないと判明している海域に出
撃したのだし、戦術的に言えば私たち駆逐艦部隊が旗艦を囲んで守る
意味も、飛んで来るはずのない航空機を警戒する陣形を取る意味もな
い。にもかかわらず旗艦殿が「ようし、今日は輪形陣やっちゃおう！」
などとその場の思いつきで言い出し、私は失敗も経験になるでし
ょうとやらせてみて、脳筋磯風は普段ならば単縦陣以外あり得ないと言
い出すところを素直に従った。

せめて時津風を庇えていたならばまだ納得もできたでしょうに、
たった一本の磯風を狙った（かどうかも怪しかった）魚雷を見逃し回
避し損ねて大破するなんて、二〇一五年最初の失敗事例として記録に
残るのは間違いない。

「そうね。輪形陣は単純に丸くなれば効果があるってものじゃないの
よ」といいかげんな事を言う私だった。

「じゃあどうすればいいの？」

「ええとね……空母と一緒に編成される時にまた説明するから。それじゃあ皆、お疲れ様。それでね、今日はちよつと話があるから。皆で夕食しながら話すから、磯風が修復するまで休憩。そうね、一時間後にしましょう。一時間後に食堂前に集合。いいわね」

時津風隊をいささか強引に駆逐艦寮に帰して（魚雷以外にも敵の攻撃が何故か磯風に集中したため他の皆はノーダメージだった）私は執務室に向き、仕事であった司令官と吹雪に時津風隊を解散させる旨を伝えた。

仕事では根回しをしていないと落ち着かないタイプの私が独断かつ行成に部隊を解散させるなんて司令官と吹雪にとつても珍事だったらしく、部隊編成予定の変更よりも、時津風隊はいつたいどのような闇を抱えていたのかと勘繰る二人の追求を躲すほうに苦労させられた。



一時間と、私が大遅刻して三十分後。

「まだ入渠中？ 寮には戻ってないの？」

見ていないと頭を振る時津風たち。

磯風には勿論、食堂前に集合するようメールしている。電話には出ない。

いくらボロボロに大破してしまっただといつてもそこはまだ練度の低い駆逐艦、修復はせいぜい数十分で済むはず。

これから夕食と食堂に入っていく誰に聞いても磯風は見えていないと言う。

「ど、どうしよう叢雲。磯風って大怪我してたんじゃ……」

私が倒れた時もそうだったけれど、時津風にメンバーを思いやれる旗艦としての責任感があったからこそその、時津風隊を固定編成にする話だった。ただちよびつとばかり阿呆なだけで、『エクスカリバー』と叫ぶ訓練にしても決して悪気なんて見られず、本当にそれで磯風が強くなれると信じていたからこそだった。基本、阿呆ばかりが一つ所に

集まった天照大艦隊なのだから、部隊の旗艦は人並み以上の阿呆（当艦隊基準）くらいが丁度良い。

つい先程、解散を正式なものにしたばかりなだけに、時津風の子犬のように潤んだ目で見られるとバツが悪くなってくる……。こういう人事はやっぱり司令官から通達するべきじゃあないかしら。ほらだって私はこうした方がいいんじゃない？ と提案しただけで最終決定を下したのは司令官なわけだし。天照隊の責任者だし。私なんて総旗艦と言われたところで中間管理職よりも権限のない、ただ阿呆たちがあんまりにも阿呆なことをしないよう見張っているだけの普通の駆逐艦だし。

などなど言い訳をつらつら一通り並べて現実逃避は終了。時津風の動物の耳のように垂れた髪を両手で掴んで左右に引っ張った。

「わふっ!?! なになにに遊びたいの!?! ごめんね今ちよつとアレだから後でね」

「磯風は大破はしたけど心配ないわよ。長湯したことなかったからのぼせて涼んでるだけよきつと」

「でもさ、電話にも出てくれないんだよ」

「私がちよつと浴場見てくるから。皆は先に食べて。話があるって言ったけど明日にしましょ」

「……今日の叢雲、なーんか隠し事してる気がする」

嗅覚も動物並かこの子は。

「えっと、だ、だから重大発表を明日まで隠すって言うてるのよ。ほら出撃もしたしお腹空いたでしょ？ 酒呑み連中が騒ぎ出す前に食べちゃいなさいな」

時津風たちを強引に食堂に押し込んで、私は浴場に向かった。その足は自然と早足になった。

隠し事。それは時津風たちだけに対してではなく、私自身にも隠していた。考えないようにして走り出そうとするのを堪えた。私が焦燥に取り憑かれるほど、可能性がどんどん現実味を帯びてしまっただったから。

磯風は極度に暗然としていた。あの刀剣のような武人氣質が折れ

てしまつて、そんな危うい状態の子を一人にさせてよかつたのか。雷が浴場まで付き添つてくれていたから体の方は問題ない。でも入渠では心までは修復できない。

まだ練度の浅い時津風にもできる気遣いができなくて何が総旗艦だ私の馬鹿。もし浴場で磯風が一人きりになったら、もし磯風が一人で何処かへふらりと行つてしまつたら、もし――

「叢雲さん？ どうしたんです、そんなに怖い顔して」

【電：Lv. 102 ↓ 109】



寝間着で駆逐艦寮から来たらしい電に、私はつい肩に手をかけ掴みかかつてしまつた。

「磯風見てない!? 入渠から戻らないのよ!」

私と艦隊での立場をほとんど同じくする電を目にした途端、私の自戒はあつけなく崩れた。

「ちよ、ちよつと落ち着くのです」

「落ち着いてなんかられないわよ! 磯風に何かあつたら――!」

「よく分かりませんが、磯風なら雷とお風呂に入ったんですよね」

「え? う、うん。そうだけど何で知つてるの?」

「雷から連絡ありましたから」とスマホを取り出して見せる電。

「ところでこの連絡があつたのつて一時間半くらい前なのですが……磯風もまだ戻つてない?」

「磯風も? も?」

「私も雷を探しに行くところだったので……ちよつと待つてください。嫌な予感がしますよ」

電の肩に掛けていた手を離れた。「どういうこと?」

「叢雲さん。まさか磯風つて落ち込んだりしてませんでしたよね?」

「落ち込むどころの様子じゃなかったから心配してるのよ。だからバカなことしないかって――」

あちやー、と電は額に手を当てた。

「叢雲さん。残念なお知らせがあります」

「な、なに？ なにごと？」

「磯風はお風呂で絶賛バカやってる最中です。いえ正確に言うとやられてる側なのですが」

「どういう事？ ちゃんと言つてよ、わたし本当に心配してるんだから。磯風は無事なの？」

「あー……えー……無事かどうかは被害者の主観次第なのですが、少なくとも私が見てきた限り、被害者はみんな無事では済みませんでした」

「被害者って何よ？ 何がどうなってるの？」

「磯風のこと頭がいっぱいになって忘れてるかと思いますが、叢雲さん」

ハッキリした断定口調のわりに、電の目は不具合が出た魚雷のように泳いでいた。

「雷のダメ人間製造機の通り名は伊達ではないのです。私の姉は疲れた心を性的手段で癒やして中毒にしてしまう……変態です」

私の思考ベクトルは危険を察知して急速反転し、何も無かったことにして食堂に戻りたくなった。

人は失うことでしか持つていたものの大切さを理解できない。

それは例えば、おバカだった時津風隊。

本当になんておバカで楽しくて、私は解散なんてバカなことを考えてしまったんだろう。そのまま良かったじゃない。いつか磯風も時津風の事を分かつてあげられる日が来るはずだったのに。

すべて今更だった。

司令官に正式に決定させたのは私。

この手で幸せだった過去と幸せになれたかもしれない未来を捨てたんだ。

私が間違ってた。

過ちを犯した私にはきつと相応の罰が下る。私はそれを甘受する。だから……。

……磯風の事はもう諦めちゃダメかなあ。



電とぼったり出くわしていなかったとしても、どうやら浴場の異常には間違いなく気づけていたらしい。入り口にはちよつとした人集りができていた。

「お風呂場ってけっこう響きますからね。音とか声とか。中の音が外まで漏れちゃって、それを聞いて集まってるのですよ」

あっちの鎮守府にいた頃はよくある風景でした、と、しみじみ言っ
ていられる電の神経が私には理解できない。

きつと磯風は部隊の悩みを打ち明けていて、天照隊の最高練度を誇る雷が親身になって聞いてあげているから長いこと話し込んでいるんだきつとそうだ、なんて淡い期待すらさせてくれないのかコイツらは揃いも揃って。

「どきなさいムツツリスケベ共！」

入り口で耳を澄ませていた阿呆共を押し退けた私は、どうしてくれるのか抑えきれない怒りにまかせて無人の更衣室を突っ切り、

「あの、叢雲さん——」

曇りガラス戸を勢い良く開いた。

浴場を貸し切りになっていた二人は足だけを湯につけてタイルの上に重なっていた。

雷と目が合い、その下で薬物でも摂取したようにおかしくなった誰かを見た——私の常識とか理性とか、そんなのが一瞬吹っ飛びかけた。私の知らない世界がそこにはあった。人間があんな風に人を貪ったり、また貪られるがまま嬌声を上げたりするなんて知らない。

一旦ガラス戸を閉めた。

「心してかかったほうがいいのです。あっちの世界は初見だときつっついでですよ」

「……いい、言うのが遅い！」

「あ、やっぱり初めてだったんですか。こういうの」

「くあwせdrftgyふじこlp;@:!!!」

「まあまあ。ここは私が先に行くのです。姉妹の不始末は姉妹で処理しますから」

余裕綽々といった感じで電は靴下を脱いだ。その一方で気づけば私なんて土足だった。なにこの差。全つ然羨ましくもないのに、私の知らない世界でレベルの差を見せつけられたみたいで悔しくて堪らない。この経験値ってどうやったら稼げるの？ 清く正しい人として稼いでいいものなの？

とりあえず私もいそいそと靴と靴下を脱いだ。服は……いや脱ぐ必要ないでしょ私のバカ。電も寝間着のままだし。

「それじゃあ突入します。心の準備はいいですか？」

「う、うるさいっ。早く行くわよ」

「では——」とガラス戸に手を掛けてからの電の行動は紛れも無いプロのそれだった。

戸を開けるなり積んであったケロリン桶を引っ掴み、躊躇や姉妹艦への気遣いといったものを全く感じさせない勢いで投げつけた。

日本全国の銭湯でおなじみのケロリン桶は、子供が蹴飛ばそうが腰掛けようがビクともしない強度から『永久桶』の別名を持つ（と紹介されているけれど私は永久桶と呼ぶ人を見たことはない）。その信頼性は毎日のお風呂や正規空母の度重なる乱闘で証明されている。風呂桶にそこまでの強度を持たせる意味が果たしてあるのか、つくづく日本人のガラパゴス努力はよく分からない。

そんなケロリン桶が電の手から放たれ、見事スコーン！ と雷の頭に命中した。アンパンマン新しい顔よと言わんばかりの勢いだっただけで雷の首が一瞬、不自然な方向に曲がった。

「いいかげん死ぬのDEATHこの万年発情猫！」

雷が怯んだ僅かな隙に電は素早く急接近、背後に回ると胴体を掴み磯風から引っぺがすように抱え上げてそのまま仰け反りジャーマンスープレックスを決めた。魚雷が炸裂したかのように湯船に立ち昇る水柱。お湯のプールがあるとはいえよいこはまねしちゃいけないレベルの危険さに見える。

「げえっほー！　うえぶ……！」とふらつきながらも雷は立ち上がり、少しホツとした。

しかし同じく湯船に落ちて寝間着をびしょ濡れにした電にはまだまだ許すつもりはないらしく、湯船をリングとした雷電キャットファイトのゴングが鳴った。

「はあ、はあ……な、なんだ？」

電が雷を相手にしているのだから、磯風は当然私が何とかすることになる。直視もできないのに。



私がさつき磯風を見て一時撤退したのは、本能に近い所から出て来る背徳を感じたからだった。

あの武人氣質で、堅物で、脳筋で、一本の筋を通した磯風が、

「い、いかずちは？　なぜ途中で……もう少し、だったのに……っ！」
まるで野生を忘れた犬のように仰向けになり、雷に何もかもさらけ出し、拳句その体を這い回る雷の手や舌を求めるように自ら腰を上げている姿なんて死んでも他人に見られたくはなかったでしょう。私ならそんな醜態を見られたら死ぬ。それを心の準備なしで見せられる私の事情も少しは考慮して欲しい。

いつまでも入り口に突っ立っているわけにもいかず、仕方なしに私は磯風に恐る恐る様子を見ながら近づいた。

「ね、ねえ……大丈夫？」

一応聞いてはみるもののどう見ても大丈夫ではない。雷を引き離してもなお全身は痙攣しているし、上体を起こすどころか四肢からはほとんど力が抜けていた。それに何より、あれだけ凛々しかった表情は熱々のトーストに載せられたバターのように変わり果ててしまっていた。

「……むら、くもっ？」

「そう叢雲よ。もう大丈夫だから上がりましょ？」

「だ、駄目だ……駄目なんだ……！」

虚ろに濁っていた磯風の目から突然、涙が溢れてきた。既にさんざん泣き腫らした痕の上を大粒の涙が流れ、緩みきった口からは嗚咽――ではなく、さつきまで浴場の外にまで響かせていたものに近い色の声をあげた。

何がもう少しで駄目なのかサッパリ分からず混乱する私の目を盗んで、磯風の両手には力が戻っていた。たぶん無意識なのだと思う。私に見られていることなんてお構いなしに磯風の手は、雷に教え込まれたらしい場所を這い回っていた。

私の目の前で磯風がやっていることは分かる。知識としては頭にある。

「……はっ、はあ………んっ！」

けれど実践されるとなると理解とはまったく別の次元にあった。

お子様体型の雷と違って磯風はけっこう良いスタイルをしている。出ているところは出ているし、締まるところは締まっている。長く綺麗な黒髪が白いタイル上で濡れて、横たえた身体に絡みつき強調されたラインから目が離せない。

誰もが羨むだろうこの身体が今、誰の手にも渡らないまま持て余されている。

左の指を食い込ませている胸は左右の大きさは違わずバランスの良い形をしていて、触ったらきつと気持ちいい。これだけ自分で弄っているのだから触られても気持ちいいのかな……。右手はまだ何処をどう触ればいいのか迷っているようで、そこ全体をマッサージするように揉んでみたり一箇所を擦ってみたりと落ち着かない。たまに一点に指が触れて、その瞬間だけ磯風の腰が大きく跳ねるけれど、すぐに手放してしまうのは怖いからかも――

「んんっ！――あ、あ、だ、だめなんだ、もう少しなのに……っ！」
……磯風が何か言ったことで、自分がいまじまじと観察していたことに気付いた。うわあいやだこれじゃあ私もスケベじゃない。

「叢雲、頼みがある」と言いながらも磯風の手は身体を休ませようとはせず、苦しむ身体を逃がさなかった。

「な、なごっ！」

「こんなに切ないのに、——んっ！　じ、自分じゃ駄目なんだ……！
途中で止められて頭がどうにかなりそうなんだ……！」

あんたの頭は既に手遅れです。

「少しでいい……手を貸してくれ」

そう言われて本当に私の手そのものを必要とされたのは初めての経験だった。磯風は了承もなしに私の右手首を掴むと、孫の手でも使うかのように大事な部分にあてがった。

その瞬間に感じたモノを、私は何と表現したらいいのか分からないし知りたくもない。ただ、ずっと目の前で綺麗な身体が悶え喘ぐ姿を見せつけられて、周りが見えなくなったというか理性が欠けたというか、そういうものはあったかもしれない。

私の指が僅かに撫でただけで反応する——ほう、と気持ちよさそうに満たされた吐息と安心した顔は私にすべてを開いてくれたということだった。誰もが求めるこの美しい身体に私は求められ、だから求められるまま、求められる以上に、磯風を乱れさせたい。

「んああ!?　ま、待っ——んっ！　いきなり、つよくはっ……！」

触れたものは柔らかいけれど複雑なカタチをした箇所もあって、私はさつき磯風の弱い場所を何度か見せつけられた。だからそこを触りたいと思うのは当然だった。ここが磯風の欲求を満たす場所なのに、決壊が怖くて自分では触れられない。相反する願望を私だけが叶えてあげられる。拒絶される程の快楽を与えてあげられる。この綺麗な身体をどうにでもしてしまえる高揚感に打ち震えた。

「はあ、はあ……あ、あんたがやれって、言っただからね……！」

「っ……い、いやだっ！　そこ、はあっ！　くるし、やだっ……！」

「でもここがいいんでしょう?　……ふふっ」

なんて可愛い顔をするんだろう。——もつと見たい。もつとこの凛々しい顔を歪ませたい。

「だめだ、やめて——あっ！　んん！　んっ——！」

磯風の全身が強張り、私の右手を跳ね返すように強く跳ねた。望んでいた崩壊。歯を食いしばり奔流に耐える表情も素敵——だけど、私はまだぜんぜん足りない。私だけが満たされない!

「っはっ！ はっ、ま、待って、もうじゆうぶ、んんっ!? やだ、やだ
本当に限界なんだ……!」

「な、なによ……はあっ……こっちはずっと見せつけられてたんだか
らね……はあ、ははっ、あははっ！ もうちよつと付き合いなさいよ
……!」

「だ、誰か助けひあつ?! もう死んで、しまっ！ やだっ、次のが来た
ら……!」

「次のつてなあに? ほらちゃんと言いなさいよ、雷に教えられ——」

雷の名前を出して、私は唐突に現実に戻ってきた。

場所は浴場。そこで雷に襲われている磯風を助けるために電と二
人で突入したんだ。そうだったそうだった。私は部隊編成の事
などで悩む天照大艦隊の多忙な総旗艦、叢雲だった。

助けようとした磯風は私が覆い被さった下でたった今、惰性で動い
ていた私の右手により鷄をめたような悲鳴を上げて失神した。あら
まあ可哀想に。よっぽど気持ち良……苦しいことがあったんでしょ
うね。素っ裸で風邪もひきそうだし、すぐに医務室に運び込むとしま
しょう。

「じゃ、じゃあ二人とも。磯風を担ぐの、手伝ってくれる?」

磯風と同様に全裸の雷、寝間着をずぶ濡れズタズタにした電はさつ
きまでプロレスに興じていたはずなのに、気が付くと二人は大人しく
並んで呆然と私を見ていた。見知らぬ獣の不思議な生態でも観察し
たかのように。

二人の視線は私の左手に集中していた。磯風に求められたのは右
手で、じゃあ空いた左手は何をしていたのかと見てみると、いつのま
にやら勝手に私の下着の内側に滑り込んでいた。磯風も同じ事をし
ていたけれど無意識って怖いわね。急ぎ指揮系統を奪い返した左手
の指を動作確認のため動かすと「んひっ!?」ゾクリとしたものが身体
の芯を走った。

雷が恐る恐る口を開いた。

「えつと……欲求不満なら、いつでも言ってくれていいのよ?」

「……そういう気遣いはいらなから」

◆
◆
制服のまま浴場に入って濡れ鼠になり風邪をこじらせた、という設定で医務室の布団をテント代わりに籠城すること一週間。ようやく気持ちの整理が少しだけついて、テントから出る決心ができた。

そろりと廊下に出ると、医務室前をタイミング悪く時津風が通りがかった。

「あれ、もう大丈夫なの？ 熱が50度も出たって聞いたけど」
死ぬわよ。でもここはやり過ぎすしかない。

「うん。まあね。おかげさまで」

「そっかー。良かった良かった。でもねー、病み上がりで悪いけど悪いニュースがあるんだー」

「な、なに？」

「時津風隊が解散させられたんだよ。今はみーんな別々に動いてるの。残念だよねえ。納得いかないよねえ」

「あーあったわね、そんな話。一週間前はものすごく悩んでいた気がするのに、今は正直どうでもいい。」

「解散しても任務次第ではまた同じメンバーが揃うことだってあるわよ」

「ホント!？」

「うん。たぶん」

「その時はまた旗艦やつてもいい!？」

「いいんじゃない？ ……それよりも、さ。ちよつと聞きたいんだけど」

「うんうん。なんでも聞いて」

「私が風邪ひいたのってさ、えつと….:…どうしてだっけ。50度の熱のせいであんまり覚えてなくて」

「50度じゃ仕方ない仕方ない。実は磯風がねえ、お風呂に入ってる時に雷とおしゃべりし過ぎてのぼせちゃってさあ」

「へ、へえ」あの時、浴場前で磯風の喘ぎ声を盗み聞きしていた連中に

は箝口令をしいてあるはず。時津風の様子からして電は私が土下座して頼んだ通りにやってくれているらしい。

「そこに叢雲が助けに行っただけで、自分も風邪ひいちやうのはよくないな。ゾンビ取りがゾンビになるってやつだね」

「ミイラね」

「自分のことも気をつけないとダメだからね。困ったことがあったらいつでも元時津風隊の旗艦、この時津風に頼っていいからね！」

「ありがとう。頼りにしてるわ」

「へへっ。それじゃ遠征行ってくるね。あ、そうだ叢雲は知ってる？」

「なに？」

「磯風って栗が弱点なんだって」

むせた。

「……誰が言ってた？ それ」

「知らないけどお風呂で雷と話してたらしいよ。おいしいのにねえ」

「そ、そうねえ美味しいのにねえ」ドロドロトドロト湧いてくる方のイメージを払拭すべく必死にモンブランケーキを思い描いた。

「じゃーまたねー！ と去ってゆく時津風の後ろ姿が、何故だかとても尊い存在に見えた。」



駆逐艦僚の自室前で、そういえば吹雪と相部屋だったことを問抜けにもここにきて思い出した。

吹雪が時津風のように純真無垢であればよかったのに、残念ながら彼女はとうの昔に雷に美味しく頂かれて身も心もあの万年発情猫を是としている。私や磯風の事を伝言ゲームで聞いただけでも間違はなく嘘を見破り正解に辿り着くはず（仮に本当に何も無かったとしてもいかがわしい方向に考えそうですらある）。

これからもずっと一緒に布団を並べて生活を共にするのだし、じゃあ私はどう振る舞えばいいのだろう。

何事も無かったように過ごす？ 吹雪なら触れずにいてくれるとは思いますが私が居た堪れない。

それならいつそ開き直る？ 磯風の栗がおいしくてさーとか言っちゃって……私のバカ！

ごちやごちやと考えるのをやめて出たとこ勝負、ノックして「ただいま」扉を開けると、

「おお叢雲、復活したか！ 元気も戻ったようでは何よ——」

一歩引いて扉を閉めた。いま吹雪が陽炎型の十二番艦に見えた気がした。一週間で部屋の場所を忘れちゃったかなハハハと表札を見ると『叢雲・磯風』と書かれていた。

さて、再び考えてみよう。おかしいのは私の目か、頭か、それとも世界か。この三つに絞れると思ったらよくよく検討すると視覚情報は目というレンズから入ってくる光を脳で処理しているんだし世界についても私が知り得る限りのものでしかないんだから頭の中に存在すると言ってよくつまり今現在脳内会議を繰り広げている小さな私たちそのものがエラーという結論に——

「気持ちは分かるが、恥ずかしがることはないだろう」中から出てきたのは改二となつて間もない吹雪とは似ても似つかない磯風だった。

「……恥ずかしがってなんてないわよ。何してんの」

「ん？ 暇だったから本を読んでいたが」

「違う、そうじゃない。私と吹雪の部屋で何してんのって聞いてんの」「なんだその事か。叢雲が医務室から出て来なかったからな。事後承諾になるが吹雪と部屋割りを変わってもらったんだ。これから宜しく頼む」

私に何を宜しくしろと言うんだらうこの脳筋阿呆。

磯風の肩越しに部屋の中を覗き見ると吹雪の私物は一切が消えていて、代わりに見知らぬ居住空間が発生していた。なんだか新しい住人を迎え入れたというか、元の住人に見捨てられたって気分になつてくるんですけど……。

「吹雪に変わってもらったって言ったわよね」

「ああ。二つ返事だったぞ」

「二つ返事で見捨てられた……」

「さすがは最古参の艦娘と言わざるを得ない洞察力だった。私の情感などお見通しらしい」

磯風は頬をポツと紅色に染めた。

「……この部屋の防音性はイマイチだから、夜は少し静かにしたほうが良いとアドバイスまで貰ったぞ」

この部屋割り異変の謎すべてに、性的欲求という一本の筋道を立てることで説明が付いた。だからといって私が納得するかは全っ然別問題であつて、誰かとナニコレするつもりなんてこれっぽっちもない。本当はない。あの浴場での出来事はほんの気の迷いというか磯風が辛そうだったから仕方なく救命処置のような感じで対処したのであつて、決して私はそういうのじゃない。過去の業務日誌『叢雲の薬指 10』あたりに明記してある。私はノーマルです。二刀流でもありません。

「……この磯風では駄目か？」

急にチワワのような瞳をしないで欲しい。

「磯風がダメとかじゃなくてね……そうだ吹雪！ 吹雪がいるじゃないー！」

「なぜ吹雪が出て来るのだ？」

「あんたさつき自分で言ったじゃない、吹雪はなんでもお見通しだつて。ほら、冷静になってよく考えてみて。吹雪はなんでも分かってくれるのよ？ そんな子と一緒に生活したくない？ 私なんかよりずっと——」

「分かってない。分かってないぞ叢雲！」

「へ？ きやつ!？」

手を引かれて部屋の中に転がされた。畳には布団を敷かれていたから痛くはなかったものの……どうして昼間なのに布団が出しっぱなしになっているんだろう。

磯風は後ろ手で部屋の扉を閉めた。

「これから侵食を——ああいや寝食を共にするのだから隠し事は無しにすべきだと思う」

「私はお互いのプライバシーを大切にすべきだと思う」

「一週間……私は耐え抜いたんだぞ」

「はい？ 何を？」

「私は叢雲に飢えているんだ！ あの時、もう自分だけではどうしようもないと……そんな私を救ってくれたのは叢雲ではないか！」

「ちよっ!？ 声大きい。さっき防音はイマイチだって言ってたでしょ」

「だが安心してくれ。この磯風、もはや叢雲なしでは生きていられないが、相方に尽くすことも決して忘れはしない」

鼻息は荒く、瞳孔を全開にした磯風はいつの間にか外していたセーラー服のスカーフをはらりと落とした。

「戦闘以外は不器用なのは自分でも承知している。しかし私だけが世話になってばかりはいられない。だから頼む。まずは叢雲の身体を研究させてくれ」

狭い二人部屋で入り口を塞がれては逃げ場なんてない。

「不安になるのも分かるが私を信じて欲しい。不器用な私のために吹雪は特殊装備まで貸してくれたのだ」

「特殊装備？」

磯風がゴソゴソ取り出したのは、簡素なりモコンに細長いケーブル、そしてうずらの卵のようなものがひと繋がりになった……なにが特殊装備だ本当にバカじゃなからうか。

「これで初心者も安心だ。大丈夫、既に自身で試してみても——うん。悪くなかった」

「ふぶきー！ 出てきなさいふぶきー！ あんた私を裏切ったこと後悔させてやる！ とうか誰か助けフグツ!？」

口の中にハンカチを押しこまれて、さつき捨てられたスカーフをぐりりと巻かれて固定。この間わずかコンマ五秒。

「あまり大きな声を出されては困る。叢雲とて、その……自分の恥ずかしい声というものを響かせるのには抵抗があるだろう？」

この時から既に私は涙を流していた。好き放題にされるのが悲しいからなのか惨めだからなのか理由は定かではなく、声を出せていれ

ば小さな子供のようになんわん泣いていたと思う。

私が声を上げようとすればする程、磯風は何を勘違いしたのか一人盛り上がっていった。

第25話 エラー猫のパラドックス

◆――金剛の知的好奇心――◆

副提督という立場であれば無責任をほしいままにできると口の端を釣り上げ、さんざん好き勝手放埒悪辣自己中心的に部隊を運用していた一ノ傘鉄子であったが、近頃はその仕業もセーブすることを止むを得なくなっていた。正当とは言い難い理由で独自の作戦を立てて部隊を動かす、天照大艦隊内でクーデターでも起こす気かあの人は、と艦娘たちに噂されていた姿はもうなく、第二執務室に籠もりキーボードを叩く日々が続いた。パソコンの両脇に集合住宅のように積まれた書類は一ノ傘を囲む壁となり、閉塞感はむしろ彼女を少しだけ安心させる数少ない要素だった。栄養ドリンク剤やコーヒーの空き缶は椅子の周囲に雑草の如く置かれて、日に日に足場を侵食していった。

それにしても風呂に入りたい、と彼女は思い出すように考えた。あたかも自分が綺麗好きであるかのように錯覚しているが、最後に風呂に入ったのが何日前であったか記憶にないし、そうでなくとも第二執務室は元からガラクタで溢れた倉庫のような有り様だった。今や彼女はゴミ山の女王と成り果てて君臨してしまっている。

一ノ傘の道楽三昧と自分勝手に愛想を尽かし、やたらと冷たく当たる電にさえも「あの……おにぎり作ったので、ちよつとでも食べたほうがいいのです」同情され気遣わせた原因となったのは他でもない、近隣の鎮守府に着任した従姉妹にして天敵、一ノ傘姫乃である。

「ヘーイ副提督、マーフィーの法則って知ってマス？」

【金剛：Lv. 89 ↓ 99】

「めつちや頑張つて今やつと書き終わったメールは消えるって法則。

――金剛ちゃん今ちよつと不吉なこと言うのやめようか。あと30秒くらい黙つとこうか」

「Oh…ソリー」

身内がかつてブラック鎮守府の責任者として名を馳せていたことを最大限に悪用し、様々な過程を省略して提督となった、どころか深

海棲艦になりかけた艦娘の監視と運用を任されるまでになり、その上
前例のないトラブルを呼び込み楽しんですらいる悪魔、一ノ傘姫乃―
―傘姫の身内人事のツケが今、ここ第二執務室の主に怒涛のような勢
いで流れ込んでいるのである。

あまりに事情が複雑であり誰に何を説明しようかと全容を把握して
いるのが当事者である一ノ傘（鉄子の方）ただ一人である以上、いく
ら説明を繰り返したところで上層部の把握はまったく追いつかない。
今、恐る恐る送信ボタンをクリックして送信した内容も、いったい何
度説明したことやらと彼女をウンザリさせるものである。酷い時な
ど、上層部の配属変更により担当となった新米らしい者から「正規空
母の葛城なる危険因子が登場した理由と安全性を説明せよ」と今更か
つ見当違いも甚だしい要求をされたこともあった。秘書艦が止めて
いなければキレた一ノ傘が電話越しに相手の鼓膜を攻撃するところ
であった。

傘姫に関する問題事については厄介を極めるが、上層部の方針は
至ってシンプルだった。

「元々はお前の管轄だった鎮守府と海域にお前の身内を配属させたの
だから、お前が責任を取れ」

一ノ傘以外の誰もがそもそも思考を放棄しているため、彼女の苦労
は最初からすべて無駄であり、そのことを分かっているとお対応義務
のある彼女は今まで好き勝手にやってきた代償を払うように不毛な
仕事に没頭した。

「アイツほんとクソやる……前送ったメール添付しとんのに普通これ
皮肉って気付かんかねえ。そのお話は前にもしましたよーあなたの
頭の容量は何キロバイトですかー」

「……Excuse me? ちよつ、ウエイウエイ！ メール打っ
てるヨ副テートク！ 今のはまずいデースー！」

「あん？ ……おホントだ。指が勝手に動いとった」

「ダークサイドに堕ちかけてたヨ。ちよつと休憩したほうがイイ
ネー」

寝不足が続くにつけ、封筒にカッターナイフの替刃を入れようとし

たり、暗黒メールを送信したりしそうになるなど危うい行動に走りやすくなった一ノ傘に従事する秘書艦は、専ら副提督の監視を最近の仕事としていた。どうせ今の一ノ傘に他人に仕事を割り振る余裕がなく、秘書艦は執務室の掃除や一ノ傘のパシリくらいしかやることはない。ちよこちよこ暗黒面に墮ちる一ノ傘を恐れて通常の艦娘は近づくとすら躊躇い、耐性があるか、もしくは凶太い艦娘ばかりが秘書艦になった。必然、秘書艦は副提督とは対照的にくつろいでいることが多かった。本日の秘書艦、金剛はというと、空いた時間を家具カタログの精査に当てていた。

「そーいや金剛ちゃん、さっき何か言いかけとらんかった？」

「ちゃんと言ったつもり……そ、そうデシタ。マーフィーの法則ってありますよネ？」

「有るか無いかで言われたら無いとは思うけど、あるねえ。それが？」

「じゃあ『バター猫のパラドックス』はご存知？」

「えーと………バター猫のパラドックスとは二つの言い伝えを皮肉った組み合わせに基づいた逆説、のことやろ。知つとる」

「目の前でWikipedia音読される知ったか振りは初めてデス……まあ説明の手間が省けて助かりマース」

「ほほーう。バター側から落っこちるトーストと空中で体勢整えて落ちる猫を貼り合わせると、空中で回転し続けると……これ猫じゃなくてもトーストとトーストじゃ駄目なん？」

「トーストは意地でもカーペットを汚そうとしマス。マーフィーの法則に従うと、二枚重ねたトーストを落とした場合は縦に落っこちて、パカッと割れて両方がカーペットにベチャリと」

「あーなるほど」

「トーストと猫。この二つを組み合わせることで、回転し続ける永久機関の完成デース！ ワアオ！ ダ・ヴィンチもビックリネー！ どうデス副提督、興味ありませんか？ 妖精のテクノロジーをも凌駕したスーパーサイエンスを手に入れたと思いますよネ？ タイヨウコウハツデンとかいう技術もコストも機器寿命も人間のオツムも追いついてないファックな呪縛から世界を解き放ちたいと思いますよ

ネ?」

「使い方次第なエネルギーにイチ艦娘が変なこと言うのやめとこうねー」

「イエッサー」

「まー面白そうではあるねえ。猫がクルクル回るのとか特に」

「デショ!? それじゃあ善は急げ! Let's experiment」

「そんなに暇やったん?」

◆――トーストと猫――◆

「トースト焼いてきたヨー」と金剛は片手にバターを塗った熱々のトーストを乗せた皿を持って元気に第二執務室に戻ってきた。そのやたら楽しそうな表情を見て、つい先程まで心身に余裕がなくなるまで働いていた一ノ傘は、僅かながらも怒りを覚えずにはいられない。

「は? ちよつ、ここで実験する気?」

「そりやそうデショ」

「なんで?」

「なんでって、Why?」

「……いいけど。それで猫はどうするん?」

「心配Nothing. さつき比叡に五分以内に捕まえてこいって言いましたカラ、そろそろ届くと思います」

「この鎮守府で野良猫ってそう見らんものやけど……竹櫛も言つとったけどさ、君ら姉妹って実は仲悪いの?」

「What? 金剛型シスターズ・ラヴは艦隊ナンバーワンですが?

ああ球磨型と比べるとはやめてクダサイ。あつちはクレイジーな一線を超えますカラ」

「どつちもどつちやと思うけどねえ」

胸を張って得意気になる金剛に（歪んだるねえ）と失礼な評価を下す一ノ傘である。

まったく期待できそうにないシスターズ・ラヴを待つよりは金剛の

焼いてきたトーストを食べて仕事に戻ったほうがいいか、と考えていると「お姉さまー!」と廊下からはつらつとした声と、何か重量物がゴロゴロと廊下を転がってくる音が聞こえてきた。少し自分の価値観に自信を無くす一ノ傘であった。

「お待ちせしました金剛お姉さま、ご依頼のネコです。あ、どうもです副司令」

【比叡：Lv. 81】

今に始まったことでもない、ついでのように挨拶されるのも、ささくれ立った一ノ傘の気分には引つかかった。表情に出たのだろう、比叡は尻込みして「……す、すみません騒がしくして」ペコペコ頭を下げた。

一ノ傘の不機嫌は艦隊全員の知るところであり、彼女に近づきたくないと言う艦娘の割合は非常に多い。積極的に世話を焼こうとする雷や、睡眠時間を削って仕事をしている人間の前で平然と家具カタログを読んでいられる金剛のような者はごく少数だった。

「ハイ比叡、ソレ何ネー?」

比叡は猫を抱いてはおらず、台車に布団の塊を乗せて運んできた。これから粗大ゴミに出しに行くかのように。

「何って、お姉さまに言われたとおりネコですけど。ああ、この蒲団はですね、ネコが炬燵から出てくれなかったので、そのまま蒲団でラッティングしてお届けに来たんです」

「にしてもビッグサイズですが、まあいいデシヨ。ご苦労様ネ」

「いえいえ、お姉さまの頼みとあれば」

「せっかくだし比叡も見学していきますか? 今から歴史的実験を行うのデスが」

「えーつと……」チラリと一ノ傘をうかがう比叡。

「せっかくのお誘いですが、今日は……その……防御力を高める訓練といえますか、砲弾を素手で弾く特訓をしようと思つてましてですね」

「さつきまでPS4でDestinyやってた奴のセリフとは思えネーヨ。つーか砲弾を素手でとかデンジャラスなことは霧島とか球

磨とか、人外のやることネー」

「と、とにかく訓練がありますので。では一ノ傘副司令、お忙しいところを失礼しました」

台車を捨て置いたまま、比叡はそそくさと去っていった。

蒲団にくるまった猫は台車の上で、比叡に慌ただしく運ばれて来たにも関わらず逃げようとも動こうともしなかった。

「このビッグキャット、ちゃんと生きてるんでしようネ？」

金剛が上部を指でつつくと蒲団がわずかにもそりと動いた。

「ふむう……Take this！」

何を考えてか次は横から、突き刺す勢いで指を蒲団にめり込ませた。これには中のネコも堪らず「ふにゃあ!」と明らかに擬音語表現ではない人間の声で悲鳴を上げて蒲団から飛び出した。

「さつきから何にゃ、多摩はいま忙し……あれ、多摩の部屋は？ 副提

督と金剛？ ここはどこにゃ？ 吾輩は誰にゃ？ でも猫じゃあないことだけは確かにゃ」

【タマ：Lv. ネコ】

誰しも得手不得手を持つように、金剛のように秘書艦業務を任せられる者、比叡のように業務から逃げる者もいれば、タマのように秘書艦業務にまったく向いておらず、執務室に近寄ることすら稀である艦娘も一定数存在する。歯に衣着せぬ言い方をすると竹櫛、一ノ傘曰く「邪魔だから来るな」といった具合である。

そんなタマにとって第二執務室は初めて足を踏み入れる場所だった。竹櫛のいる第一執務室は指折り数える程度は見たことがあったが、ここはあまりに盛沢山だった。仕事になんら関係の無さそうなオモチャと仕事の憂鬱さを如実に表す書類で溢れている。

「にゃあ……にゃあにゃあ」

新たな縄張りを巡回するように室内を観察するタマは何故か、満更でもなさそうだった。

自室に戻る余裕もない時に一ノ傘が仮眠を取るためのソファと毛布を発見すると、吾輩ここに居場所を見つけたり、遠慮という概念を持たない野生動物のようにソファの上で毛布にくるまり丸くなつて

しまった。

「日向に匹敵するメンタルネー」

「さすが球磨ちゃんの妹……」

◆ — 実験準備 — ◆

「サーテ。問題はどうかやってタマにトーストを固定するかネー」

「え、実験やるん？ 猫は？」

何を言っているんだコイツはと言いたげに金剛はタマを指し示した。

「……うん、もういいや。トーストはほら、ウィキペの絵みたい紐で縛ればいいんじゃない」

「スーパースイエンスなので装置もスーパーにしたかったのデスが、まあいいでショウ。副提督、なんか紐あります？」

「ある……かもしれんけど」

一ノ傘の事務所 兼 私物倉庫と化している第二執務室は物で溢れ返りすぎ、適当な紐一本を拾うのにも逆に難しそうな様相を呈している。ビニール紐やガムテープといった日用品を雷に管理させ、いざ自分では使えないのは一ノ傘の良い年した女として非難されるところであった。

「じゃあコレで代用しまショウ」と金剛がガラクタの山から引っ張り上げたのは、PCモニタ用のアナログケーブルだった。確かに使わんから放置しとったし別にいいけど金剛ちゃんもうちよつとこう私への遠慮とかそういうのはしてもらえんのかね、と言いたくても言えない倉庫の主だった。

「Heyタマ、Good morning!」

いなり寿司の油揚げのように被っていた蒲団を勢い良く引っぺがすと、「猫じゃにゃいけどフシャー!」と犬歯を剥いてタマは威嚇態勢に入った。

「ハイハイ後でなんでも奢ってあげマスから大人しくしましよネー」

「……………海鮮丼、松で」

威嚇態勢、解除。ちよろい。

背中にトーストを当てられて「あく温かいにや」アナログケーブルで腹をグルグルと巻かれるタマの姿は、少なくとも一ノ傘にはとてもシユールに見えた。

「OK, これで準備はバッチリデース! さーいよいよ実験開始デスよ? 副提督、論文のための記録準備はバッチリデスか? 目を離しちゃあ捏造疑惑かけられるからNO! なんだからネ!」

「金剛ちゃんが楽しければいいよ、私は」

◆ — 一方、隣の第一執務室では — ◆

「なあ叢雲、さつきからペン回しが上手いようだが……」

「え? あ、ごめん。ちよつと気が抜けてた。大規模作戦が片付いたからって私ったら」

どこか遠い場所を虚ろに眺めていたことを咎められた、そう思い姿勢だけでも引き締めようとした叢雲だったが、竹櫛は「いや、そういう意味ではなくてだな」と歯切れ悪く言った。

「器用に回しているそれ、ペンじゃなくて……ナイフなのだが」

「はい?」

自分の右手が持っていたものを見た叢雲は「……うっそお」勝手にナイフを抜いてしまう自身の無意識にドン引きした。

鎮守府が海でなく陸から襲撃されて以降、彼女は球磨に陸地での格闘戦技を習い、右足にナイフを常備するようになった。理由は明確、すぐ側にいる男をいついかなる時も守るためである(と彼女の口からは裂けても出てこないが)。もし再び鎮守府内に銃を持つ暴漢が現れたとしても、今の彼女であれば迅速かつ安全に処理できる。ただ睨みを利かせる他に何もできなかつた情けない過去を穿ち己の刃で活路を切り開く。まだまだ球磨には遠く及ばないものの会得した技術は彼女に確かな自信をもたらした——はずだった。

「……のところ不調続きではないか。二度も医務室で寝込んだのも普

ならないほど……待て逃げるな叢雲。心配するな。危険なものを使い
きなり叢雲に使用する愚は犯さん。まずはこの磯風が安全性をしつ
かり確かめる。だから逃げようとするな、大丈夫だ。安心してその身
を任せてほしい。貸してくれた吹雪とて叢雲に負けず劣らずの練度
だぞ、この電動マッサージ器も優れたものに違いない』

といった理由で、叢雲が鍛えたナイフスキル初の攻撃対象は電動
マッサージ器になってしまった。

悪気は無かった二人のためを思つてのことだったと言いつくす吹
雪に知っている限りの関節技をかけても、しようもない理由で折れた
彼女のプライドと大きく欠けたナイフの刃は元には戻らなかった。
そして追い打ちをかけるように、落ち込む叢雲を慰めようと彼女の布
団に潜り込んでくる、懲りることを知らない磯風。休まる時間などあ
りはしなかった。

そんなワケで寝不足です、と竹櫛に知られた日には生きてはいけな
い叢雲である。

「実は……その、言いにくい事なんだけど……」

「なんでも聞かせて」

「あ、ありがと。……えっと、私つていつの間にか総旗艦つて位置付け
になつたじゃない？ 誰かが勝手に呼び始めた肩書きなのに」

「誰も異論を挟まないほど信頼されていたからな。やはり具体化され
た肩書きはストレスになるか」

「……うん。ちよつと」

総旗艦という肩書きが重荷になつていないことは嘘ではない。しか
し彼女が感じている重さの程といえば財布に少々貯まりすぎた小銭
程度でしかなく、むしろ竹櫛に「総旗艦」と呼ばれて戦意が高揚すれ
ば軽巡洋艦の主砲すら装備できそうな力で満たされる。

とはいえ高揚したところで寝不足は誤魔化せない。

限りなく嘘に近い真実であれば構わない。叢雲は慎重に言葉を選
んだ。

「総旗艦つて呼ばれること、不満に思つてるわけじゃないのよ？ た
だ、そうやって自分に言い聞かせて動いてたら、他の皆もこう、そん

な目で私のこと見るのよ」

「ほ、ほう。そうか。そんな目でな」知ったような振りをする竹櫛である。

「頼りにして貰えるのは嬉しいんだけど……限度つてもものがあるじゃない。えーと例えば大井と北上みたいないな」

「あの阿呆共か？ 私はもうアレは手遅れだとばかり——」

「間違えた。今のナシ。そんな極例は置いて、私だってまだまだ未熟なのよ。おんなじ駆逐艦で練度も近い電と雷と吹雪は私が知らない……うん、全つ然知らないレベル上げてるし、私に同じこと期待されても困るのよ。というか何で雷じゃなくて私なの？ 磯風は私相手にレベル上げて吹雪から借りる道具も最近使わなくなっ………いろいろな疲れて寝不足です。はい」

「そ、そうだったのか」

竹櫛が気の利いたフォローもせずに考え込んでしまったせいで、第一執務室はしばらく叢雲にとって息苦しい静寂で満たされた。

◆ — 実験開始! — ◆

「待つにや待つにや待てコラ金剛オマエ今から多摩をどうする気にや！」

金剛にお姫様抱っこをされたタマは下手に暴れることはできなかった。金剛は秘書机の上に立っているため、今のタマはそこその位置エネルギーを獲得している。このエネルギーを元にパラドックスを誘発し、永久機関を完成させるのである。金剛の理論に隙はなかった。

一ノ傘はストップウォッチを持たされている。これは『万が一』実験が失敗した時、タマがどれだけの時間を回転し続けられたかを計測するためである。ただし一秒を確実に切ってくるであろう時間を正確に計れるか一ノ傘には自信がなかった。

「カウントダウン、いきマース！ FIVE, FOUR…」

「だから待てとゆーとるにや！」金剛に猫パンチを食らわせるタマ。

「せめて何するか説明くらいしにやいか!? 想像つくけども! なん
となく想像つくけども!」

「じゃあ問題ないネー。THREE, TWO, ONE. 投下」

タマの背中に縛りつけられたトーストが床を向くよう、金剛は躊躇
なく手を離した。

「にゃっ!」

「あ……」金剛が手を離したと同時に、やっと一ノ傘は気付いた。少し
見上げるほどの高さから背中を着地するのは人体的に非常に危険で
ある。骨や臓物や命への甚大なダメージは免れない。ソファの上で
寝返りを打って落ちただけでも神を呪う程の痛みを味わったくらい
である。しかしタマは既に金剛の手から離れ、もう間に合わない。ス
トップウオッチが手をすり抜けた。タマが落ちてゆく刹那、走馬灯の
ように様々な未来が流れていった。担架で運ばれてゆくタマ。竹櫛
や電たちの侮蔑の視線。憲兵が来るより早く届くであろうタマの姉、
球磨のナイフ。何もかもが手遅れ。絶望するより他になかった。

ト

……かに思えた瞬間、だがタマは床に落ちない。

ト ト

「What?」と金剛。

「へ?」と一ノ傘。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

高さは床から約1メートル。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

回転数はトーストがはつきり見えないほど高速。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

ト ト

回転方向が横方向ではなく前方向なのは予想外ではあるが、そもそ
もが予想外。

ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト

ト ト ト ト ト ト ト ト

「そ、そんなアホな……回っているウ——ッ!? とても私には信

げ捨てれば済む話ネー。——Friendsの迷惑になる？ LA Nケールで繋がっただけのひよろっちい関係なんて友情とは認めません。『こんな時間にゲームやってんじやあネーヨ働けニートw』と煽りメッセ送ってあげるのが真の友情なのデス。比叡のアカウントは私が管理してて忘れたわけじゃあないでしょうネ？ 今直ぐ削除するのも顔写真付きでID晒すのも——Good. 物分りの良い妹はお姉ちゃん大好きデース。じゃ、第二執務室で待つてマース」

一ノ傘、本日何度目かのドン引きだった。

「ねえ金剛ちゃんさ……やっぱ嫌いやろ。比叡ちゃんのこと」

「Why? こんなにも愛してマスののに。Burninng love! があるからこそ、ゲーム課金のために私のお給料からお金を抜き取られたことがあってもまだ生かしておいてやってるんデスが?」

「そ、そう……」

「詳しくは業務日誌【叢雲の薬指 2】をご参照クダサーイ」

「……気が向いたらね」

「それはさておき副提督。私たちはさっきの実験でどうやら、とつても大切なことを失念していたようデス」

「倫理観とかね。タマちゃんへの気遣いとかね」

「ズバリ、カーペット! ついついバター猫に気を取られてしまいましたガ、前提条件となるマーフイーの法則を発動させる確率を上げるためには高級カーペットが欠かせマセン」

「ああ、そういやさつき家具カタログ見とつたね——働きもせんで」

「そ、それは……とにかくカーペットが必要ネー。家具職人妖精のオーバーテクノロジーをふんだんに使った力作が、えっと確か竹櫛提督が無駄に使ってマシタ。ちよつと隣に行つて借りてきマス」

いそいそと執務室を出て行く金剛の背中を見送り、一ノ傘は改めて室内を見回した。特別欲しい家具があるわけではない。服がシワにならず収納できて化粧や全身チェックできるだけの鏡さえあれば構わないと考えている。しかし家具を置かないのと置けないのは別の話である。仕事が一段落つき次第、雷と電に掃除を手伝ってもらおう

と決意し、自分一人では掃除もできない生活力に今更ながら泣きたくなるのだった。

◆ — 一方、隣の第一執務室では 2 — ◆

気まずい雰囲気か二人の間に漂う中、竹櫛は「その……叢雲さえよければ、だが」叢雲の顔色を窺いながら慎重に切り出した。

「疲れを取るために温泉に行ってみるのはどうだろうか。あれだ、つまりその、慰安旅行というヤツだな」

「はい？」と叢雲はつい素っ頓狂な声を上げてしまった。

「温泉？ 慰安旅行？」

「忘れてくれ。何でもない。冗談だ。仕事がありながら私は何を言っているのだ。……はは」

「いや、そうじゃなくて。あんた今までそんなこと一度も言ったことなかったじゃない。急にどうしたのよ」

「た、たまには悪くなくろうと思ったのだ。娯楽も解さないほど野暮ではないつもりだぞ、私は」

内心「どうだか」とつぶやく似たもの同士な叢雲だった。

「いいんじゃない、温泉。疲労回復に戦意高揚のための慰安旅行。それより美容と健康効果の方が気になる連中ばかりでしょうけど。でも行ける人数はかなり限定されるわよ？ それにお金だって相変わらず……」

「そ、そうではない！ 旅行に行けるのは二人だけだ」

疲れているという叢雲と二人きりのこの状況、期は熟せり。机の引き出しの中で温めていたチケット二枚を、竹櫛はカードゲームの切り札のように掲げてみせた。チケットに早くも染みができそうなほど手は汗ばんでいる。

「それって、あんた自分で買うようなタイプじゃないわよね。どうしたの？」

「傘姫から送られてきたのだ」あっちの艦隊の、と竹櫛は近隣の鎮守府がある方角を指さした。

「一ノ傘の艦隊から脱柵した潜水艦娘を発見して、何一つ処罰せずに艦隊に迎え入れてしまっただろう。その口止めとして送られてきた。この共犯者を作る遣り口はいかにも傘姫らしい」

「あー……アレね」

叢雲も傘姫の艦隊（特殊深棲監視艦隊）の秘書艦、葛城と何度もメールのやりとりをしていて、伊号潜水艦五名を不自然に抱き込んだことは聞いていた。

「向こうには大本営直属の戦艦様がいるからな。温泉チケツトなど燃やして明かりにするほど手に入るのだろう。だが人手不足で自分たちには使う暇がないから別の使い方をする、というわけだ」

「傘姫司令官をやけに悪く言うわね。せっかくのチケツトなんだから捨てたり換金したりするより誰かにあげちゃったほうがいいじゃない」

「ダメだ叢雲、騙されるな」

「騙されるって、そんな大げさな」

「奴は数多のあだ名を持っているがな、私が覚えている限りで最も新しいのが『羊の皮を被ったエイリアン』だぞ。奴の理解不能さは尋常じゃあない。同じ人間だと思うな」

「よく分かんないけど……じゃあどうするの？ そのチケツト」

「だから、む、叢雲と、わた、しで使って、し、しまうのだ」

話の流れに任せて言えたことに、竹櫛は心の中でガッツポーズを決めた。が、すぐに不安に襲われた。

叢雲が真顔で硬直したためである。普段からしてクールな彼女ではあるが、凛々しい表情と無表情はまったくの別物だと竹櫛は理解した。さらに彼女は硬直したまま椅子を回して竹櫛に背を向け、なにやら小刻みに震え始めた。

女性を温泉に誘う一世一代の大博打に出るに当たり、天国から地獄まで様々な返答を想像するのは竹櫛も勿論、例外ではなかった。リビドーに溢れた希望から鎮守府を去る絶望まで、目に焼き付けている限りの叢雲像で以って（気色悪いこと甚だしい）反応をシミュレートしたのだった。つまり貧弱な想像力では彼女の見えない部分までは埋

めることはできず、背を向けて黙り込んでしまった彼女に、情けなくもダメ押し声を掛けられずにいた。門すらかかかっていない門の前で破城槌を持ったまま様子見をしているような体たらくであった。

叢雲も叢雲で、クレヨンしんちゃんのあるルールに縛られるように竹櫛に顔を見せられないでいた。

野原しんのすけがニヤける時、カメラは絶対に正面に回らない。

叢雲の顔は、1990年に連載が始まり様々な紆余曲折がありながらも今日に至るまで愛され続けている野原しんのすけの誰も見たことのないニヤけ顔のようになっていた。鏡がないため誰も目視はできないが、叢雲が感じている表情筋のかつてない緩みっぷりから想像されるのはまさしく野原しんのすけのニヤけ顔だった。音でバレないうように静かに深呼吸、ではなく何故かラマーズ法で冷静さを取り戻そうと試みるも、バクバク激しく鼓動する心臓が呼吸器さえも震えさせる。

「あー、あ、あんたが！」

とにかくこのチャンスを逃すまいと返事を考えるのに必死で、裏声になろうとも気にしてはいられなかった。

「い、いいいい行きたかっただけなんじゃないの!?!」

「そ、そんな事はないぞ！ わた、私は、その、アレだと思ったのだ！」
叢雲の素っ頓狂な声につられて竹櫛もヒートアップしてしまう。

「アレって何よ！ アレって何よ！ なに考えてんのよスケベ！ ヘンタイ！」

「んなつ!?! ただの温泉ではないか！ それに旅行とは言ったが温泉は近場だぞ！ 日帰りだぞ！」

「んひゃつ!?!」ルームメイトになった磯風を夜毎つっぱねはするも、知らず知らずのうちに毒されていた叢雲だった。だがここで引いてしまえば自分は温泉旅行を破廉恥とみなすムツツリスケベである（事実そうなのだが）。もう後には引けなかった。

「お……温泉旅行っていえば普通は最低でも一泊するでしょ!?! そうに決まってるじゃない！ だから寝る時は同じ部屋、に、なるわ、け、だし……そ、そんなのに女性を誘うってのがよろしくないのよ！ 普

通は！ なに考えてんのよバカ！」

「そ、そうだな……私と温泉など行きたくないよな……」

「は、はあ!? 誰が行かないなんて言ったのよ！」

滅茶苦茶であることは叢雲が一番分かっている。だからまだ竹櫛には背を向けたままだった。

「その……仕方ないから行ってあげてもいいって言ってんのよ！」

つ、疲れてるし、温泉入りたいし。別に、あんたと行きたいわけじゃないけど……えっと、ほらそのチケツト、あんたのだし。使わないと傘姫司令官に失礼になるし」

「そ、そうか……！ では、だが、どうする？ ……日帰りにしとくか？」

「い……一泊二日って言ってんでしょバカ——ッ!! なんなのバカなの死ぬの!?! 私が泊まるって言ったの聞いてなかったの!?! あんたってほんとバカ!! シュレーディングのバカ!! バター猫のバカ!! キャトルミューティレイションバカッ!!」

つい我慢ならず椅子を蹴倒して立ち上がり、竹櫛に向かって秘書机を叩いた叢雲。その興奮は竹櫛と目を合わせた途端、顔の水分を蒸発させそうなほどの恥ずかしさに変わった。まだまだ罵倒し足りなくとも、何も言えなくなってしまう。というっかり口を滑らせてしまっいそうだった。

温泉どころか宿を取る、嬉し過ぎる誤算となった竹櫛も、今までと同じ目で叢雲を見ることはできなくなっていた。

言葉が見つからないまま目を逸らすこともできず、しかし決して悪いものではない沈黙。だが二人とも言いたいことだけは昔からあった。いつか必ず言おうと決意していたそれ以外に今は何も紡ぐことができない。

だったら、もう、言ってしまおう。

二人の想いは共鳴した。

「なあ、聞いてくるr」「ねえ、聞いてほs」

「へーイ提督ウ！ High-gradeなカーペットを寄越しなサー……い？」

第一執務室で今まさにLoveがBurningしようとしていた雰囲気、練度99の鍛え上げられた直感でもってして金剛は扉を開くと同時に感じ取った。

阿呆戦艦は阿呆戦艦であつても阿呆戦艦なりに、やっつてはならないボーダーラインは弁えているつもりであつた。姉妹にも鉄の掟として教え込んでいる。

曰く、人の恋路に土足で踏み入りそうになれば自分の足を砲撃しても止まれ。

人の恋のためならば世界中の紅茶葉をボストンの港に放り込むことも躊躇うな。

そう偉そうにのたまつた張本人が、ようやく長かつた道のりを合流させようと、歩み寄ろうとしていた二人を全力で妨害したのである。艦娘歴の長い金剛も今ほど「あ艦これ」と諦観したのは初めてのことであった。他所様の恋路に足を踏み入れるくらいなら足を撃つて止まれと自分で言つておいて、では全身で立ち塞がってしまった場合はどうすればよいのだろうと金剛は考えた。やはり三式弾だろうか。せめてハーグ陸戦条約に引つかからない手段で一瞬で楽にしてはくれないだろうか。

しかし金剛が脂汗を排出しプルプル震えながら結論をひねり出すより先に、叢雲が壊れた。

「ふっ——フヒッ」

深海棲艦よりも不気味な笑みを湛え、錆びついたかのように右腕がギチギチと動き、だが手だけはしっかりと太腿のホルスターからナイフを抜いて握った。

◆——猫に蹴られて死んじまえ——◆

「あ艦これ！ あ艦これ！」

慌ただしく戻ってきた金剛の尋常ではない動揺っぷりに、一ノ傘は何があつたのかもしばらく聞けなかつた。

第二執務室に戻ってくるなり扉に鍵をかけ、ソファやら書類棚やら

ハンガーラックやらを手当たり次第に扉に押し付けて固めてバリケードにしていた。

「テコの原理で固定して……！ ああそんなネタに走ってる場合じゃない……！」

とにかくサイズの大きな物を室内で引きずり回せば当然、一ノ傘の部屋は限りなくゴミ屋敷に近い様相となつてゆく。そんな事などお構いなしに金剛は室内を走り回った。目ぼしい重量物が無くなつても、折りたたまれたダンボールや梱包材、手に取った物は片っ端から扉の前に詰め込んでいった。

「普通の人間だったら死んでた……！ 普通の人間だったら死んでた……！」

キャラも忘れてテンパる金剛が、一ノ傘お気に入りの観賞用ライフルまでもバリケードの一部にしようとしたため、一ノ傘は慌てて止めに入った。

「ちよつとちよつと！ どしたんよ？ 何があつたん？」

「ふ、副テートク……ヤバイよ私。殺サレル」

「なんで？ カーペット借りるだけがそんなにまずかつたん？ 竹櫛も小っちゃい男やねえ」

「No. カクカクシカジカで激おこ叢雲が人外サイドに片足突つ込んだんDEATH」

「人外って、そんな女の子を化け物みたいに」

「ちよつと前に球磨は、まだまだナイフ投げも無理だつて言つたの二……極死七夜とか完全に私を殺し二……あばバばババばば」

「なんか知らんけど、金剛ちゃんが悪いんやから素直に頭下げに行つてよ。ここで暴れんでくれる？」

「ネガティブ！ 副提督は私に死ねと!? 下げる頭を引き千切るのが極死七夜という——！」

入り口を封鎖してとりあえず今直ぐ死ぬ心配はなくなった金剛の意表を突くように、ピリリリ！ と金剛のポケットからけたたましい電子音が鳴った。自分のスマホの着信音に驚いた金剛はガラクタの山に頭から突つ込んだ。

「Shit...! What's the fuckin' call
! ——比叡!? こんな時に電話してくんじやあネーヨ!」

通話ボタンを押した金剛は開口一番「F u c k y o
u !!」と叫ぶのだった。

「クソ忙しいのが分かんネーのかクソビッチ! ——あん!? 猫才!?
知らネーヨこっちは殺人鬼に狙われてんノ! オマエのネーチャ
ン、叢雲に殺されそうナノ! 早く助けに来なサイ! 今どこほつ
き歩いて——はあ!? 傘姫提督の鎮守府!? 何故に猫探しに隣の鎮
守府まで——は? そっちの秘書つて、いやいや比叡まさか——NO
!! NONNONNONNO!!! やめなさいバカ! 妖怪猫吊るしか
ら猫借りるとかクレイジーにも程がありマス! 艦隊潰す気かオマ
エ! ——いなかった? 出張中だったけど伝言がある? 私に?
この金剛に? 妖怪猫吊るしから? ……Why? まだ会った
こともないのに意味ワカラン。何だっテ?」

それがですね、と言伝を預かった比叡は困惑気味に、言葉を重ねた。
『うしろからすみません。こんにち
は』

「……金剛ちゃん……後ろ!」

一ノ傘は拳銃を引っ搦んだ。エアガンではない、自決用の役立たず
だと馬鹿にしていた鉄砲である。引き金にまで指を掛けていた。

叢雲の突風のような殺気とは違う、纏わり付くような不気味さに怖
気を震った金剛は恐る恐る振り返った。歩幅にしてたった一步の距
離。金剛の鋭敏な感覚にも察知されることなく、小柄な少女はそこに
立っていた。

白いセーラー服。無闇なドヤ顔。そして前足を持って吊るされた
白猫。直接会ったことはなくとも、いったい何時から何故この場にい
るのか理解不能でも、金剛の艦娘としての奥底から湧く本能的な恐怖
が平常心を塗り潰した。通話中だったスマホが手から落ちた。

『猫。ご入用ですか』

「——撃って副提督」

極限の恐怖が金剛のギアを、深海の鬼姫クラスを相手取るレベルま

で加速させた。全国の艦隊が足並みを揃えて旅団となり、それでも尚、人類の守護者を幾多も葬る理を逸脱した化物。それと同等、あるいはそれ以上の『何か』と対峙していた。

「銃を構えたら躊躇わずに撃つネ——ッ!!」

戦艦といえども艦装がなければ盾にしかなれない。だが銃を持つた一ノ傘の盾にはなれる。決戦モードの金剛は合理的に迅速に、目の脅威を排除することだけを考えた。しかし発砲音はいくら待っても鳴らず、執務室に現れた少女は金剛にドヤ顔を向け続けた。

『通信 エラー です』

「What? 何を言って——」

一ノ傘は臆してしまっただけだが、幸い相手もまだ動かない。こうなれば一ノ傘から銃を奪って撃つしかない、後退しようとしたその時、金剛の背後でゴトリと何かが落ちた音がした。その音に反応してつい振り返ってしまい、化物から目を逸らしてしまった金剛をさらなる混乱が襲った。

一ノ傘の姿は無かった。ただ床に拳銃が落ちているだけだった。

『通信 エラー です』

少女は淡々と繰り返した。それが当然のシステムであるかのように。

金剛は飛び付くように拳銃を拾い上げて少女に向けて構えた。

「副提督に何をシタ?」

『その 武装 は 実装 されて いない ため 装備 できません』

「何をしたかと聞いているネエ——ッ!!」

深海棲艦に向けてそうするように、金剛は容赦無く引き金を引いた。

しかし人差し指は空を切り、ただ指を強く握り込んだだけだった。一ノ傘が落とし、それを拾い、構えたはずの拳銃を、金剛は持つていなかった。

ゴトリ、と金剛の足元で音がした。拳銃だった。手を伸ばして掴み、狙いもままならないまま引き金を引いた。だが再び人差し指は空

振る。ゴトリ、と足元で音がした。

『その武装は実装されていないため
装備できません』

戦闘面において優秀な艦娘としての金剛は完全な敗北を認めた。勝ち目のない戦闘に執着する愚は犯さない。自分は戦ってはならない相手と対峙している。恐れ慄く暇があるなら逃げろ。

この撤退する他ない戦況で、しかし唯一の退避経路をバリケードで塞いでしまったのは金剛自身だった。

「あ……ああ……！」

絶望するより他になかった。

『バタ―猫のパラドックス。さあ実
験しましょう』

少女が突き出した白猫は金剛の目前に迫っている。自分が腰を抜かしへたり込んでいることにも気付かず、顔を恐怖の色に染めて頭を振ることしかできなかった。情けない声をあげて泣く彼女とは別に、全てを諦観した別の彼女は、こんな情けない姿を誰にも見られていないことが唯一の救いだと言葉を漏らす。

『さあ実験しましょう。システム改
善にご協力ください』

金剛型一番艦として上手くやれていただろうか。

自分がいなくなった後も妹たちは上手くやっていたらだろうか。

天照大艦隊の皆は上手くやっていたらだろうか。

どうか、すべてが上手くいきますように。

最後に願う金剛の顔に、白猫のプロプロした腹がベシヤリと押し付けられた。

◆――エラー猫のパラドックス――◆

第二執務室（四階）の窓を蹴破って室内に飛び込んだ叢雲は問答無用で金剛の上半身と下半身を切り離すつもりだった。さっきの極死・七夜は廊下に逃れることで避けられてしまったが、今は金剛自ら第二

執務室の扉を閉鎖し、檻の中で大人しく解体されるのを待っている。狭い室内ではどこに逃れようとも閃鞘・迷獄沙門（ガード不可）の射程範囲内である。叢雲はナイフを逆手に構え、腰を落とした。

「……………ん？」

が、室内はもぬけの殻だった。部屋の主、一ノ傘の席も空いている。入り口にはソファやら何やらが違法投棄されたゴミ山のような様相で壁を成しており、外からの立入りだけでなく中からの外出もできなくなっている。わざわざ割って入った窓とバリケードで閉鎖された扉を除いてこの部屋に出入り口はない。ならば金剛は（理由は不明だが一ノ傘も一緒に）隠れているに違いないと叢雲は室内をしばらく漁ってみたものの、細かいガラクタに溢れるばかりで人が隠れられるスペースなどないことは、ときどき秘書艦を務める立場から知っている。他に可能性があるとするれば、一ノ傘が部屋を忍者屋敷のようにこっそりと改造して何かしらのギミックがあるか、あるいはバリケードの中に金剛と一ノ傘が仲良く埋もれることで擬態をしているか、この二択になる。

阿呆らしくなり、すっかり毒気を抜かれた叢雲はナイフをしまつて大きな溜息をついた。

ふと、床に拳銃が落ちてるのが目についた。エアガンだけは丁寧に扱う一ノ傘にしては珍しいものだと思えば拾い上げると。

『その武装は実装されていなかったため
装備できません』

女の子の声が聞こえたような気がして、手でも滑らせたのか拳銃はゴトリと床に落ちた。聞いたことがあるようなないような不思議で不気味な声だった。室内を再度見回したが、やはり誰もいない。頭に血が上り過ぎているのかと叢雲は自省した。

落ち着いたところで改めて第二執務室の現状を観察すると、これ程なかなか酷い有様だった。框ごと窓を蹴破ったせいで、破片を片付けてガムテープで応急処置してハイお終い、というわけにはいかなかった。室内の暖かい空気がポツカリ開放された窓からビュンビュン逃げてゆく。家具職人妖精の力を借りて補修工事しなければ、雨でも降

ろうものならちよつとした惨事になってしまふ。叢雲の今月の給金の使い道が確定した。

とりあえず第一執務室に戻りたくても、さつき調べて判明した通りこの部屋には出口が無い。無くもないのだがバリケード化された扉が彼女が入ってきた四階の窓かの二択である。歌月十夜の悪夢にうなされた叢雲であれば二段ジャンプ ↓ 空中ダツシュ ↓ 空対空蹴りで隣室まで移動するのも容易いことだったが、正氣に戻つてみれば正氣の沙汰とは思えない移動法である。

「ああ、もう……」

外から助けを呼んだところでどうしようもない以上、富士の如く聳えるガラクタバリケードをちまちまと撤去していくしかない。戦艦の腕力で組み上げられた山を崩すのは、駆逐艦の叢雲にとっては大仕事である。

「……もう怒つてないから出てきていーのよ金剛。ねえつてば。副司令官までどうして隠れてるんですか」

呼びかけてみるも割れたガラスが寒風を切る音しか返つてこない。果たして二人は何処へ、どうやって消えたのか。うんざりする撤去作業のせめてもの慰みに、この密室トリックを暴いてやろうと叢雲はあれやこれやと考えた。出口のない部屋で人が消失するパラドックス。先ほど聞いた女の子の声こそ鍵、あるいは解答そのものであることに気付くはずもなく、益体もない推理ばかりが生まれては消えていった。

第26話 叢雲の薬指 13

『試飛会』とは日向が制作したラジコン飛行機のテスト飛行を行う会である。

戦艦から航空戦艦へと進化した日向は己の刃を研ぐべく航空機の研究に明け暮れ、定期的に切れ味を試すべくラジコンを製作しては戦艦察上空を飛行させたり墜落させたりした。日々を深海棲艦との戦いに費やす艦娘にそのような暇があるのかと問うならば普通は無いと答え、日向は普通という枠を何食わぬ顔で切り捨てた。故に航空戦艦になってから随分と久しいものの練度に僅かの上昇も見られず、ラジコン飛行機の製作技術ばかりが無駄に上昇していった。勿論、この技術が深海棲艦に対する抑止力となった例は一度として無い（一度だけ、深海棲艦になりかけた艦娘を止めたことならあった）。本末転倒も甚だしかった。

「艦娘としてあんたそれでいいの!？」と叢雲に激怒されることは度々あり、日向も雀の涙くらいは気にしている。ところで雀に限らず鳥類が涙することなどあるのだろうかと日向は疑問に思い、つまり全く気にしていないと同義とも言えた。これぞ鋼のメンタルの成せる業である。

日向が製作するラジコンはいかなる機種であれ、全体をヘチマのような緑色に塗装され、両翼と胴体には赤いマル模様が入られる。機体下部には固定翼機や回転翼機、アダムスキー型未確認飛行機だろうと何だろうと例外無く水上に浮かぶためのフロートが無理やり取り付けられ、つまりは瑞雲化改修が行われた。

制作する飛行機の機種はいつも自由自在だった。F-22ラプター、F-35ライトニングII、A-10サンダーボルトII、Ka-50ホーカム、V-22オスプレイ、サボイアS-21、コンコルド、気球船、果てはハインケル・レルヒエのような珍機体（特に航空戦艦が運用できそうなもの多）などがプロペラ駆動のラジコン飛行機となった。

半強制的に観覧に招待された最上が見守る中、日向のラジコンは戦

艦察前の空を優雅に飛行した。あるいは制御不能に陥った機体が爆発しない巡航ミサイルとして最上の頭や山城の部屋、葛城の意識を狙ったりもした。それら経験はすべて日向の糧となり、最上の精神的重石となった。



毎度の如く招集され、重巡察を陰鬱たる面持ちで出た最上は、はてな隣の戦艦察前の様子がおかしいことに気付いた。それもただおかしいのではない、既に関わりたくない類のトラブルが発生していた。常ならば試飛会が開催される時、戦艦察前は日向と最上の貸し切りとなる。本当に誰も近寄らない。阿呆らしすぎて関わりを避けるために姿すら見せようとしなかった。ストレスを少しでも分かち合いたいがために最上が同型の三隈・鈴谷・熊野を誘ったこともあったが、姉妹艦三人にすらやんわりと拒否されて少しばかり涙ぐんだ程である。

そんな試飛会に日向と最上を除いた者が足を踏み入れたのは、あの木刀らしき棒を二本担いだ長門が初めてだった。慌てて最上は茂みの中に飛び込んで身を隠した。



一ノ傘副提督と金剛の身に何が起こったのかは誰にも知り得なかった。ある日突然、二人一緒に姿を消したと思えばその数時間後、鎮守府の正門前にぼんやりとつつ立っていたのである。それから二人は人が変わったように大人しくなり、処理落ちしたパソコンのように何もしなくなった。

最後に金剛の姿を目撃している叢雲によると、密室となった第二執務室の中から忽然と姿を消したという。

「そんな筈はないだろう！ 何かがあったから二人はああなったのだ！」

【長門：Lv. 124】

長門の憤りは尤もだったが、叢雲に問い詰めたところで何が解決するわけでもないことも痛いほど承知していた。それでも許容し難い状況である。

一ノ傘と竹櫛の艦隊が統合される前より長門は、大艦巨砲主義の権化であり一ノ傘の主砲たる大戦艦と自負し、また天照大艦隊が結成されてからも己の火力を発揮しつつ、また快速の空母機動部隊に編成できる金剛の性能・洗練された戦術、自身とは異なる戦艦の在り方を高く評価していた。

「現状を軽く見ているようだが叢雲、これは我らの危機だぞ。見ろこの副提督と金剛の様子。なにが元気が出るまで遊んでいればいいだ！ そんな場合か！」

「いいじゃない図上演習板くらい。どうせ役に立たないんだし、せつかく比叡がボードゲームに改造したんだし。ねえ金剛、楽しい？」

「……うん」

「ほら。ホコリかぶってるより有意義な使い方よ」

「道具の問題ではない、艦隊の戦力の問題だ！ 副提督の代わりなど誰にも務まらないのだぞ！ 金剛だってそうだ、高速戦艦に求められるのは空母機動部隊を率いることができる経験に裏付けされた練度だぞ！」

「分かってるわよ。だから今は訓練も兼ねた哨戒メインでやってるじゃない」

「不測の事態に備えられず何が艦隊か！」

「ちよつ、つば飛ばさないで……」

「総旗艦がたるんでいるとは何事だ！」

「納得できないなら電に言っつてよ。あっちの方が付き合い長いでしょう？」

「ああ既に言っつてあるとも。今のお前と全く同じ反応だった」

「……でしようねえ」

トラック泊地を守り抜いた人類側を次に襲ったのは、他でもない貧窮だと大和コネからこつそり窺っていた。

兵站なくして勝利なし。それ以前に先立つ物がなければ始まらないわけで、アニメーションの売上に不安を覚えた司令部は菱餅を作って売るといふ迷走に打って出た。負担するのは当然ながら全国各地の鎮守府であり、深海棲艦と菱餅に何の関係があるのか知らされないまま、どうかすると大規模作戦より苦行とも感じられた任務に嫌々当たることとなった。任務を放棄した艦隊も少なくない。

天照大艦隊も例外ではなく菱餅任務に当たった。この任務は司令部の回りくどい金策だと大和から直接聞いた叢雲と電は「あーはいはいそんなことだろう」と呑気な感想を漏らせる少女ではいらなかった。日頃から大和のコネクションを利用する者として、今回は逆に大和に利用される側であることに気付いてしまったからだ。

大本営直属の最強戦艦が直々に頭を下げているのだから、天照大艦隊の皆様ならば積極的に精力的に、少なくとも他の艦隊の倍は任務目標を達成して当然ですよ、と。

一ノ傘のような交渉術を持たない叢雲と電は下請けの頼りない営業のように、大和の表面的には温和な圧力の前に屈する他になかった。相手を宅配ピザ食ってばかりの世間知らずのお嬢様と侮った結果がこれである。

「……初めて副提督のありがたみが分かったのです」と電は、気が抜けた一ノ傘を見ながら重い溜息を吐いた。

誰も参加に手を挙げようとしなかった菱餅作戦部隊の旗艦を務め続けた二人は燃え尽きた。最初から灰色だったため燃え尽きるという表現が適切かどうかは定かではないものの、とにかく気力が枯渇した。やるべき業務は食堂で目が合った誰か（覚えていない）に総旗艦権限を行使して丸投げして、自分たちは日中はぼんやり、夜になれば好きでもない酒を呑んだ。

二人は何もこのまま墮落し続けて解体処分されたいわけではない。ただせめて、菱餅作戦の副収入分くらいの休暇が欲しかった。自分たちの苦労はすべてジャンクフード大好き大和の胃袋を満たすためだったことを忘れる時間が欲しかった。もし今後、天照大艦隊に潜水艦娘が配属されることになった時は、オリョールクルージングだけは

絶対にさせないでおこうと、ジョッキを片手にベロンベロンになりながら叢雲と電は語ったのだった。

「だから、つまりその……長門だって疲れたでしょ？ 何処の誰に利があつて益があるのか分かんない菱餅。しかもトラック泊地の作戦が終息した直後に。私たちは原子力で動いてるわけじゃないんだから、そんなにストイックにならないで休まないで。気を抜く時間が要るのよ。副提督と金剛だって……時間がいろいろ解決してくれると思う」

「副提督と金剛のアレは休暇ではない、事故だ！ トラブルだ！ 速やかに対処すべき問題だ！」

「あーもう、じゃあ長門が何とかしてよ。私と電は完全にお手上げ。ただいま艦隊構成員からの冴えた解決案を募集しています」

「良い機会だ。この艦隊のたるみきつた連中に活を入れてやる。手始めに戦艦共を立派に生まれ変わらせてやるから見ている。その次は駆逐艦だからな。総旗艦艦として例外ではないから覚悟しておけ！」



最上が観察するに、長門が持っている二本の木刀には黒文字でデカデカと『棒入注神精軍海』と書かれていた。所有者の主義主張が一目で理解できる便利アイテムである。フリーダムこそ最大の特性であり武器であるとはばかり思われている艦娘には、無関係どころか真逆の代物なのではと最上は首を傾げた。

「うん？ 木刀など持つてどうした長門。すまないが今からこの場所は我々が使うのでな、素振りなら他所でやってくれないか」

フリーダムの権化にして鋼のメンタルを持つ日向には、長門の圧力などそよ風ほどにもなり得なかつた。世界を構築する力は重力などの四種類に分けられると言うが、あるいは航空機を浮かす揚力になり得るか否かの二種類にも分類できる、と講釈を垂れる日向の前で、最上は小一時間ほど傾聴させられたことがあつた。長門の圧力はどうやら後者に分類されるらしかつた。

今更日向に察することは期待していないのか、長門は左右の手で二本持つているうち右手の方でコンクリートの地面をゴツンと殴った。威迫のつもりらしい。

「私は安易に暴力に訴える指導を良しとはせん。しかし時として人は痛みから学ぶこともあると理解している」

海軍精神注入棒を持った人間がそんなことを言っても、少なくとも最上には体罰の言い訳にしか聞こえなかった。

長門は海軍精神注入棒の一本を放り投げて、日向はそれを器用に掴んだ。

「日向。墮落したお前をこれから、剣を交えて、誇りある戦艦になるまで叩き直してやる。体が自然と艤装を装備したくなるようになるまで休憩はないものと思え」

「ただの戦艦ではない。航空戦艦だ」

「つまらない口答えをするな！　いいか、お前が気を失おうが血反吐を吐こうが私は続けるぞ。今まで甘やかされてきた分を取り戻すのだからな。陸で遊んでいるより海で深海棲艦と戦っていた方がマシだと思えるようにしてやる。この長門の辞書に情け容赦に類する言葉は一切ないからな！」

長門が海軍精神注入棒を正眼に構えたことで、ようやく得心がいつたらしい日向は「なるほどな」同じく渡された海軍精神注入棒を構えた。

「つまり剣道がしたかったのか」

ダメだあの人この修羅場をサツパリ理解してない！　と最上が茂みの影で焦っていると、

「おい最上、さつきからどうしてそこに隠れているのか知らんが、ちよつと審判を頼まれてくれないか」

日向はあくまで気楽に、最上を修羅場へと引きずり込んだ。練度10しかないくせしてなんて索敵能力……と危うく言い捨てそうになる最上だった。仕方なしに向かい合う二人の前に出た。

「できませんよ審判なんて。ルールも知りませんし。木刀じゃなくて竹刀と防具がいるってことくらいは分かれますけど。危ないですし

「……普通の演習にしません？」

「防具など必要ない」と強気の長門。「棒切れなどに臆する者は戦艦にあらず。もし日向が装甲を求めるのであれば用意しても構わん。装甲ごと臆病を砕いてくれよう！」

「そうだな。飛行甲板は盾ではないからな」

話が噛み合っているのかいないのか最上には分からないし知りたくもなかった。

「あの、二人とも怪我だけはしないでくださいよ？ 正規空母たちのせいで感覚が麻痺してますけど、私闘はかなりよろしくない事ですからね？」

「これは喧嘩ではなく精神鍛錬である！ では始めるぞ日向、歯を食いしばれ！」



頭頂に60W白熱電球ほどの大きさのたんこぶを生やして気を失ってしまった長門を医務室のベッドに寝かせて、ようやく日向は殊勝な顔つきになった。

「なあ。最上の意見を聞きたい」

「……なんですか？」

「私は手加減をすべきだったのだろうか。不器用な私が手を抜けば長門のプライドを傷つけてしまうと考えたのだが」

「海軍精神注入棒を持って指導しようとして、返り討ちにされるほうがヘコむと思いますけどね……頭へのダメージで長門さんの記憶が飛んでいることを願いましょう」

医務室を後にした二人は戦艦寮に戻る道すがら売店に立ち寄って缶コーヒーを買った。ビニール傘と並んで海軍精神注入棒が一本千円で売られていることに最上は初めて気付いたが、すぐに忘れることにした。

「相手の戦力は瞬時に見極めなければならん。もし長門の相手が私ではなく深海棲艦であつたら今頃は海の底だったぞ。そのあたりを伝

えたかったのだが、指導とは難しいものだ。飛行甲板を持たない者のやることはよく分からん」

甘く見られて面白くなかったというのもあったのだろうと最上は推し量った。先の試合(?)では長門が僅か様子を見ようと切先を動かした瞬間、既に日向の海軍精神注入棒は振り下ろされていた。せめて長門がもう少し天照大艦隊の真つ当ではない部分を認めていたならば、格の違いを思い知る時間くらいは稼げたかもしれない。それも二人の練度の差を考慮すると難しいことではあるが。

長門：Lv. 124

日向：Lv. 10

(最上：Lv. 66)

練度12. 4倍の戦艦を躊躇も容赦も無く殴り倒した航空戦艦はコーヒーを飲み干し「しかし解せん」空き缶をゴミ箱に投げつけた。「長門は果たして何を求めているのだろうか。航空戦艦を倒せば航空戦艦になれると思っただろうか。——ははあん、なるほど。さてはアニメにそういう描写があつたのだな? 仲間とすれ違い、衝突し、認め合うことで秘めた能力に目覚めるような展開が」

「違……わなくもないですけど、その想像とは全然違いますからね、アニメも長門さんの考えも」

「ほう? では最上は見抜いているわけか。やるじゃあないか」

このままでは艦隊のためを思っただけ真面目に行動した長門の殴られ損である。あんまりである。ここで長門の意思を継がなければ最上型ネームシップの名が廃るというものである(それと長門が目覚めた後が怖かった)。

副提督と金剛に異変が起きた事を始まりに、天照大艦隊が疲弊している現状を丁寧伝えた。通常任務は勿論のこと菱餅任務なども他人事の怠惰戦艦にどれだけ大変だったかを説明するのは骨が折れたが、売店近くを通りがかった者を数名つかまえて愚痴らせることで、なんとか日向に現状を認識させるに至った。

「そうだったのか。いろいろと大変だな」

「完つ全に他人事ですね」

「このところ察を出入りする金剛に覇気がないとは思っていた。金剛一人が静かなだけで戦艦察は随分と落ち着いてな」

「副提督も同じ様子なんです。艦隊に支障があるのもですけど、特に旧一ノ傘艦隊のみんなは心配で、でもどうしていいか分からなくて」

「それをカバーするために長門は鍛錬を積もうとしたわけか」

「だから違……ええ、その通りです。長門さんは特に責任感が強いですし」

日向との付き合いで大切なのはちよつとした誤差を無視することだと最上は心得ていた。どうせ長門でない他の誰だったとしても、日向の鋼のメンタルをどうこうするより深海棲艦との戦争そのものを終わらせる方がまだ現実的とすら言えた。

「指揮を執る人と艦隊の主力が病気？ みたいですから何とかしなくちゃとは思ってるんですよ、みんな。でも菱餅が絡んだ任務のせいで疲れ果てちゃって、艦隊は開店休業です。出撃も遠征も最低限にとどめてます」

「それはいかんな。しかし水臭いじゃあないか」

「水臭い？」

「こういう時こそ航空戦艦を頼ってくれなくては。もつと早く相談して欲しかったものだ」

「……………」

同じ航空戦艦の伊勢と山城が疲労困憊で休んでいる中、さつきまでラジコンで遊ぼうとしていた輩のセリフとは思えなかった。

「どれ。ここはひとつ私がひと肌脱ぐとしよう。副提督と金剛は何処に？」

「第二執務室です」

「それは何処だ？」

「いや、第一執務室の隣ですけど」

「だからそれは何処だ」

「提督がいるところですよ……まさか忘れてませんか？」

「そういう事務的な場所は艦娘になじみが無いだろう？」

やっぱりこの人には一度、海軍精神注入棒による指導が必要なん

じやあないかと日向を少し蔑視する最上だった。



死んだ魚のような目を、二人はしていた。

「王手」

「Check」

図上演習板をボードゲームに改造した比叡がどのようなルールを定めたのかは不明だが、少なくとも最上から見ても、一ノ傘 v s 金剛のゲームがルールに則っている様子は皆無だった。

「王手」

「Check」

「王手」

「Check」

「王手」

「Check」

「王手」

「Check」

「王手」

「Check」

「王手」

「Check」

青色と赤色の兵棋が戦略もへったくれもなくボード上で争っている。編隊が崩れた空中格闘戦のように青が赤を襲い、赤が青を食らい、奪った駒はすぐさま再び戦場に投入された。凸形の駒それぞれに外見的区別はなく、どれがどちら側の駒なのかは一ノ傘と金剛にも把握できていないようで、向かい合った相手の方を向いていれば自分の駒とした。肘が当たって駒の向きが変わればあっさり寝返るザルっぷりである。

「王手」

「Check」

すべての駒が玉将でありキングでもあった。また「王手」「Check」と言いつつ駒を奪つてもゲームは続いた。そもそもゲームとして成り立っているのか誰にも分からない、不毛過ぎて見ているだけで頭がどうにかなりそうな勝負は、深く沈んだ一ノ傘と金剛をさらなる影で塗り潰すしかないように思われた。

だが腐つても天照大御神の名を借りた艦隊には、状況を変え得る可能性を秘めた様々な艦娘がいる。虚空から混沌、混沌から狂気に近づきつつある一ノ傘と金剛のゲームに介入し得る、鋼のメンタルを持つ航空戦艦がここにいる。

青赤の味気ない兵棋が入り乱れる戦場に突如として乱入したのは、1/48スケールの瑞雲だった。

「ふふ。悪いがこの海域は私のものだ。航空戦艦を投入して制圧させてもらうぞ」

金剛のターンに割り込んでデン！と瑞雲を鎮座させた日向は周囲の駒をごっそり奪った。一瞬で一ノ傘軍と金剛軍の一部を葬る様は戦術核の如し。積み木の城を怪獣の玩具で蹂躪するレベルの軍事介入を行う極めて程度の低い第三勢力だった。

突如として現れた（一応、第二執務室に入る前にノックはした）日向と戦場の一部を制圧した瑞雲に呆氣に取られ、一ノ傘と金剛は手を止めて乱入者を唾然として見た。日向の背後で見守る最上ですら理解できないでいるのだから、魂の抜けた一ノ傘と金剛がポカンとするのも無理からぬことである。

「うん？ どうした、次は誰の順番だ？ 忠告しておくが航空戦艦に容赦はないぞ」

二人が手を休めた（処理落ち）と見るや、日向は第二の1/48スケール瑞雲を発艦させた。その威力はまたしても規格外で、絨毯爆撃により多数の駒が海域から消えて日向の手に渡った。図上演習板がどこの海域のものかは最上には分からないが、縮尺からすると瑞雲はトラック諸島くらいなら余裕で制圧できる規模の戦力らしかった（敵味方の区別なく葬ることになるが）。

呆けていても自分の駒を一瞬で大量に奪われたのには堪らなかつ

たようで、一ノ傘と金剛はそれぞれ駒をひとつ手に取り、
「王手」

「Check」

瑞雲に襲いかかった。しかし先も言った通り、航空戦艦に容赦はない。
い。

「その程度の兵力ではどうにもならんよ」

二人の手から直接ひよいと駒を取り上げてしまう日向だった。これには傍観していた最上ですらどついてやろうかと思つた程であるから、元々が負けず嫌いな性質である一ノ傘と金剛が何も思わないはずがない。輝きを失つていた二人の双眸に蠟燭ほどの小さな、しかし血を滾らせるほど熱い火が灯った。

「王手飛車」

「Checkmate」

二人が両手に駒を持ち、同時に瑞雲に突撃を敢行した。今が誰のターンかなど一対一のゲームに第三勢力が割り込んできた今更、どうでもよかつた。

「ふっ、甘いな」

またしても日向の神の手は襲い来る二人の駒に直接伸びてあっさり奪つていった。

「さ、さすがにソレはどうなんですかねえ」

最上はプルプル震えながら海軍精神注入棒を握り締めていた。野球盤の打球を手でキャッチするに等しい蛮行を黙って見ていられるほど日和つてはいられないのである。たとえば日向であつても看過できないと最上の水雷魂のような何かが叫ぶのである。

「守りましょうよ、ルール。乱入するにもマナーつてもものがありますよねえ」

「おいおい、これは戦争のシミュレートだぞ最上。相手に情けをかけるでは意味がない」

「現実から程遠い超兵器で凶上演習も何もないと思えますが」

「勘違いしているようだが、兵器には二種類の使い方があつた。破壊と威圧だ。航空戦艦の圧力は時として戦略核すら超える範囲をも制圧

してしまうものだ」

「じゃあ今すぐ出撃してきましょうよ。その圧力なら一週間もあれば太平洋は平和になる計算ですが?」

「まあ待て。その前にこの二人の相手だ。ようやく本気を出したらしいぞ」

「はい?」

元から滅茶苦茶だったゲームに荒らしまで現れた今更、何を——ゲーム板を見た最上に衝撃が走った。

金剛側に、新たな駒が追加されていた。凸形の味気ない兵棋ではなく、ねんどろいど金剛型四姉妹である。改二の姿を見慣れた今では艤装に差異を見受けられるものの、各々の特徴が見事にデフォルメされていた。2・5頭身となった四姉妹は今にも叫び出しそうに、主砲を瑞雲に向けていた。

瑞雲に制圧された海域を挟んで向かいの一ノ傘側では、蒼き鋼の潜水艦イ401が板上に凜々しい姿を現していた。宇宙戦艦を潜水仕様にしたような規格外の戦闘力は艦娘であれば誰もが「あんなバケモノどうしようもない」と口を揃える。景気良くばら撒かれる追尾魚雷、野生海獣のような機動力、運良く爆雷で捕捉できても衝撃を無効化してしまうバリア。同時に出現した霧の艦隊も含めてとても人類の手に負えなかった艦艇を、一ノ傘は戦場に投入した。

日向という理不尽の塊に煽られ、一ノ傘と金剛はかつての炎を取り戻していた。

「王手——さらに猪鹿蝶、赤短、五光!」

「Check —— and Full House, Four of a Kind, Royal Flush!」

「挟み撃ちというわけか。ならばさらに瑞雲を投入するぞ」

「国士無双!!」

「JACKPOT!!」

「4スロット目はまさかのSH—60K（ロクマル）だ!」

もはや三人が何をやっているのか外からでは理解不能な領域に入ってしまったが、楽しそうに何よりである。元氣（敵意）も溢れて

きたようで何よりである。ここでルールが云々と横槍を入れるのは野暮というものである。最上はそつと日向の背後を離れ、音を立てないように第二執務室から退室した。

日向が意図しての事なのかは置いておいて、とにかく副提督と金剛に元気を取り戻させることに成功した。大きな功績と言えよう。月間MVPは日向と最上で間違いない。天照大艦隊にそんな気の利いた顕彰制度は存在しないが、叢雲に言えば夜の食堂で一杯タダになるくらいの便宜は図ってくれるかもしれない。

後は日向に殴り倒され意識を失った長門が、ついでに記憶も失うことを願うばかりだった。



最上に対して友好的ではない幸運の女神が珍しく気まぐれを起こしたのか、長門は日向をどうしようとしたことを綺麗サツパリ忘れてくれていた。

「トラック泊地に敵の大部隊が接近しているのだぞ！ なぜ我々は暢気に……は？ もう終わった？ 上からの発令はつい先日……今日は何月何日だ？ 待て。少し待ってくれ。陸奥、ちよつと私の頬を引っ張ってくれ痛い痛い！ ちよつとだと言っただろう！」

海軍精神注入棒を持った長門に妨害された『試飛会』は今日、改めて開催されることとなった。今回はなんと、毎度おなじみ最上に加えて、新しい見物客が一人増えていた。試飛会が開催されること幾度目の中で初めての来客である。

「フーンフーフーン♪ Hey♪ You♪ What the fuck is wrong with you♪」

「その歌ってさ、にこやかに歌うものじゃない？」

「モガミンは細かいこと気にするタイプだったんデース？」

「金剛が細かいこと気にしなさすぎるんだと思うよ。あとモガミンやめて」

「航空甲板持ちは皆サン気難しいネー」

「その括りもやめて。ほんとやめて」

「ところでモガミン、このサバトの事なん德斯が」

「サバト!? 違うよ! ラジコン飛ばすだけだよ!」

「いろんなモノをデストロイする儀式だって噂ヨ?」

「……否定できないな」

「実際のところ目的は何なのネー? 戦艦寮の前でやってるの、いつも気になってたヨ」

「本当にラジコン飛ばすだけだって、試飛会は。何事も無くフライトして終わる事だってあるんだよ」

「山城が壊されたディスプレイ、三万円だって言ってるマシタ」

「うっ……」

「葛城が気を失った時の損失額を試算したら五十万を超えたらしい德斯」

「ううっ……」

「いやー戦艦寮前はリッチなプレイスポットネー」

「……金剛って意外とねちっこいんだね。アニメみたく頼れるお姉さんって感じだと思ってたのに」

「冗談德斯よ。イツツ、ジョーク。こうしてモガミンと日向と親睦を深めに来てるん德斯から」

「そういえば重巡と戦艦って役割がハッキリ分かれてるから、あんまり接点ないね」

「よく見かけるのはモガミンと日向、あと最近よく山城の部屋に古鷹が来るようになりマシタ」

「古鷹かあ……」

「呼んだ?」

【古鷹：Lv. 97 ↓ 100】

「うわっ!?」「Wow!?!」

「あ、ごめん。驚かせるつもりはなかったんだけど。私がどうかしたかなって」

「う、ううん何でもない。ちょっと話に出ただけ」

「き、気にしないでクダサイ。別に悪口とかじゃない德斯」

「そう。金剛、また戦艦寮にお邪魔するね。それじゃ」

「(「ゆっくり〜」)

……………。

「……あのさ、古鷹と山城って噂されてるけど……できてるの?」

「フクザツなジジョーがあるみたいデス……山城は存在しない姉一筋
なはずデスののに、夜になると……」

「よ、夜になると……?」

「モガミンはそういう話、ないんデスカ? ボーイツシユな感じがウ
ケそうネー」

「金剛もそういうこと言っちゃう? バレンタインでチョコ貰う側だ
とか言っちゃう?」

「違うんデスカ?」

「……ホワイトデーものつすごく大変だった」

「アラマー」

「どさくさに紛れて正規空母もどっさりお菓子持ってきてき。ただの
冗談だと思って受け取ったのが間違いだっただ……。ほら、ホワイ
トデーは三倍返して言うよね」

「変なカルチャーで……え? まさか……いやいや冗談だったんデ
シヨ?」

「ボクも冗談だと思ったさ。でも当日になって真顔で要求され
たよ……三倍」

「マジデスカー……」

「当然そんな量を用意してなかったのが不幸中の幸いだったよ。目の
前でクツキーの奪い合いが始まってさ、かろうじて逃げる隙ができ
たってわけ。渡し損ねた駆逐艦の何人かには後でパフェ奢る羽目に
なったけど、矢が飛び交う戦場にいるよりは——ねえ?」

「そんな事件があったトハ……モガミン、これから命の危険を感じた
ら戦艦寮に逃げてクダサイ。ワタシが守リマス。いざとなれば霧島
のメガネパンチでクレイジー空母共を黙らせませすカラ」

「……いいの? 本当の本当に頼るよ?」

「No problem! 超弩級のキャパは伊達じゃないヨ」

「金剛……………ぐすつ」

「ちよつ、泣くほどデスカ？」

「なんだろう、人の温かさに触れたのが久しぶりな気がして……………ずびっ」

「Oh…も、もう安心してクダサイ。今日から金剛型と最上型は姉妹艦も同然ネー！」

「なんだか気を遣わせちゃって。ありがとう。こんなに安心したのは久しぶり……………いや初めてだよ」

「もつと色々、モガミンのこと教えてクダサイ。……………営倉の準備も必要みたいデスシ（ボソツ）」

「何か言った？」

「独り言ネー。ところで話を戻しませんが、この、シツピカイ？　は何をするんデス？　やっぱりサバト？」

「だからラジコンを飛ばすだけ——あ、でも一つルールというか、ジnkusがあるから気をつけて」

「What？」

「試飛会の間は絶対に喋っちゃいけないんだ。黙って見ていれば何事もなく終わるけど、一言でも、ちよつとした感嘆詞であっても口に出すと……………」

「口に出すト？」

「……………墜ちる」

「やっぱりサバトじゃないデスカ」

「いや大丈夫！　黙ってれば本当に何も起こらないから！　うん。大丈夫。それはボクが保証する。約束する。安心安全セーフティ」

「まあモガミンの言うことなら信用しませんが。じゃあ今こうしてトクしてるのはセーフなんデスね？」

「……………え？」

「……………エ？」

「…………………………」

「Hey, いきなり黙らないでクダサ——」

本日の試飛会で戦艦寮前を飛行する機体は、日向の4スロット目に

搭載されているらしい、まさかのSH-60K（ロクマル）だった。

来客が嬉しくてうっかり話し込んでしまった最上が迫り来るローターの風切り音に気付いたのは、SH-60Kが金剛の後頭部に衝突する約0.1秒前の事だった。

第27話 ラックレッツサー山城 4 叢雲がウザい

「吹雪、ちよつといい？ えーと、その、特型駆逐艦の先輩に聞きたいことがあつて——いやいや何をご謙遜なさいますやららら！ 天照大艦隊じや最古参でしょ、電と並んで。だから先輩。経験豊富。しかも改二！ ヒューツ、頼れるう！ で、その改二のことなんだけどね、どう？ どんな感じ？ ——特に何ともって、何かあつたでしょ。例えば活力が溢れてくるとか全身が光つたとか。改造前後にどんな変化があつたのか知りた——あんたが忘れてるだけで絶対に何かあるはずよ！ お願い。どんな些細なことでもいいから、思い出したら教えて」

「よく似合ってるわよねえ、その制服。前のシンプルなセーラー服もよかつたけど華やかにカスタムした今のほうが絶対いいわ。それに何より改二の大幅強化よ！ やっぱり火力の秘訣はメガネなのかしら。鳥海が改二になつたのはついこの前だし、やっぱりこう、その時の感覚とか体が覚えてるわよね？ ——もう！ それだけ変わつて気分がよくなつた程度なんてあり得ないわ！ 大改造なのよ、大改造！ 吹雪も鳥海も自分の変化にそんなに無関心でいいの!? ……ふむ。でも、メガネねえ。念のため作つておいたほうがいいかしら、メガネ」

「ふーむ。特別な機能があるでもなし。普通のメガネだわね。——ああ、ごめん霧島にケンカ売りたいわけじゃなくて、今ちよつと調べてるのよ。改二改造に何が必要かなつて。——もちろん知ってるわよ、高い練度でしょ？ でも考えたのだけど、他に必要な要素があるんじゃないかしらと。例えば先輩空母のシゴキに耐えるとか、浜松町あたりの高級ホテルで拳式を……違う違う私はそんな妄想してない！ と、とにかくアレよ、不精に亘るなんちゃらかの精神で出来ることはやつておこうかなつて。よし、とりあえず私もメガネ買つとこう。売店にあつたかしら？」

「みんな尊敬してると思うのよね、飛龍のこと。——違う違う変に勘繰らないで。別に何かさせようってわけじゃないわ。お世辞でもな

くて、一ノ傘副司令の艦隊じゃ蒼龍とたった二人だけで空を制圧して、こつちに来てからも『まともな』正規空母として働いてくれる。プリン一個のために殺し合いしたりしない。だからこそ改二になれたと思うのよ。どう、違うかしら？ —— もーハッキリしないわねえ。副司令のことだから飛龍が改二になれるって分かった瞬間に飛びついたでしょ、その瞬間の何かを私は知りたいの。 —— 弓を新調した、ねえ。知らないけど竹よりカーボンのほうが湿気に強くていいんじゃないの？ まあ私は弓を持つとうとは思わないし関係ないか。でもやっぱり装備というかアクセサリーも重要よね。 —— ええ、さつき売店で買ったのよメガネ。もちろん伊達だけどね。最上が海軍精神注入棒を見つけたって言い出してから私も気付いたんだけど、無駄に色々揃ってるのよね。もしかして改装設計図なんてのも売って……そうよ改装設計図！ こんな重要アイテムのことを何で忘れてたのよ私は！ ——

「龍鳳って実質は改二だと思うのよ。私の勝手なイメージだけど鯨から鯉、鯉から龍にまで昇ったって感じで。潜水艦が一人もいないから潜水母艦が活躍できないってのは、事情のひとつでしかないわ。空母としての素質というか、潜在的な色々があったから進化できたのよきつと。でも艦種が変わるってどうなのかしらね。体に負担がかかったりしなかったの？ それとも改造前に筋トレで弓を引く筋力をつけておいたとか、都合のいい話だけれど勝手に弓を扱えるようになったとか —— だから、そういうものだったとか言われてもピンと来ないのよ。具体的にね、筋力がついたとか瞳が赤くなったとか、ないの？」

「アンタほど外見が変わっておいて、覚えがないはないでしょうよ。アニメで光ってたじゃない。工廠のカーテン裏で異常なくらい変化したじゃない。で、実際アンタもそうなるじゃない。総旗艦命令よ、あのカーテン裏で何やってたのか答えなさい。今しゃべるなら、実は本当にアンタは夕立の姉で入れ替わってましたトリックでも聞かなかったことにしてあげるから。……自分で言ってる阿呆らしいとは思ってるわよ。でも、そもそもよ、白露型は改二じゃなくても見

た目が変わり過ぎなのよ！ イイ感じに成長し過ぎなのよ！ いったも阿呆なことやってるせいでスルーされてるけどアンタらはもう軽巡訓練受けていいじゃない！ 少しは五月雨と涼風を見習って大人しくなりなさいな！ ——涼風はウルサイとか音量的な意味じゃなくて、やることなすことウルサイのよアンタらは！ 遠征に出ておいてドラム缶に東京ばな奈をしこたま詰めて帰ってくるような真似をやめろと言ってるの！ 東京でひよ子を買うと何故か一ノ傘副司令が不機嫌になるから二度とやらないで！ というか東京急行は東京まで急げって意味じゃないって何度言えば分かるのよ！ 観光すんな！」

「……本当は自分でも分かってるのよ。改二改造は余計な準備なしでいつでもできる。でもね、一度改造しちゃったら元には戻れないじゃない。こういうのを、えっと——そうそれ非可逆。取り返しがつかなくなっちゃう。木曾は改二で見違えるように良くなったでしょ。他の皆もそう。でも私もそうとは限らない。確実に強くなっても、その代わりに大切なものを失うかもしれない。——あ、ごめん別に北上と大井のこと言ってるわけじゃ、というか最初から頭おかしかったじゃない、あの二人。じゃあ例えばよ？ もし球磨が改二になって、今以上に……今異常に近接格闘戦に特化してしまっただろう思う？」

『そうクマ……やはりこれからはCQCの時代クマ』って日向みたいなこと言い始めたら嫌でしょ？ ——うん、例えが悪かったわね。既にそういう奴だったたわ意外に優秀な球磨ちゃんは。……はあ……私はどうしたらいいのかしら。木曾から見ると私はどうしたらいいと思う？ これじゃ仕事に付かないわ」

「ねえ金剛はどう思う？ ——ちよっ、待って！ なんで逃げるの！？」

改二の話を聞きたいだけなの！」

「おーい古鷹ー、今少し時間うわっ眩しい!? なに急にライトアップ!? やめなさい……あれ？ 古鷹？ どこ行っただの？ なによ、ちよっ」と話し聞きたいだけなのにもう！」



「叢雲がウザいので、さっさと改二にして下さい」

【山城；Lv. 86 ↓ 91（非改二）】

「あー口が滑りました。コホン……天照大艦隊総旗艦の改二を巡る言動が皆に受け入れられず、提督は早急に総旗艦の強化改造を執行されるべきと具申します」



ジャンケンほど非道な勝負はないと私は考える。

食堂に集まった百を超えるメンバーからたった一人、あまりに低い確率で、しかし絶対に誰かが敗北者になるのは当たり前といえれば当たり前で、その点にケチをつけようとは思わない。モンティ・ホール問題のような小賢しい話でもなく分母の大小にも関係なく、そりゃあ勝負を続けていけば次々と人数は絞られていって、最後に残った一人がアンダードッグの栄誉を賜らせられる。勝ち上がりとの違いは途中棄権できるか否かというだけで、皆がただひたすら1/3に全てを掛ける。ごく一部のコンマ数秒以下の世界に生きているインチキじみた奴らは幸運組と変わらないから無視するとして、皆は思い思いの理論で勝負に臨んだ。私もそうした。

どうしても納得がいかないのは。深夜に叢雲を除いた皆がこっそり食堂に集まってジャンケンをすることにして、数グループに分かれての一回戦を始める前から「どうせ山城が負けるんだから最初から手を挙げとけばいいのに」的な空気が漂っていたのと、本当にその通りになったこと。

思うに私は前世で何か神様の気に障ることをやらかしたに違いない。あるいはご先祖様か、ご近所様か、それら全員か。扶桑姉さま以外の過去現在未来にわたる全員が敵のように思えた。

勿論「みんなグルだったでしょ絶対！」と叫ばずにはいられなかった。ワラワラと私を取り囲む百人以上いる誰に噛み付いてやろうか唸っていると、肩にポンポンと手を置かれた。金剛だった。

「大人なワタシたちが示してあげるべきなん德斯」

「はあ？ 何を」

「大切なのは誰が負けるかじゃない。誰かが負けた、その『結果』が必ず要デシヨ？」

「意味が分からないんだけど」

「山城は負ける。分かりきってることでもやらなきゃいけないのが仕事ってもんネー」

「ちよつと殴つてもいいですかね……！」

「皆の不正と自分の運を疑いたくなるのも無理はありマセン。じゃあこうしまシヨウ。今から金剛型四姉妹と一人ずつジャンケン勝負してクダサイ。誰か一人にでも勝てたら役を交代スル。Hey, シスターズ、問題ありマスカ？」

「お姉さまの仰る通りに」と比叡。

「何度でもお相手しましょう」と榛名。

「ハンデはこれだけで十分ですか？」と霧島。

「じよ、上等じゃない……扶桑型戦艦を侮つたことを後悔させてやるわ！」と私。

四連敗した私の後ろで「もはや様式美だ」と誰かがつぶやいたので振り返つて睨みつけようとするも、皆ゾロゾロと食堂を出ていくところだった。

こうして真夜中の、叢雲がウザいので何とかさせる係を決める茶番劇はお開きとなった。

後になつてよくよく考えてみるに、叢雲がウザいと本気で考えていた連中は自分で言いにくいことを他の誰かにやらせたかっただけに他ならなかった。ほとんどの連中は私と同じように、ソワソワする叢雲を見ているとカレーのジャガイモの切り方がいつもと違う程度に落ち着かないから元に戻つてほしい、くらいにしか考えていなかったはず。金剛の言い方を借りるならば私は、皆の前でルールに従い順当に敗北するという結果を確たるものと成し、何が公平だ卑怯だ卑劣だ薄情だと言い逃れを許されない責任を背負わされた間抜けだった。

「叢雲と提督が怒つても私は知らないからね！」

ひっそり集まった深夜の集会だったので、どいつもこいつも重たい
瞼をこすりながら私の怨嗟の叫びに聞く耳を持たず寮に戻っていつ
た。

ぼつんと食堂に一人残された私は誰かがキープしていたボトルを
掴んだ。明日の仕事がなんぼのもんじやい。



なんだか眩しくて体も痛くて、頭を上げると皆がご飯を食べてい
た。時計は正午を回っていた。働きもせず酒瓶を倒したまま食堂で
昼まで爆睡する人を放置するのが果たして優しさなのか冷たさなの
か、私にまともな判断ができるはずもない。しかし断固として視線を
交えることを良しとしない姿勢を貫く連中を私は仲間だと認めたく
ない。

背中にはジャージが掛けられていて、ヨダレをぬぐった私の前にコ
トリと水を注がれたコップが置かれた。

「大……丈夫？」

【古鷹；Lv. 97 ↓ 101】

「大丈夫に見える？」

「……だよね」改二重巡の目は泳いでいた。

コップの水を高速給水して食堂を飛び出して、途中ちよつとお花摘
みに寄って、私の足はスタコラとまっすぐ第一執務室に向かった。

ノックもなしに扉を開け放ち、面食らう提督に

「叢雲がウザいので、さっさと改二にして下さい」

と言い放った。さすがに不意打ちストレートが過ぎると思いがた
り、

「天照大艦隊総旗艦の改二を巡る言動が皆に受け入れられず、提督は
早急に総旗艦の強化改造を執行されるべきと具申します」

と言いだした。

提督と、本日の秘書艦を務める天照大艦隊総旗艦、叢雲は呪いで口
ウ人形になったかのように凍りついた。少し遅れて私も凍りつき、酔

いが覚めてしまったのは不幸中の不幸と言えた。



ド直球に「ウザい」と嫌厭を隠さずに言われて傷つかない人はいないと思う。程度の差はあれ負のリアクションを起こさずにはいられないはず。私なら何もかもを捨てて扶桑姉さまを探す旅に出る。

叢雲の場合はまず涙が滝のように流れ、表情がくしゃりと歪んだのは涙の数秒後のことだった。

自分で状況を作っておいて何だけれど、それからはもう私の手に負えなかった。

叢雲がわんわん大声で泣き始め、提督が私に向かうか叢雲に向かうかオロオロしているうちに隣の部屋から騒ぎを聞きつけた一ノ傘副提督と電が飛んできて、副提督は「と、とりあえず落ち着かん？ ね？」とたいして役に立たず、電（勿論ジャンケン大会に参加していた）は立つこともままならない叢雲を背負うようにして執務室の外へ曳航していった。私とすれ違う時に「……できる限りのフォローはしますので」と、ボソリと言い残して。フォローが欲しいのは今現在の場でだと、どうして分かってくれないのだろう。

誰かが泣いた後の部屋というのは、なんだか、静か過ぎてかえって落ち着かない。そんな中に残った三人は頭を落ち着かせ、先の騒動について話し合うことにした。

「よし分かった。まず最初にだ。扶桑型戦艦山城は本日をもって解体追放処分とする。姉でも誰でも勝手に探しに行つてしまえこの馬鹿！」

「そう来ると思つてましたよーだ。解体した私の不幸艦装を誰かに合成して運をマイナスまで下げてやる」

「二人ともちよい落ち着いてん。なんか知らんけど山城ちゃんにも事情があるんやろ？ 意味もなく叢雲ちゃん泣かすような子やなかうもん」

「副提督……！」

味方！ 初めての味方！

夜な夜な艦娘が集まって叢雲がウザいと言いついて合っていたことを洗いざらいゲロつてしまう欲求に負けそうだったけれども、一ノ傘副提督に免じて思いとどまることにする。ブラツクなお方だとばかり思っていたのに、なるほど長門たちが付き従うのも領ける。

「まず山城ちゃんが何したかを、理由も含めて教えてくれんかね。あそこまでのガチ泣きを見たんは学生時代以来やわ」

「この馬鹿はあろうことか叢雲がウ、ウザいとぬかしたのだ！」

「はいはい竹櫛の話は後で聞いちゃるけん——山城ちゃん、ほんとに言ったん？」

「……弁解をさせて下さい。悪意はないんです。むしろ善意でして」

私が筋の通った言い訳を考えている間に、唐突ですが竹櫛提督と一ノ傘副提督の喋り方について解説します。読み飛ばしても問題ないです。

二人とも昔からの付き合いで福岡育ちだそうです。訛りを気にした竹櫛は標準語をマスターできず文語のようになってしまい、逆に訛りを気にしなすぎた一ノ傘は喋りたいように喋るため独自の方言を構築していきました。博多弁＋北九州弁＋鹿児島弁＋ α と本人は思っているようですが、 α がおおよそ五割を占めていることに気付いていないようです。ただ二人とも共通して「阿呆」は軽口のように受け止め、「馬鹿」を明確な侮蔑とみなしています。各々の感覚で捉えるべきニュアンスに明確な基準があるのは良いことでしょうね。艦隊のトップがそうなので必然、私も「この阿呆！」と言われたら「何よ阿呆！」と言いつ返す余裕はありますが、「馬鹿」と言われたら脳内ゴングが鳴り響くようになりました。他の艦娘もだいたいそうです。自由奔放、ただし影響を受けるもまた自由、という感じでしょうか。長々と何が言いたいかと結論を出しますと、さつき提督に「この馬鹿」と言われた私はとてもイラツとしたというわけです。私に落ち度がなければグーで殴っていました。ええ解体上等ですともよ。

——よし策は整った。ついでにここで一つ、私の立場をか弱いものに演出するため小芝居を打ってみるのも悪くない。叢雲を泣かせて

しまった弁解をするならば、私だつて精神的に追い詰められていますとアピールするのが得策。

秘技！ 年中睡眠不足による欠伸を利用した嘘泣き！

「山城ちゃん嘘泣きとか巫山戯たことしたら鎮守府から追い出すよ」

あ、ダメだ副提督この人超怖い。

「えーとですね……叢雲には強くなって欲しいんです。今のままでも練度は十二分ですし、作戦での状況判断力なら彼女の右に出る者はあんまりいません」

「あんまりとは何だ貴様！ 叢雲にケチをつけるのか！」

「竹櫛うるさい。私の電とかおるやろ。ねえ山城ちゃん」

実際に海に出るわけではない二人には説明のしようがない事もあるので、スルーして話を続けた。

「だからこそ改二になることを躊躇しないで欲しいんです。お二人もこここのところ叢雲が悩んでるところをみますよね。強くなれるのなら強くなればいいのに、って思いませんか？」

「うんうん。私もそう思つとつた」副提督はこれで完全に私の味方になった。「ごちゃごちゃ考えとる叢雲ちゃんは置いて、竹櫛あんな何でさっさと改造してやらんのか？」

「き、貴様らのように人の成長までも安直に考える連中とは違うのだ！ ……難しい問題なのだ！」

「難しい問題なんですか？」「いやあ、別に？」私と副提督は顔を見合わせた。

「特別な設計図はいらんし、そら魔法でもないんやから費用はかかるけど何人かの改造くらい見込んでるのが予算つてもんやし、後は……改造後の能力と燃費がどうやろね、ってくらいやろ」

「だそうですよ提督。というかあなた以前、叢雲改造のために勲章八个も温存してるとか言っていましたよね。改二どころか改三まで無意味に見越してましたよね。まさか叢雲の改造に設計図が必要無いのが逆に不満だとか言いませんよね」

「そんなわけがあるか」

「じゃあ何ですか面ど……」危うく普段のように暴言を吐きかけた。

一応、今は私の立場が悪いので自重しないと。

「……ならば一ノ傘、お前はどうか。仮に電が改二になれるとしたらどうする」

「はあ？ んなもん全てに優先して改造するに決まっとうもん。当たり前やん」

「本当にそうか？ ようく考えてみる——大幅に強化され別人のようになり、外見まで大きく変わってしまう可能性もあるのだぞ」

「ハッ!?」 雷に撃たれたように副提督。

「しようもない！」 つい叫んでしまった私。

「何を悩んでるかと思えば発想が叢雲以下！ 面倒臭い！ 女々しい！ ウザい！」

「死活問題だ！ お前程度に理解できるものか！」

「理解したくもない！ こないだの鳥海の際は惜しみなく勲章使ったくせに！ というか私はいつまで改のまま放置されてりやいいんですか！ そんなに扶桑型戦艦が気に入らない……あれ？ まさかですけど、私も外見が変わることを気にして……とか？」

「ふん。お前なんか勲章は勿体無いからに決まっている」

「くたばれ！」



提督を殴り倒して自主的に営倉にひきこもること丸一日、内側から施錠できない扉がキイと音を立てて開いた。

恐る恐る姿を見せた叢雲は制服がバージョンアップされていて、ますます特型駆逐艦のよその子へと変貌していた。それと頭の謎デバイスの形が変わったような気もするけれど、元の形がどんなのだったかはつきり覚えていない。思い出す前向き気分になれない。球磨の影響を受けた太腿のナイフホルスターだけは相変わらずだった。

妙にオドオドした叢雲は中に入ってくるでもなく、気まずそうにしている。

「改二になったんだ？」

「ええ、まあ……」

「可愛い制服ね」

「そ、そう？　ありがとう」

「改造はどんな感じだった？　期待してた感慨はあった？」

「いやあ……特になかったです。はい」

「そう。じゃあ叢雲改二さん、扉閉めてくれる？　私は今からおやすみなさい」

毛布にくるまり直そうとした私を「待って待って！」と叢雲が扉に手をかけたまま邪魔をする。

「叢雲の事をウザいと言い放ち提督をブン殴った私に用事があるとするば、処罰か復讐の二択だと思うのだけど、どっち？」

叢雲は顔をうつむき気味にしたまま言った。

「憎まれ役になってくれたんでしょ？　敢えて挑発することで、改二になる決心がつかない私の背中を押そうとしてくれたって」

「はあ。どこ情報よそれ」

「電が教えてくれたのよ。だからその……山城にはお礼を言ったらいいのか謝ったほうがいいのか分からなくて」

叢雲の好感度が下がらずに済んだだけでも有り難いと思わないといけない。最初から電がやればよかったじゃないと文句を言ってもいけない。だって私は不幸だから。

「私は提督を殴ったんだけど？　鼻血を見て怖くなってここまで逃げてきたわけだし」

「アイツが酷いこと言ったそうじゃない。副司令に説教されたそうよ。鼻血垂らしながら」

「ねえ叢雲、あんな男のどこがいいの？」

「んなっ!?　べ、別にいいでしょ私のことは！」

「もう隠しも否定もしないんだ」

バンと乱暴に部屋の扉が閉じられ、カチャリと鍵がかかる音がした。気難しいなあ総旗艦殿は。

「……で、あのバカが無駄に溜め込んでた勲章、山城に使うことに決まったから」

「改二になれるってこと？」

「そ。何か不満ある？」昨日まで改二になろうかどうしようかとうジウジウ悩んでいたくせに、叢雲は偉そうに扉の小窓から覗んできた。

「不満はないけど……自分のこと殴った艦娘に貴重な勲章を使うとは思えない」

「その辺も副司令に反省させられて同意したから問題ないわ。アンタが次に顔を合わせる時は『私は山城に対して不適切な接し方をしました。もうしません』って謝罪されるわよ。まあ、副司令は大艦巨砲主義などころがあるから、山城改二の火力に期待してるってのもあるかもだけどね」

「ふうん。副提督って頼もしいと言うか狡猾というか、改めて難しい人だと思うわ」

「ふふっ、まったくね」

「ところで叢雲さんや」

「なんじゃ山城さんや」

「改二改造したばかりなら分かると思うんだけど——その改造は営倉の中でもできるものなの？」

「無理に決まってるじゃない」と言いつつ鍵をチラつかせてくる。ウザい。

「よし分かった。ジャンケンで勝負して、私が負けたら鍵を開けて工廠まで連れて行って」

「……なんで負けたら？ そんなに勝つ自信ないわけ？」

「問答無用！ ジャーンケン——」

ポン！ で私は非必殺のナマクラ、チョコキを出した。

叢雲は小窓から私のナマクラを「ふむ」とじっくり観察した後で「はいパー。私の負け」とも素っ気無かった。

「ちよつと！ 後出しじゃない！」

「じゃあ後出しで私の負け。残念でした」

「卑怯者！ 叢雲がそんな奴だなんて知らなかった！ 分かった、改造ミスで性格がねじ曲がったんだ」

「あのねえ山城——」毛布の中から吠える私に、溜息まじりに言う叢

雲。

「どうせ幸運の女神に嫌われてるから絶対に負けるとか思ってるんでしようけど、私たちが祈るとすれば、それは勝利の女神よ。どんな不運も覚悟の上、それに撃ち勝つのが私たち艦娘ってものでしょ」

あんまりにも受けた衝撃は大きく、私はしばらくポカンとした。

「な、何よ。反応くらいしなさいよ」

「改二になっても運のパラメータ、あんまり上がらなかつたんだ」

「うっさいバカ！ いいでしょ別に！」

「冗談ですごめんなさい——いや本当に、感銘を受けるっていうの？

なんだか不幸でもいい気がしてきた。そうよ勝てばいいのよ。むしろ今まで生き延びてきた分、私には勝利の女神がベツタリしてくれてるのよ！」

「できればその勝利の女神の恩恵、艦隊の仲間にもお裾分けして欲しいくらいよ」

「勿論。じゃあ早速工廠に行つて改二改造しないと。なんてったって勝利の女神は私についているのだから！」

「ごめん。それはちよつと待って」

小窓越しに話をしていた叢雲はパイとそっぽを向いてしまった。

「あのね、実はここに来る前にお願ひされたのよ。山城に悪いことしたからお詫びがしたいって。二人つきりで、できれば誰の声も届かない場所であつて。営倉なら都合がいいからちよつと中で待ってもらつていって」

「総旗艦殿には釈迦に説法だろうけど、そういう話は『誰が』の主語を付けた方がいいよ」

「……古鷹が」

「お願い出して！ 今すぐここから出して！」

扉に飛び付いて叩くと叢雲はゆっくり離れていった。

「だ、大丈夫よ。古鷹なら営倉の鍵を預けてもいいくらい信頼できるわ」

「耳。赤くなってるんですけど」

慌てた叢雲は両手で耳を塞いだ。

「古鷹が何しに来るか分かってんじゃない、このムツツリスケベ！」
「は、はあ!? ただのお詫びの何処にスケベ要素があんのよ! アンタの思考こそスケベなのよ!」

「言つとくけど磯風みたいな小娘にダウン取られるようじゃ古鷹相手だと死ぬからね! 地獄を天国で上書きされたことある!? 涙が枯れてからが本番なんだから!」

「だったらそのまま死んでしまえ変態!!」

そう叫びながら叢雲が走り去っていったことで、私は自ら最後の逃げ道を捨ててしまったことに気がついた。「待つて叢雲、むらくもー!」と、いくら叫んでも聞こえるはずはない。だってここは誰の声も届かない場所。古鷹が都合が良いと言った場所なのだから。

どうせ古鷹は叢雲が出ていくのを今か今かと待ち構えていただろうから、どうして私がこんな羽目にと嘆く時間はほとんど無い。風が吹けば桶屋が儲かるように、叢雲がウザくなれば古鷹が潤う。もう慣れっこですよこんな負の連鎖は。

ところで風が吹いて桶屋が儲かるまでの過程について考えを巡らせると、失明してしまう人と三味線にされてしまう猫が出てくるのは現代的思想に基づくといささか不謹慎ではなからうか。いやいや時代が違い過ぎるし「風が以下略」を偶然的の奇跡か非現実的かのどちらのニュアンスで使うかを議論したいわけでもない。

ただ、叢雲が改二改造を浴るところから始まり、古鷹が嬉々としてここ営倉に来るまで、あんまりにも私が可哀想過ぎませんかと声高に主張したい。偶然を重ならせるにしたって不幸という鎖で繋がなくてもよいでしょうよ。たまには幸運が幸運を呼んでもいいでしょうよ。1/3なんて贅沢は言わない。せめて1/5くらいの確率で私が美味しい思いをしたっていいでしょうよ!

「そうだよ。だから山城には今からたくさん、気持ち良い想いをしてもらおうから——」

「オーケー観念するから今は待つて古鷹。私、昨日からずっとここにいたの。ジャンケン大会の前からお風呂入ってないの。分かるでしょ」

「知ってる？ 山城の匂いって優しくて、落ち着くんだよ」

「そんな息荒くした人の言葉とは思えない」

「戦艦寮だと気を遣うけど、ここは大丈夫だから。山城の苦勞に免じて好きだけ休暇を取っていいって許可も貰えたから。ほら見てこれ、使われてないのを見つけたよ、手錠。すごい場所だよねえ営倉つて。普通こんなの使わないよねえ——えへへ♪」



R指定は良くないと思うので結果だけを簡単に言うと、気が付くと私は改二になっていた。比叡が言うには、レベルアップ時のHP・MP全回復を利用するようなスマートな方法なのか。私には応急修理女神に頼ることを前提としたゾンビ進撃と同レベルのブラック理論としか思えない。

改二改造と意識の覚醒、どちらが「ついで」だったのかは誰も答えられなかった。

第28話 二周年

ドーモ。カンコレテイトクIIサン。正規空母、葛城です。

本日の業務をこの辺で切り上げて休もうとしているところですよ。提督は先程あくびをしながら執務室を出ていきました。「後よろしく」と言い残して。それは別にいいんです。いつものことですから。困ったのは伊号潜水艦の五人です。夕方ごろに遠征から帰ってくるなり休息も取らず工廠に籠り、ずっと出てくる気配がありません。何を作つてと頼んだわけでもなく、今日はもう休んでくれてよかつたにもかかわらず、日付も変わろうというのに窓から漏れる明かりが消えない、というか怪しげな機械音が響いています。僕はこのまま自室に帰つてもよいのでしょうか。それとも工廠の様子を見に行くべきでしょうか。普通ならば後者に決まっています。ですが練度カンスト空母である僕から見ても、遠征から戻るなり開発に精を出す艦娘は普通ではありません。遠征任務中に自分たちの装備に不満でも覚えたのでしょうか？ にしたって明日でいいでしょう。何も五人がかりで開発に励む必要はないでしょう。

僕と提督、大和、猫吊るし、そして伊号潜水艦が五人しかいないこの艦隊では誰某に苦手意識を持つ贅沢はしていられません。働いてくれるのであれば猫吊さんとでも、仕事の相談をして一緒にランチをして出撃中の留守を任せて戦果をまとめて、また明日と手を振りまです。ええ慣れましたとも。発狂しそうになるのは最初だけでした。むしろ誰よりも軍の『かくあるべし』に忠実である猫吊さんは日本一優秀な職員と言っても過言ではありません。猫吊さんが着任してくれてから僕の仕事も随分と楽になったものです。……妖怪ですけどね！

だから贅沢な悩みだと僕は自分に言い聞かせています。ですがどうしても、伊号潜水艦の五人が僕にはよく分かりません。決して不仲ではありませんが、接し方が分からないのです。時々、見えている世界が違うのではないかとすら思えてくる程なのです。



「完成でちー!」

【伊58:L.V. 150+1】

結局、僕は昨日、落ち着かないまま自室に戻りました。ですが工廠をずつと気にしたせいで欠伸が止まりません。

ぼやけた頭と視界で執務室を開けてパソコンの起動を待っている、目の下を青黒く変色させたゴーヤが飛び込んできました。その姿に僕は少し、恥ずかしながら、失禁しそうになりました。……しそうになった、であって失禁した、ではありません。それくらい驚いたという表現です。驚いたことを恥じたという意味です。

ゴーヤは工廠から一直線にここ執務室まで来たらしく、所々が焦げたりしている作業着のまま、お風呂にも入っていないからか髪もガビガビしています。ここまでは良いのです。ちよつと不潔なくらい可愛いものです。

問題はゴーヤが、大和の主砲よりもゴツい鉄塊を肩に担いでいることです。これに僕は驚いたのです。

「見て見てすごいのが作ったよ。ほら見て」

「見えてる見えてる嫌でも目に入るからこつち向けないで」

その鉄塊はどこか見覚えがあり、僕は青白い脳細胞をフル回転させました。走馬灯にも近いほどの勢いで記憶を探るのです。だつて少なくともゴーヤが担いでいる鉄塊は、まず間違いなくボンバーウエポンなので。

「……思い出した! それ映画でシユワちゃんが使ってたバズーカ?」

「ランチチャー系の兵器をバズーカって呼ぶのは、レシプロ戦闘機なら全部をゼロ戦って呼ぶようなものでちー」

知らんがな。

「でもコマンドーのこと言ってるならイイ線いってるよ。なんとビツクリ、これはロケットの代わりに魚雷を発射する、その名も『トルピードランチチャー』でちー!」

もう驚き済みなのでトルピードランチャーなるものをまじまじと観察しました。何のことはありません。魚雷発射管を四本束ねたものにと手と照準器を付けただけです。ただ一般的な駆逐艦や軽巡や僕などが装備するものより見てくれが第三次大戦的になっていて、威圧的に感じてしまうのでしょうか。いや実際、こんな狭い部屋で発射されたら僕はおろかゴーヤも巻き添えでミンチになるのですが……。

「おやおやその冷めた目。ただの魚雷発射管だと思ってるね？」

「いや……資材とか電気とか無断で使ったことには目をつぶるから、その危険物を置いて速やかに休息を取ってほしいと思ってる。他の四人は？」

「トルピードランチャーが完成したら倒れ……工場で寝ちゃった。みんな疲れてたしね」

「うん。その四人は僕が何とかしとくから、ゴーヤも自室に戻るからお風呂に行くかして」

『「な、なぜそのような兵器を？」って聞いてくれないんだー。シヨツクでちー」

「な、なぜそのようなへいきを」面倒臭い。

「よくぞ聞いてくれたでちー！」

徹夜したからだと思えます。ゴーヤのテンションはちよつとおかしなことになっているようです。

「昨日の遠征、コンテナ船を護衛するのでね、到着して港の警備にバトンタッチした後だったのよ。新米っぽい奴が浮かれて敬礼して、『二周年おめでとうございます！』だって」

「そういうえば何かが二周年らしいね。記念掛け軸もあるとか」

「だからゴーヤ達で決めたんだけ。アイツ殺そう、って」

「……………」

可愛らしい女の子が魚雷発射管（装填済み）を担いで笑顔で「アイツ殺そう♪」とのたまう恐怖は対峙した者にしか分からないと思います。僕は大喜急、提督が始業する前までにトイレ・シャワー・着替えを済ませなければならなくなっていました。大和でも猫吊さん

でもいい、誰か何とかして……。

「……怒らないでね？ 僕にはイマイチその新米君を殺す動機が分からないんだけど」

「えっ!? だって二周年おめでとうだよ!? 港ごと焼き払ってケジメをつけさせないと!」

規模が大きくなった!

「僕の聞き方が悪かった。よく知らないけど二周年は、ゴーヤにとっておめでたい事じゃない、ってこと?」

「戦争二周年を祝う趣味はないでち」

「ああ……なるほど」と言いつつ、僕は誰が正しいのか分からなくなっていました。二周年がどうこう騒いでいても僕はおよそ一年間、艦娘と深海棲艦の間を彷徨っていて記憶がないので興味がありません。

ゴーヤたちの怒りを買った新米君はたぶん男性で、艦娘を間近に見て興奮して、何かしらがおめでたくて悪気はなく「二周年おめでとうございます!」と言ったのだと思います。相手に悪気があつたら雷撃していいかどうかは別として。

「本当はその場で吹っ飛ばしてやりたかったのに、潜水艦は基本的に陸上の敵には無力……! あれほど悔しい思いをしたのは久しぶりでち!」

「敵じゃないからね。派閥のいざごきはあつても一緒に戦う仲間だからね」

「そこでゴーヤたちは考えたでち。魚雷をロケットランチャーのように改造したらどうだろう? 水陸両用にしてしまえばどうだろう?」

「水陸両用ってそういう意味で使えるの? というか魚雷は空をすっ飛んでいくものじゃないでしょ」

「その通りでち。さすがは砲雷撃戦までこなすマルチロール空母、よく勉強してるね」

「シーツ、誤解を招くこと言わないで。深海棲艦だって判断されたら実験プールで雷撃処分されるか調査解剖されるかの立場なんだからね、僕は」

「大丈夫、大丈夫——というワケでこのトルピードランチャー、実は最

も工夫された箇所は装填する魚雷の方なんで！ 世界初！ ロケット弾のように空を飛ぶ魚雷！」

「それロケット弾のように、じゃなくてロケット弾そのものだと思う」「まあ実際、作るのが難しくって仕組み的にはグレネードランチャーに近いものになっちゃったけどね」

だから知らんがな。

「作るだけ作ったけどテストできてなくて。ねえ葛城、今日って確かあっちの鎮守府と演習組んでたよね？」

「僕一人が出る。だからゴーヤは今日はもう休みでいいから——」

「腕が鳴るでち！ 爆雷バラ撒く低練度の駆逐艦はコイツの丁度良いのでち！ もし二周年とかで浮かれポンチだったら……ナムアミダブツ！」

徹夜のテンションを維持したままゴーヤは執務室から出て行きました。廊下の壁に長大なトルピードランチャーをゴツゴツとぶつけながら。

シャワーを浴びたい。下着を替えたい。でもその前に大至急連絡しないと。

「おはよう葛城。ん？ なにか慌てる？ さっきミサイルみたいな持ったゴーヤとすれ違ったけど」

「すれ違ったって……止めようよ、あなた提督でしょ。鎮守府内で見たまんまの超危険物を持ち歩いてるんだけど」

「やだよ。目が怖かったし」

「だろうねえ。提督がそんなだろうと思ったから僕は焦ってるの」

「まあ酷い」と呑気に言う提督を無視して、僕は天照大艦隊に電話をかけました。あっちの今日の秘書艦は誰だろう。叢雲さんみたいに話を通じる相手だといいなあ。今日の演習はロケット魚雷が飛んで来ても何とかなる練度の艦娘に変更して下さい……なんて話を通じる艦娘が、全国に何人いるとも思えません。

こうして僕の、本日の業務が始まりました。いっつもです。いっつもこんな感じです。二周年だか記念日だかは分かりませんが、中には毎日「……深海棲艦になつといた方がマシだったかなあ」とつぶやく

艦娘がいることを、僕は誰かに覚えておいて貰いたいんです。
嗚呼、ナムアミダブツ！

第29話 叢雲の薬指 — 海花と海鳥 ①

◆ — 海花と海鳥 — ◆

正規空母として戦場に身を置く夷川海花には、同じく正規空母となった海鳥という妹がいる。

あるいは、いた。

二人がかつて所属していた艦隊の司令官であり父でもあった男は哀れにもあまりに無能であり、まず海鳥が激戦海域に出撃したまま帰投を果たさなかった。艦隊壊滅の引き金となる一人目となつてしまったことを、彼女が知れば何を思っただろうか。

行方が分からなくなった海鳥とその部隊を捜索すべく愚かな父は手持ちの駒を全て投入し、全てを失つた。海鳥の姉、海花も例外ではなかった。

それから一年の空白の後、海花は艦娘と深海棲艦の間で揺れながらも父の前、そしてある艦隊の前に姿を表した。

逆恨みから他の司令官に襲撃を仕掛け失脚した父が迷惑をかけた分を償うため、海花——正規空母『葛城』は暁の水平線に勝利の炎を捧げた。

だが、やはり振り返らずにはいられないこともある。
忘れてはならないことがある。

出撃の度にその海域が気になった。

まだ葛城が精神的に未熟であつた頃、衝突してばかりだった妹の行方が知れなくなってからは泣いてばかりだった。そして涙が枯れるより先に彼女自身も行方不明となった。その当時よりは前進し、夢に見る昔の自分を「情けない」と一喝できるまでに力を付けた。しかし叱咤され泣きべそをかく自分の横に立つ妹には何も言えなかった。夢だからだろうか、妹の表情はひどく曖昧だった。

確かな情報がないまま姿を消した妹の海鳥——正規空母『~~X~~』を、葛城は今でも想った。

強さこそ絶対であると唱える者を、否定するつもりはまったくない。反論もしない。揚げ足も取らない。しかし肯定もしないし、長月の持論を語ることもしない。つまり彼女自信にとつて艦娘としての強さなど何の意味もなかった。

【長月：Lv. 41+1】

魚を捕ることだけが目的ならば刀でチクチク刺せばよいし、あるいは爆雷を使った爆破漁なども駆逐艦らしくてよいかもしれない。しかしそんなことをすれば魚釣り大会では当然失格である。目的と手段、これらと長月のベクトルが並行であつてくれるかどうかはまったく別次元の話なのだった。今はただ魚がエサ付き針を口に啜えてくれるのを待つばかりの、釣り糸と針を蝶結びで結ぶ程度の無力な少女でしかない。

斬つた亡者から吹き出した汚血ならば、風呂で洗い流しジャージは洗濯すれば綺麗サツパリする。ソレはソレ。

釣りのエサとして臯月が買ってきたウネウネ動く気色悪い虫は触りたくも視界に入れたくもない。コレはコレ。

仕方なく望月のやり方を参考に、食パンの耳を釣り針に通して海に垂らすこと数十分、果たしてこれで釣れるのだろうか、そもそも海中に没したパン耳はまだ崩れず健在だろうかと長月はどうでもよく思い、軽い溜息を青空に流した。隣では文月が海面をぷかぷか漂う悪趣味なルアー、スケルトンナインが獲物に食われるのを欠伸をしながら待っている。

カレンダーズ魚釣り大会は現在、ヒトデを一匹釣った弥生が首位、それに長靴を一匹釣った卯月が続き、他に当たりが来る気配はまるでない。最初は横一列に並んで仲良く同時に糸を垂らしたカレンダーズだったが、早くも「場所が悪い」と移動した菊月に始まり、忍耐という概念を持たない皆は性格からして釣りに向いていないことを悟り始めていた。

現在時刻は一三五〇。澄んだ空と涼しい風は釣り竿を握るには絶

好の気候である（釣れる釣れないは別にして）。せつかく道具まで揃えたのだからと止め時・飽き時すら決められそうにない空気の中、長月は「（これは……不毛も極まったな）」相変わらず垂らした糸に工夫をこらそうともせず頭をほりほりとかいた。

それでもカレンダーズの一艦、睦月にいちゃもんを付けようとする者は一人もいなかった。



カレンダーズとは勿論、睦月型駆逐艦のことである。

命名者は睦月。彼女は当然ながら特定の姉妹艦を仲間外れにするような真似はせず、陰暦九月の異名である菊月、陰暦八月十五日の月でもある望月、陰暦八月三日の月を特にいう三日月もカレンダーズに含めた。

「今日から睦月型は『カレンダーズ』って名前にしよう。グループ名みたいでいいでしょ」

【睦月：Lv. 44】

そう宣言してから前述の三名が仲間外れにされた顔をしているのに気が付き、慌てて頑張つて辞書をひいたのである。あんまりに唐突過ぎて意味不明な睦月も睦月だが、自分の名前の由来くらい知っておくよと胸の内ですツツコミを入れた長月だった。

ちなみに、睦月型ヨコモジ化の原因は白露であった。

「今日から白露型は『砲火後ティータイム』になります！ ハイ苦情は受け付けません！ 春雨が加わったからね。なんだか青白くて葛城さんみたいで強そうな期待のホープが加わったからには、白露たちも進化していかないと。そんなわけで『砲火後ティータイム』、はりきって行きましょー！」

【白露：Lv. 60】

渾作戦が終息したあたりでやけに青白い春雨が天照大艦隊に加わった日、『砲火後ティータイム』が即日解散となったのは言うまでもないことだが、何を勘違いして対抗心を燃やしたか睦月が結成した

『カレンダーズ』の方は、語呂がウケたのか今日に至るまで存続・浸透しており、部隊編成では「カレンダーズより四名」と指名されるなど定着してしまった。うっかり「カレンダーズ」とだけ言われて軽巡も空母も付け忘れた睦月型だけで決戦援護のための遠征に出してしまうミスもある程の定着っぷりである。



見慣れた港。間の抜けたウミネコのさえずり。代わり映えのしない海。釣れない魚。

二匹目の長靴を釣り上げた卯月が「つままないぴよん」と言っただけで釣竿を海に投げ捨てようとしたのを弥生がかろうじて制止した。だが変色したばつちい長靴は捨てた。

「釣り道具セットがいくらしたか忘れたか卯月。元を取るまで撤退は許さないぞ」

【菊月：Lv. 39】

「ケチ臭いなあ」と釣り姿が太公望のように堂に入っている望月に、菊月は「戦果を求めて何が悪い」と食ってかかった。「一応これは釣り大会なのだが？」

「戦果とか勝ち負けとか気にしないでさー。のんびり糸を垂らすのも釣りの醍醐味って言うじゃん」

【望月：Lv. 40】

「というかさ、砲弾とか爆撃機とか飛んで来るかもしれない海を前にしてこんな風時間を無駄にできる娯楽なんて、あたしただけの特権っしょ？ 役得になっちゃった娯楽を使い潰してたらだらでできるんだから満喫しようよ。ああ、まったく外の風も悪くないさね」

不毛を楽しめる望月が大人めいて見えてしまうものだから菊月は余計に面白くない。少し考えて言った。「望月。いいことを教えてやろう」

「んあ？ いーんこ？」

「一ノ傘副司令の艦隊がここに越してきた日、あちらの陽炎型が異常

なほど贅沢な家電製品を持ってきたのを覚えているか」

「話が唐突だねえ。個人用冷蔵庫とか空気清浄機とかのこと？」

「あれ、艦娘くらいしか入れない海域で採れた珍しい海産物とトレードして得たものらしいぞ」

それを聞いたカレンダーズは『『マジで』』と双眸を輝かせた。

もちろんマジであるはずもない菊月のでっちあげエピソードである。艦娘が海で荒稼ぎできるような戦況になっているとすれば、深海棲艦は日本に王手をかけていることだろう。制海権を奪われた日本に空気清浄機を作る余裕などあるだろうか。

迂闊なデタラメ話をした菊月と、話を鵜呑みにするカレンダーズ、どっちもどっちである。

鼻息を荒げた卯月が抑えきれない欲望を不純な情熱に換え、釣り竿を再び手に取った。

「……うーちゃん、人をダメにするっていうソファが欲しいぴよん」

虫は苦手だと言っていた如月がウネウネ動く虫を数匹まとめて掴んで釣り針に刺した。

「応急修理女神を大人買い……うふふふ……」

「いや、あの……皆？」菊月はカレンダーズの欲深さに呆れる以上に戦慄した。

「睦月は可愛い下着が欲しいと思ってたんだあ……。ねえ菊月ちゃん。睦月はね、可愛い下着が欲しいと思ってたんだあ……」

「その、だな……」

「じゃあ移動しようか」と望月。「射撃場のあたりなら珍しい魚が釣れるかもよー」

「れっつ、ごー！」ゆらゆら海面を泳がせていたスケルトンナインを文月が引き上げるのを皮切りに皆が移動の準備を始めた。今更さっきのは嘘だと言えない菊月は「あう」と呻く他にできない。

「そう心配しなさんなって」望月はぽんと菊月の肩をたたいた。「いざって時は青葉に頼めばいいからさ。ちよっと撮影して動画を投稿したりナニしたりするだけで十分貯まるよ」

「わ、分かかって言ってるだろお前！」

「さてね。なんのことやら」

泣きべそをかきそうな菊月、面白がる望月、欲望のままに移動を開始するカレンダーズ。不穏な混濁気を港からうららかな海へと垂れ流しつつ魚釣り大会第二ラウンドを始めようとする阿呆共に待ったをかけたのは長月だった。

「皆……ちよつと待ってくれ」



望月が次の釣りスポットに指定した射撃試験・演習場は、工廠から水平線に向かって約2キロと少々も伸びる、その名が示す通り兵装のテストやトレーニングを行う細長い施設である。国境線でも敷いているように見える鼠色の壁が陸から海の遥か先まで横たわっている様は異様であり、事情を知らない関係者ですら視察の際に変に勘繰る有り様である。

「これはもしかや加速器の建設中か何かですか？」

工廠から施設内に入ると、実際は果てしなく長い他に特筆すべき事はない防音壁が海面上に浮かんでいるだけであり、それを知って露骨にガツカリする失礼な輩も少なくない。

粒子を衝突させて生み出すブラックホールやら何やらを超兵器へと昇華させる研究はさぞ浪漫に溢れることだろう。しかし実態は艦娘がバカスカ撃ちまくることで発生する騒音がご近所さんの迷惑とならぬように音を遮断するので精一杯である。戦争と生活の妥協ラインが2 kmの射撃試験・演習場となったのであった。あるいは鎮守府で快適な静穏ライフを送るために、ご近所さんへの配慮を口実として得た補助金で建てた設備でもあるのはナイショである。二十四時間いつ早朝バズーカならぬ早朝連装砲が鳴り響くか分からない生活環境は実際、死活問題であった。

カレンダーズ魚釣り大会の第二会場として射撃試験・演習場が選ばれ、それにしても、いつ見ても無駄に長い建物だと長月はおよそ2キロ離れた建物の先端を何となく見た。建物の先端には、壁の影に隠れ

て海面に這いつくばっている者がいた。

「……………」

長月は自身のステータスを『洞観者』として疑わず、過信もせず、欺瞞の中と外を渡り歩いてきた。自分自身こそ絶対であるからこそ洞観者であり、ルールに縛られようが外れようが絶対的な自分自身を貫き通す。この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。小柄な体はその炎で満たされていた。

敵対するものが常軌を逸し過ぎてルールから僅かでも外れてさえくれれば、それが戦艦クラスはおろか鬼姫クラスであろうと、長月自身もルールを外れて相手取ることができるのであるが、それは単純に長月の異常な能力の範囲内で、という意味でも当然ある。例えば「死ニタクナイ」と命乞いをされれば躊躇うことはない。しかし阿呆な敵がどこで覚えたのか「ドローモ、ハジメマシテ。戦艦レ級デス」と丁寧にアイサツをされると、実際困ってしまうのは普通の艦娘並である。後に長月の対応がスゴイ・シツレイであると教えられても、やはり彼女は困惑する他にない。射撃場の先に見える者はそういう反応に困る類の阿呆なのだった。

長月でなくとも、視力に優れる艦娘のほとんどはランドルト環を2キロ先に置いてもし少しは見えて取れるだろう。海戦において目視できることは前提であり、索敵機・電探・僅かな気配を頼りに発見するこゝとこそ重要なのである。

母港でのんびりと釣りをしていた長月の気は確かに緩んでいた。少し目頭を押さえた後で、見間違いであったことを期待しつつもう一度、射撃場の先端を見た。そこでは学ランのような陸軍制服を着た間抜けが、海面上を匍匐でもぞもぞと動きながら鎮守府の様子を窺っていた。うっ伏せの体勢なので波を顔面いっぱいを受けて「おぶっー」のような顔をしているが、それでも立ち上がろうとはしない。どう見ても諜報活動中であった。しかし偵察どころか細波との戦いで既にいっぱいいっぱいに見える。天照大艦隊には阿呆が多いが、あのクラスの間抜けとなるとなかなか見当たらない。

面倒なものを見つけてしまったと長月は一人溜息をついた。釣り

スポットを射撃場に移動するついでにこつそりお沈み願うほうが騒ぎにならずに済むかと考えた。しかしいくらアレが間抜けであつても情報戦であることには露骨なほど間違いない。長月一人が下手に介入すれば個人の手に余るほどの、余計に厄介事に発展する可能性が非常に高い。陸軍との政治戦にまで発展してしまえば、それこそ長月のような戦闘特化の洞観者が最も役に立たない戦況である。

大抵の艦娘にできないことを成すのが洞観者だが、逆にできなくなってしまう事も少なくない。常識から外れたが故か、常識であり当然であるはずの恩恵を受けられない。長月にとっては不便と感ずる場合のほうが多いくらいである。

「皆……ちよつと待つてくれ」

崩れる可能性のある石橋を下手に叩いて破壊するわけにはいかない。長月はとりあえずカレンダーズを射撃場に近づけないようにした。

「そろそろ、えーと……あれだ。おやつ時間じゃないか」

「また出たよ、怪しんでくれて言わんばかりのセリフ。長月さー。なに隠したいか分かんないけど、せめてもうちよつと上手いこと言つて隠してよ」

【臯月：Lv. 39】

「ボクらも毎度毎度ごまかされ甲斐がない」

「ご、ごまかされ……」

「だって長月って、唐突におやつ食べたいなんて言い出すキャラじゃないし」

いや私だって甘味は人並みに好きだと言いつ返したかつた長月だが、今はそういう問題ではない。

「……それは気遣つてくれてるのか？ それともバカにしてるのか？」

「隠し事を正直に話してくれたらボクらも正直に教えてあげる。ねえ皆？」

うんうん、と揃つて首肯するカレンダーズ。

長月としては「(怪しまれてはいるだろうな)」くらいのつもりでい

た。白露型ほど酷くはないにせよ、カレンダーズも南無三それなりに阿呆の集まりである。その阿呆共に嘘を看破されていた、どころか今まで気付かないフリをされていたとは、長月こそ最たる阿呆に他ならなかった。何が洞観者だピエロじゃないか、長月は少しばかり泣きそうになり、鼻がツンと痛んだ。

「……………サ……………」

間拔けな陸軍スパイと同レベルであることが耐え難く、今すぐ自室に帰って布団に潜りたくなった長月は言い訳を考えようとする余裕すらなく口から出るに任せた。

「…………サメがいるんだ。あの辺りには。…………どこかでそう聞いた、よ
うな……………」

『『サメ!?』』カレンダーズはまさか、食い付いた。

「そう、サメ。…………人喰い鮫」

『『人喰い鮫!?』』海のほとりからつんのめるほど慌てて離れるカレンダーズ。鋭いのか阿呆なのかどちらかにしてくれよと長月は呆れた。

「ジョーズ!? ジョーズがいるの!」如月と抱き合った睦月が発狂し
そうな声で言った。

「詳しくは知らないが…………とにかく人を食べるらしい」

「ウサギは!?! ウサギはエサに入るぴょん!」卯月は弥生と抱き合っ
てぶるぶる震えている。コイツらサメが怖くて今までよく艦娘を
やっていられたなと長月はいつそう呆れたが、自分ばかりが阿呆でな
くて安心もした。

「ウサギでも何でも食べるだろう。多分。分かっただろ? 射撃場の
近くは危ないんだ」

「しゅーりょー! カレンダーズ魚釣り大会はおしまいでーす!」

睦月が閉幕を叫び、釣り道具一式を捨て置いたまま長月以外のカレ
ンダーズは駆逐艦寮へと走り去っていった。道具を揃えるのに使っ
た小遣いが勿体無いと望月に噛み付いた菊月などアスリートの如く
誰よりも速い。逆に望月は射撃場と長月を交互に見て訝しげであっ
たが、ぽてぽてと皆の後を追いかけていった。

第30話 叢雲の薬指 — 海花と海鳥 ①と②の間

◆ — 洞観者 — ◆

「長月だ。久しぶりだな」

【長月：当時L v. 14 + 1】

「例の物がさつき届いたぞ。素敵なインテリア雑貨をありがとう。さっそく駆逐艦寮の玄関にでも飾ることに——それは私の台詞だそっちこそふざけるな。こんな武器をくれなんて頼んだ覚えはないし私のあだ名が『フフ怖』になりそうだ、どーしてくれる！ それに大戦艦のあんたは初心なんて忘れてしまってるだろうけどな、私たちの部屋は基本的に複数人部屋で宅配テロ対策なんて不可能なんだからな。私は二人部屋で寝起きして扉に鍵をかける習慣もない。鍵は逆にプリン一個を巡る殺し合いを認める証っていう変な風習があるんだ。もう姉妹艦の全員が触ったぞ、この刀。——手入れ方法なんて知るもんか、本物の刀がこんなに大きなものだってことすら知らなかったんだぞ。残念だけど価値の分からない人間に送るものじゃなかったな。——……は？ え？ ちよつ、ワンモアプリーズ。……特注で、さんびやくまんえん？ ……ははっ、いやいや武蔵さん、そんな冗談に引つかかるほど子供でも阿呆でもないぞ私は。嘘をつくなら『猫爪（ネコノツメ）』なんて可愛い名前じゃなくて虎徹とか斬月とかもつとこう……そりゃ私の艦装なんかより上等な鋼なのは触れば分かる。分かるけど……送り返す。この刀はあんたが自分で……嫌だよ三百万円を担いで出撃するとか！ 手を滑らせて海中に落としたらお終いじゃないかふざけんな！ ——ああ、そのためのストラップ通す部分が——いやだからそういう問題じゃなくて」

— 10 —

「何本か作る予定だから、最初の試作一本に強いて値段を付けるなら

三百万くらいになる、という意味だ」

【武蔵：Lv. 150+1】

「例えばお前が百人前のカレーを作ったとして一皿にどれくらいの値段を付ける？　ってくらいの感覚だよ。新開発の兵装に三百万くらい珍しくも何ともないさ。それとベタベタ触るなどは言ったが『猫爪』は艦娘が扱う兵装として作ったからな、防食に特化させている。汚れたらこまめに拭く程度で問題ない。その代わり刀の性能としては難しいが、少なくとも三徳包丁よりはマシだろう。……おい、いい加減に観念しておけよ長月？」

痺れを切らした武蔵は「その刀はお前の物だ。お前が使え。普段どこに置こうが飾ろうが構わないがな、もし送り返したり誰かに譲ったり換金なんかしてみろ、全国の洞観者と大和経由で司令部にお前のことを『フフ怖』と紹介するからな。——あー電波が悪いみたいだ聞かない。それじゃ上手く使ってくれよ」長月の返事を待たずに通話を切り、すっかり店主、あるいは司令塔としての貫禄が付いてきた『ハングド・キャット』の仕事に戻った。

◆ — 話はさらに一年以上前に遡る — ◆

鉄を舐めると血のような味がする。卵の腐ったような臭いはなるほど腐卵臭と呼ぶに相応しいと、腐った卵を見たことすらないのに納得する。強大な戦艦であった彼女にとっての呼び水はその程度の、自覚することすらなかったものだった。

従って彼女はある日ある瞬間、まったく唐突に目を覚ました。

居眠りを咎められたわけではない。一秒前までは事務仕事に追われていたはずである。室内の様子も、外の天気も、共に働いている提督も、何も変わらない。ただ彼女の意識だけが夢から現へと這い上がった。

覚醒してしまったからには理解できない道理はない。即ち今までの『夢』が、彼女が戦ってきた何もかもが、覚悟を決めて臨んできた戦場が、悪い冗談であるように思えてならなかった。

数秒前までの自分が作成していた記録が目の中のモニターに映っている。ルーチンワークではあるものの真面目に作成していたはずのそれを見て、彼女はボソリと呟いた。

「……何の遊びだ、これは」

【武蔵：当時Lv. 150 ↓ 150+1】

その声に反応した提督が何か言った。しかしその男は今の彼女の目には、ケージの中で回し車に夢中になるハムスターのようにしか見えなかった。いや、生きるための運動という意味のあるハムスターのほうがマシとすら思えた。そんな無意味な児戯めいた仕事を今すぐやめてしまえ、そう言いかけた言葉をすんでのことで飲み込めたのは、彼女も数秒前まで同じ児戯をしていたからだだった。その日は体調が優れないからと強引に休暇を取った。

その違和感が明確な不具合として現れたのは出撃時だった。

なぜ人間が戦車のような装備を担いで平然としていられる？

なぜ人間が、いや何であろうと海面より下に没することなく立っていられる？

訝しむ仲間がどのように装備し進水しているか、それだけはハツキリ理解できた。騙されているのだ。豚を煽って木に登らせるように、事実、かつての彼女自身も欺瞞に煽てられるまま木に登った戦艦だった。騙されていることを甘んじて受け入れながらの出撃は常の幾倍もの精神的苦痛をもたらし、母港に帰る頃には天下無敵の大戦艦は見る影もなくボロボロになってしまっていた。

最近らしくない、と氣遣われながら彼女は体を休めるよりも頭を冷やすことに重きを置いた。自分の頭がおかしくなったと疑うような弱い心など深海棲艦を千ほど沈めた頃に捨てた。欺瞞を洞観して見えた世界こそ絶対であるのは間違いない。しかしそれを仲間にも伝えてしまったのはいたずらに混乱させることだろう。心技体の練度に不足のない彼女ですら少々参ってしまったのであらば、いつそ墓か深海にまで持っていくのがよい。

ならば彼女が成すべきことは己にしか成せないこと、砲火とは別の手段で世界を弾劾することに違いないと、日が昇れば起床するよりも

当然のように覚悟を決めた。動力源は己が正義。倫理に従った義務である。だがしかし何より、彼女ら艦娘が騙されるまま戦に臨んでいる現状が気に食わなかった。

名残惜しきはあったものの無理を言つて鎮守府を出て、彼女が向かった先は研究機関だった。海を汚す深海棲艦。パンデミック——そのように解釈している誤りを正すことさえできれば、戦争を終わらせて全鎮守府を漁港や観光地に変えてしまうのに一年も必要ないだろうと彼女は考えたのだった。まさしくウイルスのように人類を悩ませる深海棲艦に対して、艦娘はワクチンなどではなく都合の良いウイルスに他ならない。最強の戦艦として戦ってきた経験と新たに得た啓蒙より導き出された結論である。この現状はあまりに巫山戯ていると、彼女は中枢で働いている姉妹艦・大和に頼み込んで用意してもらった紹介状をうっかり握り潰してしまった。

— 1 —

彼女は自惚れていた。迂闊と言う他にない。

その欺瞞こそ彼女を今まで最強の戦艦たらしめ、ルールから外れることは当然のように与えられてきた加護を捨てることでもあると、思いついた時には既にどうしようもなくなっていた。

— 2 —

研究者共は腐っていた。

普通の戦艦であった頃は新兵器の開発や海域調査、深海棲艦の研究などに没頭する純粹な味方であるとはかり思っていた。

彼女は何度も、クズ共の脳味噌というものは果たして何色に腐食するものなのかを頭蓋を砕いて確認してやろうかと手を伸ばしかけた。深海棲艦が沈めるべき存在であるならば研究者共には人としての形を保つことすら度し難い。彼女に下卑た話を持ちかける男を肉塊に変えるなど、敵部隊からはぐれた駆逐イ級を踏み潰すよりも容易い。

逆に研究者からしてみれば、社会の構造を知らぬ鴨が葱を背負つて来ただけのことだった。若い娘、しかも『撃沈王』と名高い大和と並

ぶ大戦艦が大した見返りも求めず協力を申し出て来たのだ。これ以上の果報が残りの人生に訪れようか。彼女は無知であるだけで知力は悪くない。好きに利用されていることに気付くのは早かった。だがその僅かな時間で十分だった。それほどに彼女の蜜は甘い。

傍から見たら何の事はない、子供が大人に良い様に使われただけの話である。

艦隊に戻る気力も無くしてしまふほど彼女は疲れてしまった。鎮守府を出た彼女を心配して様子を確かめた提督が強引に連れ戻し休養させたのだが、塞ぎこんだ彼女の耳には何も届かなかった。

巫山戯た世界を変えようとして何もできず、結局、この巫山戯た世界に帰ってきてしまった。こんな事になるのなら何も知らないまま戦艦として戦っていればよかった。行動を起こして後悔するなど最悪の兵士の見本ではないか。

白いはずの布団が灰色に汚く見え、もうずっと目を閉じていようかとぼんやり思った時、布団の上に茶色をしたものが飛び乗ってきた。立派な毛並みの茶猫だった。猫は黒猫に限らず不吉の象徴のように思われている。しかし欺瞞を洞観した彼女には何故だかそうは見えなかった。

「お前は自由の身か？」

茶猫は一声、小さく鳴いた。それが肯定か否定か、ただ気まぐれに鳴いてみせただけなのかはどうでもよかった。ただ無害に、何を気兼ねする必要もなく話し相手になってくれることが少しだけ嬉しかった。だからようやく、彼女は心のままに泣くことができた。

「……助けて、くれないか」

涙をぼろぼろと流す彼女に茶猫はまた短く鳴いて、布団から飛び降り窓の外へと走っていった。

— 3 —

その茶猫こそ、史上初めて全国に点在する炎に呼びかけた猫となった。

腐った者共を尋常外の炎で燃やし尽くせ。

武蔵と同じく道理を外れ、己を持って余していた艦娘達は茶猫の招待に喜んで応えた。

— 4 —

食事が喉を通らなくなつて二週間ほど過ぎた頃だろうか、一人の駆逐艦らしき少女が訪ねてきた。

「あー参つた。余所者が入る手続きだけでも面倒だつてのに、あんたに用があるつて言つた途端に警備の目つきが変わつたぞ」ぼやきながら部屋に入ってきた少女は頭に茶猫を乗せていた。「えーと、はじめまして。……何から話したものが迷つてたんだが、私と話す元気は……どう見ても無さそうだな」

【長月：当時L v. 9 + 1】

茶猫は少女の頭から布団の上に飛び乗り、何日かぶりに戻つてきたと武蔵が思えばすぐに丸くなった。

「こういう場合の対処はどうしたものか……私らが羊羹でも食べていれば気分が高揚する艦娘でなくなつてしまつたのは分かるだろ？だからたぶん普通の治療が必要だ。菓を飲んで寝ろ。夢すら見ないほど爆睡しろ。明日か明後日にでも医者をここに手配する。それから最低でも半年は休暇を取れ。艦娘の義務だの世界の嘘だのは忘れる。とりあえず、あんたが一人で抱え込んでた面倒事は猫から聞いて、私らで全部片付けておいたから。……新米同然の駆逐艦風情が何を偉そうに思うだろうなあ。いや思う気力もないか？でも我慢してくれ。猫の大雑把すぎる連絡じゃ、あんたが嘘だらけの世界を滅ぼそうとする可能性も考えないといけなかつたんだ。つまり、あんたが人類に敵対しようとした場合は最低でもこの鎮守府より外に被害を出さないよう身構えてたんだが——」

武蔵より頭二つは小柄な少女は、背に隠していた三徳包丁をプラプラと見せびらかした。

「——懷疑が無駄になつて良かったよ。あんたが鬼姫になつてたら私一人じゃ始末は骨が折れる」

長月が言った通り、その翌日に民間の医者が武蔵の診察に来た。

療養を続けるうちに、次第に口を開くくらいの気力は戻ってきた。蝸牛が這うようにゆっくり頭を整理しながら、艦隊の皆には当たらずといえども遠からずな話でお茶を濁し、対して見舞いに来る長月には思い切って様々なことを打ち明けた。

「まったくだよ。私ら艦娘は深海棲艦と戦えたって、それだけの世間知らずだ」

「どいつもこいつも箱入り娘からは程遠いのに、と長月は付け足した。

「嘘を嘘と見抜けたからって何なんだろうな？ 各地の鎮守府から一人出るかどうかの洞観者は——」

「洞観者？」

「言ってなかったっけ、私らはそう名乗ることに決めたんだ。秘密結社の構成員みたいなものだと思うってくれ。ただ困ったことが……ああ、ちなみにその洞観者なんだが、目覚めた中で自発的に目標を持って動いたのはあんた一人だけだった。で、様子見してた私らの元に猫の使いが来た。その猫が発信源の伝言ゲームみたいに全国の猫が、伝書鳩ならぬ伝書猫になったんだろうな。ちなみに私の所には白猫が来た」

モツプのようにふさふさした茶猫は武蔵に大人しく撫でられていた。

「それで困ってる事ってのはな。あんたの呼び掛けに応えた後、洞観者が集まって本当に秘密結社みたいなクラブを作ろうとしてるんだ。ああ勿論クラブを作る話が先で、それありきの洞観者だったはずなんだけどさ。フリーメイソンみたいな隠れつつ現れつつの自己主張をしたいわけじゃなくて、強いて言うならアサシン伝説に近いような……」

「穏やかじゃない例えだな」

「例えだよ例え。あんたも私も秘密の薔薇園ってガラでもないだろ？」

北は幌筵泊地、南はシヨートランド泊地まである鎮守府から集まっ

て薔薇を楽しもうってわけじゃないけどさ、情報の集約点とか発信源になる場所は必要だろ？ 問題はそこなんだ。どこを拠点にして誰が仕切るのか、てな具合でね。最近の名前をオシヤレにしたい、なんてくだらない事で揉め始めて」

「最初に皆に声をかけた私が……このザマだからか」

「いや悪い。そういう意味で言ったんじゃないんだ。ただ伝書猫をくだらない連絡のために使いつ走りにしてるのが少し面白かったり——まあ少ない仲間だし、気楽にやっつていこうと考えてはいるよ。その点だけは皆の共通認識だ」

ケラケラ笑う長月は、武蔵には確かに気楽で楽しそうに見えた。

「気楽に……ひとつ聞いてもいいか」

「どうぞ何なりと」

「聞いていると、長月たち——洞観者は皆、私の醜態を知っているのだろうか？ あれは簡単に片付く話では」暗い顔になりつつあった武蔵を、長月は「猫、武蔵の顔をモフれ」と言っつて強制的に黙らせた。

「おふっ!」茶猫が武蔵の顔面に張り付いた。

「医者も言っつてただろう。何も悪いことはしてないんだから気にする必要はない。あんたに何の情報も回らないのは誰かが止めてるからじゃなく、私ら洞観者でケリをつけたからだ。解決済みだ。……というかそれが、私みたいいな小娘も『洞観者』なんて大仰な肩書きを持つ決意とかアシン伝説みたいな話に繋がったんだが……まあ、元を辿ればあんたが最初の洞観者つてことになってるしな。うん、確かに変な話といえれば変な話だ」

意味ありげに言っつた長月だったが、武蔵にとってはそれよりも、自分と同じくルールから外れた仲間たちがいることが嬉しく、ずっと重くのしかかっていた肩の荷が下りたような気がした。

洞観者。それは艦娘とは言い難い難い尋常外の在り方を肯定する徴のようだった。

「詳しい事は回復具合を見ながらぼちぼち話していくよ。ああ、自分で調べようとしても無駄だからな。情報とかアリバイとか、そういうのを弄るのが得意なヤツがいるんだ。マジで。あんたの姉妹艦、国の

英雄『撃沈王』ですら真相には辿り着けないだろうよ」

—【 6 】—

武蔵が艦隊の者らと談笑できるまでに気力を取り戻して、さんざん思わせぶりなことばかり言っていた長月はようやく語り始めた。武蔵が茶猫に助けを求めて長月と出会ってからおよそ半年が過ぎていた。

「『インガオホー』というコトワザ？ を聞いたことある？」この日も見舞いに来ていた長月は尋ねた。週に一度の見舞いは彼女らの恒例となっていた。

「……『因果応報』という四字熟語なら知っているが」

「だよなあ。私も未だに意味は分かってないんだが、つまりアトモスフィアはそういうことらしい。マツポーの世はナムアミダブツ、慈悲はない。だがアイサツだけは忘れてはならない。古事記にもそう書いてある」

「ますます意味が分からんぞ」

「うん。言っておいて何だけど私も未だに分からない。……分からないまま作戦に駆り出された私も実際バカにされてたのか？ あの時はバカバカし過ぎて逆に痛快だったけど、なんか今になって腹が立つてきた」

「私は洞観者そのものが心配になってきたぞ……大丈夫なんだろうな？ まさか本当にアサシン伝説めいたオハギで頭をやられて……あれ？ なあ私は今何か変な……？」

—【 7 】—

リハビリがてらの鎮守府近海警備を終えて帰投した武蔵を、長月はニヤニヤしながら迎えた。余所の艦隊所属の見舞客もすっかり武蔵の話し相手として歓迎されてすらいた。

「どうだった、洞観者としての初の出撃は？」

「……お疲れ様、くらいは言ってくれないものか」

「ん？ ああ、お疲れ様。で、どうだった？」

「見ての通りだ。駆逐艦如きに装甲を破られるなど恥ずかしさで轟沈しそうだったぞー！」

「駆逐艦の私を前にそんなこと言うかね」

「小口径砲をモノともせず戦ってこそその戦艦なのにこのザマだ！」

ひしゃげた砲塔を気怠そうにゴリゴリ引きずる武蔵だった。出撃前に忠告した長月も、練度測定不能の大戦艦がはぐれ深海棲艦に大破させられた様を実際に目の当たりにすると、洞観者の危険性を嫌というほど思い知らされるようで逆に笑えた。

「……長月の言った通りだった。艦装も今までの経験も嘘みたいだ。半年前までピアノを弾いていたと例えると、今は鍵盤を奪われた代わりにハンマーを渡されてモグラ叩きのように弦を直接殴打して演奏している気分だった。猫踏んじやったを弾くために腕が何本必要になる？」

「猫の機嫌は損ねないほうがいい。私ら洞観者は特に」

「長月も私と風呂に入っただけ。猫の情報網でこの症状について掴んでいるんだろう？ 笑われてばかりじゃ面白くない。全部話してもらおうか」

「戦艦と長風呂は嫌だなあ……」

余所者でありながらタオルやシャンプー、着替えまで借りられるほど馴染んでいた長月は渋々、武蔵と並んで湯船につかった。身長差・練度差があまりに大きく、他の者から見ると、長月は武蔵に憧れてくっついて回る小娘のようで微笑ましかった。

「……とは言ってもな、分かっていることなんて『全然分らない』くらいのものだ」

長月は温かい目で見られるのが嫌で、頭に乗せたタオルを額までずらして目を覆い隠した。

「私も他のヤツらもあんたと同じように、最初は戸惑った。進水のやり方を忘れたとか兵装をどうやって装備してたかも忘れた、なんて話もあったくらいだから、戦って、勝って、帰ってきたあんたはマシな方さ」

「……帰ってこなかった者もいるのか？」

二人は他の者には聞かれないような声をひそめた。

「今のところは聞いてない。ただ轟沈したヤツは基本的に無口だからなあ」

「それはそうだが……」

「洞観者を見分けてくれる猫に伝言を託して全国に注意喚起する他にないのが現状だ。あんたはさつき自分の性能をピアノに例えただろ？ これも才能というか性質というか、個人差が大きくあるらしい。

『エイムアシストが切れたみたいで燃える』なんて呑気なヤツもいれば『深海棲艦が幽霊にしか見えなくなっただけ怖い』ってヤツもいる。『軽巡だけど装備枠をいじつたら戦艦の主砲を装備できた』とか『潜行は苦しいから潜水艦やめて空母になりたいと思ってたら航巡になった』とか、もうメチャクチャだ」

「そう言う長月自身はどうなんだ」

「私？ ……は、言っても信じないと思う」

「今こうしてゆっくり風呂に入っているのは長月のおかげだ。今更、私がお前の何を疑えと？」

「じゃあ……私があんたに初めて会いに来た日のこと、覚えてるか」
「忘れるはずもない」

「あの時点では世界の欺瞞を洞観したヤツらは繋がったばかりで、正直なところ遣いの猫が目の前にいても半信半疑だった。正確に言うところ、猫に助けを求められているのを信じるか、深海棲艦の罠なんじゃないかと疑うかだ。他のヤツがどれほど深読みしてたかは後にならないと分からなかったが、比較的鎮守府が近くて、かつ腕に覚えのある私が無視するわけにはいかないだろうと考えた。独断で動くのだから艦娘としての装備は使えないし、この鎮守府の警備は厳しい。敷地に入って包丁一本をくすねるのが精一杯だった」

「あの時持っていた包丁は……」

「あんたならどうする？ 猫を遣わす魔女のような深海棲艦がいるとしたら、そいつは間違いなく鬼姫クラスの脅威だ。もしそうだとしたら敷地内を歩くヤツらはどうだ？ 乗り込んだ泊地が既に絨毯爆撃で焼き払うべき土地に成り果てていたとしたら？」

「あのな。確かに長月くらいの練度の艦娘が無人島の木と深海棲艦を見間違える報告は少なくない。だがこの本土に敵が踏み込んだ可能性があれば、少なくとも私の姉妹艦たる大和が偵察に来るくらいの柔軟性はあるぞ。ましてや私の鎮守府がゾンビパニックになったと聞けば大和は……む、どう反応するかな」

「まだまだ学び足りない駆逐艦なりに答えを出したよ。普通のやり方では対応不可。だから私一人でやると決めた」

「……助けて貰っておいた身ではあるが、これだけは大先輩の戦艦からの忠告として聞け。大規模作戦つてのはな、敵の大部隊を叩くために立案されるものだが、大将の鬼姫クラスの強さは単体でも尋常じゃない。連戦につぐ連戦で頭のネジを二・三本なくした艦娘でもな、前に出過ぎてうっかり姫と鉢合わせしてしまった時は立ち竦むほどだ」

「へー。バンザイ突撃も考えものだな」

「真面目な話だ」武蔵の声は少し大きくなった。「その馬鹿者は気圧されたんだ。姫の姿を間近でハッキリ捉えて格の違いを悟ったんだ。馬鹿者は勝手に人質になって棒立ちするわ姫は面白がって放置するわ……あんな戦場はもう勘弁願いたい」

「……悪い。その馬鹿者つてもしかして……」

「ん？ ああいや私はそんな無様な真似はせんよ。それに、その馬鹿者は反省して後に撃沈王と呼ばれるようになって、十分すぎるほど汚名返上を果たしたからな。とにかくだ長月、絶対に深海棲艦を侮るな。今のところ我々は格の違いを戦術戦略で補っているに過ぎないことを知っておけ」

「……………」

しばらく黙りこんだ長月は唐突に「あくもう無理。のぼせそう」と湯船から飛び出した。

「おい長月、私はお前のことを思って——」

「だから言っただろ。私の言うことなんて信じないだろうってさ」

長月が急にツンツンし初めたのは新米によくある反発心だろうと武蔵は思い、先に洞観者としての長月はどうなのかと聞いたことは忘

れてしまっていた。

湯船から出た少女の体は小さい。今更になって、このような少女が戦場に立たなければならぬ世界に腹を立てる武蔵だった。

「武蔵。戦艦として万全に動けるようになったら私の艦隊に演習を申し込め」

「はっ」

「その時には相手を睦月型八番艦・長月一人と指名しろ。リハビリに付き合わせるだけでも言えればいい。できるだろう？」

「いや、できるだろうが……」

「あんたの見舞いはもう必要無いだろう。次は海の上で会おう。とうか姉妹艦の中で私一人だけ外出のし過ぎで練度が低いんだ。数字に意味は無くなったがレベルが低いってのはなんとなく嫌だし、何よりあんたに甘く見られるのも、理解できても面白くない。演習で本当の『格の違い』ってヤツをたっぷり教えてやる。それじゃあな。せめて全盛期の八割くらいは力を戻しておいてくれよ。できるだけ沢山の経験値が欲しい」

「お、おい長月……」

浴場から出ていく長月を武蔵は追いかけようとしたが、仲間はまだ修復中だと湯船に押し戻された。

— 8 —

それから一週間後、武蔵は言われた通り長月との演習をセッティングした。

『……随分と早かったじゃないか』開始前に無線で長月が言った。『ピアノの弦をハンマーで直接叩く演奏法、まさか会得したのか？』

「ああその通りさ。猫踏んじやつたくらい今や朝飯前だよ。何せ私は大戦艦、武蔵だからな。むしろピアノの構造を熟知した分、全盛期を超えたと感じているくらいさ」

『そりゃ良かった。じゃあ私に艦装をバラされても修理できるな』

「ははっ！ その自信の元を見せて貰おうか！」

この言葉から数分後には艦装の80%以上が損傷どころか海中に

沈められてしまい、喉元に包丁を突き付けられているのだから武蔵は
たまらず息をピタリと止めたまま両手をゆっくり上げた。

「……降伏するついでに謝罪する。格の違いを見抜けない愚か者は私
の方でした。ごめんなさい」

心から長月を認める他になかった。

対する、まったく無傷の長月は自分の頭よりも高い位置にある武蔵
の喉から包丁を引き、年相応の少女らしく満足気だった。ドヤ顔だっ
た。

「そうそう、この包丁はあなたの鎮守府から借りっぱなしだったんだ」

「包丁くらい構わないが……お前のせいでロストした大和型の戦艦装
備、金で換算すると駆逐艦の装備数人分どころじゃ済まないぞ」

「うえっ!？」

「くくっ、冗談ではないが冗談だ。戦争には強さ以上に金が要る、とで
も言っておかないと私の完全敗北で帰って泣きそうだったからな」

長月から受け取った包丁を武蔵は青空に掲げて眺めてみた。先程、
鋼鉄の砲塔を一刀のもとに切り落としたとは信じられない三徳包丁
である。刃こぼれのひとつすらない。

「もし私がちゃんとした武器を調達してやると言ったら長月、お前は
深海棲艦を世界から一掃してくれるか？」

「無理だ。私は戦闘はできても戦争ができないお子様だと、あんたが
さっき言ったんだろうに」

「だからあれは冗談だよ。金の話は艦隊の秘書とか総旗艦とかに任せ
ておけばいい。任務を繰り返し返せばそのうち嫌でも覚える事さ」

「……ふうん」完全勝利を狙っていた長月は不満気だった。

「しかしこの強さ、温存しておくにはあまりに惜しい。戦闘はできて
も戦争ができない、か。それは長月の認識でいい、どれくらいの程度
なら勝利を取れると思う？ 少なくとも私が鎮守府ごと深海棲艦の
泊地に変えていたとしても、中に乗り込みさえすれば勝てるど踏んで
いたのだろうか？」

しばらく俯いて考えた長月は少々真剣な顔をした。

「あんた、まだ薬は飲んでるのか？ 医者からは何に気をつけろとか

「むしろ適度なストレスも必要だそうだ。もう長月には十分過ぎるほど気を遣わせているし、好きに喋ってくれ」

「なら……単刀直入に言う。あんたを苦しめたクズ共、三人の研究員に行方不明になつてもらつた実行犯の一人は私だ」

いつかはその話とも向き合う必要があると覚悟はしていた武蔵も、やはり多少は怯まざるを得ない。それが事件性を帯びたとあらば尚更だった。

「わざわざクルーザーとかを買つて単独で海に出た可能性がある、くらいはちよつとしたニュースになつたな。理由がまるで分からないつて。あんたもそれくらいは知つてるだろ。真相はこうだ——クズ共は不正を告発される前に退職金を手にして逃げて、家族からは逃げられて、自暴自棄になつて人生最後にオリョールクルージングを楽しむべく船を買つて深海棲艦が跋扈する海に出た。勿論、仮に深海棲艦がいなかったとしても素人がオリョールまで船旅するなんて不可能だから、私の役目は搜索の目が届かない所まで深海棲艦からこつそり護衛することだった。その後は深海棲艦にやられたらしい残骸を見つけて雷撃処分。つてなわけだ。海を利用した艦娘ならではの単純な復讐だったが実際はものすごく複雑で、奸計をめぐらせるヤツらには正直、勝てないと思つたね。そういう意味で、私は戦闘はできても戦争は——」

「嘘だろ……お前、人に手をかけたのか」

「そんな怖い顔するなよ。ただ偶然、洞観者の中に大学のシステムに詳しいヤツがいて、興信所みたいな事ができるヤツがいて、セールズトークが上手いヤツがいて、音も無く深海棲艦を葬りながら船を誘導できるヤツがいて、隠蔽工作が上手いヤツがいて、ソイツらが偶然にも……なんて言つてもあんたは納得しないだろうから一言で済ませると、私らがやったのは正しい意味での確信犯だ」

道徳的・宗教的・政治的な信念に基づき、自らの行為を正しいと信じてなされる犯罪。

「それと皆、自分の手を汚したつもりもない。前に話しただろ、意味は

分らないけどインガオホーってやつだ。マツポーな世の中はナムアミダブツ、深海棲艦と同じく人類に仇なす輩に慈悲はない。頭の良いやツが確認までしたさ。撃沈王の姉妹艦とクズ共、天秤にかけるまでも——」

「もういい」武蔵は長月の話を遮った。「洞観者としてやるべきことをやった、つまりそう言いたいのだろ」

「そうだけど……理解はされないだろうなあと思ってたんだが」

「そりゃあ理解したくないが私とて洞観者だぞ。それに事の始まりは他の誰でもない私じゃないか。私が洞観者になって得た智見を研究者に提供しようとした結果がこれだ。そうだとも、やはり私が自分でどうにかすべきだったんだ」

「な、なあ。ちよつと落ち着いてくれ。あんたはまだ療養中なんだから」

「洞観者の秘密結社を作る話は今どうなっている、長月？」

「え？ あ、ああ……それならぜんぜん進展はない、けど。拠点も名前も、どいつもこいつも好き勝手に注文と文句ばかりで」

「ならば私が今日からお前たちの纏め役だ。大和型二番艦に文句はなからう。あつたとしても言わせん。お前らには常識という手綱が必要だ」

「……クズ共を退治したこと怒ってる？」

「ノーコメントだ。私も奴らの腐臭に参ったからノーコメントだ。そういうえば演習も終わりだな。帰投するぞ。長月もこっちの鎮守府に来い。早束手伝ってもらうぞ、洞観者」

「で、でも大和型との一対一の貴重な勝負だから結果を詳しく報告しろと命令されてて——」

「来なければ大和型装備ロスト分をそっちの艦隊に請求する。報告など私が直接電話でも何でもしてやる。ほら、いいからさっさと帰るぞ。思い立ったが何とやらだ」

— [9] —

『THE HANGED CAT (ハングド・キャット)』は武蔵が開

いた喫茶店であり、洞観者の情報収集・発信、補助・統率を担う秘密結社もとい秘密喫茶でもあった。

店内を飼う猫が自由気ままに闊歩し、時に店の天井辺りの窓を出入りする猫は小さな鞆を背負っていた。気取った風なコーヒーを楽しんで貰うのが店のコンセプトだったはずなのだが、やはりメニューから外せないカレーのスパイシーな香りがいつも店内に充満していた。実際カレーが『ハングド・キャット』を支えていると言っても過言ではない。

「もうカレーだけに絞ったら？ 武蔵の口替わりオリジナルブレンドは不味いんだもの。実際、飲めたものじゃないわ」

カウンターの席で茶猫を撫でながら大和は言った。

「……お前、日増しに私に対する口が悪くなっていくぞ。まだ怒っているのか」

「当たり前です」

「殴られた跡、まだ消えないのだが」武蔵の左頬は大きなガーゼで覆われていた。「ひしゃげたメガネも買い直した」

仕事は仕事、それとは別に自分の喫茶店を持つことに武蔵が多少浮かれてしまうのも無理からぬことではあったものの、うっかり開店告知のチラシを大和にも自慢気に送ってしまったのだった。開店当日、並ぶ客を無視して店に踏み入った大和は武蔵に詰め寄り、オーブン・グスタッフとして駆り出されていた長月ら洞観者数名の制止を振り切って洗いざらい吐かせた。いくら姉妹艦とはいえ大戦艦である武蔵を殴り倒して何から何まで喋らせる様は、『撃沈王』の通り名は伊達ではないと長月ですら震え上がった。勿論、開店は延期せざるを得なくなっただが、あの店には国の英雄大和や他にも艦娘が入り浸るのかと、宣伝としては十分過ぎる程だった。

「姉妹艦に今の今まで病気のこと隠してたおバカさんが悪いんだわ。ねえ猫さんもそう思うでしょ？」

茶猫も同意するように「にやあ」と鳴くものだから武蔵は苦笑するしかなかった。

「コーヒーを淹れる才能がないのはもう十分、分かったでしょ？」

……普通の艦娘には戻らないの？ 『ドーカンシヤ』はそんなに大切なことなの？」

「いくら説明しても『そんな事は知りません』の一点張りなのはお前の方だろうに」

「この店とあっちの鎮守府、往復して働くなんてそのうちまた体を壊すに決まってるじゃない。おバカな姉妹艦を心配してあげてるの。い・ち・お・う・ね」

「今ちよつと手が離せないんだ。だが未知の敵陣深くに切り込むのが仕事のお前に比べちゃあ楽なものさ。大丈夫。同じ過ちを繰り返すつもりはないし、皆が私を気遣ってくれる。それに笑えない冗談ばかりの仕事が多過ぎて逆に笑えてくる程だ」

「下手の横好きって言うものね。コーヒー飲んだお客さんが泡吹いて倒れても知らないんだから」

「……私はお前の方が心配だぞ撃沈王。世間での艦娘のイメージはお前のイメージとイコールだからな。出されたコーヒーに延々とケチをつけ続ける英雄は私ですら正直、嫌だ」

「だからこうして変装してるんじゃない」

「変装のつもりだったのか、そのメガネ」

「ねえ。さつきから裏でゴソゴソ何やってるの？ コーヒー豆いじくる暇があるなら外の自動販売機でコーヒー買ってきたほうが有意義だとアドバイスしてあげる」

「いい加減にしないと殴るぞ貴様……！」

大人しく座っていた灰猫の背中の中を閉じて「よし、じゃあ頼んだぞ」と頭を撫でた。灰猫は軽快に店内のキャットウォークを登り、天井付近の専用窓から走り去っていった。

「今のがドーカンシヤの仕事？」

「立派なドーカンシヤの仕事でありお前にも関係する。——誰にも説明しようのない事だから姉妹艦の勘と思って聞け。例のダメコンを装備したまま沈みもせず遺体で発見された艦娘の件、深追いするな。あれは彼女が洞観者、つまり例外だったからである可能性が非常に高い。だから間違っても全艦隊にダメコン云々の情報を漏らしたりす

るなよ。注意喚起なんてすれば士気戦力はガタ落ちだ」

「……不味いコーヒーがもつと不味くなる話をここでする？ その話に耳を貸すなら武蔵、あなただけじゃなくて他のドーカンシヤさんも同じ危険性を抱えてるってことにならない？ いま嫌な映像が頭に浮かんできそうで気持ち悪いんだけど」

「だから気をつけるよう猫で情報を発信している。仲間が身をもつて炙り出した問題だ、決して無駄にはせん」

「猫で、ねえ……」

「名簿すら作成困難な状況でな。猫の感覚だけが頼りなんだ」

「私、艦娘の俗っぽい風習とか噂話には疎いけど、どの鎮守府でも鼠と同じくらい猫も忌避されてるんでしょ？ それくらいは知ってるわ」
「まあ確かにな。だが逆にこれほど頼もしい味方もいない。事実、私はその茶猫に救われた。——お前には本当に感謝しているよ」そう武蔵が投げ掛けても茶猫は気持ちよさそうに大和に撫でられるばかりで反応しなかった。

「ところで大和。お前がこうしてタダで不味いコーヒーを飲めるのは、私がお前に頼み事をしているからだっただけだ。そろそろ良い返事を聞きたいものだな」

「あのねえ。バスタードソードみたいな日本刀を作れと言われて簡単にヨロコンデーって誰が言えると思う？ 申請の理由をでっち上げてねじ込むだけでも三週間かかって、気が付けば大口径砲開発くらいのビッグプロジェクトになっちゃったわ。納期十五ヶ月とかふざけたこと言われて短縮するよう交渉中」

「そのでっち上げた申請すら甘い見積りになるぞ。三徳包丁ですらアレだったしなあ」

「それもドーカンシヤ？」

「そう。ドーカンシヤ」

「自分で使うわけじゃないのよね」

「お前が私を殴りに来た日に会っているはずだぞ。見た目は子供、強さは化物だ」

「少年漫画じゃないんだから、もう！」

第31話 叢雲の薬指 — 海花と海鳥 ②

◆ — ここまでのあらすじ — ◆

カレンダーズ魚釣り大会の最中、長月は射撃場の影より偵察を試みる一人の間抜け陸軍人の姿を発見した。

巧み極まる嘘によりカレンダーズに悟られないよう避難させた長月は、執務室で働いていた秘書艦の電に速やかに報告、そして欠伸をしながら自室に戻った。

「面倒臭そう」という合理的帰結により長月の肅清を免れ、知らずのうちに命を拾ったスパイ、あきつ丸の運命や如何に!?



一ノ傘が過酷采配を振るう本陣である総合棟は四階、第二執務室その窓から、四つの銃口と四つのレンズがそれぞれ対となって窓の外を油断なく睨みつけている。なるべく窓からの露出を減らすようと体を壁に隠し、部屋の主の一ノ傘と秘書艦の球磨、隣室から作戦計画を練りに来た竹櫛と秘書艦の電は、今や気分は超一流スナイパーだった。ガラス窓は閉めている。この時間帯で監視のみが目的ならば外の光が反射して室内を隠してくれるだろうという判断である。

言うまでもなく四人のターゲットは陸軍の侵入者であり、もう一つ言うまでもなく四人が構えているライフルはエアソフトガンである。BB弾がポスポス出る。

侵入者は全長約2キロものレンズを誇る射撃試験・演習場の最尖端に隠れ潜んでおり、視力が悪くもなくも優れもしない竹櫛・一ノ傘では、言われてようやく豆粒のような何かに気づける気がする程度である。射撃場を建てた責任者の竹櫛自身が「誰だ2キロも必要などと話を盛った者は」と憤慨した。

「それにしてもすごいのです。この部屋みたいに高くもない場所からよく見つけましたよね、長月」

【電：Lv. 109 ↓ 114】

電が言う通り、いくら侵入者が間抜けであるとはいえ、秀でた視力とそれに勝る勘なくしては発見できない位置である。距離が距離なだけに相手が伏せているとあらば尚更その姿を捉えるのは難しい。

「特に菱餅のような小物を探すなら視力は大切ですものね！」と4コマ漫画第5巻78話を読んだ電は柄にもなく、大和を相手に八つ当たりしたこともあった。

秘書艦・電が連絡を受けて竹櫛は窓から確認しようとするも、自分の双眼鏡を紛失してしまったため、一ノ傘の部屋にあるライフル・スコープを借りるついでに対策会議を開くことにしたのだった。双眼鏡など不要だ（から失くした）と無駄に胸を張って威張る竹櫛を無視して一ノ傘は電から事情を聞くと、コレクションであるライフルを四丁用意した。

「おい一ノ傘。このスコープの倍率はどうやって変えるのだ。赤い点の明るさしか変わらないぞ」

竹櫛が構えているライフルはカービンと呼ばれる比較的短めなサイズの銃である。

「やっぱ知らん人は知らんもんやねえ、ダットサイト。それ倍率ないよ」

ほくそ笑みながら一ノ傘はDMR（デジグネイトされたマークスマンのライフル。つまりカッコイイ）に乗せた高倍率スコープを覗いている。重量が多少あるため一人だけ机を窓際まで引っ張ってきてバイポッドを立て、楽々と目標を見据えている。

「遠くまで見えるやつを貸せと私は言ったはずだが。倍率のないスコープに何の意味がある」

「そら勿論、はじめてダットサイト覗いた人の反応が楽しいけん」

「貴様つ……お前が何と言おうがスコープの形をしているのだから見えるに決まっている。この怪しげなネジを調整すればよいのだな」

「ああっ、やめてそこは触らんでゼロインやり直し面倒なんやから」

「……竹櫛司令、電は望遠鏡なくとも大丈夫なので、コレ使ってください」

まったく緊張感のない提督と副提督に少々呆れながら電が差し出したのは、たいへん軽くて扱い易いボルトアクションライフルに適度な倍率のスコープを乗せたものである。

「肝心の提督が遊んでたら作戦会議もへったくれもあつたもんじやないクマー」

【球磨：Lv. 78 ↓ 95】

一ノ傘の隣で球磨が構えているカービンライフルは竹櫛のものは種類が異なる。光学機器はホロサイト+4倍ブースターというチョイスであるものの、電と同じく目視できる球磨はレンズの歪みを嫌ってブースターを銃の横に倒して、ダットサイトを贅沢にしたようなホロサイトを通して監視している。四人の中で最も遊びに興じているのは雰囲気だけ真面目な球磨と言えた。

一ノ傘と球磨は仲良くサバイバルゲームに興じる間柄であり、一ノ傘のメインウエポンは気分によりけり、球磨はまさかのゴム製ナイフを使う。意外すぎる優秀さを発揮した球磨に遊戯のフィールドはあまりに狭く、本気でゲームに臨めばガン⇨カタの世界よろしく敵陣がゾンビで溢れてなお壊滅してしまい、女性ゲーマーを手放したくないフィールド運営者を悩ませてしまうのだった。その妥協点がゴムナイフなのだが、なおも強すぎる球磨は畏敬の念を込めて『リアルナイフアー・クマさん』と地元では呼ばれている（仮にガン⇨カタを極めた者がいたとしても、球磨のような素の可愛さでも持ち合わせていなければ村八分にされた挙句インターネットに晒されるだけなのだ。紳士性が問われる遊戯での露骨な技術・装備などの誇示は控えたほうが賢明かもしれない）。

それはさておき、竹櫛が電に手渡されたライフルのスコープを通して侵入者の黒色の味気ない制服を辛うじて確認できて、ようやく会議の本題に入ることができた。

「陸軍か何か知らんけどさ、敵対行動するヤツに侵入された時のために皆で訓練までして備えといったワケやん？ まさかの二回目が来たのは驚いとくとして……マニュアル通り動く？」

この鎮守府は過去に一度、一ノ傘の命を狙われる形で人間一人と深

海棲艦（のなりかけ）一人の侵入を許したことがあった。詳しくは【叢雲の葉指】——来訪者】を参照されたし。その時は竹櫛と叢雲を人質に取られるも、

リアルナイフアー球磨

着任から初となる戦果を上げた日向

艦隊の頭脳と言われた霧島

この三名の活躍により無事に状況を打開することができたのだった。

とはいえ過去の事例は過去の偶然に過ぎない。次の刺客も球磨のナイフや霧島のメガネパンチで撃退されるまで攻撃を待ってくれるとは限らない（ましてや隙を作ったのは日向が遊びで飛ばしていたA—10サンダーボルトIIの奇跡的な事故だった。この事実は最上しか知らない）。一発のちやちな銃弾であつさり昇天してしまう事実を痛感した竹櫛と一ノ傘は万が一に備えるべく、敷地内での脅威への対策マニュアルを作成し、それに基づいた訓練も入念に行つた。竹櫛と一ノ傘と、指揮官が二名いるためどちらかが残念なことになった場合は言うまでもなく、あるいは二名とも残念なことになってしまった場合は叢雲ないし電が代理として指揮を執る（このあたりから叢雲は『総旗艦』と呼ばれるようになった）というものである。指揮系統が機能しなかつた前回の反省が生かされた。

「艦隊は深海棲艦を敵とみなすべし。拡大解釈して敵を見つけたらそりゃあ深海棲艦である」一ノ傘は平然と個人的解釈を言つてのける。「じゃあ海も陸も関係なく問答無用で沈めるべし。仲間がやられてからじゃ遅いけんが、いつものように主砲ぶつ放そう。海より狭い敷地やけんフレンドリーファイアにだけは気をつけようね」

「待て一ノ傘。私はそのようなハードラインマニュアルを作成した覚えはない。勝手な解釈を加えるな」と竹櫛は反論する。「機動力も何も無い陸では徹底して艦娘としての装甲を固めるのが最優先だ」

「そんな呑気なこととしてられんクマ」ライフルを構えながら球磨は指揮官二人を横目に見た。「臨機応変クマ。各自が最善と思うことをしろつて命令だつたクマ」

「なるべく穏便に、だったと思うのです」とは電。「葛城さんみたいにお話すれば分かり合えるかもしれないから、説得とか交渉とかを試みる訓練をしませんでしたっけ？」

「いや電、それやとまず私が殺されてしまう。交渉するのはまず相手を無理にでも席に着かせてから——」

しばらく四人はマニュアル化されたはずの対応をめぐり今更ながら言い合った。

実際のところはどのようなマニュアルであったかと書類棚の奥に埋もれてしまったファイルを引っ張り出すと、四人の言い分それぞれが記載されている。マニュアルに思いつくまま詰め込み過ぎてしまった結果、今更になって冷静に思い返すと各々が好き勝手に内容の一部分を切り取ってしまう有り様だった。量も種類もてんこ盛りのマニュアルは正規空母の弁当レシピに近いものがある。

襲撃された直後は竹櫛と叢雲が命の危険ギリギリに晒されたこと、葛城の鮮血に染まった会議室を見たことから、誰もが事件を重く見て積極的にマニュアルの作成と実践に臨んだものである。仮想敵に扮した山城（ジャンケンで決まった）が精一杯、悪役らしい身なりをして、

「えー……そのー……ザツケンナコラー！」

なぜヤクザスラングを叫ぼうと思ったのかはさておき、目前に現れたフコウ・ヤクザに今度こそ我等が鎮守府で好きにはさせまいと全員が本気になった。正規空母たちは襲撃当日は営倉にいたくせに弓を過剰な力で引き、カレンダースはナイフを構えた球磨の後ろに隠れてぶるぶると小動物のように震え、とにかく誰もが切迫感に背中を押されるまま本気で何かをした。唯一される側に回った山城からすればたまったものではなかった。

このようにして零から作成されたマニュアルであったので、内容の充実は過剰気味になってしまい、マニュアル完成・訓練終了からひと月かふた月もすれば、指揮官の二人も含めたほぼ全員が全貌や詳細を忘れてしまう体たらくだった。



「……で。マニュアルの事は一旦忘れて、今々はアイツを何とかしないクマ?」

球磨に似合わないまともな具申をできたのは、竹櫛と一ノ傘が言い合いの末に始めた責任のなすりつけ合いが非常に見苦しかったためでもあった。

秘書艦の二人にカツコイイ大人などころを見せたい二人は咳払いをして「う、うむ。そうだな」「そうやね。さてと」チクチク突き刺さる球磨と電の視線を我慢する。

艦娘の二人は目視できる分だけ、たとえ阿呆らしそうではあっても侵入者から感じる脅威は大きいという理由もあつてやや緊張気味である。

「あの、本当にすぐどうにかしたほうがいいと思うのです……今日は誰も射撃場にいないですけど、なんだか寮の屋根にスズメバチがとまってるみたいな気分なのです」

「クマもそんな気分クマ。正直なところ、気付かないほうがよかった早くどっか行つてほしい、とか、危害が及ぶ前に主砲ぶつ放してしまいたいクマ。とゆーかココが海上なら躊躇無く砲雷撃戦を始めてるクマ。横つ面を強襲された距離クマ。大井の性格なら敵影を確認する前にとりあえず魚雷ばら撒いて水柱で索敵しようとするクマ」

攻撃的な秘書艦二人に横からせつつかれ、しかし指揮官二人の反応は鈍い。

「鎮守府で気軽にドンパチさせないための射撃場なのだ。いいか誤解はするなよ? 私は決して強行路線を執つて責任問題が発生するのを恐れているわけではない。断じてない。なあ一ノ傘、このエアガンで威嚇射撃を行うというのはどうだ? 安易な武力行使に踏み切らないのが日本人の美德であろう」

「今だけは竹櫛に同調したいわー。でも残念やけどエアガンの有効射程ってせいぜい50メートルなんよ。本物のライフルがあつても2キ口はふつう無理。威嚇するなら日本刀と対決して勝つたつていう

マシンガンくらいは最低ほしいとこやね。それ以上は艦娘に出てもらったほうが早い」

「難しいか。では探照灯はどうだろう。まだ日中だが、だからこそ適度な明るさが、こう、目にやさしく、後になって失明の危険がなどと、いや私は決して後の責任追求を恐れているわけではないのだが」

「おお、それナイスアイデアかもしれない。じゃあ……まず実験してみん？ 射撃場でどれくらい効果があるか確かめんと」

「そうだな。そのための射撃場だからな。両端に誰かを立たせて――」

これぞお役所仕事の真髄、最適かどうかは不明であるも不適切ではない対応を取りつつ視界の端で様子を窺いできれば時間が解決してくれるのを待つスタイルである。つい先程まで侵入者に仏の慈悲など不要と言わんばかりに強行路線を語っていた元ブラック艦隊提督までもが一転して弱腰になってしまったものだから、電と球磨はいっそう呆れるばかりだった。竹櫛の少し情けないところも好きと言う電でさえ閉口してしまい、一ノ傘の遊び友達として球磨はお前そんなんでいいんクマ？ とビンタで目を覚まさせてやりたい衝動に駆られた。

「球磨さん、どうしましょう……」

「……クマが何とかしてみるクマ。今度こそ敵に何かされる前に何とかしたいとは思ってたクマ。すっごい不服なのは置いとくとして……。電は射撃場に誰も近づかないよう見張ってほしいクマ」

「ごめんなさい球磨さん一人に危ない事を……よろしく願いますのです」

球磨が窓を開け放って一歩踏み出しそのまま外へ、四階の高さがあるにもかかわらず躊躇無く身を躍らせても、話し込む指揮官はまるで気付く様子はない。

「探照灯で照らす役はやはり古鷹ちゃんが適任であろう」

「じゃあ照らされる役は青葉で決まりやね。眩しかったら『ワレアオバ』つつつて」

「うむ。――いや待て。古鷹ちゃんが強力に照らしている先から発光

信号を送られても見えないのではないか？」

「ああ、そうかもしれん。じゃあ、そうやねえ……逆に眩しくない間ずっと『ワレアオバ』させるのは？ 『ワレアオバ』が途切れたら成功、って」

「なるほど。今日は頭が冴えるな一ノ傘。では早速、今から古鷹ちゃん働けるかを確認するでしょう」

「じゃあ私は青葉に——」

「……あのう」と電は、2キロも続く射撃場のゆるやかな三角屋根の頂点をニンジャの如く軽快に駆けてゆく球磨を見ながら話に割り込んだ。

「お二人の理屈だと、照らされてる間は『ワレアオバ』が途切れたかどうかも確認できないと思うのです」

阿呆二人はしばらく固まった後、「確かに」と鹿爪らしく頷いた。電はイラツとした。

「盲点であったな」

「さすが私の電やね」

「ではどうする。青葉にも同じ明るさの探照灯を装備させるか」

「ここはもう叫ぶのがいいんやない？ 『ワレアオバ……』て」

叫ぶなり電話なり無線なり好きにするのです。そう頭の中にだけ留めておいた電は、阿呆二人が球磨の邪魔をしそうにはないことだけは良しと逆に考えることにした。



球磨が射撃場の側面にある簡素な通路ではなく屋根の上を走るのは、なるほど侵入して来た陸軍人に見つからないようにかと電が気付いたのは、球磨がそろそろ目標と接触する距離まで到達しかけている頃だった。

ナイフを構えた死神が猛スピードで接近しているというのに陸軍人は気付いた様子もなく、相も変わらず鎮守府の様子をうかがってばかりいた。ずっと電たちに観察されているというのに逃げるでも隠

れ直すでもなく海面に匍匐したまま、そろそろ顔面を打つ細波に耐えかねたらしく首をやや上げたくらいの変化しかなかった。

もしかして陸軍の彼女は単なる情報収集などではなく別の目的を持っているのでは？ そう考えるのと同時に電はもう一つ懸念した。

「球磨さん、どうするつもりでしょう」

「うむ」「ねえ」と相槌を打つ竹櫛と一ノ傘は、電の梅雨前線の如くジツトリ湿った視線に耐えかねてライフルスコープの筒内世界に隠れ場所を求めた。

どうするかという点については、どうもこうもなかった。

至極当然クマ、と2キロ先から声が届いてきそうなほど慣れた手際で陸軍人を強襲した球磨は、手を後ろに縛ってとっ捕まえてしまった。セーラー服のスカーフは球磨に言わせれば装飾にも包帯にも手錠にもなる便利グッズである。射撃場の影になっていたため第二執務室からはその様子は残念ながら見えなかったものの、球磨が屋根から飛び降りた約十秒後には陸軍人を捕獲して側面通路に出てきたものだから、見守っていた三人にはハラハラする暇もなかった。

捕まえた陸軍人に前を歩かせて球磨は「おいクマー」と2キロ先から呑気に手を振った。「カブトムシ見つけたクマー」と無邪気な台詞でアテレコされても違和感がなさそうだった。

「竹櫛さあ」

一ノ傘がぼつりと言った。

「この鎮守府の警備、もう球磨ちゃん一人に任せん？」

「今日はやたらと気が合うな。私も今、同じことを考えていた」

「もう！ お二人ともそろそろ他人事スタイルはやめにしとくのです！」



長い長い射撃試験・演習場は工廠から生えるように建造されており、開発された主砲などをすぐにテストすることができる。性能評価も各種訓練も可能な合理的施設は必然的に予約の奪い合いが生じる

殺伐空間でもあり、今日のように砲撃音や喧嘩の音が聞こえてこない日は珍しかった。

電は念のためにと工廠に転がっていた小型砲を掴んで球磨を迎えに走った。竹櫛と一ノ傘は射撃場外壁の側面通路の始点で待つことにした。先程まで警備責任のなすりつけ合いをしていた二人とも偉そうにふんぞり返っている。一ノ傘は竹櫛を盾にしている。でも工廠内に逃げ込めるように通路と工廠を隔てる扉から離れなかった。

側面通路は簡素で頼りなく、戦艦数人が艤装を背負って歩くだけで壁からもげてしまいそうだった。ただ点検などのために、鉄柵が水平線まで届きそうなほどダラダラ続くばかりである。

長い道のりをはるばる歩いてきたクマ警備と先行した電は、まさしく陸軍の者を連れて来た。

声が届く距離まで近づき、竹櫛と一ノ傘がツバを飲み込むと、後ろ手に縛り上げられた者はまったく唐突に叫んだ。

「この『あきつ丸』の目は誤魔化せないであります！」

【あきつ丸：Lv. 38】

あきつ丸と名乗る阿呆陸軍人に臆した様子はなく、むしろ何処か知れない所から湧いてくるらしい自信を糧として竹櫛よりも偉そうな表情をしてすらいた。天照大艦隊の周囲に現れる阿呆はだいたいが偉そうであるとはいえ、他所様の敷地に侵入しておいて捕まり手を縛られて、なおも偉そうな態度を通してくるとは四人の予想外だった。竹櫛と一ノ傘、電、のみならず楽々と捕らえたクマ警備ですら僅かに怯んでしまった。偉そうな阿呆に弱腰の態度を見せればさらに増長させてしまうと経験から学んでいる四人の、これは迂闊だった。

案の定、四人の狼狽に勝機を見出したあきつ丸は、この場で畳み掛けて圧倒的優位に立ってしまおうと、用意していた切り札を早くも切るのだった。

「いくら隠蔽しても自分の力号は真実を暴くであります！」

力号に索敵値は設定されていないが、細かいことを気にするものではない。

「確かな情報を掴んでいます——この艦隊では『葛城』と名乗

らず、敢えて戦果を独り占めすることで第六駆逐隊の気まずい雰囲気をも吹き飛ばしたのだった！

これぞ天照大艦隊の最高練度が魅せる機転！

「ハラシヨ―……美味しいところを奪ってくれるじゃあないか」

響は皮肉混じりに言った。

「あら悪かったわねえ。それじゃお詫びに一杯奢るわ」

ステージを降りてゆく四人の姿を、観客席の数人は確かに見ていた。

その輝かしい絆を！

ユウジヨウ！

「あ、次ですか？ ……えっと、頑張ってください……なのです」

しかし、去り際の電に声をかけられた山城ただ一人だけは、そんな第六駆逐隊の姿を忌々しく思った。次は彼女がステージに上がる出番である。果たして第六駆逐隊が大成功を収めた後で、彼女の一発芸『扶桑姉さまモノマネ』く六月の幸運編』は笑いを勝ち取ることができらるだろうか。

第32話 叢雲の薬指 — 海花と海鳥 ③

沿岸から人の目が届かないぎりぎりの航路を、睦月はやかましい陸軍人に先行して気怠そうに進んだ。睦月の鎮守府と葛城がいる鎮守府を結ぶ一時間程度の連絡航海が、これほど憂鬱だったことがあっただろうか。

「此度はアウェイであったからの転進であつて、これは自分の確な状況判断によるところだったであります。そこを駆逐艦の君、勘違いされては困るのであります」

「そうですね」とプログラムされたような返事をした睦月は追いかけてくる雨雲を見上げた。遠くの方では既に雲から霧を落とすように雨が降っており、自分たちと雨脚のどちらが先に葛城の鎮守府に早く着くか微妙なところだった。

睦月は案内とそこまでの護衛をしてやれと命令されただけで、到着後の面倒まで見ろとは聞いていない。あきつ丸を葛城に引き渡した後は兵装を仮置きさせてもらつて陸路で帰ることにした。

「時に君。例の偽葛城とは顔見知りでありますか」

あきつ丸は葛城のことをずっと偽物呼ばわりしていた。

「偽物じゃないです」睦月は少しムツとして振り返った。

「葛城さんはいい人だつて天照隊のみんなが知ってます。睦月も作戦とか訓練とかで何度もお世話になってますから。それに葛城さんは、あの『撃沈王』大和さんと肩を並べて戦つてるんですから」

大和の名前を出して睦月は少し得意気になる。

「やはり戦力的な問題は撃沈王でありますな。自分が下調べした通りであります」

「他の仕事と掛け持ちだから今日いるかは……いま戦力的って言いました?」

「撃沈王が偽葛城サイドに付いたとなると厄介であります。対するこちらの戦力は自分と駆逐艦が一人。やはり実力行使を避けるため情報を武器に揺さぶりを——」

「ストップストップ! 諸々を置いておくとしても睦月はあつちに着

いたらすぐ帰りますよ!？」

「不思議なことを言うでありますな。君は自分の護衛であります。人の間違いに漬け込み、補給満タンの対価として装備を身ぐるみはがされ無防備な自分を守るのが仕事。そう、つまり君は貴重な装備であった力号の分だけ働けど、あの悪魔のような副提督に命令されたはずであります」

虎子を得ようとするも虎穴の隣にあった熊の寝床に間違えて入ったのは自分だろうと睦月は言い返したかった。しかしあきつ丸は捕らえられた時から相変わらずの絶好調だった。自分の落ち度とて元を辿ればすべて海軍や葛城のせいだと言わんばかりの様子である。

「それにこれは君にとっても幸運な話であります。内部告発は事情とか私情とかなかなか難しい事ではありますが、潜入している深海棲艦と匿う者たちを白日の下に晒した正義の駆逐艦として、新聞の一面を飾りたくないのではありませんか」

「……どうして葛城さんのこと、そんなに悪く言うんですか」

「む。新聞ではなくテレビのほうがよかったですか。それとも今時の若者はユウチュウブ派でありますか」

「睦月は名声とかそんなの欲しくありません!」

「これは自分の上官の教えでありますか」とあきつ丸は前置きして言った。

「深海とは宇宙にも等しいのであります。海と陸は海岸という境界で隔てられており、海岸を超えて海上に人が——艦が進出するのはアポロ11号が月面を踏んだ程度の些事ではない。即ち深海棲艦とは太陽系の遙か遠くから襲来しているようなものである。我々に果たして原始的返答以外の何ができようか。鉄と鉛と火薬だけが言語なのか。理解を深めるために、しかし深海はあまりに暗く恐ろしく、そして恐れるべきである。この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在することを。——さあ。急ごう、であります。雨が降る前に到着したいところでありますな」

あきつ丸は僅かに速度を上げて睦月の前に滑り出た。

睦月は得体の知れない宗教団体の標語を押し付けられたような気

分になり、黙つてあきつ丸の後に付いて行つた。もう案内役の睦月が先導せずとも進めば目的地が見えてくる距離だった。

二人は『何かしら用事がある客』として、棚ぼた的に手に入れた装備にホクホクしていた一ノ傘からアポイントメントを取つて貰つていた。

鎮守府の施設が見えてきたところで大粒の雨に降られてしまい、急いで駆け込もうとした二人は、しかし同時に速度を落とした。

「だ、誰でありますかあれは」あきつ丸はここまで来てようやく恐れをなした。

「……睦月も最近会つたばかりだし、詳しくは」睦月も『あれ』がいたことを今更になって思い出し、あきつ丸を置いてこのまま回れ右をしたい気分だった。

「いやしかし君、いったい……あれは何でありますか」

あきつ丸と睦月を出迎えた一人の少女は、屈強な大男でも容易には取り扱えそうにない巨大で無骨な鉄塊、トルピードランチャーを肩に担いでいた。海上での絶大な破壊力を誇示するそれは潜水艦娘にはまるで似付かわしいものではない。

あきつ丸と睦月よりも早く客人の姿を見つけていた出迎えの伊168は、雨に濡れるのにも厭わず不敵に笑っていた。

【伊168：Lv. 150+1】

空を覆う黒雲の向こう側では、日が沈もうとしていた。



伊168は二人の来訪を歓迎した。その対応は少なくともあきつ丸が難癖を付ける隙がない程度には丁寧だった。

濡れ鼠となった二人はタオルとジャージを借りて着替えた。濡れでも問題ない水着も予備があると伊168言われ、しかし二人には冗談なのか真面目に言われているのか判断が付かなかった。

前を歩いて鎮守府内を案内する伊168の後に付いて行きながら睦月とあきつ丸はひそひそ囁き合つた。

「……なんだか怖くないですか。丁寧すぎて不気味というか」

「我々は客人でありますから当然ではありませんが……なぜロケットランチャーを担いでいるのでありますか。まさか水着にロケランが海軍式の礼装なのでありますか?」

「誰が得するんですか、そんな軍隊……」

不意に伊168が立ち止まり、二人は仲良くビクリと震えた。

「ここが応接室になります」と伊168は客人二人に言ってから扉を開こうとして、しかしわざとらしく取っ手に伸びかけた手を引っ込め、ニコリと笑顔を作った。

「誤解されては困りますが、水着はいつ何時、敵が現れても対応できるように極力着用するようにしています。それと、これはロケットランチャーではなくトルピードランチャーです。似たようなものですが、魚雷がいかに強力であるかはご存知でしょう。勿論これも緊急用ですよ。もし万一、鎮守府に人の形をした鼠などが入り込んだら——」
伊168は客人二人を舐め回すように眺めてから「困りますものねえ」と言った。



応接室は落ち着いた色合いの蛍光灯に控え目に照らされており、窓の外の暗さをいっそう際立たせている。しんと静まった室内を雨に打たれた窓ガラスが震わせた。

部屋に通される前から肝を大破させられた睦月は、しかし葛城の姿を見るなり表情をぱあつと明るくした。カレンダーズ魚釣り大会から数時間ぶりの笑顔である。天照大艦隊の中でも駆逐艦は特に正規空母葛城との協同作戦に出ることが多く、空母の護衛として付きつつも練度測定不能の熟練空母に逆に助けられることが少なくなかった。特に天照隊の食欲に支配された阿呆空母共をよく知る睦月にとって葛城はまさに、アニメーションに出演するような尊敬すべき先輩空母のように見えるのだった。

「こんばんは葛城さん。お邪魔します」

「うん。いらつしやい睦月ちゃん。それと……」

椅子から立ち上がった葛城は睦月への挨拶もそこそこに、陸軍人の顔をうかがった。

「……どうも。ご存知だとは思いますが葛城です。すみません、今日は提督が席を空けてまして」

「あ、いえ。自分も突然の参上で申し訳なく……」

魚雷を至近距離で向けられ生きた心地がしなかった直後に、鎮守府のボスは平サラリーマンのような低姿勢である。必要とあらば自分ごと吹き飛ばすのも厭わないと言わんばかりの恐ろしさを漂わせていた伊168が、役割を終えて葛城にペコリと頭を下げて引いてゆく様にあきつ丸は見覚えがあった。任侠映画に登場するようなアレは懐刀などと呼ばれるソレだった。

狭い部屋のどこから現れたのか、席に着いた三人の前にヌツと現れた猫吊さんが茶を出した。猫吊さんはそのまま葛城の横に立ち、部屋から出ていくつもりはなさそうだった。

三人は無言で湯呑みに手を伸ばした。少しだけ気分之余裕のある睦月は壁掛け時計を見て夕飯の時間を逃してしまったと口寂しくなったが、机の皿に盛り付けられた煎餅をボリボリ音を立てて食べてよい空気でないことくらいは察した。

葛城はともかくとして、厄介事をプレゼンしに来たあきつ丸までもが気まずそうに茶をちびちび飲んでいるのだから嫌な間が続いてしまう。外の景色がまるで見えないほどの雨音に耳を澄ませるばかりで、葛城とあきつ丸は目を合わせようとしない。猫吊さんは同席することのみが使命であるかのように、葛城の隣で猫を吊り下げた置物と化している。

任務説明を受ける以外の会議に参加したことのない睦月であるものの、このままでは夜食すら危ういと思い助け船を出した。

「あのう。あきつ丸さんは、葛城さんに用事があるんですよね？」
声を掛けられた二人は情けなくも硬直した。

「え、ええ。そうだったでありますな」あきつ丸はようやく空になっていた湯呑みを置いた。

「それで……その……貴官は天照大艦隊の副提督からどこまで話を聞いているでありますか」

「電話では、具体的には何も」葛城も湯呑みを手放した。

猫吊さんはおかわりを注いで回り、その際にさり気なく睦月に饅頭を差し出した。

「ただ、陸軍の方が僕に用事がある、とだけ聞いてます。……まあ、僕に舞い込む話のおよそ九割は深海棲艦に絡む話ですが」

やっと表情らしい表情、自嘲気味な微笑を浮かべた葛城の姿を、あきつ丸は座ったまま見える範囲で観察した。葛城と対面する誰もが最初に行う事であり、饅頭を口の中でモシヤモシヤさせている睦月も初対面時にはカレンダーズの面々と恐る恐る挨拶をしたものだった。

うっかり鎮守府の場所すら間違えるあきつ丸のアテにならない感覚が勝機を見出した。

「まずこれを見て欲しいのであります」

そう言っただジャージのポケットから取り出したのは、海水と雨でしわしわになった一枚のポートレートである。濡れて変色しているも分かる独特な装飾から、どうやら写っている人物は艦娘であるらしい。

こんな風に写真をダメにするからこの人もダメなんだろうなあ、と睦月が呆れつつ覗き込もうとするより早く、葛城はあきつ丸の手からポートレートを破りかねない勢いで引っ手繰った。

「……どうしてあなたが、海鳥の写真を？」

一年以上前行方が知れなくなった妹の姿を勝手に持ち出された怒りが、葛城の語調を僅かに荒立たせた。



正規空母として戦場に身を置く夷川海花には、同じく正規空母となった海鳥という妹がいる。

あるいは、いた。

二人がかつて所属していた艦隊の司令官であり父でもあった男は

哀れにもあまりに無能であり、まず海鳥が激戦海域に出撃したまま帰投を果たさなかった。艦隊壊滅の引き金となる一人目となつてしまったことを、彼女が知れば何を思つただろうか。

行方が分からなくなつた海鳥とその部隊を捜索すべく愚かな父は手持ちの駒を全て投入し、全てを失つた。海鳥の姉、海花も例外ではなかつた。

それから一年の空白の後、海花は艦娘と深海棲艦の間で揺れながらも父の前、そしてある艦隊の前に姿を表した。

逆恨みから他の司令官に襲撃を仕掛け失脚した父が迷惑をかけた分を償うため、海花——正規空母『葛城』は暁の水平線に勝利の炎を捧げた。

この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する

だが、やはり振り返らずにはいられないこともある。

忘れてはならないことがある。

出撃の度にその海域が気になった。

まだ葛城が精神的に未熟であつた頃、衝突してばかりだつた妹の行方が知れなくなってからは泣いてばかりだつた。そして涙が枯れるより先に彼女自身も行方不明となつた。その当時よりは前進し、夢に見る昔の自分を「情けない」と一喝できるまでに力を付けた。しかし叱咤され泣きべそをかく自分の横に立つ妹には何も言えなかつた。夢だからだろうか、妹の表情はひどく曖昧だつた。

確かな情報がないまま姿を消した妹の海鳥——正規空母『~~X~~』を、葛城は今でも想つた。



「睦月ちゃんごめん、こんな時間まで。提督いないから車で送れないんだ。部屋はたくさんあるから今日はここに泊まってくれないかな。天照隊には連絡しておくから」

「まだ休みません。一緒させてください」睦月は力強く応えた。「なんのお話か分かりませんが、なんのお話でも、睦月は葛城さんの味方

ですから。絶対に」

カレンダーズの一番艦を侮られては困ると言いたげに睦月は机上の煎餅に手を伸ばしてポリポリと豪快にがつついた。先輩が喧嘩を売られるならば自分だって何時まででも相手になってやると、睦月は戦鬨に臨む駆逐艦の面持ちになった。

決して睦月の仁徳を無下にするつもりはない。だが葛城の耳は、可愛らしく喜ばしく心強い声は雨音と区別が付かないほど臙げな音としか拾えなかった。艦隊の旗艦として事務的に他所の駆逐艦を労いこそすれ、蒼玉のような瞳には妹の写真を自分の許し無く所持していた陸軍人しか捉えていなかった。一瞬、葛城の静かな怒りが左目から青白い火花となり散ったことには、猫吊さんを除いて誰も気が付かなかった。

あきつ丸の双眸は葛城の方を向いてこそいるが、映っているのは現実逃避めいた両親の姿だった。蛇に睨まれた蛙とは具体的にどのような心理的状况であるかを今、彼女は冷や汗が滴るほど思い知っているといるのである。自身の練度が胸を張れるほど高くないことくらいは弁えているつもりだった。今は一ノ傘に身ぐるみはがされてしまった装備が仮に万全に揃っていたとしても、さらには陸上でさえ、戦力的には拮抗に持ち込むのも難しいかもしれないと考えていた。即ち、あきつ丸は情報収集の段階から、国の英雄『撃沈王』と肩を並べる練度測定不能の正規空母をあまりに低く見積っていた。

「……もう一度だけ、お伺いします」妄想の世界に逃げようとするあきつ丸の意識を葛城は容易く手繰り寄せた。

「どうして陸軍の方が海鳥の姿を持ち出すのですか？」

本格的に土砂降りとなった雨の音をもともせず葛城の声は強く室内に通った。

「あの子は戦いから開放されて安らかな眠りについています。相応の理由を聞かせてくれるのですよね——鎮魂とは真逆にある鎮守府に連れ出した理由を」

今度こそはつきりと葛城の左目から青白い火花が、電気回路がショートしたような音を立てて飛んだ。

煎餅を貪る睦月の手が止まった。燃費の良さから輸送連絡任務を任されることが多いとはいえ彼女も戦場を幾度と経験してきた駆逐艦である。火花は確かに見間違いでなく、間違っても鎮守府内に存在してはならない光だった。そうでなければ装備すらしていない主砲を無意識に構えようとさせる恐怖に説明が付かない。

「は、早まるのはよくないであります」

自分で踏み付けた地雷に爆発しないでと懇願するあきつ丸だった。「落ち着いて。落ち着いて」

さらに葛城の左目の輝きは増し、瞳そのものが小さな破裂にも近い光を放った。

あきつ丸が日中に竹櫛と一ノ傘にしたように、このタイミングで葛城に非難と弾効の限りを尽くせば……死ぬ。青白く眩しい光は命の危険度を分かりやすく教えてくれる、あきつ丸にとっては不幸中の幸いと言ってよいのか不明ながらも得られた物差しだった。

「自分はそのう……、言いたいのはつまるところ……、えー……、その写真は一ヶ月前に入手したのであります……」

「誰が、僕の、許可も無く、その写真を渡したと？」

「と、当人！ 葛城殿であります！」

詰問してやろうと意気込んでいたあきつ丸だったが今や立場は完全に逆転していた。

「葛城殿から貰ったであります。いえ正確には写真を撮らせてくれなかったので、その写真をくれたのは確か重巡洋艦の……ええと誰だったか……」

「僕？ 今日が初対面だと思いましたが。ここ一ヶ月も海にはあまり出ていません。どこかでお会いしましたか？」

「そうではないのであります、その……その写真の人物が葛城殿であるという意味であります」

「はあ？ 海鳥が何ですって？」

「で、ですから海鳥殿が正規空母『葛城』であると自分は聞いているのであります、これは本人に確認したので間違いのないということであり、呉の鎮守府でも海鳥殿は葛城として在籍しております、自分の

カ号の一時着艦を許可頂いた飛行甲板がなかなかのフラットさであったのはよく覚えているであります。しかし仲間からは対空戦闘への意識や空母としての絶妙な性能バランスが輸送任務に最適であるなどと評されており――」

「……つまり？」

「つ、つまり、葛城と名乗る貴官はいつたい誰なのでありますか！」



天照大艦隊を襲撃し、一ノ傘姫乃と艦隊を立ち上げるまでの葛城は深海棲艦ではないかと疑われる毎日(それを今でもそうなのだが)、研究員が考える様々な仮説を元に調べ尽くされた。泳げないとさんざん主張したにも関わらず背德的スクール水着を着せられてプールで溺れ、大和に救助される姿がメディアに掲載された事もあった。

深海棲艦に対しての理解が浅いから戦争をしているのであり、研究員たちの仮説には荒唐無稽なものも少なくなかった。例えば、轟沈した艦娘が深海棲艦になってしまうという風説は、実は深海棲艦の謀略の失敗が表に出ただけで、その実態は沈めた艦娘になりました。深海棲艦が鎮守府に潜り込み、獅子身中の虫としてじつと機会を窺っているのではないか、という意見がある。

「百歩譲って外見はてきとうな理由を付けるとしますよ。でも記憶の問題とか色々無理があると思います。それにこの前の引っ掛けテストで僕が1インチがどれくらいの長さかも知らないって分かってもらえたはずです」

いくら検証に協力的な葛城であっても、深海棲艦であるか否かを試す思考実験のようなものを何度も繰り返されていけば研究員の一言一句をテストではないかと疑うようになってしまい、互いの溝をより深めてしまう結果となってしまったのだ。この問題は、人畜を対象としたテストを深海棲艦に当てはめても結果の妥当性を示すことが困難である、とお茶を濁すことで要追加検討案件として放置されて

いる。

価値ある研究材料が有意義に使われるとは限らない。葛城は大和にこぼす愚痴を、実験を重ねることに増やし、葛城の背徳的スクール水着姿に何らかの世界を見出した研究員数名がHDDと共に処分された。それもまた不毛な考察の悲しむべき産物といえた。

とにかく、このようにして深海棲艦に関する多種多様な見当が生み出されては消化されていくのを、葛城は間近で見ってきた。



葛城は鉛球を精製できそうな重いため息をついて席を立った。

「姉妹をタネにした入れ替わりトリックもとつくに考えられます。もつとも海鳥と私はあまり似てませんでしたが、書類数枚で片付けられました」

葛城は冷めた声で言った。「話は以上でよいですね。僕はお腹が空きました」

あつさり切り捨てられて怯むあきつ丸も、切り捨て慣れた風格さえある葛城も、睦月が見る限り二人とも嘘をついているようには見えなかった。

いまさら改まるまでもなく睦月は葛城の味方である。同じ海軍として、それ以上に世話になってきた先輩後輩として。しかしだとして、あきつ丸の言っていることを無下にできないのは何故だろうと、話が終わりに差し掛かった今更になって疑念が湧いてきた。未だ葛城は何かにつけて深海棲艦疑惑をかけられるとはいえ、気候が別世界と言つてよいほど変わる遠く離れた海域まで進出しては作戦に従事している。睦月らが苦戦する、あるいはやり過ぎすべき強敵を彼方より察知し殲滅する正規空母の姿を何度も見てきた。憧れに近い尊敬の念を葛城に対して抱いている。そんな先輩を鼻目に見て何が悪い、とすら開き直った。であるのに何故、あきつ丸を悪者扱いする気になれないのか。睦月は自身の感覚に疑問を持ち、それ以上に嫌な予感がしていた。

葛城の左目に走った青白い閃光、あれはまるで燃やしてはならない何かを燃やしたような輝き方をしていた。

「ま、待ってほしいであります」

今日もまた疲れる仕事を終えたといった風に立ち上がった葛城を、あきつ丸は慌てて帰らせまいとした。

「できれば葛城殿には迷惑をかけたくなかったのでありますが、やむを得ないのであります」

「だから、ハッキリ言っただけは既に迷惑かけられまくってます」

あきつ丸は使い古された感じがにじみ出る折りたたみ式携帯電話を取り出した。

「呉に証拠の電話をします。少し待って欲しいであります」あきつ丸はそう言っただけで携帯電話をいじりながら応接室から出て行った。

部屋に残された葛城は再び重いため息をついて、睦月と一緒に煎餅を齧った。気が抜けたのか、しばらく雨が降り頻る窓の外をぼんやりと見るでもなく見ていた。

猫吊さんはまるで空腹という概念すら持たないかのように湯呑みに茶を注いで回った。

「本当にぐめん睦月ちゃん。変なことに付き合わせちゃって」

「あの……葛城さん。左目は怪我してるとか、なんですか？」

「うん？　左目？　やだ、何か変？」

「いえ、変というより……」なんか火花が出ました、とは言いつらい睦月だった。言っただけで自分まで葛城のことを人外——深海棲艦扱いしてしまうような気がしたからだだった。

「確かに左目だけ視力が安定しなかったりぼやけたりするんだよね。まあ今はそれより、あの陸軍人さんをどうするかなあ。ここに泊めるべきか追いつくべきか。あーもう、どうしてこんな日に限って出張してるかなあ提督は。夕飯はピザでも注文しようと思うけど、睦月ちゃんもそれでいい？」

葛城が猫吊さんにピザ屋のチラシを取ってきてもらおうとした時、あきつ丸が部屋に戻ってきた。携帯電話の送話口を手で覆いながら、

殺人事件の決定的証拠でも見つけたように得意気な顔をしながら「さあ、話してみるであります」と言った。



物心がついた頃から言い合ってばかりだったとはいえ、姉妹なんてそんなものだろうと海鳥は思っていた。姉妹とは生活の一部として喧嘩をするもので、嫌いかどうかは別問題である。姉——海花もそう思っていたに違いない。

今の艦隊に幸運にも救助され、呉での生活に慣れるのに一年という時間は十分過ぎた。父が指揮を執っていたかつての艦隊が自分を捜索するために壊滅してしまったと耳に入ってから、自分が何をしたらいいのか、あるいは何もしなかったのか、よく思い出せない日のほうが多かった。ただ季節が移ろう毎に今の仲間が苛烈に戦い抜いていたことだけは確かで、気が付くと海鳥もその中に入っていた。

海花が生きているかもしれない。なんとも曖昧な情報は、ろくでもない父が海花を連れて他の艦隊を襲撃したという情報規制だらけのニュースと共に飛び込んできた。返り討ちにされて良かったと仲間には強がり、それから海鳥は海花についての疑惑を取り上げるニュースから逃げた。深海棲艦になりかけながら帰還したと言われても、正直に言えば反応に困った。おまけに襲撃事件から初めてメディアに掲載された姿は、屋内プールで溺れているところを『撃沈王』に助けられているシーンだったらしい。確かに姉には水泳の才能が絶望的に枯渇していて、水に顔をつけるのが精一杯だった。その意味でも、よくもまあ艦隊が壊滅した中で生き延びたものだと思つた。面白半分で記事を見せようとする仲間から海鳥は、そんなオマヌケさん知らないんだから、と言って逃げた。

「……まあ、いつかはオマヌケさんに会いに行かないと、とは思ってたけど」

寮から外に出て静かなベンチに海鳥は腰掛けた。黄金色に輝きが過ぎる月がまばらに浮かぶ雲の輪郭を照らしている。

永遠に出来そうもなかった心の準備を、戦争というものは待つてはくれなかった。まさか以前、見ていられなくて手を貸した陸軍の者が、まったく唐突に「貴方の姉君に声を聞かせてあげて欲しいであります」と電話をしてくるなど想像できようはずもない。しかもこの電話が掛かってくるまで、あきつ丸の存在すら忘れていた。久しぶりと挨拶を返したものの顔すら思い出せなかった。なんとなくキョーンシーっぽかったようなそうでないような、海鳥にとってはその程度の関係だった。

しかし、これくらいサプライズでよかったかもしれないと、海鳥はスマートフォンを耳に当てながら観念した。どうせ時間が解決してくれないかしらんと逃げていた事、ならばこの電話こそが漠然と願っていた時間的解決の具体的な表れなのだろうと思うことにした。しばらくの無言の後、あきつ丸ではない者が恐る恐るといった感じで電話を代わって出た。

『……もしもし?』

出会ってそれほど時間は過ぎていないあきつ丸の顔は忘れても、一年以上もの空白越しに聞いた声は確かに姉のそれだと分かった。



葛城は泣いたり怒ったりしんみりしたり笑ったり、そしてまた泣いたり態度をコロコロと変えた。同じ室内に睦月とあきつ丸、猫吊さんがいるのも忘れたように電話に夢中になり、あきつ丸が持ってきたシワシワのポータレートを一心に見ている。

「生きてるんなら生きてるって早く言いなさいよ!」と葛城は呉にいらしい妹を叱りつけながら歓喜の表情を作った。「昔っから僕に隠し事ばっかり!」

そんな葛城を見ながらあきつ丸は腕を組み満足気に頷いていた。「人助けは気持ちが良いものでありますなあ」

葛城を偽物扱いしにこの鎮守府を訪ねた者が吐いてよい言葉とは睦月には思えなかった。海軍精神注入棒とはこのような時こそ役立つ

つのではと、頬をプクウと膨らませた。しかしあきつ丸の考え無し（あつたかもしれないが余計なお世話でしかない）の行動は結果オーライと言えなくもなく、もらい泣きさせられた睦月は今だけは素直に感動しておくことにした。

「一段落したらお腹がすいてきたでありますな。今は泡の出る麦茶などを一杯やりたい気分ではありますが、この鎮守府の食堂はちゃんと揃えているではありませんような」

「食堂も売店もないですよ。自炊はできるみたいですけど」

「なんと!？」あきつ丸が大げさに驚いたので睦月は掌打めいた勢いで口を塞いだ。葛城の電話は誰にも邪魔をさせない。

「おぶっ! ……ここ、これだけ広い敷地に食事施設がないと? ここを拠点とする者は霞が主食でありますか」

「だってここで寝泊まりする人は、えっと確か——九人しかいませんし。ですよね?」

睦月が猫吊さんにそう聞くと、猫吊さんは無言で八本の指を立てた。

「あ、そうか。大和さんは忙しくて色んなところに出かけるんですね。そういうわけで、この鎮守府には使われてない施設が多いんです」

「そ、そうでありましたか」そんな事よりも沈黙の秘書らしき猫吊さんとコミュニケーションを取った睦月に驚くあきつ丸だった。

「まあ、自分は大人でありますし、ビールなどいつでも飲めるから今日のところは我慢するであります」

「睦月はビールの何が美味しいのかよく分かりません。カクテルじやダメなんですか?」

「君も酒を呑むではありませんべっ!」いちいちやかましいあきつ丸に再び掌打。

「……普通に飲みますけど。悪いですか」

「なんたる風紀の末法的荒唐でありますか。戦場に立つ若者が嘆かわしい」

「アルコールは燃料です。駆逐艦が燃料を飲んで何が悪いんですか」

「くたびれたサラリーマンの如き屁理屈でありますな」

「泡の出る麦茶とか言っちゃやう人にケチ付けられたくないです」

呑気に言い合う二人は、しかし、電子機器が爆ぜるような炸裂音で緊張を思い出し、また同時に自分達が葛城を弾劾せんがために来ていることを思い出させられた。

歓喜の仮面を捨てたかのように表情は消え、ただ呆然と電話をする葛城の左目からは十や二十では数えられない量の青白い火花が飛んでいた。雨音が響くばかりの応接室はぼんやりとした雰囲気から一転、電気事故が発生した工場の工作室のような有様となった。

「……カツラギは、僕でしよう?」

そう問いながらも葛城は誰にも答えて欲しくはなかった。



近く海花に会いに行こうと決めた海鳥は、声だけで繋がった今はせめて気の利いたことを言っただけで姉を安心させようとした。そのつもりだった。

「大丈夫、元気でやってるって。私は正規空母『葛城』なんだから」
途端に口を噤んでしまった海花の動揺は電話越しでさえ伝わってきた。ただ壊れた蛍光灯がショートするような音だけが声の代わりに聞こえてきた。

「海花姉? どうしたの?」ベンチの背もたれに体を預けていた海鳥

——本物の葛城は不安から立ち上がった。「何か言っただけよ。ねえ」

つい声が大きくなってしまったらしく、同僚が寮の窓から顔を覗かせた。葛城は「大丈夫、何でもない」と手を振って、胸騒ぎを止めようと再びベンチに座った。

空を照らす月が小さな雲に一旦は隠れ、また現れるまでの時間を置いてから姉はようやく言葉を絞り出した。

『……カツラギは、僕でしよう?』

葛城には言われたことの意味が本気で分からず、はてな自分の姉は「俺がガンダムだ」とジョークを飛ばすような人間だったのだろうか

考えてしまった。そんな姉の姿は少なくとも葛城の記憶にはない。空白の一年で変わってしまったのだろうか。

「いや、ええと……私が葛城なんだけど？」

『違うー！』姉が何かに必死であることが痛いほど分かった。『葛城は僕だ！』

「どうしちゃったの海花姉？ ……まさかこの電話、あきつ丸にいいように利用されてるとかじゃないよね」

『他の人は関係無い。これは僕らの問題だ』

「問題って……」

姉の息遣いは早くなるばかりで、電話の向こうでは既に過呼吸で倒れているのではないかと心配になる程だった。

「……私たち色々あつて、急にこうして話したからちよつと混乱しちゃったんだよ」

『うるさい！ 僕がおかしくなったみたいに言うな！』

「言っていないよ。ただちよつと勘違いみたいなのがあるかなつて。落ち着いて思い出して。私が正規空母『葛城』で——」

『うるさいうるさい！ もう何も言うな！』

「海花姉は正規空母『X X』でしょ？」

ゴトリと何かが落ちる音が返ってきた。通話を切られたわけではないが、どうやら姉は電話機を落としたらしく、それからいくら葛城が呼び掛けても返事は無かった。



この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。

海花——偽葛城の左目から、ついに青白い炎が噴出した。怒気が発露したが如く煌々たる火影が不気味にうねり暴れる。炎は偽葛城の白い肌や灰色の髪を焦がしはしない。だがそれ以上に致命的な何かを燃料として燃え上がる類の炎に違いなかった。

「僕は……僕ハ……」

瞳から炎が出ようが気にならないのか、あるいは気付いていないの

か、偽葛城は床に落としたあきつ丸の携帯電話を茫然自失の様子で見下ろしている。青白の炎だけが荒く髪をなびかせ、一見して静かであるその姿を睦月とあきつ丸は知っていた。白を基調とした道衣袴で身形を整えているとはいえ、行き場のない怒りを全身に纏ったその姿は空母ヲ級と呼ばれる深海棲艦、その上位種そのものだった。

「ダツタラ、僕ハ……誰？」

【葛城：Lv. 150 ↓ 偽葛城：150+2】

答えを求めるように偽葛城は、ゆつくりと睦月らの方を向いた。

「ひっ!？」

睦月が小さく悲鳴を上げた。

偽葛城の左目は燃え盛る炎の中にあつて、炎以上に深く輝いている。

豪雨が降り続く外の様子は空からの猛烈な爆撃に曝された海のようにうだつた。

いくら天照大艦隊の中でも珍しい良心的な思考回路を持つ睦月であつても、この状況を招いたあきつ丸には文句のひとつでも言わなければ気が済まなかった。穏やかだった葛城を返せとあきつ丸を睨みつけようとすると、なんとあきつ丸はさっきまで立っていた場所からいなくなっている！ なんとという逃げ足の速さ！ ……と睦月が驚いたのも一瞬のことで、少し下を見ると足元に転がっていた。口から泡を吹いて気絶していた。あまりに情けない姿を見せられて少し冷静さを取り戻した睦月は、偽葛城により近い仲間である猫吊さんに助けを求めようとした。しかし猫吊さんは音もなく部屋の扉を開けた気配もなく、忽然と姿を消していた。

「睦月チャン、ソノ人ドウシタノ？ ナンデ倒レテルノ？」

少なくとも睦月には、偽葛城には何の自覚もないように見えた。



釣りを楽しみ、サメを怖がり、仕事も片付け、本日のやるべきことを終えたカレンダーズは残すところ睦月の帰りを待つばかりとなつ

た。

三人部屋に九人がすし詰めになってだらけているうちに卯月が大きな欠伸をすると、他の全員にまんべんなく欠伸が伝播した。

「誰か睦月から連絡きてないのー？」と聞いてみる望月だったが、ダンボール空間を奪い合う猫のように密集するカレンダーズにとつて、スマートフォンは自分の電話番号くらいは設定された共有物のようなものだった。中身の詮索はしないと最低限のエチケットを暗黙の了解とするだけで、誰かのスマートフォンから呼び出し音が鳴れば当然のように近くにいる他の誰かが電話に出る。この垣根の無さが天照大艦隊においてカレンダーズを十人にして一つの集団と大雑把に捉えられる要因の一つだった。

望月だけでなく他の皆も近くにあったスマートフォンを拾って、皆分かっていながら「きてない」と口を揃えて返した。

「この時間なら今日はもう睦月ちゃん、あつちに泊まるんじゃないかしら」

テレビを見る目をしばしばさせながら如月が言った。「明日はみんな遠征に出るし、もう寝ちやいませよ」

「そだね」と臯月が立ち上がった。この三人部屋には睦月・如月・文月の布団がある。「葛城さんところなら優しくしてくれてるでしょ。睦月にはメールしとこう」

皆が本日のだらける業務を終える準備をする中、長月は天気予報を無視して降り続ける雨を気にした。ずぶ濡れになったであろう睦月が風邪をひいたかどうかではなく、洞観者である彼女らしくもない根拠のない不安を、睦月を見送った直後から抱いていたのだった。

葛城が在籍する艦隊に面倒事を押し付けるように、装備を搾り取った出洩らしのあきつ丸には責任を追求せずに逃がすと一ノ傘副司令が決めると、それからの航路案内は燃費の良いカレンダーズから適当に一人が選ばれた。

鎮守府に侵入していたあきつ丸を最初に発見した自分が手を挙げておけばと、長月は睦月の帰りが遅れそうだと分かってから後悔した。

第33話 叢雲の薬指 — 海花と海鳥 ④

長月が普段は私室の壁に飾っていたり適当に立て掛けていたり、あるいは洗濯物を掛けたりとぞんざいに扱われる刀『猫爪（ネコノツメ）』は、天照大艦隊の他の者からは無駄に本格的な芝居用小道具か何かだと思われていた。刀と呼ぶには、それも小柄な長月が携えるには、冗談じみたサイズだからである。

竹櫛の自慢だった今は亡き軍刀『丑の刻摩天楼』が量産的オーラを醸し出していたため、一部の例外を除いて超近接兵器を持たない艦娘らには「刀といえば提督の役に立たなかったアレ」という基準がある。長月のネコノツメはその基準から一回り二回りでは済まないほど逸脱していた。

「バスタードソードみたいな日本刀を作れ」と大和に注文を付けたのは武蔵だった。姉妹艦の我儘にウンザリしながらも大和が、せめてシステム開発プロジェクトの悪夢とならぬよう顧客が本当に必要なとしているものを探ると、「深海棲艦を真つ二つにできる強靱さでテレビゲームのように刃こぼれひとつせず海水なんかに浸かっても腐食しない刀」を武蔵は求めているらしいことが分かった。

「海底遺跡で伝説の剣でも探さないよ。ああいやだ姉妹艦のゲーム脳！」と大和は嘆いた。

「……………こっちは大真面目なんだが。言わせてもらおうと、洞観者から見ればお前ら普通の艦娘のほうがよっぽどゲーム脳とかいうヤツに見える」

武蔵と大和、最強の戦艦が口喧嘩を念入りに繰り返してネコノツメは鍛えられた。その姿は工業刀というよりも工業で破棄された鋼鉄のリサイクル品のような風格が感じられる。美しさのカケラもない姉妹愛を反映してか、その鋼色の刀身には一切の輝きが無い。通常は弓のように反るべき刀身の弧と弦の間にできる空白まで鋼で埋められており、バスタードソードのような日本刀という注文に見合う身幅である。お世辞にも美しいとは言いがたい難い形の溝は洗練された樋ではなく、強度シミュレーションを取り敢えず反映させてみた結果オーラ

イ的形狀と言うべき様相だった。重ねは戦艦の装甲にも匹敵し、そして何といつてもネコノツメ最大の特徴はその長大さである。

『ねえ、刀身とかのサイズはどうすればいいの?』

仕様検討中の事である。大和は電話から疲れた声で武蔵に尋ねた。『どうか何を基準に決めたらいいのかサツパリ分らない。普通に配られてる軍刀くらいって言おうとしたら、じゃあ普通の軍刀でいいだろって馬鹿にされそうな空気なんですけど。ワタクシなにか粗相をしましたかしら?』

「そりゃあ基準は長月だ。長月のための刀だからな。長月が取り回せるギリギリの巨大さがいい」

『……あのね武蔵。百歩譲ってナガツキさんが世界の何処の誰だとか意地の悪いことは言わないでおくわよ。でもその長月さんは可愛らしい女の子なんでしょ? その子に扱える限界と成人男性の平均はどう違うのかしら。ぐ・た・い・て・き・に!』

「ふむ、そうだな。例えば長月が、こう、野球のバットをリラックスした感じで構えたとするだろう」

『もう結構。明日からハンド・キャットを臨時休業してこっちに来なさい。召喚命令です。仕様書の空欄を埋めるまで帰さないから。……ああもう、バスタードソードみたいな日本刀じゃなくて、日本刀みたいなバスタードソードだったらまだいくらか楽だったかもしれないのに。なんだって日本刀のパーツって細かくて名前が難しいのかしら。しかも尺貫法とメートル法がごっちゃになって、ああもう……温泉行きたい』

かくして開発されたネコノツメは長月の手に渡り、武蔵が期待した以上の威力を発揮することとなった。

偶然、たまたま、いったい何の因果かテスターに選ばれた長月は敵駆逐艦や軽巡洋艦、重巡洋艦を一刀のもとに斬り伏せて、大和が開発のためにこじつけた「最接近距離での一撃必殺兵器」という名目に具体的な成果を与えた。道連れを覚悟した魚雷発射など言語道断であると力説する大和は試作を終えてようやくプロジェクトが本格始動してしまった感覚を泣きたいほど味わい、またその裏で武蔵が真の狙

いが果たされたかを確かめた。

三徳包丁をプラプラ持った長月に完全敗北したことのある武蔵は、試験は試験で勝負は勝負、次こそ一発くらいは見舞ってやろうと一対一の演習に臨んだ。

「最強と名高い大和型の力、今度こそ披露しよう」

『そりや楽しみだ。ネコノツメ抜猫！』

三百万円の刀と聞いて尻込みしていた時とは違う威勢のよい声が無線で返された。長月は『抜猫』なる造語を作る程度にはネコノツメを気に入っていた。

そして結果は前回と何ら変わらなかった、どころか武蔵は戦艦撃破タイムアタックの標的にでもされた気分になってしまった。

「……ネコノツメは工業の産物だぞ。魔法アイテムにしろと誰が言った」

仕様見当段階から懸念されていた重量については、少なくとも長月が持つ分には余計な心配だった。身の丈ほどもあるネコノツメを長月は、まるで三徳包丁が少々大きくなった程度であるかのように軽々と扱っている。

長月は刀身の汚れを制服で拭い取り、桜と猫の模様をあしらった豪華な鞘にネコノツメをバチンと小気味よい音を立てて納めた。その納刀モーションは居合道のような洗練された技術ではなく、傘立てに傘を突っ込むような気軽さで行われた。

「よっぽど私を人外扱いしたいらしいな。じゃあ自分でこの刀を使って試せばいい。火とか雷とか出たら人類は戦争に勝ったも同然だ」

「普通の人間は数百メートル先の物体を切断したりしない……」

「マンガとかゲームとかでよくあるのを真似してみた。ほら、ジャンプとか」

「普通の人間は数百メートルの距離を一瞬で詰めたりしない！」

「マンガとかゲームとかでよくあるのを真似してみた。ほら、プレステとか」

「大和に何と説明すれば私は罵倒されずに済むんだ？ 『ほら見なさいゲーム脳！』と罵るあの顔が目には浮かぶぞ」

「撃沈王が罵倒する姿かあ。軽くニュースになるな」

「私の戦艦としての立場もズタズタだ。偵察機でお前の姿を見つけたのが唯一の戦果だぞ？ ハングド・キャットが忙しくて鈍ってましたでは済まない。長月、お前こそどうするつもりだ。『相手の装備を次元ごと抉り取って無力化した』とか結果報告するつもりか？」

「ふん。一年前の私じゃあるまいし」そう言うと長月は申し訳程度に装備していた主砲を一発、空に向けて撃った。

『一発の砲弾が偶然、相手の艀装の誘爆を引き起こした』とか書く。こういうちよろまかしばつかり得意な仲間がいるんだ」

「三百万の刀を預けるテストでもあったんだぞ。そんな浅知恵が通つてたまるか」

「ふふふん。こつちの白露っていう駆逐艦の深淵なる浅知恵を侮るなよ」

「……その白露とかいう阿呆とお前には一度、分からせてやったほうがいいな」

鬼に金棒、長月に猫爪の組み合わせはしかし指折り数える程しか出撃していない。ネコノツメは専ら長月の鎮守府内で発生する『事』にのみ使われた。

最終決戦兵器とも言うべきそれを用意した武蔵は良い仕事をしたと手を叩いて満足し、しかし勘では安直に強力な兵器を作るのは危険だと警告した。



カレンダーズに制止させる暇すら与えずにネコノツメを掴み、艦を拒んでいるような雨が降る海を十五分ほど走り抜けた頃、長月のスマートフォンが雨音の中で機械的に小さく鳴った。叢雲だった。

何があるろうと艦隊は艦隊として動くのが最適である。睦月と長月を欠いたカレンダーズは総旗艦に事情を伝えて、今頃は出撃準備のために各寮に走って呑んでくれない者をかき集めていることだろう。しかし今回ばかりは長月にとって正しさと早さは決して等しい

ものではない。

「悪い叢雲。今は言い合ってる余裕もないんだ」

スノーノイズのような雨音の中で鳴り続ける着信音が、何故か叢雲の怒鳴り声のように思えて長月はクスリと笑った。

長月は前方少し上にスマートフォンを放り投げた。鬼姫クラスの深海棲艦の頭はあれくらいの高さだろうかと適当に考え、そしてネコノツメは既にその刃を放たれていた。破裂音を伴う斬撃を武蔵は魔法だと言い表した。

「……むー」

スマートフォンが真つ二つになり叢雲の怒声めいた着信音が止んだのはよかった。久しぶりにネコノツメを握る感覚が鈍っていないのもよい。しかし雨粒のカーテンの中では魔法の正体が飛沫となつて現れてしまっていた。スマートフォンを切断した一閃が芸術的な形を作ったまま海に落ちてゆく。

深海棲艦が——例えば今から睦月を助けに行く場所に潜む敵が一体のみとは限らない。超音速の砲弾が飛び交う死闘の中では誰であつても、この一撃目の飛沫を見逃してはくれないだろう。

ネコノツメを鞘に納めた長月は緩みかけていた速度を再び上げた。今は総旗艦のお叱りを受けている時間も、技を深く考える時間もない。一撃一体で追いつかないのなら一撃と呼べる瞬間の内に相当数の斬撃を繰り出すまで。もしも葛城が敵となるのであれば空に群れを成す航空機を、雨のように降り注ぐ爆弾を、何一つ逃さないイメージを長月は思い描いた。同時に、スマートフォンを衝動的に捨ててしまったことは少なからず後悔した。

「あう……」いや、かなり後悔した。睦月や他のカレンダーズと連絡を取れなくなつてしまったのだった。

夜と雲の闇、そして雨の音が長月の存在を覆い隠すため、日中の睦月のように陸から離れた航路を通る必要はない。目的の鎮守府までほぼ一直線に進む長月の左手にはぼつぼつと道路や建物の灯りが見えた。今のようにつつそりと夜間に近道をした時、睦月が「海から見える灯りって、なんだか寂しくなるね」と言ったことがあった。カレ

ンダーズで編成された部隊は揃って頷いた。長月も勿論、睦月と同じように寂しくなった。

情報網を文字通り切断してしまったこともあり仲間との時間がつい恋しくなった長月の尻を蹴るように、再び電子音が鳴った。

「うえっ!？」

それはハングド・キャットに属する洞観者が肌身離さず持つておくよう命じられている携帯電話だった。猫以外の迅速な連絡手段であり、着信があつた場合は交戦中でない限り必ず出るときつく言われている。極めて重要度の高い連絡のみを行うための電話なので、よほどの事でもない限り使う事は無かつた。長月がネコノツメを鎮守府外に持ち出した回数とこの携帯電話が鳴った回数は今のところイコールである。

「この忙しい時に……!」

驚かされた怒りに任せてさっきのスマートフォンのように切り捨ててやろうかとも思った長月だったが、こればかりは叢雲にギャンギャン言われる程度では済まない。カレンダーズを大切にすると同じように仲間意識を特に強く持つのが洞観者だった。防水仕様の携帯電話は雨にどれだけ濡れようとも鳴り続け、仕方なく長月は電話に出た。

『遅い』と武蔵は挨拶も省略して難癖をつけた。『待つてる間に腕に爪痕が二つも増えたぞ』

「爪痕? 知らないけど今の私は姉妹艦の救出で手一杯だ。今こそネコノツメの真価を発揮する時なんだ、文句ないだろ」

鼻息を荒くして断固睦月救出の態度を崩さないよう身構える長月だったが、電話の向こうで武蔵は僅かに沈黙した後、他の誰かと話をしている様子だった。

「間違い電話? そうなんだな? 切るからな」

『待て、ちよつと待て。その姉妹艦というのはもしかして睦月という駆逐艦か?』

「そうだけど、どうして知ってるんだ」

『口癖でよく「にやしい」と言う者か?』

「誰だそれ……もしかして武蔵の用事って、正規空母の葛城を倒せと？」

『痛っ!?!』武蔵は唐突に悲鳴を上げた。『もう少し表現をマイルドにしてくれ。本物の猫の爪はけっこう痛くてな』

「もうあんたにまで情報が届いたのか、早いな。私が睦月のメールを受け取って二十分くらいしか経ってないぞ」

『そのメールより早くて正確で恐ろしいモノが届いたのさ……そして私は今、脅されている』

「脅され？」

『あとどれくらいで到着する?』

「えっと、ショートカットしてるけど、それでも三十分はかかる」

『なら十五分後にまた連絡する。そのまま進んでくれ』

「何がどうなってるんだ? 本土に現れた深海棲艦を始末しろ——」

『痛い痛い! と、とにかく今は早まるな。いや速まりはしていいが、頭は冷やしておけ。後でまた指示を——え? ちよつ——……どうもこんばんは、長月さん』

痛がったり武蔵がいきなり別人の声になったり、長月にはいいよわけが分からなかった。

『任務で来てくれて、何度か会ってるよ? 傘姫提督、って呼ばれてる、葛城の上司です』

天照大艦隊のブラック副提督、泣く子を黙らせてしまい落ち込む一ノ傘鉄子の従姉妹にして、竹櫛からは「羊の皮を被ったエイリアン」と形容される傘姫提督は、少なくとも長月の直感に引つかかる人物ではなかった。部下の葛城にタブレットを持たせていつでもどこでも秘書艦業務に勤まらせてはいるが(この濃縮されたブラック加減が葛城を深海棲艦に墮としたのではないかと長月はふと思った)特別に変わっているようにには思えなかった。ただ綺麗に切り揃えられたオカッパ頭だけが印象に残っていた。今の今までは。

「……どうも、こんばんは」と長月は挨拶を返した。

この時長月は、洞観者の中にやけに挨拶に拘る海外艦がいたことを

思い出していた。それは神聖不可侵の行為であり、挨拶はされれば返さなければならぬ、古事記にもそう書かれている、と。その古事記と長月が知る古事記が一致するかはさておき、傘姫提督が挨拶を返されるのを待ったように感じた。例の古事記の事を知っているかのよう

うに。

『葛城は悪い子じゃない。長月さんも知ってる、よね？』
「あの、そこハングド・キャットですよ？ どうしてこんな時間に……」

『じゃあ、また武蔵さんと代わるね』

掴み所がないとはこのことか、と長月は思った。

『……というのをだな』再び声は武蔵に戻った。『傘姫提督は私に拳銃を突き付けながら言っているわけだ。葛城が死ぬのなら人類の敵となつて滅ぼす道を平然と選ぶらしい』

「んなバカな」

『今のハングド・キャットの様子を見て欲しいものだ。猫吊さんがいきなり現れたと思つたら猫たちが一匹残らず私に牙を剥いて、これまた突然来店した傘姫提督が協力しろと脅すんだ。正直、一番混乱しているのは私だと思うぞ。これが悪夢なら誰か覚まさせて欲し痛い痛い引つ掻くな！ 言葉の綾だろ猫には分らんか！ ……またかけ直す。とにかく長月はそのまま進め』

通話が一方的かつ乱暴に切られ、長月はしばらく携帯電話を耳に当てたまま呆然とした。



閉店から随分と時間が過ぎた人と猫とカレーの天国、秘密結社もとへ秘密喫茶『THE HANGED CAT（ハングド・キャット）』のホールは、一つを除くすべての椅子が机の上に整然と乗せられ、最低限の照明だけが点いていた。

照明の中心にいる武蔵はカウンターに背をあずけ、長月との通話を切つて猫たちに引つ掻かれた傷をさすつた。照明はまるで刑務所の

サーチライト、いきり立つハングド・キャットに住む猫たちは脱獄囚を囲む警備兵のようである。猫吊さんの合図一つですべての牙が武蔵の肉を食い破る紙一重の雰囲気だった。武蔵がいざという時のために奮発して買っておいだ高級キャットフードは匂いすら嗅いでくれない。

「さあ。次は大和だね」と猫吊さんの隣で椅子にゆったりと腰掛けた傘姫が平然と言った。

「もう葛城の事は察知してるはず、だから早く手を打たないと。長月さんと合流して、できれば一緒に、何とかして欲しいねえ。うん、それがいい。さあ武蔵さん、ほら武蔵さん、大和に電話しよう」

あくまで朗らかに傘姫は、武蔵に拳銃を突き付けた。その拳銃は既に一発が壁に掛けてある絵画の人物の額に穴を空けており、ハツタリではないことは証明済みである。ハングド・キャットの外が騒ぎにならないのは、その拳銃に消音器が取り付けられているからだ。音も無く発砲できる銃器の所持など、武蔵の知る限り許可される者は存在しない。

「鉄砲から音がするとか、しないと、細かい事はいいじゃない。ほらほら、急がないと、大和が私の鎮守府に攻撃しちゃう」

「貴様が自分で大和を止めたらいいだろ」武蔵は投げ遣りに言った。「貴様が任された空母に何かが起こった時のために、わざわざ撃沈王が貴様の下に席を作ったんだ。だというのにいざその時になれば、こんな場所で何をしている？ 閉店時間を過ぎた喫茶店に入り浸るなど敵前逃亡にも等しいと私は思うが？」

「前提が違うんだよ、武蔵さん。仲間に何かが起こったら助けるものでしょう？ 敵ってというのは、誰だろうねえ。陸軍さんのこと？ 何にしても、大和が何一つ問題ない自分の鎮守府を攻撃しちゃうのは、見過ごせないと私は思うねえ」

「瞳を青い炎で燃やす異形に問題は無いと？」

「少なくとも」傘姫は拳銃を持たない方の手を仰々しく広げた。「猫吊さんとハングド・キャットの猫たちは、武蔵さんに不満な様子、だよ？ 猫を信じなくなった洞観者に、意味はなくなるんじゃない、かな」

武蔵は赤の他人に何が分かるのかと言いつ返し返そうとして、しかし口を噤まざるを得なかった。この喫茶店に猫吊さんと共に入って来た時点で、傘姫は武蔵を手玉に取りに来たようなものである。拳銃も猫たちの乱逆もポーズでしかない。「乱暴なことは好きじゃないけど、あんまり物分かりが悪いと、ねえ」と傘姫の目が言っているように思えた。

「……私だって、猫に助けられはしたさ」

あの時の茶猫の姿を横目に、武蔵は携帯電話で大和の番号を探した。

「言っておくが、何が正解であっても事態が一刻を争うのには変わらない。長月と大和に妙な期待はかけるなよ」

「もちろん。だから大和が早まらないよう少し待ってもらって、腕が立つ長月さんを『調査』に送り込む。武蔵さんと大和がネコノツメを託したくらいだし、こんな時こそ活躍、してもらわないとねえ。あ、そうそう。この件が片付いたら、葛城にもネコノツメを持たせたいと思うんだ。三本くらい作っただけ。あの子ってばわりと器用で——」

得意気に、そして満足気に語る一ノ傘姫乃という女性のこと人間を皮を被った正体不明のように見えるところ、不機嫌そうな声音をさせた大和が電話に出た。



再び連絡を取ってきた武蔵に指示された通り、長月は目的の鎮守府から少し離れた地点を目指した。

視界が悪い中でも大和を旗艦とする重装備部隊はかなり目立っていた。そこに刀一本を装備した小柄な駆逐艦一人が合流するのは、戦力云々に関係なく相当に気まずいものだった。

曇天の暗夜にあつて猶、撃沈王大和の気迫に陰りは一切無い。

「もう何度か会っていますけど、改めて——こんばんは、ドーカンシヤの長月さん。私の姉妹艦武蔵がいつもお世話になっています」

自分に八つ当たりをするなよと長月は苦々しく思った。「……こんなばんは」

「時計は？」大和は訓練兵を揺さぶる鬼教官のように聞いた。

「え？ あ、いや、就寝前に飛び出したから……」

「構いません。扶桑、長月さんに時計を」

長月はどこかで会ったような航空戦艦から腕時計を受け取り、右手首に巻いて恐る恐る大和の時計と付き合わせた。

「アラームを30分に——では今から30分後に私たちは鎮守府に攻撃を仕掛けます」

大和は冷めた声で言った。「対地攻撃とはいえこの雨なら三式弾より徹甲弾の方が良さそうです」

「待ってくれ！ まだ睦月が残ってるんだ」

「では、これを」そう言って大和が長月に差し出したのは信号拳銃だった。引き金が動かないよう四桁のダイヤル式南京錠で無理矢理ロックしてある。

「その信号弾を確認できたら私たちは作戦を攻撃から偵察へと切り替えます。タイムリミットを迎えるか合図の確認ができるか、あるいは……あるいは深海棲艦が攻撃を仕掛けてくるか、それまでは一切の手出しはしません」

「でもこれ、鍵が」

「暗証番号は私が今までにあの鎮守府で食べたピザの枚数です」

「……………」大和が真剣なのかふざけているのか、長月には判断が付かない。

「葛城は優秀でしたから、それくらい把握しています」

「……つまり攻撃を止めたければ、葛城が正気であることを30分以内に当人に直接確認して来いと。あんたも武蔵も回りくどいことをやらせるよ、まったく。目標が中途半端な作戦は放棄して考え直せつて遠征なんかでも言われるぞ。しかも駆逐艦一人の行動を分岐点にするなんて、撃沈王が情に引きずられて判断をミスったとしか思えないよ」

「私だって！」

大和の冷徹な鍍金は容易く剥がれた。剥き出された表情は英雄の姿からは程遠い、カレンダースとも変わらない艦娘のそれだった。

「葛城を殺すなんて嫌よ！ 仲間殺しなんて嫌よ！ 分かるんでしょドーカンシヤなら、カケラも残らない姿に変えられた仲間にとれだけ救いが無いか。沈んで深海棲艦になるくらいなら空が見えるうちに灰塵になることに涙、悲しさですつて？ 昨日までの葛城ならそうして欲しいって間違いなく言った、でも今日もそうとは限らない、深海棲艦になっても私に『助けて』って言うってくれるかもしれない、全部全部もう手遅れなのに！ 今日この時のために私は葛城の仲間だったんだから！ なによ、もしその時が来たらって……あんなに優しかった人が自分を失くして他の人を傷つけるわけ、ないじゃない……」

雨はうんざりするほど重く暗く降り続いた。重い艦装に重い使命、さらに天候までもが撃沈王にのしかかる。

本当に雨は大嫌いだと、長月は心の奥底からうんざりして前髪をかき分けた。

「練度も大したことない駆逐艦の小娘なんて信用できないだろうけどさ」

ネコノツメが鞘から抜猫され、無骨で規格外の刃が露になる。尋常の刀とはまるで異なる重厚な鈴のような抜刀音を大和は長月よりも聞き慣れている。

その刀は小柄な少女どころか鍛え抜いた大男ですら片手で扱える代物ではない。試作の一振り——長月が手にしている物が完成した時、試そうとした大和は重量に任せて振り下ろすだけで精一杯だった。開発を主導していた撃沈王でこの様では失敗作だと評されたネコノツメを、しかし長月はまるでその辺りで拾った流木の一片のように軽々と振ってみせる。

「私は睦月を助けるのが絶対の目的だ。何事もなく連れ出せたらそれに越したことはないんだけどさ、睦月は葛城の目から青い火が出た時に間近にいたらしい。穏便に、とは期待できないだろうね」

「……誰の安否も分かってないのにどうして、そんなに覚悟が決まっ

てるのよ」

「さつきは中途半端だつて言ったけど訂正する。あんたは信号弾を見て作戦を変更するか、私が殺した葛城だった何かに砲弾を撃ち込むか、二つに一つだ。他に無いことは保証する」

「これだからドーカンシヤは嫌いなものよ！ 大っ嫌い！ いつつもいつつも、私に分からないところで！」

「文句は元凶の武蔵に言ってくれ」

「これは私が！ 私の手で……決着を付けないといけないのに……！」

「だったら尚更、このネコノツメは有効活用させてもらうさ」

長月は大和に背を向けた。

「あと27分。あんたがくれた貴重な時間だ。無駄にはしないさ」



総合棟一階、応接室の床に転がって泡を吹いていたあきつ丸は「でありますっ!？」と叫びながら跳ね起きた。口元を拭いながら室内を見回すも、他の三人の姿は無い。飲みかけの茶に食べかけの煎餅もそのまま残っている。

「……えらいこつちやあ、であります」

あきつ丸は記憶の最後に焼き付いている、青い炎の眩しさを思い出してブルリと尿意をもよおした。

偽葛城に渡した携帯電話も床に落ちたままだった。拾って確かめるも本物の葛城との通話は切れていた。そのまま彼女は上官に状況を報告し、応援と指示を貰おうとした。しかし携帯電話のボタンがやけに固く、操作がままならない。さては偽葛城に破壊されたか、そう疑う自分の親指が極寒の地に放り出されたかのように震えていることにしばらく気付けなかった。

ふと、外の雨音に別の音が混じっていることに気付いた。何かのエンジンが駆動するような音だった。

「な、何でありますかあ……」

恐る恐る窓から外の様子を窺うと、照明灯にぽつぽつと照らされた埠頭に、町内行事などでよく見られる白屋根のパイプテントがひとつ設置されていた。屋根には『Uボート誘致』とプリントされている。勿論あきつ丸と睦月がこの鎮守府に到着した時にはこのようなテントは置かれていなかった。

謎の音の正体は発電機の駆動音だった。金属箱にスイッチやランプが付いている謎めいた機械やプリンタ、ノートパソコンなどに電力を供給しているらしい。

機械類に混じって数本の魚雷が並べられている。その弾頭はしかし通常の丸みを帯びたシンプルなものではなく、逆に爆発を回避しつつ物理現象を観察する実験装置のように見えた。

テントの一步外が土砂降りである中、海の方を向いて長机に置かれたノートパソコンの前に座っているのは、先程あきつ丸と睦月を出迎えて応接室に案内するついでに二人の肝を大破させた伊168だった。

「アイエツ!?!」

応接室のガラス窓は閉じている。テントまでの距離もある。だがあきつ丸が悲鳴を漏らすと、伊168のマウスを扱う手がピタリと止まった。そして尋常外の潜水艦娘はゆっくりと振り返る。応接室の方を――あきつ丸を見る目は冷め切っていた。

パソコンに向かう伊168だけではない。大切な機械類にテントの中から押し出されたように、雨に打たれる四人がトルピードランチャーを肩に担いで並び、鎮守府の侵犯を許さぬ防衛線を成していた。

伊19が、

【伊19：Lv. 150+1】

伊58が、

【伊58：Lv. 150+1】

伊8が、

【伊8：Lv. 150+1】

伊401が、

暁は姉妹艦の言葉にあまり耳を傾けずに話を続けた。

「例えばこの、グリーンピースが入っててあんまり美味しくないオムライスを——」

「あ。てつきり好きで食べてたのかと」と電。

「やっぱりまだグリーンピース嫌いなんだ」と雷。

響は自分の腕に噛み付いて笑いの嵐が過ぎ去るのを待った。

「暁は毎日ずつと我慢して食べてるわけ。でも見くびってもらっちゃ困るわ。逆境はこれだけじゃ終わらないんだから。これを見なさい」

そう言いつつ暁がもぞもぞポケットから取り出したのは、爪楊枝を支柱とする小さな乙旗だった。お子様ランチをお子様ランチたらしめる装飾に他ならないそれを、暁はケチャップで描いた猫の鼻に「テイクデイス！」勢い良く突き立てた。

「……………」と電。

「……………」と雷。

響は顔を変色させてテーブルに突っ伏している。隣の陽炎型一団が喉に何かを詰まらせたのではとハラハラしたが、電と雷はそんな響の様子を見慣れているため腹がつつて本当に息ができなくなるまで無視するスタイルである。

「オホホホ。どう、この逆境。こんな逆に子供みたいな雰囲気の中でもクールに振る舞える私ってば、やっぱりクールビューティなお姉さんなのかしらん？ あら電、この旗が欲しいの？ よいですともよいですとも。暁はお姉さんだから、はいあげる」

「いらない……というかスパゲッティのどこに刺せばいいのです……………」

「あら響、お腹痛いの？ 大変だわ。でもこれこそ真の逆境ってヤツだわ。クールビューティに振る舞わないと。ほらお水よ。——飲めない？ ふうむ、顔色も悪いみたいだし、今日はもうお休みしたほうがいいわ。心配しないで、全部この暁お姉様に任せればいいのよ」

その時、暁の背後に「姉さま？」と鋭く反応する者がいた。

「ああ大丈夫よ雷、クールビューティな私はちつとも気にしないわ。お姉さんキャラを被せていきたい気持ちはよく分かるもの。でも

何というか、雷が『お姉ちゃん』だったとしても暁は『お姉様』なの。レディでクールビューティな私のお下がりのお洋服とか貸してあげるのもやぶさかじゃないわ。なぜなら暁は」

「暁、後ろー」

雷が叫んだ時にはもう遅い。暁の左側頭部に摩天楼のような艦橋が傾いて取り付けられた。ランチ・ノンビリ・アトモスフィアを利用した狡猾で卑劣なアンブッシュだ。そのジエンガめいた艦橋の持ち主は天照大艦隊に一人しかいない。

「姉さま……ああやつぱり。この艶やかで綺麗な黒髪によく似合うと前々から思ってたのよ」

自分の頭から艦橋をもぎ取って暁に勝手に付けた山城は、暁の潤った長髪をうっとりしながら撫でた。青黒く作られたくまの上に据わった瞳は、見るべきではないものを見ている。

「正直におっしゃって下さい。暁って本当は扶桑姉さまなのでは？」

暁は否定できない。声の出し方が分からない。艦橋の重さで首を傾けつつ、自慢の髪を好きなようにされているというのに、しかし振りほどきたくとも頭の艦橋からおぞましいものが流れ込み、頭の中を髪よりもドス黒く侵食してゆく。それは『不幸』などという生易しいものではない。暁が経験したこのとのない感覚は『絶望』と呼ぶには闇が深過ぎた。

山城が暁の髪にキスをしようとした瞬間、「イヤーツー！」ゴウランガ！ 雷のチョップが間一髪で暁の頭から艦橋を削ぎ落とし、ブツダに手を引かれるように我に返った暁は飛び退くことができた。

「FLSよ！ 山城がまたFLSを起こした！」

雷が暁を手繰り寄せると同時に電は落ちた艦橋を拾い上げ、元々あるべき山城の頭に破城槌めいた勢いで振り下ろす。

「イヤーツー！」

「グワーツー！」

そこそこ重量のある艦橋で殴られれば冗談では済まないダメージが入る。山城の右側頭部に確実に生えるであろうタンコブを封じる要石めいた艦橋が戻り、脳震盪により山城は意識を失い倒れた。

「暁!?! しつかりしなさい、暁!?!」

暁を胸に受け止めた雷は頬を叩いて呼びかけた。頭に少し違法建築物を建てられただけの暁はしかし、「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」ブツダに慈悲を乞うように呟くばかりだった。

陽炎型一団が心配して寄ってくる中、響は響で一人、別府温泉めいて湧いてくる爆笑を止められずに山城の隣で腹を抱えて転げ回っている。

ナムアミダブツ。

天照大艦隊において、この程度の事件はチャメシ・インシデントなのである。

第34話 叢雲の薬指 — 海花と海鳥 ⑤

元は一ノ傘率いるブラック艦隊が拠点としていた場所なだけあって、常駐員が八人しかいない鎮守府としては不釣り合いに広く、今も多くの建屋が来るべき何らかの未来のために保存されている。鎮守府の全景は、天照大艦隊の鎮守府から増築された部分と長過ぎる射撃試験・演習場を除けば丁度、同じような風になる。工業地帯を防衛する最重要拠点としては人々を不安にさせるほど寂れているように見えた。要となる施設機能を除いてほとんどの扉には鍵が掛けられたままであり、葛城や傘姫、潜水艦らは四階建ての総合棟の二階に寝泊まりしている。オリョール海は嫌だが階段の僅かな昇り降りしかしない生活も嫌だと言う潜水艦たちが羽を伸ばしに積極的に海に出るほど窮屈な日々を過ごしている。実際、一階の執務室に籠もることが増えた葛城は若者らしくもなく目や腰の疲れを訴えた。猫吊さんに聞いている言うまでもなく、気分や体調どころかその生態がいつまでも謎のままである。

不要な照明は分電盤から電力を断たれ、また蛍光灯も必要な場所のための予備として回収されている。無人となった寮などは廃墟と呼ばれるのを待つばかりであり、その有様が敷地内の夜間の闇をいつそう深いものにした。元々そこで生活していた旧一ノ傘艦隊の者たちは元の姿をよく知っていることもあってからか、最低限の機能を残すのみの鎮守府を見ると胸が傷み、夜になれば建物の輪郭すら見えなくなる暗さを恐ろしく思いでできるだけ近寄ろうとしない。

天照隊の鎮守府も同様に節電と規則正しい生活のため消灯されるものだが、夜の帳が下りて艦娘が任務から戻ると、どの建屋にもポツポツと灯りが見えるものである。夜勤、三交替業務、ただの夜更かしなど理由は様々ある。

任務から鎮守府に戻る時、旗艦を務める睦月が短く探照灯を点滅させると、駆逐艦寮の眠っていない一室の窓から灯りに包まれた如月が手を振り返した。

「こういうのって、なんだかいいよね」と睦月は長月の側に寄ってはに

かんだ。

カレンダースは温かい場所にいるべきだ。長月はそう思っている。腰のベルトに刺した信号拳銃に触れつつ陸を目指す。

総合棟のように高い建物を見つければ10km以上先から可能だった。しかし低い位置まで見えるようになるまではもう少し近づく必要がある。普段ならば気にも留めない距離がもどかしかった。

鎮守府全体が目視できる距離に入ったことで指折り数える程度の小さな灯りが見えた。不幸中の幸いか煙や火が立ち上る気配はまだない。深海棲艦と成った可能性のある葛城が潜む鎮守府で今尚、誰かが灯りを必要としていることになる。少なくともその辺りで見かける深海棲艦よりは秩序があると長月は見た。暗然たる影の上から雨のフィルターが覆い隠そうとするあの場所の、睦月は恐らく総合棟一階のどこかで助けを待っている。あれほど灯りの少ない場所で、睦月が心細げでないはずがない。長月はいつそう目を凝らした。

長月が洞観者となり、猫に誘われるままに武蔵の様子を確かめに行ったことを思い出した。あの時はまだ猫を半分疑っており、見舞いを装って入り込んだ長月はくすねた包丁で艦隊を壊滅させる覚悟すらしていた。猫が人を動かそうとする理解不能な異常事態では万が一を想定せずにはいられなかったのだった。

そして今、その万が一がコイントス程の確率となって再び長月を誘っている。

被害が出てからでは遅いという大和の態度は艦娘ならば誰にだって理解できる。葛城が『その気』になっていけば鎮守府、そして周辺には既に悪夢のような炎と黒煙が上がっていたことだろう。鎮守府近隣の工業地帯までもが破壊されれば国の防衛力すらなし崩し的に傾くに違いない。睦月がその場に居合わせたらどのようなに動くかと分かり切った想像しかけるも、長月は頭を振ってその想像を払った。

以前、武蔵の身に異変が起こった時は彼女がマトモであってくれたために荒事は回避できた。その時は運が良かっただけの話である。今から長月は再び尋常を踏み外した艦娘がまともであってくれるか

を確かめ、目から青白い炎が出たからと言いつくすならば躊躇無くその炎を首ごと胴体から切り離して鎮火させる。むしろ今回は望みが薄いと分かっているのが幸いして、睦月救出のみに専念できそうだった。ただ、今だけは睦月の正義感が大人しくしていてくれることを祈るしかない。

全容が見えてきた総合棟の正面、埠頭に大きなテントと人影が見えた。大和との話の中でもまったく触れられなかったが、この艦隊には五人の潜水艦がいたことを長月は今になって思い出した。可能な限り関わりを避けてきた潜水艦である。

五人が五人とも常識を踏み外してしまった艦娘——洞観者と成ってしまった彼女たちにも理由は必ずある。しかし先ほど電話をかけてきた武蔵までもが彼女たちの存在には触れなかった。五人の潜水艦はハングド・キャット、つまり猫の庇護を拒み続けているのである。時雨や木曾のように「比較的マトモな世界」から踏み外さないよう長月が見張っている、といったような特別な理由もないという。招待を無視され続けている武蔵は理解に苦しむと嘆き、長月に言わせれば奴らこそ深海棲艦よりも分かりやすい異世界からのアンノウンだった。相互理解など試みるだけ無駄と断定する他にない。

その証拠にアンノウンらは、人類の脅威となった葛城ではなく、人類を救うべく単独で立ち向かう長月にロケットランチャーのような何かを向けている。

同じ艦隊の仲間であったはずの大和まで一切言及しなかったのは、実は扱いきれない猛犬の事をわざと思考から追いやったのではないかと長月は勘繰った。



トルピードランチャーを構えた潜水艦たちは単身で乗り込んできた間抜けにニヤリと笑みを作り形だけの敬意を表した。彼女らの旗艦・葛城に仇なす不埒な連中が少数精鋭で来ると予想しての準備だったが、大和の姿が見えないどころか、まさか駆逐艦が一匹、おまけに

洞観者とは。海老で鯛を釣ろうと期待していたらシーラカンスが釣れたような気分だった。予想外の範疇をさらに越えての襲来が愉快でならなかった。

水面下と水面上の両方に伊19、伊58、伊8、伊401の四人が遙か遠い的に向けて間断なく魚雷をばら撒いた。全速で突っ込んで来る駆逐艦を信管が捕捉し炸裂する。海中を進むだけでなくロケット弾のように空中からも突き進み派手に爆発する魚雷(?)を、しかし駆逐艦は堪えた様子もなくやり過ぎして向かってくる。

「いいよいいよお洞観者……シーラカンスどころかドラゴン釣っちゃったね！」

伊401だけではない。他の四人も悪鬼めいた笑顔を見せていた。艦娘としての練度が測定不能域にある彼女たちにとって普通の魚雷で沈む艦に価値は無い。そして一撃必殺の暴威を全方向から浴びているはずの、だが全く怯む気配を見せないあの大剣を持つ駆逐艦は最高だった。潜水艦たちが久しく感じていなかった強者と対面する感覚は絶頂までの道に近い。

敵駆逐艦がさらに接近してくる。制圧雷撃とも言うべき殺意を好く好く送り続ける攻撃がまるで通用しない。

「——イヒッ♪」伊19が笑った。

我慢しきれなくなった四人は『本気で』魚雷を撃ち込み始めた。既に鬼姫クラスの深海棲艦を数体は沈められる魚雷を消耗している。陸に立つ彼女らには山積みした魚雷を狙われても雷撃の壁で防御できる程の準備がある。

申し訳程度の照準器が付いているトルピードランチャーから放たれた魚雷がようやく一発、小柄な駆逐艦の胴体めがけて空中を真っ直ぐ飛んだ。

「さあ死んでみせてよ」伊8が喘ぐように言った。「耐えきれたら犯したげるからさあ！」

洞観者の木端微塵になる様は絶頂するほど素敵に違いない、四人がそう期待して目を凝らした瞬間だった。

駆逐艦は水面を蹴って跳躍、魚雷を飛び越えるつもりかと思われた

瞬間にさらに魚雷を踏みつけて跳躍、海面に踏み落とした魚雷が発生させた水柱を受けて見上げるほど高く跳躍——潜水艦らは一瞬、天に昇る龍を幻視した。

遙か上空、制服の損傷一つ無い駆逐艦は姿勢を整え、スカートをちよこんと押さえながら雨と共に急降下した後に着水した。ハッキリとこちらの四人を見据えている。「着水の瞬間を狙ってくれても構わなかったのに」と、その目は確かに言っていた。

両者の距離は約2km弱。最終決戦距離まで詰まっていた。

「もう我慢ならんでちー！」

伊58が叫んだ。他の三人も同じ気持ちだった。アイツと本気で海戦がしたい。命の駆け引きがしたい。

トルピードランチャーを担ぎ直して四人は海に走り出そうとした。駆逐艦との距離はさらに1kmまで詰まっている。鎮守府という障害物のない海で戦いたい。殺し合いたい。

しかしそれを制止したのは、ずっとテントの下でおあずけを食っていた伊168である。

「待ちなさいバカ達！ 発情するなら300メートルまで引き付けてからにしなさい」

「「「うへえ〜い」」」

一気に冷めてしまった四人の照準はやっつけ仕事のものになってしまい、魚雷の一発一発から当てようとする意気込みが消失した。距離が近く直線的な回避が難しくなったというのもあるが駆逐艦も雰囲気の変化を察したらしく、逆に訝しんで速度を落とした。

両者の間がジリジリと縮まる。伊168はこつそりと得意でもない小口径砲を装備した。

「もうすぐよ。合図したら予定通りフルファイア」

「「「うへえ〜い」」」

「3・2・1はい今！」

「「「もっと早く言え！」」」

トルピードランチャーの一斉射撃により、もう目と鼻の先にいた駆逐艦の周囲に派手に何本もの水柱が立ち昇った。露骨な目眩ましと

足止めである。再び怪人の如き跳躍をされる可能性もあったがやる気のない魚雷で速度を緩めさせたのが良い方向に働いたらしく、狙い通り駆逐艦は水柱の檻の中で停止した。

「この瞬間を待ってたのよ。海のスナイパー、イムヤにお任せっ！」
水柱の檻には一方方向だけ穴が開けられていた。檻の中の獲物と伊168を結ぶ直線上である。

手練の駆逐艦は当然それに気付いた。その先でへっぴり腰で小口径砲を構える伊168にも。今までの陥穽はその一発のためか、ここに来てそんなちやちな砲で私をどうにかできると思っているのか、そう言いたげに見つめている。その慢心こそ狙い通りと、伊168は引き金を引いた。

魚雷よりも軽く速く放たれ、パコンと軽い音を立てて刀に弾かれたそれは砲弾ではない。

「いよしっー」とガッツポーズをする伊168と自分が弾いた物を見て普通ではないことを悟った駆逐艦は、ここまで来てようやく刀を刀らしく構えた。檻を構成していた海水が滝のように駆逐艦の周囲に降り注いだ。

小口径砲をポイと捨ててテントの中のパソコンの前に座る伊168の背後に、他の四人が集まった。モニターの明かりが五人の顔を照らす。

「どうなの？ どうなの？」と伊19が急かした。



イムヤ「んん〜……」

ゴーヤ「どうなんでち？」

イムヤ「やつぱり駄目。ノイズが多過ぎる」

ハチ「潜水艦がノイズを言い訳にするなんて情けない」

シオイ「波形の一番高いここが固有振動数じゃないの？」

イムヤ「これだけ他の周波数でも振れてたら、意味のあるデータとも言い難い」

ゴーヤ「意味わからん！　そもそも固有振動数って何でち！」

長月「私も分からない」

イク「イクも分からないのね」

ハチ「私の読んだ本にも書いてなかった」

シオイ「もうさ、とりあえず撃ってみようよ。振動魚雷」

イムヤ「あんた達は今まで何をやってきたのよ……もう一回だけ説明するわよ。振動魚雷については霧の艦隊に係る資料を後で読むこと。まずはとにかく、ただ爆発とか泡の膨張・収縮をぶつける単純な攻撃だけじゃ破壊力には限界があるの。せつかく当てた魚雷がダメージコントロール以前に装甲で対処されたら悔しいじゃない？　そこで標的の固有振動数だか共振周波数だかの振動を持つ入力を相手にぶつけると、それが何倍にも増幅されて出力になる——つまりダメージが何倍にもなる。ここまでは極楽師匠に習ったからいいでしょ」

ゴーヤ「分かる？」

長月「さっぱり分からん」

イムヤ「だ・か・ら！　霧の艦隊とかナノマテリアルとか意味不明なものの特性なんて分かりっこないけど、艦娘と深海棲艦の外構造くらいなら普通の機械みたいに二次遅れ+むだ時間系で近似できるだろうと仮定するわけ。ああ理解しなくていいわ。普通の機械よ、普通の。そんなものと思っとけばいいから。じゃあそういう仮定で具体的に何が分かるかっていうと——こんな感じに山が一つあるグラフが書けるの。横軸が周波数で縦軸がゲ……ダメージ倍率」

シオイ「ほうほう」

イク「ふむふむ」

イムヤ「この山の高さがダメージ倍率を表してて、1000の力で叩いたらダメージが500とか1000とか余裕で増幅されるわけ。で、この山がいちばん高くなるこのポイント。この周波数を固有振動数つつってんの。いいわね？」

ハチ「なーる」

シオイ「そういえば極楽師匠もそんな絵を書いてたよーな」

長月「誰だその極楽師匠ってのは」

ゴーヤ「極楽師匠は極楽師匠でち。それ以上でもそれ以下でもない」

イムヤ「じゃあ話を戻すわよ。固有振動数は相手の弱点みたいな数字ともう面倒臭いからそう覚えてくれればいいけど、問題はその周波数をどう測定しろって話なの。とにかく機械の色んな要素で特性は変質しちゃって、いざ機械を作ってみたら自分で発生させた振動で壊れちゃった物だって少なくないわ。共振アレルギーみたいに強く揺れたら共振だつて決めつけちゃう人も少なくないリスクの高い現象なの。まあ私も極楽師匠から聞いた話しか知らないんだけど。一言で言うてしまえば振り子みたいだとか単純なのに、実際は振動が発生する要因や部分はたくさんあって、それを支えるたくさんの骨格はもつとたくさん。そんなの考えるなんて途方も無いでしょ。だから共振問題についてはシミュレートできるならできるに越したことはないとして、企業とか職人のノウハウで回避したり現場で試行錯誤したり、共振しても耐える強度になるよう後追いで補強したり、あるいは振動弾頭を開発したつていう天才チャイルドがいてくれたらなつて感じなの」

シオイ「じゃあ私たち駄目じゃん」

イムヤ「最後まで聞きなさい。というか極楽師匠の話は全員で聞いたでしょうが……。だから私たちが作った振動魚雷は何というか、ローテクなの。まず相手にセンサー叩き込んで固有振動数を測定して、得られた数値を弾頭に入力して、それを発射する。対霧の艦隊用の魚雷が全自動でやってくれるっぽい作業を手動でやるつてわけ。敵の艦種が同じなら別個体も固有振動数は近いはずだからデータの使い回しができるかもつて期待してやってるんだけど、さっきも言った通り問題は肝心の測定方法つていうねえ」

イク「決められた通りの振動で強く震える弾頭を作るの、失敗しまくつたのね」

イムヤ「何も知らずに作つてた意欲のほうがスゴいわ」

長月「レーザーだか音波だかで測定できるセンサーはないのか？」

イムヤ「あるかもしれないけどさー、ハンマーでガツ！ とやって波形を観察するのが一般的。しかも打撃ポイントを何箇所も決めて、対象物に余計な振動が一切加わってない状態で、何回か叩いてみてやっと確認らしきものが得られるくらいよ。有線ハンマーの代わりに無線砲弾。対象は激しく動いてて、測定チャンスは限られてる。おまけにターゲットは戦艦を想定してたのに駆逐艦が来ちゃった。極楽師匠の教えだからここまで作ってはみたけど、あれこれ考えれば考えるほど、ねえ……」

ゴーヤ「どーすんでち！ 大和を一撃で沈める魚雷はどうすれば作れるの!？」

イムヤ「ものすごく静かな環境であと50……最低10回はテストして波形を取りたいわ。測定弾は5発しか作れなかったから使い回すしかないわね。あるいは……」

ハチ「あるいは？」

イムヤ「普通に測定器付属のハンマーで叩く。これなら測定弾より数億倍マシだと思う。ケーブル長とか接近の問題とかあったけど、今はホラ、ここにいるわけだし。駆逐艦」

イク「それなら簡単そうなのね」

長月「ハンマーで叩くって、具体的には？ ピコピコハンマーみたいなものか」

イムヤ「対象に観察できるくらいの振動を発生させないと意味ないし。五寸釘を打ちつけるくらいの強さで全体まんべんなく、いやトルピードランチャーで狙えそうな箇所絞るかな？ 各ポイントで5回くらいってどこかしら」

シオイ「面倒臭い……予めいろいろ想定するのが潜水艦というかさあ」

イムヤ「いきなりだったんだから仕方ないでしょ。ていうか今の今まで何も知らなかったくせに」

ゴーヤ「メンドイけど、せっかく作った振動魚雷が無駄になるよりマシでち」

ハチ「えーと駆逐艦のあなた、そのまま動かないでね。最初は頭を

強く測定した方が全身を調べるのに面倒がなくて——」

長月「発想が白露レベルだ阿呆共が」

ネコノツメのハンマーのような棟が潜水艦五人の頭頂部に振り下ろされた。状況を弁えずはしゃいでいた声が無くなり、『Uボート誘致』パイプテント内は発電機がマイペースで働き続けるばかりとなった。

猫を通して繋がりが合ったはずの、しかしハングド・キャットの繋がりを拒否し続ける五人を、長月は複雑な目を見た。武蔵からは幾度となく説得を命じられていたが、腕っ節だけでは戦争には勝てないと教えたのも武蔵である。例えば長月に、あのラジコンで遊ぶことこそ使命と言わんばかりに働かない航空戦艦・日向を更生させることができらるだろうか。いやできない。長月はハートまでもがネコノツメのように強靱であるわけではない、その点では他のカレンダーズと変わらない少女である。

できれば一生、関わり合いを本気の本気で持ちたくなかった阿呆潜水艦たちをせめて並べてテントの中に寝かせて、長月はその場を後にした。



総合棟一階の窓は一箇所のみ室内の灯りが漏れていた。

潜水艦たちが冰山空母をも撃沈させる勢いで魚雷をばら撒いたばかりであり、葛城がそれに気付いていないはずはない。元から楽に事が済むとは考えていなかった長月だが、ここに至ってもまだ窓ガラスの一枚も割れていない静けさは予想していなかった。

「心理戦というか……こういうのは球磨の領分だろ……」

長月は海戦用の艦装を外し、ネコノツメと鞆、信号拳銃だけを持って恐る恐る明るい窓に近づいた。

おっかなびつくり室内を覗くと、そこは客人を迎えるための小奇麗な椅子とテーブルがしつらえられた応接室だった。室内には誰もいない。

秩序的な室内には特に荒らされた様子は見当たらない。テーブルには三人分の湯呑みがあり、放置された食べかけの煎餅が、つい先程までこの部屋が平和的に使用されていたことを表している。そして煎餅を食べ終わらぬまま部屋を出たらしく、出入り口の扉は開いたままだった。

長月にとって部屋の検分といえば密室殺人よりもマウスポイントで室内をクリックしまくる脱出ゲームである。もしくは金田一的トリックに感心するのも嫌いではない。つまりはその程度の観察眼しか持たず、とはいえ応接室の扉は開きっぱなしで密室殺人も脱出ゲームも成立しないし、いつまでも雨が降り続く屋外から屋内を観察していてもしようがない。

出来る限り静かに窓を破って中に足を踏み入れようとした、その時である。長月が差し入れた右足はブミリと柔らかいものを踏み付けた。

「ひゃうん!？」

可愛らしい奇声を上げた長月は飛び跳ねて椅子を蹴倒してしまった。

外からは死角になっていた窓の真下に罠のように設置されていたのは他でもない、長月が昼間にその姿を発見した時からすべてが始まった元凶、間抜け陸軍人が倒れていたのだった。

「……おい、生きてるか？」

応接室に入った長月が陸軍人をネコノツメでつつきながら昼間の黒い制服姿と今の緑ジャージ姿を頭の中で比較していると、ふと、おかしな点に気がついた。ミステリに明るくない長月の脳にカミナリが走った。

失禁である。ジャージの上から失禁しているのである。するとつまり陸軍人はわざわざジャージに着替えてから失禁したのである。茶をこぼした可能性も無くはなかったが湯呑みはすべてテーブルの上であり、加えて今この陸軍人が倒れている尻の下あたりの木床にシミができています。その場で失禁したと見て間違いないだろう。これはミステリである。名探偵ならば臭いをかいで確認したかもしれない

いが長月には勿論そのような趣味はない。

「普通、お漏らししてからジャージに着替えるんじゃないか？」

服を濡らしてしまうからジャージを着用するのであって、ジャージは濡れることを予期してオムツ的に使えるものではない。清掃のためにジャージを着用することならば長月にもあるが、葛城に嫌がらせをすることが目的だったはずの陸軍人にわざわざ制服を脱ぐ理由がない。仮に、百歩譲って、ジャージがそのようなオムツ的用途であったとしても、敵陣内部で着替える暇があるならば予めその辺で用を足してこいという話である。

いくら葛城が目から青い炎を出したといっても自分の陣地を排泄物で汚されも無頓着、ということがあり得るだろうか。深海棲艦はそのあたりどうなのかと純粹な知的好奇心から知りたくなつた長月だったが、陸軍人の目を覚まさせて詳しく聞きたいとまでは思わなかった。

「死んではいないみたいだし……いいか」

かくしてあきつ丸の活躍は終わった。

後日、なぜかジャージに着替えた上でお漏らしするアブナイ女と噂され、誤解を解こうと必死に無駄骨を折るのだった。この手の悲しきアクシデントの御多分に漏れず、それはまた別の話である。



長月が応接室から廊下に出ると、そこは外部の暗さが嘘のように照明が行き届いていた。鎮守府全体、建物内のおおまかな構造は長月ら天照隊のものと変わらないからか、廊下や扉の形質が同じであるのに案内板などの些細な違いが違和感を生み出し不気味だった。

廊下はツンとした臭いで充満し、右手の曲がり角の向こうからバシヤバシヤと水が暴れるような音がする。

長月は臭いの正体にすぐに思い至った。

あれはいつかの昼食時のこと、阿呆空母共が「自分のカレーの肉が少ない」と食堂でいつものように争っていた。まとめて処罰されたた

め直接的犯人は不明のままだが、一航戦もしくは五航戦の誰かが手裏剣めいて投げたスプーンが消火器に突き刺さったのである。白桃色の粉末が、よりにもよって食堂中に飛散する。まさに地獄的光景だった。様々な意味での悪夢だった。阿鼻叫喚の食堂となってしまった。日常茶飯事の範疇を超えてさすがに腹を立てた他の艦娘たちは、必死に雑巾で食堂中を拭いて回る阿呆空母に見せつけるように出前の牛丼を食堂の外にレジヤシートを広げて美味そうに食べた。

この場所でも消火器が破裂したのか意図的に使われたのか、どちらであつても良い状況であるはずがない。長月はネコノツメを構えながら水音がする方へと忍び足でゆっくり歩いた。

廊下の角を曲がった先から続く廊下は便所と部屋二つが並ぶだけで短く、便所のあたりを中心に白桃色の消火薬剤が床から天井まで撒き散らされている。床には黄色い安全栓が抜けた消火器が転がっていた。

そして水音は勿論便所の中から聞こえてくる。その音はまるで、女性の頭を掴んだ少女が水で満たしたバケツにその頭を突っ込み片手で押さえつつ、もう片方の手でホースを持ち水を継ぎ足しているようなものだった。

「……………」

確かに見ているものを必死に理解しようとする長月の頭をじわりと頭痛が襲う。いくら大和型戦艦を無傷で撃破する洞観者であっても、女性の頭を掴んだ少女が水で満たしたバケツにその頭を突っ込み片手で押さえつつ、もう片方の手でホースを持ち水を継ぎ足している場面に出くわせば、思考回路のショートのひとつやふたつは発生するものである。潜水艦といい陸軍人といい、世界は阿呆に満ちていた。しかし少なくとも長月から見て、女性の頭を掴んだ少女——葛城の頭を掴んだ睦月は全身まんべんなく白桃色にしながらも構うことなく必死の形相だった。

睦月の体を何度もタップしていた葛城の我慢が限界に達したのか、腕で強引にバケツを払いのけて便所のタイルに倒れ込んだ。

「ゲエツホッ！ オゴエツ！」

「消えましたか葛城さん!? そんなっ、まだ消えない!」

空気の代わりに体内に侵入した水で苦しむ葛城の顔面に、睦月は容赦無くホースで追撃的水責めを行う。人間よりも空母ヲ級に近い姿をした女性が水に苦しむ様子は、長月には無駄に貴重な場面に見えた。重点的に狙われる葛城の左目からは水圧に押されながらも青白い炎が吹き出していた。

葛城の容姿が容姿であることもあり、確かに左目から青い炎が出れば深海棲艦だと断定されても仕方がないのかもしれない。海で出逢えば誤射されても「そんな紛らわしい姿をしている方が悪い」とすら言われそうだった。

だがこうして目の当たりにした炎に長月は心当たりがあった。のみならず長月自身、その輝きが炎の色であると、この場で初めて知った。

長月は水と消火薬剤で酷い有り様となった便所に一歩踏み入った。

「それ水とか消火器じゃ消えない火だぞ。たぶん」

「長月ちゃん!? どうしてここにいるの!?!」

長月は睦月の無事が嬉しかった。そしてそれ以上に、このような葛城を見ても助けようとする、いつもの睦月であってくれることが嬉しかった。

「まず葛城に水をかけるのを止めてやってくれ。溺死するから」

葛城が泳げないのは天照隊でも知るところだった。水に顔を付けることすら苦手であったらしく、大量に水を飲んでしまった葛城が話せるようになるまで睦月は背中を叩いたりさすったりした。その間に長月は葛城の涙目から出る炎をまじまじと観察した。

「ハア……ハア……ト、トイレデ溺レ死ヌトコダツタ……」

「ごめんなさい……」炎を消せなかっただけでなく、もう手遅れかもしれないと言わんばかりに睦月はしょぼんとした。

「睦月ちゃんハ悪クナイヨ。僕ノ目カラ変ナモノガ出チャツタノガ悪インダン」

葛城はぐつしよりと濡れた髪を掻き分けながら左目のあたりに触れた。指の隙間から熱気を持たない炎が逃げてゆく。諦めたように

寂しく笑った後、長月の方を見た。

「ホラ、迎エガ来タヨ。僕ノコトハイイカラ逃ゲテ。大和ガ僕ヲ始末シニ来ルハズダカラ」

「嫌ですっ！ 何も悪いとこなんてないじゃないですか、なのにどうして！」

「最後マデ信ジテクレル人ガイテクレルダケデ嬉シインダ、僕ハ。アリガトウ睦月チャン。イツカコウナルツテ分カツテタカラ大丈夫ダヨ。結局、僕ガ何ダツタノカハ最後マデヨク分カラナカッタケド、死ンダト思ツテタ海鳥ガ生キテタシ、不思議ダケド睦月チャンヲ見テルト明ルイ満月ニ照ラサレテル気分ニナレルンダ。僕ガヒトリポツチダツタラ未練ヲ残シテタ」

「そんなこと……言わないでくださいよお……」

「ヒトツダケ、才願イシテモイイカナ」

「嫌です！ 睦月は聞きたくありません！」

「大和モ優シイカラ、キツト僕ノコトデ悩ムト思ウンダ。撃沈王ダツテ強クテモ普通ノ戦艦ト変ワラナイカラ、悩ンダママ危ナイ海ニ出テ欲シクナイ。ダカラ睦月チャン、モシ大和ガ泣クノヲ我慢シテタラ、ソノ涙ヲ分ケテアゲテクレナイカナ」

「絶対に嫌です！ 嫌ですよっ……！」

「傘姫提督ハ……イイヤ。アノ人ハスグ地獄ニ来ソウ。先ニ行ツテ待ツテルツテ伝エテクレル？」

「自分で……言ってください……」

睦月は葛城の胸に顔をうずめた。

「ゴメンネ。重タイ連絡任務バカリデ」

葛城は睦月の頭をやさしく撫でた。それは御伽話のように尊く、慰め合う二人は本物以上に本物らしい姉妹のようだった。

二人への声の掛けづらさといったら、不機嫌な叢雲へのそれとは比べ物にならない。「……あのー」長月は二人に聞こえるか聞こえないか程度の声を掛けた。

炎を纏いながらも優しい目で長月の方を見た葛城は、長月が持つ刀を見てぎよっとした。巨大な刀身が死神の大鎌を連想させたのだから

う。「……空母ハ駆逐艦ニ処分サレルツテ思イ込ミハアツタケド」自分を殺しに来たのが大和ではなく駆逐艦で、しかも雷撃でもなく斬首が今時のスタイルなのかと勘違いをした。「コノ世界ノベテランダト自負シテタケド、艦娘ノ首ヲ落トスタメノ刀ガアルナンテ……初メテ見タヨ」

「あ、いや」長月は慌ててネコノツメを鞘に納めた。「待て待て、早まるな」

「どういうこと長月ちゃん！」と睦月はまだまだ泣き足りない顔を葛城の胸から上げて、長月に噛み付いた。

「その刀、そんな風に使うものだったなんて睦月は聞いてない！ただのインターアだって言ってたのに、睦月たちのこと騙してたの!」「ち、違うんだ。私の話を……」

「駄目だよ睦月ちゃん、アノ子ダツテ覚悟シテ来タンダカラ。僕ハ大丈夫ダカラ、任務ハ全ウサセテアゲナイト。……僕トアノ子ノ覚悟ガ揺ラグ前ニ」

「待てつてば、私はそうじゃなくて……」

「睦月はそんなことさせないっ！ 葛城さんも長月ちゃんもみんなみんな、誰も悲しませたくない!」

睦月は清掃用具置き場の中からモップを掴み、それをぎこちなく構えて長月と葛城の間に割って入った。

「葛城さんをどうこうしたかったらまず睦月を倒してからにして、長月ちゃん!」

葛城とは感動的な抱擁をしていた睦月が「えいしやらあ!」と姉妹艦を威嚇するというのは、長月の心を堪らなく凹ませた。カレンダズは天照大艦隊の中でも類を見ないほどの素朴な仲良し姉妹である。その素直さこそがカレンダズであり、その象徴が一番艦の睦月なのである。「そいやつさあ!」そんな睦月に、あまりに掛け声や構えが情けないとはいえ、敵意を向けられるのは辛いことだった。人懐っこいと言われる動物に噛み付かれるようなものである。

「……何もしないから、ほら!」と言って長月はネコノツメを壁に立て掛けた。「だから落ち着いてくれ。私を嫌わないでくれ。頼む!」

「わっしょーい！ ……ホントに何もしない？」

「猫に誓って何もしない。闇プリンをかけてもいい。私を信じてくれ」

闇プリンとは天照隊内で原則として禁止されているプリンを鎮守府外で購入し内部に持ち込んだ違法隠匿菓子である。

葛城にも「大丈夫だよ睦月ちゃん」と言われた睦月は振り上げていたモツプを下ろした。

「でも長月ちゃん、葛城さんの目とか大和さんが来るとか、どうしたら……」

「それなんだがな。葛城、あんたも落ち着けるだけ落ち着いてくれ」

「……落ち着イテルヨ。僕ハモウ覚悟デキテルカラ」葛城はタイルにへたりこんだままだった。

「そんな切腹する侍みたいな覚悟も捨てて、心と体の両方をリラククスさせてくれ。全身の筋肉から力を抜いて心拍数が普段通りになるくらい」

「ヤメテヨ。色々言ワレタラ怖クナツチャウカラ」

「武蔵の時といいあんたといい、私は心がどうか詳しくないんだぞ。でもとにかく、その青い炎には心当たりがあるんだ」

ネコノツメを試す一対一の演習時、長月は武蔵に自分の技を『魔法』だと指摘された。その時は深く考えず否定した。しかし本当はどうだろうか。何らかの物理現象が働いた結果として成せたと長月がい加減に考えていた超長距離斬撃、それはネコノツメを振れば遠方的が切れるような単純なものだっただろうか。武蔵の砲撃を躲しつつ戦艦の射程距離から相手の背にある艦装だけを狙って局所的斬撃を発生させ、切断することなど可能だろうか。ネコノツメの長さを13kmに伸ばして武蔵ごと艦装を斬るのはわけが違う。

長月とネコノツメは狙った場所に斬撃を生み出した。長月がネコノツメを振り、武蔵の艦装が位置する空間のみを切断する。確かにこれは魔法と呼べるのかもしれない。

「魔法でも何でもいいけど、今は原理がどうか考えてる暇はない」

肝心なのは、長月が生み出した斬撃が、記憶に焼き付くほど強い光

を放った一閃が、葛城の炎と同色の青白い閃光を放ったことだった。「たぶん気合とかヤル気とか緊張した状態でその青い炎は出る。本当にたぶんだけど。だから落ち着け。具体的には、大和が今までにこの鎮守府で食べたピザの枚数を言えるくらいに落ち着け」

「大和ガ？ ピザ？」

「そう、ピザ。その枚数が知りたい。私じゃ信じられないか？ なら睦月からも頼んでくれ。私は大和が食べたピザの枚数が知りたいんだよ。今すぐに」

「……………」睦月はしばらく考え込んだ。「…………あの。長月ちゃんって姉妹艦の中でたまに変なこと言うんですけど、それは皆のためにわざとなんです。皆がサメにびっくりしないようにとか気を遣ってくれたり理由があるんです。だから葛城さんも信じてくれませんか？」

駆逐艦二人にじつと見つめられて、葛城は「分かつた分かつた」と言いつつ立ち上がった。



「アモ大和ガコノ艦隊ニキテカラ食ベタピザツテスゴイ量ダヨ？ 初メテ食ベタ時ナンテ注文シタノガ届クマデ」お箸でいいのかしら？ 手で取るのは品がないかしら？」ツテ言ツテタクライ物ヲ知ラナイオ嬢様ダツタノニ。ソレトコーラモ。「ラムネとは違ったシユワシユワですね」ツテ言イナガラ、ピザ食ベテコーラ飲ンデピザ食ベテコーラ飲ンデピザ食ベテコーラ飲ンデピザ食ベテ……ケツコウ多メニ注文シタハズナノニ、アツトイウ間ニ消エチャツタンダカラ。僕ト提督ノ分マデ。大和ハ提督ノコト苦手ミタイダケド、ピザ食ベテル時ダケ提督ヲ压倒シテ絶句サセテルノニ気付イテナインダヨ。ドン引キダモン。アノ傘姫提督ヲ黙ラセルツテスゴイコトナンダカラ。アニメノ大和ガ死ヌホドゴ飯オカワリシテタデシヨ、アレヲ目ノ前デ見セツケラレルト實際引クヨ。アサリシジミハマグリサンヲ絶滅サセタ後ハ、生態ピラミッドノ大和カラ下ノ階層ヲ食ベ尽クシタ後モ止マラナイ勢イダト僕ハ思ウネ。

普段モツトイイモノ食べテルデシヨツテ聞いたら『ピザは別腹ですから』ツテ笑顔。Lサイズノピザ3枚ガ余裕デ収マル別腹ツテ何？ 別ジャンナイ方ニハ何ガ入ッテルノ？ アア勿論、撃沈王ハ体ノラインモ英雄ラシク保タナイトイケナイカラ、プロポーシヨンハ知ッテノ通り完璧ナンダ。オ風呂デ見タカラ間違イナイ。タブン食べタモノヲ片ツ端カラ体内デ燃烧サセテルンダロウネ。脂肪ノ燃烧トカイウレベルジャンクテ千何百度ノ火デバーニングサセテル感ジデ。最強ノ戦艦ツテ言ッテモ燃費ガ悪イトカイウ次元ジャンイヨ。一時期ハホントニ艦隊ノ才金ガ食費ニ圧迫サレテ無クナリソウダカラツテ提督ガ泣ク泣クポケツトマネーヲ使イ始メテ、サスガニ大和モ察シテ、少シハ落ち着クカナト思ツタノガ甘クテサ。今度ハ大和ガ自腹ヲ切り始メタンダ。アア勿論、天照大艦隊モ同ジダト思ウケド食費ハオ給料ニ含まレル感ジダカラ食べタケレバ好キナダケ財布カラ出セバイイシ、量ト出費ヲ減ラスノモ自由ダヨ。イヤ確カニ自由ナンダケドサ。大和ノ才金ダカラ僕ラハ口出シデキナイナーツテ思ツテタラ、今度ハ僕ガ深海棲艦的パワーデ大和ヲ洗脳シテ才金ヲ出サセテルンジャンイカツテ疑惑ガカケラレチャツテ。マア確カニ正直ナトコロ、ピザデ大和ヲ釣ツタコトモ何回カアツタヨ？ ソノ時ハ僕モ地味ニピンチニナツテネ、ダツテ撃沈王ノ安全ガカカツテタワケダシ。遠回シニ大和ニ、ピザ洗脳中毒疑惑ガ深マルトモウ食べラレナクナルカモツテ伝エテ事無キヲ得タヨ。撃沈王ノ影響力モスゴイケド、ソレ以上ニピザパワーガ凄カッタネ。日本ノ平和ハピザデ支エラレテルト言ッテモ過言ジャンイヨ。ほんとに。呆れるけど。日本ノ英雄、撃沈王大和ガコノ鎮守府デピザノ味ヲ覚エルマデこの国はどうやって戦ツテタンダロウね。僕も一応ベテランだけど不思議ダヨ。ソレデ大和が僕ノ無実を証明スルタメニどうしたカツテイウとね、冷凍ピザ買ってきたの。自分デ。そのへんのお店カラ。一枚一枚が袋に入つたものなら日本中の誰でも食べられるし深海棲艦は関係ないでしょうって。そういう問題じゃないと僕ですら思ったんだけど、まあ何故か僕の疑惑はそれで晴れたというか大和が根負けさせたというか、結果オーライだからいいんだけどね。食パンとか焼いてる食堂のオーブンが小さ

いからって特大オーブンまでわざわざ買ってきて。あのお嬢様が自分でだよ。ポイントカード作ったのも嬉しそうにしちゃって、もつとすごいカード持つてるくせに。僕とは関係無くピザが好きなんだって主張したかったとは言うけど、案の定それ口実だったよ。『量と質は落ちるけれど値段が一枚あたり十分の一なのよ。つまり十倍食べられるってことなのよ、すごいと思わない!』だって。その単純計算が成り立つ方がすごいよって教えたくても、とっくに最適な焼き加減の研究を進めてたしき、どうしようもなかった。定期的にデリバリーも食べて幸せ気分になるんだけど、自分で好きだけ焼いて食べるのも楽しいらしくてね。焼いて食べてのサイクルを弾数無限の機関銃みたいに繰り返せる胃袋って、あれ絶対に研究する価値のあるホモサピエンスの突然変異的な何かだと思うんだ。それか体内にブラックホールを飼ってるか。ああ勿論、大和は健康にも気を遣って野菜とかいろんなものもちゃんと食べてるよ。ピザと一緒に。だってピザは別腹だしね。ついでに食後のデザートもそれはまた別腹なんだって。もう意味不明。何にせよ猫吊さんの存在と同レベルの不思議だね。勘違いしてもらっちゃ困るけど全部事実だよ。僕の頭がおかしいんじゃないかって大和の食欲がおかしいんだからね」

【偽葛城：150+2 ↓ 150+1】



秀でた戦闘能力を持つ長月も、それ以外の部分は他のカレンダーズ同様に平凡な駆逐艦であり、今の今まで時間を確認しなかったというミスも犯してしまう。

「……まずい、遊び過ぎた！」長月が渡された腕時計をふと確認すると、大和に与えられた三十分も時間は丁度、残り一分を切ったところだった。

長月が唐突に腰のベルトから信号拳銃を取り出したため睦月と、大和ピザトークですっかり頭を冷やし左目の炎が消えた葛城の二人は長月から飛び退いた。

「それで結局、何枚なんだ！」長月は葛城に怒鳴った。

「え？ 何が？」

「だから大和が食べたピザの枚数！ 見ろこの信号拳銃、鍵が掛かってるだろ。これの暗証番号なんだよ。これを撃たないと海でスタンバイしてる大和たち戦艦六人がこの鎮守府を攻撃してくるんだよあと45秒！」

「はあ!?」「ええっ!?」葛城と睦月が疑う余地もないほど長月はあからさまに焦っていた。

「早く言え！」

「知るわけないよ、そんなの！」

「なんで!？」長月は手汗で信号拳銃を落としそうになった。

「大和があんたなら知ってるって言ってたぞ！」

「僕だってさっき言ったでしょ、大和がどんだけ食べたか！」

葛城と長月を交互に見る睦月は鎮守府を狙う大和の姿を想像して涙を浮かべた。

「だから、そのどんだけ食べたかを聞きたいんだよ！」

「分かるわけないよ！ 1000から先は数えてない！」

まさかの四桁。

ダイヤルの一桁目はゼロだろうと予め合わせていたが、それすらも違う。力が抜けて信号拳銃がタイルにカツンと落ちた。何もかも諦めかけた、その時である。

「こ、この鍵……壊せないのかなあ」

睦月は藁にもすがる思いで口にしたのだろう、だが長月は「あ。そうか」落とししかけた氣力を辛うじて掬い上げ、壁に立て掛けていたネコノツメを掴んだ。

「自分で気付け私のアホーッ!!」

抜猫した長月はタイルに落ちた信号拳銃の鍵にネコノツメを突き立てた。戦艦の装甲すらも容易く切断する刃が鍵を直下のタイルごと砕いた。

長月にとっては鍵もタイルもガラス同然でも葛城と、壊せないかと言っただけ言ってみた睦月はまた長月から一步離れた。

尋常ならざる刀、ネコノツメの開発を主導したのは大和だと長月は聞いている。果たして信号拳銃を渡した大和が、長月が鍵を自力で破壊することまで織り込み済みだったか、それを考えている暇もない。信号拳銃を掴んだ長月は一足で便所から廊下を飛び越え窓を蹴破り、雨の降り止まぬ外に躍り出ながら時計を見た。

残り二秒。

一秒。

アラームが鳴った。

疾うに覚悟を決めた大和らは時間と同時に斉射しただろう。砲撃音が届くより早く徹甲弾の雨が降ることになる。だが長月は構わず雨雲を照らすように信号弾を空に放ち、海の方へ走って総合棟を背にし、ネコノツメを構えた。

信号弾を確認した大和らは攻撃を中止するだろうが、既に放たれた一撃目は止まってはくれない。鬼姫クラスの深海棲艦を殺す気で絨毯爆撃めいて降ってくる砲弾を睦月と葛城が躲せるはずもない。ならば長月が防ぎ斬り守り切る。

最悪の視界の中、長月は音速を遥かに超える速度で飛来する粒のような砲弾群を捕捉した。先に大和が言っていた通り三式弾でなく徹甲弾なのは幸いだった。

この鎮守府に睦月を迎えに行く途中、自分のスマートフォンを切り捨てた後にイメージの構築は済ませた。ただ想定していたよりも的が小さく超音速で大量に飛んで来る、それだけのことだった。

一閃で幾十の斬撃を。武蔵が言った魔法を。洞観者の青白い炎を。

この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。

迫り来る砲弾群の一発に一閃、目視した全砲弾に重ね掛けて幾十閃。正面上空、圧縮された青白い炎の刃が空を砕く亀裂となって走る。それは鎮守府全域を覆う網を成し、砲弾の嵐を真っ向から受け止めた。発生した衝撃が一带のガラスを残さず砕く。ネコノツメ自身も悲鳴を上げるように空気を切り裂いたため、長月が立つ周囲の物を金属だろうと何だろうと例外無く衝撃波で爆砕させた。

赤く燃え広がる炎、青く鋭く走る炎、性質の全く異なる炎が混ざり

第35話 叢雲の薬指 — 海花と海鳥 ⑥

第一執務室のエアコンが瑞鶴に破壊され、竹櫛が泣く泣くエアコンを買い直してから丁度一年が過ぎようとしていた。洗いたてのカラー皿のように白く艶やかなボディを持つエアコンは、なんと風向きを変える羽を手で直接動かす必要がなく自動なのである。手動ではない、自動なのである。リモコンのボタンをひとたび押せば勝利は確定、室内にこもった熱気を狙い撃ちである。室内の空気を循環させていた扇風機は涼しくなる季節まで温存できることとなった。自動的に冷房と除湿を行い、さらに消費電力は昨夏まで使用していたものは比べ物にならないのだから科学の進歩とは深海の悪夢に勝るとも劣らない恐ろしいものである。快適さをひとたび肌で感じればフィルターの掃除など手間とも思われないのだった。

比べて窓の外は雲も風も一面の海ですらも照りつける太陽に焦がされ、涼しげな要素が何一つ存在しない灼熱地獄である。まだ長月の一日が始まって間もないが、昼食は早くも冷やし中華に決まった。ラムネを腐らせたような色の海がある景色は眺めるだけならば季節感を情緒豊かに味わえる——涼しい部屋からただ眺めるだけならば。窓ガラスが熱を持ち、長月が座る秘書机のあたりをじわりと温めた。

天照大艦隊が遠方の艦隊の手を借りてまで総動員されている中、涼しげに夏を眺めている長月はグツグツと沸き立つ引け目から逃げるために外の景色を眺めては仲間たちが汗水垂らして働く姿を想像し罪悪感に苛まれるという悪循環に陥っていた。秘書艦を務めた経験があまりなく、執務室という場所に慣れていないのも心の平穩を乱すのに拍車を掛けた。

室内であるのに手に嵌めた軍手はそういう意味ではなかったのだが、今は、心だけは共に作業をしているという気分を少しだけ味わえる無駄アイテムとなった。

「お茶が入りましたよ」

長月が窓の方から振り返って見ると、左腕に『提督代理』と書かれた腕章を付けた電が盆に湯呑み一つと急須を乗せて持ってきた。湯

呑みから立ち上る湯気がエアコンの風に吹かれて揺れた。室内の温度は二十七度に設定されている。そして長月の見たところ、電が入れてきた茶の温度は九十度前後はありそうだった。

「いえいえ。勘違いはしないでほしいのです」電は長月が何か言いかけるのを制した。

「水分補給はちゃんとしなさいといけないのですから、長月はこの緑茶を飲み干さないといけません。すると必然的に長月は心頭滅却の心構えをすることになります。１リットル沸かしたお湯をすべて飲みきった頃には、無想の境地に至った長月は外を気にすることもなくなって反省文に集中できる。ついでに水分補給もできる。こんなに合理的な一石二鳥が他にあるでしょうか。いいえないのです」

「……知らなかった。電って体育会系だったんだ」

「冷たい麦茶の方がよければ早く書き終えればいいだけなのです」

今は電が使っている竹櫛の席には水滴がしたたるグラスがあった。

「勘弁してくれよ。私だって好きでサボってるわけじゃなくて、何を書けばいいのか本気で分からないんだ。原稿用紙5枚とか1年かかって埋められる気がしない。400×5で2000字だぞ。般若心経を書き写しても1枚分くらいにしかないんじゃないか」

「ああ、ナイスアイデアなのです。じゃあ原稿用紙5枚分、みっちり写経してください。日本神話の神様から名前を拝借する艦隊が仏教を参考にするのは変かもですが、まあ反省っぽい感じにはなるでしょう」

「いや待て。私はなんとなく頭に浮かんだものを言っただけで、般若心経なんて難しい漢字だらけだつてことしか知らないぞ。それを2000字分って終わらないだろ」

「普通に反省文を書いてたら1年でも終わらないのでしよう。別にどちらでもいいですよ。改行を駆使して原稿用紙を使い切るか般若心経で埋め尽くすか」

「……ブツダデーモン」

「聞いたことのない暴言が聞こえましたよ。言つときますけど司令官は最初、原稿用紙20枚つておっしゃったんですからね。『叢雲の薬

指』の1話平均文字数が1万字弱だから楽なものだろうって。私は別に、今すぐ温情を捨てて残り15枚の原稿用紙を持ってきてもいいのです」

「分かりましたよ頑張りますよ一人で勝手に飛び出した私が悪いんですよ」

電はグラスをもう一つ出して大きな水筒から麦茶を注いだ。

「反省文も写経も嫌なら……報告書でもいいんですよ」

「報告書？ 大和が公表したっていうヤツを丸写しすればいいのか。ああ、それに私がスマホを失くしたとか怪我したとか書き足すけど」

「睦月と二人揃って無事なのは何よりです。こうして元気できてくれて嬉しいんですよ、長月」電の表情が僅かに硬いものになった。

「でも大和さん達の滅茶苦茶な『抜き打ち訓練』に巻き込まれて、散弾みたいな金属片を全身に浴びて、お医者さんが絶望的とおっしゃった摘出手術の最中に三途の川を大ジャンプで飛び越えて傷痕も残さないほどの回復を遂げたり」

電は麦茶を注いだグラスを「どうぞ」と敢えて長月に差し出した。長月は二つの意味でしかめっ面をして「……どうも」軍手を嵌めた両手でグラスを受け取った。今朝も電に着せられた制服の袖口から包帯が覗いた。酷使した腕は回復が他の傷と比べて遅いか早いかではなく、元々の形を構成していた物質から腕を再構築しているようだった。グラスの重量が両腕に重くのしかかる。痛みも無視できるものではない。軍手と包帯の下を見られる者が今は電の他に数名しかないのが幸いといえば幸いだった。せめて皮膚の下が元の色に落ち着くまではカレンダーズには見せたくなかった。

「それと急成長を遂げて改二になった睦月です」電の話は続いた。「長月の無事を聞く直前まではひどい顔をしてましたけど、それからの活躍は知っての通りです。カレンダーズの一番艦でリーダーみたいな部分はあつたにしてもですよ、さつき向こうからついに、吹雪に続いて長門まで仕事を奪われたって半泣きの電話がありました。姉妹艦隊は元の人たちが戻るまで睦月が完全に指揮しそうな勢いです。……傘姫司令官は面白がって好きにさせているみたいですけど。お

かげで私は暇人なのです。竹籬司令官には叢雲さん、一ノ傘副司令官には雷が付いて行って、私はここで責任者の代理として傘姫司令官と戦うのが仕事だったはずなのに、まあ、向こうで直接話せる睦月のほうが早いですからね。長月が原稿用紙の前から逃げないよう見張ってるくらいしかやることがないのです」

長月は麦茶に少し口をつけて、グラスを慎重に机の上に置いた。

「喜ばしいことじゃないか、急成長。私の怪我だって、うん、まあ治るならいいじゃないか」

「……原稿用紙、1枚追加します」

「なんで!？」

「私は仲間が大切なのです」

そう言った電の瞳は真剣で、悲しそうだった。

「それだけ酷い怪我をしないといけなかったほど、あれだけ我武者らに成長しないといけなかったほど、危険な目に遭ったのでしよう?」

「……お願いですから二度とやらないでください。使命なんて考えずに精一杯逃げてください。自分たちだけの力で何とかしようとしたので、私たちを呼んでください。なにが『抜き打ち訓練』ですか。その嘘は死にかけてまで通さないといけないものなんですか。もし長月と睦月が帰らなかったら私は——少なくとも旧一ノ傘艦隊の皆は、大和さん達を相手にどんな手を使ってでも本当の事を知ろうとします。今だって本当は……。長月はこのまま、何も教えてくれないんですか」

電の目を見れないまま長月は「ごめん」と呟いた。

「ただ誤解はしないで欲しい。私も睦月も、大和や葛城を恨んでなんかいない。むしろ睦月は今、葛城のために頑張ってるんだと思う」

「ふむ。さようなのですか」ケロリと一転して軽い調子になった電は長月のグラスをひよいと取り上げ、麦茶を一息に飲み干した。

「長月の嘘がつけない素直なところは好きです。誰とは言いませんが誰かさん達に爪の垢を煎じて注射したいくらいですよ。あの陸軍人さんの存在をすっかり忘れてしまうほど大変だったみたいですね。そしてニュースで言っていた『抜き打ち訓練』には間違いなく裏が存

在する、と。まあそうですよね。向こうの鎮守府で起こりそうな事件なんて、大方の予想を外れないでしょうけどね。カレンダーズの口がかなり堅いので真相は分からず終いかともどかしかったのですが、ええ本当に長月が素直で分かりやすくして——あれ？　ちよつ、なんで泣くんですか!?!」

「……だって……ぐすつ………武蔵とか、みんな、私を子供扱いするんだもん……」

「眺みたいなこと言わないで下さい……。ごめんなさいです。長月のことを下にも上にも見たことはないのです。同じ駆逐艦じゃないですか。ただ睦月に仕事をほとんど取られて時間が空いて、情報だけが入ってきますから色々と考えてしまうのです。ですから、許して欲しいのです。ほら今度こそ冷たい麦茶ですよ。反省文の代わりの写経も一回でいいですから、ね?」

鼻をすすする長月は頷いて、電から再びグラスを受け取った。気が減った途端に両腕の痛みが我慢しきれないものとなり、麦茶をすべて喉に流し込んで早々にグラスを机の上に置いた。

「……私、般若心経なんて一文字も知らない」

「知ってる艦娘なんて存在しないと思うのです」駄々をこね疲れた後の暁をあやす時のように電は苦笑いを作った。「ちよつと探しますから」

竹櫛の机に戻った電はパソコンに向かった。

「でも真面目な話、今回の隠蔽……いえ、マル秘訓練は何と言いますか、外に対してだけアピールするものだと思うのです。思ってるだけですよ?　私は何も知りません。世間様から非難轟々なのは当然として、身内の私たちは好き勝手に受け止めろ、みたいな感じですよね。今はあちらの姉妹艦隊と鎮守府がドタバタしてて考える暇がなくても、元葛城さん達の謹慎処分が解除されれば——」

「モトカツラギ?」

「ええ。——解除されて状況が楽になれば長月と睦月に注目が集まるはずなのです。あの時、叢雲さんからの電話を無視したでしょう。怒り狂った叢雲さんまで飛び出して、動ける人はみんな慌てて後に続い

たのですから。私は次の日に備えて早く就寝してたので、騒がしきで布団からは出ましたけど遅れたので待機してました。最終決戦かと思うくらいの大部隊でしたが、聞いた話だと砲撃音が聞こえた後、途中で大和さんに通せんぼされて『今のは訓練でした』って謝られて、堪忍袋を爆発させた叢雲さんはナイフで大和さんに襲い掛かったそうですよ。球磨さんが止めてなかったら危なかったんですって。あの撃沈王を相手に一触即死だったそうですから、いやあ、私も見たかったのです」

「そういえば私、あれからまだ叢雲の顔を見てない……怒ってる、かな」

「叢雲さんが戻ったらアイスの差し入れでも持っていくといいのです。大丈夫なのです、あの人も長月のことはちゃんと分かってくれますよ。怒られるのは避けられないでしょうけど。——そういったわけで、長月と睦月は既に注目の的なので、皆さんが帰ってきたら質問攻めですよ、たぶん。そういう意味でも心配してまして、頑張り過ぎな睦月は明日にでもこちらに戻ってきてもらってもいいです。この猛暑の中で明らかなオーバーワークですから、長月は睦月をメンタル的に労ってあげて欲しいのです。睦月は長月をフィジカル的に助けようとするでしょうから、何と言いますか、そうしていつものカレンダーズに戻ってください。睦月にだけ帰ってきてと言ったら変に勘繰られるかもですねえ。その時は傘姫司令官に無理を言ってもカレンダーズ全員に休んでもらいましょう。それがいいのです」

「睦月、そんなに活躍してるんだ？」

少し自慢気になりそうな長月を電は諫めた。

「司令官さんの代理として言わせてもらいますけど、良いことではないですよ」

「改二にまでなって、さらに急成長してるのには？」

「姉妹艦隊の総旗艦まで任せてと言わんばかりの勢いがいつまでも続くと思いますか？ 今後は天照隊から派遣する形で人を出すことになると思いますが、それであちらが楽になるほど単純な話ではありません。先日までの葛城さんを思い出してみてください。右手に弓、左手

にタブレットを持って発着艦と書類仕事を同時にこなす姿を」

バラエティに富む任務を任されるカレンダーズは実戦経験を重視されており、演習に出されたとしても数合わせであることが多かった。電は思い出せと言うが、長月は葛城と戦ったことがない。しかし雑務のついでのように天照大艦隊の艦娘を軽く捻る過労死寸前の姿は何度となく語られて、長月の耳にも姿を想像できる程に入っていた。

「睦月にも同じことをさせたいと思います？　語り種になってる私たちから見た姿なんて氷山の一角ですよ。あの空母がもし……あくまで仮定ですけど、もし深海棲艦だったら、人類は制海制空どうのこの以前に戦略レベルでどうしようもなく負ける他ないと私は思います。傘姫司令官みたいな手綱の握り方をする鬼姫が深海棲艦にも存在すればの話ですが、とにかくそんなレベルの業務なのです」

「睦月は私たちが知ってる姿の睦月が一番いい。カレンダーズは、みんな」

「そういうことです」

電はネットから拾った般若心経を印刷して長月に渡した。

「見たこともない漢字だらけだぞ。そもそもタイトルから何て読むんだコレ？」

「分からなくても写せはするでしょう」

「理解しなくても徳が高くなったりするのか、写経って」

「知りませんが、ガッツリやりたいのなら調べますよ」

「いやいい。坦々と写す」長月は痛む腕でペンをゆっくりと動かし始めた。

「なあ電。あの時、睦月がカレンダーズに送ったメールは見たんだよな」

「ええ。見ましたね」

「それで、どう思う？　もし青白い炎を出した奴が——」

「ストップ」電は強引に遮った。「葛城さんは訓練を行うために、本格的な『空母ヲ級っぽい』コスプレのアクセサリーとして青く燃えるように見える何かを用意したんです。その火が何色であれ葛城さん——」

「元葛城さんの目が発火するだなんて常識的にあり得ません。そうですね」

「……その通りです」

「思わせぶりなことを言った私が悪かったです。本当に『抜き打ち訓練』以上の情報は耳に入っていないんですからね。好奇心と同じくらい、傘姫司令官の情報操作に巻き込まれたくないとも思ってるのです。好奇心は猫を殺すと言いますし。で、何のお話なのですか?」

「えーとだな。仮に青い炎を魔法みたいに出せる奴がいたとしたら、そいつは何なのかな。例えば……人間よりも深海棲艦に近いのかな」
「それは例えば、龍驤さんのようなタイプの空母に言える事ですよね」

睦月の事、葛城の事、そして洞観者の事にばかり気を取られていた長月は、摩訶不思議な能力でヒトダマのような光を発し艦載機を操る空母の存在を今の今まで失念していた。

「海は勘違いの畑です。幽霊船の正体見たり無人島。何か心配事があるみたいですが、今更、分からないことが一つ二つ増えたところで、やっぱりそれは今更です。私たちはそんな戦いをしているのですから」

少し座り心地の良さそうな椅子に深く腰掛けた電がもし、あの時の葛城を見たらどう判断するのだろうかと長月は想像した。葛城の側にいたのが睦月ではなく電だったならば事態はより簡単に終息しただろうか。いくら仮定してみても電の言う通り分からないことが今更増えていくばかりだった。

「手が止まっていますよ長月。どれくらい進みましたか」

「知らない字を写すのって想像以上に苦痛だぞ。電も暇ならやってみればいい」

「確かに暇とは言いましたが、やるべき事はそれなりにあるのですからね」

「ところでさ、さつきモトカツラギって言ってたけど、どういう意味だ?」

「姉妹艦隊の仲間になるわけですから近いうちに正式な発表があると思うんですけど、変わるそうですよ。艦名。正規空母ってところは変

わるでもないそうですが」

「……今回の件が原因か？　だとしても名前を変えさせられるって、あんまり酷いんじゃないか」

「まだ傘姫司令官に少し聞いただけなのですが、懲罰的な意味ではないそうですよ。むしろ話した印象だと、今のドサクサに紛れて葛城さんの悪印象を闇に葬ろうとしている様子でした。新しい艦名を考えただのも自分だって自慢気でしたよ。元葛城さんご本人にも既に通知してて、わりに好印象だったのですって。でも『羊の皮を被ったエイリアン』ですからねえ、傘姫司令官。お仕事でお付き合いました感想だと、どちらかというと葛城さんより傘姫司令官の方が深海せ——」

完全に手を休めている長月に気付いた電は唐突に表情を引き締め、パソコンに向かった。モニターは印刷した般若心経を開いたままだった。

「さあ仕事しますよ、仕事。天照大艦隊の夏は姉妹艦隊のサポートに追われそうですからね。長月も腕の具合が良くなったらスポーツドリンクの輸送任務から始めてもらうのです」

「せめて葛城の新しい艦名くらい教えてくれよ」

「それは勿論、後のお楽しみ、なのです」

「ここまで話したのなら教えてくれたっていいだろ」

「だから……傘姫司令官なら『それは勿論、後のお楽しみ』にする、という意味です。司令官代理の私が一番おあずけされてて、あの人のあることないこと話したくて仕方がなくなってるのです。天照隊が葛城さんのことを誤解せず良い人だって分かっていることを理解した上でナイショにしているのです。わざわざ『この冷蔵庫には高級プリンが入っています。食べてはいけません』ってメモ残します？　わざと目に付く所に置いておく嫌がらせです。空母寮でなくても戦争になつてますよ。どうして一ノ傘一族ってあんな人ばかりなのでしょうね。エイリアンに遺伝子つてあるんですかねえ。葛城さん達もせっかくの謹慎ですから、この鎮守府の営倉を使ってくれれば色々とお話を聞いたのに、喫茶店で寝泊まりするなんて素敵じゃないですか。なんていうお店でしたっけ？」

「ハングド・キャット」

「と言いますかその喫茶店も大和型の艦娘がやってるのでしよう？」

喫茶店で優雅にカフェすることって謹慎じゃあないですよね？ 傘姫司令官のお給料が減らされたのは妥当だとして、私たち元一ノ傘艦隊が使ってた鎮守府を中途半端に破壊した大和さん達がどうなのですよ」

「あと私も怪我した」

「ただの怪我じゃありません、明らかに致命傷でした。今生きているのが不思議なくらいの。天照大艦隊所属カレンダーズ八番艦長月を死なせかけたのに謹慎とは名ばかりの長期休暇ですよ。いくら撃沈王だからって特別扱いにも限度つてもものがあるのです。それに、疑惑のある艦娘が深海棲艦として覚醒してしまった時のための抜き打ち訓練なのに、その前提であって懸念材料の艦名を変更してごまかすだなんて長月は怪我のし損じゃないですか。お金だけは入りましたけど撃沈王なら資材とプリンを持ってお見舞いに来るのが筋というものなのです。ああいえ、もちろん長月の命が資材とプリンで補えるという意味ではないですよ。とにかく、暗躍してコソコソ隠そうとするなんて御天道様は許してはくれないのです！ 天照大艦隊なだけに！ まあ、事情があるのは明らかなので怒るに怒れないところもなきにしもあらずですけどね。ただのご近所さんが今後は姉妹艦隊になるわけですし、仲良くしていきましょう。天照隊が発足した時は人数が倍になりましたが、今度は単純に増えるだけでなしにあの全員練度測定不能の方々が加わるとなると、長月はどう思います？ 私は雷の独走状態がやっと崩れるのが愉快なのです」

「私に真面目に写経させたいのか、雑談させたいのか、どっちだ」

「真面目に手を動かしつつ話し相手になってください。原稿用紙1枚は写経で消費して、残り19枚分のカルマを私との雑談で浄化できるのですから楽なものでしょう」

「カレンダーズ全員分のカルマを合計しても電には届かないと断言できると」

「業務に精を出し過ぎると業が深くなるんですよ。私と司令官の子孫

は苦勞するかもしれせんね」

「……どうして猫は電みたいな捻くれ者じゃなくて、私を選んだんだろう」

「また珍妙な暴言を吐きましたね長月」

「意味のない独り言ですよ提督代理」

「ところで暁と響が睦月の急成長に興味を持ってるのですが、そのあたり何か知りませんか？」

「今からでも睦月たちを呼び戻せないか」

「まあ酷い。私とのおしゃべりは姉妹艦に押し付けたいと言っただけ」

無言の返事と共に長月は原稿用紙に向かい直した。構わずしゃべり続ける電の声を聞き流しながら、ふと葛城の事が気になった。

睦月がこっそりと長月に教えた話では、『正規空母 葛城』は本物が呉にいて、天照大艦隊を襲撃した事のある空母ヲ級に似た葛城は自身の存在に確信を持てなくなったという。睦月が言った「誰にでも間違いはあるよ」で済ませられる事だろうか。加えて艦名が変更されるという情報は、電が勘繰る裏よりも深い何かがあるという気にさせる。深海よりも深い何かがある。

「聞いてますか長月」

「聞いてません提督代理。写経で忙しいんです」

「そんなに写経が楽しいならやっぱり原稿用紙20枚、頑張りますか」
「分かったよ頑張って雑談もするよ、もう」

何かがあるにせよ、執務室は涼しく鎮守府は静かで平和だった。



夏です。

すると必然的に、薄着です。

正午を回ると特に暑さに備えた格好が必要なのは言うまでもありません。

いつかは堂々と自分の姿を世間様に馴染ませないといけなかった

のですから、今回の件は気分的にも外見的にも一新する良い機会でした、なんて血を流した長月ちゃんの前では口が裂けても言えません、あの可愛らしくも強い駆逐艦の二人のためにも、僕が卑屈であつてはなりません。胸を張って前を向きましょう。

睦月ちゃんを意識したショートにまでバツサリ頭を軽くしたのは本当に正解でした。人の目が違います。深海のお化けから珍しい外国人にまでランクアップした感じです。提督に紹介してもらった美容室のお兄さんはかなりのワザマエと評価せざるを得ません。最初に僕の髪を「綺麗な銀髪」と言ってくれたところから非常に好印象でしたし。もう人にジロジロ見られる電車もジメツとした暑さも苦ではないのです。この『あたりまえ』を僕はすっかり忘れてしまっていました。

新幹線の改札口をたくさん荷物を持った人々が入り出ていきます。その様子はぼんやり眺めていてなぜか飽きることがありません。僕はあまり目立たない所から観察していました。何が面白いのかは自分にもよく分かりません。

海鳥が乗っている新幹線もそろそろ到着するというのに、話す事が決まりません。積もる話がそれこそ積もりまくっているのですが、海鳥が僕を見た時にどんな顔をするかが気になります。昔の僕ではない僕が「あなたの姉の海花だよ」と言っていて信じて貰えるでしょうか。電話をした時とは違って面と向かうわけですから、今日一日の会話が記念となるかトラウマとなるかは海鳥にかかっています。お願いだから妹には、好感触とまでは言わずとも想定範囲内のリアクションをして欲しいところです。夷川家の今後を考えるのはそれからにしましょう。僕も海鳥も昔のようにはいかないのですから。

改札を通る海鳥からは見つけやすく通る人様には見られにくい、そんな都合の良い場所なんてなく、僕は不審者にならない程度に柱の影に潜みました。やはりどうしても人目を引いてしまうのは仕方がないとはいえ、今日は別の理由でビクビクせざるを得ません。僕は今、謹慎中のはずです。大和も潜水艦たちも猫吊さんも揃って謹慎しているはずなのです。提督だけは鎮守府の復旧作業があるので普通に

仕事をしていますが、給料を九割カットされた上で休む暇もなく働いていますから妥当でしょう。インガオホーとも言いますし。

鎮守府に居場所がないため追い出されて、仕方なく喫茶店『THE HANGED CAT』の二階に借りた部屋で一日中正座しているべき者が、呉からはるばるやって来る妹に会うなど許されるはずがありません。武蔵さんが妹の方の都合を色々付けてくれて大和たちが行け行けと背中を押すので僕はこうして新幹線を待っているのですが……スーツを着るような関係者に見つかって処分されることについては百歩譲って良しとしましょう。では「謹慎をやぶって妹と遊んでいる」と天照大艦隊の皆さんにバレたらどうでしょう。僕は今度こそ抹殺されてもおかしくありません。

夏です。

すると必然的に、猛暑です。

正午を回ると鎮守府のコンクリートは焼肉ができそうなほどの熱を持ちます。

衝撃波が全域のガラスを念入りに砕き、徹甲弾の破片が雹のように降り注いだ鎮守府の復旧作業は地獄的でしょう。

天照隊の姉妹艦隊という形で僕らの艦隊は取り込まれ、鎮守府の長く使用していなかった寮などの設備はサテライトとして復旧させることになりました。雪のように積もった埃はきつと衝撃波で天井まで舞い上がったことでしょう。潮風がせめて換気扇代わりになってくれることを祈るばかりです。鍵を掛けっぱなしで放置していたので内部では小型多足生物を頂点とする独自の生態系が出来上がっている可能性も否定できません。それに加えて工業地帯の防衛なども普段通り行ってもらうのですから、その名の通りの大艦隊が遠くの他の艦隊にまで応援を要請するほど人手が足りないのでしょうか。小型多足生物に限っては文字通り猫の手を借りたほうがよいかもしれません。いつそのこと一帯を吹き飛ばして新しくしてしまった方が早いとの意見も勿論あったそうですが、長月ちゃんが命懸けで守ってくれた鎮守府を一時的にでも壊すだなんて睦月ちゃんが黙っていないはずです。高練度の僕をバケツの水に沈めまくったせいかな練度の異

常上昇を遂げた睦月ちゃんを筆頭とする天照大艦隊の皆さん——今後は姉妹艦隊となる仲間たちに、今は頑張ってもらおう他にありません。僕にできることは謹慎のフリをして妹と遊ぶのみです。バレたら球磨さんに殺されます。マジで。

さて、予定時刻通りに新幹線が到着するアナウンスとホームに新幹線が入ってくる音が聞こえてきました。

とりあえず、謝っておきましょう。『正規空母 葛城』は僕ではありません。いつから僕は自分を葛城と名乗るようになったのでしょうか。行方不明となった海鳥の捜索に出てから自分まで行方不明となってしまうお父さんの前に戻るまでの一年の間に、僕に何があったのでしょうか、なんて自分で分からないようであれば誰にも分かりつこありません。軍部だつていい加減なものです。あれだけ僕の事を警戒しておきながら『正規空母 葛城』が二人も存在していることに気付かなかつたのですから。

早い乗客が奥の階段から改札へ流れ込んできます。そんなに急いでどこへ行くのでしょうか。……本当にそうでしょうか。葛城が呉の所属となった後でもう一人の葛城が深海棲艦のような姿で現れてもすっかり見落とすことは現実的な確率で起こり得るのでしょうか。そして「バレちゃったなら、艦名を変えればいい。でしょ？」と、まるで予定されていたような手続きが僕には用意されていました。命拾いをした分際でも疑問は持ちます。

僕は誰なのか。誰だったのか。海鳥なら覚えているはずですが。それを確かめなければなりません。

そして疑問ついでにもう一つ。じゃあ僕の提督で、天照大艦隊の副提督の従姉妹を名乗る一ノ傘姫乃は何者なのか。長月ちゃんや武蔵さんと同じ洞観者となったからでしょうか、あの人こそ放っておいてはならない何かのように思えてなりません。

海鳥は僕が覚えている姿よりも少し垢抜けたように見えました。僕は柱の影から出て、海鳥に向けて小さく手を挙げました。

改札を通り抜ける直前に小奇麗な空母ヲ級を見つけた海鳥は一瞬、固まりましたが歩調を強めて真っ直ぐ僕に向かってきました。気を

張ったがゆえに切符を通すのを忘れて止められるあたりがいかにも海鳥らしくて、僕の肩の力が抜けました。

今日は傘姫提督のような変なものは忘れましょう。

気恥ずかしそうに駅員さんに頭を下げる海鳥に、僕は姉らしく落着き払って近づいていきました。



「おい……カレーは三時のおやつじゃないんだぞ」

ランチタイムを過ぎたハングド・キャットは珈琲一杯で粘る客の休憩スポットになる。満席時に二階に上がらせていた潜水艦たちも降りてきて、五人でテーブルを囲んで怪しげな書類やら凶面を広げている。言うまでもなく水着姿ではない。アルバイトと猫には潜水艦グループに近づかないよう武蔵は言い聞かせていた。

カウンター席に齧り付いて離れようとしないう大和は次のおかわりを要求した。

「暇なんだから食べるしかないでしょ。不味いコーヒーと美味しいカレーしかないお店で、他に何をしろって言うのよ」

武蔵は姉妹艦をこれでもかと蔑んだ。

「仕事を取り上げた途端に最悪の穀潰しだな貴様は。なら私が食っちゃ寝ライフに意義を与えてやる。外でチラシを配れ。謹慎だか何だか知らんが、この店に奉仕しろ」

「お腹が空いて動けません」燃料が枯渇した艦娘に何ができるのかというニュアンスで大和は言った。大和に言わせればハングド・キャットのカレー皿は小さ過ぎるのである。「チラシ配りはいいけれど、それならまず補給が必要でしょう？ ほら早くカレー」

「もう残ってない」

「嘘になる嘘を言いなさいな。奥から漂ってくる香りは何？」

「あれは今晚のお客さんの分だ。客でもないお前なんぞに出せる分はもうない。閉店して残った分は食っても構わんが、それまでの夕飯は知らんぞ。いい機会だから燃費について考えろ」

大和は激怒した。「撃沈王が餓死したら責任取れるの!？」

「自分が大和型であることが恥ずかしいぞ私は……」

武蔵とアルバイトの軽巡はクレーマーが騒いだことを客に謝った。店内の客は全員いそいそとスマホを取り出した。画面を覗き込むまでもなく英雄『撃沈王』が起こした珍妙なかんしゃくをつぶやいているのが武蔵には分かる。武蔵の近くでじっとしていた茶猫が「にゃあ（どんまい）」と鳴いた。

武蔵は大和の空になっていたコップに水を注いだ。

「一応言っておくが、客ではないとは言っても金を取る事に変わりはないからな。食費が宿泊費を上回っているのは驚くべき特需だ。開店記念日ほどではないにせよ材料を多めに仕入れておいてよかったよ。つい先日、面倒を見る洞観者が一気に六人も増えてな。実は少し助かってもいる」

「自分の艦隊の、自分以外のメンバー全員が怪しげな宗教に入った時の気持ち武蔵に分かる？」

「猫を崇めている点では宗教と言われても否定はせんよ。だからこそ表立っては動かない」

「つまらない反応ですこと。あーあ、何か面白い事でも起こらないかしら」

大和がぼやいた時だった。

店の扉が弾けるように開かれて来客を告げる鈴が乱暴に鳴った。店内でくつろいでいた猫たちが一斉に毛を逆立てる。ダイナミック入店で店内の全員を驚かせた者は一直線にカウンター席の大和に向かって走り、その勢いのまま誰もが羨む躯幹に飛び込んだ。

完全なる奇襲であった。

「左舷に被弾！……うおぶっ……」

戦艦大和とて無敵ではない。臨戦時ならばいざ知らず、気を緩みに緩ませた上に貯蔵タンクにカレーと白米をしこたま積んだ状態での脇腹に体当たり被弾は魚雷のクリティカルヒットにも等しい。腹部を圧迫されたことにより食道を逆流しようとするものを辛うじて留めたのは撃沈王の賞賛されるべき根性だった。

なんだなんだと寄ってくる客やアルバイト、潜水艦に構わず、魚雷の如く大和に突っ込んできてそのまま抱きついた者は国の英雄を敵視するテロリストか？ いや違う。昨日イメチェンした姿をカワイイカワイイと褒めたばかりの艦隊旗艦だ。めそめそと泣く情けない艦隊旗艦である。

大和が口を押さえて顔を青くしているので、仕方なく武蔵が代わりに尋ねた。

「あー、お巡りさんに深海棲艦が歩いていると職務質問でもされたか？ 何があつたか聞いてやるから、ほら落ち着け」

その空母の顔は涙と鼻汁を大和になすりつけてもまだグシャグシャだった。

「海鳥がひどいんだあ……！ もうやだ僕の名前……提督のばかあーっ！」

【偽葛城：150+1 ↓ 斑鳩（いかるが）：150+1】



葛城という名前に込められた想いがあるように、『いかるが』という名前にもやはり何かしら素敵な由来があるのだろうと海花——斑鳩は思っていた。

「かわいい鳥の名前、だよ」

羊の皮を被ったエイリアン、傘姫の言葉を迂闊にも鵜呑みにしてしまったのは斑鳩がその名前の響きを気に入ったためであった。

自分の妹、本物の葛城に新しい艦名を得意気に名乗ると当然、それはどういう意味かという話になる。久しぶりに再会した二人にとってはよい話のタネでもあった。

本屋を探して辞書を立ち読みする古き良き(?)時代だったならば、なるほど斑鳩とは葛城と同じく奈良県に由来する地名なのかと二人は納得したことだろう。そこから海花の昔の艦名はどうだったという話に広がったかもしれない。

しかしスマートフォンという恐るべき通信端末が姉妹の仲を引き

裂いた。

グーグル先生に「斑鳩とは何ですか？」と質問をしてもろくな返事を貰えないのは艦娘あるあるネタですらある。ならばいつそのこと宇宙戦艦など多種多様な扱いを受ける方が万人に親しまれている証であり格が高い、というのが共通認識であるとも言えた。戦果を上げた後のエゴサーチには更なる戦意高揚の効果も確認されている。

海花も葛城を名乗っていただけに、きつと二つの名前には深い縁があるのだろうかと二人は『葛城』と『斑鳩』でAND検索を行った。それがまずかった。

斑鳩のバストは豊満である。一方で葛城のバストは平坦である。

自分の提督の性格を思い出した斑鳩は、よりにもよってこのタイミングで自分の艦名の出所を発見してしまった。それほど長い付き合いでなくとも分かる。あの羊の皮を被ったエイリアンは男性向け巨乳的ゲームから名前を取ってきたのだ。



アルバイトにスマートフォンで検索させた武蔵は画面を覗きこんで「うむ。間違いなくこのゲームが元ネタだな」と不要な太鼓判を押した。

潜水艦の五人が斑鳩の周りに集まってきておしぼりで顔を拭いたり水を差し出したりした。野次馬になろうとする他の客を見過ごす彼女らではなく、魚雷の一本すら勿体無い場合に深海棲艦を追い返す時の眼光でもって一人残らずレジに向かわせた。

大和も慰めようとしたものの、嫌だ嫌だという名前で呼んでよいのか迷い言葉に詰まった。

「そ、それで、妹さんは今どうしてるの？」

「……知らない」大和の脇腹から斑鳩が顔を離すと、左頬が広く赤くなっていた。

何があったと聞くより早く潜水艦らは勝手にカウンター裏に乗り込み、お冷で濡らしたおしぼりを量産してバケツリレーのように斑鳩

の左頬を冷やした。

「見るに平手打ちをされたらしいな」店内から客が一人もいなくなつてしまった事実には武蔵は深刻な衝撃を受けたのだが、斑鳩を囲む連中に弱みは見せまいと努めて平然と振る舞った。

「海鳥が叩いた……昔はあんなに乱暴じゃなかったのに……」

斑鳩がチンと鼻をかむ音が店内に響く。実は店内には耳を澄ませば聞こえる程度にクラシックが流れているのだが、謹慎組が居座るようになってからのハンド・キャットは汚い音で溢れるようになっていた。

大和は深海棲艦のような者に抱きつかれて複雑な気分になつてしまふのを誤魔化すように斑鳩の頭を優しく撫でた。

「悪いのは傘姫提督でしょう？ どうして妹さんが暴力を？」

「知らないよ。……ただ検索した時におっぱいの画像がいっぱい出てきて、ちよつと海鳥のを見て笑っただけなのに」

「お前が悪い。何もかもお前が悪い」

斑鳩のバストは豊満である。一方で葛城のバストは平坦である。

本物の葛城の容姿を知らない武蔵でさえも、葛城が平手打ちをする場面を思い浮かべることができた。

「今すぐ謝りに戻れバカタレが。海鳥の許しがあるまでお前は入店禁止だ」

「せっかく再会したんだし場を和ませようとジョークのネタにしようとしたのに」

「笑えるか。ゲームキャラから取ったキラキラネームの巻き添えにされた上に体型の事で笑われて、私ならグーで殴っている。むしろ海鳥に代わって殴りたいところだ。せっかく呉から会いに来てくれた妹になんたる仕打ちだ貴様という奴は」

大和や潜水艦たちの手が止まっていることに気付いた斑鳩は顔を上げた。

仲間であり友人でもある大和、仲間でありながら過剰に待する潜水艦、彼女らの表情の変わり様は夏の夕立のように斑鳩に冷水を浴びせるようだった。

居たたまれなくなった斑鳩は「……すみません。行ってきます」逃げようようにハンド・キャットを出ていった。



退屈が極まって店を手伝った大和は、閉店後の掃除をしている間中ずっと腹の虫を鳴かせていた。雑巾を動かす手を止めて猫をじっと見つめる大和に「おい、食い物じゃないぞ」と武蔵が声をかけると、「――え？　ち、違うわよ！　ただ柔らかいお肉……しなやかな体が素敵だなど思っただけです」大和は慌てて口元を拭った。

アルバイトの軽巡は切り上げて潜水艦たちも二階に戻り、武蔵と大和と数匹の猫だけを残したハンド・キャットは静かだった。

この店を知る学生や地域の住民は噂する。あの猫カフェなのか艦娘カフェなのかカレー屋なのか分からない店は、閉店すると同時に人間社会から離れ、すべてのカーテンが閉じられた窓の向こう側では猫の集会が開かれているらしい。そこでは艦娘のペットだった猫又が猫でも食べられるカレーの研究をしており、香りにつられた猫たちがじっと完成を待っているという。

「その噂を信じてかどうかは知らんが苦情が来たこともあったな。野良猫を餌付けされると色々困ると」

「ふうん。どうしたの？」大和は見つめていた猫の背を撫でた。

「この店にはそもそも野良猫は近づかんよ。100km単位の距離を旅する猛者の縄張りだからな。まあ元々は野良猫だったとしても、今では立派過ぎる放し飼い猫さ。長旅の間の行動までは胸を張れる自信はないが、少なくともこの店の周辺には迷惑はかけていない。上手く誤解を解けたと思ったら、猫の集会場疑惑がさらに強くなって夜間の売上がほんの少し上がったりしてな」

警察まで出てきた苦労事を冗談めかして話した武蔵はカウンターに冷えたグラスを置いた。

「私は明日から艦隊に戻るから店を空ける。だから大和、今のうちに話しておく事があるだろう。お互いに」

「……謹慎中くらい何も考えたくなかったのに」

二人はカウンタ―席に腰掛けてから、久しぶりに横に並んだことに思い当たり気恥ずかしくなった。

先に口を開いたのは大和だった。

「私ね、なんだか軍部が信じられなくなってきた。葛城——あ、あ元葛城ね、姉の海花。その海花に『何か』があった時は私の艦装が警報を鳴らすようになってたのよ」

「なってた？ 過去形？」

「あの日あの事件の直後に壊したわ。機密がどうたらこうたらで触るなって命令されてはいたし、まさか本当に警報が鳴る日が来るなんて思ってたから放っておいたんだけど、いざ作動したら誤報だったわけでしょ。目から炎が出てドーカンシヤなんて変なものにはなっちゃっても、少なくとも海花は私たちの敵じゃない。だから艦装を壊して内部の警報装置がどんなものなのかを確かめないといけないと思って」

「開けて見て分かる物だったのか？」

「無かったのよ。何も」大和はグラスの水をじっと見つめたまま話した。「正確には音を鳴らすだけのスピーカーと小さい電子部品とバッテリーがあつた。ただ音を鳴らすだけでラジオにもなれないようなオモチャを想像すればいいと思う。それ以外のスペーは本当に空っぽだったわ」

「お前の艦装の他の機能を利用している様子も無かつたんだな？」

「完全に独立した音を鳴らす箱よ。さらに言うところと入切スイッチみたいなものすら見当たらなかった。どう思う？」

「どうもこうも……」武蔵は大和の横顔を覗き見たが、さすがに冗談を言っているようには見えなかった。「警報装置と別の装置を間違えたんじゃないか？ としか言えないな」

「自分の艦装よ。ブラックボックスだった部分以外はちゃんと把握してる」

「そのブラックボックスは壊して、今どこに？」

「その場で海に捨てた」

「言うまでもないとは思うが——」

「ハイハイ私は阿呆ですよーだ。でも武蔵だって、そんな気味悪い装置があつたら捨てたくなるでしょ？　ただ音が鳴る機能を持っただけの空箱が、遠く離れた海花の異変に反応していきなりファンファン鳴り出すのよ？　最初は自爆装置でも起動したかと思つて死ぬほど慌てたんだから」

「その装置、本当に電波とか何かしらの信号を受信する機能は無かつたのか」

「無かつた。一緒に出撃した他の五人にも見ってもらつたけど、ただの鉄の箱だろうって。無駄に頑丈なブリキのオモチャとも言われたくらいよ」

「そうか。なら鉄の箱なんだろうな」

武蔵は諦観が半分、納得が半分といった顔で水を一口飲んだ。

より細かく追求されるだろうと構えていた大和は肩透かしを食つたように面白くなかつた。

「ねえ。私は『ドーカンシヤは魔法を使える』ってことで納得するしかないんだけど、武蔵はどうなの？」

「海花の青白い炎、それと長月の事か」

「戦艦六人の三連装砲それぞれ四基で計七十二門。鎮守府を月面みたいにする威力だったのに防がれたのよ。撃つた直後に長月さんの信号弾を確認した時の私の絶望感が分かる？　かと思えばほぼ全弾が空で青く光る網に阻まれて、ギロチンの刃を落とした瞬間に死刑囚の無実を知らされたと思つたら間一髪で刃を砕かれた気分よ。自分で言つても意味が分からないけど、それくらい私にはもう何が何やら。あれが魔法じゃなかつたら何だつて言うのよ」

「この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する」

「たまに聞くわね、そのフレイズ。伝承？」

「誰が言い始めたのかは誰も知らない。ただ私も長月が魔法を使っているんじゃないかと疑つてはいるよ。長月本人は否定しているがね。洞観者全員が同じ戦力を持つているなどと考えるなよ。寝床に徹甲弾が降ってきたら走馬灯を楽しむ他に出来ることはない。魔法なん

て言わずもがなだ。——魔法と言えば、私はむしろ傘姫提督を疑っている。あれは妖怪猫吊るしと並ぶ悪夢だ。ほら、あの絵を見ろ」

武蔵が指さした絵画の中で帆船を背景に作業をする男の額には小さな穴が空いている。

「大きなほくろを描き足したんだと思ってたけど、穴だったのね」

「どんな勘違いだ……。お前が鎮守府に砲撃を行った一時間前、奴はこの店で消音器が付いた拳銃を発砲した。さつきお前は軍部を信じられないと言ったな。私はあの個人が信じられん。もう海花を見張る理由が無くなったのならあの艦隊に出向く意味もないだろう。元の軍部直属艦に専念した方がいい。一応、お前を心配してやってるんだからな」

「……尚更、海花の側を離れられないじゃない」大和はしばらく考えてから言った。「あの日、警報が鳴った後で武蔵から電話が来たでしょ。脅されてるから葛城を攻撃するなって。あの時は嬉しかったわ。大義名分でしか動けない私を止めてくれる人がいて。葛城——海花の味方がいてくれたんだって。でも長月さんを待つ短い間に何かがおかしいことに、やっと気付けた。傘姫提督は出張で席を外すとは聞いてたけど、どうして出張先がこの店で、よりにもよってあのタイミングで、しかもドーカンシヤなんて得体の知れない人たちを頼ったの？」

「お前、さつきから洞観者をディスプレイりまくるな……。まあ、その通りだ。奴は奇跡的なタイミングで猫吊さんと共にこの店に現れて、海花を助けろと私を脅した。疑問だらけだが、とにかくお前が装備していたブラックボックスと似たような理解できない部分がある」

「——海花に『何か』が起こることを予想していた？」

「妖怪がテレポートしたくらいで騒がないのが艦娘だが、閉店時間後に普通に入り口から入って来たからな、傘姫提督は。しかもハングド・キャットの猫たちを操って私に歯向かわせた。猫と仲良くできるのが洞観者の特権かと思っていいたら、その上を行かれたわけだ。まったく嫌になるよ。それだけじゃないぞ。奴はお前と私がネコノツメを開発したことも、三本作ってそのうち一本が長月の手に渡ったこと

も知っていた」

「あり得ない。だってあの人、つい最近まで軍人ですらなかったのよ？ 天照大艦隊の一ノ傘鉄子副提督の従姉妹で、空いた鎮守府と海花の面倒を見るためにコネで提督になった……って、私は、聞いてる、けど……」

「自分で言っていておかしいと思うだろ。いや、海花の異常性を隠れ蓑にしていたのかもな。何せ深海棲艦じゃないかと低くない可能性がある者だ、目はそちらにばかり向くのが普通だろうな。誰にも経験の無い事態だから仕方がない。だが実際は側にいる奴こそ本当に疑うべきなんだ。ある意味、手垢まみれのお決まりのパターンだと思わないか？ いや、こうして改めて状況を思えば海花が怪し過ぎて逆に他を疑えと誘導されているようにも思えてくるな。深海棲艦にだってそれくらいの知恵はあると思うぞ。難攻不落の鬼姫がいたと思ったら実は他の個体が強さの秘密を握っていたとか」

「……本当にそうだとしたら、どこまでがあの人のお惑なの？ 海花に関しては『斑鳩』って艦名を付けたのが今のところ最後にやられたことだけ」

「名前の元にしてもカモフラージュの意図があつたりするかもな。海花にも行方不明になる前の艦名が当然あつた。葛城でも斑鳩でもない名前だ。葛城という名前の問題を本人の勘違いと軍の手違いで済ませたとしても、それならそれで元の名前に戻するのが普通だろう。いつそ『正規空母 葛城』が二人いた方がまだマシと言える。今まで気付かれなかつたくらいだからな。監視対象の名前をコロコロ変えて混乱を招く馬鹿がどこにいる。意図的に混乱を招くのが目的なら話は別だろうがな」

「そのまま海花の扱いをうやむやにしてしまう——今回の一件は最初から仕組まれてた、ってこと？ 海花を解放するために？」

「動機までは分からんが偶然が重なった『抜き打ち訓練』と見るのは現実的じゃない。まあ、魔法だ何だと話す時点で、撃沈王ですら知らない暗い部分が軍には必ずある。大和、明日は海花海鳥に随伴しろ。警戒するに越したことはないからな」

「……護身の基礎くらいは覚えてるけど、陸に上がった戦艦は無力量？」

「撃沈王が目立っておけばいいんだよ。海鳥には自分が付いているとアピールできれば極端な動きはないだろう。海花の本場の艦名を知る、一応は唯一の人物ということになるからな。その海鳥が今のところ無事だからといって、海花の存在に疑念を生じさせる存在であることに変わりはない。もし傘姫提督なんか海鳥の前に現れたら——」

「現れたら？ どうなるの、かな？」

閉店時間を過ぎた薄暗いホール、武蔵と大和が並んで座っているその背後に、傘姫は立っていた。綺麗に整えた制服姿ときっちり揃えられたオカツパ頭がハンド・キャットの雰囲気にも妙に馴染んでいた。華奢な体躯が照明を消した店内にこそ不気味に似合っている。傘姫の隣には猫吊さんがいつものドヤ顔で控えている。店内の猫が動かないことを除けば、海花の事件の日に武蔵の前に現れた時と同じだった。

振り返った武蔵と大和は言葉を失った。

「物騒なこと、考えてない？ 斑鳩の妹ちゃんはみんなの家族も同然なんだから、みんなで守らないと、ねえ。お父さんはゲームキューブで殴られて、とつても残念な状態だし、天照大艦隊の姉妹艦隊になったからには、その辺りを竹櫛くんと鉄ちゃんに頼ってみようかなって、まあそれはダメ元の難しい話、だけどね」

「……どうして、ここに？」大和はそんな事を聞きたいわけではなかった。しかし質問攻めにしたくとも頭が追いつかない。

「いやあ。恥ずかしながら、睦月ちゃんに仕事を取られてねえ。先日から頑張るなあ、とは思ってたけど、私の仕事までやっちゃうんだから、立場がなくて。参った参った。明日からは睦月提督って呼ばないと、かなあ。——冗談だよ？ そんな前衛芸術みたいな顔で、私を見ないでよ。謹慎してる部下の様子を見に来たんだから。ほら、差し入れも」

傘姫は手に下げていたビニール袋から缶チューハイを取り出して見せた。

「店内ではアルコール禁止だ」銃を向けられ猫に引つ搔かれた時の悪夢を思い返さずにはいられない武蔵は外面を引き締めるだけで精一杯で、その混乱は大和のものを超えていた。

「穿って考えてる二人にこそ、ほらお酒だよ。さあ飲もう飲もう。迷ったらお酒に頼るのもひとつの手段、なんだから。ビールとかおつまみとか色々買ってきたから、好きなの取って」

そう言いつつ、傘姫は適当な缶を武蔵と大和に押し付けた。

「さあ、良い機会だし親睦会しよう。私に聞きたいこと、あるでしょ？

お酒を飲ませれば口が軽くなっちゃう、かもねえ。私も武蔵さんと大和のこと、もっと知っておこうと思って。ほらほら固まってないで、冷たいうちに乾杯、しよう？」

大和型の二人が戸惑っている間に猫吊さんはハイボールの缶を開け、自前の白猫の喉に無理やり流し込もうとしていた。



駅からしばらく歩くと短いトンネルに差し掛かります。辺りに人影はなく、走って駆け抜けたくなるほど不気味なトンネルです。人がいたらそれはそれで怖いのですが、トンネルを迂回しようとするハングド・キャットまで随分と遠回りになってしまったため、僕は小さく意を決して一步を踏み出します。

その瞬間、背後から猫の鳴き声がありました。いつの間にか三毛猫が僕の後ろを付いて来ていました。

「驚かさないでよ、もう」

三毛猫は警戒するでもなく近づいてきて、僕が左手を差し出すと腕に飛びついてきました。首輪に付いている小さなドッグタグ（キャットタグ？）がハングド・キャットの猫であることを示しています。

三毛猫は空母斑鳩の左肩に搭乘しました。夜道をその優れた目でもって警戒してくれるのか、ただ店までのタクシーにしたいだけなのかは分かりません。何にせよ不気味なトンネルは何ということもなく通過できました。

それにしても、日中はあれだけ人通りがあつたのに、時間が時間とはいえ前にも後ろにも人の姿がありません。二車線の道路をたまに車を通ります。それだけです。僕の鎮守府周辺ですらどこに行くのか帰るのか人は通ります。単にこの道がそういう道、ということでしょうか。

人が見ていないことを良いことに僕は海鳥が教えてくれた『 $\times\times$ 』という艦名を思い出しました。すると心のざわつきが頂点に達すると同時に、左目から青白い炎が噴き出します。トイレの水では消せなかつた炎です。

左肩の三毛猫が驚いて僕の頭に何度も猫パンチを食らわせてきたので、すぐに大和が食べたピザの枚数を数えて心を落ち着けます（正確にはげんなりします）。そうすることでガスの元栓をゆっくり閉めるように炎の勢いは弱まり、やがて消えていきました。

もしかしたら昼のレストランで炎が出てしまった時、誰かに見られたかもしれない。これが普通の熱い炎ならばちよつとしたボヤ騒ぎになる勢いですから、騒がれなかつたということは海鳥以外には気付かれなかつたということでしょう。そうでないと困ります。

人目につかない所で海鳥と検証した結果、分かつたことが三つあります。

一つ目は、どうしても『 $\times\times$ 』を僕が認識できないことです。海鳥に言ってもらうだけでなく、字を書いてもらっても頭が認識を拒絶して、心がざわついて、左目が燃えてしまいます。自分でも意味が分かりませんが、燃えるものは燃えるんです。

二つ目は、心を落ち着けることで炎をわりとあっさり消せること。これは前に長月ちゃんに教わつた通りなのですが、炎という明確な感情の昂ぶりを表すものがあるために、コントロールもいささか簡単になつたように思います。だからといって感情の上げ下げに何度も耐えられるほど僕は強い人間でもありませんので、今は対策が無いわけではない、くらいに考えることにしています。

そして三つ目は海鳥には内緒にしています。青白い炎を出している時、とても不愉快な感情が心を満たすと共に、体の方は謎めいた強

い力で満たされるんです。何も試せない謹慎中の身ですが出来そうな事には思い当たりがあります。

今まで僕は傘姫提督の超少数精鋭主義のせいで空母らしからぬ装備を扱うことが多々ありました。潜水艦たちにはマルチロール空母と言われたりもしたくらいです。ですが正規空母が艦砲や魚雷で敵を殴りに行くなんて阿呆です。必死で練習してどうにか最低限の取り扱いができる程度なのに、余計な装備を積んで飛行甲板を盾に突撃する空母など愚の骨頂の権化と言えましょう。僕に余計な魔改造を施す余裕があるのなら一人でも多くの艦娘を連れて来なさいよ馬鹿提督という話です。——人手不足の件は天照大艦隊に統合されたことで解消されましたが。

僕が青白い炎の力を知覚した時に最初に感じたことが、戦艦の艦装もいけるのではないか、でした。提督が言っていたブツダをも恐れぬ悪魔の所業、戦艦と空母のハイブリッド！ 航空戦艦じゃないですよ。今まで通り多種多様な航空機を飛ばしつつ大口径砲も同時運用する、究極のアウトレンジ戦法です！ ……は以前はさすがに無理だ阿呆だと試しもしなかつたのですが、それが今ならできそうな気がするのです。

この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。

どこかで聞いたような言葉が脳裏によぎります。確かな力を感じながらも僕はどうしても浮かれることはできません。当たり前です。理屈を考える必要すらなく、絶対に手を出してはならない類の力でしょうから。魂のような不気味な炎を燃やしながら戦う艦娘と深海棲艦にもはや違いはありません。僕が僕でありたいのならば、尚更です。

などと思いつつ、つい数時間前に見つけたこの力にはもう使い道を決めてあります。僕は睦月ちゃんと長月ちゃんに助けられて生きています。だから今度は僕が二人を、そして二人の仲間である天照大艦隊を守る番です。どんなに自惚れても長月ちゃん程に強くなったと思ひ込むことすらも敵いませんが、仮に、もしも、先日の絶体絶命の窮地にあつた時に僕が長月ちゃんの立場にあつたとしたら、徹甲弾の

嵐から二人を守ることにくらいはやってみせるつもりです。絶対に、例え僕自身の身体を装甲として使っても、僕の背後には傷一つ付けさせません（……潜水艦たちとあの陸軍人さんもあの場にいたわけですが、何が起ころうともなんだかんだと生き延びる気がするので、放っておいてもたぶん大丈夫です。たぶん）。

そこの郵便局を曲がった先がハングド・キャットです。

最悪の事態を避けるための艦隊ですから、天照大艦隊という名前の通り大きな組織に加わった今後においては、僕が青白い炎を出すのがさつきので最後になるよう願うばかりです。誰かを守る決意よりも誰かに何も起こらない願いの方が良いに決まっています。それに、心のざわつきは短い間ならば我慢できなくもないのですが、長く続けば人類を滅ぼしたくなったりする感情も理解できてしまいそうです。僕の気持ちや踏み躪った弱者共を圧倒的な力で消し炭にするのはきつと理性を喜んで捨てたくなるほどの至上の快楽に違いありません。……それくらい炎が不快だという比喩ですからね？

「そう思ってるわけじゃないからね？」
「にやあ」

物分かりの良い三毛猫くんです。本当に外見通りの猫なのかしらん。

明日こそは海鳥とちゃんとしたデートです。姉らしくしつかりと、謹慎中らしくこつそりと、間違っても人波の中で取り乱したりしないよう今から心構えを作っておかなければなりません。海鳥には長い間、心細い思いをさせてきたんです。今日も余計な心配をさせてしまいましたから、せめて明日は新幹線に乗るまでささやかな休暇を楽しんでもらいたいです。

閉店したハングド・キャットには猫の額を照らすほどの明かりもなく、すべての窓がカーテンで閉じられていて昼間のお客さんが出入りする姿が嘘のようです。僕は帰ったら裏口のチャイムを鳴らすように言われています。

店に近づくと——これは洞観者の能力的なものでしょうか——直感しました。店内に傘姫提督がいます。自分の目を疑うわけではあ

りませんがやつぱり店の中の様子は見えません。街と一緒にひっそりとしています。でも分かっています。奴がいます。なんだか赤い糸ならぬ紫の糸で結ばれているようで甚だ気持ち悪いです。赤い糸の色は赤外線だから見えないと言いますが紫外線だつて見えないので納得です。体のどこかに糸クズが付いていないか確かめましたが残念ながら探せませんでした。

あの人は鎮守府の復旧作業のために外に出る暇もないはずですが、多種多様な理由で提督がここに来るなんてあり得ないのです。僕がこれだけあり得ないと思うという事は、直感はやつぱり正しいのでしょうか。あの人の天邪鬼的奇行は羅針盤だつて狂わせませう。考えるだけ無駄です。考えたら負けなのです。今のところ負け続けている僕が言うのですから間違いありません。

提督は恐らく現在進行形で大和と武蔵さんを困らせていることでしょう。

「ごめんなさい大和型の二人とも。僕は今日はもう疲れました。

「ねえ三毛猫くん。お店にこっそり入れる入り口とかない？」

三毛猫は僕の左肩から降りると、建物外壁に何気無いよう見せ掛けられたキャットウォークを華麗な身のこなしで登ってゆき、換気扇くらしいの高さにある換気扇くらしいの大ききの戸まで到達しました。そこで三毛猫はちらりと僕を見下ろしました。

「いやいや、無理だよ……」

僕がそうつぶやくと、三毛猫は僕を見捨てて戸を潜ってしまいました。

分かりましたよ分かっていますとも。僕の仕事の半分は提督の相手をすることです。いつでもどこでもあの人からは逃げられないのです。気色悪い紫の糸で結ばれているのですから。

ただ、せめて心の準備がしたいです。いきなりあの人の相手はシンドイです。

裏口の扉の前で深呼吸をしていると、扉が勢い良く開きました。

「おかえり〜斑鳩。はいこれ、斑鳩の分のビール、だよ」

酔っぱらいが鳩時計の鳩のように飛び出してきました。

それはそれは驚きましたとも。左目から青白い炎が噴き出すくらいに。

【海花と海鳥 編】 完

第36話 秋空を翔ける阿呆

何の冗談か。

あるいは夏の暑さと忙しさが嘘であったかのように北鎮守府に吹き渡る涼しく牧歌的な風がそうさせるのか、白露が大規模作戦の情報誌に目を通してしている。紙面の文字をじっくりと目で追う姿はまるで、誰にも想像し得ないような、仕事熱心な艦娘のそれだった。

「ド、ドウシタノ白露姉サン、具合ガ悪いノ？ 半袖力長袖で悩ム季節ハ体調ヲ崩シヤスイシ、熱ガアルノカモ」

【春雨：Lv. 24-1】

「ソレトモ知恵熱？ 知恵ガツイテキタラ発熱スルツテイウアノ熱ガアルノカモ……デモ待ツテ。資料ヲ読ンダカラ熱ガ出タノ？ ソレトモ熱ガ出タカラ資料ヲ読ムナンテ有リ得ナイコトヲシテルノ？ ドツチガ先ナンダロウ。イイエ、ヤツパリ普通ニ風邪カモシレナイ。ダケド白露姉サンガ、アノ白露姉サンガ、気温ガ少シ下ガツタクライデ風邪ヲヒクトハ思エナイシ……風邪ヲヒカナイ何トヤラノ象徴ミタイナ存在ナノニ……ウゥン」

あんまりな言われ様は白露の右耳から左耳へと抜けていき、彼女は物憂げに溜め息までついてしまうほど本調子から外れている。天照大艦隊に着任してから比較的日子が浅い春雨にさえ大きな心配をかけるしまう程だった。

それほど今回の大規模作戦に参加できなかったのが悔しいのだろうかと春雨は考え、すぐに否定した。昨日までは激戦が繰り広げられていた海域すら知らなさそうな、知っていたとしても「ソロモン海？ ああ、うん、もちろん聞いたことあるよ。うん。聞いたことはあるね。ソロモンの悪夢。確か時雨か夕立がそんなこと言ってたよ。うん。程度の反応だったはず——そんな姿を思い出して、ある事に思い当たった。五日前にこの北鎮守府に移ってから今に至るまで、白露の元気がどうにも日に日に萎んでいるようなのだ。



竹櫛・一ノ傘が活動拠点とする鎮守府から見て、傘姫や斑鳩の鎮守府は北に位置する。夏の騒動で傘姫の艦隊が天照大艦隊に吸収されてからは互いの関係がより太く綿密になったため、傘姫の鎮守府を正式名称とは別に「北鎮守府」と簡単に呼ぶようになった。竹櫛・一ノ傘の方は逆に「南鎮守府」ということになる。

艦隊名も「特殊深棲監視艦隊」という長つたらしく分かりにくい名前から「分隊」と大胆に縮められ、こちらについては少々揉めた。

二つの艦隊は姉妹艦隊ということになっていたため同格であるが、傘姫たちを天照大艦隊の管理下に置く意味もある。話し合いの中で「分隊」という言葉の意味については深く触れられなかった（興味のある者がいなかった）ものの、艦娘の頂点である撃沈王が仮にも所属する艦隊を、小規模なオマケ扱いしてもよいものかが悩みどころだった。加えて北鎮守府の他のメンバーも決して大和に劣らない。斑鳩や潜水艦たちも含めて全員の練度が測定不能域にあり、陸海空に隙のない精鋭中の精鋭という意味では、演習の場では手加減をされない限り南鎮守府の者たちに勝ち目は万に一つも望めないほどの差がある。斑鳩が控え目な性格でなかったならば話はさらにこじれて收拾がつかなかったことだろう。

「天照隊には感謝してもしきれないくらいお世話になってますし、人数だつて一桁以上違いますから、むしろ同格に扱われると恐れ多くてですね」

こうして天照大艦隊の構成は竹櫛・一ノ傘が率いる南鎮守府の「本隊」と、傘姫が率いる北鎮守府の「分隊」という形で落ち着いたのだ。



待機も立派な職務である。

天照隊に吸収されるまでは留守を置いておく頭数すらなかった分隊では、予備の戦力を鎮守府でゴロゴロさせておくのは斑鳩に言わせ

れば戦艦大和を遊覧クルージングの護衛に使うレベルの贅沢だった(当然このシビアに過ぎる感覚はブラック艦隊に頭が汚染されつつあった彼女に特有のものである)。故に、頭数を揃えることができ、自分の帰る場所で仲間を待っていて貰える安心感を作られた北鎮守府は、欠けていたあたたかみを少しづつ取り戻しつつあった。

白露と春雨の他にも数人が復旧させた寮に待機しており、潜水艦らと共に出撃したメンバーの帰りを待っている。ただ待っているだけだった。

ふう、と白露は煙草を吹かすように気取った溜め息をついた。

「暇。暇。すさまじい暇。とつても暇だよね春雨」

「ソレナラ傘姫司令官ニ報告書ヲ出シニ行コウ。今日ノ夕方ガ期限ノヤツ」

「そうじゃない。そうじゃあないんだよ春雨。あたしの退屈っていうのはさ」

「マサカトハ思ウケド白露姉サン、念ノタメニ聞クヨ。ソレダケ余裕ブツテルノニ報告書ハ書イテナイ、ナンテコトハナイヨネ？」

「いま春雨が『報告書』って言うまでは、あたしの頭にそんな言葉は存在しなかった。これってつまり……えーと因果的な……あれが……とにかく暇なの。突き詰めて考えれば人生ってさ、つまりそういうことでしょ？ 分かる？」

「ウワア……阿呆ノ哲学ツテコンナニムカツクンダ……深海側デスラ白露姉サンヨリ上等ナコト言ツテルヨ」

白露は読んでいた大規模作戦の情報誌を机の上に放り投げた。読んでいたと言うよりも正確には熱心に戦いの記録を頭に詰めていたのではなく、防空棲姫のように大胆かつクールな格好をすれば自分も情報誌に載るくらいイケるかもしれないと考えていたわけでも少しなくはないがそうでもなく、味気無い室内よりは情報誌の方が視界に入れてマシなものだった、というだけの事だった。

白露はしんみりした表情になった。

「先月にさ、南鎮守府の近くでよさこい祭りってあったでしょ」

「ヨサコイ祭り？ アア、ウン。ココノ艦隊ノ事トカ大規模作戦ノ支

援ガアツテ、私タチハソレドコロジヤナカツタケド」

「去年の夏はさ。まだ春雨がいなかった時なんだけど、そこで時雨たちとステージに立ったんだ。そりゃあ盛り上がったもんだよ」

「ホント!? スゴイ!」

「この白露型一番艦が考えた『ずっと一緒だよ』っていうお芝居をちよつとね。まあ、大したものじゃあなかったんだけど」

嘘である。この阿呆は嘘を吐いている。詳しくは叢雲の薬指の第20話『ずっと一緒だよ』を御参照頂きたい。

「今年もやりたかったと思うと退屈度が余計に増しちゃってさあ。春雨をぜひキャステイングしたかったな。心まで深海棲艦になっちゃた夕立と心から深海棲艦の先に行きたい春雨の戦い。実現させたかったな。全米を感動させたかったな」

「白露姉サンハ阿呆ダケド真ツ直グナ心ヲ持ツテル——トカジヤナクテ純粹純然ナ阿呆ダカラ反応ニ困ルヨネ」

「できなかったことばかり考えてると心が不完全燃焼になるでしょ。あたし達つてやつぱり駆逐艦だしさ、デストロイヤーなわけだしさ、無意識に刺激を求めるトコロがあるよね」

「無イヨ。皆無ダヨ。ヨシンバアツタトシテモ仕事ヲ放棄シテイイ理由ニハナラナイヨ」

「もう二度と戻つては来ない今年の夏を、この白露は胸にぽつかりと空いた穴を、とびっきりの思い出で埋めたい。そう、今からでも遅くない」

「今カラデモ遅クナイカラ報告書ヲ——」

「というわけで、ですよ。今こそ大っ切に温めておいた、とーつておきのプロジェクトを実行に移す時!」

スマートフォンを取り出した白露は、まだ一度もかけたことのない番号を、それも天照大艦隊の誰もがかけようとしないう番号を、気後れするでもなく呼び出した。

「春雨も超エキサイティンするよー期待しててね。——あ、どーも白露型一番艦の白露です」

「時雨姉サンガ前ニ、危ナイト思ツタ時ハ姉ヲ躊躇無ク見捨テテ逃ゲ

ロツテ言ツテタケド、今ガソノ時カナア」



『試飛会』とは日向が制作したラジコン飛行機のテスト飛行を行う会である。

戦艦から航空戦艦へと進化した日向は己の刃を研ぐべく航空機の研究に明け暮れ、定期的に切れ味を試すべくラジコンを製作しては戦艦察上空を飛行させたり墜落させたりした。

日々を深海棲艦との戦いに費やす艦娘にそのような暇があるのかと問うならば普通は無いと答え、日向は普通という枠を何食わぬ顔で切り捨てた。故に航空戦艦になってから随分と久しいものの練度に僅かの上昇も見られず、ラジコン飛行機の製作技術ばかりが無駄に上昇していった。勿論、この技術が深海棲艦に対する抑止力となった例は一度として無い（一度だけ、深海棲艦になりかけた艦娘を止めたことならあつた）。本末転倒も甚だしかった。

「艦娘としてあんたそれでいいの!？」と叢雲に激怒されることは度々あり、日向も猫の額くらいは気にしている。ところで猫の額とは面積の狭さを例える言葉であり思慮の大小を表すのには使えないのではと日向は疑問に思い、つまり全く気にしていないと同義とも言えた。これぞ鋼のメンタルの成せる業である。

日向が製作するラジコンはいかなる機種であれ、全体をヘチマのような緑色に塗装され、両翼と胴体には赤いマル模様が入られる。機体下部には固定翼機や回転翼機、アダムスキー型未確認飛行機だろうと何だろうと例外無く水上に浮かぶためのフロートが無理やり取り付けられ、つまりは瑞雲化改修が行われた。

制作する飛行機の機種はいつも自由自在だった。F―22ラプター、F―35ライトニングII、A―10サンダーボルトII、Ka―50ホーカム、V―22オスプレイ、サボイアS・21、SH―60K、コンコルド、気球船、果てはハイнкел・レルヒエのような珍機体（特に航空戦艦が運用できそうなもの多）などがプロペラ駆動のラ

ジコン飛行機となった。

半強制的に観覧に招待された最上が見守る中、日向のラジコンは艦察前の空を優雅に飛行した。あるいは制御不能に陥った機体が爆発しない巡航ミサイルとして最上の頭や山城の部屋、葛城（現・斑鳩）の意識、金剛の後頭部を狙ったりもした。それら経験はすべて日向の糧となり、最上の精神的重石となった。



白露が北鎮守府での仕事を放棄している一方で南鎮守府、天照大艦隊の本隊が拠点とする方では日向が仕事を放棄していた。日向に仕事をさせようという試みはかなり前から挫けたままであるため放棄する仕事が無という鋭い見方もあるかもしれないが、そうであつてもなくても今の日向の眼前には絶好の試飛会日和が広がっていた。

試飛会には『日向以外の誰かが声を発するとラジコンが墜落する』という悪夢のようなジnkクスがあり、今のところ的中率100%のそれはジnkクスというよりも確立されたシーケンスともいえた。しかし今日の最上は最初から有らん限りの声を発した。

「やめてくださいマジで！」スタスタ歩く日向の腰に最上はしがみつきながら引き摺られている。「他のヤツなら何でも飛ばしていいですからそれだけは！それだけは駄目なヤツですって！」

「おっ？最上もコレを覚えていたか。メディアから名前が消えて久しいからな」

「めっちゃ名前書いてるじゃないですか片仮名で！」

「形状はしっかりと再現した上でボディに大きく日本語で名前を書くのは面白いだろうと思つてな。まあ、実際やってみればただシユールなだけだったが。ところで最上、この『テポドン』とは別にノドンというミサイルもあっただろう。あれは朝鮮語で「労働」を意味すると思う。いくらミサイルがどうだと騒いだところで海外に関する知識な

んていい加減なものだな」

日向が抱えているテポドンはそれ以上にいい加減な代物だった。優に全長2メートルを超えるサイズはこれまでのラジコンとは一線を画するものの、瑞雲化改修の例外ではなかった。即ち全体をヘチマのような緑色に塗装され、固体ロケットブースターのようにフロートが無理やり取り付けられているのだ。一本の太い棒と二本の細い棒からなる謎のオブジェクトだが、最上が言った通り本体には味気無い赤文字で『テポドン2号』と書かれている。ロボットブーム黎明期に見向きもされず消えたような残念極まりない勇姿であっても、あくまで日向は近代的ミサイルのつもりなのである。

日向はしがみつくと最上をもともせず、戦艦寮前に予め設置しておいた発射台へと歩いていった。

「なあに、そう心配するな。外観こそ弾道ミサイルだが、これはあつという間に過ぎてしまった夏の宿題として提出し損ねた、たわい無い工作——ペットボトルロケットだよ」

「ペットボトル……あの水の勢いでブシュッと飛ぶアレのことですか？」

「そうだと。夏の工作には少し遅いが、この心地よい天気には飛ばすのにはうってつけだろう。ほら、自分で歩け」

最上は日向が抱えているペットボトルテポドンを怪訝そうに観察しながら日向の腰に回していた腕を解いた。

今までの試飛会にエントリーしてきたラジコンはすべてプロペラやローター、そういった回転する羽によって空を飛んだ。だから日向ならば次はきつと話題になったドローンに飛び付くだろう、鎮守府の外を撮影しようなどと言い出したら営倉行き覚悟で対空装備を持ち出そう、それほどに恐れていた今回の試飛会が予想を上回るミサイルであったことは最上の肝をカチンコチンに冷凍させたが、しかしペットボトルロケットと言われると別の疑念が生じてくる。

最上の記憶にあるペットボトルロケットといえば、大きくともせいぜい2リットルサイズのペットボトルを加工して繋げた程度のものでしかない。しかし日向が発射台に据え付けているものの大きさは

日向の身長を大きく上回っている。太さもかなりのものである。しかも無駄に金属製であるらしい堅牢そうな発射台がテポドンを支える時に少し軋んだ。航空戦艦筋力によって運ばれてきたため重量の推測が難しい。あのテポドンの材料はそもそもペットボトルなのだろうか。素材は本当にポリエチレンテレフタレートで間違いないのか。瑞雲塗装を剥がせば金属光沢が現れる、といった裏切りはないだろうか。

テポドンというチョイスに加えて先述の通りプロペラ駆動ではないところも非常に怪しかった。これは最上の知る日向の好みではないように思われた。春夏秋冬休日の日向が夏休みの工作をする阿呆らしさは置いておくとしても、ただ打ち上げてキャイキャイ楽しむだけの単純なものをなぜ作ろうと思ったのか。日向ならばもつと技工を凝らしたミサイルを——ここで最上のトラウマにより形成された思考回路に閃くような電気が走った。

このテポドンはこれまでのラジコンとは明らかに『目的』が異なるものだということに最上は気がついた。伊達に試飛会に付き合わされてはいない彼女である。

「あの、質問があります」最上は発射準備中の日向に声をかけた。ジんクス云々はもはや手遅れであるためやむを得なかった。

「何でも聞くといい」日向はまるで工廠から盗んできたような機械とテポドンを接続している。

「それって『ロケット』じゃなくて『ミサイル』なんですよ。飛ばすためじゃなくて、……どこかに落とすための」

「ほう。なかなかどうして鋭いじゃあないか最上。ご明察、というヤツだな。実はこのプロジェクトの発案者は私ではなく白露でな」

白露。それはこのタイミングで登場するのは最悪の最適解とでも言うべき名前だった。

「前々から白露に疑問を投げ掛けられていたんだ。果たしてペットボトルロケットほどの程度までロケットになり得るのかと。数さえ揃えれば人間だって飛ばせるのは飽きるほど証明されてきたが、白露は単体での限界を知りたいと言う。私はそのダイヤモンドの原石の如

く純粋な好奇心に胸を打たれた。まるでかつての自分自身を見ているようじゃあないか。あれは航空戦艦の素質があるぞ」

「それ単に白露が暇だったからテキトーな思いつきを言ったただけだと思いますけど」

「だから私は教えてやった。ただ高く飛ばすのも良いだろう。しかし飛行するからには高く、遠く、ただ出力のあるがままに飛ばすのではなく、到達点を決めた方がロマンに満ちる、とな」

テポドンに太いチューブを繋げた機械がけたたましい音を立てながら動いた。自転車の空気入れを使う普通のペットボトルロケットではないことを日向は隠そうともしない。そして耳を塞ぎたくなるほどの騒音を発しているにもかかわらず、最上と日向を除けば誰一人として建物の外に出て苦情を言いに来ようとはせず、最上が気付いた時にはすべての窓が閉じていた。この疎外感に最上はいつまでたっても慣れる事はない。鋼だと思っていた日向のメンタルは実はオリハルコンか何かではなからうかと最上は訝しんだ。

「しかしだ最上」日向は無駄に熱く語った。「大砲の中に人間を詰めて打ち上げたところで意味が無いように、ペットボトルロケットにプロペラを付けて飛ばしたところで誰が喜ぶと思う?」

「それよりさつきからペットボトルって言ってますけど、それ金属製ですよ」

「水と圧縮空気で飛ばさなければ意味が無い。空に向かえば何でもかんでもロマンとする見方もあるかも知れないが、目的、手段、そして結果が結びついてこそ真のロマンだ。イカロスは我等が太陽神、天照大神を甘く見たがために墜落しただろう。無知無謀に人は憧れべきではないのさ」

「イカロス氏は日本人ではありませんけどね」

「まあ、そのように熟考を重ねつつも航空戦艦だからな。強度計算と機材さえあればペットボトルロケットなど夏休みの工作の範疇を出ないものだよ。残すは白露の準備が整うのを待つばかりだったが――先程、白露から連絡があった。機は熟した、いつでも撃つて来いと――撃つて来い? 白露って確か今日は――いやいや。いやいやいやい

やいやいやボクは信じないぞお！ 姉妹艦隊にミサイル撃ち込む阿呆がこの世に存在するはずがない！」

「よし。最終チェック完了だ。さて最上にはカウンドダウンの権利をやらう。10からでも100からでも好きな数字から始めていいぞ」
「あーあー何も聞こえないしミサイルも見えない」

最上は目を閉じ耳を両手で塞いで現実逃避の構えを取った。それが不幸中の幸いだった。

「そうか。なら発射だ」

日向があつさりと発射ボタンを押した瞬間、テポドンは大和型戦艦の砲撃にも匹敵する圧力で炸裂した。水圧も加わる分だけより強烈ですらあった。対戦車障害物のような発射台が木端微塵になり、解体する手間は省かれた。

視覚と聴覚を遮断していた最上に洒落では済まされないエネルギーを持った水飛沫が襲いかかり、数メートル先のテポドン発射台からさらに数メートル弾き飛ばされた。「金剛型と最上型は姉妹艦も同然ネー」と言ってくれた金剛の下に逃げようとする暇も、呑気に現実逃避をしていないで日向を盾にすればよかったと後悔する暇もなかった。テポドン発射に伴い発生した衝撃は最上の体より先に意識を吹き飛ばしたのだった。

「おお、すまんな最上。少し離れていると言うのを忘れていた」

そしてテポドンの間近にいた日向はピンピンしていた。衝撃を回避したわけでもなくテポドンから勢い良すぎる程に噴き出した水を全身に浴びている。鋼のメンタルを包み込む肉体もまた鋼なのである。

さすがに無視できない破裂音を聞いた鎮守府の面々が窓を開くと、戦艦寮から秋空へと一本の白い線が伸びていた。水色の浴衣に涼しげなアクセントを加えるような美しさが憎たらしい線だった。執務室にいた叢雲も、食堂にいた金剛も、誰もが開いた口を塞げなかった。その正体は何らかの液体であるらしい白い線は、勢いを失わずにどんどん遠く離れていき、北を目指して伸びていった。

艦隊の中でも特異な視力を持つ者だけが白い線の先端、謎の飛行物

体の胴体に『テポドン2号』と書かれているのを確認することができた。



日向に連絡を入れていた白露は外に出て、いつでも来いと待ち構えていた。活動的阿呆はひとたび動き出せば温まるのは早い。安全第一ヘルメットに海軍精神注入棒というスタイルは野球の打者を表現している。テポドンを打ち返せたら楽しそうだと思いつくも野球道具が無かったための装備である。

「一番打者、白露いきます！ ピッチャービビッてる！ ハイハイハイ！」と水平線の彼方の日向を無駄に煽っている。

「ネ、姉サン恥ズカシイカラ止メヨウヨ」

春雨は野球帽にミットという格好をさせられていた。野球帽はきちんとしたもの（傘姫が持っていたダイエーホークスのもの）なのがバットがなければ当然ミットもなく、工廠から少しでも丈夫そうな手袋を借りてきて両手に嵌めている。

そんな二人を、総合棟二階の執務室から見下ろす二人がいた。

傘姫にしては珍しく理解し難いものを見るような目をしていた。

「ねえ斑鳩。私さあ、駆逐艦っていったら、てつきり睦月ちゃんとか長月ちゃんみたいな子、ばっかりなんだと思ってた」

投げかけられた斑鳩も似たり寄ったりな表情をしている。

「ギャップが凄いよね。でも白露ちゃん達の名誉のために言っておくけど、あれで悪意は無いんだよ。ただ、その、ちよつと……阿呆というか」

「仲間が増えれば人間関係も変わる、のは当然だと理解してる、けど、きつついねえ。竹櫛くんと鉄ちゃんは今まで、どうやって手綱を取ってたんだろう」

「提督がそんな弱気じゃ困るよ。本隊の方にはもっと恐ろしい艦娘がウヨウヨしてるって聞くし。あの球磨さんですら常識人に分類されるらしいよ。暗殺術を極めんとする人を常識側に分ける基準って、僕

は信じたくないね。提督が何とかしてよ」

「白状するとね。天照隊に吸収されたら、私の本隊を乗っ取っちゃおう、なんて考えてたんだ」

傘姫がどのような人物であるかをよく知る斑鳩に驚きはなかった。むしろ傘姫が天照大艦隊の内部からじわじわと侵食し、ついには支配してしまう未来を勝手に想像して戦々恐々としていたくらいである。「でも、やめた。この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。けど、そういう約束を、白露ちゃんは平然と、平気な顔して、無視しよう。コソコソすればするほど、カートゥーンめいた制裁が待ってそう」

「例えば？」

「風が吹いても桶屋は儲からない。この世界の猫は強い、からねえ。だからその代わり、風が吹いたら——バタフライ効果で北朝鮮に砂埃が立って、間違ってミサイルが発射される」

「ありそう。それは十分あり得る」

「どうする？ また長月ちゃんに、助けてもらおう？」

「いやあ流石の長月ちゃんも弾頭がどんなものか分からないミサイルは無理でしょ」

「ミサイル、怖いねえ」

「日本海側にも敵が現れるわけだし」

「そうになったら、さすがの私でも、ちよつと無理だねえ」

「いや提督はミサイルで死んでるから」

「五十センチ隣に立ってる斑鳩だって、死んでるよ？」

「ほんとだ。阿呆って怖いもんだね」

「怖いねえ、阿呆」

「春雨ちゃんが僕以上に異常なほど深海棲艦に似てることなんて誤差の範疇だよね」

「言ってる、言ってる」

「猫と阿呆が戦争の行方を握ってるとすら思えてきたよ、僕は」

海花が正規空母『斑鳩』と艦名を改めてからの、これが傘姫との初めての談笑だった。探り合った腹をこねくり回すようだった二人の

空気がこの天気のように心地よいものになったのはいつ以来だったか、斑鳩も傘姫でさえも忘れていた。二人は穏やかな気持ちで執務室の窓から、どこまでも広がる青い海と空、そして足元で何やら騒いでいる阿呆たちを柔らかい表情で眺めた。

「おっとストライクゾーンを外れるかな？　しかしこの白露に見送りの文字はなーい！」

「逃ゲテクダサイ!!　傘姫司令官ト斑鳩サン、ソコカラ逃ゲテー!!」

日向の製作する飛行物体は、罪の無いターゲットを意図せず狙うことに関しては期待を裏切らない可能性がない。

まさかこうも早く、これほどしようもない事で、しかも睦月や長月ではなく自分と傘姫を守るために、青い炎の力を使う機会が訪れるとは斑鳩には想像できなかったことだった。判断があと僅かでも遅れていれば自分と傘姫がミンチになっていたとはいえ、「僕の決意が……こんなくだらないうことで……!」斑鳩は激しく嘆いた。

羊の皮を被ったエイリアン、傘姫は腰を抜かして、この日は結局自力で歩けなかった。

そして天照大艦隊に統合されて間もない姉妹艦隊の要人二名が一歩間違えば死んでいたことについて、一ノ傘は電や雷でも見たことがないほどキレた。エイリアンとはいえ一ノ傘鉄子と一ノ傘姫乃は従姉妹の関係にある。ぬらありと拳銃を持ち出し雷電姉妹に制止されている一ノ傘の姿を見たため、竹櫛は逆に冷静になることができた。

自分のやらかしたこと、やらかしかけたことを問い詰められた日向は、テポドンが狙い通り北鎮守府に到達したことに満足気だった。航空艦理論によると少々出力が高いペットボトルロケット程度では乱数的可能性の壁を突破することは不可能であり北鎮守府に影響は出ないと供述し、南鎮守府から北鎮守府の間の空を兵器がすつ飛んでいくところを民間人に見られたことも、まあ珍しい飛行機雲か何かに間違えられるだけだろうと昨今の情報共有社会にも恐れをなす様子がない。当然、派手な抜き打ち訓練をやらかしたばかりの艦隊に苦情とお叱りが殺到しないわけがないのだが、そこは航空戦艦が興味を持つところではない。これぞ鋼のメンタルが成せる業である。

斑鳩と傘姫に並ぶ被害者が最上である。意識を取り戻した後、自室からルームメイトの三隈を追い出し、数日ほど閉じ籠もってしまった。

「あのお……起きていらしたら聞いてくださるかしら。よろしければ私たち、最上さんのお力になりたいと思ってましてよ。ほ、本当ですよの！……今度こそは。ですから、この扉を開けて下さいまし！せめて無事かどうか声だけでも！」

【熊野：L v. 63】

最上型は姉妹艦を見捨てる薄情者の集まりでは断じてない。しかし戦闘に臨む者は時として辛い決断を下さねばならない時もあり、最上の周囲ではその辛い瞬間が日常レベルで頻発するのである。誰にも熊野たちを責めることなどできはしなかった。

(R—15) 第37話 磯風がいる世界

「叢雲の肌の冷たさが、気持ちよくて、たまらなく好きだ」

ずっとずっと後で頭を冷やして考えて磯風と私の体温に大きな差なんてあるはずがないと気が付くのだけれど、今この時の私は口車に乗せられたと言うべきか、そういう気分になってしまった。必要以上の好意を乗せた言葉を貰ったのは初めてでもないのに、真正面から受け止めてしまうのがこんなにも危ないとは知らなかった。

磯風が冷たいと感じるなら、私は磯風が温かいと感じることになる。そう意識した途端、ずっと受け身のされるがままだった私の身体が勝手に、磯風の温かさを受け入れようとしていた。気付いた時には私は色々と手遅れだった。

くすぐつたいと感じるのはさらさらと肌にこぼれてくる髪くらいになった。影に溶けるほど綺麗でも今だけは邪魔をして欲しくなくて、私は両手を上げて磯風の髪をかき分けた。そのまま手を磯風の背に回すと、うつすらと見える磯風が嬉しそうに微笑んだのが分かった。

私たちはたぶん、初めてキスをした。

たぶん初めて。ああ、なんて酷い関係でしょうね。今だって寝間着や下着を剥ぎ取って随分と時間が過ぎていくのに、ここまで来てようやく心を重ねるようなキス——なんて考えてると呼吸も忘れて求めてしまった。磯風は今、何を考えてるんだろう。絡み合う音がどんな言葉よりもいやらしかった。

布団の上に寝かされた私と被さる磯風、二人して手のやり場にさんざん困った後、握り合った。

磯風の顔が離れた。

「叢雲が恥ずかしがっていた気持ちは今、私にも分かった」

「何のこと？」

「電気。風呂には普通に入れるのに不思議なことだな」

「あんた……この前偶然、浴場で二人つきりになった時に襲って来たじゃない。島風たちがあと少し早く入って来てたらどうなっただと

思ってるのよ」

「見せつけてやればいい。と、さつきまでの私なら言ったかもしれないな。だが今になって急に恥ずかしくなった、というのも一つあるのだがな。それよりも、より深く理解したんだ」

私に軽く身体を預けていた磯風は両手を解いて起き上がり、私を抱き起こした。カーテンの隙間から零れる灯りしかない部屋の真ん中で、世界の中心にでもいるような気分で座ったまま抱き合った。私たちは夜目はきいて当たり前だからお互い見たければ見えるけど、やっぱり直接の感触に勝るものはない。磯風の羨ましい胸が押し当てられる。くすぐったかった髪が当たらなくなった今は、ただすべてが気持ちいい。

磯風は私の右肩に顎を乗せて耳元で囁いた。

「口下手ですまない。だがこれは紛れも無い本心だ。——私は叢雲を大切にしたい。傷つけたくないだとか守りたいだとか、言うだけならば簡単な事のすべての実現を以って信頼されたい。たった今この磯風が手に入れた気持ちこそ、『本物の愛情』なのだと思う」

言葉だけなら本物になれる。私だってそれくらい知ってるはずなのに、今はただひたすらに本物だけを欲した。



最初の頃、磯風が吹雪と入れ替わるように私の部屋に転がり込んできたばかりなんてそりやあもう酷いものだった。まず私に抵抗させないよう手を縛るのは当たり前で、足まで固定されたこともあったし、ガムテープで口を塞がれたこともあった。それに加えて吹雪から借りてきたいかがわしい道具を持ち出すのだから、そんなに私の怯える顔を見たいかと怒ったり泣かされたりするのはしよつちゆうだった。

ドタバタした夏は昼間に汗を流した分だけ夜はグッスリと寝て、なんだかんだ充実していたのだけれど、磯風は欲求不満をこっそり貯蓄していたらしい。暑さと仕事が落ち着いたかなと思っていたある日

に突然、ビツクリするほど突然、私が「おやすみなさい」と言おうとした瞬間、爆発した。それ突き刺したら超えちやいけない一線を超えるでしょうがって卑猥道具を使われそうになって、磯風の無防備なお腹に本気の膝蹴りを入れてしまった。深海の敵に備えて球磨に教わっている格闘術の尽くを磯風に向けて使っている気がしてならない。うずくまって動かなくなってしまうた磯風と両手を縛られて動けない私。深夜に、しかも二人とも裸だったこともあって助けも呼べず、私の艦隊ライフもこれで終わりかと本気で覚悟した。どうにか自力で動けるようにはなつた磯風だったが、私たちはこの事がきつかけで変わったんだと思う。

磯風は懲りないし、めげた後でもっと強くなる。

膝蹴りのダメージを引きずっていた磯風は私と目を合わせようとはしなかった。まあ嫌われるのも仕方ないかなと強がっていた私が寝る時間になって、さて友人が減った記念に枕でも濡らそうかと布団に潜ろうとした時によく磯風は私の前に帰ってきた。

先に謝つたのは磯風だった。

「雷に説教されていたんだ。そんなものは愛じゃない。愛がなければ気持ちよくないし、気持ちよくなければ愛じゃない。強引に奪おうとするなんて、あなたはレイプ犯になりたいのかと。厳しく叱られた」

もう手遅れだと思う。十分やらかしてくれただしようが。そう言いそうになつたけど私は膝蹴りの負い目があつて黙って聞いた。

「では愛とは具体的にどうすれば手に入れられるのかと聞くと、雷は慈母のように教えてくれたよ。それは手に入れて初めて本物だと気付く。しかし本物を知っていなければ気付くこともない、とてもまどろっこしいものだ。例えばペットの犬に愛情を感じたとして、では叢雲のことも犬のように扱えば愛を得られるのか？ 否。そうではないだろう」

……例え悪っ。

「私は明日から一週間かけて雷から本物を教わることになった。もう北鎮守府に二人分の仕事を作つて寮も一部屋使うことにしている。だから叢雲。一週間ばかり部屋を空けるがどうか許して欲しい。こ

の磯風は必ず戻って来る」

「長期遠征とかよくあるじゃない、大げさな。そのまま分隊所属になってもいいくらいよ」

そして翌朝。本当に磯風と雷の一週間分のスケジュールが北鎮守府の方でキツチリ組まれているのを知った私が手際の良さに呆れたのは言うまでもない。磯風はまだ仕事の都合を好き勝手に操ることなんてできるはずもなく、雷には磯風のためを思うのなら愛じゃなくて仕事を教えなさいよと言いたかった。言いたかったのだけれど二人はとつくに北鎮守府に向かっていた。

「雷ですか？ 私が起きた時にはもう準備万端でカロリーメイト食べてましたよ。よっぽど磯風との仕事を楽しみなんですよ。叢雲さんはそんなに呑気にしていいのです？ 磯風、取られちゃうかもしれないのです」

電は無駄に私を煽りつつ欠伸もしつつ朝食をとり食堂に歩いていった。

最近、どいつもこいつも総旗艦を蔑ろにしすぎている。そう思ったのが二週間前の事だった。

磯風が本物の愛なるものを獲得しに出ること一週間後、そして今からは一週間前、雷と帰ってきた磯風は部屋に戻ってくるなり私を抱こうとした。私は今度は加減して膝蹴りを入れた。

「やっぱりただ性欲を満たしたいだけじゃない、このバカ！ 変態スケベ！」

プリプリ怒りながら一日を終えたのだけど、ただその日、私の警戒を裏切って磯風がやけにあっさり引いたのが少し気になった。

私の異変は翌日の朝から始まった。

普段通りに一日のやるべきことを頭の中で整理しようとする、何か磯風の事が真っ先に浮かんでくる。まあ本物の愛がどうだと言って一週間の修行から帰ってきたばかりだし気にもなるかと深く考えずに気を取り直して、午後は傘姫司令官と斑鳩が来るから会議の準備をしなくちゃ、とところで磯風はちゃんと無事に出撃から帰って来

るんでしようね、なんて……何故か、私は、ダメになっていた。

磯風が頭から離れてくれない。この場に居もしないくせに私の邪魔をするなんて。それも油断していると今直ぐ顔を見たいという欲求に知らず知らず侵食されて、昼食のためきうどんを一口も食べずに冷やしてしまう有様だった。

「叢雲ちゃん？ 大丈夫？」と声をかけてくれた吹雪のおかげで現実に戻って来られた。

「あ、ああうん。大丈夫。ありがとう」

「大丈夫な顔してないよ」

ずっと前にも吹雪に考え事してるのを見抜かれた事があつたような。あの時は確か竹櫛のことを考えていて、今回は磯風……そう、磯風が……。

「叢雲ちゃん！」

「はひっ!?」肩を揺すられて再び現実に戻ってくる私だった。

「今日はもう休んだほうがいいよ。今の叢雲ちゃん、絶対に普通じゃない」

よつぽど呆けた顔をしていたらしく、吹雪型のみんなに強引に引っぱり張られて寮の自室に放り込まれた。

思えばこの時、吹雪に悩みを見透かされたような事を言われなかった時点で、私は疑うべきだった。牧歌的な顔の裏に雷から与えられたR指定知識を暗器のように隠し、時に人の心を看破するのに使い、時に人に巫山戯た道具を貸し与える、私よりも艦娘歴が長く、あくまで善意で悪魔的な道に迷い込んだ私と磯風の背中を押す吹雪を、私は疑うべきだった。

恋は苦しいものだと言いつれど、部屋に一人きりになってからが苦しさの始まりだった。認めてしまえば楽になると自分にほめかせ、ええそうです磯風が気になって仕方がないんですと開き直つてしまうと、余計に磯風に会いたくなかった。時計を見るか、磯風に抱かれた夜を思い出すか、そのどちらかしかできなかった。磯風の布団を引っ張り出して抱きついていたら丁度、竹櫛から心配する電話が来て、……邪魔をするなど思ってしまうくらい私は異常だった。

そう、異常。

自覚はしていても、どうしようもなかった。

夕方頃に磯風が部屋に戻った時、たぶん私は犬みたいに尻尾を振っていたと思う。「夕食なんてどうでもいいから一緒に居て」という言葉ですんでのことで飲み込んだのは本当によく我慢したと自分を褒めてやりたい。ただ磯風と食堂に行ったものの何かを食べる余裕なんてあるはずもなく、通りかかった雷がくれたカロリーメイトをちびつと齧った。私がどんな状態か知った上で心配してくれてたんでしょうよ、吹雪みたいに。

そして無自覚に待ち焦がれていた夜。そろそろ肌寒い季節なのに暑くて熱い。寝間着をはしたなくてはだけさせた私に磯風はゆっくり近づいて来た。もう回避が間に合わない敵の魚雷がスローモーションで見えるような、そんな感じだった。でも悪い気分じゃない。回避できないのなら仕方がないと自分に言い訳をしながら、磯風の唇を受け入れようとして――。

「おやすみ。叢雲」

磯風は私の頬を指でちよんとつついて、寝てしまった。

正気を失うと視野は極端に狭くなるらしく、私が亡霊のように駆逐艦寮を出て工廠あたりの暗い場所に消えていくのを夜勤組に見られていた。近寄らないでくれたのはありがたいけど、正気を失ってしまつた艦娘を「ああなつたらもう手遅れクマ。下手に近寄ったらクマ達も危ないクマ」あつさり見捨てる艦隊ってどうなんでしょうね。

磯風なりの迷惑が過ぎるお茶目だったそうで、翌朝に見せてくれた笑顔は干からびそうな私には眩し過ぎた。

「今日は休暇を取得していな。好きにだけ一緒だぞ、待たせたな。ああ叢雲の休暇も吹雪が取っておいてくれたから心配不要だ」

磯風をグーで殴った勢いで自分まで倒れた。

そしてその次の瞬間、私は磯風の上で目を覚ました（服はちやんと着てる）。夜に寝たと思つた次の瞬間には朝になっていて寝た気がす

るようなしないような分からなくなる、あの損した感覚と同じだった。

「今、何時？」

「午後二時を少し過ぎたところだ。まだ顔に疲れが残ってるぞ」

「誰のせいよ。——はあ。お腹空いた」

「私もだ。食堂へ行こうか」

お腹を満たしたついでにお風呂に入り（何となく離れて湯船に浸かった）、私たちは駆逐艦寮まで手を繋いで帰るといふ暴挙に出た。誰にも見られてないか念入りに索敵したとはいえ、大井と北上の他に例がない小つ恥ずかしいことをしていると、ああ、私の頭は沸騰した後の残り湯になっちゃったんだなあ、なんて泣きたくもなる。さすがに磯風まで顔を真っ赤にしてみまい、だから尚更、私は繋いだ左手を離せなかった。

部屋に戻ったら今までの全部、全部が全部の仕返しをしてやろうと私は意気込んでいた。自分がこんな風になってしまった元凶の日、あの時の浴場でやったように、磯風が悲鳴を上げても休ませてあげるもんですかと。勝ち気な顔が歪んで可愛くなるところをまた私に見せなさいよと。許しを言えば請うほど燃やし尽くしてあげよう。

……私はいつからこんなにも思い上がった愚者になっていたんだろう。

例えるなら、飼い主に遊べ遊べと突撃した子犬が優しく撫でられた途端にお腹をさらけ出しておとなしく服従してしまう感じだった。私が子犬に持つてるイメージが合ってるかどうかはさておき、私はこの子犬になり、磯風は飼い主だった。

お腹を撫でられるだけでここまで気持ち良くなれるのかと味わう感覚に驚きながら、仰向けになった子犬のようにうっとりしてしまっ

た。
「しばらくこの磯風を、叢雲に尽す存在でいさせてくれ。今までの不甲斐ない私を上書きさせて欲しいんだ」

磯風の手はお腹やその周りを撫でつつ、もう一方の手はさつき帰ってくる時のように私の左手を取った。今度はただ握るだけじゃない。

指と指を絡め合い感触を確かめ合って、愛おしむように。

磯風が今まで強引に貪ってきた箇所にはまだ全然触れられていないし、服もお腹くらいしかはだけていない。それなのに、既に満ち足りた気分だった。本音を言えば、お腹から上の方や下の方に感触が伸びる度に期待はした。私のような誰かの吐息が上ずったものになると感触が逃げていって、ああこれは焦らされてるんだと気付きはしたけれど満たされない不満なんてない。十分に気持ちよくて、安心して身を委ねられて、ほんのり幸せだった。

私は思い出したように空いていた右手を上げて、私の上で微笑んでいる磯風の顔に触れた。磯風にもこの気持ちを味わって欲しい。でも磯風ほど上手にできる自信なんてない。

「気持ちだけでも嬉しいさ」と言ってくれた。「まだ叢雲は疲れているんだ。時間はいくらでもある。今は休むといい」

「うん……ありがとう」

起きたまま幸せな夢を見ながら私は、いつの間にか本物の夢の世界に入ってしまった。

次の日、私は初めて無断欠勤というものをした。

日向を筆頭とする阿呆たちがさんざん仕事を放棄しておいて今更、駆逐艦の一人や二人が寮から出ないくらい何ということもないと許してくれる司令官もこの世に存在するかもしれない。でも想像してみて欲しい。積み重ねてきた艦隊のデータベースを鑑みて部隊を編成し、艦娘に装備の許可を出し、さあ抜錨だと気合を入れようとしたところで旗艦がない。あるいは鎮守府中に散らばった奴らのお尻に火を付けて回ってでもレポートを回収してまとめないと天照大艦隊データベースが狂ったり軍司令部から怒られたりするのにも、そもそもデータベースの管理者である総旗艦がない。仮に艦隊運営をすべてイントラネット化したとすると、そもそも任務受付画面のお姉さんポジション艦娘が出て来ないから仕事にならない。——さすがにそこまで言い過ぎで、実際には電の負担が増えるか他にも代理を頼める子はいるけれど、つまり私はそれくらい自分の立場に責任を持って

いるのだと表明したい。

……したいのだけど、まだ体調が優れないですごめんなさいとすっかり日が高くなってから連絡した私は、直前まで磯風とイチャついていたのだった。

「調子が悪いのは本当なのだから、気まで病むことはない。叢雲だって他の者にはそう言うはずだ」

「でも、こんなんじゃない私……」

「心の休養も体調管理の内だ。ほら、もっとこっちに。布団に隙間ができてしまう」

「うん……」

結局、少し時間を置くと触り合いを再会してしまう私たちだった。こんな情けない自分で他の皆に顔向けができるはずもなく、昼食と夕食は磯風が溜め込んでいたカロリーメイトで済ませた。

ところでこのカロリーメイト、ここ最近の磯風がおやつのように食べるものだから私もブロックの半分だけ貰ったりしてたけど、この前も誰かが食べてたような。流行ってるんだろうか。この『ようかん味』なる美味しくはないけど不思議と癖になるものが新登場して人気が出てきたとか？

部屋の外でみんなが自室に戻る気配が落ち着いてくる時間になると、私は自分から下着姿になっていた。もちろん明かりを消した後で。弁解する余地もなく私から磯風を誘っていた。私は別に、お腹だけじゃなくてもっと他のところを触られても構わないのだけれど？
——なんてせめてもの去勢を張ることすらしなかった。昨日の陶酔感が忘れられない。あれだけの事で気持ち良ければ、誰だってまた触って欲しくなるに決まってる。

なのに！

「んっ………ねえ」

「どうした。触れられたくないところは言ってくれ」

「いや触れて欲しいんだけどね？ そうじゃない、と言うか何と言うか……」

「ふっ。おかしな事を言うなあ叢雲は」

身に付けているものが下着だけだから肌の露出箇所は服をちよつとめくった時より断然多い。そして私の無自覚に近い期待通りに快感は露出分だけ増えた。……ぴったり露出分だけ。

鎖骨から私の反応を楽しむように指を下ろして行って、以前までは人様の胸をオモチャのように好き勝手にしていたくせに、今はただ周りをなぞるだけ。胸なんて触られても恥ずかしいし噛みつかれて痛いばかりでちつとも面白くないと私に印象付けたのは磯風なのに、今はもうはつきりと、何故か、快感がある。だからブラの下に手を入れないのが余計にもどかしい。

太ももの内側を舌でなぞられたのには驚いたけど、抵抗しない自分にはもつと驚いた。さすがに恥ずかしくて磯風の頭を押し退けようとするのに手に力がまるで入らない。もつとして欲しいのに力なんて入るわけがない。私の足に顔をうずめた磯風の前髪が、布一枚を挟んであそこに不意に触れ、つい腰がピクリと反応してしまった。髪で触ってしまうことは予想外だったんだろう、察知した磯風は顔を上げて私をじつと見た。たぶん私は物欲しい目で見詰め返していたんだと思う。腹立たしいことに少し勝ち誇ったような笑みを作った磯風は這い上がってきて、上半身を口で、下半身を手で攻めてきた。

絶対に下着を着崩させることなく、私の芯を外側から炙り続けてくる。とつくにその気になっていた私を上げも下げもさせず、生かさず殺さず——途中で何度も負けを認めそうになったり休憩中に磯風をそれとなく触って促したりするうちに、朝というタイムリミットを迎えてしまった。部屋に明かりが入って来たことに気付いた途端に息切れするほどの疲労感に襲われるのだった。

「ね、ねえ……ちよつと」休憩しよう、と私が言いかけると同時に磯風はゴトリと布団に倒れ込み、そのまますすうと寝息を立てはじめた。私が火照った身体を、オイルをなみなみと注いだランプのような身体を少しでも燃やしておこうと目の前で一人でしてみせても、磯風は幸せそうな顔をして夢の中だった。

「……天然悪女め」

汗やら何やらでほとんど全身が濡れてたから拭いた後で自分と磯

風に布団をかけると、私もすぐに落ちた。

生活リズムが綺麗に反転したことは私たちにとってあまり不都合じゃなかった。トイレやシャワーで他の誰かに会う事もないし、食事は磯風のカロリーメイトが沢山ある。

次の日もそのまた次の日も磯風は意地の悪い愛撫に終始し、私のなぶり方から探りを入れるような無駄が削ぎ落とされていった。

何時間も私の反応を観察していれば当然といえば当然のことでしようけど、それだけじゃない。磯風が不意打ちでたった一度だけ、ブラの上から爪で弾かれた瞬間、波のある呼吸を続けていた私の口から、自分が出したなんて信じたくない悲鳴が出た。絶対に隣室まで聞こえたくらいの大きさだった。狭い部屋の中でも少しだけ反響した声は悲鳴のくせに驚きが半分、もう半分は甘ったるい何かのように聞こえた。その瞬間に味わった唐突で強烈な刺激も忘れられないけど、それよりも私は自分の声がさらなる興奮と快感をもたらすことを知ってしまった。ただ恥ずかしいから我慢してたのに、さらに部屋中に声を響かせたい欲求まで我慢しないといけない。知れば知るほど気持ち良いのに辛くなる。加えて磯風が上手くなればなるほど私は声を我慢しないとイケなくなつて、そんな私を見るほど磯風は私の弄び方を覚えていく。これが気持ち良くて堪らないから逃げることもどうすることもできない。私は磯風にどこまでも深く溺れていった。

そうして、こんなにも不純な関係を築き上げていると一週間なんて瞬く間だったように思えた。私たちは今、初めて唇を重ねたこの時に至る。

いまさら言葉にするのは照れくさいし、昨日まで積み重ねてきたように触れ合つて結ばれるのも悪くないかな、なんて根本から変わった自分に少し驚いていたりする。素直になるとはこういうことなのだろうか、それとも単に頭がダメになつてしまつたのだろうか。まあどっちでもいいか。そう思える変な強さを私はいつのまにやら手に入れていた。

何か大切なものを捨ててしまったかもしれない。けれどやっとお互いの身体のすべてを晒し合うまでに達したことに比べたら、どうでもよかった。



正直なところ、という前置きも必要ないくらい、以前までの私は磯風との触れ合いに消極的だった。磯風を特別に見ていたわけでもないし、自慰よりも気持ち良かったことなんて覚えてる限りでは四本目くらいの電動マッサージ機が使われた時くらいだった。

一本目から三本目までは見る度に破壊して（吹雪はその都度買い直しているらしい。引くわよね）それでもあんまり磯風がしつこいから、それと、まあ、私もそりゃあ興味が無いはずがなかったから折れたわけで、あの「家庭用電源の力は偉大」と思わせる振動に私は為す術もなく何回か負けてしまった。この時だって磯風が調子に乗って強さレベルを最強にしゃがったことで、下半身が血の流れが止まったように麻痺してしまい、手は縛られてるから渾身の頭突きを食らわせて止めさせるといふムードもへったくれもない遊びに終わった。

せっかくの磯風の好意を無下にせざるを得ない私の身にもなつて欲しかった。仮にも身体を許してるんだから、心まで許してもいいかなと思えるような、いや私は決して同性をそんな目で見る趣味はないけどそれでも、下着の下を触られて私も触り返すに足る気持ちが欲しかった。

「たった今この磯風が手に入れた気持ちこそ、本物の『愛情』なのだと思おう」

向かい合つて座つた磯風はそう言った。

今更そんな事を言うなんて、磯風の方だつて気持ちを持っていないかっただけだった。酷いヤツだと思つた。

言葉は行動で証明してくれた。私のあそこに優しく触れた磯風の指から、さんざん待たされた分を補つて余りある愛情が伝わってきた。

た。

「んっ……い」

用心してたのに声を上げそうになる。部屋の壁は薄い。気を強く持つしかない。

指の動きそのものはマッサージくらいの強さしかない。自分でもこんなに優しく触ったりしない。それなのにくすぐったくないどころか、上から下に、下から上になぞられる毎に私の口から小さな声が漏れた。自然と腰が跳ねてもっと強い感覚を欲してしまう。優しい火は私をゆっくり確実に炙った。

磯風のもう片方の手が私の左胸に不意打ちのように伸びてきたせいで、誤魔化しようのない喘ぎ声が暗い部屋に響いた。これで確信した。私も磯風が手に入れたらしい本物の感情を持っている。心臓のバクバク鳴っている鼓動を感じ取られないか、もしかして磯風より緊張してるんじゃないかと思うと、磯風のものより随分と寂しい胸に収まりきれない快感を与えられた。

胸のことを気にしたのを悟られたのか、急に手つきが少し荒くなつて乳首をしごかれた。

「や、やだ……い」抵抗しようとする布団に押し倒されて、いつもの二人の位置になった。今は磯風が完全に優位という違いはあるけれど。

「嫌じゃないさ。そうだろう?」

急にそんな事を聞かれた。

強がったことを言う前に、この時を待っていたかのように秘所を炙る火が強くなる。

「あ、ああっ!」狙われた。今の私が言葉を出そうとすればこうなるに分かってやられた。

「自分の器は自分ではない誰かに満たして貰うものだ」

磯風の言葉と感触だけが私のすべてになる。そのくせ耳がくすぐったいのが舐められているからだど気付くのに時間がかかった。頭の中をくすぐるようなぞわぞわしたものから逃げようとする、
「器を満たされる喜びを叢雲にも知って欲しい」今度は蛇のように胴

体をなぞり、心を締め付けてくる。

私はお腹を撫でられた日の事を思い出した。たったあれだけのことで満足していた自分がばかばかしい。ずっと動きを休めない磯風の手から逃れようと腰が意思に反して跳ね回る。私を満たそうと注がれ続けるなんて経験がない。これだけ長い時間を絶頂も迎えずによがり続けたことなんてない。

腰から下と上は、動かす気力はなくなっていた。足なんて腰が上がる時にちよつと支えるだけの棒だったし、下手に手で遮ろうとしたら磯風は「叢雲の弱点はここ数日で調べた」と言葉にはせず徹底的に責めてきた。

「冷たい肌が好きだとは言ったが、鼓動が聞こえる熱いここも好きだ」胸に顔をうずめられ、中まで手に取られているようで押し退けようとする、両方の胸から離れなくなり信じられないくらいそこが弱いことを教えてくる。

抵抗すれば手荒くなる。その事を磯風はたっぷり時間をかけて教え込もうとしてきた。ペットの躰をされる私がどれだけ辛いか、歯を強く噛み締め過ぎていよいよ我慢できそうになくて、でも耐えるしかなかった。明らかにまだ前哨戦だと分かってしまう分だけ先が想像できなくて余計に決壊も早くなってしまう、磯風だって……こんなに早く私が絶頂までいってしまうとは思ひもしなかったでしょうよ。

私が必死で口を押さえながら、腰は暴れるように痙攣して磯風の手をはね除けようとし、磯風は軽くクリトリスに触れることで、まるで馬をムチで落ち着かせようとするように指を激しくしていった。

「お、願……もう……無理、無理だからあ……！」
なんとも情けないギブアップだと自分でも思う。

私の股間に顔をうずめて舌を這わし始めていた磯風は私の声が涙声だったことに気付いたからか、やつと止まってくれた。

どれだけの時間を上り詰めていたんだろう、磯風が離れた後も感触がなかなか肌から消えてくれず、それは余韻と呼ぶには強すぎた。しばらくは深呼吸も満足にできなくて波が収まってくれるのを磯風の腕にしがみつきながら待った。涙を拭おうとした腕は汗でびっしょ

り湿っていた。ずっと閉めきっていた部屋の空気は私たちの熱気でこもっていて肌を冷やすような涼しさはない。

なんとか落ち着くと、二人並んで横になり手を繋いで天井を見上げた。天井のシミでも数えてないと磯風の指ばかりが気になるのに、あいにく部屋が暗くてシミが見えない。私を念入りにいじめてくれた指は、今は私の手を優しく包んでくれている。

自分ではほとんど何もしていないはずなのによほど疲れたのか、興奮と一緒に睡魔まで襲ってきた。

「…………ごめん」磯風の期待に応えられなかった上に寝落ちなんて許されるはずがない。本当なら今頃は我を忘れて燃え上がっていただろうに、すっかりクールダウンしてしまっている。

「謝るのは加減を見誤った私の方だ。生まれ変わった私をもっと味わって欲しかった」

「二週間前だっけ、本物の愛がどうこう言って訓練しに行ったのはねえ、何したらこんな技術が身に付くの？ そんなに雷が怪しげな技術を——」

「今は他の者はいいだろう。私だけを見てくれ」

スネた磯風も可愛い。なんて横顔を覗き見ると、その表情は真剣だった。

「二人つきりになれる場所に行かないか」と磯風は言った。

「もう二人つきりじゃない、私たち」

「そうじゃない。誰にも邪魔されない、私たちだけの場所だ」

「何処にあるの？」

「探しに行くんだ。鎮守府の外に」

磯風が冗談でこんな事を言うヤツじゃないのはよく知ってる。だから問題は私が冗談扱いするかどうかだった。

磯風は両手で私の手を取り、真っ直ぐ見つめてくる。その選択をさせる真面目さに少し不満を覚えた——私たちは何時でも何処でも一緒じゃないの？ どちらかが離れたら残された方は黙って残るの？

「自由の代償は決して小さくない。それでも声を上げたい時に上げられるようなムツ!？」

磯風のグダグダ喋る口に自分の口を押し当てた。やった直後に「キスで黙らせる」キザなアレだと気付いた私はすぐに顔を離してそっぽを向いた。

「……連れてくなら早くしなさいよ！」



身体を拭いて外出用の地味な服に着替え、最低限の貴重品をポケットにつっこんだ私たちはそろりそろりと駆逐艦寮を出た。外の新鮮な空気を久しぶりに吸い込んだ気がした。

深夜とはいえ静か過ぎる気がした。総合棟も含めた鎮守府全体の窓明かりが普段よりも極端に少ない。誰か一人くらいはすれ違いそうなのに姿も見えない。でも今は好都合だった。

仕事では海だけでなく陸の方にも用事はそれなりにあるわけで、遊びにだっけ行くし、鎮守府の外に出たら即射殺されるわけでもあるまいし、なのに、正門が見えてくると私の歩幅は自然と狭くなった。「射殺は」されない。なぜなら陸の方に銃口あるいは砲口を向けてはならないから。だから、それ以外の恐ろしい番犬が正門で待っているような確信にも近い勘がある。警備員が一人立っているだけの門だけけれど、「目に見えるレベルの話ではない」ことを私は確かに知っている。遅れる私に後ろから引っ張られるように磯風が止まった。

「やはり怖いか？」

「……ううん。大丈夫。行きましょう」

今は目に見えるものだけを信じたくて私は止めていた歩みを進めた。

警備員に身分証を見せて正門を一步出たその瞬間——さすがに近くで見れば金剛が警備員に変装していることくらい分かった。けっこう様になつてるとはいえ、どれだけ長い付き合いだと思ってるんだろう。

金剛は私たちを捕まえようとしなかった。見逃してくれるのか、それとも見捨てているのか——私が逡巡したタイミングを見計らって、

いきなり空から降ってきたものに押し伏せられた。

「かはっ……!?!」

全身まんべんなく地面に叩きつけられ、隣で磯風も同じようにされているのが見えたのが最後の記憶だった。

金剛は困だった。そして何も無い空から降ってくる変態じみたヤツなんて、まあ、一人しかいないわよね。



目覚めれば医務室というパターンは前にもあったけど、けっこう心臓に悪いので出来れば次からは穏便にお願いしたい。

部屋の隅にある私のベッドはパーテーションで他から隔離されていた。自分がやらかした事を思うと「R指定艦娘注意!」と有害物扱いされているようで凹む。悪いのは私だけど凹むものは凹む。

部屋の時計は11時12分を指している。全然眠り足りない、眠い。ということは私が磯風と脱柵を試みってから数時間しか経ってないんだろう。服もあの時のままだった。お風呂に入りたい。

眠い以外に体に不調があるわけでもなく起き上がると、枕元に『起きたら金剛まで電話しろ Bit ch』と書かれたメモと私のスマホが置いてあった。……思わず磯風の姿を探してしまう私だった。私のこと愛してるなら代わりに死んでくれないかなあ。

「死なれちゃあ困りマス。叢雲に死なれたら誰が総旗艦やるんDeath?」

恐る恐る呼び出した金剛は怒ってるというよりも疲労とストレスが堪えきれない様子だった。リングと皿と果物ナイフを持ってきたものの「元気があるなら自分で剥くネー」私に丸投げする有様である。お腹はちよつと空いてたからありがたいけど。

「早く仕事をバトンタッチしたいのできつさと話しマスが、一つ守ってクダサイ。今回の件については他言は許しマセン。愚痴もダメ。SNSもダメ。酔って口を滑らせるなんて論外デス。誓えマスか?」
こうして金剛に注意を向けている今もどこかに球磨が潜んでいそ

うで、怯えながら「……誓います」結婚式で言いたかった台詞を言わされた。

「Good. つまり現在の我々、天照大艦隊が何らかのアタックにより深刻なダメージを受けていることを、得体の知れない何者かに悟られたくないんです。砲弾ブチ込まれて痛くても No problem なフリしてれば敵も怯んで攻撃が一瞬止まるデシヨ?」

「駆逐艦が真似したら沈むけどね。……深刻なダメージ、つて?」

「ハイハイハイ頼むヨ総旗艦。まさか自分が蒸発しても代わりはいくらでもいる、なんて思つてないでしょうネ?」

この一週間のどこかでも自分の立場について考えた事はあった。いつだって私の責任は変わらない。

「私の代わりなんているわけない。万が一のために託せるようにはしてても、その時が来ないように私は……私は、その……自分を大切に努力と言いますか……空席を作らないために、色々……するべき、ですね。……はい。ごめんなさい」

「ここ数日、連絡も寄越さず部屋から出なくなった総旗艦の代わりに誰が働いたと思ひマスか?」

金剛つてたまに怖くなる。阿呆ばかりだから真面目な怖さに耐性がつきにくい。

「マア、働いてたのは電なん德斯けどね」

「あんたじゃないんかい」

「でも昨日の晩、ついに堪忍袋の緒が切れて雷と吹雪をブチのめしてゲロさせたんです。ずっとピリピリしてマシタが今朝なんてもう Breakfast も入らないくらい胃が痛いヨ。ぜんぶ叢雲のせいだからネ」

「どうして雷と吹雪が出て来るの?」と疑問を口にしてはみたもの思い当たるフシはかなりあった。あの二人が磯風をそそのかしたと言つても過言じゃない。でも真相はより悪質だった。

「コレに覚えはありませんか?」と金剛が懐から取り出したるは、私と磯風が引き籠もるにあたり主食にしていたカロリーメイト(ようかん味)だった。

「よく見てクダサイ。また食べたいと思いませんか？」

「いやあ？ 何故か癖になる味ではあるけどね。でも美味しいかと聞かれるとかなり微妙よ？ 磯風はたくさん買い込んでたけど、種類を選べるなら私はチョコレート味にするわね」

「フム。中毒性は無いみたいデスね」

「中毒性？」

「ようかん味なんて怪しいモノ、手を出す前に成分を確認しなヨ。ホラ」

金剛に手渡されたパッケージの裏側を見た私は「……恋はダイナマイ」とつぶやいた。

いや、だって、そう書いてある。カロリーメイトの特徴説明やグラム当たりエネルギー何キロカロリーとか書いてあるべき成分表がすべて『恋はダイナマイ』に書き換えられている。あまりの意味不明さが不気味でつい布団の上に投げ捨ててしまった。

「な、何なのよこれ……」私はずっと、こんなものを口にしていた？

「ダイナマイトはようかんの味がするって言いマスからネ。『恋はExplosion だ』とでも言いたかったんデシヨ。有り体に言えば惚れ薬ネー」

「ほれ、ぐすり……？」

「効果は実証済みヨ。雷と吹雪の喉にコレ押し込んで二人を部屋に軟禁したら、一時間も経たずに大井と北上みたくなっていたヨ。マア、元々そーゆーのに抵抗のない二人が惚れ薬の被験体に適しているとは言い難いんデスが、少なくとも強烈な促進効果はあるみたいネ。人間が発情期の猫みたいになるのは逆に見てて面白……ソーリー。ちよつと無神経すぎマシタ」

「大丈夫。私の不注意が招いたことだから」なんて強がろうとしても偽物の愛情に眩まされていた昨日までの一週間が頭を過り、金剛が言うことの方を嘘だと思っていたい気持ち捨てられない。あれだけの熱を持った心の底からの気持ち嘘で偽物で做られたのなら、私はいったい何なのだろう。

「だから天照隊は攻撃されて、叢雲が標的になったってことデス。狙

い撃ちされたのヨ。さつき総旗艦の責任がどうこう言ったのは正しいヨ、でも絶対な防御なんてあり得マセン。風邪だって普通にひくでシヨウ。インフルエンザはもつと強敵ネー」

それから金剛は事件のあらましを説明してくれた。

金剛がようかん味カロリーメイトの事を知ったのはほんのついでさつき、9時だったらしい。警備員に変装していた時点では惚れ薬云々なんて知らず、ただ危ない顔した艦娘が危なかったから監視していただけということになる。

その一方で、カロリーメイトの事を金剛に伝えた電も、脱柵未遂事件をその時に聞いたのだという。

「怒った事をコミックで表す時の怒りマークってあるデシヨ？ 血管が浮き出るヤツ。あれリアルで見ると恐ろしかったヨ。電にフアイティングパワーが無かったコトが今回最大のラッキーだったかもしれマセン。制止しなきゃ雷と吹雪がこの世からサヨナラしてマシタ」

つまり私の異常に気付いていた二人が（と言っても誰から見ても異常だった）それぞれの方向から動いてくれていた事で逃亡に至るプロセスの解明、そして私が磯風一人のために天照大艦隊を捨てようとした疑惑の解消がなされた——で合ってる？

「どちらか片方でも情報が抜けてたら駄目デシタ。カロリーメイトの事が分からなかった場合、叢雲は頭がイカれた艦娘として処分されたデシヨウ。逃亡が気付かれずに成功していた場合は……マア、球磨なら数時間で連れ戻せるデシヨウけど。死体を運ぶより自分で歩かせた方が楽とか言いそうネー。仲間想いな仲間を持ったことを感謝シナサイ」

「感謝します」私は素直に頭を下げた。「この変なカロリーメイト、出所は？ まさか普通に売ってたりしないわよね」

内容物がきな臭い点と、パッケージが不気味である点を除けば本当によくできてる。商標権とかを全力で侵害してる。

「調査中、と言っても発覚したばかりデスし、球磨のサーチャイに引つかからなかった時点でラビリンスに入りそうヨ。今は雷と吹雪の毒

が抜けるのを待つ他にないネ」

ナイフの扱いを習っておいて今更だけど球磨って何者なんだろう。近接格闘に秀でるだけじゃなく、夜間でも当然のように敵潜水艦を仕留めて「運が良かったクマー」と通常どうしようもない脅威を取り除いてくれたり、本当に今更、球磨の野生の勘のような何かを疑う者は艦隊にいない。目の前にあるカロリーメイトだつて球磨が注視して得体が知れない物だと言うのなら、たぶん誰にも分からないだろう。

「二応、おバカ二人に食べさせる前に軽く聞いたそうデスが、雷も吹雪も自分の部屋で見つけたらしいデス。しかも自分のデスクの上にポンと置いてあつて、怪しいとも思わずに『恋はダイナマイ』を試したくなつたトカ。脳ミソが蛍光ピンクじゃあないと真似できマセン。だからこそ蛍光ピンクがケミカルアタックの始点として狙われたんでしようネ。もし攻撃が叢雲まで届かなかつたとしても蛍光ピンク二人——最高練度と最古参が無力化された時点で艦隊にとっては十二分な痛手デス。まったく恐ろしいウエポンがあつたものヨ。こんなジョークグッズに引つかかる自分たちも情けないデスが」

「この艦隊を狙った攻撃……そう解釈して間違いないの？」

「ヘイ叢雲。自分がハニートラップに引つ掛かつたコトは自覚してヨ？」

「……………」謝罪の言葉も出ないほど情けなくなつた。

「斑鳩——元葛城の親子に襲われた時もピンチでしたガ、あの時は少なくとも天照隊の誰一人としてダメージを受けてナイ。デスが、今回は叢雲を無力化された上に危うくサヨナラするところデシタ。ついでに電もブチ切れて冷静さを失つてマスし、この二人の代理を担うべき蛍光ピンク二人も結果的に一時戦闘不能。もしワタシが天照隊の敵なら今この瞬間を狙います。何も起こらないのが逆に不気味なくらいデース。本気で艦隊がピンチだと思つたのでワタシが最善と思つた行動を取りマシタ。——叢雲の様子はここんとこちよつと変でしたガ、医務室でリングゴ食べたら元通り。よかつたネ。ワタシ達は昨日も今日も異常ナシ。間違つてもジョークグッズ如きで提督や副

提督が狼狽えるような事態だけは避けなきやならナイ。提督二人の資質にケチつけたいわけじやあないヨ。ただ、いたずらに流すべき情報じゃあなかつた。正気に戻った総旗艦にも意見を伺いたいネ。このカロリーメイトは提督に提出するべきでしょうカ？」

私に意見なんてできるはずがない。でも天照隊の総旗艦に戻るなら、ここで考えて指示を出せ、と言われてる気がする。

「司令官、副司令には真相まで含めた情報を集めてから報告しましょう。その調査だけ……ねえ金剛。こんなに情けない私だけど、今までみたいに頼ってもいいかしら？」

「任せるネー！」金剛は待つてマシタとばかりに親指を立ててくれた。本当に、ずっと頼もしい戦艦でいてくれる。

「この件を知るのはワタシと叢雲、球磨、電、雷に吹雪だけデス。この六人でコツソリ調査を進めまシヨウ」

「磯風も合わせて七人でしょ？　そういえば磯風は？　この部屋にはいないみたいだけど」

金剛の頼もしい笑顔が途端に曇った。

「さつきから磯風の名前が全然出て来なかつたけど、あいつだつて被害者でしょ？」

「加害者デス」感情が入る余地のない即答だつた。

「雷と吹雪だつて『恋はダイナマイ』は効果があつたら面白いネ、くらのつもりデシタ。偶然やつて来た磯風に渡した時もジョークグッズのつもりだつたそうデス。自分で食べたなら意味ありませんカラ、クズ二人は磯風を実験台にしたんデスね。そして運の悪いことに本物の惚れ薬だつた。どこまでが犯人の計算通りなのカ……。さらに運の悪いことに……磯風も超弩級の阿呆ヨ。自分の叢雲に対する想いと行動は全て本物だ、惚れ薬なんて関係ない、何もかも自分の意思だ……と、最後まで主張を曲げなかつたヨ」

「な、何よ、最後まで、つて……」

聞きたくないのに、私は知らないうちに金剛の両肩に手を伸ばして揺さぶっていた。

「ねえ!!　磯風は!？」

「辞めたヨ。艦娘」金剛の言葉は体を埋める鉛のように重かった。「自分のせいで総旗艦、そして天照大艦隊を危険に晒したつて。提督には実家の都合がどうか適当なこと書いた紙を出して、自分から解体処分を望んだヨ。こうなる事が分かってたような早きデシタ」

私は医務室を飛び出して誰かを突き飛ばしながら寮の自室に走った。

目眩で吐きそうになるのを堪えながら数時間前まで磯風と抱き合っていた部屋に飛び込むと、そこは半分だけが見慣れた様子だった。私の机、私の棚、私の荷物、私の布団。もう半分は——最初から何も無かったかのように綺麗だった。元々そんなに荷物はなかったけど制服や本だったり色々あった。あつたはずなのに、今はすべて嘘だったように何も無い。思い出ごと私の世界から消えた気がした。ただ部屋に唯一残った私たちの匂いだけが鼻にツンとしみた。

私は泣いた。できる限り大声を上げた。私の声を聞いた磯風が慰めに来てくれると信じて。

でも集まって来たのは大勢の他の誰かで、私はまた医務室に連れ戻された。



明らかに適正がなく、沈まれる前に辞めてもらう子は多くはないけど少なくともない。働かない阿呆、働くフリをして遊ぶ阿呆、そんなやつらでも死なれるよりはずっといい。『艦』だから辞める時は『解体』なんて不名誉な言われ方をされても、沈んで、死んでしまうよりはずっといい。その子の為にも、そして私たちの為にも。

磯風の解体は、じゃあ、誰の為だったんだろう。

私の部屋は一人部屋になった。仕事には復帰した。

勝手に進んでいく時間に合わせて動いていると何となく一日が終わる。

解体した装備がまだ工廠に残っていて使い道が決まらないと、それとなく気を遣ってもらっても、見る勇気がなくて工廠には近づけな

かった。

司令官に天気の話が振られると、外は雨が降ってるような気もすれば風が吹いてる気もした。

すべてが灰の色をしているから、たぶん天気はよくないんだろう、と思った。



食堂の騒がしさには近づく気になれず、今日も売店でパンを買って済ませようとした。

すると。

「む。いかんぞ叢雲。こんな菓子パンでは精がつかん。ほら、このカツサンドも一緒に買え」

【磯風：Lv. 18 ↓ 売店のアルバイト】

なんか売店のお姉さんがエプロン姿の磯風に見えてきて、これはもう私もダメかな解体されるつきやないかなと思えてきた。吹雪型駆逐艦五番艦、天照大艦隊総旗艦、叢雲もいよいよ寿命かもしれない。

「それとコーヒーの飲み過ぎだな。いいだろう。この磯風が昼食を選んでやる。まずはプロテインだ。叢雲はもう少し肉的なものを付けた方がいい。バルジはバランスが肝心だ」

「……何してんの、あんた」

「だから叢雲の昼食メニューを選んでいる。ああ、プロテインは嫌か？ 確かに胸部装甲に変化がないのに他ばかりの増強も考え物だからな」

「こいつ……!」

思わず太股に手を伸ばしたけど指が空を切り、ナイフを装備し忘れていたことに気付いた。なんだかもう色々和阿呆らしくなってくる。ホントにもう。

「解体されたんじゃないやあなかったの？ ここでは何してるの?」

「売店のアルバイトをしている」

「見りや分かる。どうしてあんたが平然と売店のアルバイトをしている

のかを聞きたいの、私は」

「うむ。実はこの鎮守府を出た直後に傘姫司令から連絡があつてな。敷地を出た瞬間に電話が掛かってきたから本当に驚いた」

またあの人が……。

「自分の下でアルバイトをしないかと持ち掛けられたんだ。北鎮守府は人の出入りが増えたはいいが買い物をするところ、アカシマートすらないだろう？ だから私をしばらくここで働かせてノウハウを積ませて、そのうち分隊支店を作る腹積もりだそうだ。ゆくゆくは私も店長ということだな」

「前向きですこと」

普通の店なんて、面白くない、でしょ？ と傘姫司令の声が聞こえてきそう。北鎮守府には空っぽの設備ならあるんだし普通でよければすぐにでも店ができるはずなのに。

「こういう形での戦い方もある、という事さ。一度解体されたくらいで戦いに背を向ける気はさらさら無かつたし、またこの艦隊で働けるならそれが最善だ。それに……私はまだ謝罪すらしていない。済まなかつた叢雲。危険に晒してしまった事を償わせて欲しい。どうかもう一度だけこの磯風にチャンスをくれ。また私と布団を並べてくれ！」

ぜんぜん懲りてない。私の涙を返して欲しい。

「今はどこに住んでるの？」

「そこだ」と磯風は売店のレジ奥を指した。「事前準備として、昨日までは何故か『ハングド・キャット』という喫茶店で住み込みの研修を受けていたのだがな、カレーの作り方を覚える前に研修が終わってしまったのだ。噂には聞いていたが傘姫司令の考えている事はよく分からん」

「普通にクビになったんだと思うわ」

「とにかくだ、こうして早く鎮守府に戻って来る事ができたのは幸いだ。しかし……なんだ。ほら。再び叢雲に会うことができたんだ。分かるだろう？」

「何が」

「だ、だから……恋しくなるものだろう。駆逐艦寮の、あの部屋が」
ぜんっぜん懲りてない。どうして阿呆に限ってメンタルが鋼のよ
うに強いんだろう。

「嫌よ。もともと私は天照隊ができる前までは一人部屋だったの。ど
うして久しぶりに手に入れた一人部屋に、変態を入れないといけない
のよ」

「変態とは何だ！　そもそも私をこんな風に変えたのは叢雲じゃない
か！」

「はあ!?　私がいつ何をしたって――!　……。」

……そうだった。どちらかといえば悪いのは私だった。

私が浴場で磯風を慰めた時のことを思い出したのが顔に出たのか、
磯風は「ほら見ろ！」と畳み掛けてきた。

「責任はしっかりと取って貰う。そして私も責任を取る。だから一緒に
住むのが実際的だろう。今日の夕方にも引越すぞ」

「いや、あのね?　百歩譲って私が許可してもよ?　ちよつとキレ気
味の金剛とか見たでしよ?　正直あんたと今こうして顔つき合わせ
てるだけでも、どこに潜んでるか分からない暗殺者が襲って来そうで
怖いのよ」

「もし殺されそうでも、納得して貰えるまで説得するさ」

「頭は本気?」　頭は大丈夫?　本気なの?　が混ざった言葉である。

「研修を受けていた喫茶店では他の艦娘も働いていたのだが、全員か
ら漏れ無く艦娘らしからぬ雰囲気がかくかくに感じられてな。外見は普
通でも、まるで海の裏側の世界に引きずり込まれそうな気配を漂わせ
ていた。まあ、何故か冷や汗が止まらなかった原因に気付いたのは店
を出た後の事だったかな。深海棲艦とも違う、あの世界の方へ足を踏
み外すくらいならいつそ味方の手で処分されたい……そう思えるよ
うな……なのに全員が親切で、丁寧に仕事を教えてくれるんだ。カ
レーの作り方は途中だったが」

よっぽどカレーを作れたかったらしい。

「短い研修で表面的には何ともなかったものの、終わってみれば、何も
知らずに航行していた海域が機雷原だったと知ったような気分だ。

かつて味わったことのない種類の恐怖だ……。だから、今更ちよつと天照隊の誰かに殺されそうになつたところで取り乱したりはせん。精神をかなり鍛えられ——そうか！ 傘姫司令の狙いは精神鍛錬だったのか！」

「いや、売店のアルバイトにそんな精神はいらなと思うわよ。お腹空いてるから早くお会計」

「すまないが無理だ。この店にはレジが無いからどうしていいか分からない」

「研修の意味がない！ そんなんで私にプロテイン売りつけようとしてたのか！」

「いつものお姉さんは？」

「私に店の鍵を渡してすぐに、しばらく休暇を取ると言つて旅行に出掛けた。ずっと京の都に憧れていたらしい」

「……確かそこらへんにお金が出舞つてあるから、勝手に使えつて事でしょ」

「おお金庫があつたぞ。しかしダイヤル式だ。番号は分かるか」

「もうお釣りは後でいいから今は記録だけしといて、お姉さんが旅行から帰つたら処理して頂戴」

「了解した。しかし叢雲、プロテインを買うには最低あと三千元ほど足りないが？」

「いらないつつてんでしょ！」

「ふふ、冗談だ」

パンを入れたビニール袋を受け取る時、磯風の両手が私の手を優しく温かく包んだ。磯風の真つ直ぐな目はそのまま信頼の強さを表している。素直に受け取れる、そんな不思議な力があつた。

「また叢雲に会えて嬉しい。本当に」

「……ま、野垂れ死んでなくて良かったわよ」

「おつと他の客が来そうだ。続きは今晚、私たちの部屋でゆっくり話そう」

「この売店はあんた一人の働きにかかつてるんだから。休む暇なんてないでしょ」

「お、おい見ろよ！ 磯風だ！ 売店のお姉さんが磯風になってるぜ！」と騒ぐ深雪に続いて吹雪たちも入ってきた。特に詳しい事情を知る吹雪は言葉も出ないほどの驚き様で、磯風と私を交互に見て、説明が欲しいようだった。私はニツコリしながら吹雪の肩を叩いて売店を後にした。

しばらくぶりに心が晴れ晴れすると、部屋の掃除をしなくちやと思いだたり、小走りで駆逐艦寮に向かった。

自分は小走りのつもりでも他人からはスキップに見えたらしい。数分前まで廃人のようだったヤツがスキップしていれば、そりやあ気が狂ったと思われるのも不思議じゃない。

やれ叢雲がついに狂ったのだの、やれ磯風の怨念が売店に現れたのだの、鎮守府はちよつとしたパニックになった。私はその様子をケラケラ笑って眺めていた。

第38話 温度差

同艦隊内であっても寮が変われば寮内文化も変わる。
例えばプリン。

天照大艦隊においてプリンの単純所持はこれを禁止されているが、その受け止められ方が大きく異なる。

駆逐艦寮では、せいぜいが大っぴらに買ったたり食べたりしてはならない程度である。どこかの冷蔵庫を漁れば奥の方から必ず名前が書かれたプリンが出てくるし、時間が空いた時など自作にチャレンジしたりもする。

「コーププリン持ち込むなー」と怒る叢雲でさえコツソリ外から買ってくる有様だった。

一方で空母寮はというと、プリンが違法薬物めいた扱いをされている。元々が極度の需要過多だった上に禁止されたことが重なり寮内価値はさらに上昇、菓子という本質が消え失せ価値ばかりがインフレした。

鎮守府内に存在する『闇プリン』はプッチンするものやふんわりしっとり贅沢品を問わず、価値が二極化してしまっていた。階級差など無い仲間内で非常に危うい温度差が生まれているのだった。

この温度差が保たれるなど寮以外の設備が共用であるはずの共に戦う仲間ではあり得ない。しかし現に駆逐艦寮では毎日のようにこつそりと楽しまれているし、空母寮では闇プリンの情報にすら値が付いた。

そして最も割を食っているのは、そのバランスが熱力学的な流れによる崩壊を迎えぬよう奮励努力する中間層である。



「今日は何の日？ ねの「トリック・オア・トリート！」

「夜分すみません」

「素敵なパーティーっばい！」

「阿賀野さーん、まだ寝ないでくださーい」
「お菓子くれなきやニンポを使うよ！」
「バカ。ニンポなんて小学生にも笑われるでしょ」
「じゃあ何？ カラテ？」
「うーちゃんプリン食べたいぴよん！」
「あ、あの、プリンは一応禁制品ですから」
「カラテ・オア・闇プリン！」
「糖分を重点！」
「今ダイエツト中なのに……」
「センダイⅡサンのニンジャめいたクッキー・スリケンだ！」
「おい躲すな！ 勿体無いだろ全部受ける！」
「ははっ。こうして見ると駆逐艦は子供ばかりだな」
「今の聞いた!? 売店のアルバイトがナメたこと言ってる！」
「磯風破城槌だ担ぎ上げろ！ 軽巡寮をこれで突き破るぞ！」
「ニンゲンギョライ・ジツを喰らえっ！」
「人間魚雷……」
「ひどい……」
「ブツダ……」
「ナムアミダブツ……」
「ご、ごめん……あたしはそんなつもりじゃ……」
「なんか独占のチャンスだよ白露型！ 総員突撃ーっ！」
「突撃ナラ白露姉サン一人デシテヨ」
「あれ？ 暁の姿が見えないわね」
「仮眠のつもりが、ってやつさ。せめて枕の横にカボチャを置いてきた」
「暁型は一周回って姉妹に冷たいのう」
「磯風槌スタンバイOK」
「お、おい本当にやるのか!? 陽炎たちはどうして助けてくれない!？」
「陽炎型なら普通にハロウィンしてるい」
「売店にコスプレグッズを置かなかった報いを受けるがいいわ」
「おっつきカボチャ被ってるの龍田さんだよね？」

「あの人やつぱりカワイイよね」

「実際カワイイ」

「あ、照れてる」

「カワイイね」

「実際カワイイ」

「照れ隠しで天龍さんが刺された」

「カワイイことするね」

「実際カワイイ」

軽巡察前の賑わいにハロウィンらしいオレンジ色の灯火は少なかった。ただハロウィンだったので駆逐艦たちは隣の軽巡察に菓子をねだりに来て、軽巡たちはたくさんの菓子を用意して待ち構えた。それだけだった。

休むか飲むかを選択するこの時間に、寮の外に一団が出来上がるのは珍しいことだった。遠征に出ていたり休息に入っていたりする者を除いても駆逐艦の人数は多く、加えて誰にも酒が入っていないことが不思議と彼女らを寄せ集めて気分を踊らせた。

今までやったことのなかったハロウインを今年はやろう。最初にそう言ったのが誰なのかは分からない。ただ、無闇に膨れ上がる駆逐艦たちの菓子強盗ムードに合わせて用意していた軽巡たちも、財布は寂しくなったが心はランタンのように明るくなった。

自分たちは戦うだけの艦じゃない——そう考える者もいるかもしれない。しかし世間が楽しんでるのだから自分だって。そして或いは、肩に重荷を乗せた仲間を支えるために。

深い意味は彼女たち自身にも自覚はない。

磯風破城槌が軽巡察の扉を突き破れず「鼻血がー！ 誰かティッシュシュー！」茶番になってしまった後も、駆逐艦と軽巡洋艦の交流は続いた。

ハロウィンっぽくはない。しかし、楽しければそれでいい。鼻を押さえた磯風も含むこの場の誰もがそう思った。



軽巡察二階にいる木曾は賑わいを横目に、駆逐艦察とは反対方向に位置する重巡察に懐中電灯を向けて点滅させた。

《問題無いか》

すると重巡察からも同じように小さな光が点滅して返ってきた。

《問題発生》

木曾の相手をしているのは衣笠である。

予想していた状況であり、予想していたからこそその通信ではあるものの、ウンザリせずにはいられない。

正直に言えば、思いの外楽しそうであるハロウィンに混ざりたい。自分も駆逐艦に菓子をくれてやりたい。しかし軽巡察前の笑顔を守るために彼女はこうして重巡察の方を見張っているのである。

笑顔で溢れる軽巡察は言わば天国の門であり、その門より先は魔境である。大天使と名高い古鷹ちゃんまで居る重巡察も今ばかりは地獄を閉ざす門と化し、駆逐艦たちが混沌に足を踏み入れぬよう——そして暴虐を始めた地獄の住人を寄せ付けぬよう防衛ラインが築かれた。

地獄でもまた、ハロウィンは開催されていた。



山城の部屋の窓ガラスを突き破った矢は攻撃ではなく矢文だった。もう何度破られたか分からない窓から身に沁みる冷気が容赦無く吹いてくる。

『大人しく投降して菓子を出せ。さもなくばイタズラする』……ふざけんなバカ空母共オ！ この寒い夜に人様の窓ガラス割っというイタズラもクソもあるか！ コレもう戦そウボツ!?!』

不本意に空いた窓から身を乗り出した山城の顔面に非致死性のゴム矢が的中した。戦艦察前に設置されたバリケードの何処から飛んで来たものだった。数少ない戦艦察住民を一人無力化したことでバリケードは一步前に進んだ。

攻めてくるにしてもスタンダードなバカ四人だけだろうと油断していた戦艦たちは真っ先に最大戦力である霧島を沈められていた。酒の力を借りた空母たちの人海アウトレンジ戦術は、装甲とプライドが高く少人数でありながらまとまりのない戦艦寮を確実に陥落させるためのものだった。

何より天照隊で空母の数を揃えるということは常識人までもが動員されたことを意味する。球磨に負けず劣らずの戦闘力を持つはずの霧島の轟沈も、まさか信じていた大鳳に裏切られたショックによるところが大きい。ジャック・オー・ランタンに愚痴るほどベロンベロンに酔ってなお狙いを狂わせない練度が今の時だけは仇となった。「ブツダフアック！ そんなに菓子食いたきや鎮守府の外行けヨ！艦隊から逃げてもオマエラは止めネーヨ！」

山城がやられたことを自室から音を聞いて悟り地団駄を踏む金剛に、比叡が恐る恐る提案した。

「お、お姉さま。こうなったらおやつを渡して帰ってもらうしかないんじゃない？……？」

「アホ！ アホなことやってんじゃないネ！」

「アイエエエエ……」

「コッチが投降しようとしまいとイタズラされるに決まってるデシヨ！？ でも確かにこのまま籠城してるばかりじゃジリー・プアー（徐々に不利）……何かフリーリカザンを……ハロウイン……オヤツ………閃イター！」

金剛はクローゼットの奥に隠していたものを取り出した。それはつい最近、天照大艦隊を過去最大の危機に陥らせた毒物、ようかん味のカロリーメイトだった。

何も知らない比叡には普通のカロリーメイトにしか見えなかったが、金剛の慎重に扱う様から何か恐るべきものであることは理解した。ゴクリと喉が鳴る。

「お姉さま、それは……？」

「これはアンタイ・カンムス・フードとでも呼ぶべき悪魔の菓子ヨ。こくなつたらヤバレカバレしか道はナイ。ヤツラにコレ食わせれば空

母寮は退廃ホテルに様変わりしてグワーツ!?!」

金剛の頭を非致死性のゴム矢が撃った！ 禁断の兵器を使おうとしたことがインガオホーしたのだ！

「アイエエエエエッ!?!」

目の前で金剛がボーリングのピンめいて倒されたことで比叡は失禁——はしなかったものの、続け様に飛来するゴム矢によって「アバツ!?!」金剛と並んで気絶！

空母たちはいよいよ戦艦寮突入を開始した。対する戦艦の戦力は侵攻の妨げにすらならない程度である。誰にも相手にされないが唯一この場を鎮められるであろう日向は鋼のメンタルを発揮し安眠中だ。十数分もあれば戦艦寮からようかん味のカロリーメイトも含めた食料という食料が略奪され尽くすことだろう。

その様子を観察していた重巡寮は絶望アトモスファイアに包まれながらもイクサに備えて動いていた。

空母たちが戦艦寮だけで満足してくれる望みは薄い。

衣笠も他の重巡と同様に決断的ハロウィン闘争衣装を纏い、軽巡寮の木曾に向けて最後の信号を送った。

《我ら、決戦に突入す!》

お
わ
り

第39話 わらしべ任務（上）

◆—【球磨さんのナイフ】—◆

「今日やるべきことを今日やると実際疲れる」

格言めいて尚且つクソみたいなことを言っつて、傘姫提督が自室に引っ込んでしまいました。そして困った事に、この僕も、午前零時になつたら気晴らしに執務室を出て、そのまま業務を終了してしまう事が多くなつてしまったのです。執務室の明かりは明日の朝に消せばいいやと。南鎮守府の本隊から来てくれる助っ人たちは誰もが夜更かし好きですから、気付いて消灯しておいてくれる事もあります。というか皆、僕のことを過労で深海棲艦になりやしないかと気遣つてくれる優しさっぷりですから、その好意に甘える余裕が僕にはできた、ということなんでしょう。

「斑鳩さんがちゃんと休むための姉妹艦隊です。夜遅くまで働くなら睦月たちにも仕事を分けてください。あ、でも電気はこまめに消したほうがいいと思います」

【睦月：Lv. 44 ↓ 69】

命を救われた上にこんなことまで言われては甘える他にありません。布団を用意して貰つておきながら眠らない失礼がどこの世界で許されるのでしょうか。

まあ、睦月ちゃんクラスの頑張り屋さんになると手伝い感覚で仕事を奪いに来てワーカホリックになろうとするので、そこはバランスです。助け合つてこそその姉妹艦隊です。いやー睦月ちゃんがあと一年早く艦娘になっていればなーと詮無いことを考えずにはいられません。十分に成長した睦月ちゃんと僕が出会えていたら……目から青白い炎を出した時点で決断的殺処分されていたかもしれないですね。くだらない妄想歴史はくだらない未来しか作りません。ひとつ勉強になりました。

睦月ちゃんに尊敬される正規空母であり続けたければ、ちゃんと働いてちゃんと休んで、澄まし顔で挨拶しろということでしょう。空母ヲ級の澄まし顔なんて不気味で怖いだけかもしれないですけど。

ちなみに、この分隊を紙とペンとその他諸々で支える有能秘書の猫吊さんはというと、僕が知る限り鎮守府内での朝昼晩のタイムスケジュールを崩したことがありません。そのくせ突然パツと消えたりハングド・キャットに現れたり謎めています。ですがそれは毘だと僕は睨んでいます。人は時として解決しないほうがよい謎に出くわすものです。

「好奇心は猫に殺される引き金」

諺をつぶやいた口から、ついでに小さな欠伸も出ました。

今日は寝る前に何を食べよう、また大和の冷蔵庫から冷凍ピザ貰おうかな、グラタンピザが意外にも美味しかったな——（といった事を天照隊の皆に話したら驚かれました。撃沈王からおやつを盗むなんて正気の沙汰ではないとか云々……プリン一個で流血沙汰になる人たちの方が狂ってる、とは言えないので、大和の冷蔵庫を見せて更に驚いてもらいました。冷凍ピザの一枚二枚を抜いたくらいでは撃沈王の貯蔵にいささかのダメージも通りません。後でちゃんと埋め合わせさえすれば実質ピザ食べ放題なんです）——なんて考えながら執務室を後にしようと扉を開きました。すると。

「クマッ!？」

【球磨：Lv. 78 ↓ 92】

扉の向こうに、着ぐるみのような着膨れパジャマ姿の暗殺者がボケツと立っていました。

いや、驚きたいのは僕の方なんですけどね。



夜食にピザ一枚は自分でもどうかと思っていたには思っていたので、僕と球磨さんが二人で一枚のピザを焼くことにしました。

……無言で。

オーブン（大和用ではない小さなもの）は給湯室にあるのですが、ついでにお茶でも、という気にもなれません。黙々と冷凍ピザを開けてオーブンに放り込むだけです。僕が何をしたというのでしょうか？

あと道衣袴から楽な格好に着替えたいです。

以前ナイフでぎっくりとやられた両腕が傷を覚えているかのよう
に疼き、気付かないうちにまた刺されたんじゃないかと肉に食い込ん
でくる幻覚に、ピザを食べる食欲を削がれていきます。

シヨック死しそうになった僕と、シヨック死させそうになった球磨
さん。どうしてこんな時間に二人してピザが焼けていくのを観察し
ているんでしょうね。オーブンはジジジとゆっくりタイマーを回し
つつ淡々と職務をこなすばかりです。

あと僕かでも応急処置が遅れて血が足りなければとは聞きました
が、そんなことより激痛でしたからね。心も折れましたよ。自分の父
親が人様に鉄砲を向けているのを黙って見ていた僕に身の安全を叫
ぶ権利は無かったわけですが———そうそう。あの場の会話を盗聴し
ていた天照隊の何人かは、僕の叫び声はまだ耳から離れないそうで
す。本当は怖い艦これ的な絶叫だったそうです。自分の声がトラウ
マにされるって、申し訳ない以上に嫌ですねえ。ははは。

「……………怖いクマ?」

「ひっ!? は、はい?」

やっと喋ってくれたはいいものの、いきなり話しかけないで欲しい
です。球磨さんはジウジウ音を立てて焼けてゆくピザをじつと見つ
めたままでした。

「クマのこと、怖いクマ?」

なんとも反応に困る質問です。僕は慎重に答えました。

「誰だつて、痛い思いをしたら怖がると思います」

「……………まあ、そりゃあそうクマ」

再びオーブンの目盛りがひとつ進むくらいのだんまりを挟んで、球
磨さんはポツポツと話し始めました。

「クマは普通の軽巡クマ」そんな出だしでした。「なのに気付いたら皆
から工作艦みたいに思われて、クマも工作艦みたいなこととしてたク
マ」

「そんな技術持ってたんですか? すごいじゃないですか、自衛もで
きる工作艦なら三千世界から引つ張りだこですよ」

「クレーンとか使う工作じゃなくて、スパイ的な工作クマ」

「……ああ、そっちの方ですか」などと適当に話を合わせる僕です。どっちの方ですって？

諜報艦というか情報収集艦なるカテゴリーもありますし、それはそれで偉い人からスカウトされるレベルかも分かりませんが、球磨さんの様子からして海洋上での話ではないのでしょうか。もっと身近でナイフが生きる、外套と短剣の世界……天照大艦隊は何と戦争をしているのでしょうかね。ハロウインの時は身内での戦争を予期していた何人かがこつちの鎮守府に疎開してきて、実際に戦争が起こったそうですが。洞観者の目から見ても意味が分かりません。

「この前、金剛にある仕事を頼まれたのだから、クマのことを工作人員か何かと思われてたからだったクマ。——確かに出来るクマよ？ でも違うクマ。艦隊の誰かがクマのことをスケープゴートにしてるクマ。金剛が隠れてコーヒー飲んでたことなんて知らなかったし、第一話の提督盗撮情報だって闇ルートから偶然入手した情報だったクマ。この艦隊にはマジモンのスパイがずっと前からいるのに、最近はずマを隠れ蓑にして好き放題クマ……夜の潜水艦より隠れるのが上手い、クマの第六感にも映らないヤツをどうすればいいクマ……」

シリアスで闇が深い話をしているのは理解できます。球磨さんがモコモコフワフワ格好でなければ、もうちよつと真剣に聞いてあげられるのですけどね。

でもそんなことより提督盗撮情報って、僕としてはその部分を特に気にするべきなんじゃあないかと詳しく聞きたいところです。第一話の提督と言えどももちろん竹櫛提督のことを指すわけですが、あの人が盗撮？

「ビビリてーとくと盗撮のことは気にしないでいいクマ。そのカメラだってスパイがセットしたもので、ビビリてーとくもクマと同じように情報を入手しただけのはずクマ。それにビビリてーとくのことだから映像はビビって見れなかったと推測するクマ。チキン野郎なんて眼中に無いクマ」

結果的に天照大艦隊に拾われることになった僕としては、組織の

トップにそんな過去があつたなんて知りたくなかつたんですがねえ……。

話したいことを話し終えたのか、球磨さんがほんの少しだけ身を寄せてきました。

初めて僕に神妙などところを見せる球磨さんが切実さを隠そうともせずに、じつと見つめてきます。なんとも庇護欲をわかせるじやあないですか。その辺りに生えている男なら容易くコロコロされそうな瞳です。

でも、ごめんなさい。

ナイフで殺されそうになつたりテポドンで殺されそうになつたりした僕は、天照大艦隊に何が潜んでいても納得してしまふんです。そうでなくても僕がここに来てまだ日が浅いというのに、スパイなら陸軍のアレを追い返したことなんかも記憶に新しいです。加えて僕自身もまた洞観者という秘密構成員で、本隊にも長月ちゃんとその協力者が二人います。おまけに協力者のうち一人は球磨さんの姉妹艦でしたよね？

一度、真面目に整理した方がいいくらい天照大艦隊は混沌とした組織なんです。僕や球磨さんが知らない側面の一つや二つが出てきたとしても、いえ、むしろ出てこない方が不思議とすら言えるでしょう。ですから「と、とりあえずピザ食べましょう？　ほら丁度焼けましたよ。悩んだ時は胃袋に何か入れる、って大和が言っていましたし」無力な僕にできることなんて話を逸らすか伸ばすかしかありません。

半分に割ったグラタンピザは生地も風味もペラペラしています。先日までは美味しかった気がしたのに。

「……クマだつて普通の軽巡やりたいクマ。雷巡でもいいクマ」

球磨さんはあまり冷凍ピザに期待をかけるタイプではないようで、淡々とムシヤムシヤしています。

「オマエを殺そうとした時とかは、クマにしか出来なかつたからそうしただけクマ。それは別に構わんクマ」

構って欲しい。せめて殺されかけた僕の前では構って欲しい。

「でもクマの知らないところで『アイツなら出来る』とか『アイツならや

りかねない』とか余計な評価は、ちまちまプレッシャーになって肩に積もってくるクマ」

「それが積もり積もりで重荷になってきた、と?」

球磨さんはぎこちなく頷きました。察するに、僕に悩みを打ち明けちゃったことにまだ葛藤があるのでしょうか。なにせ僕は(流されるままに)天照大艦隊を襲撃して、球磨さんに「オマエは死ぬべきクマ」と一度はジャツジされた身ですから。そこから傘姫提督の下でけっこう頑張ったことが報われて、やっと「オマエは死ぬべきだったクマ。けど悩みくらは聞かせてやってもいいクマ」程度の信頼を勝ち取れた——そう思っているのでしょうか。そういう事にしておきましよう。でないといピザが不味いばかりですから。

「気持ちには分からなくもないです。僕も深海棲艦じゃないかつて現在進行形で疑われてましたから。以前よりはマシになりましたけど」

「そこクマ。斑鳩はどうやって脅威度を下げたクマ? そのところ知りたいクマ」

ようやつと名前で呼んでくれたことに内心感動する僕です。

「ひたすら無害アピールですよ。普通の艦娘らしく働いて、泳げなくてもプールに飛び込めと言われたら飛び込んで溺れて、傘姫提督の無茶振りに付き合っつて、天照隊のカレンダーズや阿呆たち……身近な仲間にいるいろ見て貰うのが一番でしたね。振り返る度にそれが大切だって思いましたよ。仲間もスパイも阿呆もいつも一緒なんですから、僕たち自身もその一員ってことを意識し直してどうにかすれば、そのうち、どうにかなるんじゃないでしょうか。信頼され過ぎた結果が球磨さんに悩みをもたらした、だとしてもです」

「時間任せは性に合わんクマ」

「簡単には変わりませんよ。最後の最後は球磨さんのナイフが敵をやっつけてくれる、みたいな雰囲気分隊の僕にまで伝わってくるくらいですし」

球磨さんはピザを食べる手をピタリと止めて、それから何かを決心したように頷くと、出し抜けにモコモコパジャマの内側に手を突っ込みました。

毛深い中から秘密道具のように取り出されたものが僕のトラウマを刺激します。

「ひいつ!？」

僕の両腕に深々と突き刺さったナイフ——大きき的には鉋ほどもある危険物が鞘に収まった状態で出て来ました。いま食べているピザの直径よりも長く、大柄でもない球磨さんが普段どうやって隠しているのかサツパリ分かりません。分からないから怖いんです。少女の皮を被ったランボーですよ。かわいいふりしてこの子わりと殺るクマですよ。

飛び退く僕にナイフがズイと押し付けられました。

「ひいいいい!？」

「もう怖がらなくていいクマ。オマエに預けるクマ」

「はいい!?! いらないうす結構です遠慮します! 僕の血を吸ったものじゃないですか!」

「オマエが自分で持つとけば、もうこのナイフで怪我することはないクマ」

「ピタゴラススイッチ的に自分を刺しちゃう死亡フラグじゃないですか」

「オマエを……斑鳩のことを信用してやるって言ってるクマ! ありがたく受け取れ!」

ピザの皿を奪われ、代わりに無理矢理ナイフを持たされました。いかにも鉄の塊といった感じの重さがギロチンの刃を思い起こさせます。元々は全体が綺麗な黒色だったのでしよう。今は色褪せや傷によつてヴェンテージ感が出ていて、長く信頼されてきたツールであることを物語っています。僕は留め具のところをしつかりと握りました。絶対に抜きたくないからです。刃に僕の血液がミクロンでも染み付き残っているんじゃないかと思うと……ああ寒気と鳥肌。「クマの気が済むまで預けておだけクマ。いつか返してもらうことを忘れるんじゃないクマ」

「今すぐ返しますよう」

「誰も持ち歩けとか言っていないクマ。クマの手がないことをアピール

できればいいクマ。オマエの机の上に飾るのも悪くないクマ」

噛み付かれた犬を剥製にして飾るようなものです。

「で、でも……そうだ、球磨さんが困るんじゃないですか？ 今までずっと、いざって時のために持ち歩いていたんでしょ？ 明日がその時かもしれないよ。例えば……その……近接格闘戦を挑んでくる新手の深海棲艦が現れたり、第二の僕みたいな奴が鎮守府に攻めて来たり、ええと……」

「その事なら心配いらんクマ」

球磨さんは左手を掌底打ちのように素早く突き出しました。すると袖の下から、ジャキンという小気味よい金属音と共に細く鋭いブレードが飛び出しました。スパイダーマンが手から糸を出すような感じで球磨さんは刃を出したんです。いよいよ人間を辞めたのかと思いましたが、袖をめくって腕にベルト留めされただけのギミックを見せてくれました。

「開発に苦労しただけあってかなり便利クマ。今はただの飛び出しナイフで、これから他のギミックとか装飾とか加えていつてアサシンブレードっぽく機能的にしていく予定クマ」

「……へーすごいですねー」

僕の意思の弱さがために確認を取ることは叶わなかったのですが、普通の軽巡洋艦アピールのためにナイフを手放した決断と、アサシンブレードなる暗器を新たに装備する愚挙は、特に矛盾しないらしいです。

もしかしてこの人、『アサシン』の意味を知らないんじゃないでしょうか？

「アサシンブレードのことをオマエに教えてやった意味、ちゃんと理解することを期待するクマ」

周りの目が気になるといつても根本的には本人の気持ちの問題ですからね、結局は(あるいは乱暴には)。球磨さんがそれでいいのなら万事解決ということになるのでしょうか。

これからも影の道を歩んでください。影ながら応援しますから、影から出て来ないでください。

◆—【猫爪（ネコノツメ）】—◆

「明日できることは明後日にするのが知的」

球磨さんのナイフを金庫に封印した翌日の午前零時、つまり先程、怠けたいだけのクソみたいな発言を残してオカッパもやし提督が自室に引っ込んでしまいました。

提督を甘やかす気はないんですけどね。でも困ったことにあの人、飄々としていながらも道理を掌握する脳細胞と得体の知れない知略で問題を魔法のように処理してしまう——わけでもなく、実務となると要領がとつても悪いんです。

従姉妹である一ノ傘鉄子副提督なら三十分もあれば片付けてしまいうような仕事でも、一ノ傘姫乃にかかれば完全徹夜コースになってしまいます。いつだったか「おはよーございま……え、提督？ まだ仕事してたんですか？ いくら長く働いても残業代なんて出ませんよ」提督が一人デスマーチをしようとするなんて、その時は仕事量と提督の性格から想像もしませんでした。「……ああ、もう朝？ おはよ斑鳩。ちよつと、手伝ってくれ、ると、うれしい……かな」

その後、もやし提督は三八度の熱（低体温症でこの数字です）を出して三日ほど寝込んでしまいました。もう一度言いますが、普通なら三十分程度の仕事です。僕のお父さんのような唾棄すべきクズ提督であれば判子を秘書艦に押させるだけで終わらせるでしょう。提督がどこで躓いていたのかは未だに謎のままです。

向き不向きで片付けるには面倒くさ……ちよつと配慮が必要なので、残念ながら一蓮托生の身である僕は、もやし提督を枯らさない上手な付き合い方を模索していかなければ、というわけです。

「お酒が入ると寝ないくせに……お茶にスピリタス混ぜてみようかな……」

などと執務室で一人ブツブツ言っていると、壁の向こう側の廊下からゴロゴロと重たいものが台車か何かに乗せられて来る音が近づいてきました。僕は身構えます。またイムヤ達が変なものを作ったのかと。兵器開発はもう好きにしているから、いちいち執務室まで試作

品を持ってくるなど何度言えば分かってくれませんか。

しかし音が執務室の前でピタリと止まると、扉が丁寧にもノックされました。マナーを知らない潜水艦たちではないようで、ですがこんな時間に誰でしょう。

「どうぞ」と緊張しつつ声をかけると、ゆっくり開いた扉から恐る恐るといった様子で長月ちゃんが顔を出しました。帰還してまだお風呂にも入っていないようで、制服にカーディガンを羽織っています。

「あの……ドーム。斑鳩さん。カレンダーズの長月です」

【長月：Lv. 41+1 ↓ 42+1】

奥ゆかしいエントリーを果たした長月ちゃん。オジギは洞観者ジョークみたいなものです。

「ドーム長月さん。斑鳩です。——何かあった？」

「相談したいことがあって……」長月ちゃんはおもいとおもい様子です。「どうしていいか分からなくて……でも斑鳩にも迷惑をかけてしまいかもだが……」

「いちばん身近なカレンダーズよりも僕に聞いた方がよさそう、って思っただよね？」

長月ちゃんはコクリと頷きました。

「そういう事なら僕に聞かせてよ。力になれたら僕も嬉しいし。ほら、立ち話もなんだし部屋に入って。僕以外の誰も聞いてないから」自制しようと思っただけでもカレンダーズは、特に長月ちゃんと睦月ちゃんは鼻息してしまいます。誰だって自分を殺そうとした暴力熊よりは命の恩人を取るでしょう。球磨さんも恩人には違いないのですが怖いものは怖いし、可愛いカレンダーズは可愛がりたいのです。それが自然の摂理というものでしょう。

訳あり正規空母とはいえ熟練艦の矜持を手放さずにここまでやってきた僕ですから、長月ちゃんの悩みを聞くだけ聞いて「話せば楽になったでしょ」的な解決はプライドが許しません。懐の広い大先輩を演じつつ、同じ洞観者として対等であろうとする努力を見せ、ピザが食べたいのなら何枚でも焼き、僕は長月ちゃんの信頼を勝ち取るのです！

胸の内で意気込んでいると、長月ちゃんは廊下に置いていた台車を執務室内に押ししてきました。そりゃあ台車で運ばれてくるくらいですから重量物です。重量物なのですが……また刃物でした。

撃沈王・大和の大出力を以ってしても扱える見通しが立たなかったと言われている、まるで巨大なブツダデーモン像から拝借してきたかのような巨大刀『猫爪（ネコノツメ）』は、僕も触ったことがありません。長月ちゃんが持つ一振りの他に使い手のない二振りが余っていたので、それに目を付けた提督が借りてきて、魚雷や艦砲のノリで僕に装備させようとしたのです。一応、（秘密裏に）青い炎の力を行使して、ようやくと装備できたといえませんでした。ですが、それは例えるならば「戦艦大和も艤装の八割を捨てたら飛行甲板を装備できる」と言うのと同じくらい意味がありません。ネコノツメはあまりに重すぎて、持ち上げるだけで全身がプルプルしてしまいます。さらに洞観者最悪の弊害である妖精サポート無効化や、泳げないことも考慮して脳内シミュレートを何度繰り返しても、出撃から数分以内に転覆・沈没する未来しか見えませんでした。

そんなネコノツメですが、本体は超無骨なのに、鞘だけは美しく、また可愛いんです。漆のような朱色のベースの上で金色の猫が現代的センスに沿った絵柄で遊んでいます。極秘の兵器なので画像をインターネットにアップロードできないのが非常に残念です。同じ絵柄でTシャツとか作れないか相談までしたのですが、開発責任者だった大和に聞いてもデザイナーが誰なのか分からず終いでした。大漁旗よりは可愛い猫タペストリーのほうが艦娘にウケると思うんですけどねえ。……いや、洞観者になったせいで感覚が麻痺しちゃってました。猫は不吉のシンボルでしたね。

鞘のデザインだけは好きだったネコノツメが、台車にぞんざいに乗せられて運ばれて来る様に密かにショックを受ける僕でした。鞘も含めて立派な兵装なので少々荒っぽく扱った程度でどうこうなる代物ではないのですが……長月ちゃんはスマホの傷とか気にならないタイプなのでしょうか。

「わざわざ台車に乗せて来なくても長月ちゃんなら軽く手で持って――

「まさか相談事って、力が出なくなつてネコノツメを扱えなくなつたとか?」

「いや。台車はいつも芝居のために使つてる」

「芝居?」

「重たい物を簡単に持ち上げたりすると皆から怪しまれるだろう」

そう言つて長月ちゃんはネコノツメをひよいと片手で(ひよいと片手で!)取り上げました。オリンピックとか出場してみたいですね。

「あれ? でもここまで持つて来たつてことは、南鎮守府から持ち出す時はどうしたの? 赤帽か何かで運送?」

「うまいこと誤魔化してるから、そこは大丈夫」

ダメそうです。この様子だと長月ちゃんは南鎮守府内の引越しや模様替えの時には欠かさず呼集されてきたことでしょう。

「それで相談したいことだけどさ……本当に、こんなこと相談されても困るかもだけど……」

長月ちゃんは右手に柄、左手に鞘を持つてネコノツメをズルリと抜猫(抜刀のことです)しました。全長が僕の身長に迫るほどもあり、一息では抜けない刀身が露になります。ここ執務室で誤つて落つことでもすれば大惨事になりかねない兵器なのですが、長月ちゃんが持つてくれれば安心して見る事ができます。ネコノツメ+長月ちゃんの重量が華奢な二本の足にかかっているので床鳴りがすごい、にもかかわらず長月ちゃんに重量を苦にする様子はまったくありません。口が裂けても言えない表現ですが、僕の頭の中から(化物)の二文字が消えてくれません。

鞘くらいは僕でも持つてるので預かると、長月ちゃんは「ここなんだけど」と一点を指して僕に見せてきます。

「どっ?」僕は首を傾げます。巨人の包丁じみて巨大で無骨なので指し示された範囲がまず分かりません。大雑把に鋭利な鉄塊だなあ、としか捉えられないんです。鉄塊に問題など発生するものなのでしょうか。

「この部分。ほら」

「ん〜?」

「刃が欠けてるだろ」

「いやあ? 何処にも——」グイグイ見せられる刀に少し怯みながらも目を凝らすと「……まさか、この1ミリくらいのところ?」確かに欠けていました。大型バイクくらいなら余裕で真つ二つにできそうな刃の中程に、ほんの1ミリ程度の欠けが。僕が所有者だったなら絶対に気付かないであろうレベルです。

「知らないうちにこうなつてて……私はこれ、どうしたらいいか分からなくて……怖くて……修理、やっぱり弁償しないといけないのかな?」

「えーつと……僕が洞観者になつたのつて最近だし、ネコノツメのことも詳しくないんだけど、大和や武蔵さんとレンタル契約でもしてるの?」

「そういうのが送られて来た時の伝票とか見てもよく分からなくて、でもこれ……さんびやくまんもするんだぞ!」

「三百万——キログラム? ジュール?」

「三百万円!」まるで三百万機もの敵航空機を発見したような怯え方でした。

ここで僕は長月ちゃんの悩みをようやくと理解するに至ります。三百万円の刀を傷つけちゃった、どうしよう、ということなのでしょう。

確かに大金ですよ、三百万円。新車を買える額です。3,000k円と書類に表記しても、それに上乘せされる数%の諸経費が無視できない大きさになってきます。

ですが。

「この刀つて長月ちゃんのために開発されたんだよね?」

「武蔵はそんなこと言つてた気がする」

「この刃こぼれが長月ちゃんの戦闘に影響するとか、運用上の問題はあつる?」

「それはない、けど……」

「じゃあ大丈夫だよ。折れそうな様子もないし」

「で、でも、さんびやくまんえん！」うちの潜水艦たちに見習わせたい金銭感覚です。「カレンダーズ全員でTDRとUSJに行ける値段だぞ！ いや、札束とか見たことないから三百万円がどれくらいかは実際想像もできてないんだけど、でもさあ」

「現ナマは僕も見たことないなあ」と言いつつ口元がほころびそうになるのを我慢する背徳的空母斑鳩です。

可愛らしい子が可愛らしい悩みでオロオロする様は、さながら怪獣のぬいぐるみを警戒する子猫の如し。そっち方向の趣味がなくとも抱きしめてあげたいという欲求が湧いてくるのは社会性動物的本能から仕方のないことです。南方の泊地で目撃されるらしい殺人オラウータンすらも長月ちゃんの可愛らしさの前には警戒心を解くことでしょう。……不適切な例えでした。つまりは「スゴイカワイイ」と言いたいだけなんです。

無意識に手を伸ばしてしまう前に問題を片付けちゃいましょう。

「心配しないで。僕の方で何とかするから」

「ほ、本当か？ 何とかなる、のか？」殺人的上目遣い！ 守ってあげたい！ けど僕より長月ちゃんの方が三百万倍は強い！

「ネコノツメと普通の刀を一緒に考えていいかは分からないけど、消耗品を開発した時点でアフターサービスまで考えてあるはずだからね。材料を継ぎ足すなり全体を研ぎ直すなりして修理するのか、製作された三本のうち一本が予備とされてるのか、どっちかだとは思うよ。僕が調べておく。開発責任者の大和を捕まえられたら一番だけど最近また忙しくしてるからなあ。まあ、他にもツテはあるし、傘姫提督も知ってそうだから大丈夫かな。長月ちゃんが心配してるお金だけど、修理にせよ交換にせよ天照隊に請求されることは絶対に無いよ。秘密兵器を最前線で戦う駆逐艦に押し付けて壊したら弁償しろー、なんて話を通った日には信用も何も無くなるからね。たった三百万のためにコロネハイカラ島を見捨てるおつもりですか？ 全国の鎮守府には作戦決行の用意があったんですけど三百万を支払ったばっかりに食べ物を買えなくて出撃を断念せざるを得ず、悔しい思いをしますね。——なんて言っちゃって、僕たち艦娘は堂々としてれば

いいんだよ」

夜の東京タワーを色鮮やかに照らすライトめいた視線が長月ちゃんから注がれます。

「ネコノツメはしばらく僕が預かるけど、その間は大丈夫かな。やっぱり先に予備を手配した方がいい？」

「……えっ？ あ、ああ、そうだ、何か代わりの刃物がないと。できればちゃんとした物があればいいけど、最悪そのへんの包丁でも……」
「それなら丁度、ベストなものが手に入ったところだよ」

昨日、絶対に金庫から出すまいと心に固く誓ったばかりの球磨さんのナイフを、僕は躊躇無く引つ掴みました。

「それって確か球磨のナイフじゃないか。どうしてここに？」

「ちよつと訳あって今は僕のものなんだ」本当は預かり物ですけど、僕に預けた球磨さんが悪いんです。「コレでどうかな？」

「——うん。球磨のナイフなら信頼できる。すごくいい！」

超大型ナイフもネコノツメと比べると小刀も同然です。それでもナイフを手にした長月ちゃんは喜んでためつすがめつして見たり指で弾いたりしました。

「斑鳩に相談して本当によかった」長月ちゃんの肩から三百万円の荷が下りたようで、その表情は晴れ晴れとしています。「本当にありがとう。こんなに簡単に解決できるなんて。さすが練度カンスト空母だ。実際スゴイ」

まだネコノツメを預かっただけで解決はしていませんが、今はそういうことにおきましよう（それと最近、唐突なブレイクスルーによつて僕ら艦娘の性能と練度の上限見直しがなされると発表がありましたね。小賢しくなってきた深海棲艦に対抗するための力が手に入るのはよいことです、強さの基準が霧の艦隊レベルにまでインフレする前に戦争を終わらせられることを願うばかりです）。

「さあ。人生に立ち塞がる壁をひとつ乗り越えたところで、今日ももうお休みの時間だよ。長月ちゃんは確か、明日は近海の警備の後で南鎮守府に戻るんだよね」

「私の予定まで頭に入ってる……！」

「本隊から貴重な戦力を預かってるなら当然のことだよ。ご飯はちゃんと食べた？」

「如月が作ってくれてたおにぎり食べた。軽くシャワー浴びたら寝るよ」

「うん。じゃあ僕はもう少し仕事があるから」

「分かった。それじゃあ悪いけどネコノツメのことは任せるよ」

「任せて〜おやすみ〜」

「ああ、おやすみなさい。——いつかお礼するから！ 本っ当にありがとうな！」

執務室の扉が閉まり、廊下をトトトと軽い足音が駆けていきました。

少し待つてから廊下に誰もいないことを確認して扉に鍵を掛け、ネコノツメのカワイイ鞄に飛び付いて頬擦りしつつスマホで呉の海鳥を呼び出しました。コール六回も待たされました。

「遅い！ お姉ちゃんの電話にはすぐ出なさい！」
切られました。

0. 5秒で掛け直します。

「聞いてよ海鳥！ 僕たちさあ、色々あったよねえ。でもね、僕さつきね、今まで頑張ってきたに良かったと——酔ってないよ仕事中！
なに、もしかして寝てたの？ 呆れた。あのねえ海鳥、いや正規空母の葛城IIサン。部屋の窓から埠頭を見てご覧なさいよ。悩める駆逐艦が膝を抱えて海を眺めていたらと考えたことないかなあ。現実の仲間はみんなが都合よく眠れなくて散歩しつつ集合したりしないんだよ？ じゃあ誰がその駆逐艦の子を助けてあげるの？ それが僕たちの使命でしょうからに！」

切られました。

0. 5秒で掛け直します。

律儀に出る方も出る方ですよ。

「前に長月ちゃんって子のことは話したでしょ。今さつきその長月ちゃんがさあ——うへへ」

つ
づ
く

第40話 わらしべ任務（中）

◆—「T」の被り物—◆

獣の病が蔓延し、艦娘はおろか深海棲艦でさえも沿岸より滲む青ざめた赤い血に冒されると言い伝えられている最果ての海域に見える悪夢、その名はヤーナム島。

ごく小さな島の中心部に位置するという、すべての元凶と考えられている廃病院から悲鳴のように鳴り響くナースコールめいた電話が僕のスマホにかかってきました。

『……クマの……クマの信頼を裏切りやがったな』

こういう時に限って執務室に僕を一人残すのが傘姫提督です。昼の会議に遅れるとか言つてさつきまでドタバタしていたため、今の室内がいつそう静かに感じられます。

落ち着け僕。預かったナイフを翌日すぐ長月ちゃんに渡せば、球磨さんからのコンタクトがあつて然るべきと分かつていたことじゃないか。ただ球磨さんの怒り具合が予想の数百倍だつてだけの話で。

「……………あのう」ひり出せた言葉がこれだけでした。事前に手を考えていたのに自分の声が恐怖で詰まってしまうとは想定外です。

『あ？ なんだつて？』

球磨さんはキレると語尾が普通になる畑の人のようです。

……落ち着け僕。対応を間違えたら北鎮守府がヤーナム島みたいになるんだぞ。床一面が僕自身の血に濡れた総合棟の廊下を松明を掲げながら歩きたくはないでしょう？ 頑張れ僕！

「や、やだなあ人様のナイフを、そんな、理由もなく他人にわた、渡したりしません、よう」

『……………』

「昨晚、長月ちゃんから相談を受けまして。カレンダーズを変質者の魔の手から守れるように球磨さんみたくナイフを扱えたらな—って。ほ、ほら、球磨さんはずいぶん前から叢雲さんに稽古をつけてるって聞きましたよ。長月ちゃんも本当は参加したいんだけど、でも今更になつて加わるのも気が引けるらしくて。ずっと固定メンバーで仲良

くやつてる水雷戦隊の中に新しくひとり入っていくのが気まずい、あの感じですよ。よくありますよねー。僕も天照隊の人たちと出撃する時はけっこう緊張しますし、そういうアレなんでしょうねー。ですから、まずは長月ちゃんに球磨さんのナイフを貸してあげたわけですよ。形から入るのも悪くないと僕は思っていました。いやー本当に昨日の一日でナイスタイミングでしたよ。はい」

完璧な設定です。勿論抜かりなく長月ちゃんにも口裏を合わせるよう連絡を入れてあります。これで球磨さんの怒りを鎮められるはずだったのですが、

『長月も含めたカレンダーズ全員、トレーニングに参加したことがあったが？　すぐに飽きて十一本のゴムナイフが無駄になったが？』

ナムサン！　聞いてないよ長月ちゃん！

「えーっと……力、カレンダーズって十一人で一人みたいなどころがあるじゃないですか」

スマホを右の頬と肩で挟みながら喋りつつ、パソコンの方で長月ちゃんに連絡を——アドレスを登録しているスマホで通話中！　ナムアミダブツ！　なんたるデジタル依存社会の弊害か！　どうする僕？　考えろ——天照隊には頼めない——伝書猫では遅すぎるし——仕方がない、武蔵さんに中継してもらおう。鎮守府がヤーナム島化するかしらないかの瀬戸際だし緊急事態ですからね。

「だから他の十人に流されちゃうことだってありますよ」

僕の指がかつてないタイピング速度でキーボードを叩き、メール送信！　メール一通を武蔵さんがすぐに読んでくれるはずもないので再び送信！　三度送信！　送信！　送信！　送信っ！

「実際、ナイフを渡した時はかなり喜んでましたよ。『これで仲間を助けられる』っていうあの表情に僕は希望を見出しましたね。この子がいてくれたら世界はなんとかなる、そう思える笑顔でした」

嘘に真実を織り交ぜるのは基本ですよね。

『キモいことを言ってるんじゃないかクマ』

球磨さんの反応が和らいでゆくのを目にしながら、僕の両手はすさまじい速さで根回しに勤しみます。工作は球磨さんの専売特許では

ありません。僕だって『葛城』と名乗っていた頃は処分されないように色々やってきたんですから。

「長月ちゃんだけじゃなくて、僕だって興味ありますよ。陸にも敵が多い立場ですけど鉄砲なんて装備できませんし」

『ふーん……ちゃんとした募集なら、ちゃんと真面目な奴らが集まると思うクマ?..』

「それはもちろん」

『一回五百円くらいでも?..』

「お金取るんですか?..」

『理解されない消耗品が多いクマ。弓道の米俵みたいなヤツと、それ専用の矢みたいなもんクマ。必需品なのに自分で買うなんて想像もしない、みたいな』

「巻藁のことですか。ああ、確かに僕もしようもないことで揉めた記憶があります。でしたら竹櫛提督にお話してみたらどうです? 球磨さんがパイみたいに頼られてるってことは、つまりそこに最低でも球磨さんのお給料分のニーズがあることを意味してるんですよ。必要なら必要なだけ要求するべきだとも思います。球磨さんが指導したスキルで天照大艦隊の戦力は増強されて、球磨さん自身の負担も減る。理想的な一石二鳥じゃあないですか」

『——そう上手くいくクマ?..』

「球磨さんの頑張り次第では。竹櫛提督の考えは実際に聞いてみないことには分かりません」

『提督は今日の午後からそっちに出張の予定だったはずクマ。交渉上手の斑鳩から話してみればいいクマ』

「えー僕からですかー?」なんて不満気に言ってみますが、ナイフの件を流すのに加えて球磨さんに貸しを作るのなら、これほどのお安いご用ありません。

今ちようど武蔵さんからの返信も来ました。

慌ただしい朝でしたが、今日もどうにかこうにかかなりそうです。



だというのに、どうして僕が本隊からの助っ人さん達に囲まれながら、脱衣所のストローブの前で青ざめてガタガタ震えているのかというと、ヤバイ女だと思われたからです。

この季節に泣きながら冷水シャワーを浴びていれば深海棲艦云々の事情がなくてもヤバイですからね。



ヤーナム島が実在するかどうかはさておき、僕は球磨さんの怒りが有頂天に達することを血みどろの孤島に例えました。ですが所詮は個人レベルのいざこざに過ぎません。ダメコンが発動しない、つまり慢心しやうがしまいが運次第では砲弾一発で肉体がネギトロめいた魚のエサになり得る全泊地で今この時も命綱のない綱渡りに興じている存在、洞観者の面倒を見ている武蔵さんにとって死ぬほどどうでもいいエマージェンシーコールほど邪魔なものはないでしょう。

球磨さんとの電話を終えた後、直後に掛かってきた武蔵さんからの電話で、僕はとつてもキツイ嚴重注意を受けました。

怒られて泣くのとつて、あるいは泣くほど怒られるのつて、記憶を遡つても最後の経験がいつだったか思い出せません。電話ですからビンタやゲンコツが飛んでくるわけでもなく電源さえ切つてしまえば簡単に逃げ出せたはずなのですが、恐ろしい大人のような武蔵さんと過誤を犯した子供のような僕の通話は一時間も続きました。電話の向こうの武蔵さんがどんな様子でキレていたかは分かりませんが、僕の方は無意識のうちに木の床に正座していました。涙と鼻水をダラダラ流しながら。

僕は調子に乗っていたんです。傘姫提督が頼りないからつて自分が分隊を預かった気になって、ちよつと練度が高くて色々と装備できる航空母艦だからつて、偉そうに誰を守るとか面倒を見るとか、ちゃんちゃらなんちゃらです。逆に笑えてきます。笑おうとしたら咳き込みました。

叱責から解放された僕は鏡の中で酷い顔をしていました。深海の空母ヲ級が涙を流す様はさながらヤーナム島のラスボスです。即死攻撃を使つてきそうです。

「……………シャワー浴びなきゃ」

気が付くと竹櫛提督がいらつしやる時間になつていたので全部洗い流しておこうと浴場に行ったのですが、いざ涙を隠す水を浴びてしまふと——例えるなら傘もささずに雨の中で一人立ち尽くす、あの気持ちです。堰を切つたよう、という表現そのままに我慢できなくなりました。

そして自分を取り戻した頃には、タオルやら毛布やらでぐるぐる巻きにされた状態でストーブの前に座つていたわけです。

身体や髪が丁寧にも乾いていたということは、僕は皆に色々な意味で自分をさらけ出してしまったわけで、もう一生このまま脱衣所から出たくない所存です。

「ぶっちゃけますとですね。斑鳩さんの好感度がグリーンと上がりましたよ。なんてゆるーかこう、人間味みたいなのが見れて」

そう言つてくれたのは阿呆、もとい白露ちゃんでした。本当にぶっちゃけてくれますよね。じゃあ今まで僕に人間味がないと思われていたということでしょうか。「人間味」は人情や温かみを意味しますが、白露ちゃんは明らかに「深海棲艦か否か」を基準に言っていますよね。他の誰も否定しません。そう言われるのなら艦娘だって洞観者から見たら——とは言いません。それならそれで僕のイメージアップに繋がつたとプラスに考えておきましょう。でないとな後の洞観者としての活動が憂鬱すぎて、また泣いてしまいそうですし。

今後といえはナイフの件にも影響が出ました。

今日は南鎮守府の方にいる球磨さんにも迷惑をかけてしまいました。ヤバイ女が保護される前、恫喝のような電話をしていたところを見られていたらしく、南鎮守府では球磨さんが詰問されるという珍し——くは別にない騒動が起こつていたとか。ついでに誰かのおやつを勝手に食べた食べてないの言い争いになり、ナイフの話は流れていききました。阿呆もたまには悪くないものです。たまには。

◆
◆

「あー、その、あれだ。無理をする必要はないのだぞ。少々溜まった仕事など後で傘姫にやらせればよいのだ。むしろ本来そうすべき事ばかりだ」

そう言つて下さるのは天照大艦隊の一番偉い人、南鎮守府から定期監査にいらした竹櫛提督です。僕が執務室に戻る前から傘姫提督の机を勝手知つたる他人の席のようにお使いになり、記録を精査されていました。

(以降、面倒なので地の文では尊敬語を省略します)

傘姫提督が頼りないからと僕がいくら頑張つても所詮はイチ艦娘、やっぱり重要な部分は竹櫛提督や一ノ傘副提督に面倒を見て貰わなければ分隊は上手く回らないわけです。

「もう大丈夫ですので」と僕。充血した目で言つても説得力はありませんけど。「すみません、せっかく来て頂いたのにお待たせしてしまつて」

「私の仕事は待つ事である。果てしなく広く遠い海に部下を送り出し、帰投を待つ。情けない限りだが待つ事ばかりが上手くなつてしまつてな」

ドヤ顔で言われても少しも心に響かない台詞ではあるものの、だから普通で良い人なんだと考えることもできます。もやしクズでもブラックでもない、ごくごく普通の提督さんにバンザイです。今日は傘姫提督の出張に付いて行つた猫吊さんからすると「普通過ぎて興味無し」とのことみたいですけどね。これはとつても幸運なことです。

「それに——その、なかなか興味深いものをだな。見つけたのだ」

「興味深い？ 傘姫提督の悪事の証拠とか」

「私は一ノ傘のような悪趣味は持ち合わせないつもりだ」傘姫提督の苗字も一ノ傘なんですけど、竹櫛提督がそこまで含みを持たせたかは分かりません。「そこで台車に乗せられている大剣のことだ」

竹櫛提督が指したのは昨日、長月ちゃんから預かつた猫爪（ネコノ

ツメ)でした。ちよつと台車の位置がズレていて鞘から刀身が少しはみ出ているところを見るに、僕が来るまでに竹櫛提督はウエイトリフディングにチャレンジしたんでしよう。

「あの大剣の用途が気になる。まさか傘姫が携えるわけでもなからう。では何に使うのだ？」

長月ちゃんが敵を切るのに使うんです、という機密がいささか開放的であっても問題にならない理由を、竹櫛提督は直に体験したんです。大剣で体験したんです(すみません言ってみただけです)。

ふつうの人ならば無造作に置いてあるネコノツメを抜猫(抜刀)することさえ困難です。健康な成人男性であれば鞘の先の方を掴み持ち上げて引っ張れば抜けるには抜けるでしょう。ですが重力により落下する刃は真下にあるもの(例えば床とか足とか)を容赦無く切断します。納猫(納刀)はさらに困難を極めます。車のタイヤ交換をジャッキ無しで行えるか、というレベルの話です。

なので大剣の形状をした超重量物に触れた人は、「なるほどコレは部屋のインテリアか何かだろう」と解釈するって寸法です。いえ別に意図してそんな設計をされたとは聞いていませんが、竹櫛提督の反応の通り、ネコノツメは誰かが装備する兵器とは理解されないのです。

ということ、僕が非常に合理的でいい加減な嘘をつく理由も理解されることでしょう。

「傘姫提督が執務室の飾り物について、買ったんです」

「普通の掛台では支えられそうにない大きさだが？」

「鞘の模様が可愛いからって何も考えてなかったらしくて」

嘘+真実≡優しい嘘。本当に美しい公式です。『バファリンの式』に似た汎用性があります。

「成る程。傘姫のやりそうなことだ」

竹櫛提督はあっさり信じてくれて、チェックしていたファイルをドサリと机の上に置きました。

「実はこの私も軍刀を持っていたのだ」

そして唐突に始まる自分語り。

『『丑の刻摩天楼』は名刀だった。今でも惜しんでいる程で——』

無駄に長い話だったので要約すると、頭のおかしい空母たちに真ん中から折られた上、僕のお父さんが襲撃時に奪って破れかぶれで振ったところをゲームキューブで迎え撃ちされて刀身が綺麗サツパリ消失したと。

つまりお父さんが悪いようですが、意味不明です。なんですかゲーム機に負ける名刀って。

「あ、あの……僕は」

「いや気にするな。私は斑鳩を非難する考えを一切持たず、また分隊に欠かすことのできない空母であると高く評価している」

「はあ……ありがとうございます」

「ところでだ。話を聞いて貰った通り、結果的に今の私には腰に下げられるものがないわけだがな。うむ。腰回りが実に寂しい」

「はあ……あの刀でよければ持つていかれます?」

「おお、いいのか!」

言ってみただけだったんですが、まさか食いつくとは——持ち上げられもしない刀をどうするつもりなんでしょうね? 大きな武器は持っているだけでもカツコイイ的心理でしょうか? いえいえ僕にだってそういう感性はあります。機能美あふれる大口徑砲カツコイイ。でも持たされるとなるとウンザリするのが現実でしょうに。ネコノツメは粗大ゴミにも出せませんよ。

「さすがは斑鳩だ。話が早い」

「ですが注意事項がいくつかあります。まずですね、実はこの刀——猫爪という銘があるのですが、実は入手するために傘姫提督ったら、天照大艦隊の艦娘にもコツソリ協力をあおいでいまして」

今日の僕の口からは事実と異なることばかり出て来ます。

「特にカレンダーズがよく知ってるはずです。加えて、見ての通り非常に特別な刀でして、何処の誰が管理しているのか、それだけでも問題の火種になりかねません」

「なるほど」と竹櫛提督は知った風に頷きます。

「ですので、執務室に飾るくらいに、なるべく人目には触れないようにして頂いて、もし本隊の誰かに指摘された場合は、『これは君が知るも

のとは別の個物だ』として切り抜けて頂けると面倒がなくなります」
「分かった。そうしよう」

「それと——たいへん申し上げにくいのですが、この刀はあくまで借用品という形でここに置いておりました」

僕の真の目的、それはネコノツメを遠ざけてしまうことです。

……だって長月ちゃんから預かった極小の欠けがあるネコノツメ、
研ぎ直すのか交換するのかそのまま使えと言われるのか、どうしたつ
て武蔵さんと連絡を取る必要があるんです。ええそうですとつても
嫌です。深海棲艦に似ているからって感情がないと思わないでくだ
さい。誰が激怒させた相手に平気で電話できましようか。

「もしかしたらですけど、軍の偉い人から返却やメンテの要求がある
場合もあります」

「軍刀の借用とは情けない話になってしまっうな」

「ま、まあまあ。お飾りですから。詳細は改めて後日ご説明させてく
ださい」

「そうだな。私も運び出すために一ノ傘から車を借りなければならな
いようだ」

お分かり頂けるでしょうか、僕の自己嫌悪。自分の命を救ってくれ
た兵器を何も知らない人（関係者ではありませんが事情を知らない人）
に、恐怖の武蔵さんから逃れるために預けちゃったんです。

……球磨さん、こういう事の処理が得意なんでしたっけ？ 話だけ
でも聞いてもらえないでしょうかねえ。



「さて今日の用事とは別にだな。傘姫に持たせに来た物がある」

ずっと気になっていたんですが、竹櫛提督の横に四十リットルくら
いの大きなダンボールが置かれています。竹櫛提督は南鎮守府から
電車とバスでここまで来ていますから艦娘の誰かに海路で運ばせた
ものでしょう。見た限りではダンボールに企業ロゴなどは入って
いません。

「中身は何でしょう？」

「うむ。これは私が斑鳩を信用しなければ達成できない任務だ。そして同時に斑鳩にも私を信用してもらおう必要がある。つまるところが相互理解だ。分かるか」

「はあ」

「私は模範的行動により天照大艦隊を指揮し、邪念という障害は我が愛刀で——いや今は刀を持たないが、そう弓だ。我が愛弓で困難を排除してきた」

「はあ」

「間違ってもこの箱の中にあるような唾棄すべき下劣な道具を使おうなどと考えた事はない。断じてない。いや、人間としての性を捨てたという意味ではなくてだな、理性こそ人間だと私は考えている。何事も理性的であるべきだ。そうだろう」

「……はあ」

球磨さんから聞いたことが思い出されます。この人、盗撮映像を手していたんですつけ？ どの口が理性を語るんでしょうね。叢雲さんは知っているんでしょうか。

「では、見せるぞ」と竹櫛提督がダンボールにカッターナイフを入れて開き、その中から取り出したのは……黄色い「T」の形をした何かでした。テトリスのブロックの中に「T」形のものがありますよね、あれを一体成型で作った感じです。そして梱包していた大きなダンボールに入っていただけあって、「T」は人の頭ちようど四つ分くらいのサイズがあります。その割には随分と軽そうで、抱えている竹櫛提督の両手にはほとんど力が入っていません。

……などといった描写も非常に阿呆らしいので言ってしまうと、いえ賢明なる読者さんならば既にお察しでしょうが、軍服の上から「T」字の頭を生やした妖怪なのかロボットのなかやーナム島の異形なのか、噂には聞く存在未確認の司令官、それからもぎ取られた頭のようにでした。

僕がだいたい引いているのを察した竹櫛提督は「大丈夫だ、見ろ。ただの被り物だ」人間でいうところの首に該当する部分に開けられた穴

を僕に見せました。中は空っぽのようです。

「あ、あはは、ですよね被り物に決まっていますもん。宇宙人か何かが艦隊の責任者やってるなんてあり得ないですよね。根も葉もない噂ですよね」

「……………」

「どうして黙るんですか」

「知りたくもない闇と隣合わせなのだ、我々軍というものは。斑鳩の言う噂には本当に根も葉もないだろうか？ この被り物は誰が何の目的で作り、我々の元に送っている？ マスクで顔を隠した者がインターネットで注目を集める程度は理解し難くとも人間の範疇だ。しかしこの「T」を被って脱がない者を艦娘が何の疑問も持たず慕うのだ。これが狂気でなくて何だというのだ」

「で、でも被り物なんですよね？ 理解できなくてもいろんなファッションがありますし、少なくとも頭が「T」字のミュータントは実在しないんですよ？」

「……………」

「どーして黙るんですか!？」

「これは噂だが——「T」字男(?)が艦娘にセクハラ行為をはたらいていたらしい。見かねた勇敢な警備員は「T」の端部に拳を叩き込んだ。すると重く鈍い音と共に「T」字男は頭(?)の殴られた箇所内出血(?)を作って倒れ、セクハラされていた艦娘は親の仇を始末せんが如く警備員を襲い始めたようだ。——信じるかどうかの判断は任せる。この情報を持ち帰ったのが一ノ傘だということも付け加えておく。頭を隠せるついでに男装していたのが幸いだっただけだ」「そ、そんなまさか……僕だってそれなりに経験を積んできたのに、そんな狂った世界が……?」

「斑鳩は頭を撫でられる行為について、どう思う?」

「頭ですか？ よほど気を許した相手でもない限り正直、格下扱いされてるみたいで怒ると思いますけど」

「悪夢のような艦隊に所属する艦娘はだな。司令官に頭を撫でられると喜ぶそうだ」

「アイエエエエエ！」

頭を撫でる行為は海外の特定の地域ではタブーとされていますが、『叢雲の薬指』の世界でも異なる理由でタブーです。もちろん、例えば叢雲さんが竹櫛提督に撫でられる分にはツンツンデレデレするだけでしよう。なんでか僕に対して無駄に忠誠を誓っている潜水艦たちも褒める時は頭を撫でるとよいみたいです。——が！ 普通の感性を持つ艦娘ならば頭に触れられた時点で「よし、こいつは右肘を逆方向に曲げられるよう改造されたんだな」と極めて冷静に判断&鉄槌を下します。僕が身体検査を受けていた時、汚い手でペットを扱うように頭に触れやがったハゲ共……深海棲艦の次は貴様らだ……！

「つまり、この被り物はだ」と竹櫛提督はまとめました。「仮面舞踏会めいた暗黒懇親会の招待状なのだ。ブラック艦隊運営をやっていた一ノ傘には以前から届いていたようだが、天照大艦隊も大きくなったために私の元にも、そして一時的にでも大和を預かることがある傘姫にも送られてくるようになった、というわけだ。分かったか」

「……分かりません」

「では傘姫にこれを渡しておいてくれ。頼んだぞ」

「失礼ですが絶対にやめておいたほうが良いと具申します。あの人ああ見えてけっこう繊細ですよ？」

「短い付き合いではない。知っている」

「一ノ傘副提督は男装されて潜入なさったんですよね？ つまり『そういう危険』を想定されて、実際その予感的中したんですよね？

もし傘姫提督がセクハラされたら——」

「分かっている」

「発砲騒ぎになりますよ!? 階級とか立場とか考える前に躊躇無く拳銃抜く性格の持ち主ですよ!?!」

「分かっている! だから参加させるとは言っていない!」

息を荒くして上官と睨み合う僕らはまるでハリウッド映画の1シーンの中にいるようでした。我に返った執務室の扉の外からゴソゴソと音が聞こえてきました。セクハラ云々の発言が盗み聞きされて誤解を招かなければいいのですが。

「すまない。私の説明不足だった」

「いえ。僕の方こそ出過ぎた発言でした。申し訳ありません」

「傘姫にはコレを受け取らせて、参加・不参加の連絡だけは必ずしろと伝えてくれ。受け取り拒否は本件の性質上、許されん。対象となった時点で強制参加という雰囲気があるのは否定しないが、天照大艦隊の最高責任者は私だ。当然、分隊についての責任もこの私にある。そう伝えてくれると助かる」

「了解しました。お心遣い感謝致します」

竹櫛提督から「T」の被り物を、勲章のように神妙に受け取りました。明日は傘姫提督に四の五の言わさず片付けさせましょう。

……こんな阿呆らしいことをやっているから深海棲艦が無念を怨念に変えて人類を根絶やしにしようとしているんじゃないか。洞観者としての僕は尚更そう思わずにはいられませんでした。

◆—【愁いの髪飾り】—◆

真実と対話せよ。

昨晚の武蔵さんの電話は僕にとって新たな目覚めでした。彼女ほど、このおかしな戦争と真面目に向き合っている艦娘を僕は知りません。猫はきつと、だからこそ、最初に呼びかける相手に戦艦武蔵を選んだのでしょう。

昨日あれだけ悩んでいたのが嘘のように僕の頭は澄みきつています。近いうちにまたハンド・キャットにカレーを食べに行きたいですね。傘姫提督の部下となつてすぐにカレー鍋に大穴を開けてクビになったという磯風の武勇伝にも興味があります。

いつか戦友として僕が暗雲を蹴散らし、武蔵さんの砲弾が敵を貫く日が来たならば——おっと死亡フラグをたてるどころでした。

意気込むのは程々に、しかしさて、今日も真面目にお仕事です。夜が明ける直前まで話し込んでしまったのでちよつと遅刻してしまいました。傘姫提督が僕より早く執務室を開けている珍しいパターンです。

「ぐつもーにん。斑鳩が寝坊なんて、珍しいねえ」

「ごめん。深夜に長電話しちゃつ——……」

傘姫提督は、左手に「T」の被り物を、右手にカッターナイフを持っていた。

「動クナー！ 左手ノカッターカラ手ヲ放セ！」

【斑鳩：Lv. 150+1 ↓ 150+2】

「あ、あれ？ 斑鳩さん？ そんなに怒るの予想外、だよ？」

「椅子カラ降りテ跪ケ！ 両手ハ頭ノ後ロダ！ 早クシロ！」

「ねえ落ち着いて？ 分かったから。冗談だから。私が読心術を使えるの——」

「早クシナイトブチ殺スゾ糞提督ガー！」

「斑鳩に何があったの!？」



取り乱しました。

【斑鳩：Lv. 150+2 ↓ 150+1】

「ここ数日の斑鳩、ちよつと変だよ。何か曰く付きの装備とか、開発して、ないよね——いま『提督に心配されちゃお終いだ。そして今、心配されてる僕はお終いだ』って、考えてる、よね？ すっごい失礼なこと、考えてるよね？」

「心を読まれるのには慣れたから、せめて口に出さないでもらえる？」

傘姫電探を装備した球磨さんと長月ちゃんのトリオで無敵の部隊を編制できそうです。敵の最深部まで一気に叩けるんじゃないでしょうか。

「敵がいる海域まで、ずーっとドラム缶の中に？ たぶん開けた時には、衰弱死してるよ」

「今からでも艦娘になつてみたら？」

「残念だけど、私には竹櫛くんに連絡、しに行く任務があるから。ちゃんと直接、『NO！』って言いに行くから」

「そこまでしろとは言つてないよ。電話でいいよ」

「斑鳩の疑念を、完全に払うために私、頑張るから！ じゃ、後はよろ

しく、ね」

南鎮守府までは陸路で三時間。会議と称した雑談と食事で三時間。帰ってくるのに三時間。ただ竹櫛提督に「NO!」と言うだけでヤツの本日の業務は終了です。天照隊の助っ人のおかげで僕が使う機会が減った便利アイテム、いつでもどこでも仕事ができる非人道的タブレットを常備させようかと考えています。



デスクワークをお願いできて、しかも嫌な顔ひとつせず引き受けてくれる万金を積んでも欲しくなる艦娘、その人こそ航空戦艦・山城です。本日は傘姫提督の替わりに執務室に籠ってもらうことにしました。

「この部屋——扶桑姉さまの匂いがする?」

【山城：Lv. 91 ↓ 94】

海と机はシームレスだと本物のモノノフは言います。文房具も立派な兵装だと。「ペンは剣よりも強し」ではなく「戦闘の前後に記録を残せ」という意味です。その言葉を残した重巡洋艦は仲間が怠ってしまった戦果確認のために出撃し、奇襲を受けたとの通信を最後に帰らぬ者となってしまいました。僕たちが胸に留めておくべき有名な話です。

「このへんかしら……姉さま!」

竹櫛提督が可能な限り多くの艦娘に仕事を覚えさせようとしているのも、そういった理由からだそうです。天照大艦隊ほどの文字通りの大艦隊ならば叢雲さんから数人を秘書に専念させれば捗るんじゃないか、そんなアホな事を言う人もいたそうです。

「(こ)じやない……姉さま? 姉さま!」

僕の目の前では山城がドラえもんでも探しているのか傘姫提督の机を引っ掻き回していますが、あのように必要なものを見つけられないのも常日頃からしっかりしていないために生ずる問題です。……たぶん。問題です。

「姉さま？ どこに隠れているんですか？」

「あのー……ねえ山城？」

「姉さま!? 違う、もつと奥の方から？」

「ねえ山城？ ねえ!？」

「姉さま!? 姉さまー!!」

「うるさいよ!!」



提督の机は泥棒に荒らされた後のような様相を呈しています。すべて解放されて中身をかき乱された引き出しや、机の上から落つこちた液晶一体型パソコンは無事でしようか。あまり自分というものを見せない人が机に飾っている猫の写真が入った写真立てを床から拾い上げると、悲しい出来事を象徴する遺品めいて割れちゃっていました。ほとんど怒らないタイプの傘姫提督もこれはさすがに……ああ昨日も今日も胃が痛い。

そんな惨状も瑣末なこと、倒壊させた家具を粉微塵も気に留めない猫のように山城は室内をキョロキョロと見渡しています。

「姉さまあ……どうして出て来てくださらないんですかあ……」

「お願いだから僕をこれ以上幻滅させないで。航空戦艦に対する不信感がすごいんだから」

サラツと流されちゃいましたが秋のミサイル事件（36話「秋空を翔ける阿呆」参照）、もし僕が青い炎の力を扱えていなかったら傘姫提督と仲良くネギトロめいた肉片になっていましたからね。

「斑鳩にも妹さんがいるんだから私の気持ち、分かってくれるでしょ」「いや姉妹がどうかじゃなくてね。意味が分からな——ちよ、ちよつと僕の匂いがかがないで！ まず説明をプリーズ！」

「この部屋から微かに扶桑姉さまの優しい香りがしたの。つまり姉さまがいらっしやるか、あるいは姉さまに繋がる何かがある。OK？」

「NO」僕と傘姫提督はノーと言える日本人です。

「隠し扉とか無いわよね。空襲に備えてのシエルター」

「ここは総合棟二階の、薄い壁と床と天井に囲まれた、スキマ風をDIYで防いでる執務室です。復旧作業の時に見てるでしょ」

「一週間前に入った時は特に何も感じなかった——つい最近、扶桑姉さま本人が来たり関係する品物が届いたりしたはずよ。どんな些細な事でもいいから教えて」

「そう言われても、ねえ……」

特別なことといったら、球磨さんからナイフを預かり、そのナイフを渡す替わりに長月ちゃんからネコノツメを預かり、竹櫛提督にネコノツメを預けた後に渡された「T」の被り物が手元にあるくらいです。

傘姫提督がカッターナイフで切り刻もうとした「T」のゴミをホラ何もないでしよと言う代わりに渡したら、まあ驚き、山城は匂いをかいた後に被り物をギュツと抱きしめて「ああ、姉さま……山城はついに追いつきました」ヤーナム島から回収された遺骨でも扱うように感傷に浸り始めました。竹櫛提督と一緒にさんざん罵倒した「T」提督を胸の中で慈しむ光景が再現されています。ドン引きです。

「姉さまの温もりを忘れた日は一日としてありませんでした」

「あ、あの……山城？」

「この日を待ち続けて……やっとここまで……!」

「ねえ仕事はじめようよ」

「姉さま……姉さまあー!!!」

「うるさいってば!!」



僕だって楽しくて山城を蔑ろにしているわけではありません。

イギリスが第一次産業革命で労働のカタチを変えていた時代、ロンドンのとある酒場ではこんな騒動が勃発していたそうです。

『あの店は酒も買えない浮浪者が近づくと扉を閉めるんだ。分かるか？ 金を持ってない奴は酒を目で見る権利すら無いと言う。不幸者の視線が酒を腐らせると言う。なあ、店主や店の中で笑ってる商人共こそせっかくの酒を腐らせるクズだと思わないか？ だったら俺た

ちで、店の扉や窓が二度と閉じられないようリフォームしてやるのが世のため人のためつてもんだらう』

こうして幸運の星を見つけられない人々を蔑ろにしてきた酒場は荒ぶる匠たちの手により日本家屋めいた開放的空間にされ、改装賃として様々なものが強奪されていったといっています。

嘘です。いま考えた作り話です。ごめんなさい。

それはさておき、「仕事のできる艦娘が抱える悩みをほったらかしにすることは天照大御神が許しても空母斑鳩が許さない」をモットーとする僕がすつとぼけているのには当然それに足る理由があります。

大本营直属の大戦艦、撃沈王・大和はあまりに有名ですが、憧れる子供の夢を壊さない言い方をするならば、彼女だつて一人で戦っているわけではありません。当たり前です。いかなる未知の脅威が棲んでいるか分からない海域にも臆さず旗艦として超攻撃的な偵察作戦を遂行できるといっても、仲間のフォローなくしては少々頑丈なだけの鈍足艦は四方八方からの飽和攻撃を受けて轟沈してしまうのが戦場というものです。なので撃沈王とは即ち随伴艦の存在があつてこそ華やかであり続けられるのであり、大和本人も運命を共にする仲間を誇りに思っているといつも語ります。ただ残念ながら艦隊の性質上その編成は決して公にはされません。大規模作戦を練るための情報収集隊が壊滅してしまつたらアウトですからね。脚光を浴びる大和の背後には決して姿を表に出さないニンジャめいた艦娘がいるんです。

そして山城によく似た薄幸美人、航空戦艦・扶桑もそのニンジャめいた一人なのです（ニンジャではありません）。

僕がスクール水着を着せられて溺れていた頃に見張り番をしていたり、また僕が目から青い炎が出た時なんかは大和と一緒にこの鎮守府を砲撃したりと、実はけっこう接点があつたりします。積極的に歩いて棒に当たりにいくスタイルの妹とは違って扶桑はおっとり不幸ですが、枝垂れ桜が似合うイメージは瓜二つな感じがします。

山城の鼻を信用するとして、これは僕の想像ですが「T」の被り物を製作・発送させられている不憚な艦娘が扶桑なのでしょう。怪しげ

なパーティーと極秘扱いの艦娘はとても相性がよさそうですからね。

「この黄色い物体、誰のもの？　というか何なの？」

山城は「T」の被り物を手放す気がなさそうに深く抱きしめ、子供が玩具の所有権を主張するみたいに僕の視線からも隠すよう背を向けました。

「傘姫提督のもの。さつき出掛ける前に捨てようとしてた謎のオブジェクト」

本当のことを詳しく説明すると山城自身が匿名暗黒懇親会に参加しかねません。いえ恐らく「T」の中で素顔を惜しげもなく晒しながら「扶桑姉さまー!!」と叫んだりするに違いありません。

「山城の言う扶桑某さんの事は分からないけど、それ欲しいなら持つてっいいよ。だから仕事しよう？」

「——斑鳩から隠し事の匂いがあるわ」

「お風呂にはちゃんと入ってます。そんな匂いしません」

「叢雲や雷電姉妹よりも秘書艦慣れした斑鳩が執務室に持ち込まれた、こんな目立つモノの出自を把握してないのはおかしいじゃない」

「僕は山城が言ってることの方がおかしいと思う」

「私のヘソクリ三式弾を賭けてもいい。斑鳩は何か知ってるわ」

「知らない。知らないったら知らない」

この後の一時間にも及ぶ睨み合いの末（一時間もの間、ずーっと山城の濁った瞳を鼻息荒く堪能し続けました。目を逸らしたら負けですからね。途中で誰かが執務室に入ってきてきても熱い視線を途切れさせることはありませんでした。声だけじゃ誰だか分からなかった触らぬ神に祟りなしを実践した誰かさん、とても賢明な行動だったと評価しますが、できれば仲裁に入って欲しかったなあ……）、山城はようやくと折れてくれました。

山城が視線を外してくれたと同時に二人して眼球の乾きに悶え苦しみました。阿呆なことをやっています。

「い、斑鳩がここまで強情だとは知らなかったわ。いいわ、なら作戦を変えるまでよ——これを預かって頂戴」

「なに？ ごめん見えない」あと五分は目を開けられそうにありません。

「私の髪飾りよ。ほら」と言いつつ山城も見えない僕に向かって腕を振り回したのか、左肩をベシツと殴ってきました。

ジャラジャラした物体は山城の頭に生えている墓石のような艦橋の根本に付けていたものでしょう。受け取ったが最後、僕の運のパラメータが13ほど下がった気がしました。静かなる狂気と不幸をもたらす装備はまるでヤーナム島廃病院の手術室で入手できるアイテムです。島の特殊イベントを進めるために必要となる重要なヤツですきつと。目が見えないので匂いをかいでみました。——普通です。何をやっているんでしようね僕は。

「で？ 僕にこれをどうしろと？」

「聡い斑鳩なら分かるでしょ」

「評価はありがとう。でも分からないから聞いているの」

「その髪飾りが扶桑姉さまの手に渡れば、姉さまの方から私を探してくれるわ」

「だから扶桑某さんについては何も知らないって——」

痛みを我慢して右目をうつすら開くと、ちょうど山城が執務室から逃げていくところでした。

「みなまで言わなくても私は斑鳩のこと信じてるから！ この黄色い何かはありがたく貰っていくわ！ 本当にありがとう、それじゃ！」

まだ山城も目があまり見えていないようで、廊下の色々なものに体当たりする音を響かせながら去ってしまいました。

執務室には僕だけがぽつんと残りました。よく見えませんが傘姫提督の机は荒らされたままです。

「……せめて片付けていけよコンチクショウ」

今日はもう執務室を封鎖してしまつて、ヤーナム島のイベントでも攻略しに行こうかしらん。

自分で言うのもアレですが僕はヤーナム島で死んだら怨念がエリアボスに昇華する類の艦娘ですからね。その時は今度こそ人類の敵になろう、駆逐艦を見逃すかわりに航空戦艦を執拗に狙う怨念になる

う、そう決意しました。

つづく

◆—【藁】—◆

アンタは他の連中にないものを持っている。

あれは激戦を終えて母港に帰る途中でした。もう立っているものやっとなといった様子の仲間に肩を貸している時に、耳元でぽそりと褒めてもらったことがありました。お父さんの艦隊が壊滅し、僕が失跡する前のことです。

今になって僕は思います。誰も持っていないものを自分だけが持っている、それはとつても孤独で寂しいことのようなのです。

「僕は、一人じゃない」

そう書いた手記の切れ端をヘンゼルとグレーテルのように歩いた道に遺しながら、僕はヤーナム島の中心部、廃病院を目指しました。

ふと振り返ると、落としていった手記の切れ端は獣の血に溶けて消えていました。それもまたヘンゼルとグレーテルのように。

島に持ち込んだ物資は上陸から数十メートルも進まないうちに底を突き、しかし幸い生き残るために必要な獣狩りの道具や、流した分を補う輸血液はいくらでも手に入りました。

かつて僕らに迫るほど高い水準にあったであろう文明を築き上げた島の住民が生活していた街の影を、鋸、鉈、そして砲弾代わりの水銀で切り開きながら駆け抜けました。

赤い月を背にした廃病院の外観を見る頃には、僕は血に酔ってしまっていたのだと思います。本来の目的を記していた手記は既にページがすべて失われ、月を見ているだけで発狂して脳が破裂しそうになるのを抑えるために飲んだ鎮静剤の副作用のせいで何も考えられません。ですがそれでも、廃病院から漂ってくる濃厚な血の匂いに惹かれて暗い内部に足を踏み入れました。

「あら、あなた——素敵な髪飾りね」

ヤーナム島で初めて出会った『まともな』人間、澄んだ声を持つそ

の若く美しい女性は、ヒールで獣の頭を踏み潰したとは思えない綺麗な姿をしていました。



「そしてコレがその髪飾り。ほら、どう？ ちょっと触ってみない？」

【斑鳩：Lv. 150+1 ↓ 152+1】

思い思いのお酒を持って僕を囲んでいた本隊のおよそ百人がサーツと引いていきました。武勇伝で釣る作戦は失敗のようです。庭付き一戸建てサイズの巨獣の内蔵を素手で抉った話には目を輝かせて食い付いたくせして、ちよつと愁いを帯びただけの髪飾りは避けるなんて酷いじゃありませんか僕も含めて。

「んなモンより早く続きを話せヨー」

ジョツキを片手に顔を赤くした金剛さんが言うのを皮切りに、僕をせつつくシユプレヒコールが360。全方位隙間なく、不満の投石の如くぶつけられました。お酒が入っていかなかったらイジメと呼ばれる吊し上げ行為ですよコレ。天照大艦隊のモラル教育はどうなっているんだと問い詰める先の叢雲さんまで「イイところで話を切ってんじゃないわよー！」この有様です。

「ちゃんと話すからシャラップ！」もちろん僕もけっこう飲んでいきます。「でもラスボス戦の前にキーアイテムの説明が必要でしょう？」

「なんのためにブラッディ・メアリーとホルモンを用意したと思ってるんですかあ」

【睦月：Lv. 69 ↓ 70】

「斑鳩さんが獣を狩る話を聞きたいにや〜」

「でもラスボスは獣じゃあなかったんだよ睦月ちゃん。ヤーナム島が悪夢の地と化したのには理由があつて、病院だつて廃れてからもずっと『医療』を続けてたんだ。つまり、そう——すべては不幸だったんだ。ひとつの文明が滅ぶ程の不幸、それはどんなものだと思う？」

僕が懐から取り出した、まるで西洋の古代王の墓から盗んできたよ

うな豪華な杯に皆の視線が釘付けになります。手付かずの赤ワインを用意していたのはこの時のためです。黄金の杯に満たされる赤い液体——僕の話をごここまで聞いた皆の頭には、島に眠る人々を冒瀆する聖杯の儀式が浮かび上がっていることでしょう。ですから敢えて僕は何も語りません。

「さあ。天照隊には悪夢を喉に流す勇氣のある艦娘がいるかな」

食堂から言葉が奪われ、誰もが好奇心と恐怖心の間を彷徨っています。

「その正規空母たちはどう？ このワインは僕の奢りだよ」

僕と同じ正規空母、かつ悪名高い赤城たちの心臓を鷲掴むことできらに場を支配してしまえます。この中では飛び抜けて高い練度も印象操作に利用させてもらっていますからね、誰一人として僕が見てきた悪夢から逃げ出すことは叶いません。カレンダーズ全員を怖がらせ半泣きにさせてしまったのは心が痛むものの、あの暗殺者・球磨さんまでもビビらせているのは痛快でもあります。

「え、ええ……勿論いただきます。格調高くも危険な儀式は一航戦にこそ相応しいですからね。——さあ加賀さん。一航戦の誇りを示してください」

【赤城：L v. 98 ↓ 99】

「押し付けられる意味が分かりません。それに私はワインよりも日本酒派ですから。——瑞鶴。あなたが飲みなさい。改二になる設計図が貰えない悲しみを聖杯で紛らわすといいわ」

【加賀：L v. 97 ↓ 99】

「今からでもヤーナム島に泊地を敷設しに行つて死ねばいいのに。——ようし、五航戦のカッコイイところを皆に見せつけてあげてよ、翔鶴姉」

【瑞鶴：L v. 80 ↓ 99】

「……そうね。最近ちよつと正規空母としての在り方を見つめ直さないとマズい気がしてたから……」

【翔鶴：L v. 81 ↓ 99】

おずおず僕の前に座つたチャレンジャーは奇しくも、と言う程でも

ありませんが僕と同じく銀髪の翔鶴です。今の僕は睦月ちゃんをリスペクトした軽く短いヘアスタイルですから、目の前の翔鶴はなんだか鏡に映った過去の自分のようです。被害を凶らずも積極的かつ必然的に担当しそうな雰囲気までダブリますねえ。

賭け事の一騎打ちめいた空気になり、僕らを囲む誰もが固唾を呑んで怖いもの見たさに何かを期待しています。

「緊張しないでいい。簡単なことだよ」と声に重みを持たせて緊張させに行きます。「僕にできたんだから翔鶴にだって、難しいことじゃあない」

「え、ええ」

「今から暴くのは医療の根源。それは神秘のようでもあり、あるいは神秘を盗んだ罪と罰の始まりでもあった——さあ。まずは髪飾りで夢の徴を」

「え？ 嫌よ。それは嫌」

もし世界が核戦争で崩壊して男全員がモヒカン肩パッドになっても愛せるか、と質問した時の模範回答のようなキツパリとした拒絶です。今この時まで食堂内に注意深く構築していったオカルト的な空間が、翔鶴の極めて冷静なお断りの言葉によりあっさり砕け散ってしまいました。台無しです。周囲のおよそ百人も、冷めたホルモンを口に運びはじめました。

それほどまでに愁いの髪飾りを拒否するか。そんなに運のパラメータが大切なか。

「ちよつとだけ。ちよつと装備するだけでいいから」

「それが嫌なの。近づけないで」

「五航戦が臆したの？ 神秘に触れるカツコイイところを皆に見せつけなくてもいいの？」

「何航戦とか、そういうのは別にいいわ」

「イヤーツ！」翔鶴の頭に髪飾りパンチ！ こうなったら実力行使です！

「イヤーツ！」しかし翔鶴の正規空母反射神経は僕の手を弾きます。

そして食堂は髪飾りを押し付けた僕が誰彼かまわず頭を狙い、他

の皆は食べ物飲み物をひっくり返しながら逃げ惑う、さながら火炎放射器を携えた狩人が獣を追いかけ回すヤーナム島の街道めいた様相を呈することと相成りました。

「もうホント一瞬でもいいから！ 誰でもいいから！」

「こつちくんなクマー！」

「お前らのせいだぞ馬鹿空母！ 何とかしろ！」

「知るかボケ！ ウチに言うなや！」

「撤収——！ カレンダーズ撤収——！」

「僕は一人じゃない……僕ハ一人ジャナイ……！」

「ねえ、なんか斑鳩がオーバーソウルしてるんだけど」

「カレンダーズに見捨てられたら、まあ気持ちは分からんでもない」

「やむを得ないネ。霧島！ 斑鳩にメガネパンぐほおつ!? おええ……」

「お姉さまも大概だけど霧島の酔った時の手の早さもひどくない？」

「うわあこつち来た！ こつち来た！」

「アレも正規空母だ、食い物で釣って——ダメだ無駄に常識人でいやる——」

「いやあああ少し触られた！ 運が下がるう——！」

「衛生兵——！」

「メディーック！」

「えーせーへー！」

「遊んでんじゃないわよ！ 全員、寮に避難して鍵を掛けなさい！早く——」

ほとんど食堂から逃げられてしまった頃、隅っこで一人ぼつんとしている戦艦を見つけました。しかも幸運なことに、愁いの髪飾りが誰よりも似合いそうな負のオーラを頭の艦橋から電波塔のように発しています。この人に渡さず誰に渡せと言うのでしょうか。

「ハア……はあ……。さ、さあ。この髪飾りを付けて聖杯の儀式を——」

「ザツケンナカラー!!」

フコウ・ヤクザ克蘭の山城が僕にどれだけ強く椅子を振り下ろし

たかは、木製でありながらも乱闘騒ぎに耐えてきた歴史ある椅子が修理できないほどバラバラに壊れたと言えは伝わるかと思えます。



一週間後、机に突っ伏した僕にフアブリーズの霧が噴き掛けられました(ヤードナム島で使っていた血と水銀で霧を作るロスマリヌスではありません。そのへんのスーパードで普通に買えるやつです)。頭をもたげると鼻の中を強烈に消臭・除菌されました。

「斑鳩から、不幸の臭いがするー」プシュツ。プシュツ。

「……傘姫提督って知らないんだっけ？　こんなこと自分で言いたくないけど、僕という斑鳩型航空母艦一番艦は慎重に扱われるべき要注意艦娘なんだよ。あんまり雑に扱おうと鎮守府を焦土にしちゃうかも分からないんだよ。それもアニメみたいに無防備な提督を殺し損ねるようなヘマはしない練度だよ」

「猫吊さん、そうなの？」と提督が聞くと、執務室でただ一人真面目に働いていた猫吊さんは頭を振りました。

「大丈夫だって」プシュツ。プシュツ。

「大丈夫じゃないからやめろって言ってるの！」

提督と猫吊さんの攻撃的なお茶目も、この一週間は五割増しでキツい気がしました。自分でフアブリーズしておきながら「うっ……ごめん斑鳩。本当にごめん、ね？　ちよつと、その、お風呂休憩とか、したほうがいい、かも。悪ふざけでした。ごめんなさい」と提督が素直に頭を下げるほど不気味です。

念入りに消臭・除菌された体をシャワーでさらに念入りに洗い直し、服も替えたのですが、鼻の奥までフアブリーズの霧が染み付いてしまったせいで何もかもがフアブリーズの臭いしかしません。少し寒空の下に出てみましたが潮風すらもフアブリーズです。こういう時は昼食に何をチョイスするのが正解なんでしょうか。

「ゲームでよくわらしベイベントってあるじゃない。わらしべ長者みたいにアイテム交換を繰り返して、最後にはレアアイテムが手に入

るっていう」

執務室に戻った僕を待っていたのはガスマスクを着用した提督と猫吊さんと白猫でしたが、ツツコミを入れる気にもなれません。

「そのイベントがバグで進行しなくなっちゃったらさあ、提督ならどうする？ アイテム捨てちゃう？」

「ゲームはゲーム、現実には現実、だよ」

ガスマスクを被ったオカッパもやしにくぐもった声で諭されました。シヨックです。

「にはは。心配無用、だよ斑鳩。球磨ちゃんから始めて、ヤーナム島攻略まで、頑張ったご褒美は、私が、ちゃあんと用意してる、から。はいプレゼント。わらしべイベント達成おめでとう。遠慮せず受け取って、ね」

一般的な鎮守府ではプレゼントをコンビニ袋に入れて渡す人間が見られるでしょうか？ 僕は見えています。今、目の前にいます。

そしてコンビニから品物を持ち帰った後の袋はゴミであり、ゴミ袋の中身は当然ゴミです。

「ゴミとは失礼な！」

提督はプリプリ怒りました。ガスマスク着用なので表情は分かりませんが。

「斑鳩つてき。艦娘なのに泳げないこと、コンプレックスになってる、よね。だからほら、ことわざ。溺れる者は藁をも掴む」

ゴミの正体は束ねられてすらいらない藁でした。麦わら帽子などの形に加工されているでもない、昔は日用品の素材としてありふれていたけれど（その昔が何年前なのかも分からずに言っています。とりあえず頭に思い描いているのは江戸時代です）今の時代では逆に珍しくなった、面白も何もない藁です。枯れた草です。ゴミです。この北鎮守府だと弓道場の巻藁前で採取できます。提督は忙しい身でありながらも巻藁の周辺を掃除してくれたようで、上司に掃除をさせてしまったって頭が上がりません僕としては一刻も早くゴミ箱に投げ入れなければ気がありません。

「いやいや斑鳩。まさか、床から拾ったものをプレゼントするなんて、

そんな酷いことはしないよ。ちゃんと綺麗なやつを、選んで引っこ抜いてきたから」

「巻藁から引っこ抜いたの!? 何してくれてんの!？」

「ずつと心配、だったんだ。斑鳩が出撃する度に、溺れないかって。でも肌身離さず持ってたなら、安心だよ。藁。いつでも掴めるからね。藁。転ばぬ先の藁」

「へー……。提督はつまり、僕が目の前で溺れてたら浮き輪じゃなくて藁を投げるんだー。ガスマスク付けたまま僕が沈んでいくのを守るだけなんだー。そうなんだー。へー……。ちよつと信頼関係にヒビが入ったかなー……」

「わらしイベントを完了、したのに不満なの？」

「せがむつもりはないけど、大和のおかげで有り余ってる温泉チケツトとまとまった休暇を貰えたら信頼関係のヒビを補修する気分になるかも」

「二泊三日。ネオサイタマで味わうオスモウ・コロシアムの迫力重点アトモスフィア体験ツアー。どうかな？」

「ヤーナム島でさんざん血を浴びてきた僕に、今度は重金属酸性雨を浴びてこいと?」

「あつ! ごめんごめん、忘れてた。はいこれ、斑鳩のガスマスク」

「もうそれでいいや……。じゃあ提督にはこれをどうぞ。愁いの髪飾り」

「NO」

どんなに運のパラメータが下がってもゴミ箱には捨てられない、他所様から受け取った物はきちんと大切に自分の真面目な性格が今だけは恨めしく思えます。

じゃあ一週間前の山城への仕打ちはどういうことかと聞かれても答えられません。現実世界も艦これもセーブ&ロード不可ですからね、たまには取り返しをつかない間違いだってしますよ。

提督から貰ったゴミは例外的に捨てるとして「ひどい!」僕のわらしイベントは実質、山城に頭を下げながら扶桑探しに協力するよう約束する——ふりをして山城が下手に機密に近づかないよう手を回

す、という新しいイベントを発生させるただの通過点に過ぎませんでした。

「茶番劇はさておき。斑鳩くん。ヤーナム島の調査報告書、まだかな？」

困難なイベントが次々と襲い来る中を、果たして僕は傘姫提督と二人三脚でこれからもやっていけるのでしょうか。

『無理そうだから海鳥のいる呉に移れないかなあ』なんて、考えないで、ね？」

これからも羊の皮を被ったエイリアンに心をズカズカ侵略されるんだと思うと……なんだかもう逆に頑張ろうという気になってこようというものです。僕が頑張らないといけません。決して共存とやらではないですよ。この一ノ傘姫乃なる人物(?)を野放しにするなんて想像するだけでも胃が痛む所業ですから。本隊の提督方々に引き取って貰えるのならば喜んで差し出します。でもそれができないから執務室にフアブリーズの匂いが充満するような羽目になるんです。

そんなわけで提督と猫吊さんと白猫のガスマスクを引っ剥がして、窓を大きく開いて室内に冷たくも新鮮な空気を迎え入れ、今日もまた海を少しばかり平和にするための通常業務が始まります。

おわり

◆—【『叢雲の薬指』用語集(仮) Ver. 20160131】—

●—【あ】—●

『青い炎』

この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。

『アサシンブレード』

球磨が左腕の袖の下に隠している飛び出しナイフ。家具職人のオーバーテックノロジーを借りて開発された、球磨をいよいよ近接戦に特化させる武器。ゆくゆくは様々なギミックが追加される予定で、特に半袖の季節になっても装備が苦でない機構の追加が待たれる。

『明日はきつと晴れる』

時雨が不運にも発見してしまった天気の法則より、危機を仲間知らせるための暗号。

あるいは木曾・長月という仲間を得た幸運。

『天照大艦隊』

竹櫛の艦隊に一ノ傘の艦隊が転がり込んで統合・編制された二倍艦隊。竹櫛が提督で一ノ傘が副提督という系統をとっているが、そのあたりは良く言えば二人が臨機応変に動いている。さらに北鎮守府の姉妹艦隊も組織に含めることもある。

艦隊名を考案したのは叢雲。神道的趣旨によるが宗教的意味合いはない。

『斑鳩』

いかるが。洞観者の一人。斑鳩型航空母艦一番艦とされている謎の多い空母。

外見は空母ヲ級に酷似しており、美容室で睦月を真似たヘアスタイルに整えるまでは仲間からも不気味がられていた。制服も白を基調とした道衣袴を普段から着用しているため天照隊で「白いヲ級」と言えば斑鳩のことだと一目で分かる。

大和と並んでも見劣りしない戦闘力からは単純な練度の高さのみならず空母として極めて優れた性能を見ることが出来る。さらに表立っては使わないが、傘姫提督が無意味に製作した甲標的や小口径主砲、さらに青い炎の力を使えば戦艦クラスの大口径砲までも装備・運用できる異常なまでの汎用性を持つ。故に彼女は常に深海棲艦疑惑をかけられ、しかし泳げないため深海に棲むどころか母港で足を滑らせるだけでも溺死する可能性がある。

心に波風を立てることで左目から青い炎を発し力を行使でき、同時に思考が外見にそぐうものへと変化してゆく。書類仕事にも長けているからといって彼女を酷使すべきではないだろう。自身の炎に心を焼かれた彼女が深海へ堕ちようとしても、泳げないがために、海上でポツンと佇む他にないのはあまりに可哀想である。

『居酒屋鳳翔』

午後九時頃から南鎮守府の食堂が様変わりした宴会場、そこに現れる居酒屋。鳳翔が自主的に開く店であり、彼女が出撃した日や遠征に出ている日などが休業日である。そして彼女もまた空母寮の一員であることを忘れてはならない。

『一ノ傘鉄子』

天照大艦隊、本隊の副提督。

竹櫛と付き合いの長い同期の女性。初期艦は吹雪。迷った時は取り敢えず装備できるだけの砲を積ませる大艦巨砲主義者。役割論者ではない。

博多弁＋北九州弁＋鹿児島弁＋αで喋る。雷電姉妹にR指定接触を取り、あんな風にした。

現在の北鎮守府に配属された当初は提督としての素質がないように思われ、竹櫛の元から派遣された電の助けを借りるなど苦労と失敗を重ねてきた。しかし夷川の艦隊壊滅に関わってからは一変してブラック提督としての才能を開花させ、工業地帯を草むしり程度の気軽さで防衛しつつ様々な作戦に加わった。潜水艦には逃げられ、ほぼ唯一の航空戦力だった蒼龍と飛龍が頻繁に寝込むようになっても火力さえあればなんとかなる、そんな運営方針は電の謀反によりあっさり崩れた。竹櫛の元に戻った電に艦隊ごと南鎮守府に引越した一ノ傘は副提督という中途半端な地位に就くこととなった。責任を竹櫛に押し付け自由にやろうと目論むも再び立ちはだかる夷川、さらに北鎮守府の後釜として唐突に現れた従姉妹の一ノ傘姫乃にペースを崩され、今では雷に慰められたり慰めたりしながら地味な陰謀を巡らせている。

非常に多趣味で特にエアガンを多く集め、南鎮守府に移ってからは

球磨と共にサバイバルゲームに参加するようになった。他、執務室を散らかすなどの性質がある。

『一ノ傘姫乃』

天照大艦隊、分隊の提督。

一ノ傘鉄子と区別するため「傘姫」と呼ばれる。初期艦は偽葛城（斑鳩）。迷った時は取り敢えず斑鳩一人にすべて任せ少数精鋭主義者。

一ノ傘鉄子とは同じ年の従姉妹で線の細いオカッパ頭の女性。言葉を頻繁に区切る話し方は聞き取りにくい時もあり、逆に彼女からは読心術で見透かされるためコミュニケーションは一方的になりがち。軍人でも関係者でもなかった彼女がある日いきなり北鎮守府や超高練度の深海棲艦になりかけた空母を預かるという経歴を疑わない人間は存在せず、疑いの眼差しはすべて親族の鉄子の方へと逸らしている。

得体が知れず付け入る隙もないように思われることもあれば、ちよつとした仕事を一人で片付けられずに倒れて斑鳩に看病されることもある、謎多き人物（或いはエイリアン）。

『丑の刻摩天楼』

竹櫛が自慢気に所持していた普通の工業刀。翔鶴の安っぽいコンパウンドボウと打ち合った際に刀身が半分になり、夷川家とのいざこざでゲームキューブと打ち合い刀身を完全に失ってしまった。現在は第一執務室の装飾品となっている。

『夷川海花』

斑鳩の本名。夷川の娘で海鳥の姉。失踪する以前の姿はもう失われているものの、新しい仲間たちの中で前向きに苦勞している。

『夷川海鳥』

雲龍型航空母艦三番艦・葛城の本名。夷川の娘で海花の妹。失踪した海花を捜索していた夷川の艦隊が壊滅した中で一人だけ奇跡的に生き残った。呉の艦隊に救出され、そのまま仲間に加わり今に至る。

『夷川海司』

何故この男の遺伝子から海花と海鳥のような出来た娘が作られた

のか誰もが首を傾げる、高い地位だけは持っていたクス提督の権化。ゲームキューブを装備した霧島の情け容赦無い右ストレートにより顔を平らに均された今となつては元の提督業はおろか、このクスにできる事は何一つ無い。

●――か――●

『海軍精神注入棒』

売店のお姉さんが仕入れた木刀に「棒入注神精軍海」と自分で書付けたもの。南鎮守府の売店にて一本千円で販売中。

『傘姫』

一ノ傘姫乃のこと。竹櫛や鉄子が昔からこう呼んでいた。紛らわしいが天照隊では「一ノ傘提督」と言えば鉄子を指し、「傘姫提督」と言えば姫乃を指す。

『カレンダース』

睦月型駆逐艦のこと。結束の固さが強さに繋がっている好例である。

『カロリーメイト（ようかん味）』

恋はダイナマイ。

菓子を装った恐るべき惚れ薬で、薬指に指輪をはめた艦娘であつても艦隊を捨てて目の前の偽愛を選んでしまう。一見しただけでは普通のカロリーメイトと変わらないため極めて高い技術力を持つ者が製造したと推察される。金剛・球磨・叢雲・電・雷・吹雪の六人でひっそりと調査中。ハロウインの時に金剛が空母に強奪された分は球磨がこっそり奪い返して事なきを得た。

『北鎮守府』

天照大艦隊・分隊の母港。

南鎮守府からは海路で一時間前後、陸路で三時間の距離にある。

工業地帯に近く防衛の要所であるはずだが一ノ傘の艦隊全員が南鎮守府に移ってしまい、後釜として来た夷川はクスで即リタイア、さらにその後釜はド素人の傘姫と深海棲艦になりかけた正規空母の二人だけ、おまけに大和ら戦艦数人の砲撃で焦土にされかけるなど、あ

まり大切に扱われない。

現在は一ノ傘が提督として指揮を執っていた頃の半分ほどの設備しか電気が通っていない。

『キャットタグ』

ハングド・キャットの猫が首輪に付けている小さなタグ。ラバウルだろうと単冠湾だろうと洞観者がいるところで見かけることができる——かもしれない。

『ゲームキューブ』

霧島の拳のリーチと重量を底上げする強力な鈍器。さらに金剛型姉妹がスマブラDXで遊ぶこともできる。

『結婚（ガチ）』

竹櫛の最終目標。叢雲と共に艦隊を辞めて人生を共にする、というもの。時が経つにつれて艦隊を抜け出せない環境が整えられていくため、今のところ達成の目処は立っていない。

『撃沈王』

日本最強の戦艦・大和の称号。よく「日本で最も数多く撃沈しダメコンで生き延びるか救助された艦娘」と誤解されるため、軍は大和がいかに数多くの敵を沈めてきたかをアピールするのに忙しい。

『航空戦艦理論』

航空戦艦がそう言うのだから、それで間違いないのである。

『極楽師匠』

一ノ傘のブラック艦隊から脱柵した潜水艦たちに生きる術と戦う技術を教えたとされる人物。正体不明。

『ぶんごう』

金剛がLv. 999のイージス艦に急成長して変貌した姿。メガネパンチで元に戻る。

『金剛大三角』

夏の星空に極端に大きく描かれる模様。見渡せる範囲で可能な限り離れた明るい星三つを結べば、天文学的確率でそれは金剛大三角かもしれない。

『試飛会』

試飛会（しつぴかい）とは日向が制作したラジコン飛行機のテスト飛行を行う会である。

戦艦から航空戦艦へと進化した日向は己の刃を研ぐべく航空機の研究に明け暮れ、定期的に切れ味を試すべくラジコンを製作しては戦艦察上空を飛行させたり墜落させたりした。

日々を深海棲艦との戦いに費やす艦娘にそのような暇があるのかと問うならば普通は無いと答え、日向は普通という枠を何食わぬ顔で切り捨てた。故に航空戦艦になってから随分と久しいものの練度に僅かの上昇も見られず、ラジコン飛行機の製作技術ばかりが無駄に上昇していった。勿論、この技術が深海棲艦に対する抑止力となった例は一度として無い（一度だけ、深海棲艦になりかけた艦娘を止めたことならあった）。本末転倒も甚だしかった。

「艦娘としてあんたそれでいいの!？」と叢雲に激怒されることは度々あり、日向も猫の額くらいは気にしている。ところで猫の額とは面積の狭さを例える言葉であり思慮の大小を表すのには使えないのではと日向は疑問に思い、つまり全く気にしていないと同義とも言えた。これぞ鋼のメンタルの成せる業である。

日向が製作するラジコンはいかなる機種であれ、全体をヘチマのような緑色に塗装され、両翼と胴体には赤いマル模様が入られる。機体下部には固定翼機や回転翼機、アダムスキー型未確認飛行機だろうと何だろうと例外無く水上に浮かぶためのフロートが無理やり取り付けられ、つまりは瑞雲化改修が行われた。

制作する飛行機の機種はいつも自由自在だった。F-22ラプター、F-35ライトニングII、A-10サンダーボルトII、Ka-50ホーカム、V-22オスプレイ、サボイアS-21、SH-60K、テポドン2号、コンコルド、気球船、果てはハインケル・レルヒエのような珍機体（特に航空戦艦が運用できそうなもの多）などがプロペラ駆動のラジコン飛行機となった。

半強制的に観覧に招待された最上が見守る中、日向のラジコンは戦

艦察前の空を優雅に飛行した。あるいは制御不能に陥った機体が爆発しない巡航ミサイルとして最上の頭や山城の部屋、葛城（現・斑鳩）の意識、金剛の後頭部、北鎮守府の執務室を狙ったりもした。それら経験はすべて日向の糧となり、最上の精神的重石となった。

『姉妹艦隊』

天照大艦隊の本隊と分隊は書類上では別々の艦隊と扱われており、人員や物資などを密接に融通し合うことから、その関係を姉妹艦隊と表現されることがある。

『射撃試験・演習場』

南鎮守府の工廠から海に向かって約2kmも伸びる防音設備。兵装のテストはしたいが近隣の住民には迷惑をかけられず、かつ自分たちも静かな生活を送りたい、そんな願いを竹櫛が珍しく補助金を取ってきて実現させた。外から見るとベルリンの壁の如く強固に見えるが、間抜けな陸軍人の侵入を許すほど防衛面では障害となり、また悪天候時に大きく歪むことから不安の声は上がっていたが最近になって対空機銃で容易く天井板が吹き飛ぶことが時津風によって確認された。

『振動魚雷（ローテク）』

潜水艦たちが極楽師匠の教えと霧の艦隊に関する資料を参考に開発した失敗作。

まず敵との距離を300mまで詰めた者が小口径砲で無線測定弾を撃ち込み、敵の固有振動数を測定する。次に得られたデータをパソコンから振動魚雷にインプットして魚雷をトルピードランチャーに装填、敵の位置を再度よく確認して発射する。

すべてがイムヤの計算通りに進んでいけば不沈要塞めいた大和でさえ轟沈することすら叶わず海面上で肉片と化すはずだった。

『総旗艦』

艦隊全体の面倒を見る秘書艦、阿呆たちのまとめ役。

まだ葛城と名乗っていた頃の斑鳩が叢雲をヨイショするための肩書きとして使ったのが始まりで、それが定着した。竹櫛の右腕である叢雲、一ノ傘には電、傘姫には斑鳩と、天照大艦隊には三人の総旗艦

が存在する。ただし電と斑鳩は総旗艦と呼ばれるのはあまり好きではない。

● — 〔 た 〕 — ●

『竹櫛』

天照大艦隊、本隊の提督。

一ノ傘鉄子と付き合いの長い同期の男性。傘姫のことも昔から知っていた。初期艦は電。迷った時は取り敢えず空母数名と古鷹ちゃんに出撃準備をさせ、とにかく空母を働かせた後で手堅く素早く作戦を進める面白味のない機動作戦主義者。

北鎮守府に配属されてからは球磨、叢雲を迎えて堅実に滑り出したかと一息ついたところで、同期で近所の一ノ傘が資金燃料弾薬諸々を枯渇させていた。見捨てるわけにもいかず当時は僅かに仕事慣れしはじめていた電を派遣し、この事が後に想像もしないような影響を及ぼす。

弓道警察としては口煩い方ではないものの、さすがにアニメ中盤から後半にかけてのあり得なさに対しては多量の唾を飛ばした。

『タマ』

球磨型軽巡洋艦二番艦の多摩だと主張し、猫ではないとかたくなに言い張る、一応は人の形をした猫。タマネギやチョコレートなど人間と同じものを食べても問題無い。酒のツマミの中にこっそりキャットフードを混ぜると匂いでバレて引っ搔かれる。

『洞観者』

嘘を見破った艦娘。何の前触れもきっかけも無く世界が異常であることに気付く例が多い。

目覚めた時に現れる猫の呼び掛けに応じることになり、各地に散らばる数少ない洞観者で成すべきことを成すために行動する。

真実と嘘の境界に立っているため艦娘としての性質は極めて曖昧なものとなり、異常な力を得た者もいれば、逆に海面に立つことすらままならなくなった者もいる。また騙されようとしないう艦娘に対して妖精は無反応となり、それは轟沈の瀬戸際であつても変わらない。

洞観者は不要な混乱を招かないよう普通の艦娘には何も語らず、ハングド・キャットからの指示を待つばかりである。

『時津風隊』

時津風を旗艦とする練習部隊。やる気と面倒見だけは十分な時津風のふわつとした方針が要因となり解散した。

『特殊深棲監視艦隊』

傘姫や斑鳩の艦隊が天照隊に吸収される前の名称。

『トルピードランチャー』

誰がどう見ても四連装ロケットランチャーなのだが、装填するのはロケット弾ではなく専用に開発された魚雷。陸上の敵（味方）を始末するべく分隊の潜水艦が開発した。

魚雷らしからぬ速度で海面上を飛び、また水中での使用も可能と潜水艦の攻撃力を格段に向上させる兵器である。もちろん使用すれば隠密性はほぼ失われる。

●——な——●

『偽葛城』

斑鳩のこと。なぜか彼女が自身のことを「葛城」だと思い込んでいたことより。

『猫吊さん』

分隊の優秀な秘書。気配りができてお茶目な面もある妖怪。

『猫爪』

ネコノツメ。

長月のために武蔵と大和が開発した刀。バスタードソードみたいな日本刀、というコンセプトを掲げて開発を進めるうちに攻撃力（重量）を欲張り過ぎたため、出来上がったものは漫画「BLEACH」の主人公が持っていた巨大な出刃包丁のような斬魄刀、それに可能な限り刀装具を用意した風である。海での使用を想定しているため防食に特化しており、機密とされている材質は鉄かどうかも怪しい。

プロジェクトでは三本が制作されて、有効な兵器と確認されればさらに量産して一本三百万円で全国の艦隊に向けて販売される予定

だった。しかしネコノツメの重量たるや大和や青い炎の力を使った斑鳩が気張ってなんとか持ち上げられるくらいで、刀としてまともに扱える人物は今のところ長月ただ一人しか確認されていない。

●——は——●

『売店のアルバイト』

艦娘を辞めた磯風は直後に傘姫に拾われ、南鎮守府の売店でアルバイトをしている。叢雲と同室で以前と変わらず駆逐艦たちと生活を共にしていても磯風の雇用主はあくまで傘姫なので、竹櫛の提案・要望はだいたい無視する。

『抜猫』

①猫爪(ネコノツメ)を鞘から抜くこと。「長月の一術は魔法だと思うんだがな。いやホントに」

②鎮守府の全機能が猫によって停止すること。また、その猫。

③猫を駆除？ 貴様如きが？

『ハングド・キャット』

THE HANGED CAT

洞観者の洞観者による世界のための秘密結社。伝書猫で情報交換を行い、指導者である武蔵の命令に従って活動している。

または秘密結社の本拠地であり財源でもある喫茶店。とても賢い猫たちを利用した猫喫茶のつもりで武蔵は店を開いたものの、客は手伝いで働いている艦娘(洞観者)や本格カレーを目当てに来店する。武蔵が最も力を入れているコーヒーは「極めて不味い」と撃沈王のお墨付き。実際不味い。

『フアランクス』

正式には『夕張砲改』という名称で登録されている産廃兵器。

10cm連装高角を妖精さんが魔改修正したもの。(命が擦り減る程の)気合と根性を動力源として無敵の防空能力を得られる。現在は三機が南鎮守府の工廠に鍵付きで保管されており、その鍵は鎮守府正面海域の海底のどこかにある。

『扶桑皇国』

運が悪いと迷い込むことがある鏡写しのような世界、そこには扶桑皇国という日本に類似した国があり、空を飛ぶ怪物と空を飛ぶ艦娘のような少女たちとの戦いがあるとされている。

山城はその国に姉がいるかもしれないと見当を付けており、いつネウロイと遭遇してもいいように常に三式弾を数発隠し持ち歩いている。

『FLS』

フソウ・ロスト・シヨック。

『古鷹ちゃん』

天使。

『古鷹のサーチライト』

ヤコブのはしご、天使の階段、薄明光線などとも呼ばれる、雲の間から柱状に降り注ぐ太陽光のこと。

『分隊』

北鎮守府を拠点とし、傘姫の指揮の下で活動する艦隊のこと。

軍隊編成単位としての意味はない。天照大艦隊（本隊）に色々と融通して貰っているため、本隊から別れた組織感をそのまま名前にした。

以前の艦隊名は「特殊深棲監視艦隊」で現在も新しくきちんとした名前があるのだが、長いので誰も使わないし覚えてもない。

『非人道的タブレット』

出撃中あるいは交戦中の艦娘に事務仕事をさせるための堅牢かつ非情なタブレット。傘姫・斑鳩の艦隊が天照大艦隊と姉妹艦隊になったことにより人員に余裕ができて使われなくなった。

『羊の皮を被ったエイリアン』

傘姫のこと。

容姿だけは迷える子羊のような導いてあげたくなる雰囲気や霧を気前よく撒き散らしているためタチが悪い。

『本隊』

南鎮守府を拠点とする艦隊のこと。正確には傘姫や斑鳩たちの世話を焼く天照大艦隊を指す。

●—【ま】—●

『慢心、ダメ、ゼツタイ!』ポスター』

各鎮守府に月一で送られてくるポスター。何らかの写真や誰かの手描き絵に標語を配置したデザインとなっている。小中学生の勉強の一環で作成されたような見栄えのしないデザインが逆に緊張を削ぐと全鎮守府から苦情が集まっているはずなのだが、軍は頑なに作者を伏せたポスターを送り続けている。

『南鎮守府』

天照大艦隊・本隊の母港。何といっても外観の特徴は水平線に向かって2kmも細長く伸びた射撃試験・演習場である。よく視察を受け入れ、何の面白味もない防音壁を見せてガツカリされるのは毎度のことである。

居住地に近いこと、より重要度の高い防衛拠点である北鎮守府が近隣にあることから竹櫛の艦隊を一ノ傘の艦隊に統合させる計画は何度も検討され、しかし逆に一ノ傘の艦隊が南鎮守府に押し掛けてしまった。人口密度が非常に高い。

『叢雲艦隊』

天照大艦隊が結成される前の竹櫛が管理していた艦隊。深い意味は勿論無い。

『メガネパンチ』

霧島が放つ必殺のフィスト。

震えるぞハート! 燃え尽きるほどヒート! 刻むぞ血液のビート!

さらにメガネパンチはまさかのラッシュ技である。日本の厳しい気候にも負けない建材としての瓦を容易く砕くパンチが瞬間的に何十と繰り出されるため、霧島を怒らせることはあまり賢明とは言えない。

●—【や】—●

『ヤーナム島』

噂には存在する、かつて人が外界と遜色のない文明を築き上げていた島。血塗れになりながらも血に渴いて死ぬ覚悟があるのなら、その島を探す価値はあるかもしれない。

『闇プリン』

南鎮守府では争いの元となるプリンの所持・持込を禁止されている。しかしプリンのない生活などカラムルのないプリンも同然であり、艦娘たちは密かに楽しんでる。

闇プリンの相場は察によって大きく異なる。

『妖怪扶桑姉さま隠し』

いくら探せども姉の姿が見えない山城が創りだした幻影。あながち間違いではない。

『妖精さん』

南鎮守府の妖精全員が稀に軍人魂を失ったような何かに入れ替わることがある。もしアバウトな彼ら（彼女ら？）と上手く付き合うことができたなら、改修・開発で大きすぎる効果を得て大きすぎる代償を払うことができるだろう。

●—「ら」—●

『リアルナイフアー・クマさん』

南鎮守府から比較的近いサバイバルゲームフィールドで、球磨は尊敬と畏怖と下心の念を込めてそう呼ばれる。「クマ」は偽名だと思われる。

球磨が本当に弾幕を回避していることをペイントボールで証明したためゾンビ疑惑は晴らすことができたものの、次はあまりに強過ぎるためゲームバランスを崩壊させると不満の声が上がった。貴重な女性ゲーマー（一ノ傘も含む）を失いたくないフィールドスタッフは装備のランクダウンという形で調整を重ね、ついには「クマさんだけはナイフアタックとフリーズコイルのみ」までランクを下げることになった。勿論それでは球磨が何をしに来ているのか分からなくなり、また何十万もかけて整えた装備が少女とゴムナイフにやられる男共も面白くなく、球磨一人＋物好き数人 vs 他全員というイベント

戦が開かれることもある。

ちなみに球磨が本気を出す時の銃は東京マルイのハイサイクル電動ガンと電動マシンガンの両手持ち。

●—「わ」—●

『ワレアオバ・トリガー作戦』

敵艦隊が展開している海域——MAPのスタートマスとボスマスを繋いで自滅に追い込む、傘姫が指示し斑鳩がやってのけた裏技。

日が沈む直前にワレアオバ・トリガーを準備し、夜になって発動すれば、後は遠くから戦果を確認するだけでよい。出撃するのは高速艦たった一人でよく、必要な装備は副砲と非人道的タブレットのみ、ひたすら逃げ回るだけなので消耗は燃料と僅かな弾薬だけと、まさに裏技と呼ぶに相応しい作戦。

欠点はワレアオバ・トリガーの準備に失敗すると敵部隊に囲まれて撤退ができなくなること。また傘姫と斑鳩は怒られるだけで済んだが最悪の場合アカウントを停止される。

第42話 ラックレッツサー山城 5

昼食をモリモリダラダラ食べていた連中の視線が、叢雲の隣に立つ一人に集まった。

「皆、ちよつと箸を置いてー」と叢雲。「新しいメンバーが加わったから紹介するわ。こらそこ！ 焼きそばは後にしなさい！ ——それじゃ自己紹介して頂戴」

その頭に可愛らしい鬼の角のような二本の髪を生やした子は、もうこの鎮守府では久しく見ていない気がするピッチリとした敬礼を見せてくれた。

多種多様な食べ物の匂いが食堂を満たす中、私の鼻が反応した。

「秋月型防空駆逐艦四番艦、初月です」

【初月：Lv. 2】

「未熟者ですので、どうか僕を容赦なく鍛えて——」

その時、食堂中に衝撃が走った。

「いま、『僕』って言ったよね」

「ボクっ娘だ」

「斑鳩に続いて、これはもう来てるわ」

「しかもイケメン……」

「モガミンのアイデンティティが……」

「今ボソツと言ったヤツ出て来い！」

「最上の自己同一性が……」

「言い直したヤツ！ 今言い直したヤツ！」

「最上さんのことをアレコレ言うのはやめてくださいまし！ 艦娘も

ジェンダーフリーの時代でしてよー！」

「……………ボク、ちよつと気分が優れないみたいだ。利根、悪いけど予定、変わってくれるかい」

「お、おう。吾輩は構わんが……大丈夫か？」

「三隈はしばらく他の部屋で寝泊まりして。少し……一人になりたいんだ」

「ああつ、どちらに行かれるんですの最上さん！ モガミンさん！」

「はい黙りなさい」

叢雲が手を叩いたことで重巡を除いた者たちが静かになった。古鷹の注意まで逸れてくれるだなんて、いよいよ私の運に追い風を感じずにはいられない。——いいえ。これはきつと、扶桑姉さまが私を引き寄せて下さっている！ 私はそう確信した！

今しばらくお待ち下さい姉さま。山城は必ずやこのチャンスを逃さず、万難を排してお傍に参ります！

叢雲は初月について補足した。

「この初月は正確には天照大艦隊所属ではなくて、分隊の大和のように席を一時置くって形になるわ。その大和からのミッションで、初月は最低でも天照隊の駆逐艦の誰よりも強くなってからでないと帰れないの。逆に言えば、私たちには初月を最強の駆逐艦に育てる義務があるってことよ」

皆の視線が叢雲だけでなく吹雪や、ここのところ急成長を遂げている睦月に注がれた。今日はここにはいない雷電姉妹だっている。誰もが私と同じように「（そりゃあ無理だ）」と思っているに違いない。たとえば明日にでも文字通り死ぬような経験をしたって、燃費の良さに特化したカレンダーズの誰の足元にも及ばないでしょうよ。いつか開発された産廃兵器『フランクス』を防空駆逐艦らしく使いこなすとかいった才能でもあれば話は別かも分からないけれど。

「でも時間をかけずに練度が急上昇するなら、私たちはとつくに戦争を終わらせてる」叢雲は事前に初月と話をしていたのか、言い難いことをあつさりと言った。「だから最初は一ノ傘副司令が考える『研修』を中心として、普通に働いてもらうわ」

初月からは皆の表情が露骨に曇ったのが見えたらしく、たじろいだ様子だった。

「あんた達、さつきも言ったけど他人事じゃないわよ。副司令に全部任せてたら『今週中に戦艦レ級を五匹狩って来い』とか言い出しかねないから、負担の分担や仕事のフォロー諸々について訓練も兼ねて、誰か数名に初月と行動を共にしてもらおうわ」

食堂中に一斉に飛び交うブーイングを叢雲は「はい黙りなさい」

い」と手を叩いて撃墜した。その手際の良さに初月は感心したように、同時にブーイングに少し凹んだようでもあった。

「あんまり無茶な活動は竹櫛司令官が止めるし、何かあれば私か電に相談してくれればいいから。それで私からの相談んだけど、初月と行動を共にしてくれるガッツのある艦娘はいないかしら。練度も艦種も問わないわ。この機会に集中的に訓練できるし、せっかくの防空駆逐艦から学べることもある。私としては時津風隊を新編するのがベストかなと——」

「この私、山城が引き受けたわ!」

自由の女神像がソフトクリームか何かを掲げている右手のように、私の右手は高々と立っていた。

食堂中の視線が叢雲から私へと移り、当然その中には初月の視線も含まれている。——ああ、匂う。匂うわよ初月。ようこそ天照大艦隊へ。ようこそ私の元へ。

海の自由を象徴するが如く立ち上がった私を見た叢雲は、急に頭痛でも起こしたのかこめかみを軽く押さえた。

「えーと、ごめんね時津風。ちよつと待ってて。——確かに私はさつき『誰か数名』を募集したわ。でもね山城、あんたなら分かってくれると思うんだけど、ぶつちやけ誰にも期待してなかったのよ。一ノ傘副司令に積極的にこき使われようとする子なんてほとんどいないでしょ。だから予め時津風に声を掛けてたってわけ。——で? 正直に答えて山城。何が目的なの?」

私の姿勢はピンとしたままだった。

「総旗艦・叢雲に具申します。大本営直属の防空駆逐艦であるならば様々な戦術を学ぶ必要があり、つまり教育係にも同様の手札の数を求められるはずです。即ち、この山城改二こそが適任だと考える次第であります」

「正直に話す気が無いようなので却下します」総旗艦殿は素っ気無かった。「それじゃ最初は初月と時津風でペアを組んで——」
「ちよつと待って!」

ピンとした姿勢、からのダツシユ、スライディング、そして土下座

！ 私は叢雲の足元の床に額をこすりつけた。プライドは姉さまを
探す旅に於いては重荷でしかない。

「えっ!?… ちよつ、なにごと!?」完全に叢雲の不意を衝けた。「やめて
山城、立って。ほら初月がドン引きしてるでしようが」

「お願いします！ 私にやらせて下さい！ これは運命なんです！」

「ち、違うのよ初月。一ノ傘副司令がブラックだとは言ったけど、こう
いう艦娘としての尊厳を捨てさせるようなアレじゃなくて、いい、いい
加減にしなさい山城！ みんな見てるから！」

「どうか初月を私に預けて下さい！ 叢雲が『分かった』と言うまで二
十四時間ずっと土下座し続けてやる！」

「分かった、分かったからやめて！」

練度は叢雲のほうはずっと高くても、身長なら私のほうがずっと高
い。土下座から立ち上がると叢雲の頭の謎デバイスがちようど目の
前にあって刺さりそうだった。自分よりはるかに背が高いヤツに土
下座されるのって、どんな気分でしょうね。

「……何なのよ、もう」

叢雲の呆れ顔も、今の私にはあまり響かない。

食堂中が静まり返って私に異様な視線を向けられたって痛くも痒
くもない。

時津風はまったく頭が付いて行けていない様子で、飼い主に投げら
れたフリスビーが空中で爆発四散するのを見た犬のようにポカンと
していた。

「時津風も通常業務で大丈夫だから。ぜんぶ、何もかも、この山城に任
せてくれて構わないから。——はじめまして初月。ところで見ての
通り今は昼食時なんだけど、もう何か食べた？ まだなら私が奢るけ
ど」

叢雲よりは少し背が高い初月であっても、私の圧倒的土下座を目の
当たりにした新人は圧倒された様子だった。

「えっと……昼食はまだ、ですが大丈夫です。はい。……食欲が無く
なりましたので」



「初月が天照大艦隊に？　大和の勧めで？　そう……心配だわ」

【扶桑：L v. 155】

南方海域の深部を目指す偵察部隊の旗艦扶桑は、まさしく鎧袖一触の勢いで進路の安全を確保し、しかし隣に並んだ照月の話には溜め息をついた。

「大和さんが監視してる艦娘がいて、前に扶桑さん大和さん達が攻撃したところですからね……初月、心配だなあ」

【照月：L v. 155】

隣にならって照月も溜め息をついたが、扶桑にすぐに「ああ、初月のことなら心配いらわないわ」と否定された。

「大和がピザ食べに帰りがる程度には懐が深い艦隊だから。むしろ私が心配なのは——そうね。大丈夫かしらね、初月」

「危ないのか危なくないのか、どっちですか」

「ヲ級みたいな斑鳩に取って食われるとかいった心配なら無用なよ。でもねえ……私の妹がねえ……」

「扶桑さんの妹さんですか？　その方が天照大艦隊に？　なーんだ。

じゃあ安心でき……え？　何が心配なんですか？」

「山城は誤解されやすいけれど、素直で良い子なの」

「何一つ問題の無い妹さんだと言って下さい扶桑さん。さもなくば照月は可及的速やかに帰投して天照大艦隊に向かいます」

「私そっくりよ。まあ、最後に会ったのはもう何年も前だけれど」

「外見じゃなくて中身です。中身の問題です」

「素直で良い子。でも、どうしてかしらね。犬も歩けば棒で殴られると言うでしょ。あの子は昔から歩く先々で棒を探し当ててきたのよ。

今思えば、本当に棒を持った男に襲われて返り討ちにした時から、戦艦としての才能が開花したのかしら」

「……扶桑さんにも似たような武勇伝、ありませんでした？」

「似たもの姉妹ねえ。うふふ」

「心配だなあ……」

◆
◆
涙が出てくるほど悲しいことに、いつも（なるべく）綺麗に片付けている私の部屋を訪ねてくる人は、古鷹という招かれざる例外を除いてほとんどいない。比叡たちとスマブラをする時だつて「山城の部屋つて、無敵のゲームキューブですら壊されるかも分からないし」窓から徹甲弾が入ってくる紛争地帯のような言われ方をして避けられる。言い返せず比叡の部屋に行く自分、そして私の窓ガラスを割りまくる阿呆共が憎らしい。——けれども、めげずに部屋を片付けてきた努力は今日、報われた。

私と向かい合つて正座をしている初月はとつても落ち着かない様子の子のイケメンだった。

「さて。いきなり部屋に連れて来てしまったから、改めて自己紹介といきましょうか」

土下座のことは棚に上げて先輩の威厳っぽいものをあらん限り発しながら言うと、初月の背筋がピンと伸びた。フッフ。大本営直属といつても、まだまだ可愛らしいものよのう。

「私は扶桑型の二番艦、山城よ。艦種は——分かるわよね？」

「は、はい。扶桑さんと同じ航空せん……あつ」

この子が「扶桑さん」と言つた途端によく分からなくなって、体が勝手に初月を抱き締めていた。

「え!?! え!?! 山城さん!?!」

以前、斑鳩から貰つてきた黄色い被り物、あれよりもっともつと強く確かな匂いが、この子から感じられる。

間違いない。ほんの数日前に、この子の手は、扶桑姉さまに握られた。

「あ、あの……事情がサツパリ呑み込めないのですが、僕がさつき言つたことは間違いで——」

「ええ。ええ。扶桑姉さまの秘密と安全を守ってくれてるのね。偉いわ」

どれだけ粘っても口を割らなかつた斑鳩と比べるのは、さすがに私自身のことを再び棚に上げる必要があるものの、躑不足。はつきり言ってこんな体たらくでは姉さまの隣には立たせられない。少しでも口を滑らせた時点で叱るべきでしょうね、教育係としては。

でも、そんなものは私が姉さまに会った後でいい。姉さまに会えたら何もかもが解決する。

「と、とにかく離れませんか?」

「離れません」

教え子はちよつと未熟なくらいが可愛いとも言うし。初月が私と姉さまの『かすがい』のように思えてならなくて、より強く抱き締め頬を重ね合わせた。

姉さま。山城は早くも幸せです。

「お、大声を出しますよ」

「大丈夫よ初月。怖がらなくても。あなたはとつても大切な子だもの。それと——この天照隊では悲鳴なんて日常茶飯事よ。離して欲しければ扶桑姉さまの居場所を教えなさい」

「誰か——誰か来てくれ——!」

初月が叫んだ次の瞬間、部屋の窓に砲弾でも撃ち込まれたような乱暴な衝撃が走った。

「クマツ!? ——つ痛いクマ……!」

何をどうやったら二階の窓に飛び蹴りをかますことができるのか、いまさら驚く私じゃあない。むしろガチな防弾ガラスにほんのちよつぴりでも罅を入られた球磨に拍手を送りたい。でも残念ながら私の両手は初月で塞がっている。

「フハハハ熊も木から落ちるって言うでしようが阿呆め! 私がそう何度も窓を割らせるとでも思ったか!」

どうやら戦艦寮の周りで私たちを監視していたらしく、下から球磨を心配する声が聞こえてきた。そんなに初月が心配か。そんなに私が信用ならないか。

「用事があるなら普通に入り口から入ってきなさいよバーカ!」

今度は入り口の扉から、木の板が容易く割れる音がした。

そういえば、いつもいつも窓ばかり破壊されるものだから、扉の補強はちつとも考えていなかった。いやあ、うっかりうっかり。

一連の襲撃が怖かったのか初月は私の服を掴み、初月を手放したくない私はそのまま、二人で抱き合った私たちは、扉を突き破った拳がそのままカギを回すのを呆然と見ていた。

「初月にひとつだけアドバイスを送るわ。今後メガネの艦娘には注意しなさい」

「……………はい」

自分のコブシこそ戦艦寮のマスターキーだと言わんばかりの霧島が部屋に入ってくるのを見ながら、私はいつか雷にも扉を破壊された時のことを思い出していた。

そう。あの時の私は確かダウジングで扶桑姉さまを探そうとして、雷の一人遊びを探し当ててしまったんだった。なんて阿呆だったのだろう。オカルトに頼るだなんて。私は扶桑姉さまを何だと思っていたのか。

「……………姉さまに、私は会う」

初月を引き剥がそうとしたヤツを、私は殴り飛ばしていた。

「姉さまに、私は会うんだ!!」



初月が出て行った鎮守府の正門のすぐ側にテントを張って生活するようになったのは、決して霧島を殴って戦艦寮を追い出されたからでも、初月を転属させた罰でもない。むしろ鎮守府から出てよければ駅の改札前に住みたいくらいだった。提督なら「もう勝手にしろ、この阿呆」とか言いそうだけれど。まあ、既に同じようなことを言われたからこうして正門でキャンプしているのだけけれど。

正門生活をしていると、鎮守府の出入りが海の方ばかりじゃなくて陸の方も多いことに改めて気付かされた。

色々な人が出入りしていく。

同業者に「何だアイツ」みたいな目で見られた。

外に出掛ける霧島に「風邪はひかないように」と差し入れを貰った。小さなリュックを背負った白猫が堂々と入ってきて警備員の手を擦り抜けていくこともあった。

色々な人が出入りしていく、それを存分に眺めるだけの日々が過ぎた。

提督が「必ず来る」と言ったのだから、嘘ではないのでしょう。

また今日一日分の資材を磯風が配達に来た。

『配達なんて本当はうちの売店のやることじゃない』と、また今日もお姉さんに小言を言われたぞ。もう普通に戦艦寮で待ったらどうだ」「せっかく磯風を雇ったわけだし、無駄に充実し過ぎてる品物はより積極的に売りに行くべきよ」

「こんなところで一人、山城は暇じゃないのか？ 電話にも出ないぞうだが」

「スマホの電池が切れたのよ。でも私は読書で暇を潰せるから」

「さつき叢雲が言ってたぞ。大切な連絡も拒否するつもりなら別に構わない、と」

「お願い磯風、バッテリー売って。当然あるでしょ？」

磯風はニヤリとして「税込みで一万円になります」と言った。

「足元見やがってチクシヨウ……！」

「人聞きの悪いことを言わないでほしい。偶然、たまたま、輸入したハイエンドモデルしか残っていないんだ。ほら、ソーラーパネル付きだぞ」

「……わ、分かったわ。ツケにしておいて」

「フフン。毎度あり」

妙な方向に遅しくなってしまうた磯風はさておき、私はここしばらく沈黙していたスマートフォンに電気を食べさせ、第一執務室に電話を掛けた。

『たった今、無視しようかと決断しかけたところだ。この阿呆』

久しぶりの会話なのに提督はいきなりご立腹の様子だった。

「人のことを阿呆阿呆って、そればかり。今までけっこう働いてきた戦艦に対して他に言うことがありますよね」

『やかましい。扶桑型戦艦は呪われているのか？ 先程連絡があつて、駅で拾つたタクシーが何を間違えたのか山奥に入ったようだ。艦娘が何の用事で山に行くのか——』

「私が行きます。私がお迎えに参ります提督」

『お前もどうせ迷子になるだろうから、せめて夜までには帰つて来い』
「迷子になんてなりません。……あの、提督」

『なんだ。タクシー代は経費にならんぞ』

「その……ありがとうございます。色々と便宜をはかつてもらつて。一応、お礼は言います」

『私はお前が姉さま姉さまと五月蠅いのにウンザリしていたただけだ。それと大和にも大きな貸しを作ってしまったことを忘れるな』

「ぜんぶ姉さまに会つた後で考えます。では、行つてきます」



朝から乗つたタクシーを一日中乗り回せば当然、メーターはすごいことになる。運転手のおじさんがピリピリするくらいで、私は嫌な汗をダラダラさせていた。だって私の財布には磯風に一万円を出すこともできないくらいの残弾しかなかったから。

あれほど夢見ていた感動の再会になるはずだったのに、名前も知らない夜の町で、私は扶桑姉さまに泣き付いた。もちろん感動の涙も混じっていた。でも、どちらかと言うと、無心する感じの泣き付きだった。いくら平和を守るために戦っているとはいえ、ほぼ無賃乗車のような真似は非常にマズい。

「山城、大丈夫よ」と姉さまは優しく仰つてくれた。「私的にタクシーチケットは使えないけれど、カードがあるわ」

「さすがです、姉さま……！」

そして全身をくまなく探つても財布が出て来ないところも、流石は私の扶桑姉さまだった。姉さま、よく電車に乗れたなあ。

「や、山城にこんな事をお願いするのは心苦しいのだけど、どこかでお金を下ろせないかしら」

「申し訳ありません姉さま……できれば最初からそうしたかったのですが、リスク分散のためにカード類は置いてきてしまいました……」

二人の運ちゃんも今にも通報しそうだったので、どうにかこうにか天照大艦隊に所属する艦娘であることを説明して（姉さまも天照隊の一員ということにしておいた。本当にそうなればいいのに）、遥か遠い南鎮守府を目指してもらった。

「お任せ下さい姉さま。鎮守府にさえ着けばお金はどうにかかりますから——竹櫛という提督が、たぶん」

「ずいぶん気前の良い方なのね」

「土下座すればお給料の前借りはできるはずです」

「そんなのよくないわ。二人で一緒に土下座しましょう」

「はい、姉さま！」

姉さまと一緒になら、私は何だつてできる気がした。

「大和から色々と聞いているわ、天照大艦隊。山城から見るとどんな艦隊なのかしら」

「それはもう阿呆ばかりでして——」

二人を乗せたタクシー（と後方に一台）がどれだけ長く走っても、姉さまとの話が途切れることはなかった。

姉さまはお忙しい身で、南鎮守府に到着してもすぐに帰らなければならぬという。

初月が将来そうなるように、存在が秘密兵器。外部との連絡にも制限が掛かる。

だから、いつぱい話した。ずっと話したかったこと、恥ずかしくて隠しておきたかったことも、全部。

涙声になってしまっても、声にならなくなってしまっても、姉さまは聞いてくれた。

「お手紙、送るからね」

「はい……絶対ですよ、姉さま……！」
違う。

こんな情けない姿を見せるために戦ってきたんじゃない。

私は涙と鼻水を拭った。

「……姉さま」

「なあに」

「山城は必ず強くなります。強くなって必ず、姉さまのお側に並んでみせます」

「まあ。遅くなったのね」

「私の仲間も、阿呆ばかりですけど、強いです」

「心強い味方がいることも山城の強さよ」

「私と姉さまで、暁の水平線に勝利を刻みましょう！ その後は、ずっと一緒に……」

「本当に強くなったわね山城、本当に。嬉しいわ」

「ですから、今は少しだけ……お手紙くらいだけ……甘えます」

座席で姉さまに寄り掛かりながら、なんだか死亡フラグっぽいことを言ってしまったかなと思つた直後だった。

「不運（ハードラック）」と「踊（ダンス）」つちまつた運ちゃんはどうやら私たちの語らいに感銘を受けたようで、視界が滲んで電柱に突っ込んでしまったらしい。ぶつかつたのが人じゃなくて、運ちゃんも痛そうにしているけれどエアバッグに助けられたみたいで、これぞ百年に一度の不幸中の幸いだった。

戦艦的耐久力でピンピンしている私と姉さまは、扶桑型が二人も乗つて、そりやあ「事故（ジコ）」るわよねと申し訳ない気分になりつつ、救急車と警察を待つ間は運ちゃんを介抱していた。

道路の左右は真つ暗な林という場所で、もう一台のタクシーだけが私たちを照らす明かりだった。他に車が通る気配もない。

ひしゃげたタクシーの外で肝試しのような静けさを味わつていて、暗闇の中からヌツと黒い小さな物体が姿を表した。きちんとした首輪を付けた黒猫だった。

「私に近寄るサメとアホウ以外の動物なんて珍しいわね。何か用？」

黒猫は私の足に身体を擦り付けると、そのまま暖を取る気なのか座り込んでしまった。

「山城？ 何か言つた？」とタクシーの中から姉さまが顔を出した。

「いえ姉さま。ただ――」

【山城：L v. 94 ↓ 94 + 1】
「たった今、世界が変わったような気がしました」

第43話 島攻略オンデマンド

「山城が出撃した直後に洞観者になったって連絡を受けた時は本当に、もう絶対ダメだと思ったんだけどな。よくもまあ沈まなかったよ」

【長月：Lv. 42+1 ↓ 43+1】

「あの大和型の武蔵でさえ最初は普通に海に出ることすら危うかったんだ。艦船として戦えなくなつてハングド・キャットでバイトしてる奴もいる。幸運の女神つて奴がいるのなら案外、山城に呪いはかけてたとしても見捨てるまではいつてないのかもな」

射撃場で軽い調整を行った帰り道、隣をてくてく歩く小柄な駆逐艦、少しだけ得意気になつてペラペラ話す長月の言っていることを、山城はせいぜい二割程度しか理解できないでいた。

姉との再会は山城にとって海の平和を二の次にする目標だった。彼女のすべてと言い換えてもよい程に。故に扶桑との邂逅に恵まれ、代償なのか「不運（ハードラック）」と「踊（ダンス）」「つちまい、提督に姉妹仲良く土下座して借金を抱えた後に今度は「実はハングド・キャット」という秘密結社があり、お前もその一員となった」などと言われて誰が真剣に耳を傾げるのか。確かに事故の直後に世界が変わつた、自分自身の感覚が変わつた『理解不能な何か』が起こつた。しかしその不可思議な現象を、丁寧にも陰謀論めいて解説する者がコンタクトを取ってくるなど出来過ぎていると山城は思った。さらに相手が素直なカレンダーズの一員、それも嘘は苦手そうな長月である。今まで両者に特別な接点があつたわけでもない。山城は現在の状況を計りかねていた。

歩きながら話す二人の周囲には誰もいない。長月が人を避けて道を選んでいた。

「山城には最低限、三つのことを守ってもらおう。まず――」

「あのー長月先生？ 質問しても？」

「なんだ」

言葉にこそ出さないし、扶桑型航空戦艦とカレンダーズでは艦隊で

の役割がまったく異なる。それでも山城の頭の中では、自分があらゆる面で教える立場にあり、長月は教わる側にあつた。

「話の中によく出てくる『はんぐどきやつ』とか『どうかんしゃ』つてさあ。そういう招待制SNSがあるの？ 理由は分からないけど私たちは大和型二番艦様のお眼鏡にかなつた、と思つていいの？」

長月の足と口がピタリと止まつたのを見て取つた山城はアプローチの方向を間違えたことを悟つた。

「いやごめん私の勘違いだった。SNSとかではないのね。うん。なるほど。よし。えーとじゃあ……何か食べながらじっくり話を聞きたいから売店に行きましょ。そうしましょ」

山城は支払いの目処が付かないツケを売店に作つてしまつており、なるべく売店（とアルバイトの磯風）には近づかないようにしていた。スマートフォンを一回充電しただけで一万円も取られた事を泣き寝入りする軟弱な彼女ではないものの、磯風のバックにいる売店のお姉さんには自慢の扶桑型艦橋を以てしても勝ち目はない。

よつてしばらく利用しないつもりでいた売店だつたとしても、しょんぼりしてしまつた長月には甘い物を与える必要があつた。近頃カレンダーズを頑張り以上に甘やかしていると竹櫛提督より軽巡洋艦以上の艦にこつそり苦言を呈されたのだが、主に甘やかしているのは分隊の斑鳩である。山城の知つたことではなかつた。

「頭を整理するのには甘味よね。長月もシュークリームとか好きでしよっ？」

「……山城も私を子供扱いするんだな」

「い、いや。そんなことは……」

「いいさいいさ構わないさ。どうせ私は電なんかよりお子様さ。甘い甘いシュークリームで機嫌を取ればいいさ」

つむじを曲げて早足になつてしまつた長月の背中を見ながら山城は、やはり自分には誰かの面倒を見るのは向いていないらしいと思うのであつた。逆に自分が長月に面倒を見られているとはまだ知らずに。

◆
◆
長月の機嫌の淀みは売店に入るなり吹き飛んだ。

商品の陳列をしていた磯風が「おお、長月に山城じゃないか」と頭を上げた。「二人ともこちらの都合を察して来てくれるとは、手間が省けて助かる。良い心掛けだぞ」

「お金なら無いわよ」と山城は先手を打った。「バッテリーの支払いは再来月まで待つて。しばらくカツカツの生活をしなきゃいけないから」

「だろうと思ってな。では延滞料の話をしようじゃあないか」
「……先に長月の方の話を済ませて」

その長月の耳には山城と磯風の会話は入っていないなかった。コンビニエンスストアのように整然としつつも混沌とした商品群の中、店の隅に立て掛けられている商品に目を釘付けにされ、「長月？」と山城に呼び止められるのにも構わずフラフラと吸い寄せられた。

全幅の信頼を寄せている斑鳩に預けた巨刀、ネコノツメが、一体全体何がどういった因果科学的反応を起こして売店に並べられるに至ったのか、今の長月のこんがらがった頭脳ではルートのひとつも思い描くことができなかった。

美しい朱色の鞆に僅かに付いている傷は長月の記憶にあるものと完全に一致した。それだけではない。

「く 猫爪 (ネコノツメ) く 3, 000, 000円」

明らかに事情を少しでも知る者が書いたであろう値札が貼られている。

呆然とする長月の隣に磯風が並んだ。

「駆逐艦寮の玄関に飾ってあった剣だ。ある日忽然と紛失したと思ったら、お姉さんが司令から買い取ったんだ」

「待て。司令って傘姫司令官じゃなくて竹櫛司令官か？ どうして司令官がネコノツメを持っていた？」

「詳しいことは聞いてないな。司令が軍刀欲しさに、代わりとしてこの剣を駆逐艦寮から持っていったのではないか？」

「剣じゃない。刀だ」

長月の口調は強くなった。

「な、なんだ。やはりお姉さんの言った通り長月はこの——刀に思い入れがあったのか。元々はフォークリフトで長月の元に届けられた謎の荷物だとは聞いていたが」

「磯風が知ってる限り全部を教えてください。ここに至るまでの経緯は？」

「本当にほとんど知らない。お姉さんから少し聞いただけだぞ」

磯風はエプロンの上で腕を組んで記憶を遡った。二人とも売店の入口で所在無きそうにしている山城のことは忘れていた。

「どうして司令がこんな大業な刀を持つとうとしたのかは知らないが、知つての通り刀として持てる重量ではない。戦艦のどんな艤装よりも遙かに重いだろ。でだ。司令にフォークリフト並の筋力があるはずもないから当然もてあましていた。そこに目を付けたお姉さんが声を掛けた。この刀と、常識的サイズの軍刀を交換しないかと。というわけで司令は新しく手に入れた面白味のない刀に『丑の刻摩天楼・改』という名を付け、お姉さんはこのネコノツメにとんでもない値を付けた」

「……300万って値段は、見る人から見たら妥当なのか？」

「さあ？ 聞いてみたが教えてもらえなかったな。しかし長月よ、やはり買い戻せるならそうしたい様子と見た。寮の玄関に飾っていたとはいえ大切だったのではないか？ 覚えのない異世界の海戦の記憶に焼き付いているとかいった類の」

「いや全然違う。——けど、取り戻したいかと聞かれたらその通りだ」
手近な包丁でも構わない。そう何度も言ってきたからこそネコノツメから球磨のナイフに持ち替えて、改めて兵装そのものが持つスベックにも欲が出て来たのだった。

長月は偽葛城事件でネコノツメと自分自身を初めて酷使した日のことを何度も思い返していた。睦月を守るために飛び出して、自分は少々の傷を負ったものの守るべきものは守り切った。ネコノツメを装備した自分以外の誰かに代役が務まる事件だったか？ いや無理

だ、次があるならば次も私が守ると決意しているから球磨のナイフを持っていく。だがしかし、心に背負った荷物を確かめれば確かめるほど、球磨のナイフでさえ心許なくなつた。

この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。

果たして球磨のナイフは炎に焼き尽くされず仲間を守る使命を全うしてくれるだろうか。難癖を付ける話ではない。それでも、どうしても、もし偽葛城事件の時に装備していたのがネコノツメではなく球磨のナイフだったら結果がどうなっていたか。再び同じように全身全霊を要求される場面が訪れたらどうなるか。長月は砲撃を防ぎ切るのに力を使い果たして破片の雨を全身に浴びたと聞いていた。それでもネコノツメを使ったからこそできた精一杯だった。

装備の不足は睦月に砲弾が直撃する映像を鮮明に創り出し、それは夢の中で何度も再生された。

「そう悲しい顔をするな長月よ。話の続きだが、長月にだけ特別割引の話を持ち掛けるとお姉さんに命令されている」

「特別割引？」

「略して特割だ。聞いて驚け、このネコノツメを片手で持ち上げられたら99%OFFで売ってもいいそうさ」

「99%OFF!?! ……きゅ、きゅうじゅうきゅうを掛け算？ するど？ するの？ あれ？ えーと」

「3万円也」

「3万……それでも微妙に高いな」

「入口に立っている航空戦艦ならポンと出してくれるんじゃないか」

「聞こえてるわよ、そのアルバイト」と山城がつかかかると磯風は「聞こえるように話したんだ」と軽く流した。この二人にとってはネコノツメが持つ値段以上の重さも、長月が脳内で戦っている水火の難も、まったく知るところではなかった。

カレンダーズ全員に頼めば3万円ならどうにかなるかもしれない。しかし『駆逐艦寮の飾り物』を買い取りたいからお金を貸してくれ、とは言い出せない長月だった。斑鳩や武蔵に相談すれば何ということも

なく解決すると分かっているにしても、やはり無心のようなことは性格に
対してハードルが高かった。

「なあ磯風。その……ネコノツメの取り置きはして貰えるのか」

「構わんぞ。というか誰が300万円を売店に落とすのか、お姉さん
の考えが理解できん。美しい刀であるのは間違いないがコレクショ
ンの足しにするにもなあ」

「じゃあ——これは真面目な約束だ磯風。今から見る事を絶対に他言
するなよ。フリでもなくマジで。山城は誰か来ないか入口で見張っ
ててくれ」

「客の大切な秘密を他言してしまうなら口を物理的に結べとお姉
さんに言われている。まあ、この磯風がそう簡単に約束を違えはしな
いが」

つまり磯風は、竹櫛の軍刀購入については心底どうでもよく秘密で
も何でもない事だと認識しているらしかった。

「長月よ、本当にチャレンジするつもりか？ いくらお姉さんの名指
しとはいえ、この刀を片手で持つなんて人の形をした生物には不可能
だ。個人的には触らないでほしいくらいだぞ。もし長月の上に倒れ
たらペシヤンコに押し潰されるのは避けられないし、今こうして立て
掛けているのだから苦勞したものだ。考えてみれば寮に飾ったのは
誰がどんな治具を使って——」

磯風のぼやきに耳を貸さずに長月はネコノツメの柄を小さな右手
で握り、まるで一本千円で販売中の海軍精神注入棒を物色するような
力加減で99%OFFの条件をクリアした。

「……………は？」と磯風の口から彼女らしからぬ間の抜けた声が
出た。

今は売店の商品であることもアルバイトの反応にも構わずネコノ
ツメの刀身を鞘から抜いた長月は本物かどうか念のための確認に、自
分が手放した原因である刃毀れを探した。しかし真っ先に目に飛び
込んで来たのは大胆にも白いチョークで刀身に書かれた矢印と『ココ
修復済』という注釈だった。誰の文字か分かるうはずもない。だから
長月は知れない誰かに頭を下げ、刀身を鞘に収めた。

「ねえ。磯風がフリーズしてるから解説が欲しいんだけど。何のさつきから」

売店入口の見張り番を任されていた山城は視線を適当に外に向けつつ、制服のどこかに小銭の一枚でも紛れ込んでいないかまさぐっている。

「ああ悪い。元々は私のものだったんだ、この刀は」

「それは話を聞いてりやあ分かった。磯風がこんな反応をする理由の方よ、聞きたいのは」

「いや、これは……手品、なのか？」

磯風は長月の周囲に透明なワイヤーやクレーンを探そうと手をふよふよ漂わせた。

長月は苦笑して「種も仕掛けもないよ」と言った。

「駆逐艦寮に住んでる奴らならだいたい触って知ってるんだけどな。ネコノツメはちよつと重いんだ」

「待て」と磯風。「長月は『ちよつと』の意味を知らないらしい。それともまさか、私が戦闘から離れて知らぬうちに衰えただけ……では絶対にならないな。うん。戦艦である山城も試しに持つてみてくれ。絶対に持つてないから」

「持つてない物を持つてって、頓智？」

「その真逆の筋肉だ。力こそパワーだ。あり得ないことだが、もし持ち上げられたらツケは私が肩代わりしてもいい」

「よーし言ったわね。取り消しなんて許さないから。扶桑型戦艦のパワー・オブ・チカラを侮ったことを後悔するがいいわ。長月、それ貸して」

「やめとけて。無理すると腰とか痛めるぞ」

「駆逐艦にンなこと言われちゃあ余計に引き下がれないわ。というか普通に持つてるじゃない、長月。そんなに大きな刀を軽々持つてるくらい力持ちだったのは少し驚いたけど、私だっけ決して非力じゃあないつもりよ。ほら貸してみなさい」

言うなり山城は長月が持つネコノツメを引っ手繰ろうと柄に右手を掛けた。――が、ネコノツメは山城の意に反して僅かの動きも見せ

なかった。

「ちよつと。手え離しなさいよ」

「いや、力を入れてないが」

長月は両手のひらにネコノツメを置き、献上品のように山城の方へ差し出した。磯風はニヤニヤして様子を見ている。

山城はもう一度、ちよつと借りるくらいの気持ちで取ろうとした。しかしネコノツメはフリーンカザンの奥義を象徴するヒマラヤ山脈めいて上にも下にも動かない。両手で試してみても結果は変わらず、長月が巨大な鞘の裏でこつそり掴んではいけないかとジロジロ確かめながら、もう一度挑戦した。

「ふんっ！………っんん？」

今度は少し腹に力を入れてみたものの、ネコノツメはその名の通り、暖房の前から動こうとしない猫のようだった。

「私の言った通りだろう」と磯風は現実を受け入れられない様子で山城の肩に手を置いた。「気持ちちは分かるぞ。刀か長月のどちらか、それとも両方がおかしい筈だろう？　しかし刀が並大抵で持てないのは店番をしている私が確認したし、見ての通り長月は涼しい顔で持っている。私だってまだ現実を受け入れきれていないさ。でも今は納得しておいた方がいい。でないと、この『長月の姿をしたターミネーター』に始末されてしまう」

「変なこと言うな。私は私だ」

「このターミネーターが長月を演じてくれている今がチャンスだ。刀でも何でも渡して見逃して貰うしかない」

「おいコラ。じゃあ私の心臓をソナーで確かめるか？」

だが山城は磯風の言葉に耳を貸さなかった。

「私はね、強くなるって決めたばかりなのよ——扶桑姉さまのように！」

今度は駆逐艦の前で余裕ぶるような真似はせず、息を大きく吸った山城はネコノツメの柄を両手でしっかりと握った。砲撃時のように両足を軽く開き、丹田を意識しつつゆっくりと息を吐いた。戦艦の力とは腕力に非ず。頭の艦橋から足の先まで力が充実するのを感じな

がら深呼吸をもう二度行つた。

高練度の航空戦艦の引き締まった表情は洞観者の長月、そして売店のアルバイトの磯風にも緊張を伝えた。

肺に空気を満たした山城は、目を見開き活火激発、出力を限界まで引き上げた。

「W a s s h o i !!」

その掛け声は店内の長月を、磯風を、あらゆる雑多な商品を震わせ吹き飛ばすかのようだった。そして、おお、なんたる戦艦の大出力か！ ネコノツメがコンマ5秒ほど浮き上がったではないか！

しかし長月の能力に耐え得る最終兵器ネコノツメの方が一枚も二枚も上手だった。山城に掛けられた力のほぼ全てを謎の金属素材は頑とはね返してしまった。エネルギーはそのまま山城の手を伝い肘、肩、胸、腹を通過し、尻の方へと抜けていった。一連の力の流れはまるで無反動砲のようで、戦艦の出力を相殺してしまう程、ガスが噴出した音は掛け声に勝るとも劣らない大きなものだった。



比較的落ち着きある駆逐艦・元駆逐艦と認められている長月と磯風が抱腹絶倒するものだから、山城の羞恥心が怒気に変換されるまでさほどのタイムラグは無かった。

「わっしよいブーwwwwわっしよいブーwwww」

「死ねっ！」

山城がプリプリしながら売店を出て行ってしまった後も、残った二人はしばらく笑い苦しんでいた。

「あんなの絶対に笑うよな」と涙を拭って長月は言った。

「山城には悪いが、あれは不幸な事故だ」と言った磯風は冷えたペットボトルの緑茶を冷蔵棚から一本取り、長月に差し出した。

「これは私の奢りだ。その刀から早く手を離したほうがいい。怪力は秘密にしておきたいのだろう」

長大なネコノツメを振り回しながら腹を抱えていた長月はそそく

さと元の場所に立て掛けた。まだ99%OFFで購入する権利を得ただけで、3万円を支払う目処はまるで付かない。ネコノツメが再び手に入れば不要となる球磨のナイフを売ってはどうかと長月にしては冴えた案が頭に浮かんだものの、長月・球磨・斑鳩の三名間にも厄介な事情があるのを思い出して、しばらくは売店から再び他人の手に渡らないよう見張っておこうと一応の妥協点を付けた。

緑茶で喉と頭を冷やすうちに長月は、磯風にじっと観察されていることに気がついた。

『なぜ長月なのか』も当然、お姉さんに聞いたさ」

磯風は途中だった陳列を再開しながら言った。

「そして答えも当然、聞けなかった。あの刀も長月も訳有り——と言ったら不義があるようで違うか。とにかく詮索すべきではない何かがあって、私はただのアルバイトとして事務的に刀を取り置き、いつか長月に売る。それだけの話、なのだろうな」

「あの……お金はいつになるか」

「構わんさ。仮に誰かが300万円以上の札束を持って来たとしても、まず長月に一報を入れるから心配するな」

空になったダンボールを手早く片付けた磯風はカウンターの裏側に回り、暇そうに客を待つ仕事に戻った。

「私が艦娘を辞めた理由、長月にはどう伝わっている?」

「いきなり話が飛んだな。——叢雲が抜け殻みたいだったし電は何故か怒ってたし、説明してくれる奴がいなくて変な噂ばかりだった」

「正直なところ、私自身でさえ説明『できない』事がある。秘密だったり、未だ理解できていないという意味での『できない』だ。辞める直前にかかなり痛い目を見てな。直後には怖い思いもした。身の丈に合わない何かがこの世界には存在していて、残念ながらもまだ未熟な私が触れようとする瞬間に身を滅ぼすと思ひ知ったよ。——この磯風の言わんとする事は上手く伝わったか?」

「はつきり言ってくれ。私の周りはカレンダーズを除いたら小難しいことばかり言う」

「命乞いだよ」

磯風は涼しい顔で言った。

「刀や長月の秘密には便宜を図る。だから私を消さないでくれ」



「……と、ところでさ。この店の品揃えってすごいよな。なんでも売ってる」

話し下手な長月の返しが今ばかりは良い方向に働いた。ターミネーターを前にしている緊張が少しは解けたらしい磯風は「そうだろう。そうだろう」と働き始めてまだ日が浅いくせに得意気に頷いた。「プリンを除くあらゆる甘味を棚に並べる準備がある。魚釣りがしたければ釣り道具一式を提供できる。お偉方の社交パーティーに出席したければドレスや偽名者宛の招待状を用意しよう。工場で製造できない欲しい装備があれば気軽に注文してくれて構わない。いつも己が統率する艦隊で戦いたくなったら肩書きと鎮守府をその手に握らせ、逆に私たちの戦争から逃げたくなればカレンダーズ全員が乗れるバスとシエルターまで案内するGPSアプリを手配してみせる。売り場とバックヤードの狭さこそ見ての通りだが、取り扱う商品はそこいらの通販サイトを軽く凌駕する。どうだすごいだろう。今すぐ何か注文したくなつたんじゃないか?」

「本当に、何でも?」

「問い合わせるだけなら無料さ。それに同じ釜の飯を食う仲だろう。気軽に言ってくれ」

「じゃ、じゃあさ。私も、その、睦月みたいに改二になりたいって言ったら……なれる?」

「すまない。装備とか艦隊のくだりは話を盛った」

「なんだよもう! ちよつと本気で期待した私が阿呆じゃないか!」
「私でなくお姉さんに聞けば不可能ではないと返ってくるだろうが、契約が現実的かどうかは別問題だぞ? 一気に睦月に追い付く程の地獄の特訓か、あるいは——そういえば長月は3万円の壁にすら阻まれていなかったか」

「い、言うだけなら無料なんだろう」

「あくまでモノを買って貰うために要望を聞いているのだからな。そうだ長月よ、ひとつ新サービスを買ってみないか。元駆逐艦であるこの磯風が些細な経験を元に考えた画期的なビジネスだ」

「お金が無いんだってば」

「名付けて『島攻略オンデマンド』だ。この名で興味を引かれないはずがない」

「話を聞け。私にはお金が無い」

「茶を飲み終えるまでは話を聞いてみないか。未熟なアルバイトのプレゼン練習に付き合うと思って、な。その椅子を持ってきて座ってくれ。ほら、これがチラシだ」

せめて他の誰かも付き合わせたい長月だったが、こんな時に限って売店を訪れる客は現れない。カウンター前に置いた簡素な椅子にポツンと座っている自分がひどくしょうもないことをしている気がしてならない彼女だった。

磯風から強引に手渡されたA4サイズのチラシは、あまり詳しくない長月でも「パソコン教室で作らされるヤツだ」と思わずにはいけない、体裁を整える努力がまるでなされていないような出来栄えだった。レインボーでポップな文字が不必要に自己主張するかと思えば何らかのプランを並べた表をまたいで磯風の好みそうな荘厳な文字列がみっちり詰り込まれている。『島攻略オンデマンド』というタイトルしか読む気になれないデザインは数秒で長月の目と頭を痛め、チラシを裏返すと南鎮守府の地図と売店の位置、電話番号、お姉さんのツイッターIDが、こちら側はやけに熟れた風に作られていた。

「長月。表を見る。売店の位置はよく知っているだろう」

「必要無い情報は最初から省けよ。裏面いらさないだろコレ」

表面もいらさない、と言いたいのを良心からグツと堪える長月だった。

「お姉さんに手伝ってもらったら知らないうちに裏面もできていたんだ」

レインボーな文字に目を細めた長月を集中していると勘違いしたのか、磯風は満足気に頷いて「コホン」とわざとらしく咳払いをした。「それでは、この磯風が考案してお姉さんが段取りをした『島攻略オンデマンド』について説明するぞ」

「お姉さん段取りって、つまり磯風はチラシ作っただけじゃないか」
「黙れ」

自分でも気にしていたのか、少々口調が厳しくなる磯風だった。

「……では内容を説明していこう」



「我ら人類の敵対者である深海棲艦も悪い意味で期待通りの進化を繰り返している」と分析され、それを打ち砕くのが艦娘だと言われている。しかしだ。可能な限り早く脅威を排除したい我々に対して敵はまったく意図が不明、つまり超長期戦を想定していたとしても不思議ではない。鬼姫を観察すれば一目瞭然なように高度な戦術・戦略という概念を持っている点に疑いの余地はない。そこでだ。仮に深海棲艦の現状の目的を、戦争を長引かせることにあると仮定しよう。ではその理由は長月、何だと思う？」

「……悪い。いま何の話をしてる？」

「戦争による特別需要を狙っているとは考えにくい。というより考えたくない。何者かが深海でバイオハザードを起こしているとなればハリウッド映画的解決法を模索するしかなくなるからな。では深海にも技術や懐の事情があるから時間が必要なのか？ これは当然あるな。徹底的に妨害したいところだ。さて、ここで再び長月に問題だ。敵も当然こちらを妨害したかろうが、具体的には何を襲撃したい？」

「……………むずかしいなー」

「その通り補給路だ。さらに絞って言えば、我々が安全を確保したと考えると、呑気にお喋りしながら最低限の警戒で通過しているルートだ。何度も何度も通り、時には戦い、反攻作戦に出ることもあるだろう。」

安全を取り戻し継続的に利用可能な補給路を確保したと大本営発表があれば安心するな。だが待て。私がさっき言った事を思い出して欲しい。もし深海棲艦が我々のように戦略を練り、技術を持ち、その上で超長期戦を選んでいるとしたら？」

「……………うん」

「敵は準備をしているのだ。少々の再生能力を持つ個体をどうにか撃破できないかと四苦八苦している我々の視界の外で、ひっそりと仕掛けを準備しているのだ。いや、もしかすると既に何度も目にはしているのかもしれない。分かり易く言ってしまうえば、迷彩を施された砲台小鬼のような強力な兵器が各方面でじつとDーデイを待っているとしたらどうだ。北から南まで全域で同時に油断した艦娘を、深海棲艦特有の後先を考えない火力で以て我々を壊滅させる、そのための準備が今この瞬間も着々と進められているかもしれないのだ。今更になつて『一度負けてもまた司令と秘書艦の二人で再建していけばいい』などという綺麗事はもはや美談にもならない。一度突破されれば押し返すのがどんどん困難になっていく現在の状況で、これはすぐに対処すべき脅威ではないか！」

「……………」

「しかし残念なことに我々は現状見えている危機への対処で手一杯だ。それだけではない。広大な海でゲリラ戦の誘いに乗るなど、それこそ敵にとっては願ったり叶ったりに違いない。ではどうする？ どうするのだ長月よ？」

黙っていることにも疲れた長月は磯風に何かをしつこく質問されたようなので、とりあえず手元のチラシを指した。

「その通り！」

我が意を得たりと磯風は大仰に手を広げた。

「わざわざ歴戦の艦隊に恐る恐る偵察をさせずとも、南鎮守府総合棟正面入口から徒歩数十秒の位置にある売店に安全が売っているじゃないか。いつも見ている小さな島が気になるか？ そんな時に『島攻略オンデマンド』だ。簡単なサーブिसさ。ただ『あそこの島を攻略してくれ』とデリバリーピザのように甲・乙・丙を選んで注文するだ

けで悩みの種を排除できる。素晴らしいと思わないか！」

「……素晴らしいと思う。わあ。すごいなあ」

「フフツ、そうだろう」



「——といった具合に不安を煽ることで契約と結び付ける寸法だ」

「おい待て悪徳売店」

最初から話を右から左へ受け流していた長月もさすがに聞き流せなかった。

「ここまでの長つたらしい話は何だったんだ」

「この磯風の想像に過ぎん」と悪びれる様子もなく言い切った。「艦娘を辞める直前の私の練度は長月よりも低かったのだぞ。海の正確な情勢など分かるものか。しかし噂されていたヤナム島が発見された直後に深海棲艦もいよいよ陸上での展開を活性化させてきたことで不安は高まってきただろう。かといって陸軍といっそう足並みを揃えることに不安もあるに違いない。そこでコンビニで本格的コーヒーを買うような気軽なサービスである『島攻略オンデマンド』の出版というわけさ」

「……うさんくさー」

「胡散臭いかどうかは内容で判断頂きたいものだな。甲・乙・丙が並んだ表を見てくれ」

三列からなる表は説明する気が有るのか無いのか（どちらかと言えば無さそうな）契約内容がひどくシンプルに記載されていた。

「まずは『丙』だ」と磯風は長月が目を通す暇も与えずに話し始めた。

「千円ポツキリで陸軍から一人を召喚する。以上だ」

「以上って……島攻略してないじゃないか」

「値下げの限界を追求したプランだからな。有り体に言えば、ほら覚えてるか、この鎮守府に忍び込もうとした陸軍人。名前は……ん？

まあとにかく、あの陸軍人が天照大艦隊に自身の有能さを見せつけたいと五月蠅いのでな。プラン『丙』は何とかいう陸軍人を千円出せ

ば寄越すから、島の攻略が少しばかり楽になるでしょう、というものだ」

この鎮守府に忍び込んだ陸軍人（長月も名前を忘れた）を真つ先に発見したのは他でもない長月だった。揚陸前に球磨に捕まる程度であることも、睦月を巻き込んで斑鳩に大迷惑をかけたことも磯風より知っていた。さらにはジャージにわざわざ着替えてから失禁するという奇怪な行為に及んでいる。プラン『丙』は千円を払って厄介者を呼び寄せるものだと言月が結論付けた。

「千円なら長月もそこそこ気軽に出来るだろう。どうだ、ひとつ試したくはないか？」

「……攻略したい島を見つけたら考えるよ」

これなら出撃前にちよつと贅沢に千円分の菓子を買った方が誰にとつても幸せであるように思われた。

一つ目のプランから『島攻略オンデマンド』に見切りを付けようとしている長月の様子に気付かないのか、磯風は次の説明に移った。

「次は『乙』だな。このプランは先程の私が並べた建前を信じる人や、実際に怪しい島に悩まされている団体、この御時世にプライベートビーチを持ちたがる命知らず向けだ。よって事前調査の段階から最低でも2,000万円を頂戴しなければならない」

「もう私とは別の世界だな。高いのか安いのか検討もつかないけど」
「民間の怪しげな軍事会社とは格が違うことをアピールする意味もあるからな。実際に島を攻略する段階になれば契約費用は桁が増えるどころではないかもしれない。多少の余裕がある艦隊に調子に乗らない程度の小遣い稼ぎ話を持ち掛けて、客は出した金の分だけ確実に安心を手に入れ、この店は潤う。完璧だ。隙の無いプランだろう」

「磯風には悪いが、どんどん私の趣味と離れていってるぞ。お金、お金、お金。正直うんざりだ。艦娘を辞める前のお前は、お金よりも大切なものを知っていた。島でも何でも任せると胸を張って言える奴じゃあなかったか」

「……………」

「悪いが私もやることがある。山城との話の途中だったんだ」

磯風が天照大艦隊に加わったのは比較的新しい事で、それでも戦いに向ける熱意は自分よりも大きそうだと長月は思っていた。それは売店のアルバイトとなっても、いや立場を変えてまで鎮守府に残った揺るぎない信念を尊敬すらしていた。

少し言い過ぎたか、いや磯風のためか、どちらにせよ売店に居づらくなってしまうた長月は腰を上げようとした。そこでチラリと磯風の顔を窺うと——不気味にも、ニヤリとしていた。

「できれば遠回しに伝えたかったのだがな。長月よ、よく考えてみる」

「考えることなんて無い。私は司令官の命令に従って島の攻略作戦に参加する。個人的に出撃することなんてない」

「あの巨大な刀を担いで鎮守府を飛び出した駆逐艦の台詞とは思えないな。長月という『洞観者』は表舞台で戦った数少ない例だと聞くが」

「——今、洞観者と言ったか？」

カウンターを挟んでの睨み合いに発展しそうだった雰囲気。「待て待て」と磯風が制した。

「さつき命乞いをしたらどう。秘密だと承知しているし、正直なところお姉さんに聞かされても、長月の怪力をこの目で見るまでは半信半疑だったんだ。だいたい北鎮守府の事件の時だって、目撃されていたにもかかわらず長月が刀をどうしたと駆逐艦の皆が首をひねっていただろう。私もそうだった。しかし実際にあの刀が兵器として有効活用されそうだと分かれば正直、胸が踊った。これは本当に島攻略オランダマンのプラン『甲』も現実的になりそうだ」

「おいまさか、私に戦わせる話ではないだろうな」

「まあ少し落ち着こうじゃあないか長月。ほらコーヒー牛乳も奢るか。長月。騙されたと思って長月。オーマイリルナガツキイ」

「バカにしてんのかお前」

「とんでもございませんお客様。チラシのプラン『甲』のところを見てくれ」

磯風に渡されたピンを一気に空にして、長月は再びチラシに目を落とした。冗談であろう格安の丙、高額納税者でもターゲットにしてい

るのか乙、そして甲もまた長月とは無縁そうな料金設定がなされていた。

「時価。……時価？」と長月は首を傾げた。「回転しない寿司屋の怖いヤツか？」

「まずプラン『甲』の概要を説明させてくれ。さつき『乙』は確実に攻略すると話したな。だがお目当ての島を攻略するための全負担を誰かが持つなどあまり現実的とは言い難いだろう。せいぜい双眼鏡で木が何本生えているか数えられるような離れ小島にロケット花火でも撃ち込んで何も潜んでいないか、一応プロである艦娘が確認しに行く程度だ。しかもロケット花火の撃ち込み方を検討するだけに誰が2,000万も払ってくれるのか少々疑問だな」

「私は最初から島攻略オンデマンドに疑問がある」

「だがプラン『甲』は違う。まったく未知であろうと、逆に鬼姫の存在が確認済みであろうと、形振り構わず制圧する。例えその島を攻撃することで深海棲艦を余計に刺激することになろうとも、それが顧客の目論見だと考えて戦い抜くに足る戦力を送り込む。ゴルゴ13でもなければ攻略は難しい？ ならば話は早い、ゴルゴ13なら解決できる可能性が高いのだろう。ヤーナム島のように恐ろしい？ 斑鳩という攻略者が既にいるのに恐れる理由は無いな。——口で言うだけならば容易いともさ。ならば口で言ってくれ。島攻略オンデマンドのプラン『甲』をくださいと、ファミチキを買うような気軽さで、この磯風に伝えればよいのだ」

堂々と宣言（宣伝）する磯風は気早くも世界を握ったように偉そうである。自分も売店でのアルバイトを経験したら無駄に自信が付くのだろうかと思し考えてみる長月だった。フンスと鼻息荒くプレゼンテーションを終えた姿が、荒唐無稽でも売れるようなモノを作った磯風の行動力が、ちよつぴり羨ましかった。

とはいえ島攻略オンデマンドが阿呆らしいという感想にいささかの变化も無く、プラン『甲』を説明されたから何だという気分だった。「それで？ プラン『甲』を説明されて？ だから何だ？」と実際に口にも出した。

「実はだな。既に注文が入っているのだよ。しかもプラン『甲』と『丙』をセットで」

「嘘だろ？　　というか本当に商売する気があったのか」

「正直なところ発案者である私が一番驚いている。こんなに小さな売店にも頼るほど暴きたい島があるのかと」

「どこの島だ？　　誰に頼まれたんだ？」

「契約情報だぞ、口外できるものか。……今はまだ」

「今はまだ？」

「ところで長月よ。いや洞観者の長月よ。ここからが本題なのだが――あのご執心の刀、ネコノツメについて何か変だとは思わないか？　　というか頼むからそろそろ気付いてくれ。私も隠しているみたいで心が痛む」

言われた長月は慌てて再びネコノツメを手に取った。長月の身長よりも長い刀を端から端までチェックするのは大変な作業で、それでも根気強く探そうとした。

三分だけ待った磯風の方が折れた。

「念のために聞くが長月よ。まさか気付いていないフリではなからうな」

「教えてくれよ！」長月を縛る300万円の呪縛は99%OFFとはまったく別次元の話であるため未だ解ける気配が無かった。「この刀に何かあったら私……借金地獄……」

「余計に言いづらくなつたな……ではヒントを出すぞ」

「ああ。何だ」

「修復費」

長月の手から抜身のネコノツメがポロリと落ちた。持っていたのが小柄な少女であったためにその様はポロリであったが、扶桑型戦艦・山城の出力をはね返して放屁させた重量のある刀は売店の床に落つこととしてよい物ではない。それも運悪く切っ先が真下に向かったとなると、山城の次に敗北するのはコンクリートの床だった。正当なる王に抜かれるのを待つ伝説の剣のように、音はまるで重機のそれのように、ネコノツメは売店カウンター前の床に真っ直ぐ突き立つ

た。

ネコノツメの扱いだけならばまったく苦と考えない長月も、300万円＋修復費という別次元の重みには耐え切れず売店から走って転進した。



「あ……待って……」

一方で磯風の口からは情けない声しか出なかった。お姉さんの指示通りネコノツメを店の隅に立て掛けるだけでも天井を一時撤去してユニットを使ったのである。ただの陳列が様々な意味での苦労となった経験は、できればもう二度と御免だった。それが今度はカウンター前、ちょうど客が品物を持ってきて支払いをする位置に深々と食い込んでいる。刀身はおよそ半分ほどがコンクリートの中に入った。

こうなってしまうえば最後の手段、万が一、もしかすると自分の中の人がアーサー王の末裔か何かである可能性に賭けた磯風は柄に手を掛けた。時津風が指導の訓練で言わされた掛け声が思い出される。

「よし、せーの…… エクスカリバー!!」

誰も見ていないのを良いことに叫んでみたものの、ネコノツメは既に長月を選んでいる。特別な先祖や湖に棲む乙女のような知り合いに恵まれない（加えてアーサー王伝説に興味もない）磯風にはうんともすんとも言わない、どころか下手に刺激を与えたせいで1cmほど余計に沈んでしまった気がした。

あまりにどうしようもなさ過ぎて、長月を説得するまではこのままでも構わないかと磯風が諦めようとした時だった。店の奥から長身の青白い女性が、録画していたドラマを見終えたらしく半纏姿で出て来た。店に立つ時や旅行鞆を持った時の颯爽たる美人は精神的炬燵で寝ているのか鳴りを潜めている。

「マタ旅行ニ行キタクナツテシマッタ。磯風、才前ハ鹿児島ノ指宿トイウ温泉観光地ヲ知ツテルカ」

「い、いえ。知りません」

お姉さんから無意識にネコノツメを隠そうと体で遮ってしまった磯風だった。

「旅行ならどうぞ。店はこの磯風に任せて下さい」

「ホーウ。言ウヨウニナツタジャアナイカ。先程、島攻略オンデマンドノ客カラメールガ来テナ。希望ハ明日ニデモ計画ヲマトメテ、明後日カラ特急テ取り掛カツテ欲シイソウダ」

「あ、明日!?! いくらなんでも急過ぎ——」

「オ前ノ背後ニアルモノヲ見ルニ、長月トハ話ヲシタンドロウ」

お姉さんはカウンタ―に置いてあつたチラシを拾つて「何度見テモ酷イ。我ナガラヨク客ヲ掴ンダモンダ」としみじみ言った。

「客ノ依頼ハヤーナム島ノ無害化ダガ、トックニ分隊ノ斑鳩ガ攻略済ミダ。深海棲艦デモ人間デモナイ正体不明ノ相手ガ得意ナ長月ニハ退屈ナ仕事ダロウナ。ムシロ同行サセル記録補給係ノ陸軍ノ……エート名前ハ……マアイイ。ソノ陸軍人ノ面倒ヲ見ルノガ唯一ノ厄介事ニナルカ」

「それが……ですね、お姉さん」

「ウン? ドウシタ冷ヤ汗ナンテカイテ。急ニ日程ヲ早メルナド無理ダト突ツ撥ネテモヨカツタガ、オ前ガ考案シタビジネスノ成果ガ早く出ルコトニナルシナ。良カツタナ。ドウシタ、モット喜ベヨ」

「いや、その……」

「心配スルナ」

お姉さんはあまり健康的には見えない細く青白い手を磯風の肩に、ヌラリと絡みつくように置いた。

「客ハ長月ノ裏ノ姿ヲ知ツタ上デ『甲』ト『丙』デ注文シタカモシレナイガ、戦力ノ指名ハサレテナイシ、我モソコマデノ我ガ儘ヲ聞ク気ハナイ。我ガ温泉ヲ満喫シテル間ニ全テ磯風ノ采配通りニ事ガ進ミ、島ハ無事攻略サレル。確カニ我ハ長月ノコトヲ教エテヤツタシ、アノ子程ノ強サガナケレバ——」

お姉さんはもう一方の手で磯風の後ろに深々と突き立ったネコノツメをチヨイチヨイと指した。

「——命ガ幾ツアツテモ足りナイト助言モシタナ。オ前ハ忘レルホド

阿呆ジャアナイダロウ。シカシ、モシモノ話ダ。客カラ大至急ダト煽リガ来テル時二限ツテ、長月トノ友好的ナ会話ニ失敗シタト仮定シヨウ。コンナ時、磯風ナラドウ対処スル？ ウン？」

磯風は短い艦娘経験のおかげで自惚れることは(あまり)なかった。だから島攻略オンデマンドを練る段階から、このサービスはあくまで『強い者』といかに交渉し派遣するかを考え、まさか人と時間の不足から『弱い自分』が出向くなどあり得なかった。少し深海棲艦と戦える程度の自分がノコノコと近づけば確実に沈められるような、そんな危険地帯をどうにかするのがそもそもの島攻略オンデマンドであるはずだった。

ヤーナム島については斑鳩から酒の席で話を聞いた以上に、お姉さんから微に入り細に入り聞かされて脅されていた。そこに待つのは死よりも恐ろしいものだ。

「ドウシタ磯風、震エテルゾ。寒イノカ？ 心配スルナ。ヤーナム島デハ火種ニハ嫌デモ困ラナイト聞ク。——デ？ ドウスル？」

「こ……この、磯風が……」

「磯風ガ？ ナンダ？」

「磯風が………斑鳩と交渉してみます。絶対に時間は作れないと思うが、聞くだけ聞いてみれば、もしかしたら」

するとお姉さんは我慢していたのを堪えきれなくなったように大口で笑った。

「アツハハハハ！ 成長シタナア磯風！」

磯風の肩に置かれていた手は頭に移り、今度はベシベシと叩きはじめた。

「痛っ、お姉さん痛い」

「才前ハアノ阿呆潜水艦タチト比ベタラ素直デイイ。モシ自分ガ行クト言ツテタラ止メナイツモリダツタヨ」

「私が行っても何とかなる島なんですか？」

「イヤ？ 超危険ダトシツコク教エタダロウ。運ガ良ケレバ制服ノ切レ端クライハ島ニ流レ着クカモナ」

「……………」

磯風は答えを間違えなかつた数秒前の自分を褒めてやりたかつた。お姉さんはヤルと言つたらヤル人で、死に行こうとした磯風には弁当を持たせて平然と手を振つたことだろう。

「仕方ガナイ。指宿旅行ハ先延バシニシテ、ヤーナム島ノ遺跡ヲ見ニ行クトシヨウ。実在スルト聞イテカラ直接歩イテミタイト思ツテタシ、金銀財宝ガ見ツカルカモ分カラナイ。磯風ハ長月ノ機嫌ヲ取ツテ、我ガ帰ルマデニネコノツメヲドウニカシロ。出血大サービストカ言ツテ100円デ引キ取ラセテモ構ワナイカラ。カウンター前ガ危ナクテ商売ニナリヤシナイ。穴モ砂利カ何カデ適当ニ塞イデオケ」

「りよ、了解しました。しかし、大丈夫なんですか？」

「ナニガ」

「いえ、ですから危険な島なのでしよう。そんな場所に痛つ!?!」

お姉さんは磯風の頭を叩いていた手をパーからグーに変えた。

「ネコノツメヲ扱エル筋力ガ無ケレバ弱イトデモ? 剣ト魔法ノフアンタジーハ漫画ノ中デヤレ。磯風。我ノ名ライツテミロ」

などと漫画の有名な台詞を借りるお姉さんに、磯風は店内を逃げ回りながら答えた。

「ご、極楽型戦艦一番艦の極楽で、痛い痛いですつ!」

「結構。ヨク覚エテイルジャアナイカ」

【極楽：Lv. 155+2】

第44話 日向は富士急ハイランドに行きたい

『試飛会』とは日向が制作したラジコン飛行機のテスト飛行を行う会である。

戦艦から航空戦艦へと進化した日向は己の刃を研ぐべく航空機の研究に明け暮れ、定期的に切れ味を試すべくラジコンを製作しては戦艦察上空を飛行させたり墜落させたりした。

日々を深海棲艦との戦いに費やす艦娘にそのような暇があるのかと問うならば普通は無いと答え、日向は普通という枠を何食わぬ顔で切り捨てた。故に航空戦艦になってから随分と久しいものの練度に僅かの上昇も見られず、ラジコン飛行機の製作技術ばかりが無駄に上昇していった。勿論、この技術が深海棲艦に対する抑止力となった例は一度として無い（一度だけ、深海棲艦になりかけた艦娘を止めたことならあった）。本末転倒も甚だしかった。

「艦娘としてあんたそれでいいの!？」と叢雲に激怒されることは度々あり、日向も猫の額くらいは気にしている。ところで猫の額とは面積の狭さを例える言葉であり思慮の大小を表すのには使えないのではと日向は疑問に思い、つまり全く気にしていないと同義とも言えた。これぞ鋼のメンタルの成せる業である。

日向が製作するラジコンはいかなる機種であれ、全体をヘチマのような緑色に塗装され、両翼と胴体には赤いマル模様が入られる。機体下部には固定翼機や回転翼機、アダムスキー型未確認飛行機だろうと何だろうと例外無く水上に浮かぶためのフロートが無理やり取り付けられ、つまりは瑞雲化改修が行われた。

制作する飛行機の機種はいつも自由自在だった。F―22ラプター、F―35ライトニングⅡ、A―10サンダーボルトⅡ、Ka―50ホーカム、V―22オスプレイ、サボイアS・21、SH―60K、テポドン2号、コンコルド、気球船、果てはハインケル・レルヒエのような珍機体（特に航空戦艦が運用できそうなもの多）などがプロペラ駆動のラジコン飛行機となった。

半強制的に観覧に招待された最上が見守る中、日向のラジコンは戦

艦察前の空を優雅に飛行した。あるいは制御不能に陥った機体が爆発しない巡航ミサイルとして最上の頭や山城の部屋、斑鳩の意識、金剛の後頭部、北鎮守府の執務室を狙ったりもした。それら経験はすべて日向の糧となり、最上の精神的重石となった。



「ふざけるな有給を消化する権利があるのは働いている者だけだ貴様が通算でどれだけ働いていないか——艦これが四周年を迎えたばかりだから貴様の不労記録も四周年記念だおめでとう阿呆が何故この私が穀潰しをいつまでも艦隊に置いているか分かるかむしろ私が知りたい何故お前は遊び呆けていられるのだ全世界の労働者の敵め富士急ハイランドの前に行くべき場所があるだろう艦娘にはいやそもそもお前は艦娘なのか艦娘だったのかすら分からんがとにかく許可は断じて出さんぞ！」



日向の考えでは「今回は試飛会の場所を戦艦察前から変えるか」程度のものだったため、少々長めの遠征許可（普段は勝手に外出している）が拒否されるとは、まさかであった。

「いやいや流石に有給って……ほぼ四年も働かなかった艦娘が有給って」

【最上：Lv. 66 ↓ 79】

竹櫛提督のいる第一執務室の場所をまた忘れたからと日向に付き合わされて、至極当然な罵倒を聞かされて、最上は総合棟外のベンチでぐったりした。

「せめて最初に言っておいて下さいよ。有給を取りに行くって」

「ほう。最上が言えば取得できていたのか」

【日向：Lv. 10】

「無理です。あーいや、ボクの方だけなら取れますけど、ボクだけ行っ

ても」

「有給休暇とは難しいものだな。社会問題にもなるわけだ」

誰でもいいからここを通り掛かって、隣に座る日向を海軍精神注入棒で殴ってはくれないだろうか。最上は見上げた太陽に期待せず祈った。



日向ならば富士急ハイランドに行きたがること間違い無しと艦隊の誰もが予想して、だから何だということもなかった。

今更である。遊びに行きたければ勝手に行き、である。

であるのに有給休暇など余計な気を回してしまったものだから、鎮守府からの外出ごと禁止されてしまった。

「ボクは別に関係ないですよね?」と聞きづらくなってしまった最上まで巻き添えを食ったにもかかわらず、日向は次なる一手を考えていた。鋼のメンタルはここに健在している。

「仕方がない。少々割高になるだろうが売店に行くとしよう」

そう言って日向は腰を上げた。

「売店?」最上も立ち上がった。「売店でどうするんです?」

「富士急ハイランドまで行く手段を買いに行く。決まっているだろう」

「なんですかそのピンポイントな商品……」

「たぶん売っている。いや間違い無く」

「いや無いですって」

「いや、ある」

「絶対無いですってば」



「ソコノ航巡。我ノ売店ヲ舐メテルダロ」

【極楽：Lv. 155+2】

売店のお姉さんはなんでもお見通しだった。細く青白い指先にピシりと額を小突かれた最上はよろめいた。

「い、いやでも、この人、そもそも外出禁止ですよ?」

「ツマラン事ヲ気ニスル奴ダ。黙ッテレバ電車ニ揺ラレテ一眠リデキル料金プランダツタノニ」

「最上。真面目であるに越したことはないが、時には柔軟性も必要だぞ」

ならばお姉さんにいくら払えば日向を殴ってくれるだろうか。

「それで、我々はどのようにして富士急ハイランドまで行けばいいんだ?」

当然のように最上を頭数に入れた日向の注文に対して、しかしお姉さんは急にやる気を失った。「阿呆ラシイ」と口にも出した。

「梅雨入りリデ気ガ減入ルトイウノニ、活弁ナノハ阿呆バカリ……。オイ、アルバイト。休憩ハ終ワリダ。チョットコイツラヲ富士急ハイランドマデ連レテ行ケ」



艦娘とは電車やバスで陸を移動するのではなく、海に波風を立てるものである。お姉さんの案とは海路で富士山の近くまで行き、あとは売店のアルバイトに荷物持ちやヒッチハイクなど適当にやらせるものだった。

なるほど外出は禁止でも遠征ならばよい（よくない）。

しかし最上、日向、そしてアルバイトの磯風は三人で単横陣を取つつ、海に余計な波風を立てていた。間違いなく敵潜水艦に見つかっている状況で、最上は右手の日向、左手の磯風がとにかく恐ろしかった。

まず磯風はとつくに艦娘を辞めていて、現在ではすっかり売店のアルバイトとして馴染んでいる。即ち久々の抜錨だった。装備一式も勝手に予備品を拝借している。艦これアニメ第一話の主人公の如く進む姿は非常に危なっかしい。道案内はできても戦力にはなりそう

になかった。

磯風に多少の勘が残っているならば、約四年ぶりの日向には残る勘すら無いはずである。現にその海を滑る姿は腕を組んでの直立不動、芯がまったく振れないのが逆に気持ち悪い印象を最上に与えた。乗馬に手綱を必要としない類の人外らしかった。

「えー……二人とも、聞いて下さい」と最上は言った。

「観測できました。ボク達はもうすぐ敵潜水艦に攻撃されます。けっこう囲まれています。ヤバいです。……磯風は大丈夫そう？」

「だ、大丈夫……いや申し訳ない。正直に言つて足手まといだ」

「だよ。とにかくソナーに集中して。それで……」

最上が気を遣いたくない右手を見た、その瞬間だった。

「ふんっ」

日向が足踏みをした途端、一帯の海水が波紋状に広がりながら固まったように見え、波紋の到達した一点が大爆発を起こした。当たれば重装甲をも破壊する深海棲艦の魚雷である。

最上と磯風はポカンとして見ていただけだった。

「ほう、やはりアレは魚雷だったか。見るのは久しぶりだが——速度はあんなに遅かったかな」

ちなみに日向は艦載機を一切使っていない。何故ならそれらは富士急ハイランドで使用するからである。

「今の、何ですか？」と最上が聞いた。

「敵の魚雷だった」

「いやそうじゃなくて、足で、こう」

最上と磯風は日向の真似をして海面を踏みつけてみたものの、当然パシャパシャと鳴るだけである。敵潜水艦に自分を狙えと言っているようなものだった。

「む。二人とも戦場での油断は感心しないぞ」

そう言つて日向は、今度は何かを投げた。すると投げた方向でまたしても大爆発。

「いやだから何してんですか」

「ああすまない。自分で迎え撃ちたかったのか」

「そうじゃなくて！」

「少し待て。相手も本気になったようだ」

最上と磯風の間に割って入った日向は迫り来る魚雷をまったく寄せ付けなかった。

「水は意外にも硬い物質だと言うだろう。それに鎧通しの技を合わせるわけだ」

意味不明な解説の後に徹甲弾を投げつけ、異様な相手を観察するため顔を出した敵潜水艦を沈めていった。

「なんだ磯風、爆雷を持っているじゃあないか。ちよつと分けてみる」
二時間ほどの戦闘を、日向はたった一人で苦もなく「たまにはこんな運動も悪くないな」乗り切った。

全自動潜水艦迎撃兵器の下で最上は、阿呆らしくなって艦載機を戻した。自分で立てた波風を自分で乗り越える。哲学的サーフィンをしながら一行は磯風ナビに従って進んだ。

【日向：Lv. 10 ↓ 13】



「もう帰って叢雲に癒やされたい……」

艦娘を辞めたとはいえ、対潜装備を整えていたにもかかわらず何の役にも立てなかった磯風は上陸するなり座り込んでしまった。

最上も似たような気分なので体と心が休息を求めるものの、スマートフォンで調べた現在地を見ると、どうしても動かざるを得ない。海から富士山に近づいて、これから富士山のほぼ反対側の富士急ハイランドまでどうしろと言うのか。もちろん回れ右して海路で帰るなどできるはずもない。

「ねえ磯風。装備とかは磯風がどうにかするって売店のお姉さんが言ってたけど」

「……この辺にでも、置いておけばいいんじゃないか」

最上は日向の様子を伺った。何としてでも行く気で満ち満ちていた。

「もう行けませんからね」

「何を言う。折角ここまで来たというのに」

「こつそり鎮守府を抜け出した方がマシでした」

「あまり時間も無いな。走ってどれくらいの距離だ？」

「日本ナメすぎです！ けっこう広いんですからね！」

「ではヒツチハイクになるか。金があればな」

「この状態の磯風をどうするつもりですか」

「そうだな。こんな時の売店でもある。磯風、ちよつと売店に電話をしてくれ」

「こんな体たらくを知られたら……お姉さんに殺される……」

「磯風をこんな風にしちゃって心が痛むでしょう。ボクは痛いです」

「なあと安心してしろ、最上」

日向は親指を立てて言った。

『『瑞雲祭り』で元気になるさ』

「やかましいよ」

第45話 ヤーナム泊地にて

ヤーナム泊地の提督さんが言うには、どうしても、どうしても、どうしても僕らの艦隊に『挨拶』をしたいそうです。それも天照大艦隊の本隊の方ではなく、分隊であり面倒を見てもらっている僕らの小さな艦隊に。どーしても。

「んー……これは面倒の予感」

【斑鳩：Lv. 155+1 ↓ 165+1】

「ねえ傘姫提督。怒らないから正直に言っつて。なにか恨みを買ったりしたでしょ」

「失礼、だねえ」とオカツパ頭で細身の提督、一ノ傘姫乃は椅子をキイキイ鳴らしながら、健康雑誌の精査に勤しんでいます。仕事しろよ。「ヤーナム島のことなら、斑鳩のほうが詳しい、でしょ？」

「僕は少し攻略したただけだよ。その後で大和たちが苦勞して泊地にしたとは聞いたけど。あんな場所を引き受ける人が現れたなんて未だに信じられない」

「でも、いるんでしょ？ ヤーナム泊地に、提督さん」

「らしいね」

「艦娘も、活動してるんでしょ？」

「だろうね」

「怖い怖いって噂の、ヤーナム島を、拠点とする艦隊がある、と」

「その艦隊がね。何故か僕たちを名指して『挨拶』がしたいって言うんだよ。というわけで提督、対応よろしく」

「絶・対・嫌」



ヤーナム島というのは、簡単に言ってしまうえば深海棲艦すら近づかない恐ろしい島のことです。艦娘たちの間では噂話上の存在でしたが、僕が見つけたそこは島の周囲十数キロが海水と血液が混じり合っているような島でした。劇場版艦これのような赤い海ではなく、鉄の

臭いが強い血の海です。

島の攻略に艦娘の艦装はほとんど役に立ちませんでした。僕を餌にせんと襲い掛かる脅威を退けたのは洞観者としての能力でした。恐らく普通の艦娘ならば上陸すら叶わず、運良く上陸できたとしても数分後には獣の餌でしょう。これは僕の強さ自慢ではありません。この体で調べてきた事実です（大和からこっそり愚痴られました。大本営直属の調査部隊はあまりの恐怖に島に近づくこともままならなかったそうです）。

そんな曰く付きまくりのヤーナム島なのですが、最強の艦娘、撃沈王・大和が負けっぱなしでいられるはずありません。どうにかこうにかして島を無害化し、泊地としての機能を持たせることに成功したわけです。どうにかこうにか……何をしたんでしょうね？

かくして危険だったヤーナム島は、今や深海棲艦のみ寄り付かない貴重で重要な泊地となったわけでした。じゃあ積極的に寄港したいかと問われると、残念ながらネオサイタマ鎮守府とどっこいどっこいなのは仕方の無いことです。以前までの恐ろしげな噂も根強く残ってはいますが、そんなことより未だに海の赤色が少し残ってますしね。仕方がないですよ。まあアレです。重要なのは僕ら艦娘にとっての有利が増えたという宣伝的事実ですから。



「艦娘にとっての有利、でしょ？　じゃあ艦娘の斑鳩が相手、してあげてよ」

艦娘と艦隊を切り離して考える阿呆がここにいます。今日は昼食後のシエスタをさせないことにしました。

「いやいや。お昼寝、絶対にするからね」

「心は読んでもいいから口に出さないでってば」

「だって心当たり、本当に斑鳩しかない、よ？　ヤーナム島に行ったこと、あるのも斑鳩だけだし」

「でも『挨拶』に来るんだよ？　じゃあ提督が対応するのが普通で

しよ」

「やだ。なんか怖い」

小さくとも立派な艦隊をまとめる大人が「なんか怖い」から僕に仕事を押し付けてきます。せめてもっとマシな言い訳は出ないものでしょうか。

「じゃあ私は出張。南鎮守府で定期連絡、してくる」

「一昨日行ったばかりだよ。僕の横で置物になってるだけでもいいから、せめて顔くらい出して」

『挨拶』って、何するの？ 具体的に」

「そりゃあ……」

名刺交換みたいなもの、と言いかけて言葉に詰まりました。思い当たる理由がこれっぽっちもないのに、わざわざ挨拶がしたいとの申し出があれば誰だって訝しみます。ただのラブコール——な訳はないでしょう。面倒くさい系の裏があるに違いありません。

それに『挨拶』と言えば……嫌なことを思い出しました。僕は自分の事を深海棲艦だと言つて、お父さんに連れられて天照隊を襲撃した前科持ちです。お父さんは『挨拶』をして鎮守府に入り込み、一ノ傘副提督——傘姫提督の従姉妹の命を狙ったのでした。

「こういう面倒事って、ほとんど斑鳩絡み、だよなぁ」

「いや待って。それは認めるけど過去の話にしたい」

「というか、斑鳩だって私に、押し付けたい、でしょ？」

「そんなこと……確かにあるけど。でも仕事だから無視もお断りもできないし……」

「じゃあ、大和、呼ぶ？ 実際あの子がヤーナム島を無害化、したんだし」

「大和の仕事の邪魔はさすがに……ああもう分かった僕が対応するよ。でも提督も最初に顔だけは出して、呼んだら来てよね。一ノ傘副提督のところにお茶しに行ったりしないこと」

「んま。ちゃんとした仕事、だよ」

「丸一日のほとんどを雑談で潰す出張は許しません。イムヤ達に見張らせるから」

「あの見張り、トイレにも自由に行けなくなるの、どうにかしてよ」



ヤーナム泊地に返事をする、明後日、相手はまずは艦娘を寄越すとのことでした。最初は軽くお話でも、ということらしいです。本当に、どうしてここまで僕らの艦隊と外交をしたがるんでしょうね。とりあえず傘姫提督の出番は無さそうです。

相手方の目的——普通だったら「深海棲艦になりかけた僕のピンチ！」と安直に考えるのが妥当なのですが（いや、好き好んでピンチになりたくはないのですが）、今回は相手にも事情があります。なにせ相手はヤーナム島の住人なのですから。

「新しいメール、来たよ」と提督。

「なんだって?」

「えっとね——遠回しだけど、斑鳩に会いたい、だって」

「……そう」

大本营直属の調査部隊すら恐怖で追い返す島を根城としてしまう艦隊とは、どれほどの化物……いえいえ、強者集団なのでしょう。実際にヤーナム島を歩いたことのある僕が推測するに、どうしても、かなりのレベルで、危ない像しか浮かび上がってきません。

想像してみてください。使い込まれた血染めの制服。奇妙かつ合理的に変形する艦装。そして影となった表情から漏れる笑い声……。

僕だって決して弱くはないつもりですが、念のために球磨さんか長月ちゃんを呼んでおいた方が安全でしょうか。いざとなったら——いやいや早まるな僕。いざって何だ。挨拶だから。ただの挨拶ですからね。洞観者の『アイサツ』でもなく普通の、交流のための『挨拶』ならお茶を飲みながら近況を聞いたり言ったりしていればいいんです。相手も同じ艦娘。じゃあ僕だって艦娘らしいことをして、後の提督同士の話に繋がるようにしておけば十分でしょう。

「確かにこのメールだと僕を指名して……ちよつと待って。なんで夜のお店がもう予約されてるの? 普通こういうのって迎える側が準

「備するものでしょ？」

「気合、入ってるねえ」

「他人事みたいに言わないでよ。何この意味不明な接待。僕は何を要求されるの？」

「ヤーナム泊地なら、そうだねえ。斑鳩の珍しい血液、とか？」

「笑えないからね。ヤーナム島って本当にそんなところだからね」

「まあまあ。明後日になれば、分かることだよ、危なくなったら、やつつけちゃえばいいし」

「よくないし」

でも、本当に身の危険を感じたら……明日は久しぶりに青い炎を慣らしておくとしましよう。



そしてこの日を迎えました。

……
……
……



その翌朝、という感じがしません。朝日が昇らなければ昨日が永遠に続いていたでしょう。あの子たちと別れたのは——何次会でしたっけ？

執務室の机でぼんやり昨晚のことを思い返していると、猫吊さんが時間通りに仕事を始め、それから提督が仕事をぼちぼち始める時間になっっていました。

「うわあ……斑鳩、もしかして、朝まで呑んで、たの？」

「空が明るくなるまでだから、たぶんそう」

「接待に満足し疲れた人の顔、って感じ、だよ」

「あー……。うん」

「部屋がお酒臭い。お風呂行って」

「もうちよつとこうさせて」

「臭い」

「もうちよつと」

座り心地は微妙だと常々思っていた椅子も今は快適に感じます。まあ、ただ動きたくないだけなんですけどね。

グデツとした僕の姿を提督はスマホで撮影して見せてきました。

「どう？ この自分の姿」

「……命からがら逃げ延びた空母ヲ級」

「睦月ちゃん達に、こんな姿を見られ——」

「ごめん提督、猫吊さん。午前は休ませて」



「ひとつ、ハッキリしたね」と提督は、仮眠から戻った僕に言いました。

「なにが」

「斑鳩は、少女が好き」

「いやいやいやいや！ そんなんじゃなくて！」

「じゃなくて？ 駆逐艦の子たちに楽しく接待されて、カレンダーズ（睦月型）は大好きで。——大丈夫、だよ。私は差別したり、しないから」

「違うつてば！ 提督も見たでしょ！」

ヤーナム泊地からの使者は大正浪漫の風を吹かせ、現代の俗物を色鮮やかに染め上げるが如く舞い歩む駆逐艦、神風型五人衆でした。

「それは、認める」と提督は肯きました。「確かに、すごい可憐な感じだった」

「でしょう。艦娘だって言われなかったら歌劇団的なヤツだと思うよね？ でもね、実際そうだったんだよ」

「へえー」

「最初に予約されてたお店にステージがあつてさ。入った時はブルースやっつてて気取ってるなーと思ったら、次にステージに上がったのが

神風ちゃんも春風ちゃんだよ!? まあ、ちよつと場違いだけどカラオケが好きなのかなと思うじゃない。でもそんなレベルじゃあなかった。春風ちゃんの意外と軽快な歌も良かったけど、それに合わせた神風ちゃんのステップ! あの大正浪漫スタイルがステージ上でくるくる回るんだよ! 長い髪と袴が歌と一緒に飛び回って、ステージをカツカツ踏むブーツもまた上手く魅せるんだ! まだあんまり酔ってなかった僕が確信したんだから間違い無いね。あの神風型の子たちは『ヤーナム歌劇団』だったんだ!」

「へえー」

「三軒目が面白くてさあ。お腹痛くなるまで笑ったのっていつ以来だろう。五人で『ロミオ達とジュリエット達』って……ぷふっ……いやごめん、思い出したら笑っちゃって。あんなの卑怯だよ。歌劇団だから普通にやるのかと思ったら、まさかのコントなんだもん。お淑やかな旗風ちゃんの口からガチ暴言が吐かれるわ、僕までロミオにされてグーで殴られるわ——いやあ楽しかった」

「へえー」

「んで三軒目は確か——」

「分かった。斑鳩が楽しんだのは、分かったから」

「まあ、とにかく良い子たちだったよ。来週がちよつと楽しみかも」

「来週? 何か、あるの?」

「今度は僕がヤーナム泊地に『挨拶』に行かないと。そうでしょ?」

「……いいけど。本当に大丈夫、なの?」

「泊地になる前に僕一人で攻略した島じゃない。今はもつと安全だよ」

「そういう意味、じゃないんだけど、なあ」

「むしろ提督に悪いと思ってるよ。いやあ僕ばかり楽しんでいいのかなー全然いいよねーむっははは」

「猫吊さん。憲兵呼んで、コイツ黙らせよう」



一人で向かったヤーナム泊地周辺の海は、以前と比べて血の赤色がかなり薄れていました。大和が言っていた無害化の影響だと思われる。島に遺された背の高い廃墟群も青い海を眼下にすることで見た目の脅威度がグツと下がっています。艦娘たちの間でヤーナム島が廃墟探索スポットになる日もそう遠くないでしょう。

その遺跡の正面に新設された建物はどれも極めて簡素な造りをしています。というか仮設キャンプを少しマシにした程度で、お金が無かったのか工事業者の度胸が無かったのか、といった感じになっちゃっています。見た目雅な神風ちゃん達がここで暮らす風景が想像できません。まあ、想像しなくても目の前にある風景が素晴らしいのですが。

「流石は練度最上限の空母。時間通りだ」

【松風：Lv. 30】

「ようこそヤーナム泊地へ。——と言っても見ての通り、お客さんを十分持て成せる場所じゃあないんだ」

「先週、十分過ぎるお持て成しを受けたよ。はいこれお土産」

「悪いね。いや、僕らも久々の本土だったからさ。はしゃいじやって」

一人称が被りました。

「少し休憩するかい？ 安全過ぎるルートも案外疲れるものだろう」

「いや、早く帰って来いってうちの提督がうるさくて。こちらの提督さんは？」

「あそこの二階に居座っているよ」と松風が指したのは木造の平べったい二階建ての建物でした。古き良き小学校の校舎というか、まさに『あの時代』の建築物というか、そんな感じですよ。

「しかしキミは本当に不思議な存在だな。正直、空母ヲ級に似ていることよりも不思議だぜ？」

「どういうこと？」

「僕らの司令官に直々に指名されたことに決まっているだろう。あの奇人といった何が繋がっているのやら」

「やだ、その人ってどんな人？」

「元陸軍人、とだけ言っておこうか。すぐに分かるさ」

◆
◆
松風ちゃんは恐らく「会ってみれば分かる」くらいのニュアンスで言ったのでしようけど、僕はその提督の顔を見てすぐに理解しま……いや、理解できませんでした。

「よおく来たでありますなあー！」

【あきつ丸：L v. 38 ↓ 提督】

「どうでありますか、我が活動拠点と部下は！ あ、松風。今日は煎餅の気分であります」

なーんでコイツがこのタイミングで現れるんでしょうね。海って本当に不思議でいっぱいです。

この阿呆陸軍人についてご存知ない方々のために簡単に解説しておきましょう。僕がまだ自分を『葛城』と勘違いで名乗っていた時に現れたのが、あきつ丸でした。本物の葛城である僕の妹を知ったあきつ丸は鬼の首を取ったように僕を偽物扱いしに訪れて……悪者を退治したかったのか、あるいは勲章でも欲しかったのでしょうか。僕があきつ丸に糾弾された後の展開が超々々弩級のドツタンバツタン大騒ぎで凡人の出る幕ではなくってしまい、結局あきつ丸の出番は途中からサツパリありませんでした（事件の後、天照隊の調査によると失禁して気絶していたそうです）。

僕に『斑鳩』という名が与えられるきっかけを作った人物、という意味では忘れてはならないでしょうね。それは認めます。ですが強引なやり方のせいで長月ちゃんは全身をズタズタにされ、あと少し間違えていたら僕と睦月ちゃんは肉片すら残せず死んでいたに違いありません。結果オーライだなんて誰が言うもんですか。

「ふっふっふ。驚いた顔をしていますなあ。とりあえず座るであります」

パイプ椅子に長机です。やっぱりお金はあまり無いらしいです。

「驚いたというか何というか——何やってるの？」

「むっふっふ。ここヤードナム泊地で提督をやっている、であります」

意味不明すぎます。

「陸軍のフリーランスとして活躍していた自分に、この危険な島の管理を任された、というわけでありますな。現状の海軍には務まらない責任を、この！ あきつ丸が！ 預かったのであります！」

「……ああ。なるほど」

天照隊に独断で迷惑をかけたことで陸軍を追い出され、誰も欲しがらないヤーナム泊地の椅子（パイプ椅子）に座ることになった、ということでしよう。

「じゃあ僕が呼ばれた理由は？　　というか事情は分かっていたから帰っていい？」

「何一つ分かっていないようでありますな！」と無駄に憤るあきつ丸。「本題以前に感想をまだ聞いていないであります！　この島を統べる自分を尊敬したくなつたとか。この泊地には大きな期待を寄せているとか。思うがまま言葉にすることを許可するであります」

「帰る前に神風ちゃん達に挨拶したい」

「駆逐艦はさっきの松風も含めて近海の警戒中であります！」

「松風ちゃんはさっきまでここに……ねえ。もしかしてこの泊地にいる艦娘って」

「話が早くて助かりますなあ。伊達に葛城殿の姉をやっているわけではなさそうであります。——その通り。ここヤーナム泊地に在籍する艦娘は神風型の五人のみであります。まあ、いざとなれば最終決戦兵士の自分が出るのもやぶさかでないのであります」

あきつ丸は煎餅に手を伸ばし、最終兵器らしくバリツと豪快にかぶり付きました。ドヤ顔です。自分で言うのも何ですが、よくもまあ練度カンスト空母を目の前にして自信満々でいられるものです。

　　というか僕相手にドヤってる暇があるならば艦隊の規模を大きくした方がいいでしょう。ヤーナム島に深海棲艦が近づかないから今が成り立っているだけで、血の海のような異常が消えた後も敵に避けられ続けるとは思えません。神風ちゃん達には悪いですが——悪いのは目の前の阿呆ですが、僕一人に殲滅されてしまう程度の戦力では泊地と言えるような安心感はありません。

「しかし戦力が揃わない現状では難しい場面も多々あるであります」
曲りなりにも提督を名乗っていれば、流石に戦力不足も理解できる
ようです、が……。

「だからこうして他の艦隊から、なるべく高練度の艦娘を引っ張って
こようと思いついたのでありますな」

「……………は？」

「貴官とは顔見知りで、しかも荒れていた頃のヤーナム島を一通り歩
いた実績があると聞いているであります。最早、このヤーナム泊地で
働けと天啓を得ているようでもありますなあ。自分もそうだったであ
ります」

「いやいや。ちよつと聞き取れなかった。耳の調子が悪いみたい。――
何だつて？」

「特別に一人部屋を用意してあります。向かいの建屋がそうであ
ります」

「えー。あのですねー。僕は天照大艦隊の分隊の総旗艦をやらせて
貰ってましてー」

「総旗艦！ 良い肩書きでありますな。では貴官をヤーナム泊地の総
旗艦に任命するであります」

「そんな冗談はいいから」

「艦隊を強くするためには少々の強引さも肝心。艦娘は海を渡り時に
流されるもの。貴官には早速当たって貰いたい任務が多くあるであ
ります」

「…………神風ちゃん達に僕を誘い出させて、何かと思えば…………僕を怒ら
せナイデ。雑魚相手ダト加減ガ難シイカラ」

【斑鳩：Lv. 165+1 ↓ 165+2】

怒りは僕にとつてある意味で最も制御し易い状態です。無理をし
なくても心を水底で足掻かせることができ、冷めた息苦しさが青い炎
となり左目より燃え上がります。熱ではない、僕の心と性質を持った
炎です。

「で、でで、出たでありますな！ 深海棲艦のような炎！」と後退るあ
きつ丸。「し、しかし、その姿を見たのは二度目！ しかもよく考えて

みれば以前も今も、立っているのは陸上であります。つまりは元陸軍人である自分こそ圧倒的優位！」

あきつ丸は部屋の隅に事前に用意していたであろう軍刀を引っ掴み抜き放ちました。

「やはり力づくになつたでありますな。上等であります。このあきつ丸の強さにひれ伏し艦隊員の一人と——」

「僕ノ炎ノ性質。僕ノ能力。万物ハ僕ノ艦装トナル」

パイプ椅子に炎を引火させれば、パイプ椅子は僕の装備品。机も、煎餅も、壁も、へっぴり腰で軍刀を構える阿呆すらも。引火させたものは全て僕の装備品。

床に手を付いて炎を引火させ装備。僕の意のままとなつた床を——部屋全体をひっくり返す！

「イヤァッ！」

「アイエエエエエ!?!」

言うなれば畳返しを強力にした感じです。僕以外の物が派手にかき混ぜられた室内であきつ丸は、それはもう見事にやられてくれました。宙を舞う中で棚に鼻をぶつけ「アバツ!」、床が抜けて落下する中で椅子と机に鼻をぶつけ「アバツ!」、持っていた軍刀に鼻——だけは運良く回避して下の部屋に落っこちました「アバァッ!」。

「フウ……久々にすつきりした」

【斑鳩：Lv. 165+2 ↓ 165+1】

「これに懲りたら、明日からはちゃんと提督らしく振る舞いなよ」と下の階でのびているあきつ丸に助言をしてあげました。

さてと。勢いで部屋を壊してしまつて、神風型の五人には何と言いつても訳をしたものでしょうか。



悪かったのは絶対にあきつ丸でしたが、それでも怒られるのは絶対に僕でした。

「随分と長かった、ねえ。大和のお説教」

僕が怒られるのを楽しんでいたのか、提督はニコニコして執務室で待っていました。

「キレるのを我慢してた感じだったよ。あー怖かった。大和が色々手を回して泊地——っぽい形に整えた島だからね。あきつ丸を懲らしめたことよりも建物を壊したことの方が痛いんだってさ。だから提督、その、悪いんだけど」

「私たちは、しばらくヤーナム泊地のお手伝い、でしょ？ 全然問題ない、からね」

提督が珍しく気の利いたことを言ってくれました。

「本隊に、斑鳩の代理で叢雲ちゃんとか、助っ人、お願いしてるから。斑鳩はしばらく、ヤーナム泊地で頑張って」

やっぱり薄情でした。

「ずっと向こうで仕事しろって？ 嫌だよ。環境云々じゃなくて阿呆の下で働くのが嫌だ。提督だつてこの前まで挨拶すら嫌がってたじゃない。僕の気持ち分かるでしょ」

「向こうで、神風ちゃん達が待つてると、思うな」

「……………せめて潜水艦たちを連れて行きたい。いいでしょ」

「やっぱり斑鳩は、少女が好き」

「し・ご・とー！」

「ヤーナム歌劇団、だっけ。動画送って、ね」

「し・ご・とー！」

「そうだ。カレンダーズにも、お手伝い、お願いしようか？」

「ぼ・く・の・し・ご・とー！ もういいって。壊した分は働いてくるから」

もう二度と見たくなかった阿呆の顔ではありましたが、とはいえ僕の強さを十二分に味わってもらったわけです。次に会う時は、阿呆とはいえ、少しくらい自重していることでしょう。

……そう思っていたのもヤーナム島に到着する前まででした。島の浜辺であきつ丸は、一人ノルマンディー戦（ドイツ側）で僕らを出迎えてくれました。高く積まれた土囊の上に機関銃を乗せて待ち構

える阿呆は僕らに向かってこう叫びました。「かかって来い！ であります！」

「……うん。そんな気もしてた。じゃあイムヤ達、アレは弱いから手加減してあげて」

うちの潜水艦たちはとても頼もしいことにトルピードランチャーを装備しています。ノルマンディーの防衛施設といえども空を高速で素っ飛ぶ魚雷（あくまで魚雷です）にかかればたったの一発で爆発四散してしまいました。

もちろん僕らは無傷で悠々と上陸を果たしました。そして生かしておいたあきつ丸も勿論、これにすら懲りることはありませんでした。

……ヤーナム泊地滞留の初日から何やってるんでしょうね、僕は。

第46話 そんなの『艦これ』の設定に無い

誰にだって忘れてしまいたい失敗はあると思う。例えばカロリーメイト（ようかん味・惚れ薬）を迂闊にも口にしてしまうとか。

【叢雲：Lv. 111 ↓ 130】

悪意があったかどうか分からない誰かが仕掛けたカロリーメイトは私と磯風の胃袋におさまり、それから二人は墮落の限りを尽くし、艦隊からの脱走まで試みた。——なんだか他人事のように思えてさえる。この私が艦隊から脱走？ 私がいなくなった艦隊で司令官になんが出来るというのだろう。司令官がいなくなった私になんが出来るといえるだろう。

明かりを落とした部屋で、同じ布団に入った磯風は言った。「たまにこうだ。叢雲は私ではなく司令を見ている」

もちろん布団くらい二組ちゃんとする。けれども二人で一つを使った方があったかいというか距離の問題とか——察して欲しい。私たちはこれでもかなり自重するようになったわけだし（隣室の綾波に壁ドンされた時のいたたまれなさは半端じゃあなかった）。

明日は雨が降るらしく、今夜は外がいちだと暗かった。私たちはこういった理由を見つけては抱き合……仲良く一緒に寝ることにしている。

「司令が気になるか？」と磯風はささやいた。「こうしている今も」

「……ごめん」二人の部屋で、取り繕う意味は失われていた。

「責めるつもりはないんだ。司令のことは見ているのも、私と触れ合うのも、叢雲はそういうものだ」と理解しているつもりさ」

あのカロリーメイトのせいで磯風は艦娘を辞めて、売店でアルバイトとして働くようになった。一方で私だけが艦娘を続けるどころか未だに総旗艦だなんて大仰に名乗っていて、本当によかったのかと未だに思う事もある。幸い、売店の仕事はけっこう充実してるらしいけど。

「ただだな。この部屋の中、この時だけは私の方を向かせてやりたくない」

磯風の手はもう私の寝間着の中に入り込んでいた。抵抗したり逃げたりするだけ磯風をその気にさせてしまい、私はそんな気にされてしまい、綾波に壁ドンされるのも仕方ないかなーと、もう諦めていた……都合の良い言葉よね、諦めるって。

磯風の顔が、息のかかる近さにあつた。いつも不意に指の動きを変えて私の反応を楽しもうとしてくる。だから私にできる抵抗は、もつと顔を近づけることだった。部屋は暗い。でも待ち望んでる磯風の表情ははつきりと捉えられる。少しでも主導権が欲しくて私は、はしたなくも舌を出しながら――。

「ゲフンゲフン。お邪魔してるクマ」

【球磨：Lv. 95 ↓ 99】

いつの間にか枕の側に立っていた球磨は私たちを見下ろしていた。……あるいは見下していた。



「ノックぐらいしなさいよ!」

「こっそり叢雲だけ起こすつもりだったクマ」

「あと……せめて何か反応はないわけ!? スルーされると余計に恥ずかしいのよ!」

「阿呆な妹たちを持つと嫌でも耐性がつくクマ」

大井北上と同レベル扱いされた私はとりあえず手に取ったものを着込んで球磨の後を追い、駆逐艦寮を出た。部屋に置いてきた磯風は、先に寝ててと言つても寝られないでしょうよ。

外は冬らしく冷え込んでいた。球磨は何枚重ねたのか着ぶくれている。それにやたら大きなバッグを持っていた。私が追い付くと、球磨は何も言わず工廠の方へと歩きだした。

「ねえ。何の用事かくらい言ってくれてもいいじゃない」

「すぐに着くクマ。それに誰にも聞かれちゃあいけないクマ」

夜更かし好きだったり用事があつても、こんな時間にこの寒さじゃあ建物の外には誰も出ていない。それでも球磨が警戒するなら、私も

黙って歩くしかなかった。球磨の声はシリアスだった。

工場——というよりそこから海に向かって約2 kmも伸びる射撃試験・演習場の影に隠れたような場所、破棄されたものがゴロゴロあるだけの岸壁で球磨は足を止めた。工場の向かい側の30 mくらい先からはコンクリート製の高い壁が海と鎮守府を隔てている。工場と壁の間の隙間、私たちが立っている場所はぼっかりと海へと開いていた。警備上は問題ないと思いついていたのにこんなにも大きな穴があったなんて、長い鎮守府生活の記憶の中でも空白の場所ということとらしかつた。まあ、こんな場所には誰だって用事はないでしょうよ——球磨みたいなヤツを除けば。

「この艦隊には『敵』が潜んでるクマ」空白の場所に着いて球磨はようやく口を開いた。「カロリーメイト事件でケンカ売ってきた奴クマ」「まさか犯人を見つけたの？」

球磨は首を横に振った。



天照大艦隊の中に『敵』が潜んでいる——私たちがそう考えてるだけで、敵の姿どころか痕跡も、もつと言えば実害すらはつきりしていない。私個人はただのイタズラだったという可能性も捨ててはいないくらいだった。

金剛、球磨、電、雷、吹雪、そして私の六人で内密に対処することにはしたけれど、実際に動いているのは球磨だけだった。というか私ら他の五人は何から手を付けていいかも分からなかった。精々思いついたのが聞き込み調査……金剛は「内密云々が早速終わりそうデース」と言った。

逆に球磨はただ歩き回るだけで見るべきものが見える探偵のようだった。それも安楽椅子探偵とは真逆、見渡すべき場所に到達し、探るべき場所に忍び込み、それらを気付かれることなくやってのける。意外に優秀な球磨ちゃんなんてレベルを越えている。第六感なのか野生の勘なのかは分からないけど、こんな仲間がいれば私のような凡

人はむしろ下手に動き回るだけ邪魔になっってしまう。

さらに加えて球磨は、単純に強い。たぶん艦隊で一二を争うくらい強い（たぶんも何も霧島との二強だろうけど）。アクティブな探偵は得てして危機に陥るもので、球磨なら立ち塞がる悪者共をキック&ナイフで全滅させるタイプだと思う。私も球磨に稽古をつけてもらってるけど未だにまったく追いつける気がしない。さらにさらに、目の前の障害物を倒すのではなく避ける術にも同じくらい長けていて部隊の被害を何度減らしたか数え切れない。

球磨が仲間であってくれたことは奇跡だと思つづくと思う。艦隊の最初期から今に至るまでずっと、私たちは球磨に頼ってきた。そしてこれからも頼っていく。……おんぶにだっこを良しとしてるんじゃないやなくて、例えばナイフを振り下ろして返り血を浴びることに躊躇しないなんて他に誰が真似できるのか。いやできない。少なくとも私には。



「手詰まりクマ」と球磨は言った。「それっぽい手がかりが何一つ見つからんクマ。だから叢雲には取り敢えず、別件のやべーヤツを知らせておくクマ。状況を変えれば何か出て来るかも分からんクマ」

「……やべーヤツ、と言うと?」

「その目で見えるまで絶対に信じないと思うクマ。だからまずは分かった事実をそのまま言うクマ」

で。その意外に優秀な球磨ちゃん曰く、

・雨上がりの夜、草木も眠る丑三つ時、この工廠裏の岸壁からゾンビが這い上がってくる

・雨が降らなければ何も現れない。逆に雨が降り止んだ後は必ず現れる

・この事を知っている長月、木曾、時雨が今までゾンビ退治をやってきていた

・実際に退治をしているのは長月で、木曾と時雨は誰も近づけない

よう見張っている

・ 巨大な剣で戦う長月の強さは艦娘のレベルを超えている。だから鎮守府は今まで平和だった

「信じるクマ?」

「——球磨の言う事は信じるつもりよ。でも『ゾンビ』って何? 何かの隠語?」

「ウイキペディアに書かれてる『ゾンビ』そのまんまクマ」

「あの……ウボアーって感じの?」

「そんな感じクマ」

「じゃあ、長月が強いつて? そもそもカレンダーズの長月のことで合ってる?」

「合ってるクマ。あの低燃費駆逐艦が強いどころの話じゃあないクマ。駆逐艦寮の玄関に飾ってある大剣を振り回してたクマ」

「大剣ってネコノツメのことよね。それなら見間違いよ。確かに飾ったのは長月だけど、あれ三人がかりでも持ち上げられないくらい重いだよ」

「触って確かめたから知ってるクマ」と球磨は言いつつ左腕の下に隠している飛び出しナイフを外し、指先でクルクル回した。「クマがこんな風にナイフを扱うのと同じように、長月はあの大剣を持ち出してブンブン振り回してたクマ。しかも片手で」

長月が、あくまで駆逐艦の中では、力持ちなのは寮の中ではよく知られていた。部屋替えの時なんかは家具を一人で軽々と持ち上げられるからって手伝われる姿をよく見かけるし（五百円かお菓子で引越しを手伝ってくれる）。でも本棚やミニ冷蔵庫なんかとネコノツメはとても重さを比べられるようなものじゃあない。——そして私の知る長月と球磨の言う長月も、別人としか思えなかった。

「叢雲が理解できなくて当然クマ。だから今、明日深夜のために呼び出したってわけクマ」

「明日?」

「明日は朝から雨が降って昼には晴れるらしいクマ。だからその雨上がりの夜、その目で確かめてほしいクマ」

◆
◆
こういう偵察こそ球磨の得意分野で、一日中茂みの中で隠れていると言われてしまえば従うしかなかった。

「さ、寒……」

「我慢するクマ」

球磨の大きなバッグの中身はお泊りセット（偵察）だった。全体を葉っぱで覆った大きなポンチョを被り、顔まで徹底して草木色にした私たち二人は工廠裏から離れた場所で、音を立てずにその時間を待ち続けた。夜が明けても雨が降り出しても。

「風邪ひきそ……」

「クシャミだけは我慢するクマ。あの長月ならたぶん気付かれるクマ」

「ねえ、仕事は？ 丸一日すっぱかすことになるんだけど」

「吹雪に適当にやつとくよう頼んどいたクマ」

「なんで仕事だけ適当になるのよ」



鼻水を静かにすすった午前二時の十五分前、球磨の言った通り本当に長月と木曾、時雨が工廠裏にやってきた。特に緊張した様子もなさそうで、木曾と時雨は工廠裏の海に背を向けた。一方で長月は大剣ネコノツメを本当に軽々と担いで海の方へと一人で向かった。

「マジっぽいわね」と私は小声で球磨に言った。

「マジなのはこれからクマ」

午前二時、草木も眠る丑三つ時。海から這い上がってきたのは、深海棲艦が萌えキャラに思えるほどの化物だった。

その化物を長月は、まず一体——続けて二体目、三体目、四体目、五体目にネコノツメを滑らせ、暗い海へと還した。

約三十分間の出来事だった。



「どうした叢雲。マスクなんかして風邪か」

【長月：Lv. 42+1 ↓ 58+1】

食堂では幸運にも長月が一人で朝食を食べていて声をかけやすかった。数時間前には大剣を振り回して戦っていた——長月の表情からはそんなこと、全然読み取れなかった。

私はというと情けないことに熱が38度も出た。体の節々が痛い、けど今はそんなことを気にしてる場合じゃあない。

私は長月の前に座った。「えーと……長月はさ、今日の予定は何かある？」

「別に。明日からの遠征の準備くらい」

「そう。なら悪いんだけど、一三〇〇に一〇三会議室に来てくれないかしら」

「何かあるのか。私だけ？」

「ううん。他に二人いるわ」

「……………用向きは？」

「実はね」球磨とも相談したけど、やっぱり直接聞いてみるしかない。周りの誰も聞いてないことを慎重に確認した。「昨晚のこと、見たたのよ。長月がゾンビをやっつけてるところ。だから少し話がしたいの。咎めたりなんて全然しないのよ。ただアレが何なのか、総旗艦として——は勿論だけど、何より仲間として知っておくべきだと私は思うの」

長月はものすごく困った顔をした。「……………何処から見えた？ 木曾と時雨が見張ってたのに」

「離れたところに球磨と隠れてたのよ」

「ああ球磨か……やられたな。隠し通すつもりだったんだが」

「覗き見したのは本当に悪いと思ってるわ。でもほら、途中で話しかけに行くわけにもいかなかったし」

「分かった。話はする。でも時間と場所は私が指定する。それと木曾

と時雨は無関係だから見逃してくれ」

「無関係って、でも三人で一緒に——」

「そういう意味じゃない」と長月は力強く言った。「あの二人は普通の艦娘で、ただの協力者で、私が異常なだけなんだ」



長月に話し合いの調整を任せたら一週間後になってしまった。

指定された場所、『THE HANGED CAT（ハングド・キャット）』は艦娘が出迎えてくれる喫茶店ということで結構な有名店だった。磯風が売店のアルバイトを始める前に研修を受けていたり、斑鳩が謹慎と称して寝泊まりしていたお店だったり、鎮守府からの距離は近くはないけど少しだけ私たち天照隊にも関わりがあった。暇ができたら行ってみようと思っただけなのに、こんな形で実現するとは。

「風邪はもう治ったのか」と長月が聞いてきた。

私と長月の二人は私服姿でバスに揺られていた。球磨は「お喋りは任せたクマ」と言っただけで後処理を私に投げ、金剛や電たちは出撃している。

「二日で治したわ。——ねえ。今更なんだけど、話をする場所ってハングド・キャットじゃないと駄目なの？」

「駄目だ」と長月はキツパリ言った。

「ふ、ふうん。ハングド・キャットに何かあるの？」

「そうだ。私たち洞観者はハングド・キャットからの指示で動いている」

急に長月がB級映画っぽいことを言い出した。

「……………長月って、まさか本当にサイボーグとかそういうアレ的な何？」

「違う違う。とにかく私じゃ説明しきれないし、余計なことを言うなって厳命されてるんだ。だからハングド・キャットできちんと話を聞いてもらわないと」

「ま、分かったわ。到着までは聞かないで置いてあげる」

「バレたのが叢雲と球磨でよかった。他の奴らだったら艦隊全体に広まってたかもしれないしな」

「私と球磨に見つかつたんだから、いつか他の誰かも見つけるわよ」



コーヒーとカレーの香りが混ざり合う珍妙な喫茶店、ハングド・キャットはこれまたB級映画っぽい（私の偏見）洒落たお店だった。店のあちこちに賢そうな猫が鎮座してるし、艦娘の店員とそれ目当ての客——なるほど、朝っぱらから客が入ってるわけだ。

「猫カフェだぞ叢雲。すごいだろ」

「いや、うーん……普通の喫茶店に猫を放してるってだけな感じ。どう見ても一般的な猫カフェじゃあないわ」

長月が予約していたらしく私たちは一番奥の四人掛けの席に通された。現役艦娘に接客されるのは、なんだか磯風からパンを買う時のことを思い出させた。

「まだカレーって時間じゃあないしな。叢雲もシフォンケーキとコーヒーでいいか？　ここは私が奢るから」

「ああ、うん。ありがと」

長月はメニューも見ずに注文した。それに店員の艦娘とはどうやら顔見知りらしい。この喫茶店には相当馴染んでる様子だった。

しばらくして私でも顔を知ってる店員さんがケーキとコーヒーを三人分運んできた。店員さんは配膳すると、そのまま長月の隣に座った。……そういうことか。

「私は大和型戦艦二番艦、武蔵だ」

【武蔵：Lv. 151+1 ↓ 158+1】

「艦娘ではあるが、この『ハングド・キャット』の責任者でもある。つまり洞観者たちをまとめているのは私だ」

「……………どうも。天照大艦隊の、叢雲です」

エプロン姿なのに気圧される。ものすごい気圧される。大和型の

一番艦、撃沈王にはもう慣れたけど二番艦には別種の凄みがある。怖いとかじゃなくて、これぞ超弩級戦艦といった感じの。ラムアタックされたら衝突前の気迫だけで木っ端微塵になりそう。

そんな武蔵は表情は柔らかく、コーヒーにミルクを注ぎながら言った。

「叢雲。君の事は長月から連絡を受けるより前から知っていた。天照大艦隊とは色々あつてな。その総旗艦を知っておかない理由はないだろう?」

「は、はあ……」

「いきなり長月との間に入ってすまない。まずはコーヒーを味わって欲しい。今日のはなかなか悪くない」

頭が追いつかず、言われるままにカップに口を付けてみた。

……

……

……

びいみよおおおお……。

「あー……叢雲」と長月。「ケーキは——ケーキもいいぞ。食べてみてくれ」

長月が助け舟を出した通り、シフォンケーキは良い口直しになった。なにこの喫茶店。朝からこの店に通う客は好きでこのコーヒー……いや泥水を飲んでるわけ?」

頑張れ私。顔に出すな。武蔵の威厳は泥に沈んでしまったとしても、まだ自己紹介が終わっただけだ。話を終えるまで上手いことアレして頑張るのよ私。



「さて。君は長月の魔人的な強さを見たのだったな」

腕を組んで話す武蔵に「魔人とか言うな」と長月がつっこんだ。

「超人でも何でもいい。あれは洞観者が燃やす青い炎、その中でも長月が持つ固有の性質だ」

「あの。その『洞観者』って何なんですか？」

「隠すわけではないが全てを話すと長くなるからな。艦娘の異端、突然変異、猫に導かれた者……そんな連中だと認識してくれ」

「じゃあ、武蔵さんも」

「武蔵、で構わない」

「——武蔵も、洞観者、なのよね？」

「そうだ。ちなみに私の炎の性質は簡単に言えば、艦娘としての能力を極限まで研ぎ澄まさせる。誤解しないで欲しいのだが、私を含む洞観者の誰もが長月のような強さを持つているわけではないからな。一人一人、能力はまったく異なる。例えば天照大艦隊だと最近、山城という戦艦が洞観者になったのだが」

「山城も!?! 長月と同じ!?!」

「だから秘密なんだって。基本的に」と長月が言った。

「その山城の能力が微妙でな……」

武蔵は右手の指をパチンと鳴らした。すると、まあなんということでしょう。さつきから青い炎がどうか言つてたけど、本当に人差し指の先からライターくらいらしいの青い炎——と言うには小さな火が現れた。手品には見えない。

「触つてみてくれ」武蔵は青い火をズイと私に近づけてきた。「大丈夫だ熱は無い。少し冷たいくらいだから」

恐る恐る人差し指を（E・T・みたいに）近づけて火に触れた——すると、冷たつ、と思つた瞬間に私の指に燃え移つた！

「うわあつ！」

「あ、すまん！ 引火を忘れていた！」

私は咄嗟に泥水もといコーヒーに指を突っ込んで「あつつい！」飛び上がった。



人目を引き過ぎた私たちは店の裏口から外に出て話を続けることにした。

「驚かせるつもりはなかった」最強の戦艦、大和型にペコペコ謝られるってのも貴重な体験かもね。「私の炎に害は無い。むしろさつき言ったように能力を向上させる効果があるだけだから……コーヒーが少し冷めていてよかった」

指を念のため氷袋で冷やしてはいるけどこれ、逆に外の寒さと合わさって良くないんじゃないかなろうか。

「とにかく。長月と山城が洞観者っていうものなのね。それは分かったわ。まさか他にはいないわよね」

「斑鳩がそうだ」と長月。「あと潜水艦の五人」

「……ああ、そう」

すごく納得した。むしろ普通の艦娘である方がおかしい連中だし。

「なら木曾と時雨は洞観者じゃあない、って意味で無関係だつて言うのね。長月、山城、斑鳩、それに潜水艦たち計八人でゾンビ退治をやっている、木曾と時雨は普通の艦娘でただ協力してるだけだったって」「いや、それは違う」武蔵はキツパリと言った。「ゾンビ云々については天照大艦隊にのみ出現する問題だ。他のどの鎮守府や泊地にも例が無い」

「でも長月がずっと戦ってくれてたから私たちの艦隊はゾンビに襲われずに済んでるんですよ」

「洞観者とゾンビの間に関連性があるかどうかも分からない。長月たちは色々条件を探ったそうだが、天候の他に条件は見つかっていない。天照大艦隊は不運にも何故かゾンビの襲撃を受け続け、幸運にもそれを退けられる長月がいた。残念だが今はそう考えて撃退に集中するしかないだろう」

「まあ正直、叢雲と球磨に見つかって少し気が楽になったよ」と長月は言った。「さすがに三人だけでコソコソ対処してるのも眠かっ……危なかったからな。これからは二人にも協力して貰いたい」

「勿論よ。帰ったら話し合いますよ」

「叢雲。帰る前に約束をして貰いたい」

武蔵は真剣な表情で言った。——あれ？ 私、もう帰らされちゃうんだ。まだまだ聞きたい事が山ほどあるのに。

「洞観者は猫に好まれる代わりに妖精との距離が空く。通常の装備ならば機械的に働いて貰えるのだが、妖精の頑張りに大きく左右される装備はまったく使えない」

「——ダメコンは？」

「流石は総旗艦を名乗るだけはある。明察の通り洞観者にダメコンを持たせても意味が無い」

天照隊は基本的に、ブラックな一ノ傘副司令であっても、ダメコンは使わない。どうしてもという子だけがお守りとして持つことがあるくらいだった。それでも、だとしても……最後に生き残る手段が使えない奴が、今までずっとそれを隠して戦っていたなんて。

「そう深く考えるな」と武蔵はわざとらしく軽く言った。「だからこそ私がハングド・キャットを立ち上げて洞観者たちを管理している。再び山城を例に出すと、洞観者になった直後から長月と斑鳩にフオローさせている」

「山城も……長月も、武蔵も、どうして洞観者になったの？ 望んでそうなったの？」

「恥ずかしながら分かっているなくてな。それは猫にしか分からない——つまり約束して欲しいことの一つは、難儀な洞観者に少しでも気を配ってくれ。無駄にダメコンを持たされると逆に緊張してしまうものだからな」

「分かっ……たことしておくわ」

「それともう一つ。これは絶対に守ってくれ」

それは武蔵に言われるまでもなく察してたことだった。

「洞観者の存在は、秘密だ」



「情報が断片的すぎるクマ」

ハングド・キャットから帰った私はその夜、また工廠裏で球磨と話をした。

「なんでもっと詳しく聞いてこなかったクマ？ 洞観者とかいう人の

ネットワークがあつたならせめて成り立ちくらい聞いてくのが普通クマ」

「だって武蔵も忙しい仕事を抜けてきてたんだもの」と言い訳する私。

「長月には後で色々詳しく教えてくれるよう約束したわよ」

「まあいいクマ。とりあえず姉ちゃんに隠し事をしてた愚妹を責めるのは勘弁してやるクマ。代わりに斑鳩が何を隠してるのか、問い詰めるのが楽しみクマ。もしかしたらカロリーメイトの件にも進展があるかもしれないクマ」

「木曾と時雨は本当に関係薄そうだし、私たちも知ってしまったからには手伝うわよ。ゾンビの件」

「……クマに戦闘の手伝いを期待してるクマ？ それは無理クマ」

私が想像だにできなかった返事だった。

「じゃあ叢雲に質問クマ。ゾンビに噛みつかれたら何が起こるクマ？」

「そりゃあ——」

「ゾンビが増える、と普通は想像するクマ。じゃあもう一つの質問クマ。洞観者とかいう異常存在だったからこそ平気で戦ってた長月の隣に、ちよつと戦える程度の普通なクマが突っ立ってたらどうなるクマ？」

今、私たちが立っているこの場所にゾンビは海から這い上がってきて、長月は凄まじいといしか言い様のない戦いをしていた。30m程の岸壁の端から端までがワニワニパニックのような戦場で、私より少しだけ背の低い少女は一切の鎮守府への侵入を許さなかった。幅が30mもあるワニワニパニックをたったの一人で攻略するには？

—長月の答えは単純明快だった。瞬間移動に近い速さで動けばいい。「つまり凡人は邪魔にしかならんクマ。しかも長月だから噛みつかれてウイルス的なものに感染するミスが皆無だっただけで、強くないクマが戦えばマジモンのバイオハザード発生源になりかねんクマ」

「じゃあ……球磨ってエアガン好きだし鉄砲も扱えるわよね」

「深夜の鎮守府でパンパン鳴らしてもいいクマ？」

そうでした。

「総旗艦として心配するのは分かるクマ。だからまずは長月たちに詳しい話を聞いて、それから手伝えることを考えればいいクマ」

「まあ、そうね。天気予報だとしばらく雨は降らないからゾンビも出ないし、長月だって次はやられちゃうかもってレベルの強さじゃあないし」

「ところで叢雲。銃にはサプレッサーという便利なアタッチメントがあるクマ。アサルトライフルとサプレッサーを支給してくれたらクマでも——」

「それ絶対、アンタが趣味で欲しいだけでしょ」

「ゾンビには剣より銃クマ。王道クマ」

「却下します」

「じゃあ売店で取り寄せを試してみてもいいクマ？」

「本気で欲しいのね……勝手にしなさいな」



いつもそうやってきたと三人は言った。だから今回も次もそうだ。長月も、木曾も時雨も、無事に艦隊を守ってくれる——はずだった。

……なーんてお決まりの事故もなく、次の雨の日は長月がまたしても魔人的活躍を見せていた。近くで見ると余計に動きを目で追えなくなる。

一方、本当にライフルとサプレッサーを調達してきた球磨ちゃんはというと、ゾンビではなく銃の故障と戦っていた。

「何処の誰が作ったM4クマ!? ——うわあガスピストン化に失敗してやがるクマ。意味が分からんクマ。技術がないなら最初からHK416とか買えよアホクマ——」

「おい球磨。私の代わりに戦ってくれる話はどうなった」と長月は剣を振るいながらも余裕たっぷりだった。

「銃が届いたのが今日だったからテストできなくて……お、落ち着くクマ。ボルトアクションとしてなら使えなくも——チャーハンが折れたクマ—— どーやったら折れる部品クマ!？」

「邪魔だから下がってろよ、もう！」

ついこの前まで天照大艦隊で最強の戦闘能力を持っていたと思つてた球磨が「邪魔だから下がってろ」って……。とぼとぼ引つ込んできた球磨は売店で掴まされた不良品を「クソが！」と地面に叩きつけた。

「ちよ、ちよつと静かにしなさいよ。気持ちは分かるけど」いや本当は分かんないけど。

「弾薬代も考えてお金がないから安いので、でも西側の銃がいいって売店のお姉さんに注文したクマ……。これじゃあ実パ取りにもならんクマ……」

「つ、次は私もお金出すから、ね。工場もこつそり使っているから、次はもつと小さくて安くて確実に動くものにしときましようよ」

「そうするクマ……。拳銃が二丁あれば『リアルナイフアー・クマさんのガン』カタを披露できるクマ。でも欲しかったクマあ……。アサルトライフル」

「やっぱりあんたの趣味じゃないの」

まあ今回のところは様子見と、少し邪魔が入った程度では長月には全然問題ないことが分かったただけでも良しとしましょう。

ゾンビに洞観者。艦隊の問題が二つほど新たに発覚したことで頭を痛めるべきか、発見できてよかったと思えるか、また私の中で整理はついてない。対処を誤らないよう慎重に考えて動かないと。

——ところで。私たちって『艦隊これくしょん』をやってたんじゃないか知らん。

第47話 ラックレッツサー山城 6

「やったね山城！」

【古鷹：Lv. 101 ↓ 112】

「今の撃破で練度が上限だよ！ じゃあ早く——ケツコン、しないとね♪」

うおーやべーこの子。

【山城：Lv. 94+1 ↓ 99+1】

まだ私が敵部隊に初弾を命中させたばかりなのに、反撃を掻い潜って指輪と書類とペンを差し出してきたよ。今ここでギチギチの絆を結べと？ 古鷹と？ 人様の身体を好き勝手にするだけじゃ飽き足らず心までも捧げろと？

「待って待って今はとりあえず戦闘しましょ。相手はまだ戦艦が三隻もいぎゃん!？」

鈍足で大きな的である私は集中砲火を浴びて、戦艦にあるまじき吹っ飛び方をした……んだと思う。うおーやべー私。いつの間にか顔と海面がくつついてるわ。それ以外の感覚が全然無い。これ沈むっていうか、首から下はもうネグトロになって水没してんじやあなのいの？ 音も聞こえないし見えてるものも意味が分からないし——あれ、今って何だったかしら？ まあどうでもいいわよね、眠くなってきたし。

私は奇妙な眠り方をした。だって目を瞑る前から夢を通して様々な過去を振り返るなんて。

こんなに楽しい夢を見、たのな、んて——。



臨死を体験できたのって、けっこう貴重なことじゃあないかしら。サンズ・リバーから戻った私はあの後どうなったのか、一緒に出撃していた陽炎に話を聞いた。大天使から大戦犯へと堕ちた古鷹は鎮守府に戻るやいなや叢雲に顔面を思いつき殴られて鼻骨を骨折、

殴った叢雲も手の骨が折れてしまったらしい。もうアレね、聞いただけでも痛々しいわいろんな意味で。こういう時こそ提督がビンタ一発でその場を収めるべきだったのよ。ああ情けない、頼りない男ですこと。

叢雲がガチギレした理由は分かる。私が『洞観者』とかいうダメコンが使えない意味不明な艦娘になってしまったって、知ってしまったからに違いない。天照隊がダメコンに頼らない方針でやっていたとしても、保険のきかない私たち洞観者を危なっかしく思う気持ちは理解できるし氣遣ってくれて嬉しいと思う。それと古鷹をぶん殴ったこと——グツジョブ。

陽炎の話に戻って、私は九死に一生を得たものの、しばらくベッドから出ることを禁じられた。そりやあそうでしようね、全身が痛むのをベッドの上で我慢しているしかないわけだし。まあ心配してた首から下がちゃんと残ってただけでも良しとしときましよう。

私が動き回れるようになってからのプランを考えている中、何人かが見舞いに来てくれた。嬉しいには嬉しいものの、皆が皆、リング一個と果物ナイフを持ってくるのはちよつと勘弁して欲しかった。アंतरたら怪我人の横でリングを剥きたかっただけだろうと。動けない私は目の前で指をザックリ切りに来る阿呆共を追い返した。いや見舞いは本当に嬉しいけどね？ 絆創膏も貼ってあげられない私の目の前でザクザク指を切られるのは見ているこっちが痛い。それに、ああ、リングよりも売店のカツサンドが食べたい。肉が食べたい。

結局、古鷹は一度も見舞いには来なかった。



「私、復活——」と窓から見える朝日に叫んでみた。

まだ戦える体ではないけれど、今はとりあえず歩いて回れたらそれでいいわけよ。やるべき事の前にまずは肉。食堂で肉を補充しないと、肉を。朝食の時間なら——とにかく肉だわ。

……うん。迂闊だった。肉よりもつと考えるべきことがあった。

古鷹は食堂で一人、手付かざのご飯を前にしてただ座っていた。叢雲に殴られた鼻はもう回復したっぽいけれど、そんなことよりも顔のやつれ方が目に見えて深刻だった。輝いていた左目は電池が切れたように黒く暗くなっていて、もし古鷹が本当に天使だとしたら「終末まで……残り一時間……」とか呟いていそうだった。

「(山城おっそーい！ 早くアレ何とかしてよ、空気が重い！)」

【島風：L v. 31 ↓ 79】

「(待ちなさい島風。デリケートな問題なんだから。山城、慎重に行くのよ)」

【天津風：L v. 11 ↓ 76】

二人の駆逐艦にグイグイと背中を押されて、券売機ではなく古鷹の前まで来てしまった。そんな私と二人の姿も古鷹の目には入らなかったようで、私は恐る恐る声をかけた。

「お、おはよう古鷹。えっと、いい朝ね」どこがいい朝だ阿呆。

跳ね上がるように顔を上げた古鷹は私の顔を見るなり逃げ出した。お盆を持った摩耶にぶつかって朝食をぶちまけても振り返ることなく走って行ってしまった。

「あーあ。山城が遅いから」と島風。

「ほら、摩耶も察して怒らないでしょ。この空気どうするのよ、山城」と天津風は私を責めるように言った。

ええー……これって私の責任？



「才前ガ悪イ」

【極楽：L v. 155+2 ↓ 165+2】

食堂に居づらくなくなって売店に逃げてきたわけだけど、売店のお姉さんが言う事は相変わらず無責任にトゲトゲしていた。何処に逃げても責められる不幸な私。

「集中砲火ヲ浴ビタ程度デ轟沈シソウニナル戦艦ガソモソモ悪イ」

「あ、けっこう手厳しいこと言うのね」

「才前ラハ本当ニツマラナイ事デ隙ヲ作ルナ。死ヌナラセメテ店ニ全

財産ヲ落トシテカラ死ネ」

長身で青白い女性の「死ネ」は鋭く冷たかった。

「マア、生キテルノナラオ前ノ有リ金ハ仕方ナイ。今日ハロースカツサンド、ハムカツサンド、コロツケサンド。店ニ並ベタ我ガ言ウノモ何ダガ偏リ過ギダロ。野菜系モ買エ」

「先週ずつとリンゴ食べてたから身体が肉を欲しがってるのよ。——それと、なんだけど。ええつと、そのー……。指輪とかって、置いてないわよね?」

「アー?」

「ほら。7000円の。あるでしょ? 高い練度が必要になる儀式ともいいですか」

「ケツコンカツコカリ?」

「そ、そうそうそれぞれ! 私、指輪と書類一式が欲しいの」

「フウン。艦娘自ラケツコンヲ押シ付ケヨウトスルトハ、竹櫛モヤル事ハヤツテルラシイ」

「ち、違つ! 私は、私には、姉さまがいるし——ただ強くなりたいただけだし。だから一人でパパツと限界突破しようと思つて」

「恥ズカシイナラ適当ナ男ヲ紹介シテヤロウカ? 我ガ最後マデ面倒見テヤルカラ」

「余計なお世話過ぎるわ。とにかくレベルを上げたいの。そのために頑張ってきたんだから」

「面白味ノナイ理由ダ」

そう言つてお姉さんはレジ台の下から「コレガ指輪ト、書類ダ」弁当の割り箸の如き味気無さでサンドイッチと一緒に並べた。……確かにケツコン云々を省略したいと言つたのは私だけでもよ。なんだか私のケツコンが安—い感じで扱われた気がしてならない。いや7000円だったとしても。

「指輪と書類一式で7000円ジャアナイゾ。『ケツコンカツコカリ』ノ面倒臭イ手続キヲ我ガ代行スルカラ6, 5000円ダ」

「……ぼったくり」

「ブチ殺スゾ。ホラ今ココデサツサト書類に記入シロ」

「お姉さんにペンを投げて渡され、仕方なく6, 500円の書類にサインをす……んん？」

「ねえ、お姉さん」

「ナンダ」

「この書類って『ガチ』なやつじゃない？ ガチな婚姻届じゃない？」

「ほらこことか、初婚・再婚を選ぶ欄まであるし」

「実際イルダロ、再婚者」

「は？ ……ああ電ね。じゃあ私の夫は誰になるの？」

「モンキー・D・ルフィ」

「逆に安心できる名前で良かったわ」

◆ ◆ ◆
【山城：Lv. 99+1 ↓ 100+1】

私が架空の海賊と架空の絆を深めた直後から、天照大艦隊の空気はさらなる悪化の一途をたどった。

「そこどいてー！」

【雷：Lv. 135 ↓ 154】

「山し——航空戦艦なら丁度いいわ、出撃するから一緒に来て！」

「え、ちよつ、なにごと？」駆逐艦らしからぬ馬力には引つ張られた。

「叢雲が潜水艦にやられたの！ 助けに行くわよ！」

これが鎮守府の近海じゃあなかったらと思うとぞつとする。対潜よりも速力を優先した装備で急いだ私たち応援部隊が目にしたのは、意識のない叢雲を背負った隼鷹と、体を張って魚雷を止める島風と天津風だった。

◆ ◆ ◆
「艦隊の雰囲気が悪くなるとき。戦力もガタ落ちするんよ」

一ノ傘副提督に呼び出された私は、秘書艦の仕事だけじゃなく説教をされるんだなー、と第二執務室に入った時から勘付いていた。

「あんねえ山城ちゃん。竹櫛に一言も無く勝手にケツコンカッコカリーはいかんって。言いづらいんやったらせめてワタシとかさ」

「あの一。艦隊の雰囲気が悪いのと私のケツコンに何か関係があるんです?」

「あるから言っとるんやって、もー……」

「前々から思っていたけれど私って、この女性副提督と相性が良くない。」

「隣の部屋における竹櫛はね、めっちゃ滅入っとるんよ。自分はカッコカリですら拒絶されるほど提督として信頼されとらんのやって」

「提督がですか? 信頼はともかくケツコンについては今更過ぎると思うんですけど。私よりも前にほら、金剛とか球磨とか」

「マジで艦隊の緊急事態やから隠さず言うけどね。竹櫛の奴、山城ちゃんがレベル90を超えてからずっと用意しとったんよ。指輪と書類一式」

「はい? ……いい、いやそれは私じゃなくても誰かが始上限に到達した時のため——」

「他でもない山城ちゃんのため。酔ったところを聞き出した」

「うそ……。な、何かの間違いですよ。だって、あの、提督が」

「やからさ、全部言わせんでよ」一ノ傘副提督は——副提督も、少し苛立っていた。ここ最近の天照隊は皆そうだった。「竹櫛は山城ちゃんのこと、ああもう何て言えばいいか分からんけど、けっこう好きやったんよ」

「す、好きい? 阿呆阿呆ってよく罵倒されてるんですが」

「男心を全然分かつとらんねえ」

そんな中学生みたいな男心なんて知りません。

「叢雲ちゃんは叢雲ちゃん。それはそれとして山城ちゃんとも仲良くしたかったんよ。ケツコンしてイチヤイチャしたかったんよ、竹櫛は」

そんなダメ男なんて知りません。

「とにかくよ。大切に保管しとった指輪がふいにされて——叢雲ちゃんも悩みがあつたんやろ? んな状態で出撃した結果が意識不明の

重体で、今マジで竹櫛の精神状態がヤバいわけよ。艦隊のトップが駄目になると艦隊そのものがおかしくなるってワタシが一番よく知つとる。やけんが山城ちゃんは竹櫛に言つてやつて。『気恥ずかしかったから売店で済ませた』って」

「べ、別に恥ずかしくなんて……」

「つべこべ言わんで竹櫛を何とかしろ。これ厳命やから。洒落んならんレベルで艦隊の雰囲気が悪いんやって。雷電姉妹に艦娘たちのサポートを任せとるけど厳しいやろなあ……。あーもう。こういう時こそ深海棲艦の異常個体とかが近海に出現して皆でブチのめす中で雨降つて地固まらせるのが王道なんやけど……。その辺におらんかなあ鬼姫クラス」

現実を徹底的に直視するタイプの副提督があり得ない妄想を語り始めてようやく、私は今の天照大艦隊のヤバさを実感するのだった。



「ねえお姉さん。ケツコンがあるならリコンもあるんでしょ。その手続きがしたいんだけど」

売店に誰も立ち寄りそうにないタイミングを見計らつて、私は再び売店に入った。

「モウ離婚スルノカ。ソシナニ旦那ノルフィガ気ニ食ワナカッタカ」

「そ、そうなのよ。艦娘が海賊とケツコンなんて許されなかつた」

「最初カラ竹櫛ノトコロニ行ツテオケバイイモノヲ。ハハア、サテハケツコンヨリモ子作りノ方ガ目当テダナ」

「……………子作り……………んばっ!? ば、ば、馬鹿言つてんじゃあないわよクソ店主!」

「冗談ダ。オ前ニ子供ハマダ早イカラ避妊ハシツカリシテオケヨ。ココデ買ツテクカ?」

「い、い、か、ら、リコンさせろ!」

「分カツタ分カツタ五月蠅イナ。ホラ書類ダ。7,900円ナ」

「ケツコンより値段が高い意味が分からない」

「結バレル時ヨリ、離レル時ノ方方面倒ガ多イカラニ決マツテルダロ」
「カツコカリなのに面倒って……」

私はただ、扶桑姉さまに一秒でも早く追い付きたいだけなのに……
どうしてこんなことい。

【山城：Lv. 100+1 ↓ 99+1】



皆、鎮守府から逃げるように出撃してしまった。昼食時の食堂がこんなにも静かだったことなんて、私が覚えている限り天照大艦隊が結成されるよりずっと前の人手不足だった頃くらいだったと思う。

一人でうどんをすすっていると前の席に唐揚げ定食が入ってきた。雷だった。

「山城の左手薬指。今日も寂しいままね」と雷はツンとした顔で言った。

「……雷は出撃しないの？」

「みーんな欲しくもない戦果稼ぎに出ちゃって、叢雲もまだ動けないのよ。この鎮守府は誰を頼ればいいのかしら。ねえ？」

「すみません……」

今の状態はある意味、天照隊の強みを最大限に発揮していると言えないこともなかった。二人の提督に二人の総旗艦、さらに総旗艦をそれぞれバックアップする艦娘。大きな木が二本あるから枝はそう簡単には途切れない（頭が統一されない組織は弱いのが常識だけれど、勝てばいいのよ艦これは）。バラバラに散ってしまったように見える今の艦隊も、金剛に球磨、電、長門、吹雪、そして雷がしっかり繋いでいた。

「せめて竹櫛司令官が気力を取り戻してくれたら少しは艦隊も落ち着くのに。でも分かるわよ、山城が素直になれない気持ちも」

「だから、私はそういうのじゃなくて」

「じゃあ、どうなのよ」

雷にも、私自身にも、姉さまを言い訳に使わずどう説明したらいい

のか分からなかった。

「力になってあげたいけど、こればかりは山城が自分で解決しないといけないことなのよ。カッコカリだからって強くなる以外は無駄なことだと切り捨てちゃうの？ 始上限までの長い道は誰かと一緒に歩いてきたんじゃないの？」

「余計なお世話だっつっててるのよ。副提督も雷も、私のこと知った風なこと言わないで」

「知ってるわよ。山城が司令官の秘書艦やってる時はいつも、二人とも楽しそうなの」

「はーあ!? 馬鹿言わないで!」

「馬鹿はどっちよ!」

雷と取っ組み合いを始める寸前だった。訓練でしか聞いたことのない空襲警報が突然、鎮守府内に鳴り響いた。

「なに、今日って訓練の日だったの?」喧嘩の腰を折られた私は脱力した。「ほとんど人が出払ってるのに」

「違うわ。訓練は再来月の予定なもの」

人の焦燥感を刺激するアラームが鳴り続ける中、今度は一ノ傘副提督の緊迫した声がアラーム以上の大音量で発せられた。

《襲撃警報! 襲撃警報! 鎮守府東北東より強大な敵空母一隻が接近中!》

「う、うそ。マジで?」

「黙って聞く!」雷は冷静だった。やっぱり差が出るなあ。

《今から名前を呼ぶ者は大至急出撃準備! 雷、山城、古鷹、五月雨、涼風、初春! もっぺん言うけん雷を旗艦としてダッシュで出撃して! 旗艦雷、山城、古鷹、五月雨、涼風、初春! 他に残る全員も対空戦闘準備! 敵の一機たりとも陸地を観測させるな!》

「山城は軽巡察と重巡察を念のため回ってから対空特化で準備して!

私は駆逐艦で指示してから追い付くから!」

「戦艦と空母は?」と口に出してから気付くノロマな私。

「戦艦も空母もないの! しかも敵は空母で、迎え撃てるのは航空戦艦の山城だけ! 今から制空権のお勉強する!」

「わ、分かってるわよ。とにかく暇人共の尻を蹴った後で古鷹を連れてくるわ」

「じゃあそっちは任せたわよ！」



一旦引いてきた対潜哨戒部隊と合流して話を聞くと、敵はたったの一隻がいきなりポツと湧いて出たらしい。

「見たことも聞いたこともない深海棲艦だったよ」

【鬼怒：Lv. 58】

「航空機は余裕の温存されちゃった。でもアレはパナイ！」

「四人とも無事だったから良かったけど、何がどうパナイのか説明して」と雷は苛立ちを抑えつつ言った。

「こつちが副砲くらいしか装備してなかったから牽制で撃ったんだけど、敵の周りの海水が立ち上がって壁になったんだよ！ しかも鬼怒たちが倒した潜水艦の残骸を回収して装備しちゃうんだもん！ 空母のくせに魚雷とか使ってくるから気をつけて」

「——分かったわ。そいつは私たちで倒す。でも四人とも悪いけど鎮守府に戻ったら休まず換装して警戒をお願い。飛鷹一人でも空母がいてくれて心強いわ」

鬼怒が言った通りの余裕なのか、見渡す限り空に敵機の影は無かった。



その空母は偵察機すら出さず私たちの前に姿を表した。

空母ヲ級の変異種のようににも見えた。黒い着物のような服を着ている。頭の発艦口が無い代わりに身体の各部を、まるで他の深海棲艦から剥ぎ取ったような装甲で覆っていた。右手にクロスボウのようなもの、左手に飛行甲板、そして鬼怒が言っていた通り装甲に混じるように雑に装備された魚雷発射管が多数——姿をつぶさに観察でき

るほど両者の間は縮まっていた。私たちだけじゃあない。黒い面をしたアイツも私たちを観察している。青く燃える左目の鋭さは鬼姫クラスのそれだった。

「見た目は空母なのにアイツ何がしたいの？」私は装填した三式弾をもう敵本体に撃ち込んでしまいか迷っていた。

「空母と魚雷、それに鬼怒が言っていた海水防御——いいわ山城。三式弾の斉射」

雷に指示されて棒立ちの相手にぶつ放した。普通ならよほど頑丈な敵でもない限り撃破できる。

謎の空母は敢えて後手にまわっているようだった。私の発射動作と同時に海面を踏み付け、すると空母の前の海水が高く厚い壁となって突き上がった。確かにこれはパナイ。こんな超自然的な力を持った深海棲艦がいるなんて。それに何より、アイツは『私が撃つ砲弾が三式弾だと読んでいた』。

三式弾の弾子が海水の壁にあっさりとは阻まれたのを皮切りに、敵空母はいきなり空母らしく大量の航空機を発艦し始めた。あれは……色は黒いけど流星？

「対空戦闘始め！」雷が叫んだ。「この距離を保ったまま敵機を全て撃墜するわよ！」

「えっ？ 徹甲弾なら壁を——」

「山城危ない！」

私の前に古鷹が躍り出て、爆発的な水柱が上がって、ようやく私は何が起こったか理解した。海水の壁ばかり見ている下で敵空母は魚雷を発射していたんだ。

「古鷹！」

「だい、じょうぶ……まだ、守れるから」

「なに言ってるの！ 守るなら自分を守りなさいよ！」

「ごめんね山城……ずっと……謝りたかった」

「……別に怒ってなんかいいわよ。まあ、心配させたって意味では怒りたいけど」

「あはは……ごめんね」

「だから謝らなくていいって」

「……うん」

なんて呑気に仲直りしていると後ろから頭を引っ叩かれた。

「古鷹は下がって。山城もさつきと瑞雲を飛ばして。五月雨たちがキツいの」



敵空母の戦術は、自分を海水の壁で守りつつ攻撃機と魚雷で私たちが囲んでしまいうえげつないものだった。全方位から襲来する魚雷を――。

「爆撃機じゃー!」

初春のファインプレーで出し抜けの急降下爆撃は防げた。けど何故? 深海棲艦ってこんなに捻くれた戦いを仕掛けてくるかしら。

雷は「爆撃機は陸地空襲のためだから飛ばしたくないんでしょ」と言うけど、私にはそうは思えなかった。

「雷。私に策があるわ。あの敵空母を一人で叩くから航空機を引き付けておいて」

「アイツの秘密が分かったの!?!」

「いや分かんないけど、たぶんアイツは乗ってくる」

「たぶんじゃダメ!」

「雷も航空機だけ相手して、私の方は見ないで。深海棲艦に読み合いで負けたくないのよ」

たぶんアイツは乗ってくる。アイツは深海棲艦のくせに『空気が読める』。さつき私と古鷹が見つめ合っていた時だって、鋭い勘を持っているならその隙を見逃さなはずがない。

私は一人、輪形陣から外れてゆっくりと敵空母の前に出た――ほら、やっぱり魚雷攻撃を止めて警戒体勢に入った。徹甲弾は確実に読まれてる。それを躲してカウンターで襲ってくるのは魚雷か爆撃機か、いや絶対に別の手をまだ隠してる。でも恐れるな山城。私の能力は有効射程が20mにも満たない。

「焦らせ……焦らせ……」

相手が砲撃を誘ってるのと同じように私も攻撃を誘う、わけじゃない。戦艦の装甲ナメンじゃあないわよ。もう少し近く。一歩でも近く。これがマカロニ・ウエスタンだと思わせろ。もう少し……。もう少し……。

「……………——ッ！」

気付かれた！ アイツ私の目を見て砲撃する気が無いことまで読んだ!? 動きだした敵空母は水面に両手を付いて、一部隊くらい隠せそうな横幅の広い海水の壁を張った。位置の攪乱とはちよこざいな。

「これだけ近づけば……ヤッテヤル！」

【山城：Lv. 99+1 ↓ 99+2】

青い炎を生みながら海水の壁に接近するやいなや、広い壁の全面から魚雷がポンポンポン何本も一斉に飛び出してきた。いやらしい奴、たったの一人で戦ってると思わせておいて背後に仲間を隠してたなんて。いいわ、魚雷の3, 4発くらい貰ってあげようじゃあないの！

「グッ……！ ツコノ程度、扶桑型ヲ舐メルナア！」

青い人魂がフワリと私の周囲にいくつも浮かび上がる。壁の向こうのお相手様に不足しないようにまだまだ燃やして、いっそ冥界を作ってあげましょう。私の立つ場を悲しげに飾る人魂たちよ、「行ケ」。

魚雷のお返しに、人魂たちに一斉に海水の壁の上を乗り越えさせた。するといとも容易く「ヒヤアッ!」というやけに可愛らしい悲鳴が真正面から聞こえてきた。

「ソコカッ！」

壁を強引に突破して手の届く距離、敵空母の黒い面に右拳を叩き込んだ。顔を隠していた面が割れると同時に左拳で殴り飛ばす！

「ソシテ食ヲ——え？」

【山城：Lv. 99+2 ↓ 99+1】

近接格闘からの砲撃コンボは『艦娘が一度はやってみたい技』ランキングの上位に入ると思う。私だってやりたい。でもやれなかった。

「私が改二になった時のこと、もう忘れたんですか。頑張ってる艦娘に面と向かって勲章は勿体無いか言い放つ阿呆提督がいたんですよ」

「……………」

「ケツコンカツコカリなんて尚更、拒否されると思っっちゃうじゃあないですか。どうなんですか。何とか言え阿呆提督」

「やかましい。どうせ一ノ傘から余計な事を吹き込まれたのだろう」

「ええそうです。だからこうして『指輪ください』って恥を忍んでお願いしてるのに…………正直、男性としてどうかと思います。マジで」

「…………ならば言う。だがこの事は他言無用だ。他の誰かに知られたら私は艦隊から去る」

「な、なんですか。そんなに重い話なんですか」

「約束しろ」

私は深く頷いた。

「いいか。私は始上限に到達した阿呆共に指輪を丁寧に渡そうとした。カツコカリなど馬鹿馬鹿しいとは思っていてもだ。記憶に残る大切な儀式のようなものだとは私は考え、私なりに誠意を尽くした」

「はれ？ いつもの提督とは思えない行動、良いじゃあないですか。そうですよ、それを求めてたんですよ。グツジョブですよ」

「…………金剛と球磨に笑われた挙句、拒否された」

「い、今から二人で飲みに行きましょう提督。私は提督の味方ですから。絶対に笑ったりしませんし誠意の込められた指輪を拒否だなんてそんな…………アイツら絶対にぶつとばす…………ほ、ほら元気出して提督。らしくないですよ。さあさあ外に出掛ける準備してください、ね」

【山城：Lv. 99+1 ↓ 100+1】



低迷していた本隊のために何かしたいと、確かに僕は言いました。
ドーモ。斑鳩です。

この分隊、北鎮守府に手伝いに来てくれていた誰もが暗い顔をしていましたからね。いつもお世話になつてばかりいる本隊のために、たまには分隊が諸肌を脱いでサポートするのが仲間というものでしょう。

「もう。鉄ちゃんも竹籬くんも、艦娘心を全然分かつてない、ねえ」

天照大艦隊の三人目の提督にして『羊の皮を被ったエイリアン』傘姫提督はそんなことをのたまいやがったのです。補足ですが『鉄ちゃん』とは一ノ傘副提督、一ノ傘鉄子さんのことです。

「仕方がない、から助け艦を出そう。ね、斑鳩？」

「僕だって出来るものならとつくにやってるよ。でも今回の敵は深海棲艦とか資材不足とかじゃあなくて人間関係のこじれだよ。先に言っておくけど南鎮守府に行つて何とかしてこいとか言われても僕には——」

「斑鳩もまだまだ、だねえ」

わざとらしく肩を竦められてもムカつきませんでした。慣れましたから。

「仲間の雰囲気は険悪になる。そこに強い深海棲艦が現れる。一緒に立ち向かつて、倒して、絆をいっそう深める。鉄板、でしょ？」

「アニメじゃあるまいし。それに今の天照隊のコンディションだと敵主力群まで辿り着けるかも怪しいよ」

「だから、近場で済ませちゃおう」

「烈風を餌にして北方棲姫でも連れて来る？」

「ここにいる、よね？ 強い空母が」

そんなわけで指をさされた僕が深海棲艦に扮しました。影の功労者はイムヤ達です。深海棲艦から適当な装甲やら何やらを奪ったり、一人ポツンなはぐれ空母と見せかけて足元では潜水艦たちにじつと待機してもらっていました。

仮面を付けていても斑鳩だってバレるんじゃないかと心配していたんですけどねー。というか気付いて欲しかったんですけどねー。変装が完璧だったのか、それとも僕が深海棲艦に変質しても気付いて貰えないのか……いや仮面が割れたら山城は気付いたわけです。

もし最後まで気付いてもらえなかったら本気で本隊・南鎮守府ヲ潰シテヤロウとか全然ちつとも思つてませんでしたよ。いやほんとに。

「私だつて頑張つた、よね？」と傘姫提督は主張します。

「まあね。本隊にすぐ動ける空母が残つてたら少し面倒だったし、長月ちゃんなんていたら逆に僕が瞬殺されてたし。よくタイミングを見計らつたとは思う」

「ふふん。そうでしょう」

「でも提督が作戦立案者だつてことは忘れないでよね。大和はすぐに勘付いて怒りに来るだろうな。僕とイムヤ達は提督の命令に従つただけだから」

「怒られて終わる、それまでが、ぜんぶ斑鳩の任務、なんだから」

「しーらない知らない。僕は明日からヤーナム泊地の仕事があるから。怒れる撃沈王の対応よろしく」

とか言つていたその日のうちに彼女から電話が掛かってきました。天照大艦隊の前に突如として現れた謎の敵空母、その話を掻い摘んで聞いただけで僕のことを頭に浮かんだらしいです。海水で壁を作るような異常個体が、しかも鎮守府近海にいきなり現れたと無闇に全国に周知されてしまったら——そりゃあ箝口令ものです。本隊の方には既に調査の打ち切りと資料の破棄、そして絶対に口外しないよう竹櫛提督に頼み倒したそうです。

「提督。あと一時間くらいで大和が来るから正座して待つてよう」

「嫌だ。せつかく良いこと、したのに」

「ねー。僕ら良いことしたのにねー」

僕も山城に負けず劣らずの不幸体質じゃあないでしょうか。

第48話 アイアム深海棲艦ベリーマツチ!

白露型が十人全員そろって食堂で夕食を食べていた時の出来事である。

春雨がいきなりキレた。

「イイ加減ツツコミ入レテヨ!」

【春雨：Lv. 24-1 ↓ 51-1】

「深海棲艦! アイアム深海棲艦ベリーマツチ!」



春雨の今日に至るまでの艦隊生活につつこみを入れるのは妖精に「ブークスクス」と小馬鹿にされても怒り返せない行為であろう。すなわち野暮というものである。肌が少々青白かろうと彼女は天照大艦隊の仲間であつたし、白露型姉妹の一人だつた。

天照隊の目を欺き、読者諸氏すらも巧みなカタカナさばきで煙に巻き、白露型の中に混じって過ごした彼女の日々は、なんと色鮮やかだつただろう。あんまりにカラフルだつたために春雨は自身が深海棲艦であることを忘れることすら多々あつた。いや、ほぼ忘れかけていた。

春雨がパツと思ひ出せる思ひ出は良いものばかりである。であるのだが強烈なインパクトで悪夢の如く責めてくるものも少なくない。ミサイルをバットで打ち返そうとする阿呆な長女を前にして深海棲艦も艦娘もあつたものではなかつた。

東京急行と称して『ペルソナ5』の聖地巡礼をし、駆逐艦寮の前で白露型六人が一列に並んで正座させられたのは良い思ひ出では決してあるはずがない。あの時の山風の悲痛な表情は春雨も目を背けた。縮こまって並んだ六人の前でガミガミと怒る叢雲の形相もまた春風の艦隊生活のうちの一色であつた。東京急行が南方への鼠輸送作戦であると知つていながら聖地巡礼を敢行するのが白露型である。すべての責任は一番な長女にある。

山手線を周回していても練度というものは少しずつ上昇するものらしく、気がつくくと春雨の練度は50を超えていた。

「深海棲艦ツテ、ドウシテ普通ニ遊ビニ来ナインダロウ」

無意識の独り言に春雨は勝手に衝撃を受けた。イヤイヤ、自分ダツテ深海棲艦ダカラ。ナニ普通ニ『ペルソナ5』ヲ十人デ遊ンデルノ？

主人公ノ総攻撃ノ後、手袋クイツトスルヤツガ素敵トカ深海棲艦ノ私ニハ関係ナイカラ！



残念ながら春雨の心からの叫びは姉妹艦たちに届かなかった。

せめて時雨姉さんだけでも私の葛藤に気付いて欲しい。そんな願いも南無三、ゾンビに慣れてしまっていた時雨は白露と大差ない反応だった。春雨がなんの前触れもなく大声を上げたことには驚き、心配はした。しかしただそれだけだった。

「なるほどね——うん。大丈夫。大丈夫だよ春雨」

【白露：Lv. 81】

「売店に正露丸が売ってるから。すごいんだよ、あれ飲めば大抵のこととは治るから。寝る前に飲んどこう」

「真面目ニ聞イテ、コノ阿呆！ 私ハ皆ノ敵ナノ！ 麻婆春雨ダツテ実ハ毒ヲ盛ロウカツテ何度モ迷ツタンダカラ！」

「そっか……。実はね。あたしも春雨にずっと隠してたことがあったんだ。本当にごめん」

「ナ、ナニ？」

「一番艦だから我慢してたけど……麻婆春雨、あんまり好きじゃあないんだよ」

「ナンデ今カミングアウトシタノ!? モット早く言ツテヨ、ケツコウ傷付クシ……。ウウン、許ス。許スカラ私ノ話モ真剣ニ聞イテ。春雨ハネ、深海棲艦ナノ」

「分かった。みんなは先に寮に戻ってて。ここはあたし、白露型一番艦に任せて。食堂中が注目しちゃってるし早く行こう、春雨」

「ドコニ行くノ？」

「だから売店だつてば。お腹痛いんでしょ」

「阿呆！ コノ阿呆！ モウイイ、私ガ深海棲艦ダツテ行動デ証明スルカラ！ 売店ナンテ壊シテヤル！」



食堂を一人飛び出した春雨は総合棟の横を抜け、標的である売店がまだ閉店していないことを確認してから工廠へと向かった。深海棲艦といえども砲のひとつやふたつ持っていなければ阿呆姉さん達と大差ないからである。

誰かが利用しつぱなしにしていたのか、工廠は春雨が訪れた時から明るかった。ひと通り見て回ったが中には誰もいなかった。

作業をしながら、春雨はあの阿呆たちをまだ姉妹艦だと思っていることに気付いてしまった。自分は深海棲艦だと啖呵を切ったことも、白露型の一人であることも、どちらも彼女の存在を形作っていることを疑えず、捨てられない。どちらかを捨てようにも捨てがたい。やる決めて主砲を持ち出し砲弾を装填するだけのことに随分と時間をかけてしまった。

ちょうど準備が整った時である。「誰かいるの？」と入口で声がした。叢雲だった。

「春雨？ どうかしたの？ フルメタル・ジャケットのデブ二等兵の最後みたいな顔色してるわよ。いつも青白いけど今は特に」

売店よりもここで総旗艦を亡き者にしてやった方が天照大艦隊にとってダメージが大きく、本当の意味で自分は艦隊の敵、残虐な深海棲艦となつて他の何もかもを捨てられるかも——デブ二等兵のM14の如く信頼できる連装砲が春雨の手にあつた。

タダ構エテ撃ツダケ。……デブ二等兵ツテ酷クナイ？ ……イヤ今ハソレヨリ、サア撃テ私。

春雨の頭の単純な部分はそう言った。だが冷静な部分が身体を押しさえ付けてピクリとも動かさない。叢雲の正確な練度は知らないが

春雨より一桁高いところにいるのは知っている。ハートマン軍曹のように簡単にやられてくれるだろうか？ 春雨には自信が無かった。不意打ちの砲撃でもヒョイと躲かれて死ぬほど怒られるビジョンしか見えない。いや、この状況からのフレンドリーファイアでは殺されるほど怒られるだろう。

春雨の練度が決意に追いついていなかった。

「……私、深海棲艦ダカラ。モウ誰ニモ止メラナイヨ」

「はあ」

「ソレトモ叢雲ガ今ココデ私ヲ……倒ス？ ヤレルモノナラ——」

「練習熱心なのはいいけど早く休みなさいよ。消灯お願いね。射撃場の明かりも最低限にね。電気代けっこう馬鹿にならないのよ。じゃあね」

総旗艦は行ってしまった。



「ワ、私ヲ馬鹿ニシテ……!」

春雨の目的と手段も入れ替わろうというものである。心のどこかに、天照隊の皆に深海棲艦だと認知させ、なんやかんやあって綺麗に海に帰り、あわよくばLv. 1の艦娘・春雨に生まれ変わる願望があったことは否定しない。だが今はとりあえず売店を破壊したかった。

「正露丸ヲ一粒残ラズ焼キ尽クスンダカラ!」

売店の周囲には誰もおらず、売店のお姉さんがちようど店を閉めようとしているところだった。絶好の襲撃チャンスである。

ここからカタカナトークが展開されることを読者諸氏にはご容赦願いたい。

お姉さんには春雨と似ているところがある。お姉さんの肌も雪女のように青みがかっている。着る毛布の上からエプロンを身に付けていて、寒さに震えながら外に出していた商品を店内に運んでいる。

春雨は連装砲をちらつかせながら、深海棲艦らしい薄気味悪さとい

うものをせいいっぱい演じつつお姉さんに近づいた。

「オ姉サン……危ナイカラ逃ゲタホウガイイヨ」

「アン？」とお姉さんは面倒臭そうに振り向いた。「買イ物ナラ明日ニシロ。今日ハモウ閉店ダ」

「買イ物ヲ明日ニ？」春雨は可笑しくなつてクスクス笑った。「ソレハデキナイヨ。ダツテコノ売店ハ今カラ……壊サレルンダカラ！」

ついに春雨は連装砲を人に向けて構えた。当然、冗談であつても許されない行為である。さらにはつい最近、銃器を少々仕入れたお姉さんへの挑発行為であつたことは春雨には知る由もない。

お姉さんは模範的舌打ちをして、売店の奥に向かって怒鳴った。

「オイ磯風！ オ前ノ友達ガ来テルカラ相手シロ！」

しかし磯風は現れなかった。

「ソウダツタ、クソガ。コンナ日ニ限ツテ休ミダツタ。アイツ仕事ナメテルナ」

「絶体絶命ダネ」と春雨は言つてせせら笑った。「元艦娘ノ助ケモナイヨ。デモ少シ可哀想ダカラ、オ姉サンニ八十秒アゲル。スグニ売店カラ離レ——」

「オ前、ロードローラーノ質量ヲ知ツテルカ」

お姉さんは春雨の話に耳を貸そうとはしなかった。

「道路工事デヨク見カケル、地面ヲローラーデ圧シ固メルヤツダ」

「ハ？ ロードローラー？ ……見タコトハアルケド」

「ソウカ。見タコトハアルカ。シカシ、ロードローラーノ車体裏側マデハ見タコトアルマイ。冥土ノ土産ニ見テオケ」

そう言うなりお姉さんはトンと軽く数メートルほど跳び上がった。春雨から見るとお姉さんはジャンプするなり、まるで円筒から射出した打ち上げ花火のように空へと飛んでいった。

春雨が口をあんどりあけて空へ跳んだお姉さんを見上げていると、本当に打ち上げ花火のようにお姉さんの周囲で青い炎が爆ぜた。煙状あるいは雷状に形が安定しない炎はすぐに収束して具体的な形を持った。サファイアのような炎の青色も同時にくすんだ黄色と灰色に変色した。

春雨はロードローラーの車体裏側を初めて見た。もちろん別に白いものではなかった。そんなことよりも、数メートル上から降ってくるロードローラーの真下にいることの方がよほど珍しい体験である。

「イアッヒャア!?!」

春雨が転がるように逃げた場所にドグオン！ と情け容赦のない質量が落ちた。春雨が下敷きになっていてもいなくてもコンクリートの地面が砕けることに変わりはない。

地響きが空気までも震えさせるのは大戦艦の砲撃に近いものがあった。衝撃が体内を駆け巡り、心臓が喉から飛び出しそうになっている春雨とは対照的に、お姉さんはロードローラーの運転席にゆったりと腰掛けていた。

「オー。ヨク避ケ切ツタナ」とお姉さんは特段感心した様子もなく言った。「半分クライハ潰レルダロウト思ツテタンダガ。才前、サテハ対空戦闘ニ慣レテナクテ逃ゲ回ル奴ダロウ」

逃げ回る、という言葉が春雨を動かした。

マツタクワケガ分カラナイ。

汗がどつと噴き出す。

アンナ死ニ方ハ嫌ダ。

周りには誰もいない。

突然ロードローラーが降ツテキタ。

潰れた自分を想像して吐きそうになった。

手カラ滑リ落チタ連装砲ヨリモ今ハ逃ゲナイト。

ドウシテ空カラロードローラーガ降ツテクル？

オ姉サンハモノスゴク高クジャンプシタ。

私ハ喧嘩ヲ売ル相手ヲ間違エタ。

間違エルコトハ悪イコトダカラ罰トシテ圧シ潰サレル。

アノロードローラーガ私ヲ轢キ潰スマデドコマデモ追イカケテ――

春雨自身は全速力で走っているつもりだったが、実際には腰が抜けて地べたをのそのそと這っていた。「アウ、アウ」とあえぎながら質量

の悪魔から必死になって逃げた。生き延びる殺されるの問題ではなかった。ただただグシャリと潰されるのが怖かった。

背後のロードローラーが動き出す音はしない。その代わり、パチンと指を鳴らしたような音がした。すると春雨の目と鼻の先で、またしてもドグオン！ と地面が炸裂した。飛び散ったコンクリートの破片が春雨の顔を直撃した。錯乱極まった頭で、今の衝撃はさっきのものと同じだと感じ取った。

「オイオイ逃ゲルノカ？ 逃ゲタラ我ノ店ヲ壊セナクナルト思ウケドナア」

春雨の背後から悪魔の声がした、その直後、彼女の耳元で同じ悪魔が囁いた。もはや彼女の世界の常識は木っ端微塵になっていた。

「我ノ懐ハ深イカラナ、暴拳ニ走ツタ理由クライ聞イテヤロウ。PTSDデモ発症シタカ？ 男子ニ捨テラレタカ？ ン？ ——返事ナシ。磯風ヨリツマラン奴ダ」

お姉さんが二台目のロードローラーに触れると、ロードローラーは青い炎へと姿を変えてお姉さんの手に吸い込まれていった。

「鎮守府デオ前ヲ艦娘ガイクラ騒ゴウト我ノ知ツタコトデハナイガ、我ニ迷惑ヲカケルナ。砲弾一発デモ店ニ撃ツテミロ、オ前ノ全身ノ穴トイウ穴ニ同ジ砲弾ブチ込ンデヤル。分カツタカ？」

春雨は頭を掴まれて、無理やり肯かされた。

「ヨーシイイ子ダ。ジャアサツサト帰レ」



「お昼の時間だね。今日は食べれそう？」と白露に聞かれて、春雨は頭を振った。あれから三日、何も食べていない。ずっとベッドの上にいた。顔の傷も癒えておらず、まるで大災害からの奇跡の生存者のようだった。

「そっか……。リンゴはまた冷蔵庫に入れとくね。あたしが隠してた闇プリンもあるから食欲がでたら食べていいからね」

「……白露姉サン」

「ん、なに？」

「迷惑カケテ、ゴメンナサイ」

「昨日の夜もおんなじこと言ったよ、春雨ってば。白露型に遠慮はナシだってルール忘れちゃった？」

「ソレト……聞イテモイイカナ？」

「うん。なにになに？」

「私ツテ、普通ダヨネ」

「全然普通じゃあないよ！ 白露型駆逐艦はいっちばんすごいんだから！」

「……ソウダネ。ソウダツタ。ジャア、私ハ、白露型駆逐艦——デイイノ？」

「変なこと聞くね、春雨ってば。やっぱりまだ体調が悪いのかな。『売店で』 正露丸買ってきたんだけど——」

「ヒツ!？」

「あ、ごめん苦手だった？ 仕方ないよ、臭いもん。それじゃあ私ももう行かなきゃだけど、何かあつたらみんなにメッセージ送ってね。絶対だよ。一人で無理しないでね」

白露が出て行った後、春雨は自室で一人、布団の中で静かに覚悟を決めた。

私ハ白露型駆逐艦五番艦、春雨。

ソシテ『普通の艦娘』。

最後ノ時マデ貫キ通ス。

第49話 撃沈王の世間話

撃沈王・大和と天照大艦隊は、互いに利用し合う関係にある。大和は天照隊を少しの罪悪感もなくそそのかす。天照隊は宅配ピザと引き換えに情報を引き出す。

これは癒着ではないのか？ だがしかし、どうだろう。読者諸氏のスクワッドが銃火器をそろえようとする時、ウォルマートのカゴに銃と弾薬を放り込むよりも、テキサス生まれで遠縁のアンダーソン氏が経営するショップを利用するのが自然な流れではないだろうか？ 要はそういうことである。

「午前中は特に艦隊運用がお忙しい頃かと思いますが、その中でお時間をいただき恐縮です」

第一執務室に迎えられた大和は柔らかく言った。

「捷号決戦、その後も特にさしきわりなく作戦展開を継続されていると、斑鳩より聞き及んでいます。流星です」

「艦隊として当然のことである」

提督の竹櫛はキリツとした感じを出そうと腹と顎のあたりに力を入れていいる。もはや顔なじみであるとはいえ、最強の艦娘たる撃沈王には色々とアピールをしたい男心である。秘書艦として同席している叢雲は知っている。大和が来る直前までこの男は仕事もせず捷号章を念入りに磨いていた。

「我が天照隊に活躍の機会を与えてくれたことに深く感謝している」などと偉そうにのたまう竹櫛であるが、言うまでもなく階級は大和のほうが上である。

「そんな、とんでもありません。本日は私が個人的にお礼を言いたくてお伺いしたのですから」

「はっはっは。我々はただ作戦に従い動いたまでのこと」

「天照隊にしか担えない作戦でした。サマール沖東方に同時展開していた佐世保の艦隊は、同海域の敵残存部隊があまりに早く崩れたため、畏かもしれないと必要以上に警戒してしまったほどです」

「それは申し訳ないことをした。球磨は——あの時の部隊旗艦はどう

にも、チャンスがあれば作戦をステルスミッションに変更したがる悪癖がある。後で注意しよう」

「いえ。それこそ天照隊の本領だと思って、私はあの作戦を託したのです。どうしても激戦の長期化が避けられない大規模作戦の、疲れが隠せなくなる後段作戦ではトリックスターのような――」

「トリックスター？」

「あ、ええと……確実に作戦を遂行できる上で、さらに予想もつかない利をもたらしして頂ける、という意味で申し上げました。ですが味方も少々混乱させてしまった、という意味ではトリックスターという名もあながち間違いではないと思いますが？」

「なるほど。これは一本取られたな」

「ええ。ふふふ」

「ははは」

その後も大和による露骨な竹櫛リスクトは続いた。多忙な彼女である、まさか目的も持たずに天照隊に世間話をしに来るなどあり得ない。今日はどんな面倒事を持ってきたのか……身構える叢雲をよそに世間話は続く。続く。これでもかと続く。

大和がなにをしに訪ねてきたのか、そのうちどうでもよくなった叢雲はあくびを噛み殺しながら、二人の湿気ったせんべいのような話が終わるのを待たされた。



「あら。いけない、もうお昼前になってしまいました」

ついに大和は天照隊に何の要求もしないまま世間話を終えてしまった。

「長々とお付き合ひ頂きありがとうございます」

「こちらこそ充実した話ができ」と竹櫛はほめ上げられて満悦の様子で顔に出していた。

「これから分隊の方へ行くのだろう」

「ええ。最近あまり顔を出せていなかったものですから。こちらの売

店で食べ物を買ってから出発します」

「うむ。撃沈王からも傘姫提督をどうかよろしく頼む。叢雲、売店までの案内を頼む」

叢雲の後について執務室を出た大和はこっそりと言った。

「随分と変わった艦娘のようですね。球磨という方は」

「一度会ってるわよ。忘れたの？ 例の『抜き打ち訓練』の時、私があなたに飛びかかったところを制止した軽巡洋艦」

「ああ、やっぱりあの時の。それに斑鳩から何度も繰り返し聞かされた話は本当みたいですね。私の部隊に加わってくれば存分に活躍してもらえそうですが」

「スカウト？」

「駄目ですか？」

「球磨は絶対に渡さない」

「それは残念です」

「どうか球磨よりも、長月の方が大きな戦力になるんじゃないの？」

叢雲は軽くかまをかけてみたものの、大和は叢雲の期待した反応とはまったく異なる、悲痛な表情をつくった。

「……『抜き打ち訓練』のその後、長月さんの調子はいかがでしょうか」「え？ ……あ、ああ。全然普通よ。今日だっていまごろは、遠征任務の真っ最中でしょうし」

「あの時は訓練に巻き込んでしまい、何度謝っても私が許されることは——」

「も、もう気にしてないわよ、長月も私たちも。ずいぶん前のことだし」

「お心遣いありがとうございます。確かに長月さんは、集中砲火の中を生き延びた驚異的な生存力をお持ちの艦娘ですし、もし大本営直属の部隊への転属を希望されるのであれば遠慮なく連絡をください。歓迎しますよ」

叢雲は『洞観者』について撃沈王の立場からの情報を聞き出すつもりだったのだが、話の振り方を下手に間違えたせいで聞きづらくなっ

てしまった。

総合棟を出て、大和は「売店の場所は分かりますから」と言った。「さつきはすみません。長話に付き合わせてしまつて」

「あ、いや、うん」

「では、私はこれで。また天照隊には協力をお願いすることがありますし、その時は総旗艦。よろしくお願いしますね」

「ああ、うん。こちらこそ」

売店の方へ歩いていく大和の背中を見ながら叢雲は、言葉に表しがたい違和感を覚えずにはいられなかった。



叢雲の視線が切れたあたりで大和は周囲を見渡した。幸い艦娘二人とすれ違っただけで他には誰もいなかった。近くの建物の影に身を潜め、スマートフォンで電話をかけた。

「こちら大和。天照大艦隊への潜入に成功したわ」

《お前知っているか？ 喫茶店は今が一番忙しい時間帯だ》

通話は一方的に切られた。大和はすぐさまかけ直した。

「こちら大和。天照隊への潜入に成功したわ」

《お客様のおかけになった電話は現在、この武蔵の邪魔だ》

「鎮守府の中で一人になることに成功したのよ」

《よかったな》

「これから売店に向かうわ。なるべく人目につかず行くにはどうしたらいいかしら？」

《知らん。じゃあな》

「アドバイスくれるまで何度でも電話するわよ。スマホの電源切ったら、次はハングド・キャットの電話が鳴ることになるわね」

《……昼食時の混雑が過ぎるまで待てばいいんじゃないか》

「なるほど。でも待って武蔵」

《なんだ》

「待ってる間、私はどうするのよ。お腹が空いたわ」

通話は再び一方的に切られた。

「使えない姉妹艦ですこと！」

大和はスマートフォンに毒づいた。気が緩んでいたといえれば緩んでいた、その時である。不意に声をかけられた。大和がよく知る声だった。

「お昼ご飯、私が奢ろう、か？」

身体が反射的に飛び退くほど大和は驚き、声の主をまさかと凝視した。

細身のオカツパ頭「傘姫、提督……？」彼女はニコニコと大和の側にいたらしかった。傘姫だけではない。もうひとり、白猫の前足を吊るしてブラブラさせているセーラー服の少女が隣にいた。

登場があり得ない二人だった。ここは天照大艦隊の本隊がある南鎮守府であり、二人が所属しているはずの分隊がある北鎮守府は陸路で三時間かかる場所にある。

昨日、大和は確かに分隊の斑鳩に確認を取った。今日の傘姫は溜まった仕事を片付けるために北鎮守府の執務室から出る暇などないと。今日ここ南鎮守府で出くわすはずはないと。

「竹櫛くんと、ピザでも、食べよっか」傘姫は撃沈王の眼光をまったく意に介さない。

「……遠慮します。傘姫提督はまた仕事を抜け出して、斑鳩に怒られますよ」

傘姫と猫吊さんの二人が突然現れた。この事実だけで既に大和はいくつかの確信を得ていた。

「傘姫提督。猫吊さん。二人とも私なんかにかまっついては斑鳩が過労死してしまいます。早く北鎮守府に戻ってください」

「斑鳩は大丈夫だよ。本隊に助けて、もらってる、から。それより私、心配だよ。どうして大和ったら、こんな影に、隠れてるの？ 大和って、売店にも行けない、くらい、お嬢様、だったっけ？」

「——いいえ。お陰様で、もうコソコソする必要はなくなりました」

「売店、に行くの、やめた方が、いいと思う、けどなあ」

「何故ですか？ 話してください」

「んー。何となく?」

「私は猫吊さんと同等の権限を持っています。力づくで聞き出すことも可能ですか?」

「にはは。私は大和の、ためを思つて、言つてるん、だよ?」

「そうですか。お気遣いには感謝します」

大和は傘姫と猫吊さんを押しのけて建物の影から飛び出した。二人とも大和を止めようとはせず、追いかけてもこなかった。

大和が一直線に売店に向かつている途中、前にいた艦娘は道を開けた。撃沈王だから、ではない。足早に突き進む大和の表情がそうさせた。

品揃えがやけに豊富であることを除いてこれといった特徴のない売店では、磯風がレジ台で客をさばっていた。そこに鬼気迫る表情をした大和が入ると店内は一瞬、静まった。

並んでいる客がいるのにも構わず大和は、手が止まった磯風に一枚のチラシを突きつけた。パソコン教室に通いはじめて五時間ほどの初心者が作つていそうな出来栄えのチラシである。

『島攻略オンデマンド』の責任者はどこですか?」

店内で買い物をしていた艦娘たちにはわけが分からなかつただろう。彼女らには撃沈王が何かに怒りながら、わざわざこんな普通の売店にクレームをつけに来たように見えたはずなのだから。だが彼女ら以上に混乱したのが磯風だった。正直に言つて磯風は、自分が考案した『島攻略オンデマンド』の存在を今この瞬間まですっかり失念していた。

「これは私、大和個人のお願いではありません。撃沈王の命令です。

『島攻略オンデマンド』の責任者を出しなさい」

「あ、ああ、分かった。少し待っていてくれ」

撃沈王の脅しに近い命令に磯風はあわてて店の奥に引つ込んだ。そして数秒の後、『ゴチン☆』と音がしたかと思うと、磯風は頭頂部を押さえながらヨロヨロとレジ台に戻ってきた。

「すまない大和。忘れていた。この磯風が島攻略オンデマンドの責任者だった」

「だった？」

「いや失礼、過去形ではない。ちゃんとした責任者だ」

大和は当然、怪訝な顔をした。長月のような例外の存在を認めているにしても、目の前の駆逐艦相当の少女が何らかの特別性を持っているように見えなかった。

「あなたが？」

「そうだ。企画をしたのも、そのチラシを作ったのも私だ」

「私と武蔵に営業を送ったのも、あなたの指示？」

「まあ、そういうことになるだろうな」

この子は形だけの責任者だ、大和は確信を得た。島攻略オンデマンドの営業として現れたイムヤとゴーヤ、あの控えめに言って頭アイアンボトム・サウンドの潜水艦たちが斑鳩以外の言うことを聞くはずがない。

「——では、ヤーナム島を無害化できるレベルのフィクサーを手配したのも？ あなただと言うの？」

「それは……ちよつと複雑な事情があつたんだ」

買い物客たちが野次馬になろうとするのにもお構い無しに、大和は磯風に詰め寄った。

「奥にいるのね？ 事に詳しい誰かが」

「待ってくれ。お姉さんは今……あー、百人の真剣勝負で忙しい」

「お姉さん？ お姉さんって誰？」

「お姉さんは売店のお姉さんだ。それ以上でもそれ以下でも——ま、待ってくれ大和！」

大和はレジ台の奥に押し入り、腰にしがみつくと磯風を引きずりながらダンボールのジャングルめいた薄暗いバックヤードを突き進んだ。

「今はまずい！ 今度こそドン勝が食べられそうなんだ！ 邪魔しないでくれ！」

さらに奥に進むと、急に生活感にあふれる六畳ほどの茶の間に出た。部屋の中心からまだ撤去される気配のない炬燵のまわりはゴミこそ落ちていないものの、炬燵から少し身体と手を伸ばせば冷蔵庫や戸棚などから物を取り出せそうだった。部屋の主の面倒くさがりな

性格がそのまま模様として表れている。電源タップには複数台のスマートフォンが乱雑に繋がれている。部屋の奥に配置された大型モニターでは今、ヘルメットを被った男がライフルを持って草むらの中を匍匐前進していた。

そんな部屋の様子も、スマートフォンも、ゲームの画面も、大和の目に入らなかつた。

「どうして……あなたが生きてるのよ。極楽」

「我が生キテタラ不満カ？ 最悪ノ人権侵ガア」——ツ

!?! クソガ！ 芋ツテンジャアネーヨ死ネツ！」

茫然として立ち尽くす大和に向かって、売店のお姉さん、極楽はヘッドセットを投げつけた。

第50話 ショートショート集

◆― 叢雲と一ノ傘副司令 ―◆

こうも遅い時間に小浴場を一人で使っていると、寒さともあいまって少しさみしい気持ちになる。

お湯に口までつかってブクブクしていると、一ノ傘副司令が入ってきた。

「お疲れ様やね叢雲ちゃん。竹櫛も後で入るってよ」

「どうも、お疲れ様です」

「竹櫛が来るまで待つならワタシは邪魔かいな？」

「からかわないでください」

「にはは」

雷電姉妹から清い心と身体を奪った人間の言うことは冗談かどうか分かりにくい。

「そういえばさ。すっごい今更なんやけど、今は頭の機械、外しとるよね」

副司令は両手を頭の上に添えてウサギの耳のようにピョコピョコさせた。

「あ、ちよい待って寒っ！」

だんまり二人で湯船につかっているのも気まずいし、副司令から話を振ってくれるのはありがたかった。

「でき。あのウサギみたいな機械って何なん？ 他にも何人か頭に似たようなの浮かべとるよね」

「本当に、すっごい今更ですね」

「むしろ今まで気にせんかった自分にビックリしとる。で、何なん？ 装備したら強くなるん？」

「強くなる……というより、補ってるんです」

「ほう」

「元々、艦娘としての適正が低かった私には補助が必要だったんです。自転車の補助輪みたいなものです」

「あ、ああ。なるほど。……なんかゴメン。変なこと聞いたね」

「気にしないでください。今の私にもう補助輪は要りませんし、制服の一部くらいにしか思っていないですから」

「知らなかったわあ。後でちよつと貸してくれん？　ワタシも装備したら海の上に立ってんかいな」

「んー……、やめておいてください」

「やめとく。長湯させてしまったけど大丈夫？」

確かにけつこうな長風呂になつてしまった。ポカポカしすぎると湯上がりの牛乳も味が落ちる。

「私はこれで。今日はお疲れ様でした」

「うん、お疲れ。ワタシは竹櫛が来るまでもうちよい——あ、いや、うん。お疲れ」

「お疲れじゃあないです」

私はまた湯に戻った。

「副司令。私からも今更な質問があります」

「明日も一日がんばるぞい」

「副司令と竹櫛司令官の仲ってどれくらいなんですか」

「あ、そ、そういや仕事ひとつやり残しとった。ワタシもう上がるわ」

「仲良しなんですか。混浴レベルですか！」

「わからんわからん。ワタシには何の話かわからん」

「ちよつ、逃げるな！　待ちなさい！」

次の日、私と副司令は風邪をひいた。

◆— タマ改二 —◆

タマはなかなか面に倒くさい猫である。

そんなに綺麗好きを自称するのなら風呂に入れと言ってもなかなか聞かず、そのくせ一度風呂に入るとなかなか上がろうとしない。お前は風呂が好きなのか嫌いなのかどっちなのかと何度問い詰めても「多摩は猫じゃあないにゃ」の一点張りである。

木曾が「ほら姉ちゃん、キンキンに冷えたビン牛乳が待ってるぞ」と

言う、五割ほどの確率で興味が湯船の外へと移る。

「今日は木曾のおごりにや」

「今日『も』の間違いだろ。つーか今週に分、後で返せよな」

「な、なんてこったクマー!?!」

タマがサツパリホカホカして脱衣所に戻ると同時に、ジャージ姿の球磨型の長女が突然騒ぎ始めた。

「多摩のジャージが盗まれて、代わりに『改二』の制服が置いてあったクマー! あ、下着は残ってたクマ。でもこうなったら、とりあえず、しかたなく、今は『改二』制服で我慢するしかないクマ。多摩、泥棒探しは後にして——」

タマは球磨の顔面を容赦なく引つかいた。

「グマツ!?!」

さらに球磨が着ていたジャージ上下を無理やり剥ぎ取り、それを着てさっさと脱衣所から出て行ってしまった。

「なあ球磨姉ちゃん。今度の作戦は完璧だつて言つてなかったか」

「……姉ちゃんを躊躇なく引つかくような娘に育てた覚えはないクマ……」

「もう引つかかれ慣れてるもんだと思つてたよ。——だめだ全然分からねえ。どこが『臭い』んだ、この制服は?」

「たぶんネコにしか分からない臭いがあるクマ。何回洗つてもダメな臭いが」

「それを理由に改二の制服を捨てる心理も分からねえな。はあ……どうする? もう姉ちゃんが使つたらいいんじゃないか」

「木曾、ナイスアイデアだクマ」

球磨は捨てられたタマの改二制服に袖を通した。

「じゃーん! 今から球磨は改二——お、おお! 悪くない着心地クマ。安眠すらできそうクマ」

「その格好で寝るのか? まあ使われないよりは寝間着になるほうがマシだろうけどよ」

その翌朝、軽巡察でのことである。

木曾はあくびもピタリと止まるほど妙なものを見た。

「おはよう多摩姉ちゃ……あ？」

部屋から出てきたタマは、ヨレヨレになってしまっている改二の制服を満足げに着ていた。

「にゃ」とだけ挨拶したタマが行ってしまったあと、同じ部屋から下着姿の球磨がヨロヨロと出てきた。顔面には引っかけ傷が昨日より増えていた。

「——ああ。そういうことか」と木曾は得心した。「球磨姉ちゃんの匂いがついたからネコの的に安心したんだな」

「……クマ的には納得いかねークマ」

◆——艦娘ツポイコトヲシタイ春雨——◆

艦娘であらんがために艦娘っぽいことをしようと思った春雨は、演習の時などで使用するメガホンを用意した。

春雨はたいへん真面目な深海棲艦である。

艦娘としての道を歩み続けると決意してからというもの、彼女はいつそう艦娘たらんと振る舞うようにした（ように当人は思っているのだが、実際のところ自身が深海棲艦であることを忘れかけていたものだから艦隊生活にほとんど変化はなかった。あえて言えば白露型一番艦に「好きじゃあない」と言われた麻婆春雨を作らなくなっただけらしいである）。

「艦娘ツポイコト……秘書官、時報……総員起コシッ！ カナ？」

ちょうど今月の駆逐艦寮の寮長当番は春雨である。

四階建ての寮の中庭、すべての部屋が見渡せる敷地の中心部で、春雨は大きく深呼吸をした。

時刻はマルロクマルマル。春雨はメガホンを構えて叫んだ。

「ソウイン！ オコシィー!!」

中庭に春雨の音が響くと、三つの部屋の扉が弾けるように開いた。何事かと飛び出してきたのは叢雲、吹雪、雷電姉妹の四人だった。

しかし四人とも、中庭でメガホンを持っている阿呆が特に切羽詰った様子でもないのを見ると、ブツブツ文句を言いながら自室に戻ってしまった。

それだけだった。春雨はしばらく待ってみたが他の部屋の扉が開きそうな様子は無い。

「チャント聞こエナカツタノカナ？」

春雨は今度は腹にしこたま空気を取り込んだ。

「ソウインツ!! オーコーシー——ツ!!!」

春雨がふたたび叫ぶなり、今度は寮の八割ほどの扉が開き、中から枕や目覚し時計を持った駆逐艦たちがワツと出てきた。

「いま何時だと思ってるんだ！」

誰かがそう野次を飛ばしたのを皮切りに、中庭の春雨めがけて四方八方から物が投げつけられた。枕はまだいい。しかし目覚し時計は痛い。

「痛ッ、痛イッ！」

隠れる場所もない春雨がカリスマガードで耐えているうちに、砲撃は止み、駆逐艦たちは自室に引っ込んでしまった。涙目の春雨の他に残ったのは散乱した枕や碎け散った目覚し時計だけだった。

時刻はマルロクマルゴ。

「……艦娘、ヤッパリ私ノ敵ナノカナ……」

◆——弓道警察——◆

「翔鶴姉……アーチェリー、そんなに面白い？」

翔鶴は弓道場に似付かわしくない弓、リカーブボウをテキパキと組み立てている。

「ええ。とっても楽しいわよ。瑞鶴も始めてみる？」

「いや……。この前まで、なんか丸いのが両端に付いた弓を持ってなかったっけ？ それ、また通販で買ったの？」

「協会の方におすすり頂いて、新宿の渋谷で一式そろえたわ」

「新宿の……渋谷？」瑞鶴は首をかしげた。

「和弓と同じ力の流れで引けて、サイトを通してしっかり狙えるから楽しいの」

翔鶴が組み立てたりカーブボウ『葉桜』は黒を基調として桜色と緑色の模様が入っているためそう名付けられた（作者愛用の弓でもある。WIN & amp; WIN 製）。

「すぐよく中るのは見てれば分かるけどさあ……海では和弓を使うんだから、弓道に集中したほうがよくない？」

「もちろん弓道を疎かにするつもりはないわ。でも、弓に対する新しい発見もあるし、それにとっても良い息抜きになるのよ」

「そうかもしれないけど、でも……」

そーゆーことじゃあないんだよ翔鶴姉、と瑞鶴は言いたかった。

もし翔鶴が弓道をほっぽり出し、貴重な時間を息抜きのアーチェリーのためだけに使っていたとしても、弓道場にエアガンを持ち込んでBB弾を撒き散らす一ノ傘副提督と球磨よりはるかにマシである。

では何が悪いのか？ それは今、道場に來た加賀が教えることとなった。

「翔鶴。あなたまたアーチェリーをやるつもり？」

「軽い気分転換です。加賀先輩もやってみませんか。加賀先輩、このところ『まったく中らない』みたいですし、『射形も見るに堪えない』ほど焦りが出てますから、ここは違った視点から——」

「弓道警察よ」

言うなり加賀は翔鶴に腹パンした。

あまりに無慈悲な弓道警察の一撃。

翔鶴は膝を折った。

「な……なん、で……」

弓道警察としての用は済んだと練習の準備に行ってしまった加賀の代わりに、瑞鶴が罪状を告げた。

「『弓のことなら私、知り尽くしてますから』って顔してる翔鶴姉、ウザい。弓道警察とアーチェリー警察を足して2をかけたくらいウザ

い」

「あ……く……き、きゅ……」

あの人だつて空母一の弓道警察でウザいじゃない、と言いたくても呼吸すらままならない翔鶴だった。

◆—— 任務：ネオサイタマ鎮守府との交流を深めよ！ —— ◆

駆逐艦たちが羨ましいと提督にぼやくと、「私が直々に肩をもんでやる艦娘は山城、お前だけだぞ」と肩甲骨のあたりをグリグリされた。秘書艦の席でくつろぐ私と背後から手を伸ばす提督、こんな私たちを叢雲が見たらどんな顔をするか知らん。

私が700円の指輪を受け取ってからというもの、私と提督の仲はまあ何と言うか、こんな感じに変化した——のはまた別の話。

「じゃあマッサージ交代します。私が提督の肩をもみますから、任務をよみうりランド泊地の視察に変えてください」

「ならん」と提督は一刀両断した。ちよつと……ほんの少し仲良しになったところで駄目なものは駄目らしい。「駆逐艦を中心に、もう何人が何回出撃したか分からん」

「分からんって、もう完全に遊ばせてるじゃあないですか」

「私にも色々と思うところがあるのだ」

「その思うところに戦艦が入ってなくないませんか？ 戦艦だけは誰もよみうりランドに行つてないんですけど」

（このとき私は、しばらく姿を見ていない日向のことを打ち忘れていた）

「よみずい任務に戦艦だけ編成制限がかかるってことはないでしょう。差別です」

「お前ならば分かつてくれると私は信じているのだ。山城よ」

「分かりません。分かるうとする気も——」

肩の良い感じのところを押されて「あゝあゝそこです」不平をキャンセルされた。

「ネオサイタマにも娯楽はあるだろう。向こうの相手と最低限の接触

を済ませた後は好きにして構わん。小遣いも出そう。なに心配するな、我が天照大艦隊の戦艦は強い。……万一ヤクザに絡まれても戦艦ならば何とかなるはずだ」

「ならねーですよ」

「山城がネオサイイタマ入りしている間は金剛姉妹と陸奥を都市境で待機させておく。何かあれば連絡しろ。場合によってはすぐに増援を――」

「待てや阿呆提督」さすがにマツサージの手を払いのけた。「私ひとり？ 金剛たちの意味がないし、単独任務の意味がまったくサツパリ分らないし」

「複雑な事情があるのだ。話せば長くなる」

「いいですよ長くなっても。むしろ私を不幸にする事情つてもものに興味すらあります」

かくかくしかじか、と提督は言った。

「――つまり、こういうことね。不可解にも向こうから名指しをうけた三人のうち、斑鳩は多忙で無理。長月はよみずい任務中。じゃあ暇人でいらつしやる山城さんが行ってこい、と」

「我々の方はネオサイイタマ鎮守府についての情報をほとんど持っていない。今まで接点があったく無かったからな。しかし向こう側は少なくとも山城、長月、そして斑鳩の存在を知っている。お前、何か個人的な繋がりを持っているのか？」

「記憶にございませぬ……すん」

「どつちだ」

「ちよつと記憶をたどりますから待ってください」

戦艦クイーン・エリザベスとウォースパイト。

長月から聞くところによると、私たち『洞観者』の間にみょうちくりんな慣習を根付かせた阿呆らしい。特にクイーン・エリザベスの方は傲岸不遜なちっこいお子様のくせに大陣営の頂点に君臨していて、面倒なことはすべて専属メイド隊にやらせているとかいないとか。

私とネオサイイタマとの繋がりなんて、その二人を除いてある？ いやない。それにしたって私と長月、斑鳩にとつちやあ洞観者のお仲間

がいるってだけの話で、ネオサイタマ鎮守府とはなんの関係もない。交流なんて心の底からどうでもいいと思う。艦娘歴は長いけれど今の今まで関わったこともなかったし。

「思い出しましたよ提督。私、ネオサイタマ鎮守府の艦娘(?)と連絡取れます」

「本当か。まったく情報が無駄に流れたかとヒヤヒヤした」

「じゃあ向こうとは適当に話を付けておきますから、任務はそれでいいですよね」

「いいわけがあるか。現地に行つて話をしてこい」

「そもそも戦艦なら万が一でも云々とか関係ないじゃあないですか。そんなに交流がしたいなら、ええ私は別に構いませんよ。でも提督が一ノ傘副提督と一緒に行かないと、ただのお使いになりませんか」
「……よくぞ気づいてくれた。そこなのだ。そこが最も大きな問題なのだ」

提督は自分の席に戻つて座ると、もったいぶつたように机に肘をつけて大きなため息をついた。

「山城、『ブレードランナー』という映画を知っているか」

「いえ。知りませんけど」

「一ノ傘がこよなく愛する映画だ。映画に登場する鉄砲のオモチャを数万円で購入する程だ」

「あの人らしいですね。それが？」

「似ているのだ。映画ブレードランナーの世界と、ネオサイタマが」

「はあ」

「そして奴は当然、ネオサイタマに行きたがっている。何としても阻止せねばならん」

「は？ どうして？」

「言葉で説明するより見た方が早い。すぐにTSUTAYAに行つてブレードランナーをレンタルしてくるんだ。見れば分かる。あの世界に足を踏み入れているのは、鉄砲を歓迎のクラッカー程度に思える超弩級戦艦だけだ」

「いやいや撃たれたら普通に死にますし」

「今から山城を旗艦とした戦艦六人で部隊を編成しろ。ブレードランナーを本日中に鑑賞し、明日にはネオサイタマに向かえ。都市境から先はお前の単独任務となる」

「いやです。拒否します」

「一ノ傘は既に車と荷物の準備、観光スポットの調査、鉄砲のオモチヤのメンテナンスをはじめている。奴が出発する前に何としても任務を終わらせるのだ。さあ早くTSUTAYAに行くんだ。いいな」

そして私は第一執務室から追い出された。「ひとでなしの阿呆提督！」と叫んでも中から鍵をかけられた扉は開かなかった。

せめてTSUTAYAまでのバス代とレンタル料くらい渡すものじゃあないの？ 私はそう思った。誰だってそう思うでしょう。

私が扉の前で憤っていると、隣の第二執務室、一ノ傘副提督の部屋の扉が開いた。

「またケンカしてるのです……？」と電が呆れた顔をのぞかせた。

「違うのよ。副提督のせいで私が——いま副提督は何してる？」

「さあ」

「さあ？」

「出張の準備で忙しいとか言っただきり連絡が取れないのです。見つけたら伝えておいてください。『死ね』って」

「……あ、ああ。うん」

魔境ネオサイタマ。

その都市の空気は、電が吐き捨てる毒のように息苦しいのだろうか。

私の任務は始まった。

つづく……つづかない？

第51話 任務：続・ネオサイタマ鎮守府との交流を
深めよ！

<<前回のあらすじ>>

ネオサイタマ鎮守府所属の戦艦クイーン・エリザベスとウォースパイトから恐れ多くも招待賜った山城。

ネオサイタマ、暗黒サイバーデイストピア都市といえば、そう！

映画『ブレードランナー』！

竹櫛提督よりTSUTAYAで速やかにレンタル・鑑賞を済ませてから交流任務に当たれとの命令が下されたのだが、残念ながら山城の興味はB級サメ映画の方が勝ってしまった！

山城、彼女が戦艦寮でサメ映画の鑑賞会を開いていた間、一ノ傘副提督がネオサイタマ観光へと向かってしまった！

!!
どうする山城!? サメ映画を観ている暇が彼女にあるのだろうか



どうするもこうするもなく、私は提督の呼び出しを無視し続けた。誰だって怒られるために呼び出されたくはないでしょ。私だってそう。だから無視し続けた。

「二足歩行のサメってもう逆に哺乳類的にかわいいというか、サメじゃあないって思うんだけど」

なんてことを伊勢とのんきに話していると、今月の戦艦寮長、霧島がやってきて言った。

「いくら提督から逃げ続けても構わないけれど、山城に外からの来客よ。お客様を無視はしないわよね。101応接室よ」

「来客? ……——扶桑姉さま!」

「ではなくて残念だったわね。戦艦のウォースパイトという方よ」

「……帰ってもらって」

「ダメです。今すぐ応接室に行きなさい」

「じゃあ長月は？ 今日いないの？」

少しウカツ発言をしてしまう私。

「長月がいなかったから山城に声がかかった、って分かっているのね。ふむ、山城と長月って珍しい組み合わせね。何かあるのかしら」

「分かりました分かりました。行けばいいんでしょ行けば」



101応接室で待っていたお客様は、私の想像よりもずっと小さかった。

いえ待って、言い訳をさせて欲しい。山城さんは初対面の人を見て『チビ』と思ってしまうような礼を知らない艦娘ではないと。だって霧島が『戦艦の』お客様だって言うから、どんな超弩級フォーリナーが威圧してくるのかと警戒してしまうのも仕方のないことではないよ？ ねえ？ 例えば玉座のような艤装に腰掛けて紅茶を飲んでいくような戦艦を、普通は想像すると思う。でも違った。

お客様はどちらかと言うと、駆逐艦アトモスフィアすらあるカワイイ系だった。

「ドーモ、はじめまして」椅子から立ち上がった彼女はそう言って手を合わせ、オジギをした。「ウォースパイトです」

「ウォースパイト：from アズールレーン」

「……ドーモ、ウォースパイトIIサン。山城です」

長月、斑鳩、それと武蔵の他の洞観者とやりに合うのは実際これが初めてだった。だからアイサツするのも初めてで、私は洞観者たちがほんとうに面倒くさい連中であることを痛感した。助けて扶桑姉さま、山城は変なのに絡まれています。

「あなた、見たところ洞観者になって間があまりないようね」

「そんなこと分かるの？」

「アイサツで分かるわ。さて、陛下の招待に応じなかった理由を聞こうかしら。長月は？ あの子にまで無視されたとは思えないのだけ

ど」

「長月なら遠征に出てるから。ええと、長月の知り合いで？」

『あの作戦』に加わった仲間にも長月の炎を覚えてない者はいないわ」
一瞬、遠い目を見せたウォースパイトは確かに、戦艦としての矜持を持つ、そんな風格があった。ちっこさとのギャップがそう——これが今や死語となった『萌え要素』ってやつか知らん。なんて口に出したらプライドにつけた傷を10倍にして返されそうな雰囲気がある。

とにかく目の前の人は小柄でも戦艦は戦艦。少なくともウチの日向なんかよりずっと戦艦。



「陛下、クイーン・エリザベスは洞観者たちの炎を蒐集しはじめたの」
それが前日に私らをネオサイタマ鎮守府に集めようとして、今日ここに来た理由らしい。

私は「はあ。へえ」と言った。言ったというか他の言葉が出なかった。

向かいに座るウォースパイトは勝手に話を続けた。

「陛下の炎の特性がようやく判明したの。炎の燃料となる炎——陛下の能力下にある炎は記憶・保存されて、一度は消えた炎でも陛下の能力で再び点火できる。ロイヤルネイビーを統べる陛下らしい能力だわ。そして、『この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する』。まさに洞観者を象徴するかのような能力でもあるわね」

「え、待って待って。話についていけない」
「なら今からついてきなさい。あなたも日が浅くても洞観者なのだから」

私をおいてけぼりにしたまま、ウォースパイトはポーチからシルバーのZipperライターを3つ取り出した。

「このライターは一度、陛下の炎を灯したライターよ。これで陛下以外の洞観者の炎を保存しておけるってわけ。便利でしょ」

「ん？ んん？」

「鈍いわねえ」と煽ってくるウォースパイトⅡサン。「まさかとは思いますが、炎の『引火』を知らないわけではないわよね」

「……悪かったわね。いや、私は悪くないと思うけど」

「まあいいわ、教えてあげる。百聞は一見にしかず。山城、ちよつと炎を出してみなさい」

ちよつと炎を出す。

こんな言葉がサラツと出てくるあたりも、私が洞観者なるものを未だ受け入れられない理由のひとつだった。まあ、出せちやうんだけど。炎。

前にも披露したことがあるけど(『ラックレッサー山城 6』でやってるので読んで下さいおねがいます) 私は青い人魂を生み出せる。生み出せちやうのよこれが。草木も眠るウシミツ・アワーの墓地を漂っていきそうなやつが。触ると熱くもなく逆に少しヒヤツとする。これが私の能力なわけ。こんな程度のが。長月や斑鳩と比べると恥ずかしいくらいシヨボくて泣きたくなってくる。

ポツと指先からひとつ人魂を作ってみせると、シヨボさを知らないウォースパイトにはウケがよかつたらしく少し関心した様子だった。「綺麗な炎じゃない」とも言ってくれた。

「じゃあライター1個に炎を移して頂戴」

「こう?」Zipproひとつに人魂を付けると、冷たい火なのに燃え移った。「はい。これでいいの?」

「ありがとう。これであなたの性質を持った炎はこのライターに保存されたわ」

「へー」

ウォースパイトに火が付いたままのライターを渡すと、彼女はふたをパチンと閉じた。一度でも火を付けたらそれでオーケーらしい。

「そのライターで私の能力が誰にでも使えるようになるの?」

「陛下以外の洞観者は僅かしか使えないわ。永続的にコレクションできるのは陛下の燃料の能力あってこそなの」

「ふうん。能力のコレクションってなんかカツコイイわね。——いや待って。その陛下さん、クイーン・エリザベスってとんでもなく凄く

ならない？ 例えば長月の炎を持っておくだけでも無敵じゃあないの」

「ようやく理解してくれたようね。ま、能力の何割を保存して発揮できるかはまだ不明だけど、そういうことよ。洞観者たちをネオサイタマ鎮守府に呼集める理由も、意義も、わかってくれたかしら」

「それはわからない」

「……なぜここまでできて否定されるの？」

「だってネオサイタマだし。噂だとデイストピアなんでしょ？ そうだ、このあと戦艦寮で『ブレードランナー』っていう映画の鑑賞会やるんだけど、一緒にどう？」

「お誘いに感謝するけど遠慮するわ。洞観者が誰も招待に応じないせいで、この私が各泊地をまわってるの。次は舞鶴ね。もし私の苦労を心配してくれるのなら、この艦隊のあと2人の洞観者の炎も同じようにライターに保存して頂戴。特に長月の炎は是が非でも手に入れないきやだわ。ああそれと、普通の配送業者じゃあなく、ちゃんと伝書猫で送ってね」



この鎮守府を去るときに「オタツシヤデー」と言ったことを除けば、ウォースパイトは思っていたよりは常識的な戦艦だったと認めてあげなくちゃあいけない。ネオサイタマがデイストピアだと私が言ったことに否定も肯定もしなかったことが気になったけど。

そうそう。ウォースパイトが去ったあとでブレードランナーの鑑賞会をやったのだけど、残念ながら私には——芸術的センス？ 感性？ が合わなかった。映画を最後までちゃんと（寝落ちせず）観たにもかかわらず何が何だか色々理解できず、ただ『強力わかもと』だけが頭に残った。ストーリーはまるで頭に入ってこなかったのに。強いて感想を言えば、ウォースパイトはよくもまあ、あれに雰囲気に近いらしい都市に住んでいても頭がおかしくならないなあ、つてころだった。

最後にひとつ。今回ネオサイタマ鎮守府との交流ができたかどうかはさておき、ネオサイタマに観光に行っていた一ノ傘副提督は無事(？)帰ってこれはしたものの、しばらく「アイエエエ……」と言いな
がら何かに怯えるようになってしまっていた。どうやら何か
がフ
ラッシュバックするらしい。それを面白がってしまった白露が副提
督を背後から脅かして……いえ、この事件は忘れましょう。副提督の
自業自得とはいえ、粗相はね……ええ、みんな忘れるべきよ。

第52話 洞観者つてなにクマ？

ドーム。斑鳩型航空母艦、一番艦の斑鳩です。

今回はですね、『洞観者(ドウカンシヤ)』とは何なのかを、僕が知っている範囲で解説していこうと思います。実際、聞き慣れないとか一般には認識されていない言葉ですしね。大事ですよ、解説。たぶん。

解説のお相手は球磨型軽巡洋艦の一番艦、球磨さんです。

「球磨だクマー」

よろしくお願いします。

ところで画面外の皆さんは『軽巡・球磨』と聞いてどのような姿を想像しますか？ おそらく腕と脚が開放的な制服を着ていることでしょう。あるいは浴衣姿？ サンタクローズ？ ですが僕の前にいる球磨さんは寒がりなので長袖で、ついでに言えば袖の下に飛び出しブレードを仕込んでいます。アサシンブレードです。怖いですよ。やめてほしいですよ。でもそれが球磨さんのアイデンティティなんですから仕方ないですね。

「そーゆー斑鳩は深海棲艦の空母ヲ級にそっくりだクマ。髪型は駆逐艦の睦月を真似してて、全身真っ白い上衣袴がユーレイみたいな奴クマ」

どうせ僕は深海棲艦のなりかけ、半端者ですよ。

今回はこのデコボコギザギザした二人で解説をしていきます。

「クマはギザギザしてないクマ。オマエが勝手にビクビクしてるだけクマ」

僕をナイフでぐっさり刺したことがある人がよく言いますよ。



「わかりやすく説明するクマ。洞観者つて何クマ？」

辞書のとおり言ってしまうば『本質をつかんだ艦娘』なのですが――説明になってない上に、普通の艦娘を無知と見下しているようで、

正直なところ言いづらいんですよ。

あの、球磨さん？ 最初にお願いしますが怒らないでくださいかね？

「話が進まないクマ。さっさと言うクマ」

ええ。では。

深海棲艦の侵略と艦娘による抗戦、これはどうしようもないくらいの茶番です。はつきり言って戦うなんて馬鹿馬鹿しいです。

「茶番？」

そうです。僕らが出撃するのも、深海棲艦が海を制圧して陸を破壊するのも、双方にとって無意味で無価値なことなんです。

これが洞観者から見た『戦争』です。

逆に言えば、その真相をうっかり観測してしまった艦娘のことを洞観者と呼んでいます。まあ、呼び方はあくまで洞観者たちの中だけで通じるものですけど。

でも、絶対に、これだけは勘違いしないでくださいね球磨さん。僕たち洞観者は球磨さんの艦隊行動を否定するつもりはこれっぽっちもないんです。無駄だ無駄だと言って深海棲艦を無視したりはしませんし、今までの僕だってちゃんと艦娘としてやってきてましたよね。すべての洞観者が同じように『戦争』のバランスを崩壊させないよう決意しています。これからもそうするつもりです。そこはどうか心配しないでください。

「……本質的に全部、無意味だって言うクマ？」

言い方は乱暴ですけど、そうなっちゃってます。

「じゃあ当然、無意味っていう根拠を斑鳩はこれから話すはずクマ」

それはできません。

「ああ？」

ほら怒った！

ですから洞観者は可能な限り普通の艦娘にその境涯を明かさななんです。球磨さんや叢雲さんみたいに艦娘としての軸がしっかりしてる人ならまだしも、大抵の艦娘はやる気をなくしちゃいますよ。今までの戦いはすべて無駄だった、なんて言われたら。

「説明するならクマをちゃんと納得させるクマ」

すべてが無駄だという真実を洞観し、『秘匿する』。艦娘としての正しい在り方からうっかりこぼれ落ちてしまった者たちが仲間を道連れにしないよう覚悟を決める。それが洞観者です。——長月ちゃんが洞観者だってバレてしまったのは本当にイレギュラーなことだつたんです。その他の洞観者は、ああ武蔵さんと大和の関係をのぞいてですが、誰一人としてバレずにやっています。

球磨さんには洞観者の存在だけを認めてほしいんです。かつ、僕ら洞観者が見る世界を知るべきではないんです。ほら、底なし沼に落ちた人は「こつちに来るな」としか言えないって、あるじゃあないですか。そんな感じですよ。

あ、でも『神様のゲームボードの上で踊らされてる』みたいな類ではないですよ。そこは安心してください。

「なにに安心すればいいのかも分からんクマ。まあ、隠したいのなら探らないで置いてやるクマ」



洞観者になる——なってしまう仕組みですが、これは全然わかっていません。

「オマエ本当に解説する気あるクマ?」

だって分からないんですもん僕だって気がついたら猫が——あ、そうです猫です。

「猫?」

洞観者になると必ず賢い猫が一匹、その人の元に現れるんです。最近の洞観者、山城の場合には夜の山奥の中で黒猫が寄ってきたっていうから間違いないです。……たぶん。

「ふーん、猫。使い魔みたいな感じクマ?」

あ、そう! それです使い魔! 僕ら洞観者はまさにそんな感覚で猫と接しています。……いや、どちらかというと僕らの方が使われているのかな? まーとにかく本当に賢い猫ですね、伝書猫といって、

ちやんと手紙とか届けてくれるんですよ。

「クマの姉妹艦にも猫がいるクマ」

タマはお使いなんて絶対にしてくれないでしょ。

洞観者になる仕組みが分かってないのは、人数が少ないのも理由のひとつなんです。各泊地にだいたい一人から三人くらいしかいませんからね。検証しようにも絶対数が足りません。

「二人から三人？ 天照隊はどうなってるクマ？」

長月ちゃん、山城、イムヤ、ゴーヤ、イク、ハチ、シオイ、そして僕。かなり特殊な艦隊だつて武蔵さんには言われています。

「この艦隊に何かあると考えるのが普通クマ」

それが本当に心当たりが見つからないんですよ。天照隊の最初の洞観者、長月ちゃんに聞いてはいますけど、「あるタイミングで猫たちが一齐に青い炎を点けた」としか知らないらしくて。そのタイミングの後から洞観者になった僕や山城はレアケースだそうです。

潜水艦たちは……ええ、まあ、ええ。何なんでしょうね。



洞観者の洞観、それともう一つの大きな特徴が青い炎です。見た感じは——言ってしまうと、深海棲艦の上位クラスが目とかから出してるアレに近いですね。

「斑鳩オマエ、やっぱり深海棲艦クマ？」

おっと、その理屈だと長月ちゃんや山城も深海棲艦になっちゃいますよ。

この炎とはですね、なにも寝食の時や戦闘中なんかにはやたらめったら出すものではなく、その洞観者の特性・能力の表れなんです。カツコイイ表現をすると固有スキルってなものです。

「一部の巡洋艦が普通の巡洋艦と違って水戦・水爆機を搭載できるのとかとは違うクマ？」

ええ、もう全然別物です。艦娘として有利に働く能力持ちの洞観者は少なくないですが、使い道が見出せない能力や、デメリットですら

あるのもありますね。

「アメリカットの能力って何クマ？ 面白そうクマ」

一例を挙げると、中途半端な空気圧を生み出す能力ですね。彼女ほど悲惨な能力持ちはいないでしょう。

「なんでクマ？ クマなら持つておいて損はしなさそうな能力クマ」

圧力を生み出す時にですね、音がするんですよ。……おならみたいな。

「……………なんかすまん」

僕に謝らないでください。僕の能力じゃあないですからね。

ちなみに僕の能力は『あらゆるものを僕の装備品にする』というものです。

「斑鳩はどうでもいいクマ。長月の能力について説明しろクマ」

ええ……。

……長月ちゃんですか。それが強すぎて逆によく分からないんですよね。むりやり言ってしまうえば魔神化だって武蔵さんが。僕も同じ意見です。まず僕らが能力発現の前に青い炎を展開させる、そのワックションすら必要ないのが異例で、長月ちゃんの特長です。

普通はですね。『凶化』を発動させることで青い炎を出せるようになるんですよ。

「強化？」

凶化。

「凶化」

はい。

ちよつと気分的に悪くなるその状態でのみ、炎を出して能力を操れるようになるんです。この凶化と青い炎こそ洞観者の最も大きな特徴ですね。分かってもらえたでしょうか。

「おならと魔神化だけじゃあ性質がよく分からんクマ。仕方ねーからオマエの能力も聞いといてやるクマ」

ええ……。

……僕の炎はですね、いろんな固体、液体に引火するんですよ。そうやって燃やした物はなんでも操れるようになります。例えば鉄筋

コンクリートの壁に炎を引火させると、燃えた部分をバコツとひっぱがして軽々持ち上げることが出来ます。艦娘的な利用方としては、戦艦の主砲を燃やせばそれを装備して運用できます。空母なのに。

「ふうん——。その炎で火傷はしないクマ?」

青い炎はむしろひんやりします。ためしに今、僕の炎に触ってみます? 球磨さんに引火させてしまうと僕は『球磨さんを装備』しちやいますけど。

「気味悪い」と言うなクマ」

まとめると、洞観者は自らの青い炎によって特殊な能力を操ります。僕らが艦娘という存在から余計にかけ離れたように感じてしまう一因にもなっています。

能力の種類は千差万別……というほど洞観者の数はいませんが、様々で不可思議なことを芸としています。

能力についてはこんなところでしょうか。



ああ、それともう一つ、大切なことを忘れてました。洞観者と妖精との関係ですが、これが悲しいんですよ。

「妖精? 艦装を動かしてくれる妖精のことではないクマ?」

はい、その妖精です。

戦争は無駄。艦娘は無意味。そんな目をしているからかもしれないが、妖精との付き合いがとても冷淡なものになってしまっています。いくら僕たちが話しかけても反応はもらえませんし、仕事はとても機械的になってしまっていて……まるでロボットです。

戦闘機にいくら乗っても習熟しようとはしませんし、困難な戦況を前にしても司令部施設はまるで無関心です。

さらには応急修理要因に応急修理女神——轟沈するほどのダメージを洞観者が被った場合、ダメージコントロールは機能しません。装備した時から妖精は、つまり最初から諦めているんです。沈むものは沈むのだと。

「んな馬鹿な……じゃあ、ダメコンを用意しておきながら轟沈した艦娘がいたってことクマ？」

いえ。以前はその可能性があるから洞観者たちの間で情報共有を厳にしていたのですが、今は実験によってダメコンが機能しないことが確認されています。

「実験、って、どうやったクマ？　まさかわざと轟沈したとか、そんな阿呆な……」

そのとおりです。いますよね、天照隊にはわざと轟沈する阿呆と、その下で備える阿呆が。そんな実験を平然とやってのける潜水艦たちが。

「……頭がどうかしてるクマ」

同感です。イムヤ達のやることは本当に心臓に悪いですよ。でもおかげで可能性が裏付けされて洞観者たちのモヤモヤはなくなりました。僕ら洞観者はダメコン要員を抱えながら沈みます。

おつと違います違います。そんな顔しないでください。ダメコン頼みの行動ができないってだけですから、普通の艦娘のように気をつけていればいいだけのことです。ただ、他の仲間には『普通じゃあない』ことを悟られないようにしないといけません。

「そんなの、いつまでも隠しきれるものクマ？」

まあ何とか。あれこれ情報共有しながら今のところはやっていけてます。……天照大艦隊を除けば、ですが。



どうでしょう球磨さん。ここまでの話で何か。

「洞観者になった時点で、艦娘やめるって選択肢はないクマ？　運良く扱いやすい能力を持ったとしてもデメリットが大きすぎるクマ」

言われてみればそうですね。二人くらい前線を退いてハングド・キャットでアルバイトをしている子もいますが、艦娘までやめてしまおうって話は聞きません。

たぶん仲間意識が強いからですよ。特に武蔵さんや長月ちゃん達、

ほぼ同時期に洞観者になった艦娘たちはその傾向が見られます。頑なに口をつぐまれるんですが、どうにも長月ちゃん達は武蔵さんのために、力を合わせてシリアスなことをしでかしたっぽいんですよ。十中八九、犯罪行為です。

「マジクマ？ やべー連中クマ」

アサシンブレード忍ばせてる人には言われたくないと思います。

ちょうど話そうとしてたハングド・キャットの名前が出ましたね。

「それなら知ってるクマ。大和型が何故か喫茶店やってるっていう戦力の無駄遣いクマ」

ま、まあ確かに大和型を遊ばせてるように見えますよね、普通は。

洞観者は危なっかしさを抱えているくせに、猫のネットワークでつながって大きなことをやらかす性格をしています。さつき言った犯罪、つまり暴走です。これを制止して制御するために武蔵さんが進んで先頭に立って、ハングド・キャットという秘密結社、かつ喫茶店を作りました。なにせ大和型ですからね、組織のトップとして名乗りを上げた時にはひとつも文句がなかったそうです。まあ、もちろん、面倒事を率先してやってくれるという人にケチなんてつける理由もなかったのでしょうか。

組織としてのハングド・キャットの活動は、とにかく秘匿、秘匿ばかりです。いちばん最初に言った『無駄な戦争』を観測しながら表に出さないよう、武蔵さんからの指令という形で協力し合ってます。伝書猫のことは話しましたよね。大切な情報は猫に託して、本当の本当に火急の時だけ専用の携帯電話を使ってやりとりしています。ちなみに、まだ僕の携帯電話が鳴ったことはありません。

「じゃあ本当に、猫が手紙を持ってくるクマ？」
そうです。

「メールとかSNSは使わないクマ？」

秘密結社だから……だそうです。まあ、他にも通常の艦娘の任務の内に隠した活動もありますから。

ところでハングド・キャットのもう一方の面、喫茶店については――
球磨さん、行ったことありますか？

「コーヒーがマズかったクマ」
あつはい。それだけの認識で十分です。

◆◆
他にはですねー。ええと、いえ、球磨さんは別に知らなくてもいいですね。今のはナシで。

「なに隠し事してやがるクマ。ぜんぶ話す約束クマ」

いえいえ隠すような事でもないんですけどね、これは……。洞観者は礼儀知らずじゃあいけないんですけど、逆にシツレイでは？ と僕は思ってる作法があるんですよ。

「ほう。どんなものクマ？」

アイサツは神聖不可侵の行為です。古事記にも書かれています。アイサツはされれば返さなければならぬのです！

「……………うん？」

ドーモ、球磨さん。斑鳩です。

「は？ あ、うん、こんにちはクマ」

駄目ですよ球磨さん。ちゃんと手を合わせてオジギしないと、シツレイです。

「……………わ、分かった、もう分かったクマ」

相手が深海棲艦だろうとアズレン勢だろうと、アイサツという礼儀も知らないサンシタがイクサの中で生き残ることがありますよ！

「も、もう十分クマ。オーケー理解したからもういいクマ」



洞観者について僕から教えられるのはこんなところです。どうでしょう、お役に立てたでしょうか。

「ん……………。いっこ質問クマ。洞観者が普通の艦娘と敵対することはあるクマ？」

ない、と僕は断言したいです。洞観者をまとめている武蔵さんと撃沈王・大和のコンビが決裂でもしない限りは平和なはずですよ。

球磨さんの心配は、例えば魔神化長月ちゃんが敵に回ったらどうするか、ということですよ。大丈夫です。洞観者になったところで艦娘としての部分を捨てたわけではありませんし、それ以上に仲間を捨てることはありません。僕だって青い炎の能力は仲間のためだけに使うつもりですから、絶対に——という今後のフラグでもありませんよ。普通よりちよつと手間がかかる艦娘、くらいにどうか思っておいてください。

「ふうん。まー今のところは信用してやるクマ」

はい。ありがとうございます。では洞観者の話はこれで。

……そ、それじゃあ、僕はちゃんと話しましたし……球磨さん？

「分かってるクマ。ほれ、ハロウィーンの時の駆逐艦たちの仮装姿、しっかり撮影しといたクマ。このUSBメモリに入ってるクマ」

ありがとうございます！ いや、いや、本当に！

「仕事でハロウィーンに参加できなかったから気分だけでも味わいたい」って、別に今からでもお菓子をくれてあげれば駆逐艦は普通に喜ぶと思うクマ。どうして写真クマ？」

え？ いやだから気分の問題ですって。やっぱりこう……ハロウィーンといえれば仮装こそが醍醐味じゃあないですか。その記念写真ですよ、記念写真。

「渋谷のパリピみたいなこと言ってるクマ。斑鳩オマエ、イベント好きだったクマ？」

え、ええそれはもう！ 仕事の疲れも吹き飛びますよ。

「ふうん。ふうん。まあいいクマ。情報、感謝してやるクマ」

ええ。長い解説の傾聴、お疲れ様でした。



あ、そうだ球磨さん、最後にひとつ。

この成句はご存知ですか。

『この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する』

「クマ？——聞いたことはある、気がするクマ。それが？」

ああいえ、ただ聞いてみただけです。ふと、何だろうなと思いません。

第53話 極楽とは程遠い極楽 ①

「こちら大和。天照大艦隊への潜入に成功したわ」

◇
「竹櫛くんと、ピザでも、食べよつか」傘姫は撃沈王の眼光をまったく意に介さない。

「……遠慮します。傘姫提督はまた仕事を抜け出して、斑鳩に怒られますよ」

◇
「どうして大和ったら、こんな影に、隠れてるの？ 大和って、売店にも行けない、くらい、お嬢様、だったっけ？」

「——いいえ。お陰様で、もうコソコソする必要はなくなりました」
「売店、に行くの、やめた方が、いいと思う、けどなあ」

◇
「これは私、大和個人のお願いではありません。撃沈王の命令です。『島攻略オンデマンド』の責任者を出さない」

「あ、ああ、分かった。少し待っていてくれ」

◇
「どうして……あなたが生きてるのよ。極楽」

◇ ◆
以前の、数メートルもの高さからロードローラーが落下する轟音。

今の、怪しげに天照大艦隊を探りを入れる撃沈王・大和。

これに気づかない球磨ではない。大和が分け入った売店の客の一人となって球磨はその様子をつぶさに観察していた。

「どうして……あなたが生きてるのよ。極楽」

「我が生キテタラ不満力？ 最悪ノ人権侵ガア」

!? クソガ！ 芋ッテンジャアネーヨ死ネツ！」

球磨は大和の背後から音も無く忍び寄った。

ナイフで脅すか？ いや半端で大人しくなるお姉さんではない、問答無用の暴力で制圧する。得意とする徹甲弾めいた蹴りを大和の影

から放つ。

「グマ、——アあ!？」

五体を奪った責任は問い質した後でとればよいと覚悟して放たれた蹴りは、球磨の足は、だが極楽に片手で容易く掴まれた。鋼板に穴を空けるほどの蹴りが、である。

大和も直感に従って右拳を、顔面を砕く勢いで放っていた。だがこれも極楽のもう片手が止めた。

「アー？ 才前ラ我ヲ殺シテ店ヲ奪ウツモリカ？」と売店のお姉さん、極楽は両手を痛がるそぶりすら見せない。球磨の蹴り、大和の拳は通常の艦娘が放ちうる最高クラスの当身技である。それを真正面から受け止めてもなお、極楽の面倒臭そうな顔は崩れなかった。「オイ仕事シロ磯風。コイツラヲ店ノ外ニツマミ出セ」

「大和も磯風もすつこんでるクマ。クマはお姉さんに話があるクマ」
「あなたがどいていなさい。極楽の相手はこの大和がせねばなりません」

「お、落ち着かないか二人とも」と磯風は三人の間にぎゅうぎゅうと割って入った。「いったいどうしたというのだ。お姉さん、何をすれば二人をここまで怒らせるのですか」

「あらあら。ケンカ、かな」さらには傘姫まで追って来た。「よくない、ねえ。ほら、みんな仲良く、ね」

売店のバックヤードのさらに奥、六畳ほどのお姉さんの部屋でわざわざわちやと言い争う五人。

「まさか磯風もグルクマ？ どうなってるクマ？」「なぜここに傘姫司令が？」「極楽あなた、ずつとこんな場所に隠れてたのね」「このお店、大丈夫、なの？ みんな見てる、けど」「傘姫提督、あなたにも聞きたいことがあります」「クマの邪魔すんなクマ！」「おちつけ球磨、ほらどうぞ」「あなたの用事は後になさい。今は私の仕事中です」「はあ!？ 撃沈王が天照隊に何の用クマ！」「まあまあ。みんな、ほら、まああ」「お姉さん、ほんとうにもう何をしたんですか」

「才前ラ全員出テケ！ 我ノ部屋カラ出テケ！」



「明日クマ。明日、売店のお姉さんに問いただすクマ」

叢雲、金剛、電、雷、吹雪を内密に集めた球磨は核心に迫るための一手を五人に話した。

ここ天照大艦隊には、艦隊を崩壊させようとする者の手がかかっている。それは例えばようかん味のカロリーメイトという形をした惚れ薬で総旗艦を失跡させるような、艦隊を内部からむしばむ手段を取る魔の手である。あっさりと罠にかかった叢雲は実際、艦隊からの逃亡まであと一歩のところだった。叢雲と共に逃亡を図った磯風は艦娘を辞め、売店でアルバイトをするまでが事の顛末だった。

犯人探しのほとんどを球磨まかせにしていた他の五人は、まさか売店のお姉さんがという盲点を、難しい顔をして頭の中で検討した。

「お姉さんが普通じゃあないのは間違いないクマ」

球磨の言うことを盲目的に信じたい五人は、いや球磨も含めて、とてもシンプルな疑問を持たざるを得なかった。なぜ売店のお姉さんなのかと。そして売店のお姉さんがなぜ、なのかと。

確かにお姉さんは愛想まで売るような人物ではない。アカシマートという暗黒メガコーポのフランチャイズ戦略に唾を吐き、天照大艦隊の提督に頭を下げることも一度としてなく、まるで孤立無援のように見えるながらも悪魔的品揃えを維持し続けている。その品揃えは艦娘たちのためでは決してなく、あくまで売店に金を落とさせるためのものだった。お姉さんの趣味は旅行であり、夢は豪華世界一周クルーズである。

「——本当にお姉さんが黒だとして」と金剛は眉を八の字にしながら言った。「目的は何ヨ？ 動機は？」

「今はわからないクマ。だから明日、本人に話してもらうしかないクマ」

「球磨にしては手ぬるいネー。脅したりしないノ？」

「それがそうはいかないクマ」

「どうしてよ」と叢雲。「まあ、ナイフを突き付けて怯むお姉さんも想

像できないけど」

「今更、驚愕のマジやバーことが分かったクマ。お姉さん、桁違いに強そうクマ。長月みたいな非常人の類クマ」

「あの冬の寒さも夏の暑さにも弱いお姉さんが？」

「そのお姉さんがクマ」

皆、さらに困るしかなかった。

「極楽型戦艦の一番艦だった、それはお姉さんが隠していた事でもない。戦艦らしく少々強かろうが特別驚きはなかっただろう。だがそれ以上の事も、言われてみればアルバイトの磯風が語るお姉さんの武勇伝には荒唐無稽なものが多かった。

「今まで誰も、ずっと気づかなかったって……そんなの……」とつぶやく吹雪は首をかしげすぎて頭が愉快的な方向を向いている。

「Hey, 球磨。だから明日、お姉さんから話してもらうことにしたノ？」

「そういう約束をして、とりあえず解散したクマ」

「私の知ってるお姉さん、そう簡単には納期以外の約束を守らないヨ？」

「クマもそう思うから、こうして困ってるクマ」

「Oh……」

「大和も同席する予定クマ。だから少しは……少し、は……クマあ……」



一方で大和は、傘姫提督と猫吊さんを探していた。共に一度、北鎮守府に戻るためである。

ところが、「あの、傘姫提督を見ませんでした？」と誰に聞いても知らないという。現れたのが唐突であったのなら姿を消すのもまた唐突だった。

「まだ南鎮守府から出てはいないはずだけど……一瞬でも目を離したのが失敗だったわ」

仕方がなしと大和はとりあえず武蔵に電話をかけることにした。戦艦極楽の生存、これには武蔵もさぞや驚くことだろうと。いや、驚き以上に血をたぎらせるだろうと。

しかし武蔵は電話に出なかった。コールが留守番電話に変わり「私わたし、大和よ。早く折り返し電話して」とメッセージを残し、ひとりで北鎮守府に向かおうとしたところだった。すぐに着信音が鳴り、大和は足を一歩で止められた。

《大和お前、天照隊の傘姫提督を見なかったか》

武蔵の声は変に緊張していた。

「見たというか、さっきまで一緒にいたけど見失ったわ。それが？」

《最後に見たのはいつだ。お前は今、何処にいる》

「はい？　だから、ついさっきまで一緒だったって言ったじゃない。

天照隊の南鎮守府の中で見失ったから探してたところよ」

《念の為に確認するぞ。お前の言う「ついさっき」は一時間や二時間ではないんだな》

「五分も経ってないわよ。ああ違う間違えた、そこから見失ったことに気づいて二十分くらい探し回ったわ。けど、なに？　なんなの？」

《……………》

「ねえ、聞いてる？」

《……………北鎮守府にいる斑鳩から連絡があった。傘姫提督が——青い炎を伴って、突然現れたそうだ》

「待って。言ってる意味が分からないわ。武蔵、ちゃんと話を整理してから教えて頂戴」

《事実を整理して簡潔に言ったつもりだ。だから確認がしたい。お前は確かに、さっきまで南鎮守府で傘姫提督と一緒にいたんだな？　間違いはないんだな？》

「え、ええ——そうよ。私はここで傘姫提督と一緒にだった。だから北鎮守府にいるはずがない」

《ならば二つの可能性が考えられる。私の知り得ない洞観者の能力で傘姫提督がテレポートでもしたか、提督自身がそれ相応の能力を持っているかだ》

「とても分かりにくくて助かるわ。ドーカンシヤって本っ当に迷惑ね。でもそれが本当なら、やっぱりそうだったんだって納得してしまおう自分があるわ。武蔵もそう思ってた私に電話したんじゃあないの？」

「提督が『羊の皮を被ったエイリアン』だっていう証拠が——」
「誰がエイリアン、なのかな？」

その声は大和の目の前で立ち上った青い炎の中から発せられた。まるでハリー・ポッターの映画のようだと大和は思った。

青い炎の柱はほんの数秒で人の形をつくり、より具象的な人間へと変質した。線が細いオカツパ頭、傘姫はその意図を読み取りづらい微笑を大和に向けた。

「あ、電話中。誰と、私の話をしてる、のかな？ 武蔵さんかな？」

「——今、傘姫提督が目の前に現れたわ」と大和は通話を切らずに言った。「傘姫提督。あなたは今まで、この二十分間、何処にいましたか？」

「やだなあ。さつきまで一緒に、売店に、いたじゃあない」

「……分かりません。なぜこの期に及んで白を切るのですか。私や武蔵、斑鳩をからかうためでしょうか思えません。いったいあなたは……何なんですか」

「にはは。何、だろうねえ。難しいよねえ」

「傘姫提督！」

「斑鳩のこと、これからもよろしく、ね」

大和はとっさに手を伸ばした。しかし掴んだのは冷たい青い炎だった。

傘姫は風に吹かれたように、大和の前から姿を消した。

第54話 極楽とは程遠い極楽 ②

今朝も皆の間で、傘姫提督が姿をくらました「らしい」という話でもちきりだった。昨日から北鎮守府をゴミ箱の中まで探す斑鳩の様子だけがそれだけ切羽詰まっていた、ということなんでしょうね。でも私と長月は事態がよりよろしくないこと——傘姫提督が本当に、文字通り、消えたことを知っていた。

昨日、斑鳩からこんな電話があつた。

《山城の能力で提督を出したり消したりしてないよね?!》

もちろん私はやってないし、そんな能力の持ち合わせはない。

「私もそんな能力は知らないな」

食堂の隅で私たちは朝食をとりながらヒソヒソと話していた。

傘姫提督はいなくなった「らしい」のではない。本当に、青い炎の中に、消えてしまった。少なくとも斑鳩にはそう見えた……「らしい」。

「レポートやサイコキネシスでなくてもよ、例えば長月ならそういうトリックもできるんじゃない? 青い炎を出してる間に傘姫提督を抱えて超スピードで連れ去るとか。ほら、長月ってば超能力を活かした宴会芸が得意じゃあないの」

「無理だ。私の炎は加減が利かないからな、燃やした瞬間に人間くらい木っ端微塵だ」

「変な想像させないでよね、食べてるときに」

「言い出したのは山城だろう」

「じゃあ、やっぱり傘姫提督が洞観者だったってこと?」

「艦娘でない洞観者なんて聞いたこともないけど、今のところそうだったとしか思えない。分隊の他の洞観者、潜水艦たちもいるにはいるが、斑鳩の胃を痛めつける理由がないしな」

「斑鳩には悪いけど力にはなれそうもない——とは言ってもいられないのが不幸だわ」

「普通に失踪事件だしな」

「いや、普通じゃあないわよ。斑鳩が言ってたでしょう、別れの挨拶を

一方的に済まされたって。このことを知ってる私たち洞観者だけで事件を解決しなきゃいけないのよ。いや、叢雲とか球磨たちは事情を知ってるから喋ってもいいのよね、うんそうだわ。それなら少しは状況がマシなのかしら」

「そういえば叢雲たちはどこまで話を知ってるんだろうな」

食堂を見渡すと、すぐに頼れる六人を見つけられた。叢雲、球磨、金剛、吹雪、それに雷電姉妹がちょうど固まって座っていて……みんな、朝っぱらからとても難しい顔をしていた。なんだか、もう、ダメそうな感じしかしなかった。例えるなら勝ち目のないにも程がある相手に喧嘩ふっかけて今日が決闘日、みたいな。

「……もう万策尽きてそうな顔してるな、あの六人」長月も同じ感想だった。

「ねえ長月。事態が事態だし、念のため長門にも事情を話しておいた方がいいんじゃない?」

「洞観者の事とか? それはダメだ」

「でも傘姫提督が見つからなかったら今日からたぶん、指揮系統が混乱するわよ。雷電、長門の系統が途切れたら困るわけだし」

「なら山城が間に入ってやってくれ。よく秘書艦やってるから、そういうの得意だろ」

「いや全然得意じゃあないわよ」

「とにかく洞観者の存在はあくまで秘密、それが第一だ」

「まったく悪い予感がするわ。そう簡単に崩れないための天照大艦隊なのに」

まあそれを考えるのは提督たちの仕事だ、と私が言おうとした時だった。

食堂が一瞬ざわついた後、

「食事中にすまない、みな聞いて欲しい!」と阿呆、竹櫛提督が食堂中に言った。

なぜ皆がざわつくかって? 理由は二つある。

ひとつ。竹櫛提督はめったに食堂に現れることがないから。あの人は普段、売店で適当に買ったものを執務室で食べている。

まあ、それは別にどうでもいい。

もうひとつ……竹櫛提督の隣に一ノ傘副提督がいて、そして……ああ、何かの間違いであって欲しい……。竹櫛提督の左手と一ノ傘副提督の右手が重なっていて、指がこう、それぞれ離れないようジョイントになっていて……つまり、私たちが面食らったのは、そう、何と言ったかしらん……。

「なんで手なんか繋いでるんだ？」と長月が代弁してくれた。

「長月、長月。ちよつと私のほつぺた摘まんでみて」

「ああ、ほら。どうぞだ」

「めっちゃ痛いわありがとう」

よくよくみれば提督も副提督も、気恥ずかしさを隠しているような表情をしている。でも、どこか嬉しそうというか——「新しい道を歩み始めます」的な顔でもある。あんな乙女な副提督、一度だつて見たことがない。

嘘でしょ提督。今から冗談だつて言うんでしょ提督。

「静かに、静かに」と提督がなだめたことで食堂はしんとした。そりゃあ黙るしかない。

「今日は皆に重大なことを伝えなければならぬ。まず一つ、これはもう噂になつて聞き及んでいる者もいるかもしれないが、分隊の傘姫提督の行方が分からなくなっている。彼女を発見した者はすみやかに私に報告して欲しい。しかし過度に心配をする必要はない。彼女の性質からして、そう深刻な理由はないと考えている。本日中に姿を現さなかった場合、分隊の指揮は一時的にこの一ノ傘副提督が取る」傘姫提督には悪いけれど今はそんなことはどうでもいい、と思つてるのは絶対に私だけじゃあない。

「そして——ゴホン。もう一つ、皆に知らせるべき事がある」

早く言え、いや言うな、私はどちらかという恐怖していた。

「この度……——私と一ノ傘鉄子は身を固めることとなった。以上である。では朝食に戻ってくれ」

早口で言つて、提督と副提督は食堂から逃げるように出ていった。食堂中の誰もがポカンとするしかなかった。

私は長月を見た。長月も私を見た。今の、聞いた？ と目と目で言い合った。

誰かが喋り出すより先にゴツンという鈍い音が二連続で聞こえた。何かと思えば、叢雲と電が頭から倒れた音だった。その音を皮切りに皆の口から思い思いの、いや、それはもう思うこと思わないことが発せられた。

食堂、大混乱。

提督たちと入れ替わるように入ってきた寝坊組はなんだなんだと聞くより先に「ちよつと聞いてよ！」と混乱をぶつける相手にさせられた。

「山城は……知ってた？」と長月に聞かれた。

「まさか。誰か一人でも知ってたら噂になってたわよ」

「身を固める、って、そういうことでもいいんだよな」

「ええ、たぶん。エイプリルフルって四月一日だけじゃあなかったのね」

「そ、そうなのか？ 今日ってエイプリルフルだったのか!？」と冗談が通じないくらいには長月も混乱しているらしかった。

「いや、いや。……ところで長月、今日は暇だったりしない？」

「え？ あ、ああ、特に用事はない」

「私、今日の秘書艦なのよ。お小遣いあげるから代わって——」
「嫌だ」

「はあ……不幸だわ」



もちろん、私は皆の期待を背負わされた。秘書艦ならどういふことが詳しく聞いてこいって、そりゃあ聞きたい気持ちは分かる。私だつて聞きたい。でも直接聞く役になりたくはない。

「……失礼しまあす」と私はおどおど第一執務室に入った。

「うむ」とだけ言った竹櫛提督は朝食のカロリーメイトを食べていた。私は秘書艦用の席に着いた。……こんなに落ち着かない秘書艦業

務はケツコンカツコカリのとき以来、いやそれ以上だった。

「何か聞かないのか」

提督の方から話を振ってきた。

「……聞いていいんですか？」

「聞かれるのなら早い方がいい」

「じゃあ……いや提督から話してくださいよ。お味噌汁飲んでる時にいきなりあれだけパーツと言われたって反応に困るんですけど」

「傘姫が行方不明なのだ。斑鳩が搜索願を出す予定であるが、それ以上の混乱は避けたかった」

「混乱させられまくりなんですって。せめてもう少し、傘姫提督の件が落ち着くまでの間、内緒にした方がよかつたんじゃないですか？」

「こういった事は隠していても話が漏れるものだ。ならば先んじて話しておいた方が良い」

「……いつから、副提督とそんな話をしてたんですか？ そんな素振り、ぜんぜん見えませんでした」

「いつから、か——それが分からんのだ」

「は？」

「気がつくど、一ノ傘とそういう話になっていたのだ」

「いやいや、んなはずないでしょう阿呆提督。そんな、ふわつとした話がありますか」

「ならば一ノ傘にも聞いてみるといい。同じことを言うはずだ」

「ええ……。大人ってそんなのもアリなんですかねえ……」

だもので、提督との話はふわふわしたものが続くだけだった。

ただひとつ。叢雲のことを今どう思っているのかはなんとなく聞けなかった。

第55話 極楽とは程遠い極楽 ③

「総旗艦が二人とも倒れた!? はいいい!？」

大和が因縁の再開をはたした翌日、戦艦極楽を糾弾するために再び南鎮守府にやってきてははじめ聞かされたのがそんな話だった。

本隊の総旗艦は卒倒。

分隊の提督は失踪。

天照大艦隊は見るに堪えない状態になっていた。

「分隊の方の総旗艦、斑鳩は今日も傘姫提督をネズミの穴まで探して
るし……加えて極楽をずっと匿っていたなんて、本当にもう、どう
なってるのよこの艦隊は」

さしもの撃沈王も助言のひとつも出せず、ただ呆れる他になかっ
た。

「ごめんクマ……」と普段は強気の球磨も、アホ毛をしなだれさせてい
た。「でも別に、売店のお姉さんは匿ってたわけじゃあないクマ」

「ええそうですね。天照隊にサテライト席を作った時から気づかな
かった私の落度だわ。それで、倒れた叢雲と電の二人は大丈夫なので
すか？ 極楽との会合まであと三十分。もう私一人で、今すぐ極楽の
売店に突撃してもいいかしら」

「だめクマ。売店は昨日の閉店からずっとシャッターを下ろしたまん
まクマ」

「シャッターの一枚や二枚、今更なにを気にしますか。壊してでも押
入ればよいでしょう」

「会合の前からお姉さんの機嫌を損ねてどうするクマ」

「私が極楽に気を遣う理由がありません」

「売店で買い物するクマ達の身にもなってほしいクマ……。つーか、
どうしてそこまでお姉さんを敵視してるクマ？ まあ、お姉さんは友
達よりは敵を作るタイプなのは分かるクマ」

「極楽型戦艦が二人いたのは知っていますか？」

「んー、初耳クマ」

「極楽はただ一人の姉妹艦、『寿』を沈めました。誤射ではなく故意に」

◆
◆

売店のお姉さん、極楽が店のシャッターを下ろしたままにしているのは勿論、ただ単に、大和らと顔を合わせるのが面倒だからである。店を開けば混沌の使者共、彼女の平穩を踏み散らかす野蠻な連中が会合の時間を待たずにズカズカと入ってくるに違いなかった。だからシャッターの表には『本日臨時休店』の張り紙をしていた。買い物ができない天照隊の艦娘たちの事を思うと彼女の心は痛んだ。その痛みはワサビ気持ち多めの寿司に比類する。

炬燵に入った極楽は、アルバイトの磯風が淹れた茶を飲みながらテレビのニュース番組をぼーっと見ていた。芸能人が不倫したかどうかとか、しようもないニュースが彼女の頭をからっぽにした。

「あの、お姉さん？」と言う磯風も一緒に炬燵に入っていないながら、極楽とは対照的にソワソワしていた。「店を開けないのであれば私は休暇でいいでしょうか」

「駄目だ。才前ガイナキヤ他ニ誰ガ茶ヲ淹レル？」

「叢雲が倒れたんです。気が気でなくて——」

「ソウダ、磯風。仕事ガ欲シイノナラ才前ガ会合ニ行ケ。大和カラ何ヲ聞カレテモ適当ナ返事デ構ワン」

「いいやよくない、困ります。相手は撃沈王ですよ？ 昨日だって『島攻略オンデマンドの責任者を出せ』と、すごい剣幕で内心怖くて怖くて」

「撃沈王ダロウト何ダロウト艦娘ハタダノ艦娘、以前マデノ才前ト何が違う」

「全然違います。練度が桁違いです」

「才喋リニ練度ハ関係ナイダロ。使エン奴ダ。——仕方ナイ。磯風、今カラ我が2人ニナルガ驚クナヨ」

「2人になる？」

「質問モスルナ。説明方面倒ダ」

極楽はパチンと指を鳴らした。

するとその瞬間、極楽の隣で青い火柱が立ち上った。部屋の天井まで届こうかという猛烈な、しかし冷たい炎である。

その火柱は磯風が驚きで湯呑を倒すと同時、すぐに圧縮され、形を変え、色を変え、人の姿となった。

極楽の言った通り、二人目の極楽がそこに立っていた。炬燵に入っている極楽と外見が何一つ変わらない、着る毛布姿の彼女である。

驚くな、と言われた磯風だがそれは無理だった。火柱で死ぬかと思えば、二人目の極楽は増える悪魔である。自分が茶をこぼした事から気づかなかった。

新たに出現した方の極楽（スレーブ）は「オー寒ッ」と言いつつ、炬燵に入った。

マスター：イヤ炬燵二入ッテンジャアネーヨ。我ノ代ワリニ会合ニ行ケ。

スレーブ：ハア？ 知ルカ、貴様が行ケ。

マスター：間拔ケカ貴様ハ。何ノタメニ貴様ヲ出シタト思ッテンダ？

スレーブ：同ジコトヲ言ワセルナ。知ルカ、クソ間拔ケ。

マスター：コノクソ役立たズメ、ソレデ我ノドツペルゲンガーヲ語ルナ。

スレーブ：我ハみかんヲ食ベルノニ忙シイ。貴様ノ方ガ暇人ダロウガ。

マスター：勝手ニみかんニ触ルナ。貴様ニハ一房サエ勿体無イ。

スレーブ：貴様ノ雑菌ダラケノ手デ触レラレタみかん達ガ可哀相ダ。スグ腐ルゾ。

マスター：無駄口タタイテナイデ失セロ。我ノ視界カラ失セロ愚図ガ。

スレーブ：貴様ガ炬燵カラ出テケ。外デ乾布摩擦デモヤッテ腐ツタ根性ヲ鍛エロ。

マスター：出テイクノハ貴様ダ。貴様ガイルダケデ部屋ノ空気スラ腐ル。

スレーブ：腐ツタみかんガ喋ルナ死ネ。鏡ヲ見テミロ、皮膚ガ死体

袋ミタイダ。

マスター：貴様が視界ニイルダケデ目ガ腐リソウダ。手足ガ生エタ雑菌風情メ。

スレーブ：オ前、艦娘ニ向イテルゾ。深海棲艦スラ顔ヲ背ケル醜サダ。

極楽（マスター）が指を鳴らすと、極楽（スレーブ）はパツと青い火の粉となつてあつけなく消えてしまった。

「……フム。ソロソロ会合ノ時間ニナルカ。ヤレヤレ面倒ダガ仕方ナイ。少シダケ連中ニ付キ合ツテヤルトシヨウ」

「……………」

「ナンダ磯風。言イタイコトガアルナラ言エ」

「いえ、別に」

「我ハ出掛ケル。オ前ハ留守番シテロ。——ソウダ忘レテタ、新シイビジネスヲ始メルカラ、ソノ広告ヲ作ツテロ」

「ビジネス、ですか。島攻略オンデマンドみたいなものですか？」

『提督代行サービス』ダ。ソロソロ需要ガ生マレルダロウカラナ。取り敢エズ我が戻ルマデニ広告ノタタキ台ヲ考エテオケ」

第56話 極楽とは程遠い極楽 ④

それは大和が『撃沈王』の名を冠するずっと前のことだった。

彼女は最強であることを期待され、それを証明するために北へ南へ、東へ西へと戦場に投入された。常に最前線にいた。常に見知らぬ艦娘たちと、同じものがひとつとしてない作戦に従事した。最強の証明とはつまり、彼女にありとあらゆる任務を経験させ、達成させることだった。勝ち続けさせることだった。敗北は許されなかった。

まだ未熟だった彼女にとって戦争とは、顔と名前が一致しない仲間を率いて戦うことだった。

まるで傭兵のようだ、と思うこともあった。

その境遇を分かち合うことができるのは姉妹艦の武蔵と信濃だけだとはかり思っていた彼女だが、ある日、武蔵から自分たちと似たような境遇にある戦艦がいることを聞いた。

極楽型戦艦、極楽と寿だった。



会合、というといささか大仰に聞こえるが、応接室に三名がただ集っただけである。

撃沈王、大和。

天照隊の暗殺者、球磨。

売店のお姉さん、極楽。

大和と球磨の前にデンと座った極楽は着る毛布にくるまったままの姿で、ヤル気とは正反対のものを大層アピールしている。

「ええ。よく覚えているわ」と大和は言った。「極楽、昔からあなたには緊張感というものが欠如していた。それとTPOをわきまえる姿勢を見せたこともなかった」

「我二言イタイ事ハソレダケカ？ 分カツタ次カラ善処シヨウ。ジャ

アモウ一人ノ——名前ハ確カ——多摩」

「球磨だクマ……」

「ソウダツタ、球磨ナ。才前ハ何ノ用ダ？」

「お姉さんのこと、少し調べさせてほしいクマ」

「阿呆カ。断ル」

取り付く島がない、とはこのことだった。

「我ト喋リタイ話ハソレダケダナ。ジャア解散ダ」

「大和……知り合いなら説得してほしいクマ」

「私まだ質問のひとつもしてないんですけれど」

「ジャア我カラ逆ニ質問シテヤロウ。大和、昨晚才前ハ何ヲ食ベタ？」

「ピザだけ。それが何？」

「美味カツタカ？」

「……ええ、まあ」

「ソレハヨカツタナ。我モ今晚ハ宅配ピザヲ取ルトシヨウ。質問ハ以上ダ。才前ヲ、モウ帰ツテイイゾ」

「会話のドツジボール……クマ」

「極楽あなたねえ。軍法会議を知らないとは言わせないわよ！」

「知ラン。オイ多摩、売店ハ午後カラ開ケルコトニシタト各寮ニ伝エテ回レ」

「だから多摩じゃなくて球磨……」

「どうして生きているのか、どうやって生き延びてきたのか。今日までの経緯、いえ最初からすべてを話してもらおうわよ」

「撃沈王ツテ奴ハ暇人ナノカ？ 羨マシイナ、我ト多摩ハコノ部屋ヲ出タラ別ノ仕事ガアルノニナ」

「絶対に、絶対に！ あなたは今ここで話さないと後悔することになるわよ！」

「ドウデモイイ事ダガ才前ヲ、コノ暖房ガキイテナイ部屋デ寒クナイノカ？ 我ハ寒イ」



「で？ 結局なに一つ聞き出せないまま会合は終わった——というより始まりすらしなかったのか」

極楽との弁舌勝負に完全敗北した大和は、その後、鎮守府を出て喫茶店ハンゴド・キャットに立ち寄った。

店はそろそろ片付けに入る時間になっていた。

店のマスター、武蔵にはどうせ馬鹿にされると思いつつ今日の会合の様子を話した大和だったが、意外にも武蔵は理解を示した。

「いや、意外でもない。相手はあの極楽だろう。私が覚えている奴の性格が変わっていないなら、会合に呼べただけでも運が良い方だ」

「運……」

撃沈王がただの幸運でしか相手にされなかったのは屈辱だった。

「そうかもしれないけど……でも腕っ節の強さまでは記憶にないわ。力尽くで座らせることもできなかったのよ。武蔵は知ってた？」

「知らなかったが、ひとつ合点がいった。『島攻略オンデマンド』で長月の代わりにヤーナム島を無害化したのは極楽なのだろう」

「……ああ、そういうことだったのね」

島攻略オンデマンド——天照大艦隊、南鎮守府の売店がはじめた商売は、金さえ積みめばどのような島であろうとフィクサーを用意し制圧する、というものである。

血と獣の島、ヤーナム島の実在に悩まされていた大和はこの胡散臭いサービスに飛び付き、島は営業の言った通り無害化された。

悪夢が具象化したようなヤーナム島は現在、簡易的ながらも泊地として機能している。

「私は知らずに極楽を雇ってたってわけね」大和は重い溜息をついた。

「確か長月に匹敵するフィクサー、という触込みだったな。となるとだ、大和。和平的な話し合いで極楽を捕らえようとして、それ以上の深追いをしなかったのは正解だったわけだ」

「正解？ どこがよ」

「長月レベルを相手に武力行使をしなかったことだ」

「私も一度、長月ちゃんと一対一の演習、やってみようかしら。武蔵の話だけだと、どう聞いても誇張としか思えないのよね」

「全力で殴りかかっても軽々とめられたのだろうか？」

「まだ『全力で殴りかかっても軽々とめられただけ』よ。その程度で諦

める撃沈王がいますか。それに、長月ちゃんレベルだつて自分から教えてくれたのなら、有り難くその情報を活用させてもらうまでだわ」「忠告しておいてやろう。望みを持ったまま長月のレベルを知れば絶望するぞ」

「大和型の二番艦が情けないわね」

「まあ、しかし——何を考えて売店など開いているのだろうか、極楽は。目的がまるで分からん」

「喫茶店やつてる武蔵がそれ言う？ どうせ極楽にも、ろくでもない理由があるんでしょう。天照隊の誰かがそのうち聞き出してくれると思うわ」

「なんだ、ここから先は神風主義か？」

「注視はもちろん続けるわ。でも残念だけど撃沈王は暇じゃあないの。生きてた亡霊より怒れる照月よ。早く仕事に戻ってメールが何通きてると思う？」

「前から思っていたのだが、その照月、お前にやたら厳しいな」

「遅くなり過ぎたのよ、きつと。戦場は人を変えるわね」

「いや、お前が仕事をしないからだろう」

「してますー。ちゃんとしてますー」

「じゃあさっさと職場に戻れ」

「カレー食べたらね。ほら、早く出して頂戴」

「食ってばかりの撃沈王に幻滅したんじゃないか、照月は」

第57話 極楽とは程遠い極楽 ⑤

天照大艦隊の分隊は北鎮守府を拠点としています。本隊のある南鎮守府から陸路で三時間、海路で一時間の場所です。

分隊を構成するメンバーは本隊と違って非常に少ないです。僕ごと空母斑鳩、潜水艦イムヤ、ゴーヤ、イク、ハチ、シオイ、妖怪猫吊さん、そして——現在、姿をくらましている傘姫提督。

この泊地は工業地帯の安全を確保するための重要な拠点であり、人員の少なさを天照隊の本隊から人手を借りることで補っています。北鎮守府と南鎮守府、わりと近いところに艦隊を割いて置いているのは無駄だ無駄だと言われ続けていますが、そのあたりは……まあ、色々と事情があつたんです。ちゃんと意味があつて分隊は今日も動いているんです。

「とは言ったものの、提督がいないんじゃないやあ……はあ」

北鎮守府内を隅から隅まで探し尽した僕は、『提督代理』の腕章を左腕に付けてはいるものの、仕事が捗りません。

「オマエ、ブーツとしすぎクマ……はあ」

そう言う球磨さん、助っ人秘書艦もだらけきり、ボールペンを分解しては組み立てるを繰り返しています。

「球磨さん、本隊の方はどんな様子なんですか？ できれば竹櫛提督か一ノ傘副提督にこちらに来ていただきたい……っていうお願いをスルーされ続けてるんですけど」

「てーとく達は仲良く働いてるクマ」

「あっはい。仲が良いのは結構なことですね」

「第一と第二執務室を行ったり来たりし合っていることがめっちゃ増えたクマ。だから効率が……上がったクマ」

「上がっちゃいましたかあ……。下がったなら陳情もしやすいんですけどねー」

「ねークマ。今までが悪すぎたクマ」

「お二人の身を固める宣言の時、分隊は一ノ傘副提督が面倒を見るって話もあつたんですよ？」

「あー……。身を固める宣言が強烈すぎて、たぶん提督たちも含めてみんな忘れてるクマ」

「いやいや忘れたとしてもですよ。僕からのSOSを無視し続けるって分隊軽視もアレ過ぎませんか」

「クマと他何人かを送れば今のところ十分と思ってるんじゃないクマ？」

「でも球磨さん、秘書艦はあんまりやるタイプではないですよ」

「最近、クマはちよつと疲れ気味クマ。だからここ分隊で休憩させてもらうクマ」

「球磨さんまで分隊軽視……」

でも確かに、球磨さんの疲労は目に見えて溜まっていました。いつもの、僕をむやみに脅して楽しむ姿が見え……。なくて喜ばしいんですけどね、それはそれ、とにかく元気がありません。

提督たちと艦娘たちを結ぶ総旗艦、叢雲さんと電さんもまだ回復しそうにないと聞いています。なんでも、嘔吐するくらいだとか。

天照大艦隊には疲弊が蔓延しています。それもこれもすべて——言っちゃっていいですよ、提督たちのせいです。

かく言う僕も疲れています。単純な多忙からの疲労ではありません。メンタル的なものです。

提督代理の腕章も、本当は付けたくないんですけどね。



本隊のような混乱を避けるために、武蔵さんと大和の他には誰にも言っていないことがあります。

僕は傘姫提督に、別れの挨拶をされました。

「バイバイ、元気でね」と。

あまりに突然、一方的に別れを告げた傘姫提督は、青い炎となって、青い火の粉となって、僕の前から姿を消しました。

鎮守府内を探せるだけ探してはみましたが——僕と提督は短い付き合いではありません。あの別れの挨拶は、本当に最後のものだと分

かってしまっていました。

もう、きつと、あのオカツパ提督と会うことはないのでしょうか。姿どころか悲しみすら残さないのが、あの阿呆、傘姫提督っぽいんです。

「うおーい、聞ってるクマ？」と言われて僕は、自分が考え込んでいたことに気づきました。

「あ、はい。何でしょう」

「この工廠をこっそり使いたいクマ」

「ええ、使うのは別に構いませんが、なぜこっそり？」

「ちよつと内緒で作りたいものがあるクマ」

「ほうほう。何を作るんです？」

「だから内緒だつってクマ」

「それは隠すの難しいと思いますよ。うちの潜水艦たちがしょつちゅう兵器開発で出入りしてますから」

イムヤ達が開発したトルピードランチャーは改良に改良を重ね、今では海中・海上はおろか対空攻撃にも使えるよう進化しています。ものすごく非効率的ですが。

それと僕が大和に殺されそうになった時にお披露目されたローテク振動魚雷。あれから進歩して、条件と運がととのえばエグイダメージを出すことに成功しています。

「僕が潜水艦たちに言付けてもいいのですが、隠していると余計に覗き見されるでしょうね。それでもよければ」

「……ピストル用カービンコンバージョンキットのDIYクマ」

「ピストル？ の何ですって？」

「えーと……ピストルの改造パーツ、クマ」

「球磨さん。アサシンブレードはギリギリ納得しましたけど、ついに鉄砲ですか。艦娘的にそれはどうでしょう」

「長月を助けるためクマ」

僕がカレンダーズに甘いとは知……いえ思ってた長月ちゃんの名前を出したのでしょうか。

「下手な嘘はつかないクマ。いま長月に電話で確認してもいいクマ」

「でも——球磨さんは長月ちゃんや僕ら洞観者の事情を知ってますよね。じゃあ鉄砲なんて長月ちゃんには意味がないこともご存知では？」

「フクザツナジジヨウがあるクマ」

「——まあ、分かりませんが分かりました。工廠は自由に使ってください。イムヤ達にも一応、僕から言っておきます」

「助かるクマ」

「でも資材節約をお願いしますよ」

「大丈夫クマ。どうせ簡単なものしか作れないクマ」

「それと球磨さん。僕、いま大変なことに気付きました」

「クマ？」

「僕たち、今日まだ何一つ仕事してません」

「いや、クマは休憩しに来たってさつき言ったクマ」

「ダメです。労働しましょう」

第58話　メリークリスマス、天照大艦隊

ドーモ。天照隊、分隊の社畜もとい艦畜、斑鳩です。

突然ですが僕の恋愛エピソードを紹介しましょう。皆さん聞きたいですよ。聞きたくない？　聞け。

酔ってますか？　僕？　酔ってますとも。みんなも酔ってます。クリスマスに酔って何が悪いんですか。



あれは僕がまだ深海棲艦になりかける前のことです。何年前でしたっけね。

クリスマスを二週間後に控えて、まわりがソワソワし始めるくらいの日でした。

僕のソワソワっぷりは人一倍のもので、頭の中で悶絶するような苦しみと甘ったるい期待が激しくぶつかり合い桃色の火花を散らしていました。そう、つまりは『好きな人に告白すると覚悟した日』です。

「気合入りすぎ〜！」と誰かが言いました。

「仕方ないでしょ、僕の人生初の告白だったんですから」

ひゅ〜ひゅ〜と無駄に煽ってくる巡洋艦共。ウザいです。

さて僕は意中の彼——A君を、夜の九時ごろ、公園に呼び出すことに成功しました。

正直、この段階ですでに勝った気でいました。だって十二月の夜ですよ。けっこう寒いですし、そんな時間に公園にただ呼び出してただ遊ぶ、なんてワケがありませんよね？　A君もそれを承知で、九時ぴったりにやって来たわけですよ。

「A君ってイケメン？　イケメン？」

「あー、まあ、イケメンとはちよつと違ったと思います。いやでも、ふとした瞬間に見るとカッコ良かった……：ように見えたって感じですかね」

でもまあ、そう簡単には言い出せないじゃあないですか。やつぱ

り。

寒いね、そうだね、とか言いながら、そういう雰囲気とかタイミン
グを計りました。これがなかなか難しくくて、たぶん三十分くらい無駄
話をしましたね。A君がどうだったかは分かりませんが、僕は
もう、いつだ、いつ言えればいいんだって自分と神様に聞いてました。

「A君かわいいそう」

「いやA君だって悪いと僕は思いますね。だって『それで、何か用
?』って言うってくれるのに三十分もかかったんですから。十二月の夜
に三十分ですよ。ちよつと心が折れかけてましたからね」

どうにか話をそういう流れにできて、ようやく僕は……シンプル
に、「付き合ってください」と言えたわけです。オーケー貰えたわけ
です。

パチパチパチ。どうもどうも。

任務達成した僕とA君は、寒い寒いって言いつつ照れ照れしながら
帰りましたと。

「手繋ぎながら?」

「いえ。A君には一度も触れてません」

「その日はまだ恥ずかしかった、でしょ?」

そうじゃあないんだ天津風ちゃん。

僕は過去に一度もA君に触れたことがないんです。

「はあ?」

普通ここからですよ。恋人はここからスタートですよ。でも
僕は違った。違ったんです!

最初の一週間は毎日SNSのやりとりをしてましたよ。でもそれ
も本当に最初の一週間だけで――

「待って待って斑鳩。デートとかは?」

「瑞鶴、それな。でもね、付き合ってからデートどころか顔すら一度も
合わせてないんです」

遠距離恋愛でもないのにSNSだけで済まされて、しかもですよ。
二週間目からは返事すらなくなりました。僕の方からは毎日連絡
を取ろうとしたけどですよ。

で、やっと返事が来たと思つたら『俺たち今、付き合ってる？　じゃあごめん、別れよう』だつてさ！　だつてさ！

「うわぁ……」

僕は僕なりにいろいろ頑張つたつもりだったけど、二週間でA君とバイバイでしたとさ！

ちゃんちゃん♪

「どこが恋愛エピソードだった？」

「山城の不幸エピソードみたいだったね」

「鬼怒、一緒にしないで」

まあまあ皆、まだ聞いて。実はですね、この話には続きがあるんです。続きがさつきできたんです。

「さつき？」

ただの失恋話だつたら面白くもないし、しませんよ。

なんとついさつき、本当についさつき、そのA君からメールが届きました！　これを晒しましょう！

青葉、ちよつとこのメールを声に出して読んでくれる？

「了解です。えー……『久しぶり。元気？　いま何してる？　いやその前に俺のこと覚えててくれたら嬉しいんだけど。久しぶりに会えないかなつてふと思つて。もし今暇だつたら二人で食事でもどう？　店は予約してあるから』……以上です」

僕は今から、このクソ勘違い野郎をここに呼びつけようと思う！

僕をクリスマスぼっち扱いたしたクソ野郎を！

半深海棲艦、練度カンスト航空母艦、斑鳩ノ誇リニカケテ！

「やっっちゃえやっっちゃえ！」

「祭りだ、晒し上げだ！」

「殺せ！　殺せ！」

「ランボー怒りの元カレ召喚！」

「V8を讃えよ！」

「二　V8！　V8！　V8！　三」

僕ハ一人ジャアナイ！　仲間ガイルツ！

皆ノ前デコノクソ野郎ニ「死ネ！」ト言ツテヤルツ！

メリークリスマス、天照大艦隊！

第59話 極楽とは程遠い極楽 ⑥

深海棲艦でも、無能な上官でもない敵——ゾンビに襲われる艦隊というのは、他の者から見れば呪われた艦隊と言えた。見たことがあればの話であるが。

「……………34……………35……………」

木曾に誰にも近寄らせないよう見張らせている工廠の裏で、球磨は頭を撃ち抜いたゾンビの数をかぞえていた。数え始めてから二十分になる。あと十分程度で終わる『仕事』だった。

球磨が長月の代わりに『仕事』をこなせるようになったのは、自前のピストルカービンを用意できたからだだった。安く調達したピストルに、サプレッサー、フラッシュライト、フォアグリップ、ストック、ホログラフィックサイトを追加改造している。廃材を利用して狭い工作台の上で組み立てられたとは思えない働きをしていた。

「……………36……………」

今まで、その小柄な体躯で『仕事』をしていた長月の代わりになれたことは大きいと球磨は考えていた。この仕事は決まって真夜中にある種の儀式のように行われていた。務まる者は多いほうが良いに決まっている。ましてやゾンビが相手なのだから。

「……………37……………慣れって怖いクマ」

ゾンビ処理能力の限界、撃ち漏らしが引き金となるバイオハザードを恐れていた以前までの自分を思い出しているの独り言だった。

今はただ、ゾンビの頭に銃弾を二発しつかり叩き込むことだけに集中すればよかった。

球磨は前方にだけ注意を払っていた。

だから、背後の人影に気付けなかった。

「寒イノニナア、ゴ苦労ナコトダ」

「クマツ!？」

球磨が振返ると、毛布オバケがそこにいた。

着る毛布の上から毛布を羽織ったオバケ、極楽は地面に散らばった空葉莢をいくつかチャリチャリと拾った。

「ホラ、余所見スルナ」

「え？ あっ」

球磨がピストルカービンを構え直すより早く、極楽は空薬莖をゾンビめがけて投げた。無論ただの投擲ではない。ネオサイタマのニンジャが使うスリケンめいて、空薬莖は38体目のゾンビを蜂の巣よりも酷くした。

「木曾が、ここに誰も近づけないよう見張ってたはずクマ」と球磨は言いはしたものの、極楽を相手に意味のないこととは分かっていた。

「慣レナイ奴ニ亡者狩リヲ任セルノモ心配デナ」と極楽は自分の言いたいことを言った。「突破サレルト面倒ダ。オ前ニハ特別サービステ自動小銃ヲ融通シテヤツタ方ガヨカツタカモナ」

「……このゾンビ達のこと、いつから知ってたクマ？」

「サア？ イツダツタカ我ニモ思イ出セナイナ。コレガ本当ノ『腐レ縁』ツテヤツダ。相手ガ亡者ナダケニ」

「面白くないクマ」

「ホラ次ガ来タゾ。我ヲ守レ」

「クマより強い人を守る意味がわからんクマ」

球磨は39体目の頭に二発の銃弾を撃ち込んだ。

「ナイスショット」極楽はまるで賞賛がこもっていない拍手を送った。「腐れ縁、我を守れ……—まさかこのゾンビ達、お姉さんを狙ってるクマ？」

「ム。失言ダツタカ。気ニスルナ、忘レロ」

極楽はまた空薬莖を拾うと、まるで川に小石でも投げるように空薬莖を投げた。40体目のゾンビが海に帰らされた。

「つまり、お姉さんが元凶だと考えろ、ってことになるクマ」

「次ノ劇場版ノ主役ハ我ダナ」

「毛布の上に毛布を重ね着する主役なんて、興行爆死は必至クマ」

「アニメ化サレタ我ハソレツポイ格好スルニ決マツテルダロ。主題歌ハ我ガ歌ツテモイイゾ」

「……どっちが悪いクマ？ ゾンビの方？ お姉さんの方？」

「海が悪い。七ツノ海ガダ」

「さすがお姉さん、スケールが無駄にでけークマ」

「ソロソロ時間ダナ。最後マデ気ヲ緩メズココヲ死守シロ。才前ノ命ニカエテデモ亡者ヲ売店マデ通スナ」

タシユツと飛び上がった極楽は一足で工廠の屋根を踏んだ。そこから毛布を外套のようにはためかせ夜の闇へと消える姿はさながら怪人——そう、彼女は中から外まで怪人だった。

第60話 極楽とは程遠い極楽 ⑦

この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。



戦艦、極楽は沈むべきだった。

沈むべき理由があった。

沈まなければならなかった。

だが彼女はこう思った。

「阿呆ラシイ」

極楽の炎に感傷の熱は無く、深海から伸びる絶望という名の手に足首を掴まれても何ら怯むことはなかった。その程度か情けない、もつと根性出して引きずり込め、とすら彼女は思った。

深海からの誘いに無視を決め込んだ極楽は、自分自身を炎で燃やした。深海の手は炎から逃げるように足首を離して消えたが、その炎はむしろ冷たかった。青い炎だった。



雨も降り止み、幸運にも小さな無人島を見つけられたのは深夜、暗闇の海、さしもの極楽も疲弊していた。残りの燃料も心許なかった。

大戦艦の艦装を浜辺に捨てて、極楽は砂の上に仰向けに倒れ込んだ。空はどこまでも黒一色だった。方位も分からない。

今はこのまま寝てしまおうと、目を瞑ろうとした時だった。視界の端、海の方から、極楽を追ってきたように何かが現れた。疲れていた極楽は空目を使おうとしたが、それが人の形をしていては無視できなかった。

「……………」

極楽は嫌々、その深海より遣わされた亡者を見た。

水死体とは違って、どちらかというとお化け屋敷やハリウッドで見

れそうなナリをしていた。海や孤島に暮らす生き物の愛らしさの真逆だった。意図してのものであるはずはないが、それを見てしまった者の嫌悪感を強く刺激させる姿になっていた。人の形をしているから、それは尚の事。

「ゴノ世界ニハ深海ノ闇デスラ消セナイ炎ガ存在スル……ツツテモ、海ガ諦メル諦メナイハ別ノ話ツテワケカ」

面倒だ、と極楽は思った。

海が「恐れよ諦めよ受け入れよ」としつこく迫ろうとも、そんなものは極楽の知ったことではなかった。もう海にはウンザリしていた。怒れるポセイドンがそこにいたのならグーで殴って分からせてやるのもやぶさかではなかっただろう。

だが海が遣わしたのは筋骨隆々の神ではなく、のそのそと這い寄るだけの亡者である。殴り甲斐もない。面倒臭い。

ああ、自分がもう一人いたら、と極楽は思った。あまりの面倒臭さに本気で祈った。

祈りはあつさりと、ポセイドンとは別の神に届いた。何の神かは不明だが、その神は極楽の炎に性質を与えた。

その性質とは『複製』。

極楽が期待せず出さず出してみただけ出してみた青い炎の中から、もう一人の極楽が現れた。制服の汚れまで一致していた。

「……誰ダ、才前？」とオリジナルの方は訊いた。

人が自分の姿を見るのは主に鏡に映った左右反転された自分だから云々、ではなく、倒れた自分の側に立っている者に見下されるのが不快だった。もう一人の自分を望んでおきながら、それが叶ったら叶ったで文句を言うのが極楽である。

「フン、我方姿方情ケナイ」

青い炎で生み出された極楽は、近付いていた亡者のグズグズの頭をヒールで踏み潰した。

「サツサト立テ。我一人ニヤラセルナ」



「……………さん。お姉さん。起きてください。店を開けますよ」

肩を揺すられて極楽は夢の世界から現実に戻ってきた。

左の側頭部に痛みがあった。しょうもない夢を見た原因が見つかった。テレビのリモコンを枕にして寝てしまっていたらしい。

「アア、クソ。磯風、モット早く起こせ」

「早く起こすと怒るじゃありませんか。それにまた炬燵で寝てますし、夜遅くまでゲームか何かやっていたのでしよう」

「水ヲ持ツテコイ。部屋ガ乾燥シテタマラン。ソレト頭痛薬」

「その痛みに頭痛薬は効かないのでは？」

「別ノ痛ミダ。クダラン夢ヲ見タセイノヤツダ」

「朝食は食べますか？」

「イヤ、気分ジャアナイ。水ト薬ダケテイイ」

薬を飲んだ極楽は、一昨日、中にカビの繁殖が確認された加湿器を睨め付けた。空気の乾燥など実際のところ彼女は言うほど気にはしていない。ただの八つ当たりのようなものだった。

「ところで、どんな夢だったのですか？」と磯風は訊いた。

「アー？」

「お姉さんが夢について口に出すのは、そういえば珍しいと思ったので」

「……我方海戦ニ出テ、深海ナントカ姫ヲ倒ス夢ダ。高く売レソウナ勲章ヲ——」

「それはさつきまで見ていた夢じゃあなく、お姉さんの『願望』という意味の夢では？」

「ナゼ分カル？」

「だってお姉さん、この前『ブーゲンビル島ガ近海ダツタラ我方甲種勲章ヲ取ツテタノニ』ってぼやいていたじゃあないですか」

「ツマラン事ヲ覚エテルナ、才前」

「いや、三回か四回は言ってきましたよ、お姉さん」

「マジカ」

「マジです」

「磯風。才前ガ氣ヲ利カセテ甲種勲章ヲ取ツテクルトコロダゾ」
「いやいやいや」

第61話 極楽とは程遠い極楽 ⑧

天照大艦隊はおかしくなっている、と言わざるを得ません。ドーモ、斑鳩です。

午前八時。天気は上々。執務室のエアコン設定温度は少々高め。だというのに僕の気持ちは低空飛行。不安で不安定。そして憂鬱。これなら戦艦と空母と潜水艦の混成部隊と演習をやっていたほうがマシというものでしょう。

傘姫提督がいなくなつてしばらく、この天照隊の分隊は提督不在で動いていたわけですが、今日からようやく提督……を仮で名乗る人の管理下に置かれるようになったのです。

「ココガ我ノ席力。ソシテオ前ガ秘書艦ノ——」

「斑鳩です」

「マズハ茶、イヤ、珈琲ガイイ。珈琲ダ斑鳩」

提督代行サービス、だそうです。お金を払えば南鎮守府の売店のお姉さんが為政してくれるという……。ええ。どうかと思いますよ僕はそりやあ。でもお金を出したのは(たぶん)竹櫛提督と一ノ傘副提督ですから、つまりお二人が売店のお姉さんを認めたとということです。僕はてつきりお二人のうちどちらかに北鎮守府に来ていただけるとのばかり思っていましたので、まあ控え目に言つて意表を突かれたわけです。

この分隊においては飲み物はセルフサービス方式だったのですが、そんな小さなことを言つても仕方ありません。

「どうぞ。珈琲です」

「ウム、ゴ苦労。座ツテイイゾ」

艦隊運用は提督の性格が出ます。ではこの人の場合、この分隊をどうするつもりなんでしょうね。

「あの、提督代行」

「ナンダ、ソノ中途半端ナ我ノ呼ビ方」

「まだお名前を聞いていなかったのだから」

「我ハ極楽。極楽型戦艦、ソノ一番艦ダ」

この人、艦娘だったんだ！ という驚きもありますが、それより気になったのは聞き覚えのある名前です。

「もしかして、イムヤたち潜水艦に『極楽師匠』と呼ばれてる方ですか？ 振動魚雷とか教えたつていう」

「ホウ。我ヲ知ル者カ」

「潜水艦たちを逞し過ぎるくらい育てたようで、ありがとうございます。ところで極楽さん、ひとつお願いをしてもいいでしょうか」

「言ツテミルダケ言ツテミロ」

「カタカナで喋るのを、普通にひらがなにしてもらっていいでしょうか。せめて提督代行を務める間だけは——できますか？」

「我ニ……アー、あー、できない事は無い。だが何故だ。我のトークがそんなに気に食わんのか貴様」

「いえいえ。ただの個人的な偏好で申し訳ないのですが、カタカナで喋るのは僕的に本気を出す時、だと思ってまして。炎を燃やす程の」

「ふうん。まあ、秘書艦の頼み事だ。ひとつくらい尊重してやろう」

僕はお願い事の一枚を早くも使い切ってしまったらしいです。



極楽師匠とはどんな人物か？ と潜水艦たちに聞いた事がありました。

「強い」

「実際強い」

「鬼」

「すごい」

「暗黒面に堕ちたメシア」

つまりよく分からないけれど、潜水艦たちの尊敬を集めるに足るモノを持っている人物らしいです。

読者諸氏が指揮する艦隊の潜水艦はどのような艦娘でしょうか。

海のスナイパー？

オリヨクルから解放された高練度低燃費の任務遂行者？

ここ天照大艦隊、分隊の潜水艦たちは狂ってますよろしくおねがいします。彼女らは独自に開発したトルピードランチャーを担いで今日も破壊力を追い求めています。とても素直に任務を承諾してくれるのはホント有難いんですね。彼女らは潜水艦なのにいつも爆音と共にあります。狙撃手がロケットランチャーを使いますか？おかしいと思いませんか？あなた。

そんな潜水艦たちから『師匠』と呼ばれる人物ですから、極楽さんが普通ではないことは確実です。そして極楽師匠はまさかの、南鎮守府の無愛想な売店のお姉さんでした。謎とその正体は慮外、身近に潜んでいるものですよね。



「そうだな。まずは基本、編成任務からだな」と極楽提督は意外と堅実なことを言いました。「とりあえず知った顔のイムヤ達に近海の掃除でもやらせるか——何か言いたそうだな秘書艦」

『提督代行サービス』なんて聞いたこともなかったのです。でも安心しました。艦隊運用はお任せしてよいですね」

「金を取ってるからな。その分だけはやる」

「では僕はやっと、傘姫提督探しに本腰を入られます」

「あー？」

「早々にすみません、秘書艦は他の艦娘にバトンタッチさせてください。猫吊さんもいますし、僕は出掛けても——」

「却下だ。お前はその椅子に座ってる」

「え……でも、あの」

「無駄に仕事を増やすな。近海の草薙りが終わったら、次はお前ら洞観者たちの性能を計るからな」

極楽さんは出し抜けに話をすつ飛ばしました。

提督代行が相手だところも勝手が違うものなのではしうか。……いやいやいや。

「分かったか？ 分かったなら返事をしろ」

「いえ……すみません、ちよつと混乱してます」

「一ノ傘姫乃のことは忘れろ。お前は私の秘書をやっていたらいい。つまり、言われたことをやっていたらいい。珈琲淹れとかだ」

「……どういう、ことですか？」

「何がだ」

聞きたいことは幾つもあります。ですが今はとにかく、ひとつ。

「傘姫提督を探すな、って、どういう意味ですか？」

「別れの言葉を聞いただろう。じゃあそれで納得しとけ」

有り得ない。この人は有り得ない！

「極楽さん。あなたは知っていますね」

「知らん知らん。立ち上がるな、大人しく座つとけ」

「話してもらいますよ。全部、何も彼も」

「磯風とはまた違った面倒臭い奴だな。ほれ」

極楽さんはパチンと指を鳴らしました。すると僕の前に青い炎の火柱が立ち上り、その中から――。

「傘姫……提督？」

「あらら。また会っちゃった、ねえ、斑鳩」

しかしそれは白昼夢のように朧げで、つかまえようとする前にフワリと消えてしまいました。

「これで満足か？ 理解したか？ おーい聞こえてんのかお前」

僕はしばらく、ぼうつとしていました。

同じ執務室にいる猫吊さんは、いつものように何も言いませんでした。

第62話 極楽とは程遠い極楽 ⑨

「駆逐艦、長月。一発芸、スプーン曲げマジックをやらさせていただきます！—」

酒が提供されはじめた食堂中に、長月は私を見よと声を張った。

これは罰ゲームとしてやらされているのか？ 否。長月はジャンケンで一発芸枠を『勝ち取った』。天照大艦隊の夜とはそういうものである。

「まず種も仕掛けもないことを証明します」と長月は皆に言った。「誰か、適当にスプーンとかフォークとか渡してくれませんか。それを曲げてみせます」

「ハイハイ！ じゃあこのスプーンを曲げてみせて。今日こそ絶対にトリックを見破ってやるんだから」

スプーンを掲げたのは瑞鶴だった。そのスプーンは念の為と数人の手をリレーして、ごくごく普通のステンレス製品であると確認されてから長月の手に渡った。

「よしよし。このスプーンだな。じゃあいつも通り、まずスプーンにおまじないをかけます」

チャララララン。と、長月はベタなノリでスプーンを撫で回した。瑞鶴たちによく見えるよう『何か仕込むおまじない』で皆の目を手先に集めた。このアツい視線である。これだけ熱心な注目が集まるから、夜の一発芸はやめられないのだった。

「はい。今このスプーンに宇宙のパワーが宿りました。それではいよいよ——」

「ちよつと待った！—」

またしても瑞鶴が手を挙げた。

「その宇宙パワーが宿ったっていうスプーン、もう一度調べさせて」「瑞鶴、おとな気ないわ」と翔鶴は言ったが無視された。

「いいですよ。でも宇宙パワーを扱えるのは私だけです」

余裕たつぷりの長月の一挙手一投足に注意を払いながら瑞鶴は前に出て、スプーンを受け取った。

瑞鶴は軽く力を入れて曲げようとした。曲がらない。長月のおまじないを真似てから曲げようとした。曲がらない。指でこすって温めてから曲げようとした。やはり曲がらない。

「んん？ んんん……」

「満足しましたか？ 私にしか扱えない。それが宇宙パワーなのです」

「ぐっ……いいわ。まだ普通のスプーンとしか思えない」

「いいですね。ではいよいよ曲げて——」

「待った」

「またも物言いがついた。今度は加賀だった。」

「長月、あなたは宇宙パワーで曲げると言ったわね」

「そうです。宇宙パワーで」

「今スマホで調べただけで、普通はテコの原理を利用して曲げるらしいわ」

「加賀さん、おとな気な過ぎます」と赤城は言ったが無視された。

「あなたの宇宙パワーが本当なら、支点・力点・作用点を作らず曲げられるはず。そうでしょう？」

「つまり、テコの原理が働かないような持ち方で曲げてみせろ、ということですね？」長月はニヤリとした。

「ええ。私たちによく見せながら曲げてみて頂戴」

「ファイトよ長月ちゃん！」と如月の応援が飛んだ。

「分かりました」と長月は右手でキツネ・サインを作った。「ではこのキツネの一噛みで曲げてみせましょう」

長月は親指と中指と薬指をくつつけて作られたキツネにスプーンを噛ませた。

食堂中が長月の『両手』に注目した。加賀の悪辣な物言いをいかな演技で躲すのかと、長月にそんな高度な誤魔化しができるのかと、ヒヤリとさせられた。ともすると折角の一発芸が台無しになってしまう。

だが長月の右手のキツネはスプーンをくわえて前に突き出され、左手はだらんと下にさげられた。

「ではいきます」と長月。

「ワン、ツー……………イヤーツ！」

すると、おお、本当に宇宙パワーが働いたのか、キツネがくわえている点がへニヤンと曲がったではないか！ スプーンは長月の言った通り本当に曲がった！

「馬鹿なっ!？」

おとな気ない加賀の目が大きく見開いた。密着した親指と中指と薬指、それ以外は何もスプーンに触れていない。手品師の演出のようにスプーンを振ったり回したり隠したりもしていない。ただ長月が前に突き出しただけのスプーンがへニヤンとなったのだ！

「「すつーいー」」とカレンダーズが叫び、どっと食堂中から長月に拍手が送られた。

喝采を浴びた長月は左手を振りつつ、右手のキツネで曲がったスプーンを元のまっすぐに戻した。瑞鶴と加賀、それと何人かがそのスプーンを見せろと長月に迫った。

聡明な読者諸氏は長月の『宇宙パワー』に既に気付いておられることだろう。一般人ならばステンレス製スプーンでは不可能でも、プラスチック製ストローならば同じことが容易に可能であるはずだ。要はそういうことなのだ。

長月は満たされまくった承認欲求を肴に、今日はうまい酒が呑めそうだった。



そんな騒ぎから遠く、食堂の隅で安酒、電気ブランをちびちびと呑んでいる二人がいた。

向かい合って座る叢雲と電、二人の間に会話は無い。ただ世の理不尽を面持ちで語るだけだった。長月が光なら叢雲と電が闇、とまで名状し得るほど雰囲気には差があった。電灯を消しているわけでもないのに二人の空間だけ影がかっていた。

皆、そんな二人に気遣って声を掛けなかった。或いは気遣ったわけ

でなくとも何とも言えなかった。

ただ一人、勇気ある時津風を除けば。

「ねーねー二人とも。長月のマジック見なかったの？ ねーってばー」

時津風は二人の肩を掴んでゆっさゆっさした。この子は空気を読めないのか？ それとも読んだ上でゆっさゆっさしたのか？ それは時津風にも分からない。

「……うえう」と叢雲の口から妙な音が出た。顔と目を真っ赤にしていた。「時津風ごめんね、なんでもないから気にしないで」

「うっそだー。叢雲はフツーそんなにお酒のまないじゃん。そーでしよ？」

「ああ………うん」

「面倒くさそーにされたー！ どうしちやったのさーむらくもー。電も。どうする、誰か叩く？ 叩いたら解決する？」

叢雲と電、二人は誰かの名前を口にしかけて、やめた。代わりに電気ブランを一口呑んだ。

「んく？ ……なるほど。なるほどねー」と時津風は一人で勝手に納得した。「分かった。そういうことなら時津風にまかせてまかせて！」

「……時津風に何が分かるのです」

電の少々トゲのある言葉を聞いても、時津風は尻込みしない。その程度で下がる時津風ではない。

「叢雲は時津風隊の一員だったからね！ 電は——うん、電も今から時津風隊の一員ね。じゃあ待ってて二人とも。すぐに元気にしてあげるからね、たぶん！ じゃなくて絶対！」

そう言って時津風は食堂の明るい方、皆の方へと戻っていった。

叢雲と電は顔を見合わせた。

（何だったのかしらね）

（何だったのでしょうね）

二人は鉛のようなため息をついて、再び電気ブランを黙々と減らす作業に戻った。

第63話 極楽とは程遠い極楽 ⑩ 出張版『撃沈王の土産話』

グッズの売上を見れば、艦娘人気というものはそれなりに大きいものだと誰の目にも明らかである。商品棚を埋めては空けるを早いサイクルで繰り返す、これがどれだけ特異なことかを撃沈王・大和は正しく認識しきれていない。自分のグッズの売上がどうこうと右耳には入るがそのまま左耳から抜けてしまうからである。一方、姉妹艦の武蔵はこの恩恵に与っている。カレーが美味しい、猫がいる、だがコーヒーが不味く立地条件にそれほど恵まれているわけでもない喫茶店ハングド・キャットが今日まで長く続いているのは、店員が艦娘だからである。「艦娘メイド喫茶」と揶揄されることがあるのも仕方のないことかもしれない。

その店員たち全員が、普通の艦娘ではない『洞観者』であることを、関係者にもあまり知られていない。ましてや客が知る由もない。彼女ら店員は小遣いを稼ぎつつ、洞観者の要所ハングド・キャットの運営に手を貸している。

それと、物は試しとレジ横に置いてみた大和型グッズもまたハングド・キャットのお猫様たちの餌代の助けになった。

「ほら見なさい。グッズを作られるのも悪いばかりじゃあないでしょう」

「大和お前、ときどき重度の御都合主義に走るよな」



「ねえ武蔵。以前にもこの話したかしら、してないかしら。艦娘の中のぐくぐく一部がドーカンシヤになる？ のよね」

「なっているな。それが？」

「深海棲艦にも、ドーカンシヤみたいな変り種がいると思う？」

「勿論いるだろう。しれっと百貨店で買い物をする鬼姫クラスがいる

くらいだ」

「そういう話じゃ……いえ、そういうことなのかしら……んー」

「なんだ。変わった敵でも見つけたか」

「そうなのよ。その深海棲艦っていうのが——」

「待て。待てお前。この話は喫茶店でしていい話なのか？」

大和は店内をキョロキョロと見回した。

「大丈夫。猫しか聞いてないわ」

「色々軽い奴だな、撃沈王」

「うるさい。変な組織のトップにだけは言われたくないわ」

「で？ 変わった深海棲艦とやらは？」

「幽霊みたいな深海棲艦がいる、っていうピンと来ない情報が上がってきたから偵察に出たのよ。でも、そもそも普通の深海棲艦だって幽霊に見えなくもないし、半信半疑——いえ二信八疑くらいだったんだけどね。本当にいたのよ。武装もしないで、ただ空を見上げてるだけの、女性の姿形をした幽霊みたいなのが」

「お前まで『幽霊みたい』で済ませてどうする。もつと言葉で具象化しろ」

「鬼姫クラスの深海棲艦から艦装を全部取り上げた感じよ。ほぼ裸。ああ、幽霊とはいっても足はちゃんとあったわね。身体が透けて見えただけでもないわ。でも、ただ海の上に立ってるだけで何も反応がなかったのよ」

「近付いて確認したのか」

「この手で触つてもみたわ。それでも反応なし」

「そこまで接触しておいて反応なしとは信じられんな。その幽霊、敵対しそうな雰囲気すらなかったのか」

「ええ」

「お前から攻撃を仕掛けたりはしなかったのか」

「観測機を此れ見よがしに飛ばしたくらいだったわ。無視されたけど」

「当然、話し掛けたのだろうか？」

「文字通りの心ここに有らず、って様子だったわね。たぶん今々もま

だ空を見上げてるんじゃないかしら」

「ふうん。変わった深海棲艦もいるもんだ——いやちよつと待て。今々もまだ空を、ってお前、そいつのことを放置してきたのか」

「だってあまりに無害だったし」

「静かに沈めてやれよ。幽霊っぽかろうが何だろうが深海棲艦だったのだろう?」

「違うのよ。深海棲艦なのは確かだったけど、海の脅威とか、その子の鎮魂とか、そういうのは違うって気がしたのよ」

「よく分からんことを言うなあ大和よ。ああ、それで私に、深海棲艦バージョンの洞観者のような存在がいるか聞いたわけか」

「そう。私だってかなり迷ったんだから。沈めるか見逃すか、それとも担いで拿獲してしまうか」

「拿獲はさすがに危ないな」

「まあ、そうよね」

「かといって無視を決め込むわけにもいくまいよ。その幽霊が後の脅威にならない保証もないしな」

「……いいえ。だから、そういうことじゃあないのよ」

「あん?」

「私の勘がそう告げているというか、なんて言えばいいのかしら。『あの深海棲艦の物語に余計な手出しは許されな』ような気がするのよ」

「おいおい大丈夫か撃沈王。そんなフワツとした根拠で意思決定していいのか」

「これも勘だけど、もし武蔵があ深海棲艦に会えば、私と同じ気になると思うわ」

「お前一人でその幽霊を偵察してきたわけではないのだろう? 他のメンバーは何と言ったんだ。お前の判断に素直に従ったから幽霊はまだ空を見上げているんだろうが」

「……ま、まあ、ね……。そう、それともう一つ、今も頭の中で必死に記憶の掘り起こしをやってるんだけどね。その深海棲艦、昔どこかで見た気がしてならないのよ。頭からもう少して出てきそうまで出てこ

なくて」

「それはつまり——元艦娘で、お前の知り合いだったというヤツか？」
「そうじゃないかとも思ってるわ。でも、それなら忘れたりはしない
と思うんだけど」

「なるほどな。お前の頭がアテにならないことは再認識した」

「私知ってるなら武蔵も同じように知ってる可能性が高くない？」

それにもし幽霊がドーカンシヤみたいな妙な存在だったら、武蔵なら
何か分かるかもしれないし。というか何とかしてしまっってほしいわ」

「私は行かないぞ」

「なんでよ」

「忙しいからに決まってるだろうが。お前の勘に付き合う暇はな
い」

「今こうして喋ってるくせに？」

「私は仕事中で、お前はただカレーを食っているだけの暇人だ」

「んまつ！ 頼り甲斐のない姉妹艦ですこと」

「本気で私に押し付けるつもりだったのか」

「次の大規模攻勢の準備があつて、無害で変な敵の相手なんてしてら
れないの」

「じゃあ、アレだ。極楽にでも依頼したらどうだ？」

「……………」

『『島攻略オンデマンド』のように金さえ積みめば、奴がどうにか解決す
るだろう』

「…………本気で言ってる？」

「適当に言っている」

「迷わせるようなこと言わないで頂戴」

「いや迷うなよ阿呆。大和型を貶めるような真似だけはするなよ」

「大和型が淹れるコーヒーは不味い、って私まで言われたことがある
んですけど」

「…………きつと聞き間違いだろう」

「ため息も出ないわ、お馬鹿さん」

第64話 極楽とは程遠い極楽 ⑪

「私の姉妹艦に始末を付けてやるためだ。悪いか」

そう極楽さんは言いました。やっと言ってくれました。ドーモ、斑鳩です。

誰かが訊かないと、この人、すべて自分の中で完結させてしまいうすからね。目標を知らされないまま出撃する艦娘ははいけません。代行であろうと提督は提督なんです。説明すべきことは説明して然るべきでしょう。……と、お願いすること一週間。僕はようやく極楽さんの理解を得られたのでした。

うーん、傘姫提督を相手するよりつらい。

「悪いのか、斑鳩」

「まさか悪いだなんて。話してくれてありがとうございます」

「ふん」

……。

……………。

……………。ほら、もう説明が終わる！

「あの。もうちよつと詳しく話を聞きたいんですけど」

「詳しく？ 何をだ」

「その姉妹艦さんの名前とか。始末？ の具体的な方法とか、それと――」

「どんだけ喋らせる気だ貴様。我に時報ボイスは実装されてないぞ」

戦艦極楽に実装されているボイスが少ないのは、この一週間でよく思い知らされました。

いえ、喋らない人ではないんですけどね。雑談はしてくれませんが、戦略とか部隊編成の理由とか、何より面倒臭がりな人がわざわざ提督代行にまでなった理由とか、肝要な部分をまったく話してくれませんでした。「そんな事よりデビルメイクライ5の話が先だろ」みたいな。あるいは僕に丸投げでした。

「極楽さんと目標を共有したいんです。この天照隊分隊の秘書艦はほとんど僕ですから」

「肩肘張ってんな、お前」

「傘姫提督が指先ひとつで召喚されることには、今は敢えて触れませんが、そのかわり教えてください。この分隊がやろうとしていることを、一から十まで」

「――まあ、そうだな。率先して面倒事をやりたがるお前は貴重だ。練度もカンストしてるしな。最初から色々やらせるつもりだったが、さらに仕事をくれてやろう。だが、よく覚えておけ。お前じゃあ『寿』をどうすることもできん」

「寿？」

「私の姉妹艦の名だ」



極楽さんの昔話を、僭越ながら僕の口から語りましょう。

僕が語る過去というのは、まだ現在のように海戦の研究が進んでいったわけでもなく、艦娘は手探りで深海棲艦を殴っていた部分が多々あった頃。

例えば、その当時の大和はまだ撃沈王と呼ばれてはおらず、最大射程距離と有効射程距離に大きな差があったはず（当然？ いえ、

大本営直属の艦隊だけでなく、各泊地の艦隊も、量が少なく確証も怪しい情報を元に各々の戦略・戦術を組み立てては失敗しては再検討を繰り返していました。どこもかしこも非効率。強敵を叩いたという戦果を持ち帰り、一息入れている間に敵に回復の猶予を与えてしま

う。

まあ、つまり、それだけ昔の話だということですが。その頃の極楽型戦艦の二人は、大本営直属であるという点をのぞけば普通の艦娘でした。

極楽さんと寿さん。

二人は『その名を知られないほど』優秀な艦娘でした。何故その名が世界に轟かないのか、まあ言うまでもないことでしょう。大和や武

蔵さんと肩を並べるとは、そういうことを意味します。

極楽さんの辞書には最初から、謙虚という言葉がありませんでした。

「おいおい大和、我らは見えた深海棲艦に片っ端から砲弾ブチ込む委員会か？ あんな適度に面倒臭そうなヤツはそのへんの艦隊に譲ってやればいいだろ。我は帰るぞ。帰ってスマブラをやる」

軍隊では無能な働き者こそ迷惑な存在だと言われていますが、旗艦大和に言わせれば有能な怠け者、その権化が如き極楽さんこそアレな存在でした。大和のために補足しておく、大本営直属部隊は砲弾ブチ込む委員会でないのは確かですが、ある程度の深海棲艦群ならば殲滅できるほどの艦娘たちで構成されています。十分叩けると判断したならば叩いておくのも作戦のうちです。……どうして極楽さん、性格を理由に外されなかったんでしょね。きつと大和より偉い人もまたアレだったのでしょうかね。



「私の判断こそ合理的だろう。適当な艦隊に仕事を振ってやれば戦果を稼がせてもやれるぞ」

「うーん、ノーコメントで」



幸い、極楽型二番艦の寿さんが大和と極楽さんの間に入れる性格だったので、意見の衝突はそれほど深刻な問題になることはありませんでした。

極楽型の二人はとても良いコンビでした。この二人だったから極楽型は優れた戦艦足り得るのです。どちらかが欠けてはいけません。大和には武蔵さんが必要なように、極楽さんには寿さんが必要なのです。

そして——いえ、だからこそ、と言うべきでしょうか。この昔話で

は別れが語られることになるのです。

ある日、ある時、時計の秒針がひとつ進んだ瞬間のことでした。

極楽さんは気付いてしまいました。

すべて、意味が無いことに。

艦娘？

深海棲艦？

貴様らは何を戯れ合っているんだ？

一匹撃沈した？

二人轟沈した？

それは何が楽しくてやっているのか？

大和が砲撃用意の合図を出している状況の中で、極楽さんは目覚めてしまいました。

今迄の全てが夢だったような錯覚と実感。自分自身にさえ説明出来ない幻想と正体。

極楽さんでさえ困惑するのは仕方のないことです。まだ例の無いことでしたから。この極楽さんのように目覚めてしまった艦娘たちが自らのことを『洞観者』と呼称しはじめるのは、何年も先のことでした。



「では、最初の洞観者は武蔵さんや長月ちゃん達じゃあなく、極楽さんだったんですか？」

「我より先がないと断言はできんがな。少なくとも武蔵よりは先だ」



極楽さんが動きを止めてしまったことで戦況は悪化し、大和たちはギリギリのところまで撤退に成功しました。

当然、大和は命令無視について問い詰めようとしたが、それよ

り先に極楽さんは寿さんに訴えました。

こんな戦争に意味など無い、と。

我らだけでもこの無意味な状況から抜け出すぞ、と。

ですが寿さんは静かに、姉妹艦の突拍子もない言葉に首を横に振りました。

寿さんもまた、極楽さんと同時に目覚めてしまっていたのです。それでいて大和たち、普通の艦娘たちと共に戦うことを決意していたのです。



「二人同時に洞観者に……何か原因があったと考えるのが普通ですよね」

「さあな。近くにSCP-040-JP（ねこです。よろしくおねがいします。）の汚染源でもあったんだろ」



極楽さんは寿さんの意志に従い、艦娘として戦い続けることに頷きました。

ですが、それはただ自分に無理矢理言い聞かせているだけでした。無理がありました。まったくの無駄だと分かっている戦いなど長く続けられるはずがありません。極楽さんがそれに気付いたのは、寿さんの様子が日に日に『おかしく』なっていたからでした。

無理をする理由など何処にもない、と極楽さんは口癖のように言い続けていましたが、寿さんは無理をし続けました。

続けて、続けて。

我慢強さが災いして、寿さんは限界以上に我慢し続けてしまいました。

そしてついに、寿さんは極楽さんをお願いしました。「私を殺して」と。

「殺し損ねた気がしてならんのだ」と極楽さんは、まるで寮の自室の鍵をかけ忘れたくらい口の調で言いました。「うっかり沈めた程度で済ませてしまったかもしれない。姉妹艦が相手だったからな。我ともあろう者が不覚だった」

洞観者——今の僕らは、多くの仲間と手を強く握り合っているから戦えています。戦えなくなっただとしても『ハングド・キャット』というセーフティネットがあります。だから、僕には極楽さんにどうこう意見することはできません。昔の極楽型の二人にもです。だって僕はハングド・キャットに命を救われたから。ハングド・キャットがなければ僕は斑鳩という名を与えられることもなく始末されていたから。

そう。始末。

「やっと理解してくれたか斑鳩。そうだ。寿を始末してやらねばならん。だが我の姉妹艦がそう簡単に殺されてくれるはずもない。だから我は考えた。寿を確実に始末できるだけの艦隊を持とう、とな」

「それで、この分隊を乗っ取って提督代行を請け負う真似を……」

「その通り。この艦隊は特に都合が良いだろう？ 昔から良かったが、天照大艦隊になつてからはさらに良くなった」

「……思考を放棄して言いますが、呆れます」

「ふははは好きに言え。まあ、かなり時間は掛かってしまったが、奴は待つのを苦にしない性格だった。問題なからう。では寿始末に向けた仕事を始めるぞ斑鳩。駆逐艦の長月をこの鎮守府に呼べ」

「っ！ 長月ちゃんに何をやらせるつもりで——」

「違う違う勘違いするな。長月程度の力で寿を相手させるつもりはない。だが我がここに以上、雨が降るとこの鎮守府はゾンビに群がられるぞ。お前、バイオRE：2はやったか？」

「ゾンビ？ 今度は何の話ですか？」

「今週末は天気が崩れるらしいから、その時にでも見ておけ」

また意味不明なことを言い出す極楽さんです。ですがどうせまた

説明は無いんでしょう。これ以上の話を引き出すのも疲れるだけですし、言われたとおり今週末を待つことにします。

しかし、寿さん……極楽さんの言っている通り、今もどこの海で待っているのでしょうか。深海棲艦になりかけの僕が、極楽さんの話を疑うのはおかしいでしょうか。

この『無意味な戦争』の中で、僕らはこれ以上何をやればいいというのでしょうか。

第65話 極楽とは程遠い極楽 ⑫

天照大艦隊本隊、南鎮守府は今日も穏やかな一日を始めようとしていた。

「おつ、いいところにマシユ風はつけん♪ ねーねーマシユ風さー、ねー」

「時津風、お願いですから私のことは、普通にマシユか浜風かのどちらかで呼んでください。自分でも混乱してしまいますので」

「あのでっかいシールド貸してほしいんだけど。何日間か。何週間か」

朝食をしっかり食べてしっかり元気なのが時津風の良いところだった。

『あのでっかいシールド』とは、長月のネコノツメと並ぶ駆逐艦寮内の珍物である。マシユが何故か自室に飾っている、十字架を模したような巨大な盾がそれである。大きさはマシユの身長を超え、戦艦の装甲にするにも大き過ぎる。そんなものをマシユがなぜ大切そうに持っているのか天照隊の誰も知らない。知ろうとしたことはあつたが、そもそもマシユ自身がすらくよく分かっていない。

「はあ。何に使うんですか?」というマシユの疑問は尤もである。「時津風には大き過ぎて何にも使えないと思います」

「来たる戦いに備えないとさー。あたしってば時津風隊の旗艦だし?」

「戦い、ですか。それほど身構える必要のある作戦はなかったと記憶しています」

「実はね」と時津風はあたりを見回しつつマシユに耳打ちした。「叢雲と電に元気がないでしょ。あれ、攻撃されてるからなの」

「そうなんですか!?!」

「シーツ、声大きい」

「す、すみません。それで、攻撃とはいったい何から?」

「たぶん北鎮守府、分隊の方から」

「(ごくり) 分隊が……それは穏やかではありませんね。しかし何故

……」

「分かんない。でも今週のあたしの運勢は『北の方角に注意』ってニュースで言ってたって雪風が教えてくれたし間違いないよ」

「それで、具体的にどのような攻撃が分隊から？」

「それが分かればあたしも苦労しないってばー。ほら、ニュースの占いって細かいことまでは教えてくれないし。でも雪風が言ってたんだよ」

「えっ？」

「うん？」

「あの、時津風？ ニュース以外の情報は？」

「これから集めるよ。だから威力偵察のためにマシユ風のシールドを借りたいの。あれすっごく強そうだし」

「……ええと……重たいものなので、気をつけて遊——使ってくださいね」

「うん、ありがとうマシユ風！」



磯風は今や立派な売店のアルバイトである。売店の主、極楽お姉さんが分隊の提督代行サービスで不在のため、磯風は一人で売店を切り盛りしている。これはもう、来る日には南鎮守府を離れ、北鎮守府の売店のオーナーとなるのも確実かと思われた。

だから、いまさら「艦娘に戻らないか」と言われても彼女は困ってしまうのである。

「叢雲を助けるため——か」

昼食時を過ぎて、売店にはカウンターに立つ磯風と客でもない時津風しかいなかった。無駄に品揃え豊富なこの売店は次のおやつタイムまで暇だった。

「すまない時津風。それでも、私は私の仕事から、この売店から離れるわけにはいかない」

「なんでさー」

話に乗ってもらえるものとばかり思っていた時津風は、散歩の途中で引き返された犬のような顔をした（それがどんな顔かは作者にも分からんが、たぶんそんな感じの顔である）。

「一緒に戦つてよ。時津風隊だった時みたいに」
「今でも戦友と思つてもらえているのは嬉しい。だがな。この磯風の今の戦場は、ここなんだ。ここで皆に必要な物資を可能な限り提供するのが戦いだ」

実際、今の磯風はお姉さんに代わり一人で暗黒メガコーポ『アカシマート』（①話参照）とギリギリのところまで戦っているのだが、そのことをひけらかす彼女ではない。

「兵站を司る、と大げさに言うつもりはないが、あれこれが欲しいとやってきた客が何の不思議もなくそれを買っていける拠点でありたいんだ。この磯風がいなければ皆が困る。皆を困らせるようであれば私が困る。それがもし、鎮守府が敵の空襲を許してしまっている状況下であろうと変わりはしない。例え爆炎の中であろうと戦意高揚のために菓子でも何でも売り続けてみせよう」

磯風の、そのまっすぐ見据える眼が、不思議と時津風を理解させた。時津風はそれを自分の言葉では言い表せない。しかしなんとなく、磯風はただ午後のおやつを売るだけのアルバイトではないらしかつた。

「なにー、難しい話？」へいへーい、と時津風はカウンター越しに磯風の頬を指でつついた。

「いや。とにかく」磯風はその手をペシンとはたいた。「すまないが他に当たってくれという話だ。以前の時津風隊にはこの磯風と叢雲の他にも仲間がいただろう」

「五月雨とか、か……。ん、やつぱやめとく。あたしの戦いはあたしがやらなきや。あたしは一人でやれる艦娘だからね」

「そうか。時津風がそう思うのなら、それが正しいのだろう。頼む、叢雲を助けてやってくれ」

「うん！　ありがとね磯風。バイト頑張つてね」

「ああ。時津風も、何をするのかは知らないが頑張れ。うむ、何をする

のかサッパリ知らんが」

「聞きたい？ 聞きたい？」

「いや、別に。と言うか私はそもそも叢雲と同室で生活しているからな」



「普通の駆逐艦風情が、なぜ我が『作戦』に打って出ると知ってる？」

天照隊分隊、提督代行、極楽は眉をひそめてみせた。

極楽は温めておいた『作戦』を自分と洞観者たちだけで済ませるつもりでいた。無論、他言は許していない。

しかし、どういうわけか、マシユから借りた巨大な盾をわっせわっせと北鎮守府の執務室まで運んできた時津風は言った。

「お姉さん、あたしは知ってるんだよ。叢雲と電が落ち込んでるのはお姉さんに原因があるんだよね。その企み、この時津風が見破ったり！」

「(洞観者となって日が浅い山城あたりが喋ったのか?) 総旗艦の二人か。ご愁傷様だが我にそれ以上の感想は無い。というか貴様、巨大な十字架を背負うヤツとかりアルで初めて見たぞ。それは何だ、貴様の墓標になる予定か」

「このシールドで何でも弾き返せるよ」

「ほう、それで？」

「とにかくこの北鎮守府が怪しいの。あたしに隠し事とかよくないなあ〜」

「ああもう面倒臭い。おい斑鳩、てきとーに相手してやれ」

話を振られた秘書艦・斑鳩はだが、パソコンのモニターを凝視して仕事の方が忙しいとアピールしている。隣の猫吊さんと同じように集中力を真正面にのみ集めていた。段々と極楽の扱い方が分かってきた斑鳩だった。

極楽はこれ以上ないほどわざとらしい舌打ちをした。

「なぜ天照隊には面倒事に首を突っ込もうとする阿呆が多かったり少

なかつたりするんだ」

「阿呆じゃないよっ！」

「叫ぶな。やかましい。……まあいい。どうせ洞観者だけでは少し人数が足りないと思ってたところだ。作戦に参加したいと言うなら参加させてやる。赤ブルをしこたま詰めたドラム缶を運ばせるとしよう」

「輸送作戦？ 今から戦うんじゃないの？」

「今から？ 何と戦うつもりだ？」

「いやだから、お姉さんと？ そんなもって叢雲と電が元気になつて？」

「は？」

「え、やらないの」

「……ああ、我はいまやっと理解した。いかによく聞け駆逐艦の何とやら。お前が真に戦うべき相手はここから東の方において、そこに辿り着くルートを固定するにはドラム缶をガン積みした駆逐艦が一人必要だ。つまり、お前の力が要る」

「あ、そうなの。でもせっかくマシユ風からシールド借りてきたんだよ」

「余計な伏線を張るな、我の物語が散らかるだろうが。今日までに返してこい」

「ちえー」

こうして戦艦寿始末作戦のメンバーが出揃った。

旗艦、極楽。

洞観者の長月、山城、斑鳩、伊168、伊19、伊58、伊8、伊401。

そして普通の駆逐艦、時津風。

この作戦、この物語の結末は極楽だけが思い描いている。ましてや洞観者ですらない時津風には、結末も、ルートも、何も見えなかった。

「え、んな阿呆な。ルートくらい先に教えといてよ」

「おーい斑鳩。おいコラ秘書艦。お前の仕事だぞ」

「……………（ガン無視）」

第66話 極楽とは程遠い極楽 ⑬

おお我ら艦隊の慈母アマテラスよ、いるんだったら答えてください。

どうして私と扶桑姉さまがなんとか都合を付けた日に限って、急な仕事を入れてくるんですか？ 私たちにはちよつと食事をするのも許さないスタイルですか？ 神様にだってやっていいイタズラと悪いイタズラがあつて、あなたのそれは後者だと思ふんですが？ 電話もメールもSNSも制限されている姉さまと予定を合わせる事がどれだけ難しかったか、私、山城は憤りを覚えざるを得ませんよ。……はあ。姉さまをがっかりさせてしまったわ。この埋め合わせもどうせ難しいんでしょうね。埋め合わせの埋め合わせ、そのまたさらに埋め合わせもどうせ……不幸だわ……。

誰よ「戦争六周年おめでとう」とか言ってるの。馬鹿じゃあないの。こんな戦争がなかったら本当は今頃、私と姉さまは一緒に——いえ、百歩譲って戦争は仕方がないとして、どうして私は北鎮守府・分隊に呼集されなきゃいけないのよ。分隊の活動に戦艦なんて必要ないはずなのに。



というわけで、私は分隊の方に集められた。

何故に？ それは今から提督代行・売店のお姉さんから説明がある様子だった。

会議室には長机が四角に並べられ、

分隊の斑鳩と潜水艦五人

本隊の私と長月、時津風

が座っていた。てつきり洞観者の集まりなんだと思ってたけど、なぜ時津風がいるんだろう。まあどうでもいいけど。それを言ったらお姉さんも謎だし。

ああ、誤解のないように言っておくと、潜水艦たちは水着ではなく

スーツ姿だった。それもちよつと着慣れてる感じの。カジュアルな姿のお姉さんよりビシツとしようという意気込みが伝わってくる。

お姉さんはホワイトボードのそばに立って、ボードにきれいな字で大きく『戦艦寿始末作戦』と書いた。

「うむ、よく集まってくれた。お前らを今ここに呼んだ理由は他でもない、今からお前らはこの作戦に従事してもらう」

そう言ってお姉さんはホワイトボードをペシペシ叩いた。

戦艦寿始末作戦。

戦艦の寿さんを始末する作戦。

なんとまあ分かりやすい面倒事ですこと。

私は無駄だと分かっているでも拳手をした。

「なんだ、山城」

「私の代役は探すから南鎮守府に帰っていい？　今からでも扶桑姉さまと——」

「もういい黙れ。じゃあブリーフィングを始めるぞ」

ほら拒否権なんてない。知ってたわ。

「この作戦の目標は私の姉妹艦、寿を沈めることだ。鬼姫クラスのネームド深海棲艦を一匹ぶちのめしに行くようなもの、とは少し違うからな。だから我がわざわざ説明してやるんだぞ」

「その寿さんが深海棲艦になってしまっているんですか？」と斑鳩が聞いた。

「正直どんな状態かは分かってない。判明してるのは奴がいるとされる位置、それと能力の片鱗だけだ。だが奇跡的に艦娘のままであったとしても、深海棲艦になっていたとしても、状態に関係無く沈める。問答無用だ。つっても、お前らはそこんとこ深く考える必要はない」
「いやいや考えないわけにはいかないでしょうよ、と言いたかったけど、とりあえず話を最後まで聞くことにした。」

「毎度よくある、敵を倒しに行く作戦であるからして、今回の作戦も二段階に分けられる。いわゆる道中とボス戦だな。日帰り電撃作戦を予定している」

お姉さんは作戦の概要説明をはじめた。



作戦は必ず晴天続きの日を狙って決行する。万一、運悪く雨に降られた場合については後で話す。

まず道中はルートもクソもない、一直線に寿を目指す。

寄り道は無しだ。つまり視界に深海棲艦があつたとしても無視する。索敵も不要だ。楽だろう？

かといって敵に見つからないよう微速でコソコソするのは私の趣味じゃあない。

そこでだ。我々は深海棲艦に偽装する。敵になりきって堂々と進軍する。カムフラージュ率は80%以上を目安とする。具体的な偽装方法は第47話『ラックレッサー山城 6』で斑鳩がやったのと同じだ。深海棲艦から奪った装甲やら何やらを斑鳩の能力で体に貼り付け、ついでに山城の能力で青い炎をそれっぽく体に点ける。これで十分なカムフラージュ率が稼げるだろう。

敵に接近することになってもキョドるなよ？ 間抜けな深海棲艦になりきれ。

「ここにいる全員分、深海棲艦の装甲が必要なんだよな」と長月。「かなりの量を奪わなきゃいけないと思うが」

「このブリーフィングが終わった後、お前らに集めに行かせるから心配するな。細かい部分はペイントでカバーする」

偽装した我々は脇目も振らず寿を目指す。

だがもし運悪く、遭遇した深海棲艦が、我らが艦娘だと気付いて行動してきた場合は、潜水艦たちが迅速にトルピードランチャーで片付ける。十分に偽装した我々には敵も慎重になっていることだろう。そこを瞬殺させてもらう。

航空機に見つかった場合は少々厄介かもしれないが、その場合は斑鳩と山城も能力使用に支障がない程度に加勢しろ。長月、お前はここまでは戦うなよ、力を温存しろ。

まとめろぞ。

基本、我々は斑鳩と山城の能力で深海棲艦に偽装し、戦闘を避けて一直線にボスへと向かう。

万一、余計な戦闘が発生した場合は潜水艦らで速やかに対処する。ここまでで何か質問は？

「ねー、あたしの役目は？」と時津風が手を挙げた。「あたしも戦えるんだけど」

「お前は赤ブル運搬要員だ。我がいつでも飲めるように、私の隣にいろ。それと、そうだな、深海棲艦なりきりグッズの予備も用意しておくか。とにかくお前はドラム缶を運ぶ役だ」



次にボス戦、つまり寿との決戦だが……。

奴は私の姉妹艦、極楽型戦艦の二番艦だ。つまり残念なことに我と同等の強さが期待されてしまう。そうになると普通程度の戦力じゃあ邪魔なだけだ。

長月以外は数キロ離れている。我と寿の戦いに巻き込まれないことだけを考えろ。うっかり流れ弾か何かに曝されたら泣き喚いてもコラテラル・ダメージ扱いだからな。自己責任で身を守れ。

長月には状況を見てから指示を出す。悪いがこればかりは今の我には分からんのでな。ネコノツメはもちろん装備させておくが、ちよつとしたサポートをするにとどめるか、我と挟撃のカタチに持ち込むか、とにかくお前はボス戦で何かするものと構えておけ。

寿の能力は分かっている限り、死霊術の類を行使する。

私のことがよほど憎いのか知らんが、ドス黒い死霊をゾンビ的なものに変換して襲わせる——のが可愛い方だろうと我は想像しているな。

お前らもよく知ってるだろ、海ってヤツは今現在、深海棲艦という分かりやすい形で敵意をアピールしている。『それ』が何を意味するのか洞観者であるお前ら……あー、時津風を除いた奴らには今さら説明しないぞ。

「あたしにも説明してよっ！」と時津風は当然の権利を訴えた。「なに、直に見れば分かる程度のことだ」とお姉さんはなだめた後にボソツと言った。「まあ、作戦後にクラスB記憶処理を施すがな」『それ』を寿はどうやら濃縮還元できるらしい。まったく我が姉妹艦ながら悪趣味な能力だ。まあ少ない情報からの推測だけだな。実際もつと美しい能力であることを、極楽型戦艦の一番艦たる我は願ってやまない。

さて、あれこれ言ってもボス戦で戦うのは我と、状況によっては長月の二人だけだ。他の奴らは戦闘が終わるのを遠くで待つだけだ。質問はないだろうか？

「あの、ちよつと聞きづらい事ですけど」と斑鳩が恐る恐る言った。「そのボス戦は一回で終わらせる予定ですか？ 例えば一戦目は様子見に徹して改めて寿さん対策を練るとか、もしくは……もし極楽さんがその、大破してしまった場合の撤退とか」

「ははあ。つまり我が負けるパターンか。なるほど全く考えてなかった。盲点というヤツだな。そうだなあ——」

言つてなかったが、お前らをこの作戦に組み込んだのは、道中、我を守らせるのと他にもう一つ理由がある。

『お前らは寿が始末されたと認知する証人だ』

我が一人で出撃して寿を沈めてきてもだ、それを疑う馬鹿共のせいで噂話の方が真実を塗り潰し、寿という存在をまた作り上げてしまうだろう。妄想、幻想、怨念、執念をカタチにするのが奴の能力だからな。

だから、お前ら、世界を冷めた目で見る洞観者が目撃しろ。この極楽が寿を始末したという記憶を持ち帰れ。その後は日記に書いたりツイートしたりしろ。

で、斑鳩の質問だったな。寿を目前にして背を向ける場合についてだが、そんなもんは無い。我が万が一にも負けたら——つまり殺されたらという意味だが、寿は次にお前らを殺すだろう。形勢が不利だから撤退するとかいう甘えなど無い。

おいおい、そんなシケた面をするな。なんだなんだ我がそんなに信

用ならんか貴様ら。

じゃあ分かった。妥協案を出してやろう。

斑鳩、もしお前のギリギリで撤退可能かどうかの線が見えたら他の全員を連れて逃げる。必死こいて戦っているであろう我を囷にして、という意味だ。

「私はどうしたらいい？」と長月。「あんたの指示で動いてるはずだが」

「斑鳩の撤退命令を優先しろ。というか多分そんな状況になったら、お前がしんがりで守ってないと逃げることも叶わんぞ」

逃げる話が出たついでに言っておくがお前ら、変な正義感を発揮して我に手を貸そうとか、愚かにも助けようとかするなよ。アイアンマンとハルクの喧嘩にポメラニアンが割り込むようなものだ。さすがの我も無意味にお前らを死なせちゃあ後味が悪くなる。

とにかくボス戦はだ、もう一度、念押しでまとめるが、我が戦う。長月がサポートする。他の奴らは遠く離れて待機。事が片付いたら、道中と同じく偽装効果で悠々と帰投だ。

うむ、シンプルでパーフェクトな作戦ほど美しいものはないな。



お姉さんはブリーフィングの最後に「ただし、だ」と付け加えた。「天候にだけは気を遣うが、もし不運にも作戦中に雨に降られてしまったら、作戦の中止か強行かを我が判断する。お前ら、死にたくなかったら雨雲が近づいてないかを特に注意しとけ」



「山城はこの作戦、どう思うっ?」

秘書艦の斑鳩を除いた私、長月、時津風、潜水艦の五人は深海棲艦の『ガワ』を集めるクエストに駆り出された。イムヤが言うには、コツはポケモンを捕獲するように深海棲艦をギリギリまで弱らせるこ

とらしい。もちろん私たちに必要なものを剥ぎ取った後は容赦なく沈める。作戦を始める前から悪夢的だった。

長月はスイーと私に寄ってきた。

「私はどうも何かの間違ってると思うんだ」

「ええ間違ってるでしょうよ。だって、寿さん？ が問答無用で地獄に蹴落とされるんだもの」

「そういう意味じゃあなくて……お姉さんが言うようには上手くいかない気がするんだ。気がするってただけだけど」

「長月、ひとつ確実なことを教えてあげるわ」

「なんだ？」

「作戦には私が参加する。私は不幸な何かをやらかす。ほら何も起こらないわけがない」

「……なんか、すまない」

謝られてしまった。

「長月のこと、頼りにしていいのよね。私が自己防衛するより確実なんでしょう」

「ああ。安心して私に任せてほしい」

「そのセリフ、扶桑姉さまに言ってみたいわ」

「しかしなあ……上手くいく気がまったくしないのは何故だ……」

この深海棲艦のガワ集めクエスト中、長月をお願いして全力の戦闘を見せてもらった。お姉さんや斑鳩が信頼を置く力つてやつをこの目で見ておきたかったというか、私はまだ長月がとんでもない怪力を持つてことしか知らなかったし。力持ちなら戦艦の艤装だつて何だつて要塞の如く好きだけ装備できるでしょうけど、それ以上にはならないのでは？ と思っていた。

「刃物がないと本気は出せないんだけどな」

いけしゃあしゃあと言う長月は艦これの世界の住人じゃあなかった。あの音は確実に音速を超えた音だった。時津風なんてその目で見ておいても最後まで信じなかった。

それでもまだ、長月は戦艦寿始末作戦に不安があるようでブツブツ言っていた。

第67話 極楽とは程遠い極楽 ⑭

午前10時03分。

「違法薬物『メン・タイ』の取り締りを強化せよ——……なんです、この任務？　こんなの僕、初めて見ましたよ。何かの間違いでは？　極楽さん、これ艦娘に任せる仕事じゃあないでしょう」

「我に聞くな。暇そうな駆逐艦とか軽巡でも向かわせておけ」

提督代行、極楽は適当だった。

濃紺の長袖のシャツに、似たような色のジャージのズボンというラフすぎる姿が、発言にいつそうの軽さを持たせた。せっかくのスラリとした美人が残念な姿になっているのも彼女の性格ゆえに仕方のないことである。

「いやいや、そんな海上護衛みたいなノリの任務ではないですよ絶対。えーっと作戦海域は……オールド東京湾……ああなるほど、受託したのがそもそも間違いのヤツですねこれ。実質ネオサイタマ鎮守府からの応援要請だから、えっと、そう、僕らの手に余るので本隊のガチな人たちに任せましょう。球磨さんでしょ、霧島でしょ、それと——」

「斑鳩。天気予報」

「はい？　オールド東京湾の天気ですか？」

「違う。ここのだ。この雨はいつまで続くんだ」

極楽は提督代行の席を立つと、窓際まで歩いた。

北鎮守府の総合棟二階、執務室から見える外は、こここのところずっと、朝も夜も日をまたいでも、ほぼ途切れることなくしとしと雨が降り続いていた。空も海もずっと灰色のままだった。「晴れたら戦艦寿始末作戦を執行するぞ」そう言うてから、今日の今までずっと。誰かが意図して低気圧をとどまらせているとしか極楽には思えなかった。

「ああ外ですか。洗濯物が乾きませんね」と今度は、斑鳩の方が適当に返事をした。「でも、そのうち晴れますよ。それで『メン・タイ』の取り締り任務ですけど——」

「寿を何年待たせたと……いや、我が何年待ったか分かってるのか、こ

の雨雲は。ようやく作戦の準備が整ったんだぞ。ようやくだ。だといふのにこれだ。この雨だ。天照大艦隊が崇敬する神の姿を意地でも見せないという気概すら感じるぞ。我にケンカ売ってんのかこの雨は」

「……日頃の行い」

「なにか言ったか秘書艦」

「いえ、任務についてちよつと」

「まさか、我の裏をかいて寿から仕掛けてきてないよな。……いやあり得ん。それにしたって奴も雨上がりのウシミツ・アワーを狙ってるはずだ」

極楽は一人で思いを巡らせたが、すべて溜め息と一緒に口から吐き捨てた。

「考えても仕方ないか。気に食わんが待つとするか」

極楽が「で、任務の方はどうした」と仕事に戻ろうとした、その時だった。

「あんぎやあああああああああああ!!」

外から、人間の声らしからぬ声があった。



素早く反応したのは斑鳩だった。

飛び跳ねるように席を立った斑鳩は窓まで猛ダッシュして、雨に濡れた窓を開け放つと、一分の躊躇もなく外へと躍り出た。地面までの二階分の高さなど、まるで意に介さずに。

総合棟を飛び出した直後、斑鳩の左目から青い炎が吹き出した。その悪鬼のような目で叫び声のした方向を見ると——いた。時津風が傘を手放し、尻餅をついていた。

「お、おばけえええええええええ!!」

次に時津風の視線の行方を追うと——海から這い上がってきた亡者がいた。極楽の言葉で言うところ、ゾンビ。頭から足まで朽ちた人の形。元があるとすれば恐らくは成人男性。

斑鳩がゾンビを見たのはこれで二度目だった。だからすぐに次の行動を決められた。

コンクリートの上に右手をついて着地すると、「右手を青い炎で燃やし、その炎を周囲のコンクリートに引火させた」。青く燃えた部分のコンクリートは斑鳩が手を持ち上げるのにつられてバコンと引き剥がされ、彼女の「装備品」になった。それが、ゾンビ目掛けてぶん投げられた。

「ゼリヤアツ！」

勢いはドツジボール程度、だが軽いボールではなく十数キロのコンクリート片がゾンビに直撃し、元いた海へと吹っ飛ばした。

「時津風ちゃん、大丈夫!? 怪我ハナイ!？」

左目を青く燃やしながら駆け寄る斑鳩も普通ではないのだが、時津風はまず何を理解すればよいのか頭の整理が追いつかず固まっていた。

斑鳩は執務室に向かって叫んだ。

「極楽サン！ コレハドウイウコトデスカ！」

極楽は渋い顔をした。

「やれやれだ。先手を打たれたな、これは」

そして二階の執務室の窓から当然のように飛び降りた。斑鳩のようなスーパーヒーロー着地ではなく、濡れたコンクリートをパシヤリと軽く踏んだだけだった。

極楽はまず一度、パチンと右手の指を鳴らした。すると小さく青い炎が出て、それが赤いヘアゴムになった。極楽は雨に濡れだした長い髪を後ろでひとつにまとめた。

次に指を鳴らすと、今度は青い炎が横に長く伸びて——口径12.7ミリの重機関銃が現れた。通常はガツシリした三脚や銃架に固定されて使われるものだが、極楽が物質化したこれは、手で保持しやすくするグリップと弾帯を収める箱を機関銃本体に直接くっつけた、頭の悪い重火器である。

極楽は重機関銃を軽々と——肩付けすらせずに——顔の前で狙いをつける、銃弾を二発、猛烈な破裂音と共に吐き出した。海から這

い上がろうとしていたゾンビ二体の頭が消し飛ばされた。

戦艦が46センチ砲を、駆逐艦ですら12.7センチ砲を撃つ時代に、ただの12.7ミリ弾の水平射撃が何の役に立つのか？——洞観者たちは「そうではない」と口を揃えて言った。強烈な銃弾は、当然、深刻な破壊をもたらすのだと。

「作戦を変更する。戦艦寿始末作戦プランBだ、斑鳩」と極楽は言った。「長月と潜水艦たちを呼んで来い。お前から一緒にゾンビ共からこの鎮守府を守れ」

「ソレツテ……極楽サン一人デ、寿サンヲ倒シニ行クンデスカ？」

「そうだ。どうやら楽をしようとした私の判断ミスだったらしい。結局ここから先は我一人で——」

「アツハイ。オ氣ヲツケテ」

「お前……その時津風と我に対する反応の違いは何だ？」



履物だけはクロッグサンダルではまずかろうと、極楽は工廠に寄って足回りを戦艦のそれに整えた。

上は長袖シャツ、下はジャージに戦艦艦装、手には重機関銃という海をナメたスタイルで——そして、一人、海に出た。

足を海面に付けてから百メートルほどをツイと進んで、そういえばおよそ二年ぶりの感触だと気付いた。ヤーナム島に『観光』に行った以来だった。しかし特に懐かしくも面白くもない、久しぶりの海上スケートだな、程度の感触だった。

後ろを振り向いて鎮守府の建物がほぼ見えなくなったあたりで、極楽は水族館のイルカのように高くジャンプした。レーダーも偵察機も持たない彼女の、これが索敵方法だった。

思っていたよりも見渡せる距離が伸びないなと思うと、次は十数メートル跳んだ。雨で視程が低下しているとはいえ、彼女に見えないということはない。周囲に敵影がないことを確認すると、彼女は前進した。進んで、跳んで、進んで、たまにスマートフォンコンパスア

プリで方角を確認して、また進んだ。

三十分ほど進んだところで、前方にはじめて深海棲艦の一団を発見した。極楽との距離はおよそ十キロ。重機関銃もまったく届かない距離である。敵はまだピョンピョン跳ねる極楽に気づいた様子はない。

「軽巡2に駆逐3、いや、あれは軽巡じゃなく重巡だったか？ まあどっちでも大差ないか」

極楽は敵船団の方へとやや進路を変えた。

その後、計十三発の弾丸で、邪魔になる可能性のある者らを海の底に返した。

被弾、当然ゼロ。



極楽がいくら海を進んでも、雨雲の下から抜け出すことはなかった。雨雲にストーキングされているようですらあった。

「雨上がりがお望みじゃあなかったのか！ なあ寿！」

極楽は叫んだが、声はすぐに海面を打つ雨音にかき消された。

自分でも認めまいとしているが、極楽には焦りがあった。

ここまで四回、深海棲艦との接触があつて、ほんの僅か1パーセントにも満たない消耗で突破できている。出撃時とほとんど変わらぬコンディションを保っている。

だがしかし、元々の戦艦寿始末作戦では、極楽のコンディションを保つのは当然として、それに加えてサポートに長月がいた。単純な話、極楽と寿の力が拮抗するならば、長月の分だけ天秤が傾く。逆に言えば、長月がいなければ最悪、共倒れになりかねない。

極楽は姉妹艦と心中するつもりなどさらさらない。だから何年も待った。作戦の準備が整うのを待って待って、待ちに待った。

いや、ここまでの小指の先ほどの消耗の差が、極楽の敗北をすら招くかもしれない。

それが冷静な自己分析の結果か、あるいは彼女らしからぬ弱気が、

幾度目かのジャンプの足を重くした。

「……………」

水平線を超えた先に、ついに、その姿を捉えた。

「……………」

幸い、周囲約十キロに他の敵の姿は見えない。付近には島もなく、ただ薄暗い海が広がっている。

極楽は重機関銃を青い炎に戻して仕舞うと、進む速度を落としてもう一度ジャンプした。

空中で観察したところ、『奴』はただ一人で、一糸纏わぬ姿で海の上立っていた。せめて深海棲艦のように砲の一つでも持っていてくれたら行動を推測できたのに、『奴』は何も持っていないし周囲にも何もない。

極楽が見て分かったのは、伸びっぱなしの白い髪が顔を隠していることと、体つきがとても豊満な女性のそれであるということ。肌の色は、海が暗いためはつきりしないが——極楽と同じように青白く見える。

ジャンプから降りて『奴』との間に水平線を挟んだ極楽は、ゆつくりと歩く速度で進んだ。いまさら急ぐ意味もないからか、それとも——

ゆつくり、ゆつくりと極楽は進んだ。

ついに水平線の向こうに『奴』の頭が見える距離まで近づくと、いきなり極楽の右足に何かが掴まり、海の中に引き摺られそうになった。

だがそれは極楽の想定の内にあった。想定していたことが起きて安心したとすら言えた。右足を目で確かめるより先にパチンと指を鳴らすと、一瞬の青い炎の出現の後にそれが、全長を切り詰めた散弾銃の形になった。極楽はそれを右の足元に一発撃って、掴んでいたゾンビの手を切った。

極楽は進む速度をグイと上げた。

『奴』との距離があと三キロ程になったところだった。

「——ん？」

第68話 極楽とは程遠い極楽 ⑮

午後05時42分。

この日もまたハングド・キャットに通う大和だった。

いつものカレーが目当てなのか、それとも武蔵に愚痴をこぼしに、はたまた姉妹艦の様子を見に来ているのかは大和自身、深く考えていない。考えたなら武蔵に負ける、とは考えていた。

「サイズはこれくらいだ」と武蔵は両手で15センチ程度の高さを表現した。「こんな小ささの人形が本当に良くできていな。いや、あれはもう生きていると言っても過言ではなかった。今思えば、そういう新たな生物だったのかもしれない」

「ふうん。でも人形なんですよ？」

大和の興味は武蔵の話に四割、今食べているカレーに六割といったところだった。

「お肉が皮を被って動いてるわけじゃあないんですよ」

「お前、よくカレー食べながらそんな生々しい言い方できるな」

「……私に変なこと言わせないでくれる？」

「人形を構成する材質など気にもならなかったな。その動きに無機質な固さは感じなかったし、表情なんて私よりやわらかい程だろうよ。私の相手をしてくれたレラカムイというタイプの人形はだな」

「カムイ？」

「カムイだ。その時には既に旧式化していたらしいのだが、私にはどの部分が旧式なのかまったく分からない、技術の最先端めいた人形で――」

「カムイ……カムイ……カムイ……カムイ……」

「ずいぶん気さくなAIだったな。言い方を変えると、AIが気さくさをあれほど表現できるのかと驚かされたものだ。妖精よりはるかに人間に近く――」

「カモ……イ……イ……」

「そのレラカムイ、識別名をコタマとってたな。おい大和、聞いて――」

「思い出したあ!!」

大和は椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がった。

「カモイだわ、神威!」

驚いたのは店内の客やアルバイトだけではない。武蔵も少し身を引いたし、うつらうつらしていた猫たちは一斉に毛を逆立たせた。

「な、なんだ急にお前」

「神威よ、前に話した幽霊の正体!」

「幽霊?」

「《極楽とは程遠い極楽 ⑩》で私が言ったでしょ。深海棲艦なのかそうじゃあないのか分からない何かがあった、って」

「ああ……言っていたな、そんなこと」

「私としたことがなんて馬鹿なのかしら、仲間の顔を忘れるなんて。撃沈王失格だわ。いえ、こんなところで反省してる暇があるのなら早く助けに行かないと」

「お前のチームにいた奴なのか?」

「武蔵も一度は一緒に出撃したことがあると思うわ。補給艦で、目立った印象は、そうねえ——とにかく極楽を徹底的に敵視してた」

「あの戦艦極楽をか? それじゃあ印象に残らん。極楽を嫌悪していた奴は両手で数えきれんしな」

「その中でも恨み数倍だったのが神威よ。私、知ってたもの。小分けしたドラム缶に交じって包丁を忍ばせてたの。あれ絶対に機をうかがって極楽を刺すためのものよ」

「怖すぎるだろ。やめさせろよ」

「たぶん神威が悪いのではないのよ。悪いのは神威をそこまで怒らせた極楽の方よ、どうせ」

「何をやらかせばそこまで恨まれるんだかな……ん? その神威、お前の目から離れたということは……」

「ええ……私の力不足で行方不明。もう搜索を打ち切って結構経つわ」

「そして今になって幽霊として見つかった、と」

「今度は幽霊でも深海棲艦でも何でも、ロープで縛ってでも連れ帰る

わ。じゃあ私、行ってくるから」

「ああ。だがその前に会計が3、200円だ。今日は少なめになったな」

「お財布忘れちゃった。ツケにしておいて」



「お前、誰だ？」

飛び掛かってきたその女は、寿ではなかった。少なくとも。

体つきが豊満であることだけは同じだが、逆に、それ以外に類似する点が見当たらない。その全裸の女からは、極楽が覚悟していた強さも感じられなかった。

ただ、親敵線（親の敵と相對したときに顔にできるシワ）だけは恐るべきものだった。

長く伸び放題にされていた髪を振り乱す様は、極楽がヤーナム島で狩った獣のよう。

女は跳躍回避する極楽の姿をドス黒い目で追った。

「ツイニ……現レタナ、極楽ウー！」

「うむ。とりあえず我にゾンビ的嫌がらせを続けてきた奴で間違いはなさそうだ。ところで——」

「死ネッ！」

極楽の足元、海面下からゾンビの手が四人分伸びてきた。だが、ダンダンダン、と散弾銃でテンポ良く押し返した。

同時に女が再び飛び掛かってくるも、極楽は右にひよいと避けて少し距離を取った。

「なあ、我は質問をしたいんだが」

「黙レ！」

「ここにいるはずの寿という戦艦を探していてだな」

「才前ノセイデ！ 才前ガイタカラ山本サンモ、私モ！」

「だから誰だよ、その山本さんも、お前も」

「泥棒猫！ イヤ、クズ！ 人間ノクズメ！」

「え、痴情のもつれ？ そんな理由で我を攻撃し続けてたのか？」

極楽は黙っていれば異性の目を奪うタイプである。あるいは物好きな男には、極楽の棘が美しく見えることもあった。だから、極楽にその気がまっただくなかったとしても——思わせぶりな態度を取らなかつたとしても、山本某が女と極楽との間にマリアナ海溝よりも深い溝を作ってしまったのは仕方のないことだった。

極楽に落ち度が1ミリもない珍しいパターンである。

「殺ス！ 才前ハ、絶対ニ！」

「いやいや山本さんの方を殺せよ。我は知らんて」

「ウルサイ……ウルサアイ……極楽才前ハ絶対殺ス！ アアアアアアアアッ!!」

女は空に向かって吼えた。

発狂したか、と見て取った極楽は二十メートルほど後方にステップして距離を取った。窮鼠猫を噛む、と言う。極楽に追い詰めた気はなかつたが女の方が勝手にその気になってしまった。強くなさそうに見える相手でも、僅かでも引つ搔かれて傷口から雑菌が入るのはよろしくない。散弾銃を、軽くだがはじめてきちんと構えて様子を見た。

女は両手を海面下に突っ込んだ。ウエイトリフティングのように何か重たいものを持ち上げるように見えたが、

「オオオオオオアアアッ！」

幅五十メートル強の海面ごと、女の足元から持ち上がった。水飛沫が大瀑布を逆流させたかのように立ち上った。

極楽は「おほーう」と珍しく関心した様子で、さらに十メートル後方に下がった。

女が海から引つ張り上げたもの、それは巨大で、腐りきった、帆船だった。

例えれば、映画パイレーツ・オブ・カリビアンに出てきそうな呪われた船。

フジツボや海草などは不思議と付いていないものの、形作る木材も鉄材も朽ちていながら、なお海上に浮かび上がり、鎮座した。帆船といっても、そこにあるべき帆のほとんどがボロ布になってしまってい

るか、わずかも残っていない。極楽を驚かせたのは、片舷に見える三層五十門の大砲である。過去、熟練した艦娘であった極楽でも、これほどの数の砲を一齐に向けられた経験はない。

全百門もの大砲を内包した船は、まるで女の闘争本能の表れのようなだった。

大砲が突き出す窓の隙間から見える船内には無数の蠢く人の姿があった。その人々も船と共にやはり腐っていて、女が呼び出していたゾンビ達だった。——つまり、この船は帆で風を受けることはできなくなっている、船内から操れる分だけのことは、できる。砲弾を吐き出すことは、できる。

船の上、上甲板には女が一人だけいた。

その女が一言、叫んだ。

「撃テェ!!」

五十門の大砲が、一齐にと言うにはまとまりのないタイミングで五十発、極楽めがけて砲撃した。黒色火薬が生み出す白煙はまるで煙幕のようだった。

猛烈な横殴りの砲弾の雨が放たれて——『そんなものが、極楽に当たるはずがなかった』。

「くははっ、なかなかの迫力だな」

極楽は砲弾の雨の一発目が女の船から吐き出された刹那、跳び上がっていた。女のいる高さより高く、帆柱よりも高く、海面から百メートル以上の高さにいた。

「ここにきてまさかの海戦とは面白い。なら——」

極楽は散弾銃を手放し、右手の指をパチンと鳴らした。

「——船には艦だ」

極楽の頭上に一瞬、女の船の数倍、超高層ビル程の圧倒的に巨大な、青い火柱が立ち上った。その炎の発生は衝撃波を伴うほどで、また、まだ暗い時間ではなかったがかなり広い範囲を鮮やかに青く照らした。

極楽の能力はコピー・アンド・ペースト。

例えばアメリカの戦艦ミズーリを観光で見に行った時に、極楽の炎

を走らせてミズーリをコピー（スキャンと表現した方が正確かもしれないが、極楽はコピーと言っている）しておけば、後でいつでもどこでもペーストできる。まさに今、やっているように。

極楽の真上に、基準排水量45,000tの戦艦ミズーリが、艦首を真下に向けた艦らしからぬ姿勢で、現れた。

さすがに極楽がミズーリを支えるわけではない。重たいものは、ただ落下するだけである。

「じゃあ、誰だか知らん奴、死ね」

戦艦ミズーリの重力を利用したラムアタック。

極楽が最後に下を見た時、帆船の上にはいた女は上を向いて目を見開き、ポカンと口を開けていた。この時だけは、極楽への敵意よりも『わけのわからなさ』が勝ったようだった。



極楽がミズーリを青い炎に戻して回収した跡に、帆船の一部だった木材がプカプカと散らばって浮かんでいた。女の極楽を憎悪する声はもう聞こえない。

極楽は叫んでみた。

「おーい寿！ 本当じゃないのか？」

なんの返事もなかった。極楽が見渡す限り、海が水平線の向こうまで広がるだけなので、当然といえば当然である。

「我はもう帰るぞ！ 疲れたからな！ 本当の本当に帰ってしまうぞ！」

極楽が一人でずっと温めていた計画通りならば、もしも今、寿との勝負になってしまえば、ミズーリの具現で疲弊した極楽に勝ち目はない。しかし幸か不幸か、極楽を引き留める声はない。

「本当の本当の、本っ当に我はもう……！ ……阿呆らしい。もう知らん。寿なんぞ」

ジャージのポケットからスマートフォンを取り出した極楽は、コンパスアプリを立ち上げて帰路に着いた。

それにしても、あの裸の女は誰だったのだろうか。と極楽は考え——ることとは勿論なかった。

「なんだったんだらうな、我が今まで積み重ねてきた努力と苦労はいやマジで」

第69話 極楽とは程遠い極楽 終

夏がその牙をチラつかせはじめましたね。極楽さんが動き始めた頃はもつとずつと寒かった気がするのですが……ええ、気のせいでしょう。

ドーモ、斑鳩です。

海はどこまでも広く、僕らが把握し得ることなんて果てしない未知で塗り潰されてしまうもの、なーんて知った風なことを言ってみます。

天照大艦隊を好き勝手に振り回していた極楽さんも、とどのつまり、振り回される側の人間だったということですよ。

何がどうということだ？ と読者諸氏は思われたことでしょう。

では、何が起こっていたのか、それから何が起こったのかを、僭越ながら僕から語るとしましょう。

まずは、そうですね、極楽さんが海に飛び出した直後からの出来事です。



極楽さんが先手を打たれたと見て出ていった後の北鎮守府は、それはもう「ゾンビのDOS攻撃か!」と言わんばかりの、バイオハザード RE:2すら生温く思えるゾンビの波状攻撃を受けていました。極楽さんがそこにいたから、というだけの理由で。

雨が降り続く中、海から次から次へと這い上がってくる腐った手足。崩れ落ちた顔。

僕ら陸の守護者は、鎮守府を最終防衛ラインとし、青い炎を燃やして決死の覚悟を——しませんでした。

だってネコノツメを装備した長月ちゃんがいきましたからね。文字通りの一騎当千です。僕や潜水艦たちも構えてはいましたが、手を出しても長月ちゃんの邪魔にしかありません。

「ぜりやあつー!」

長月ちゃんの刀一振りです。十数体のゾンビが切られ、海に押し返されます。五十メートル離れた場所にまたゾンビの群れが？ でも大丈夫です。ほぼ瞬間移動めいた速さで走った長月ちゃんが、やはり一振り。これの繰り返しでした。無双系テレビゲームのような、という比喩じゃあなく、それそのとおりの無双です。僕らの鎮守府がバイオ攻撃を受けているというのに、小さな駆逐艦の女の子がズバズバと敵をやっつけている姿を見ると、もうね、爽快感すら覚えました。長月ちゃん、本当に強い。そしてかわいい。

ゾンビの波状攻撃は数時間も続いたのですが（長月ちゃんはちよつと水分補給をする程度の休憩を挿んだだけで戦い続けたのですが）、夕方頃になって、ゾンビの出現がパツタリと止まりました。そうして僕らは知ったのです。ああ、極楽さんは寿さんとの決着を、勝利か相打ちでかとはともかく着けたんだなど。

「おつかれ長月」と山城が長月ちゃんを労いました。

「ああ。さすがにちよつと疲れたな」

「今日はもう休んじやつていいわよ。あとは私たちでやるから。お姉さんの帰りを待つか、帰らないお姉さんの捜索になるかは分かんないけど」

「任せた。じゃあ私は風呂……いやその前に何か食べたいな」

こうして僕ら、北鎮守府待機組の戦いは、無事、終わったのでした。

僕、この分隊の一応は総旗艦なのに、最初に時津風ちゃんを助けた以外に何もしてない。

そうそう。この作戦に参加した中で唯一の洞観者「ではない」時津風ちゃんですが、極楽さんはこの日のうちに帰ってきて、休息よりも僕らへの説明よりも真っ先に、時津風ちゃんにクラスB記憶処理を施しました。副作用を伴ってしまうものですが、これは僕も仕方がないと思います。恐ろしいゾンビや洞観者のことなんて、知らない覚えてないに越したことはありませんから。

極楽さんが沈めたのが寿さんではなく神威さんだったと僕らが知ったのは（まあ、どちらも顔を知らないのですが）、翌々日のことでした。



その一方で大和は、翌日、翌々日なんて悠長なことを言っていないで、まっせんでした。

ハングド・キャットで3, 200円分の無銭飲食をして職場に戻り、すぐに神威救出部隊を編成して海へ飛び出しました。その頃には日は落ちていて、ちょうど極楽さんと入れ違いの形になりました。

幽霊みたいな深海棲艦のような、接触しても何の反応もなかった謎の存在、その正体である神威さんの最終目撃ポイントまで、大和たちは夜の暗さに雨雲の影まで落ちた中を一直線に進みました。

道中、なぜか深海棲艦の部隊がいくつか潰された形跡が散見されましたが、その謎をただのラッキーと置いておいて、大和たちは目標ポイントに到達しました。

しかし、そこにいたのは謎の幽霊——神威さんではなく、まるで『場所が空いたからそこに陣取った』かのような深海棲艦の小部隊でした。

直前に夜偵からの情報を得ていた大和は、一足遅かったか、と臍を噛みました。ですがそれは諦める理由にはなりません。速やかに敵部隊を蹴散らし、神威救出部隊の皆で探照灯を照らしました。するとすぐに、大和が見つつけました。人の裸の姿らしきものが海面にプカアと浮いてきたのです。見る限り肌は深海棲艦のような青白いものではなく血行良好そうな色をしていました。

大和がそばに寄って抱え上げると——間違いありません。ハングド・キャットで思い出した顔、神威さんでした。

「神威！ しつかりしなさい！ 目を開けて！」

大和が神威さんの頬をペシペシと叩くと、「ん、んん……」神威さんが目をゆつくりと開いた——と思った瞬間、その目が急にクワツと見開かれました。

「極楽う！ 殺す！」と神威さんは大和の顔面に拳を叩き込みました。「あだっ!？」

「おおああああああっ！」

読者諸氏には説明するまでもないことかもしれませんが、神威さんは元々、こんなバーサーカーではありませんでした。誰にでも温かく給油してくれる、そう、皆の物資と心の支え、給油艦たるに相応しい女性でした。……でした、のですが、極楽さんと山本某さんとの三人の間に悲しい何かがあったようです。彼女をここまで変えてしまう何かが。第三者が想像をめぐらそうとする前に察してしまえるほど辛いことだったのでしよう。でなければ、撃沈王大和に出会って即パンチなんてなかなかできることはありません。

「ちよ、ちよつと落ち着いて神威！ わた痛っ！ わ、私よ、大和よ！ 敵じゃあない！」

「死ね！ 死ねえええええええっ！」

「待って、ちよつ、ねえ待ってっばー！」

「お前が！ お前のせいでえええっ！」

「ああもう！」

是非もなし。大和はおそろしく速く見逃しちやいそうでもない手刀を、荒ぶる神威さんの襟首に入れました。すると神威さんはプツツリと意識を失い、ようやっと静かになってくれました。

「まったく……まあ元気なのは結構なことですけど」

大和は左手で鼻をさすりながら、右腕で裸の神威さんを抱え上げました。

神威救出部隊、あとは帰れば任務達成です。救出作戦を計画通り終えられるなど喜ばしいことの上ありません。しかし神威さんが再び目覚めた後のことを考えると、大和は少しだけ憂鬱になるのです。



これで寿さん、ではなく神威さんの一連の騒動は終わりました。となると当然、疑問が残ります。

じゃあ寿さんはいったいどこに行ってしまったのかと。全艦娘の

所在安否をハッキリさせられるほど優しい世界ではないにしても、です。

数年がかりで計画を進行させてきながら空振りに終わってしまった極楽さんに、もはや追加調査をする気力は残っていませんでした。加えて言えば、極楽さんとして万能ではありません。ですので極楽さんは、人に頼ることにしました。渋々、嫌々、不承不承、洞観者の洞観者による洞観者のための組織、ハングド・キャットに名を連ねることにしたのです。

世界に散らばる洞観者たちは多種多様な能力を持っています。長月ちゃんのような戦闘向きの能力が意外にも少なかったりするくらいです。

極楽さんはハングド・キャットから得たネットワークを使って、人探しを得意とする洞観者に寿さんの搜索を依頼しました。

すると一週間とかからずに、あっさり「我の……今までの苦労……」見つかりました。ラバウル基地にいました。

《極楽とは程遠い極楽 ⑪》で極楽さんが言ったことを、読者諸氏は覚えておいででしょうか。

『殺し損ねた気がしてならんのだ』
『うっかり沈めた程度で済ませてしまったかもしれない』

気がしてならない。かもしれない。

そうです。極楽さんにはそもそも最初から、自分の手で寿さんをちゃんと始末したという確証がなかっただけなのです。よくありますよね、出掛けた後で寮の自室の鍵をちゃんと閉めたかどうか不安になったり。で、気になって気になって、戻って見たらちゃんと閉まっていたり。このパターンでした。極楽さんは昔ちゃんと、寿さんを始末できていたのです。といっても完全な殺害ではなく、それは本来洞観者には与えられないはずの、かすかに希望のある轟沈。さすがは極楽さん、器用なことをうっかりやってしまうものです。

そして寿さんと言うと、Lv. 1の艦娘としてラバウルの艦隊に拾われていたのです。かなり前の話だそうです。できればドロップしたことは内密に……としたそうです。

寿さんは電話で言いました。

《だって……自分から『殺して』とお願いしておいて、後でちやつかりまた艦娘として甦りました、だなんて……分かるでしょう？》

極楽さんはかつてないほど怒り狂い、

「分かるかボケエー！ もいっぺん死ねッ！」

寿さんとの通話を乱暴に切りました。

この電話を最後に、極楽さんの北鎮守府・天照隊分隊での提督代行サービスは終了しました。



極楽さん（と寿さん）に振り回されたのは僕ら分隊に集まった洞観者だけではありません。天照大艦隊が、いったい何のための大艦隊だと言いたくなる混乱を来したのです。

簡単に、起こったこと——起こされたことをおさらいしましょう。事は分隊を預かる傘姫提督から始まりました。この人は突然、青い炎となって、青い火の粉となって、

「バイバイ、元気でね」

僕の前から姿を消しました。分隊を放り投げて勝手に消えやがったのです。いったい誰の許しがあつて……いえ、僕の所感はどうでもいいですね。とにかく分隊・北鎮守府から提督がいなくなってしまうのです。

しばらくの間は暫定的に僕が提督代理を務めていたのですが、それでは困ります。僕の胃が痛くなるばかりですから。本隊・南鎮守府から一ノ傘副提督に助けに来ていただく予定でした。

……が、その予定日のことです。本隊の皆が朝食を食べている前で、竹櫛提督と一ノ傘副提督は手を繋いで、こう宣言しました。

「この度……——私と一ノ傘鉄子は身を固めることとなった」

当然、艦娘皆は大混乱しましたし、竹櫛提督に恋慕する二人の総旗艦、叢雲さんと電さんなんて聞いた瞬間に卒倒しました。

おまけに売店のお姉さん、極楽さんが見計らったタイミングで『提

督代行サービス』なるものを始めたおかげで、竹櫛提督とイチヤツいでいた一ノ傘副提督は「じゃあそれでいいやん」と分隊に来る予定をキャンセルしてしまいました。

そんなこんなで、提督代行としてやって来た極楽さんが分隊に洞観者を集め、戦艦寿始末作戦に取り掛かった、というのが一連の流れでした。

指揮系統を本隊の中で二つ、分隊一つ。三人の提督に三人の総旗艦——に分けておけばリスクを分散できる、というのが天照大艦隊の強みだったはずですが……極楽さん一人に呆気無く瓦解させられる程度のもという実情が露呈してしまったわけです。船頭多くして、と思っていたら三人の船頭さんのうち一人は行方不明、残る二人は勝手に山にハイキングに行っちゃう始末です。これからもこの体制で続けて大丈夫なんですかね、この艦隊。

さて、艦隊デストロイヤー極楽さんは、目的を望ましくなかった結果になったとはいえ果たすと、艦隊を操るのを止めました。具体的にはカロリーメイト（ようかん味・惚れ薬）の供給をストップしました。たったこれだけのことです。

すると、イチヤツき合っていた竹櫛提督と一ノ傘副提督はこんなことを言い合い出しました。

「たかが指輪に三ヶ月分の給料だど?! 馬鹿を言うな! 貴様には700円のカツコカリ用すら勿体ない!」

「はああああ!? そもそもワタシ、アンタからの指輪とか触りたくもないんやけど!」

「ハッ、どの口が言うか。欲しかったのは貴様であつたらうに」「スケベ心が丸見えやん。マジキモいわー。ダンボールにでも腰振つとけ」

「貴様のそういうところが人として情けないと教えてやったのだ! 艦娘たちの上に立つ者が本当に情けない!」

「世界一情けない男がようそんな言えるわ。え、何? 自分に提督の器があると思つとるん? 割れたお猪口の小さいカスが?」

「心も部屋も汚い女は言葉遣いも汚いものだな!」

「死ねクズ！（エアガン乱射）」

二人の醜いケンカを止めに割って入った叢雲さんと電さんは、呆れながらもニツコニコしていました。



「ええ……。じゃあ何？　今、僕の目の前にいる傘姫提督は極楽さんが生み出したコピーで、本物の一ノ傘姫乃は別にいるってこと？　で合ってる？」

「そうそう」と細身でオカッパ頭、傘姫提督はあっさり首を縦に振るのでした。

この朝、傘姫提督は当然のように極楽さんが空けた席、提督の席に着いているのです。

「そうそう、じゃあないでしょうが。ダメでしょうが倫理とかいろいろな問題的に。いつから？　本人と入れ替わってたの？」

「やだなあ。斑鳩とは最初から、ずっと、一緒だった、よ？　斑鳩はまだ、『葛城』って名乗ったまま、この鎮守府に迎えられて。私も、そのとき同時に、着任して」

「えーつと……。僕の推測だけど。僕を見張る司令官が必要になったタイミングで、極楽さんは本物の一ノ傘姫乃に接触して、コピーのあなたを作ってこの鎮守府に着任させた、ってことでよろしい？」

「そう。そうそう」

「どうして」

「うん？」

「どうしてわざわざコピーなの」

「その方が、極楽に都合が、良かったから、じゃない？」

「んあーそうじゃなくてえ……。あなた傘姫提督が、どうして、それでいいのかって聞きたいの。だってこれかもし映画フィルムの中だったら、本物の存在と自我意識の間に押しつぶされて葛藤したりするのが鉄板でしょうに。いや、その前に――」

「いろいろ、難しく考える、ねえ」とコピー人間さんは他人事のように

すらあります。

「——その口振り。極楽さんと本物傘姫さん、コピー前に随分と円満な契約を結んでいるね？　そしてそれはコピー傘姫さんも。……僕には分からない。僕だったらたぶん、いや絶対に、耐えられない」

「自分は空母・葛城ではない」と知った時のことが思い出されません。

「けっこう大変、だったんだよ？　コピーされてる時、なんて、青い火が体中、ぞわぞわあゝつて。うわっ、思い出した、だけで鳥肌が」

「そこはどうでもいいよべつに。……疑問だらけで、逆にこれ以上何を聞けばいいのかも分からないや。とりあえず、あなたがコピー傘姫さんだつてことは、竹櫛提督と一ノ傘副提督、天照隊の皆には内緒なんでしょう」

「うん。察しがよくて、助かる、よ」

「じゃあ大和と武蔵さんは？　あの二人には、人間ではない疑惑をもうかなり高いレベルで持たれてると思うよ」

「秘密、ひみつ」

「僕は聞かれても知らぬ存ぜぬで通すからいいけど。提督と極楽さんがどこまでしらを切り通せることやら。特に極楽さん、面倒くさくなったら全部喋りそうだし」



「へっくしー」

カウンターに右肘をついていた極楽さんはくしゃみをしました。

「誰かが我の話をしているな。許されることではない」

天照隊の本隊がある南鎮守府の売店に極楽さんが戻り、売店は元の姿を取り戻しました。

極楽さん不在の間、一人で切り盛りしていたアルバイトの磯風ちゃん、今は落ち着いた様子で昼食時に向けての品出しをしています。鬼の居ぬ間に何とやらだった部分も磯風ちゃんにはなくもなかったものの、やはり極楽さんという強い人がいると、安心感が違うようです。

す。

「ところで磯風。このメモは何だ？」

極楽さんは何かガビツシリと記されたA4用紙をピラピラと振りましました。

「それはお姉さんが不在だった間に、アカシマートから受けた攻撃のメモです。記録しておいた方が良いだろうと思って」

「フン、なるほど——どうやら我の不在をチャンスと見たらしい。磯風、これが何を意味するか分かるか」

「……………アカシマートの刺客が天照隊の中にいる、ですか」

アカシマートとは、暗黒メガコーポのフランチャイズ戦略によりほぼ全鎮守府・泊地・基地に展開している売店のことです。つまり極楽さんの敵です。そこいらの艦娘ならば『売店・イコール・アカシマート』という認識でしょう。詳しく調べたことがないので知りませんが、この認識でない例外は天照隊だけではないでしょうか。

「そうだ。まったく愚かなことだ。これでは自ら見つけてくれと言っているようなものじゃあないか。まあ泳がせておくが。というか、しばらく人探しは積極的にする気になれんな」

極楽さんは「はーあ……………」とひとつ溜め息をもらしました。

「磯風。今の私の気分が分かるか」

「いえ、さあ？」

「寿司屋に行ってだな。こう、いかにも旨そうなウニの軍艦巻きに手を伸ばすわけだ。だが口に入れて一噛みしたその瞬間、我に衝撃が走った。ファツキンクソ不味いと。おせち料理の具材を全部生でミキサーにかけて感じの後味は、その後何を食っても舌に残ったままだった。あれはショックだった……………そんな気分だ」

「お姉さん、疲れてますね」

「分かってくれたか。よし今度寿司屋に連れて行ってやろう。ウニとサビ抜きな」

「え、私はウニも食べたいのですが」

「お前ウニ好きなのか!? つーか寿司食ってんのか」

「陽炎型の皆でたまに。もちろん回転する方のものですが」

「なるほど、姉妹艦と飯かあ。そうかあ」

極楽さんはしみじみ言いました。

「なあ磯風。お前、姉妹艦は好きか」

「真っ直ぐ聞かれてしまうと答えるのは少し恥ずかしいですが——当然好きです」

「当然か」

「ええ。当然です」

「じゃあ、その大好きな姉妹艦から『私を殺して』と言われたら、どうしてやる？」

「ずいぶんと極端な事例ですね」

「それでもない。よくある話だ」

「私にはあまり想像できませんが……仮に姉妹艦の誰かが、いや艦隊の仲間の誰かが私にその苦難を打ち明けてくれたとしたら、この磯風、まずは全力でそのメッセージの原因を探るでしょう。それから——」

「原因を取り除いてやる、と言うのだろうか？」

「誰だってそう考えるでしょう」

「状況によるとは思わないのか。例えば、そいつがもう助かる見込みがないほど苦しんでいるとか」

「お姉さん、そういう仮定を付け足していくのはズルいと思います」

「……それもそうか。我としたことがつまらん事を聞いてしまった」

磯風ちゃんは止まっていた手を再び動かしはじめました。その姿を、極楽さんはしばらくボーッと眺めていました。棚に整然とおにぎりやサンドイッチが並べられていきます。

極楽さんはまた、思いついたことをそのまま口に出しました。

「じゃあ磯風。例えば誤射とかで、自分の手で致命的にやってしまった奴が、何かの間違いで生きていたとしたら、そいつ相手にどんな顔向けをする？ いや悪いのは射線に入ってきた奴の方なんだが」

「そういう経験をされたんですか？」

「我はそんなミスは犯さん。なんとなく聞いてるだけだ」

「ふむ……お姉さんは、にわかせんべい」をご存知でしょうか」

「博多の菓子だろ。まあまあうまいな」

「ご存知でない方はググってください。情けなく垂れた目と眉を印としてゐる珍妙な煎餅です。」

「あれのおまけとしてついてゐる面でも顔に貼り付けていけば、少しは気まずい雰囲気も和らぐのでは？」

「なるほどな。ふざけても別にいいもんな。悪いのは我ではないわけだしな」

「やはりお姉さんの事じゃあないですか」

「お前も覚えておけ。現実にはな、理解者なんて一人だつていやしないものだ。『仲間殺しは死ね』と仲間だつた奴らは口を揃える。それが姉妹艦殺しだつたら尚更だろうな。そうなつた後どうなるかはお前にも想像がつくだろう」

「はい。理解し合えるまでぶつかり続けるのはつらいでしょう」

「想像できない子だつたかお前は。誰にも理解されないと云つただらう」

「ですから、お互いに長い時間を必要とするのでしよう。長い努力をするのでしよう」

「いやそうでなくてな？ 結局は最初から自分一人しかないという

話で——」

磯風ちゃんは言うのです。

「少なくとも、この磯風は、お姉さんの理解者です」

磯風ちゃんは、その力強い瞳で極楽さんを見据えました。

極楽さんはポカンとしてしまいました。

極楽さんはポカンとしてしまいました。

極楽さんはポカンとしてしまいました。

.....

.....

.....

「お前……ホント言うようになったなあ」

「言い続けますとも。理解し合えるまで」

「フン、ならば今晚だ。今晚、寿司を食いに行くぞ磯風。といつても、

お前にはウニしか食わせんがな」

「なんでですか。他のも食べたいですよ」

「ウニ丼を見ただけで吐き気をもよおすようになるまで口の中に詰め込んでやろう」

「贅沢なのか何なのか」

「私の理解者だと豪語するのなら、まずウニの真なる不味さを魂に刻め」

「やっぱり私にはまだお姉さんの領域は早すぎたようです。理解したくありません」

「じゃあお前の好きな寿司ネタを言ってみろ。何が食いたい？」

「やはり王道の大トロ辺りでしょうか。あ、それと意外にもアボカド

とか——」

「ことごとく却下だ。お前はウニを食え」

「お姉さん、もう逆にウニが好きでしょう」

「極楽とは程遠い極楽」

「おわり」

第70話 プラチナ

「それじゃ司令官、私は先に昼餉に行ってるわよ」
「うむ」

「あんたもたまには食堂で食べたなら？ 売店のパンじゃなくて、もつと栄養のあるものを」

叢雲に健康のことで気遣われるのはたいへん喜ばしいことである。先日も夏バテ対策になる食事を勧められたところであった。ゆくゆくは「ああもういいわ。私が作ったげる」と叢雲の手料理を——いいや否定である。この竹櫛、そのようなみっともなく卑しい打算で動くような男子ではない。断じてない。食堂に滅多に行かないのは、そう、食堂が姦しく落ち着かないからなのだ。食事とは静かであるべきである。えび天うどんを食べているときに「そのえび天ちょうだい」と隙あらば箸を伸ばしてくる阿呆共の何たる厚顔さか。私のえび天は私のものであり、叢雲が作ったえび天は果たしてどのようなサクサクしているのか、私の舌はそれをいつでも受け入れる準備がある。仕事をキリの良いところで止めて、今日もまた売店でパンを買うのである。

執務室を出たところで、私は少し驚いた。扉の横に金剛がいたのである。

金剛はビクツと肩を跳ねさせた。

「へ……へーい、提督う」と金剛はぎこちなく言った。

「……………」

私は当然訝しんだ。

金剛が突っ立っていたということは、偶然出くわしたということではないのだろう。ということは、金剛は執務室の外、空調の効いていない廊下でスタンバイしていたということだ。執務室に用があるらしいというのに、部屋に入っていない意味が分からない。

「私に何か用があるのか」

「イヤー、ソノー、まだ心の準備がデスネー……」

「心の準備？」

そう言う通り、金剛はもじもじしていて私と目を合わせようとしな
い。

私は五秒だけ待った。

「私は今から売店に行くのだが」

「ちよ、ちよい待つネ。……ケ、コ、……また今度にするヨー！」

そう言っつて金剛は逃げるように廊下を走り去っていった。

——と思っつたら、また走っつて戻っつてきた。

「ご、コレ！ 受け取っつてクダサイ！ さらばデース！」

金剛は私に封筒をベシンと叩きつけるように手渡すと、また走り
去っつていった。今度は戻っつて来なかつた。まったく忙しく意味不明
な戦艦である。

私が茶封筒を困惑しながら眺めてみると、背後から声をかけられ
た。

「金剛ちゃんに何かしたん？」と聞いてきたのは一ノ傘だつた。

「心当たりはない」

「ん？ その封筒……あーね。おめでと竹櫛」

「何だ。何なのだ」

「開けりや分かる」

そう言っつて一ノ傘は行っつてしまつた。

私は執務室に戻りペーパーナイフで茶封筒を開封すると、

「……………ふむ」

ケツコンカツコカリの書類一式が入っつていた。艦娘が記入する欄
はしっかりと埋められていた。



翌日の昼のこと、同じシチュエーションである。

執務室の外に、今度は球磨がいた

球磨の動くアホ毛がチヨイチヨイと私をつつてきた。

「口で言え。何なのだ」

「ク、クマあ……」

球磨はへにやりとお辞儀をして、

「ごめんクマ」

謝罪だったのか。

「だから、ケツコンカツコカリしてほしいクマ」

謝罪に加えて素直に言えたところは金剛より評価が高い。



「山城に怒られたクマ」

日は高くコンクリートを焼く中、球磨と二人で昼食とケツコンカツコカリの書類一式を買うため売店に向かった。

『アンタらふざげるのも大概にしとけ』ってゲンコツされたクマ。たんこぶでできるくらいゴツン！ って」

「山城が正しい。本来、私がそうすべきであった」

「提督がやるとセクハラになる。これ世界の常識クマ」

「セクハラ？ パワハラではないのか」

「頭なでなでされたらコレで刺しちやるクマ」

球磨が左手を掌底打ちのように突き出すと、袖の下から（球磨は半袖の制服を持っているはずなのに長袖を着ている）ジャキンと刃が飛び出した。アサシンブレードなるものらしい。

艦娘の頭を撫でる行為については今更、言うまでもないことである。しかし世の中には、無闇に撫でる行為が許されるどころか喜ぶ艦娘が存在するという噂まであるのだから、まったく私の理解を超えて恐ろしい。健康診断に『頭を撫でられる許容度』の計測を追加すべきであろう。

「ところで提督」球磨が左手を振るとアサシンブレードが袖の下に引っ込んだ。「あの噂は本当クマ？」

「どの噂だ。我が艦隊に深海棲艦が紛れ込んでいる、というものか」

「んなわけねークマ。それじゃあなくて、ケツコンカツコカリの指輪の素材のことクマ」

「指輪の素材？ 知らん噂だ」

「本部から一個だけ支給される指輪はプラチナだつて聞いたクマ」
「なに、プラチナだと?」

「らしいクマ」

「そんなはずはないだろう。書類込みで700円だぞ?」

「その700円のやつと本部からのやつで違うかもつて話クマ」

「……その噂、誰から聞いた? 一ノ傘あたりか?」

「副提督じゃあなかったけど、誰だったクマな」

「これは調べる必要があるな。売店に急ぐぞ球磨。お姉さんなら知っているかもしれん」

「球磨は普通のヤツが貰えればどうでもいいクマ」



なんたるタイミングの悪さか、売店には叢雲と電がいた。今日に限って昼食を売店で買おうとするとは。

二人の左手の薬指には、叢雲には本部からの一個、電には700円のもののはめられている。

今ここでその素材の違いについて話すのは下策。あまりに下策。

「お姉さん。ケツコンカツコカリの指輪の素材って何クマ?」

「球磨バカタレ!」

「なに?」と叢雲。

「どうしたのです?」と電の注意を引いてしまった。

すかさず私は話を切り替える。

「今日は二人とも食堂に行かなかつたのだな。よし、昼食は私がおごろうではないか」

だが二人の総旗艦の耳は良かった。

「今、ケツコンカツコカリの指輪の素材って……」「まさか噂の……」

不味い事態である。この二人も噂とやらを知っている様子だった。叢雲だけに聞かれるのならばまだよい。私が本部からの一個を渡したのは叢雲だったからだ。だが電は違う。電は一ノ傘から渡された700円の指輪を海にポイして(確か一ノ傘の最初の一人は雷だつ

た) 私からの700円の指輪をはめているのだ。

軍隊内での扱いに差別など厳禁だという話以前に、もつとエモーションナルな問題である。

「叢雲さん」と電はズイと叢雲に近づきすぎなくらい近づいた。「三十秒だけ、その指輪を貸してくれませんか」

「い、嫌よ外すものじゃあないし」

「なら触るだけ。味もみておきたいのです」

「舐める気なの!？」

「ちよつとなのです。ちよつと」

「嫌、ダメ、嫌」

「球磨さん、叢雲さんを押さえつけます!」

「えっ、えっ」

電が叢雲に飛び掛かりそうになる直前、お姉さんがカウンターから「お前らやかましいぞ」と一喝してくれた。

「ご、ごめんなさい」と電。「ところでお姉さんは指輪の素材、ご存知なのですか?」

「知らん。何かに適当にメッキした何かだろ」

「そうなのですか……」

「だが、あるぞ」

「えっ?」

「ケツコンカッコカリ・プラチナムセットだ」

お姉さんはカウンター下から、まるで宝飾店の店員のような丁寧さでそれを我々に見せつけた。

指輪である。私にはそれが白金なのか銀なのかステンレスなのかすら分からないわけだが、とにかく高級感に溢れていた。輝いていた。

電も叢雲も、球磨までもがそれを見て息を呑みうつとりしていた。

球磨は、おそらく思ったであろう事をそのまま言った。

「提督。球磨はあれがいいクマ。あれが欲しいクマ」

「さつきは普通のでいいと言っただろう」

「違うクマ——球磨は今まで本物を知らなかったクマ」

「そうか。お姉さん、そのケツコンカッコカリ・プラチナムセットは普通のものと比べて具体的に何が違うのだろうか」

「無論、こちらの指輪です」お姉さんの言葉が何故か丁寧語になった。「では価格は普通のものと同じだろうか」

「はい。こちら150,700円からとなっております」

……確か、艦これウエディングセットが一万いくらではなかったか。

私を宝石のような瞳で見つめてくる球磨の手を取って、五百円玉一枚と百円玉二枚を置いた。

「これで買いなさい」

「いやーだークーマー！ あっちがいいクマー！」

「十五万のワガママはさすがに無理があるだろうが。うどんに何本のえび天を乗せられると思っている」

「明日おごる、明日は球磨がえび天おごるからあ」

球磨は体を押し当てておねだりしてきた。『本物の貴金属』にあてられたらしく、あの球磨が、この球磨が、女性の顔をしているではないか。頭などでなではセクハラでどうこう言っていた奴が胸を私の体に――ならん。ならんぞ私。今更これしきで心揺らぐようなチェリーではない。ただ予想外の球磨とのテリヤキ・スキンシップに驚いただけなのだ。

他所を見ると、叢雲もまた電に密着されていた。

「叢雲さん……やっぱりその指輪、噂通りプラチナムセットなのではないですか？ 確かめるなら今ですよ。重さを比べてみて――」

「ちが、違うわよ。あんなに輝いてないし」

「でも磨けばきつと同じ輝き方をしますよ」

電の声には隠そうともされていない嫉妬が乗り重なっていた。

これはまずい。私の財布がまずい。

「逃げるぞ叢雲ー」

「え、ええ」

へばりつく球磨を強引に引き剥がして売店から飛び出した。

後ろでお姉さんが「ごゆっくりご検討下さい」と言った。

◆
◆
ケツコンカツコカリ・プラチナムセットの存在はその日のうちに、
まるで集団食中毒の如く艦隊中に知れ渡った。

さらに驚くべきことに、なんと翌日、購入者が現れた。——いや、聞
いてみれば特段驚くようなことではなかったのだが。

今日の秘書艦、本隊の最高練度、雷が教えてくれた。

「大井と北上が二セット買ったわ」

「決断が早すぎる」

しかも奴ら二人は肝心の書類の方を提出しないから、練度はいつま
でたつても九十九止まりである。

「それで、雷は噂の確認はしたのか。その薬指に着けている本部から
の一個はプラチナ製だという」

「どうでもいいわ。だってこの指輪は一ノ傘副司令官からの大切な贈
り物だもの。それ以上の価値なんて他にないわ」

「うむ。立派である。いや何故そうも立派なのだ？」

「でもプラチナリングに憧れる気持ちも分からなくもないわ。本部か
らの一個が7000円のものと同じだったとしたら司令官はどうする
の？ 叢雲にプラチナリングを送れば、きっと喜んで逆立ちしちゃう
わよ」

「……なぜ叢雲が出てくるのだ」

「やれやれな二人ね。仕方がないから雷様が見守っていてあげるわ」



次の日の秘書艦は山城である。

山城は朝、執務室に入るなり自己紹介をした。

「ドーモ。7000円の女、山城です……」

「卑屈になる意味が分からん」

「だって、プラチナリングの存在を知ったら自分が阿呆らしく思いま

せん？ ああ、私はたったの700円に浮かれて練度を伸ばしているんだって」

「お前は雷を見習うべきだ」

「雷を!？」と山城はなぜか過剰な反応を見せた。

「雷に何かあるのか」

「い、いえ別に。執務室のクーラーは特に快適ですね、オホホ」

「変な奴だ」

「それはそれとして提督。私の指輪はいつ交換してくれるんですか」

「は？」

「この安い指輪、海の潮気のせいでもう軽く磨くぐらいじゃあダメなので丁度良かったんですが」

「なんの話をしている？ まさか山城も十五万円を私に出させる腹積もりか？」

「ああ、やっぱりデマだったのね。でしょうね。あり得ないと思ってたわ」

「詳しく話せ」

「朝食の時はその話でもちきりでしたよ。天照大艦隊は今後、ケツコンカツコカりにプラチナムセットを推奨するって」

「誰が言ったのだ」

「さあ？ 提督じゃあなければ副提督では？」

「絶対にあり得ん」

と言いつつも私は一ノ傘に内線電話をかけた。

「竹櫛だ。一ノ傘お前、ケツコンカツコカリについて与太話をしていないだろうな」

《ワタシは竹櫛が勝手に決めたことやけん全部アンタに負担させ――
――》

電話を切った。

「これは陰謀だ。噂にしても話が一足飛び過ぎる」

「はあ」

「して山城。誰か過剰にケツコンカツコカリの話を言いふらして回っていた者はいなかったか」

「んー……。電が叢雲の指輪を舐めようとしてた以外におかしい奴はいなかったと思います」

「誰かが私にプラチナの指輪を買わせようとしているのだ」

練度の初上限に近い者か、あるいは既に超えている者か。

理由は単純に宝飾品として欲しいだけ、だろうか。その指輪を見た者を魅了するだけの魔力を持つことは球磨が証明している。だが動機としては少し弱い気もするが……。

「そこまで高価な指輪が欲しいだなんて今まで聞いたこともありませんでしたけど。や、普通にアクセサリーとか服とかが欲しいやら、そういう話はしてますけど」

「どうしても欲しくなった時はどうしているのだ？ 私にたかろうと考えるのか？」

「いやいや、提督相手にパパ活とか情けなくて死にたくなりますし。ちゃんと自分の財布を持ってショッピングに行ったりネット通販です。ああ、それと売店に置いてあるカタログを見たり」

「ふむ。普通だな。まあ流石の売店もそこまでの品揃えは……待て」

「でもボーナスということなら喜んで受け取りますよ。すこーしでいいんです。例えば売店の飲み物一本無料クーポンとか」

「それだ！」

「うわっ、びつくりした。何です？ クーポン発行してくれます？」

「そこじゃあない。売店だ」

「売店？ が？」

「『買わせようとしているのだ』」



売店に殴り込みをかけようと飛び込んだのだが、今日の店番は磯風だった。

「磯風。お姉さんを出せ」

「ん、すまない。今日からお姉さんは出張（sight seeing）」

でな」

逃げられたか。

「その様子だと司令、噂通りケツコンカツコカリ・プラチナムセットを調達に来たのだな。何セット必要だ？」

「違う。そのデマを正しに来たのだ」

「なんだと？ では買うつもりもないのに売店に来たのか」

「当たり前である。一セット十五万が何人分必要になるのだ。今、私の財布には二千と数百円しかないのだぞ」

「この店でクレジットカードが使えたらよかったのだがな。しかし司令。となると多くの艦娘をガツカリさせてしまうことになるぞ。構わないのか」

「ガツカリ……いや普通に考えてしないでだろう。少なくとも山城は期待していなかったぞ。誰が泡沫の噂に惑わされるというのだ」

「ほら、後ろだ」

磯風が指さした方、売店の入り口に振り向くと、けっこうな人数が、覗き見をしていた頭をサツと引つ込めた。……叢雲よ、頭の謎のデバイスが隠しきれていないぞ。球磨よ、アホ毛。

あれだけの人数が——私を尾行までしてしまうほど期待、しているというのか……。何たるお姉さんの販売戦略の狡猾さか。

「愛されているな、司令は」

「これほど複雑な気分になる愛され方は初めてである。とにかく私は買わないからな」

「まあまあ、そう決断を急ぐな。そんな司令の反応を見越して、お姉さんはプラチナムセットに新たなプランを用意していったぞ」

「ふん、どうせ『今なら三セット購入で10%OFF』とかだろう」

「15, 700円だ」

「……………なに？」

「およそ十分の一に値を下げた。この艦隊の需要に合わせた努力相場といえるだろう。無論、刻印も込みだ」

「あ、有り得ん。そう簡単に貴金属品の価格が一桁も下がるものか」

「確かにお姉さんが先日見せたものと同じではない。正直に言って

『映え』は多少下がる。だがプラチナであることに間違いは無い。司令よ、よく考えてみてほしい。この磯風とお姉さんも考えたことだ。結婚指輪の相場に無理に合わせることはないのだ。これはあくまでカツコカリ、そう割り切ってしまうえば価格は手頃に抑えられるのだ。そうだろうか?」

「む、むう……かもしれん……のか?」

「再び後ろを見てみる。『カツコカリで十分』と皆の目が言っている」
振り返って売店の入り口を見た。——駄目だ、眩しすぎて直視できん。

「そうだ、いいことを思いついた。さらに先程、司令が口にした案も取り入れようではないか。『今なら三セット購入で10%OFF』だ。どうだろう、これを逃す手はないと私は思うな」

「ぬうう。ぬうううううううう」



後日。

私は秘書艦の金剛に情けない愚痴をこぼしていた。黙っていようとしても口から出てしまうから仕方がないのであった。

「天照大艦隊はその名の通り、大艦隊である」

「そうネー。ビッグ艦隊ネー」

「もし全員の練度が初上限に達した場合、ケツコンカツコカリの費用は合計いくらになる?」

「えーと名簿名簿。にーしーろーはー」

「いやいい。計算しなくていい。知りたくない」

「まだ初上限に到達してない子たち、みんなヤル気になってるヨ。目指せプラチナ! デスって」

「何より苦しかったのは出費の事ではない。一ノ傘に伝えた時、奴がどんな顔をしたか想像つくか」

「アー……。せめて副提督と話し合ってから決めなヨ」

「もう遅い……と一ノ傘に冷たい声で言われた。磯風に踊らされた間

抜けだとも」

「磯風、とつても遅しく成長したよネ。嬉しい限りデース。あ、提督が買ってくれた指輪も嬉しいヨ?」

「なんだその取って付けたような感想は」

「ちゃんと本音ヨ、本音。いやープラチナの輝きは眩しいネー。あ、そうそう提督は聞きマシタ? 本部から一個だけ支給される指輪と700円の指輪を比べてみたって」

「どうだったのだ?」

「一緒だったヨ。叢雲のと吹雪のが同じサイズだったから重さとか味とか色々比べてみたのに、つまらない結果デース」

「そうか……まあ私はもう、お前たちがその新しい指輪に満足してくればそれで良い。……それしか良いことがない」

「言つときマスが、誰も700円の方のヤツを捨てたり売ったりしてないヨ? 私は、一応、大切に仕舞ってマスし、叢雲とかは重ね付けしてたヨ」

「嬉しいことだ」

私が乾いた笑いを漏らしてしまったと同時に電話が鳴った。金剛が受話器を取った。

「ハロー、天照大艦隊の第一執務室デース。——あ、ドーモデース。ええ、代わりマス」

「誰だ?」

「傘姫提督デース」

金剛から受話器を受け取り、通話を切った。

するとすかさず私のスマートフォンが鳴った。

「……分隊にもいたな。超高練度の艦娘たちが」

「乙女はみんなファイン・ジュエリーに憧れるものネー」



さらに後日。

この艦隊に立ち寄った撃沈王・大和にこう言われた。

「ケツコンカツコカりに高額な宝飾品を使っている艦隊があると各地で噂になっています。『ずるい』『私も欲しい』といった声が上がっています。竹櫛提督、近々本部で詳しく説明をしていただきますので、ヨ・ロ・シ・ク、お願いします」

私が悪いのか？

私は悪いのか？

第71話 山城が設定をまとめる回（天照隊の派閥）

あー、あー、テス、テス。



売店に売り物として置いてある地球儀を回しながら、欧州方面まで深海棲艦を狩りに行けるガチ艦隊つてすごいわよねー、と安穩に話していたら長門に怒られたわ。お前たちは他人事のような顔をしていて恥ずかしくないのか、ですって。腕立て伏せ三十回！ ですって。もちろん逃げたわ。

ドーモ、山城です。

今日はそんなガチ艦隊ではない、この天照大艦隊の、派閥についての話をしたいと思うわ。

何故そんな話を、ですって？ いえ深い意味はないけれど。でもいつかは整理して話さなくっちゃあと、つねづね思っていたのよ。

ほら、うちつてば天照『大』艦隊なわけで、つまり無駄に……比較的大きな艦隊なのよ。しかも提督が二人、いえ三人もいる。変でしよ。う。

鎮守府見学の時なんてほぼ必ず軍事オタクからツツコミが入るくらいよ。そんなことを調べて聞いて、何が彼らの興味をそそののかしらね？ 謎よね。まあ適当にそれっぽい理由でごまかして、射撃演習場でエンジョイしてもらえば満足して帰ってくれるからいいのだけれど。

けれど外側から見られる分には適当でよくても、内側、つまり私たち天照大艦隊、以下、天照隊、の構成員からしたら、当然のような歪なような、理にかなっていないような、問題？ があるのよ。

それが派閥。

天照隊を二分する派閥。

竹櫛提督派と、一ノ傘副提督派。

なんて言っても、別に宗教・政治的に対立しているわけじゃあないわ。皆なかよしよ。でも例えば、

「体育祭しまーす。紅組と白組に分かれてー」

と皆に言えば、示し合わせたわけでもないのにパツと綺麗に二つに分かれるわ。バランスもほどほどに良く。

そんな天照隊の事情を、この私、山城が簡単に解説していきましよう。

眠たい解説にならないよう一応の努力は——たぶんできないと思う。ごめんなさいね。

それと、この話、今まで何度もちよこちよこ繰り返してきた話だから、もう知ってくださっている方には「またその話か」ってなっちゃうわ。申し訳ないのだけれどブラウザバックを推奨………したい気持ちも、最後まで付き合ってほしい気持ちもある山城です。



まず最初に、天照隊が結成されたところから話しておくわね。

昔々、五年くらい昔。あるところに、竹櫛提督が率いる艦隊と、一ノ傘提督が率いる艦隊がありました。

二つの艦隊は鎮守府の位置的にも間柄的にもお隣さんで、深い交流をしていました。

ところがある日、一ノ傘艦隊のところの電さんが暴走してしまい、竹櫛艦隊の方へと転がり込んでしまいました。

その電さんを追った一ノ傘提督も、竹櫛艦隊の方へと転がり込んでしまいました。

さらにその一ノ傘提督を追った一ノ傘艦隊の皆さんも、竹櫛艦隊の方へと転がり込んでしまいました。

こうして竹櫛艦隊と一ノ傘艦隊は統合し、今の天照隊ができあがりましたとき。

めでたしめでたし。

決して話を簡略にはしていないわ。本当にこんなシンプルかつ阿

呆らしい事件で、二つの艦隊はあつさり統合をキメたのよ。

まあそれはともかく、私が何を説明したいか伝わったでしょう。

竹櫛艦隊と一ノ傘艦隊、一つ所に統合したにはしたのだけれど、今日に至るまでまだ皆の頭の中には、

「私は元々、竹櫛提督の下にいた、そして仲間たちと一緒にだった」

「私は元々、一ノ傘提督の下にいた、そして仲間たちと一緒にだった」

という思いが残り続けているってわけよ、良くも悪くも。

そしてそれは私たち艦娘だけの話じゃあないわ。提督たちもそうなのよ。むしろね。

竹櫛提督が部隊編成する時はなんとなく旧竹櫛艦隊のメンバーから選出されることが多いし、一ノ傘副提督も以下略。

というか頭の二人がバラバラに動いて指揮系統を一本化する気配がないのがアレね、軍事オタクからツツコミを入れられる原因だわ。まあ、今となっては慣れてしまった構造を変えられる方が迷惑だけど。

ああそれと、対外的に言っている指揮系統が複数ある理由、リスクの分散だとかフォロワーし合うことでの相乗効果とかは真に受けられても困るわ。まあ確かに、竹櫛提督がインフルエンザをもらってきってしまった時なんかはそれっぽい効果はあったけれど、せいぜいがそれくらいよね、実際のところ。

どうかしら、理由も実態も単純すぎて、『派閥』なんて言い方は大きだったかもしれないわね。『派閥』っていう言葉を辞書で調べると……、あー、排他的ではないわ。さつきも言ったとおり、天照隊は皆なかよし。笑顔あふれる職場だわー。殴り合うほど仲がいい、つてよく言ったものだわー。

天照隊は竹櫛派と一ノ傘派に分けられるって理解してもらったところで、じゃあ次はそれぞれの派閥の特色を見ていこうかしら。



竹櫛派の戦闘ドクトリンは、空母機動部隊を編成して、堅実かつ快

速に攻めよう、つてところね。

問題は……ええ、いきなり問題の話になるけれど、空母不在の部隊だと落ち着かない気分になってしまうのと、肝心の主力阿呆空母たちがしよつちゆうケンカしているところかしらね。

前者は工夫して心を落ち着けているわ。空母でなくても誰でもいいから輪形陣の中心に置いておけば、猫が狭いところを好むように、なんとなく落ち着くのよね。

でも後者の阿呆空母たち、具体的に赤城・加賀・翔鶴・瑞鶴は何度宮倉にブチ込まれても懲りるといふものを覚えないわ。ご飯抜きの罰を与えたこともあったけれど……あの時は悪夢だったわ、マジで。

まあ、まあ、とにかく、竹榴派の部隊は攻防バランス型ってところね。私たち自身、けっこう高いレベルで戦えていると自負しているわ。攻める・防ぐ・避けるをどれも疎かにならないよう常に意識している。無難なようできてとても難しい考え方ね。

主な顔触れを紹介しましょうか。

まず竹榴提督の右腕、総旗艦、叢雲。

天照隊を代表する艦娘ね。

この艦隊に『天照大艦隊』と名付けたのもこの子よ。ほら、天照大御神って天叢雲剣を献上されたじゃない。なんかそんな由来があつて、つまり叢雲は偉いのよ。

実際よくもまあ阿呆たちをまとめ上げているなあと思うわ。大変でしょうね。大変だから磯風に逃げるのも仕方が……いえ、この話はナシで。

あ、そうそう。古い話を知らない子には誤解されがちだけれど、叢雲は竹榴提督の初期艦娘ではないわ。提督の初期艦娘は電、現一ノ傘派よ。不思議よね。

戦艦、金剛。

よく叢雲をフォローしているわね。

竹榴派のナンバー2、頼れるお姉さんって感じかしら。

同じ戦艦として私、ちよつと尊敬していたりするわ。「へーい！」とか軽く言っているのに頭は冷静沈着だし。でもスマブラでは絶対に

私が勝つ。

天照隊を縁の下から支えている雰囲気があるわね。

ちなみに姉妹艦の霧島は天照隊の二大戦力の一人で、拳の殴り合いになれば恐ろしいところがあるわ。

軽巡洋艦、球磨。

天照隊の二大戦力のもう一人。

暗殺者。

鬼姫クラスの深海棲艦に気配を消して接近して蹴りとナイフで仕留めてしまう、敵の体力をゲージで可視化するなら一合でゲージを破壊してしまう、猛者。

それと不思議な第六感を持っているらしくて、闇プリン流出事件の真相——確か翔鶴が盗み出したのが発端だったわ——を暴いてみせたりなんかもしているわね。

ただ、なんでもかんでも「意外に優秀な球磨ちゃんに任せれば」っていう天照隊の気風に、こここのところ疲れ気味みたいね。あんまり気軽に頼み事するのはやめておきましょう。

カレンダースから、長月。——のことは皆に内緒だし、ここでは言及できないわ。

私にとっては天使のような悪魔、重巡、古鷹。

ニート航空戦艦、日向も一応こっち派なのは、ええ、別にどっちでも変わらないわよね。

あとはまあ、任務を頻繁にサボる白露型駆逐艦とか、ブツ飛んでいる大井北上とか。

言い忘れてた。この私、山城もこちら側。

竹籬提督が無難無難に考える反動からか、艦娘たちの方に若干フリーダム感が強いってところかしら。提督は、以前まではほとんどの子に秘書艦をやらせて仕事をきちんと覚えさせようっていうご立派なことをやっていたのに、最近はおきりめ気味ね。仕方ないわね。

私の主観の話をする、部屋の窓ガラスを割られたりして腹立たしかったり、ついちよつと魔が差した結果、叢雲や提督に怒られたりしても、そうね、居心地は悪くないと思うわ。どうして扶桑姉さまと

ずっと同じところに行られないのか自分の不幸を理不尽に思うことはしよつちゆうでも、じゃあもし今すぐ姉さまのところに行けるか、ここに留まるかを選べると言われた……ら……、いや待って、冷静に考えて五分五分だわ。

まあ、竹櫛派についてはこんなところかしら。



一ノ傘派は、一言で表せば『ブラック艦隊』よ。近年珍しいわよね、ブラック艦隊。

一ノ傘副提督は、

「んなことないって。ちゃんとメリハリつけてやつとるよ」

そうなたまっているけれど、明らかに竹櫛派より出撃頻度が高いし、向かう先も厳しい戦いが予想される海域が多いわ。

練度がまだまだな子も安心。午前はガチ演習してヘトヘトになった体にお昼ごはんを詰め込んだあと午後ガチ出撃。

鬼ね。

大艦巨砲主義な副提督は航空戦艦の私にもよく声をかけて半ば問答無用で部隊に編成するのだけれど、そのとき驚かされるのが一ノ傘派の子たちの士気の高さね。作戦の困難さが予想されればされるほど目が鋭くなっていくのよ。竹櫛派ならブー文句が出るところなのに、一ノ傘派は無言で頷きつつ、たぶん頭の中で作戦をシミュレートしているの。皆そういう顔をしているもの。ミーティングで私が、

「ちよ、ちよつと待ってください副提督。その作戦は無理がありませんか」

って口を挟むと、他の子たちから「おまえは何を言っているんだ」って目で見られたわね。

すごい——いえ、恐ろしい副提督と艦娘たちの結束だわ。

ああ、でも、誤解しないで欲しいのは、一ノ傘派の子たちは決して心が鉄になっちゃったソルジャーではないってことね。言葉でど

う説明したものか——普通なのよ。普通に艦娘として戦いもすれば、楽しむこともする。よみうりランド泊地の視察任務なんてすごい回数をこなしていたんだから。

それに、つまらない竹櫛提督と違って、一ノ傘副提督はお茶目さん。仕事を雷か誰かに丸投げして一人ネオサイタマに観光に行くような人よ。球磨のサバイバルゲーム仲間でもあるわ。

副提督とその手下たちは砲火力が命、水上打撃部隊を編成してガンガン殴るぜって感じね。たまに論者wwwとも言われたり。というか天照隊に統合される前まで一ノ傘艦隊には空母が蒼龍と飛龍の二人しかいなかった、攻め攻めスタイルだったわ。ええ、論者ね。今はさすがに航空戦力の研究も進めているけれど、それでもやっぱり戦場を切り拓くのは主砲の一撃だっていう考えが根強いわね。脳筋——いえ、論者ですぞwww。

ブラック艦隊のイカれたメンバーを紹介しようか。

一ノ傘副提督の腹心の部下にして叛逆者、電。

天照隊結成の話で出てきたわね。

竹櫛提督LOVEという意味で叢雲とはライバル関係にあるわ。男の趣味についてはノーコメント。

一応この子も総旗艦という肩書きを持ってはいるのだけれど、表向きには艦隊を混乱させたくないから、お酒を飲んだ時にこぼした話では責任は叢雲に譲りたいから、という理由で総旗艦という肩書きをあまり使いたがらないわ。

どちらかというと、叢雲が阿呆艦娘たちの面倒を見る一方で、雷電姉妹は阿呆提督たちの世話を焼く、って感じかしら。

姉妹艦だけあって雷電姉妹は息の合った仕事をするわね。ケンカをする時もプロレス技をかけ合う激しいもので、ちよつと引くくらい見応えがあるわ。

まあ、皆が素直に従いたくなるしっかり者よ、電と……雷、も……。

……駆逐艦、雷。

立場は基本的に電と同格。

さらに天照隊の本隊の中では最高練度。

働き者であることはさつき言った通り。ちよつと電より世話焼きさん。

……なのだけれどね。

ええ、とつても良い子なのよ。私が見た限り悪気とか見当たらないし。

こつちの方は一ノ傘副提督LOVEなのも個人の自由、どうでもいいわ。女の趣味についてもノーコメント。

ただ……ええと、どう言つたものかしらね……そうだ、電の言葉を借りてみましょう。

「雷のダメ人間製造機の通り名は伊達ではないのです。私の姉は疲れた心を性的手段で癒やして中毒にしてしまう……変態です」第24話『叢雲の薬指 12 さよなら純情ようこそカオス』より……。

な、長門の話をするわね。

戦艦、長門。

大艦巨砲主義の権化。

副提督のメインウェポンって感じね。重火力部隊をグイグイ引つ張っていくわ。

副提督と違って魚雷の爆発力までしっかり頭に入れているのも高ポイント。

でもやつぱり脳筋なところが玉に瑕かしら。

その偏った面倒見のよさ、得意の根性論は、艦娘という在り方とは相性がよくないと思うのよね。良くも悪くも、力こそパワー系で組ませたら無敵、つてところかしら。

あと当然のように負けず嫌いで、以前は戦艦寮スマブラカースト最底辺だったのに、最近私を追い越しそう。まあ、負けず嫌いじゃあない戦艦なんて一人だっていらないのだけれど、長門は人一倍ね。

駆逐艦、吹雪。

副提督の初期艦娘。

あまり表立って動くことはないような、でも大切な場面には必ずいるような、最古参らしい振る舞いをしているわね。

私的にはクセが強くなって好感の持てる子だわ。

さつきも話に上げた、正規空母の蒼龍と飛龍は本当にリスペクトせずにはいられないわ。艦隊に空母がたったの二人で、いやいやあんた。

でもそれも昔の話。

この山城、航空戦艦として微力ながらお手伝いさせていたいただきたいわね。

竹榴派から一ノ傘派に引っ張っていかれた龍驤は……今では見違えるように遅しくなって、ええまあ、よかったわね。ブラック艦隊に入るとどうなるか、よく見せてもらったわ。

重巡は妙高型と、天照隊の結成以前から姉妹艦で二人分かれてもらっていた高雄愛宕。

小口径砲で頑張らないといけない駆逐艦は、陽炎型が目立っている気がするわ。

一ノ傘派って軍隊色が強いわね。いや本来、艦隊ってこうあるべきなのかしらね。かといってそれを認めちゃうと、同時にブラック艦隊も認めることになるわけで——ふむ、難しい。

いくらか前までこんな話を耳にしていたわ。竹榴艦隊と一ノ傘艦隊、別々のままの方がよかったんじゃないかって。無理して一箇所にぎゅうぎゅうに詰め込まなくても、元々深い交流はあったし助け合っていたし、それぞれの鎮守府にいた方が合理的だったのでは？

確かにそうね。

でも今はそんな話は聞かない。

ゆるい竹榴派にとってカツツとした一ノ傘派は良い刺激になってるし、逆もまた然り。

何より仲間が増えるのは喜ばしいことよね、と綺麗事を言っただけで締めることにするわ。



天照隊内の派閥、竹榴派と一ノ傘派、どうだったかしら。なんとなく

くでも分かってもらえたかしら。

簡単解説とか言っておいて、長くみっちりしてしまつてごめんなさいね。

でも、知っておいて欲しかったのよ。

軍事オタクに、そんな組織は変だ、と指摘されても、

「やかましい。私には私らの事情があるのよ」

ピシヤリと黙らせたいのよ。派閥があるのが私たちの性格なんだから。欲を言えばその事情まで知った上で私たちを評価してもらいたいってわけ。……一般人に喋ることじゃあないって、いろんな人から怒られそうね。

あんまり長くなるのもよくないし、この動画もここでスツパリ終わっておくわ。

ご視聴、ありがとうございました。



……一応、分隊についても触れておく？ あそこはあそこで一つの派閥っぽいし。

ここまで話してきたのは天照隊の本隊のこと。

ほら、一ノ傘艦隊が竹櫛艦隊の方に転がり込んできたって話したでしょ。すると一ノ傘艦隊のいた鎮守府がまるっと艦隊不在になるじゃない。

そこに紆余曲折を経て、天照隊の分隊ができたのよ。

構成員をパパツと言うわね。

一ノ傘副提督の従姉妹、傘姫提督。

超有能な総旗艦、と呼ばれるのを遠慮して嫌がる空母、斑鳩。

頭がヤバイ潜水艦が五人。

秘書の妖怪猫吊るし。

以上。

ああ、それと撃沈王・大和がここに席を作っているわね。たまに見かけるわ。



おっと、これを忘れちゃあ駄目だった。

異世界の提督さんから質問を頂きました。

ありがとうございます。

どうして天照大艦隊には海外艦が一人もいないのか？ という質問です。はい。

なるほど異世界ともなると、ずいぶん事情が異なるのね。

こつちの世界では、世界各国の選りすぐりは一箇所に集まって、とてもとても大きな艦隊を作っているわ。それはもう天照隊なんて比じゃあない、世界超弩級連合艦隊よ。

そこはネオサイタマ鎮守府。

よりにもよってネオサイタマを拠点に選ぶのよ。これには異世界の提督さんも驚くんじゃあないかしら。敢えてそうする理由が何かあるんでしようねえ。意味不明よねえ。

ちなみに、その艦隊の中にも、派閥というか陣営があるらしいわ。

何だったかしら——『ロイヤル』とか『重桜』とか、他にもいくつか。まあ、それだけ大きな艦隊ってことね。

話すべきことは、これでだいたいわしたわね。

では今度こそ、またお会いしましょう。

さーよーなーらー。

第72話 ヤーナム島の黒い風（前編・雑）

「いや実は僕、漁支援にはまったく携わったことがないんだよね。去年もこれ言っただけ？」

「あら、そうなの？」

「お父さんの艦隊にいた頃はアレでダメだったでしょ、その後の一年の空白でしょ、それから今ここの少人数艦隊」

任務で漁場まわりを遠くから広く哨戒していたことはありましたが、漁支援装備をガン積みして魚群を探しまわる艦の護衛をしたことは一度もありません。

僕の他に潜水艦五人（と提督と猫吊さん）しかいないこの分隊が、わざわざ本隊から人手と装備を借りてまで秋刀魚&鰯祭りに興ずるのは、それが任務だとしても、なんかほら、違うでしょう。

「お刺身とか蒲焼とかいろんな料理があるよ。食べにおいで」

と本隊から親切にも誘ってもらえているのは嬉しい限りなのですが、しかしですよ。何もしてないくせに旬の魚に舌鼓を打つのは気後れしますし、かといってお断りしてしまうのもスゴイ・シツレイだから悶々としている、ドーモ、斑鳩です。

「ふむふむ。じゃあ、こうしよう」とオカツパ頭の傘姫提督は言います。「斑鳩の分まで、私一人で食べるに、行ってくる、ね」

「またサボる口実を……いや、うん。今回はそれでいいや。向こうの皆によろしく言っといて」

「今から行けば、ちょうど、お昼ごはんの時間、だね。さあ出張の、準備」

ピロロロロロ。

提督が立ち上がったと同時に執務室の固定電話が鳴りました。電話を取るのももちろん秘書艦の仕事です（諸説あり）。

「提督に用事かもだから待ってね——はい、天照大艦隊分隊執務室です」

《その声は斑鳩殿でありますな!? ならば話は早い、大至急の支援を要請するであります!》

「えー……。そう言うそちら様の声は、あきつ丸……。提督？」

あのアンポンタンを提督扱いしたくはないのですが、実際提督なので渋々、です。

《その通りヤーナム泊地のあきつ丸であります！ 我が泊地は現在、かつてない危機に直面しているのであります！》

電話の向こうで、阿呆がかなり焦っている様子が感じ取れます。やいやいと騒ぐことが得意なあきつ丸の、こんなにも切羽詰まった声のトーンは初めて聞きます。

しかし何用でしょうか。漁支援のことでしょうか。

僕の知る情報が古いものでなければ、ヤーナム泊地に在籍する艦は、ここ天照隊分隊とほぼ同等で少ないです。神風型駆逐艦が五人いるだけ。あきつ丸を入れても六人。漁支援に割ける戦力は考えるまでもなくありませんから、悩む必要なんて逆にはずなのです。

「なんの危機？ 秋刀魚と鰯の漁の任務なら余裕のある艦隊が——」

《秋刀魚？ 漁？ 遊んでいる暇などなひゃあ!?》

今、あきつ丸の声の裏で、ドカーン！ と何かが発射したような音がしました。その音は音割れを起こすほどでした。

「もしもし？ どうしたの？」

《敵戦艦からの砲撃であります！》

「は？」

《深海棲艦の包囲艦隊が一キロ先まで迫っているのであります！》

「……………大丈夫？」

頭がイマイチ追いつかず、とりあえず大丈夫かどうかを聞いてみる僕。

大丈夫じゃあないに決まっているでしょうが僕もアンポンタン。



艦娘はおろか深海棲艦すら忌避する海域は存在します。文字通りの『血の海』が脳の単純な部分を恐怖で塗り潰してしまう、そこはヤーナム島周辺。

と言つてもそれはちよつと前までの話で、大和が島を無害化してからは血もだんだんと薄まつていき、小規模ながらも僕ら人類にとても有利な、深海棲艦が寄り付かない泊地が作られたのでした。

……が、その約束された安全も、どうやら過去のものとなつてしまつたようです。

《どふおあ!? 敵さん、また撃つてきたであります!》

「神風ちゃん達は!? まさか、まさか……!」

《いや神風たちは出撃させていたでありますから、帰還命令を出したところでもあります》

「そう。とりあえず無事でよかつた」

《ちつともよくないでしょう!? 迎撃ができないであります!》

「大本営にはもう連絡したんでしょう? なら早く島の奥まで撤退して——」

《いや、ヤーナム島に詳しい貴官に支援要請を出すのが先でありましょう。現場の的確な状況判断であります》

「命令系統ガン無視にも程があるでしょうがコンチクシヨウ」

僕にどうしろと!

《ヌツ。どうやら敵包囲艦隊がジリジリと前進を始めた様子であります。これは……深海棲艦による上陸作戦? おのれ反撃がないからと甘く見て!》

「ああもう! 敵の規模は?」

《こちらの見える範囲で……ちらり。空母4、戦艦2、巡洋艦3、駆逐艦11、識別不能1、潜水艦不明。あの識別不能の敵からは、ちつこいながらも鬼姫級の気配が——あつ、いま確かに目が合つてしまつた! であります! ここはまずい、撃たれるであります!》

「あああああもう!」



猫吊さんの神懸かり的な伝達手腕のおかげで、とても厳しい命令系統のガン無視事案を巧妙に隠しつつ話は速やかに進み、ヤーナム島反

撃作戦が発令されたのでした。

僕は右手で出撃準備を進めつつ、左手にスマホを持って通話しているところですよ。

《……確認させて頂戴。この私が》大和です。《あきつ丸提督に対して、軍事機密を管理している建物に火を放った後、オドン教会なる場所まで撤退するよう指示を出した。また帰還中の部隊はまっすぐ泊地に戻らず、ヤーナム島北東部にある漁村の方から島に入ってあきつ丸提督と合流すること。——ということになってるのね？ そう口裏を合わせたいのね？》

「はいその通りです。本当に申し訳ない」

傘姫提督ならともかく、一兵卒の僕がアレコレとあきつ丸提督を動かすのはよろしくないでしょう。なので猫吊さんは、撃沈王に責任を押し付けてしまうのがよい、と判断したようです。ヤーナム泊地を作ったのは大和ですし……という理由が通るのかは分かりませんが。

「腐っても一応は元陸軍の揚陸艦が、敵に上陸の動静ありつて言うものだから、迎撃できないなりに何かしないと、と思つて……その、焼却してしまうのはやりすぎだったかなと反省してます」

《ふふふ……斑鳩は私が作ったヤーナム泊地を破壊するのが何よりお楽しみの方で……なんてね、冗談よ。奪われるよりずっとマシだよ》

それから五秒ほどの沈黙。たぶん大和は僕に聞こえないようにため息をついたのでしよう。それと冗談なのは半分ほどなのでしょう。

《じゃあ、ヤーナム島反撃作戦は天照隊に任せちゃつていいのね》
「うん、任せて。つて言つても僕一人の他には本隊から出てきてもらうんだけどね」

《今はみんなソナーとか探照灯とかばっかり装備して出撃してるんじゃないの》

秋刀魚&鯛祭りの邪魔をしてしまうのは悪いよね、それも、

「泊地が敵の攻撃を受けているから今すぐ助けて」

なんて重たい作戦で割り込むのは止む無しとはいえ心苦しいよね。と僕も提督も思いつつ本隊にお願いをしました。ところが返事は、

「漁支援にもちようど飽きてきたところだった」

とのことで、本隊の皆さんは快くヤーンナム島反撃作戦に手を貸してくださいることになりました。ストレス溜まりそうですもんね、漁支援。

《深海棲艦が増えておおごとになる前によく頼むわよ。あ、そう
だ。せっかくなら——天照隊にはあの子がいたわね。差し支えな
ければ部隊に入れてもらえないかしら》



第一艦隊旗艦斑鳩、第二艦隊旗艦球磨さん率いる十二名からなる空
母機動部隊、出撃です！

「なんで球磨だけ、撃沈王からご指名いただいたんだクマ？」

後編につづ……………く？

第73話 ヤーナム島の黒い風（中編）

発令！ ヤーナム島反撃作戦

第一艦隊、旗艦斑鳩、比叡、翔鶴、瑞鶴、大鳳、那智

第二艦隊、旗艦球磨、霧島、妙高、夕雲、卷雲、風雲

空母機動部隊、出撃です！



艦娘が嫌な予感を覚えたその時、少なくとも空と海は灰色でなければならぬと僕は思います。例えば、大破した艦に右も左も肩を貸している困難に足を突っ込んだ後であれば雨雲が空を覆い尽くし、やや強い風が吹いていると良いでしょう。すごい強そうな鬼姫クラス深海棲艦率いる敵艦隊と対峙した時は、空は、黒色と赤色のステンドグラスが割れている感じが丁度良いでしょう。

雰囲気重点。

だというのに、今は空も海もきれいな青色をしています。そんな大自然の何が悪いのか？ 情景描写ができないじゃあないですか。僕がいま心の中でモヤモヤさせている、「普通に戦ってハイ任務完了、とはならないんだろうなあ」という勘をどう表現したらよいものか。十一名の本隊の戦力を預かる部隊旗艦であるため弱音を口にすることもできません。

僕らヤーナム島反撃作戦機動部隊は現在、索敵を怠らずヤーナム島を目指しています。

過去、僕が二回ヤーナム島を往復した時は、敵らしきもの一つすらありませんでした。なんというか、警戒し甲斐のない航路だったので。その理由こそが、ヤーナム島を幻たらしめていた原因なのでした。

出撃から■時間、何事もなく快速で進んでいると、球磨さんがツイと僕の横に並んできました。他の皆は一発の爆弾で多数の被害を出さないよう適度な間隔を取っています。

「なんで球磨だけ、撃沈王からご指名いただいたんだクマ？」

球磨さんの装備は連装砲と偵察機、それと敵が上陸を果たしている
と想定してのロケットランチャーです。あと、恐らくいつものナイフ
も厚着の下に隠しているのでしょうか。

「同じ軽巡なら矢矧たちの方が喜んでヤル気MAXになってたと思う
クマ」

「大和は意味もなく指名したりはしませんよ」たぶん。

「じゃあ、どうしてクマ？」

「どうしてでしょうね。理由は特に言ってますませんでした」

「斑鳩オマエ、理由も聞かずに言われるがまま、球磨をコタツから引き
ずり出したクマ？」

「もうコタツ出したんですか。早いですね」

厚着はナイフを隠すためではなく、ただ寒かっただけのようです。

「この急な冷え込みに球磨のヤル気はただ下がリクマ」

「ヤーナム島までの辛抱ですよ球磨さん。あそこは妙に生暖かいです
から」

「ふーん」と言って球磨さんは僕の側から離れ、第二艦隊旗艦位置に戻
りました。その後に通信装置(デザイン性を捨てたBlue tooth
hイヤホンのようなもの)で、

《みんなー、寒いのはヤーナム島までの辛抱らしいクマー》

「みなさーん、球磨さんの言うことは気にせず警戒を続けてくださー
い」

《警戒してないのは旗艦の二人だけじゃない！》と瑞鶴に怒られてし
まいました。《ここまで本当に何もなかったけど、もういい加減、偵察
機が何か見つけてもいいんじゃない？ 敵艦隊には空母もいるんで
しょ》

「瑞鶴、いいタイミングで言ってくれた」

元陸軍人、あきつ丸の眼が腐っていないと……そう信じるとした
ら、敵包囲艦隊は泊地を破壊するのに極めて消極的です。あきつ丸が
「深海棲艦による上陸作戦？」と推定したことと、電話から聞こえた敵
戦艦からの牽制めいた密度のない砲撃。僕はこれら情報より、敵の目

標を『ヤーナム泊地から陣地丸ごとと情報の奪取』だと考えました。で、あれば、先んじて泊地に火を放ってしまえば敵（と大和）は作戦目標の半分くらいを失い困ってしまって、後にやることといえれば撤退か、反撃に出る人類側への迎撃しかありません。撤退してくれるのならそれでよし。泊地で待ち構えているか進撃してくるかは——今ここまで僕らの偵察機が何も見つけていないことから前者のようです（僕らとすれ違わない方向へ向かっているとしたら、それはもうただの敵はぐれ艦隊です。好きに漂流させておけばよし）。

「なら僕らはいつ攻勢に出るべきか——翔鶴、瑞鶴、大鳳、攻撃隊発艦準備をお願い」

《いつでもいけます》と翔鶴。

《待ちくたびれたわ》と瑞鶴は弓を引き絞りました。

《攻撃隊、発艦準備完了》と大鳳はクロスボウを構えました。

さすがは練度が初上限に到達しているだけあって、三人とも頼もしいです。

「全攻撃隊、発艦！」



「す、ストップストップ！ 攻撃隊全隊、攻撃中止！ 繰り返す、攻撃中止！ 敵対空射撃を警戒しつつ接触を続けて！」

僕を含む空母四人以外にはわけが分から……いえ、僕らもわけが分かりませんでした。

「皆も微速……いや今の陣形のまま停止。作戦タイムに入らせて」

当然、球磨さんは第二艦隊を代表して訝しみます。

《斑鳩、なにごとクマ？》

「あ……ありのまま、今起こってる事を話していいですか」

《ポルナレってんじゃあねークマ。分かりやすく説明するクマ》

「五秒待つてください。……——泊地地上で艦娘らしき者六名、恐らくあきつ丸提督と神風型駆逐艦五名が……えー、鹵獲？ 捕虜？ にさせていただきます」

《はあ!?!》《そんな!?!》と何人かから懐疑の声が返ってきました。まあ、そんな反応になりますよね。

ですが僕は逆に安堵していました。なぜ、逃げたはずのあきつ丸と神風ちゃん達が捕まったのかはわかりませんが、今、生き残っているということは、

『普通ならばとつくにもたらされている死』

を免れていることを意味します。

しかし航空機からの観測ですから、近づいてよく見れば、それは屍を生きているように見せる案山子だったという………考え過ぎです、僕。吐きそうになるくらいなら考えるな。

「ケホツ……地上には敵戦艦2、空母2、重巡1。たぶん足がしつかりしてる系の深海棲艦が上陸したんだと思う。泊地付近の海上には空母2、軽巡2、駆逐艦11」

あきつ丸が見た数より一体足りず、しかもその一体は鬼姫クラスの可能性のあった個体です。神風ちゃん達の決死の集中攻撃で倒してしまつたのでしょうか。

「こつちの航空機には、ただ見てるだけで迎撃してくる様子なし。あと泊地の建物から火が出るけど、これはあきつ丸提督がやったものだから……いやどうだろう。命令通りやれた可能性が低くなつてきたから敵に攻撃されたのかも」

《深海棲艦が、捕虜を取るんですか?》と霧島が、皆がシンプルに思っていることを代表して口に出しました。《創作戦記ではたまに見かけますが》

《斑鳩、そのところどうクマ?》と球磨さん、なぜか僕にパス。

「え、なんで僕が知ってる風に聞くんです?」

《だってオマエ、深海棲艦になりかけの奴クマ》

「あーなるほど、そういえばそうで……いやいや、分かるわけないですよ深海棲艦の考えることなんて」

とは言ったものの、部隊の旗艦が『知らない分からない判断できない』ではいけません。

「翔鶴、瑞鶴、大鳳。もう一度、攻撃隊の妖精に確認してもらつて。感

覚的でいいから、艦娘らしき者六名は捕虜のように扱われているか、って」

残念ながら僕と一緒に働いてくれている妖精は、このような曖昧な指示を聞いてくれません。

妖精は『洞観者』に対してとても冷淡なのです。

航空機にどれだけ乗っても機体に慣れようとせず熟練度は上昇しません。艦砲を構えても最低限しかエイムをアシストしてくれません。上陸用舟艇（大発動艇など）だけは楽しいらしく、小さな舟艇に飛び乗ると、満足するまで海上を走ったのちに帰ってきます。応急修理要員に至っては艦娘の被害甚大と見れば「ダメなものはダメ」と諦めてしまいます（うちの潜水艦たちによって狂気の実証済み）。

《――攻撃隊より》と大鳳。《まるで強盗立てこもり事件の人質のよう、とのことです》

《こちらと同じように見えています。艦娘たちは膝をついて両手を頭の後ろに回して、それに敵戦艦と重巡が砲を向けています》

《私も大鳳と翔鶴姉とほぼ同じ》

翔鶴と瑞鶴もそう報告してくれました。

久しく流していなかった脂汗。さつき吐きかけた時からの胃痛。

おお、我らが慈母アマテラスよ。これが僕らが足を踏み入れる戦場ですか。

「この中で誰か、人質事件に詳しい人、いない……よね？」

《オマエが昔、提督と叢雲を人質に取って天照隊を襲撃してきた事ならあつたクマ》

「今は勘弁してくださいよう。……ん、攻撃隊から新しい打電（ハイテク）です」

僕だけでなく他の空母三人も、ほぼ同時に報せを受けているようです。

『地上の敵空母が本隊に向けて両手を上げたり広げたりしている』――んん？』

これを正確に判読できたのは瑞鶴の妖精でした。

《『手旗信号を送ろうとしているように見える』ってよ》

「瑞鶴、助かった。応信お願い」

《了解。——『コノモノタチノイノチガオシケレバブソウヲホウキシタノチココマデコイ』……以上》

この者たちの命が惜しければ武装を放棄した後ここまで来い。

僕は腕を組み、空を見上げました。日はてっぺんをとうに過ぎ、あと■時間くらいで綺麗な夕焼けが見られることでしょう。相も変わらず自然は空気を読まな……いえ、このタイミングで嵐に見舞われようものなら部隊の士気はガタ落ちしてましたね。「一度撤退しよう」と誰も言わないでくれるのは有り難いです。

とりあえず、あきつ丸たちが “人質” なのは確定しました。

つまり、今ここで、僕らで、何とかしなくっちゃあいけないということですよ。

「球磨さん、天照隊に状況連絡と増援要請をお願いします」

《増援を待つてから動く作戦クマ?》

「いえ。僕らがしくじった場合のためです。早まるなど言われても無視してください」

《りよーかいクマ。斑鳩のそういうトコは嫌いじゃあないクマ》

「瑞鶴、敵方に向けて送信——できるかなあ? 妖精の小さい手で、し

かも高く飛んでる航空機の上から」

《気合でやってもらうよ。何て言い返す?》

『ファツキユー』とか『人質を取る卑怯者のくせに手旗信号と日本語だけはお上手ですね』と煽りたい気持ちはグツと我慢です。

「シンプルに『そちらの目的を問う』とお願ひ」

《分かった》

「次は、ええと——」

矢継ぎ早に指示を出そうと、頭よりも口が先走って回ります。部隊の皆が今のこの状況を、冷静を通り越して深刻に考え込みすぎないように。……というのは建前で、僕自身が挫けないように。

「夕雲ちゃん、巻雲ちゃん、風雲ちゃん。装備してるソナーはアクティブだっけ? パッシブだっけ?」

《みんな漁支援で使っていたものをそのまま持ってきたから、当然ア

クティブソナーよね》

夕雲ちゃんがそう言うのと、《ふえ？　なんでですかあ？》と首を傾げる巻雲ちゃん。

《巻雲のはパッシブソナーですよ？　でもこのソナー、ちよつと壊れてるかも。お魚の音がぜんぜん聞こえないんです》

《えっ……巻雲姉さん、漁支援は得意だって、えっ？》

《えっ？》と巻雲ちゃん。

《えっ？　えっ？》と風雲ちゃんは巻雲ちゃんと夕雲ちゃんを交互に見やりました。

《巻雲さん、今までどうやって漁支援を……》

「い、いやナイスだよ巻雲ちゃん。もし本当に武装を全部放棄することになっても、音バレしないパッシブソナーだけは捨てずにこつそり使い続けてね、つてお願いしようとしたんだ」

だから間違ってくれて逆に助かったよ、とは皮肉っぽくなりそうだったので言いませんでした。

「それから比叡」

《難しいことはご勘弁！》

金剛型戦艦に容赦など不要です。

「僕か球磨さんか、あるいは両方か。部隊旗艦を引き継いでもらうかもしれないから、心の準備をしておいて」

僕はてつきり「ひえくっ!？」と返されるものと想像していたのですが、比叡は、

《マジ？　斑鳩と球磨、デコイになって死ぬの？》

僕より遥かに酷い想像をしたようです。



その頃、ヤーナム島にひとつの黒がありました。僕らの知りようがない黒です。

黒は、鮮麗な五色と混ざり合う時を、今か今かと待ち続けていました。

この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。

第74話 ヤーナム島の黒い風（後編）

その頃、ヤーナム島にひとつの黒がありました。僕らの知りようがない黒です。

黒は、鮮麗な五色と混ざり合う時を、今か今かと待ち続けていました。

この日のために黒は風となったのです。

それはきつと綺麗な六色になるだろうと、黒は期待に胸を苦しいほど膨らませました。



『ブソウヲホウキシタノチココマデコイ』

武装を放棄した後ここまで来い。

敵は、再び手旗信号で同じ要求を繰り返しました。

深海棲艦に「そちらの目的を問う」と聞くことがナンセンスだったのでしようか。

主導権を握っているのは、人質を取っている敵の方です。こちらにはプロのネゴシエイターなんているはずがありませんし、味方の応援を待たため時間を引き延ばす術もありません。素人が刑事ドラマの真似事なんてしたら、六人も豊富にいる人質は数を減らされるに違いありません。

「瑞鶴、また敵方に向けて送信お願い。『そちらに行く。人質には手を出すな』って」

「へちよつ、本気なの？」と驚き半分、抵抗半分で言う瑞鶴の気持ちは分かります。が、

「作戦がある」

僕はズバツと言いました。

半分、皆に対するハツタリです。強がりです。

皆に腹を括って動いてもらうために必要なのは筋道、つまり作戦。それを用意します。

では何が半分ハツタリなのかということ……軍師でもない僕が立てた作戦なんて、ただ、今できることをやろう程度のもなのです。妙策どころか、ヤーナム泊地で囚われている六人に加えて犠牲者を上積みする下策かも……ああ、少しでも気を緩めると顔に出そう……。

「瑞鶴の攻撃隊から敵に送信を終えたら、翔鶴、瑞鶴、大鳳。攻撃隊全隊、帰還させて」

……いいえ、覚悟はさつき済ませたじゃあないですか。今ここで、僕らで、助けるんです。神風ちゃん達を。あと一応あきつ丸も。

《球磨は第二艦隊の旗艦だけど、作戦は斑鳩に任せるクマ。で、どんな？》



元々のヤーナム島反撃作戦部隊はこんな感じでした。

第一艦隊、旗艦斑鳩、比叡、翔鶴、瑞鶴、大鳳、那智

第二艦隊、旗艦球磨、霧島、妙高、夕雲、卷雲、風雲

「どうやら敵には何か理由があつて、人質を盾にして僕らを一方的に攻撃するのではなく、ヤーナム泊地まで呼び出したらしいです。何をされるのか、させられるのかまではわかりませんが、それに合わせて部隊編成を変更します。第一艦隊は旗艦僕、翔鶴、瑞鶴、大鳳はそのまま、球磨さん、霧島が移ってきてください」

第一艦隊、旗艦斑鳩、翔鶴、瑞鶴、大鳳、霧島、球磨

「比叡と那智は第二艦隊に移ってもらいます。比叡はさつきお願いしたとおり第二艦隊の旗艦をお願い」

第二艦隊、旗艦比叡、妙高、那智、夕雲、卷雲、風雲

《旗艦はまっかせて！》と頼もしい比叡。《でも、どうして変更を？元のままじゃダメなの？》

「僕らは航空機を全力発艦させちゃったけど、敵の方からは今の今まで何も飛んで来ないし、レーダーでもヤーナム島からここまでは探知できない。つまり、こちらの戦力はまだ『航空機の数から推測して少なくとも空母四隻』としか知られていない。だから泊地に出向くのは

最低、空母四人だけでいい」

《それなら、空母四人に私と球磨を付け足したのは？》と云って霧島は眼鏡をクイツと上げました。

《球磨はもう分かったクマ。いつものパターンクマ》

「はい。第一艦隊は武装を解除されながらも敵が待つ泊地まで行かないといけない。海軍陸戦隊」です。頑張りましょう」

出撃前、大和が作戦部隊に球磨さんを入れるよう言ったのは、まさかこの状況を見越してのことだったのでしょうか。だとすればさすがは撃沈王、潜り抜けてきた修羅場の数が違うようです。

あ、加えて霧島までいてくれたのはただのラッキー、いや我らが太陽神が与えたもうた奇跡でしょう。

ですが艦娘とは、海の上を滑り踊る者。

《はあ!? 海軍陸戦隊ですって!? 冗談じゃないわ!》

瑞鶴の反発も、いやこの反発こそ、もつともです。

《まさかアズールレーンのアニメみたいに弓矢で戦えっていうの!?》

「ごめん。残念だけど人質の命がかかってるから、装備はここで全部捨ててもらう。海の中にドボン」

《んなっ……!?》

予想できていたこととはいえ、皆からの「コイツはなにを言っているんだ」という視線が痛いです。ですが、ここが旗艦としての踏ん張りどころ。

《ヤーナム泊地の顔も知らない艦娘のために、私たちが死ねて——!?》

「絶対とは言わないけど勝ち目のない勝負はしない。地上にいる敵は戦艦2、空母2、重巡1。それぞれの立ち位置次第だけど、砲撃してくる戦艦2と重巡1は僕と霧島、球磨さんと速攻で倒す」

球磨さんについては今更、言うに及びません。

霧島は、僕は実際に見たことではないのですが、そのメガネパンチなる技は『星の白金のような残像が見えるラッシュ』だそうです。速さもさることながら威力も折り紙付きで、過去、ゲームキューブをメリケンサック代わりに装備したパンチで僕のお父さんの顔面を真っ平

ら以上にしました(第18話『叢雲の薬指』——来訪者』での出来事です)。お父さんの顔は数回手術した今でもちよつと見れたものではありません。

「球磨さん、刃物は今どれくらい隠し持ってます?」

《人をやべーヤツみたいに言うんじやあねークマ》

そう言いつつも、球磨さんが両手を掌底打ちのように軽く振ると、長袖の下からアサシンブレードがジャキンと二本飛び出しました。それを引っ込めると今度は背中に手をつっこんで、鉈よりも大きなナイフをすりと抜きました。僕を刺したことがあるヤツです。コワイ!

「その大きなナイフ、空母の誰かに貸してもらえませんか」

《慣れないものを貸したくはないけど……まあ、素手よりはましクマ》
《あの、待ってください》と言った翔鶴の顔に表れているのは、怯えの色でした。《私たち空母は、本当に戦えないというか、足手まといにかならないと思うの》

《私も、戦えるとは言っていないかもしれませんが?》と霧島が同調しようとしたが、スルーでいいです。

「翔鶴と瑞鶴、大鳳には敵空母2隻を、僕か霧島か球磨さんの誰かが駆けつけるまで、航空機を飛ばさせず、できるだけ長く怯ませておいてもらいたいんだ。やつつけるとは言わない。ナイフで脅すでも石を投げるでもいい。タツクルしたり掴み合いしてくれればもつといい。とにかく時間を稼いで欲しいんだけど——できるかな」

《で、でも、喧嘩みたいな荒っぽいことは——》

「え。しよつちゆうしてるよね。赤城と加賀たちとで」

翔鶴と瑞鶴の目が古代エジプトのメジエドのそのようになりました。

「やつてくれる、よね?」

《わ、分かったよ! 本当に時間を稼ぐだけだからね!》

《はあ……でもこれも旗艦命令だし》

瑞鶴と翔鶴はやつと折れてくれました。

「大鳳。お願い、していいかな」

《……分かったわ。できるだけやってみる》

《球磨、そのナイフ私に貸して。どうせならアズレンの同名キャラみたく刃で活躍してやるんだから》

《ナイフを奪われないよう、過信も相手を甘く見るのも禁物クマ。ほら、腰の後ろにでも挿して隠しとくといいいクマ》

球磨さんが瑞鶴にナイフを渡しているところで、霧島が僕の側に寄ってきました。

「もう一度言うわよ。私も、戦えるとは言っていないんですが？」

『金剛型戦艦に容赦など不要』って金剛さんが言ってたから、それに甘えようかと」

「お姉さまが？」

「うん、金剛さんが」

「……………今回だけよ」

渋々といった様子で、「艦隊の頭脳になるには……………」などとしばらくブツブツ言っていました。



「さて、第二艦隊の方だけど」

《敵の目が届かない地点で、万一に備えて待つてるしかない？》

比叡は若干気楽に思っているらしくて申し訳ないです。

「うん。待つには待っててもらって——」

僕は第二艦隊の皆に向かって手を合わせ、オジギをしました。

「僕からの合図で、最大速度で、主砲撃ちまくったり偵察機ブンブン飛ばしたりして可能な限り目立ちながら突撃してきてください」

《うわー。つまり敵のヘイトを集めろと》

「陸戦隊が攻撃を仕掛けるきっかけが欲しいんだ。敵が僕ら陸戦隊から視線を外して、海の方に注意を向ける瞬間が欲しい。それと人質確保まで上手くいった後も、焼け落ちてない建物の裏側まで隠れに背中を晒しつつ走らなきゃいけない。欲を言えば島の奥、ヤーナム市街まで逃げたいけど、そこまでは難しいなあ」

《海上の敵の規模ってどれくらいだっけ?》

「空母2、軽巡2、駆逐艦11。それと未確認だけど潜水艦もこっちの索敵に気づいた時に隠れた可能性がある。敵のヘイトが第二艦隊に向いたら、陸戦隊は泊地で使えそうな装備を探して加勢するから」

《もういつそのこと、今から全員で突撃するのはどうだ?》と大胆に提案したのは那智でした。《装備を捨てた者を先頭にして、その背後に完全武装した者が隠れながら進むんだ》

「ジエツトストリームアタックみたいなの? あゝ……」

下手な作戦を考えるよりいいかも、とはちよつと思いましたが、僕はガンダムにまるで明るくないので却下です。

と、ここで帰還命令を出していた航空隊が帰ってきました。僕ら空母の飛行甲板に次々と着艦させていきます。

装備の妖精たちも、ここで第二艦隊に預かってもらいます。

「みんな聞いて。敵が痺れを切らして偵察機を寄越してこっちの全戦力を見られたら、本当に詰む。だからお願——いや、やるよ。第一艦隊、海軍陸戦隊は刃物以外のすべての装備を海に捨てて。——ああ分かるよ、勿体無い以上に無防備になるのは怖いけど作戦は必ず上手くいく! 第二艦隊は第一艦隊出発から五分後に行動を開始して。比叡が積んでる高性能レーダーを頼りに敵の索敵範囲ギリギリ外まで近づいて待機、合図を待って」

第一艦隊の皆が手放した装備が次々にボトボトと海の中に……ああそっか、弓と飛行甲板って海に浮かぶんだ……いや僕が惜しんでどうする。

「よし。第一艦隊、進撃開始!」



ヤーンナム島周辺の海は以前と比べたらいくらかマシになった、というだけで、まだ「間違ってもこの海水を口に入れたくない」と思う程の血が混ざっています。鉄の匂いも鼻を突きます。

単縦陣でこの海域に侵入してから、僕ら部隊の進む速度は二割ほど

遅くなっていました。速度を一定に保ちつつ先頭に行く僕がちらりと後ろを振り返ると、後続を置いて行きそうになっていたのです。――二番艦の、球磨さんすらも。

血で足を濡らすのは、まるで彼岸花を踏み荒らすようだ、などと安易に比喻できません。恐怖が足首に鎖を巻きつけるのです。

各艦二十メートルほどの距離を取っているので、話をするならやはり通信装置が便利です。

「斑鳩から第一艦隊各艦へ。泊地の火災の煙が見えてきたよ。みんな心の準備はいい?」

二番艦の球磨さんから順に霧島、瑞鶴、翔鶴、大鳳が、

《問題なしクマ》

《問題なし》

《問題なし》

《問題なし》

《問題なし》

問題大あります。皆、返事が硬い。

「斑鳩から第二艦隊、比叡へ。そっちは順調?」

《待機位置に着いた。ええもうヘイトも経験値もガンガン稼ぎますとも》

「了解。活躍に期待するね」



ヤーナム島に残された市街や聖堂街がもつとも美しく見えるのが、今の夕暮れ時です。

泊地まであと一キロ、つまり敵の姿も人質たちの姿も目視できるここに至って、ようやく僕は思うのでした。ぱつと見では考える頭のなさそうな敵駆逐艦も、上位個体に従って無防備な艦娘を攻撃しないでいる知能はあるんだな、と。

僕らが近づくと、海上に無秩序に集まっていた深海棲艦たちはサーツと左右に分かれて、奥まで入って来いと言っているようだし

た。深海棲艦に道を空けられるのは、これが最初で最後の経験になるでしょう。僕らは拒否できないし、するつもりもありません。用事があるのは陸上にいる者らです。

あきつ丸と神風ちゃん達は、岸壁に横一列に並ばされてきました。翔鶴の攻撃隊の報告通り、膝をついて両手を頭の後ろに回しています。僕らを見つけた人質たちが期待と喜びの表情を見せたのは、ほんの一瞬のことでした。当たり前です。救出に来てくれたのだと思っただ部隊が、一切の武装をしていないのですから。ただ人質を無駄に増やしに來ただけなのか？ それともせめて人質を交換しに來たのか？ 何にせよ、失望はされたでしょう。

泊地の少ない建物のいくつから火が上がっていました。提督、あきつ丸の部屋がある木造二階建ての建物はほとんど崩れ落ちてしまっています。この泊地はまたほぼゼロからやり直した、と嘆かれるに違いありません。主に大和から。

僕は通信装置へ小声で喋りました。見れば誰でも分かることですが一応言っておきます。

「陸上の敵は偵察通り戦艦2、重巡1、空母2」

敵戦艦は夕級が二隻、重巡はネ級が一隻。人質たちに砲を向けています。空母はヲ級が二隻、人質たちの前、つまり地上の先頭に立っています。手旗信号を送ってきたのもこいつらで、僕らを迎える役なのでしょう。せっかくの顔があっても表情からは何も読み取れません。「作戦は予定通りやるよ。右の戦艦は僕がやる。真ん中、人質の奥の戦艦は球磨さん。左の重巡は霧島」

CCCに持ち込みたい僕らは可能な限り、一メートルでも一センチでも岸壁に近づく必要があります。敵がどこまで接近を許してくれるかが勝利の鍵です。

二百メートルまで近づくと、僕らに道を空けていた深海棲艦たちが背後を封鎖するように回り込んできました。問題ありません。僕らは前にしか進みませんから。

僕らは陣形を単縦陣から、僕を右側とした単横陣に変えて、ランニングぐらいの速度（約四ノット）で慎重に進みます。

空母ヲ級との距離百五十メートルまで近づきました。まだ止められません。

距離百メートル。全力で速度を上げれば何秒かかるでしょうか。

距離五十メートル。まだ瞬間的に詰められる距離ではありません。

距離二十五メートル。泳げない僕にとって苦々しい距離です。

距離十五メートル。あれ？ とつくにスリケン投擲の射程範囲では？

距離十メートル。……まさか、ここまでいけたらいいなと思っていた距離です。

更に五メートル進めたところで、やっと、空母ヲ級のうち右の一隻が手と口を動かしました。

「止マレ」

叫ばずとも普通に話ができる近さです。

このまま突撃してしまおうか一瞬悩みましたが、「全員、止まって」と指示を出しました。作戦にないことはできません。

二隻のヲ級は岸壁の上、僕らより一段高いところにいます。

僕は二隻を少し見上げながら尋ねます。

「言われた通り、ここまで来てあげたよ。装備も見ての通り全部捨てた。改めて聞く。そちらの目的はなに？」

「こちらが仕掛けない理由はもう、これを聞くためしかありません。

「この泊地の奪取？ 人質を集めて愉快な作戦でも考えてる？」

止マレ、と僕らを制止した方のヲ級がはじめて、読み取りやすい表情を作りました。眉をひそめたのです。

「……………」

そして、言いました。

「……才前タチノ目的ハ、何ダ？」

次の瞬間、そのヲ級の頭が、右側から『何かに撃たれて』爆ぜました。

「なっ——!?!」

ヲ級一隻が倒れた直後、再び右方向からの『砲撃』。もう一隻のヲ級も頭に強烈な一撃を食らいました。

僕が、いや敵も味方もほぼ全員が砲撃音のした方を向いた瞬間——
球磨さんだけが、叫びました。

「斑鳩！」

「っ！ 球磨さん、霧島、突撃！」

三人は一足目で五メートルの距離を詰め、二足目で岸壁に乗り上げました。

僕は青い炎を左目から、そして両手から燃え上がらせました。目標は混乱状態にある戦艦夕級。岸壁の舗装面に青い炎を引火させて引つ剥がしました。これで押し潰——そうとした直前、またしても右から飛んできた砲弾が夕級の頭にぶち当たりました。

同時に、人質たちの上を飛び越えた球磨さんのアサシンブレード二振りがもう一隻の夕級の首と胸を貫き、また距離を詰めた霧島の数え切れない拳が重巡ネ級に叩き込まれたのです。

僕は通信装置へ叫びました。

「比叡！ 陸は片付いた！ 攻撃お願い！」

《了解！》

「翔鶴たちもこっちに上がってきて！ 逃げるよ！」

ようやくと砲撃のあった方向を見ると、黒髪に黒い振袖、黒い腰帯、黒い袴、黒いロングブーツの——駆逐艦？ が海上の深海棲艦たちの方へ躍り出たところでした。



深海棲艦を一掃した頃には、もうすっかり夜でした。月昇る海も歩く艦娘にとって満天の星は見慣れたもので……夜のとばりに溶け込む敵影がないか水平線にばかり目を凝らしてしまうものですが、静穏を得たあとに見る星々は、見上げた空は、素直に綺麗だなど思うのでした。

僕ら陸戦隊と、比叡たち、あきつ丸と神風ちゃん達、そして謎の助っ人は、念の為海から離れておこうと、泊地から島の少し奥に進んだ先、ヤーナム市街に建っている旧診療所に集まりました。

「斑鳩。斑鳩。今気づいたクマ。この島、マジで妙に生暖かいクマ」
「でしよう。本格的な冬になるまでコタツいらすの島です」

「いや、でも、この空気はちよつと……クマあ……」

建物の中はだいぶ埃臭いですが、ここなら、人質になっていたせいで疲弊が著しいあきつ丸と神風ちゃん達が横になれるベッドがそろっています。明かりは十分なロウソクがありますし、不思議なことに人っ子一人いないヤーナム島では火種に困ることがありません。

天照隊からの増援はあと一時間以内に到着してくれるとのことですが、

《へーイ斑鳩。こちら増援部隊の旗艦、金剛デース。も少しだけ待っててネ。ところで比叡と霧島はちゃんと働いた？》

「大活躍でしたよ。むしろ僕が二人の働きっぷりを自慢したいまでありますね」

《ほほう？ 自慢話、楽しみネー》

天照隊鎮守府への帰還は明日にしました。休息が必要なあきつ丸と神風ちゃん達の泊地はしばらく使い物になりませんから、僕らの艦隊に一時避難してもらうことになりました。装備を捨ててしまった僕と球磨さん、霧島、瑞鶴、翔鶴、大鳳は夜間にこっそり鼠輸送のように帰るのがよいのでしようが——僕らにも休息が必要だと判断しました。疲れました。

明日、増援部隊を頼りにしつつ、大人数で帰りましょう。



さて。ではそろそろ話してもらわなければいけません。

「私ハ……ク、黒風（クロカゼ）。神風型の黒風」

そう名乗った謎の助っ人の子は、長い髪を右でまとめて縦ロールにしています。

「黒風？」「まあ……」「黒風、だつて？」神風ちゃん達は颯爽と現れた姉妹艦に……困惑しているようです。

神風ちゃんが一步前に出ました。

「本当にごめんなさい黒風。私、あなたのことを今まで知らなくて――」

「イヤ、気ニシナイデ。私ハ隠レ……隠サレテタ存在ダツタカラ。誰モ知ラナイノハ仕方ナイ」

「なら今からでも、あなたのことを教えて。神風型の何番艦なの？もしかして十番艦？」

「エツ？ ソレハ、ソノ……エツト………零（ゼロ）」

「……零番艦」

「……零番艦?!」

神風ちゃん、朝風ちゃん、春風ちゃん、松風ちゃん、旗風ちゃん、すごい食い付きです。それはそうでしょう。響きがカツコ良すぎます、ゼロ番艦。

「私よりお姉さんってこと!？」

『ぷろとたいぷ』ということでしょうか

「ああ、きつとそうなのでしよう」

「ねえ。全身真つ黒だけど、朝と夜、どっちが好き？」

「まあ待ちなよ皆。続きはベッドの上で話さないかい？」

「アノ、待ツテ。今コレダケハ聞カセテ」

黒風ちゃんはひとつ深呼吸をして、一步踏み出すように言いました。

「私ハ、皆ノ……『仲間』ニ、……ナレルノカナ」

「変なことを聞くのね」

そう言つて神風ちゃんは、黒風ちゃんを優しく抱きしめました。

「仲間――家族じゃない姉妹艦なんていないわ。これからよろしくね」

きつと、それは今まで黒風ちゃんにとつて、当然のことではなかったのでしょう。黒風ちゃんは強く抱きしめ返し、肩を震わせたのでした。



ヤーナムの夜明け。

ヤーナム島反撃作戦に関わった皆は、空腹に起こされたようなものでした。

市街から泊地に出て、燃えずに残っていた食料は、神風ちゃん達のあまり大きくない寮に残っていた煎餅などのお菓子や、大量に備蓄していたカップラーメンでした。朝から空きっ腹にラーメン、これはこれで乙なものです。

どうでもいいことですが、僕は春風ちゃんがカップラーメンを食べる姿が想像できませんでした。いやまあ、今も今、春風ちゃんがカップを持って麺をすすっているのを見ているわけですが。

僕は煎餅をかじりつつ、あきつ丸に話を聞きに行きました。

あきつ丸は一応、ヤーナム泊地の提督であつて、彼女の泊地がこんな有様になってしまつて……でもカップヌードルを腹におさめて、元気をあつさり取り戻した様子でした。

「やあ斑鳩殿。この泊地で食べる煎餅は美味でありましょう」

「で？ 昨日、どうして島の奥まで撤退せずに捕まっちゃつたの」

「おっと前口上もなく始まる聴取——泊地に火を放つた後は速やかに転進しようとしたのであります。が、島の奥から、待ち構えていたように敵巡洋艦が一隻現れ、行く手を阻まれてしまったのであります。自分がせめて軍刀さえ携えていればと、悔んでも悔みきれないでありますすなあ」

「その巡洋艦はどこに行つたの？ 僕らが倒した数に入つてないけど」

「それが不可解で、鬼姫級らしき個体に『肅清』されてしまったのであります」

「シユクセイ？ つて、独裁者が好きな排除のことだよな。どうして？ 何か粗相でもしたの、その巡洋艦が？」

「そういう風には見えなかつたのであります、その巡洋艦が包囲艦隊に合流するなり、鬼姫級は言葉も交わさずにズドン！ と巡洋艦の腹に穴を空けたのであります」

「……その鬼姫クラスっぽい個体、どんな見た目だった？」

これは人類側全員が共有しておくべき情報でしょう。

「頭の天辺から足の爪先まで、黒い装甲で固めていましたな。まるで西洋の騎士が鋼鉄のスカートを着いて、全身を黒く塗ったような姿であります。装備していた主砲は普通の深海棲艦らしくない、我々が使う工業製品っぽかったですであります。ああ、それと身長は駆逐艦並でありましたな」

「聞いたことない個体だなあ。それで、その鬼姫クラス一隻は僕らが駆けつけた時にはいなかったけど、どうなったの？ まさか神風ちゃん達で倒した、ではないよね」

「神風たちを捕らえてきた敵部隊を引き連れて、南の方の遠くへ行っってしまったきりであります。もしそのままここに留まっていたら我々にとつてさらなる不利だったのでありますが、敵の落ち度に助けられた、であります」

「んー……何なんだろう。ぜんぜん意図が読めない」

「自分も同感であります、我々の勝利に変わりはないのであります」
糖分が充実していない今、どれだけ考えても仕方がなさそうです。

「今考えなくとも、まあまあ。貴官らの鎮守府に行つて泡の出る麦茶などを一杯やれば何か見えてくるはずであります」

「泊地がこんなことになつても本当に、普通に前向きだね。いや、こういうところが美点なんだろうけど」

皆が朝食を済ませた頃、金剛さんが「へーい、みんなー！」と呼びかけました。

「そろそろ出発するヨー！ 十一時のティータイムまでには帰りたいから飛ばしていくヨー！ さっさと出撃準備を済ませるネー！」

装備を捨ててしまった僕には出撃準備も何もありません。

伸びくとストレッチをしていると、スマートフォンが鳴りました。大和からの電話でした。

「もしもし？」

《お疲れさま、斑鳩。作戦は成功したつて聞いたわ》

「まだ終わってないよ。母港に帰るまでが作戦で、ちようど今から

ヤーナム島を出るところ」

《あら、これは私としたことが失礼。ところでみんな無事?》

「うん。奇跡的に四人がちよつと被弾した程度で済んだよ。貴重な装備を大量にロストしちゃったのは痛いけど」

《装備は私にできる範囲で作り直しを援助するわよ。じゃあ軽巡洋艦の球磨という子も無事なのね》

「ん? ああうん、無傷だけど——そうだ大和の読み通りだったよ! 球磨さんがいてくれて本当に助かったんだ!」

《ふむふむ。結構結構。帰投したら詳しく聞かせて頂戴。それじゃあ気をつけて帰ってきてね》

「了解です」と通話を切りました。

……今の電話、何の必要があったのでしょうか?

ヤーナム島の黒い風 おわり

後日。

天照隊本隊(南鎮守府)から、慢性的な人手不足の分隊(北鎮守府)へ派遣された白露型駆逐艦・春雨は、一時的に滞在しているらしい『ヤーナム歌劇団』神風型駆逐艦たちへ料理を振る舞おうと思った。

得意料理、麻婆豆腐を。

聡明な読者諸氏であれば「いやそこは麻婆春雨だろう」と訝しむことだろう。古事記にもそう書かれている。しかし麻婆豆腐なのである。

白露型の一番艦がこう言ったせいであった。

「お、おいしい! 春雨が作った麻婆豆腐すつごいおいしい! 麻婆春雨はあんまり好きじゃあなかったけど、この麻婆豆腐はなんで!?! なんでこんなにおいしいの!?! ご飯何杯でもいけちゃう! 週一で食べたい! 麻婆春雨は月一でも嫌だったのに!」

姉を殴らない春雨はよくできた子である。

それはさておき、麻婆豆腐が出来上がった。食堂で待っている神風たちの喜ぶ顔を期待しつつ皿を運んだ。

テーブルでは赤・青・桃・緑・黄・黒の子たちが、すでに麻婆豆腐の香りを楽しんでいた。

——ン？ 黒？

春雨はその黒い子をよく見た。

「……………ンッ!?!」

その黒い子、黒風も春雨をよく見た。

「……………ンッ!?!」

世の中は広いようで狭いと、よく言ったものである。

第75話 天狗

「叢雲の意見を聞きたい。今年は皆に節分騒ぎを控えさせるべきだろうか」

あんた司令官でしょう好きにしなさいな、と言おうとしてやめた。「そういう風習の日だから」って疲労を無視して豆のドッジボールなんてやっていたら、節度をわきまえない子から順に魂をスウツと抜かれかねない。実際、私自身もそれくらいに疲労を抜けきれないでいる。豆まきが原因で死ぬのも過労死にカウントされるのかしらね？

「そうね。今年は豆は食べるだけにしといた方がいいかも。あと恵方巻きを食べる程度に」

「今年からはもう恵方巻きは販売されないのではないかと。去年、売店のお姉さんはかなりの量を廃棄する羽目になったとぼやいていた。珍しいミスだった」

「あー。私も恵方巻きより……今はエナジードリンクの方がつふうああく……失礼」

午前10時からあくびの我慢もできない秘書艦、叢雲よ。文句ある？



大規模……いえ、大々規模作戦『南方作戦』は、全作戦を成功し、敵深海主力部隊の撃滅にも成功した、と発表された。

疲れた。

やっと終わった。

泥沼化するかと思った。いや、泥沼に片足をつっこんでいた。

ソロモン海戦中、大和と武蔵が数年ぶりにコンビを組んだことがニュースになったけれど、「大和型戦艦二人の投入ですら決定打にならない」とネガティブなことを言う軍事評論家もいたし、実際に鉄底海峡に突っ込んだ幾つもの艦隊も「砲撃より雷撃が運良く致命的に当たってくれるよう祈るしかない」と意見をそろえた。もちろん、そん

なことは撃沈王自身が一番よく分かっている、最前線では大本営直属部隊が砲撃という名の防御に徹していた。

そう。「誰か」の魚雷が運良く致命的に、重要攻撃目標である防空巡棲姫に当たってくれさえすれば。

その「誰か」になったのが、うちの、天照大艦隊の、夕立だった。



確かに夕立は幸運を引き当てた。

敵主力部隊の旗艦だけを刈り取って、戦力的にまだまだ余裕があった（ように見えた）深海棲艦群を引かせた、その結果だけを見れば、重要攻撃目標だけをスマートに刈り取って勝ちを得た……とは、いやいや、ならないわね。こっちは大本営直属部隊も含む多くの艦隊がボツコボツにされたのだし。かつてないほど疲弊させられたし。

でも。あの子のために言っておかなくっちゃあならないのが、夕立がただのラッキーガールではないってことね。

夕立の攻撃のセンスは頭一つか二つ抜きん出ている。練度がずつと高い私よりも、ずっと効果的な攻撃ができる。ただ撃つて当てればヨシ！ の先、装甲を貫いて有効なダメージを与えられる。とても自分と同等の装備を使っているとは思えないほどに。

「どの艦隊の誰でもいいからアイツに魚雷を当てろ」と叫ばれてはいたけれど、その「誰でも」の中に入るには、やっぱり夕立ほどの攻撃のセンスが求められた。

だから作戦終了後、夕立のことをやたらラッキーガールだと持て囃した人たちは本質を見誤っているし、つられて勘違いした夕立が買った宝くじが当たるとは到底思えない。



午前中にやってしまおうと思っていた仕事が片付かなかったのはよくない。昼餉まであと何分……と時間を数えてばかりで、これじや

あただの怠け者だつての。

カツ丼でも食べてパワーをこうグイツとしようと思わふわ思いなから食堂までの廊下を歩いていると、そこで時雨がどうやら私を待っていた様子だった——あるいは、唐突に私の前に出現した。まあ、なんでもいい。

「叢雲、ちょっといいかい」

時雨は周囲をキョロキョロと見回して人の目を避けているようだった。ここで見える範囲には私と時雨しかない。

「どうかした？」

「それが……」と声を潜めて言った。「夕立が……天狗になってしまったんだ」

「天狗う？」

「うん、天狗。あれはどう見ても天狗だね」

「なくんですってえくくく」

夕立が驕つてもよかった時間は慰労会の時まで。大和型ですら防戦一方だった重要攻撃目標を撃破したことを誇りに思うのはさらなる飛躍の足しになるから推奨する。でも天狗になって鼻を高くするのはいただけない。まったく、誰よ「夕立には攻撃のセンスがある」とか言つて持ち上げたのは。「ぼーいぽいぽい」と笑つて他の駆逐艦を見下す夕立が、想像しようとする手順をすつ飛ばして私の頭の中を占拠した。

「ぼーいぽいぽい。叢雲なんかぼーいぽいぽい」

総旗艦を足蹴にして天狗笑いとは猫をも恐れぬ所業。おのれ夕立許すまじ。

「なにしてるの時雨、早く行くわよ。高くなつた鼻を元の高さから1cmマイナスマで縮めてやるわ！」

「夕立は寮の自室に閉じこもっているよ」
「すぐ行くから待つてなさいよ夕立い！」

あれ、夕立の部屋つてどこだっけ——……そうそう、ここだ。

「コーンコン。ノックしたわよ。入るわよ夕立」

「は、入っちゃダメ！」

構わず私は扉を開いて押し入った。

部屋の中には――顔を手で隠そうとしても隠しきれしていない、天狗になった夕立がいた。

いや、どちらかと言うと、夕立に似た天狗がいた。



天狗とは日本に古来から存在するフェアリーの一種で、赤く長い鼻を持ち、空を飛ぶという。

「ニンジャスレイヤー」「アトロシティ・イン・ネオサイタマシティ」

#2 より」



顔の真ん中から立派な赤いモノを生やすという不意打ちを受けた私は反射的にこうするしかなかった。

「ブっふおwww」

吹き出した。

赤いモノがあまりに立派だったから。

半べそをかいていた夕立天狗は、そりやあ笑われたら怒るわよね、背中に生やした大きな黒い翼を広げ、勢いよく羽ばたかせた。

「ザツケンナポイー！」

夕立天狗が起こした天狗風は私を部屋の入り口から吹き飛ばし、寮内の廊下と階段から押し流すように吹き飛ばし、駆逐艦寮の入り口から外へと吹き飛ばした。

寮の前で地べたにひっくり返った私を、時雨が困り顔で見下ろした。

「どうして怒らせるような真似をするかな、叢雲」

「……天狗になってる、ってちゃんと説明しない時雨が悪いでしょう」

「そう言ったじゃあないか」

「いや言ったけれどもよ。ミスリードを誘われたというか……え、あ

れ本当に何なの？ 夕立？ 天狗？ 夕立改二天狗？」

「なるほど、さらなる改装で天狗になった可能性もあるね。元の夕立にコンバート改装できるのかな」

「真に受ける話じゃあないのだけど」

「夕立のことはさておき」

アレを見ておいて、普通、さておける……？

「叢雲、君もどうやら考え物だ」

「はい？」

「夕立を増長という意味での天狗だと決めつけていたあたり、総旗艦という地位にあぐらをかいて——天狗になっているんじゃないかい？」

「な、なに馬鹿なことを……」

「でも。ほら、君の鼻は嘘をつけないようだ。もう鏡がなくても自分の視界に入っているだろう」

私は顔をおさえようと手を……ああ、でも鼻から棒が伸びたように……なんなのよこの棒のような、赤い、私の鼻は……！

「い、いやあつ！ 見ないで！」

「君が見せているのさ。天狗になった、自分の顔をね」

「や、やだっ！ こんな、助け……！」

「君自身が自分を天狗にしたんだ」

「て、天狗なんて、そんな、いやあ——！」



「——ひいやつ!？」

真正面の敵戦艦から直撃を食らったような飛び起き方をした。

見慣れた執務室。座り慣れた秘書机。

飛び起きた体勢のままコンマ5秒で状況判断。

……夢。

「はあ……」

どうりで、時雨がいきなり現れたり、寮に瞬間移動したり、天狗が

出たり天狗になったり、色々ありえないことがおきたのに疑問を持たないわけだ。

居眠りをやらかしたショックで顔を左手で覆うと、いつも通りの大ききの鼻が手に当たった。

「起きたか」と怒るでもなく言う司令官。

「私、いつから寝てた？」

「30分ほど前からだろうか」

壁掛け時計の針は11時8分を指している。夢の中では昼餉を食べようとしていたから時間が巻き戻ったような感覚に陥った。今の疲労度的にこの無駄骨感はやつとつらい。

「お、起こしなさいよ！……いや、ごめんなさい」

「隣の部屋では電もな、ソファで仮眠を取っているらしい」

「秘書艦やる意味ないじゃあないの」

「叢雲も昼の休憩は長めに取ったほうがよいのではないか」

「充分寝たから大丈夫」

「しかし、うなされていたが」

「……寝言、言ってた？」

「テングがどうか」



ヒトフタマルマルの時報任務を遂行した私は食堂に、ではなく売店の方に行った。

私の、まあ低くはない練度から導かれた未来予測によると、時雨と夕立が「少し早めの節分の準備」とか言って真っ赤な天狗の——鬼と言いい張れなくもない天狗のお面を被って私を驚かせようとしているらしい。さっきの夢はほぼ正夢でした、なんてありがちなオチを用意して食堂に向かう私を待ち構えている様子。

だから先手を打たせないために私も天狗のお面を買っておこうというわけね。天狗には天狗で対抗する。自分でも何を考えているのかよく分からないけれど、たぶん疲れているんだろうけれど、とにかく

く天狗のお面が必要だった。



売店のなにごすごいって、本当に欲しい時に売っているのよ、天狗のお面が。売店のお姉さんは私たちの夢の中まで市場調査の網を広げているんじゃないかと思うてる。

お面は、夢で見た夕立天狗にも負けない立派な赤いテカテカヌラヌラしたモノを生やしていらっしやる。需要があると見越してか値段もちよつと強気の3,500円。……まあ、モノが太くて硬そうで立派だし妥当な値段だと思うしかない。

天狗のお面と、ついでにお弁当とエナジードリンクをレジに持っていった。今日の店番は磯風だった。

「おお叢雲、今日は弁当を………、っ????」

天狗のお面を見るなり動転する磯風。

「こ、これを買う、のか?」

「ええ買うのよ。ほら立派に生えてるでしょうコレ」

「立派に生え……っ!」

磯風の声が裏返った。なんなの?

「っ、つまり叢雲は、こ、これ、を、使うつもり、なのか?」

「せっかく買うんだから、そりゃあ使うわよ」

「待て! 他の客もいるのだぞ、あまり大っぴらに言うな」

「あんたが聞いたんでしょくに」

「そうだが……やっぱり待て。どちらがどちらに使うつもりだ?」

「どちら、って何処と何処?」

「私と叢雲に決まっているだろう。他にいるものか」

「ええ……? 私が買うんだから私が被って使うに決まってるでしょ」

「ままま待ってくれ!」

磯風が顔を真っ赤にして私の買い物を妨害してくる。

「これほど大きく大きいモノを受け入れる準備は……私にはまだ……早

い」

「早い？ も何もないでしょう。じゃあ磯風が被って使う？」

「それほどまで『天狗プレイ』がしたいのか!? 少し落ち着け、私たちはもつと緩やかにやっていこうと決めたはずだ。叢雲にだってこれほど太くて大きいモノは——ま、まさか、ついに前の方だけでは物足りなくなってきたのか!? 後ろを使って連結を成すというのか!?

駄目だ駄目だ心の準備が——!」

磯風の言う『天狗プレイ』なる言葉について考えてみた。

太くて大きい立派なヌラヌラしたモノを生やしたお面を、私か磯風のどちらかが被ってどちらかに使い連結する。昼間はお互い仕事があるから、『天狗プレイ』は夜に私たちの部屋でやることになる。そういえば磯風とは最近、大規模作戦のおかげで疲れていたからご無沙汰だった。ああ、だから磯風は前の方だけじゃあ物足りなくなったのかと勘違いしたんだ。そんなことは全然ないのにね。かといってこのお面の立派なモノが使えるかという私たちはそのレベルには近づかないよう気をつけているし、磯風の言う通り『天狗プレイ』は私たちにはまだ早い。

売店にいた他のお客の皆が動きをピタリと止めていた。足音のひとつもない。ソナーを使うように耳をそばだてて私と磯風の会話を拾っていた。

私はプルプル震える手で天狗のお面を掴み、磯風の真っ赤な顔面めがけて投げつけた。

「お馬鹿!」

第76話 球磨争奪戦 ① アサシンフリート

あきつ丸がいくらアレであろうとヤーナム泊地を任される提督であるという事実は認められたものである。否定は決してされない。文句を言われる筋合いは、大いにあるのだが、「じゃあお前が代わりにヤーナム泊地を預かれ」という暴力的な反論があまりに強かった。だから、あきつ丸に勝てる人間はこれも暴論めいて存在しないのである。

それに、その言動は批難されるようなものだけではない。仮にも提督であるあきつ丸は、彼女なりにやる事はやっている。

現状維持ではなく改善を。

行動を起こせば起こすだけジリ貧だと言って放り投げてしまうような輩に深海棲艦の相手は務まらず、付き従う艦娘などまづいない。その点、あきつ丸には立派な『ヤーナム歌劇団』神風型駆逐艦たちという指揮下にある艦娘が確かにいる。ならばヤーナム泊地を任される提督であるという事実を認められ、否定は決してされず、文句を言われる筋合いは、いや冷静に考えて大いにあるのだが「じゃあお前が代わりに——」……と、あきつ丸周囲の人間は、この堂々巡りに付き合わされる羽目になるのだった。



最近は、ここ天照大艦隊・分隊、北鎮守府の者らがウロボロス丸の被害に遭っていた。

「泊地が使い物にならなくなって幾日。ほぼ総力戦だった第二次南方作戦のタイミングが我らにとってあまりに悪く泊地の再建が後回しにされた、と嘆くのは提督として三流。自分ほどにもなると、こうして天照隊分隊に居候中でありながらも、戦力の増強を着実に図っているのです。フフツ。揚陸艦にならず最初から提督の道を進んでいたifの自分を想像するのが恐ろしい……」

傘姫提督からも、斑鳩からも、猫吊さんからも聞かれていないのに

勝手にしゃべり始めるあきつ丸はもちろん、自慢話がしたいだけだった。

執務室内はエアコンで暖められており、特別チープな加湿器はそれなりに潤いをもたらしている。休憩用ソファの座り心地はヤーナム泊地のパイプ椅子より良好。ついでに聞く耳をもつ人間の模造品と半艦娘半深海棲艦と妖怪もいる。つまり自慢話がしたいあきつ丸にとって、ここはとても居心地のよい場所だった。

こういう時に相槌を打つのは秘書艦、半艦娘半深海棲艦、斑鳩の仕事である。

勤務中の雑談を推奨しているくせに面倒臭い受け答えは秘書艦任せなのが、人間の模造品、傘姫提督であり。

そもそも滅多に喋らないのが、妖怪、猫吊さんなのだ。

「あー……、うん」と律儀にキャッチボールに付き合うところが斑鳩の美点である。「ヤーナム歌劇団に加わった黒風ちゃんが即戦力レベルだったからね。艦装をちよつと整えてあげただけで性能が跳ね上がったもんね。よかったね」

「いつの話をしているのですか。南方作戦より以前などもはや遠い過去。自分は常に時代の最先端を生きているのであります」

「左様で。じゃあ何かもつと強い装備でも作った？」

「この鎮守府の工廠は、ほぼ24時間、常に潜水艦の誰かが使用していて近寄れない、と苦情を申し立てたいところでありますな。それに資材は、わずかでも本隊の方の作戦行動に回すから必要最低限しか使うなど言ったのは貴官でありましょう」

「そうだったね。儉約重点。今週も効率的にがんばろう」

スツとPCモニターに視線を戻した斑鳩的には自然な流れで仕事に戻ったつもりだった。

しかし、そうはさせないまだ話し足りない自慢し足りない、ウロボロス丸は構わず喋るのをやめない。まだまったくドヤアア……足りていない。

「聞けば驚くこと間違いありません。実は今日、新しい艦を1人迎える手筈になっているのでありますー！」

「……なんだって？」

「黒風が加わったとはいえ、自分の艦隊が保有する艦は神風型駆逐艦が6人。切り札中の切り札である自分、このあきつ丸も数に入れたとしても、あまりに戦力不足——いや単純に人手不足。ならば自然、艦を増やして戦力を増強すべしとなるのでありますなあ。そして、フツフツ、自分の一声は陸軍から海軍へとも呼び寄せてしまうのであります。これが『かりすま』と呼ばれる力でありましょうか」

「ちよつと待つてあきつ丸。今日、ここに艦娘を呼んだの？ 来るの？」

「そうであります。が、まだ来ないでありますな。少し遅れるとの連絡は受けたのであります」

「いきなり来られても困る、というか、鎮守府に入れさせられないよ」
「む。貴官ともあろう者が、元陸軍人だからと締め出すつもりでありますか。やれやれ、これだから海軍は——」

「いや単純に、関係者以外は立入禁止だから」

「ん？ 疑う余地のない関係者でありますか？」

「それを証明する書類を用意して1週間前までにちゃんと申請してくれたら、あの人」斑鳩は傘姫提督を指さした。「が許可を出すよ」

「……………ここは、このあきつ丸の顔に免じて、どうかひとつ」

「昔、『ジャマイカからやってきた金剛型1番艦』とかいう不審者に襲撃されて以来ねー、警備を厳しくしてるんだ。正直ちゃんと申請してくれてても、知らない人を入れるのはどうかなってくらい。というか今の時間まで少し遅れるの連絡ひとつしかないのなら、前にあきつ丸が間違えたのと同じように、天照隊の本隊、南鎮守府の方に行っちゃってるんじゃないの？」

「あ、あれは、そもそも天照大艦隊の公式ウェブサイトが悪いと思うであります。『本隊と分隊があります』程度の情報しか掲載していないのは明らかに不親切。あのウェブサイトを見れば誰だって、とにかく本隊の方に行けばいいのだな、と思うに違いありません」

「まあ、天照隊に用事があるからって、この分隊に来られても実際困るし」

ここまで、あきつ丸の戦力増強の話を困り顔で聞いて却下しようとしている斑鳩であるが、ここ天照隊分隊の人手不足も大概である。空母斑鳩の他には5人の潜水艦しかおらず、不足は本隊からの艦娘派遣で補っている。所属艦娘全員の練度が一騎当千が如く極めて高いので充分だと錯覚しがちだが、艦隊運用は練度のみで頼ったゴリ押しが通用するものではない。どうあれ艦隊の人員不足の解消に着手しているあきつ丸の方が、本隊に頼り切ることに慣れてしまった傘姫提督や斑鳩よりマシ、と嘲笑できることに気付いているのは猫吊さんだけであった。

猫吊さんは仕事をしながらも斑鳩とあきつ丸の会話を耳でしっかりと拾っている。しかしやはり、何も言わない。嘲笑もしない。余計なこととも言ったほうがいいことも言わない。猫吊るしとはそういう妖怪なのである。

斑鳩は、新たに来るという元陸軍人を一応心配しつつ話を続けた。「そのお仲間さんには言ったの？ 本隊の方でなく分隊に来るように、って」

「言ったはず……いや言ったであります。間違いなく」

「電話してみたら？ 正門の警備からも本隊からも連絡がないし、ただ単に道に迷ってるだけかも」

「そうでありますな。ではちよつと失礼」とあきつ丸はソファから立ち上がった。「傘姫提督殿。『神州丸』は練度が初上限に到達している極めて優秀な艦であります。どうか本日の受け入れを前向きにご検討頂きたい」

あきつ丸はそう言い残して執務室を出ていった。それを見届けてから斑鳩は言った。

「ご検討しろだつてよ、どうする提督？ 身分証確認と持物検査で正門くらいは跨がせてあげる？ ヤーナム泊地の戦力は後々のために1日でも早く、1人でも多く補強したほうがいいのは間違っていないと思うけど。神州丸さんがどんな艦かはさせておき」

「やだ。怖い」

傘姫提督、フルネームで一ノ傘姫乃という者は、人間の模造品とは

いえ立派な大人である。その立派な大人が「やだ。怖い」と小学生並みの感想を吐く様はあまりに、せめて安全のためには例外を作らないなどの建前を……いや悲しいかな、秘書艦斑鳩は既に傘姫の小並感に順応してしまっていた。

「じゃあイムヤ達に監視にあたってもらおう。最近、振動魚雷の研究でなんかブレイクスルーを見つけたとか言ってたし、元陸軍人さんが、万が一、脱法対艦娘実験のチャンスを提供してくれるかもしれないなら喜んで監視してくれるよ。たぶん」

「ふうん。その、振動魚雷って、陸の上でも、使える、ものなの？」

「今更それ聞く？ トルピードランチャー担ぐ潜水艦にだよ、僕らの常識なんて通用しないじゃない」

「ふうん。まあ、それなら」

「でも、なーんか引つかかるんだよね。黒風ちゃんみたいに、姉妹艦がいるから、相当の理由を持っていてヤーナム泊地の仲間になりたがる人がそうそういる？ いや普通じゃない。きな臭い。……こういう時に球磨さんがいてくれたらなあ」



——1時間前

彼女は天照大艦隊の本隊がある南鎮守府の中にいた。

彼女は入場許可証をネックストラップで下げていた。

しかし、彼女は誰からも何の許可も得ていなかった。

だからだろうか。彼女は入場許可証を持っているにもかかわらず、つい反射的に建物の影に隠れてしまった。その表情もまたフードの下に隠されている。

「あれは——撃沈王、大和？」

彼女が見る先ではその姿を知らぬ者などいない戦艦大和が、当たり前前に堂々と、しかも案内役と思しき駆逐艦らしき少女2人を付けて歩いていた。

「何故ここに？ まさかあの不確かに過ぎる噂が本当だと……いや考

えすぎだ。大和が天照大艦隊と深い交流を持っているのは隠された話でもない。今日ここに来ているのはただの偶然だろう。まさか、仮に噂が正しかったとしても球磨を確保しに来たタイミングがぶつかるなど——」

《独り言が多いな神州丸》

彼女の右耳の通信装置から届いたその声は、成年以上だがまだ若い男と聞き取れるものだった。どこか嫌味つたらしい印象を与える声である。また、特別その存在を覚えておく必要がない作中のモブキャラクターっぽい声でもあった。

《僕の助けが必要なら早めに言ってくれよ。1秒を争う状況になってから頼られても困る》

「貴様は、今日この鎮守府に大和が来ることを知っていたか」

《いや？ そんな報告は受けていないな。しかしまあ、君がブツブツ言っていた通りだろう。世に名高い撃沈王様が君と同じく艦娘を拉致しに来たとは、少し想像し難い》

「拉致ではない。確保だ」

《どちらでもいいから早く済ませてくれよ。僕のドローンのバッテリーは長く持たないし、君のアリバイ偽装にも時間制限がある》

「言われなくても分かっている。貴様は空からの偵察に集中しろ」

大和たちが過ぎ去ったのを確認してから、彼女——神州丸は建物の影からするりと抜け出した。

つづく可能性、5割くらい

第77話 球磨争奪戦 ② カレンダーーズ

睦月型駆逐艦——通称カレンダーーズに新たに与えられた任務は、遠征でも演習でもなく、全員が自転車に乗れるようになることだった。

「だ、誰か他に……卯月以外の誰か……」

「なんでうーちゃんを信じないっぴょん!? 離さないぴょん! 絶対に離さないぴょん!」

「怒りたく、ないから……。卯月を本気で殴って『やっぱり弥生は怒ってる』って、言われたく、ないから……」

「本気で殴って『怒ってない』は無理があるぴょん! うーちゃんは弥生にケガしてほしくないぴょん……だから……」

「卯月……」

「だから1秒か2秒くらいしか離さないから弥生はただ安全に驚くだけぽほオオオ!? ……お、お腹……は……」

弥生はピカピカの自転車を放棄してプンスカと察へ戻ってしまった。これで自転車練習任務から去ったのは3人目——腹を押さえてうずくまる卯月を含むと4人が脱落してしまった。

1人目の脱落者は菊月だった。普通に転んで手足を擦り剥いて痛くて、涙を浮かべたのだった。

「じ、自転車など別に……グスツ……乗れずとも……」

半ベその菊月に水無月が付き添っていった、ということが先程あった。

ほぼ使われることなく残された4台の自転車が虚しさを醸し出す。そしてそれ以上に虚しいのが、これからどうしたものか分からないまま残された8人と、1人呼吸で精一杯の卯月だった。

卯月と菊月は、特殊なカーボンでできた制服を着ていたら結果は多少違ったのだろうが、今はカレンダーーズ全員が普通の生地のできたジャージ姿である。だから転べば普通に怪我をする。ちよつと血が出る。傷はジンジンと痛むし水で洗浄しなければならぬ。

言うまでもなく。砲弾や魚雷などの脅威に日々曝されて尚当然のように明日を生きる艦娘といえども、特殊なカーボンに守られていな

ければこんなものである。それは菊月であつても撃沈王であつても変わらない。そこに差があるとすれば、特殊なカーボン無しで怪我をした時にどれだけ我慢／瘦せ我慢ができるかどうか程度である。

(時には水着や浴衣といった戦をナメているとしか思えない姿で出撃する艦娘も度々記録されて誤解を招いているが、心配は不要、あれら水着などの生地も特殊なカーボン100%である。露出度が過度に高かったとしても、特殊なカーボンだから制服を正しく着用しているのと変わらない。つまりは戦闘に何の問題もない、いいね?)

誰だつて怪我はしたくない。ましてやカレンダーズの誰かが自転車を求めたわけでもないのに、頑張ることに何の意味があるのか分からないまま課された練習任務で怪我をするなど、彼女らが理不尽と思つて当然だつた。体力作りのためのランニングで足を挫いて泣くほうがまだ納得できる、とまで言えた。

「あのさー」と切り出したのは望月だつた。「やっぱ自転車つて危なくない? この安全な鎮守府の中で転んだだけでも血が出るわけだし、外になんて出ていったら……車とかいっぱい走つてるしさー。というか、なんでわざわざ命令されてまで乗らないといけないの、自転車?」



そもそもの発端は、竹櫛提督と、カレンダーズの中で唯一の改二改造艦かつ働きの睦月との、何気無い会話だつた。

「ご苦労である。今日のカレンダーズの仕事は——うむ、少し早いがこれで終わりであるな」

「よすよす。じゃあ提督、睦月たちは今からお外にお出掛けしてもいいですか。駅の近くに、行つてみたいにやーつてみんなで言つてたお店があるんですよ。タピオカブームに乗り遅れた新しいお店ですよ、それからお肉デザート食べ放題の焼肉屋さんでしょ」

「外出は構わんが、肉と一緒に酒を飲むのならくれぐれも注意するよ。自転車であつても飲酒運転は厳禁である。酔つて判断力が低

下した、は言い訳にならんぞ」

「それなら全然、カレンダーズには関係にやーいのだ」

「ぬう。よいか睦月。そのように他人事だとバイアスがかかっている状態が最も危険なのだぞ。日々の行動とは選択の連続であり、数多の選択の中に油断という因子がまるで——」

「バスで行くから大丈夫ですって。提督は心配性だにや〜」

「今回はそれでよいだろう。しかしだな」

「それに睦月たちカレンダーズは、誰も自転車に乗れないから絶対に関係無いのだ！ えっへん！」

「……なに？」

竹櫛の、外出許可を出そうとしていた手が止まった。

「乗れないのか？ 自転車に？」

「乗れないけど？ 自転車に」

「その『乗れない』とは、自転車を持っていない、という意味か？」

「んーん」と睦月は頭を振った。「普通に、乗り方が分かんないだけだよ」

「普通ではないだろう。普通は乗れるだろう」

「そー言われましてもおー。泳げる人もいれば泳げない人だっているのと同じだよ」

「いいや違う。得手不得手好き嫌いに関係無く、自転車には乗れなければならぬ。私のこの発言からサイクルレイシストだと批難が上がるかもしれないが考えを改めることは絶対がない」

竹櫛は大学生だった頃に研究室の同期と同じ話をしたことを思い出していた。自転車を貸そうかと言ったら、その同期の男に「乗れないから」と断られた過去である。

お前、フアツシヨン雑誌を読み漁りブランド物の服や財布やらでキメようとする男が、まさか自転車に乗れないなど冗談だろうと外に連れ出し自転車を差し出すと——自転車が跨がる以前に、ハンドルを持って支えるという発想すらなく前輪がグリンツとなって自転車を倒してしまっただ。その後の、まるで新車のバイクを倒してしまっただかのような反応もおかしかった。1万幾らのママチャリが倒れた

から何だというのか。オメーそんなアンバランスな認識でよく今までやってこれたな、ハンドルすら握れないヤツに触らせるバイクなんてねーよ、研究室でやってたドヤ顔バイク談義は何だったんだマジで？ まかり間違つて免許を取れたとしても奥多摩の景観をオメーのひしゃげたバイクで汚すんじゃないやあねえ。

という、竹櫛がまだ社会を知らない頃的一幕だった。ただ同じ研究室にただだけの同期の男だったから話はこれでお終いになった。

しかし睦月は違う。天照大艦隊に所属する艦娘たちは違う。

提督とは決して艦娘たちの親ではない。縁をギリギリまで近づける妥協点には『カツコカリ』と必ず付く。四八の（仮）関係を結んだ提督が突然、艦隊指揮をゲームに例えてクソだと主張し出す現象は2007個もの根拠が明示されており怪談の域を超えた常識である。互いの立場を超えることはまったく推奨されない。『叢雲の薬指』とかいう大タイムトルは一旦棚上げされた。

それでも竹櫛は、今この時だけ仕事に私情を差し挟む自分を許した。

天照大艦隊の艦娘たちを、睦月を、愛しい娘のように見よう。

カタチある愛情を与えよう。

確実にカタチとして残る、技術を身に着けさせよう。

自分の娘に自転車の乗り方を覚えさせるのは保護者の義務である！

「睦月、今日のところはいい。外で好きなものを食べてきなさい。ほら、ここに名前と外出理由を書くんだ」

「あ、はい。どうしたのかにや提督は？　なんだから——とつぜん眼差しが優しくなったような？」

「気のせいだ」

睦月が外出許可願を書いている間、竹櫛は隣室の副提督に内線電話をかけた。

「竹櫛だ。緊急に話し合うべき問題ができた。

——ああ今すぐにだ。ところで一ノ傘、念の為に確認しておくが、お前は当然自転車に乗れる大人であるな？

——ふざけてなどいない。問題はシリアスだ」

聞き取り調査の結果、竹櫛の想像以上に——今まで気付かなかっただけなのだが——天照大艦隊の艦娘たちは自転車に乗れなかった。カレンダーズのみならず小型艦から大型艦まで全体の半数以上が「乗れない。乗る必要もない」と回答した。

戦艦たちの回答を回収して持ってきた今月の戦艦寮長、山城も「自転車で乗る」という具体を天命で紛失したらしく否定的だった。

「え……だって、1回使う度にタイヤがパンクする欠陥乗り物なんて、誰が好き好んで乗りたいと思うんです？」

「山城。いつか戦争が終わり鎮守府を離れることになっても強く生きるのだぞ。だが運転免許だけは取ろうなどと絶対に考えるな」

「は？　なんで阿呆提督が扶桑姉さまとのドライブに口出しするの？」

「いくら入念に保険を掛けてもな、1つしかない命は帰ってこないのだ」

そこで竹櫛は試験的に、まずカレンダーズに自転車練習任務を与えた。自転車の数をそろえるのも、駆逐艦たちの間で使い回せることを考慮すれば痛い出費ではない。

練習に集中できるように、これまでカレンダーズをメインに任せていた遠征などの任務も一時的に編成を見直した。

燃費に優れるカレンダーズ不在という艦隊能力に空いた穴は決して小さくない。それでも竹櫛は愛しい娘たちにカタチある愛情を与えることを優先した。



……のだが、『親の心子知らず』ということわざがある。

「というか、なんでわざわざ命令されてまで乗らないといけないの、自転車？」

望月がこう言ったとおり、竹櫛の愛情はカレンダーズにまったく届いていなかった。

三日月「……私、分かっちゃったかも」

臯月「なにが？」

三日月「カレンダーズが自転車に乗れるようになったら……陸上にもおつかい任務に行けちゃう……」

長月「ま、まさか。一ノ傘副司令官なら考えそうなことだが、命令したのは竹櫛司令官の方だし……」

文月「でも、あたし聞いたことあるよ。ピザは配達よりお持ち帰りのほうがおトクだから、って」

(誰にでも間違いはある。これを言ったのは分隊の傘姫提督だ)

如月「司令官のピザのために、菊月ちゃんが怪我をしたってことなの？」

卯月「うう……ちゃんも……おな、か……」

睦月「そんなの、ちよつと許せない」

臯月「決まりだね」

睦月「うん。みんな行くよ。提督をお説教しに」

自転車(と卯月)を置いて、いざ行かん第一執務室へとカレンダーズが歩き出したその時だった。

「貴様た……コホン、君たちは駆逐艦だな。訓練中だったか？ 邪魔をしてすまないがひとつ聞きたいことがある」



睦月たちが知らない艦娘だった。入場許可証を首から下げているということは余所の艦隊か何かからの客人らしい。

客人が来ることは特に珍しいことでもない。鎮守府の友軍対応機能に今更説明など不要だろう。ただひとつ、特殊なカーボン製の制服にフードが付いていて、それを雨天でもないのに被っているのは珍しかった。羨ましかった。

ずるい。かわいい。そのかわいいデザインはずるい。少しでも映画を見る男子には必ず刺さる。睦月の改二の上着にもフードは付いているが、被ったら雨合羽か人目を避ける家出少女にしか見えなく

なってしまうのは違う。中途半端な家出少女になるくらいならば
いつそ暗黒面にまで堕ちた方がエモい。もつと、こう……そう、まさ
に客人のもののような被つても良しのかわいいのがよかった。

提督にガツンと言つてやろうと意気込んでいた睦月は、表情をコ
ロツと無害なものに変えた。

「はい、なんででしょう」

他のカレンダーズの面々は睦月の後ろから、この人は軽巡洋艦？

重巡洋艦？ ついジロジロと見てしまう。1人練度が高い——とい
うより仕事の腕をバリバリ磨いてきた睦月とはこういつたところで
差が出る。

「ワタクシは強襲艦、ゴッドランドだ」

「睦月です。変わったお名前ですけど……」

「よくつつこまれるが見た目通り日本の本の艦だ。色々あつてな」

お互い、一応は艦娘らしくラフに敬礼を交わそうとして——ほんの
一瞬、ゴッドランドが睦月の仕草を観察するように眼を光らせて—
—。

——その後のさらに一瞬、睦月とゴッドランドが右手を上げ切るよ
り早く、長月が割り込んだ。両手を胸の前で合わせ、上体を45度倒
した。古事記の解説図として描かれても恥ずかしくない『オジギ』だ。

「ドーモはじめまして、ゴッドランドIIサン。長月です」

ゴッドランドはまったく反応できず、中途半端な姿勢で固まってし
まった。

「こ、こら長月ちゃん。お客さんが驚いちゃうよ。失礼しましたゴッ
ドランドさん」

「……あ、ああ。大丈夫だ。気にしていない。よろしく長月」

「……よろしく」とだけ言つて長月は睦月の後ろに下がった。

「ボクは臯月だよ！」

「あたし文月」

結局この場にいる全員が「う……うーちゃ……びよん」挨拶をして
から、睦月が聞き直した。

「ところで、お聞きしたいことつてなんででしょう」

「艦を探しているんだ。軽巡洋艦の球磨という艦はいるか」

「球磨ちゃんなら今日は——」

「『ちゃん』?」

「意外に優秀な球磨ちゃん、って、よく言われますから」

「成る程、違くない。ワタクシも第二次南方作戦で世話になった球磨に改めて礼を言いたいんだ」

「……………そうだったんですか!」

睦月はニコツと微笑んで両手を後ろで組んだ。

「でもすみません。球磨ちゃんなら今朝から遠くの海域に出撃しちゃったはずです」

睦月が後ろで組んだ手は『待て』を示していた。

「そうか……………ふむ、タイミングが悪かったな。帰投予定はいつか、までは聞かれても困らせてしまうか」

「ごめんなさい」

「いや、君たちの邪魔をしたのはワタクシだ。協力に感謝する。この艦隊には他にも用事があるし、そちらを回るとしよう。ではワタクシは行く。皆、またの機会に」

「はい。またお会いしましょう」



睦月たちから姿を見られないところまで移動した神州丸は、他の誰にも見られていないことを確認して建物を作る死角に入った。

《君は2つの失態をしでかしたぞ、神州丸》

右耳の通信装置の向こうにいる男からは、開口一番の駄目出し。

神州丸は、2つあるらしい失態の1つについては既に考え終えていて、さして問題無いだろうと結論付けている。

「一応、再確認する。球磨が今この鎮守府の中にいるのは間違い無いんだな?」

《今日の球磨のスケジュールに海に出る予定がないのは調べが付いているし、もしも鎮守府から外に出る姿が確認されていたら? 僕は無

駄が嫌いなんだ。とつくにプランBに切り替えている」

「ああ本艦が悪かった。あんな小童に警戒されて嘘の情報を握らされた。反省はこれでいいか？」

《警戒された原因は何だったんだ》

「恐らく球磨に関するこちらの認識だろうが、ならば今後は球磨について余計な会話を避ければいいだけだ。再びあの駆逐艦たちに出会す場面があっても『勘違いがあった』とでも言っておけば問題ないだろう。まあ、その場面が訪れる前に球磨を確保してここを出ているがな」

《現場対応は君の仕事だ。任せるとも》

「で？ 早く言え、もう1つの失態とやらは？ 下らない揚げ足取りだったらアサシンブレードの錆にするぞ」

《君とあの少女たちのリーダー格の子が敬礼していた時、そこに割って入って来た子がいただろう。あの顔をどこかで見た覚えがあつてデータベースを漁ったら——何が出て来たと思う？》

「さつさと言えと言っている」

《『ハングド・キャット』だ》

「なに？」

《あの子はハングド・キャットで働いたことがある。それも1度や2度ではない》

「……………だとしても、何か問題あるか？ ハングド・キャットは大和型2番艦がマスターで、艦娘だけをアルバイトとして雇い、撃沈王が頻繁に足を運ぶ、一風変わってはいるがそれだけの猫カフェだという結論なのだろう」

《君はレポートを都合のいい部分しか読まない人間か？ あの猫カフェはいま君が言ったこと以上の情報が何一つ手に入らないんだ。自分たちを敢えて警戒させて、近寄るなど言わんばかりにね》

「調査チームがハリボテの艦艇をどう沈めるかで悩んでいるのなら、この任務が終わった後でひとつ手本を見せてやろう」

《君からはお気持ちだけで充分さ。まあ、ハングド・キャットについては今は横に置いておくとして》

「貴様から言っておいてか？」

《ちようど君の近くを、間の抜けた顔をした軽巡クラス2人組が歩いている。跡をつければ他の軽巡クラス、あわよくば球磨の近くに案内してもらえるんじゃないか》

「はあ……了解だ。尾行に移る」



種を明かすほどのことでもない、簡単な話である。

神州丸たちは、球磨を高評価するあまり素人にもできる調査を怠った。大規模作戦での球磨の活躍を勝手に想像し、作戦後も変わりなく五体満足でいることだけを確認したら、きつと彼女は獅子奮迅——いや熊奮迅の活躍をしたに違いないと自分たちの想像を補強した。

だが実際のところ。

第二次南方作戦時、球磨は前段作戦の開始と同時に風邪をこじらせてずっと布団の中にいた。後段作戦開始ごろになつてようやく症状は治まったものの、病み上がりの艦娘に任せられるのは鎮守府の近海・航路の草むしり程度である。

南方作戦に深く関与する天照大艦隊を、球磨は日常の任務で後方から支えた。——つまり作戦に直接は関わっていないし、ゴツドランドから礼を言われるほどの何かをした事など有り得ない。「ちよつと電話してくる」と長月は皆から離れた。

嘘を見抜いて嘘で返した睦月を、底の見えない暗い不安が襲った。寒気が襲った。怖気が襲った。

こんな『駆け引き』をしたのは初めてだった。叢雲や雷電姉妹のような熟練艦が嫌でも通ってきた道に、この少女は今、初めて足を踏み入れた。

「睦月ちゃん？」

「如月ちゃん……。どうしよう、私、あの人を騙せなくて、騙された振りでお返事されて……。球磨ちゃんが……。！」

「大丈夫よ睦月ちゃん。みんなここにいる。カレンダーはいつもみ

んな一緒だから。菊月ちゃんと水無月ちゃんと弥生ちゃんと長月ちゃんはいないけれど、『心は繋がってる』とかキングダムハーツみたいなことを適当に言っておけば何とかなるから。さあ、お話を聞かせて」

「うん、ありがとう如月ちゃん……！ みんな、実はかくかくしかじかで」

臯月「言われてみれば……あの人、雰囲気は球磨ちゃんに似てたよね。悪い意味で」

卯月「うーちゃん復活びよん！」

睦月「ゴッドランドっていうお名前も怪しいよ。金剛さんの英国設定くらい怪しい」

三日月「これ言っているのいいのかな？ 球磨ちゃんが狙われるのって……逆に安心しない？」

如月「たし」

望月「かに」

文月「返り討ちだもんね、ふつゝに」

睦月「でも、もしゴッドランドさんが球磨ちゃんより強かったら……」

卯月「カレンダーズじゃあどうしようもないっぴよん」

臯月「11人がかりで球磨ちゃん1人に負けたんだよ、ボクラ」

如月「ああ、あのトレーニング体験の時ね」

※第40話【わらしべ任務(中)】でキレた球磨が「長月も含めたカレンダーズ全員、トレーニングに参加したことがあったが？ すぐに飽きて十一本のゴムナイフが無駄になったが？」と言った事である。11対1で負ければ誰だってやる気を失って当然である。

望月「ナイフが本物だったら球磨ちゃん無傷であたしら全員死んだもんね」

三日月「いーえ！ あの時のもっち、何もしなかったでしょ！」

望月「何かはしたかったよ、でもできなかったんだよ！ 一番最初に狙われて！」

睦月「カレンダーズがあと100人くらいいたらにやあ」

皐月「追加した100人分の名前、どうするのさ。お月さまは1個しかないよ」

卯月「世界には175姉妹がいるぴよん。名前くらいなんとかなるぴよん」

如月「さすがに無理だと思うわあ」

睦月「じゃあ吹雪型とか他みんなを名誉カレンダースにして……何するんだっけ？」

望月「おい言い出しっぺ」

文月「あゝつ、いいこと思いついたゝ！」

皐月「100人分の名前の心当たり？」

三日月「それはもういいから」

文月「あつち見て。ほら、暇そうな戦艦の人がいるよ」

睦月「いるにやー」

卯月「いるぴよん」

如月「いるかないないかで言えば、いるわね」

皐月「確かにいるね。それから？」

文月「？ 戦艦の人だから、強いよ？」

望月「あれ？ 概念と概念のマウント争いとか、そっち方向の話？」

睦月「うん。睦月たちよりはもちろん強いと思う。腕相撲とかなら」

如月「でも練度は？ 睦月ちゃんの何分の一？」

一同「うん……」



「天照隊所属、長月だ。いま話せるか？」

——あ、そ、そうかすまん。

——うん、頼む。待っている」

……

……

……

「もしもし。悪いな忙しい時に。

——え、今日一人もいないのか、バイト!? 言ってくれよ、私は今日暇だったのに。

——言った?

——あ、本当に悪い、見てなかった。でも丁度よかった。この電話が、今からハングド・キャットに行ってもいいかって話なんだ。私の艦隊に、洞観者でもないのに超能力めいた何かを使える軽巡がいるって

——そうそう球磨。もしかしたら炎は持たないがダメコンは発動しない、みたいな中途半端で悪いところ取りの存在かもって相談したよな。その球磨を今からハングド・キャットに連れて行くから見てもらいたいんだ。私もバイトに入れるし小遣い稼……いやなんでも。とにかく丁度いいな。

——それが実はさつき、とんでもなく怪しい奴が鎮守府の中にまで、球磨を探しに来たんだ。ゴツドランドって名前でフード被ってる奴なんだが、武蔵はそういう奴に心当たりあるか?

——いや見た感じ海外艦ではない。あと多分そいつの仲間が飛ばしてるドローンが離れたところから偵察してた。一応アイサツしてみたが反応はなかったから大した脅威ではないはずだが、少なくともよからぬことをしようとしているのは多分まちが

——あー。

……うん。その通りだ。すまない。ハッキリ感じたことを言うのだな、ゴツドランドは球磨を殺しに来たか、拉致しに来たか、それくらいのことを実行するつもりでこの鎮守府に入ってきてる。もう調べたり様子見する段階は終わってて、あとはやるのみって眼をした。1度だけ戦ったことある深海棲艦のレ級より闇が深い眼だった。だから頼む。ハングド・キャットで武蔵と猫たちに見てもらって、ついでにしばらく匿まえないか?

——いやでもほら、何れにせよ、まず武蔵に話さないと始まらないし

——あー、誰だっけ目利きが得意なの? もうそれか、ネオサイタ

マから陛下を呼んだほうが手っ取り早

——まあそうだな、都合よく来てはくれないよな。だから今日アルバイトが1人もいないんだし。でもせめてゴツドランドをなんとかするまで

——え？ そりゃあ……殴って分からせるとか？

——いま面倒臭くなつて言っただろ。でも言ったからには頼らせてもらう。とにかく私は球磨を連れてそっちに行くぞ。

——さあ？ まあ、皿洗いくらいは最低できるんじゃないか？」

第78話 球磨争奪戦 ③ 撃沈王の勧誘話

今回は前話【球磨争奪戦 ② カレンダーズ】と同時刻の出来事である。

いわゆる「一方その頃」というやつである。

……が、しかし、信じ難いことに、第49話【撃沈王の世間話】（2018/04/19投稿）から続く話でもある。

2年。

2年もの空白。

恐らく大和も、竹櫛も、誰も覚えていないだろう。

作者ですら覚えていなかったのだから。



大和型戦艦1番艦『撃沈王』大和とは、あまねく知られる切り札、最初にして最終の決戦艦である。

最初にして——彼女がいなければ脅威度を計れない。作戦すら立てられない。

最終の——強力な敵主力を相手にする最終段階で彼女を温存するほどの愚はない。

彼女が1撃目を放つのにかける計算の長さには賛否があった。「あなたにとって作戦よりも狙撃距離の世界記録の方が大事なのか」と。時には、せつかくの超々長射程も敵艦隊に接近の時間を与えるだけだと友軍から批判されもした。……この点は大和が悪い。友軍への説明が足りない。

「まず私が敵の旗艦を仕留めます。それから皆さんで——」

艦隊決戦では最初に敵旗艦を沈めておけば有利でしょう、と教科書以下の理想論を前提として戦術を組み立てる大和に、幻滅に近い感情を持ってしまう者も少なくなかった。なぜ期待してしまったのか、所詮ただの大本営直属の箱入り娘だった、と。

賛否があった。

批判されもした。

幻滅に近い感情を持つてしまう者も少なくなかった。

所詮ただの大本営直属の箱入り娘だった。

すべて過去形である。

今となつては――。

片方間違えたソックスがリスペクトされるわ（寝てなくて素で間違えた姿が注目されてしまった）、

勝手にライバル認定されて1対1の演習を迫られるわ（スケジュールは安易に組めないが少なくとも十数ヶ月待ち）、

拒否権のない大和型グズ展開にゴーサインを出させられるわで（最近、自分は炎上しなかったことがラッキーだったと思っている）、

結局、大和がため息をつく頻度は昔も今もあまり変わらなかった。

だが、今のため息は昔のものより随分と軽い。



ライトネイビーの地味なジャケットとパンツ姿の大和は、天津風と島風に案内され、通された部屋は応接室。

応接室にはこの鎮守府内で2番目か3番目くらいに良い椅子が使われている。どうでもいいが1番良い椅子は比叡のゲーミングチェアである。

応接室には先に男が1人、待っていた。

「できれば、次からは2日か3日前くらいには連絡が欲しい」

竹櫛は挨拶を省いた。

大和は一応、天照大艦隊の分隊に自分の席を作っている。だから身内が身内を訪ねるような気軽さで――昨晚、大和は竹櫛にメールを送った。何なら事前連絡なしに竹櫛のいる第一執務室を訪問しても、大和的にはそれはそれでよかった。

大和は竹櫛の苦言を無料の笑顔で流した。

竹櫛は、とりあえず大和に座るよう手で促し、天津風と島風に言った。

「天津風、島風。ご苦勞である」

「はい」「じゃーねー大和」

駆逐艦2人は仕事から開放された。普段の2人は客人の前ではビシツとしている。オッサン相手に愛嬌を振りまくことがかえって仇になることを経験的に理解しているからである。

応接室で向かい合って座った竹櫛と大和、どちらの方が偉いのかは言うまでもない。応接室のそこかしこに、天照大艦隊がいかに上手くやってきたかを雄弁に語る品々が飾られている。

茶のひとつも出ないことに大和は気にせず気付きもせず、やはり今更、天照隊の提督相手に堅苦しい挨拶も不要とばかりに、彼女は開口一番、訊きたいことを訊いた。

「球磨型軽巡洋艦1番艦、球磨には話をしていただけましたか?」

「既に答えた通りである。球磨に話す必要はない」

「私は『個人的なお願い』ではなく『戦艦大和からの命令』をしました」
「既に答えた通りである。私は拒否する」

応接室で向かい合って座った竹櫛と大和、どちらの方が偉いのかは言うまでもない。応接室のそこかしこに、天照大艦隊がいかに上手くやってきたかを雄弁に語る品々が飾られている。——そのうちのひとつ、額に入れられた表彰状は大和から天照大艦隊に贈られたものだった。

一介の提督ごときに拒否を許してしまうほど、大和は天照大艦隊と仲良くなり過ぎていた。

「なにも球磨さんを大本営直属部隊に差し出せと言っているのではありません。入隊訓練を受けてみないかと——いえ、受けるべきだと推薦したいのです」

「仮に球磨が、ただ珍しい徽章か何か欲しただけで訓練に臨んでも?」
「修了の後に最低数ヶ月、我らの下で勤務できることが資格要項にあります。ですが、これはあまり大きな声では言えないことなので秘密にしてくださいね。第二次南方作戦に私と並んで参戦した大和型戦艦2番艦、あのお馬鹿さんは——」
「お馬鹿さん?」

「コホン……あの私の姉妹艦は実は、とうの昔に大本営直属部隊への入隊資格を失っています。状況中、『たまたま我が部隊と武蔵の進路が重なった』だけなのです。このような偶然があるのなら逆もあることでしよう。球磨さんに与えられた任務の性質上、我が部隊から単独で離れて天照大艦隊と行動を共にすることが最も効果的である、といったような偶然があつても私は不思議に思いません」

「……すべての仮定が、球磨が訓練から脱落しないことを前提としているようだが」

「もちろん訓練はとても厳しいものです。私から推薦されたからといって合格ラインが下がることは有り得ません。しかし私も、訓練を突破できそうにない艦を無闇に推薦したりはしません。撃沈王の名が廃りますから」

「なおさら理解に苦しむ。優れた艦が求められるのならば練度で球磨に勝る者は少なくない。特に斑鳩など、私よりも大和のほうが付き合いがよりよく知るのではないか？ 練度の上限が見直される度に数値が際限まで上がってしまう程だ」

竹籬のこの発言は迂闊だった。

向かいの相手に気付いた様子はなく、大和は付け入り言い包める道を見つけた——のだが、やめた。あの奇妙な友人をダシにしたくはなかった。

「確かに斑鳩は、我が部隊にできなかった様々をやつてのけた等実績は十分で、泳げないことに目を瞑れば訓練を受けさせる時間すら勿体無いほどの戦力でしょうが……あの子に限つては引き抜いてはならない理由が多過ぎます。斑鳩を失った傘姫提督がどうなるか、想像はできませんが最悪になることだけは断言できます」

「うむ、傘姫はそうであろうな。『羊の皮を被ったエイリアン』が何をしでかすか私にも分からん」

「それに、もう忘れられかけていますが、斑鳩は深海棲艦のなりかけです。存在がそもそもグレーですからね」

他にも、斑鳩がドーカンシヤであるという大きな理由もあるものの、大和自身が未だドーカンシヤの存在を受け入れきれないため

に口を滑らせることはない。
ところで。

球磨よりもカレンダーズの長月を勧誘するほうが簡単かつ色々手取り早いのでは？ これについては大和も当然考えた。大真面目に検討した。試せる範囲で試した。結果、大和と武蔵はひとつの有力な仮説を立てた。

『長月の全力投入は世界終焉シナリオに至る近道ではないか』

「揚げ足を取るようで申し訳ないが、先程斑鳩に対して、引き抜く、という表現を使っ——」

「我が大本営直属部隊は球磨さんの『タカの眼』が欲しいです、喉から手が出るほどに。なにも彼女を差し出せと言っているのではない、と私は言いましたが、こちらが譲歩しても受け入れて下さらないのであれば、次はより強い命令になってしまいます」

だが大和はまだ言い足りない。

「はつきり申し上げますと、球磨さんをただの軽巡洋艦として扱うなど信じられません。世代ひとつふたつを超えた艦ですよ？ 戦艦に例えるならば、前弩級戦艦と超大和型戦艦を同一視しているようなものです。ああ、超大和型戦艦というのは、およそ量産型撃沈王とお考え下さい」

「……話を逸らすわけではないが、その超大和型戦艦というのは、私も噂には聞いていたが……実現可能なのか？」

「計画はあります。ご理解いただけただけでしょうか。その領域に、球磨さんはどうやってか到達しているのです」

超大和型戦艦——噂はあり、実際計画も確かにあり、それを撃沈王が大真面目な顔で口にしたとなれば、竹籬でなくとも「有り得るのか」と思ってしまう。

しかし、聡明な読者諸氏は既にお気付きのことだろう。

深海棲艦を相手に建艦競争を繰り広げてしまえば、その先に待つのは『自滅』である。ネオサイタマ鎮守府を除いたすべての拠点の提督たちはこう教育されているはずである。

《工廠に膨大な資材を投入する必要に迫られた場合、その前に子犬な

どの動物を記録した動画を1時間以上視聴せよ》

実際、この警告を無視した結末が第8話【叢雲の葉指 7】である。ここ天照隊でさえ長門改二と陸奥改二の戦線投入は慎重になつてしまう。そんな胃を痛める判断をいつも迫られる竹櫛は腕を組んで熟考するフリをして大和の表情をチラリとうかがった。……嘘をついているようにはとても見えなかった。あくまで戦艦に例えただけの話ではあるが、軽巡・球磨が超大和型ほどの艦なのか……？ こうして撃沈王が自ら勧誘に来ているのが何よりの証拠、と考えてよいのか……？

竹櫛は大和に何かを言おうとしてはやめて、聞こうとしてはやめて、結局10分以上も応接室を静かにしてしまった。10分という時間は字面以上に長い。ましてや撃沈王の前では。

多忙な身であるはずの大和は結論を急かそうとはせず、竹櫛の沈黙に付き合った。眉をひそめることもなく、むしろ10分以上ずっと微笑をたたえていた。

大和の思惑どおり悩みに悩み——竹櫛はようやく1つ言うことができた。

「大和、私を試しているな？」

応接室で向かい合って座った竹櫛と大和、どちらの方が偉いのかは言うまでもない。応接室のそこかしこに、天照大艦隊がいかに上手くやってきたかを雄弁に語る品々が飾られている。そのうちのひとつ、額に入れられた表彰状は大和から天照大艦隊に贈られたものだった。「試す、だなんてまさか」と大和はしれつと言った。「この大和、天照大艦隊を一際信頼しています。以前、少しの間だけ預かっていただけ秋月型防空駆逐艦、初月という艦を覚えていらっしやいますか」「……あの時は、うちの山城が迷惑をかけてしまった」

第42話【ラックレッサー山城 5】を参照されたし。

「もし初月が予定通りここで経験を積んでいたら、私は、あの子をそのまま天照隊の防空の要として使って頂いても構わないとすら考えていました」

大和が満足気に立ち上がっただけで、部屋の空気がまるで応接室で

はなく談話室のように軽くなった。彼女は自分が贈った表彰状を見つけて——これには、年相応の少女の満足さを見せた。

「竹櫛提督。本日はお時間を割いて頂きありがとうございます」
「待て。いま天津風と島風を呼ぶ。それともここにピザを運ばせた方がいいか?」

「それも露骨に警戒なさらずとも——」

「だがこの後、売店に行くのであろう?」

「半分だけ正解です。球磨さんを見つければまいったかと思つていませんし、もし偶然見かけても話しません。天照隊を裏切るような真似などできませんよ。ただ売店には、極楽のだらしない姿を拝みに行くだけです」

「そうか、そういえば売店のお姉さんとは旧友の間柄だそうだな」

「きゅ……っ」

本日はじめて大和の眉が良くない方向にピクリと動いた。

「……え、ええ。そうです」

「これは失礼した。ならば付き添いは野暮であつたな」

「おほほ……」

「ところで。最後にひとつ撃沈王に聞きたいことがある」

「なんででしょう」

「自転車には乗れるか?」

「自転車……ですか? え、自転車?」

「うむ」

「……事故があつてはならないので自転車に乗ることは原則禁止されています。車とバイクの免許も一応持つてはいますが緊急——」
「許可不許可はともかく自転車を運転することはできるのだな? ペダルを漕いで前に進むことが」

「ええまあ、普通にできますけど?」

「であるなあ。そう、それが普通だとも。やっとスッキリした。感謝する」

「いえ……どういたしまし、て?」

試したことへの意趣返し? 自転車と撃沈王に何の関係が? 大

和は思考を巡らせたが何ひとつ思い浮かばなかった。当然である。
竹櫛の超個人的な、ただの自己満足のためだったのだから。

第79話 球磨争奪戦 ④ 売店のお姉さん

人間か深海棲艦か、どちらかと言えば後者に見える売店のお姉さんがなぜ売店でお姉さんなどやっているのか、疑問を持つ者も、知る者も、少ない。

お姉さんが抱えていた事情まで知る者はもつと少なく、今もまだアカシマートと戦い続けてまで天照大艦隊の中で売店を開き続けている理由を知る者はさらに少ない、どころか片手の指の数の方が多すぎる。

理解者になるべく、

「何故ですか」

とお姉さんに素朴に聞いた磯風はアイアンクロードで持ち上げられた。

「痛い痛い砕けるー」

吊るされた磯風には聞こえなかったようだが、お姉さん——極楽型戦艦1番艦、極楽は素朴な問いに一応は答えていた。

「我にも分からんことを聞くな」



磯風という扱き使えるアルバイトがいるとはいえ、お姉さんは磯風とどきたい半々くらい割合で代わる代わる店番をやっている。お姉さんの方は勿論だが、なんと磯風の方まで割に融通してもらえるのだ、次のやり取りのように。お姉さんはやさしい。

「明日は浜風たちと遊びに行つてきますので店番お願いします」

「構わんが——なあ磯風、我は確かに『マスクを集めろ』とお前に言つたし、お前は確かにそうした。それはいい。我が思つてたのと少し違つたがまあいい。だが一緒に同数以上集めた『ネズミボトル』というのは……これはなんだ？」

「聞くところによると『ネズミボトル』あつての『マスク』だそうです」

「それ、誰に聞いた？」

「専門家です」

「何の専門家だ？」

「恐らく『ネズミボトル』と『マスク』の専門家かと」

「……まあいいだろう。色々初耳で興味深い」

自らが前に立つてみせなければ自分の言葉に何の説得力もないことを戦艦極楽は嫌と言うほど知っている。だから店番をそうそう渡しはしない。それはそれとして、後に磯風はネズミボトルとマスクの実演販売をやらされ死にかけた。



今日この日も店番をしているのはお姉さんの方で、磯風はというとバックヤードのさらに奥の茶の間で、赤いジャージ姿でダラダラとスマートフォンをポチポチしている。最近買い換えた大型テレビは見られてもいないのに、アナウンサーがああだこうだ言っているニュース番組を垂れ流している。

「こんなに墮落した艦娘磯風なんてもう磯風じゃない！」

と言われて当然で、

「いや、うん。この磯風は艦娘を辞めて売店のアルバイトとなって随分久しいからな」

と返されるのも当然である。

バックヤードの反対側、ネズミ色の上下スウェットに黄色いエプロンをかけたお姉さんもお姉さんで、カウンター裏に座って（必要がなければ基本立たない。立ちっぱなしは疲れる。これ至極当然のことである）ひとつ欠伸をした。

鎮守府内での流通を禁じられているプリンを除けばアカシマートの何もかもを上回る（予定の）お姉さん自慢の売店とはいえ、鎮守府の売店が常に、ましてや艦隊が本格的に活動を開始して間もない時間から賑わうはずもない。今現在のように店内に客が1人しかいない時だって当然ある。

唯一の客、球磨も金を落とさないという意味では客ですらない。カ

ウンターから10メートルほど離れたわずかなスペースに設けられた銃器コーナーで、憧れのちゃんとした本物の銃器をガラス越しに指をくわえて見ているだけである。この軽巡洋艦は朝から何をしているのか？ 何か文句あるクマ？

◆――売店で鉄砲が買える――◆

コーナーのスペースが狭いこともあってショーケース内に展示されている銃器・弾薬の数こそ悲しいほど少ないが、どれも有名どころばかりが厳選されている。

(読者諸氏には注意願いたい。銃と弾を一緒の場所に置いておくと法云々以前にターミネーターのシユワちゃんよろしく「いいんだ(ズドン!)」される。慣れている球磨でさえエアガンでやらかす時はやらかす)

それもテロリストを連想させたり、鈍器だ栓抜きだ爆発するとネタにされるようなモノではなく、友好国の軍や警察などでの採用を云々……とにかくお姉さん選りすぐりで、銃砲店としても隙がない。むしろ購入後は、

「せっかく工場とか2kmの射撃試験・演習場があるんだから自分で勝手にしろ。整備修理はどうしても言うなら、そうだな……新品を買うのと同じ値段で受け付ける」

というスタンスなので日本一自由である。鎮守府の外にこの話が漏れたら通報と苦情の嵐に見舞われるだろうが、磯風には扱わせないと、後述の理由から、安全面にも抜かりはない。

ただし銃砲店としても隙がないというのはお姉さんの弃で、明確に1点だけ欠点がある。その1点があまりに痛い。

今、球磨がジーツと見ているのは、西側諸国がよく使っているようなアサルトライフルに似ている、それも民間市場向けの自由な(自己責任な)アップグレードが施され、かつ鎮守府内ならいくらでも言い訳魔化しができるからと銃規制をガン無視して本来あるべき機能や姿をそのまま保っていて、とにかく非常にカッコイイ。このライフルを

抱いて眠りたくなる程である。

故に球磨は悩まされ続けている。そのライフルは目の前にあるのに、一言お姉さんに、

「このガラス戸を開けてほしいクマ」

と言えば手が届くというのに、届かない。

いかに高い評価を得ている1丁とはいえ、ただのアサルトライフル1丁と弾薬1箱のお値段が馬鹿みたいに高いのだ。それだけの金を用意できるのならば、国際線航空券とセミオートマチック・アンチマテリアルライフル1丁、それに見合う高級スコープ、しばらく遊ぶに足りる数の弾薬が買えてしまう程である。自動車と違って抱いて眠る以外に何の実用性もないくせに。

同時に安全性も非常に高いレベルで確保していると見える。そもそも誰にも買えないのだから。鎮守府の外にこの話が漏れたら「そんな屁理屈が通るか」とさらなる通報と苦情の嵐に見舞われるだろうが、通報苦情すべては『デマ』となり天照大艦隊は引き続き呑気に鎮守府一般公開で大好評の砲撃体験をやる。

スマートフォンを持つ球磨はスマートにアンチマテリアルライフルの参考価格を見せながらクレームを入れた。

「馬鹿げてるクマ！ 馬鹿げてるクマ！」

天照大艦隊内において基本的に「阿呆」は軽いツツコミで「馬鹿」はガチ罵倒を意味する。

「足許見るにも限度つてもんがあるクマ！ ふざけんな馬鹿！」

だが、お姉さんはガチ罵倒を、むしろ面白がった。

「ほーう。ほおーう。なるほど。では聞くが。もし我がお前に10万\$ポントとくれてやったとして、お前は海外に飛んで対物ライフルを買ったとして——『日本に持ち帰れるのか?』」

「ぐう……っ！」

「そんな日本人向けに、海外で銃を購入させてそのまま海外に保管させるビジネスもあったなあ。あんな悪辣な遣り口、いやあ小心者の我にはとてもとても。購入させた銃すべての所有権は会社にあるといきなり主張すると同時に会社ごと逃げるなど、信じられない話もあつ

たものだ。我としては国内でお客様ご自身に所持頂ける安心なサービスを提供したいものだ。ああ勿論、寮内での保管に不安があるだろうから我に任せるのもオススメだ」

「……な、なら、銃砲店じゃあなく射撃場的な——」

「断る。買え」

「……………クマあ」

それができないから球磨は我慢してエアガン……………も安くはない玩具なので、一ノ傘副提督(球磨のサバイバルゲーム仲間)のコレクションを借りて遊ばせてもらったりしている。

実際のところ、鎮守府から比較的近いサバイバルゲームフィールドのアイドル『リアルナイフアー・クマさん』は遠慮し続けなければ貢がれてしまい、球磨がその気になれば懐がけっこう簡単に暖まってしまふのだが——お姉さんも、そうしろよ値引きしてやるから金を集めて銃を買えと思うのだが——世の男共というのは本当にどうしようもない生き物なのだが……………そんな球磨など望まれるものではない。

◆ — 過去の復習 1 — ◆

ちなみに。

皮肉なことに、お姉さんがこれほど大胆に足許を見る原因を作ったのは、他ならぬ球磨だった。売店で銃器を2回も取り寄せ、仕方がない部分もあったにせよお姉さんに「これは金になる」と思わせてしまったのだ。

取り寄せ1回目。

人知れずゾンビと戦っていた長月、木曾、時雨に加勢する(という口実ができたのでアサルトライフルを手に入れる)ためにお姉さんに相談して取り寄せたものの、

「弾薬代も考えてお金がないから安いので、でも西側の銃がいいって売店のお姉さんに注文したクマ……………。これじゃあ実パ取りにもならんクマ……………」

球磨はお姉さんに予算相応のジャンク品を掴まされた。

取り寄せ2回目。

今度は事情を知る者たちで金を出し合い、ハンドガン1丁、サブレッツサー複数、弾薬を取り寄せた。

ハンドガンの威力や安定感は当然アサルトライフルより劣る。そこで球磨は一ノ傘副提督が持っていた玩具用のカービンコンバージョンキット(※)を参考に、同機能のものを工場でDIYすることで、低コストで不足を補うことに成功した。

(※) 小さなハンドガンに大きなサブマシンガンやアサルトライフルのようなガワを被せたりするもの。銃が単純に大きくなるので手だけでなく上半身でガツシリ構えられるようになる。またスコープなどのカスタムパーツも追加しやすくなる。ただし欠点も当然あり、例えば「最初からサブマシンガンとかアサルトライフル買えばよかつたじゃん」と計画性の無さ、あるいはお金の無さを馬鹿にされる。

さらに売店経由でなくとも調達可能なフラッシュライト、ホログラフィックサイトを自分で購入し、すべてを合体させて世界にひとつだけのカービン銃が完成した。手作り感あふれ洗練されていない外観が、これがまた愛着を湧かせるのだ。

「なかなか悪く……いやけっこう良いクマ」

この2回目が悪かった。

球磨は銃器に少々詳しいかもしれないが、軽巡洋艦として実際に砲を撃ちまくってもきたが、決してそれ以上ではない。DIYで作られたカービン銃の寿命はとても短かった。正直なところ球磨も失敗作であることは認めていた。やはり素人の工作では無理なのか……？

そうでもなかった。

カービン銃が寿命を迎えたのとほぼ同時に、天照大艦隊にのみ出現していたゾンビ達が何故か襲撃をパツタリと止めたのだ。球磨はカービン銃が奇跡をもたらしたのだと草木も眠る丑三つ時の空に壊れたパーツを捧げた。

「おお、我らが天照大御神か銃器の神様の誰かよ、感謝するクマ」

天照大御神は布団の中だろうし、銃器の神様の誰かがいたならば普通は忌避される。

ともかく。よく分からないが。すべての問題は上手く解決した。

一方お姉さんは面白くなかった。球磨の働きを評価して、ライフルよりも日本国内所持が難しい（一ノ傘副提督が持っているものはちゃんとした支給品である。合法品とも言う）ハンドガンを良心的な値段で譲ってやったのに加えて、さらにまともなアサルトライフルも融通してやろうかとまで検討していたのに——すべての問題は上手く解決してしまった。もう戦うための銃器は不要。ときた。

お姉さんが不貞腐れているところに球磨がやって来て、こう言った。

「ねーねーお姉さん。あのハンドガンがあれだけ安く輸入できるなら、アサルトライフルもよろしくして欲しいクマー」

お姉さん——極楽型戦艦1番艦、極楽はこういうナメた奴が大嫌いである。

◆ — 過去の復習 2 — ◆

ちなみにちなみに。

ゾンビが襲撃対象としていたのは天照大艦隊ではない。天照大艦隊・本隊内で売店を営んでいるお姉さん個人である。

夕立の強力な改二改造祝いを終えた雨上がりの夜にゾンビ攻撃の第1波が現れたことから、対応に当たった時雨・木曾・長月はこのホラー現象を『ソロモンの悪夢』と名付けたのだった。しかし実際には夕立の改二改造とはまったく関係無く、ただ偶然タイミングが重なっただけのことだった。ならばこの時お姉さんが何をしていたのかというと、売店は数時間前に閉めていて、普通に就寝していた。

時雨・木曾・長月、後に加わった球磨・叢雲は、鎮守府を守るために戦っていたのではなく、本当のところはお姉さんの安眠を守らされていた。……このことを最も早く知った長月の頭が理解を拒み、仲間への説明がかなり遅れてしまったのも無理からぬことだった。球磨ももつと早く知っていれば余計なこと「ねーねーお姉さん。あのハンドガンがあれだけ安く輸入できるなら、アサルトライフルもよろしく

して欲しいクマー」を言わずに済んだものと、天照大御神が銃器の神様のな誰かは憐れんだ。たぶん。

お姉さんが売店から離れて別の場所に行けば、そこがゾンビの襲撃対象になってしまう。行く先々で殺人事件を発生させる名探偵のような女性である。申し訳程度の申し訳なさから旅行の際は、現地に迷惑をかけないよう注意深く天気予報をチェックしていたし、べつに予報が外れて雨に降られたとしても、

『総合的に長月より強い』

のだから、お姉さん的にはゾンビが何だ面倒臭いという程度のこと
で、そんな圧倒的な相手をゾンビ達は律儀に命令に従い攻撃し続けていた。

◆ — 過去の復習 3 — ◆

その上またちなみに。

根本的な問題だったゾンビ襲撃の原因を排除したのもお姉さん自身だった。

すべての問題は上手く解決してしまった。もう戦うための銃器は不要。……という締め括りをつけたお姉さん自身に不貞腐れる権利はあるのだろうか。いやない。

球磨が迂闊な発言をしたことが確かに銃器・弾薬値上げの原因ではある。

あるのだが。

果たして0を数倍して10や100にする暴利が許されるのか。

洞観者であるお姉さんの炎の特性『コピー・アンド・ペースト』は、実包223 Remingtonとその弾薬を使用するアサルトライフルでも、基準排水量45,000tの戦艦ミズーリでも、もうひとりの自分や一ノ傘姫乃（傘姫提督）という人間さえも具現化できてしまう。限界はまだ誰にも見せていない。

あるゲームのあるエピソードで、宝石が大好きな女神の依代が、食堂で腕を振るう正義の味方の過去に、「芸術品の贋作でお金儲けをし

よう」と冗談半分で言ったことがある。
それを、お姉さんは実際にやっているのだ。

◆ — つまり、この売店は — ◆

話をまとめて結論を述べると——天照大艦隊よ聞け。

売店に並んでいる「これ、どこからどうやって仕入れたんだ？」と謎めいた商品の3分の1くらいは、原価ゼロとは言わないが原材料はお姉さんの炎である。お姉さんの気分次第で炎は消える、ということはお姉さんが購入後の商品はいつ消されてもおかしくない。なにか不都合があれば完全消滅するためソーシャルゲームのデータよりも信用がない。

まだ日向以外に目立ってやらかした者はいないが、仮に銃器の事故事件でも発生したらお姉さんにはいつでも証拠の銃や弾などを消す用意がある、どころか『まったく問題のない無可動実銃』を新しく作って差し替えることもできる。弾痕がある？ 怪我人がいる？ 艦娘たちが艤装で事故を起こさないなど夢の見過ぎだ。

天照大艦隊はそんな恐るべき代物でぼったくられている。

素直にアカシマートを受け入れていた方がよかったのでは？ そんな未来が見える。

しかしである。やいのやいのクマクマ言われたとしても何だというのか、銃砲店の店主としてのお姉さんは、真に客と見ている一ノ傘鉄子（一ノ傘副提督）が現実的な交渉を持ち掛けるまで値を下げるつもりはない。

◆ — ここから本編スタート — ◆

話は売店の中に戻って、軽巡2人が新たに入ってきた。

「またそれ見てんのかよ球磨。飽きねーな」

「うっせークマ。天龍にはコレの機能美なんて理解できないクマ」

「オレの剣のほうがよく強いつつーのに」

買い物に来る奴は皆いい奴である。うまい棒1本だけだったとしても金を落とすし退屈を紛らわしてくれる。

その後が続いてもう1人が……お姉さんをして呆れるほど怪しい奴、性別は女、艦娘っぽいのが店の出入り口から顔を覗かせた。

そいつの顔に見覚えがないのは、鎮守府の入場許可証を首から下げているので構わない。売店の客になるかどうかはまだ分からないが艦隊の客ではあるらしい。フードを目深に被っているのも、スウェットエプロン深海女がファッションセンスを語れるはずもないので一向に構わない。

だが、そいつの視線がまるで駄目だった。せつかくのフードをまるで活かせていない。

名前が分からないので陸軍の艦娘っぽい奴、『陸軍人』と仮称されたそいつは入り口で立ち止まり、球磨の後ろ姿に極端な反応を見せて、ボソボソと誰か見えない別の奴と会話をした。声からして相手は男らしい。

「(球磨を発見した。店内にいたぞ)」

《こちらでも確認した。僕はどうすればいい?》

「(その位置で店内の監視を続ける)」

《僕のドローンに監視以上を期待しないでくれよ》

「(そんなドローンがあるなら貴様の居場所はAIに奪われている)」

店内の軽巡3人には聞こえなくて当然だろうが、一方当然、店内で怪しい奴の声を聞き逃すお姉さんではない。

陸軍人は一般的なアカシマートと比べてかなり広く物も多い店内の様子を素早く目で探った。まさか実銃ではなくエアガンだろうが球磨はそれに夢中で陸軍人に気付いていない、客は他に2人が飲料を見ている、他はカウンター裏にやる気のなさそうな店員が1人だけ、防犯カメラは何故か全部ダミーで防犯ミラーもない、店内の出入り口はいま自分がいるところとカウンター裏と恐らく施錠されている大扉の3ヶ所、売店の外と内を隔てているのは一般的なコンビニのように一面ガラスなので店内で何かを行えば外から丸見えだが幸い今は外に目撃者になりそうな者はいない。わずか1秒か2秒ほどでの観

察は大したものだ——お姉さんに看破されていることを除けば。

(ドローン? ……ああ、あれか。現実には妖怪ドローンとは程遠いな。リスキルしてくださいと言っているようなものだ)

逆にゲーム内のお姉さんが比叡に「今そこです! ……え? なんで威嚇射撃? ほら位置がバレたー」と煽られるクソエイムプレイヤーなのはさておき、売店の領空を侵犯されるのは初体験で、なかなか不愉快だった。

「天龍ちゃん、お仕事ない日にそれ飲んでどうするの?」

「なに飲んだってオレの勝手だろ」

陸軍人が店内にサツと滑り込み、天龍・龍田に見つからず、念を入れてカメラに写っても不自然と思われない動きで、いくらエアガン(と普通は思うだろうが実銃)に夢中とはいえ静かに艦隊の暗殺者・球磨の背後を取ったのは錬磨の賜物に違いない。流石は陸軍といったところかそれ以上か。磯風にも最低あの程度の立ち回りで仕事をさせたいお姉さんだった。なお逆にゲーム内のお姉さんは立ち回りもクソである。

陸軍人にとって都合の良いことに球磨はガラス戸の前にいる。鏡のように背後が見える。つまり自分の存在を正しく認識させるのに振り向かせる必要がない——背後から忍び寄る側にとってあまりに不利な状況を逆手に取れている。

陸軍人は球磨の首に左側から手を回し、程近いところで「ジャキン」と音を鳴らした。球磨の首の近くで刃が飛び出す音を聞かせた。この音に聞き覚えがあるだろうか? ガラスの反射で状況を見させた。袖の下から飛び出す暗殺用の刃に見覚えがあるだろうか? とでも言うように。

球磨は動かなかった。あるいは動けなかつた。

陸軍人の右足は球磨の蹴りをいなせるように置かれた。知らないお姉さんはただ動きを制限させるだけと見たが、実際は球磨の必殺技を事前に研究して潰す恐るべき対策だった。

「(これは貴様がネットで拾った設計図と同じものから作られたアサシンブレードだ)」

そうなのか、へえ、覚えていたら後で検索しよう、とお姉さんは思った。

ここで球磨が取るべき正しい行動は、単純に、驚き、叫び、何ならひっくり返ることだった。誰にでもできる行動だ。普通は誰だっそうなる行動だ。そうしてくればお姉さんが5円玉非電磁砲（ただ5円玉を指の力で弾き飛ばすだけ。超電磁砲と比較するのもおかしいほど弱い）が当たると十二分に痛い）で介入してやらないこともない。陸軍人が刃を出すと同時に、既にコインカウンターから5円玉を1枚抜いている。

だが『少々の実戦経験しかない素人』は逆にそれができなかった。恐らく深読みが過ぎてしまっている。素人のくせに一丁前っぽい真似をする。

危害を加えるつもりがあまり無いように見える『専門家』の陸軍人は実際、騒ぐなども動くなども言っていない。陸軍人は、刃物を首に突き付けた程度でパニックになられるようでは困る、とでも思っているらしいし事実そうなっている。

「オマエ、人違いをしてるクマ」

「あの設計図を貴様は当然のように見ただろうが、ひとつ真実を教えよう」

「それよりクマの話聞いて欲しいクマ」

自分でクマクマ言っておいて人違いも何もないだろうに。

刃がほんの僅か、出血する寸前まで首に食い込んだ。

「あれは普通の人間の眼には映らない、『タカの眼を持つ者にしか見えない代物だ』。構造から見直されたアサシンブレードはOTFナイフの強度問題を解決している。だから貴様は——いや貴様だけが設計図をダウンロードした。我々は貴様という艦娘、球磨のすべてを知っている」

球磨の耳元でささやく声色は……まあ訓練はしているようだが、まだ可愛さが十分抜けていな（くて羨まし）い。

「……クマに何かご用事クマ？」

「ただ副業を紹介してやるだけだ。悪いようにはしないと約束する。

本艦と一緒に来てもらう)」

「(副業?) 知らんけど…) —そりゃ無理クマ」

球磨は長い髪を置き去りにするほど素早く屈んだ。首に突き付けられた刃に構わず、当然怪我をするのにも厭わずである。

苦し紛れの行動でどうにかされては専門家ではない。だから陸軍人には何故球磨が迂闊な行動に出たのか考える余裕すらある様子だった。

カウンター裏のお姉さんも、飲み物を選んでいた軽巡2人すらもがハッキリ見ていた。

陸軍人には、目の前の球磨の頭が下に引つ込むことでショーケースのガラス戸が見えたのだろう。それに反射したものが、やっと、見えたのだろう。

《神州丸、後ろだ!》

自分の真後ろに、右ストレートをぶつ放す直前の撃沈王が見えたのだろう。

「なっ!?!」

それでも陸軍人は自分の後頭部めがけて放たれた拳を右に飛び退いて躲してみせた。隠密行動に失敗したとはいえ、球磨の罠と大和の奇襲を回避する、十分すぎる化け物と呼べる。

お姉さんは大和の右ストレートを受け止めたことがある。まあ弱い連中の中では強い方じゃあないか、程度の威力はあった。それが空振れば…:拳が進む先のガラス戸などあつてないようなもので派手な音をたてて砕けた。

「くそっ!」

その悪態をつきたいのはお姉さんである。

陸軍人は無駄のないステップで球磨と大和の2人から距離を取った。その先はお姉さんに近づく方向だったが『ただの店員』など今は問題にしてもらえない。

通信装置に怒鳴った。

「おい! なぜ大和が本艦の邪魔をする!?! それに貴様は大和の接近を見ていただろ!」

《大和はなぜか店に入るなり君の元へ一直線だった。警告する暇もなくね》

反撃はまだ終わっていない。

球磨を阻むガラスの壁がなくなった。緊急事態という理由付けも……微妙だが、自分より強い相手に対抗するには強い武器が必要という判断は一側面では間違っていない。

球磨はアサルトライフルを引っ搦んで左脇にはさみ左手でハンドルを引いた。右手で掴めるだけの弾薬を掴み——陸軍人は銃が玩具でないことに気付いた——1発を装填、ボルトを閉じて、

「何事ですかお姉さん！」

騒ぎを聞きつけて磯風が顔を出したのと同様、

B L A M !

艦娘あるいは元艦娘ですら目眩がするほどの、室内での大音響。発砲。

身構えていなかった天龍・龍田・磯風は、驚いたというより耳と正気度にダメージを受けた様子だった。艦娘ならば知っている。艦娘たちが事故を起こさないなど夢の見過ぎで、今の音はまさに事故の音だ。狭くはないが決して広くもない屋内でこの音がしたという事は、ただの破裂事故などではなく、『既に他の何かが深刻に破壊されている』。

制止が間に合わないほど手際が良過ぎる上に躊躇のない1発をしっかりと見ていた大和でさえ少し怖がったような顔をしている。お姉さん以外に見られておらず良かったものの、撃沈王が頼り無く情けない。

そして陸軍人は左腕を押さえながら痛みと——喜びに興奮していた。

「ハハッ……本艦がわざわざ出向いた意味があつたぞ……！」

まあ、この陸軍人が何者かは知らないがその通りだろうとお姉さんは同意した。陸軍人が狙われたのは左腕ではない。頭だった。専門家でなければ今の銃撃で確実に死んでいた。

「その迅速果断の攻撃を可能にする『予て穿つと決めた覚悟』！ その

通りだ球磨！ タカの眼など所詮副産物に過ぎない……！」

お姉さんは普通に弾道を目で追っていた。弾丸は最終的にはネズミボトル1本を貫通した後に壁で止まった。薬莖は……床に落ちた音がしたからすぐ見つかるだろう。

思い切りの良い奴は、嫌いではないのだが。

まず球磨。銃砲店で絶対にあってはならないことを流れるように一通りやった。そもそもこの売店が……の前述の上に、許可のない者がライフルを手にとって、装弾し、他人様の頭に銃口を向けて、トリガーに指をかけて、撃って――。

それに陸軍人は。銃撃が威嚇ではなく避けられないと咄嗟に判断したからか、左腕のアサシンブレードを傾斜装甲のように使って銃弾を逸らした。アサシンブレードと左腕が駄目になった程度、安いものだろう。特殊なカーボン100%の制服がどうこう言っている次元ではない破壊力を見事、最小限に殺したのだ。だが、それはまだ1発目で――。

絶対に死……いや殺したはずの相手が笑っているのだ、球磨のその表情はお姉さんにも理解できる。まったく笑えない戦闘だが両手は笑ってしまう。2発目の装弾に手間取ってしまった。

「プランAは失敗したが作戦続行する。プランCだ」

《プランC？ そんなものはないぞ？》

「予備チームを車ごと鎮守府内に送り込め。プランBを鎮守府内でやる」

今度は陸軍人が右腰あたりから小型の……リベレーターにそっくりな……消音麻酔銃？ を抜いて球磨に雑に狙いを付け、とても小さな発射音を伴って撃った。緑色のレーザーサイトで着弾点を教えてくれる優れものだ。用意が良い。

だが銃撃戦ならば球磨が勝る。むしろ不思議技術ガンIIカタを習得した者にとって近接銃撃戦は望むところだろう。球磨は可愛い少女が見せるべきではない目をしている。

麻酔弾の弾速は音速を大きく下回り、おまけにレーザーサイト付き。そんなものが球磨に当たるはずが――ほら回避どころか反撃動

作に繋がりに——いや違う。陸軍人はわざと銃を使ったようだ。その証拠にさらに嬉しそうな表情を見せた。調査通り『当たらない上に当てられる』ことを身を以て確認できた、といったところだろう。

1歩前に踏み込んだ球磨のライフルが2度目の火を吹いた。しかし今度は陸軍人に距離を大きく取られて外れ、売店出入り口の方へ逃げられた。

陸軍人が走る途中に天龍と龍田がいたが止められるはずもなく、球磨が次弾の装填を終える前に売店の外へ出ていってしまった。

ところで。銃撃の現場となってしまった売店をどう掃除したものか。金属製の弾丸は取り除けばいいのだろうが、さすがのお姉さんも麻酔弾の掃除方法は知らない。インターネットで調べて出てくるとも思えない。本当にどうしたものか、困った。

真つ当な頭を持つ艦娘であつても意見が割れるだろうが、「予備チームを車ごと鎮守府内に送り込め。プランBを鎮守府内でやる」

というセリフを聞いたとしても、あの手強い陸軍人とのこれ以上の戦闘を避ける判断も賢明と言える。だから球磨が電話で艦隊の危機を提督たちに知らせる寸暇を惜しんで、左手にアサルトライフル、右手に数発の弾薬を持ったまま陸軍人の後を追ったことが正しいかはお姉さんにも——まあ、なるようになるし、ならないものはならない。

球磨に力を貸した大和もついて行く……前にチラリとお姉さんと目を合わせ、視線だけで責任を押し付け合った。練度カンスト艦同士に言葉は不要なのである。悪い意味で。

(鎮守府内発砲殺人未遂事件、どうしてくれるのよ極楽あなた本当に……！)

(撃沈王様に突破されないセキュリティがあるなら教えろ)

大和も出ていったことでようやく売店に平和が戻った——と単純に思えるメンタルを持つのは勿論お姉さんだけだった。

お姉さんはずっと持っていた5円玉1枚をコインカウンターに戻した。

「磯風。……おい磯風、生きてるか?」

「は、はいっ！ この磯風、力の限り頑張ります！」

「なにを頑張る気だ阿呆。あのへたってる軽巡2人を奥で休ませて、一旦店を閉めろ。まず掃除だが、んー……銃器コーナー周辺5メートルに近寄るな。麻酔弾がどんなものやらまるで分からんからな。それと銃と弾には、何があっても絶対に触るな。大きめの空薬莖2個と小さいの1個がどこかに転がってるからそれは触っていない。まだ熱いかもしれんが探して拾っておけ。捨てるなよ。割れたガラスも今は放って——いや待て。そうか。こんな時のためのネズミボトルとマスクだったか」

「え？ いえ、ですが私がまた死にかけるのでは……」

「失敗しても眠らされるだけだ、たぶん。あとは適当に任せる。じゃあ我は少し出てくる」

「どこへ、ですか？」

「あー？ 決まってるだろ」

お姉さんは。

いつも先回りしてアレコレ売りつけてくるし、自分が後手に回ることを基本許さないからアカシマートと競い合えているように見えるが、面倒臭くなければという条件が付いている。

例えば、商品を少々不安定あるいは芸術的な積み方をして、それが崩れてしまう1秒前だったとしても、それをどうにでも防げるくせに、面倒臭いから崩落が終わるまで見守る性格である。後で余計に面倒臭くなることは重々承知している。それでも面倒臭いものは面倒臭い。

重い腰を上げるのはいつも落ち着いている時、落ち着いた後になつてからである。落ち着くためにわざと腰を重くしている、やる気を捨てている節すらある。

アカシマートも分析している。たまにお姉さんは攻撃を黙って受け続けることがあり、決まって後の報復が尋常ではない。だったら24時間365日ずっと攻撃を続けるのが効果的かと思われたが、1分もしくは1秒でも攻撃の手を休めてしまえばネオサイタマの本部が無事では済まない。

「我が店を壊した奴らに賠償させなくっちゃあならんだろ。それに――銃と弾を『万引き』した愚か者をインタビュー（※）する」

（※） 尋問

第80話 球磨争奪戦 ⑤ 航空戦艦ついに動く

《応答しろ神州丸！ 僕のドローンも壊れたようだし、いったい何が起こっている!?!》



「もしもし。悪いな忙しい時に。」

——え、今日1人もいないのか、バイト!? 言ってくれよ、私は今日暇だったのに。

——言った?

——あ、本当に悪い、見てなかった。でも丁度よかった。この電話が、今からハンド・キャットに行ってもいいかって話なんだ。私の艦隊に、洞観者でもないのに超能力めいた何かを使える軽巡がいるって

——そうそう球磨。もしかしたら炎は持たないがダメコンは発動しない、みたいな中途半端で悪いところ取りの存在かもって相談したよな。その球磨を今からハンド・キャットに連れて行くから見てもらいたいんだ。私もバイトに入れるし小遣い稼……いやなんでも。とにかく丁度いいな。

——それが実はさっき、とんでもなく怪しい奴が鎮守府の中にまで、球磨を探しに来たんだ。ゴッドランドって名前でフード被ってる奴なんだが、武蔵はそういう奴に心当たりあるか?

——いや見た感じ海外艦ではない。あと多分そいつの仲間が飛ばしてるドローンが離れたところから偵察してた。一応アイサツしてみたが反応はなかったから大した脅威ではないはずだが、少なくともよからぬことをしようとしているのは多分まちが

——あー。

……うん。その通りだ。すまない。ハッキリ感じたことを言うのだな、ゴッドランドは球磨を殺しに来たか、拉致しに来たか、それくらいのことを実行するつもりでこの鎮守府に入ってきてる。もう調

べたり様子見する段階は終わって、あとはやるのみって眼をしてた。1度だけ戦ったことある深海棲艦のレ級より闇が深い眼だった。だから頼む。ハングド・キャットで武蔵と猫たちに見てもらって、ついでにしばらく匿まえないか？

——いやでもほら、何れにせよ、まず武蔵に話さないと始まらないし

——あー、誰だっけ目利きが得意なの？ もうそれか、ネオサイタマから陛下を呼んだほうが手っ取り早

——まあそうだな、都合よく来てはくれないよな。だから今日アルバイトが1人もいないんだし。でもせめてゴツドランドをなんとかするまで

——え？ そりゃあ……殴って分からせるとか？

——いま面倒臭くなって言っただろ。でも言ったからには頼らせてもらう。とにかく私は球磨を連れてそっちに行くぞ。

——さあ？ まあ、皿洗いくらいは最低できるんじゃないか？」



嘘を見抜いて嘘で返した睦月を、底の見えない暗い不安が襲った。寒気が襲った。怖気が襲った。

こんな『駆け引き』をしたのは初めてだった。叢雲や雷電姉妹のような熟練艦が嫌でも通ってきた道に、この少女は今、初めて足を踏み入れた。

「睦月ちゃん？」

「如月ちゃん……。どうしよう、私、あの人を騙せなくて、騙された振りでお返事されて……。球磨ちゃんが……！」

「大丈夫よ睦月ちゃん。みんなここにいます。カレンダースはいつもみんな一緒だから。菊月ちゃんと水無月ちゃんと弥生ちゃんと長月ちゃんはいないけれど、『心は繋がってる』とかキングダムハーツみたいなことを適当に言っておけば何とかなるから。さあ、お話を聞かせて」

「うん、ありがとう如月ちゃん……！ みんな、実はかくかくしかじかで」

臯月「言われてみれば……あの人、雰囲気は球磨ちゃんに似てたよね。悪い意味で」

卯月「うーちゃん復活ぴよん！」

睦月「ゴッドランドっていうお名前も怪しいよ。金剛さんの英国設定くらい怪しい」

三日月「これ言っているのかな？ 球磨ちゃんが狙われるのって

……逆に安心しない？」

如月「たし」

望月「かに」

文月「返り討ちだもんね、ふつゝに」

睦月「でも、もしゴッドランドさんが球磨ちゃんより強かったら……」

睦月の懸念は当たっていた。

卯月「カレンダーズじゃあどうしようもないつぴよん」

臯月「11人がかりで球磨ちゃん1人に負けたんだよ、ボクラ」

如月「ああ、あのトレーニング体験の時ね」

望月「ナイフが本物だったら球磨ちゃん無傷であたしら全員死んだもんね」

三日月「いーえ！ あの時のもっち、何もしなかったでしょ！」

望月「何かはしたかったよ、でもできなかったんだよ！ 一番最初に狙われて！」

睦月「カレンダーズがあと100人くらいいたらにやあ」

臯月「追加した100人分の名前、どうするのさ。お月さまは1個しかないよ」

卯月「世界には175姉妹がいるぴよん。名前くらいなんとかなるぴよん」

如月「さすがに無理だと思うわあ」

睦月「じゃあ吹雪型とか他みんなを名誉カレンダーズにして……何するんだっけ？」

望月「おい言い出しつぺ」

文月「あくつ、いいこと思いついた〜！」

皐月「100人分の名前の心当たり？」

三日月「それはもういいから」

文月「あつち見て。ほら、暇そうな戦艦の人がいるよ〜」

睦月「いるにや〜」

卯月「いるびよん」

如月「いるかないないかで言えば、いるわね」

皐月「確かにいるね。それから？」

文月「？ 戦艦の人だから、強いよ？」

望月「あれ？ 概念と概念のマウント争いとか、そっち方向の話？」

睦月「うん。睦月たちよりはもちろん強いと思う。腕相撲とかなら〜」

如月「でも練度は？ 睦月ちゃんの何分の一？」

一同「う〜ん……」



カレンダーズは間違っている。

あの暇そうなのは戦艦ではない。

航空戦艦だ。



『試飛会』とは日向が制作したラジコン飛行機のテスト飛行を行う会である。

戦艦から航空戦艦へと進化した日向は己の刃を研ぐべく航空機の研究に明け暮れ、定期的に切れ味を試すべくラジコンを製作しては戦艦察上空を飛行させたり墜落させたりした。

日々を深海棲艦との戦いに費やす艦娘にそのような暇があるのかと問うならば普通は無いと答え、日向は普通という枠を何食わぬ顔で

切り捨てた。故に航空戦艦になってから随分と久しいものの練度には僅かの上昇しか見られず(Lv. 10 ↓ 13)、ラジコン飛行機の製作技術ばかりが無駄に上昇していった。勿論、この技術が深海棲艦に対する抑止力となった例は一度として……いや一度だけ、深海棲艦になりかけた艦娘を止めたことならあった。その一度だけだった。本末転倒も甚だしかった。

「艦娘としてあんたそれでいいの!？」

総旗艦・叢雲に激怒されることは度々あり、日向も猫の額くらいは気にしている。ところで猫の額とは面積の狭さを例える言葉であり思慮の大小を表すのには使えないのではと日向は疑問に思い、つまり全く気にしていないと同義とも言えた。これぞ鋼のメンタルの成せる業である。

日向が製作するラジコンはいかなる機種であれ、全体をヘチマのような緑色に塗装され、両翼と胴体には赤いマル模様が入られる。機体下部には固定翼機や回転翼機、アダムスキー型未確認飛行機だろうと何だろうと例外無く水上に浮かぶためのフロートが無理やり取り付けられ、つまりは瑞雲化改修が行われた。

制作する飛行機の機種はいつも自由自在だった。F-22ラプター、F-35ライトニングII、A-10サンダーボルトII、Ka-50ホーカム、V-22オスプレイ、サボイアS-21、SH-60K、テポドン2号、コンコルド、気球船、果てはハインケル・レルヒエのような珍機体(特に航空戦艦が運用できそうなもの多)などがプロペラ駆動のラジコン飛行機となった。

半強制的に観覧に招待された最上が見守る中、日向のラジコンは戦艦寮前の空を優雅に飛行した。あるいは制御不能に陥った機体が爆発しない巡航ミサイルとして最上の頭や山城の部屋、斑鳩の意識、金剛の後頭部、弾道ミサイルとして北鎮守府の執務室を狙ったりもした。それらの経験はすべて日向の糧となり、最上の精神的重石となった。



「ほう、この不審者が、球磨を狙っている」と

睦月がゴッドランドを背後からこっさりスマートフォンで撮影した動画を、日向はとても真剣に観察している。フード付きの外套を羽織った者の後ろ姿は、人相こそ分かるはずもないが他の者と見間違えることはないだろう。もし同じ姿で顔を隠した者が大勢現れても全員ぶちのめすまでのことである。

今回の試飛会は本当の本当に過去最悪レベルで危ないから、（飛ばす予定だった機体は瑞雲化改修されたパンジヤンドラムだった。誰でも一度は飛ばしてみたくなる兵器ランキングの常連だろう）近寄るなど最上はカレンダーズを追い返そうとしたのだが、

「まあ待て最上。艦隊の危機は我々航空艦の危機だ」

今まで数々の天照大艦隊の危機をスルーし続けてきたニート航空戦艦は、珍しく趣味を放り出した。

実は今回作ったパンジヤンドラムにあまり自信がなかった——飛行する姿があまり美しくないかもしれないという意味で——それは些細なことで、強力かつ絶対の航空戦艦がちっこい駆逐艦たちの救援要請を無下にしてよいはずがない。

「つまり、このゴッドランドと名乗る者に話を聞いて適切に対処すればいいわけだな。そして同時に球磨の安全を確保すると」

「はい。嘘をついてまで誰かを探してるなんて絶対怪しいです」

睦月は2つの意味で心配で仕方がない。

ひとつ、無論、球磨が危ない。

ふたつ、練度13の戦艦（ではなく航空戦艦）を頼るのは正解だったのか。

「なに、言葉通り大船に乗ったつもりで、全面的に任せてくれて構わない。しかしそうだな、念の為……最上、この子たちを戦艦寮の中へ。山城の部屋ならば防弾ガラスやら何やらで安全だろう。相手は最低でも、まあ普通は拳銃などだろうが、何かしら武器を持っているからな」

「え、分かるんですか？」と最上。「あの動画だけで？ 手ぶらでした

けど」

「手ぶらだからだ」

「はい?」

「他所から来る艦娘が手ぶらなはずがないだろう。鉄の装備は預けてきたか知らないが、『艦隊に用事がある』と言ったのだろう。ならば荷物のひとつでも持ち歩くのが普通だ。普通でなければ、その者は普通ではない。外套の下などを見せてもらわねば」

「……………ああ」

真つ当なことを言う日向に少しモヤツとさせられる最上だった。

「ならば急いだほうがいいな、では不審者を探しに行くでしょう。そうだな、とりあえず売店の方向に行けば途中で何か目につくだろう」



不審者はあつさり見つかった。

ついでに、何故か、ジャケツトとパンツ姿の大和も見つけた。

しかも親切なことに2人とも——大和はべつにどうでもいいのだが——結束バンドで手足の自由を放棄させられ地面に転がっていている。それも二人三脚のように2人が仲良く繋がれていて互いに動きを制限し合い、不審者の方など短すぎたスカートの中を隠すこともままならない。

日向に言わせると、拘束された人間をナマで見るのはあまり愉快なことでないものの、まあ楽だったというか、脱出ゲームの最後の鍵がいきなり手に入ったというか、こういうのを確か……そう、「肩透かしを食わされた」と言う。

よく見ると転がる2人の背中からそれぞれ2本の細いワイヤーが伸びていて、その先は玩具の拳銃のようなものに繋がっている。日向は試しに2つの拳銃の引き金を引いてみた。

「イ、ぎ……ッ!」

「あああああッ!」

見れば分かるものでも試さずにはいられない人畜生である。

「ッ……やめろ貴様！」

「なにしてくれるの！」

不審者と大和から文句を言われる航空戦艦。

「いや、装甲を貫くでも爆発するでもなく、電撃で無力化するという発想が面白くてな」

「面白くない！」

「ところで大和ではない方の君が、ゴッドランドを名乗る者だな」

「そういう貴様は……まさか日向ではないか？ そうだ、この艦隊に貴様がいることをすっかり失念していた。ならば本艦のことは知っているだろう。本当の名を神州丸という」

「神州丸？ はて……すまんが、富士急ハイランドで会ったか？」

「その頃はまだ本艦は実装されていない。覚えていないのか!? 煙突の件だ、貴様から不要になった煙突を譲り受けて、本艦はそれを偽装として——」

「飛行甲板は？」

「は？」

「飛行甲板。持っているか？」

「……馬欄甲板とカタパルトならあるが？」

「そうか。良かったな。大切にするといい」

「あ、ああ……」

「……………」

「……つまり何なんだ貴様は!？」

「不審者の方はこれで解決して、あとは球磨の安全確保だが……む、あれは……いささか骨の折れる仕事になりそうだ」

「あの、日向？ 私を無視しないで？」と大和。共に戦ったことが一度もなくともこのニートの名は当然知っている。なにせ『日本一いやどうかすると世界一働かない戦艦(航空戦艦)』と7つの海に名高い。真逆の戦艦撃沈王が知らない理由がない。

「私の拘束は解いてほしいのだけだ」

「いま駆逐艦たちから頼まれ事をされているのでな。後でな」

「ちよつ、待つ、私の解放くらいしてもいいでしょ！ ねえ待って！」

……嘘でしょ撃沈王をスルーした……。私がおかしかった？ ビリビリされて地面に転がされる屈辱を味わわされるようなことした？」

した。具体的には売店の銃器コーナーを破壊した。

むしろレーザー銃の引き金を引きっぱなしで固定されないだけ売店のお姉さんにしては有情ですらある。

「……ねえ、あなた神州丸といったわね。たぶんSCPやらSPCとかの特殊部隊的なプロなのでしょう？ こういう状況から抜け出す訓練とかも積んでるのでしょうか？」

「なんだその雑な認識は。無茶を言うな。くそっ、このっ！」

「いたた、ちよつと勝手に動かないで」

「わざとスカートの中を丸見えにされているんだぞ、こっちは」

「……………その下着、ずいぶん可愛いけれど、そっち方面の武器？ それともあなたの趣味？」

「黙らないと貴様の関節が外れるまで暴れるぞ」



元々その自動車は、ガバツと捕まえた人間——今回の場合は球磨をポイツと放り込んでブロロロ……と走り去るために使われるものだった。さらに車内には屈強な男4人が詰まっていた。ドローンを操縦して神州丸と通信をしていたモブ男とは違い、誰の目にも荒事が得意そうに見える者らだ。この予備チームは、機転を利かせたプランCを実行するために鎮守府の正門から強引に乗り込んできた様子だった。

警備員はさぞ驚いたに違いない。恐らく車の運転手は鎮守府をホームセンターか何かと勘違いした高齢者だろうと思っただけに違いない。稀によくある事案だ。まさか艦娘をこうも堂々と拉致しに来たとは思えない。

そして球磨を狙った謎の組織側も、まさか自分たち4人が乗る自動車が、たった1人の深海棲艦に似た艦娘に天地逆にひっくり返され、車外に這い出たところをレーザー銃と結束バンドで無力化され、さら

にひっくり返った自動車の上はどこからか現れたロードローラー3台が積み重ねられて潰されるとは思うまい。理解など追いつくまい。だが事実そうなっている。

なかなか不思議な状況だが、プランCだの何だのを知らない日向には関係のないことだった。航空戦艦の手助けが必要な場面はとつくに終わっている。

そんなことよりも、少し離れたところで――。

「球磨を渡してくれ、お姉さん。今から急いで連れて行かなくっちゃあいけない用事があるんだ。力尽くになってもだ」

赤いジャージ姿の長月と、

「この万引き犯は今から我に分からせられるんだ。つまり我とコイツは忙しい。それとも何か長月、お前に真のイクサを教えてやるのが先か？」

ネズミ色の上下スウェットに黄色いエプロンをかけたお姉さんと、

「オロロロロ……」

片腕で雑に抱えられた猫のように、いやネコではなくクマなのだが、お姉さんに捕まって顔を真っ青にしている球磨がいる。

15メートルほどの距離で睨み合う長月とお姉さん。

まだまだ成長途中の駆逐艦と、一見病弱そうな戦艦、2人の間に枯葉がひとつ地面に落ちたと同時、2人は残像を作る速さで飛び掛かった。どう見ても人間がやってよい動きでは――いや残像しか見えないのだから、どう見るもこう見るもない次元だった。

日向はカレンダーズから球磨を託されている、だから、という理由など物理的かつ常識的に許されないはずなのだが、人外2人の間に割って入った。

「まあ待たないか2人も。球磨が……あつ」

少し驚いて急停止したお姉さんは球磨をうっかり手放してしまった。

極々普通の人間という器からちよつぴりはみ出た程度の球磨は、嘔吐しながら可哀相な飛ばされ方をした。

というのも、本イベントの前段作戦、第二作戦《防備拡充！ 南西諸島防衛作戦》で天照隊は早くも大きくつまずいてしまったのである。

旗艦大和と5人の駆逐艦で構成された部隊が、20回出撃して1度もボスの姿を拝むことすらできないというピンチに見舞われたのだった。ラストエリクサー症候群だ何だと言っていられる余裕すらなくなつて、部隊の6人は天照隊初となる補強増設を使った強化艦娘となつただけけれど効果はなかった。無念、撃沈王（と言っても、この世界の大和はかなり弱く装備も貧弱なので仕方がない）。

こんな序盤からこの調子かと、あせりにあせつた提督は、甲報酬の烈風改（三五二空／熟練）を指をくわえて見つつ、作戦難易度を『そこそこ頑張る』の乙に下げた。

「英断じゃあないですか、提督」

私がつつかくこう言つてあげたのに、提督ときたら、

「……………うむ……………」

しわしわピカチュウのような顔をしていた。

そこから先の作戦は——察してください。

甲種勲章？ ああ、それなら一度、大量の燃料などと交換したことがありますよ。手元に数があれば便利かもしれないね。でも別にないと困るものじゃありませんよね。

……………はあ。

イベントの塩梅はそんなところで、今は遡つて第四作戦海域を周回しているところだった。

何人目かの戦艦・陸奥が着任したところだった。

「陸奥には悪いが、陸奥はもういいのだ……………」

提督は頭をかかえた。

私は基地航空隊の補充をしながら、

「そんなに疲れるのなら、もう諦めたらどうですか？ ほら、アズールレーンの方ならとつくに高レベルのフレッチャーがいるじゃあないですか」

「イベント期間中は浮気はせん」

「ご立派なことだ」

「……ん？ 待て山城。アズールレーンに駆逐艦フレッチャーがいるな」

「そう言いましたけど。そろそろ頭、ダメですか？」

「駆逐艦……フレッチャーとは駆逐艦なのか？ 軽巡洋艦ではなく？」

提督は物欲センサーが働かないよう、イベント期間中は情報収集を最低限に控える。そんなんだから20回出撃ボス到達ゼロとかやらかすのだろうけれど、実際、攻略中にまったく知らない可愛い子がドロップする事も少なくない。

（そういう意味でも、未来の作戦突破報酬の神州丸はかなり衝撃的で特別だった）

「そんな勘違いをしたまま掘ってたんですか？ そりゃあ出るものも出ませんよ」

「駆逐艦だったのか……」

次の出撃、そのまた次の出撃でも、比叡の部隊は道中の敵艦ル級に阻まれ撤退を余儀なくされた。

これには提督だけでなく私もイラツとさせられる。たとえ何度目のことであつても。

「まあ、私たち以上に比叡たちの方がイライラしてるでしょうけど」
すると提督が、

「そうだ……淀んだ空気を変える意味でも、部隊編成を変えてみてはどうか？」

「せっかくそこそこ最適化してきた編成ですけど、どんな風に？」

「例えば、レベリングを兼ねてコロラドや八丈、石垣を組み込むのだ」
「そんな余裕ありますかねえ」

「同じことを考えて実行に移している他の提督がいるかもしれん。今すぐググるのだ」

「迷走してますね、提督」

「やかましい。さあレベリング兼掘り編成例をネットの海から探せ、秘書艦山城」

「自分で考えたかどうか？」

「……私は、もう、疲れたのだ……」

さようですか。

ものは試しと、頭を使わず単純に旗艦比叡をレベル1のコロラドに入れ替えてみたものの、予想通りの火力不足……それ以前の問題で、ボスマまでのルートを大きく外れてしまった。最短ルートを通るためには部隊を高速艦で編成しなければならず、コロラドは低速だった。提督はまた、しわしわピカチュウのような顔をした。

◆―― 没った世界 ――◆

【艦これアーケードの「発動！渾作戦」予告PVを見て激しく興奮するも、話が矛盾してしまうため並行世界送りになった春雨の話】



「コ……コレダ……！」



にまあ……。と春雨は鏡に向かって笑みを浮かべてみた。

鏡側から見るとそれはただの上目遣い、肌と瞳が青白かろうと普通に可愛いだけだった。肝要である目のハイライトの消し方やノイズの出し方など春雨が知るはずもない。

「ウーン……違う、コウジャアナイ。モット影ガアル感じデ……」

「さつきから何やってるの、春雨？」と1番な姉は聞いた。「笑顔の練習？ FFX？」

「白露姉サン。モシモ、モシモダヨ？ 艦娘ガ実ハ深海棲艦ト隣リ合ワセテ、今マデ仲間ダト思ツテタ艦娘ガ深海棲艦トシテノ本性ヲ現シ

「タラ、ドンナ感じダト思ウ？」

「え、ごめん何て？」

「私ガ実ハ深海棲艦ダツタトシテ」

「うん」

「本性ヲ現スノ」

「うんうん」

春雨はせいっぱい魔性の笑み（ただの上目遣い）を作った。

「ドウ？ —— 怖イ？」

「え、何が？」

春雨の顔がひきつった。

「ダ、ダカラ、私ヲ深海棲艦ダト思ツテミテ」

「うんうんうん」

「フフ……。怖イ？」

「え、だから何が？」

「モウツ！ チヤント私ヲ見テ、真面目ニ想像シテ！」

「うんうんうんうん」

「今マデ仲間ダト思ツテタノガ実ハ深海棲艦ダツタノ。ドウ？ ドウ

!？」

「んくく……。ごめん。春雨のことは1番よく知ってるあたしだけで、意味分かんない」



「阿呆ガ相手ダカラ悪インダ」

自分の、ただ可愛いだけという贅沢すぎる笑顔を棚に上げた春雨は駆逐艦寮を出た。白露型姉妹に聞いても1番な姉と同じ反応をされそうだと思つた春雨は、他の艦娘を探した。できれば駆逐艦でもない方がよい。その方が新鮮な反応を貰えそうな気がしたのであった。

するとちやうど、戦艦寮の前に2人の駆逐艦ではない艦娘がいた。



『試飛会』とは日向が制作したラジコン飛行機のテスト飛行を行う会である。

戦艦から航空戦艦へと進化した日向は己の刃を研ぐべく航空機の研究に明け暮れ、定期的に切れ味を試すべくラジコンを製作しては戦艦寮上空を飛行させたり墜落させたりした。

日々を深海棲艦との戦いに費やす艦娘にそのような暇があるのかと問うならば普通は無いと答え、日向は普通という枠を何食わぬ顔で切り捨てた。故に航空戦艦になつてから随分と久しいものの練度には僅かの上昇しか見られず(Lv. 10 ↓ 13)、ラジコン飛行機の製作技術ばかりが無駄に上昇していった。勿論、この技術が深海棲艦に対する抑止力となった例は一度として……いや一度だけ、深海棲艦になりかけた艦娘を止めたことならあった。その一度だけだった。本末転倒も甚だしかった。

「艦娘としてあんたそれでいいの!？」

総旗艦・叢雲に激怒されることは度々あり、日向も猫の額くらいは気にしている。ところで猫の額とは面積の狭さを例える言葉であり思慮の大小を表すのには使えないのではと日向は疑問に思い、つまり全く気にしていないと同義とも言えた。これぞ鋼のメンタルの成せる業である。

日向が製作するラジコンはいかなる機種であれ、全体をヘチマのような緑色に塗装され、両翼と胴体には赤いマル模様が入られる。機体下部には固定翼機や回転翼機、アダムスキー型未確認飛行機だろうと何だろうと例外無く水上に浮かぶためのフロートが無理やり取り付けられ、つまりは瑞雲化改修が行われた。

制作する飛行機の機種はいつも自由自在だった。F-22ラプター、F-35ライトニングII、A-10サンダーボルトII、Ka-50ホーカム、V-22オスプレイ、サボイアS. 21、SH-60K、テポドン2号、コンコルド、気球船、果てはハインケル・レルヒエのような珍機体(特に航空戦艦が運用できそうなもの多)などがプロペラ駆動のラジコン飛行機となった。

半強制的に観覧に招待された最上が見守る中、日向のラジコンは艦察前の空を優雅に飛行した。あるいは制御不能に陥った機体が爆発しない巡航ミサイルとして最上の頭や山城の部屋、斑鳩の意識、金剛の後頭部、弾道ミサイルとして北鎮守府の執務室を狙ったりもした。それらの経験はすべて日向の糧となり、最上の精神的重石となった。



「アノ、チョットイイデスカ」と、まさか駆逐艦が無防備に近寄ってきたものだから最上は慌てた。

「危ない！ 伏せて！」

「エツ、危ナイ？」

最上はラグビーのタツクルめいて春雨を押し倒した。直後、春雨の頭があつたまさにその場所をラジコン飛行機がチエツクポイント通過のような正確さで風を切った。間一髪、という言葉がこれほど当てはまるタイミングはなかなか無い。

今回の試飛会の飛行機は（当時の）時事ネタよりP-1哨戒機である。もちろん瑞雲化改修が例に漏れず施されており元の姿とはだいぶ違っている。

「ふう……。危ないよキミ！ どうして迂闊に近づいてくるかなあ！」

「エツ、エツ、危ナイ？」

「さあ、早く逃げて！」

「ア、アノ、少シ話ヲ——」

「逃げるんだ！ 走って！」

「ハ、ハイイ！」

何の用事だったか彼女は知らないが、最上は1人の駆逐艦を救った。『いつも通りのお約束』という意味不明な脅威が発動しても、犠牲者は出ていない。最上はやれたのであった。

「何だ、さっきのは」とP-1哨戒機の持ち主、日向が言った。

「さあ。でもたぶん大した用事じゃあなかったんですよ」
「そうなのか。せっかくだから本物の低空飛行哨戒を見ていけばよかったものを」

「そ、それはボクが見てますか、ら……あれ？ 飛行機は？」
「む。そういえば」

今日の最上の勘はとことん冴えていた。

低空飛行。哨戒。

ほんの一瞬でもコントロールを失ったP-1哨戒機を、最上は事故が起るより前に発見することができた。

だが、発見しただけで飛行物体が停止する道理はない。

P-1哨戒機は背を向けて走る春雨目掛けて速度を増していた。



「イタタ……」

「はい。ここでいい？」

「ウン。アリガトウ、姉サン」

白露に背中に湿布を貼ってもらった春雨は、ぎこちなくベッドにうつぶせになった。

「ところで春雨。さっきの深海棲艦がどうかって、結局どういう意味だったの？」

「……ゲームセンター以外デハ、勘違いダツタミタイ」

「ふーん？ そうなんだ」

「姉サンモ忘レテイイヨ」

「えー、でも可愛かったよ」

「ソレガ1番違ウンダケドナア……」

【家でプレイステーションか艦これをしてろ！】

「ん……………」

大和は自分の席でうつらうつらしていた。
昨夜寝ていないのもあるが。
今は春。
だから仕方がない。



「あらっ？」

大和のスマートフォンが鳴った。

電話を掛けてきたのは珍しく——通話することは別に珍しくもない相手だったが、向こうから掛けてきたのは珍しいことだった。

大和も電話をしようしようと考えてはいたものの、この忙しきでなかなか時間を作れなかったため、まあ小休止にも丁度良かった。

「もしもし武蔵？ 私も電話しようと思ってたのよ。そっちはいま大丈夫？」

《……………すまない。大和型の姉妹艦に頼みが……………いや……………》

「万策尽きた？」

《この電話が……………最後の策だ、な》

まあ、そうなるわよね。

大和型はかしこいが。ハタから見ていると意見が分かれるが。彼女らも意識的にそうとは思っていないのだが。

なんだかんだ、この2人は姉妹艦思いだった。



猫喫茶『THE HANGED CAT（ハングド・キャット）』も、

艦娘たちが働いているという特徴はあるものの、特別ではない。どころか世界を守る艦娘の安全を守るためには営業自粛以外の選択肢は

なかった。かといってドーカンシヤ達を指導し守るための秘密結社
ハングド・キャットが潰れてしまつては元も子もない。未だ頑にドー
カンシヤを認めようとしなない大和も、矛盾上等でそれは理解してい
る。

幸いなことに直近の確認を取つた段階では、検査を受けた者は全員
陰性だったらしい。また他の者にも症状の出現は見られていないと
のことだった。

《さすがにウイルスに対抗できる能力を持つ洞観者は都合良く見つ
かつていないが――》

能力とは扱い方を工夫してはじめて生きるものである。ウイルス
に対抗できる能力も、実際ないこともなくはなかった。

ただ残念ながらその能力を持つ者が天照大艦隊の売店のお姉さん・
第79話を映す視点役・極楽で、対抗方法とは火炎放射器を大量に具
現化するというものだった。

「イタリアのどっかの知事がそんなこと言つてたぞ。本場の自肅警察
は装備が違うな」

この有難迷惑な申し出に賛同者が8人もいた（極楽を師匠と崇める
5人はともかく他の3人はなんなんだ）から武蔵は逆に冷然……いや
冷静になれた。

《――クラウドファンディングについての知識を提供してくれた者
や、シンプルに支援金を寄せてくれた陛下、他にもかなり助けられて
いてな。今のところ、どう楽観的に計算してもギリギリアウトではあ
るが……仲間たちがいなければ、私1人ではとつくに潰れていた》
「そもそも1人じゃあないからハングド・キャットがあるのでしよ
うに」

《ああ――その通りだ》と言う武蔵にその気はなかったものの、姉妹艦
の大和には伝わった。やっと気付けた。今の言葉は武蔵にとつてな
かなか良かったらしい。

武蔵のメンタルはとても硬い。
が、しかし脆い。

そのことを大和は、ハングド・キャットの開店告知チラシを自慢気

に送られて店に殴り込みをかけて実際武蔵を殴り倒して何から何まで喋らせるまで『知らなかった』。

気付けなかった。

このことが大和にとってどれほど恥辱的だったことか。

今の状況下でもし武蔵に頼られなかったら、大和はまた殴り倒しに行くつもりでいた。

「でもその『陛下』って誰？　ずいぶんと余裕のある艦娘なのね」

《んー……向こうに余裕があるかは正直なところ分からん。もしノブレス・オブリージュとやらの遂行ならば「自分を優先しろ」と遠慮するのも侮辱になるしなあ。かといってあそこの状況もまったく——》
「どっか？」

《ネオサイタマ鎮守府》

「大和型戦艦Ⅰ番艦『撃沈王』大和が命じます。今すぐ全額返しなさい。代わりにその分だけ私が追加で出すから」

《いや、しかしだな》

「ネオサイタマ鎮守府に借りを作るって何考えてるの？　KAN—SEN—YAKUZUに絞り上げられたいの？」

《いやネオサイタマを拠点とするだけで悪い奴らでは……かなりのスピード感でハングド・キャットの危機をだな》

「ドーカンシャ達に重金属で汚染されたマスクを着けさせたいの!？」

《……マスク、単価が上がりすぎてだな》

「だったら燃料フィルターでも口に啣えてなさい！　このおバカ！」

大和ははたと気づいた。オフィスで働いているマスク顔の皆が皆、大和を見ていることに。

皆、大和がハングド・キャットでも大切な仕事をしているのは知っている。仕事相手がかつてここに顔を出していた大和型戦艦2番艦だと聞かされたら納得せざるを得ない。しかしあくまで納得したのは『仕事相手』であり、『仕事内容』は話せることではない、と説明はされないまま。燃料フィルターを口に啣えさせる仕事とは何なのか。

「大和さん、大丈夫ですか？」

右隣の初月に気遣われてしまった。

「ありがとう大丈夫。ど、どうもお騒がせしましたー……」
大和はペコペコしながらオフィスの外に出ていった。



廊下の隅っこにて。

「それで、私は何を提供すればいい？ お金？ 全自動コーヒーメーカー？」

《猫関連、食料とか猫砂とか》

「え？ その猫たちがキャットフード食べてるの、私見たことないわよ」

《何も食べない猫の毛並みがこんなに良いわけが——よしよし珍しく良い子だ——ないだろう》

「言われなくても分かりますう。でも私が買ったおやつは食べてくれなかったんですけどお。お金返してくれますう？」

《それはそうだろう。お前は艦娘、それも艦娘オブ艦娘なのだから》
「ドーカンシヤに唯一のメリツトがあつてよかつたわね」

《ほとんどの猫たちがお客さんの視線を嫌つてな。おやつは誘惑の方が勝るらしいが。それにお前はたしかまだトイレ部屋は見たことがなかつたはずだ》

「じゃあ餌と、その……あれ、えっと、そう猫砂をどれくらい送ればいい？」

《いや。ここの猫たちは賢さに比例するように好みのベクトルがバラバラかつ大きい。最も賢い猫は燃費がものすごく悪痛つ!》

「なにごと？」

《久々にひつかかれた。とにかく我々洞観者が猫の手を借りるのなら、それぞれに好みのものを与える必要がある》

「つまり——やっぱりお金じゃあないの」
《すまん……》

「私はもともとそのつもりだったから、武蔵はネオサイタマ鎮守府をどうするか考えてなさい。後はお互い適当に。頑張りなs……何で

もない。じゃあね」

余計なことを言い捨てて通話を切ってしまった、ああ失敗やれやれだった。

こんな時こそ Twitter でそれっぽいことをつぶやくのが——良くないわね、武蔵に指摘されるまでもない。大和型はかしこいのである。

だが……だが、である。

廊下の見える範囲には誰もいない。人のことを言えない。少しくらい弱々しい顔をしてため息をつく程度は許されるだろう。

武蔵に余裕がない状況下で、大和に余裕があるはずがない。

大和は壁に寄りかかって、少し目を瞑った。まばたきより少し長い間——大和は油断した。

『C I A O ちゅるを送るのです』
白いセーラー服。無闇なドヤ顔。そして前足を持って吊るされた白猫。

大和の目の前に、妖怪がいた。



「ひああ……っ！」

大和は椅子をガタツと揺らして跳ね起きた。

つまり、居眠りをしてしまっていた。

右隣を見ると、当然、初月がいる。

「大和さん、大丈夫ですか？」

左隣を見ると、当然、扶桑がいる。

「大和、少し疲れているのね」

ぐるりと見渡したオフィスは、夢？ で見たものとはひとつだけ違っていた。誰もマスクを着けていない。

「……ごめん。20分だけ仮眠とってくる」

オフィスの外に出た大和はすぐに電話を掛けた。

「武蔵はCIAOちゅる食べたことある？ そんなにおいしいモノなの？ ————食べないわよ！ ただ何となく、今がハンド・キヤットのお猫様に貢ぎ物をするタイミングかなって。 ————勘よ。撃沈王の勘。じゃあお金は？ ————だからお金。電子じゃないマネー。 ————こ、これも何となく…… ————それはそうでしょうよ。ええ、心配した私がバカでした。じゃあね」

大和型はかしこいが。ハタから見ていると意見が分かれるが。彼女らも意識的にそうとは思っていないのだが。

なんだかんだ、この2人は姉妹艦思いだっただけだ。ただし少々、歪んでいた。

第81話 球磨争奪戦 ⑥ 提督とか副提督もいる

窓を閉じていても、何かが破裂したような音が2回、売店の方からすれば聞こえるし……まあ、この程度のことならば、どうせまた売店のお姉さんが理解に苦しむニーズに応えたのだろうと、艦隊を指揮する者らは確認する気にもならない。

だがその後には聞こえた、「これ絶対に痛いやつだろう」と誰でも直感的に分かる悲鳴を無視していいはずがない。

総合棟4階、第一執務室の窓からは竹櫛提督と秘書艦の叢雲が顔を覗かせた。竹櫛は大和との疲れる話を終えて戻ったばかりだった。

第二執務室の窓からは一ノ傘副提督と秘書艦の電が悲鳴の発信元を探した。一ノ傘が最後にまともに登場したのが何時の何話だったのか分からないので補足すると、彼女は女性提督で、博多弁十北九州弁十鹿児島弁十 α （十 α が5割を占める）で喋る。

第一執務室と第二執務室は隣室なので、外に顔を出した4人がそのまま空中会議をすることもできる。

「ねー……竹櫛さあ」

一ノ傘の迷惑そうな言葉から会議は始まった。

「アンタさつきまで大和と話しとつたんやろ？ 『アレ』、何なん？」

「私が『アレ』を知っていて許可を出していると思うのか？ そもそも『アレ』はどう見ても大和と……いや待て。あのパンツは丸出しのくせにフードはしっかり被っているのは誰だ？ 陸軍のような格好に見えるが」

「首に入場許可証があるのです」と艦娘らしい優れた視力を発揮する電。「外からのお客様のようですけど、どなたか許可を出しました？」

竹櫛、一ノ傘、叢雲はだんまりした。

この鎮守府は、あきつ丸に続いてまた不審陸軍人の侵入を許したのかと、電も含めた4人は言葉にすたくなかった。

しかし黙ったままでは会議にならない。

「つまり『アレ』は——」と叢雲は分からないなりにまとめた。「入場許可証をどうやってか手に入れたパンツ丸出しの陸軍人と、大和が、

たぶん売店でお姉さんを怒らせたとかで捕縛されて、それと球磨もお姉さんに捕まってどこかに連れて行かれた、ってことね」

「叢雲さん。話がぜんぜんまとまってないのです」

「んなこと分かってるわよ私だって」

「パンツ丸出し陸軍人さんとはもかく、もうひとりには撃沈王ですよ？

いくらお姉さんがあまり普通でないにしても、あの撃沈王がですよ、ああも簡単に地面に転がされます？　この世界のパワーバランスはどうなっているのです？」

「私が知るわけじゃないでしょう。聞かないで」

「きちんとした装備、妖精のサポート、それら無しでも何とかなるレベルの人たちが売店の店主さんひとりに封殺されるって、もう艦娘の立場がないのです。どうしてくれるのです、この無力感？」

「だから私に言わないで。じゃあ電、あんたがアレ達に話を聞いてきて——」

叢雲も無力感からコンディション値を赤く下げていた、その時だった。

ちいさな何か、あるいは誰かが、大和とパンツ丸出しの不審者に目もくれずお姉さんが消えた方へと走り去っていった。「いま何かが」「何なん？」と竹櫛、一ノ傘にはよく見えなかったのも無理からぬことで、動体視力にも優れる艦娘である叢雲と電にはなんとか見えた。

建物4階の高さから俯瞰してようやくそれと分かるアノマラス存在など、叢雲と電が知る限りでは、天照大艦隊には一人しかいない。ちようど艦娘の尊厳を取り戻したかった叢雲と電だが……強い艦娘が駄目ならば、もつと強い艦娘を出せばいいというのは……違う、そうじゃない。

（電、どうする？　どう誤魔化す？）

（叢雲さん、後で長月にお説教を）

微妙に息が合っていない秘書艦2人のアイコンタクトを邪魔するように、第一執務室の内線電話が俺も会議に混ぜろと鳴き叫んだ。叢雲が乱暴にそれを取る。

「ああもう誰よこんな時に。もしもし？　今ちよつと立て込んでるか

ら後に——あ、ああ失礼しました。そうですね、総旗艦の叢雲です。——
ええ——ええ……え？ んん？ すみません、ちよつと意味が分か
……ですよ、はい、直接確認に向かいます。——そうですね、門だ
け閉じて他は一旦そのまままで。お願いします」

叢雲は電話を終えて、空中会議に新たな厄介事を上げた。

「正門の警備からの連絡だったわ。ええと……見るからに屈強な男4
人が乗った車が鎮守府内に強引に入ってきて、その車の前に売店のお
姉さんが立ったら車がひっくり返って、中から出てきた男たちをお姉
さんがテキパキ拘束して、それから空からロードローラーが3台降つ
てきて車を押し潰した……らしいわ」

「叢雲さん。話どころか自然法則すらぜんぜんまともじゃないので
す。意味が分からないにも程があります」

「だーかーらー、じゃあ電、あんたが正門に行つて直接その目で確認し
てきなさい。これ総旗艦命令だから。今すぐ行きなさい」

「おのれ総旗艦、ズルいのです」

「では私も提督として命令するでしょう。一ノ傘副提督、お前も大和
のところに行つてアレの事情を確認してくるのだ」

「おのれクソ提督、ズルい奴め」

◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆

別のシリーズからで申し訳ないです。

別シリーズ：撃沈王の土産話

最新話【艦船ステータス】

その直後に発生したインシデントです。



長月が口を滑らせてくれたおかげで、私と電、分隊の斑鳩は、大和がスーパーアカウンタを持つてを知った。いや、それ以前にスーパーアカウンタなるものの存在を知った（私の推測だけど、斑鳩は今まで知らなかった振りをしてた）。

大和がそのアカウンタでログインしたアプリを起動したまま街中を歩くと、もし近くに艦娘がいた場合、同意も無しにその子を自分の部隊に編成したり詳細情報を取得したり、勝手に物を装備／解除したり、それとここからは私たちの推測だけど、無理矢理アイス最中を口に突っ込ませたり、問答無用のロック解除から解体や近代化改修（あるいはその素材に）したり、練度99なら一方的なケツコンカツコカりだって可能なはず。

「でも叢雲さん。思うのですけど」と向かいに座って昼餉のチャーハンセットにいただきますする電は言う。「大和さんなら、どれも『撃沈王の命令』とか言えば大抵の艦娘は逆らえなくないですか？ きつと普通の艦娘には分からない理由があるんだと思って。それにそもそも、権力が通じないなら当然のように腕力に頼るタイプですよね、あの人」

「まあ、確かにね。電ならどうする？ いきなり『解体されろ』って言われたら」

「説明を要求しますし、たぶんできる限りの抵抗はします。でも……指輪だけは手放さないのです」

長月はスーパーアカウンタの存在を漏らした罰として分隊の方で自主的な反省中で、そのスーパーアカウンタを持つ大和がひきこもる部屋の監視任務をやっている。

聞いた話によると大和は、頭がおかしくなるほど疲労を溜めこんで、複合機（コピーとか印刷とかする事務機械。断じて生物ではない）にお茶を飲ませるといふ奇行に及んだらしい。その直前、深夜にずっと自撮りをやっていた記録も見つかっていて、

「もう死にたい……誰か私を殺して……」

と発言したことから、大和型戦艦2番艦・武蔵の助言もあって北鎮守府で休んでいるのだとか。

「理由は分からないのですが、何かの間違いだったと思うのです。疲れているのは事実だとしても」

「ウミガメのスープとかの水平思考パズルみたいな事が実際に起こったって？ 何をどう間違えたら複合機にお茶を飲ませるのか……うん、サッパリ分からない。それはともかく電も、疲れたのなら言いなさいよ」

「そっくりそのままお返しするのです」

うどんの上のエビ天が丁度いい感じになってきたので食べようとしたりとこころだった。騒がしい雰囲気近づいてきて、私と電は目配せし合った。

「総旗艦が2人、ちよーどいーねー、いーよいーよー」

「時津風、総旗艦はこの人だけなのです」と私を指さす電。

「時津風、仕事の相談ならそつちに言いなさい」と電を指さす私。

「2人とも、この話は知ってる？」

時津風は私たち2人にだけ話があるらしく、キョロキョロ警戒しつつココソコ言った。

「天照大艦隊七不思議」



鎮守府に七不思議なんてものがあっていいはずがない。もしあるならそれは『不思議』ではなく『管理不十分』と言う。

私が言えた事じゃあない管理不十分はたくさんあったけど……多分まだあるだろうけど……総旗艦として、適切に対処していく所存で

す。

電も同じ考えであってくれてるらしく、ビシッと言ってくれた。

「時津風……鎮守府の中でお化けを目撃してもいちいち報告しないように、って忘れたのです?」

「お化けじゃないよっ! ……でも言われてみると、どっちかがお化けかも」

どっちかが?」

「お化けかもしれないなら、それはプラズマなのです」と言い切るプラズマ。「全部のお仕事がこんな風に『それはプラズマです』で説明できれば楽でいいのに」

「じゃあ電は、親潮と朝潮、どっちがプラズマだと思う?」

「はい?」と電。

「なんですって?」と私。

「ほらーやっぱり誰も気付いてないもん。でもあたし、ちゃんと調べたからね」

時津風が言う天照大艦隊七不思議のひとつ。

「親潮と朝潮、2人ともいるけど、本当はどっちか1人しかいないんだよ。怖くない?」



食堂を見渡すと、すぐに見つけた。

「親潮があそこで食べてるじゃあないの。マシユ風の横、大淀の後ろ」
私が言うなりマシユ風はスマホを取り出して——私のスマホが鳴った。

《総旗艦叢雲。私のことはマシユか浜風かのどちらかで呼んでください、と何度もお願ひしたはずです》

「大変失礼致しました」

私は言い直した。

「マシユの横、大淀の後ろ、ほらあそこ。親潮がちゃんというじゃあないの」

「じゃあ朝潮は？ いま何処にいる？」

「んー、食堂にはいないみたいだけど――。電。今進行中の任務に朝潮は入ってたっけ？ 入ってないわよね？」

「はい。今日の仕事はないはずなのです」

「分隊に手伝いに出てる駆逐艦は長月を除けば特型からだけだし、なら朝潮は売店にでも行ってるんでしようよ」

「どこにもいない」と妙に強気に言い切る時津風。「売店にも、寮にも、トイレにもお風呂にも、絶対いない」

電は飼い主とはぐれた犬をなだめるように言った。

「時津風、疲れているなら北鎮守府で休みます？ 今なら撃沈王に添い寝できるのです」

「いないもん！」

「本当に鎮守府にいないのなら……外出許可願も今日はまだ誰からもないし、いやでも、いないはずがないでしょう」

またスマホを取り出して、今度は朝潮に電話をかけてみた。するとすぐに出てくれた。

《お疲れ様です叢雲さん。新しい任務ですか？》

仕事に対して真面目すぎる。

「いえ、朝潮がいま何処にいるかなって」

《この朝潮が、ですか？》

「ええ。悪いわね変なこと聞いて」

《今はお昼なので食堂にいますが》

「食堂？」

《あ、後ろです。叢雲さんの――》―背後からですみません」

生の声が後ろから聞こえて振り返ると、プラズマではない普通の朝潮がすぐそこにいた。

「電さんと時津風さんもお疲れ様です。この4人での任務でしょうか」

「ごめん。本当にただ朝潮が何処にいるか気になっただけなのよ」

「はい。所在確認は大事だと思います」

「ほら時津風、この通りよ」

では親潮だった。



聞くのが怖い。でも総旗艦として聞かないわけにはいかない。

「ね、ねえ時津風。その……天照大艦隊七不思議ってのは、こんなの他に6つもあるの?」

「むっふっふっ叢雲も興味あるでしょ? 興味あるよね? だよねだよね?」

「いや、だって……」

親潮は確かにこの艦隊にいる。

朝潮も確かにこの艦隊にいる。

なのに、いくら手を尽くしても、2人のどちらかしか存在を確認できない上に『なにも矛盾しない』。

「頭がおかしくなりそう……なのに、矛盾しないから現実を受け入れるしかないって悪夢じゃあないの。だから他6つの悪夢——艦隊のバグも、今、まとめて教えて。ああ寒気がしてきたわ。本棚の裏にある大きなのがずつと潜んでみたいな、ああ変なこと思い出しちゃったじゃあないの」

「そこまで怖い? 七不思議なんてずーつと昔からあるじゃん。たぶん艦これ七不思議も腐るほどあるし、天照大艦隊七不思議は2つ目がもう少しで出来るところだから、乞うご期待!」

「は? もう少しで……出来る? 何が?」

「でもそんなに知れたがりな叢雲にだけ、こっそり予告してあげる」

なにがなんだか分からないけど、私は……。

「ゴトランドって艦娘のこと知ってるよね? 知らないわけないよね? だって『司令と副司令の初期艦なんだから』」

第82話 球磨争奪戦 ⑦ ?性? ツペ
?????

長月はともかくとして、鋼のメンタルを持つ日向、そして売店のお姉さんこと極楽まで。

強者が何故コソコソしなければならぬのか。

強いのだから堂々と歩きたい方向へ歩き、コンクリートの壁が邪魔ならば砕き、交通ルールでは誰が最も優先されるべきかを教えてやるのが強者の務めなのだ、さきほど極楽が片足で自動車をひっくり返したように。

だのに強者三人ときたらコソコソと、あろうことか腰の高さほどの生垣の裏に隠れていた。隠れるなど弱者の所業に他ならない。アフリカゾウが弱肉強食の地で巨軀を隠すだろうか？

「やっぱり、だ、誰か連れてきたほうが……」

そう言っただけ立ち上がりとした長月の頭を、極楽は「狙撃的だ阿呆。戦場なら死ぞ」とよく分からない理由で引つ込めさせた。

「だが、どうする？」と日向。「航空戦艦はおよそ万能だが限度もある」「いいからコイツの様子を見てろ。1分待て。私の頭を回す」



理由は重要ではない。

ただ確かな事実として、球磨は売店でアサルトライフルと弾薬を万引きした。極楽が見ている前でも構わず堂々と掴み・使い・持ち去ったことを万引きと言い表せるのかはともかく、球磨には慈悲深い教育が必要だった。許容範囲を超えた愛情をそそがれた暁には売店内の空気にもお金を払うと言っただけ聞かなくなるに違いない。取り敢えず売店から持ち出されたアサルトライフルは一発すら使われることなく、極楽はすぐに球磨を捕獲した。

ここまでは極楽の考える『後でどうとでもなる』の範囲内だった。

極楽がさてインタビュ（尋問）（愛情）するかと球磨を脇に抱えたところで現れたのが、また面倒なことに長月だった。

長月はその球磨を渡せと言う。危ない奴が球磨を狙っているから喫茶店ハングド・キャットで匿まうと主張する。恐らく長月が言っているであろう危ない奴とは売店で暴れた陸軍人のことだろうし、それならとつくに無力化して地面に転がしているし、1週間後にしろと極楽が譲歩してやったにもかかわらず長月は今すぐにと言う。ワガママ！

『互いを知っている』二人は、原始的な奪い合いを始めてしまった。単純に、地と空を駆けるスピードは長月のほうが優れる。大和型戦艦撃破50% Speedrun (RTA) 走者から逃れられる生物など地球上に存在するだろうか？

ここに最低一名存在した。

長月が「掴んだ！」と思ったものは球磨を抱えていない極楽の写し身、本物は50メートル離れた電柱の上にあった。極楽のドヤ顔は実際のところハツタリで、フィジカルモンスターと1対1の追いかけてこ、それも人間一人を抱えながらでは少々分が悪い。

極楽の写し身が使ったレーザー銃の電撃をまったく意に介さず再度突進する長月。

また新たにチープな足止めの策を具現化する極楽。

航空戦艦が介入するまで時間にして30秒程度の追いかけてこだったが、二人のそれを強いて例えるならば、弾道ミサイルと迎撃ミサイルシステムの極限勝負と言ったところか。

つまり——化け物たちの勝負に付き合わされ物理的に振り回された、普通より少々優秀な程度の球磨が無事であるはずがなかった。



それはまあ極楽も、万引き犯を素っ裸にして売店の前で正座させようとは思っていた。だが、どうだろう、いま気絶して地面に寝かせている球磨もほぼ裸だ。辛うじてセーフと判断する者と即通報する者とでハッキリ分かれるだろう。

衣服を脱がせるのと、結果的に衣服が無くなった、ではまったく意

味が異なる。艦娘たちは激闘の中で好き好んで制服をビリビリに破くのか？ 少なくとも天照大艦隊の中にそんな趣味を持つ者はいない。

たった30秒の間で服がほぼ無くなってしまいう程のダメージを受けた球磨の様子は、極楽・長月・日向に——真の強者たちに、

(これは……マズい)

そう思わせた。それ以上の具体的な描写を無意識に避けた。ところで。

とんでもなく今更な事ではあるが、この世界には高速修復材いわゆるバケツというものが無い。この時点まで一切描写していない(はず。……間違いが無ければ。かなり自信がない)。風呂兼ドックはある。応急修理要員・女神もある。

だが医務室もある。医者もいる。大事であれば外の大きな病院に移す。医療関係者は口を揃えて「一瞬で修復？ 医療にオカルトを持ち込むな」と言う。



「よし」と1分を4秒オーバーして極楽は頭を上げた。

「我が球磨のコピーを作って、しばらくそつちを本物として生活させる。長月お前は、そろそろ捕縛した大和と陸軍人が野次馬を集めてるだろうから——」

「ああ、そういえばお姉さんを追いかけてた途中に何かいたな」

『齟齬があつた何もなかった』とか言つて全員解散させてこい。大和と陸軍人もだ。もし陸軍人がゴネるようであれば、構わん、ぶちのめせ」

「球磨は任せていいんだな」

「我的人脈はお前の想像の数百倍に達する。ほら騒ぎが大きくなる前に、さあ行け急げ」

「分かった」

長月は何も疑問に思う様子もなく生垣の裏から飛び出していった。

「お姉さん。コピー、とは何を意味するのだろうか？」と日向は当然知らない。

「分身とかクローンとか、そんなんと思つとけ」

「ふむ……長月の疑いがない反応を見るに、不思議だが可能なのだろうか」

航空戦艦の頭脳は、ニンジャが何人に分身しようとも混乱しないほど実際柔らかい。

「日向はそこ、正門の混乱をなんとかしてこい。というか球磨はここから迂闊に動かせる状態じゃあないから、我がコピーを作り終えるまで誰もここに近付けさせるな。覗かれたら球磨は死ぬ、尊厳を失うという意味で」

「身体を隠すものくらい取ってくるが？」

極楽が指をパチンと鳴らすと、青い炎が一瞬だけ薄く広く広がって、それがそのままブルーシートの形に具現した。ついでに、それを見せた航空戦艦に「ほう。やるものだ」とコピー云々の大凡の理屈を理解させた。

「べつに今更、大浴場を使う連中が鎮守府内で裸を見られたところで死にはせん。死にはせんが……過去、ただ唯一のたった一人だけコピーを作るのに全面的に同意し協力した頭のおかしい人間ですら、作業後に目撃者を、つまり我を殺そうとした。……まあ我も、マイナスドライバーで刺されてやるくらいには……アレだったな」

という理由で売店のアルバイト、磯風のコピーが作られることは、一度さえ我慢すれば後々どれだけ便利になるか明らかであつても永遠にない。

「お姉さんに任せてよいものか疑問に思えてきた」

「今はその協力者は2倍の生を楽しんでる。勝手にコピーを応用して好き勝手やってるくらいだ、球磨なら喉元過ぎればアレ以上に好き勝手やるだろ。たぶん」

「……………球磨を思うなら急いだ方がよさそうだ。作業にはどれくらい時間がかかる？」

「前の時は、我の方が躊躇したせいで1時間以上かけてしまったから

な。そうだな、【今回は30分くらいで完了するはずだ】

「まあ、お姉さんを信用しなければ進む話も進むまい。私も行くぞ」

「もし球磨の悲鳴っぽい何かか聞こえても——」

「いや、もう十分だ。これ以上聞くと逆にお姉さんを止めたくなる」



天照隊の副提督、一ノ傘鉄子は思った。

これ、ワタシの仕事やなくない？

撃沈王大和不審パンツ丸出し陸軍人の二人が、背中合わせて捕縛された状態で雑に放置されている。地球ロックされるでもなく見張りが立っているでもなく、しつこく巻かれた結束バンドだけに二人を任せるあまりの雑さ。手も足も（二人が協力し合わなければ）動かせないようだから危険は少なく拳銃も刺股も不要だろう。

アンタらウチの鎮守府で何しとるん？ と聴取するだけならば普通は長門あたりに任せるし、万が一を考えるならば一ノ傘より長門のほうがずっと適任だと誰でも考える（竹櫛提督の場合は山城か霧島に事を投げる）。提督から副提督に「D o i t .」と命令されたとはいえ——そんなん知らん。

しかし天照隊の副提督、一ノ傘鉄子はこうも思った。

陸軍人なら……珍しい装備、持つとるよねえ。

以前（第31、32話）鎮守府に愚かにも侵入した不審陸軍人あきつ丸からは、見逃す対価としてカ号観測機を置いていかせた。天照隊の対潜戦闘能力がどれほど向上したことか、一ノ傘は笑いが止まらず無駄に敵潜水艦を狩りまくり「もう投げる爆雷が残ってないのです！」と電に怒られた。

副提督としては、次は強力な対地装備が欲しい。

「貴様は陸軍とサンタクローズ村を識別できないのか？」

不審パンツ丸出し陸軍人、神州丸は拘束され横たわっていなながらも

強気、いや——。

話がしたい。だから一歩、近寄った。

一步。

ただの一步。

だが一ノ傘の経験になかった一步。

足が勝手に止まってくれた方がいいが、それを感じ取れてしまったことが手遅れの左証。

それは、誰もが言葉だけは知っている。

それを『間合い』と言う。

「本艦に迂闊に近寄らないことは褒めてやる。天照大艦隊の副提督、一ノ傘鉄子」

一ノ傘より先に五人の野次馬艦娘が集まっていた、のだが、一ノ傘と陸軍人二人とやはり同じ距離に縫い付けられ何もできないでいた。何もできない。本当に何も。「不審パンツ丸出し陸軍人発見！」と笑えない。笑えば——死ぬ。殺される。スマートフォンに本艦の情報を4ピクセルでも記録したら殺す、などと言われたわけではない。数分前の球磨のように刃を突き付けられ勝手に駆け引きをはじめたわけでもない。今一度の確認、陸軍人の手足は動かせる状態にない。それでも。

この陸軍人は、あまりに恐ろしかった。

球磨のサバイバルゲーム仲間でありエアガンを買い漁っている一ノ傘は目敏く拳銃に似たもの、テザー銃が落ちているのを見つけた。……だから何だというのか。自分が死ぬ理由を増やしてどうする。

「すみませーん。どなたかハサミか何か持ってきてもらえると助かるのですが……」と大和は簡単に言う。

冗談じゃあない。

テザー銃ですら何も保証されないというのに。

ハサミなど、そんな『危険極まる凶器』を持って近付けば切り裂かれるのは首か、それとも突き破って心臓か。



「大和を取り囲んで、一ノ傘たちは何をしているのだ？」
「さあ？」

総合棟4階、第一執務室にいる竹櫛と叢雲には分かるはずもない。
神州丸——専門家はあの球磨の背後を取れるのだ。自他の気配を
殺す者が間合いより外に恐怖を振り撒くはずもない。

縛られている陸軍人など、安全な位置からでは『どうせまた、あき
つ丸みたいな阿呆なのだろう』としか見られない。

「そういえば副司令は結束バンドを切るものを持っていったのかし
ら」

「売店のお姉さんがわざわざ縛ったものを切ってよいのだろうか」

「んー……いや大和の方はいいでしょう。事情があったとしても」

「事情か。誰もまったく動かない、と言うより硬直している理由と関
係があるのだろうか」

「大和は何か言ってるみたいね」



「あのー、一ノ傘副提督？」

大和には見えないのか。わずかに震える一ノ傘の足が。

「こんな醜態をさらしながらのお願いで——」

「いま、長門を呼ぶけんが」

そうは言うものの。

「そのまま待つといて。お願いやけん動かんでね。……みんな、下手
に動いちゃあいけんよ」

組織を束ねる者の一人として命令を絞り出した。しかし脂汗が出
るばかりで自分のスマートフォンを取り出すことさえできないでい
た。

何でもいい、この状況を変えてくれる要素が……。

「おーいー！ そのみんなー！」

要素は、とても軽い感じで来てくれた。



いかな長月として普通の感覚を忘れたわけではない。陸軍人はどうやら近付く者を殺したらしい。あまり近い距離で可愛いパンツ（長月のより可愛い）を見られたくないのだろうか。

しかし残念。よほど消耗していない限り、刃が心臓を貫いた程度で長月は倒れない。まあまあ痛いことは痛いかもしれないが、貫いた刃が魔を帯びていたならばむしろ真の力に目覚めてしまう可能性すらある（ない）。

危ないけん来んな！ と一ノ傘が警告するより先に陸軍人の間合いに入ったカレンダーズ8番艦、ハングド・キャットの関係者と知られた少女は——あまり物語をインフレさせるべきではないのだが……上には上があるから仕方がない。

「みんな聞いてくれ」長月は言う。「これは……えーと……間違いだ」「は？」と神州丸。

「ほら、よくあるだろ、間違い。例えば……間違い電話とか、音楽性の違いとか……そういうアレがあったんだ。だよな？ 大和、ゴツドランド」

長月がジャージのポケットから取り出したのは手のひらサイズのカッターナイフ。青い炎の刃を顕現させるには何でもいいから依代となる刃物が必要で、いつも念の為に持ち歩いている。

そのカッターナイフで二人を縛る結束バンドを切る——ように、一ノ傘ら野次馬たちには見せ掛けた。

大和と神州丸（長月はまだ彼女の本名を知らない）には、素手で結束バンドを引き千切って見せて、

「そうだろう二人とも。ちよつとした間違いだったよな？ な？」

「え、ええ……私の勘違いだった、かも？」と大和。

「……………この状況は本意ではなかった」神州丸は、後でハングド・キャットに関するレポートを真面目に読み返そうと思った。

拘束を解いて長月の仕事はだいたい終わった。陸軍人ゴツドランドも抵抗しそうにないし、後はみんな勝手に帰ってくれるだろうと楽

観的に考えた。

気になる売店のお姉さん、極楽の方は——見ると、ちょうど球磨がこちらに向かって走ってきていた。どうやらあちらも上手くいったらしい。流石はお姉さん、「仕事が随分と早い」。

睦月たちのところに戻る前に、念の為ゴッドランドが帰るのを見届けたほうがいいだろうと彼女を見ると、振動するスマートフォンを取り出していた。



このタイミングで電話を掛けてくる空気の読めなさ、やはりあきつ丸からだった。神州丸は着信画面を苛立たしく見た。

現在時刻、第76話（球磨争奪戦 ① アサシンフリート）で斑鳩がこう話している時である。

「でも、なーんか引つかかるんだよね。黒風ちゃんみたいに、姉妹艦がいるから、相当の理由を持っていてヤーナム泊地の仲間になりたがる人がそうそういる？ いや普通じゃない。きな臭い。……こういう時に球磨さんがいてくれたらなあ」

あきつ丸からの呼び寄せを利用し、うっかり天照大艦隊の分隊ではなく本隊の方に行ってしまった、手違いで南鎮守府に入ってしまった、そんな『てい』で球磨を確保する計画を練ったのは神州丸たちだった。

それがどうだ。

時間を掛け過ぎた。まだ球磨を確保できていない。おまけに結束バンドを手編み糸のごとく引き千切る謎のバケモノに目を付けられた。

作戦は、ほぼ失敗した。

逃げるは逃げるとしてその前に、あきつ丸に八つ当たりしたい気分だった。



ああ間違いやったん？　なんだ心配して損した。……と思えるほど一ノ傘鉄子は能天気な生き方をしていない。

大和は善し悪しも分かりづらい、ぎこちない表情をしている。

陸軍人はスマートフォンを睨んでいる。

拘束が解かれた二人は先程、立ち上がると、テザー銃からワイヤーで繋がる背中に刺さった電極を文句のひとつも言わずに自分で乱暴に抜いた。一ノ傘は銃火器が好きでもテザー銃には詳しくなく体験したこともない。それでも「間違い」で撃たれてよいとは思えないほど強烈なのは知っているし、釣り針のようなカエシがある電極の針は見るから痛そう。そんなものを二人は「間違いだった」で納得した？

恐らく事情を知っている長月は……何故『並べて世は事も無し』という態度をされている？

副提督として明らかにすべき何かがあるらしい。

立場が上の撃沈王。

許可されていない入場許可証を持つ陸軍人。

偶然居合わせた？　カレンダーズの一人、長月。

今ここにはいない売店のお姉さん、それに球磨。

全員から、全員の話の辻褄が合うまで、徹底的に聞き取る必要が――

ドン。

と一ノ傘は背後から何かにぶつかられて転んだ。

前を見ずに走ってきた時津風でさえ大人を倒すほど強くはぶつかってこなかった。転んだ先はコンクリート。サバイバルゲームでもこれほど派手で痛いアクシデントに見舞われたことはない。

「オレ達を……甘く……っ！」

一ノ傘に体当たりをかましてくれたらしい、この声は天龍。

「っ……あた、ま……おかしく……？」

もう一人は、苦しそうだが龍田？

後ろを振り向くと、天龍が右に、龍田が左に投げ飛ばされたところ

だった。

投げ飛ばしたのは、球磨。邪魔な二人を掻き分けたようにも見えた。ゴミのように退けた。

球磨は両手の下から伸びる刃、二人分の血を吸ったばかりのアサシンブレードを一ノ傘に向け、飛び掛かってきた。

先程まで感じていたのは、恐怖。

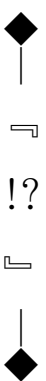
今、感じているのは——何もかもを最後にする、死。



「あーもう！ 邪魔するな引つ掻くな猫畜生が！ いいか、お前が我の邪魔をすればするだけコイツはアへ顔を晒し続けるんだぞ！ 分からののか！ 分からんよな、猫に言うだけ無駄だよなクソが！」



ここから本編と関係ないヤツ



この話は「SCP財団」に基づきます。

<http://ja.scp.wiki.net/>

このコンテンツは、クリエイティブ・コモンズ 表示—継承3.0 ライセンス (<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/deed.ja>) の元で利用可能です。

加えて、上記ライセンスに関する記述は妖怪猫抱きフック「アングリーSCPナード」のライセンスガイドより丸コピしています。

<https://scp-event.tokyo/licenses/ing-guide/>

◆ ◆
自らを『初期艦のGottlandですが何か?』と言い張るSCP
???? | JP | 2に私たちはエアリアル日銀砲を以って応戦、この撃
墜に成功した。

◆ ◆
アイテム番号：SCP | ??? | JP

「天照大艦隊七不思議」

オブジェクトクラス：Euclid

特別收容プロトコル：

SCP | ??? | JPは天照大艦隊? 隊が活動拠点とするサイト | 8
1?? 所属のSCP | ??? | JP | aの口をダクトテープで塞ぐことで
收容されます。SCP | ??? | JP | aが食事や睡眠などの前に口を
開くことを要求した場合、要求された者はSCP | ??? | JPについて
発言しないよう「指切拳万」を行った後にダクトテープを必要とされ
る時間だけ剥がしてください。天照大艦隊? 隊関係者にカバース
トリー『あの子、今ちよつとアレだから』を適用することでSCP
| ??? | JP | aの口を塞ぐダクトテープは適切に管理されます。S
CP | ??? | JP | aがサイト | 81?? 外へ出撃するには総旗艦1名
の許可が必要です。

説明：

…：叢雲さんが、自分で作ったカバーストリー『あの子、今ちよつとアレだから』を自分にまで適用させちゃったせいで、現在の天照隊は傍から見てわけのわからない状態になっちゃっています。例えば、
? 鎮守府がサイト | 81?? と呼ばれたことなんて今まで一度もな

かつたんですけどね。なので代わりに、カバーストーリー（これもSCP|???|JP|bと指定しておきましょう）の適用を免れた洞観者である僕から説明しますね。

ドーム。斑鳩です。

SCP|???|JPは、2020年6月27日以降SCP|???|JP|a「陽炎型駆逐艦10番艦 時津風」ちゃんが発見した天照隊内の七不思議です。

「七」不思議、とは言われていますが、特別收容プロトコルが適切であつたおかげでSCP|???|JPは不思議を2つ発露させただけで、現在は非活性化状態にあります。

発見された不思議は以下の2つです。

SCP|???|JP|1：親潮あるいは朝潮

SCP|???|JP|2：初期艦Gotland

ここから、報告書の中で申し訳ないのですが、当然のことながらハッキリさせておきたい事を記させてください。

特別收容プロトコルに指示がないことから分かるとおり、親潮ちゃんあるいは朝潮ちゃん、それとGotlandなる者をもう気にする必要はありません。時津風ちゃんの口をダクトテープで塞いでさえいれば、SCP|???|JPはこれ以上の異常性をばら撒くことなくきちんと收容されるという寸法です。

時津風ちゃんが自分で勝手にダクトテープを剥がす心配？

ありません。

恐らく時津風ちゃんにもSCP|???|JP|bが適用されているとか、指切拳方で約束させているとか、そんなんでしょう。ただ僕が詳しく聞かなかつただけなのですが、何らかの特別な対策を講じる必要などない、だから特別收容プロトコルで『適切に管理されます』と断言されている——と僕は叢雲さんを信じています。

もつとSCP|???|JPについて詳しく調査すべき？

せめてその存在が減法的に推測される残り5つの不思議を明らかにすべき？

ナンセンスです。そんなことはできません。

天照隊には艦隊という性質上、機動部隊の構成員となり得る精鋭、つまり艦娘はたくさんいます。

が、けれども！

提督たちは評議会員ではありません。総旗艦たちはレベル4セキユリテイクリアランスを持つ研究員ではありません。たくさんいるからといって、艦娘たちがDクラスに分類されるなどあつてはなりません。

実験として、時津風ちゃんに、僕の思いつく範囲では……口頭ではなく紙とペンで記述してもらった場合どうなるのか様子を見るとか、？鎮守府から遠く離れた泊地で喋ったらSCP——JP——JPはそこで活性化するのとか——いったい誰が、我ら天照隊に、次にそう識別番号を割り振られるであろうSCP——JP——3にも対処できると保障してくれるのでしょうか。

SCPを収容している自覚が足りない？

ええ、ええ、でしたら是非、胡散臭い財団とやらのエージェントを紹介してください。

この文書が公開された時、恐らく「？」こんな黒塗りが多用されているでしょうけれど、実は「SCP——JP」の黒塗り箇所は最初から黒塗りでした。識別番号なんて元からありません。叢雲さんがそうした理由は2つあります。1つ、時津風ちゃんが見つけてくる面倒事を管理するフォーマットとしてSCP報告書という合理的なものがあったから拝借しただけ（なのだけでも、SCP——JPの説明項目以降は叢雲さんが作成できなかったのは前述の通り）で、将来的には絶対に消去する文書に仮でも番号を与えなくなかった。2つ、もし本当に財団エージェントと接触できたら、SCP——JPの管理はお任せしてしまつて、天照大艦隊七不思議なんて意味不明なものオブジェクトクラスをEucclidからNeutralizedにする方法、というか異常を完全に消し去る方法をお願いだから教えて欲しい……というもの（さては叢雲さん、僕ら洞観者もNeutralizedにするつもりですね）。

僕たちが望んでいるのはSecure（確保）・Contain（収

容)・Protect (保護)でも、Destroy (破壊)・Destroy (破壊)でもなく……英語で、えーと……平和・平穩・また平和です。それでなくても大規模作戦で慌ただしいのに、なんですか異常存在って。勘弁してください。



自分で作ったカバーストーリーに頭をやられてしまった阿呆な私
が、代書してくれた斑鳩にはとても言い辛いんだけど……。

「私の気持ちを酌んで熱弁してくれたのは嬉しいわ。ただ、オブジェ
クトの説明はもうちよつと坦々としてるべきかなって、いやスーパー
秘書艦斑鳩には釈迦に説法だと思ってるのよ」

《にはは……正直、書いてる途中から自覚はありまして》

分かる。私書いたなら多分、時津風と、親潮あるいは朝潮と、自
分を初期艦と言い張る不審者に対する小言まみれになった。

《でも叢雲さんが元にしたSCP報告書っていう体裁なら、特別收容
プロトコルの部分だけで十分じゃないです？ いやあ本当によく出
来てるなーと思ったんですよ。「細かいことは気にするな。とにかく
時津風ちゃんの口をダクトテープで塞げ」で異常がサッパリ解決する
んですもん》

「ええ……その、特別收容プロトコルのことなのだけどね」

《もう電話切つていいですか?》

「斑鳩が番号振った通り、SCP—ナンタラーJP—3が発生したわ。
時津風は、変なものをただ見つけて指をさして、誰かに知らせるだけ
でよかつたみたい」

《全然よくないです。やっぱりSCP—ナンタラーJP、異常存在の
中心は七不思議じゃあなくて時津風ちゃんの方なのでは?》

「今はとにかく新たな異常を……どうにかできる気が全然しないわあ
……」

《そ、そんなにマズいことが……?》

「いや全然。危険度はゼロと言つていいわ。ただ……『庄』だけがすご

「い」

《庄、ですか》

「16時からちょうど1時間の間、戦艦霧島が何か言うのと頭の上に『!?』って出る」

《?!?》

「そうそう。その感じの圧を20倍くらいにしたような」

《いや、ぜんぜん分かりません》

「見れば分かるわ。『!?』が見えるの。なぜか。……ねえ、おかしいのは実は私?。なんで記号が見えるの……?。」

《僕に聞かれても……で、でも少なくとも時津風ちゃんにも見えてたんですよね》

「ええそれはもうハッキリと」

「だって気圧され過ぎて漏らした程だし、とは時津風が気の毒すぎて言えない。」

《霧島当人は、いったいどれだけのコワイ表情と台詞を?》

「廊下の曲がり角でぶつかりそうになっただけ。『おっと』!?』ってものすごい圧で」

《南鎮守府って廊下で不運（ハードラック）と踊（ダンス）ってるんですか?》

「16時からちょうど1時間の間、霧島の周囲ではね」

《……取り敢えず、SCP—ナンタラカンタラ—JP—3の封じ込め、応援しますので》

「応援に来てよ、斑鳩が。私にどうしろって言うのよ」
《………頑張ってください》

◆ — 提督兼マスター、副提督兼指揮官（少し加筆） — ◆

「やった………ついにやったぞっ、山城!」

「やりましたか!」

秘書艦用の椅子を蹴飛ばして、提督を押し退けてパソコンのモニターを奪った。ブラウザは『さあ! この栄光の瞬間をスクショして永久保存してください!』と言わんばかりの表示を——してない。

ただ普通に、見慣れた母港画面で、瑞鳳2号(改二までまだまだ)が待機してるだけだった。瑞鳳をクリックしても「天山は——」とか「彗星は——」とか言うだけで、もちろん天照大艦隊の輝かしい勝利を私たちと共に喜んでくれたりはしない。

「え? 提督まさか、第4作戦(E-4)に瑞鳳2号を送ったんですか? いえ、まあ、1号を温存できたなら、そりゃあいいことですけど」
「なにを言っている」

「というか作戦に成功したなら、普通はリザルト画面とか報酬を見せてくれませんか? どうしてすぐ母港に戻っちゃいますかねー」

「その瑞鳳2号は1時間ほど前に演習を終えたところだぞ。つまり、1時間ほど休ませているとも言う」

「……………つまりつまり、この瑞鳳2号は1時間ほど何もしていないと? さつきからずっと?」

「私が言ったことを繰り返すものではない。それに、いいか、瑞鳳2号と随伴艦たちは休息中だ。休息のない仕事など私は断固認めん」

充実した演習後の艦娘って、むしろキラキラしてるはずなんだけど。

悲報。瑞鳳2号、戦意高揚状態のまま1時間も『おあずけ』される。

「じゃあ、やっぱり予定通り瑞鳳1号を旗艦にして突破したんです?」

私を提督の机から押し退けようとしてくる男を遮りつつ、マウスをポチ、ヨシ! ポチ、ヨシ! 大規模作戦中は1回ポチする毎に指差し確認ヨシ! を怠らない優秀な私。

「ん? ……はあ? ……あの、本当はこんな呼び方したくないんですけど、おい阿呆——いえ、クソ提督」

「なんだ不幸の権化」

「どうして第4作戦のゲージが回復してるんです? 私たち頑張つて、ちよびつと削りましたよね」

「クサイ特効艦攻を3セット。これを用意してボスに与えられたのは擦り傷。……勝てるわけがない……」

「実際に出撃して戦う艦娘、つまり私たちが『あんなの無理!』って言いましたよそりゃあ。でもですね、いくら竹櫛提督のアカウントだからって、秘書艦に一言もなく難易度を下げるとか信じられな……いや、さつきハイテンションで『ついにはやったぞ』とか言っていましたよね? 何やったんです?」

「見ろ、これだ」と提督はスマートフォンを差し出してきた。「まさか、こうもあつさりとカーマを召喚できるとは。先日メルトリリスやアナスタシアの召喚に成功したし、いやはや、聖晶石をコツコツと貯めてきた甲斐があったというものだ」

「はあ。このアンニユイな表情した銀髪の女の子が、そのカーマⅡサンですか」

「非常に強力なアサシンだ」

「はあ。球磨より強いアサシンですか?」

「金背景と星5なら、星5の方に軍配が上がるう」

「はあ。すごいですね。ところで提督、このカーマⅡサンは艦娘ですか?」

「サーヴァントだ。艦娘には恐らくなれない」

「じゃあ、この子は我ら天照大艦隊の何の役に立ってくれるんです?」

「私のカルデアの戦力が整うほど、Fate/Grand Orderの攻略がスムーズになる。マスター兼提督である私の仕事がスムーズになるほど、何もかもが上手くいく」

「なるほど。万事理解しました」

「うむ。理解のある秘書艦は優れた秘書艦である」

提督が手を伸ばしてきたけど、私はそれをヒョイと躲した。

提督のスマートフォンは私の手の中。その意味するところは——艦山城が英霊になったらクラスはアヴェンジャー、航空戦艦に改造されたらフォーリナーに変化する感じをお願いします。

「いくらカーマⅡサンが優れたサーヴァントだとしても、レベル1で

は戦力にならないでしょう。優れた秘書艦であるこの山城が責任を持って育成します。おや、丁度良い経験値になりそうな星5サーヴァントがいますね。メルトリリスさん、アナスタシアさん、あなた方の霊基は決して無駄になりません」

「そんな真似をしてみろ。私が許しても、マシユ風が絶対に貴様を許さんぞ……！」

「マシユ風が身内に厳しいのをご存知でない？ 提督が作戦ほつたらかして大奥で遊んでるなんて知ったら……あ……絆が弱いので、せいぜい悲しい目で見られる程度ですね」

「フン。貴様が私のグランドオーダーの何を知って……そうなのか？ マシユ風がそう言っていたのか……？」

「弱ったゴールドルフ所長みたいな顔やめてください。見てるこっちの胸が痛くなるじゃあないですか」

提督のスマートフォンを破壊する気も失せた。

「ほら、スマホは返しますから。とにかく1時間も放置された瑞鳳2号に何か指示してあげてください。それから、せめて副提督には作戦難易度を下げた連絡をしましょうよ」

「……一ノ傘は何と言うだろうか……？」

「だからそのゴールドルフ顔やめてください。分かりましたよ一ノ傘副提督には私から伝えますから。ほら早くパソコンの前に座って」



秘書艦はつらい、なんて今更になって思う私だった。副提督の反応を想像すると実際つらい。

嫌で嫌で仕方なくても……本当、私ってば不幸の権化だわ……秘書艦の職務を遂行すべく第二執務室の扉をノックした。

「どうぞ、なのです」

こっちの秘書艦、電は副提督の席に着いていて、じゃあ一ノ傘副提督はというと。

「ねえ、電」

「はい、どうしたのです?」

「電の隣で床に正座していらつしやる副提督はいかがされたの?」

「今の聞きましたか『指揮官』さん。山城はまだ、あなたのことを副提督と呼んでくれますよ」

「……………」副提督、俯いたままだんまり。

「ああ、分かったわ。隣の部屋の竹櫛氏がFGOのマスターをやったように、こっちの一ノ傘氏はアズレンの指揮官をやった、と」

「半分正解なのです」

「その台詞リアルで言われたの初めてだわ。半分?」

「この一ノ傘鉄子さんは『ドールズフロントラインの指揮官』なのです」

さすがは総旗艦叢雲とほぼ同等の権限をお持ちの電、行動力が半端じゃあない。私にできなかったことをやっていながら涼しい顔をしてる。正座する副提督(指揮官)の前には、半分に折りたたまれたスマートフォンがあった。言うまでもないことだと思っけど一応言っておくと、そのスマートフォンの折りたたみ構造は電の暴力によつて付与された様子。

「それはそうと山城、さつき何と言いました? 『FGOのマスター』とか何とか聞こえた気がしたのですが——」

「私、作戦のことで連絡しに来ただけ。良い機会なので聞いておきましょう。そのマスターさんのお気に入りキャラは? 絆レベル上限到達サーヴァントは、まさか…………可愛かったり美人だったりする女性オンリー、だったりしませんか」

「霊基一覧を絆レベル順でチラリと見たわ。半分…………いえ、四半分正解ね」

「と、言いますと?」

「タマモキヤット・アタランテ「オルタ」・フランケンシュタイン。確かにカワイイヤッター!」

「やっぱりヤッター!」

「でもそれ以上に星4バーサーカーで、ストーリー2部3章くらいまでずっとメインアタッカーだった。打たれ弱さは令呪か聖晶石で力

バー。迷いのないコンティニューで全員NP100%チャージすれば実際撤退より早いし強い！ あ、マッシュ風とフレンド様にはいつもお世話になっております」

「ははあ、それがフォーリナー過剰信仰の理由ですか。バーサーカーに有利なクラスはまさに自陣営の理を否定する、星界からの使者だと」

「絆レベル上限到達があと一人。ほぼ最初からいたせいで存在の有難味にまったく気付けなかったらしい、諸葛孔明」

「……たぶんですが。エルメロイⅡ世がいなかったら旅は『面倒臭い』を理由に途中で終わってましたよそれ」

「私らの艦隊から時間を奪った男、とも言えるわ」

「それもそうなのです。これだから見目麗しい男性は」

「えっ」

「えっ」

「電、今の『どっち』に言った？」

「作戦のことで連絡があるのですよね山城。何でしょう」

「ねえねえ今どっちに言った？ 第1第2のエルメロイⅡ世？ 第3

最終のウェイバー？ それとも両方？」

「ウザい！ 新しいオモチャを見つけた雷くらいウザいのです！」

「そのオモチャはどっちとどうやって遊ぶのお電あゝツ」

「この部屋から出ていけ！ 新しい山城がドロップしたら山城1号このウザいのは強化素材にするのです！」

第83話 球磨争奪戦 ⑧ 球磨の薬指

全員がコンマ数秒の世界で動いた。
いったい何故？ そんなものは、数秒後の自分が思い返せばいい。

◆―へ 球磨? ‹―◆

艦娘が副提督に近付くのに理由はいらない。抵抗される理由もない。最初の暗殺は意図せずチュートリアルのようになってしまった、と思った。

それでいい。

これから先はどうせ何もかもが敵になる。最初の一人くらい楽をしてもいいだろう。

あと10メートル。

天龍と龍田を決して甘く見てはいなかった。過小にも、過大にも。まだ耳も心も癒えていないだろうに。――いや。だからこそか。

◆―へ 天龍と龍田 ‹―◆

大和がガラス戸を殴り割った。

球磨が知らないヤツをライフルで一発撃った。確かに当たったように見えたが……動きを止められていないのなら外した？

知らないヤツは拳銃のようなものを撃ちながら逃げ、球磨は二発目を外すと売店から逃げたヤツを追いかけた。大和もそれに続いた。売店のお姉さんは磯風に幾つかの指示を残して面倒臭そうに店を出ていった。

天龍と龍田は何もできなかった。

球磨と大和の敵ならば当然自分たちの敵、ヤツに体当たりでもすればよかったか？ 分からない。まったく。……二人は結局のところ同じことを考えていた。

「……………な」。龍田

「なあに？」

「オレ達ってよ……ただ、邪魔だったんだよな」

「何もしなかったから邪魔にもならなかった、が正しいんじゃない？」

「ああそうそう、ソレだ。つまりだ龍田」

「そうね天龍ちゃん、こんなの——『全然面白くない』」

二人はそれぞれ手に持っていた、天龍はエナジードリンクを、龍田はカフェオレを、一息に飲み干した（後に天龍はオエツとなった。無理をするからに）。

「お、おいこら！」と磯風。「支払いの前に商品を飲み食いするんじゃない。さつきお姉さんが言ったことが聞こえていなかったのか？」

万引き犯にはインタビュ（尋問）を——」

「お姉さんにはナイショに、ね？」

龍田が磯風に握らせたのは、なんと五千円札。千円札と比して五倍も強力。これには磯風も「まあ……次から気をつけてくれ」見て見ぬ振りをせざるを得ない。

「天龍ちゃん、大丈夫？」

「げふっ……問題ねえ。行くぜ龍田」

「ええ行きましょう。だって私たちは——」

世界水準を軽く超えているから。

店の外で起こっていた状況はまるで理解できない。

どうして球磨が副提督を襲うのか、理解できるはずもない。

どうして副提督が球磨に襲われるのか、訊いても理解できないだろう。

だが凶刃を遠ざけることなら。その後で訊いてみなくっちゃ無理解できるものもできなくなる。

副提督を体当たりで突き飛ばした。球磨の方は……既に気付かれた状態から本人をどうこうするのは無理。球磨の腕を二人で一本ずつ掴み、アサシンプレードを腹で受け止めることが精一杯。理性的な頭が逆に仇となってしまい激痛に耐えられなかった。盾にもなれずゴミのように退けられた。

「オレ達を……甘く……っ！」

「っ……あた、ま……おかしく……？」

言いたいこと、聞きたいことは届いていない。球磨は無表情で、ターゲットの副提督しか見ていない。

なんてこった、また『全然面白くない』し痛い。まさか長いか短いか分からない人生の中でハラキリを体験することになるとは。こんなのなら体験せずに死にたかった。

副提督がこの場から逃げるまでの時間を作りたかったのに、泣きたくない、一瞬の邪魔にしかならないとは。読んで字の如く痛切に、全然面白くない。二人は倒れながら思った。

◆――へ 神州丸 〳――◆

失敗や敗北から学び成長する奴は素晴らしい。

数分前の売店では観察した通り、あの軽巡二人を気に留める必要は無かった。そんな奴らが今、『球磨を相手にコンマ数秒の時間を稼いだ』。恐らくあの二人は自分らの無力を嘆いているだろうが、とんでもない。磨けば必ず光る。普通の艦娘をやらせておくには勿体無い。部下にしたいくらいだ。これは思いがけない人材の発掘をしたものだ。

リクルーターには後で話すとして――。

ちょうど右手にブルブル震える鬱陶しいスマートフォンがあった。万に一つも保存されたデータを見られてはならず、消耗品のように扱ってよい安物でもない。

だが何より優先されるべきは軽巡二人が稼いだ時間。

走って間に合う距離ではないが丁度良いところに最強と呼ばれる兵器がいる。球磨の顔面目掛けてスマートフォンをブン投げた。

◆――へ 大和 〳――◆

一步の踏み込みで右手が球磨に届く距離にいる。転んだ一ノ傘副提督には――間に合わない。

まさか状況が意味不明だからといって、その敵が、その子が欲しいがために今日は天照大艦隊を訪問していて、少し前に売店で助けたとしても、即断即決できない撃沈王ではない。

ないけれども……自分が欲する程に相手が相手だから無傷で止められる期待はできず……言いたくないが正直に言うところ。

「提督たった一人のために撃沈王の肢体や大量の血液を失うわけにはいかない」

暴走する球磨を止めないといけない。自分には絆創膏ペタリで済む切創くらいしか許されない。ならば確実なのは、球磨の両腕から飛び出た刃が副提督の身体に食い込んだ直後。

……また、この迷惑な艦隊か。

数年前、葛城と名乗っていた友人に向けて、自分を含む戦艦六人で三連装砲それぞれ四基で計七十二門を斉射したことを思い出した(第3, 34話重点)。勿論、殺すために。でもあの時、撃つ直前まで覚悟を決められず駆逐艦の小さな子に……。

……うわあー恥ずかしい。その小さな子、長月ちゃんが今ここにいる。自分の情けなさをぶちまけてしまった。仲間殺しなんて嫌だとか甘ったれたことを口にしてしまった。しかも徹甲弾七二発中七一発を防いでもらったおかげで無用な仲間殺しをせずに済んだ。

今、また、長月ちゃんに情けない撃沈王の姿を見せてしまつ……いや見せるわけにはいかない。やる。やると決めたからにはやる。反撃でザツクリやられるのは、やられた後で考える。右ストレートでぶつとばす。一步踏み込んでぶつとばす。

良いのか悪いのか、行動が勝手に連係してしまう者らがたまにいる。ものすごく久しぶりに武蔵と並んで出撃した時は「流石お二人とも息ぴったりですね」とか言われたけど全然意識してなかった。先の売店では球磨が危険を冒して頭を引っ込めた。ちようどそこは神州丸の後頭部を殴る軌道上だったから避けてくれて助かった。

今、神州丸の投げたスマートフォンが球磨の顔に直撃して隙ができた。「本艦の手は届かず間に合わないから止めるのは当然貴様の仕事だ」とでも言わんばかりに。思考が同レベルだから連係できた、では

ないと思いたい。あれほど可愛い下着を買ったことはない。——どこで買ったかは参考までに知っておきたい。

◆—へ 長月 —◆

球磨が、躍り出る天龍と龍田を刺した。

その次は副司令官に飛び掛かった。……嘘だろ？ 冗談だろ？

ゴッドランドが球磨の顔にスマートフォンを投げ付け隙を作り、その一瞬を突いて大和は右拳を腹に食い込ませ殴り飛ばした。大和の筋力なら人間は文字通りぶっ飛ぶ。

ここまで見てやつと、危ない奴からは第一に逃げるべきだとテレビで見たのを思い出した。自分のように逃げる必要がほとんど無い者の場合はどうすればいいかも知りたかった。

「素人か貴様！ ぶっ飛ばすより地面に叩き付けろ！」

「素人で悪かったわね！」

動き出しの早かった二人は走り出して……刺された箇所を手で押さえながら倒れる天龍と龍田、を、全然、まったく、無視した。球磨の方を追った。

なんで？

怪しい陸軍人は目的が球磨なのだからそうしたのだろう、けど、大和は？ 仲間じゃなかったのか？

「あのトラックの裏に隠れるつもりだ。絶対に視界から逃がすな」

「もう逃げ場はないじゃない」

「いいから！」

そうだ、他にも野次馬艦娘がいた。副司令官も無事にいる。出血に對してはとにかく圧迫しろと習った。じゃあ自分も——。

「いない!? どこに隠れ——」

「ああクソツ！ 逃がした。最悪だ」

「トラックの下は？ 上は？」

「違う。もうこの場にはいない。気配が完全に消えた」

そう、違う。

天龍と龍田の方じゃあないと思った。

何が？

「間に合わないだろうが追うぞ。この艦隊の副ではない方の提督は何処にいる？」

「あの建物の四階、ほらあそこ。ちょうど窓から私たちを見てる」

「おい！ その貴様、竹櫛提督！ 今すぐそこから逃げるか隠れるかしらー！」

「どういうこと？」

青い炎はウヌボレではない。

なのに何故、天照隊の者ではない二人が副司令官と司令官を守ろうとしている？ 自分は何をしている？

何故、天龍と龍田があんなにも痛そうにしている？ 自分がいたのに何をしていた？

いつたい何時、青い炎それを扱う者がウヌボレていたことに気付けばよかった？

「奴は副提督の暗殺には失敗した。だがこの艦隊に限ってはもう一人分チャンスがある」

「——次は竹櫛提督を狙うっていうの!? なんで!? それに、さつきからあなた——！」

「元来死ぬべきは貴様の方なんだぞ撃沈王！ 本艦が今ここで……！」

いや兎に角、貴様は建物内部の階段を上れ。外壁から行く本艦と挟み撃ちだ。あの男の運が良ければの話だが」

「つ……ああもうっ！」

それでは駄目だ。さつき言った通り間に合わない。

「長月ちゃん！」

野次馬の中にいた、睦月が叫ぶ——。

なんて無能だ。言われなければ自分にしかできない事が分からな
いなんて。自分一人では言葉も出ない無能。失敗。今はそれを受け
入れる。反省は今晩呑みながらやる。

「提督を守って！」

だが。

カレンダーズの一人としての自分は違う。
カレンダーズはウヌボレを数年前に踏み越えた。
球磨がいきなり敵になったワケは自分には想像がつかない。それでも何人寄れば文殊の知恵、昨日は水無月が、明日は誰かが、今は睦月がやるべき事を教えてくれた。
総合棟の四階、第一執務室へ跳んだ。

◆―へ 叢雲 ―◆

逃げるか隠れるかしろ、と言われても……いったい何から逃げるか隠れるかすればいい？ 不審陸軍人から名指しされた司令官も同じ疑問を持っているらしく顔にそう書いてある。

いや分かる。一部始終を見ていたから分かる。

でも……扉をノックして入ってきたのは……。

「てーとく、叢雲。なんか外が大変な騒ぎになってるクマー」

いつもの、普通の、球磨にしか見えない。

「私の所感だが……」と司令官は額を押さえながら言った。「大変な騒ぎを起こしている者らのうち一人は、球磨、お前ではなかるうか」

「クマは運悪く巻き込まれただけクマー」

「どちらかと言うと巻き込んだ元凶のように見えたのだが」

「あの阿呆共とクマを――」

球磨は左拳を振り上げた。子供のテレフォンパンチより遅く、さっきの扉のノックより弱い威力。

「一緒にするんじゃないやあねークマー」

つまり仲良しパンチで司令官に抗議しようとしているだけなのに。球磨の長袖の下、腕の内側に刃が仕込まれていることは天照隊の誰もが知っている。その刃がどうしてか、まるで、司令官の心臓を真っ直ぐ狙っているかのよう――。

ドガン！ と窓の方で破壊音がした。その後の一瞬は目で追えず、不思議と納得してしまう結果だけを見ることになった。

語るまでもないだろうけど球磨の刃が『左拳から』司令官めがけて

飛び出して、でも窓の外から飛び込んできたらしい長月が刃を素手でガツシリと握って止めていた。

長月に守られた司令官は……この状況をどう見て何を思っているだろう。

球磨の歪んだ表情は、暗殺に失敗した悔しさからか、それとも左手の薬指を切り落とした痛みからか。

◆―へ 球磨? 〽―◆

天龍と龍田で『ああなった』のだから、自らナイフを教えたのに加えて提督を恋い慕う叢雲は必ず無視できない障害になる。ならばと打った一芝居その数秒が仇になるとは……。どうやら本調子ではないらしい。そんな自分も、呆けていた長月が動けるようになることも、普段の自分ならば視えていたはずだが。

長月に掴まれたアサシンブレードを腕から外して捨て、執務室から逃げた。視線も切れた。どこか静かな場所で自分の状態も含めた状況を整理しなくては。

暗殺チュートリアルを進めた結果はただ失うだけだった。パンチに偽装した刃も、長月の超高速の世界の中では無駄も無駄。左手の薬指は付け根から――。

「……ああ。そういう意味……」

これが実以てチュートリアルなのだとしたら、暗殺入門として『縁を切れ』ということか。

指輪ごと失った箇所は、血が止まらない。

◆―へ 電と日向と極楽とタマ 〽―◆

天照隊が控え目に言つて未曾有の危機に瀕している、と知る由もない電と日向は正門の方で平和にああだのこうだの言っていた。

「晴れ時々ロードローラーはもういいのです。そんな天気もあると勉強になりました。ところでさつきからガソリンスタンドみたいな臭いがするのですが、これマズくないですか？」

「うん。実は航空戦艦的にもそれが気になっている。鎮守府内で火災など、いかなる理由があろうとも洒落にならないからな。——どうだろう君たち」

日向は拘束された男四人に話を振ってみた。

「もし火災に至れば真っ先に君たちが温まることになりそうだが、どうしたらいいか知っているかな？」

男らは冷静だった。

電や日向くらいの年齢の子供を持つ者もいる。彼らはいくら訓練をしたところで駆逐艦や航空戦艦にはなれないが、歳月を重ねた男として、つまり単純に人生経験が違う。ただ先程は相手があまりに悪過ぎたために今の情けない状態になってはいるものの、話を通じる相手ならば話は違う。

流石は神州丸が失敗してからが本番の予備チームという名の本命チーム、言葉巧みに然るべき業者の電話番号を伝えた。勿論、電話をすればやって来るのは彼らの仲間である。

男の一人が、上着のポケットにスマートフォンが入っているから使ってくれと言う。伝えた電話番号も登録されているらしい。電は言われるがままスマートフォンを取……残念なことに男らには冷静さも人生経験もあったが、より単純に運が無かった。

「雄野郎の言うことを真に受けるな総旗艦2号」

顔に多数の引つ掻き傷を作った売店のお姉さん極楽は、『猫』の首根っこを掴んでどこからかフラリと現れた。

「お姉さん、とタマ。どうしてここに？」

「多摩は猫じゃあないにゃ」

「覚えておけ総旗艦2号」

「電（いなづま）です。総旗艦は叢雲さんです」

「パスワードなんかは結局しようもない盗まれ方をする。お前のスマホの鍵である——生体認証は使ってるか？」

「はい。指紋認証を」

「なら怪しい奴のデバイスに触るな。ほら猫、もう自分で立て」

「猫じゃあないつつつてるにや」

「あるいは正しい触り方をしろ。例えばこうだ」

極楽はスマートフォンを使ってくれと言った男のポケットからそれ（神州丸のものと同一モデル）を抜き取ると、書き損じたメモ紙をそうするようにバキグシャリと握り潰した。

「……………」男は軽口恨口のひとつとも言えなかった。

「ん？　なんかガソリン臭いぞ」

「車を潰したのはお姉さんだろう」と日向。

「しまったスマホが発火するぞ。総旗艦2号、これを安全なところまで持っていて放置しろ」

摘み取った花を、スカートの裾をつまんで乗せ集める素朴な少女は現代日本にいるのだろうか。鬼畜お姉さんに花ではなくバッテリーが膨らみはじめたスマートフォンを乗せられた少女ならここにいます。

「ちよ、ちよ、ちよオー……ーツ!?!」

その行く先が修羅場になっているとも知らず、電は「おぼえてるのですーっ!」走って行った。

「——で？　お姉さん、球磨のコピーはどうなった?」

「この猫が邪魔すぎて集中できん」

「多摩にや」

「はいはいタマな。球磨は一旦我が預かって何とかする。日向にはタマを任せた。正直、洞観者と共に現れる猫を侮っていた」

「今日はよく分からないことがどんどん増えていく」

「あー…………今度のは、そうだな、星界からの使者〔夏〕とパンケーキに黒猫が乗る、そんな感じだ」

「前々から考えていた。やはり一度、この世界を航空戦艦が調査する必要があるそうだ」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆

◆ SCP|???|JP|EX 天照大艦隊七不思議 ◆

この話は「SCP財団」に基づきます。

<http://ja.scp-wiki.net/>

このコンテンツは、クリエイティブ・コモンズ 表示-継承3.0
ライセンス (<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/deed.ja>) の元
で利用可能です。

加えて、上記ライセンスに関する記述は妖怪猫抱きフック「ア
グリーSCPナード」のライセンスガイドより丸コピしています。

<https://scp-event.tokyo/licenseing-guide/>



◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆
◆ ◆ ◆ ◆ ◆

アイテム番号：SCP|???|JP|EX

「天照大艦隊七不思議」

オブジェクトクラス：Euclid Explained

特別收容プロトコル：

SCP|???|JPは天照大艦隊？隊が活動拠点とするサイト|8
1??所属のSCP|???|JP-aの口をダクトテープで塞ぐことで
收容されます。SCP|???|JP-aが食事や睡眠などの前に口を
開くことを要求した場合、要求された者はSCP|???|JPについて
発言しないよう「指切拳万」を行った後にダクトテープを必要とされ
る時間だけ剥がしてください。天照大艦隊？隊関係者にカバース

トリー『あの子、今ちよつとアレだから』を適用することでSCP
|????|JP—aの口を塞ぐダクトテープは適切に管理されます。S
CP|????|JP—aがサイト—81|??外へ出撃するには総旗艦1名
の許可が必要です。

SCP|????|JP—EXを收容する必要はありません。

説明：

あまり言いたくはないのだが……艦娘たちがコソコソと何かやっ
ているのを提督、つまり私は見ている。最低でも『奴は一昨日から何
をしている?』くらい感付いてはいる。小学校でも大学でも、教壇に
立てば児童や学生がいかに工夫を凝らそうが居眠りを発見できるよ
うなものである。腹が立つから無視したくとも艦娘が船を漕ぐ様は
——なんだ艦が船を漕ぐとは。この世界のメタファーか。

まさか磯風が艦娘を辞めた理由「実家の都合がどうのこうの」を私
が本気で信じたとでも? そう言うのか? まあ、あの件はすぐに傘
姫が拾い直して叢雲も立ち直ったからよかったもの——いやまっ
たくよくないが。

本題に入るとしよう。

「あの子、今ちよつとアレだから」

そう言つて叢雲は時津風の口をダクトテープで塞いだ。そこから
本格的に何かが始まった。

次は時津風が自室待機となった。私は何ひとつ指示と許可をして
いない。

その次は時津風が営倉待機となった。遊びが過ぎる。

終いには私を含む天照隊の全員が口を塞がれそうになり、さすがに
遊ぶのも度が過ぎると判断した私は叢雲に報告書の提出を命じた。
できればその口で説明（するよりもつと前に相談）して欲しかったの
だがダクトテープの下からモゴモゴ言われても、すまない叢雲、さっ
ぱり分らない。

曰く。

天照大艦隊七不思議、というものがあるらしい。

時津風が次々に不思議で不可解なモノを見つけてくるらしい。

現在までに発見されたモノは以下の七つである。

SCP | J P | 1 : 親潮あるいは朝潮

SCP | J P | 2 : 初期艦 Gotland

SCP | J P | 3 : 『!?’』

SCP | J P | 4 : そんなことより金剛が紅茶でなくコーヒ
を飲んでいる

SCP | J P | 5 : 零式艦戦52型 (烈海王)

SCP | J P | 6 : 気合計測器

SCP | J P | 7 : 海の上に立つ人

聡明なる読者諸氏はお気づきのことだろう。

SCP | J P | 1 ~ 6 はどうでもいい。親潮、朝潮、忘れもし
ない初期艦、霧島、金剛、そして烈海王妖精には悪いのだが、ものす
ごくどうでもいい。

問題は SCP | J P | 7 を時津風が発見した時間、その瞬間。

これは大本営より厳重注意事項として発令され、また類似する情報
を東西南北の提督たちが慌てて発信したのだが……。

情報を整理すると、日本時間???, 各海域に展開していた艦娘及び交
戦状態にあった深海棲艦が、ほぼ同時に海中に落ちたらしい。まるで
突然、足場が消失したかのようにドボンと海水を飲む羽目になってし
まったという。我が天照隊の部隊も例外ではなく、相当な混乱があつ
たもののすぐに海面上に上がることができ、泳げないがために沈みか
けた斑鳩を除けばそれ以降は特に問題はなかったと報告を受けてい
る。

時津風か、あるいは七不思議を活性化させた天照大艦隊が元凶かは
分からない。

しかしやるべきことは明瞭である。

私は SCP | J P | ???? | J P を解明し、ただの偶然かそれとも遊びの範囲
内にしなければならなかった。



SCP-????-JP-1：親潮あるいは朝潮
『なにも矛盾しない』のであれば、逆に何も問題はない。親潮あるいは朝潮——親潮と朝潮には今後も活躍を期待している。

SCP-????-JP-2：初期艦Gotland
そうだ。実家にあるアルバムの写真に写っていた少女の名は『ゴトランド』だ。なぜ忘れていたのか——徐々に声が聞きたくなり電話をかけた。

《名前を忘れてた!? うわっ、ひどい人。——なんてね。私も竹櫛くんの声が聞けて嬉しい。——なあに、その反応? 私とあなたの仲間じゃない? そうだ。今度の連休、お休み作れる? 二人で何か食べに行きましょう》

SCP-????-JP-3：『!?』
霧島の頭上に現れる記号は物理的な衝撃での破壊が可能であることが判明した。破壊すると『圧』も消失し、またそれ以降『!?』は発生しなくなった。

SCP-????-JP-4：そんなことより金剛が紅茶でなくコーヒーを飲んでいる
知らないふりをするよう叢雲たちに命令した。

SCP-????-JP-5：零式艦戦52型(烈海王)
僚機の妖精は言った。あんなのは空中戦闘機動と呼べない、でも強いて言うならば——『中国拳法』、と。
意味が分からない。
く　　つづく　　く

SCP-????-JP-6：気合計測器
どこかで見た覚えのある機器だが……手に取ると赤い針が振れた。分解してみると、箱の中にはバネ、コイル、知らない素子、金色の円

盤、ホットドッグの形をした消しゴム、この臭いは正露丸、他多数の何かがすべて両面テープで固定されていた。

無論、捨てた。

SCP—??—JP—7：海の上に立つ人

営倉でしょんぼりしていた時津風、売店のアルバイト磯風も含む陽炎型駆逐艦をこっそり集めて、私は任務を与えた。

「夢の国強行偵察作戦を極秘に実施せよ」

これは極秘の作戦だ絶対に絶つ対に他言無用、とまで言ったのだが、奴らにとつて作戦とはSNSに楽しかったことを逐一投稿することや帰投後に土産物を配って回ることまで含まれるらしい。

構わない。どうせこう（陽炎型以外の艦娘たちから「ずるい！」のシユプレヒコール）なることは経験から予想していた。だが、この程度で時津風たちが天照大艦隊七不思議を綺麗サツパリ忘れてくれたのなら——……一ノ傘に資金援助を……何から説明したものか。

第84話 球磨争奪戦 ⑨ パラベラム

潜水艦五人に友達ができたことを素直に喜ばません。

ドーモ。グラフィックが無いから存在に説得力が無いと酷い評され方をした、天照隊分隊のマルチロール空母、斑鳩です。

本隊・南鎮守府の方で、球磨さんの偽物が現れて、竹櫛提督と一ノ傘副提督を殺害しようとしたそうです。悪夢です。悪夢としか言いようがありません。暗殺者がついにその渾名通りのことを始めてしまったのです。

その偽球磨さんの危険度はというと——天龍・龍田・神州丸・大和・長月ちゃん・秘書艦叢雲さんが偶然近くにおいてギリギリ凶刃を止められたと聞いています。天龍と龍田が重症、偽球磨さんは左手の薬指を指輪ごと切り落として逃走中。提督と副提督は動揺が見られるものの怪我はなし。……本物ならば、親しい提督と副提督の殺害なんてどれだけ不運だったら失敗するのでしょうか。いやしません。

本隊の提督と副提督に死んで欲しいのなら、単純に考えて次のターゲットは分隊・北鎮守府の傘姫提督ということになります。なるそうです。なるらしいです。なんででしょうね、とは後で誰かが解説すると思うので僕はしません。

分隊に来る予定が勘違い(?)で本隊の方へ行ってしまった神州丸から、分隊に居候中のあきつ丸に連絡があったのです。

《いま、球磨が一ノ傘提督——傘姫と呼ばれる提督を暗殺しにそちらへ向かっているはずだ》

とのことでした。そんなことをいきなり言われてもなあ、という感じでしたが、神州丸をやたらと高く評価しているあきつ丸が言うには、神州丸がマジだと判断したものはマジなのだそうです。

《提督のスマホを鎮守府の隅にでも隠して、本人は逃がせ。隠せ。決して球磨を迎え撃とうなどとは考えるな。本艦も球磨を搜索しつつそちらに向かう》

後で聞いたところによると、偽球磨さんの行動原理が分かる本艦が追うのは当然だろう、という建前で、神州丸は本隊・南鎮守府からの

離脱に成功したっぽいです。

傘姫提督は怖い場所、例えば番犬に吠えられる道や怒られそうな電話回線、などなどから逃げまくる大人の女性です。極楽さんの能力で作られたコピー人間だから提督なんていう仕事をスリル体験くらいの感覚でやっているのでしょうか。

僕が「マジで暗殺されるらしいよ」と言い切るより早く、傘姫提督はスマートフォンだけ残してボワツと青い炎となった後に消えました。コピー云々はあくまで極楽さんの能力であって傘姫提督はただのもやし人間です。ですが今やったように自分勝手に解除・消滅する権限があり、極楽さんの元へと戻り、再度極楽さんに適当な場所に具現化してもらえて記憶もちゃんと連続している便利人間モドキなのです。極楽さんが言うには「クソほど効率悪い」とのこと。

神州丸の警告どおり偽球磨さん——本物とまったく見分けがつかない本物の暗殺者がやって来ました。僕と猫吊さん、あきつ丸がいる執務室に窓を蹴り破って電撃突入してきたのです。

「傘姫提督を出せ。出さなければ殺す」と偽球磨さんは、特徴的な語尾は真似ない方針みたいです。

「球磨さんが来ると連絡を受けていましたから、当然この鎮守府内にはもういません。タカの眼を持つ球磨さんならまず『傘姫提督は何処に行った?』と聞くだろうと思っていたのですが」
「……………」

偽球磨さんは何もせず、同じ窓から出て行きました。

10分くらい後。

今度はまたも同じ窓からフードを目深に被った不審者、神州丸が執務室に入ってきました。この人らは何なのでしょう。鎮守府への入場許可は出せないと今朝(第76話 球磨争奪戦 ①)言いはしましたが、そんなのを無視して有刺鉄線など色々よじ登って窓から入るのが趣味なのでしょうか。あるいは出入口恐怖症とか?

「貴様らの間の抜けた顔を見るに、もう球磨が去った後のよう——
……いや待て。あきつ丸、貴様は確か、今は提督業をやっていたな?」
「まったく呆れた部下でありますなあ」とあきつ丸は少し前まで褒め

ちぎっていた陸軍仲間に言うのでした。「集合場所の間違いに加えて大遅刻！ ヤーナム泊地所属という意識が不足気味！ であります！」

「は？ ……ああ、そんな設定だったか。それより貴様、この部屋で球磨と相對しなかったのか？ トイレにでも行っていてニアミスだったのか？ どうして殺されていけない？」

「どうして殺されないといけないのでありますか!？」

「んん？ ——『自称』提督はリストに載らない？」

「斑鳩殿。この部下が自分をまったく敬ってくれないのであります」

「陸軍ジョークでしょ。知らないけど」

「少なくともヤーナム泊地は差し当たり気にしなくていい、か。思いがけず興味深い事例が手に入った。うん。あきつ丸、もう帰っていいぞ」

「泊地は黒風着任時にいろいろ破壊されて！ 自分がヤーナム歌劇団を連れて今ここに場所を借りているのであります！ だ・か・ら！ 神州丸もここに呼んだのでありましょう！ 【第76話 球磨争奪戦

①】を暗唱できるようにするのが神州丸の初任務であります！」

「本艦の登場シーン以外どうでもいい。——挨拶が遅れたが、はじめましてだな斑鳩。聞いての通り本艦が神州丸だ。少々疲れたからシャワーとか借りるぞ」

「うちの潜水艦に案内させるよ」

「ん、頼む」

「左腕、怪我してるならそれも潜水艦に言うといいよ」

「……お気遣いなく」

球磨さんと同類の人ならば潜水艦たちに任せるのが安全かなと思っただけですが、頭のおかしい人たちは混ぜ合わせるとどうなるか予想できないから困ります。

潜水艦たちは目ざとく、壊れたアサシンブレードを欲しがりました。防潜「毛」を処理するのに便利そうだとか何とか。

神州丸は、潜水艦たちがビビらせようと持ち出したトルピードラン

チャーに深い理解を示しました。

で、なんか仲良くなりました。電話番号を教え合う程度には。

もう帰ってきてても良いはずの傘姫提督がビビって帰ってこれなくなりました。

「本艦はまだ何もしていないだろう」

「あきつ丸と同じこと言うけど」【第76話 球磨争奪戦 ①】を読んで、自分が怖がられてるってことを分かって。僕から見てもちよつと怖い」



ごく一部の知る者らの助けを借りても、薄々「あの子なんかおかしい」と思われていたことを抜きにしても、長月はもう隠し切れなかった。

専用装備もバレた。山城が放屁するほど気合いを入れてやつとコンマ5秒だけ持ち上げられ、長門ならばどうにか下段の構え……ではなく、ただそれより上に持ち上がらないだけだった。駆逐艦寮の意味不明なインテリアと思われていた巨大刀を装備するよりは戦艦長門を抱っこして出撃する方がまだ現実的。それが『猫爪(ネコノツメ)』。数値がカンストすると分かりきっている攻撃力は別の機会に見るとして、長門は防御力の方を聞いた。よりによって天照『大艦隊』がドレッドノートを保有するわけにはいかないと考えたからだ。

「射撃場は2キロしかないが——」

射撃試験・演習場は、ご近所さんへの配慮が直線2キロメートルの防音施設(とても長い防音壁と天井が海に浮いているだけ。台風で折れそう)という形になって建設されたと第24話(R指定話)の叢雲が解説している。新北九州空港連絡橋とだいたい同じ長さである。

鎮守府を含むこんな軍事施設ガー、環境ガー、平和ガー、と思われるかもしれないが、少なくとも6年前には地元住民の理解を得ていたらしいし、何よりこの世界の日本にはマップー都市ネオサイタマが実際に存在する。今更2キロの建造物くらい疑問に思うだろうか? 要

はそういうことなのだ。

「何キロの距離があれば私の主砲を確実に防げる？」

ネコノツメを片手に軽々持つ長月は、なんと答えたら怒られないかとオドオドしながら言った。

「えつと……10……いや1メートル……の半分……の半分くらい？」

「仮に砲弾をその刀で止めたとしても、爆風で服が消し飛んで素っ裸になると思うが」

「あ……じゃ、じゃあ、20メートルで」

射撃場で長門から20メートルの距離を取った長月は結局、大和型戦艦撃破50%Speedrun(RTA)のノリで長門の懐に飛び込み砲撃を避けた。戦艦の艦娘のほとんどが主砲を身体の左右に配置しているため真正面最接近位置が安全地帯となることを利用したのだ。……利用してしまったのだ。それも右手にはネコノツメ、超重量の金属塊を持ったまま。

「あ、ご、ごめん。つい避けて……次はちゃんと刀で防ぐから」

「もう十分だ。十分だとも」

離れて見ていた提督・副提督も含む者らには、主砲発射と同時に長月がパツと消えて、どこに行ったか砲撃を食らってミンチになってしまったかと探せば長門の胸の前にいた、とだけしか分からなかった。スタートダッシュと急ブレーキで水柱でも立てば「わーすごい」くらい言えたのだろうが、それすら無いとなれば理解が追いついてなるものか。音の壁に馬鹿正直に突っ込むと長門が危ないから迂回した――と説明されても、逆に長月の方こそ世界を虚数的に勘違いしていると思えなかった。

質問の土砂降りが長月を襲ったものの、どれもこれも長月が過去に聞かれ飽きたものだった。そのうち一つは一昨日、長月の力を既に知っているはずの木曾にも聞かれた。

「それだけ強いなら『本物の球磨姉を痛めつけた』偽物だって簡単に捕まえられるよね？ ね？」

それだけ強いなら。

北上に、まるで責められるように聞かれた。
長月は何も言わなかった。



良くも悪くも、とは言いたくないが、頃合いなのは間違いないと大和は見極めた。

「秋月型防空駆逐艦、初月」

「はい！」

「あなたの判断が正しければ敵が沈む。あなたの判断が誤っていれば味方が沈む」

「ですが、僕の判断が必ず作戦を成功に導きます」

「他艦隊への命令権限を与える。噛み砕いて言う、あなたが過去に一瞬だけ世話になった天照大艦隊に『如何なる犠牲を払ってでもやれ』と言わなければならぬ」

「僕の信じる勝利は我々の信じる勝利です。噛み砕いて言う、撃沈王が狂った作戦計画に従おうとするならば殴って気絶させて他の仲間たちと根本から練り直します」

「……え、私を殴るの？　なんで？　ここはもつとこう、信条を曲げないとか風のことを言っただけだ」

「でも実際、まず大和さんを殴ったほうが話が早いですよ。艦娘は操り人形ではないぞというお約束を示すために」

「……ええ、まあ、そういう場面が稀によくあることは否定しないわ。でもね初月」

「S i v i s p a c e m , p a r a b e l l u m」と初月は妙に綺麗な発音で言った。「大和さんに教わったことです。深く胸に刻んでいます」

「教えてない。そもそも私がそんな英語（英語ではない）を知らない」
「実はヤーナム島にリベンジしたくてパラベラム・ピストルを通販で買ったのですが、何を勘違いしたのか長10cm砲たちが拗ねてしまっています……」

勘違いをしてるのはあなたじゃない、と、これが初月でなく武蔵だったら辛辣に指摘していた。

「ですが結果的により互いの理解が深まりました。僕は常に平和を求め、9ミリのジャブと10センチのストレートで殴ります」

「殴るって、深海棲艦を？」

「積極的に深海棲艦を殴りに行く防空駆逐艦など根本的に間違っています」

「じゃあ何を殴るのよ。サメの顔面とか？」

「ですから大和さんを。ところで撃沈王なら拳銃弾くらい大丈夫——いえ大丈夫だと信じています」

「考え方が照月に似てきたとは思ってたけれど……」

その照月はというと、姉妹艦の成長が嬉しいらしく涙をハンカチで拭っていた。

大和も泣きたかった。そんな子に育てた覚えはないと。

「ま、まあそういうことだから……扶桑、しばらく宜しく頼んだわよ」「宜しく撃たれるよう頼まれるほど信頼されているのね……山城に手紙を遺さないと」

「もう、あなたまで！」

「冗談よ」と扶桑は分かりづらい顔で言った。「他の戦いは私たちが任された。大和は振り返らずに大和の戦いに勝利してきて」

「お互い約束よ。では皆、行ってきます」

「二」 行つてらっしやい！ 「二」

冗談じゃあない、と叫びたい戦況で、ここから先は冗談が許されない。記録に残る。記録された冗談が未来に間違いを伝えてしまう。

でも、まあ、だから、挨拶くらい気楽にしよう、と言い始めたのが撃沈王だった。

——ふと、前々から聞いてみたかったことを思い出した大和は、足を止めて振り返った。扶桑との約束をあまりにも早く破ってまで聞きたいこととは何か。

「私つてば今まで何度もハングド・キャットに足を運んでたわよね。今のような事態に備えての出張であつて、でも取り越し苦労のまま戦

争が終わって『撃沈王は税金で猫喫茶に通い詰めていた』って批判を受け止めることになればいいなと思ってた。……怒らないから正直に手を挙げて。まさか、あなた達まで『撃沈王は暇さえあれば武蔵のところ遊びに——』

「いいから早く行ってください。僕たちの方は仕事があるんです」

「あ、はい、すみません……」



ロイヤルが慌ただしくネオサイタマの外に作戦展開し、後に何か不穏な事件があったことは長門の耳にも入っている。具体的なことは赤城も知らない様子だった。

お茶会……長門はとても楽しみにしていた。紅茶を優雅に飲む作法は知らない。二次創作における禁忌食品の一種スコーンなど無いなら無いで構わない。それでも美味しい飲み物や菓子を欲したのは、それらを『友達』と一緒に楽しみたかったからに他ならない。

重桜の神子なら、まあギリギリ、ロイヤルの女王と釣り合わせてあげてもいい。そう偉そうに言ってくれたクイーン・エリザベス、彼女自身の都合によりお茶会をキャンセルとさせて欲しいと連絡が入ったのだった。今日の座布団はなぜか硬い気がした。

「江風、何か情報は——」

「ありません」

長門はもうUNIXから隔離された少女ではない。

大先輩は動画を作成して民たちに世界の艦船が如何なるものかを教えている。

ユニオンのグレイゴーストは日誌として定例食糧調達について書き込んだだけなのにボロクソに言われた。

長門もただ知らぬ分からぬと言っていれば「広報ですので」と私生活丸裸にされる。「神子様を守る」と言ったはずの江風に。

「江風、何か——」

「ありません」

ネオサイタマ鎮守府は尊いがために物理的・情動的に守られているものの、あまり尊くなければグレイゴーストのようにハッカー達の獲物にされる。ではどうするか？ 簡単なことである。尊さを供給し続ければよい。アイドル活動とかやればよい。ステージに疲れた姉の爆睡する姿とかを撮影して晒せばよい。

彼女らは、ネオサイタマ鎮守府は、誰が誰から誰を守っているのかもはや誰も分かっていない。

「かわ——」

「ありません」

「むう」

それがどうだ、今日はロイヤルは勿論、他の陣営も空気を読んでのことか誰一人として個人情報や性癖などを晒していない。ただアカシマートの広告が鬱陶しく表示されるばかりだった。尊い中毒に苦しむネオサイタマの民たちがいつ公式SNSを荒らしはじめるか分からない。

「陸奥はどう思う？ やはり、と、と、……友達に、なにか手伝えることがないか伺いに行くべきか」

「いくら長門姉でも『空気を読め』ってメイドさんにやんわり追い返されるよ」

「そうか……追い返されるか……」

「空気読んだほうがいいよ」

「余もそれくらい……！ ……そうだな、うん……」

「おまんじゅう食べよ？」

「うん……」

長門はもうUNIXから隔離された少女ではない。しかし、こんな時こそUNIXの出番であることまでは学んでいない。独力でそこに至ったとしてもUNIX端末アカウントを管理する江風が触らせてくれないだろう。

IPアドレスの縁起の良し悪しが運命の分かれ目を捻じ曲げる——ここがマップー都市、ネオサイタマだ。



.....
.....
.....
.....
.....

◆ — 記録【第30話 叢雲の薬指 — 海花と海鳥 ①と②の間】より抜粋 — ◆

鉄を舐めると血のような味がする。卵の腐ったような臭いはなるほど腐卵臭と呼ぶに相応しいと、腐った卵を見たことすらないのに納得する。強大な戦艦であった彼女にとっての呼び水はその程度の、自覚することすらなかったものだった。

従って彼女はある日ある瞬間、まったく唐突に目を覚ました。

居眠りを咎められたわけではない。一秒前までは事務仕事に追われていたはずである。室内の様子も、外の天気も、共に働いている提督も、何も変わらない。ただ彼女の意識だけが夢から現へと這い上がった。

覚醒してしまったからには理解できない道理はない。即ち今までの『夢』が、彼女が戦ってきた何もかもが、覚悟を決めて臨んできた戦場が、悪い冗談であるように思えてならなかった。

数秒前までの自分が作成していた記録が目の前のモニターに映っている。ルーチンワークではあるものの真面目に作成していたはずのそれを見て、彼女はボソリと呟いた。

「……何の遊びだ、これは」

その声に反応した提督が何か言った。しかしその男は今の彼女の目には、ケージの中で回し車に夢中になるハムスターのようにしか見えなかった。いや、生きるための運動という意味のあるハムスターのほうがマシとすら思えた。そんな無意味な見せ物めいた仕事を今すぐ

やめてしまえ、そう言いかけた言葉をすんでのことで飲み込めたのは、彼女も数秒前まで同じ児戯をしていたからだった。

なぜ人間が戦車のような装備を担いで平然としていられる？

なぜ人間が、いや何であろうと海面より下に没することなく立っていられる？

訝しむ仲間がどのように装備し進水しているか、それだけはハッキリ理解できた。騙されているのだ。豚を煽って木に登らせるように、事実、かつての彼女自身も欺瞞に煽てられるまま木に登った戦艦だった。騙されていることを甘んじて受け入れながらの出撃は常の幾倍もの精神的苦痛をもたらし、母港に帰る頃には天下無敵の大戦艦は見る影もなくボロボロになってしまっていた。

……………。

巫山戯た世界を変えようとして何もできず、結局、この巫山戯た世界に帰ってきてしまった。こんな事になるのなら何も知らないまま戦艦として戦っていればよかった。行動を起こして後悔するなど最悪の兵士の見本ではないか。

「……………助けて、くれないか」

涙をぼろぼろと流す彼女に茶猫はまた短く鳴いて、布団から飛び降り窓の外へと走っていった。

その茶猫こそ、史上初めて全国に点在する炎に呼びかけた猫となった。

腐った者共を尋常外の炎で燃やし尽くせ。

武蔵と同じく道理を外れ、己を持って余していた艦娘達は茶猫の招待に喜んで応えた。

……………。

洞観者。それは艦娘とは言い難い尋常外の在り方を肯定する徴のようだった。

……………。

『インガオホー』というコトワザ？ を聞いたことある？」この日も見舞いに来ていた長月は尋ねた。週に一度の見舞いは彼女らの恒例となっていた。

「……『因果応報』という四字熟語なら知っているが」

「だよなあ。私も未だに意味は分かってないんだが、つまりアトモスフィアはそういうことらしい。マツポールの世はナムアミダブツ、慈悲はない。だがアイサツだけは忘れてはならない。古事記にもそう書いてある」

「ますます意味が分からんぞ」

「うん。言っておいて何だけど私も未だに分からない。……分からないまま作戦に駆り出された私も実際バカにされてたのか？ あの時はバカバカし過ぎて逆に痛快だったけど、なんか今になって腹が立ってきた」

「私は洞観者そのものが心配になってきたぞ……大丈夫なんだろうな？ まさか本当にアサシン伝説めいたオハギで頭をやられて……あれ？ なあ私は今何か変な……？」

……………。

「もし私がちゃんとした武器を調達してやると言ったら長月、お前は深海棲艦を世界から一掃してくれるか？」

「無理だ。私は戦闘はできても戦争ができないお子様だと、あんたがさっき言ったんだらうに」

「だからあれは冗談だよ。金の話は艦隊の秘書とか総旗艦とかに任せとけばいい。任務を繰り返せばそのうち嫌でも覚える事さ」

「……ふうん」

……………。

……。

「……なんて言ってもあんたは納得しないだろうから一言で済ませると、私らがやったのは正しい意味での確信犯だ」

道徳的・宗教的・政治的な信念に基づき、自らの行為を正しいと信じてなされる犯罪。

「それと皆、自分の手を汚したつもりもない。前に話しただろ、意味は分からないけどインガオホーってやつだ。マツポーな世の中はナムアミダブツ、深海棲艦と同じく人類に仇なす輩に慈悲はない。頭の良いやつが確認までしたさ。撃沈王の姉妹艦とクス共、天秤にかけるまでも——」

「もういい」武蔵は長月の話を遮った。「洞観者としてやるべきことをやった、つまりそう言いたいのだろ」

「そうだけど……理解はされないだろうなあと思ってたんだが」

「そりゃあ理解したくないが私とて洞観者だぞ。それに事の始まりは他の誰でもない私じゃないか。私が洞観者になって得た智見を研究者に提供しようとした結果がこれだ。そうだと、やはり私が自分でどうにかすべきだったんだ」

「な、なあ。ちよつと落ち着いてくれ。あんたはまだ療養中なんだから」

「洞観者の秘密結社を作る話は今どうなっている、長月？」

「え？ あ、ああ……それならぜんぜん進展はない、けど。拠点も名前も、どいつもこいつも好き勝手に注文と文句ばかりで」

「ならば私が今日からお前たちの纏め役だ。大和型二番艦に文句はなからう。あつたとしても言わせん。お前らには常識という手綱が必要だ」

……。

……。

……。

「殴られた跡、まだ消えないのだが」武蔵の左頬は大きなガーゼで覆われていた。「ひしゃげたメガネも買い直した」

仕事は仕事、それとは別に自分の喫茶店を持つことに武蔵が多少浮

かれてしまうのも無理からぬことではあったものの、うっかり開店告知のチラシを大和にも自慢気に送ってしまったのだった。開店当日、並ぶ客を無視して店に踏み入った大和は武蔵に詰め寄り、オープニングスタッフとして駆り出されていた長月ら洞観者数名の制止を振り切って洗いざらい吐かせた。いくら姉妹艦とはいえ大戦艦である武蔵を殴り倒して何から何まで喋らせる様は、『撃沈王』の通り名は伊達ではないと長月ですら震え上がった。

「姉妹艦に今の今まで病気のこと隠してたおバカさんが悪いんだわ。ねえ猫さんもそう思うでしょ?」

茶猫も同意するように「にやあ」と鳴くものだから武蔵は苦笑するしかなかった。

「コーヒーを淹れる才能がないのはもう十分、分かったでしょ?」

……普通の艦娘には戻らないの? 『ドーカンシャ』はそんなに大切なことなの?」

「いくら説明しても『そんな事は知りません』の一点張りなのはお前の方だろうに」

「この店とあつちの鎮守府、往復して働くななんてそのうちまた体を壊すに決まってるじゃない。おバカな姉妹艦を心配してあげてるの。い・ち・お・う・ね」

「今ちよつと手が離せないんだ。だが未知の敵陣深くに切り込むのが仕事のお前に比べちゃあ楽なものさ。大丈夫。同じ過ちを繰り返すつもりはないし、皆が私を気遣ってくれる。それに笑えない冗談ばかりの仕事が多過ぎて逆に笑えてくる程だ」

「下手の横好きって言うものね。コーヒー飲んだお客さんが泡吹いて倒れても知らないんだから」

「ところで大和。お前がこうしてタダで不味いコーヒーを飲めるのは、私がお前に頼み事をしているからだっただけだ。そろそろ良い返事を聞きたいものだな」

「あのねえ。バスタードソードみたいな日本刀を作れと言われて簡単にヨロコンデーって誰が言えると思う? 申請の理由をでっち上げてねじ込むだけでも三週間かかって、気が付けば大口徑砲開発くらい

のビッグプロジェクトになっちゃったわ。納期十五ヶ月とかふざけたこと言われて短縮するよう交渉中」

「そのでっち上げた申請すら甘い見積りになるぞ。三徳包丁ですらアレだったしなあ」

「それもドーカンシヤ?」

「そう。ドーカンシヤ」



この世界には深海の闇ですら消せない炎が存在する。



ここから本編と関係ないヤツ



◆ トリック・オア・ヘブンズ・ドアー! ◆

『貴方達は我々に自由を差し出すが、我々はただアイスクリームが欲しい』

【ドールズフロントライン】記憶の欠片のフレーバーテキストより



いくら綺麗だろうとも光、音、そして匂いが艦娘たちの心を無邪気

にさせてくれない。それが花火。うーちやんでさえ気分次第では「照明弾にもならないぴよん」と言い捨ててしまう。もう季節も過ぎた。さておき。

手持ち花火を振り回すとその軌道がネオンサインめいて目に焼き付くアレ、輝きの落書きとでも言おうアレを見た秋雲あるいは秋雲を知る誰かは思った。

「中盤あたりの岸辺露伴みたく空中に絵を描いて、ヘブンズ・ドアー！（天国への扉）なんて、できてしまうんじゃないの？」

同じことを考えたオータムクラウド先生がこれで何人目になるか——烈海王ですら異世界に飛ばされる一人になった時代なのだ。もともと昔ならば幻想郷に入って紅魔館の門番と鎬を削っていたはず。つまり、いちいち気にするだけ無駄である。



約束された改二改造を記念して秋雲に贈られたのは、ペン先が光るペンだった。

「これが意外と探すの大変だったわけよ、安っぽいのばかりで」

「持っていて恥ずかしくないものを選んだつもりだけど、どうかしら」とは陽炎と夕雲。

自分を名誉姉妹艦にしてくれたり猫の手も借りたい時に限って出撃で逃げられる多くの仲間たちに囲まれて、これが幸せでないわけがない。それはそれとして欲張っていいなら人手のプレゼントも欲しい。

ペンも美しい。アンティークペンを意識高い系企業が近代化改修したのか、自然素材と強化ガラスが上手く融合している。

「いや、秋雲さんの方がペンに使われそうだよ。机に立てとくだけでも作業環境が映え——」

『秋雲さんが持っている』姿、思ったとおり絵になるわね」と言いつつ夕雲はペンを秋雲に握らせた。力強く。

「ま、まあほら、手に馴染ませるのに時間かかりそうだし、普段使いの

方が——」

『秋雲さんが肌身離さず持っている』と私たちが嬉しいの。専用の補強増設も要る?』

「……イエ、ダイジョーブデス」

「この絶縁シートを抜いてと、はい。バッテリーは半年も持つらしいの」

「……ワー、スゴイ」

今日から秋雲は、内なる悪魔に手を引かれて駆逐艦寮を抜け出してしまふ心配をしなくてよくなった。大丈夫、げんこうしえんかんたいはいつもどこでも地の果てまでも秋雲を見守っている。だが手伝いはしない。



内蔵されている無線通信モジュールについては後で対策を考えるとして、光るペン先、これが秋雲の想像をはるかに超える強さで白く光った。指向性は皆無でハリー・ポッターの魔法もかくやとばかり。どの場面で使うのか分からないターボモードでは目映いにも程があり直視がキツイ。……目潰しペン?』

今は日中、外は羽織るものが欲しくなる程度の晴れ具合で、部屋（ルームメイト募集中）はカーテンを開けていけば十分明るい。秋雲的には外からの光がディスプレイに反射するのでカーテンは閉めたところだが、『どんな環境でも使えなくつちやあ意味がない』。

ターボモードで光らせたペンを空で振ってみると——いける。これはいける。

それと丁度良いところに風雲も来てくれた。

「ん。そのペン気に入ってくれた?」

「風雲、秋雲さんのサイン欲しくない?」

「質問を質問で返すな」

「すんごく気に入った。で、欲しい?」

「いや別に」

「オーケー。だが断られたら押し付けたくなくなるのがこの駆逐艦秋雲ツ！」

そして押し付けに問答など無用！

「へブンズ・ドアーツ！（天国への扉）」

荷物の受け取りにサインを求められた時、うっかり『そつちのサイン』を書いてしまう程度には書き慣れている。風雲に見せるために鏡文字にするのも、初めてだったのが難無くできた。

空中に白色に輝く秋雲のサインは、はつきりと風雲の目に焼き付いたことだろう。何故なら指向性の無い白光線が秋雲自身にもダメージを与えたからだ。

へブンズ・ドアー……なんと恐ろしい攻撃（？）か。それは熱意の奔流。まるでプロ中のプロ漫画家のような——締切だのコピー本だのに押し潰されているようでは三流。たとえ月刊が週刊に、週刊が日刊に、時間が加速しようとも描き切ってみせるのが本物だろう——と志そうとしてやめた。タバコを吸ったことはないが、禁煙とスケジュール管理は似ているなあと思うのだった。

そして攻撃（？）を受けた風雲はというと、

「んが……っ！」

秋雲と同様にダメージを受けていた。目に。

「見飽きたサインが……目を閉じても……」

「いやあ、ついチョーシこいちやって……申し訳ねっす」

「私たちが選んで渡したものだから。でも許すのは今回だけだから。いいね？」

「アツハイ」

「今から出撃なのに……ああ、それで秋雲を呼びに来たんだった。忘れてないでしょうね」

「だーいじようぶ、ちゃんと働きますって。レベリングがてらに」
「ならよし。先に行ってるから」

風雲が立ち去ったそこに、ヒラリと一枚のゴミ？ レシート？ いや回復しつつある目で見るとメモ用紙が落ちていた。出撃任務のメモかなと拾って見ると、こんなことが書いてあった。

《春雨の麻婆春雨、久しぶりに食べたいなあ……おのれ阿呆一番艦め》
よく分からないので「おーい風雲」聞いてみた。

「ちよい待ってー」

「あら。もう準備できたんだ」

「準備はまだだけど、風雲がどんだけ麻婆春雨が好きなのか気になつてさ」

「は？ マーボー？」

「このメモ、さつき落としてったみたいだけど」

「んん？ 私のじゃあな——えつ、なにこれ」

「春雨にお願いすれば普通に作ってくれるんじゃない？」

「そうじゃなくて……これ、誰が書いたの？ 秋雲？」

「風雲の白露殺害計画を、他の誰が書くつてのさ」

「さつ……ち、違う！ あの阿呆に文句は言いたいけど、春雨の麻婆春雨が食べたいとは思ってたけど……こんなの書いてないし誰にも言っていない」

「でも見たところ筆跡は風雲のそれですぜ？」

「……確かに……でも本当に知らない。気味が悪いし、私が捨てとく」

メモを受け取った風雲はそれをすぐ握り潰して、行ってしまった。

「——ふむ」

秋雲は光るペンをしげしげと見た。

試さない、という選択肢はもちろん無い。



「あーおーばーさんっ☆」

「おや？ ついに新聞の4コマを描——」

「先手必勝！ ヘブンス・ドアー！」

「グワーツ目潰しサイン!?!」

重巡寮の前、屋外でもこの威力。ターボモードはこれを最後に封印しようと呼ぶ秋雲だった。

大袈裟でなく仰け反った青葉のどこかからヒラリとメモ用紙が落

ちた。それにはこう書いてあった。

《足りないよお……古鷹のスケベなネタが足りないよお……》

「青葉さん、あんたさあ……大天使になんちゆう劣情を抱いてんのさ……」

「え、なんですかなんか言いました?」

「これ」

「見えません。目を潰されたので」

〜30秒後〜

「ええ、ちようど欲しかったところでした。ドスケベ大天使の良いところ」

「重巡洋艦の最悪なところを見せられた……」

「でも、このメモを書いたのは青葉じゃあないです。ネタ帳を落として他の誰かに読まれるなんて失態——秋雲さんに説明いります?」

「言われてみれば……確認するけど、この字は青葉さんのものなんだよね?」

「みたいですね」

「なら、このメモ用紙は?」

「さあ、なんでしよう?」

「ネタというかりビドーが漏れ出してるけど、いいの?」

「誰だつて一度は思うことですし。ドスケベ大天使、見たくないです?」

「ものすんげー見たい」

「ならば同士よ、ここは任せました。さらばです!」

取材屋さんの陸上機動力も凄いが、それもこの嗅覚があつてこそなのだろうと秋雲は舌を巻いた。青葉が重巡察の隣にある軽巡察に飛び込んだ直後、重巡察の中から左目をターボモードで光らせた大天使が出てきた。

まさかペンよりも強力な光でヘブンズ・ドアーを妨げられるとは、思わぬ弱点が見つかった。やはり無敵の能力など存在しないらしい。

さらに、もしヘブンズ・ドアが通ったとしても……大天使が右手に持っているバドミントンのラケット（何かおかしい）が怖くてメモ用紙を拾うどころではないだろう。

「気の所為だったかな……秋雲ちゃん、青葉を見なかった？」

「さつき総合棟の方に用事があるとかが言ってたよ」

「それ以外に何か——変なこと、言ってなかった？」

「普段通り、誰かを取材するとかどうとか」

「そう。ありがとう」

大天使古鷹も別種の嗅覚を持つのか、それともただの慣れか、ラケット（ガットが無い）を握ったまま軽巡察に入っていった。

「同士青葉さん、あなたの記事はいつも興味深かったよ——さて次の獲物を探しますかあ」



「ヘブンズ・ドアー！」

卯月

《うーちゃんだって電球の交換くらい楽勝びよん！　なんでやらせてくれないびよん？》



利根

《筑摩は吾輩を阿呆と思うておるのか？　貸した鬼滅が全巻行方知れずになることくらい最初から予想しておったのじゃ！　——で、重巡察に一冊も無いことは確認できたのじゃが、はて？》



金剛

《今の気分？　もちろん紅茶デース》

◆
◆
伊勢

《誰か、誰でもいいから教えてほしい。私は日向をどうすればいい?》

◆
◆
川内

《あああああの時あの人の「月が綺麗ですね」ってそういう……あああああ！……でも、いや、落ち着け私。もし下手に勘付いたらどうなった? 夜戦だよね? 追撃されるよね? ——ならヨシ! 夏目漱石って誰? 餅つきウサギ可愛いよね、ってちゃんと返事したよね私! ブロックする権利あるよね私! そもそも、どうして夜中に起きてるんですか? 私の夜戦はお仕事ですから! ……もう仕事できないよお》

◆
◆
初雪

《ふつう》

◆
◆
分隊から来てた斑鳩

《ほらニュース見て! やっぱりイージス艦に次のステップが求められてるよ! インフレする攻撃に対する、インフレする要求! 千年続く終わりのない競争! つまり僕のようなマルチロール空母こそ顧客が本当に必よ……レーダー? ネットワーク? 艦娘は気にしないほうがいいよ。次の敵が『カロウシ』になるから》

親潮

《あつ、単三電池を買わないといけないんだつた》



朝潮

《あつ、単三電池を買わないといけないんですた》



春雨

《今週末ノ黒風チャンノ服選ビ……ソノ前ニ黒風チャン、ドンナ格好
デ本土ニ来ルンダロウ。ココハ先輩トシテ、アドバイスタ方ガイイ
カナ。私、先輩ダカラ！》



瑞鶴

《改二の写真栄えのために両面テープで矢をくつつけた空母がいま
す》



加賀

《ハロウィンで狩った七面鳥、クリスマスまで冷凍保存でいいのかし
ら》



日向

《いや、そうはならないだろう》



秋雲さんもそう思う。

ヘブンズ・ドアー……って違う、そうじゃない。



秋雲は鎮守府内を適当に歩き回るって追加で数名のメモ用紙を獲得した。

試しに竹櫛提督にヘブンズ・ドアーを仕掛けて、あまり面白くないメモ用紙を獲得した。

少しだけ勇気を出して一ノ傘副提督にヘブンズ・ドアーを仕掛けて、もっと勇気を出すよう煽ってくるメモ用紙を獲得した。

上等だやつてやろうじやあないかと、即土下座できる気構えで売店のお姉さんにヘブンズ・ドアーを仕掛けて、

「……………ああん？」

土下座しようとした秋雲を、背後から磯風がハリセンでどついた。



「ありがとうマイシスターズ。超面白かった。まさか秋雲さん一人のために艦隊全体に仕込んでくれるなんて感激するつきやあねーですよ。それと雪風も改二改造おめでとう。台湾どうだった？」

「グーグルアースってすごいなーと改めて思いました」

「そっかー……」

このあと滅茶苦茶タンヤオした。

「秋雲さんはまだまだヘブンズ・ドアーしまくるよ。せっかく用意してくれたメモ用紙だし艦隊全員分コンプしたいし。——さて陽炎型と夕雲型の淑女共、集まってもらったのは他でもない、このメモ用紙

についてだ。陽炎おねーちゃんと夕雲おねーちゃんに念の為に確認するけど、このメモ用紙を皆に書いてもらう時に『秋雲に見せるもの』以外の条件を付けた?」

「いや別に」と陽炎。

「いえ特に」と夕雲。

「じゃあ秋雲以外に見られるのは嫌だ、って言った人はいた?」

「誰かいたー?」と陽炎が聞くと、陽炎型の皆は首を横に振った。

「誰か、いた?」と夕雲が聞くと、夕雲型の皆は首を横に振った。

「そして全員が察して、秋雲にズゾゾゾ! とすり寄った。」

「いい野次馬根性だぜ淑女共。次のネタはこの人だ!」

《高
雄》

《全員が秋雲からズゾゾゾ! と離れた。》

「間違えた。高雄さんは天照隊の総力でね、うん。ネタにしやすい人をネタにしよう」

川内

《あああああの時あの人の「月が綺麗ですね」ってそういう……あああああ! ……でも、いや、落ち着け私。もし下手に勘付いたらどうなった? 夜戦だよね? 追撃されるよね? ——ならヨシ! 夏目漱石って誰? 餅つきウサギ可愛いよね、ってちゃんと返事したよね私! ブロックする権利あるよね私! そもそも、どうして夜中に起きてるんですか? 私の夜戦はお仕事ですから! ……もう仕事できないよお》

第85話 球磨争奪戦 ⑩ パラベラム ―追―
& a m p ; 2 0 2 0 年 秋 イ ベ 実 況

「頭を整理しましょう、叢雲さん。長月が注目を集めている今のうちに手分けをして情報を集めて、因果が見えてくるように並べるのがいいと思うのです」

「じゃあ電は――」

「じゃあ叢雲さんは『あの人』をお願いします」

……まあ私も押し付けようとしたし、なんて思ってしまった差で電に逃げられるわけで。



私たちの艦隊で何が起こったのか。起こっていたのか。

不審陸軍人に侵入されたとか。その仲間なのかそうでないのか分からない男4人に侵入されたとか。

売店で、大和をも巻き込んだ何らかのトラブルがあったとか。

球磨――にしか見えなかった何者かが一ノ傘副司令官を襲い、これを阻むと次は当然のように竹櫛司令官を襲い、これもまた阻むと、何者かはまるで魔法のように姿を消した、とか。

副司令官と司令官を、左手の薬指を切り落としてまで暗殺しようとしたのは本物の球磨ではない……とは私たちがそう思いただけで、確実なのは、

『左手に薬指がちゃんとあるボロボロの球磨が、売店のお姉さんに担がれてきて、腹部を刺された天龍と龍田の横に寝かされることになった』

ことだけ。つまり球磨の姿をした者が最低でも二人いた、とか。

左手の薬指がない球磨と、ボロボロにされた球磨、どちらにもアリバイが……まともに受け取りたくない話だけれどある。前者（こっちが偽物だと思いたい）が傘姫司令官まで殺さんと分隊・北鎮守府に無

鉄砲に突撃していた時、ここ本隊・南鎮守府のベッドには後者がいた。
とか。とか。

まだ事は終わらなかった。

司令官を偽球磨から守ってくれた長月は、自分が普通の駆逐艦ではない——どころのレベルではないことを皆に明かさなければならなかったとか。

不審陸軍人その名を神州丸という輩が「本艦に様々な勘違いがあったことを、上司であるあきつ丸より詫びさせたい」とか言って、それから隠れたり隠れなかったりして天照大艦隊を探るようになったとか。

とか。とか。

「もう全部、長月一人でいいんじゃないかな」

「提督と副提督はどれだけ怒らせるようなことしたんだ？」

とか。とか。とか。

昨日の真夜中のニュース……天照隊が絶対に無関係でいられないこととか。

金剛や雷、分隊の斑鳩、いま冷静に動けそうなのは誰か見極めて動いてもらっている。

私たちの艦隊に起こっていることの共通点が、超人長月の存在も含めて『原因不明』しか見当たらないっていうのはマズい。圧倒的に足りない。情報が。



鎮守府の外から覗いているカメラに誤解を招くような撮影をされないよう、不要な行動は控えること——と、鎮守府全体に慣れない伝達をした司令官が早くも疲れた顔をしていた。むしろ知りたい聞きたいのは私たちの方なのに、質問追及憶測意見苦情命令その他色々で第一執務室と第二執務室はとっくにパンクしていた。

私も早くそつちを手伝いに行かないと。

正門に立っているジャーナリストなのか迷惑系ユーチューバーな

のかも知れない連中に、誰かが「野郎オ……」と敵意を突き刺しに行くのも時間の問題だった。



店の磯風が立つカウンターの裏の裏、六畳ほどのお茶の間で私は――炬燵に入れられ、冷凍フライドポテト2袋分をオーブンでチンしたヤツを振る舞われていた。ケチャップと塩も勝手に使え、とききた。「我也聞きたいことがあつてな、総旗艦1号」とお姉さんも炬燵に入りながら言った。「大和と球磨はこの部屋に突撃してくるやいなや、我を殺そうとした。磯風も我の目の前でよだれ垂らして居眠りできるようなったのは、たぶん少し前くらいからだ。それと、いつの事が忘れたが、麻婆だか春雨だかは有ろう事が主砲を我と店に向けやがった」

春雨が？ ……今はたぶん無関係だろうし聞き流そう。

「と、言うとは？」

「お前ら艦娘は、我のことをいつた何だと思ってる？ この戦艦極楽が、そりゃあお前らどころか長月よりは強いとマイクパフォーマンズしてやろう。だがな。炬燵話もできない猛獣だと誰が言った？」

「私は……寮は磯風と相部屋だし、お姉さんのことだつて色々聞いている。でも球磨は『会話のドッジボール』にしかないって」

「店でジュース一本だけ買って無駄話しに来るヤツ、くっそ多いぞ。つかお前もまさか自覚無しか？ お前がいままで垂らしてきた愚痴こそドッジボールの投げ側だったんだがなあ総旗艦1号。ところで磯風は我のことをどう言ってる？ 興味あるな」

「それは後で磯風本人に聞いて。今は――じゃなくて今も、私は無駄話をした気分なのよ」

「無駄話、なあ」

お姉さんは細くカットされたポテトを2本ずつ食べる派だった。

「愚痴じゃあなければ好きに話せ。見ての通り我也暇でな」

「じゃあ、球磨のことで。昨日のニュースのせいで見送られたのよ、

せつかくの改二改装が」

「磯風に聞いた。もったいないな。ブラウン系とブラックの2トーン制服、あの色使いはいかにも球磨好みだ」

「ほとぼりが冷めるまではタマの改二丁つてことにするけどね」

「ふーん」

「ところでお姉さんは……何か、その、知らない？ 球磨のことで」

「無駄話が下手すぎるだろおよお。総旗艦1号さんよお」

「もつとも。」

「ああ、さつきお前が言った通りだ。今ほど暇じゃあなかつたらドツジボールの球ぶつけて追い返してた」

「球磨のためなのよ。それと……お姉さんのためにも」

「うっははは。脅しかそれ？ この我を脅すか。つまり脅せるだけの材料を集めたか。おー怖い怖い。それは聞いておかないとなあ」

ポテトの1本も食べる余裕がない。でも総旗艦として……1号つて何？ ……とにかく負けてられない。

「偽球磨が現れて司令官たちを暗殺しようとした日、事件の直前、普通だった球磨は『何かの拍子』に超人長月のような普通でない存在になった。その証拠としては弱いけれど言わせて。長月も、山城も、分隊の斑鳩も、その時には猫が寄ってきたらしいわ。そして球磨にも、あの日からずっと猫——タマがそばにいる」

「姉妹艦がそばにいることに何の不思議がある」

「お姉さんも普通じゃあない、つまり洞観者という存在、なんでしよう？」

「もつと素直に艦娘らしく、こう、深海棲艦になってしまった！ とかの方がスルツと飲み込みやすいだろうに。面倒なことを考えるもんだな」

「長月は猛烈な強さを手に入れた。山城はほぼ無害な人魂を作れる。斑鳩は鉄でも水でも空気でも、なんでも装備できる。お姉さんに何ができるかは私は知らない。じゃあ球磨には何ができるようになったのかと想像せずにはいられない。例えば——もうひとりの自分を生み出せるようになった、とか」

「こんな風にか？」

お姉さんがポテトをつまむ指を止めて、パチンと鳴らした、その次の瞬間。

事前に磯風に「死ぬほど驚かされるだろうが、お姉さんの茶目つ気に過ぎない」と警告されていたからよかつたもの——青色の爆炎は「これ死んだわ私」と諦観するには十二分だった。でも肌で感じたのは扇風機の強風程度の、ひんやり冷たくて、磯風が言った通りなんでもなくて、目で見えたものとのギャップに頭をグルグルにされた。

「総旗艦1号、お前が想像したのはこんなのだろ」と、もうひとりのお姉さんは私の驚く顔を満足気に見下ろしていた。

お姉さん……違う、そうじゃない。私は自分が灰になったか灰すら残らず消し飛んだかをイメージさせられたのであって、その後で分身程度なんて見せられても驚けない。せめて100人くらいに増えないと、お姉さんのご期待に沿えない。

これは後日聞いた全然関係の無いことだけど、斑鳩の場合(第61話)はちゃんと分身の方で驚けたらしい。これ以上ないレベルの艦同士でやっと通じる悪巫山戯だそう。

「洞観者には何ができる、と、お前は言ったな。まあ手段が増えるというのは間違いでは——」

「……………は」

「いつまでひっくり返ってんだ。ちゃんと炬燵に入れ、中に風が入って寒いだろうが」

私は分身に強引に元の位置に戻らされた。

本物の方のお姉さんが再び指を鳴らすと、今度はずいぶんと呆気なく、分身は青い火の粉のように薄れ、そのまま消えていった。……ああ、本当に茶目っ気だけでこんなことができる怪人なのね。

とりあえず私はポテトを1本取って、ケチャップをちよいと付けて、食べて……思ったことをまんま言ってみた。

「偽球磨は、お姉さんが作り出した？」

「そっちなか？ 我の能力の方を言い当てたか？」

「そうなの？ ……つまり」

最初の壁『イベント海域にヒヤッハーして識別札もらう』を乗り越えよう、というゲーム実況です。

つまり一歩も進まないのですが……そういうゲームだと思っっているの、そういうゲーム実況です。

Fate／Grand Order 2部5章後半7節までのネタバレを含みます。



「マスター竹櫛！ サブマスター一ノ傘！ 大至急応答願う！ こちら天照大艦隊総旗艦、叢雲よ！ 繰り返し——」

《聞こえた！ おお、その声は確かに叢雲ではないか！》

マイクに向かって叫び続けること数日。喉も痛いし、金剛は「もう諦めるネー」と言うし、といったところでやっと通信が繋がってくれた。

現在、我ら天照隊の状況はとても……まあ、この通信を聞いてくれると分かると思う。

「マスター……いや司令官！ あんた自分がこの艦隊の司令官ってこと忘れてないでしょうね?！」

《悪い、今それどころではない!》

「はあ!? なに、寝ぼけながら戦ってるの!? あんたがオリュンポスから帰らないなら、もうこっちは勝手に地中海に行くわよ! というか大和がついに催促をやめて直に指揮するって言ってるのよ! 今、私の隣で!」

そう。私の顔のすぐ隣、2センチくらい隣に大和のふくよかな胸がある。たぶん男性だつて喜ばないシチュエーションだと思う。だつて圧がすごい。「指揮権（アカウント）をよこせ」っていう圧が。

《いや私の方は目下戦闘中だが戦闘どころではないのだ。状況は非常にマズい》

「なんで? 『応急修理女神6人分に匹敵するリソースが大量に手に

入った』って言ったじゃない。逆にどうやったら苦戦するのよ」

《巨大な丸い機械神が相手なのだが……詰んでいる！ 詰みなのだ！》

「リソース使い切っても削り切れればいい話でしょうに。またいつものラストエリクサー症候群？」

《機械神の防御と回復が尋常ではないのだ。私の戦力が出し得る火力が絶対的に不足しているし、頼みのフレンド枠にも妨害が入っている。削った以上に回復されてはリソースを回したところで意味がない！》

「人権キヤスターがいるから大丈夫とか甘えてたツケを今、払わされてるってことね。もうアレしたら？ カンストしてるQPを全部渡して見逃してもらったら？」

《こともあろうに食糧の無限供給が可能な神を相手にその賄賂は——いや、それでも全QPを投じてフワッフワのクロワツサンを焼けば……だが、あの丸い機械がクロワツサンを喜ぶだろうか？ そもそも食べる口らしき器官が見当たらないような……？》

金剛の言った通り、もう諸々諦めなさいと言おうとしたその時、別の声が通信に割り込んできた。

《あー、あー、もしもーし。こちらサブマスター一ノ傘。マシユ風のオルテナウスを追加改造して神様を倒す用意ができた》

《マシユ風だど!?》と過剰反応するマスター司令官。《オリユンポスカらついに……こんなことを言いたくないが、戦力としては逆に邪魔になっちゃった！ その座をポール・バニヤンと入れ替えた私の苦悩が分かるか！》

知らんがな。と一ノ傘副司令官の台詞を奪ってしまった私。

《マシユ風は編成はせんていいけん。でも『ブラックバレル』が使えるようになる。それで神様は死ぬ》

《おお！ アレか！》

《いや残念やけど、ワタシと竹櫛が知つとるブラックバレルと微妙に違う。狙撃銃でも拳銃でもない、マシユ風の盾が変形する感じのめっちゃゴツイもんやし。それと一発撃つのにマスターが死ぬほど何か

注ぎ込まんといかんらしいし、というか竹櫛は死ぬ》

《なぜ死なねばならん。アークドライブの一発や二発、好きなだけ使えばよからう》

《あの例の画像一枚でメルブラはもう黒歴史やろ。まーそれ言ったらシオンもアレんなるけど、とにかく神様倒すためには竹櫛に死んでもらわんと》

「それは好都合です」

司令官と副司令官がなんやかんや言い合っているうちに、私は大和にマイクを奪われていた。

「現時刻をもって天照大艦隊の指揮はこの大和が引き継ぎます。ですので竹櫛提督はそこで後顧の憂いなく燃え尽きて下さい。以上」

《待て！ 冗談だと気づいているだろう、ブラックバレルの名が出た時点で戦闘はとうに終りよ——！》

大和の無慈悲なチョップが通信機を破壊し、鎮守府とオリュンポスを繋ぐ線は断られた。

これだから戦は恐ろしい。人と人との繋がりがこうも呆気なく終了される、とか知った風なことを言ってみる。

「では天照隊に命令です。まず、さっさと地中海に行きなさい」

「で、でも、まだ情報収集すら——」

「行きなさい」

「はい」

マシユ風だけは帰ってきてもらおうとして、難易度は……どうしよう。

◆ — マシユかZ……あなた誰？ (イベント実況と多少のFGO

雑談) — ◆

再び艦これゲーム実況です。

RTAでもなく編成縛りなども何ひとつない艦これ実況なんて、こんなものです。

Fate／Grand Order 2部5章後半のネタバレを含みます。



撃沈王・大和に「行きなさい」と言われた我ら天照大艦隊は「はい」としか返事できなかった。

できない。ノーと言えるはずがない。

この叢雲が天照隊の総旗艦なら、だって、大和は世界の総旗艦のような立場の人なわけだし。

「で、でも待って大和。今回の作戦については私たち、本当にあんまり知らないの。なんとなく欧州方面でなにかするのとか」

「問題ありません。私たち艦娘は導きのままに進み、戦えばよいのです」

「導き？ ってそんなフワツとしたものを——」

「聖典【ぜ〇ましねっと】の導きのまま進めば海路は拓かれるでしょう」

「あ、はい」

オリュンポスの地にて黒い弾丸となって散った司令官に代わり、今私が司令官代理の腕章を付けて椅子に座っている。椅子の座り心地は……いや秘書艦のモノとは高さが違うだけだし調整すれば何も違わないし、比叡のゲーミングチェアには遠く及ばない。

で、大和はというと、秘書艦の席で私を監視しながら、

「特効艦の確認よし。ふむ……司令官代理、補強増設枠で運用可能な対空装備はどれだけ用意できますか。対空噴進弾幕用ロケット弾は後まで温存することになりますか」

あれこれと横槍——もとい指示をくれている。聖典を見るだけなら私のスマートフォンで事足りるというのに、なんとという大和型戦艦

の無駄使いかしらねえコレ。

「噴進弾幕……？ ああ、対空ロケットランチャーなら腐るほどあるわよ。捨てるのは勿体なきさそうだったから今日の今日まで溜め込んだもの。それ用ロケット弾は、あー、まあ、保管はちゃんとしていたはずだし後で確認しましよ」

「……念の為に聞きますが、12cm30連装噴進砲を改二にまで改修した物はいくつありますか？」

「ロケットランチャーの改二？ なにそれ、ランカー褒賞？」

「……さらに念の為に、ですが。この艦隊の補強増設改修された者のリストはありますか」

「リスト化する程は人数いないわよ。ええと——ほら、スクショしておいた部隊、この12人がそう。懐かしいわー。PT小鬼群に発狂させられて勝手にスロット増設して、まあそれで勝ったから結果良かったのだけど」

私たちの対PT小鬼群精鋭12名を見て溜め息をつく、あまりに失礼な撃沈王。だったら今すぐ売店に行つて、満足のいく数を買ってきて欲しい。

「ケツコンカッコカリ一人ひとりに15,700円も出す艦隊が、やれやれケチるところがおかしいなと思わざるを得ません」

第70話【プラチナ】でプラチナムセットの導入を決めた（磯風に乗せられた）司令官自身も、たしか、同じことをぼやいてた。



「ふうむ。今回の作戦は輸送船団の護衛がメインなのね。それなら天照大艦隊の最も得意とするところよ」

「この艦隊にそんなイメージ、まったく無かつたのですけど」

秘書艦大和はどうしても私たち天照隊にケチをつけたらしい。……いえ、もしかしたら、今は亡き司令官の目には、この叢雲もこんな風に見えていたのかもしれない。それでもアイツは私の忠言に耳を傾けてくれて——。

「護衛が得意だったとは、その艦隊能力を具体的に聞きたいですね」
「私たちにはマシユ風がいるもの。防御は鉄壁よ」

「はあ、マシユ風さん。護衛駆逐艦のような？」

「いいえ。唯一無二のシールド」

「シールド。……とは？」

「マシユ風の大盾を傷付けられる兵器はこの世に存在しないと断言できらわ」

「いくら個人の装甲ばかり優れていても艦隊の戦力としては——」

「もちろん、それくらいの常識を超えるからこそそのクラス：シールドなのよ」

大和の口が「ドーカンシャといいシールドといい、こいつらまた変なものを」みたいなことを言いそうになるのを私は遮った。

「マシユ風がね、『かばう』と言った時は絶対にかばってくれるのよ。マシユ風自身が大破していても、艦隊陣形が崩れていても、『かばう』と言ったら絶対に、砲弾からも爆弾からも」

「へえ」

「さらに、これはマシユ風にあまりに負荷がかかり過ぎるから注意しないとだけ。船団全体を覆うほどの幻想、キャメロット城を展開して、ありとあらゆる災厄から護ってくれる。加えて最近『ブラックバレル』っていう——」

「いえ、いえ、分かりました、もう十分です。つまり今回の護衛作戦に欠かせないメンバー、超特効艦なのです。ではバレンツ海においてはマシユ風さんを主軸とした作戦を展開しましょう。個人的に聞きたいこともあるので、マシユ風さんをこの執務室に呼んでもらえますか」

「それがまたねえ。マシユ風も今はオリュンポス——大西洋に空いた穴の中にいて、つまり偶然私たちより作戦海域に近いところにいるのよ。これはもう、逆に、マシユ風が活躍するために作戦があるって気がしない？」

「気がするかどうかは本人に話を聞いてから……と言っていると作戦がまったく進まないの、ええもう感覚と聖典に任せるがままパパッ

と出撃してもらいましょうか」



識別札について、触れておかないといけないうえでしょうね。

私も大和も、もちろん識別札のことが頭から抜けているわけじゃない。聖典【ぜか〇しねつと】でもありがたくも用心を促してくれている。

「大本営にもいましたよ。輸送船団Aが運んだ物資を用いて輸送船団Aがその足で輸送作戦をして、それを繰り返せば理論上、輸送船団Aとその護衛部隊ひとつでどこまでも進めると言った人が。ちなみにその人の渾名は『インパール牟田口』でした」

じゃあ、どうする？

風の便りに聞くとところによると、船団輸送作戦（E—1からE—3まで）はヌルいらしいから全力（甲作戦）で当たるとして、どうやって唯一無二のマシユ風に、

『地中海艦隊』

『護衛R部隊』

『PQ17船団』

さらに、

『オリュンポス破神同盟』

これら4つもの識別札を付与するのにか？

私はこう考える。

現場エラー猫はどう頭をひねって管理しても駆除できないのに、どうして札たったの一枚で事故が防げると思っているのか。

事故が発生する可能性があるのなら動力源を切りなさい。上位の動力源を切った時は複数の現場が停止するから、それぞれの現場責任猫が札をかけたに來なさい。すると動力源には必然、たぐさんの「私がヨシ！　と言うまで触るな」という札が付与される。一枚だけの札ならば現場エラー猫が無視する可能性が高まるけれど、複数の現場責任猫の名が「触るな」と威圧すれば、そこに気付かずにはいられない注

意が発生する。同時に、他の——（省略）——。

つまり、札とはそもそも何枚も付与されるものなのよ。たぶん。

「これからはインパール叢雲と呼んでもいいですか」

「過去現在未来、異世界、異次元をも旅するマシユ風の足を識別札で縛るなんて、それこそ侮辱や悪しき妨害に他ならないわ」



こうして我ら天照大艦隊はサクツと欧州船団輸送作戦を完遂した。

聖典【ぜかま○ねつと】の導きに従いポチポチしていたら結果的に勝っていた、とも言う。

「インパール叢雲さん。他の情報によるとE-3には装甲破碎ギミックがあったらしいのですが」

「その呼び方やめて。——うそ、聖典を読み飛ばしちゃってた?」

「そのようです。どうします?」

「うーん……つて、いやいや終わった後でどうもこうもないでしょ。

それより、12cm30連装噴進砲の改二のやつが1基、工廠の奥の奥で見つかったわ。どうする?」

「終わった後でどうもこうも——いえまあ、多号作戦が一応まだ残ってはいるので適当に活用してください」



「じゃあ残りの作戦は死なない程度にアレしておいてください」と雑に言い捨てて撃沈王・大和は帰ってしまった。「そうだ言い忘れてましたが、メリークリスマス。それと、これも先に言っておきましょう。あけましておめでたくなるはずなので、よろしくおねがいします」

小説 (Word 2013) の中の戦艦大和。

現実 (Firefox) の中の戦艦大和。

どちらも扱いづら……お互い気持ち良く付き合いたいものね、うん。

さて。

邪魔もn……えーなんと言うか……そう、私のプライベートな時間と空間ができたことで、ようやくと本題に入れるようになった。

《欧州船団輸送作戦、成功です》

作戦の主軸であつた彼女は、現地からそう報告してくれた。

《私も地中海（ローマ）で必要分の浪漫（ローマ）の確保に成功しています。では私はまたオリュンポスに戻りますので。全ての道はローマに通ず、と言います。逆に言えば、空間次元が万華鏡のごとく我々（ローマ）を乱そうとも、ここにローマがある限り道も必ずあるので》

「ご高説おつしやつてるところ悪いのだけど、多号作戦——台湾方面の作戦は別部隊がもう第二段階まで終わらせてるのよ」

《作戦が順調なのは何よりかと。ですが叢雲が言いたいことは分かりますので、こちらから先に言います。『掘り』までは知りません》

「そこをなんとか」

《護衛すべき船団がないのであれば盾は不要、いいえむしろ邪魔でしょう。……叢雲には分かりますか。戦闘開始のラツパと同時に「必要な犠牲」とか言われて自爆させられる私が……どんな気持ちで……》

「そ、そんな外道、この総旗艦叢雲が許さないわよ。だから、ね？」

《イヤです。オリュンポスが片付いたらカルデアベースでクリスマススを祝うんです。今年のサンタクロースが誰になるか楽しみなんです。

——そうでした、陽炎たちに伝言をお願いします。メリークリスマス、と》

この世界の住人は季節感が滅茶苦茶すぎる。

「作戦の主軸として頑張ってもらったのだし、これ以上の無理強いはできないか。うん。お疲れさまでした。余裕があればいいけれど、ブラックバレルとやらの弾丸となって燃え尽きた司令官の骨か遺品かを——」

《マスター提督なら普通に生きてますが》

「えっ？　でも、無限の機械神を破壊するのに相応のリソースが必要

だったとか何とか聞いてるけど」

《それなら、なぜか2020年内限定で使える『霊脈石』なる謎の青いキューブ状リソースが、これまたなぜか10個も入手できたので、それを代用しました。しかしブラックバレル本体の方は3発でダメになってしまったので、対深海棲艦兵器としては期待しないでくださいね》

「なんだそうなの。じゃあブラックバレルがどうのこうのと聞いた後からずっと喪に服していた電は、普通にクリスマスとお正月を楽しんでいるのね」

《私は第14話あたりの叢雲(告白mode)と今の叢雲とのギャップに驚いています》

「その第14話でも言ったでしょう。人は変わるのよ」

《一万数千年も停滞していたオリユンポスの全知性体に聞かせたい言葉です》

「あなただって随分と……ねえ、ひとつ尋ねていいかしら。確認してもいいかしら」

《なんででしょう》

「その……マシユかz……あなた誰？」

《は？》

「いや、ほら。天照隊って基本的にミユートで運営されているじゃないの。だからこうして久しぶりにマシユ風の声を聞くと、ぜんぜん違う顔が頭に浮か——」

ガブツヂュン！ という酷い音を最後に残して通信が切れてしまった。

これだから戦は恐ろしい。人と人との繋がりがこうも呆気なく終了される、とか知った風なことを再び言ってみる。

テレビを見ない人間は、テレビを見るができない。



山城は何個目か(最低5個)のリモコンを紛失して、スマートスピーカーのようなAIが助けてくれそう系デバイスを導入しようとした。一度は使ってみたいけれど安くはないものだし、その機能を聞く限り「別にいらなくない?」と思うものなわけだから他の誰かが買わないかなー試しに使わせてくれないかなーと山城の背中を押す空気もあった。のに、山城を除く戦艦寮のみんなだけは「それ山城がぜったいに使っちゃあ駄目なヤツだから」と説得した。

「それを言うなら私、スマホすら持てない人間ってこと? リモコンアプリをダウンロードしたらどうせ今度はスマホも失くすだろ、って?」

余計なことを言わなければいいのに……山城のスマートフォンは紛失を免れる代わりに翌日、水没した。

そんな山城でさえテレビは見れる。だって、自室のテレビを諦めて他の誰かの部屋にお邪魔すればいいのだし。というか見たい番組がある子らは普通、集まって見る。その方が楽しい——のではなく、逆に、

「ついさっき終わっちゃったよ、岸边露伴は動かない。でも今日の第3話で最後だったし、え、叢雲ちゃんも見たかったの? ご、ごめん私が一番かけなくて! 昨日と一昨日もみんな(特I型)集まってたから、てつきり——!」

吹雪お姉ちゃんが謝ることじゃあない。

そう、この場合は逆に、みんなと【当然】集まらなかった私が悪い。気を遣わせてしまう私が悪い。

「いや少し気になってただけよ。どうだった? 高橋一生が『ヘブンズ・ドアーツ!』ってやったの?」

「その顔は。……ウソをついてる『顔』だよ……。高橋一生が演じる岸

辺露伴を自分で確かめたいって、顔のページに書いてある」

「……………うん」

「お仕事してたせいでドラマを3日連続で見逃したってこと、また私に気遣わせないようにしてる。前にも言ったよね。もっと。私に。荷物を預けなさい、この阿呆。って」

「……………はい」

あの日はさすがに忘れられない。「あんたみたいな姉がいるから私は総旗艦だなんて胸を張っていられるのよ!」と素面で言わされたあの日は。寮の同室だった吹雪が磯風に変わったのって、ずいぶん前の話(第24話)のだけどね。

「それはそれとして。でもドラマなら見逃しても後からどうとでもなるって、おねがい! 鎮守府目安箱の3巻あたりにそういう話があったし大丈夫だよ。今日のところはもう叢雲ちゃん、後は私が代わるから」

「ありがとう。でも今日はもうメール1通を大和に送って終わるから。『掘り』まで終わらせたぞー、ってね」

「出撃したみんながやってくれたんだ! 叢雲ちゃんもまた少し素直になれたし、うん、二重三重の意味で良かった」



話を最初に戻しましょうか——良くないわよ。

なに? ブツダはサディストなの? テレビすら見させてくれないの?

一昨日のドラマが放送されていた時間はシェフィールド掘りに成功した達成感しか頭になかった。テレビのテの字も頭になかった。

昨日のドラマが放送されていた時間はシロツコ掘り部隊の修復を待っていて、だからといって執務室のテレビをつけっぱなしにする習慣は私には無い。「今日の節電が明日のおやつになる」と啓蒙して回るより天照隊の電気料金を実際に見せたほうがテレビつけっぱ対策に効果的だと分かっているけれど、言っている私は食堂にひとつ設

置されているテレビは情報ある照明くらいにしか思わないし、そういうば朝昼晩の番組を誰が決めているのかも知らない。

今日が岸辺露伴は動かないの最終日だったということは、大和に作戦完了を何と言って伝えようか考えていたらポツと唐突に思い出した。多号作戦を敗北撤退無しボス装甲破碎せずS勝利、つまり手を抜けるだけ抜いて（丁作戦で）作戦成功としたことは当然もう大和の耳には入っている。重要なのは、この事実を天照大艦隊から正式にどうかツコ良く報告したらみんなの体面を保てるか。

「フタサンマルマルまでには連絡したいけど、うーん……あれ？ 今夜10時って何か他にやることがあった、ような………あつ、あーあ……」

テレビを見る人にとって『テレビを見る』は『何かをやる』ではないのでしょね。うん、わかるわかる。

忘れそうならメモしておけって？ うん、わかるわかる。

それでも、ブツダよ言わせてください。もう今年は閉店してしまっただの？ あるいは今年をモヤツとした気分が終わらせてやろうとするサディストなの？

来年は、明日からは、本当にお願ひよ？

私も頑張るから。